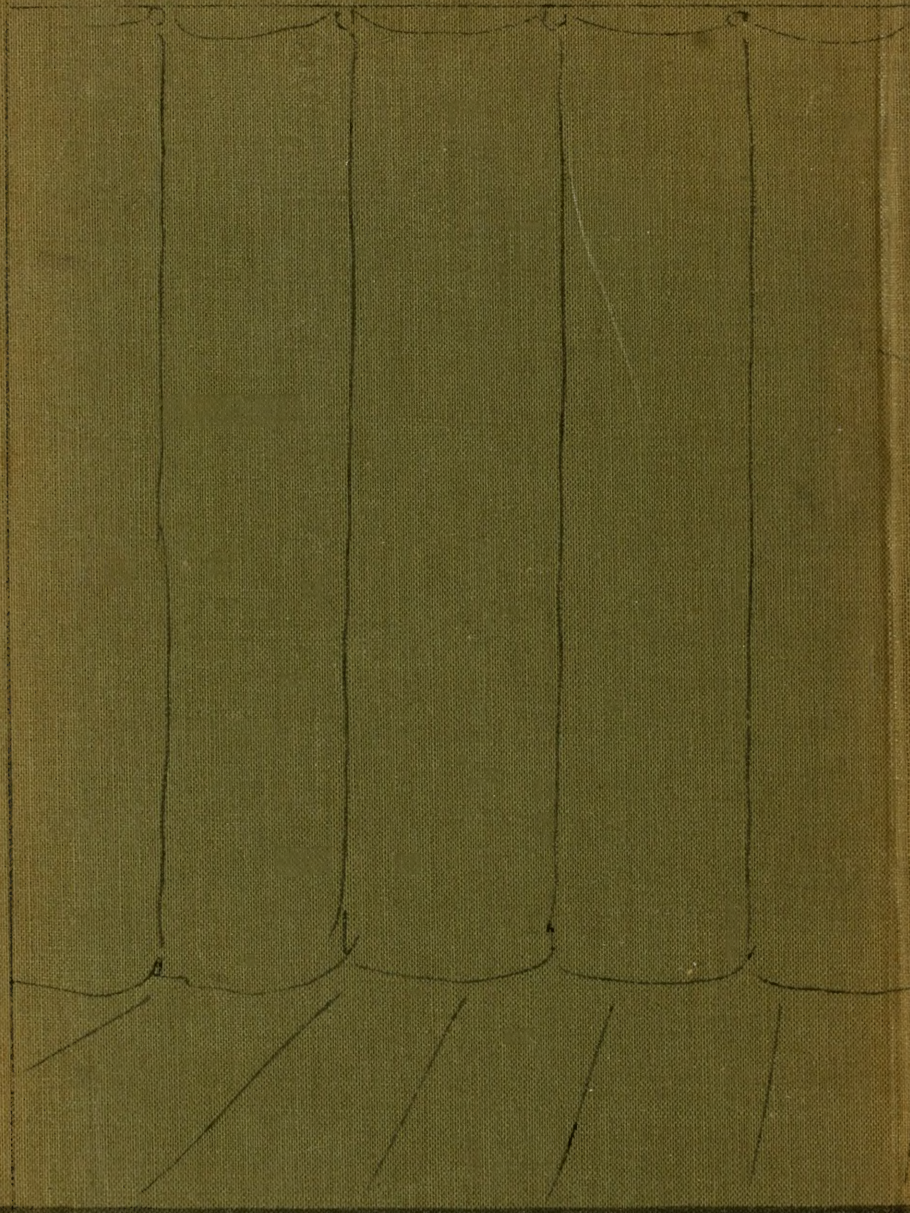


PL
764
N54
1931
v.42

Nihon gikyoku zenshū

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

日本戲曲全集
第四十二巻

谷崎潤一郎
久保田万太郎
里見弴
泉鏡花

現代篇第十輯

東京
春陽堂版

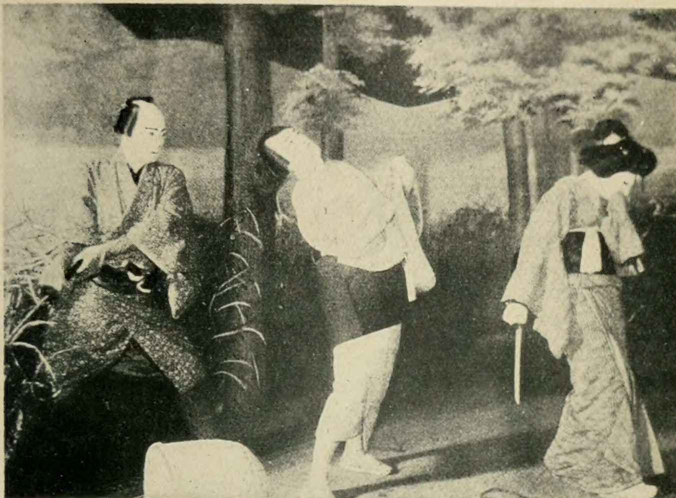
PL
764
N54
1931
V. 42

LIBRARY
SEP 29 1966
UNIVERSITY OF TORONTO

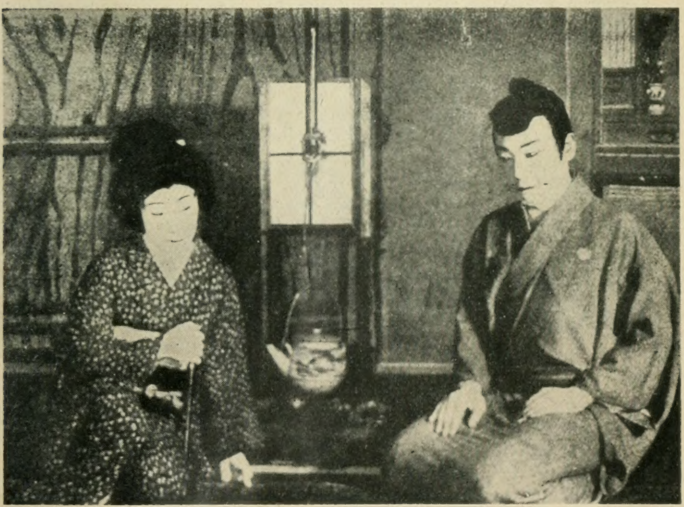
1126460



「無名と愛染」の愛染•市川松蔦



「お國と五平」河村菊江のお國・守田勘彌の友の丞・坂東壽三郎の五平



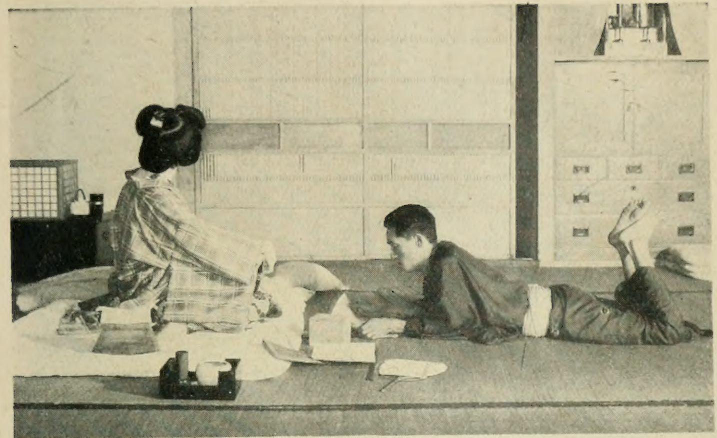
「十五夜物語」澤田正二郎・久松喜世子



「本牧夜話」の舞臺面



「白狐の場」少年角太郎の花柳章太郎・狐のスラビナ



「雨空」の松本・花柳



「正體」の中村吉右衛門・中村又五郎・中村時藏



「雪」花柳章太郎・喜多村緑郎



「夜叉ケ池」河合武雄の娘・伊井容峯の鐘樓守・後藤良介の山澤學園



谷崎潤一郎



久保田万太郎



里見淳



泉鏡花

日本戲曲全集　第四十二卷　目次

谷崎潤一郎篇

里見弴篇

谷崎潤一郎篇

戀を知る頃

人物

伸太郎　日本橋區馬喰町邊の木綿問屋の子
下總屋三右衛門　伸太郎の父
お政　伸太郎の母
おすみ　柳橋待合香川の主婦、三右衛門の妾
おきん　おすみの娘
利三郎　下總屋の手代
おしげ　伸太郎の乳母
お・寅　下總屋の小間使
お初　下總屋の小間使
お花　香川の女中
外に伸太郎の學友數人

時
明治三十年頃

所
第一幕　淺草代地、第二、第三幕　日本橋馬喰町

第一幕

待合香川の内部。舞臺左手に六疊程の一と間――其處が帳場になつて居る。部屋の左側の襖に添うて帳場格子を置き、傍の柱にいろ〳〵の通帳、狀挿しなどを掛け、其の眞上、天井に近く神棚を設ける。部屋の後ろは土藏に續き、正面の觀音開きの左に番傘の袋に包んだ三味線二た棹、右に茶簞笥、茶簞笥の上に鏡臺、置時計を置き、其前に長火鉢が後向きに据ゑてある、部屋の右側は障子、其の外は廊下を隔てゝ風呂場の入口の板戸に對す。廊下の奥に梯子段が正面を向いてかゝつて居る。春の彼岸の中日の午後二時ごろ。
（と書きに用ふる前後左右縦横等は、特に指定せざる限り、凡べて正面の觀客を標準とす）

第一節

おすみ、おきん、お花
おすみ、實際は三十七八なれど、三十前後にしか見えぬ艷なる年増。漸く今朝飯を濟ませたところらしく、

獨り長火鉢に凭れて新聞を讀んで居たが、やがて其れを膝に投げ、煙管に煙草をつめながら、甲高く呼ぶ。

おすみ　おきんちやん、どうしたの。まだ見付からないのかい。

おきん　いゝえ、わかつてよ。おッ母さん此れぢやないの。

（土藏の中より答へながら、重箱を抱へて出て來り、觀音開きの前に立つ。母に似て更に美しく艶なる女。年齡十七歲。背高く、顏しまり、眼から鼻へ拔けさうな悧巧な容貌の爲め、却つて二つ三つ老けて見える。きび〳〵した言葉遣ひ、活潑な擧止、何處かにお轉婆らしい所あり。髮を島田に結ひ、襟のかゝつた縞お召の綿入を着る。素足。）

おすみ　あゝそれ、それ。それへお萩が幾つぐらゐ這入るだらうね。

おきん　さうだわね。

（重箱の蓋を開き、一寸目分量で勘定する。）

内のは大きいから、そんなに澤山は這入らないわ。

おすみ　お前御苦勞だが、其れを持つて、ちよいと一とつ走り馬喰町まで行つて來ておくれ。今の内なら多分旦那も居らッしやるよ。お口汚しでございませうが、折角内で拵へましたからッて……母が伺ふ筈でございますけれど、二三日加減が惡くッて臥せつて居りますからとか何とか云つてね。

おきん　今日はあたし嫌よ。

おすみ　何故さ。

おきん　何故でも。……誰か女中をお遣んなさいな。

おすみ　いつも馬喰町だと喜んで行く癖に、可笑しな人だね。女中を遣るつたつて、お信はさッき藏前へ持たしてやつたし、お花は手が明かないし、お前が行つてくれなけりや、外に使ひがありませんよ。

おきん　だからもう直きお信が歸つて來たら、持たしてやれば好いぢやありませんか。

（重箱を傍に置いて長火鉢の横へ崩れかゝるやうに立膝して据わる。）

おすみ　それでも好いけれど、お前これから何處かへ出掛けるのかい。今夜は旦那も入らッしやるし内に居た方がいゝだらう。

おきん　誰も出掛けると云やしないわ。……あたし、實は少しおッ母さんに話があるの。今日は人も居ないしするから、丁度好い折だと思つて。

おすみ　また此の間の話かい。

おきん　えゝ、まあさうよ。今夜旦那が入らつしやるなら、是非おッ母さんから相談して貰ひたいと思ふの。

おすみ　お前も分らないね。あの話は此間云つた通りだか

ら、今持ち出しちや工合が悪いんだよ。おッ母さんの方にだつていろ〳〵都合があるんだから、ちッとは考へてくれなくちや。

（ほんぽんと、眞鍮な火鉢の角へはたいて投り出すと、右の手で猫板に頬杖をつく。）

お前だつて、今年はまだ十七ぢやないか、何も今直ぐ嫁に行かうと云ふのぢやなし、旦那もあらかた承知して居らつしやるんだから、あんまりせつつかない方がいゝだらうと思ふ。

おきん　おッ母さんの方にどんな都合があるか知れないけれど、あたしの方にも都合があるの。

おすみ　生意氣な事をお云ひでないよ。お前に何の都合があるんだい。ほんとにお前ぐらゐ親子の情愛の薄い人間はない。いくら榮耀榮華がしたいからつて、親の傍に居るのが、そんなにも嫌なものかね。馬喰町へ引き取られゝば、成る程大家のお孃樣にや違ひないけれど、あゝ云ふ堅儀の大店にはなか〳〵やかましい仕きたりがあつて、とても内に居るやうな氣樂な譯には行きませんよ。嘘だと思ふなら、まあためしに二三日行つて御覽。一人息子の伸太郎さんは居るし、奉公人は多勢だし、お前のやうな自墮落な女に、半日と辛抱は出來やしないから。お上さんはあゝ云ふ如才ない人だから、そりや口では、「おきんを引き取つてやりたい」の何のつて云つて居るものゝ、何がアテになるもんかね。又旦那だつてさうさ、いくら主人の威光でも妾の産んだ子を連れて來て、直ぐと伸ちやん同樣にさせちや内のしめしが付かないから、當分小間使ひと一緒に働かせる位が關の山さ。……子供の癖にお前は一體焦り過ぎるよ。嫁に行くまでは、別段内の子で居たつて差支へないんだし、一日も遲い方が私の爲にもなるのだから、其處をよく考へておくれな。

おきん　おッ母さん、あたしや何も、樂がしたいからッて頼むんぢやないよ。どうせ引き取られるなら、遲かれ早かれ同じ事だから……

（右手を懷に入れ、左手にて同じく猫板へ頬杖をつき、睨み返すやうに母の顏を見る。）

おすみ　それが同じ事ぢやないんだつてば。實のところ私の方でお前でも養育して居なければさう〳〵旦那から引き出す譯に行かないから、此方の魂膽が大分狂つて來るぢやないか。内の爲めだと思つたら、お前だつてそんな不人情は云へないだらうがね。どうも私やお前に男でも出來たのぢやないかと思ふ。

おきん　冗談にもそんな事を云つて貰つちや困まりますよ。

（冷然たる調子。）

おすみ　（次第に激して來る）　そんなら何も、お前のやうに急ぐ道理がないぢやないか。誰かお前に入れ智慧をする奴があるんだらう。

おきん　入れ智慧なんかされるあたしぢやなくつてよ。――おッ母さんにそんな事を云はれるに付けても、あたしや內の稼業が嫌で嫌で仕樣がないの。一日だつて、こんな商賣を見て居るのは嫌だわ、それよりか、早く堅儀な內へ引き取られて、小間使ひでも何でもいゝから、キチンとした暮らしをして見たいの、籍なんぞ孰方にあつても構はないわ。

おすみ　へん、どの面下げて、お前にそんな立派な口がきけるのだい。チッと自分の不斷の行績を見るがいゝや。――あんまり親を馬鹿におしでない。

おきん　だからいゝわよ。どうしてもおッ母さんが承知してくれなけりや、あたしの方にも考へがありますから。

（つんとして母の傍を去り、左方の帳場の机の前に据わつて、何か卷紙へ徒ら書きをしながら。）

あたしや、今迄にも隨分內の爲になつた積りなんだから此のくらゐの事を聽いてくれても好いと思ふわ。人の事を男があるの何のと云ふけれど、おッ母さんだつて馬喰町へ知れたら困る事がありはしなくつて？　若しもあたしが意地惡く出たら、どうする積りなのか知ら。

おすみ　（稍不安の眼つき）　お前は親を強請る積りなのかい。大それた娘もあるもんだね。そんな眞似をすりや、私ばかりかお前だつて立ち行かなくなるんだよ。

おきん　えゝ、そりやおッ母さんばかり苦勞をさせやしませんとも。

おすみ　勝手にしやがれ。

（強く云ひ放ちたれど、猶不安の表情にて、暫く無言の儘相對して居る。）

（お花、湯殿の戶を開け、襷がけで兩手の先から湯氣を出しながら、廊下に現れる。）

おはな　（襷を外して障子際に畏まる）　おかみさん、お風呂が沸きましたが、お召しになりませんか。

おすみ　さうさね。

（茶簞笥の上の置時計を顧る。）

まだ二時半だね。私やもう少し後にしよう。

おきん　そんならあたし、先へ這入るわ。

（立ち上つて衣類を帳場に脫ぎ棄てゝ、長襦袢一枚になる。）

おすみ　（お花に向ひ）　それからね、お信が歸つて來たら、此のお重へお萩を入れて馬喰町へ屆けるやうに左樣云つておくれ。

おはな　はい、畏まりました。

（重箱を受け取つて座敷を通り抜け、左方の襖より去る。）

おきん （風呂場の入口に立ち、廊下越しに部屋の方を振り返つて） おッ母さん、今の話はよく考へて置いて下さいな。もう此れッ切り頼みませんから。

おすみ 知らないよ。どうでも勝手にするがいゝさ、お前のやうな奴は、あたしの子だとは思はないから。

おきん ふゝん。

（と嘲けるやうに鼻で笑ひ、湯殿へ這入つて、中からぴしりと板戸を締める。）

第 二 節

おすみ、おきん、三右衛門、利三郎

三右衛門、利三郎、左の襖を開けて部屋に這入る。三右衛門は五十一二歳の太つた男。柔和な容貌老舗の旦那らしい澁い服裝。利三郎は二十七八歳の體格の立派な。少しく苦味走つた美男。髪を綺麗に分け、鐵無地の琥珀の羽織に地味な結城の縞入を着、お召の前掛をしめて居る。右の手に土産の折を提げて、部屋に這入るとおきんの脱ぎ棄てた衣類に眼を着け、わざと其の傍へ据わる。

おすみ おや、入らッしやいまし。大そうお早いんですね。

（自分の席を三右衛門に譲り、おきんの衣類を襖の中へ投げ込んで、かひ／＼しく茶を入れ菓子を出しなどする。）

三右衛門 あゝくたびれた。

（伸びをして、どしんと臀餅を舂くやうに据わる。）

おすみ （利三郎に煙草盆を與へながら） 利三どん、今日は旦那のお供ですか。

利三郎 へえ、どうも御無沙汰致しました、今日はお彼岸のお寺参りで、今戸迄行つて参りました。

おすみ （長火鉢の横へ据わる） あゝさう。お天氣が好くつて結構でしたね。こんなに暖かぢや、そろ／＼お花見に間もありませんね。

利三郎 左樣でございますな。もう四五日立つたら上野あたりはぼつ／＼咲き始めるでございませう。あ、それから此れはおかみさんにお土産。

（と折を渡す。）

おすみ まあ何ですか有難う。

（折を手に頂いて見る。）

おやそれおや山谷へお廻りなすつたの。久々で重箱の鰻が頂けますよ。ほんとに有難う。

（折を茶簞笥の上に載せる。）

三右衛門 鰻を喰ひたさに大廻りをして、くたびれたこと、

くたびれたこと、どうも春先は、天氣がいゝと埃が立つてかなはない。
（手拭を出して顏を撫でる。）
もう風呂が沸いて居るんだな。
おすみ　えゝ、たつた今おきんが這入つた所ですよ。こんなに早く入らつしやると知れたら、誰も入れずに置きましたつけ。
三右衛門　彼奴は長湯だから、待つて居たら容易な事ぢやない。どれ顏だけでも洗つて來よう。
（立ち上つて、廊下から湯殿の戸をあけて、中を覗き込む。其隙間から湯氣が廊下に洩れて來る。）
おきんの聲（風呂場の中より）　おや御免下さいまし、何時入らつしたんですの。
三右衛門　今來たんだよ。顏を洗ふんだから、一杯汲んでおくれ。
おきんの聲　あたしもうすぐ上りますわ。
三右衛門　お前の**もうすぐ**は何時の事だかアテになるもんか、まあいゝから、半日でも一日でもゆつくり漬かつて居るがいゝ。
おきんの聲　あら隨分よ。おほゝゝゝ。
（三右衛門、湯殿の戸を締めて中に這入る。）

第三節

おすみ、利三郎、三右衛門
利三郎　ちよいと御免下さい。
（腰を屈めておすみの前を通り、廊下に出て板戸の前へ兩手をつき、わざと高調子に、）
えゝ旦那。
三右門の聲（風呂場より）　何だ。
利三郎　私はお先へ御免を蒙りますが、別段お店へ御用はございませんか。
三右衛門の聲　あゝ、どうも今日は御苦勞だつた。別に用事はないが、ゆつくりして御膳でも喰べて行つたらよからう。
利三郎　いえどう致しまして、もう今日は充分に頂きまして、まだお腹が一杯でございます。
おすみ（火鉢の傍に据わつたまゝ、聲をかける）　でもまあ利三どん、**いゝぢやない**か。一と風呂浴びてゆつくりとして行くさ。めつたに來るんぢやないんだから。
利三郎　へえ有難うございます。
（また一段高調子になる。）
おきんちやん、どうぞ御ゆつくり。今日はお目に懸りませんが、これで御免蒙ります。

おきんの聲（冴え〳〵した調子）あらさう、これぢや左様なら。

利三郎（おきんの挨拶を聞くと部屋に戻つて、おすみの前に畏まる）や、どうもお邪魔致しました。

おすみ　まあ、利三どん。いゝからもつとゆつくりしてお出でなさいな。

利三郎　折角でございますが、いづれ又……

おすみ（立たうとする利三郎の手頸を捕へ）まあさ、そんなに世話を焼かせるのぢやないッたら。

（利三郎迷惑さうに控へる。）

おすみ　ほんとに久し振りなんだから、用がなかつたら遊んで行つて下さいよ。旦那もお前さんの事は若いに似合はず店中で一番役に立つて、そりやいつも褒めて居らつしやるんですよ。仲太郎さんはまだあの通りの子供だし、此の上ともお前さんが骨を折つて、精々旦那の片腕になつて下さらなくちやお店の方もお困りでせうからねえ。

おきん（湯上りの體へ長襦袢を纏ひつゝ、手拭を口に咬へ、風呂から上つて、つか〳〵と部屋の中へ這入り、母と利三郎との間に立つ。水の滴るやうな艶なる姿）おッ母さん、あたしの着物は何處へやつて？

おすみ　藏の中にあるだらう。

おきん　さう……利三どん、ちよいと御免なさいよ。

（直ぐに着物を着ようとはせず、茶箪笥の上から鏡臺を下ろして其處に据ゑ、長襦袢のまゝうづくまつて化粧を始める。其様子を利三郎はまじ〳〵と眺めてゐる。）

三右衛門（風呂場の戸を半ばあけて裸體の上半身を廊下に出す）おい、誰でもいゝから、ちよいと背中を流してくれ。

おすみ　おや、あなたお湯へお這入りになつたの。

三右衛門　うむ、おきんが珍らしく氣を利かして、早く上つてくれたから。

おすみ　それぢやあたしが流しませう。……利三どん、ちきに旦那がお上りになりますから、ほんとにゆつくりして行つてね。

利三郎　どうも飛んだ御厄介になります。

（おすみ着物の裾をからげて風呂場に去る。）

第四節

おきん、利三郎

おきん（化粧をしながら小聲にて）利三どん、お前隨分だね。たまに内へ來たのに歸る歸るつて、それほど私が嫌なのかい。

利三郎　そんな嫌味を云ふもんぢやないぜ。あんまりぐづ

〵ぐづしてゐると、却つてお上さんに氣取られるから、わざとあゝ云つたのさ。此處の内へは久し振りだが、お前とは三日にあげず遇つてるぢやないか。

おきん　だから、そろ〳〵鼻に附いて來たんだらう。人がお湯へ這入つて居ても知らなけりや、遇ひもしないで歸らうなんて、隨分薄情な話さ。あたしや、體もろく〳〵洗はないで飛び出して來たんだよ。

利三郎　湯殿に居たつて知れない事があるもんか。話聲ぐらゐ聞えたらうに悠々と長湯を遣つてゐるから、わざと挨拶に行つてやつたんだ。そんな事を云ふなら己は歸るぜ。

（煙草入を腰にさして立ち上る。）

おきん　あれ、利三どん。

（男の前掛を摑み無理に据わらせる。）

ちッと話があるんだから、まあ怒らないで居ておくれ。

利三郎　強つて歸りたかないけれど、お前があんまり解らないからさ。

おきん　あたし、いよ〳〵近々に馬喰町へ引き取られるの、實は今日ね、少し惡かつたけれどおッ母さんをおどかして置いたから、大概うまく行きさうなのよ。さうしたら朝から晩まで毎日お前の顏が見られるわね。お前の方ぢや御迷惑かも知れないけれど……

利三郎　（驚いたる樣子にて膝をつめよせる）おきんちやん、お前本當に私の事を思つて馬喰町へ行くのかい。

おきん　お前に會ひたくなかつたら、誰が醉興にあんな窮屈な所へ行くものかね。今のやうにお互ひに離れて居ちや、遇ふと云つても二日置きか三日置きだし、それもほんの一時間か二時間だものあたしや、まどろつかしくつて、焦れたくつて、仕樣がないよ。それに第一、人の目を盜んで、お前が道樂でもして居やしないかと思ふと、心配で〳〵ならないから……

利三郎　其心配は此方でする事だ。馬喰町へ引き取られた日にや、お前はかりにも大家のお孃樣。其の時になつて棄てられたつて、奉公人の悲しさには、主人の娘へ手も足も出されやしないだらう。ほんとにおきんちやん、浮氣をすると承知しないぜ。

（襦袢の上より女の膝を抑へていつ迄も抓つてゐる。）

おきん　抓るならたんとお抓りよ。

（抓られながら、兩手を頭に伸ばして、平氣で髮の恰好を直してゐる。）

そんなに私を疑ぐるなら、證據を見せて上げようか。

利三郎　（漸く手を放す）どんなに證據を見せたつて、變心すればそれ迄よ。

おきん　いゝえ、此れは極く内證だけれど、お前が聞いた

ら、きつと安心する事なの。

利三郎　何だい、それは。

おきん　おッ母さんと私の外には、世間で知らない事なんだから、ほんとに人に喋舌られちや困るのよ。

利三郎　大丈夫だ。

おきん　（低く囁く）實はね、利三どん。あたしや旦那の子ぢやないんだよ。

利三郎　エッ、そんなら、一體誰の子なんだ。

おきん　（利三郎の耳元に口を寄せてひそ〱と告げる）ね、だけど、默つてゐて下さいよ。

利三郎　うむ……

（急に不快な顔つきをして鬱ぎ込む。）

おきん　利三どん、あたしやお前が可愛いばかりに、飛んだ事を云つてしまつた。何卒愛憎をつかさないでおくんなさいよ。

（媚びるやうにニッコリ笑つて、着物を取りに藏へ這入る。）

（利三郎は腕組みして考へ込んで了ふ。）

第二幕

下總屋の奥の間、舞臺の右手に母屋の座敷があつて、左方の裏庭に臨む。庭の後ろは建仁寺の塀を圍らし、稍左手に木戸口が付いて居る。木戸口より更に左、庭の隅の方に滿開の櫻が二三本植わつてゐる。座敷の正面の縁側から飛石が母屋の庇と櫻の植込の間を分けて木戸口に續く。

座敷は主婦のお政が小間使などと針仕事をする所。あまり新しい普請ではなく、柱、縁側の板の色など、如何にも舊家のそれらしくてか〱と拭き込んである。部屋の後ろは腰張りのある壁、右は好い加減古びた二枚の唐紙で劃られ、庭に面する左方と前方とは中硝子の障子を開け放つ。子供の徒らと見えて、壁や唐紙の障子のところ〲に落書きがあつたり、穴が開いたりしてゐる。座敷の中央に大きな長火鉢が縦に置いてある。四月の上旬の午後、うら〱とした眠さうな日が、障子や庭に照り輝く。

第一節

三右衛門、お政、お寅、お初

おまさ、五十格好のでつぷり太つた女。長火鉢の右に据わり、くけ臺、裁板、反物の切れなどを前に置いて頻りとこてを炙つてゐる。お政の右に、前方へ半圓形をなして、お寅とお初と居ならび裁縫をしてゐる。末座

のお初は半分體を正面の緣へ乗り出し、敷居際に据わりながら開け放つた障子に背を凭せかけ、左向きに脩向いた姿勢を取る。お寅もお初も年配は二十前後。

おまさ　お初や其處の障子を締めておくれ。あんまりきらきらして上氣するやうだ。

おはつ　ほんとにお暖かでございますね。

（立ち上つて左の緣側の障子を締めて來る。）

今日はお仕事をして居りますと、何だか眠くなつて參りますよ。

おまさ　お前達を連れて一遍お花見に見かうかね、仲太郎が行きたがつて、毎日せびつて困るから。

おとら　お店の人達は、此間多勢で出かけたんでございますつて、利三どんでも、庄どんでも、みんな眞紅に醉拂つて、踊りををどりながら歸つて參りましたつけ。

おはつ　男は羨しいわね。

（三右衛門登場。）

三右衛門　お蔵居るか

（聲をかけながら、右の襖を開けて忙しさうに這入つて來る。）

おまさ　何か御用でございますか

三右衛門　着換への糯袢を出してくれ。體がねばねばして氣持が惡い。

（懐から手拭を出して、脇の下の汗を拭く。）

今日はいやに暖いな。馬鹿に手足のだるい日だ。

おまさ　お寅、六疊の簞笥の二番目の引出しに、旦那の御糯袢が這入つてゐるから、持つて來ておくれ。

おとら　畏まりました。

（襖より去る。）

およさ　あなた、今日お澄さんが、おきんを伴れて來るとか云ふ話ぢやありませんか。

三右衛門　（緣側に佇み兩手を背中に組んで庭を眺めつゝ）うむ、何でも今日は日が吉いから連れて來ると云つたつけ。

（お寅糯袢を持つて來る。）

三右衛門　（座敷へ上り、お寅の方へ背中を向けて着物を脱ぎ、糯袢を着換へさせて貰ひながら）お澄も承知して居るのだから、連れて來たら當分みんなと一緒に仕事でもさせて置くさ。今迄が今迄だから、ちツと堅儀に仕込んでやらないと、當人の爲めにもなるまい。

（着換へ終ると、長火鉢の左へ中腰に据わつて話し出す。お寅は元の席へ直る。）

おまさ　彼の娘の事は、奉公人も大概様子を知つて居ますし、それぢやあたしの氣が濟まないけれど、まあ暫く辛抱して貰ひませう。

三右衛門　當人だつて樂をしたいと思ふなら、今から内へ來たがる譯もないだらう。もと〳〵堅儀な女になりたいから、奉公させる氣で强つて引取つてくれと、斯う云ふ向ふの口上なんだから、此方も其氣で仕込んでやるさ。

おまさ　お嬢やお初も其積りで、つまらない遠慮なんかしないやうにね。

おとら、おはつ　はい。

三右衛門　名前を呼ぶにも矢張今迄通り、おきんちやんと云はしたらいゝだらう。

おまさ　だけど伸太郎があの通りの徒ら者だから、奉公人の積りでおきんを打つたり擲たりしはしないかと思ふと、またしや其れが苦になりますよ。もうそりや、必ずやるんですからね。此間だつて、まあどうでせう。お初の背中へ煮えくり返つた藥罐を投げつけたんでせう。もう少しで大火傷をさせる所なんですよ。女中だらうが、店の者だらうが、氣に入らないとお構ひなしにいぢめるもんだから、庄吉なんぞ大きな體をしておいおい泣き出すつて騷ぎなんですと。彼の子のお蔭で、内の奉公人は生傷の絶えた事がありませんよ。

三右衛門　ふゝん。

（鼻先で笑ふ。）

徒らで困つたもんだな。今日まだ學校から歸つて來ないのかい。

おまさ　えゝ、もう追ッつけ歸つて來るでせう。いつもお友達の子供を四五人も連れて來て、庭で鬼ごつこをするやら、座敷へ上つて來て芝居をするやら、そりや大變な騷ぎですよ。遊ぶのも好いけれどまあ御覽なさい。

（部屋の四方を見廻す。）

此の通り壁でも唐紙でも障子でも、みんな穴だらけにして了ふんですからね。

三右衛門　ちつと戸外で遊ぶやうに云ひつけたらいゝぢやないか。

おまさ　それが彼の子はをかしいんですよ。内に居ると大威張りの癖に、外へ出ちやしよみッ貝で、からッきし、意氣地がないんですから、なか〳〵戸外へなんぞ出るのですか、たまに遊びに行くと、直きに誰かにいぢめられて、めそめそ泣いて歸つて來ますよ。だから、學校の先生なんぞ、ちつとも彼の子の徒らを知りやしません。いつかも私が週つたら、大人しくッて結構なお子さんですッて、褒めちぎつて居るんです。尤も感心に學校の成績だけは好いやうですけれど。

三右衛門　格別勉强もしないやうだが、學問の方はさう嫌ひでもないんだらう。まあいゝさ。十二や十三であまりいぢけて居ても困るから。

おまさ　外の奉公人なら兎に角、おきんに傷でもさせた日には、ほんとに私が中へ立つて弱りますよ。

三右衛門　子供の事だし、何も樣子を知らないんだから、奉公人の積りで少しは無理も云ふだらうさ。店の者にしろ、女中にしろ仲太郎に餘計な智慧をつけないやうに、お前からよく云ひつけて置くがいゝぜ。いづれ知らせていゝ時が來れば己が話して聞かせるのだから。

おまさ　さうですね。お前達も仲太郎に下らない事を教へちや困るよ。

おはつ　はい。

（お寅と共に頷く。）

おまさ　坊ちやん、おきんちやんは實はあなたの姉樣ですよ、なんて、隨分云ひかねないからね。

おとら　まさか、お上さん。大丈夫でございますよ。

三右門　どれ。

（伸びをしながら立ち上り、襖の彼方へ去る。）

第　二　節

お政、仲太郎、お寅、お初、仲太郎の學校朋輩三人

仲太郎、年齢十二三歳色の白い體格のきやしやな、神經質らしい瓜實顔の少年。紺盲目縞の筒袖の綿入に、小倉の角帶前掛を締め、學校の徽章のついた制帽を冠り、素足に雪駄を穿いてゐる。學校の歸りと見え、鞄を肩から左腋にぶらさげ、右手に清書の草紙を携へて庭の木戸から驅け込む。その後より同じ年配の三人の子供も續いて這入つて來る。

仲太郎　只今。

（活潑に云ひながら、縁側に腰をかけ、鞄と草紙を座敷の中へ投げ込む。）

おッ母さん、何かお菓子をおくんな。……君々、みんな此方へ來給へ。

（と友達を麾く。）

三人の子供　小母さん、今日は。

（異口同音にお政に挨拶し、仲太郎とならんで縁へ腰をかける。）

おまさ　仲太郎や。

仲太郎　え、なあに。

（腰かけたまゝ母を振り向く。）

おまさ　なあにぢやありません。鞄やお草紙をこんな所へ投り出す人がありますか。そんなお行儀の惡い事だと學校の先生に叱られますよ。——今お母ッさんがお菓子を持つて來て上げますから、今日は戸外でお遊びなさい。

仲太郎　あゝ。

（お政襖の外に去る。）

（伸太郎草履を脱いで、縁側に上る。）

僕はこれからお藏へ行つて、玩具箱を擔いで來るから、君達も一緒に來て手傳つてくれ給へ。

おとら　（こはい目をして伸太郎を睨める）　坊ちやん。今お母さんが仰つしやいましたでしよ、今日は戸外でお遊びなさいましつて。

伸太郎　だから皆に手傳つて貰つて、玩具を持つて戸外へ行くんぢやないか。誰が內で遊ぶと云つたい　生意氣云ふない。

（いきなりお寅の肩を蹴る。）

おとら　（よろ／＼と倒れながら）　そら、また亂暴をなさいますね。

おはつ　それぢや、玩具を持つて入らしッたら、戸外でお遊びなさいましよ。

伸太郎　構はないからみんなお上りよ。

子供の一　あゝ、上つてもいゝかい。

伸太郎　構やしないてば、大きな箱が三つも四つもあるんだから、君達みんな來て手傳つておくれ。

子供の二　よし來た。

子供の三　一、二、三。

（子供三人、同時に緣へ驅け上り、伸太郎の後ろへついて、どや／＼と襖の蔭へ馳せ去る。）

第　三　節

お寅、お初、おしげ

おしげ、左右の手に菓子皿とお茶盆を持ち、子供が開け放した襖の一方から這入つて來る。年齡五十二歲の實直らしい老婆。

おしげ　坊ッちやんは。

おとら　今お藏へ玩具を取りに入らつしやいました。

おしげ　おや、さう。

（正面の緣側へ菓子と茶を置き、お初と差向ひに鴨居際へ蹲踞る。）

おはつ　ばあやさん、今日からおきんちやんが奉公に來るんですつて？

おしげ　さうだとさ　奉公だか何だかアテになるものか。半年も立つたら、內のお孃樣になり濟ます氣なんだらう。

おはつ　ほんとに其の氣なのかしら。

おしげ　其の氣に違ひないぢやないか。あんな自墮落な娘が堅儀な奉公をしたいなんて、誰が眞面目に受け取るもんかね。大體お澄さんと云ふ人が、なか／＼喰へない女なんだから。

おとら　おきんちやんだつて、蟲も一匹殺さないやうな顏をしてゐるけれど、どうして油斷がならないんですとさ。

たまにお店へ來ると、猫を冠つて、面の憎いほど利巧な口をきくぢやありませんか。

おはつ　それだのに又、內のお上さんは餘まり捌け過ぎて居らつしやるわね。

おしげ　全くだとも、彼の娘が嫁にでも行く時なら格別、今から引き取つて世話をするには當らないやね。たとへ旦那の血を受けて居たつて籍が這入らない中は、私は決してお孃樣とは云つてやらないから。

おとら　籍が這入つても、お孃樣とはちよいと云ひ難いわね。

おはつ　坊ちやんもあたし達ばかりいぢめないで、ちつとおきんちやんをいぢめるといゝ。

おしげ　そりや今に直ぐ始まるさ

おとら　好い氣味、好い氣味。器量の好いのを自慢にして、別嬪でございと云ふやうな顏をして居るから、鼻の頭でも引掻かれたら大騷ぎだらうね。

おしげ　冗談は兎に角として、お寅どんもお初どんも、坊ちやんに餘計な事を喋舌らないでおくれよ。

おとら　誰が喋舌るもんですか。

おはつ　ばあやさん、大丈夫ですよ。

第四節

仲太郎、三人の子供、おしげ、お寅、お初

四人の子供　やつしよい、やつしよい。

（仲太郎を先に立てゝ、大きな二個の玩具箱を二人宛にて肩に擔ぎながら、再び座敷へ戻つて來る。）

（めい／＼玩具の鎧を着たり、刀を佩びたり、鉢卷をしたりして居る。）

仲太郎　（玩具箱を一時にガラ／＼と座敷のまん中へ打ち撒け、裁縫の道具だの、反物だのを蹴散らかして采配を振ながら、女中に命令する）おい、此處で戰ごつこをするんだから、みんな彼方へ片附けておしまひ！

おしげ　そら、又そんな解らない事を仰つしやる。今日は戶外でお遊びなさる御約束でしよ。

仲太郎　いやだい、いやだい。

おしげ　いゝえ、おッ母さんのお云ひ附けですから、何と仰つしやつてもいけませんですよ。第一、其處邊を無暗にお步きになると、針がありますから危うございます。

仲太郎　危いから片附けろと云ふんだよ。何だい婆あ！

グヅ／＼云ふとこれだぞ。

（玩具の刀を突きつける。）

おしげ　そんな眞似をなすつても、ばあやはちつとも恐かございませんよ。まあ、此れを御覽なさいまし、折角火熨斗を掛けた物を、こんなに皺だらけになさいましたわ

宜ろしうございます。そんならもうお菓子も何も差上げませんから。

(蹴散らかした反物を揃へ、打撒けた玩具類を一々拾つて箱の中へ入れ始める。)

伸太郎　おい、人が折角出した玩具を、何だつて收つちまふんだい。馬鹿、馬鹿。

(と怒鳴りながら、刀にておしげを散々に打つ。)

おしげ　此處はみんなが仕事をする所ですから、こんなに散らかしては置けません。

(打たれながら平氣で玩具を集めて居る。)

伸太郎　よし、そんなら、斯うしてやる。

(いきなり刀を投げ棄てゝ火鉢の中の燒鏝を摑み取り、お寅の襟元へ着けやうとする。)

おとら　あれ、坊ちやん、飛んでもない。

(お寅とお初、あわてゝ伸太郎の傍へ駈け寄り、後ろから抱き止める。)

おしげ　(伸太郎の見幕を見て仰天し、いきなりこてを奪ひ取る)　まあ、坊ちやん何をなさるんです。此れで火傷をしたら、ばあやは死んで了ひますよ。

(急に伸太郎は大聲を擧げて泣き出し、三人をつきのけて再び玩具類を引くり返し、座敷中の物を手あたり次第に投げつけ蹴散らかして、死に物狂ひに暴れ廻る。三人の子供はアッケに取られ、暫く手持無沙汰で見物して居たが、やがて一同こそ〳〵と庭へ下りる。)

子供の一　伸ちやん、それぢや又後で遊びに來るよ。

子供の二　左樣なら。

子供の三　あばよ。

(三人逃げるやうに木戸口から出て行く。)

おしげ　ほら御覽なさい。坊ちやんがあんまり解らない事を仰つしやるから、お友達がみんな歸つて了ひましたよ。

おとら　さあ、早くお友達の所へ行つて、お遊びなさいまし。

伸太郎　いやだい、いやだい。お前が行つて、お友達を連れて來なきやいやだい。

(今度はお寅の頭へ跳びつき、髮の毛を散々に挘る。)

おとら　あれエ！　坊ちやん御免なさい、勘忍して下さいよウ！

(おしげ、お初、しきりに伸太郎を制して居る。)

おえきの聲　(襖の蔭より)　伸太郎！　いたづらをするとお藏の中へ入れて了ひますよ。

おしげ　そらお母さんが入つしやいました。お藏へ入れられると大變ですよ。

(漸く伸太郎を欺し賺かして、庇ふやうに抱き締めながら。)

坊ツちやんは決してお徒なんぞなさいませんですよ。此の通り大人で、御機嫌が宜しうございます。お寅どんも、お初どんも、早く其處を片附けてお了ひ。

おはつ　はい、はい。

おとら　まあ痛かつたこと

（兩人、座敷を片附けて再び仕事に取りかゝる、伸太郎は緣先のおしげの膝に腰かけて、菓子皿を眺めながらまだシクシク泣いてゐる）

第五節

お政、伸太郎、おすみ、おきん、おしげ、お寅、お初

お政、おすみ、おきん登場。

おまさ（おすみとおきんを案内して、襖を開ける）さあ、此方へお這入り、どうも此の通り散らかつて居て。

おすみ　御免下さいまし。

おまさ　さあ、さあ、ずつと此處へ。

（お政は火鉢の左側へ、おすみ親子は右側へ据わる。おきんの服裝はわざと質素に、銘仙の矢絣を着て髮を銀杏返しに結ふ。伸太郎は氣むづかしさうな顏つきで、じろ〳〵とおきんの樣子を見て居る。）

おすみ　坊ツちやん、相變らず御機嫌で結構でございますね。ばあやさんどうも御無沙汰を致しました。

おしげ　坊ツちやん、ちよいと下りて下さいまし。

（伸太郎を膝から下して緣に据わらせ、改めて挨拶する。）

私こそついつい存じながら御無沙汰致しました。いつもお變りがなくつて結構でございます。

おすみ　有難う存じます。また此度は娘が御厄介に成りますので、御承知の通りの不束者でございますから何分お賴み申します。

おきん　何卒ばあやさんお願ひ申します。

（お澄と共に叩頭する。）

おしげ　いゝえ、私なんざ、もう年を取つて居りますから、却つて皆さんの御世話にばかりなるのでございますよ。

おすみ（お寅とお初に向ひ）あなた方にも、何分お願ひ申します。もう何でございますよ、仕事なども一向存じませんのですから、皆さんの妹だと思召して、御遠慮なしにつけつけと仰つしやつて下さいまし。

おきん　どうぞ何分……

（母と共にお辭儀をする。）

おはつ　いゝえ、私共こそ……

（お寅と兩人、丁寧に頭を下げる。）

おきん（伸太郎を見て、愛嬌よく笑ひながら）坊ちやん、此の頃は每日お天氣で宜しうございますね、もうお花見

に入らつしやいましたか。

伸太郎　まだ行かないの。

（大人しく緣側に据わり、陰鬱な眼つきで頻りにじろじろと菓子の樣子を見る。）

おきん　おや、それはいけませんね。御一緒に觀音樣へお供致しませうか。

（伸太郎羞嬌むやうに笑ふ。）

おすみ　今度おきんが御奉公に上りましたから、何卒可愛がつてやつて下さいましよ。

（伸太郎默つて頷く。）

おまさ　伸太郎はおきんちやんを覺えて居るかい。

おきん　お店へ伺ひました時に、二三度御目に懸りましたから、御存知で居らつしやいませう。

おまさ　さうかい、お前覺えて居るかい。

伸太郎　（ちよいと頷き、稍暫くもぢもぢして）去年も會つたし、今年のお正月も會つたよ。

おきん　あゝ、さうでございましたつけ。よく覺えて居らつしやいますこと。

おすみ　ほんとに物覺えが好くツて居らツしやいますことね。學校も大さうお出來になるさうぢやございませんか。

おまさ　いくら學校で褒められても、內へ歸ると徒らばかりしますから何にもなりませんよ。

おすみ　學校さへお出來になれば、少しくらゐお徒をなすつても仕方がございません。……それでは私はもう御免を蒙ります。どうも皆さん、とんだお邪魔を致しました。

おまさ　まあいゝぢやありませんか。お鮨でも申しませうけれど、御飯でも食べてゆつくりなすつたら。

おすみ　いゝえ、どう致しまして。手前共は夜が商賣でございますから、今頃からそろそろ忙しくなつて參ります。

おまさ　さうですか。それぢやあんまりお早々樣だけれど……

（立ち上つて、おすみを送り出さうとする。）

おすみ　勝手に失禮致しますから、もう何卒此處で、……いゝえ、それでは恐れ入ります。皆さん御免下さい。

（お寅とお初は仕事をしながら、輕く會釋する。お玫、おきん、おしげの三人おすみを送つて退場。）

第六節

仲太郎、おきん、お寅、お初、子供三人

伸太郎は緣側に臥ころんで、菓子を摘まんで居る。

おはつ　おきんちやんは十七だと言ふけれど、ませて居るから、十九か二十ぐらゐに見えるね。

おとら　いやに「坊ッちやん」とか何とか云つて、小憎らしいたらないよ。好かない娘だねえ。

おはつ　でも彼の人は器量がいゝから仕合せさ。

おとら　坊つちやん、あなたおきんちやんがお好き？　それともお嫌ひ？

仲太郎　好き。

（下を向いて幽かな聲で云ふ。）

おとら　いやな坊つちやんですね。あんな人を好くんぢやありませんよ。

（おきん座敷に戻る。）

おきん　（お寅の傍へ殊勝らしく兩手をつき）お寅どん。ちよつとお手傳ひ致しませうか。一向氣が付きませんですから、御遠慮なく御用を仰つしやつて下さいまし。

おとら　はあ、もう直き仕事を仕舞ひますから、さうしたら此處を掃除して頂きませう。

おきん　畏りました。

（手持無沙汰に、ぼんやりと据わつて居る。）

（仲太郎は菓子を喰べて了ふと、鞄の中から讀本を抽き出して縁側に開き、再び臥ころんで高らかに朗讀し出したが、やがてさも熱心さうに默讀し初める）

おきん　坊ちやん、御勉強でございますか。ほんとに大人で宜しうございますね。

（仲太郎の傍に寄り添ひ、首を並べて、讀本を覗き込む。）

仲太郎　此れ何て云ふ字？

（讀本の面を指しておきんに尋ねる。）

おきん　私にお聞きになつても駄目でございますよ。坊ちやんの方が餘程よく御存知で居らツしやいましよ。

仲太郎　でも僕、此の字を知らないんだよ。

おきん　よくは存じませんが、其れは躑躅と云ふ字ではございませんか。

仲太郎　さう、有り難う。又敎へておくれ。

おきん　私こそあなたに敎へて頂きませう。

おはつ　坊つちやんはまあ、急に大人におなんなさいましたね。

（子供三人再び登場。木戸口を半分開けて顏を出し、口々に呼ぶ。）

子供の一　仲ちやん、まだ泣いてるの。

子供の二　用がなければ遊ばないか。

子供の三　戸外で鬼ごツこをしないか。

仲太郎　今日はもう遊ばないよ。

（子供の方を振り向きもせずに答へる。）

おはつ　もうお掃除ですから、ちつと戸外で遊んで入らツしやいまし。

（仲太郎は矢張默つて讀書してゐる。お寅とお初は仕事を片附け始める。）

子供の一　それぢや又あした、左樣なら。

（子供三人、木戸口を締めて、バラバラ戸外へ驅けて行く。）

おとら　勉强なんぞめつたになさらない癖に、坊ッちやんは今日はどうかして居るよ。

（お初と共に裁縫の道具を抱へて立つ。）

それぢやおきんちやん、お掃除をお願ひ申します。

おきん　はい、畏りました。

（お寅、お初、おきん退場。おきんは箒木とはたきを持つて直ぐに戻つて來る。）

おきん　坊ちやん埃が立ちますから、ちよいとお退きなすつて下さいまし。

伸太郎　あゝ。

（伸太郎草履を穿いて庭に出で、櫻の木の下に蹲踞まつて又讀本を開く。）

おきん　お勉强の御邪魔をして相濟みませんね。

（おきん掃除に取りかゝる。漸く日が暮れて、庭の面薄暗くなる。）

第七節

伸太郎、おきん、利三郎

利三郎、左の櫻の木陰から葛籠を擔いで庭へ歩み來る。脊を鈎折つて、麻裏草履を穿いて居る。

利三郎　おきんちやん、お前の荷物が屆いたぜ。

（葛籠を緣側に下ろして腰を掛ける。）

おきん　おや、どうも憚り樣。

（掃除の手を止めて男の背後に立ち、嬲るやうに膝頭で其肩を突く。）

利三郎　止しねえ、止しねえ。

（頤で伸太郎の方を示し、たしなめるやうな眼つきをする。）

おきん　子供が何が解るもんかね。

利三郎　おきんちやん、今日は何時ごろ御いでになつたのか、一向存じませんでしたな。荷物が屆いたので、漸く私は承知しました。お店の方にもたまには御用がございませうから、ちつとお顏をお見せなさいまし。

（嫌味らしく云ふ。）

おきん　嘸々御邪魔でございませうが、此れからちよいちよい伺ひますとも。――濟みませんけれども、ちよいと手を貸して、荷物を彼方へ運んで下さいな。

（意味ありげな眼をする。）

利三郎　よし來た。

（座敷へ上る。）

（おきん、利三郎と一緒に葛籠を襖の彼方へ運び去

る。)

(伸太郎は獨りになると、急に讀本を懷へ入れ、立ち上つて櫻の幹に凭れつゝ、二人の影を見送る。)

(おきん、利三郎再び登場。)

おきん　(右足を痛めたと見え、跛を曳いてる)　おゝ痛かつた、御覧な、お前があんまり邪慳に押すから、葛籠の角でいやと云ふ程打つちまつた。

利三郎　(庭へ下りて緣側へ腰を下ろす)　もう別段御用はありませんか。

おきん　あゝ、ちよいと待つて。

(庭下駄を穿き、緣に腰をかけて利三郎の右に居並び、耳元へ口を寄せて何かひそ〳〵と囁く。)

(時々伸太郎をちらりと眄めに見る。)

(伸太郎櫻の幹に凭れ、俯向いて彳みながら、折々おきんの樣子を窃み見る。いつの間にかおきんの右足の小指の先から、血が夥しく流れ出して居る。)

利三郎　(女の囁きを聞きながら、ふと下を向いて足元を見、吃驚する)　おい、お前の足から血が出てるぜ。

おきん　おや、道理であたしや痛い痛いと思つたッけ。ほんとに亂暴な人だつたらないよ。

(帶の間を搜りながら、)

お前さん、紙を持つて居ないかい。

利三郎　(懷を搜る)　さあ生憎己も持つて居ない。

(伸太郎ひそかに懷より讀本を出し、頁を二三枚むしり取つて、二人の傍へ駈けて來る。)

伸太郎　僕が紙を持つて居るよ。結はいて上げようか。

(おきんの足元に跪き、傷口へ紙片を卷かうとする。)

利三郎　(あわてゝ、伸太郎の手を拂ひ除けようとする)　いゝえ勿體ない。紙さへ下さればそんな事をなさらなくつても宜しうございます。

おきん　まあ、利三どん、もう少し話があるんだから、

(伸太郎を抱き起さうとする利三郎の首たまへかぢりつき、又耳へ口を寄せて、)

坊ちやん、どうも濟みません事ね。

(と、上の空に云ひながら、足を伸太郎に任せ、更に密語の言葉をつゞける。)

利三郎　うむ、うむ。

(頻りに頷く。)

そんなら明日の晩だな。

おきん　あゝ、きつとだよ。忘れると聽かないよ。

(漸く男を放す。)

坊ちやんどうも有り難うございました。まあ勿體ない。あなたに直して頂いちや、此の足が曲つて了ひますよ。

(伸太郎、餘念もなく傷口へ紙を卷きつけた後、今度

は階下口の血を拭かうとする。）

おきん　いゝえ、もう其れで澤山でございます。

（仲太郎を抱きます。）

利三郎　坊ちやん、あなたは好い子だから、私達が内證話をしたなんて云つて、誰にもお饒つしやらないで下さいよ。若し云ひ附けると、利三郎はあなたを淋しい所へ掠つて行つて、非道い目に遭はせますよ。（凄い眼をして睨める）

おきん　利三どんは怖い人ですから、云ふ事を聴かないと大變ですよ

仲太郎　誰にも云ひ附けやしないよ。それからあのね、さつきお爺とお婆が、おきんの惡口を云つて居たよ。

利三郎　何と云つて居りました？

仲太郎　生意氣だとか何とかつて。

利三郎　へーえ。

（おきんと顔を見合はせる。）

おきん　此れだから子供は正直だねえ。

利三郎　あんまり睨まれないやうに用心しねえ。どれ彼方へ行かうか。

（利三郎庭の左へ消える。）

おきん　あ、それからちよいと、……

（利三郎の後を追うて去る。）

（仲太郎、血に染まつた讀本の紙片を悉く拾ひ上げて懷に入れ、縁先の柱に倚りかゝつた儘、憧れるやうな眼つきで恍惚とおきんの後ろ影を見送る。）

第三幕

第一場　三右衛門夫婦の居間

第二場　下總屋裏二階

第三場　同物置小屋

第一幕より一と月ばかり過ぎた四月下旬の或夜

第一場

三右衛門夫婦の居間。正面の右半分は床の間、左半分は押入、中に箪笥が列べてある。座敷の右側の壁は裏の低い窓に劃られて、其れへ障子が嵌まつて居る。左側は襖。床柱の前に、長火鉢を縦に置く。其左右、夫婦の相對して据わるべき場所に座蒲團一對、座敷の中央、程よき所へ置ランプを立てる。

第一節

仲太郎、おきん

おきん獨り押入の前へ据わり、五六枚の着物を疊んで、一々簞笥の抽き出しへ收めて居る。仲太郎左手の襖を開け、あたりを憚るやうにおづ〳〵おきんの傍へ近寄る。一ヶ月以前に比べると血色青褪め、手足が痩せて、恐ろしく陰鬱になつてゐる。

仲太郎　（小聲にて）　おきん、僕に何か用があるの。

おきん　えゝ。濟みませんが、またお使ひに行つて下さいな。

仲太郎　利三どんの處かい。

おきん　度び度びすみませんね。――坊ちやん、あなた鉛筆と紙を持つて來て下さいませんか。

仲太郎　あゝ。

おきん　誰かに見附からないやうにね。

（仲太郎足音を忍ばせて出て行き、罫引の西洋紙と鉛筆を持つて來る。）

おきん　どうも憚り樣。ちよいと待つて下さい。

（二三行すら〳〵と走り書きして紙を細く疊み、鉛筆と一緒に仲太郎へ渡す。）

おきん　利三どんにね、此の鉛筆で裏へ返事を書いてくれろツて、そうツと賴んで下さいよ。あたしが此處に居るうちに早く行つて入らつしやい。

仲太郎　すぐに來るから、待つておいで。

（仲太郎再び退場。五六分過ぎて戻つて來る。其間におきんは簞笥を始末して了ふ。）

仲太郎　好い鹽梅に、獨りで臺所に立つて居たよ。

（と返事を渡す。）

おきん　（默つて手紙を受け取り、一通り讀み終ると、火鉢の中にくべる）　坊ちやん、御苦勞でございました。ほんとにあなたは好いお子さんね。明後日は私がおしげどんの代りに、水天宮へ連れて行つて上げますよ。

仲太郎　あゝきつとだよ。お前が居れば、おしげなんぞ居なくつてもいゝよ。――お前と僕と、それから利三どんも内證で連れて行かう。

おきん　さうしたら坊ちやんの好きな物を何んでも買つて上げますよ。

仲太郎　また此の間のやうに、三人でお茶屋へ行かうね。

おきん　おほゝゝゝ。

（低く嫌らしく笑ふ。）

どれ、私はまだ御用がございますから。

（立ち上つて、後から附いて來やうとする仲太郎を振り返り。）

坊ちやん、あなたは此處に居らツしやいな。あんまり私にくツ附いて居らツしやると、何かの時に都合が惡うございますから。

（おきん退場。）

第　二　節

お政、仲太郎、おしげ

おしげ、おきんが去る間もなく入り來り、胡散らしく部屋の中を歩き廻る。

おしげ　坊ちやん、あなたさつきから、此處にお獨りで居らツしやるんですか。

仲太郎　あゝ。

（曖昧に云ふ。）

おしげ　大そうきな臭さうございますこと、まさか火戲をなさりやしないのでせうね。

仲太郎　あゝ。

おしげ　いやでございますよ。外のお徒と違つて、恐うございますからね。

（おしげ、暫くあたりを見廻した後、何事か決心したるものゝ如く、ぴたりと仲太郎の傍へ据わる。）

おしげ　（儼然たる調子）　坊ちやん、ちよいと其處へお据わりなさいまし、お話がございますから。

仲太郎　なあに。

（微かに答へて、不承無精に据わる。）

おしげ　私はね、急に田舍の方に用事が出來ましたから、今晩お暇を戴いて、行つて參ります。尤もお宅の事が心配でございますから、明晩か明後日はきつと歸つて參りますよ。

仲太郎　ゆつくり行つておいで。

おしげ　有り難う存じます。就きまして、坊ちやんにお伺ひ致したい事がございますが、どうぞ隱さずに仰つしやつて下さいましよ。

仲太郎　うむ……

おしげ　あなたは何か、おきんの身の上に就いて、誰かからお聞きになつた事はございませんか。

仲太郎　（意外の表情。好奇心を起したらしく、キツとおしげの顔を見守る）　おきんの身の上つて、どんな事？

おしげ　（稍安心したやうに）　いゝえ、お聞きにならなければ宜しうございますが、此の先、若しおきんの身の上について、誰がどんな事を喋舌つても、決して本當になすつちやいけませんよ。

仲太郎　（氣遣はしげに）　だけど、おきんの身の上に何か變つた事があるの。

おしげ　何も變つた事はございませんよ。

仲太郎　おきんはいつまでも内に奉公して居るのかい。

おしげ　えゝ、まあ當分は奉公するのでございましよ。

（冷淡に云ふ。）

それからね、坊ちやん。さつきあなたは臺所で、利三どんに何を渡して居らしたんです。

仲太郎　(愕然たる樣子)　なんにも渡しやしないよ。

おしげ　いゝえ、嘘をおつきになつても駄目でございます。ばあやは蔭で見て居りましたから、ちやんと存じて居ります。

仲太郎　なんにも渡しやしないツてば。

おしげ　(睨みつけるやうにして)　そんな事はございますまい。

仲太郎　知らないよ、知らないよ。

(一生懸命に打ち消しながら、立ち上つて逃げやうとする。)

おしげ　まあ坊ちやんお待ちなさいまし。

(手頸を捕へて、無理に引き据ゑる。)

一體あの手紙を頼んだ者は女でございますか、男でございますか、誰にも申しませんから、私にだけ、內證で仰つしやつて下さいまし。

仲太郎　……

(默つて俯向く。)

おしげ　そんなら私が中てゝ見ますから、中つたら「うん」と仰つしやつて下さいましな。

仲太郎　……

おしげ　ほんとに剛情なお子さんですねえ。いゝ、ばあやは坊ちやんのお身の上を思つて、お尋ねするのでございますから、ちよいと一と言聞かして頂けませんか知ら。

(仲太郎ます／＼下を向いて口を噤む。)

おしげ　それぢや、どうしても聞かして下さいませんの？困りましたね……坊ちやん、あなたはかりそめにも此處の內の御主人でございますよ。其れが奉公人に頼まれて、手紙のお使ひをなさるなんて、そんな間違つた話がございますか。頼む人間も頼む人間ですけれど、あなたはあんまり意氣地がおあんなさらない。此の頃は先のやうにお徒をなさいませんし、大人になつて結構だと存じて居りましたが、あんな眞似をなさる位なら、まだしも徒らの方が餘つ程始末がようございます。

(お政登場。)

おまさ　(スラリと襖をあけて)　おしげや。お前今夜出掛けるなら、早くしないと遲くなるよ。

おしげ　はい、有り難う存じます。なあに田舍と申しましても川崎在でございますから、汽車に乘れば直ぐでございます。

おまさ　仲太郎がどうかしたのかね。

(長火鉢の左に据わる。)

おしげ　實は唯今、お叱言を申し上げた所でございます。

おまさ　どうしたんだい。

おしげ　いゝえね、先程私が勝手許の障子に蹲踞んで居りますと、坊ちやんが利三どんを捕へて、頻りに何かこそこそ話をして居らッしやるんです。どうも其の御様子が、誰か女中に頼まれて、着け文の取り次ぎでもなさるらしく思はれるんでございますよ。ところが唯今いくらお伺ひ致しましても、覺えがないとばかりで、本當の事を仰つしやつて下さいません。

おまさ　仲ちやんさうかい、誰に頼まれてそんなお使ひをしたのだい。別にお前を叱るんぢやないのだから、おッ母さんに教へておくれ。

（仲太郎追ひ追ひと涙ぐむ。）

おまさ　お前に手紙を頼んだのは、内の人かい、それとも近所の人かい。

仲太郎　内の人ぢやないの。

おまさ　それぢや近所の人だね。

（仲太郎領く。）

おしげ　しかし、どうも私は内の者だらうと存じますよ。

おまさ　だつて、まさか奉公人なら此の子に頼めやしないだらう。お前に心當りでもあるのかい。

おしげ　さあ、此ればかりは外の事と違ひますから、しッかりした證據がなければ、申し上げられませんけれど。

おまさ　仲ちやん、近所の人ッて、一體誰だね。名前を云つてお聞かせ

（仲太郎、とう〳〵シクシク泣き始める。）

おまさ　何もお前、泣かなくてもいゝぢやないか。

おしげ　泣ッきなさらないで、本當の事をばあやに聞かせて下さいましな。いゝお子さんでございますこと。

（仲太郎、大聲を擧げて泣き出す。）

おまさ　それぢや、もういゝから彼方へおいで。此れから誰に頼まれても、そんなお使ひをするのぢやありませんよ。

（仲太郎、泣きながら出て行く。）

おまさ　内の女中の事でさへなけれや、此の話はまあ此處だけにして置かうよ。何も若い人をキズ者にさせるでもないからね。

おしげ　左樣でございますか。

おまさ　だが仲太郎は此の頃大さう元氣がないね、あんな子ぢやなかつたんだが、何處か體の加減でも惡いのか知ら。

おしげ　どういふもんでございますかねえ。手でも足でも傷々しい程お痩せになりましたですよ。それに顏色のお惡い事ッたら。

おまさ　近々に、お醫者に見て貰ひませうよ。

おしげ　それがお宜しうございますね。――さて、私は此れからそろ／＼出かけると致しませう。お上さん、先程はまたいろ／＼お土産を有り難う存じました。

おまさ　いゝえ少しばかり。――それぢや、明日の晩か明後日歸つて來るんだね、お前が居てくれないと内の方も忙しいから。

おしげ　はい、明後日迄には必ず歸つて參ります。

おまさ　あたしも兩國まで、ちよいと買物に行つて來なくッちや。

（火鉢の抽出しから紙入れを出して帶の間に挾み、おしげと共に立ち上る。）

（お政、おしげ退場。）

第二場

下總屋裏二階――舞臺左の奥に、藏造りの總二階。（二階の床は舞臺の床と同一の水平面にあり。）正面の窓に四枚の雨戶が締つて居る。窓の外は廣い物干し場が、舞臺の前方へ續き二階の屋根の頂邊に火見櫓を設け、其れへ物干し場から梯子が通じて居る。物干場の床下より瓦葺の平家の一と棟が舞臺の右の方へ伸びて居る。瓦葺の後ろに一段高く土藏の屋根、庭の立木の梢などが見える。

陰暦晦日の星多き空。

第一節

伸太郎、おきん、利三郎

おきん、窓の戶を内より一枚密かに繰り開け、眞暗な二階の部屋から物干へ這ひ出る。やゝ暫く周圍を見廻した後梯子を攀ぢて火見櫓へ登つて行く。やがて伸太郎が一つ雨戶の隙間から物干しへ現れ、平屋の瓦葺の上へ飛び下りたかと思ふと、腹這ひになつて、物干しの床下へもぐり込み、其處にぢツと隱れて居る。

利三郎、二階の屋根の向ふ側から登つて來たと見え、ひよつこりと火見櫓へ現れる。

おきん　（闇に透かして男を見ながら、低く囁く）利三どんかい。

利三郎　うむ、お前もう來て居たのか。大變待たせて濟まなかつたな。

おきん　なあに今來たところだよ。

（ぴつたりと男と寄り添ふ。）

あゝ嫌だ、嫌だ。あたしや此處へ來てからもう一と月になるけれど、毎晩こんな思ひをして逢ふくらゐなら、一層、内に居る時の方がよかつたつけ。

利三郎　それ見なせえ。だから己の云はない事ぢやない。

何も醉興にこんな所で女中なんぞ働くには當らないぢやないか、綺麗な手足が汚れるだけでも勿體ねえ。

おきん　そんなうまい口をお叩きでない。

利三郎　だが、あんまり色氣のない話さ。世が世ならば私風情の及びもつかない下總屋のお嬢様ともあらう者が。……

おきん　後生だからそれだけは止めておくれ。お嬢様でもお姫様でも、あたしやお前の女房だよ。

利三郎　有難い仕合せでございます。

（欅の欄杆に腰をかける。）

おきん　利三郎どん好い加減にしないかね。止さないと往來へ突き落とすよ。

利三郎　どつこい危ねえ。

（おわてゝ欄杆から腰を上げる。）

今お前に殺されちや、犬骨折つて鷹に取られるも同然だ。

おきん　だけれど、ねお前に心變りでもされたら、あたし生かしちや置かないよ。

利三郎　それなら未だしも。お嬢様になり濟ました曉に、「下郎は口のさがなき者」で、ぽんと打ち首にされやしないかな。考へて見りや、どつちにしても己の命はあぶないものだ。

おきん　お前、そんな事を眞面目で云ふのかい。

利三郎　まあ、どうでもいゝさ。――時に物干しへ下りても大丈夫だらうか。

おきん　今夜は二階に誰も居ないの。此處は寒いから下へ行かう。

（先へ立つて、梯子を降り始める。）

利三郎　眞暗だから、踏み外づしちやいけないぜ。

おきん　あいよ。

（兩人、物干しに立つて、手すりに凭れつゝ喃々と語る。伸太郎は床下に身を縮めて、熱心に耳を澄ます。）

利三郎　今夜は大さう靜かな晩だな。お上さんは居らつしやるのかい。

おきん　さつき女中達をつれて廣小路へ買ひ物に出掛けたつけ。

利三郎　おしげどんは？

おきん　田舍に用が出來たつて、急に暇を貰つて行つたよ。明日の晩か明後日の朝は歸つて來るんだと、あたしや彼奴が大嫌ひさ。

利三郎　何だか煙つたい婆あだな。己も彼奴は癪に觸つて居るんだが、何しろ内の古顏だから、喧嘩をすると此方に損が立つばかりだ。

おきん　ところでね、利三どん此の間の話ね。

（と云ひかけて、あたりに氣を配り、更に低い纖嗄れ

た震へ聲となる。）

あたしや今夜がいゝと思ふよ。

利三郎　此の間の話つて？

おきん　今更になつてお恍けでないよ。ほら。

（男の耳へ口を寄せる。）

丁度おしげが居ないから、今夜が一番都合がいゝ。

利三郎　（身の毛の竦つやうな風をする）其の話はもう少し待つてくんねえ。下手をまごつくとお前も己も命がないんだから。

おきん　いやだよ此の人は、此の間あれ程約束をしたのぢやないか。

利三郎　約束はしたが、ハッキリと受け合つた譯ぢやない。

おきん　そんなら、お前不承知かい。

利三郎　不承知ぢやないけれど、何もそんなに急ぐ事はなからうがな。

おきん　いゝえ、お前と私の間柄が世間へパッと知れてからだと、餘計に嫌疑を受けるから、遣つてしまふなら今の内だよ。

利三郎　しかし、兎に角大恩を受けた主人の子だらう……

（打ち萎れて云ふ。）

おきん　此の場になつて、恩の義理のと愚痴をこぼすお前の心が、あたしやつくづく恨めしい。これさへうまく行けば、お前もあたしも一足飛びに、大家の後繼になれるのぢやないか。

利三郎　だがおきんちやん、よく考へて見ねえ。うまく行つたら仕合せをして、若しも露顯をした日にはどうする氣だい。悪い事に限つて、しまひにはキッと何處からか尻が割れて來るものだぜ。

おきん　今の内なら誰が私達を疑ぐるものかね。それに彼の子には、いろいろ内證を摑まれて居るし、追ひ追ひ分別がつき始めると、さうさう此方の道具には使はれて居ないだらうからね。

利三郎　内證と云つたつて、手紙の使を頼んだぐらゐが大した心配にもならないぢやないか。

おきん　そればかりぢやないんだよ。さつきお前と私が路次で話をして居たのを、すつかり立ち聞きして了つたらしいのさ。彼の子は此の頃、始終あたしの後ばかり追つかけて居るんだからね。

利三郎　……

（腕組をして考へて居る。）

おきん　あたしとおッ母さんとで旦那を欺して居る事も、みんな彼の子は聞いたらうよ。十三と云へば相當の話の解る年頃だもの。

利三郎　……

おきん　利三どん、お前もう少しシッカリおしよ。彼の子の口から大事が洩れたら、二人共立つ瀬がないぢやないか。ほんとにあたしが可愛いと思ふなら、どうか決心しておくれ。

利三郎　……（相變らず腕組をして溜息をつく。）

おきん　そんなに考へて居るのなら、何もお前にお頼み申しません。あたし一人でも遣つて見せるさ。（つんとすねて、二階座敷へ去らうとする。）

利三郎　おい、おい、ちよいと待ちねえ。

おきん　何さ。（と再び戻つて來る。）

利三郎　仕方がない、お前一人に罪を背負はせちや己の心が濟まないから、どうでも云ふなり次第にならう。

おきん　そんなら承知してくれるかい。利三どん、濟まないね。惡い奴に引掛かつたと思つて、堪忍しておくれよ。

利三郎　今夜のうちと云つたところで、一體どういふ手筈にするんだ。

おきん　彼の子は私の云ふ事だと何でも聞いてくれるから、夜中にそうツと誘ひ出して、物置小屋へ連れて行かう。

利三郎　大丈夫連れて來られるかい。

おきん　おしげが居ないから安心さ。

利三郎　證據が殘らないやうに、よく氣をつけて貰はうぜ。

おきん　何で殺したらいゝだらう。

利三郎　刄物だと血が出て困るから、一層の事細紐で、な。屍骸は今夜のうちに裸にして行李へ詰めて、濱町河岸からおもりを附けて投げ込んで了ふ。

おきん　それぢや、きつとだよ。

利三郎　うむ。あんまり寢覺がよかあねえな。――そんなら又後で會はう。（火見へ登つて行く。）

おきん　利三どん、ちよいとお待ち。時刻は何時頃がいゝの。（男の後を追うて櫓へ登る。）

利三郎　さうだな、二時頃にしねえ。己も其時分に物置へ忍んで行くから。（利三郎火見を下りて屋根の向ふへ消える。）

第　二　節

伸太郎、おきん

伸太郎、二人が屋根へ登つた樣子を見計らひ、床下から物干へ這ひ上つて欄杆の隅にうづくまる。おきん、利三郎に別れて櫓から物干へ下りて來る。

伸太郎　おきんかい。

（うづくまつた儘、聲をかける。）

おきん　（吃驚して）　おや坊ちやんですか、いつ此處へ入らつしやいましたの。

伸太郎　今。

おきん　何しに？

伸太郎　だつて獨で淋しいから、此處で考へ事をして居たの。

おきん　夜露があたると毒でございますから二階へお這入りなさいまし。

伸太郎　お前も這入んな。

おきん　えゝ、私も這入りますよ。實は先程洗濯物を置き忘れたものでございますから、それを取りに參つたのでございます。

（伸太郎を連れて、二階へ下りやうとしたが、ふと思ひついて立ち止まる。）

あ、坊ちやん、坊ちやん。

伸太郎　なあに。

おきん　あなたは私の言ふ事を何でもお聞きになりますか。

伸太郎　あゝ聞くよ。

おきん　それではね、今夜夜遲くね、お父さんにもお母さんにも內證で、私が好い所へ連れて行つて上げませうか。

伸太郎　あゝ。

おきん　其代り、此れは其の時迄誰にも仰つしやらずに居らツしやるんですよ。

伸太郎　うむ、お前僕の部屋へ誘ひに來てくれるのかい。

おきん　左樣でございますね。どう云ふ都合に致しませうか知ら。――坊ちやんは、今夜はおしげどんが居りませんから、獨りでお蒲團へお休みになりますの。

伸太郎　あゝ、おしげが居ない時は僕はいつでも、おつ母さんのお部屋の隣へ獨りで寢るよ。

おきん　そんなら、好い時分に起しに行つて上げますから、大人しく私のあとへ附いて入らつしやい。人が眼を覺ますといけませんからお內を出て了ふまで、決して一と言も口をお利きになつちやいけませんよ。戶外へ出たら、直ぐに私が好いお召物を着せて上げますからお寢間着のまんまで宜しうございます。――あなた、私が起しに參つたら、お寢惚けにならないで、早速起きて下さいまし。

伸太郎　僕は寢ないで待つて居るよ。

おきん　では私が唯今申し上げた事を、きツとお忘れなさらないやうにね。寢間着のまゝで、口を一と言もお聞きにならないで、默つて大人しく私に附いて入らつしやるのよ。

伸太郎　うん。
おきん　おわかりになりましたか。
伸太郎　うん。
おきん（暫く無言にてまじ〳〵と少年の額を見守る）坊ちやん、あなたは本當に感心なお子さんね。私の云ふ事は何でも聽いて下さいますのね。
伸太郎（思ひ切つたる樣子）僕はお前が死ねと云へば何時でも死ぬよ。
おきん（嘆きを紛らす笑ひ）おほゝゝゝ、まあなんて可愛い事を仰つしやるのでせう。（痛はるやうに頭を撫でてやる）
さあ、それでは下へ參りませう。
（おきん、伸太郎を伴ひて二階へ這入る。）

第　三　場

下紬屋裏手物置小屋――舞臺左手の奥に母屋の勝手口、それより右、母屋の右側に片庇の物置小屋が附いて居る。小屋の入口に二枚の板戸。
舞臺前面右方に大いなる掘井戸、圓形の石の井戸側、流し。
舞臺左の端より板塀が左方の奥に連なり、母屋の背後へ伸びてゐる。

眞夜中。

第　一　節

おきん、利三郎
利三郎は頰冠りをして臀を端折り、小屋の板戸の前に跣足で立つ。
おきん。粗い絣の袷にフランネルを重ね着して、伊達卷を締め、麻裏草履を穿く。
少し髮が亂れて居る。利三郎と並んで、板戸の傍に彳む。
兩人とも小聲にて語る。
利三郎　さあ、見つからないうちに早く連れて來ねえ。
おきん　もう支度はすつかり出來たのかい。
利三郎　うん、道具は一切小屋の中に入れてある。
おきん　すぐに起して連れて來るから、お前は小屋に隱れておいで。
利三郎　よし、よし。
（頷いて小屋へ這入り、中から板戸を締める。）
（おきん、拔き足差し足、板塀と母屋の間を左の奥へ去る。舞臺、稍暫く寂寥。）

第　二　節

伸太郎、おきん、利三郎

おきん、伸太郎の手を引いて、再び戻つて來る。伸太郎は久留米絣の寝間着を着て、草履を穿いてゐる。

おきん　坊ちやん、お寒いのでございますか、大さう顫へて居らつしやいますのね。

伸太郎　もう口をきいてもいゝのかい。

おきん　此處まで來れば大丈夫でございます。——

（小屋の前へ來て、窃かに板戸を開け、眞暗な中を指さす。）

さあ、お寒うございますから、ちよいと此の中へお這入りなさいまし、私が好いお召し物を着換へさせて上げます。

伸太郎　（小屋の奥を覗いて見ながら）何だか人が居るやうだね。

おきん　いゝえ、誰も居りは致しませんよ。此の中へ這入つて、ちやんとお召し物を着換へになりましたら、さつきお約束をしたいゝ所へ連れて行つて上げませうね。

伸太郎　僕は何だか恐くなつた。

おきん　何にも恐い事はございませんよ。ね、坊ちやんはよく言ふ事をお聞きになりますね。

伸太郎　お前も一緒に這入るのかい。

おきん　えゝ、えゝ、這入りますとも。誰が坊ちやんを置いてき堀にするもんですか。

伸太郎　（這入らうとして躊躇した儘、入口の敷居上に後ろ向きに立つ）眞暗で恐いから嫌だあ。

おきん　（逃路を塞ぐやうに、伸太郎の背後を擁して）利三どん、もう好いから遣つておしまひな。

（忽ち小屋の奥でどたんと云ふ物音。同時に伸太郎は暗中へ引き擦り込まれる。おきん、井戸端へ駈けて來て警戒するやうに周圍を見廻す、小屋の中にて伸太郎の呻く聲。）

利三郎の聲　（小屋の中より）おい、もう濟んだぜ。

おきん　（小屋の入口へ戻る）うまく行つたね。

（伸太郎、屍骸となつて、小屋の外へ運び出さる。利三郎は頭、おきんは足の方を抱へて、仰向に地面へ臥かす。利三郎の頬冠りをして居た手拭が、屍骸の頸部へ殘酷にくびれ込んでゐる。）

利三郎　（小屋の中から、柳行李と細引を持ち出す）早く其奴を裸にするんだ。

おきん　あいよ。

（着物を剝いで、赤裸々にする。）

（利三郎、おきん共に瘦せた屍骸を行李に詰め、細引を十文字にからげる。）

利三郎　おい、其の着物を一と纏めにして、裏の古井戸の

底へ沈めて了ひねえ。己はこれから、濱町河岸まで行つて來よう！　あゝあ、可哀さうに、飛んだ殺生をして了つた。

（茫然と行李を見下ろして佇む。）

おきん　お蔭で二人共樂が出來ると云ふものさ。こんな惡事をしたからにはお前も一生私を見棄てないでおくれ。

（物凄く笑つて、媚びるやうに男の手を執る。）

十五夜物語

人　物

浪人浦部友次郎
友次郎女房お渡
同　妹　お　篠
名主作兵衛
村の子供四五人

時

徳川時代寛永頃の心もち

處

江戸の町はづれ谷中村

第　一　幕

谷中村友次郎の寓居。

舞臺やゝ上手に茅葺きの一軒家。家の中は二た間に仕切られて、上手の部屋の前方は圓窓、側面は障子にて次の間に界す。正面の部屋の向つて右は佛壇、左は押入れ、前方は竹の濡れ縁。それより下手は勝手口の土間。土間は家の表から裏へ突き抜けて居るらしく、左手の壁に接して竈(へつつい)、土釜、流しなどが設けてある。家の外前方は枝折戸附きの四つ目垣、後方土間の裏口に近く桔槔(はねつるべ)の井戸。すべて、わびしい住居ではあるが、さりとて甚しく貧窮しても居ない樣子。舞臺のずつと下手前方は、薄尾花の生ひ茂つた丘陵の一部にて見切り、背景には、森を隔てゝ遠く天王寺の塔を望む。

或る夏の日の夕ぐれのこと、上手圓窓の葡萄棚には、葡萄の蔓が青々と伸び、その下に竹の涼み臺が据ゑてある。

下手の四つ目垣には、夕顔の花が咲いて居る。蟬、蜩などの啼(なき)く音が、一面に雨の如く聞える。

圓窓や間仕切りの障子を明け放した奥の間では、寺小屋を渡世にする浪人の友次郎が、四五人の寺子を集めて、手習を教へて居る。妹のお篠は、次の間の下手の爐端で、針仕事に餘念もない。友次郎は二十七八歳の色の白い、眉目の秀でた、品の好い男振り。黄平の單衣に角帶を締めて、嚴格に端坐して居るところは立派であるが、口邊には青髭が伸び、何となく面窶れがして、浪人臭い風情が見える。お篠の年頃は十七八歳、

水々と肥えた、氣のよささうな愛らしい娘。髮を島田に結ひ、少しく色の褪せた麻の葉の浴衣を着て居る。

幕が開いて暫くすると、下手の丘の蔭から名主の作兵衛が歩いて來て、枝折戸の外に立つ。

作兵衛　もし、もし、お賴み申します。お師匠さんはお宅かな。

お篠　はい、たゞ今お稽古をして居りますが、どなた樣でございます。

作兵衛　わしは名主の作兵衛ぢや。ちよつくら御免下さいまし。(と云ひつゝ枝折戸をあけて中に這入る)今日はちと、お師匠さんに話があつて參りましたが、いやどうも毎日毎日、お暑いことでございます。

お篠　ほんに、土用明けとは云ひながら、涼風の立つ樣子もなく、きびしい殘暑でございます。さうしてお話と仰つしやいますのは、何ぞ急なことでござんすかえ。

作兵衛　なあに、別段急ぎと云ふ譯ではありませぬ。もう直きお稽古が濟みませうから、そのうち此處で一服やつて、休ませて貰ひませう。(濡れ緣に腰をかける)

お篠　そこはあまり端近故、此方へおあがりなさりませ。

(仕事を片づけて、茶を入れ、蒲團を出しなどする。)

作兵衛　いえ／＼、それには及びませぬ。緣側の方が風通しがよくて、却つて涼しうござります。どうぞお篠さん、私に構はず仕事をなすつて下さいまし。飛んだお邪魔をいたしました。

お篠　なんの其のやうな事がござりませう。仕事と云ふのもお恥かしい、たゞもうほんの、散らかすばかりでござります。

作兵衛　どうしてどうして恥かしいどころか、わしの內の娘などは暑さにかまけて居睡りばかりして居るが、お前さんは又いつ來ても、よくまあ御精の出なさることぢや。御師匠さんと云ひ、妹御のお篠さんと云ひ、お年の若いに感心な。さすがは御武家の生れだけに、此方等のやうな百姓の子とは違つて居る。

お篠　まあ私としたことが、庄屋樣のお娘御と、くらべものにはなりますものか。つひ此の程まで兄の所へ、お手習ひにお通ひなされましたが、お美しうてしとやかで、失禮ながら御武家のお孃樣と申しても、恥かしうござんせぬぞえ。

作兵衛　あはゝゝゝ、でもお前さんは愛想のよいお人ぢや。しかし親馬鹿とはよく云つたもので、お世辭にもせよ褒められるとやつぱり嬉しうござるわい。あはゝゝゝ。(目を細くして、喜ばしさうに笑ふ)それはさうと、今の話の、お武家で思ひ出しましたが、一體お前樣がたは以前は誰方の御家中でござります。お二人さんとも、言葉づ

かひに上方訛りがありなさるが、いづれ西の方のお生れでござりませうな。

お篠　（奥の間の兄の方を見やりて、氣をかねる樣子）　さあ、私共の生國は、仰つしやる通り西の方でござります。……

作兵衛　さうして、いづこの御家中でござるかな。

お篠　外ならぬあなた樣のお尋ねなれば、お話し申しても差支へはござりませねど、つね／＼兄が申しますのに、以前はともあれ今のやうに落ちぶれて、村の衆の情に縋り、やう／＼暮らしを立てゝ行く浪人の身のうへでは、生國を人に知られるのも、つまりはお主のお名前を汚す道理ぢやと、戒められて居ります故、此ればつかりはお許しなされて下さりませ。

作兵衛　成る程なあ、お武家樣の心がけは格別なもの、いかさま御尤もでござります。これほど忠義な御家來に、お暇をお出しなさると云ふのは、お主樣のなされ方が聞えませぬ。

お篠　これにはいろ／＼仔細のあること、かりにもお主のなされ方を、お恨み申す筋合などはさら／＼ないのでござります。

作兵衛　いや／＼、お隱しなされても、私にはちやんと分つて居る。あのそれ、よく世間にあるやうに、お氣に入りの惡い侍が、お主樣へ讒言したのでござりませう。大方さうに極まつて居る。

お篠　決してさうではござりませぬ。兄が浪々の身になり果てましたは、それだけの落度があつてのことでござります。（さしうつむいて、沈鬱な調子になる）　其れも此れも、みんな時の運り合はせ、云はゞ前世の約束ごとゆゑ、今更誰を咎めませう。……

（お篠の打ち萎れた姿を見て、作兵衛も術なげに默してしまふ。）

（奥の間の友次郎は、子供に習字を敎へながら、二人の話に其れとなく耳を傾けて居たらしかつたが、此の時漸やく、「皆の衆、今日は此れだけにして置きませう。」と云ふ聲がして、次の間に立ち出でる。）

友次郎　（作兵衛の傍に坐り、慇懃に會釋しながら）　作兵衛どの、ようお越しなされました。先程からお聲を聞いて居りましたが、お待たせ申して相濟みませぬ。

作兵衛　いや、私こそお忙しいのに、大變お邪魔をいたします。今も妹御と話をして居りましたが、此の暑いのに毎日毎日、子供たちが御厄介になりまして、御苦勞なことでござります。

友次郎　そのお禮では痛み入ります。暑いとは申せ家の中で、子供を相手にいたすこと、骨は折れず氣兼ねはなし、

拙者のやうな人間には、性に適つた渡世でござります。

（此の時までに、子供等は取り散らした奥の間を片附け、天神机を壁の一方に積み上げた後、各々草紙を抱へながら、縁側の上手に脱ぎ捨てた草履を穿いて、枝折戸の方へ歩いて行く。）

作兵衛　これ子供たち、お前がたも感心に、精の出ることだなう。いつも稽古が濟んだらば、御師匠樣によくお禮を云ふのだぞ。

子供の一　お師匠さま、有り難うござります。

子供の二　有り難うござります。

（子供一同、行儀よく並んで、お辭儀をする。）

作兵衛　さうだ、さうだ。もう日の暮れに間もないから、道草を喰はずに、みんな眞直ぐに内へ歸んなさい。

子供の三　お師匠樣、ではまた明日參ります。

子供の四　左樣なら。

子供の五　左樣なら。

（子供等再びお辭儀をして、下手へ走り去る。遠く入相の鐘が鳴る。）

友次郎　（團扇を持つて身の周りを煽ぎながら）大分蚊が出て來たやうぢや。これおしの、蚊遣りを焚いたがよいぞ。

お篠　はい、畏まりました。

（お篠立ち上つて縁側に蚊遣りを焚き、佛前に燈明を上げ、それから勝手口に降りて、夕餉の支度にかゝるらしく、竈がけで水を汲み火をおこしなどする。いつしか蟬、ひぐらしの聲が止んで、蛙の啼く音が絶え間なく聞えて居る。）

作兵衛　しかしまあ有り難いことに、お前さんがたが私の村へ來て下すつてから、子供たちが大分行儀がよくなつて、お手習ひを勵むやうになりました。私がところの娘なども、どうやら物の本が讀めるやうになつたので、御師匠さんのお蔭ぢやと、いつも喜んで居りますわい。

友次郎　いや拙者こそ、浪人の身の糊口を濕はすよすがもなく、この谷中村へ流れついて、明日の日のたつきにも困じ果てゝ居た折から、ふとした緣で寺小屋を始めるやうになりましたのも、みんなお前樣のお骨折りでござります。それに妹のお篠が、用の合間には村の衆の針仕事を頼まれてくれますので、今ではまあ、どうなりかうなり樂に暮らし居りますが、此れも偏に作兵衛どのゝお情でござります。

作兵衛　さう云はれては困ります。お前樣のやうな學問のあるお侍が、子供を敎へて下さるのは、村の爲めに此の上もない仕合せぢや。此の後長く此の村に、住んでお貰ひ申したいが、考へて見れば、年の若いお前さまが、生

涯こんな片田舎でお果てなされる譯はない。やがて御歸参がかなふは知れたこと、其方（そつち）の運が此方の不運で、どうも仕方のないものぢや。

友次郎　歸参がかなふ道理なけれど、たとへどのやうな運が向いて参らうと、拙者はもう、二度と再び主人持ちにはならぬ覺悟。お役に立つものならば、生涯此處に居を定めて、及ばずながら子供衆に讀み書きを敎へて暮らしませう。

作兵衞　はて、それではお前様は、この草深い片田舎に、埋れておしまひなさる御所存かな。

友次郎　いかにも。仔細あつて世の中に望みを絶つた友次郎、この田舎家の風月を友として、のどかに淋しく世を送る所存でござります。

作兵衞　さうなさるのは惜しいことぢやが、私の方では好都合、――なう友次郎どの、お前様の所存を聞くからは、少しお頼み申したい事がござりますが、なんとかなへては下さるまいか。

友次郎　拙者で出來る事ならば、何なりとかなへて進ぜませう。どうぞ仰つしやつて下さりませ。

作兵衞　實はその話で、今日はわざ／＼伺ひましたが、改まつて尋ねられると、ちつと申しにくい次第がある。

友次郎　御遠慮には及びませぬ。どうぞ仰つしやつて下さりませ。

作兵衞　頼みと云ふのは、わたしの口から云ひ辛い話ぢやが、內の娘をお前様の嫁に貰つては下さるまいか。

友次郎　（びつくりして）何と仰つしやいます。

作兵衞　藪から棒にこんな相談を持ち出して、あまり無躾かは知れませぬが、疾うから私は考へて居たことぢや。お前様にしたところが、なんぼ世の中に望みを捨てゝ、田舎に朽ち果てる御所存でも、まさかに一生鰥夫（やもめ）をお通しなさる譯には行きますまい。

友次郎　……さあ、それはさうでございますが、末始終は兎も角も、尾羽打ち枯らした今の暮しでは、兄妹二人の口を過すがやう／＼のこと、なか／＼妻を迎へるまでには参りませぬ。

作兵衞　暮らしむきのことならば、失禮ながらどのやうにでも、面倒を見て進ぜませう。もと／＼ふつゝかな娘故、たつて貰つて下されとは云ひませぬが、どうぞ枉げて聞き届けて下さいまし。なう友次郎どの、私が折り入つてのお願ひでござります。

（友次郎、腕組みをして、ちつと考へ込んだまゝ、溜息をついて居る。）

作兵衞　……それともまた、お侍が百姓の娘を貰ふ譯には行かないとでも、仰つしやりますかな。成る程わしは百姓

ぢやが、先祖代々此の村の名主を勤めて、土地ではまあ、相應に由緒の正しい家柄でございます。腰に大小はさしませぬが、滿更の水呑み百姓ではない積りでござります。

友次郎　それはよく分つて居りまする。名主樣のお家柄が氣に入らぬなどと、拙者は假りにも申した覺えはござりませぬ。

作兵衛　それなら何が御不足なのぢや。本人の娘の氣だて、器量がお氣に召しませぬか。

友次郎　いえ／＼、あの娘御に何の不足がござりませう。拙者のやうな瘦せ浪人には、勿體なうござります。

作兵衛　では納得して下さるか。家柄にも本人にも不足がなくば、別段故障はござりますまい。

友次郎　日頃お世話になりまする名主樣のお頼み故、すげない返辭をお聞かせ申すのは、拙者も辛うござりますが、これにはいろ／＼込み入つた仔細のあること、此の緣談ばつかりは、どうぞあきらめて下さりませ。

作兵衛　あきらめろと仰つしやるなら、あきらめないものでもないが、込み入つた仔細と云ふのは、どのやうな事でござります。どうなりとして、其の故障を取り除けられるものならば、わしが身に代へても力を添へて進ぜませう。譯も云はずに、たゞあきらめろと仰しやられては、わしも思ひ切りが惡うござります。

友次郎　御道理ではござりますが、その仔細を打ち明けられる程ならば、拙者も苦勞は致しませぬ。いづれ長い月日の間には、お分りになる時節も來るでござりませう。不肖ながら友次郎は、僞りを申しはいたしませぬ。

作兵衛　それ程迄に深い仔細がおありなさるなら、わしもあきらめねばなりますまい。——お前樣がたが此の村へ移つておいでなされてから、我が子のやうに面倒を見て上げて、蔭になり日向になり、隨分爲めを思つた積りぢやが、今さら其れを云ひ出したとてせんないこと。——ようござります。ではさつぱりとあきらめてしまひませう。

友次郎　（兩手をついて詫び入る）　定めし恩を知らぬ奴ぢやと、御立腹でござりませう。それもこれも覺悟の上でござります。拙者の苦しい胸の中を、どうぞ御推量下さりませ。

作兵衛　年寄りの愚痴つぽい、云はずともよい事まで、つい口走つてしまひました。今のは私の云ひ過ぎぢや、氣を惡くして下さりますな。——しかしなう友次郎どの、斯うまでお頼み申すには、私の方にも譯がありましたのぢや。恥を云はねば分りませぬが、私の娘は、お前樣を焦れ募うて添ひ遂げられぬものならば、淵川へ身を投げると、云ひ暮らして居るのでござります。

友次郎　えゝつ、そりやほんたうでござりますか。

作兵衛　ほんたうどころか、その爲めに私も婆も、どれ程案じたか知れませぬ。大事な一人娘の身に、間違ひがあつてはならぬと、子の可愛さにひかれて、お願ひに出たのでござります。

友次郎　その御執心は忝なうござりますが、たゞ今も申し上げたやうな仕儀。かへすがへすも身を投げるなどの不了見は、お止まりなさるやう、お前様から御意見をなされたがようござります。

作兵衛　いかにも意見は致しませう。だが娘のあの様子では、なか〳〵聞き入れる筈はありませぬ。お前様を前に置いて、斯う申すのもをかしうござりますが、お武家育ちの、お年は若し器量はよし、娘は愚か此の爺でも、婿にして欲しい人品骨柄、戀ひ焦れるのは當り前ぢや。身持ちの正しいお前様故、御存知ござるまいが、此の村中で、お前様に思ひを寄せぬ娘は、一人もないくらゐでござります。

友次郎　（迷惑らしい顔つき）　はてまあ、そんな話は措いて下さりませ。

作兵衛　娘の頼みを聞いた時に、若しひよつとしてお前様に斷られたら、どうしようかと胸を痛めて居りましたが、困つた事になりました。何と云うて意見をしたらよいものか、娘の身に萬一の事でもあれば、私も生きては居られませぬ。くどいやうでも、もう一度、命にかへてお頼み申しますが、やつぱり聞き入れては下さりませぬか。

これ、此の通り拜みます。

友次郎　それでは拙者が、返答に困ります。どうぞ其の手をお上げなさりませ。――もし、作兵衛どの、たゞあきらめろと申しましたは、拙者が惡うござりました。さうまで仰せ下さるものを、聞き入れられぬ仔細と申すは、何をお隱し申しませう、拙者にはもう、定まつた妻があるのでござります。

作兵衛　（不思議さうに相手を見詰めて）　御内儀様があらつしやると？　私はついぞ、お見かけ申した事はないが、何處においでなさるのでござります。

友次郎　その不審は御尤も、――恥かしながら拙者の妻は、吉原と云ふところに、身を沈めて居りまする。

（作兵衛、呆然として、猶も相手を見詰めて居る）

友次郎　拙者は國を流浪してから、長らく麻布の狸穴に住んで居りましたが、妻が苦界に落ちたのは、ちやうど一昨々年の秋のこと。それや此れやで近所の手前も恥かしく、此の谷中村へ越して參り、圖らずもお前様の御恩を受けたのでござります。したが年期は三年故、今年の秋になりますれば、勤めを終へて戻つて來る筈。拙者も妹

も、ひたすら其の日を樂しみに、かうして明け暮れ待ち侘びて居ります。

（お徐、勝手口の用を濟ませて、家の後ろから上手へ廻り、葡萄棚の下から縁臺に腰をかけながら、蚊遣りを焚いてぢつとうつむいて悲しげに聞いて居る。夕闇がだん／＼濃くなつて、田圃の蛙がいよ／＼頻りに啼く。）

作兵衛　なるほど、さうでござりましたか。さうしてまあ、御内儀さまの御難儀は、どうした譯でござります。大方悪者にかどはかされて、そんな憂き目に遇ひなされたのでござりませう。

友次郎　いえ／＼、さうではござりませぬ。申し上げれば長いことでござりますが、妻が身を賣りましたのは、拙者の母の難病を直したい爲めでござりました。貧しい浪人の身の上で、病苦に惱む母を抱へ、藥餌を調ふる術もなく、途方に暮れて居りました折、妻は拙者へ義理を立てゝ身を賣つたのでござります。

作兵衛　さて、さて、それはまあお傷しい。さうして其の後お母様は、どうなされました。

友次郎　身代金で藥を買ふことは買ひましたが、折角の心づくしも手後れになり、その年の秋に亡くなりましてござります。

（お徐、話を聞きながら貰ひ泣きをして、そつと袂をしぼる。）

作兵衛　聞けば聞くほど哀れな話、身を賣つてまで、親御の命をお助けなさらうと云ふ、御内儀さまの眞心が通じないとは、何と云ふ意地の悪い世の中でござりませう。

友次郎　今更嘆いても及びませぬが、それも此れも、もとはと云へば皆拙者の心から。お主に背いて國を捨てた、不忠の罰でござります。

作兵衛　知らぬ事とは云ひながら、さう云ふ仔細がおありなさるのに、どうでも娘を貰つてくれと、先程から難題を云ひかけたは、餘りと云へば心なしでござりました。

友次郎　夫の嘆を見るに見かねて、我から苦界に落ち込んだ女を捨てゝは、拙者も男の一分が立ちませぬ。それのみか、母が彼の世へ參ります時にも、わが亡き後は早くお波を救ひ出して、母と思うていたはつてやれと、くれぐれも拙者への頼みでござりました。その遺言に背きましては、重ね／＼の不孝の罪が恐ろしうござります。

作兵衛　いや、さうでござりませうとも。さうなうてはならぬ事ぢや。

友次郎　亡き母の菩提所は、天王寺でござります故、朝な朝なの墓參りが出來ますやう、此の谷中村に家を持ちましたが、地獄に等しい境涯の、妻の體が救はれぬうちは、

母も地獄に居はせぬかと、たゞそればかりが案じられてなりませぬ。

作兵衛　しかしまあ、今年の秋といへば、もう二た月とは間のないこと。まゝならぬは浮世の常でも、さう〳〵不仕合せが續くものでござりますまい。お前樣も御內儀樣も、昔の苦勞を思ひ出して、笑つて話の出來るやうな時節が來るでござりませう。――わしも先から身につまされて、つい貰ひ泣きをしましたが、てもこんな悲しい事は、早く忘れてしまひたうござります。

友次郎　面白くもない身の上話を、長々とお聞かせ申して、定めし御迷惑でござりませう。――さう云ふ譯ゆゑ緣談の儀は、平にお斷り申しますが、返す〳〵も短氣な眞似をなさらぬやう、お前樣から娘御へ、御意見をなされて下さりませ。

作兵衛　仰しやる迄もござりませぬ。いかほど聞き分けのない娘ぢやとて、今のお話を伺つたらさつぱりとあきらめるでござりませう。

友次郎　あゝもし、今の話は拙者どもの恥辱になること、娘御の外には誰方にも、御內分に願ひます。

作兵衛　ようしうござります。きつと承知をいたしました。（再び鐘の音が鳴る）さう云ふうちにもう暮れ六つ、それでは私は、此れでお暇をいたしませう。

友次郎　左樣ならば作兵衛どの、御內儀殿にも娘御にも、どうぞ宜しうお取りなしを願ひます。

（お篠、涼み臺を離れて、枝折戶口へ作兵衛を送つて出る。）

作兵衛　ではお篠さん、お暇の節にわたしの內へも、ちと遊びに來なさるがよい。

お篠　有り難うござります。いづれ其のうちお邪魔に上ります。

（作兵衛會釋して下手へ去る。お篠は、まだ鳴り止まぬ鐘の音にぼんやりとなつて、枝折戶に凭れたまゝ表の闇を打ち眺める。）

（作兵衛の歸つたあとで、友次郎は佛壇の前に、暫く額づいて居たが、やがて涼臺に立ち出でゝ、何事をか考へながら、空の葡萄棚を見上げて居る。鐘の音の全く止みたる頃、ふと心づいてお篠は家の中に這入り、行燈の灯を入れ、夕餉の膳を座敷に運び、緣端に出て友次郎に聲をかける。）

お篠　兄上さま、夕餉の支度が出來ました。どうぞ召し上つて下さりませ。

友次郎　拙者はこゝで少し涼んで居るほどに、そなたは先にたべたがよい。

お篠　でも折角、裝つたものが冷めます故、召し上つて下

さりませ。
友次郎　さうでもあらうが、まあそなただけ濟ましたらよいではないか。拙者は今宵はどうしたものか一向物がたべられない。
お篠　（急に打ち萎れて）　それでは一旦片附けて、後ほど一緒に頂きませう。
（お篠、膳を下手へ片寄せ、自分も庭に降りて兄の傍にうづくまる。）
友次郎　（物思ひに沈みながら、上の空で）　……そなた、此處へ何しに來たのぢや。
お篠　はい、何の用でもござんせぬが、内の中が私一人で、淋しうござりました故、……
友次郎　それはさうと、大さう表が暗いやうぢやが、月の出るのは何時であらうなう。
お篠　今宵はたしか廿日の宵、月の出は遲うござります。それにまあ、日が落ちてからばつたりと風が止んで、何と云ふ蒸し暑い晩でござりませう。
友次郎　廿日と云へばもう今月も程なく明ける。――早く涼風が吹いて欲しいが、今年は去年に比べると、一と入夏が長いやうぢやの。月日の立つのが待ち遠しいなあ。
お篠　待ち遠とは云ひながら、待ちに待つた三年も、あと一と月か二た月足らず、姉上樣の御無事なお顏を、やがて見る事が出來まする。
友次郎　その一と月か二た月が、わしにはどうも待ち遠で、もどかしうてならぬわい。
お篠　そのやうにいつも〳〵、姉上樣の事ばつかり、思ひ詰めて居らしつては、御氣分にも障りませう。何はともあれ、彼方で御膳を召し上つてはいかゞでござります。
友次郎　いや、構はずに置いてくれ。――作兵衞どのに責められて、身の上話をしたせゐか、急にいろ〳〵の事を想ひ出して、わしは胸が一杯になつて來た。
お篠　大方さうでござりませう。私も先ほど、あのお話を聞いて居て、溜らなくなつて參りましたが、返らぬことをくよ〳〵と考へてもせんないこと。姉上樣がお歸りになるまで、昔の話はふつゝりと止めにいたしませう。
友次郎　お波の歸つて來る時分は、ちやうど母上の三回忌。御存生であつたなら、どんなにお喜びなさるであらうに、それを思ふと口惜しうてならぬわい。
お篠　はて、まあ、もうお止しなされませ。
友次郎　わしは話をした方が、却つていくらか氣が紛れる。お波が戻つて來るまでは、せめてお波の噂だけでもして居たい。
お篠　さうして若し、姉上樣がお歸りになりましたら、やつぱり此の谷中村で、お暮らしなさる御所存でござんす

かえ。

友次郎　世を捨てた身が、何處に住まうと同じこと。あの天王寺の塔の見える此の村に、母上の墓守りをして、お波と一緒に暮らして行けば、わしは其れで滿足ぢや。外に此の世に望みはないのぢや。

お篠　でもこのやうな片田舍に、埋れてしまひなされては、姉上樣がお可哀さうでござりまする。

友次郎　いや／＼、お波とても、きつと滿足するであらう。彼の心は、わしにはよく分つて居る。たとへどのやうな草深い山奥でも、夫婦で睦じく暮らすなら、淋しいとは思ふまい。わしはたゞ娘盛りの年頃を、かうして過して行くそなたの身の上が、氣の毒でならぬのぢや。

お篠（ほろりとして）何のまあ、そのやうな事がござりませう。母さまのない後は、姉上樣を母と思うて居る私、一生お側に居て、孝行をつくしたうござります。

友次郎　わしは自分の心がら故、たとへどれほど落ちぶれても、誰を恨まう筋はなけれど、一人の兄が惡い爲めに、母上のみかそなたまでも苦勞をさせるが面目ない。ほんにそなたは、不仕合せな女子ぢやなあ。

お篠　私はまた、姉上樣がお氣の毒でなりませぬ、連れ添うてからまだ半年も立たぬうち、飽きも飽かれもせぬ仲で、吉原へ身をお賣りなされたとは、何と云ふ不仕合せでござりませう。それを思へば私などは勿體ない、なぜあの時にお身代りをせなんだかと、いまだに濟まない心地がいたして居りまする。

友次郎　わしもあの時お波とは、片時も別れたうなかつたが、なんぼ身勝手な兄ぢやとてそなたを身代りにはさせられぬ。――是非ともお波に、母への義理を立てさせる場合であつたのぢや。

お篠　したが、私のためにも掛け換へのない、大事な母さまでござります。姉上樣に孝行をさせて、私が默つて見て居るのは、ほんに辛うござりました。

友次郎　親は親でも、お波に取つては義理ある母上、――それを云ひ出すと長いことぢやが、そなたも定めし知つてであらう。わしが此のやうに浪人して、母上やそなたに、思はぬ憂き目を見させるやうになつたのも、もとはと云へばあのお波からぢや。

お篠　さう仰つしやつては濟みますまい。それではどうやら、姉上さまがお惡いやうに聞えませうが。

友次郎　わしは決して、お波が惡いと云ふではない。お波は勿論、わしのした事は、過ちにもせよ、自分たちで後悔しては居ないのぢや。わしもお波も、あの時御家中の侍に、若氣の至りぢやの、不屆きぢやのと、罵られるのは覺悟の前、命を捨てゝも惜しうないと思つて居たのぢ

や。それをまあ、殿のお慈悲で、すでにお手打ちになるところを、お目こぼしに與つたのは意外の仕合せ、——全く二人は仕合せぢやつた。殿樣から永のお暇が出た後は、世間に憚るものもなくなり、たとへ貧しい暮らしをしても、二人は結局本望を成就して互ひに喜び合うて居たのぢや。

お篠　さあ、それ故私は、猶更姉上樣の義理立てが、おいたはしうござりました。

友次郎　そなたでさへ其のやうに思ふものを、私の胸の中はどんなであつたらう。二人が意地を通した爲めに、繋がる緣で難儀をなされる母上を、見殺しにしては天罰が恐ろしい故、血の涙でお波を出してやつたものゝ、わしはあれから毎夜々々、泣かない晩はなかつたわい。

お篠　せめて、母上のお命でも助かることか、あへなくおなくなりなさらうとは、姉上達もつく／＼御運の惡いお方でござります。

友次郎　あゝ、私は早うお波に會ひたい。私の心は、三年前の八月も、今も少しも變らぬばかりか、會はずに居れば居るほどに、一と入戀しさが身に沁みる。

お篠　姉上樣とて同じやうに、年期の明くのを待ち焦れておいでなさりませう。たとへ體は汚れても、お心は汚れはいたしませぬ。

友次郎　何の汚れてよいものか。此間よこした文にも、體は廓に住んで居るが、心は明け暮れ谷中の里に通うて居ると、しみ／＼書いてあつたわい。——それにつけても、今宵は月のないのが淋しい。わしは月を眺めると、二人の魂があの大空の鏡に映(うつ)つて、互ひの胸を照らすやうな氣がするのぢや。

お篠　（ふと下手の方を見て）　おゝ、御覽なさりませ。東の空が、あれ、あのやうに明うなつて參りました。もう直きお月樣が、お昇りなさるのでござります。

友次郎　成る程月が昇ると見える。こよひは空が晴れて居る故やがて此處にもすゞしい影がさすであらう。……

（兩人、葡萄棚の下を離れて、枝折戸の方へ歩み寄り遠くの森かげを眺めて佇む。空がだん／＼薄明るくなる。）

お篠　あれ、天王寺の森が、くつきりと見えて居りまする。あのお寺の塔の側から、お月樣が出なさるのでござりませう。

友次郎　ほんに、母上のお墓の上から、月が此方(こなた)へ昇つて來る。冥途においでの母上が、二人の心をいつまでも結びつけて下さるのぢや。

お篠　きつとさうでござります。草葉の蔭で母上樣が、お二人のお身の上を、お守りなさるのでござります。（うづ

くまつて合掌しながら、塔の影を伏し拜む）——母上樣、母上樣。姉上樣が一日も早く御無事でお歸りになりますやう、どうぞお願ひ申しまする。

（友次郎は無言のまゝ、猶もうつとりと向ふを視詰めて居る。）

（森のうしろが愈々明るくなつて、月が將に出ようとして居る。）

第　二　幕

第一幕から三月ほど過ぎた九月十五夜のゆふべ。同じ場所。

上手の葡萄棚には房々と葡萄が實り、下手の丘のすゝきは穗に出でて、あたりは蕭條たる秋の景色に變つて居る。

第一幕と同じ時刻で、友次郎は奥の間に子供を敎へて居るらしいが、締めてある爲めに、中の樣子は分らない。正面の部屋の爐の傍に、女房のお波が病人らしい青白い顏をして、膝を立てゝ坐りながら、長煙管で煙草を吸つて居る。品のよい、優れた器量の女であるけれど、さすがに華魁上りらしい面影がつゝみ切れず、ぱつちりした、潤ほひのある大きな瞳には、惰げな疲勞の色がたゞよひ、動作や素振りにも、何處となくしどけない風情が見える。さうして時々、さも〳〵氣分が鬱陶しさうに、頭痛膏を貼つた左右の蟀谷を叩いたり拳骨で額をぐり〳〵と揉んだりして居る。

お篠は臺所に降りて、夕餉の支度に忙しさう。

お波　もし、お篠どの。用のところをお氣の毒でござんすが、どうぞ私に、お湯を一杯汲んで下さりませ。

お篠　はい、畏まりました。

（お篠、爐の上に吊るしてある鐵瓶の湯を茶碗に注ぎ、お波の傍へ持つて行く。）

お波　毎度々々、無精をして濟みませぬが、あまり體が大儀故、惡いとは思ひながら、つい〳〵そなたを使うてばかり居りまする。

お篠　姉上樣とした事が、此れはまあ改まつた御挨拶でござります。さうしてあの、今日もやつぱり御氣分がすぐれませぬかえ。

お波　何處と云うて別段に、惡い所もござんせねど、たゞもう體の節々が解れるやうに惰くて、頭痛がしてなりませぬ。廓を出てから今日で一と月餘りになるのに、かうして明け暮れぶら〳〵と、煩ひつゞけ、内の人にもそなたにも、面目ないうござんする。

お篠　何の面目ない事がござりませう。長い間憂き艱難を

なされたのに、たまには骨をお休めなさるのが當り前、まして御病氣なら是非ない事でござります。御用は私がいたします故、どうぞお樂においでなさりませ。

お波（お篠の話の途中から、煙管を枕にぐつたりと體を崩し、片手で額を抑へたまゝ俯向いて居る）そなたの言葉に甘えるやうでござんすが、どうにも私は手足がだるうて、斯うして居るのが切なうてなりませぬ。勝手ながら半時ばかり、横にならせて貰ひませう。（すぐ其の場に倒れるが如く、ごろりと寢てしまふ）

（お篠、呆れたやうにして眺めて居たが、ふと心付いて押し入れから掻巻と枕とを出し、默つてそつとお波に與へた後、勝手口へ去らうとする。）

お波（枕もとの煙草盆を引き寄せ、煙草に火をつけながら）それはさうと、寢て居てそなたに指圖をしては濟みませぬが、今宵は母上樣のお逮夜故、何か御佛前へ供へるものを、拵へては下さんせぬか。

お篠　はい、それは私も心付いて居りましたれど、何を云ふにも不自由な田舍のこと、立派なお盛り物も出來ませぬ故、母上樣が大好きな白味噌のお汁を供へる積りで、今しがた支度にかゝつて居ります。

お波　それはまあ、よう思ひついて下さんした。母上樣も、嘸かしそなたの心づくしを、お喜びなさるでござんせう。

お篠　どうせ私の手料理で、お口には合ひますまいが、姉上樣も宜しかつたら召し上つて下さりませ。

お波　私もあとで御馳走になりませうほどに、たんと拵へて貰ひますぞえ。

お篠　はい、はい、承知いたしました。

（お篠、臺所へ降りて、味噌を摺り鍋をかけなどする。その間にお波は寢入つてしまふ。）

（程經て、奥の間の障子が明き、四五人の子供たちが「お師匠樣左樣なら」「左樣なら」と口々に挨拶して出て來り、お波の樣子を不審さうに偸み視ながら、庭に降りて枝折戸の外へ駈けて行く。）

子供の一　おい、おい、此の間來たお師匠さんの內の伯母さんはいつもごろ／＼晝寢ばかりして居るね。

子供の二　ほんとにあの伯母さんは行儀が惡いや。

子供の三　そりあさうさ。あの伯母さんは吉原の華魁なんだとさ。

子供の四　お師匠樣は己たちにはやかましい癖に、伯母さんにはちつとも小言を云はないで、馬鹿に優しくして居るぜ。よつぽどをかしいなあ。

子供の五　よせよ、よせよ、そんな大きな聲を出して聞えると惡いぢやないか。こんな處でしやべつて居ないで、もう歸らう。

子供の一　あゝ、もう歸らう。今夜は十五夜のお月樣だ。早く日が暮れるといゝなあ。
子供の二　己は此れから内へ歸つて、月見團子をたべるんだ。
子供の三　己もお團子をたべるんだ。早く歸らう。
子供の四、五　歸らう、歸らう。
（子供等一樣に空を見上げて「お月樣いくつ、十三七つ――」と歌ひながら、下手に歩み去る。歌の聲が長く長く舞臺に殘つて、だんだん微かに消えて行く。）
（夕ぐれの日の光が次第にうすれ、あたりは漸く夜の色になる。きりぎりす、蟋蟀などの鳴く音が、おいぢいと悲しげに聞え、勝手口の竈の煙が軒端を白く立ち籠めて、庇に渦を卷きながら這つて居る。お篠は小さな黑塗りの膳に、焚きたての飯と味噌汁とを盛つて佛前に供へ、燈明をあげて再び臺所へさがる。）
（友次郎が奧の間から出て來る。佛前に跪いて禮拜し、お波の寢姿を苦々しさうに顧みて腰をかける。）
友次郎　お波はまた寢たのか。これ、お波、お波。
お篠　つい先程まで、お眼ざめでございましたが、今しがたお寢みになつたと見えまする。
友次郎　（不愉快さうな溜息をする）いつもいつも、氣分がすぐれぬと云うて居るが、ほんとに困つたものぢやなう。
お篠　御自分でも、何處が惡いのやら分らぬと、仰つしやつてゞござります。折角樂しみにして居りました、姉上樣がお歸りになつても、この御樣子では心配でなりませぬ。
友次郎　わしは何だか、此のごろ一向面白くない。朝に晩に、力拔けしたやうなお波の顏を見て居ると、自分も氣分が塞いで來て、がつかりしてしまふわい。……
（お篠、土間の降り口に腰をかけて、無言のまゝ項垂れて居る。）
友次郎　なうお篠、わしにはどうやらお波の素振りが、昔と變つて居るやうに見えるが、そなたはさうは思はぬかの。
お篠　お變りなされたやらなされぬやら、私にはよく分りませねど、御病氣とあれば據ん所がござりませぬ。
友次郎　病氣とは云へ、格別の事もない樣子。起きて居れば居られるものを、なんぼ體の節々がだるいとて此のやうに寢そべつてばかり居られては、人に見られても恥かしい。散々苦勞をかけた故、今日までは知らぬ振りをしていたはつて居たものゝ、あまりと云へば勝手過ぎる。
お篠　さう仰つしやれば私にしても、腑に落ちぬ事がござりますが、長い間廓の風が身に沁みついた姉上樣、この上ともにいたはつてお上げなされば、いづれ追ひ追ひに

お直りなさるでござりませう。まあ〳〵御勘辨なさりませ。

友次郎　廓の風に馴染んだとは云ふものゝ、もとは立派な武家育ち、御殿奉公まで勤めた身で、賤ながらそなたに用を云ひつけ、煙草は愚か私に隱して寢酒までも飲むらしい。こんな事にならうと知つたら、勤めをさせねばよかつたになあ。……（暫く腕組みをして考へ込んで居たが、やがて何事か氣が付いたらしく）さう云へば今日は母上のお逮夜、何ぞ佛に供へたいと思うて居たが、ちやうど幸ひ、十五夜の月見團子を上げたい故、そなたに御苦勞でも、隣村へ往て買うて來てはくれぬかいな。

お篠　先程私の手料理を、ほんの少しお供へ申して置きましたが、十五夜のことはとんと忘れて居りました。そんならちよいと、買ひに行つて參りませう。

友次郎　では頼んだぞえ。（佛壇の下の抽斗から財布を出し、錢を摑んでお篠に渡す）もう日が暮れた程に、氣をつけて行くがよい。

お篠　畏まりました。急いで行つて參りませう。

（門口へ出て空を仰ぎ、家の中をふり返つて。）

お篠　兄上樣、御覽なさりませ。お月樣がお昇りになりますぞえ。

友次郎　（下手の緣先に立ち上つて）おゝ、月が出たやうぢや。夜路とは云へ今宵は外が明るからう。

お篠　では、直きに戻つて參ります。

友次郎　さ、さ、早う行つて來やれ。

（お篠、急ぎ足に下手へ這入る。）

（友次郎が緣先に立つて居る間に、お波はゆる〳〵と起き上り、素知らぬ顏で煙草を吸つて居る。）

（十五夜の月が、森の向ふから徐かにさし昇る。）

友次郎　（お篠の姿が見えなくなると、ちらりとお波を一瞥して、上手の席に戻る）そなた、今日は氣分がどうぢやの。

お波　はい、有り難うござんすが、今もやつぱり、手足がひだるくものうくて、さつぱり浮き〳〵しませぬわいな。（云ひつゝ、興ざめた面持ちで、相變らず煙草を吸ふ。）

友次郎　何にいたせ困つたことぢや。――常とは違うて母上の三回忌のお逮夜に、肝腎なそなたがそのやうでは、親と思うて大事にせよと云ひ遣された佛樣にも、わしが第一申譯がない。なうお波、どうぞ頼むほどに、もうちつと元氣を出してはくれぬかいの。

お波　私ぢやとて胸の中では、濟まぬ濟まぬと思ひながら、どうしたことやら元氣がなくて弱ります。まあ許して下さりませ。

友次郎　外ならぬそなたのこと、許すも許さぬもないけれ

ど、わしはつく〴〵――(云ひかけ伏目になり、かすかな、遠慮がちな聲で) そなたを吉原へやつたのが、口惜しうてならぬわい。――

お波　私が吉原へ身を賣つたは、母上さまの御病氣を直したさ。――今になつて口惜しいと仰つしやるのは、どう云ふ譯でござんする。

友次郎　あの時そなたを出してやるのは、身を切るよりも辛かつたが、もと〳〵二人は命を的に契つた戀仲、三年が五年別れて居たとて、互ひの心はよもや變るまい、變る筈がないと信じて居たのぢや。わしは考へ違ひをしたのぢや。

(草葉の露にすだく蟲の音、ます〳〵繁く細やかになる。背景の外に昇つて行つた月は、中天に懸つたらしく、水のやうな青白い光が、皎々と舞臺一面に冴え返る。)

お波　それでは、私が、誰かほかに、思ふ男を持つてでも居るやうに、仰つしやるのでござんすかえ。

友次郎　いや、いや、さうは思ひませぬ。噂に聞けば、そなたは廓で全盛を謳はれたとか云ふ話ぢやが、外に男のあるものなら、此の谷中村のあばら家へ、戻つて來てはくれますまい。

お波　廓で送つた月日のことは、思ひ出しても厭でござんすが、多勢のお客から身請けをせうと攻められるのを斷りつゞけ、毎度々々、文に書いて上げたやうに、體は苦界に沈めても心はお前の傍に居る氣で泣いて暮らして居りました。

友次郎　此方も其れと同じやうに、三年の間そなたの事ばかり思ひつゞけ、早くことしの秋が來て無事な顏を見たいものぢやと、明け暮れ祈つて居たけれど、今になつて考へれば、わしは長いこと、夢を見て居たのぢや。

お波　ではお前こそ、心變りをしなさんしたのでござんせう。

友次郎　わしは未だに、そなたの爲めに世を捨てた、昔の心をなくしはせぬ。そなたと云ふものがあればこそ、斯うして此世に生きて居るのぢや。

お波　いえ、いえ、何と仰つしやつても、變らぬとは云はせませぬ。長い間色里の水に漬かつて、男心の裏おもてを知りつくした私には、ようく分かつて居りまする。お前は變らぬつもりでも、お前の心は變つて居るぞえ。

友次郎　わしが變つて居るとしたら、それはそなたが變つたからぢや。わしはそなたが男心の裏おもてを、知りつくしたのが厭なのぢや。そなたが此處へ歸つて來てから、わしは何だか、急に自分と云ふ者が淺ましくなつて來た。男と生れて、そなたより外に女を知らぬ私の心が、私の

體が、遊里へ通ふ男たちと、違はぬやうに思はれて來た。そなたの眼にも、定めしわしが其のやうに見えるであらう。

お波　わたしも廓へやられるまでは、お前の外に男を知らぬ清い女でござんしたが、三年の間の憂き勤めで、男の醜さ卑しさがしみじみ胸にこたへました。男に屍骸を預けても、魂までは汚されまいと、一途に思ひ込んで居るうちに、私はどうやら屍骸ばかりで魂のない、腐つた女になつてゐたのでござんする。

友次郎　それ故わたしは口惜しいと云つたのぢや。そなたを腐つた女にしても、母上をお助け申すことが出來たら、せめて少しは言ひ譯もあらうものを、大事な親と戀人とを、一度になくしたのが口惜しいのぢや。

お波　魂だけはお前の所へ、預けて置いた積りで居たのに、谷中村へ歸つてからもう一と月になるけれど、一旦腐り果てた體には、二度と再び、昔の心が蘇生つては來ないさうな。

友次郎　自分の心が頼りにならぬ世の中に、人の心の變るのは當り前、わしはそなたを恨みはせぬ。恨むどころか、氣の毒に思うて居るぞえ。

お波　その氣の毒はお互ひの事でござんする。お前にもお孃どのにも、親のやうに大切にして貰ひながら、頭が痛いのだるいのと我儘を云ひ張るのを、ようまあ今日まで堪へて下さんした。廓で覺えた怠け癖を、直さう直さうと思つて居ても、ふつゝり世の中が厭になつて、生きて居るさへ大儀でならない今日此のごろ、かうして居るだけが私には、やう／＼の事でござんする。

友次郎　そなたもわしも、なぜ此のやうに心に緩みが出來たであらう。昔が夢か今が眞か、夢だとすれば私は覺めねばよかつたわい。

お波　どちらが夢でも眞でも、互ひの心が斯うなる日には、もう此れぎりでござんせう。男の醜さを私が知り、女の醜さをお前が知つてしまつては、むかしの戀は戻つて來る筈がござんせぬ。

友次郎　二人の戀をつなぐものは、魂と魂ぢやと信じて居たのに、實は屍骸と屍骸ばかりだつたのぢや。互ひに淺ましいと思ひながら、その淺ましさに引き摺られて、いつまで斯うして居るのであらう。

お波　此の世に生きて居る間は、その淺ましさを逃れる譯には行きませぬ。お前もわたしも、世間知らぬ若い頃には、戀の美しさが眼について、淺ましさに氣が付かなんだのでござんせう。

友次郎　そなたの云ふ事がほんたうなら、わしはどうしたらよいであらう。侍の意地を捨て、浮世を捨てゝかゝつ

た戀を、此のまゝには濟まされぬ。戀の命の長さ貴さを信ずればこそ、そなたの心を頼めばこそ、わしは樂しく生きられたのぢや。

お波　魂と魂との、變らぬ戀を樂しまうと仰つしやるなら、此の忌はしい屍骸(なきがら)を捨てゝしまふより外に、よい思案はござんせぬ。醜い影を此の世に殘して、あの世へ行けばお前も私も、きつと清淨な人間に生れ變るでござんせう。

友次郎　そんならそなたは、わしと一緒に死んでくれるか。

お波　私は今も云ふやうに、此の世に未練はござんせぬ。生きて居ればお互ひに、愛憎をつかされるばかり故、お前さへ得心なら、死んで未來で添ひたうござんす。

友次郎　そなたの心を聞いた上で、わしも死なうかと思つて居たが、かうまで二人の氣が合うたは、あの世でめでたく添ひ遂げられる證據であらう。

お波　ちやうど今宵は母上のお逮夜、之れも佛の手びきでござんする。

友次郎　そなたをこゝで殺しては、親と思つていたはれと云ふ、いまはの際の母上のお言葉に背くやうで勿體ないが、冥途でお詫びをするとしよう。

お波　浮世が厭はしうなつて見れば、三年前におなくなりなされた母上が羨しい。生き殘つた私等こそ、却つて不運でござんした。

友次郎　そなたが廓に居るころは、毎夜々々、天王寺の森から上る月を便りに、樂しい行くすゑを夢みて居たが、今宵の滿月は二人の爲めに來世を示す眞如の光。――どうせ死ぬならあの月かげの曇らぬうち、母上の命日に間に合ふやうに、最後を急ぐがよい分別。

お波　冥途の闇と戀路の闇を、隈なき月が照す宵に、お前と行けば迷ふこともござんすまい。二人の仲は此れからでござんする。

友次郎　そなたと一緒に蓮の臺(うてな)で、變らぬ戀を語り合ふのぢや。――それではお波。

お波　友次郎さま。

友次郎　お篠が戻つて來ぬうちに、早く支度をしたがよいぞえ。

お波　でも氣の毒なはお篠殿、私等二人が亡い後はよるべのない女の一人身、どんなに嘆くでござんせう。

友次郎　妹には可哀さうでも、戀の爲めには換へられぬ。二人が死んだら、お篠のことは、日頃親切にしてくれる作兵衛殿に頼むとしよう。わしは疾うから覺悟をきめて、ゆうべの内に書き置き迄も認めておいたのぢや。

お波　私も覺悟はついて居るほどに、さうきまつたら直ぐに此れから、一緒に行かうではござんせぬか。

友次郎　こよひの内に冥途に行つて、先立たれた母上に、

早う會ひたうなつて來た。（佛壇に向つて合掌する）——もし、母上樣、お跡を慕うて、此れから二人で參りまする。

お波　（夫の傍に跪いて）どうぞ待つて居て下さりませ。

兩人　南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

（禮拜が濟むと、友次郎は佛壇の下の扉から、脇差を取り出し、お波にそれと目くばせして奧の間に去る。お波は輕く頷いて、行燈の明りを吹き消した後、夫につゞいて部屋に這入り、境の障子を徐かに締め切る。）

（行燈を消すと同時に、氷のやうな名月が屋内にさし込み、部屋の中には纔かに佛壇の燈明が陰鬱にまたゝくばかり。やゝ長い間、舞臺無言。たゞ咽び泣く蟲の音のみ繁し。）

（程經てから、奧の間で夫婦の呻く聲が仄かに洩れる。同時に鐘の音。）

（お篠が下手から戻つて來る。家の中が暗いのを怪しみながら）

お篠　兄上樣、姉上樣、どちらでござります、どちらにおいでなさります。唯今歸つて參りました。

（と云ひつゝ、手さぐりで室内を歩き廻り障子を開けて奧の間に這入る。）

（間もなく、殆んど蟲の音に紛ふやうな、月の光に融け込むやうな、微かな、顫へを帶びたお篠の歔欷の聲が、次第に繁く激しく聞えて來る。さうして、其れが帛を裂くやうな強い調子の泣き聲に昂じて來た時、お篠は次の間へ駈けて出て、佛壇にばたりとひれ伏してしまふ。）

お篠　お二人とも、そりやあんまり御勝手でござります。御自分たちの爲めばかりを考へて、跡に殘つた妹の身を、どうなさるのでござります。せめて私に一と言ぐらゐ、知らせて下すつてもよいものを、あんまり酷いではござんせぬか。……

（お篠、口惜しさうに體をもがいて泣き崩れる。）

——幕——

春の海邊

人物

三枝(さへぐさ)春雄　工學士
同　梅子　春雄の妻
同　靜子　春雄の長女
原田千代子　春雄の妹、或る銀行家の妻
河村雪子　某省某局長の夫人、梅子の實母
吉川　清　文學士、某雜誌記者
まつ　下女

時

三月の末の或る一日、午後一時頃より夜の十一時頃までの出來事

處

相州鎌倉長谷の海岸

第一幕

河村家別莊の一室、——舞臺の下手は壁、上手と正面の奥は障子。兩方の障子を明けると外の縁側に硝子障子が嵌まつて、其の向ふに庭が見える。ところどころに春の低い小松が植わつて居る。庭の後ろは砂山に續き、折々穩かな波の音が聞える。

此の座敷は目下當地に逗留する三枝夫婦の居間に充てられて居るのだが、一年程前に新築したもので、非常に日あたりのいゝ、陽氣な間取りになつて居る。室内下手の壁に添うて、書棚の附いた、大型のライチング・デスク、其の前に椅子。デスクの上に華美な置時計、花瓶などを置く。部屋の中央に桐の胴丸の火鉢、其の左右にメリンス友禪のふツくらした座蒲團、上手前方の障子際に桑の鏡臺、其處にも同じやうな座蒲團。正面奥の縁側に籐の長椅子。——凡べていかにも若い夫婦の生活を偲ばせるやうな、華やかな調度が裝飾的に配置してある。

第一節

三枝春雄、色の白い、濃い髯を生やした、三十歳前後の神經質らしい男、獨り椅子に腰掛けて、デスクに凭れながら、何事か考へに沈める樣子。

上手の障子は締まつて居るが、正面の方は左右に明け放たれて、暖かい春の日光が庭の方から硝子越しに室

内へ射し込む。背景の砂山の向ふには、午後一時頃の空が、青々とのどかに霞んで見える。

やがて、春雄は立ち上つて、上手の鏡臺の傍へ坐り、其處に映つて居る自分の顏をつくづくと眺め始める。暫くすると、下手の方から雪子と靜子が縁側へ現はれる。雪子は四十七八歳の、でつぷりと太つた、人の好ささうな、快活な夫人、靜子は六七歳の可愛らしい娘で、祖母に手を引かれて居る。

靜子　(雪子と共に春雄の後ろへ歩み寄る)　お祖母樣、お父さんはお化粧をして居らつしやるのよ。

雪子　ほんとにをかしなお父樣だこと。――お前のお父樣は、暇さへあれば毎日鏡を見て居るんだよ。

靜子　(父の襟頸に抱き付いて、自分も一緒に鏡を覗き込む)　お父さん、あたし白粉(おしろい)を着けて上げませうか。

春雄　いや白粉は眞つ平だ。あとでお母さんに着けてやるがいゝ。

雪子　春雄さん、そんなに鏡ばかり視詰めて居てどうするのさ。此の頃は誰れだつてあなたを病人だと思ふ者はありませんよ。第一顏に赤味がさして來たからね。

春雄　しかし矢つ張り日に一度づゝ鏡を見ないと、どうも安心しませんよ。それに何ですな、かう肉が附いて、血色が好くなると、鏡に向つても我ながら非常に愉快です。お蔭樣で、今度こそはすつかり丈夫になつたらしい。

雪子　丈夫になつてくれなければ困りますよ。――全體あなたは神經病みだから、それで尚更病氣に取り憑かれるんだね。毎日毎日鏡を視詰めて、自分の血色を氣にする人があるもんですか。

春雄　なあに、別に氣にして居る譯ぢやありません、一體僕は昔から鏡を見るのが好きなんです。退屈すると鏡を見て居るのが一番面白うござんす。

雪子　妙なお父樣だねえ靜ちやん。

靜子　お父さんのお洒落やあい。

春雄　何だと、お父さんのことをお洒落だと云つたな。こいつめ、こいつめ。(と云ひながら、靜子を兩手に抱き上げて立つ。靜子からからと樂しげに笑ふ)

雪子　(縁側の寢臺に腰かけて戶外を眺める)　ほんとに今日は好いお天氣だ。春雄さんちつと子供を連れて散歩でもしたらいゝぢやないか。その內に梅子も歸つて來るだらう。

春雄　(デスクの前の椅子に腰掛け、膝の上に靜子を載せて搖すぶつて居る)　さあ、まだちよいと歸りますまい。今日は少し面倒な用事があるんですから。

雪子　どんな用事？

春雄　いえ、實は赤坂邊へ借家を搜しに行つたんです。

雪子　まあ、氣が早いつたらないね。まだ半月は此處に居たつてい丶ぢやないか。

春雄　僕はどつちでもい丶んですが、梅子が馬鹿に東京へ歸りたがつて居るんです。もう鎌倉なんか飽き飽きして、厭だ厭だつて云ふんです。それにいつまで別莊を拜借して居るのも心苦しいやうですから、……

雪子　そんなことがあるもんですか、どうせ別莊は明いて居るんだし、あなたにしたつて、一日も長く海岸に居た方が、體の爲にいくらい丶か判りやしない。あの兒が歸つて來たら、私からよくさう云つてやりませう。

春雄　しかしおつ母さん、僕も長々御心配を掛けましたが、もう今度こそ大丈夫です。此れから一番奮發して、今迄の取り返しをしなくつちや、仕樣がありません。何しろ足掛け三年と云ふもの、まるで棒に振つちやつたんですからなあ。——お父さんに對してもいろいろ御厄介になるばかりで、全く申譯がありませんよ。

雪子　けれどもあなたが此頃のやうに達者になつて下されば、それが何よりの話さ。どんなにえらい人だつて病氣に勝てないんだから、過ぎ去つた事は仕樣がない。お父さんも、來月中には必ず役所の方へお世話をするとか云つて居ましたから、いづれ近々に何とか沙汰があるでせう。

春雄　何卒何分お願ひ申します。

雪子　其の方の心配は要らないから、此の上ともに體を大事にして下さい。病氣といふものは直り際が肝腎ですよ。——ほんとにつまらない遠慮をせずと、口がきまるまで、此處に居たらよさ丶うなものだね。

春雄　それぢやおつ母さんから、梅子にお話しなすつて下さい。僕は何方でも彼れの意見通りになるんです。尤も先生はなかなか強情ですから。

雪子　いくら強情だつて、御亭主の體の爲めなら爲方がないやね。

春雄　御亭主の體は愚か、自分の體が危くなつても、云ひ出した事はめつたに後へ引きませんからな。それに鎌倉が厭で厭で溜らなくなつた所ですから、恐らくおつ母さんが何と仰つしやつても承知しますまい、どうでも好きなやうにさせて置くのが一番です。

雪子　あれは子供の時から我儘な娘でしたけれど、あなたもあまり叱言を云はな過ぎるんだよ。たまにはウンと云つてやる方がい丶んです。

春雄　けれどもおつ母さんの前ですが、僕は彼れの我儘に就いて一度も腹の立つたことがありませんよ。

雪子　あなたがそれぢや困つて了ふね。——もとはと云へば私達の育て方が惡いんだけれど……

春雄　(頗る眞面目な調子)　なに惡いことがあるもんです

か。女は我儘に限ります。大人しい女は氣の拔けたビールみたいなもんです。若しも梅子があゝ云ふ性質でなかつたら、僕は結婚なんかしやしません。

雪子　おほゝゝゝゝ、（嬉しさうに笑ふ）あなたも餘つ程變り者だね。

春雄　いゝえ、本當の話です　梅子をあゝ云ふ風に育てゝ下すつたことに就いて、僕はおつ母さんにお禮を申します。

雪子　まあ冗談は兎に角として、それ程に思つて居てくだされば、あの子もほんたうに仕合はせです。

春雄　さうして僕も仕合せです。唯不仕合せだつたのは、僕が長い間大病ひをした事です　結婚してから一年と立たぬ間に病み付いて、寢たり起きたりして居たんですから、僕は殆んど結婚の樂しみ、家庭の樂しみと云ふものを味ふ暇がなかつたんです。丁度この子が生れた時分には、四十度近くの熱に浮されて、床の中で呻つて居た最中でしたからなあ。靜子を撫でゝやりながら僕は到底助からないとあきらめて居たんです。かうして此の子を膝の上に載せて、可愛がる事が出來ようとは、夢にも思つて居ませんでした。

（靜子興奮したる父の顏を不審さうに見上げて居る。）

春雄　ですから僕はこんな大きな子供がありながら、今迄全く、父としての愛情も、夫としての幸福も經驗することが出來なかつたんです　僕一人が病身なばつかりに罪のない妻子に迄氣の毒な思ひをさせて了ひました。

雪子　けれども、あなたはまだ若いんだから、いくらでも取り返しが附きますよ。一體大學を卒業したのが、あんまり早過ぎましたからね。なあにあなた、三十と云へば仕事をするのは此れからさ。

春雄　仕事ばかりぢやない、此れから凡べて新規蒔き直しにやるんです。此の子の爲めにも、梅子の爲めにも、立派な父親となり夫となつて見せるんです。――何だか僕は結婚當時の心持ちと、昨今の心持ちと、全く同じやうな氣がしますよ。病氣が直つて、漸う人間並の體になつて見ると、凡べての事が珍しく愉快ですな。早く職業に有り附いて、目覺ましい活動をして見たい。早く親子三人で新世帶を持つて見たい……此の頃はそんな妄想ばかりに耽つて居ます。

第二節

原田千代子、松林の奥より庭上へ歩み來る。二十三四歳の小柄に太りたる夫人、庇髪に結つた、愛らしくて而も悧巧さうな圓顏の容貌。海岸の散歩から歸りたる所らしく、羽織も纏はず、足袋も穿かず、縞銘仙の綿入を着て麻裏草履を穿いて居る。

千代子　（緣側の硝子障子を明けて、室内へ上りながら）まあ今日は海が靜かでございますこと、――まだ嫂さんはお歸りになりませんの？

雪子　えゝ、まだ歸つて來ないですよ。今春雄さんから聞いたんですが、赤坂へ家を搜しに行つたんですと。

千代子　おや、それぢや兄さん、もう東京へお引越しなさるの？

春雄　うん、さうしようかと思つてるんだ。

雪子　何にしても引越すにはまだ早過ぎると思ふんですがねえ。もうあと一と月なりと、此處で養生をするやうに、千代子さんからも兄さんにすゝめて下さいましよ。

千代子　ほんとに左樣でございますね。兄さん、折角おつ母さんがあゝ仰つしやるんだからもう少し御厄介におなんなさいな。

春雄　僕はそれでもいゝんだが――（急に言葉を濁らせる）しかし、今のうちから搜して置かないと、なかなか急にいゝ家が見付からないのだ。どうだいお前の近所に好ささうな借家はないかい。

千代子　あたしの近所なんか場末だから仕樣がないわ。赤坂邊なら此方樣の御本宅も近いし、都合がいゝぢやありませんか。

春雄　けれども場末の方は空氣がいゝからな。

千代子　空氣ばかり好くつても、食べ物がまづくつて、買ひ物が不便で、ほんとに仕樣がない處よ。第一隣り近所が淋しいから夜なんぞ女は獨り歩きが出來やしないわ。あたしは此の通りお轉婆だから、一向平氣ですけれど、それでも宅の歸りが遲い時なんか、妙に心細くなるんですもの。兄さんにはよくつても嫂さんがとても辛抱なさらないわ。

雪子　ほんとに千代子さんは苦勞なすつただけあつて感心だねえ。梅子と來たら、いくつになつても娘のやうな氣で居るんだから、困つて了ふ。

千代子　（雪子の言葉を聞かぬ振りして、春雄の膝に抱かれた靜子の手を取る）まあ靜子さん、さつきからよく大人しくして居らつしやるのね。又叔母さんと一緒に遊ばなくて？

靜子　えゝ、遊びませう。

千代子　今日はお母さんに置いてき堀にされちまつたのね。

靜子　あたしお母樣より叔母樣の方が好き。

千代子　あらそんな事を仰つしやると、もうお母樣がお土産も何にも買つて來て上げませんと！

春雄　それぢやお前が家中（うちぢう）で一番好きな人は誰だい？

千代子　さあ、誰でせう？　お祖母樣か知ら、それともお

父様か知ら。

靜子　あのね、あたしの一番好きなのはお祖母樣！

春雄　それから？

靜子　それから乳母？

千代子　それから？

靜子　それから、お父様と叔母樣と同じくらゐ好きなの。

千代子　それから誰方？

靜子　それからお母樣。

春雄　お前はお父樣よりお母樣の方が恐いんだな。

靜子　だつて、お母樣は直きにあたしを叱るんですもの。

春雄　何と云つて叱るんだい。

靜子　「うるさいから、彼方へお出で」つて仰つしやるの。

春雄　よし、よし、今にお母樣が歸つて來たら、云附けてやるぞ。

千代子　嘘よ、靜子さん、お父樣は嘘つきよ。（春雄の膝より靜子を抱き取る）――あなたそんなに叔母樣がお好きなら、此れからちよいちよい叔母さんの處へ遊びに來て頂戴な。

靜子　叔母さんのお家は何處なの？

千代子　澁谷と云ふ處なの。叔母さんは二三日の中に東京へ歸りますから、さうしたら今度泊りがけで遊びに來て頂戴ね。家にも靜子さんの妹のやうな、小さな、子供が居りますのよ。

雪子　暫くお目にかゝりませんが、嘸大きくおなりでせうねえ。

千代子　はあ、漸く手足が自由になつたものですから、此の頃は危くつて目が放されません。

雪子　たしか三つにおなんなすつたんですね。今度入らつしやる時には、是非連れてお出でなさいましよ。

千代子　はあ、有難うございます。

雪子　どれ、あんまり退屈だから、少し運動して來ませうか知ら。（立ち上る）靜子や、お祖母樣と一緒に行かないか。

千代子　さあ行つて入らつしやいまし。（靜子を緣側へ下ろす）

雪子　さう云へば、こんなに好いお天氣だのに、今日はいつもの彼の方がお見えにならないね。ほら、何とか云つたけね、春雄さん。

春雄　誰の事です。

雪子　あなたのお友達で、つい此近所に居らつしやる方さ。

春雄　吉川ですか。

雪子　あつ、さうさう、吉川さんさ。彼の方が來ると、話が面白いので、ついつい時間を潰して了ふんだけれど……

（雪子、靜子の手を曳きながら、緣側傳ひに下手へ退

場）

第　三　節

千代子　（春子と靜子の立ち去るのを待つて、徐ろに火鉢の右側の座蒲團に坐る）　兄さん、あたしは明日あたり東京へ歸らうと思ひますの。

春雄　さうか、一向お構ひしないが、差支へなかつたらもつと遊んで行くがいゝ。（千代子と二人になると、急にうかぬらしい眼付をして、椅子に凭れながら頻りにモヂモヂする）

千代子　えゝ有りがと。……宅はあの通り呑氣ですから別に何とも云ひませんけれど、まさか子供を打つ放つて、あんまり長く遊んで居る譯にも行かないから、……

春雄、それもさうだな。原田君にも何れ東京で會ふだらうが、お前から宜しく云つといてくれ。（モヂモヂする擧動がだんだん顯著になつて、遂に居堪らぬやうに椅子を立ち上る）　どれ、僕も少し散歩に行つて來ようかな。

千代子　まあ、兄さん。（屹と兄を視詰める）　話があるんですから、暫く此處に居て下さい。

春雄　何だい。（顏の色變る。不承不精に再び椅子に腰を下ろす）

千代子　あたしは兄さんに云ひたい事が山のやうにあるんです。……ねえ兄さん、あたしが此の河村樣の別莊へ來てから、もう一週間になるけれど、兄さんは一度だつて、あたしとゆつくり話をした事はないぢやありませんか。

春雄　そりやをかしい。僕は隨分お前と話をした筈だぜ。

千代子　嘘を仰つしやい。兄さんが機嫌よく話をなさる時には、いつでも傍に嫂さんが居らつしやるわ。あなたは嫂さんと放れて、私に話をなすつた事はないぢやありませんか。

春雄　さう云ふ譯ぢやないんだが……

千代子　いゝえ、さうよ。兄さん獨りの時を狙つて行くと、あなたはきつと今のやうに逃げて了ふか、さもなければ、嫂さんの方から樣子を見に入らつしやるのよ。

春雄　そんな事はない。全く邪推だ。

千代子　いくら辯解しても其れは駄目よ。一度二人きりで、親身な、眞面目な話をしようと思つても、兄さんはいつもそつけない素振ばかり見せるんですもの。兄さんは妹に對して、昔よりか餘程薄情におなんなすつたわねえ。

春雄　……

千代子　そりや先と違つて、今は嫂さんと云ふ者もあれば、靜子さんもあるんですから、昔の通りになれないのは當然ですわ。けれども兄妹の親しみだけは持つて居て下すつても、好かなくつて？　ねえ兄さん、此れでも私はあ

なたのお蔭で原田の家へ嫁いでから、一度だつて兄さんの御恩を忘れた事はない積りよ。かうして態々鎌倉までやつて來たのも、兄さんのお身の上に就いていろいろ心配な事があればこそ、實を云ふと家の方だつてなかなか手が放されないけれど、漸くの事で都合をして出て來たんですの。

春雄　お前の親切はよく解つて居る。僕にしたつて、何も冷淡になつた譯ぢやないんだが、若しも氣に觸つた事があるなら、いくらでも詫るよ。しかしお前も知つて居る通り、僕は病氣になつてから散々河村家の世話になつた上、此の別莊まで借りて居るんだから、たまにお前が尋ねて來てくれても、ついつい家の者に氣兼ねをするやうになつちまふんだ。それに梅子があの通りの我儘者だからね。

千代子　あたしはそんな事を何とも思つて居やしませんわ。河村様のお母様なんぞ、兄さんは勿論あたしに對してすら、親身も及ばぬくらゐ親切にして下さるんですもの。有り難いとこそ思へ、怨んだりしたら罰が中るわ。たゞあたしは、兄さんが、昔のやうに胸の中の心配を打ち明けて下さらないのが不滿足なんですの。

春雄　心配と云つたところで、僕は今のところ、全く仕合せな境遇に向つて居るんだ。病氣は直つたし河村さんの周旋で來月中には比較的いゝ地位に有り附くことも確かだし、此れから先は自分の腕次第でいくらでもえらくなれるんだ。何も心配なんかありやしないよ。

千代子　さうですか知ら？（暫く無言の儘、兄の顏を判じるやうに眺める）あたしには本當に兄さんの心持が判らないわ。

春雄　本當にも何にも、今話した通りぢやないか。

千代子　兄さん、くどいやうですが、若しか心配事があるなら、たとへどんなに云ひ難い、どんなに恥かしい事柄でも、どうぞ私に話して下さい。私はどんな場合でもきつと兄さんの味方になつて上げます。私獨りで足りなければ、原田も居ます。原田だつて、私の兄さんの爲めならば、どんな事でもしてくれますから。

春雄　（顏色いよいよ蒼ざめて力なき語勢となる）冗談ぢやない、それ程の心配があつたら、僕は梅子に打ち明けるよ。

千代子　嫂さんにも打ち明けられない場合がありはしなくつて？

春雄　妹に打明けていゝ事なら、尙更女房に打ち明けられる筈ぢやないか。あれでも梅子は我儘な割りに、しつかりしたところのある女だよ。別段聞き糺す必要はないけれど、お前は何か誤解をして居るやうだ。

千代子　（他聞を憚るやうな低き調子）本當に誤解だと思つて居らつしやるの。
春雄　何だか知らんが無論誤解さ。僕は此の通り心配も何もないぢやないか。
千代子　兄さんには、私の意味が判つて居らつしやるんでせうね。
春雄　よくは判らないけれど、僕は自分の幸福を信じて居るよ。僕の考へて居る範圍で、自分を不仕合せだと思ふことは、一つも見あたらないんだからな。――お前と云ひ、原田君と云ひ、河村の兩親と云ひ、僕を取り卷く人達は、みんな僕の爲めに盡してくれる、親切な人ばかりだ。さうして梅子は僕の最愛の妻だ。僕が命拾ひをした事も、立身の緒が見付かつた事も、此の世の中に梅子と云ふ者が居なかつたら、僕には全く無意味になるんだ。僕は殆んど梅子の爲に生れて來たやうなものだ。
千代子　それぢや兄さんは、あなたの氣が付かない處で、御自分の幸福を破壞して居る人間があつたら、どうなさるお積りなの。
春雄　そんな人間があらう筈はない。
千代子　しかし、あたしにはどうもあるやうに思はれますわ。實は先月の月末頃に、或る人からそんな噂をちよいと耳にしたんですもの。それで此處のところ一週間ばかり暇を作つて、病氣見舞と云ふよりは、噂の實否をたしかめる爲めにかうやつてお邪魔に參りましたの、その噂に就いても、嫂さんがまるきり御存知ないとは思はれないわ。
春雄　世間の噂なんか信じて居たら、際限のない話ぢやないか。僕は噂よりも自分の判斷を信じて居るんだ。
千代子　あたしだつて噂を信じたくはありませんけれど、實際此方へ來て樣子を見ると、どうも其れが本當らしく思はれるんですもの。
春雄　おい、僕はお前に注意するが、女と云ふものは兎角前後の分別なしに輕卒な言を云つていけない。かりにお前が世間の噂を信じたところで、若し其れが發表された場合にどんな結果を來すか考へて見たら、確實な證據を握らない以上は、決して口外出來るものぢやないぜ。
千代子　だけど兄さん、若しもあたしが確實な證據を握つて、あなたの前へ突き付けたら、兄さんはどんな氣持がすると思つて？　あたしは裁判官でもなければ、世間へ發表する氣でもないんですよ。證據を握らうと思へば、毎日機會はあるんですけれど、兄さんの名譽のためにわざと控へて居るんですわ。唯それとなく兄さんに忠告すればいゝんですから。
春雄　僕はお前の好意に對しては十分に感謝するよ。けれ

どもそれと同時に、此の兄の言葉を信じて貰ひたい。

千代子　いゝえ、何卒反對に兄さんの方で私の判斷を信じて下さい。信じない迄も、彼の人達の行ひに嫌疑を掛けて、御自分からよく探索して御覽なさい。少し氣を附けて調べて見れば、すぐに判る事なんですから。

春雄　僕は探索なんかする必要を認めないんだ。

千代子　兄さん、あなたがどうしても私を信用しないと仰つしやるなら、もう少し詳しい事をお話しするわ。

春雄　ふゝん、そんなつまらん話は、もう好い加減によさうぢやないか。

千代子　兄さんは男らしくもない、卑怯な方ね。あたしには兄さんの氣持がすつかり判りましたわ。あなたはあたしの口から本當の事を聽かれるのを、恐れて居らつしやるんですね。

春雄　馬鹿を云へ。

千代子　いゝえ、さうに違ひないわ。世間に知れないで濟む事なら、たとへ自分が踏み付けにされようと、男の體面を汚されようと、成るべく見ない振りをして、一時逃れの幸福を樂しまうとなさるんですね。――兄さん、そりや成る程、あたしだつてあなたの胸の中をお察ししないんぢやありませんわ。兄さんは今迄に散々苦勞をなすつた。生きるか死ぬかと云ふやうな大病に罹つてすべての計畫を滅茶滅茶にされてお了ひになつた。折角樂しみにして居た結婚も、今迄は十分に嫂さんを可愛がる暇がおあんなさらなかつた。それだのに漸く病氣が恢復して、此れから世の中を樂しまうとする矢先へ、又新しい心配を持込まれたら、誰だつて大概厭になりますからね。

春雄　それだけの理窟が判つて居たら、好い加減に話を止めてくれないか。――況んや新しい心配と云ふものが、實際心配する價値のない事柄なんだから……

千代子　萬一價値があつたらばどうでせう。――此れが若しも、見ない振りをして居て永久に濟んで行くならば、私も別段お話ししようとは思ひませんわ。けれどもいつか一度は、否でも應でも恐ろしい結果に出會するに違ひないわ。時期が遲れゝば遲れる程、餘計恐ろしい結果になるわ。

春雄　……

千代子　兄さん、あなたは嫂さんを信用すると仰つしやつたわね。

春雄　うん。

千代子　それでもよもや彼の吉川と云ふ人――あの人を信用しては居らつしやらないでせう。

春雄　あの男だつて、世間で云ふ程惡い人間とは思はれないよ。兎に角僕と吉川とは、小學校時代からの友達だか

ら、彼奴の氣心はよく解つて居る。

千代子　そんならあの人の不品行に就て、今迄度々新聞に素破抜かれた事は、みんな嘘だと思つて居らつしやるの。

春雄　そりや本當かも知れないさ、本當にしたところで、世間で噂するやうな、血も涙もない、薄情な男だとは信じられないと云ふのさ。よしんば彼奴がどんな惡人でも、子供の時から附き合つて居る友達に對しては、やつぱり暖い感情を持つて居る筈だ。

千代子　兄さんはあの人の暗黒面を見せられた事がないから、さう思つて居らつしやるのよ。

春雄　なに僕だつて、彼奴に欺された女の一人や二人は知つて居るよ。彼奴はそれを得々として、僕にのろけるくらゐなんだから、割合に無邪氣なんだ。其れを一々不都合だとか不德だとか怒つて居た日には、男同士の交際は出來なくなるぜ。それに人間と云ふものは、お互ひに理解があると、どんな惡い事をされても、ちよいと腹を立てる譯に行かなくなるんだ。誰しも腹を立てるよりは笑つて交際する方が愉快だからな。

千代子　そんならあの人が、兄さん自身に對して罪を犯した場合にも、笑つて交際なさるんですか。

春雄　まあ大概のことならば、大目に見て置くさ。僕も此れまで吉川には二三度金を借り倒されたが、面と向へば、笑つて濟んで了ふからな。

千代子　そんな時には笑つても濟むでせう。

春雄　理解し合つて居る友達同士は、お互ひに或る程度までの惡事を犯しても、其れ以上の不道德は絶對にしないもんだよ。

千代子　其の考へが間違つて居るんですよ。今だから白狀しますが、彼の人は私のやうな者にまで以前は隨分厭らしい眞似をしたんですもの。

春雄　彼奴の事だから、友達の妹にふざけるぐらゐはしかねないだらう。

千代子　もつと非道い事だつて、しかねないんです。兄さん、よく考へて御覽なさい。あの人は何の爲めに此の鎌倉へ來て居るんです。而も此の近所の宿屋へ泊つて、毎日此處へ遊びに來て、大切な時間を殆んどあなた方と一緒に過して居るぢやありませんか。

春雄　吉川だつて別段忙しい商賣ぢやないんだから、遊んで居るのに不思議はないさ。

千代子　しかし、かりにも雜誌の記者をして居て、態々不便な田舍へ來ずともいゝと思ふわ。それに道樂をしたり、芝居を見たり、なかなか忙しいんですから、東京に居なければ用が足りない筈なんですもの。

春雄　それだけの事で、吉川を疑ふのは酷ぢやないか。

千代子　それはかりぢやないわ。あの人が嫂さんに對する素振を見れば、どうしても疑はずには居られないわ。二人で二階へ上つたきり、一時間も二時間も降りて來なかつたり、日の暮れる迄一緒に海岸を散歩したり、嫂さんの方からあの人の宿屋へ遊びに行つたり……

春雄　お前だつて、原田君の友達と芝居見物に出かけるぢやないか。

千代子　けれども場合が違ひますわ。あの人達の口のきゝやうや、眼の配り方を氣を附けて御覽なさい。それにをかしいのは、昨夜嫂さんが東京へお立ちになつてから、吉川さんは姿を見せないぢやありませんか。

春雄　お前は偶然の出來事に理窟を附けて居るんだ。

千代子　しかし兄さん、一應疑つて見て、あの人が昨夜から宿屋に居るかどうか詮索してもよくはなくつて？

春雄　宿屋に居なければ、どうしたと云ふんだい。二人で東京へ行つたと斷定するのかい。

千代子　宿屋に居ないばかりか、一緒に汽車へ乘つたところを見た人があつたならば、どうでせう。

春雄　見た人があると云ふのかい。

千代子　えゝ。あるんです。昨夜あたしは嫂さんがお出掛けになると、直ぐにあとから停車場まで附いて參りました。すると吉川さんがちやんと待つて居るんです。

春雄　それで二人はどんな樣子だつたい。何か話をして居たかい。

千代子　顏を見られちやまづいから、遠くの方から見届けて歸つて來たわ。

春雄　そんなら話にならないぢやないか。吉川だつて東京に用のある男だもの、偶然停車場へ落ち合つたかも知れやしない。

千代子　偶然に落ち合つたのか、約束をして置いたのか、一目見れば直ぐに解つてよ。

春雄　どう云ふ風に解るんだね。色眼鏡を懸けて見れば、何だつて怪しく思はれるからな。

千代子　いゝえ、たしかにさうらしいの。私の事が嘘だか本當だか、今に嫂さんがお歸りになればきつと解るわ。――若しも嫂さんに疚しい所がなかつたら、昨夜の事をお隱しになる筈はないけれど、あたしやきつとお歸りになつても、默つて居らつしやるだらうと思ふわ。

春雄　……

千代子　萬一隱し立をなさるやうなら、兄さんだつて疑はずに居られないでせうね。

春雄　……

千代子　ねえ兄さん、さうぢやなくつて？　それでもやつぱり證據がなければ駄目だと仰つしやるの？

春雄　……

千代子　いよいよさうなつた場合に、あたしは兄さんの決心を聞かしい頂きたいんですの。

春雄　まあ待つてくれ。決心などとさう譯もなく云ひ出されちや、僕も迷惑だ。成る程先からのお前の意見は解つて居るが、此方の事情も少しは考へて貰ひたい。兎に角、誰が何を云はうとも僕は梅子を信じて居るんだ。彼奴を信じる事が出來なくなれば、僕の幸福は破壞されて了ふんだ。けれどもそれ程お前が疑ふのなら、過ぎ去つた事は仕樣がないとして、此の後吉川を寄せつけないやうにしようぢやないか。其れが一番安全な方法だと思ふ。

千代子　安全過ぎて、何の效能もなささうだわね。

春雄　（少し癇癪を起こし）では一體どうしろと云ふんだ。

千代子　過ぎ去つた事は仕樣がないとして、あなたは嫂さんをお許しになるお積りなの。

春雄　ハツキリした落度もないのに、どうする事も出來ないぢやないか。

千代子　出來ないと仰つしやれば其れ迄だけれど、それで御自分の氣持ちが濟むでせうか。――成る程河村さんの御兩親は、兄さんの爲めに大恩人には違ひない、靜子さんと云ふ可愛い子供もお有んなさるし、――しかし兄さん、たとへ恩人の娘でも、夫として許す事と許されない事と有りますからね。

春雄　……

千代子　こゝで兄さんが、男らしい處置を取らなければ、自分の立身出世の爲めに、嫂さんの御機嫌を取つて居ると云はれても、辯解の途がないぢやありませんか。

春雄　世間の奴が何と云はうと勝手にするさ。

千代子　世間ばかりか、私だつてさう思ふわ。――河村さんと緣が切れゝば、出世する事が出來ないやうな、そんな意氣地のない兄さんぢやないでせう。工學士と云ふ肩書があるんですもの、今度のやうないゝ地位は見當らないとしても、立派に大手を振つて、何處へでも這入れるぢやありませんか。

春雄　千代子、お前は僕がどのくらゐ梅子を可愛がつて居るか想像が着かないのだらう。成る程僕は男としての野心もある。相當に慾望も持つて居る。しかし、單純な利慾の爲めに名譽を抛つ程の卑屈な人間ぢやない積りだ。僕は唯だ梅子が可愛いゝばかりなんだ。梅子を喜ばせる爲めには、どんな悪辣などんな陰險な手段を取つても、必ず金を儲けて見せる。

千代子　兄さんにそんな度胸があつて？

春雄　氣の小さい人間程、愛情の爲めには大膽になれるものだ。僕は金儲けの爲めに梅子を可愛がるんぢやない。

梅子を可愛がる爲めに金儲けをしようと云ふんだ。

千代子　（嘲弄的に）さうすると、嫂さんを授けて下すつたのも河村様だし、立派な地位に引き立てゝ下すつたのも河村さんだし、あの御兩親はあなたの爲めに救世主のやうなものですね。

春雄　まあ、さうだ。僕は一生、彼の人達と手を切ることは出來ないんだ。たとへお前に意氣地なしと云はれても、何と云はれても差支へない。

千代子　（呆れたやうに眼を見張つたが、やがて感情を押し鎭めて）兄さん、あなたはあんまり情けない事を仰つしやる。あたしが此れ程心配して居るのに、妹なんぞはどうなつてもいゝお積りなの。

春雄　さう云ふ譯ぢやないけれど、僕に取つてはお前よりも梅子の方が大切だからな。

千代子　しかし嫂さんは、あたしが思つて居る半分も、兄さんを思つて居やしないわ。一層あなたを邪魔にして居る位だわ。

春雄　そんな事がお前に判つて溜るものか。

千代子　いゝえ判つて居ますとも——なんぼ嫂さんが可愛くつても、外の男に愛情を注ぐやうなら、思ひ切つて了ふのが當然ぢやなくつて？　それでも兄さんは、やつぱり思ひ切れないんですか。

春雄　それでもとは何だ。（とうとう癇癪を破裂させる）何に何でもあんまり口が過ぎるぢやないか。そんな事を云ふなら、レッキとした證據を持つて來るがいゝ。

千代子　えゝ持つて來ますとも。明日歸るまでに、屹度證據を摑んで見せるわ。さうなつたら兄さんだつて、ほんとに決心なさるでせうね。

春雄　お前は平地に波瀾を起して、それを面白いと思ふのかい。

千代子　おほゝゝゝ。（涙ぐみつゝわざと甲高く笑ふ）今日は久し振りで兄さんと喧嘩をしちやつたわね。どうせ後になれば解る事なんだから、いくら喧嘩をしたつて構はないわ。あたしは此れでも、兄さんの遠い行く末を考へて居るんですから……

（千代子、上手の障子を開けて去る、春雄は頭を抱へ、懊惱に堪へざる如くデスクに突伏す。）

第　四　節

梅子、千代子と行き違ひに下手の緣側から這入つて來る。面長く、背恰好の優れた、千代子よりは一二段勝りたる容貌。二十三四歲なれど、年齢の割りに派手な好みの衣類を着て、襟頭にゴールを卷きつけ、右手に小さい袋を下げて居る。

梅子　唯今。（夫の傍に立つ）　大變運かつたでしよ。

春雄　（少しく元氣を恢復する）　うん、そんなでもなかつたゞどうだい、いゝ家があつたかい。

梅子　（息を切らせながら、忙しさうに、早口に語る）　溜池の近所に一軒いゝ家が見附かつたの。二階が八疊に四疊半で、下は玄關が三疊、六疊二た間、四疊半の女中部屋が附いて居て、風呂場もあるし便所も綺麗だし、申分がないと思ふわ。

春雄　家賃はいくらだ

梅子　二十五圓、それに敷金が三つ。建具もしつかりして居るし、押入は澤山あるし、何より有難いのは、間取りの具合が明るくつて馬鹿にいゝんですの。あたし薄暗い家が大嫌ひだから。

春雄　借りる事にきめて來たのかい。

梅子　二三日中に挨拶するつて、さう云つて來たわ。

春雄　なぜ？　極めて來たらばよかつたぢやないか。

梅子　だけど一遍あなたに見せてからと思つたの。

春雄　己はどうでもいゝんだから、お前さへ好ければ、極めて來た方が宜かつたのになあ。そんないゝ家は、グヅグヅして居るとすぐに塞がつて了ふぜ。

梅子　だからあなた、明日お天氣が好かつたら、ちよいと行つて見て來て下さいな。

春雄　うむ、……（何か他の事を考へ出したやうに、生返事する）

梅子　ね、明日の朝早くお起きになれば、明るいうちに行つて來られるわ。

春雄　さうだ、明日千代子が東京へ歸ると云ふから、其の時一緒に行くとしよう。なあに、遲くなつたら都合で赤坂へ泊めて貰ふさ。

梅子　それぢや、さうして下さいな。（上手へ來て鏡臺の前に坐り、袋を臺の上に置く。抽斗から櫛を取り出して、庇髮の鬢を直し始める）――へーえ、千代子さんは明日歸るんですつて？

春雄　うん、明日はどうしても歸らなければならないさうだ。

梅子　さうですか、嫌ひな人は早く居なくなつた方がさつぱりするわ。

春雄　もう歸るんだから、あんまりあて付けない方がいゝさ。

梅子　あゝそれからね、ゆうべ赤坂へ泊つたら、父がいろいろあなたの事を心配してね、來月の半ば頃には是非任命が下るやうにして置いたから、御安心なさいつて。

春雄　それは有り難う。

梅子　さう云へば、昨夜停車場で吉川さんに遇ひましたつ

け。
春雄　ふん。
梅子　「何方へお出掛けです」つて聞いたら、頭を掻き掻き「ちよいと東京の隠れ家まで」つて、變ににやにや笑つて居るのさ。
春雄　彼奴、隠れ家は方々にあるからな。
梅子　ところがをかしいぢやありませんか。だんだん問ひ糺して見ると、其の隠れ家と云ふのが、赤坂の家(うち)の近所なのよ。
春雄　あはゝゝゝ、（何となく不自然な笑ひ方をする）奴さん、飛んだ所を見附かつたもんだ。
梅子　丁度いゝから、一緒に氣車へ乘つて、新橋から家(うち)の前まで送らせてやつたわ。
春雄　まだ先生は歸つて來ないのかい。
道子　さあ、どうですか、事に依つたら歸つて居るかも知れたなくつてよ。明日は是非午前中に歸りますつて、あしに悪い事でもしたやうに頻りに辯解して居ましたもの。
春雄　歸つて來たら遊びに來さうなもんだがな。
梅子　こんなお天氣に、ひとりで内に引込んで居ると隨分退屈するでせう。――お母様や靜子は何方へ行つたの。
春雄　もう少し先海岸へ出掛けたやうだ。――から陽氣が暖かくなつちや、東京もそろそろ櫻が咲くだらうな。
梅子　あゝ田舎なんか厭だ、厭だ。早く東京へ歸りたいわねえあなた、千代子さんを送りがてら、明日忘れずに東京へ行つて來て下さいよ。
春雄　うん行つて來よう。
（女中まつ登場。）
まつ　あの吉川様がお出でございます。
梅子　あ、ちよいとお待ち。あたし隠れて居てやらう。（袋とゴールを一摑みにしてあわてゝ上手の障子の外へ逃げ出す）
（女中まつ退場）

第五節

上手より直ぐに吉川が這入つて來る。春雄と同じ年輩、色の淺黒い、頭を角刈にした、苦み走つた好男子、瀟洒たる背廣の服を着て、胸間に金鎖を光らせて居る。いかにも才氣の迸るやうな口のきゝやうをする。
吉川　や、失敬。（いきなり火鉢の右の座蒲團にあぐらを掻く。鳥打帽を脱いで、ハンカチで額の汗を拭く）梅子さんは、まだ歸らないかい。
春雄　まだだよ。
吉川　そいつは締めた。

春雄　どうしたんだい、ひどく汗を掻いてるぢやないか。
吉川　實は君、昨夜こつそり東京へ泊りに行かうと思つたら、運悪く停車場で君の細君に見附かつちまつてね。とうとう一緒の汽車に乘せられて、新橋へ着いてもまだ放免にならないのさ。
春雄　全體君は何處へ泊りに行つたんだ。
吉川　それがさ、やつぱり赤坂なんだから方面が悪いぢやないか。「赤坂なら御一緒に參りませう」つて、散々冷かされて、とうとう君、河村さんの家の前まで引張つて行かれたんだ。君の細君もなかなか隅へ置けないよ。
春雄　あはゝゝゝ、そいつは大笑ひだ。
吉川　あんまり冷かされるから意地になつて、「明日の朝は早く鎌倉へ歸ります」つて云つちやつたのさ。何ぼ何んでもだらしがないと思はれるからね。
春雄　柄にない心配をしたもんだな。君の道樂は今に始つた事ぢやなからう。
吉川　それもさうだが、兎に角君の細君より先に歸つて來る積りで、大急ぎに戻つたんだ。今に梅子さんが見えたら、僕は今朝歸つた事にしてくれ給へ。
春雄　よろしい、承知した。
吉川　きつとだぜ、君。細君ばかり可愛がらないで、たまには友達の味方になつてもいゝだらう。

（梅子、障子の蔭より現れる。）

梅子　吉川さん、昨晩はお樂しみ。（火鉢の側に坐す）大變お歸りがお早いのね。
吉川　はゝあ、さうか。やつぱり一杯喰はされたのか。
春雄　あはゝゝゝ。
梅子　夫婦共謀の計に陷つたな。
吉川　梅子の方が君より一と汽車早かつたよ。
春雄　あたしはあなたのやうにだらしがないんぢやありませんからね。
梅子　いや、恐縮々々。
吉川　それでもあなたは案外正直ね。何て云ふかと思つたら、昨夜の事をすつかり白狀なすつたわね。
梅子　どうせあなたの口から洩れるくらゐなら、白狀する方が正直だと思はれるだけ徳ですよ。正直ぢやないんです、つまり悧巧なんです。
吉川　君は大さう悪黨がる男だね。正直だと云ふのに、辯解しなくつてもよささうなものだ。
春雄　しかし、全く正直な人間ぢやないんだよ。――君、正直な人間よりも悧巧な人間の方が、却つて餘計正直なことがあるんだぜ。何か間違ひを仕出かす奴はみんな正直な人間さ。正直な人間程、安心の出來ない者はないよ。

春雄　悧巧な人間は何をしても、馬脚を露はさないからな。
吉川　うん、さうだ。
春雄　ところが君は、早速馬脚を露はしたぢやないか。
吉川　今の事は例外だ。露はしてもいゝことは、いくらでも露はすが、いざとなつたら世間に露れるやうなヘマはしないさ。
梅子　それぢや吉川さんなら信用しても大丈夫なの。
吉川　えゝ大丈夫ですとも。――さう云へば梅子さん、いい家が見附かつたんですか。
梅子　えゝ見附かつたわ。大概それにきめようと思ひますの。
吉川　すると、もう鎌倉には長くは居られないんですね。どうだい三枝君、明日お天氣だつたら、お名殘に二人で江の島へでも行かうぢやないか。
春雄　一度何處かへ行つてもいゝな。暫く一緒に出掛けた事がなかつたね。
梅子　それでもあなた、明日は東京へお出でになるのよ。
吉川　へえ！　何用で？
梅子　いゝえね、一遍宅に其の家を見て貰つて、若しも好かつたら早速きめて了ひますの。
吉川　あゝ、さうですか。塞がつちまふといけないから、極めるなら早い方が宜ござんすな。
梅子　さうよ、ほんとに。

第六節

雪子、靜子、庭より縁側に上る。

靜子　（母の前に坐る）お母さん、お歸りなさい。
梅子　はい、唯今。
雪子　吉川さん、入らつしやいまし。今日はどちらへお出掛け。
吉川　いえ、僕も東京へ行つて、梅子さんより一と汽車遲れて歸つて來たところです。
雪子　（寢椅子に腰を下ろす）さうでしたか。實はあんまり退屈なもんですから、先刻もあなたのお噂をして居りましたの。今夜は御馳走しますから、ゆつくり遊んで居らつしやいな。
吉川　それぢや御馳走になりますかな。
雪子　（梅子に）お前、家を搜しに行つたんだつてね。
梅子　えゝ、誰に聞いて？
雪子　春雄さんから聞いたけれど、口がきまるまで此處に居た方がいゝぢやないか。
梅子　もう鎌倉なんか飽き飽きしたわ。それに役所の方も近々任命が下るやうにゆうべお父樣が受け合つて下すつたから大丈夫なの。――まあ、お母さん、ほんとにいゝ

家が見附つたのよ。

雪子　どの邊に？

梅子　溜池の停留場から五六丁の處なの。それはもう何から何までお誂へ向きで、あたしすつかり惚れ込んで了つたわ。彼の家が見附かつたら、何だか急に東京へ歸りたくつて溜らなくなつちやつたわ。

吉川　地位は見附かつたし、家は極まつたし、今夜は一つ三枝君の爲めに祝杯を擧げるかな。

雪子　よござんすとも、いくらでも御馳走してよ。

春雄　長い間心配をかけたんだから、今日は僕獨りでみんなに御馳走するとしよう。（梅子から立つて緣側に行き、砂山の方を望む）あゝもう日が暮れる時分だな。何かうまい物を註文して、そろそろ夕飯の支度にかゝつて貰はうかな。

（春雄は後ろ向きに佇んだまゝ伸びをする。一同無言にて戸外の空を眺める。）

――幕――

第二幕

海岸の夜、――舞臺上手より下手の方へ、勾配の緩やかな砂山が、だらだらと裳裾を擴げて居る。上手の砂山の頂上より前方中腹へかけて一と叢の松林。其の後ろに別莊の二階の屋根が見える。下手の方は洋々たる一面の海。

地平線が丁度舞臺の中央で砂山の蔭に隱れて行く。

第一幕と同じ日の午後七時頃。晴れたる空に滿月が朧朧と霞んで居る。（幕が開いてから程なく、月は次第に舞臺の外へ運行して了ふ。）極めて穩やかな波の音。

第一節

吉川、梅子、千代子、下手より歩いて來る。梅子は不斷着のお召に着換へて居る。他の二人は前の幕と同じ服裝で、吉川はステッキを持つ。

梅子　あゝもう家の前へ來て了つた。千代子さん、もう少し散歩なさらなくつて？

（三人中央に立ち止まる。）

千代子　だつてあたし草臥れて了ひましたわ。

梅子　吉川さんはどうなさるの。

吉川　あなた方がいやなら、獨りで歩きますよ。三枝君の御馳走で、僕は未だに腹がくちい。

梅子　あたしも實はさうなのよ。

吉川　さうですよ。あなた方だつてあんなに喰べて置きながら運動しないぢや毒ですぜ。

千代子　そんならあたしだけ歸りますから、嫂さんもつと散步なさいな。

梅子　だけど千代子さんが居なくつちや……

千代子　をかしいわね。お二人ぢや御都合が惡いの？

梅子　惡かないけれど、千代子さんは明日東京へお歸りになるんでせう。

千代子　えゝ歸るわ。

梅子　何時頃に？

千代子　成るたけ朝早く歸りたいと思ひますの。

梅子　それぢや今夜がお名殘りだから、もう少し一緒に步きませうよ。

千代子　一緒に步いたつて別に話す事はないぢやありませんか。それに全く草臥れて了つたの。

梅子　あなたとあたしとは、此の一週間とうとう喧嘩のしつゞけね。それぢや此のまゝ仲直りをしないで別れませうか。

千代子　お互ひに其の方がよかなくつて？

梅子　ほんとにさうね、珍らしく意見が一致したことね。

千代子　吉川さん、左樣なら。

吉川　（いつの間にか砂山に足を投げ出して居る）ちよいとお待ちなさい。僕が仲裁するから、まあ仲直りをして行き給へ。

千代子　よくつてよ。どうせ嫂さんとは性が合はないんですから。

吉川　性が合はなくつても、喧嘩するにはあたらないでせう。僕を見給へ、生れてから未だ嘗て一度も喧嘩をした事がないぜ。

千代子　だからあなたは惡黨よ。

吉川　あなた方も僕の弟子になつて、もう少し惡黨の修業を積むさ。

千代子　眞平だわ。嫂さん、お先へ御免なさい。

梅子　お睡いでせうけれど、明日もう一遍お眼にかゝつてよ。

千代子　えゝ何度でも。

吉川　僕も明日は停車場までお送りします。

千代子　あら、そんな御心配には及びませんわ。

吉川　なあにどうせ遊んで居ますから。

（千代子、砂山を上つて向うへ消える。）

第二節

吉川　どうです、もう少し其の邊をぶらつきますか。

梅子　えゝ、どつちでもいゝわ。（と云ひながら、吉川の傍へ蹲踞る）實はあたしも草臥れて居るんですの。

吉川　そんならお宅へ歸りませうよ。まだ時刻が早いんだから、僕もう一遍送つて行きます。

梅子　いや、いや。（首を掉る）あたし千代子さんの顏を見るのも厭だから、わざとあゝ云つて別れて了つたの。

吉川　その位なら、初めから誘はない方がいゝぢやありませんか。

梅子　だつて彼の人を誘はないと、妙な厭味を云ふんですもの。ほんとに好かない人だわ。

吉川　可哀さうに。それ程嫌はなくつても好ござんすよ。千代子さんはあれでなかなか情愛の籠つた親切な所が見えますよ。

梅子　情愛なんぞあるもんですか。あたしが何か頼んだつて、一つとして聞いてくれた事なんかありやしないわ。假にも義理の姉を馬鹿にするなんて、何處に親切があるんでせう。

吉川　あなたに對してはさうかも知れないが、一般に云つたらいゝ人です。立派な夫人ですよ。

梅子　あなたは大さうお褒めになるのね。

吉川　褒めちや惡いんですか。

梅子　たとへ自分の事だつて、あんまり褒められゝば腹が立つわ。此の間もあなたは、三枝の事を大層褒めて下すつたわね。

吉川　そりや褒めますとも、三枝君はいゝ人です。兎に角僕に對してはいゝ人です。あのくらゐ僕の性質を理解して居る友達はありませんよ。

（二人の會話は眞面目だか冗談だか判らない調子になる。）

梅子　三枝の方でもさう云つて居ますわ。

吉川　何だつて？

梅子　あなたは世間で云ふやうな惡人ぢやないんですつて。惡人かも知れないけれど、割合に暖かい所のある、始終笑つて話の出來る惡人ですつて。

吉川　全くそれに違ひないんです。よしんば僕と三枝君と、どんなに利益が反對するやうな地位に立つても、僕は決してあの人を憎む譯には行きませんよ。一體あなたは三枝君をどう云ふ人間だと思つて居るんです。

（空が少しく曇つて、地上は稍薄暗くなる。沙山の上に三枝の姿が現はれる。兩人の影を認めて心持足音を忍ばせつゝ一間ばかりうしろに近づき、成るべく發見されても差支へないやうな姿勢を取つて、密かに耳を澄ます。兩人心附かず。）

梅子　そりや、ほんとにいゝ人だと思つて居るわ。全くあたしを可愛がつてくれるんですもの。

吉川　どうも男の性質と云ふものは、細君よりも友達の方が却つてよく解るやうですね。僕は子供の時から三枝君と同じ學校に育つたんで、あの人の氣持ちは實によく解

りますよ。
梅子　しかしあんまり優し過ぎて、男らしくないと思ふ事が時々あるわ。
吉川　それがいゝんです。あなたなんぞの御亭主は、大人しくなかつたら一日も勤りませんぜ。あの人はよくあなたの氣象を呑込んで居ますよ。夫としてあのくらゐ親切な、あのくらゐ寛大な人はめつたにありません。何處まで行つたら腹を立てるのだか、あの人ばかりは解りませんな。
梅子　あたしもその點は感謝してゐる積りなの。どんな事があらうと、あたしを信じ切つて居るんですからね。
吉川　さう云へばあなたはいつ東京へお引越しになります？
梅子　二三日うちに引き揚げようかと思ひますの。あなたは。
吉川　僕も早い方がいゝんです。大分此方で遊んだので、用事が山のやうに溜つて居るんです。
梅子　やつぱり赤坂か、麹町邊になさいましな。
吉川　えゝさうしませう。ところで明日三枝君は東京へ行くんですか。
梅子　お天氣さへ好ければ屹度行くわ。是非行くやうにさう云つたんですもの。
吉川　日歸りですか、それとも一晩泊るんですか。
梅子　まだハッキリ極まつて居ないんですの。久し振で赤坂へ行くんですから、泊らないとしても歸りはどうせ遅くなるわ。
（春雄は立聽きしながら、俄に昻奮して恐怖に充ちた眼を光らせる。）
吉川　立つのは何時の汽車でせう。
梅子　千代子さんと一緒だから、大概午前中よ。
吉川　そんなら僕は、明日の朝早く伺ひますよ。さうして停車場まで送つて行かう。
梅子　あたしは家に待つて居ますから……
（春雄、二三歩退いて、今度はわざと足音高く二人の傍へ歩いて來る。）
春雄　（いかにも快活らしい調子にて）おい、おい、二人共其處に居るのかい。
（梅子吃驚して後ろを振り向く。吉川は俯向いて、何氣ない體でステッキをいぢくつて居る。）
春雄　惜しいことに月が曇つて了つたな。（二人の傍へ蹲踞る）
吉川　先から此處に居たのに、君は何處を歩いて居たんだい。
春雄　今出て來たんだ。

梅子　あなた、羽織を召さないと、風邪を引いてよ。ちよいと家へ行つて、引掛けていらつしやいよ。

吉川　あなたが持つて來る役だね。

梅子　いやだわあたし、持つて來て上げてもいゝけれど、又千代子さんに顏を合せるのが不愉快だから。

春雄　いゝよ、いゝよ。今夜は大分暖かなやうだ。それに久し振りで飮んだせゐか、僕はまだ醉つて居る。

吉川　どうだい、たまには醉つて見るのも好い氣持だらう。

春雄　うん、いゝな。

吉川　明日東京へ行くなら、明後日あたり江の島へ出掛けようぢやないか。さうして又大いに飮むさ。

春雄　君と一緒ぢや危ない。

吉川　大丈夫だよ。梅子さんどうです、少しくらゐ酒を飮ましたつて差支へないでせう。

梅子　えゝいゝわ、あたしは宅を信用して居りますから。

春雄　あはゝゝゝ。（力なく笑ふ）

吉川　どうしたんだか、君は今日元氣がないね。

春雄　元氣は大いにあるさ。大いにあるが、唯面へ現はさないだけさ。今に見給へ。此の元氣を貯へて盛んに活動して、大金儲けをして見せるから、――さうなつたら少しは君にも惠んでやるよ。

吉川　お金を湯水のやうに使ふんだらう。

梅子　此の頃宅はお金持になつた夢ばかり見て居るんですと。あたしに指環を買つて呉れたり、二人で洋行に出掛けたり、夢の話と來たら大變よ。

春雄　今に本當にして見せるから。

吉川　どれ、吾輩も宿屋へ歸つて、金儲けの夢でも見るか。

春雄　まだいゝだらう。漸く八時だぜ。

吉川　いや、明日の朝早くお訪ねするよ。それぢや失敬。

春雄　さうか、そんなら失敬。

梅子　左樣なら、お寢みなさい。

（吉川、下手へ去る。）

第三節

梅子　あたしたちも歸りませうか。（立たうとする）

春雄　まあもう少し此處に居ておくれ。實はお前に話があるんだ。

梅子　……（氣遣はしげに再び坐る）

春雄　話と云ふと大袈裟だが、ほんたうに下らない事なんだ。全く取るに足らない事なんだから、お前氣持ちを惡くしちやいけないぜ。此れだけは前以て頼んで置く。

梅子　一體何の話なの。

春雄　外でもないんだが、此の頃己は或る人からをかしな忠告を受けたんだ。（一言一句戰々兢々として、成る可

く妻な怒らせまいとする）

梅子　はあ。

春雄　お前、此の話は誰にも云つちやいけないぜ。お母様にも、千代子にも、吉川にも——い丶かい、大丈夫だらうね。

梅子　云つて悪ければ誰にも云やしないわ。だけど氣懸りだから、早く聞かして頂戴よ。

春雄　その、つまり何だ、或る人がお前を誤解して居るんだ。己は決してそんな事を微塵も信じて居やしないが、お前が己以外の或る人間と不道徳な眞似をして居るやうに、邪推して居る人があるんだ。

梅子　誰がそんな事を云ふんです。

春雄　まあ誰でもい丶さ。

梅子　それだけの話をなさる以上は、誰だか名前を仰つしやいよ。あたしに隱す必要はなくてよ。

春雄　此ればかりは困るんだから、名前を云ふ事だけは赦しておくれ。

梅子　だつてあんまり馬鹿にしてるわ。あなたに忠告するくらゐなら、定めし證據があるんでせうから、あたし其の人の前へ出て、孰方が正しいか立派に明りを立て丶貰ふわ。

春雄　まあさ、お聞きよ。初めからさう怒つてしまつちや、まるで話が出來ないぢやないか。——己だつてそんな馬鹿げた事を信じる譯には行かないから、何か證據を見せろと云つたのさ。所が生憎證據なんぞ何もありやしないんだ。

梅子　隨分無責任な人もあるものね。證據がなくつて、どうしてそんな事が云へるんでせう。

春雄　ほんとに下らない話なんだよ。「僕は梅子を信じて居るから、さう云ふ忠告は止めてもらひたい。若し飽く迄主張するなら、レツキとした證據を出せ」つて、嚴しく跳ね付けて了つたんだ。さうすると先方ぢや負けない氣になつて、「二三日中に必ず證據を掴んで見せる」つて云ひ出したのさ。

梅子　それからあなたは何んと仰つしやつたの？

春雄　相手にしたつて仕樣がないから、「どうとも勝手にしろ」つて、其まゝ別れて了つたあね。

梅子　是非共證據を持つて來てくれろつて、お頼みになれば面白かつたのに。——あたし誰が云つたのか大概判つたわ。

春雄　判つたら判つたでい丶さ。しかし其人だつて、何も惡氣で云つた譯ぢやないんだよ。やつぱり己の事を心配して、兎に角親切に教へてくれたんだから、云はゞ有難迷惑なんだ。

梅子　それで全體あたしが誰とをかしいんでせう。

春雄　かうなつたら云つて了ふが、相手は吉川だと云ふのさ。

梅子　多分さうなんだらうと思つたわ。あの人より外に、此頃家へ來る人はありませんからね

春雄　吉川こそつまらない嫌疑を受けて、飛んだ災難だよ。

梅子　お互ひに損ですから、譯を話して、あんまり家へ來て貰はないやうにしませうか。

春雄　さうさなあ、そいつもまづいからなあ。

（空が再び晴れて、月光地上に滿つ。）

梅子　ねえ、さうして貰ひませうよ。

春雄　けれどもそんな事で友達の縁を切るのは、あんまり馬鹿げて居るからなあ。己は吉川に對して濟まないやうな氣がするよ。

梅子　だつて、さうでもして下さらなけりや、あたしが困るわ。

春雄　彼奴とは二十年來の附き合ひなんだから、此處でお互ひに厭な顏をして、別れ別れになつて了ふのも、一生不愉快だからなあ。――こんな話はもともと己獨りの胸へ藏めて、お前が聞かなかつた事にすれば、差支へないんだ。

梅子　どうとでも、あなたの氣の濟むやうにしてくださいな。そりやあたしだつて、全く別の意味で、吉川さんが嫌ひぢやないわ。現にかうやつて、仲好しで居るくらゐですもの。あの人が遊びに來なくなれば、隨分淋しいだらうと思ふわ。しかし、此ればつかりは外のことゝ違ふんだから。……

春雄　だからいゝぢやないか。吉川は勿論、お前もこの話は聞かなかつた積りで、今迄通り交際するさ。己は自分の爲めにお前の行動を束縛したり、干渉したりする氣はないんだよ。己はお前を心の底から信用して愛して居るよ。お前に不滿足を與へたり、不自由を與へたりすれば、己だつてやつぱり好い氣持はしないんだ。お前がしたいと思ふ事は何でもするがいゝ。好きな人ならいくらでも交際するがいゝ。（だんだんセンチメンタルになる）唯己がどのくらゐお前を愛して居るか、それさへ解つてくれゝば、別に何も云ふ事はない。

梅子　それはよく解つて居るわ。何ぼあたしが我儘だつて、心の中では有り難いと思つて居るわ。

春雄　己を幸福にするのも、不仕合せにするのも、みんなお前の心一つにあるんだ。お前は己を殺す事も生かす事も出來るんだ。

梅子　もう、ようく解つて居るんですから、そんな話は止して頂戴よ。

春雄　已は病氣で死にさうになつた最中でも、自分の命を惜しいとは思はなかつた。お前と靜子を幸福にさせたい一心で、も一度全快するやうに、神樣に願つたんだ。其の一心がなかつたら、已は疾つくに死んで居たかも知れないんだ。
梅子　あなた又あんまり昂奮なさると體に毒よ。いゝ加減にして家へ歸りませう。
春雄　あゝ歸らう。だがほんたうに已の心は解つてくれたらうな。
梅子　解つて居ますとも。
春雄　解つてくれたら、已はもう一つ願ひがあるんだ。
梅子　どんなこと？
春雄　先も云つた通り、已は其の人の忠告を少しも信じて居やしない。けれども先方では意地になつて二三日中に是非共證據を捕まへると云つて居るのだから、こゝ暫くの間お前も用心して、つまらない誤解を受けないやうにしておくれ。
梅子　あなたもそんな事を仰つしやるわね。身に覺えのない事なら、用心する必要なんかありやしないわ。
春雄　そりや勿論の話ださ、疚しい所がないだけに、却つて遠慮が無さ過ぎて、飛んだ誤解を受ける事があるよ。その上先方は苦しまぎれにどんな難癖を附けないとも限らないからね。
梅子　それ御覽なさいな。だからやつぱり、吉川さんを寄せ附けない方がいゝんでせう。
春雄　いやいやさう云ふ譯ぢやないんだよ。唯二三日の間、先方が手を引いて了ふまで、少し控目にしてくれゝばいいんだ。なあに其の人さへ遠退いたら、もう何をしたつて安心さ。（立ち上る）
梅子　あの人はあたしを目の敵にして居るんだわね。
春雄　お前もあまり取り合はない方がいゝよ。……さあ、歸らう。
（兩人砂山を上り行く、）
（上手松林の中より忍び足に千代子が現れる。砂山の彼方に隱れ行く兩人の姿を見送りながら、默然として舞臺の中央に立つ。）

――幕――

第　三　幕

第一幕と同じ室内。時間は第二幕より直ちに連なる。

第　一　節

春雄と梅子が入つて來る。

梅子　みんな何處へ行つたんでせう。

春雄　きつと二階だよ。靜子の聲が聞えるぜ。

梅子　あの子はまだ寢ないのか知ら。もう九時になるのに。

春雄　それにしても、千代子が居ないやうだ。又何處かへ行つたのかな。

梅子　今時分獨りで夜歩きをするなんて、千代子さんの方が餘程怪しいわ。……

（此時廊下に足音が聞える。）

梅子　……あ、千代子さんだ。あたし二階へ行つてるわ。

（梅子、上手の障子を開けて去る。）

第　二　節

下手より千代子登場。

千代子　兄さん、嫂さんはどちら。

春雄　今二階へ行つた。お前は今迄何處に居たんだ。

千代子　（春雄の前に佇立したまゝ話し續ける）あれから又散歩に出掛けましたの。――兄さん、あたし少うし都合がありますから、今夜東京へ歸りますわ。

春雄　なぜ。

千代子　でも、考へた事がありますから。

春雄　だつて、もう遲いぢやないか。

千代子　まだ九時ですから、大丈夫よ。――それでね兄さん、晝間あなたと喧嘩をしましたけれど、此まゝ別れるのは氣持ちが惡いから、仲直りをして下さいな。

春雄　僕の方ぢや何とも思つて居ないんだから、お前がさう云つてくれゝば結構だよ。

千代子　何卒兄さん、先の事は堪忍して下さい。ほんとにあたしが惡かつたわ。あれはすつかり取り消しにして戴くわ。

春雄　どうして。

千代子　あたしは本當に馬鹿な人間だつたわ。今時あたし程馬鹿な人間は、世界中にないと思つたわ。

春雄　何だかをかしいな。僕にはさつぱり判らんよ。

千代子　實は白狀しますけれど、あたしは今、松林の中であなたと嫂さんのお話をすつかり聽いて了ひましたよ。

春雄　お前あれを聽いて居たのか。

千代子　そんなに驚かなくつてもよござんすよ。あたしはあれを聽いて、ほんとに感心しましたわ。かりにも兄さんを不仕合せだの、卑怯だのと云つた事を、つくづく後悔しましたわ。

春雄　聽かれたら仕樣がないが、あれは全く僕の眞情なのだ。どうか惡く思はないでくれ。

千代子　惡く思ふ理由がないぢやありませんか。妹の癖に今迄兄さんの眞情をお察しする事が出來なかつたのが、

悪いのよ。兄さんはほんとに仕合せな方だわ。兄さん程幸福な方はめつたにないわ。

春雄　さうさ、お前の云ふ通りだよ。

千代子　あたしの無分別な了見から、餘計なおしやべりをして、たとへ半日でも兄さんに御心配を掛けたのが申譯がないと思ひますわ。あたしはもう何も疑つて居やしなくつてよ。あなた方のお話を聴いて見ると、いくら證據を摑まうとしたつて、摑める筈がないんですもの。ねえ兄さん、ほんとに堪忍して下さいまし。お互ひに笑つて別れませうよ。

春雄　笑つて別れるのはいゝが、明日歸つたらどうだらう。折角和睦したんだから、今夜はもう一と晩泊つて行くさ。

千代子　和睦したから今夜歸るんですよ。もう疑が晴れた以上は、忙しい體で鎌倉に居る用はないんですもの。一刻も早く家へ歸つて、原田に安心させた方がいゝわ。

春雄　まあ、それもさうだけれど……

（梅子上手より這入つて來る。）

千代子　あ、嫂さん、先程は失禮致しました。あたし都合があつて、今夜歸る事になりましたの。

梅子　大さう急なお話ですね。いくら喧嘩をしたつて、もう一と晩ぐらゐ泊つて居らつしやいよ。それに明日は宅も東京まで行きますから、丁度いゝぢやありませんか

千代子　ですけれど、又今度伺ひますわ。

梅子　お忙しいでせうから、そんなに入らつしやらなくつてもよござんすよ。

千代子　あたし嫂さんと仲直りをしない約束でしたけれど、すつかり後悔しましたわ。だから嫂さん、何卒機嫌を直して、堪忍して下さいな。

梅子　しかしあなたとは、どうしても和睦出來ない譯があるの。

千代子　それもあたしが詫りますわ。嫂さんにつまらない疑を掛けたのは、全くあたしが悪かつたんです。今兄さんにお詫をして、殘らず取り消して了ひましたわ、

梅子　さう仰つしやればあたしだつて、何とも思やしませんよ。

千代子　今迄の事は、さつぱり水に流して下さいまし。

梅子　えゝ、よござんすとも。

千代子　それぢや、歸りの支度をして參りますから。

（千代子、上手より退場。）

第三節

梅子　千代子さんはほんとに後悔したのか知ら。

春雄　さういつ迄も人を疑ふもんぢやない。悪いと悟つて詫つたのだから、嘘ぢやなからう。

梅子　あゝ云ふ風に優しくされると、あたしも腹を立てないけれど……

春雄　あゝ、此れで己れもせいせいした。

（雪子、下手より入る。）

雪子　千代子さんが今歸るんだつてねえ。もう四五日遊んで行けばいゝのにねえ。あんまり出し拔けぢやないか。

春雄　なあに、昨日から歸る歸るつて、さう云つて居たんです。

雪子　せめて明日にしたらどうだらう。今夜はもう九時過ぎだよ。春雄さんから勸めて御覽な。

春雄　僕も勸めたんですが、承知しないです。それに忙しい體ですから、歸した方がいゝでせう。

雪子　又何か、梅子と喧嘩でもしたんぢやないのかい。

梅子　いゝえ、喧嘩どころか、すつかり仲直りをしちやつたのよ。

雪子　仲直りをするのがお當り前だよ。同じ年でもお前さんの方が、嫂さんぢやないか。

（千代子、歸りの身支度を整へて、靜子を抱きながら上手より登場。）

千代子　それぢや皆さん、長々御厄介になりました。（靜子を下ろして、三人に會釋する。）

雪子　さうですか。一向お構ひ申しませんで、失禮ばかり致しました。何卒お宅へ宜しく仰つしやつて下さいましよ。

千代子　はい、有り難うございます。兄さんも嫂さんも御機嫌よろしう。

梅子　どうぞ原田さんに宜しく。二人共仲直りをしましたからつて、よくさう云つて頂戴よ。

千代子　えゝ云ふわ。――靜ちやん、東京へお歸りになつたらきつとお遊びに入らつしやい。

靜子　伯母さん、もつと鎌倉に居らつしやいよう。

千代子　（グツと靜子を抱きしめる）でも伯母さんは、御用があるんですもの。……ね、靜ちやんはいゝお子さんね

（女中まつ、下手より登場。）

まつ　奥樣、お俥が參りました。

千代子　あゝさうですか。それでは御免下さいまし

（一同立ち上つて廊下に出る。）

雪子　遲くなると瀧谷の方は物騒ですから、よく氣を附けて入らつしやいよ。

千代子　はあ、今夜は月がありますから、大丈夫でございます。

雪子　（硝子より戸外を見る）ほんとに穩やかな、いゝ月夜だこと、まるで晝間のやうだ。

（千代子を送りながら皆々下手へ退場。）

――幕――

法成寺物語（四幕）

人物

藤原道長　前の攝政關白
院源律師　叡山の僧侶
四の御方　故太政大臣爲光の女、宮廷の貴婦人
良圓　院源の門弟、若く美しき法師
藤原隆家　前の太宰大貳
坂田公時　源賴光の郎黨
渡邊綱　同
詫摩爲成　佛畫師
定朝　當時第一流の佛工
定雲　定朝の弟子
外に定朝の弟子二人
道長の邸に召使はるゝ女房數人
匠工人夫等多勢

時

後一條天皇の寬仁四年の春、法成寺の建築未だ完く成らざる頃。

處

洛北法成寺境內。

第一幕

場面——舞臺の奥、向つて右の隅から左方へかけて、規模雄大なる堂宇の一部が、純藤原式の莊嚴優美な姿態を作つて正面を向いて聳えて居る。堂の屋根は檜皮葺、床は板敷、簀子には勾欄を繞らし、今や外部の建築が殆んど出來上つたところである。此處に見えて居る部分は丁度建物の左半分である爲め、堂の正面中央に設けられた階段が、舞臺の右端に方つて現はれて居る。階の左方に蓮池があつて前面へ擴がつて居る。堂の左側面から渡殿が舞臺の左端へ續く。

天氣の好い、うらゝかに晴れた日の午後。多勢の佛師、工匠、人夫等堂上堂下に集つて頻りと工事に奔走して居る。堂は正面と左方と、兩側の扉格子を悉く開け放ち、既に取り付けを終つた內陣の須彌壇、天蓋、虹梁など、一代の豪華を極めた裝飾が燦爛と輝いて見える。堂の本尊たる丈六金色の阿彌陀佛のうち、二體だけは胸から下が既に出來上つて、內陣の左端より順々に安置せられ、其の傍に佛工定朝が躊躇りながら頻

りに本尊の首を彫つて居る。なか／＼理想通りの容貌を作り出す事が出來ないで、苦心慘澹たる樣子である。彼と並んで、弟子の定雲が本尊の脇侍たるべき觀世音菩薩の像を刻んで居る。輪廓の頗る醜い、表情の陰鬱な、二十歳前後の青年であるが、彼の瞳には天才の閃きがあり、彼の鑿には自信の籠つた響きがある。師匠の定朝が屢々瞑目し沈吟して居る間に、彼は八九分通り自分の仕事を成就して、折々手を休めながら、自分で作つた菩薩の妙相を恍惚と眺め入つて居る。外の二人の弟子のうち、甲は一番目の阿彌陀佛に金箔を塗つて居る。乙は二番目の阿彌陀佛の蓮瓣を植ゑて居る。正面の階に近い扉には、畫工爲成が九品蓮臺の極彩色の佛畫を描いて居る。庇の間には二三人の狩衣姿の男達、木賊椋葉などを手毎に持つて、板敷を鏡のやうにつやつやと拭き込んで居る。五六人の人夫が池の汀の土を掘つて草木を植ゑて居る。時々、恐ろしい巨材を車に載せて、四五人がかりで綱を曳きつゝ、掛け聲勇ましく上手より下手へ通り過ぎる一隊がある。其の他工匠の壁を塗る者、金具を打つ者、場内雜然たるにも拘らず、各々熱心な敬虔な態度で、比較的靜肅に立ち働く。

庭園の作業に從事する人夫の一　ほんとに今日は好い天氣だなう。かう云ふ日には钁が鳥のやうに輕うなつて、餘計仕事が捗りさうだ。

人夫の二　此の二三日めつきりと春らしい陽氣になつたなう。己の故鄕の月ヶ瀨では今頃梅が咲いて居るだらう。

人夫の一　御同樣に國を出てから隨分久しうなつたものだ。己は睦月の晦日に大江山の麓の里から召されて來たが、もう今日で一と月ばかりになる。國を出て來る時分には、己の故鄕にはまだ雪が降つて居た。

年老いたる人夫　あはゝゝゝ、お前たちはそろ／＼女房の顔が見たくなつたんだらう。……いづれ來月の二十日ごろには御堂の供養があると云ふから、もうあと一と月の辛抱だや。

人夫の三　おい／＼爺さん、それはお前何かの聞き違ひではあるまいか。此れだけの立派な御普請が、そんなに早く出來上る筈はない。

人夫の四　いや／＼どうだか解らない。何しろ國々の莊園から、一日に五六百人も人夫が這入つて來るのだから、普請の出來上るのは瞬くうちだ。

人夫の一　昨日は播磨の國の司から、人足を二百人奉つたと云ふ噂だ。

人夫の二　今朝も紀井の國から七百本の材木が屆いたさうだ。

人夫の四　これに第一、近頃のやうに天氣の續くのは珍し

いことだ。己達が仕事にかゝつてからめつたに雨が降らないぢやないか。

年老いたる人夫　大方此處の大殿の御威勢には、天道様も怖げ恐れて居らつしやるのぢや。

人夫の三　何しろまあ、いよ／＼此のお寺が出來上つた日には、嘸かし有り難い靈場になるだらうなう。

年老いたる人夫　さやうさ、先づ塔堂の麗さと云ひ、御佛像の數々と云ひ、日本は愚か唐天竺を尋ねてもこんな有難いお寺は二つとありはしないのぢや。わしは若い時分から大概の靈場に參詣したが、聖武天皇の建立なされた東大寺を始めとして、鎌足大臣の多武峰、不比等大臣の山階寺、基經大臣の極樂寺、どれも此れも今度のお寺の立派さとは比べ物になりはしない。全く此の世の中に西方淨土が出來上つたも同然ぢや。

人夫の三　そんなら定めて御利益がある事だらうな。

年老いたる人夫　それは云ふ迄もない話。此の御普請に雇はれた人間は、たとへ一本の樹を植ゑても、みな御佛の御利益で、死んだら必ず極樂淨土へ生れる事は請け合ひぢや。わしも長生きをしたばつかりにこんなめでたい折に出遇うたから、此の上はいつ死んだとて浮世に未練は殘るまいよ。ほんたうに有難い事ぢや。

人夫の四　さうして見ると、己達は仕合はせな人間だ。はる／＼と、遠國から召し出されて來た效があると云ふものだ。

人夫の一　さう云ふ譯なら、國に殘した妻子の者にも、此のあらたかなお寺の樣子を一と目なりとも拜ませてやりたい。己一人が極樂へ生れたところで、可愛い奴等が地獄へ墮ちたら、こんな情ない事はあるまい。

年老いたる人夫　なあにお前さへ正直に働いたら妻子眷屬もキット御利益に與るわい。

人夫の一　爺さん、ほんたうに大丈夫だらうか。

年老いたる人夫　あはゝゝゝ、お前は年が若いにも似合はず、感心に後生を氣にする男ぢやなう。ほんたうに大丈夫ぢや。わしが請け合ふから、心配しないで仕事に精を出すがいゝ。

人夫の二　精を出して働いたお蔭で、今日の仕事もあらかた片附いてしまつたやうだ。どうだいみんな一と休みして、お堂の樣子を拜見するとしようではないか。

人夫の三　さうだ、さうだ。隙な時分にとつくり拜んで置かなければ、國へ歸つても話になるまい。

（人夫等作業を終へて立ち上り、鋤鍬を肩に擔ぎながら、階の下に集つて恭しく内陣の彼方此方を仰ぎ視る。）

人夫の四　成る程大したものだなう。あの格天井の飾を見

ろ。まるで眼が醒めるやうだぜ。

人夫の一　床板が鏡のやうに光つて居る。

人夫の二　おい、おい、それからちよいと此處を見ろ。（扉に繪を畫いて居る待成の方を指す）何だか恐ろしく綺麗な繪が出來上るらしいぜ。爺さん、あれは何の繪だらう。

年老いたる人夫　あれは此の世で信心をした人たちが、死んでから十方世界の御佛に導かれて、極樂へ生れるところをお畫きなすつたものであらう。彼處に雲の上から後光を放つて居らつしやるのが阿彌陀如來ぢや。その傍に蓮の臺を捧げて居らつしやるのが、觀世音に勢至菩薩。向うの扉に畫いてある蓮池の水が八功德水。……成るほど見事によく出來て居る。生意氣なことを云ふやうぢやが、わしは此の年になつても此れ程立派な極樂の繪を見た事がない。かうやつていつ迄も眺めて居ると、何だか淚がこぼれて來る。

人夫の三　それから爺さん、長押の上の彫物は、あれは一體何だらう。彼處にも多勢の天人が雲に乘つて飛んで居るぢやないか。

年老いたる人夫　それよりか、あの御本尊を見るがいゝ。惜しい事にまだお顏が出來上つて居ないけれど、肩から下を拜んだだけでも、何と云ふ尊いお姿であらう。今に此の阿彌陀樣が、都合九つお堂の中へお列びになるのだから、其の立派さが想ひやられるわい。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

（堂上の人々は、人夫の言葉など耳に入らざるもの丶如く、默々として仕事に熱中して居る。定雲は漸く觀世音の像を作り上げて、一番目の阿彌陀佛の傍へ据ゑつける。）

人夫の四　あすこに出來上つたのは觀音樣かな。

人夫の一　阿彌陀樣も有り難いが、あの觀音樣のお顏は、又一段と氣高いやうだな。

年老いたる人夫　ほんたうに此れは恐ろしいほど見事な出來ぢや。不思議にあらたかなお姿ぢや。あの嚴な口元と云ひ、お慈悲深い眼つきと云ひ、何となく有り難さが身に沁みて、自然と頭が下るやうぢや。

人夫の二　勿體ない話だが、木で作つた物とは思はれないな。まるで生きて居らつしやるやうだ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

（人夫一同、觀世音の前に禮拜する。）

人夫の三　さあ、此れから一つ外のお堂を見物に廻らう。

年老いたる人夫　あゝ有り難いことぢや。勿體ないことぢや。

（人夫一同、右手へ退場。此れ迄の間に堂上の工匠も仕事を終へて、一人づつ次第々々に堂の後に消え、佛

工と畫工ばかりが居残る。霎時暫く無言のやゝありて、膝拱いて俯向いて居た定朝が、重い嘆息を洩らしながら快々として立ち上り、徐かに爲成の方へ歩み寄る。さうして、ぢつと彳んだまゝ、いつ迄も扉の畫面を眺めて居る。)

爲成 (筆をかきさしながら振り返つて定朝を見る) 定朝どの、いかゞなされた。何と思されてそのやうに、此の繪を御覽じなさるのぢや。

定朝 憚りながらあまりめでたい出來榮えに、御答へになるとも知らず、暫く見惚れ申してござる。某はつく〴〵其許を羨しう存じ申す。斯ほどにいみじき御扉繪をお作りなされた其許の、御よろこびは無かしでござらう。

爲成 さればまことに神佛の加護のお蔭でござらうか、此の御扉に向うてから、身に覺えなき不思議の力に導かれて、たゞ〳〵夢を見るやうに自然と描き上げました。某繪筆に親しんでより、かやうに心の張り詰めた事は嘗てござらぬ。

定朝 いや、いや、神佛の加護もさる事ながら、やはり其許の筆の力ぢや。世にも稀なる妙巧の業ぢや。唐の吳道玄、我が朝の巨勢金岡が蘇生つて參らうともよもこれほどには描かれまい。まことに此の繪は稀代の逸品、此の御寺のあらん限り、佛法王法の榮ゆる限り、其許の御名は此の繪と共に千載までも傳はるでござらう。かされ〳〵羨しう存じ申す。

爲成 當代に双びなき佛師と云はるゝ其許から、さほどのお褒めに與れば此の上もない面目でござるわい。……したが定朝殿、其許はなぜ其のやうに他人の業を羨しいと仰せあるのぢや。某の繪が末代までも傳はるものなら、忝くも此の大御堂の本尊と仰がれて、千百年の後までも、普く世人の歸依せらるゝ貴い如來の佛像は、抑も誰がお拵へなさるのぢや。

定朝 其れは勿論、此の定朝に負はれた役目でござる。……

爲成 さうして見れば、某こそはなか〳〵其許を羨しいと存じ申す。其許のお作りなさるゝ阿彌陀佛の御前に立てば、一天萬乘の帝でさへも御頭を垂れさせて、合掌なさるゝでござらうがな。某の此の扉の繪も此の嚴かな內陣の調度も、此の廣大な伽藍の甍も、淸しい庭の蓮池も、凡べて其許の阿彌陀佛を安置し奉る便宜の爲めに、云はゞ序に設へた飾りに過ぎぬと申すもの。此の有り難い御代に生れて日本一の佛師と讃へらるゝ御自分こそは、誰にも優る果報者よと思し召さるゝが當然でござらうに。

定朝 うむ、若しも某が仰せの如き日本一の佛師であつたら、いかさま果報者でござらうかも知れぬ。さりながら、其許の御扉繪の見事さと云ひ、御堂の普請の立派さと云

ひ、世に珍しい靈場の出來上る樣を見るにつけても、なまじひに本尊の御佛體を刻み出す可き役目の重さが、恐ろしうござるわい。覺束ない某の鑿の力で、此の靈場に適しい彌陀の尊像を、どうして作り出されようかと、それのみ頻りに案ぜられて、今日此の頃の某は夜もおちおち眠り申さぬ。

爲成　はてさてさうなうてはかなはぬこと、さ程の御用意があればこそ、一道に秀づる腕をも研き申す。某の如き鈍根の輩にさへ、神佛の加護はござつたものを鑿を取つては鬼神を凌ぐ其許の此の頃の御苦心に、などて御佛の加護がなからう。やがては名工の名に恥しからぬ傑作を成就なされて、世上を驚かすことでござらう。必ず〱御心配は御無用になされい、

定朝　……爲成どの、其許は眞實さやうに思はるゝか。此の定朝を日本一の名工と、まことに思し召さるゝか。

爲成　云ふまでもない事、ゆめ〱僞りは申さぬつもりぢや。たとへいかやうに謙遜なされたとて、當時其許を差し置いては、此の大御堂の盧舍那佛を刻み出すべき佛師はござらぬ。其許に優る名工の現はれて參らぬ限り、日本一と褒め讃へるに、何の憚りがござらうぞ。

定朝　此の身に優る名工の出て來ぬ限り、成る程某は日本一ぢや。……したが爲成殿、此の定朝に上越す者が、若しも此の世にあるとしたらいかゞ召さるゝ。

爲成　さやうな事があらう筈はない。さやうな事は信ぜられませぬ。

定朝　あはゝゝゝゝ、それは其許の迷信と云ふものぢや。世評に心を晦まされて、妄りに某を信じ過ぎると申すものぢや。――爲成どの、お聞きなされい。此の定朝は日本一の佛師ではござらぬ。某に上越す者が、いみじき佛師の名工が、もはや此の世に現れて參つた。

爲成　なに、何と仰せらるゝ？　其許の腕を凌ぐやうな、いみじき佛師が現れたとな？

定朝　いかにも。

爲成　さうして其れは、一體何處の者でござらう。

定朝　お疑り召さるゝなら、唯今其の男にお引き合はせ申すでござらう。……其の男は彼處に居る某の弟子の定雲でござる。

（兩人定雲の方を顧る。定雲は二人の言葉を耳にもかけず働いて居る。觀世音の立像を安置してしまつて、今度は勢至菩薩の粗彫の像に刀を揮つて居る。本尊の佛體に金箔を貼つて居た弟子の一人が、いつしか觀音の像に胡粉を塗り始めて、額から肩のあたりへと一と通り塗り終つたところである。）

定朝　あれを御覽せられい。彼處に出來上つた菩薩の像を

御覽ぜられい。（兩人、定雲の傍へ歩み行く）此れこそ此奴の仕事でござる。定雲の鑿の力は恐ろしうござる。

爲成　（菩薩の前に愕然として佇立する）ふむ、何と云ふ素晴らしい出來榮えぢや。何と云ふ莊嚴なお姿ぢや。

定朝　さうして又、あの生き〳〵とした御頰のあたりを御覽ぜられい。

爲成　まことにあの御頰には人間の暖い血が通うて居るやうぢや。あの柔い眼瞼の脹らみと云ひ、あのゆつたりした頤の趣と云ひ、あの軟かな脣の包と云ひ、勿體なくも物凄いやうな出來榮えぢや。世にも有り難い御顏ぢや。あゝ、何と、云ふ珍らかなことでござらう。南無觀世音菩薩……（跪いて禮拜する）

定朝　爲成殿、某はもう日本一の佛師ではござらぬ。此の觀世音を拜むにつけても、某の苦衷をお察し下されい。

爲成　はて、其れは又何故でござらう。かばかり腕前の優れた人を弟子に持たるゝ其許は、あつぱれ師の君の譽れに背かぬ、天下の巨匠でおはさうがな。

定朝　いや〳〵及びもない事ぢや。師匠と云ふは唯名ばかり、辛くも長年の修業の功で、業を磨いた某と、生れながらに天稟の才を具へた定雲とは、比べ物になり申さぬ。

爲成　たとへ其許の仰せのやうに、定雲とやらが何程優れて居ようとも、己に勝る弟子を持たれた其許は、よき後繼を得られた道理ぢや。まことに師弟の情として、お喜びなさるが當り前ぢや。

定朝　いかさま其れも一應は聞えた話、某とても斯程の若者を弟子に儲けて、喜ばしうは存じ申す。なれども一藝一能の途を競ふに、師匠もなければ、弟子もござらぬ。師弟の情は私事ぢや。千載に譽れを遺す公けの晴れの仕事に、などて上下の禮儀がござらう。某は此の定雲に蹴落さるゝが口惜しうござるわい。

爲成　蹴落さるゝと定まつた運命でもござるまい。それこそ其許の迷信と申すものぢや。

定朝　あはゝゝ、迷信でござるかなう。此の觀世音や勢至菩薩に恥かしからぬ、弟子の仕事にをさ〳〵劣らぬ本尊の御佛を作り出さうと、某はどれ程苦心いたしたでござらう。朝な夕な幻を胸に浮べて、幾度か如來の相を描いては消し、消しては描き、氣も心も狂はしうなるまでに熟慮を重ね思を凝らしても、一向工夫がつき申さぬ。此の定雲が力強い鑿の響に怯やかされて、焦ら立てば焦ら立つほど、たゞ徒らに頭の中が掻き亂さるゝばかりでござる。やがて御普請の出來上るのも程なう迫つて參つたに、見らるゝ通り某はいまだに、彌陀の尊容を一つも作り終せませぬわ。己れの技倆を顧みもせでうか〳〵と此の大任を身に引き受けた。某の苦衷を御推量下されい。

爲成　いかに定雲とやら、先刻からの定朝殿の繰り言を、其方は定めて聞いたであらう。

定雲　（定雲手を休めて額の汗を拭ひながら、躊躇つたまゝ兩人を見上げる。無愛想な表情、簡朴な言葉づかひ）　私は夢中で仕事をして居りました。よくも承りませぬ。

爲成　其方は今年幾歳になる？

定雲　今年十九でござります。

爲成　ほう、まだうら若うは思はれたが、二十前とは存じも寄らぬ。さうして其方の生れは何處ぢや。親御は何者ぢや。

定雲　津の國の、難波江に近い濱邊で生れました。親は漁師でござります。

爲成　漁師の子供がいかなる譯で、佛師にならうとは思つたのぢや。

定雲　私は漁ることが嫌ひでござりました。幼い折から渚の砂を掻き集めて、人間の形を作るのが何より樂しうござりました。

定朝　それは某がよう覺えて居る。丁度今から五年の昔、所用があつて津の國へ下向致した砌でござつた。折ふし秋のゆふぐれに難波江の浦曲をさまようて圖らずも此の定雲の砂徒らが眼に止まり、十四五の童の業とは思はれぬ程の巧みさに、そゞろに興を催して都へ伴れて參つたのぢや。

爲成　さても淺からぬ師弟の緣でござるなう。若しも其許に廻り會はずば、かほどに勝れた名工も、世に埋れて朽ち果つるのが定であらうに、緣と云ふは不思議なものぢや。

定朝　いや／＼某にめぐり會はずとも、見す／＼天賦の才ある男が、いつまで隱れて居り申さう。春が來れば自然と花の開くやうに、導かずとも世に咲き出づるは知れた道理ぢや。

爲成　定雲、其方はなぜそのやうに愛敬のない顏つきをして居るのぢや。あのやうに褒められても、嬉しいとは思はぬかな。

定雲　私の胸にはたゞ美しい菩薩の幻が充ち溢れて、現身の、世の譽などは聊か耳にも這入りませぬ。

定朝　よう申した。立派な言葉ぢや。其方の鑿には悶えの痕がない。其方の仕事には疑ひの痕がない。其方は迷はずに進める男ぢや。其方の言葉はいみじき大德の教へのやうぢや。恥かしながら其方の師匠の定朝には、まだそれ程の一念が起らぬわい。

爲成　成る程なう、どのやうな業に携はつても、悟りの道はたゞ一つぢや。達人の域に這入れば、佛師も聖となり申さう。それにつけても定雲は、そも何處からそのやう

な、堅固な信心を得て參つた菩薩の來迎を眼前に見る、有り難い功德をいつの間に積んだのぢや。

定雲　それは到底私の口から申されませぬ。菩薩の示現の貴さは、己れ自ら幻に見る事は出來ても、人に傳へる便りもござりませぬ。

定朝　其方はまことに仕合はせ者ぢや。其方は日本一の佛師ぢや。其方が居るのに、此の定朝が手を動かす用はないのぢや。私はどうかして、私の仕事を其方に讓つてしまひたい。上のお許しがありさへすれば、私の役目を其方に引き取らせてしまひたい。

（女房二人、渡殿傳ひに歩いて來る。左側の勾欄のほとりに立ち止まつて聲をかける。）

女房の一　定朝どの、爲成どの、唯今此れへ大殿がお出でなさりまする。

定朝　なに、大殿のお出でとな。

女房の二　さやうでござります。大殿には日に一度づゝ御普請の模樣を御檢分遊ばさねば、どうやら御心が落ち着かぬとの仰せでござります。

女房の一　爲成殿、御扉の繪はもはやお出來になりましたか。

爲成　さればでござる。唯今も定朝殿と語り合うて居りましたが、某一生の思ひ出に、念力を籠め丹精を盡したる效あつて、あり／＼の御佛も擁護を垂れさせ給ひてか、例になく筆の運びが捗り申した。今日すでに正面の御扉を八九分通り描き上げたところでござる。

女房の二　それは何より祝着に存じまする。大殿樣が御覽じ遊ばしたら、嘸かしお喜びなさることでござりませう。

女房の一　さうして定朝殿、阿彌陀佛のお顏はいかゞなされました。

定朝　御覽の通りぢや。いまだ一つも出來申さぬ。

女房の二　先つ頃から、並々ならぬ御苦心のお噂を妾も聞いて居りましたが、それではいまだによい御思案も浮びませぬか。

定朝　此の定朝は神にも佛にも捨てられたのでござらうよ。

女房の一　はてまあ、そのやうな呪はしい事は仰つしやりますな。一日も早う御工夫がつきますやうに妾共も只管祈つて居りまする。

女房の二　大殿樣も其方の事を聞し召されて、此間から頻りに胸をお痛めなされてゞござりまする。其方を措いては、此のやうな重い役目を果たせる者は居りませぬ。早う美しい御佛のお姿を、妾共にも拜ませて下さりませ。

定朝　そのお言葉は忝いと存じ申すが、某などを賴りにされても詮ないことぢや。工夫の浮ぶは何時のことやら、

一年かゝるか二年かゝるか、さて〳〵心細い限りぢや。次第に依つたら、大殿お見えになるのを幸ひに、分に過ぎたる某の役を免じて賜はるやう、お願ひ申して見たう存ずる。

女房の一　何と仰つしやいます。そのやうなことを、眞實思し立たれたのでござりますか。

定朝　眞實でなうて何といたさう。――お許たちにも先づ先づ此方へ入らせられて、大殿のお出でを待たれた上、とも〳〵にお口添へをお頼み申す。

女房の二　そのやうなお口添へが出來ますものか、よう考へて下さりませ。なう爲成どの、其方は何と思されまする？

爲成　お許の仰せも尤もぢやが、定朝殿の思詰めされた心の程も、推し量られて傷はしうござる。筆と鑿との相違こそあれ、畢竟するに繪師も佛師も一つ生業、同じく美しい佛陀の諸相を作り出すが命でござるに、定朝殿の胸の悶えを察すれば、なか〳〵餘所事とは思はれませぬ。某とてもそれによう似た苦しみに、出遇ふ場合もあるでござらう。

定朝　いしくも仰せ下された。さほど迄に思し召し下さるなら其許からも宜しきやうに、大殿へお取りなしをお頼み申す。

爲成　其れは思ひも寄らぬこと、役目を遁れ身を安穩に處するがよいか、苦しみに堪へて工夫の浮ぶを待たるゝがよいか、神佛ならでは解らぬことぢや。先づ某は御遠慮申して、此の場を罷り退ると致さう。何卒御免下されい。

（爲成、堂の右方へ歩み去る）

定朝（二人の弟子に向ひ）これ、大殿のお出でぢや。其方たちも下へ退つて休むがよからう。

弟子二人　はあ、畏まりました。

（弟子等同じく右方へ退場。左方の渡殿に道長の姿が現れる。年齢五十四五歳、ゆつたりと肥つた、健康らしい赭顔の男、當時は入道して法衣を纏うて居る。）

定雲（定朝の前に兩手を衝いて恐る恐る云ふ）私はいかが致しませう、御遠慮申して居りませうか。

道長　いや〳〵遠慮するには及ばぬ。此處に控へて居るがよい。

（道長聲をかけながら堂上へ歩み來る。女房二人も其の後に從つて內陣の阿彌陀の前に禮拜して蹲踞まる。漸く西に傾いた夕日が、舞臺の右側から殿堂の內部へあか〳〵と射し込む。入相の鐘の音が遠方から響いて來る。）

女房の一　おゝ、夕日が紫磨金の如來の肌へ、あれあのやうに照り輝いて居りまする。

女房の二　御佛ばかりではござんせぬ。天井でも、長押でも、金銀の細工が眩しいやうに一度に光つて居りまする。……まあ何と云ふ莊嚴な景色でござりませう。

道長　定朝、其方はいかゞ致した。今日も塞いで居るやうぢやが、いまだに思案が浮ばぬかなう。

定朝　殘念ながら一向に捗りませぬ。就いては聊か存じ寄りもござりまするが、先づ其の前に、此の觀世音を御覽下さりませ。

道長　ほう、噂に高い定雲が作つたのぢやな。定雲と云ふのは其方に侍る若者の事か。

定朝　さやうでござりまする。

道長　卑しい生れの者と聞いたが、はてさて色の黒い、顏の醜い、むくつけき男ぢやなう。此のやうな男の手から、なまめかしい菩薩の姿が作られるとは、不思議な事もあるものぢや。あはゝゝゝ。

定朝　此奴の顏の醜いのは、生れつきばかりでもござりませぬ。去年の春頃世に蔓つた疱瘡と申す流行病に祟られて、さらでも醜い目鼻立ちが、このやうに淺ましう成り果てました。

女房の二　ほんにまあ、可哀さうでござんすわいな。

定朝　哀れと申せば申すものゝ、此奴の爲めには其の不仕合せが勵みの種となつたのでござりまする。己れの顏の醜うなつたを怨むあまりに、美しい菩薩の御姿を生み出す業が、身に備つたのでござりまする。

女房の一　なう定雲とやら、たとへ顏立ちは醜うても、立派な腕前の佛師になれたら、怨めしいとは思ふまい。なか／＼其方は仕合せな男ぢやなう。

定雲　私はさうは存じませぬ。美しい御佛を作るよりも、己れが御佛のやうな美男であつたら、どのやうに仕合せでござりませう。醜い男に生れたことは、何處までも私の不仕合せでござります。それを考へると、私は悲しう存じまする。

道長　あはゝゝゝ。面白いことを申す奴ぢや。したが生得淺ましい顏形を、徒らに怨んだところで效はあるまい、及ばぬ事を願はうより、其方はやつぱり妙なる菩薩の御相を刻み出すが第一の勤ぢや。悲しうても怨めしうても、御佛を作るのが其方の運命と思ふがよい。

定雲　私もさう諦めて居りまする。せめては己れの魂なりとも、此のやうに卑しい體から救ひ出して自ら刻んだ菩薩の尊像へ打ち込んで了ひたう存じまする。

女房の二　其方の姿は醜う見えても、其方の魂の籠つて居る、此の觀世音の有難さには、歡喜の涙がこぼれるぞい。——ほんにさうではござんせぬか。

女房の一　仰しやる通りでござりまする。何としたらば此

れ程までに麗しい、圓滿なお姿が刻めたものか。かうして拜めば拜むほど、怪しう胸が時めいて、淨土の快樂が身に沁み渡るやうに覺えまする。

女房の二　あのふつくらした襟筋や、なよ〱とした兩の腕の肉づきなど、さながら生ある者のやうでどうやら物凄うござります。夜更けてから內陣の暗まぎれに、あの御像がひとりでに動き出しはしないかと何だかそゞろに恐ろしうござりまする。

女房の一　あれを御覽なさりませ。あの軟かな羅衣の下に、双びヶ岡の山肌のやうに持ち上つて居る乳房を御覽なさりませ。暖い息がわれ〱の額にまでも降りかゝつて來るやうな。

道長　菩薩と云へば人間の容貌より麗はしいのは當り前ぢやが、麿はまだこのやうな美女に出遇うた事がない。麿の戀ひした女たちは、此の觀世音の半分も美しうはなかつたわい。お許たちは此の菩薩を、美しいとは思はぬかな。

女房の二　思はぬ段ではござりませぬ。あの夕づつの光のやうな御眸の潤ひなりとも、せめては持ちたうござりまする。

女房の一　三笠山の若草のやうな、蕩けた御頰の色艷なりとも、妾は欲しうござりまする。

道長　さうであらう、さうであらう。此の御佛を拜んだ者は、誰しも後世の安樂を念ずる心が起るであらう。かゝる奇特に會ひ奉るも、みな定雲の働きぢや。麿は此上ない滿足に存ずるわい。

女房の二　申すも畏き事ながら、唯何事も大殿樣の御威勢ゆゑでござりまする。めでたい御代に生れ合せたばつかりで、下に繫がる妾どもまで、結緣の喜びに出會ふことが出來まする。

女房の一　ほんに、ほんに、このあらたかな菩薩のお姿を拜んで居れば、生きながら來迎の御手にすがるも同じこと、妾たちは必ず極樂往生が遂げられるでござんせう。

女房の二　南無觀世音菩薩、南無觀世音菩薩。

（女房等再び慇懃に菩薩を禮拜する。丁度その時前の太宰大貳藤原隆家が、一人の女房に手を曳かれて渡殿を徐かに步いて來る。長途の旅に疲れたらしく、日に燒けて窶れては居るが、しかしなか〱强情らしい太い眉根の、唇の引きしまつた、軀幹の偉大な中年の男である。手を曳かれて居るのは、彼が其の頃煩つて居る眼疾が、未だ治癒しない爲めである）

女房の三　（左側面の扉のところで道長に會釋する）　申し上げまする。

道長　おう何事ぢや。

女房の三　太宰の大貳隆家さまが、はる〴〵と筑紫の國から御上洛遊ばして、唯今此れへ御出でなされました。

道長　なに、隆家が見えたとな。さて〳〵思ひがけない客人ぢや。早や〳〵此方へ連れて參れ。

女房の三　隆家さま、あの御簾が大殿樣でござりまする。此方へお通しなさりませ。

隆家　恭う存じ申す。

（隆家女房に導かれて、道長の少し下手に坐わる。女房の三退場。）

（定雲はいつしか又仕事に取り掛つて、先刻彼の弟子が塗りかけた觀世音の彩色を施して居る。定朝は佛像の蔭に蹲踞りながら、相變らず腕を拱いて、定雲の擧動を視詰めて居る。）

隆家　御堂殿には其處にお出でゝござりますか。

道長　おう、隆家は此處に居るのぢや。筑紫へ去んだは久しい前ぢやが、其方の眼はまだ直らぬと見える。

隆家　御覽の通りでござりまする。なれども去年の冬の頃から癒えかけたが、物の形の朧へ映るうれしさに、春の立つのを待ちかねて、都を慕うて參つたのでござる。

道長　近々に上洛の噂は聞いて居つたが、今日しも其方に對面せうとは夢にも思ひ設けぬところ、數へて見れば別れてからもう幾年になるかなう。

隆家　筑紫へ下向いたしたのは今から既に七年前長和三年のことでござりまする。さるにても、多くの人々の變り果てたる都の中に、獨り變らぬ御堂殿の御運の強さ。返す返すも祝着至極に存じまする。

道長　したが隆家、見受けるところ其方も昔に變らぬ元氣ぢや。去年の二月筑紫の海へ押し寄せた、刀伊の賊徒を追ひ退けたは偏に其方の功績ぢやが、其れと云ふのも未だに血氣の衰へぬ證據と、麿は蔭ながら頼もしう存じて居つた。其方が太宰府に居たればこそ、我が日本は首尾よう夷の侮りを防いで、君の稜威を海の外まで輝かすことが出來たのぢや。其方はまことに國家を泰山の安きに置いた、天下無双の功臣となり居つたなう。

女房の一　隆家さま、どうぞ其の折の勇ましい船軍の有樣を、妾どもにもお話しなされて下さりませ。

隆家　いや〳〵無風流な戰ひの話など、今更お許たちに聞かせたうもござらぬわい。それよりは此の頃の都の春の物語こそ、先づ某が聞きたうござる。七年が間筑紫潟の潮風に打たれて、某はとんと田舍者になり申した。みやびの道をも忘れ果てゝ、今は早や、歌よむ術だに覺束なう存じ申す。

女房の二　噂に聞くさへ恐ろしい夷の船の押し寄せる、筑紫と云ふのはどのやうなところでござります。都も都と

同じやうに、三月の空にはやつぱり花が開くでござんせう。

隆家　海邊と云へば須磨明石より西をば知らぬ都の人に、邊土の春のうら悲しさはなか／＼思ひやられぬこと、さすが剛情の某も、つく／＼都が戀しう覺えて、物怪なんどの憑いたやうに急いで上洛いたしたが、もう暖い南の國では、某の旅立つ頃に花の盛りは過ぎ申した。

女房の一　長い旅路にお顔の色も日に燒けて、お窶れなされた御樣子に見えまする。さうして途中の陸路にも海路にも、さしたる難儀はござんせなんだか。貫之の日記に見えるやうな、海賊ばらは居りませなんだか。

隆家　などてさやうな障りがござらう。此の度び都に御堂建立の趣が、津々浦々の果までも聞え渡つて、地子官物はおそなはらうとも御堂の夫役を怠るなかれと、國々の司等が下知に從ひ、毎日のやうに材木土石を京へ運ぶ船や車が、遠きは四國九州の彼方より、海にも陸にも引きも切らず。海賊などの隙をうかゞふ折とてもござらぬわい。

道長　いかさまさうでもあらうも知れぬ。都の加茂川も、材木を組んでは流す筏の爲めに、水の流が塞かるゝほどぢや。

隆家　某なども道すがら世の取り沙汰を承り、やがて程なう行はるゝ御堂の供養に間に合ふやう、千載一遇の機を外さじと只管急うて参つたれど、いよ／＼都へ着いて見れば聞きしに勝る普請のありさま、まことに稀代の盛事でござる。

道長　ほう、其方は眞實そのやうに思うてくれるか。

隆家　はて異なこと仰せらるゝ。たとへ御堂殿のおん前でも、媚び諂ひは嫌ひな某、決して僞り申しませぬ。

道長　其方の口から讚へられゝば、千萬人に褒められるより嬉はなか／＼心強い。此の道長の立身を呪詛する人の多い世なれば、御堂建立の企なども定めて驕慢の沙汰のやうに、蔭では云ひ觸らす事であらうと實はひそかに思うて居るのぢや。

女房の二　大殿樣とした事が、誰方に御遠慮遊ばして、そのやうなお氣遣ひをなされまする。世間の人は此の度びの儀を誹議するどころか、古今に例ない聖代のしるしと、みな喜んで居りまする。一切衆生に佛法の惠みの雨を施し給ふ、大殿樣の御威德を異口同音に讚へ奉つて居りまする。

隆家　僭上驕慢も事にこそよれ、御殿を建てゝ御佛を供養し奉るに、何の遠慮が要り申さう。御堂殿にも此の頃はお年を召されたのでござらうが、心弱い事を仰せらるゝわい。

道長　あはゝゝゝゝ。まだ長壽はする積りぢやが寄る年波

は爭はれぬもの、去年の三月に煩うてから、麿もめつきり弱うなつたわ――なう隆家、麿は其の折の煩ひから、急に一念が發起して、菩提のために無量壽院を建立する氣になつたのぢや。盲目の其方には見えぬであらうが、麿は其れから入道して、名も行觀と改めて居るのぢや。

隆家　實によい所へお心がおつきなされた。三歸五戒を受くる人すら、三十六部の善神を始め、恒河沙程衆の守護を授かると承る。まいて天下の淨財を集めいみじき堂宇を建立なされば、功德も程も限り知られず。彌陀の利益に與るものは、御堂殿の御一族ばかりではござるまい。此れこそまことに庶民を惠む政の道に適ふと申すもの、寇の船を退けた業などの功績よりも、遙かに功ある御企でござるわい。

女房の二　ほんにさやうでござりまする。天王寺の聖德太子の御日記には、「王城より東に佛の道を弘めんを我と知れ」と、書き記されてあるとやら。さうして見れば大殿様は、厩戸皇子の再來で居らせられうも計られませぬ。

道長　さて〳〵お許はよい事を敎へてくれた。まことに麿は聖德太子の生れ變りであらうも知れぬ。現世の榮華、後世の安樂、願うて協はぬものもなく、麿の身の上は曇りなき滿月のやうぢや。もはや此の上世の中に望ましい事は何もないわい。

（夕陽の光が衰へて、舞臺は次第々々に薄暗くなる。時々急ぐ夕告鳥の音が遙かに聞えて、再び入相の鐘が鳴る。左の奥、渡殿の後ろの庭から、勞役を濟ませた人夫等が、或は鍬鋤を携へ、或は空車を曳いて出で來り、三々伍々堂の右方へ歩み去る。）

女房の一　春の一と日の長閑さに、時の移るも忘れ果てゝ居りましたが、いつの間にやら日が暮れて參つたさうな。

隆家　見えざる眼にも御佛を拜みたうて參つたれど、暗うなつては不自由な某、また重ねて拜見に參ると致さう。御堂殿、さらばお暇申しまする。

道長　おゝ、誰か隆家を案内して取らせい。

女房兩人　畏まりました。

（女房等左右より隆家を擁して立つ。道長も後から立ち上つて行かうとする。突然、木像の蔭から定朝が現れて、道長の傍に畏まる。）

定朝　大殿、不躾ながらお願ひがござります。暫くお待ち下されい。

道長　誰ぢや。其方は定朝ではないか。

定朝　さやうでござります。

道長　願と云ふのは何事ぢや

（道長が立ち止まつて居る間に隆家と女房達は渡殿の彼方へ消える。）

舞臺の暗さがだん／＼に濃くなる。忽ち內陣の闇に一箇の燈影があか／＼と搖ぎ出す。見ると定雲が灯を點じて、菩薩の面を照らしながら、猶も一心不亂に製作を續けて居るのである。）

定朝　外の事でもござりませぬ。何卒某の役を免じて、如來の像を刻むことを、あの定雲にお任せ下されい。お願ひでござります。

道長　ふうむ……なぜ其のやうなことを申す？

定朝　あの定雲の菩薩に勝る本尊を、某の手では彫り出すことが出來ませぬ。大殿はじめ世の人々の望みに背いた某は、寧ろ潔う身を退いて、あの若者に路を讓るが當然かと存じまする。

道長　などてさやうな道理があらう。いか程定雲が上手なればとて、彼には彼に適ほしい勤めがある筈、菩薩をこそは巧に彫め、まだ生若い腕前で、師匠の其方に委ねられたる大役を、あの男が引受けるのは便ない事ぢや。

定朝　では御承引下されませぬか。

道長　氣の毒ながら聞き入れられぬわ。……麿がかやうに申すのも、畢竟其方を信ずるからぢや。其方はあまりに自らを貶め過ぎて居るからぢや。氣を落さずに工夫を重ねて、一日も早う麿に安心させるやう、彌陀の尊容を作つてくれい。麿の方から賴んで置くぞ。

定朝　これほどお願ひ申しても、お聞き入れがござりませぬか。

道長　云ふ迄もない。其方の願は許し申さぬ。

（道長冷やかに定朝を見やりて、渡殿を歩み去る。）

定朝　（左の角の簀子の板敷にどつかりと胡坐を搔き、溜息を洩らしながら惱ましげに頭を抱へて勾欄に打ち伏す）私の頭は源の盡きた泉のやうに涸れてしまうた。私はどうしたらいゝのであらう。……あゝ、是非もない事ぢや。

（內陣の方に鋭い槌の音が鏗然と響いて、燈の影が一段と強くはためく。定雲が槌を捨てゝ、再び勢至菩薩を彫り始めたのである。幕が靜かに下りる。）

第二幕

第一幕より二三日過ぎたる深夜の光景。今度は平舞臺全體が同じ阿彌陀堂の內部になつて居る。從つて第一幕に見えて居た內陣の佛像柱、裝飾具等が大きく詳かに觀取される。本尊の首はまだ依然として出來て居ないが、その外に廣目天持國天等の四天王の像が二つ三つ出來かゝつて居る。左方の庇の間に念珠所があつて、三尺の障子を後ろへ立て掛け、蒔繪の花机、銀の多寶塔、瑠璃の花瓶などを置き、疊を半疊敷いてその上に

いゝわらうだを重ね、傍に脇息が据ゑてある。庇の間の向うは例の渡殿へ通ずる出入口の扉である。扉は内側から鎖されて、板戸の面に描かれた佛畫が、朦朧と夢のやうな背景を作つて居る。

幕が開くと、暗澹たる夜半の堂内に二箇の燈明が微かに點ぜられて、幽靈のやうな三つの人影が闇に浮かんで居る。人影の一つは、二十歳前後の眉目の涼しい、あでやかな婦人の姿らしく、念珠所の机の傍に大海の摺裳をひろげつゝ、眠るが如く蹲踞まつて居る。前の太政大臣爲光の娘で、四の御方と呼ばれた女である。女のうしろに道長が柱に凭れて、薄氣味惡く微笑みながらイんで居る。今一人の男は佛師の定雲である。彼は四の御方と對ひ向うた待居の板敷に勢至菩薩の像を据ゑ、婦人の容貌と見較べながら、鑿を打つて彫像の顔へ目鼻を描いて居る。二箇の燈明のうち、一箇は内陣須彌壇の前に、一箇は四の御方と定雲との間に置かれてある。三人共暫く無言。死んだやうな、寧ろ鬼氣を帶びた静かさが舞臺を支配する。やゝあつて、道長が嗄れた聲で、囁くが如くに語り出す。他の二人も幕の終るまで低い調子で、始終四隣を憚るやうに話をする。）

道長　あれを見い、燈のはためく影にあか／＼と照らし出された、あの勢至菩薩の顔を見い、其方の麗はしい目鼻立ちが、鏡へ物の映るやうに、彼處へまざ／＼と浮かんで居るわ。

四の御方　あまり其のやうに仰つしやつて下さりますな。妾はどうやら恐ろしうござります。

道長　何で恐ろしいことがあらうぞ。うれしう思ふのが當りまへぢや。

四の御方　さやうでござります。うれしいやうなさうして恐ろしいやうな心地がいたします。妾の顔がたとへいかほど美しいとて、大殿の妾を愛しむお情がたとへいかほど深ければとて、妾に生寫しの觀音勢至をお作りなさらうとは、今も昔も例のないこと、あまり勿體なうて末恐ろしうござります。

道長　いや／＼、満更例のない事でもないのぢや。遠い古の話ぢやが、大和國の法華寺にある十一面觀世音は、忝くも天平の昔聖武帝の御后光明皇后の御顔を寫し奉つたものぢやと聞いて居る。さうして見れば、其方の姿を寫し取るのに何の不思議もないではないか。

四の御方　いかさま其のやうな傳説は、妾も聽いて居りまする。したが一天萬乘の帝の御后なら、人間とは云へ菩薩も同じ貴いお方、卑しい妾の身の上とは比べ物になりませぬ。

道長　其方が卑しい身の上とな？　誰がそのやうなことを

申さう。其方の父は太政大臣爲光ぢや。麿が叔父御の法住寺殿ぢや。其方の姉は花山院の御時に弘徽殿の女御と云はれたやむごとないお人ぢや。運命がよかつたなら、其方とても女御になれた身の上であらうに。

四の御方　成る程さうでござりませう。妾の生れは決して卑しうはござりませぬ。さりながら、生ればかりが卑しうないとて、貴い人とは申されませぬ。古の光明皇后は、申すも恐れ多けれど、妾の先祖の不比等の大臣の御女ぢやと聞きましたが、ほんに御佛のやうな、美しい、慈悲深い御心を持つたお方と承つて居りまする。妾の顏は美しうても、妾の生れは貴くとも、妾には氣高い德がござりませぬ。

道長　其方に氣高い德がないとな？　誰がそのやうな事を申さう。麿が其方を慕うて居るのは、あながち其方の容貌の、世に優れたのが氣に入つたばかりでもない。麿は其方の淨らかな心が、水晶のやうに透き徹つた胸の中が、氣に入つたのぢや。

四の御方　でも大殿は妾のことを、心の冷たい女子ぢやと、折々お怨み遊ばれるではござりませぬか。

道長　うむ、それはさうぢや。さても冷たい女子ぢやと、怨み聞ゆる折もあるのぢや。さりながら、谷間の淸水も水晶の玉も手に觸れゝば冷たいやうに、凡べて心の淨らかな女子は熱い情を持たぬが定ぢや。そなたが麿にをりをり情なう見ゆるのは、其方の胸の淸しい證據ぢや。

四の御方　それでは何故大殿は、妾のやうな淨い女子をお慕ひなさるのでござります。淸しい胸の女子より、熱い情の女子の方が、戀をするには適しうござりませうに。

道長　おしなべてこの世の習慣はいづれにもせよ、麿はそなたが氣に入つたのぢや。心の中の淸々しさをそのまゝ形に現はして居る器量のめでたさは云はずもあれ、紫式部や淸少納言に劣らぬほどの賢しい性質まで備はつて居る、そなたのやうな女子は珍しい……才があつて、みめ美しい女子の胸には、煩惱の炎も強いものぢやに、そなたの心が淨らかなのはほんに不思議ぢや。

四の御方　いゝえ不思議ではござんせぬ。妾は大殿の思し召すやうな淨らかな女子でござりませぬ。妾の胸が淸しう見えるのは、いまだに戀を知らないためでござります。たとへ一遍でも戀の甘さを教はつたなら、妾とてもいつまで冷たい女子ではござんせぬ。

道長　教はらずとも、戀は自然に覺ゆるものを、そなたの心が淸ければこそ、戀の情が起らないのぢや。

四の御方　いえ〳〵さうではござんせぬ。妾の靜かな胸の中にも、世間の女子と同じやうに、情の炎の燃え上る、薪は潛んで居りまする。たゞ其の薪へ火をつける男子が

ないのでござります。妾を煩悩の闇路へ誘ふ、立派な戀人が見あたらないのでござります。

道長　さりとはそなたも不鮮な女子ぢや。今の言葉がほんたうなら、年は取つても麿こそは、其方に適はしい立派な男子ぢや。これほどいとしう思うて居る麿の心が解らぬかなう。

四の御方　それは解つて居りまする。さればこそ妾の體は大臣へお任せ申したのでござります。しかし御推量下さりませ、妾はまだうら若い女子でござりまする。

道長　ふむ、たとへ體は許しても、心は許さぬと申すのぢやな。

四の御方　まあ其のやうなものでござりませう。大殿ばかりか、その外に言ひ寄る人は多勢あつても、妾の心にかなふ男子は、今迄に一人もないのでござります。妾の心に描いて居る、相手の人はいまだに見えないのでござります。妾の胸に潜んで居る、情の泉は滴ることなく涸れ果てゝ、日蔭に咲いた花のやうに、人に知られず長へに萎んでしまふのでござりませう。妾はもうあきらめて居りまする。戀の樂しみはあきらめて、たゞ大殿につめたい屍骸をお任せ申して居りまする。

道長　よいわ、よいわ。攝政關白の威光でも、人の心を思ふがまゝに動かすことは出來ない筈ぢや。清うて冷たいそなたの心は、たゞ其のまゝにして置くがよい。麿はそなたの屍骸を得れば滿足ぢや。

四の御方　ほんに妾は不運な女子でござります。どうぞ來世には榮ある月日がめぐり來るやう、ひたすら御佛を信心するのが、今の妾にたつた一つの頼みの綱でござりまする。

道長　成る程それはよい心掛けぢや。戀の甘さは一時の夢幻に過ぎないが、信心の功德は永劫の快樂の因となるであらう。そなたの殊勝な行ひは、麿に取つての此の上もない善智識ぢや。そなたの心を知れば知るほど、猶更そなたがいとしいわい。

四の御方　まことに妾を善智識ぢやと思し召すなら、いとしがるより敬うて下さりませ。妾の屍骸をも妾の心と同じやうに、大殿の御手から放れさせて下さりませ。大殿の御意に從うて居りますのは、もと〳〵妾の本意ではござりませぬ。頼り少い兄弟たちに立身出世がさせたくて、いはゞ妾は犠牲となつたのでござりまする。

道長　はて、又してもそのやうな事を云うてくれるな。佛の道に入りながら、そなたの色香に惑はされて居るのは、愚かなことと思うて居るが、此れほど麿を迷はせたのも、世に類ひないそなたの器量のなせる罪ぢや。そなたを手から放しては、御佛に捨てられるより、麿はなか〳〵心

さびしい。麿の妄念を若し淺ましいと思ふなら、そなたの力で悟りの道へ導いてくれい。戀に溺れた麿の心を、そなたの信仰で救うてくれい。そなたはやつぱり麿の善智識ぢや。生き佛ぢや。そなたを敬うて居ればこそ、そなたの姿を菩薩の形に取らせて居るのぢや。

四の御方　さりとは執念き煩惱に、捕はれておいでなさりまする。

道長　煩惱と笑はゞ笑へ、此の菩薩こそ麿が歸依する隨一の佛ぢや。やがて堂宇が出來上れば、そなたにそつくりの顏を持つた、そなたの化身の觀音勢至が都合九つづつ安置されるのぢや。そなたにはそれが嬉しうないのか。これ、いつもそのやうに拗ねて見せずと、うれしいならうれしいと云うてくれい。うれしさうに笑うてくれい。

四の御方　でもあの菩薩のお姿が、あまり妾によう似た爲めに、世間の人が心付きはしないかと、それが何より氣づかひでござりまする。

道長　何で氣づかひなことがあらう。菩薩がそなたに似て居ればとて、もと〳〵そなたの顏と心に曇りがなければ、御佛の威嚴を損ずる道理はないのぢや。菩薩がそなたの化身ぢやと知れたとて、世間の人はそなたの冥加を羨みこそすれ、誹りはすまい。生れながらに菩薩の相の備はつた、そなたの器量のめでたさは此の御寺のあらん限り、觀音勢至の形となつて後の世までも傳はるのぢや。

四の御方　さうして、大殿と妾との密事が、幾百年の末までも人の言の葉に上るのでござりませう。妾はそれが口惜しうござりまする。

道長　夜な夜なかうして、人目を忍んで會うて居るのに、そのやうな事を誰が知らうぞ。そなたと麿との間柄を知つて居るのは、此處に居る定雲一人ぢや。……麿はそなたの屍骸ばかりを生捕つたが、此の定雲は屍骸ばかりかそなたの心の姿までも、見事に寫して刻み付けたわ。あの清淨な瞳の光を拜んだ者は、濁りに染まぬ蓮のやうな其方の胸の潔白を、ゆめ〳〵疑ふ筈はあるまい。誰しも其方を無垢な乙女と思ふであらう。

四の御方　それで大殿も妾も、世間の人を欺くことになりまする。

道長　欺いたとてよいではないか。上はやむごとない殿上人から、下は卑しい奴婢の輩にいたるまで、いとしい麿の戀人の姿の前に跪いて、さても菩薩の有り難さよと合掌するのを眺めやつたら、此れに上越す喜びはなささうぢや。

四の御方　そのやうな狂はしい事を仰つしやりますな。世を欺いた咎めは兎も角、御佛の罰が恐ろしうござります。

道長　あはゝゝ、そなたは臆病な女子ぢやなう。

四の御方　ほんに臆病でございます。こんな夜更けに御堂の闇にうづくまつて、此處に侍べる定雲とやらの、鬼のやうな恐らしい顏を見るさへ、そゞろに心が怯えまする。

道長　あはゝゝゝ。いかほど面つきは物凄うても此の若者はそなたのためには大恩人ぢや。師の定朝も及ばぬ程の、立派な業を持ちながら、醜い男に生れついた此奴の不運を憐んでやるがよい。

四の御方　妾の姿をとてもお寫しなさるなら、日本一の佛師と云はるゝあの定朝に、なにゆゑお頼み遊ばさないのでございます。此のむくつけき若者の、獸のやうな白い眼で覗まれるのが、妾は氣味惡うございます。

道長　氣味が惡うても辛抱するがよい。麿は此奴の獸のやうな面構へが氣に入つたのぢや。此奴の眼には佛も人間も同じ姿に映りさうぢや。そなたの顏を正直に佛の姿に刻ませるには、究竟の若者ぢや。

（二人は會話をやめて、定雲の方を凝視する。定雲は相變らず沈默して、冷然たる態度で製作を續けて居たが、ふと四の御方と顏を見合せて、互に長い間睨み合つて居る。）

四の御方　……まあ此の男はほんに不思議でございます。先程からあのやうに、妾の顏を視凝めたまゝぢつと何やら考へて居るさうな。

道長　大方そなたに物を云ひたいのであらう。

四の御方　あまり此の男が默つて居るので、妾は話がして見たうございます。二た言三言、やさしい言葉をかけてやつてもよろしうございますか。

道長　いや／＼其れは許されぬ。そなたはそなたの身分を考へて見るがよい。かりそめにも貴い上臈の身の上で、あのやうな賤の男子と直き直きに言葉を交はすは無益の沙汰ぢや。

四の御方　浮世をあきらめた妾の身は、有髪の尼も同じこと。上下の差別は用のないことでございます。

道長　したがそなたは、あの男が恐ろしいと云うたではないか。

四の御方　それでもどうやら、急に話がして見たうなりました。成らう事なら、妾は定雲とたつた二人で、暫く此處に語らうて居たうございます。

道長　さても物好きな事を申す。春とは云へど夜更けた故か、麿は大きう寒うなつた。そなたも定雲も定めし疲れたことであらう。あすの夜更けに又會ふとして、今宵はこれで休まうではないか。

四の御方　妾はどうしても、二人で話がして見たうございます。どうぞ大殿は一と足お先へ、お退けなされて下さりませ。

道長　そのやうな事を申さずに、麿と一緒に參るがよい。

四の御方　いゝえ、お願ひでござります。大殿は今迄に、妾の願ひを聽いて下さらぬことはござりませぬ。どうぞ今宵もお許しなすつて下さりませ。妾を殘してお出でなされて下さりませ。

道長　此の若者の傍へ、そなたを殘して置いて行くのは、なぜか麿には氣がかりぢや。

四の御方　何もお案じ遊ばす事はござりませぬ。妾の我儘かは存じませぬが、ほんに容易いお願ひでござりませうに。

道長　何で容易い事があらう。人目を忍んで逢うて居れば、片時そなたと別れるさへも辛いのぢや。

四の御方　人目を忍ぶ逢瀬とは云へ、毎夜のやうにお顏を拜んで居りまする。まだ夜明けには間のある時刻、程なう後より參りますゆゑ、どうぞ彼方でお待ちなされて下さりませ。これほどお願ひ申すのに、聞し召しては下さりませぬか。

道長　聞き入れぬと云ふではないが、此の定雲の面魂が、麿にはどうも案じられる。此の若者は悧巧者やら愚者やら、胸の奥底にどのやうな事を考へて居るやら、麿にはさつぱり解らないのぢや。そなたを此奴に預けるのは、獸の鼻面へ餌食を捨てると同じやうな心地がするのぢや。

四の御方　それでも大殿は、妾を臆病な女子ぢやと、お笑ひなされたではござりませぬか。唯今のお言葉では、妾よりも大殿の方が、あの定雲を恐れておいでなさりまする。

道長　麿は少しも恐しうない。そなたの爲めに恐ろしいと思うて居るのぢや。

四の御方　妾の爲めならば、どうぞ妾の好きなやうに、お任せなすつて下さりませ。かばかりの事をとやかうと仰しやるのは、日頃の優しい大殿に似つかはしうもござりませぬ。

道長　よいわ、よいわ、さほどに其方が賴むとあれば、不本意ながら聞き屆けて進ぜよう。麿はいつでもそなたには優しうして居るつもりなのぢや。此れまで一度もそなたの願ひを許さぬ例はなかつた筈ぢや。

四の御方　ほんにさやうでござりまする。妾は常々忝ないと、しみ〴〵思うて居りまする。

道長　天下の事はわが掌を覆すが如く、思ひのまゝに振舞ふ麿も、そなたの一顰一笑には思ひのまゝに動かされるわい。

四の御方　ほんにさやうでござりまする。妾はつく〴〵勿體ないと思うて居りまする。

道長　はてどうなりと、そなたのよいやうに思ふがよい。

そんなら麿は、あちらで其方を待つて居るぞ。

（道長、左の扉を開けて渡殿の闇に後ろ姿を消す。）

四の御方　これ定雲とやら、其方に言葉を交はすのは、妾は今宵が初めてぢや。其方は妾に云ひたい事があるのであらう。其方の重さうな唇で、妾に何とか云うて賜れ。

定雲　（その時まで機械のやうに働いて居たが、聲をかけられると、箒を措いて板敷に恭しく畏まる）有り難うござりまする。……

四の御方　妾に言葉をかけられるのを、其方は有り難いと思うて居やるか。

定雲　有り難い、勿體ないと存じまする。――私は生得唇の重い男でもござりませぬ。世間の人が、私を唇の重い男にさせてしまうたのでござります。

四の御方　さうして、其れは何故ぢや。

定雲　私の顔の醜いためでござりまする。女は勿論男さへ、淺ましい私の姿を卑しみ嫌うて、近づかうとも致しませぬ。私は人と笑ひながら話をしたことがござりませぬ。

四の御方　其方の姿は恐ろしう見えても、其方の言葉には、どうやら優しい情がある。ほんに其方は哀れな男ぢや。

定雲　大殿樣のお指圖で、私はあなた樣と毎夜のやうに、此の御堂でお目に懸つて居りまする。此の觀世音と勢至菩薩と、二つのお姿を刻み出すまで、今宵でもはや十日程、あなた樣のお顔を拜んで居りまする。

四の御方　いかさま其方の云ふ通り、今宵はちやうど十日目ぢや。

定雲　十日の間私は、かうしてあなた樣と向ひ合うて、咳一ついたさずに、默つて仕事を續けて居りました。やむごとないあなた樣からお言葉賜はらうとは夢にも存ぜず、下界の人が月の光を拜むやうに、禽獸が人間を仰ぐやうに、あなた樣のお傍近くへ侍りながら、心の底をお知らせ申す便りを知らずに居りました。あなた樣と私とは、身分の高下があまり恐ろしう隔たつて居りました。私の口には世間の掟と云ふ、嚴重な銜が嵌められて居りました。

四の御方　その銜を、二人の爲めに妾が取り除けて進ぜるのぢや。世間の掟がそちの爲めに銜なら、妾の爲めにもやつぱり銜ぢや。――人々の寢靜まつた此の夜更けに、剩へ厚い扉で四方を鎖された御堂の中に二人がどのやうな話をしたとて、誰にも洩れよう筈はない。貴賤の隔ては他人の見て居る前での事、妾が人なら其方も人ぢや。其方が獸なら妾も獸ぢや。心置きなう語るがよいぞえ。

定雲　下賤の女子供ですら、言葉を交はすのを汚はしいと思うて居る私へ、雲の上人のあなた樣から其のやうに仰

せ下さるのは、何だか夢のやうでござります。木で彫つた御佛の像が口をきくより、私には餘計不思議でござります。古への光明皇后は、癩病患者の乞に任せて、膿をすゝつておやりなされたとやら、私にはあなた様のお慈悲の深さが、それにも增して尊う覺えまする。

四の御方　醜い妾に生れついた、其方の身の上も不憫ながら、妾のやうにあまり美しう生れても、不運な月日を送らねばならぬぞえ。其方にはそれが解つて居やるか。

定雲　憚りながら、ようく解つて居りまする。あなた様の御不運は、お察し申して居りまする。

四の御方　解つて居るとは殊勝なことぢや。妾は其方を氣味の惡い若者ぢやと云うたが、あれはみんな僞りぢや。まことは其方を不憫な者と思うて居るのぢや。其方を不憫と思ふ代りに、其方は妾を不憫ぢやと思うてくれやれ。

定雲　あなた様のお身の上を、數にも足らぬ私がいかほどお嘆き申しても、及ばぬことでござります。私はたゞ己れの命のあらん限り、精根の續かん限り、あなた様のお姿を、菩薩の形に作り出さうと努めるばかりでござります。私の拵へた御佛が、微妙の相を現はして、普く世上の歸依渇仰を受けたなら、せめてはそれが私の心づくしでござります。

四の御方　妾によう似た菩薩の像が、世間の人から歸依されるのを、其方はそのやうに望んで居やるか。佛を欺き世を欺いて、來世の報いが恐ろしいとは思はぬかや。

定雲　私のやうな凡夫には、來世の報いは恐ろしうても、現世の望みと樂しみを、抛つことは出來ませぬ。醜く生れたばつかりに、ことし十九の春になるまで、戀を知らずに過して來た私は、あなた樣のお顏を刻むのが、たつた一つの冥加でござります。今度の仕事にかゝつてから、私は始めて生きがひのある心地がいたして居りまする。

四の御方　それでも妾は、菩薩の形に直されるやうな、淨い心の女子ではないのぢや。——其方は妾を、どのやうな女子ぢやと思うて居やる。

定雲　菩薩よりも美しい、如來よりもたふとげな、千萬人に禮拜されても、恥かしからぬおん方と存じて居ります。いみじき聖大德ならばいざ知らず、現世に生きとし生ける者は、まことの佛の御顏を拜まう筈はござりませぬ。たゞあなた様のやうな、すぐれて美しい御相を、菩薩の假形し給ふものと、崇め信ずるのみでござります。若し世の中に美しい人が居らずば、佛を信ずるよすがとてはござりませぬ。

四の御方　御佛の姿は美しいものと、其方はどうして知つて居るのぢや。

定雲　人間の苦患を救ふものは、美しい姿より外にござり

ませぬ。如來に紫磨金の膚がなくば、菩薩に頻婆果の脣がなくば、慈悲の大海がこのやうに廣く、弘誓の光がどのやうに清くとも、などて佛を信ずる心が起りませう。かくては畢竟、穢土も淨土も同じことでござりまする。それ故、私は眼に見えぬ御佛よりも、眼に見ゆるあなた樣のお姿に、穢土の苦しみを免れるのでござります。佛があなた樣に似通うて居らずば、佛を捨てゝあなた樣を信じまする。

四の御方　其方も大臣と同じやうに、佛の御手に救はるゝより、妾の手から救はれたいと、願うて居やるのぢやなう

定雲　大臣樣と私はふたりではござりませぬ。來世の幻に憧れるより、現世の資質を積みたいのは、誰しも同じ人情でござりまする。あなた樣と一つ時代に生れ來て、幻ならぬ菩薩の色身を御目に見る、今の世の人は皆仕合せでござりまする。

四の御方　大臣と云ひ、其方と云ひ、大方の世の人と云ひ、頼るところのある者は仕合せぢや。菩薩の像に擬へた、妾の姿をまことの佛と伏し拜んで、穢土の苦患を免れる者は皆仕合せぢや。したが其のやうに世間の人から崇められる、妾自らは何としたものであらう。妾には妾を導く佛がない。妾の頼る美しいお姿は、何處にも見えぬのぢや。

定雲　ほんにさうでござりまする。美しいあなた樣に拜まれるやうな、貴い相が此の世にあらうとは思はれませぬ。

四の御方　其れは妾もよう知つて居る。妾に勝つた美男美女が、生きて居ようとは思ひも寄らぬ。さればこそ妾は御佛に縋りたいのぢや。たとへ此の世にうるはしい人間の相がなくとも、御佛の姿は妾よりも勝つて居る筈。そのお姿を考へ出すのが佛師の役目と云ふものぢや。此の世に見られぬ微妙の相を、此の世の人に見せてくれるのが佛師の勤めぢや。

定雲　はてさて、其れはあまりに重い役目でござりまする。佛師の鑿も繪師の繪筆も、現世にないうつくしさを、作り出す事は出來ませぬ。佛も人間の形を備へて居る上は、人間を離れた微妙の相を、考へることは出來ぬ道理でござります。……あれを御覽なさいませ、彼處に半ば出來かゝつた、阿彌陀佛を御覽なさいませ。私の師匠の定朝は、當代一と持て囃される名工ながら、いまだに如來のおん顏を考へることが出來ないのでござります。毎日毎夜、血を吐くやうに思ひ惱んで、いかほど工夫を凝らしても、私の菩薩に勝る本尊を、刻み出す事が出來ないのでござります。されども其れは、強ちに私の師匠の不覺ではござりませぬ。又私の腕前の優れた故でもござりま

せぬ。私は大殿樣の仰せを受けて、たゞ正直にあなた樣をお寫し申したばかりでござります。私の師匠の惱み苦むのは、あなた樣のお姿に勝る、人間の相が見付からぬ故でござります。

四の御方　いみじき大德の敎を聽いても、御佛の姿を眼前に拜まねば、來迎の有り難さを會得することは出來まいものを、それでは妾は何としたらよいのぢや。信ずることも迷ふことも、聖の喜びも凡夫の樂しみも、等しく妾は止められたのぢや。妾の便りとなる者は、妾の爲めの御佛を、どうぞ妾に拜ませてくりやれ。

定雲　あなた樣の禮拜遊ばす御佛は、やつぱりあなた樣のお姿より外にござりませぬ。

四の御方　そのやうなをこなことが、何として出來ようぞい。妾の姿を妾が拜んでも、信心の便りにはならぬぞえ。

定雲　いえ〳〵、ならぬことはござりませぬ。弘誓の船に救はるゝ衆生の數は多くとも、佛はもとより一つ佛でござりまする。此の世の中で最も美しい人間の形に、佛が假形し給ふものなら、あなた樣も此の菩薩を御禮拜なさるのが、當然でござりまする。此れより外にあなた樣のお賴みなさるお姿はござりますまい。

四の御方　此の菩薩を信ぜよと云ふのは、妾の淺ましい肉身を信ぜよと云ふのと同じ道理ぢや。此の汚はしい肉身を、どうして妾に信ぜられうぞ。

定雲　汚はしいとは何故でござります。

四の御方　たとへ形は美しうても、妾の心は汚れて居ると、先にも度び度び云うたではないか。

定雲　では此の菩薩は、たゞあなた樣の形を寫したばかりでござります。此の菩薩には、形より外に心はござりませぬ。此の菩薩の、形を御禮拜なさりませ。あなた樣のお心を除いた、肉身の美しさをお便りになさりませ。

四の御方　妾の肉の美しさを、何で便りとすることが出來よう。たとへば彌生の空に咲く、櫻の花の盛りのやうにやがて散り失せる肉身の色香を、いつまでも信ずることが出來よう。

定雲　あなた樣の肉身の色香は枯れ萎んでも、私の刻んだ菩薩の色香は褪せる憂がござりませぬ。虛空を彩る虹のやうな、果敢ない現身の美しさに、鑿の力が永劫の命を與へるのが、佛師の役目でござりまする。あなた樣と此の菩薩とは、同じ形を持ちながら、同じ運命に縛られては居りませぬ。有爲轉變は浮世のこと、たとへ人間の肉身でも、一旦菩薩に作られたからは、生老病死の因果を斷ち、眞如の月の光のやうに、曇る時節はござりませぬ。

四の御方　妾の屍骸は菩薩になつても、妾の心の救はれる折はないのぢや。美しい屍骸を此の世に留めて、妾の魂

は焦熱地獄へ墮ちるのぢや。

定雲　さればこそ、あなた様は此の菩薩を御信仰遊ばすが宜しうござります。私が此の御像へ自分の魂を打ち込んだやうに、あなた様も御自分の魂を、此の御佛の御姿の中へ、封じ込めてお了ひなさりませ。現在の肉身は魂の宿る假の宿、此の菩薩こそ眞實のあなた様と思し召して、御歸依遊ばしたがよろしうござります。

四の御方　そのやうな理を、いかほど其方が繰り返しても、妾の迷ひは晴れはせぬ。なう定雲、其方は妾の恩人ぢやと、先程大殿が仰せられたのを、よもや忘れはしないであらう。

定雲　いかにも覺えて居りまする。私はあなた様の恩人でござりませう。さうして又、あなた様も私の大恩人でござります。

四の御方　ほんとうに其方が妾の恩人なら、妾は其方に頼みたい事がある。妾を菩薩に作つてくれた、其方の恵みは大きいけれど、妾はそれよりももつと大きな恵みを授けて貰ひたいのぢや。

定雲　此れよりも大きな恵みを、私の力でお授け申す譯には參りませぬ。此れが私の及ぶ限りの仕事でござります。此れがあなた様の、此の世で受ける仕合せの絶頂でござります。

四の御方　生きながら菩薩の像に刻まれるのが、仕合せの絶頂とは、妾にはどうしても信じられぬ。其方は妾に、もつと大きな恵みを授ける道があるぞえ。

定雲　はて、もつと大きな恵みとは、どのやうなことでござりませう。

四の御方　其方の師匠の定朝が工夫しかねて惱んで居る、御本尊の彌陀のお顔を、其方の腕前で仕出して賜れ。妾の姿に勝つて居る、尊く淨い如來の像を刻んで賜れ。其れが妾をほんとうに救うてくれる大きな恵みと云ふものぢや。其の如來こそ、妾の拜む眞實の御佛ぢや。

定雲　いえ〳〵其れはかなはぬこと、此の定雲は云はずもがな、いかやうな名人上手が現はれても、お望み通り彌陀の尊容を作り出すことは出來ませぬ。必ず〳〵其のやうな儀を仰せられぬがよろしうござります　此の世で一番尊いものは、御自分の御姿ぢやと、お信じ遊ばさねばなりませぬ。

四の御方　自分を佛と信ぜよとは、何と云ふ淋しい謂へであらう。なべての人は、己れより貴い者を見出さないでは、生きて行くことはかなはぬぞえ。

定雲　なべての人とあなた様とは比べ物になりませぬ。あなた様はそのやうな、弱い卑しい人間ではおはしませぬ。自らを佛と恃む、強い貴いお心をお持ちなされば、もう

もろの迷ひも悶えも、朝日に向ふ氷のやうに、一時に溶けてしまひまする。

四の御方　妾がどうしてそのやうな強い心を持つて居ようぞ。妾はいやしい弱い女子ぢや。此の觀世音や勢至に勝る如來の像が刻まれずば、妾の迷ひは生涯晴れる折はないのぢや。

定雲　いかやうに仰せられても詮ないことでござりまする。強いお心をお持ち遊ばす事が出來ずば、憚りながら、それはあなた樣の御不運と申すより外はござりませぬ。

四の御方　ほんに其方の云ふ通り、妾は不運な女子ぢやなう、佛を餘所に求めることも、自ら佛となることも、妾には許されて居ないのぢや。胸の悶えの消ゆる時なく、妾は一生淋しい月日を送らねばならぬわいなう。……

（四の御方、重い溜息をついてうら悲しげに俯垂れる。其の憂鬱な表情を冷静に凝視しながら、再び定雲は默然として菩薩の相を描きにかゝる。稍經てから四の御方が徐ろに立ち上つて、無言のまゝ左側の扉の方へ歩いて行く。）

定雲　（繪筆を擱いて出て行く婦人の後ろ姿を眺めながら）もし、いづれへお越しになりまする。

四の御方　（扉の所で振り返つて答へる）先の程から大殿が、妾の[illegible]を待ち憧れてお居ででであらう。もう夜明けに間近い樣子、こよひはこれで別れるとしようぞい。

定雲　これでは又明日の夜、お目に懸りたう存じまする。

四の御方　明日の夜會うても、妾は其方と再び言葉を交はさぬ故、今宵の物語は夢と思うて忘れてくりやれ。決して人に洩らしてはならぬぞや。

定雲　勿體ないことながら、此れぎりお言葉を賜はらぬと思へば、どうやら悲しう覺えまする。

（定雲が畏まつて兩手を衝いて居る間に、四の御方は扉を排して渡殿へ消える。一旦開かれた扉が外面から鎖されると、漸う定雲は頭を擡げて、ちやッと婦人の出て去つた方角を見守つて居たが、やがて今度は自分の作つた勢至菩薩に目を轉じて恍惚とする。）

定雲　（突然兩腕をひろげて菩薩の像を抱きながら、其の足もとへ轉ぶが如く打ち伏して、物狂はしげに叫ぶ）四の御方樣！　四の御方樣！　此の定雲の切なる戀を叶へ給へ！

第　三　幕

舞臺面は第二幕と同じ。其の明くる日の朝の出來事である。左側の扉格子など悉く開け放たれて、朝日が爽やかに板敷へさし込んで居る。

須彌壇の前に、定朝が唯獨り膝拔いて、定雲の作り上げた勢至と觀音とを、羨ましさうに見上げては嘆息して居る。女房の一、女房の二、左の扉から急ぎ足で這入つて來る。

女房の一 （つく〴〵と菩薩の相を眺め入つて後、竦然として罵るやうに云ふ）此れぢや、此れぢや。此の菩薩に違ひござんせぬ。

女房の二 でもまあ。そのやうな恐ろしい事があらうとも思はれませぬ。――定朝どの、其方は此の御堂に昨夜から籠つておいでなさりましたか。

定朝 いや〳〵、某はつい先の程此れへ參つたところでござる。

女房の二 それならあの、此の菩薩を拵へた定雲とやら云ふ若者は、いづれに居るのでござります。

定朝 定雲は何處に居るか、あの男のことは知り申さぬ。したが彼奴は、夜な〳〵人の寢靜まる頃仕事を勵んで、朝は休んで居りまする。さうして、あわたゞしいお許たちの御樣子は、いかゞなされたのでござります。

女房の一 其れでは其方は、此の定雲の菩薩について、不思議な噂のある事を、いまだにお聞きなさりませぬか。

定朝 不思議な噂とは？ はてどのやうな事でござらう。某一向に存じ申さぬ。

女房の二 此の頃に、此の菩薩が毎夜々々御堂の中を脱け出して、さながら生きた人間のやうに、長い〳〵渡殿を徐かに歩んで、南殿の勾欄のあたりを徘徊すると云ふ噂が、專ら擴まつて居りまする。

定朝 して其の怪しい人影を、誰ぞたしかに見とゞけた者がござらうか。

女房の一 誰彼と申さうより、妾が立派な證人でござんする。

定朝 なに、お許が御覽なされたとな。

女房の一 いかにも妾が、たしかにゆうべ見屆けたのでござります。

定朝 お許が御覽なされたとあれば、成る程まことらしい話ぢやが、……あはゝゝゝ（氣を換へて輕く笑ふ）大方其れは何かのお見違ひでござらうも知れませぬ。そのやうな不思議なことが、あらう筈はござりますまい。

女房の一 妾とても人の噂を聞くうちは、よもやと思うて居りましたが、昨夜の樣子を見るからは、もう疑うては居られませぬ。定朝どの、ほんとうに不思議なことがあるのでござんすぞえ。

定朝 ふん。たとへいぶかしい人影を御覽なされても、其れが菩薩の脱け出したものとは、どうしてお判じなされたのぢや。菩薩でなうて、盜人などの徘徊するのやらわ

かりませぬ。

女房の一　それでも妾は、二三尺の近さに擦れ違うて、星の光にまざ〳〵と、お顔を拜んだのでござります。此の觀世音や勢至菩薩に紛れもない、生きたお顔を眼のあたりに見たのでござります。

定朝　してどのやうな裝束を纏うて居られた。やはり此の菩薩と同じお姿でござつたか。

女房の一　さあ、妾が其れを拜んだ折は、たゞ恐ろしさに氣が怯えて、しかとは覺えて居りませねど、どうやらやんごとない上﨟のやうな御裝束を、纏うておいでなされました。南殿の東勾欄の曲り角で、妾とばつたり出で會うた時、あわたゞしう檜扇を面へかざして、大海の摺裳の音をさら〳〵と立てゝ、忽ちにいづこともなう消え失せておしまひなされました。

女房の二　人に依つてはいろ〳〵の事を申しまする。さる女房の見た折には、お顏は愚か御衣まで、此の觀世音と寸分違はず、渡殿の板敷を音もなくお歩きなさる眞白な御足裏が、闇夜ながらも雪のやうに思はれたと、人傳に聞いて居りまする。

定朝　して其の怪しい物影は、夜な〳〵御堂を脱け出して、そも〳〵いづれへ參るのでござらう。

女房の二　いづれへ參りますのやら、誰も定かに見究めた者は居りませぬ。いつも夜更けの丑滿頃に姿を現はすばつかりで、夜明けまでには人知れず御堂へ戻つてしまひまする。

女房の一　定朝どの、妾の申すことはほんとうでござりませうか。

定朝　さればでござる。古への百濟川成を初めとして、いみじき名工の手に成る物は、往々不思議を現ずる例がござる故、定雲の作つた觀音勢至が、自然と動き出さうとも。あながち怪しうはござるまい。彼奴の爲めには此の上もない面目でござりまする。

女房の二　ほんにさうかも知れませぬ。大殿様にもほのかに噂を聞し召されて、鬼神を欺く定雲の鑿の力で刻んだ菩薩に、いかさま其れ程の靈驗がなうてはかなはぬと、仰せられましたわいな。

女房の一　さう仰つしやればめでたい話でござんすが、聞くと見るとは大きな相違、ゆうべ妾が拜んだ節には、あまりの事に膽が潰れて、身の毛もよだつたやうにござりました。名人上手の丹精をこめた御佛も、却つて微妙に出來過ぎると、氣味が悪うござりまする。

女房の二　そのやうな勿體ない事は仰つしやいますな。人間の亡靈ならば知らぬこと、生きた菩薩のお姿を御覽なさるゝ上からは、きつと何かの瑞祥でござんせう。——

したがまあ、木で拵へた此の菩薩の御像が、どうして夜半に動き出すのやら、見れば見ろ程不思議な氣がして、いまだに實は半信半疑でござんする。

定朝　いや／＼決して恐るゝことも疑ふこともござりませぬ。某とても一應は不審に存じ申したが、斯くまで定かな證人の見えたるからは、ゆめ／＼噂に僞りはござるまい。まつたく大殿の仰せの通り、かばかり見事な菩薩の像に、靈驗の現るゝは當然でござるわい。今のうちから其のやうな不思議を示す御佛ならば、嘸かしあらたかな功徳を持たるゝことでござらう。たとへ本尊の阿彌陀佛はどうあらうとも、此の菩薩だに御信仰なされたなら、後世安樂は望みのまゝぢや。さても／＼、あの定雲は古今隨一の佛師でござる。

女房の一　それでは妾も昨夜の瑞祥を頼りにして、此の上ともに冥護を垂れさせ給ふやう、お祈り申して置きまする。

（女房兩人、觀音勢至の前に額づきて默禱する。）

（女房の三、登場。扉の鴨居に佇んで、堂内を覗き込む。）

女房の三　もし、皆樣にお伺ひ申しまする。夜な夜な戸外まで徘徊するとか云ふ、噂の高い菩薩の像は、やつぱり其れでござんすかえ。

定朝　いかにも此處に安置し奉る御木像に相違ござらぬ。此れでなうて、外にそのやうないみじき御佛が、おはさう筈はござるまい。

女房の三　丁度幸ひ裏山の院源律師がお見えなされて、一と目拜ませて貰ひたいとの仰せ故、唯今此れへお連れ申して參りました。

（女房の三、右手の方へ歩み寄る。つゞいて其の後ろから院源律師が這入つて來る。氣品のすぐれた老僧であるが、高德の聖と云ふよりも、寧ろ才智の穎脫した、鋭敏な性格らしく、眼光炯々たる威力ある容貌を持つ。）

院源　いかに定朝、久しう其方に會はなんだが、此の度御堂建立の御企てに召し出されて、本尊の彌陀の御像を作り出さんと苦心を重ぬる趣は、愚僧もかね／＼承つて、心強う覺えて居つたわ。

定朝　お心強う思さるゝとは、痛み入つたるお言葉でござりまする。如來の相を刻む可き大殿の仰せを畏みてより、晝夜の分ちなく肝膽を碎いて、種々に工夫を凝らしながら、遂に今以て心に適ふ思案も浮ばず、定めし世上の物笑ひにもなりつらんと、口惜しう恥かしう存じて居りまする。

院源　いや／＼物笑ひなどの沙汰ではあるまい。千載に傳

ふべき伽藍巨刹の本尊を作り出だすに、一朝一夕の心勞で事足らぬのはあたり前ぢや。口惜しうても恥かしうても、氣を落さずに努めたなら、いつかは稀代の逸品の成就する日が來るであらう。其方の仕事の捗々しう參らぬのが、なか〳〵愚僧には頼もしう思はるゝのぢや。

定朝　某とても一旦は役目を免れて御暇を賜はるやうに、お願ひ申す覺悟でござりましたが、再び氣根を取りかへして、たとへ死すとも思案の着くまで此の場を去らじと、不退轉の志を堅めて居りまする。餘人は知らず律師までが、さほどに仰せ下さるからは、千萬力を得たる心地がいたしまする。

陸源　かくてこそ其方は日本一の佛師ぢや。今の言葉を聞かれたなら、嘸かし御堂殿も御喜びなさるゝであらうわい。愚僧も私かに胸を痛めて居つたれど、其れで大きに安心いたした。

定朝　して律師には、何の御用で今日此れへお出でなされました。

陸源　されば一つには其方の心を勵まして、元氣を奮ひ起させう爲め、一つには文殊に高い定雲とやらの菩薩の像の拜みたさに、夜の明け方に山を下つて唯今辿り着いたのぢや。不思議な菩薩の像と申すは、いかさま此れであらうたう。

定朝　さやうでござりまする。某は己れの役目が氣づかはしうて夢中になつて居りました故、叡山の律師のお耳にも響いた程の噂、つい先の程聞いたばかりでござりまする。

陸源　さうして其方は其の噂を何と思ふ、僞りと思ふか眞と信ずるか、其方の考へはどうぢや。

定朝　某の考へと申さうより、此の御像をつく〴〵と御覽下さりませ。此の御像を御覽なされて、其の噂を信ぜぬ譯には參りませぬ。木で作つた菩薩のお姿の動き出すのが不思議なら、人間の鑿の力で此のやうな立派なお姿の刻まれたのが抑も不思議でござりまする

陸源　成る程なう。愚僧も今まで數知れず菩薩の像を拜んだが、いづこの御寺に參つても、此れに上越す觀音勢至は見あたり申さぬ。世上の噂は兎にもあれ、くも此のやうに巧みなものとは、夢にも思ひ及ばざりしに、聞きしに勝るあらたかな御佛ぢや。定雲とやら申す若者は、さすがに師匠の名を辱かしめぬ、立派な腕前と覺ゆるわい。

女房の二　それでは律師も世間の噂を、ほんとうぢやと仰つしやるのでござりますか。此の御像が夜な夜なひとりで歩み出すと云ふ話を、御信じ遊ばすのでござりますか。

女房の三　此の木像のお姿に、魂があるのでござりますか。

陸源　云ふまでもない事ぢや、魂がなくてはならぬ道理ぢや。

女房の三　そこがましうございますが、妾たちには其處の道理がわかりませぬ。木で拵へた菩薩の形がいかほど微妙なればとて、どうして其れに魂が宿つて居るのでござりませう。

院源　でもお許達はをかしな事を仰せらるゝ。人間ばかりが魂を持つて居るのではござるまい。畜生は愚か庭前の一木一石にも、乃至は空行く雲のたゝずまひ、流るゝ水の面にも、悟りの眼もて觀ずれば、皆魂が宿つて居るのぢや。まいて人間よりも圓滿な、御佛の相を具備した木像に、などて魂の宿らぬ譯がござらうぞ。此觀世音の兩の腕から手足の甲の柔々しい肌の匂を御覽せられい。一本の指にも一片の爪先にも、一つ／＼血が通うて、悉く魂が宿つて居るやうに、お許たちは思し召さぬか。

女房の二　妾たちにもどうやら生ある人間の、手足を眺めて居るやうな心地がするのでございまする。

院源　若しも魂が宿らぬものなら、いかほど器用に似せてあつても、そのやうな心地はせぬ筈ぢや。生ある人の手足のやうに見ゆるのが、即ち魂の宿つて居る證據なのぢや。

女房の一　今の律師のお言葉で、いよ／＼妾の出で遇うた、氣味の悪い昨夜の幻は、菩薩の化身に違ひないと存じまする。

女房の二　ほんに、ほんに、妾とてももう疑うては居りませぬ。そなたの御覽なされたのが、てつきり菩薩の化身でござんせう。妾も其のやうな果報にあづかりたうござんすわいな。

女房の一　果報を受くる瑞祥ならば嬉しけれど、萬一佛罰でも中りはせぬかと、いまだに妾は心配でなりませぬ。

院源　はてさて愚かしい心配はせぬものぢや。菩薩の出現にめぐり遇ふのが果報でなくば、外にどのやうな果報がござらう。一昨年此の世を逝去つた華臺院の惠心僧都は、愚僧の法の友でござつたが、嘗て横川の不二が峯で三尊の出現にめぐり遇うたと、歡喜の涙を催しつゝ愚僧に語られた例がござる。僧都の如き大德ならばいざ知らず、愚僧のやうな下根の輩は、いか程諸行の功を積み、念佛の數を重ねても、生きながら御佛のお姿拜まんことは思ひも寄らず、たゞ命終の際にこそ引接を受けんと願うて居るのに、いかなればお許は斯かる果報を得られたのぢや。愚僧は切に羨しう存じ申す。

女房の一　それを承つて妾も安心いたしまする。律師のやうな貴いお方から、羨しいと云はれる妾は、どんなに仕合せな身の上でござんせう。忝くも有り難いことでござんする。

女房の二、女房の三　ほんに、ほんに、めでたい極みでご

ざりまする。

定朝　憚りながら律師にお願ひがござりまする。定雲の刻んだ菩薩の像が古今に稀なる出來榮えとは、誰しも信じて疑ひませぬが、其の評判の喧しいに從つて、某の苦衷はどれ程でござりませう。弟子の譽れを聞くにつけても、某の胸は鳴り心は躍るやうに覺えながら、いざ鑿を取れば妄念が雲のやうに群がり起つて一向纏まつた考へが浮びませぬ。此の定雲の菩薩を見てより、某の頭はどうやら惡魔に憑かれたやうに、働きが鈍うなつたのでござります。抑もいかにしたら、胸にわだかまる悶えを靜めて、定雲の腕前を凌ぐやうな、如來の相を考へ出すことが出來るのでござりませう。――定雲の眼の前にはいつも菩薩の妙相が現ともなく漂うて居ると申しまする。どうしたら其のやうな尊い境地に、己が心を導くことが出來ますやら、何卒某に教を垂れて下さりませ。律師のお力で、某の胸の妄念を拂ひ、眞如の光をお授けなされて下さりませ。某が一生の願でござります。

院源　佛師の修行も僧侶の悟りも、二つとある可き道理なければ、いかさま心に妄想の影がさしたら、如來の相を考へることは出來ないであらう。愚僧の力で其方に安心の境地を授けさうとは、なか／＼に覺束なうは存ずるが、しかしいさゝか教へに進ませたい節もあるのぢや。若し觀念の便りともならばお互ひに此の上もないよろこび故、望みとあらば話して聞かさう。

定朝　忝なうござります。どうぞお聞かせ下さるやうに、ひたすらお願ひ申しまする。律師の御教へに導かれたら妄想の影も忽ちに、晴れ渡ることでござりませう。

院源　いや／＼愚僧の說くことは、そのやうな高尚な教へではないのぢや。いみじき大徳の聖にして丹青の才をも備へて居つた、惠心僧都が世に在りし頃、佛工畫工の心得について、愚僧に語り聞かせた事がある。それを其方に教へて進ぜるのぢや。佛師の秘密を告げ知らさうと云ふまでぢや。

定朝　はて、それならば猶更に、片時も早う伺ひたう存じまする。

院源　うん、――お許たちは暫く彼方へ遠慮をして貰ひたい。

女房三人　畏まりました。

（女房三人の全く退場し去るを待つて、院源が徐ろに語り出す。）

院源　先づ其の教を說く前に、愚僧は其方にもう一遍尋ねて見たい事がある。其方の門下の定雲が刻んだと云ふ此の觀世音と勢至菩薩を、其方は眞實どのやうに思うて居るのぢや。正直な其方の考を述べて見られい。

定朝　其の者へは從前申し述べた通りでござりまする。門弟ながらも定雲は、某を凌ぐ古今の名工、此の御像は世にも稀なる逸品ぢやと、心から信じて居りまする。

隆源　ふうむ、然らば一點の非難を挿むべき餘地のない、圓滿な妙相ぢやと申さるゝか。

定朝　さやうでござります。某の眼からは完全微妙なお姿のやうに拜まれまする。したが律師は何故あつて、今更其れをお疑ひなさるのでござります。此のお姿に難があると、思し召さるゝのでござりませうか。

隆源　愚僧とても先に賞揚した通り、此の御像を天下無類の絶品ぢやと、稱讚するに躊躇はいたさぬ。いかさま非凡の作者ならでは、斯ほどのお姿を刻まれまいと存ずるが、言や申さばいさゝか物足らぬところがあるわい。其で完全無缺とは、申されまいと思ふまでぢや。

定朝　さうして其れは、いかなる點でございまする。

隆源　成る程定雲の作つた菩薩には、たしかに魂が籠つて見ゆる。生き／＼して今にも動き出しさうに思はるゝ。されども愚僧が案ずるに、あまり生き／＼し過ぎて居るのが難なのぢや。此の木像に魂が潜んで居るなら、よも彌勒の魂ではあるまい。正しく現世の人間の魂が籠つて居るのぢや。

定朝　何と仰せられまする。

隆源　其方に合點が行かぬとあらば、仔細を說いて進ぜよう。——先づ何よりもいぶかしう存ぜらるゝは、此の木像の瞳の色ぢや。あの美しい瞳には解脫の光の冴ゆる代りに、怪しうも微かに煩惱の炎が燻いで見ゆる。あれは佛の慈眼でなうて、物に憧るゝ戀人の眼のやうぢや。それからあの生々しい唇を見るがよい。梵音相の氣品がなうて、求めて得られぬ情慾に顫へ悶えて居るやうぢや。あの﨟たけた面頰の優しさと云ひ、なまめかしい項の肉の肥えみと云ひ、一歩あやまれば邪婬の相へ陷りさうに、どうやら危げな心のさまがほの見ゆるわ。淺ましい女人の魂を包んだ姿が、凡夫の眼には微妙の菩薩と現じても、道者の眼を欺く事は出來ない道理、定雲とやらは何處から此の顏形を得て參つたか存せねど、さても恐ろしい菩薩ではあるわい。

定朝　鑿を使うて萬物の形を整ふる能はあつても、人の心の機微を見徹す眼力のない佛工の悲しさに、たゞ此の菩薩の不思議な美貌と嬌態に眼を奪はれ、一途にあらたかな御姿ぢやと驚嘆いたして居りましたが、今のお言葉で始めて夢の覺めたる心地、某にも漸う合點が參りました。恐れ入つたる律師の御鑑識、さすがに敬服いたしまする。

隆源　合點が行つたとは何よりぢや。それにつけても定雲とやらは、いみじき幻を見たものぢやなう。

定朝　憎き奴はあの定雲でござりまする。佛を穢し世を欺いて、莊嚴なる可き菩薩の相に邪婬の女の姿を混じ、此の靈場の土を汚した怪しかる振舞ひ、早速引捕へてきつと窮命いたさせまする。

院源　あはゝゝ、何もそのやうに憤るには及ぶまい、其れは其方の短慮と云ふものぢや。愚僧は却つて定雲の企てた事を今の時代にふさはしい心掛けぢやと存じて居るのぢや。其方が定雲を凌ぐつもりなら、其の心掛けを見習ふがよいと申すのぢや。

定朝　此れは思ひも寄らぬこと、何故律師はそのやうな儀を仰せられまするか。

院源　されば佛工の秘密について、其方に教へて進ぜたいのは此處の事ぢや。諸佛諸菩薩の妙相は、果してどのやうに尊いやら、凡夫の肉眼に映つた例のあらう筈なく、たゞ美しい人間の姿を選び出して、わづかに其れに擬へるより外はないのぢや。承れば其方の門弟の定雲は、卑しい漁夫の家に育つた若者の由、まいて其のやうな賤の男が、などて佛の美しさと、人間の美しさの差別を知らうぞ、彼の幻に見るものは、畢竟菩薩の形に變じた女人の姿に過ぎぬは當然、其の木像をまことの菩薩と信仰して、禮拜するのが世間の衆生の常態なのぢや。

定朝　いかさま其れも一應は道理のやうに聞えまするが、さるいかゞはしい佛像を禮拜したとならば、われ／＼衆生はいづれの時にか解脱の善根を得ることが出來ませうや。ます／＼妄念の重るばかりで、やがては恐ろしい佛罰を蒙むる時節の來るは必然、日頃の律師のお言葉とも覺えませぬわい。

院源　日頃の愚僧が說くことは、無智の凡夫を導くための方便ぢや。今日は其方にその方便を明かして進ぜるのぢや。此のやうな靈場伽藍を建てゝ、有り難い淨土の景色を此の世に現じて見せるのも、一途に衆生を菩提に誘ふ方便に過ぎぬ故、凡夫の目を欺くことが出來たなら、それで佛師の役目は濟むのぢや。御佛の美しさを拜んだことのないわれ／＼に、などてまことの菩薩の相が刻まれようぞ。たゞ人間の美しさを借りて、かりに菩薩と名づくるまでぢや。其の木像をまことの佛と心得て、ひたすら念佛をだに怠らねば、稱名の功德に依つて必ず往生は遂げらるゝのぢや。「命終の時までは一向に妄念の凡夫にてあるべきぞと心得て、念佛すれば來迎にあづかりて、蓮臺にのる時こそ妄念をひるがへし、悟の心がひらくる」と、惠心僧都も云はれた通り、彌陀の本願深きが故に、かりの佛を佛と信じて禮拜すれば、たとへ妄想が時々すとも、念佛の力で救はるゝのぢや。妄念はもとより凡夫の地體、一切衆生は皆煩惱の奴ながら、佛は我等を捨て

給はず、きつと來迎し給ふのぢや。極重惡人無他方便。唯稱彌陀得生極樂。……なんと、此の理が解らぬかな。

定朝　一と通りは解つたやうでござりますが、若しも律師のお言葉に僞りがなくば、あまりに廣大な御佛の慈悲の有り難さに、空恐ろしい心地がいたしまする。

院源　さうぞや。御佛の慈悲は空恐ろしい程廣大なのぢや。愚僧の言葉を疑うたなら、其の時にこそまことの佛罰を蒙るであらうぞい。——されば一切の衆生は、三惡道を免れて、人間に生れしことを仕合せと觀じ、われ／＼の知れる限りの美しい姿を、三尊の像に象つて、尊崇するより外はあるまい。定雲の刻んだ菩薩の相に、惱みの影がほの見えたとて、もと／＼人間の作つた姿に、完きものは得られぬ道理、多少の非難は是非ない事ぢや。其方が定雲の菩薩に勝つた如來を作らうと企つるなら、此の木像より美しい人間の顏を捜すがよい。たゞ徒らに手を拱いて工夫するより、われ／＼凡夫の仲間から、最も上品な最も端嚴な、佛に近いと思はるゝ微妙の相を尋ね出すのが捷徑ぢや。

定朝　さりながら、此の菩薩より美しい人間の相が、恐らく今の世にあらうとも思はれませぬ。殘念ではござりますが、尋ねたところで無益でござりませう。

院源　そのやうにあきらめるには及ばぬことぢや。定雲の觀音勢至に匹敵す可き、如來の相を備へた男なら、其方が尋ぬるまでもなく、愚僧が會はせて進ぜう。

定朝　なに、其のやうな人に會はせて下さりますとな。さては律師には、お心あたりがござりまするか。

院源　いさゝか憚ることがあつて、姓名だけは申されぬ。父はある時常陸の國司を勤めた男、母はさるやむごとない殿上人の御女ぢやが、二人の間に儲けられたみめ美しい淸らかな稚兒を、先年山へ預かつて、愚僧が手許に養うてあるのぢや。今年の春はねび整うて、早や十八の男盛りと見えたるに、あはれいかなる苦行をお堪へ忍ひて、行くすゑは高德の上人になりたやと、切なる本人の望みのまゝに、つい先達て綠の髮を切り落し、名も良圓と改めて、うら若い靑法師になり居つたわ。花も恥ぢらふ姿齡を持ちながら、厭離穢土の願ひのいかほど止め難しとて、斯くは勇ましう思ひ立ちけるぞと、愚僧もさすがに感涙を催したが、たとへ頭を圓めても、其の若法師の美しさは、今に少しも衰へぬのぢや。

定朝　さて／＼めでたいことを承りまする。其の若法師の御相ならば、此の菩薩にも立ち勝つて、一段と美しうござりまするか。

院源　いかにも愚僧が請け合ひ申す。定雲の作つた菩薩には、煩惱の影が搖いで見ゆるが、其の若法師のみめ形に

は、微塵も汚濁の名殘りを留めず、瞳の色は清淨無垢の水晶のやうに澄み渡つて、額から鼻筋の氣高さは、さながら白毫の光を放つかと疑はるゝ。人間にして人間ならぬ、寧ろ佛に近かるべき、世にも尊げな相貌なのぢや。己れの弟子でありながら、愚僧は時々あまりの威嚴に氣壓されて、思はず合掌するくらゐぢや。

定朝　あゝ有り難うござります。さやうな法師がおはすからには、此の定朝も救はれまする。まことの如來の出現よりも、今の某には忝なうござりまする。さうして律師には、其の法師の御相を、いつ拜ませて下さりまする。

院源　今日しも愚僧を迎へかた〴〵、後刻此方へ參るであらう、片時も早う其方に會はせて進ぜたさに、實は手筈を定めて置いたのぢや。

（女房の一、女房の二、登場）

女房の一　律師にお伺ひ申しまする。

院源　おう、何事でござる。

女房の一　唯今叡山から律師のお迎へに參つたとて、其れは其れは玉のやうにうるはしい、御佛のやうに淨らかな、良圓と申さるゝ若い法師がお出でなされてござります。

院源　うん、もう參つたか。

女房の二　たゞ今お着きなされたばかりでござんすが、まあ何と云ふ品のよい、あでやかなお方でござんせう。あの法師こそ光源氏の再來ではおはさぬかと、お局の女房たちが俄かに騒ぎどよめいて、やんごとない上﨟の方々まで、几帳の隙より垣間見ながら、はしたなう褒めそやされて居られまする。

院源　それは何よりよいところぢや　早速此れへ伴うて下さい。

女房二人　畏まりました。

（女房二人、先を爭うて渡殿を走り行く。丁度彼等が舞臺を去らうとする時、出會がしらに良圓法師が女房の三に案内されて歩み來る。律師を始め女房達の讃嘆に背かぬ平安朝式美男の典型で、繪に畫いたやうな引目鈎鼻の、優婉豐麗な容貌を持つ小法師である。）

女房の三　皆樣のお知らせを待つまでもなく、妾が此れへお伴れ申して參りました。

女房の一　おゝ良圓さま、唯今お迎へに參らうと存じたところでござりまする。

女房の二　どうぞ此方へお出でなされて下さりませ。

良圓　忝なう存じまする。

（女房の一、二も其處で一緒になり、慕はしさうに良圓の傍へ寄り添ひながら、手を取らんばかりにして本堂の方へ戻つて來る。しかし、良圓は極めて初々しい

（無邪気な、冷淡な態度を持して居る。）

良圓 （院源の前に見まゐる）律師さま、仰せに従ひお迎へに參りましてござります。

院源 おう御苦勞ぢや。申し付けて置いたよりも、大さう早う參つたやうぢや。――したが良圓、其方は愚僧に預けられてより、四年の間一遍も山を下つたことはない筈、久方ぶりで都に來て見れば、さすがに昔が慕しいであらうなう。

女房の一 此方（こなた）のやうな、うら若いお方が、むざ／＼御出家なされたには、定めし深い因縁がござんせう。久々で都へお上りなされたついでに、ゆる／＼逗留遊ばして昔を偲ぶ御知る邊なりともお尋ねなさるがよろしうござります。

良圓 いえ／＼、さうはして居られませぬ。律師さまのお迎へ申したからは、此處から直ぐに山へ歸らねばなりませぬ。

女房の二 でもまあ其方（そなた）は、都がなつかしうござりませぬか。

良圓 はい、なつかしうないことはござりませねど、浮世を捨てた法師の身で、剰へ修行の至らぬ若年の私（わたし）、都に長う留まつたとて、何の利益がござりませう。早や／＼山へ歸りたう存じまする。

女房の三 ほんにいぢらしい事を仰つしやるお方ぢや。花ならば今を盛りの御年頃で、世に類ひない御器量を持ちながら、よう御辛抱が出來ますわいなあ。

良圓 都は賑しうござりませぬが、此の頃名高い御堂建立の噂を聞いて、せめては一度有り難き靈場の土を踏みたしと、常々願うて居りましたに、今日しも望みがかなうたれば、此れに上越す喜びはござりませぬ。何卒私（わたし）に御佛を拜ませて下さりませ。

院源 たやすい願ぢや。あれへ參つて拜むがよい。

（良圓おもむろに内陣へ進んで、須彌壇のほとりに額づきつゝ合掌する。暫く讀誦を續けた後、頭を擡げて先づ中央の阿彌陀如來の尊容を見、次ぎに左右の觀音勢至へ眼を轉ずる。定朝は最初から一言一句も語らず、たゞ熱心と驚愕との相混じたる表情で、良圓の容貌を胸中へ刻み付けるやうにヂツト注視して居る。）

良圓 （またゝきもせず觀音勢至を見つめたまゝ、人形のやうに動かなくなる）律師さま、如來のお顔はまだ二つながら出來上らぬのに、此の菩薩の御像はいかなる人が彫つたのでござります。

院源 其れこそ近頃世に鳴り響いた、定雲と申す若い名工の手に成るものぢや。此れなる菩薩があまり巧みに刻まれた爲め、却つて如來の御相が作り難うなつたのぢや。

（院源の説明が耳に入らざるものゝ如く、依然として良圓は菩薩を見つめて端坐して居る。一座暫く良圓の

擧動に不審を抱き始める。）

女房の一　良圓さま、どうなされたのでござります。先の程から菩薩のお前に蹲踞まつたまゝ、何を考へて居られまする。

女房の二　ほんに何やら思ひに沈んでお居での樣子。大方あの菩薩のお姿の、あまり不思議な出來榮えに、見惚れて居られるのでござんせう。

女房の三　不思議と云へば菩薩のお姿に向ひ合うた、良圓さまの御顏を御覽なさりませ。いづれが菩薩と云うてよいやら判らぬほど、美しいではござんせぬか。

良圓　（縛られて居た人間が突然繩を解かれたやうに立ち上り、律師の前によろめき來つて跪き、戰慄しながら云ふ）律師さま、お願ひでござります。私を連れて早う山へお戻りなされて下さりませ。

院源　これ何事を申すのぢや。愚僧を迎へに參つた外に、其方にはまだ少し用事もある。次第に依つたら二三日、此處に滯留せねばなるまい。

良圓　いえ〳〵さうしては居られませぬ。どうぞ私を一刻も早う、山へ歸らせて下さりませ。律師さまお願ひでござりまする。

院源　（忽ち愕然としたる樣子にて、良圓の顏をハッタリと睨む）はて心得ぬこともあるもの、常日頃から佛にしても見まほしい、莊嚴無垢な其方の顏が、唯今菩薩を拜んでから、俄に邪淫の相を現はし、淨玻璃の如く冴え渡つて居た兩の瞳に、情慾の炎が燃え出したわ。

良圓　律師さま、其の通りでござります。其の通りでござります。もう何事も申しませぬ。どうぞ私を哀れと思うてお救ひなされて下さりませ。早う此の場を逃れさせて下さりませ。

院源　たとへ山まで逃れても、其方の心はやつぱり此の場に留るであらう。さるにてもいかなる宿世の惡緣で、此れなる菩薩が斯くも其方をば迷はせたのぢや。其方の道心はもつと堅固な筈であつたわ。

良圓　律師さま、早う私を連れて行つて下さりませ。私は恐ろしうござります。あの菩薩の眼は、私の瞳を視るために、私の姿に憧れるために、刻まれたやうでござります。あの菩薩の脣は、私の血を吸ふために、私の肉を啖ふために、作られたやうでござります。私には其れが一と眼で解りました。恐ろしいことでござります。

院源　いかに定朝、此のやうに淺ましい相になつては、もう良圓は役には立たぬ。惜しい事をいたしたものぢや。

定朝　其の御懸念は御無用になさりませい。菩薩を禮拜なされし以前の、貴いお顏がはつきりと、某の胸へ彫り付けられてござります。もはや如來の尊像は出來上つたも

同然でござります。良圓殿がお歸りなされても、憂ふる事はござりませぬ。

良圓 （物狂しく叫ぶ） お願ひでござります。早う私を山へ歸らせて下さりませ。

定朝 （歡喜に堪へざる如くに叫ぶ） 如來の像は出來上つたも同然ぢや。あゝ忝なうござります。

（女房達は呆然として始終の樣子を眺めて居る。）

第四幕

第二幕と同じ深夜、同じ場面。第三幕から四五日過ぎた頃である。堂の内部は殆んど眞暗で、庇の間に一點の燈火が纔かにはためきつゝ、その周圍の二三尺ばかりの空間をぼんやり照らして居る。四の御方と定雲とが燈火の左右に唯二人相對して、朦朧と据わつて居る。其の他の部分は闇に包まれて居て全く判らない。

四の御方 これ定雲、妾はもう一度其方と話がしたうなつた。妾は其方に頼みたい事があつて、こよひ再び大殿に席を外して頂いたのぢや。

定雲 またいつぞやの夜のやうに私たちは二人きりになりました。あなた樣からもはやお言葉を賜はらうとは思ひ設けず居りましたのに、有り難いことでござりまする。さうしてお頼みと仰せられますのは、どのやうな儀でござりませう。

四の御方 頼みと云ふは外でもない。其方の師匠の定朝は、此の頃漸う本尊の阿彌陀のお顏を作り上げたと云ふではないか。

定雲 さやうでござりまする。……

四の御方 其の御顏が、其方の刻んだ菩薩よりも、更にすぐれて美しいと云ふではないか。

定雲 ……。

四の御方 そればかりではない。噂に聞けば定朝は、叡山の律師の御弟子の良圓と云ふ、器量のめでたい若法師のみめ形を、其の儘ひそかに如來の御相へ寫し取つたと云ふ話。其方も定めて知つてであらう。

定雲 噂は聞いて居りますが、まだ私は良圓と云ふ法師を、一度も見たことはござりませぬ。

四の御方 良圓法師には會はないでも、如來のお顏は度び度び拜んで居るであらう。

定雲 それは拜んで居りまする。お顏は既に出來上つて、昨日の朝から取り付けられてござりますが、あの通り今宵は内陣が暗闇ゆゑ、此處からは見えないのでござります。

四の御方 頼みと云ふは其の事ぢや。どうぞ内陣に燈明を

灯して、妾に一と眼本尊の相恰を拜ませては賜らぬか。

定雲　外ならぬあなた樣のお頼みなれば、かなへて上げたう存じますれど、此ればつかりはお許しなされて下さりませ。

四の御方　なに、妾の頼みをかなへる事が出來ぬとは、どうした譯ぢや。

定雲　あなた樣がどのやうに仰せられても、あの御本尊を拜ませてはならぬとの、大殿樣の嚴しいお云ひ附けでござりまする。

四の御方　そのやうな事を大殿が仰せられう筈はないぞや。其方は僞りを申すのぢや。

定雲　決して僞りではござりませぬ。此のやうに燈火の數を減らさせて、わざと御堂を眞暗にして置きますのも、あなた樣に如來のお姿が見えないやうに、大殿樣のお計らひなされた事でござりまする。

四の御方　いえ／＼其れは僞りぢや。大殿の御名を騙つて勝手に其方が計らうたのぢや。

定雲　なか／＼さうではござりませぬ。

四の御方　たとひ大殿のお云ひ附けがあらうとも、妾が頼みで見せたとあらば、其方に咎めのかゝる道理はないであらう。天下を動かす事は出來ても、妾の言葉には背きかねると、つね／＼大殿は仰せられるのぢや。

定雲　御尤もでござりますが、此ればつかりはお止まりなされて下さりませ。あの御本尊をお拜みなされても、決してあなた樣のお爲めにはなりませぬ。必ず何か忌はしい事が起るでござりませう。私は心配でござりまする。

四の御方　忌はしい事が起らうとも、此のまゝ拜まずに濟まれうか。……よいわ、よいわ、聽かぬと云ふなら妾は其方に頼みはせぬ。頼まぬ代りに其方に指圖することがある。

定雲　されば、いかなるお指圖でござりまする。

四の御方　此の燈火を内陣の阿彌陀佛のお前へ運んで賜れ。頼むのではない。指圖するのぢや。

定雲　……。

四の御方　これ、何をためらうて居やるのぢや。前太政大臣爲光の女、四の御方が其方に命令して居るのぢや。妾の頼みは聽かぬにもせよ、妾の指圖を拒むことは、其方の分際では出來ぬぞや。

定雲　あゝ、是非もないことでござります。

（定雲恐る／＼立ち上りて、燈火を須彌壇の方へ運ぶ。眞暗であつた内陣がうす明くなつて、阿彌陀如來と觀音勢至の像がまざ／＼と浮び出る。定雲の話した通り、一番左端の本尊の首は既に完成されて胴に繫がつて居る。首は良圓法師の顏にそつくりである。）

四の御方　（燈火を捧げて佇立して居る定雲を背後に侍らせ、跪いて恭しく如來を仰ぎ視る）おゝ、此れぢや、此れぢや、此れぢや、此れこそ、妾が胸に描いて居る戀人のお姿ぢや。

定雲　もし、あまりにお聲が高うござります。どうぞお靜かになされて下さりませ。

四の御方　良圓さま、良圓さま、どうして其方は山へお歸りなされたのぢや。物言はぬ、冷たい如來の御像よりも生きた其方のお姿に會ひたうござります。

定雲　もし、四の御方樣、其れ程御覽になれば、もう十分でござります。どうぞ彼方へお出でなされて下さりませ。今に恐ろしい事が起るかも知れませぬ。

（道長が左側面の扉を開けて密かに入り來り、片隅の柱に凭れて窃み聽きして居る。扉の外から皎々たる月光が、堂の板敷の一部を照らす。）

四の御方　良圓さま、其方を慕ふ煩惱の炎が、妾の胸には絶ゆる隙なく燃えて居たのでござります。生まれぬ先から其方は妾の戀人でござります。折角都を訪れながら、そのまゝ山へ歸られたとはほんに恨めしうござんする。

定雲　（月明りに心付きて後ろを振り返り、道長を認めて竦然とする）四の御方樣、お靜まりなされて下さりませ。大殿樣が彼處においでゞござります。

道長　（兩人の樣子を冷眼に見やり、戸外の方に向ひながら大聲に呼ばゝる）これ、誰ぞ警護の者は居らぬか。

（忽ち外の庭先から、警護の武士の逞しげな豪壯な返辭が聞える。）

聲の一　肥前の前司賴光が郎黨、坂田金時。

聲の二　渡邊綱。

兩人の聲　此處に控へて居りまする。

道長　御堂の中に狼藉者が這入つたやうぢや。此れへ參つて引捕へい。

兩人の聲　はゝツ。

（金時と綱とが簀子を踏み鳴らして戸口から走り出で、金時は四の御方を綱は定雲を鷲掴みにして庇の間に引き据ゑる。騷ぎのうちに燈火が全く消えて、月の光がいよ／＼冴え渡る。）

金時　菩薩に似たる物怪の徘徊する由を承り、御堂を固め居つたるところ、唯今捕へし此の上臈の顏こそ、噂に違はぬ曲者らしうござりまする。

綱　月の光に定かならねど、某が捕へし男子の面は、羅生門の鬼のやうにむくつけく、人やら鵺やら判りませぬわい。

道長　其奴等の面は見るに及ばぬ。此の靈場の佛を汚した憎つくき痴者、急ぎ庭先へ曳き出して、有無を云はさず斬り捨てい。

金時、綱　畏まつてございます。

（金時と綱とが二人の男女を荒々しく戸外へ曳き摺り出す。道長は獨り柱に凭れて腕を拱いて居る。やゝ暫くして兩人の斬り殺される呻り聲が物凄く響いて來る。道長嘆息しつゝ瞑目する。）

――幕――

改作

恐怖時代（二幕）

人物

春藤家の大守　年齢二十七八歳、亂行に耽る大名

春藤靱負　大守の親族、春藤家の家老職四十歳ぐらゐ、奸譎なる侫臣

磯貝伊織之介　十八九歳の怜悧にして武術に達し、眉目秀麗なる小姓、大守の寵臣

細井玄澤　春藤家の醫者

珍　齋　甚く臆病で剽輕なるお茶坊主

氏家左衛門　近侍の武士、忠臣

菅沼八郎　同

お銀の方　大守の嬖妾、二十四五歳

梅　野　お銀の方に仕ふる女中、三十歳前後

お　由　良　珍齋の娘、十六七歳、女中梅野の腰元

其他侍、女中等數人

時

何將軍の代の何年何月とも定かならず、唯大體に舊幕時代の出來事と覺しき言語風俗を用ふれば足る。

所

江戸の深川邊の、極めて宏大な春藤家の下屋敷。

第一幕

第一場――お銀の方部屋、正面に床の間と違ひ棚、右側に書院の窓、其れに續いて萩戸が嵌まつて、戸の外は長廊下になつて居る。廊下の彼方には、宏莊な御殿の奥庭の池だの築山だの燈籠だのが微かに見えて、西に傾いたまんまるな月が、丁度築山の松の梢の蔭に沈まうとして居る。部屋の左側は遣り水に菊の花を描いた絢爛な金襖。勿論その金襖の向ふにも、立派な座敷や疊廊下が數限りなく連つて居るらしい。

夏の夜の大分更け渡つた刻限である。部屋の上手に七草の裾模様のある白綸子の蚊帳が釣つてある。蚊帳の中に、お銀の方が蒲團の上にうづくまつて、脇息に凭

れたまゝ物思ひに耽つて居るけれど、はつきりとは動作が分らない。左手の萩戸をすつかり明け放つて、女中の梅野が鴫居際に團扇をつかひながら庭を眺めて据わつてゐる。其の傍に蚊遣り火が焚かれて居る。廣い座敷に燈は僅か一點、下手の金襖に近く燭臺がぼんやり灯つて居るのみで、その外に光る物とては、沈みかかつた月の明りと、庭先の廊下に置かれた大きな螢籠ばかりである。涼しさうな夜風が折々室内へ吹き込んで、蚊やりの煙と白綸子の蚊帳をはた〳〵と、搖めかせる。

幕があくと間もなく、次ぎの間の時計がちい〳〵と、九つを打つ。

お銀の方　（蚊帳の中より）……梅野、梅野、梅野は其處にお居やるか。

梅野　はい、最前から此の通り、蚊に喰はれながらぢつと控へて居りまする。何ぞ御用でござりまするか。

お銀の方　今の時計は、あれは何時ぢや。

梅野　多分九つでござりませう。築山の彼方に見える月影が、もう直き西へ沈む刻限でござります。

お銀の方　夏の夜は短いものと極まつて居るに、てもまあ今宵の待ち遠な。……どう遊ばした事ぞいなう。

梅野　ほんにお部屋樣の氣短かな、そのやうにお急きなさらずと、やがてお越しになりませう程に、ちと緣先へお出遊ばして、涼みがてらに螢籠など御覽じませ。

お銀の方　いえ〳〵今宵はもうあきらめて、此のまゝ休んでしまふのぢや。どうせお越しがないものなら、螢籠も蚊やり火も皆片寄せてしまうたがよい。

梅野　此の目印の蚊やり火と螢籠とを片寄せてしまうたら、お可哀さうに折角忍んでお出でなさる靱負樣が廣いお庭の道に迷うて、御難澁遊ばすでございませう。それでなうても今宵のやうな蒸し暑い夏の夜に、まだ九つではなか〳〵局の人々も寢靜まつては居りませぬ。かりにも男と名のつく者は、殿樣の外に一人も這入れぬ奧御殿へ、掟を破つてお越しになるのは容易なことではござりませぬ。若しも誰ぞに見付つたら、たとへ御家老の御身分でも命はないに極まつた譯、少しは時刻が遲れたとてそのやうに仰つしやるものではござりませぬぞえ。

お銀の方　命が惜しくば出ぬがよい。命を捨てゝの戀路とは、初めからよう知れて居る筈ぢや。

梅野　あれ、あれ、御覽なさりませ。月がすつかり西へ沈んでしまひました。（庭の面も室内も更に一層薄暗くなる）戀路の邪魔をする月影が、隱れてしまへばお庭は眞暗。忍んでお出でなさるには、丁度此れからが究竟の刻限でござります。

（一陣の夜風がさつと吹き入つて、一と入強く蚊帳に波を打たせる。燭臺の火が頻りに明滅する。その時何處やらで、風の音とも人の言葉とも判らぬ樣なかすかな聲が聞える。）

聲　……梅野どの……梅野どの……

梅野　はい、（庭の方を屹と見つめて、合圖の螢籠を高く掲げながら上げ下げする）……今のはたしかに、……もしお部屋樣、お越しなされたやうでござります。早う此方へお出迎へ遊ばしませ。

お銀の方　はて其のやうに騷ぐには及ばぬ。妾はお越しを待ちかねて、とうに寢入つてしまうたと、そなたからきつぱり斷りを云うて賜れ。情ないお方に用はないぞえ。

梅野　もし靱負樣、……此處でござります。此處でござります。……

（靱負が廊下の隅からこつそりと、這ひ上つて身を縮めながら部屋の中に這入つて來る。眞黑な布で覆面をして、細かい紺絣の上布に紗の羽織を着て、袴の股立ちを取つてゐる。）

梅野　靱負樣、先程からお待ち兼ねでござんすわいな。

靱負　し、しづかに、（覆面を脫いで袴の裾を下ろす。色白の、小太りに太つた、見るから凛々しい水際立つた男振り。につこり笑ひながら蚊帳の中を見入る。）（お銀の方は寢たふりをしてゐる）……お部屋樣にはようお休み遊ばしてぢやな。……

梅野　なんでお休みなりませう。あまりお出でが遲い故、焦れて焦れて焦れ拔いて、容態を使つておいでなさるのでござんする。早う御機嫌の直るやうに、此れへお這入りなさりませいなあ。

（梅野、靱負の手を執つて、蚊帳の方へ導かうとする。）

靱負　（梅野の手を振り切る）いや〳〵。今宵はそれどころではござるまい、かねて手筈を定めて置いた大事を前に控へながら、お部屋樣にも梅野どのにも、なぜそのやうな氣樂を云うておいでなさるのぢや。

梅野　その一大事があればこそ、お部屋樣には猶更お越しを待ち憧れて、御案じなされてでござんする。……それ、あの約束の時刻には、まだ一時あまりも間がござんする。

（再び手を執つて誘はうとする）

靱負　（梅野の手を拂ひ除けて蚊帳の外に畏まり、お銀の方の枕許へわざとらしく慇懃に兩手をつく）お部屋樣にはまだお眼覺めになりませぬかな。はしたない痴話喧嘩は下樣の女子のすることであります。昔の誰かならば知らぬこと、卑しい藝者娼妓のやうに不貞寢をなさるとは何事でござります。……そのやうなそのやうなお心がけで、

殿のお家を傾ける、一大事を遂げられますまい。（お銀の方、此の言葉にびつくりして、褥の上に起き直る）さて／＼、頼みがひのないお方ぢや。

お銀の方　靱負どの、またそのやうな嫌味ばつかり、……劍の刄を渡るやうな、危い戀路の樂みがあればこそ、そなたの惡事に加擔するのでござんせうに、どうせ妾は素性の卑しい女ゆゑ、藝者上りが惡ければ、嫌はうと捨てようと殺さうと、そなたの自由になさりませ。お家を乘取る謀が、そなた一人の力で成就するものなら、妾を殺して下さりませ。（蚊帳の外に出て靱負の前に立て膝して据わりながら、銀の長煙管で煙草を吸ふ）もし靱負樣、今更あまりな言葉でござんすぞえ。

靱負　（ます／＼慇懃に頭を下げて、低い聲で輕く笑ふ）あはゝゝゝ、今のはほんの戲れでござります。誰がお前樣の素性などを疑ふ者がござりませう。昔の事を知らぬでもない拙者奴までがそのお立派なお姿には、勿體なくて自と頭が下りまする。

お銀の方　そのやうな媚び諂ひを聞きたうもないわいの。嫌なら嫌と仰つしやつて下さりませ。

靱負　ほんの一時の戲れを、さう何時までもお氣に障へられては、拙者が難儀いたしまする。これ梅野どの、どうぞ其方から宜しきやうに、お取りなし下されい。

梅野　妾風情の取りなしよりも、靱負樣のお言葉一つで、直きにお部屋樣の御機嫌が直りまする。……したが、大事の前の小事とやら、もうお戲れはよい程にして、お二人樣ともお仲直りを遊ばしたがようござります。何ぞ密密の御談合でもござりますなら、妾は一と先づお次ぎの間へ御遠慮いたして居りませう。

靱負　これ梅野どの、今も拙者が申した通り、遠慮するとは意地の惡いお氣遣ひぢや。得度ながら、其方の智慧を借用したい儀もござる。是非とも今宵の相談に與かつて頂かねばなりますまい。……何は兎もあれ、廊下の雨戸が開いて居ては無用心、憚りながら彼處を締めて下さらぬか。

梅野　畏まりました。

（梅野立ち上つて、左側の庭に臨んだ廊下の雨戸を靜かに締めて、蚊帳と蚊遣り火を奥へ運び去る。それから右側の金襖を悉く明け放ち次ぎの間の樣子を窺つた後、燭臺を室の中央に据ゑて蠟燭の心を剪る。室内が急に明るくなる。）

梅野　さあ、かうしてしまへばもう大丈夫でござります。お屋敷内でも殊更遠くかけ離れた此のお局のお庭先へ、こんな夜更けに誰も參りはいたしませぬ。どうぞ御安心遊ばして、何事なりととつくり御相談なさりませ。

靱負 （お銀の方の前へ両手をつく） お部屋樣には、まだ御立腹でござるかな。あまりおむづかりなされては、又梅野どのに笑はれる事でござらう、よい加減にして拙者をお赦し下さらぬか。

お銀の方 （笑ひながら冗談のやうな調子で） 赦し難き奴なれど、大事な話とあるからは、今宵はゆるして進ぜませう。さうして相談と仰つしやるのは、どのやうな事でござんすぞえ。

靱負 その相談は先づゆつくりとくつろいでお話申すでござらうが、今宵に限つて酒がなうてはあんまり淋しい。なう梅野どの、とてもの事にもう一つ心配しては下さらぬか。

梅野 ほんとに忘れて居りました。宵のうちから御酒の用意は整へて置きました程に、唯今此れへ持つて參ります る。……（立ち上る） さうしてせい／＼するやうに蚊帳を外してしまひませう。

（梅野蚊帳を外して次ぎの間へ持ち去り、唐草の金蒔繪の膳に酒肴を載せて捧げて來る。お銀の方と靱負は座を改めて席をひろげる。）

梅野 （兩人の間へ膳部を置き、靱負に緞子の座蒲團をすゝめる） さあ／＼。此れへお直りなさりませ。お酒が出れば御謝罪に及びませぬ。お仲直りのお印に、妾のお酌で先づお部屋樣から一こんお乾しなさりませ。

（兩人酒を飮み始める。お銀の方も男に負けず杯の數を重ねる。）

靱負 してお部屋樣には、今宵の手筈によもお手ぬかりはござりませぬな。……

お銀の方 （不愉快らしい顏つきをする） 靱負どの、話の腰を折つては濟まぬが、今宵に限つてさういつ迄も改まつて、「お部屋樣」と仰つしやるのはお止めなされて下さりませ。ほんに窮屈な。……

靱負 あはゝゝゝ、そのお許しが出たからは、「お部屋樣」は止めにいたさう。……さうして先夜の話の事は、うまく運んだでござらうの。

梅野 お氣づかひには及びませぬ。お部屋樣の御言ひ附け通り、妾がすつかり彼の玄澤を言ひくるめて、納得させて置きました。……今宵丑の刻を合圖に時を違へず此の長廊下の東の隅の床下へ、こつそと忍んで參るやうに、申し附けてござります。

靱負 さて／＼其れは御苦勞千萬。……大丈夫とは存じ居つたが、てもあの玄澤め、よくも容易く承知いたしたものでござるわい。

梅野 一大事を打ち明けた其の後で、若しも納得しなければ斯うする （右の手で人を殺す意味を暗示する） 積り

でござりましたが、つね〴〵から慾深で女好きの玄澤ゆゑ、恐々ながら納得して、御注文の毒藥を、今宵手づから御部屋樣へ差し上げると申しましたわいな。

靱負　成程それはさうでもござらう。……なうお銀の方、味方が殖えて結構ぢやが、此の御家中でそなたの昔を存じて居るのはあの藪醫者と拙者ばかり、年は取つても相手が色事師の玄澤では、どうやら拙者も氣がゝりぢや。

（お銀の方眉をひそめて默つて靱負を睨めつける。）

梅野　おほゝゝゝ、そのやうな御心配は御無用でござんすが、あの玄澤はかれ〴〵から身の程も知らないで勿體なくもお部屋樣へ横戀慕をして居る樣子、それ故にこそ今度の事も納得したのでござりませう。藥の調合に事寄せて、せめてお側へ近づきたいのが、彼奴の腹でござんする。――後でどのやうな難題を言ひ出さぬとも限りませねば、お部屋樣にも御用心遊ばしたがようござります。

靱負　それでなうても口說上手なあの玄澤、拙者も用心せねばならぬて。

お銀の方　えゝ又しても愚かしい惡推量……かりにも大望をお抱きなさる靱負殿がそのやうな狹い御了見では覺束なうござんすぞえ、ちとおたしなみなさりませいなあ。

靱負　これは強いしつぺい返し、そのお言葉には拙者一言もござらねど、さて色戀の道ばかりは男も女も愚かになるが當り前、ましてそなたと玄澤では、つい惡推量もしたくなるでござらうが。

お銀の方　ほんに憎らしい舌の根ぢや。好い程になさらぬと、もう〳〵今度は許しませぬぞえ。（煙管の雁首で、男をぐいと突く）

靱負　はてまあ御許し召されい。今のはそれは冗談でござる。あはゝゝゝ。

お銀の方　つまらぬ邪推をなさらずと、若し玄澤が無禮なことを云ひかけたら、後とも云はず斬り捨てゝおしまひなさるがようござります。

靱負　仕儀によつたらさう致すより外はない。しかし此の先どのやうな役に立たうも知れぬ男、成るべくならば慾と色とを餌にして、當分釣り寄せて置きたうござる。

お銀の方　それを妾も知らぬではござんせぬ。慾に眼のないばつかりか、身の程知らずと横戀慕が此方の附け目、今宵此の邊へ參つたら、手管一つで綾なして、裏の裏を搔いてやる妾の腕前を、まあ物蔭で御見物なさりませ。

靱負　そなたの凄い腕前なら、拙者の胸にも覺えがござる。見物せずとも大丈夫ぢや。

梅野　それはさうと、その毒藥が手に入つてからの大事な仕事は、誰の役目でござんせう。

靱負　さあそれぢや。今宵の相談と申すのは、其の事でご

ざるわい。……誰ぞ其方のお側に侍る衆のうちに頼める人はござるまいか。梅野どのにはよいお考へもござらぬかな。

梅野　妾もそれには苦勞いたして居りまする。お側の衆は多勢居ても、迂濶に頼めはいたしませぬ。……はて、何ぞよい思案はござりませぬかなう。

お銀の方　そなたは妾の智慧袋ぢや。何ぞよい工夫をして賜らぬか。

梅野　おゝ、よい事がござります。（ふと想ひ付いたやうに膝頭を打つ）妾が長年召し使うて居りまする、腰元のお由良の父親――あの茶坊主の珍齋をお頼みなさりませ。あの父親めを威嚇したら、必ず嫌とは申しますまい。

叡負　いかさまお茶坊主の珍齋なら、勝手氣儘に誰の傍へも馴れ近づいて、可愛がられる剽輕者、仕事をするに便利はござれど、てもあのやうに臆病者では……

梅野　たよりにならぬと仰つしやるのでござりますか。

お銀の方　梅野とした事が、不思議なことを云ふではないか。臆病で剽輕で輕口ばかり叩いて居る、珍齋のやうな男の數にも這入らぬ者に、めつたな事は明かされまいぞえ。

叡負　女子供の相手をさせて、座興を添へる道具には、至極重寶な人間なれど、云はゞ下様で幇間などと申す輩に同じこと、大事を頼むはいかゞでござらう。……それとも梅野どのには、何か彼の男に見どころがござるかな。

梅野　さあ、取り柄と申すではござりませねど、人に知られた臆病が此方の見つけものでござります。たとへどのやうな惡事でも、刄物を見せて威嚇かしたら、命惜しさに必ず承知いたしまする。

叡負　承知はするにしても、輕口ばかり叩くのが商賣の珍齋、其の上あれ程臆病では又外の者に威嚇されては、我等の大事を口外せぬとは限りませぬわい。

梅野　此方の頼みを引受けて一旦惡事を犯した上は、それも罪に陷ちる譯、うつかり喋舌りはいたしますまい。

叡負　そこが珍齋ではさう參らぬ。たゞ目前の命惜しさに、何處へ行つても威嚇かされゝば直ぐべら／＼と白狀するは必定ぢや。

梅野　どうせ道具に使ふだけの人間でござんする。長い間にはそのやうな心配もござんす程に、一度お役に立てた後、こつそり片附けてしまつたなら、別段面倒はござりませぬ。その後始末は妾がきつと引き受けますれば、どうぞお任せなさりませ。それとも叡負様には珍齋の外に、お心當りがござりまするか。

叡負　さて格別に、心當りはござらぬが、……

梅野　そんなら猶更妾にお任せなさりませ。――珍齋を除

いては、お側の衆は皆奥方に忠義な者ども、それでなうても我々を鵜の眼鷹の眼で睨んで居る、油斷のならぬ人たちばかりでござんすぞえ。

お銀の方　成る程梅野の云ふ通り、あの珍齋を威嚇すより外に工夫は見あたらぬ。こゝは一番梅野に任せて仕終ほせて貰はうでは御座りませぬか。

靱負　いかさまなう、外に思案のない場合、これも強ち惡うござるまい。隨分危い計略ながら上手に行けば此れ程都合の好いことはござらぬて。……惡事にかけては一枚上の梅野どの。そなたの御意見に從ふ事といたさうかの、

梅野　憚りながらきつと手落ちのないやうに、仕遂て御覽に入れませう。殊に妾は娘のお由良を幼い折から召し使うて居りますれば、旁々珍齋とは主從の間柄、決して嫌とは云はせませぬ。

お銀の方　したが梅野、そなたどのやうな折を窺つて、珍齋に話をしやる。なんぼ相手が臆病でも、たゞ威嚇かしや義理攻めでは、やす／＼承知しまいがの。

靱負　迂濶な時には話せぬが、さればというてうか／＼しては居られまい。もう奥方のお産の日も大分迫つて參つた樣子、時機がおくれては一大事ぢや。

梅野　手筈の定まる上からは、早いに越したことはござりませぬ。明日とも云はず唯今すぐにお由良に云ひつけて、密かに連れて參るやうに致させませう。今宵此の場でお部屋樣の前へ呼びつけ、靱負樣を始として妾も玄澤も共々に、口を揃へて威嚇かして、散々膽を冷やさせたら、必ず利き目がござんする。

（時計が八つを打つ。）

梅野　おゝ、今のは八つの時、……もう玄澤が參る時分。……

靱負　はて、拙者はこゝに斯うしては居られぬが、……

梅野　きつと約束の場所へ來て、待つて居るでござんせう。妾はこれから玄澤を迎へに行つて參りまする、靱負樣にはお次ぎの間へお隱れなされて、樣子をお聞きなされませ。

靱負　（何事か腹に一物あるやうな句調で）いや／＼こゝらにうろついて、若しも彼奴に見咎められては却つて事の破れる基、玄澤も珍齋もそなたたちにお任せ申して、拙者は今宵は歸るといたさう。（立ち上る）

お銀の方　（男の袂を捕へながら）もし、お待ちなされませ。急にそのやうな事を云ひ出して、どうした譯でござんする。まだ其方には話もある。どうぞ物蔭に隱れて居て樣子を聞いて賜ひなう。

靱負　あまり其方の傍にへたばり着いて、狹い了見と笑はれるのも心苦しい、話があらば明日の夜の事、兎に角お

暇申すでござらう。

お銀の方　さつきの話を根に持つて、又そのやうにお拗ねなさるのでござんせう。どうでも妾は歸しませぬぞえ。

梅野　お部屋樣があのやうに仰つしやるものを、此のまゝお歸りなさるとはあんまりでござんする。もし靱負樣、われ〲二人であの玄澤をあやなすところを、まあお慰みに見とどけてお出でなさりませいなあ。

靱負　見屆けずとも拙者充分に安心いたした。……斷つて歸りたうはござらぬが、今日此頃の短夜に、ぐづ〲して居て空が白んで參つたら一と騷儀……願望成就するまでは、大事な上にも大事を取つて、用心せねばなりますまいに、惡くお取りなされては、拙者甚だ迷惑いたす。何卒おゆるし下されい。（輕くお銀の方の手を拂ひ除けようとする）

お銀の方　そんなら今宵はどうあつても……

靱負　はてまあ、お放しなされませい。（手を振り切つて廊下に出で、前の如く覆面をして改まつて鴫居際に兩手をつく）さやうならばお部屋樣、梅野どの、明日の夜更けに又重ねて。

お銀の方　きつとお越しを、待ちますぞえ。（靱負廊下の左方に立ち去る）

お銀の方　些細な事を胸に含んで、何ぞといふと意地の惡い靱負どの、どうやら機嫌を損じたさうな。

梅野　大事な用事を捨て置いて、俄かにお歸りなされたには、仔細がありさうでござんする。

お銀の方　いづれにしても其方は此處を片附けて、早う珍齋を呼んで來たがよいではないか。

梅野　ほんにさやうでござります。それに大方玄澤も妾の迎へを待つて居る筈、お由良を使ひに出した上で、唯今直きに此れへ連れて參ります。

お銀の方　（梅野が立つて行かうとするのを呼び止める）あ、これ梅野、待ちや。

梅野　何御用でござりまする。

お銀の方　ちよいと妾に耳を借しや。……

梅野　（傍へ寄つて耳をつけながら、聞いて居たが、そのうちに少し顏色を變へて心配さうに四邊をじろ〲見廻し始める）成る程、成る程、これも御尤もではござりますが、しかし先の御相談では、……

お銀の方　えゝまあ其のやうな理窟を云はずと、妾の云ふ通りにしやいなう。

梅野　（何か非常な事を覺悟したらしく）さう仰つしやれば詮ない事、えゝようござります。

お銀の方　そんなら早う。……必ずぬかつて賜るなや。…

梅野　心得ましてござりまする。

（梅野は座敷の内を片附けてから勝部を持つて次ぎの間へ退る。お銀の方は鏡臺に据わり、やゝ暫く化粧に念を入れてから、一と入輝くばかりに美しくなつて、再び元の席へ就く。程なく梅野が、外の廊下の右手の方から玄澤を案内して這入つて來る。）

梅野　（玄澤と共に廊下に畏つて平伏する）　申し上げまする。仰せに從ひ細井玄澤を唯今此れへ召連れましてござりまする。

お銀の方　（故らに威儀を繕つて）　おゝ玄澤が參つたか、こんな夜更けに大儀な事ぢや。早速此れへ通るがよい。

玄澤　はゝッ、恐れ入りまする。

（玄澤、梅野に導かれて座敷へ這入り、下手に据わる。頭を海坊主の如くくり／＼と剃つた色の青黑い、年齢の割にでぶ／＼脂漲つた狸のやうな男である。）

玄澤　お部屋樣にはいつも御機嫌美はしう。恐悦至極に存じまする。

梅野　（急に可笑さうに笑ひ出す）　おほゝゝゝゝゝ。これ玄澤、今宵はいつもと譯が違うて、お部屋樣と妾の外には、此のお局の居まはりに誰も聞いては居らぬゆゑ、そのやうな堅苦しい挨拶は止めにして、碎けた話をしたがよいぞえ。

玄澤　（狡猾らしい、勿體振つたお辭儀をする）　あはゝゝ相も變らず御如才のない梅野樣。忝う存じまする。

お銀の方　今は主從の間柄でも、其方と妾は昔馴染、何も遠慮はいりませぬ。

玄澤　さやうな事を仰せられては、此の玄澤も冷汗が流れまする。

お銀の方　また梅野とても其の通り、妾の事は常日頃から何一つ隱さず打明けて、姉妹のやうにして居る者ぢや。決して氣づかひせまいぞや。

玄澤　いや、お部屋樣にはよい片腕をお持ちなされて、結構な事でござります。男も及ばぬ智慧才覺が備つて、度胸の据わつた梅野さま、賴もしいお人でござりますわい。

お銀の方　ほんに其方の申す通り、妾は梅野の半分も智慧才覺があつたら、まあどのやうに嬉しからうと羨ましう思はれる。

梅野　飛んでもない事を仰つしやいます。妾はまたお部屋樣の半分も美しい器量になりたいとお羨み申して居りまする。

玄澤　此れはしたり梅野さま、成程お部屋樣は格別ながら、あなた樣とていつ見ても、若々しうお綺麗なことでござります。――まあ此處だけの話でござるが、あなた樣の御器量は、御家中の若侍の間でも中々評判でござりますぞえ。

お銀の方　其はさうと此の間、人知れず梅野に頼んで渡した筈の妾の文を、其方はよんでくれたであらう。

玄澤　へゝ、勿體ないことでござります。憚りながら拜見いたしたればこそ、此の玄澤も命がけで、斯うして忍んで參りました。――御覽なさりませ。（懷から文を出して見せて、直ぐ又懷中へ收める）此の通り、肌身放さず所持いたして居りまする。

お銀の方　それを聞いて妾も滿足、ほんに喜ばしう思ひますぞえ。

梅野　さうして其方はお文の外にもう一つ、頼んで置いた品物を、持つて來てはくれなんだか。

玄澤　持つて參らぬではござりませぬが、たとへお部屋樣のお頼みでも、うかとは差上げられぬ品、どうしたものかと思案に餘つてをりまする。

お銀の方　これ玄澤、其方は呑み込みの惡い事ぢや。萬事は妾が承知して、惡いやうにはせぬ程に、まあ其のやうな事を云はずと、素直に出したがよいではないか。

玄澤　あはゝゝゝ、どうせ乘りかけた船でござれば、拙者も今更臀込みはいたさぬつもり。――次第に依つては隨分お渡し申しまする。

お銀の方　したが梅野、その相談は後でゆつくり聞くとして、何はともあれ酒がなうては話が乘らぬ。昔馴染の玄澤に、妾が手づから酌をして取らせう程に、何か馳走をしたがよい。

梅野　成程さやうでござりました。唯今直ぐに支度をして參りまする。

（梅野退場。）

お銀の方　なう玄澤、其方はやつぱり昔に變らず大酒をするであらうなう。

玄澤　昔に變らず嗜みまする。しかし、酒に性根を奪はれて、うま〳〵一杯喰はされるほどまだ耄碌はいたしませぬ故、其處は御承知を願ひたう存じまする。

梅野　何を申すも夜更の事、格別馳走もないけれど、昔語りをお肴に打ち寛いで頂戴したがよいわいの。

玄澤　これは〳〵思ひ掛けない御心づくし、遠慮なく頂戴いたすでござりませう。

お銀の方　（親ら玄澤に酌をしてやる）其方とかうして酌み交はすのも、今宵が丁度八年目、ほんに久しいものぢやなう。

玄澤　あの節お生み遊ばした照千代樣が、早や此の頃は腕白盛りの御若君、さうして見ればもう八年にもなることでござりませう。

お銀の方　其方はあの頃に比べても一向年を取らぬ樣子、いつも元氣でめでたい事ぢや。

玄澤　拙者は以前に變りませぬが、お變りなされたはお部屋樣、意外ながら、昔地上に咲き出でゝ、谷間の花と人に愛でられたお身の上が、今は天上の星と輝き榮え給ふお仕合せ、御品威といひ、御ものごしといひ、あの時代の御俤はござりませぬ。運がよいと申さうか、お羨しいと申さうか、思へば思へば拙者などは、意氣地なしの骨頂でござりますわい。

お銀の方　妾がこのやうに立身したも、元はと云へばみんな其方の骨折りぢや。なう玄澤妾はいまだに其方の親切を忘れては居らぬわいなう。

玄澤　へゝ、さう仰つしやつて下されば、まあ忝なうござります。したがお部屋樣あの節骨を折りましたのは拙者ばかりでござらぬ筈、先づ第一に御家老の靱負樣、あの御人の御親切はなか〱お忘れにならないと見えまする。

お銀の方　なに靱負どのゝ親切ぢやと? おほゝゝゝ、ほんにまあわけもない。何を云うて居やるのぢや。成る程あの方の親切を忘れては濟まぬ譯なれど、どうしたものか妾は靱負どのが嫌ひ故、めつたに思ひ出しはせぬ。

玄澤　ふん、はゝゝゝ、まあ左樣でもござりませう。

梅野　ほんに御部屋樣は、靱負殿が大の嫌ひでござんすそえ。やゝともすれば御家老の威光を鼻にかけ、昔の事を恩に着せて、考へて見ても嫌らしい、思ひありげな色目使ひ、二言目には何のかのと、あてつけがましい事ばつかり仰つしやつて、てもまあ薄氣味の惡いお人ぢやわいな。

玄澤　その大嫌ひなお人と、よう御別懇になされまする。御酒は頂戴いたしても、拙者いさゝかも酩酊いたして居りませぬ。失禮ながら下世話に申す蛇の道は蛇とやら、近頃格別なお部屋樣と御家老との御仲を、氣付かぬ程の玄澤ではござりませぬて。（お銀の方と梅野とが顔を見合せて、密かに驚く）あはゝゝゝ。

梅野　酒に醉はぬと威張つて居ても、醉うたればこそ其のやうな惡推量、——一體其方は何處からそんな噂を聞きやつた。證據があるなら、兎も角も、めつたな事は云はせぬぞえ。

玄澤　はて、何處からも聞きはいたしませぬ。拙者の外に誰も知つては居りませぬ故、まあ御安心なさりませえ。——證據をいへなら申しませうが、それでは罪が深過ぎていさゝか興が覺めまする。御自分の胸にお尋ねなさるが、一番確かでござりませう。もしお部屋樣此の玄澤を味方に附けるお積りたら、そのやうな淺はかな御手際では、先づ覺束なうござりまするぞ。其れ程までに申し上げても、やはり隱し立てをなさりますかな。

お銀の方　（暫くうつむいて相手の言葉を味つて居たが、や

がて決心したやうにきつと面を擡げる）成る程玄澤の云ふ通り妾が悪うござんした。――昔の事は其方もあらまし知つてゞあらう。あの後間らずも殿の御情けを蒙つて、今の身の上となつてから、靱負どのとはふつつり切れて居たなれど、つい此の間奥御殿で御能拜見のあつた折、二た言三言口を利いたが縁となり今宵忍んで行く故に是非共會つてくれとの難題、いやぢやといへば八年前の内證事を洗ひ立てると威嚇されて、しよう事なく妾は納得したものゝ、何で眞實あの人に心を許して居ようぞえ。――現に今宵も此處に來てつい今しがた戻つたばかり、ほんに妾の迷惑を少しは察して賜ひなう。

梅野　お可哀さうにお部屋樣は、悪い蟲につけ狙はれて免れる道のない御災難、四五日前から靱負殿には夜な〳〵此處へお通ひなされて、今宵が丁度四度目の逢ふ瀬、心の中では妾も共々口惜し涙にくれて居るぞえ。

お銀の方　其方に隠し立てをするではないが、なまじ正直に打ち明けたら、却つて疑ひのかゝる基と思うたばかりに、實は今迄默つて居たのぢや。

梅野　さあ、もう此のやうに何も彼も打ち明けたら、其方の胸も晴れたであらう。

玄澤　すつかり胸が晴れましたと申し上げたい處ながら、靱負樣との御仲が無理往生やら眞實やら、何で拙者に解りませう。八年前にも度び〳〵手管に綾なされて、散々馬鹿を見た玄澤、今度は迂濶に欺されませぬ。

梅野　おほゝゝゝ、まあ玄澤の疑り深い。其方を欺してよい位なら、どうしてお部屋樣が先日のお文をわざ〳〵其方に渡さうぞえ。よう考へて見やいなう。

お銀の方　いやしい藝者稼業から、一足飛びに立身したが嬉しうて、浮氣はふつつり止めませうと心に誓つて居たものゝ、先達靱負殿に口說かれたのが病み付きで、以前の其方の親切が煩惱の種になり、堪へ切れずに書いたあの文、決して僞りではないぞえ。なう玄澤、どうぞ妾をみだらな女と笑うて賜んなや。

玄澤　…………

お銀の方　これ程云うても疑ぐるなら、其方に聞かせる事がある。――其方や、八年前に妾が生んだあの若君の照千代樣を、誰の種ぢやと思うて居る。高い聲では云はれぬが、あれは殿樣のお子ではないのぢや。

玄澤　さゝ、それも拙者はあの時からうす〳〵疑うて居りましたが、さてはやつぱり推量に違はず、……

お銀の方　まことをいへば照千代樣は、――これ玄澤何を隱さう其方の子ぢやぞえ。

玄澤　えゝ、何と仰つしやります。（一旦は非常に吃驚したが、直ぐ用心して再び皮肉な笑顔になる）はゝ、途方

もない事を仰つしやります。殿の御種でおはさぬからは、てつきり靱負様のお種でござりませう。

お銀の方　成る程其方がさう思ふのも無理はない。已惚れの強い靱負様が自分の種ぢやと思ひ込んで、行く〳〵お家を押領したいばつかりに、妾を此のやうに引き立てゝくれた故、その積りにさせては居れど、まことを云へば照千代様は其方の子なのぢや。

玄澤　拙者も一時は已惚れから、さうではないかと迷うた事もござりますが、今ではそんな妄想を夢にも抱いて居りませぬ。それにまた、たとへ拙者の子にしてからが何の役にも立たぬこと、無駄な詮議でござります。

お銀の方　さあ其處ぢや。――其方は妾と心を協せて、悪企みのある靱負どのを道具に使ひお家を乗つ取る氣はないかえ。お盜の前にあの奥方をないものにして、照千代様に御家督を取らせたいとは思はぬかえや。

玄澤　いかさまそれもお部屋様には面白うござりませう。照千代様が全體誰の子供やら、そこの秘密を御存知なのはお部屋様だけでござります。うかと悪事に加擔して首尾よく事が運んでも靱負様と玄澤では、どちらが道具に使はれるのやら、心もとなうござりますわい。

お銀の方　其方のやうに拗ねて、さう何時までも邪推しては埒のあく時はないわいの。――そんならいつそ其方が安心するやうに、先づ邪魔の靱負殿を殺してしまひ、二人で事を謀らうではないか。なう玄澤、これまで云うても不承知かや。

玄澤　お部屋様、そりやほんたうのお言葉でござりまするか。

お銀の方　何で僞を云はうぞえ。どうせ長くは生かせて置けぬ靱負どの、幸ひ恐ろしい薬の利き目を試しかた〴〵、其方が手づから一服盛つて、そつと飲ませてしまつたら何の造作もいらぬこと。……

梅野　それには丁度都合のよい事がござります。靱負どのには明日の夜も忍んで來るは必定故、其の折其方はお次ぎの間に隠れて居て、妾が運ぶ銚子の中へ薬を交ぜてくれたなら、誰にも知れずに片付くわいの。

お銀の方　奥方の方はわれ〳〵二人が引き受けて、必ずそつのないやうに仕遂げて見せるぞえ。

玄澤　ようござります。それで話が拙者にも面白うなつて参りました。もう此の上はお部屋様の一味に加擔いたした印に、お約束の薬三服、たしかに進上いたしまする。

梅野　そんなら玄澤、きつと承知してくりやるか。

玄澤　はて、御念には及びませぬ。

お銀の方　妾もやう〳〵安心したわいの。

玄澤　（懐中から薬の包みを取り出しながら）　此の粉薬は

憚りながら、拙者が秘傳の世に類ひない激しい魔藥、一服飲めばまたゝくうちに五體が痺れ、悶絶するは必定でござりまする。先づ手始めに靱負殿を明日の夜、拙者が試して御覽に入れませう。

お銀の方　そんなら此の藥は、妾がたしかに貰つておくぞえ。（三包になつた藥の袋を受け取らうとする）

玄澤　あ、もし、暫くお待ちなさりませ。――三服といふ御註文ではござつたが、靱負殿を仕止めるのは拙者の役目、奥方の方は一服あつたら澤山でござりまする。御用があらば又差上げる事にして、殘りの二服は拙者がお預り申して置きませう。

梅野　したが何時役に立たうも知れぬ品、奥方ばかりか此れから先、どのやうな邪魔者が出て來ないとも限らぬ故、まあ用心にそれだけ寄越してくれた方が、まさかの場合に重寶であらうぞい。

玄澤　いかさま其れも御尤も、然らばたしかに預け申すといたしませう。

お銀の方　（藥を受け取つて梅野に渡す）梅野、此れを妾の手文庫の底へ、しつかり收めておいたがよい。

梅野　畏りました。（違棚の下の地袋を開けて、手文庫の中へ收める。）

お銀の方　ついでに其處から、先日整へておいた物、此方へ出して渡してくりやれ。

梅野　畏まりました。（三寶の上に金子の包を載せて、玄澤の前へ持つて來る）――これ玄澤、早速ながら、かねて約束の二百兩、當座の褒美にお部屋樣から下さりまする。頂いておきやいなう。

玄澤　はゝツ、有り難う存じまする。折角の思し召し、忝うはござりますが、此の褒美は大望成就の曉にいづれ纏めて頂戴いたすでござりませう。

梅野　はてまあ、それはどうした譯ぢや。

玄澤　もしお部屋樣、拙者は此の金子より外に大事なお願ひがござりまする。

お銀の方　身にかなふ事ならば、何でも聞屆けて進ぜますが、さうして其方の頼みとは？――

玄澤　（安心したせゐか、だん／＼醉が廻つて來て言葉がぞんざいになつて來る）はゝゝゝもし、お部屋樣、今更改めて申さいでも、大概おわかりになりさうなもの、はゝゝ、もし、さう玄澤を焦らさずと、よい程にして喜ばせて下さりませ。

梅野　何やら知らぬが其方はほんに可笑しなお人ぢや。謎のやうなことを云はずと、はつきりと云うたがよいではないか。

玄澤　いや梅野さまの性悪な。何も彼も御承知の癖にして

知らぬ振をなさるとは、お情なうござるわい。お願ひと申すは實はその、其方が居てはちよつとばかり都合が惡うござりますが、あの、それ先日のお文に書いてござつた、金子の外のもう一つのお約束、――あの事でござりまする。

梅野　おゝその事なら妾がちやんと心得ては居るけれど、生憎今宵はお茶坊主の珍齋が參る故、明日まで待つたがよいであらう。かう話がきまつた上は、それ程急ぐには及ばぬわいなあ。

玄澤　なに、珍齋が參りますとな。して今時分何用あつてあの男がかやうな席へ？

梅野　さあ、其の話は其方に今迄せなんだが、今宵ひそかにあの臆病者を呼び寄せて、三人がゝりで威嚇しつけ、奥方へ藥を上げる大事な役目を引き受けさせうと云ふのぢやわいな。

玄澤　成る程此れはよい思ひつき。しかし彼奴は平常から口數の多い人間故、役目を果したその後では靱負樣同樣に、一服盛つてしまはねば面倒でござりませう。

梅野　それも手筈がきまつてゐる。大事な藥を使はずとも、珍齋ならば妾ひとりで器用に仕止めて見せまする。

玄澤　敵に廻せば油斷がならねど、味方にすればほんに賴もしい梅野さま、此れから後は何かにつけて拙者の爲めにもよい片腕、心丈夫に存じまする。

梅野　その片腕の妾が言葉に從つて、今宵一と夜は辛抱したが、お二人樣のお爲めであらう。

玄澤　實の山に入りながら、何とやら云ふ例もござるが、さう云はれては拙者も手出しがなりませぬ。でも明日の夜が待ち遠でござるなあ。

梅野　おほゝゝゝ、年にも似合はぬ氣早な玄澤、止めては見たが氣の毒な。その待ち遠さは察してゐるぞえ。

お銀の方　これ梅野、玄澤ばかりを氣の毒がらずと、少しは妾の胸を察して賜るがよいわいの。八年振りの思ひのたけを打ち明けて、誰憚らず積る話がして見たう、明け暮心に祈つて居た今宵の逢瀬、そのうれしさを壞さうと云ふは、えゝまあほんに焦れつたい、其方はあんまり酷うはないか。玄澤が承知しても、妾はなか／＼不承知ぢや。

梅野　これはしたり、お部屋樣からその仰せでは、妾が困つてしまひまする。

お銀の方　何の其方が困らうぞえ。いつも／＼分別臭い事を云うて、人の戀路の邪魔ばかりする天の邪鬼、靱負どのとは譯が違うて、今度は妾も本氣ぢやぞえ。

玄澤　此れは／＼お出來かしなされたお部屋樣、さうなうてはかなはぬところぢや。あの性惡な梅野さまを、たん

と慰らしめておやりなされい。あはゝゝゝ。

梅野　えゝ、其方までが一緒になつて、たわいのない事を云ふではない。

お銀の方　まだ珍斎の見えるまでには時刻があらう。せめて其の間に玄澤としんみり話がしたい故、梅野はあの。おゝそれ〳〵、紅葉の間の廊下のあたりへ行つて、珍斎の来るのを見張つて居やいなう。

梅野　はてまあ是非がござりませぬ。どうとも御意に入るやうに致しませう。（次ぎの間へ下つて、直ぐ再び熱燗の銚子を携へて出て来る）さあ玄澤、熱いところを其方に一つお酌をして妾は遠慮するわいの。

玄澤　あはゝゝ、梅野さまにはいかい御迷惑、いづれ御禮はいたしまする。

梅野　（冷やかに微笑する）さやうならばお部屋様、お楽しみはさる事ながら、どうぞ御油断なさやうにくれ〳〵もお願ひ申しまする。

お銀の方　もう〳〵わかつてゐる程に、いらぬ心配しやんなや。

（梅野退場。）

玄澤　さあかうなれば誰憚らぬさし向ひ、お一ついかゞでござります。拙者のお酌も満更ではござるまいて。

お銀の方　いえ〳〵妾は酔ひ過ぎて、先程から少し頭痛がする様子。昔は其方と飲みくらべをした仲なれど、もう此の頃ではとんと意気地がないわいの。――さゝ、妾がお酌をする程に其方こそたんと飲んだがよいぞえ。（ぐつと玄澤に摺り寄つて銚子を取る）

玄澤　いや、忝うござります。命がけの仕事の積りで忍んで参つた此の玄澤、却つて壽命が延びまする。

お銀の方　其方や、そのやうにうれしいかや。

玄澤　うれしうなうて何といたしませう。全く今宵は夢のやうで、空恐ろしうござるわい。

お銀の方　忍んで来るのが命懸けなら、妾の方も命懸け、このやうな空恐ろしい罪を妾が犯すのも、みんな其方の爲めではないか。なら玄澤、此れから後は必ず〳〵浮気をしてはなりませぬ。

玄澤　浮気どころか拙者は又――もし、お部屋様、あなた様の方が心配でござりまする。

お銀の方　何で浮気をしようぞい。かうなるからは妾は一生、其方を離れはせぬわいなあ。

玄澤　しかし斯うして居りますと、失禮ながら昔のあなた様の意気なお姿が、あり〳〵と浮んで参りまする。これ、いつぞやあの柳橋の茶屋の一と間で、拙者の端唄にあなた様が調子を合せてお弾きなされた三味線の奥床しさ。しつとりとした水調子を大川の流れに響かせたのも丁度

此のやうな晩でござりましたなあ。

お銀の方　ほんにあの頃の面白さ。今では殿のお情で、お部屋様とあがめられては居るもの丶、こんな窮屈な御殿に暮らして居ようより、自由な昔の身の上が、そゞろに戀しい折もある。

玄澤　殿様といへば近頃はます／＼あなた様に御執心、夜も晝もぺつちやりと、お側をお放しなされぬと承つて居りましたが、今宵は全體どう遊ばした事でござります。

お銀の方　あまり執拗く着き纏はれてうるさうてならぬ故、この十日程假病を使つて引き籠つて居るなれど、毎日のやうにまだ直らぬかとの御催促、噂にきけば妾に會はれぬ腹立たしさに、例の癇癪をお起しなされて、昨日も近侍の侍をお手打ちに遊ばしたとやら、ほんに／＼くさくさするわいな。

玄澤　いやはや毎度の事とて珍らしうもござらぬが、相變らずの御亂行、あのやうな氣違ひにおなりなされたも、皆お部屋様のお蔭ながら、まことにたはけた馬鹿殿様でござるわい。

お銀の方　其の亂行が此方のためには却つて仕合せ、お家を思ふ忠義者は片つ端から手打ちにされて、殺されてしまふがよいではないか。

玄澤　先づあの分では殿の御壽命もあまり長うはござるまいが、次第に依つては此の方も、殿様同様にしてしまはねばなりますまい。

お銀の方　それは惡うはないけれど、一度にやつては嫌疑の種、よい潮時を窺つて追ひ／＼に手を廻はすのが上分別ぢや。

玄澤　（俄かに横腹を抱へて苦しみ出す）　あいた、あいたあいた丶丶丶。

お銀の方　これ玄澤、どうしやつた、何處ぞ加減が惡いかえ。

玄澤　あいた、あいた、あいた丶丶丶丶。（忽ち激しい痙攣が襲つて來たらしく、物凄く呻吟する）

お銀の方　（玄澤の傍から逃げるやうに飛び退つて、彼の表情を凝視する）　これまあ其のやうに苦しみ出して、ほんにびつくりするではないか。生憎のこと梅野は居ず、妾一人で手の附けやうがないわいの。

玄澤　う――む、苦しい、……は、は、腹が掻き拗られるやうでござるわ。……さ、さ、さてはあなたは先刻の藥を、拙者にお飲ませになりましたな。

（お銀の方、相變らず默然と凝視して居る。）

玄澤　ちえ丶欺されたか、殘念だ。（云ふと同時に相手を眼がけて組み付かうと試みたが、ばつたり臀餅を舂いて倒れる）畜生――だ、だ、だれか來てくれ！　ひ、人殺

しだ！

お銀の方 （玄澤の傍へ近寄り、頭の所に佇んだまゝ相手の顔をつく〴〵と見下す）欺されたのを今知つたとて遅いぞえ。もう大人しく觀念しや。

玄澤 ひ、ひとごろしい……

お銀の方 （靜かに帶の間から懷紙を取り出して、玄澤の口を塞ぐ。舞臺廻る）

第 二 場

場面――舞臺の左方に梅野の部屋、部屋の前には疊廊下がついて居て、くの字なりに右側へ繞り、眞直ぐに奥の方の暗闇へ走つてゐる、その暗闇のつきあたりの處が丁度お銀の方の部屋らしく、襖の隙間から燈の影が洩れて居る。それ以外には舞臺に一點の火光もない。前の場面と同じやうに白綸子の蚊帳が一と張り、室内の左手寄りに吊られてある。蚊帳の中には誰も寢て居ないのであるが、萬一寢て居たところで明りがないから、外より樣子はわからない。その他、部屋の中の調度は凡べて朦朧と闇に浸つてゐる。

疊廊下の左の方から腰元のお由良がお茶坊主の珍齋を伴うて出て來る。右の手に雪洞を携へ成るべく光が散らぬやうに左の袂で蔽うて居る。いかにも正直で賢さうな、うら若い愛らしい娘である。父の珍齋は、此れも娘の親とは思はれない程に顔も心も若々しい、色白の、水々とした青坊主である。著しく剽輕で臆病だといふことはその眼つきを一見すれば直ちに頷かれる。

珍齋 はて此のやうに眞暗ではさつぱり樣子が判らぬが、……これ娘、（廊下の中程へ來て、お由良の手を摑んだまゝハタと立ち止まる）そこにふら〳〵と薄氣味惡う動いて居る物は、あれは何ぢや。

お由良 えゝ何處でござります。なにもそのやうな氣味の惡いものはござんせぬ。

珍齋 それ、それ、そこを見やいなう。何んぢや知らぬが暗闇に白い物がふら〳〵と動いてゐるに違ひない。

お由良 おほゝゝゝ。まあお父樣の臆病な。あれは蚊帳でござりませうが。

珍齋 成る程〳〵、さう云はれゝば蚊帳らしいが、どなたが休んでおいでになるのぢや。

お由良 こゝは梅野さまのお部屋でござんすわいな。

珍齋 なに梅野樣のお部屋ぢやと？ これはしたり、何しろかやうな眞暗闇でとんと見當がつかぬため、飛んだ疎忽をいたしてござる。（廊下に畏まり、蚊帳に向つて叩頭する）へゝゝゝ、もし梅野さま、お召しに依つてお氣に入りの珍齋めが、唯今罷り出でましてござりまする。

お由良　（雪洞で蚊帳の中を照らして見ながら）　蚊帳の中はからつぽなのに、父樣何をして居やるぞい。大方梅野さまは、まだ奥の間でお部屋樣の御相手を勤めて御いで遊ばすのでござんせう。暫くこゝにお待ち申して居ようわいの。

珍齋　なんの事ぢや。また此の蚊帳に欺されたか。あはゝはゝゝ。

お由良　もし、お靜かになさりませ。お聲が高うござんする。

珍齋　（あわてゝ口を抑へる）　どつこい、油斷がならぬわい。頓興な聲は地聲故、つい／＼調子が高くなる。――それにしても此の夜更けに密々のお召しとは、どう云ふ譯であらうかなう。御用を承らないうちは何やら氣がゝりで溜らぬが、其方は樣子を知らぬかの。

お由良　どう云ふ譯か一向に存じませぬ。たゞ珍齋に至急頼みたい事がある故、今宵密かに連れて參れと梅野樣のお云ひ附け、先刻私が寢て居たところを起されて、急にお使ひに立たされたのでござんする。

珍齋　その密々の御用と仰つしやるが、どうも私には腑に落ちぬて。

お由良　父樣は勿論私とても、今宵の事を口外したら許しはせぬ。事に依つたら命にもかゝはるぞと、嚴しいお達しでござんしたぞえ。

珍齋　なに命にもかゝはるとか？……う、う、嫌なこと嫌なこと、そんな恐ろしい御用には係り合ひたくないものぢや。

お由良　私も氣味惡う思うたなれど、お言葉に從はねば又どのやうな難儀にならうも知れぬ故、よんどころなく父樣をお迎へに行つたのでござんする。

珍齋　口外するなと云はれても、人一倍お喋舌りな私のこと、いつ何時うつかりと舌がすべらぬ物でもないが、それで命をとられては溜らぬわい。なう娘、何とかして今宵のところは御免しを願ふ譯には參らぬか、その話を聞いてから、何だか足がすくんでしまつて、も一寸も行かれぬわえ。

お由良　どんな御用か聞かぬうちから、そのやうに恐ろしがつても詮ないこと、臆病も好い加減になされませい。

珍齋　これ、ちよいと靜かにするがよい。……氣のせゐか知らぬが、どうも不思議な呻り聲が遠くの方から聞えて來るやうぢや。

お由良　えつ、呻りごゑ……

珍齋　それ、それ、あれがお前に聞えぬかいやい。

（兩人沈默して耳を欹る。奥の方から玄澤のうめく聲がかすかに響いて來る。）

お由良　おゝ、あれはたしかに呻り聲……それではやつぱり推測通り、玄澤殿か……

珍齋　なに玄澤ぢや、お醫者の洲井玄澤殿か、今頃此處においでなさるのか。

（お由良默つて何か考へてゐる。呻り聲が又聞える。）

珍齋　これ娘、急にそのやうな仔細らしい顏つきをして、何を考へ初めたのぢや。一から十まで合點の行かぬ今宵の樣子、譯を知つて居るのなら、そつと教へてくれぬかえ。これお由良、まあ氣味の惡い、どうしたと云ふ事ぢや。

お由良　もし父樣、譯をそなたに教へた事が知れたなら、私も多分命はないにきまつて居るが、たとへ教へるなと云はれても教へずにはをられぬ仕儀――お家の大事に係はること故、びつくりせずに氣を落ち付けて、よう聞いて下さりませ。

珍齋　はて滅相なことを云ふ。それだけ聞いても私はもう體中がぶる／＼顫へて、動悸が早鐘を打つやうぢや。そのやうな空恐ろしい話なら、いつそ聞かずに置くとしようか。

お由良　いえ／＼聞くのが恐ろしうても、聞かせぬ譯には行きませぬ。常々から臆病な父樣ゆゑ、それを聞いたらどのやうに膽を冷やすことであらうと、今まで控へては居たなれど、遲かれ早かれどうせ一度はそなたの耳へ這入ること、覺悟をきめて私の話をとつくり聞いて下さんせ。

珍齋　えゝそのやうな前置きは拔きにしてくれ。威嚇し文句は眞平ぢや。

お由良　何で私が父樣を威嚇かすやうな意地惡るをしようぞえ。しつかり心を落ち着けて、話を聞いて貰つた上、次第に依つたら父樣も、お家の爲めに命を捨てねばならぬところでござんする。

珍齋　えゝもう分つて居るといふに、私は覺悟をして居るから、さつさと話すがよいではないか。

お由良　私とてもたしかな事は云へぬけれど、此の間から樣子ありげな話の模樣を襖越しに聞いて居れば、お部屋樣と御家老の靱負樣とが一つになつて、お家を押領しようと云ふ惡企み、それには勿論梅野樣も加擔人でござんする。――もし父樣、あの三人はても恐ろしいお方ばかりでござんすぞえ。……

（珍齋はすつかり元氣を失つて、生きた心持もないやうに俯向いたまゝ聞いて居る。さうして時々返辭の代りに怯えた眼つきで娘の顏を訴へるが如く偸み視る。右側の廊下を梅野が忍び足で歩いて來る。暫く暗がりに佇んで、お由良の話に耳を傾けて居たが、きつと思

案をしたらしく、室内へ這入つて蚊帳の中に隠れてしまふ。兩人とも心づかず。)

お由良　詳しい事は知りませぬが、あのお部屋樣の素情といふは、何でも卑しい藝者上りで御家老樣とは昔馴染の間柄、――そればつかりか若君の照千代樣は、あの二人の間に生れたお子さんでござんすわいな。

珍齋　えゝツ、そんなら照千代樣は、殿樣の御種ではないと云ふのか。

お由良　さあ、密談の工合ではさうらしうござんする。お部屋樣には其の後長らく殿樣と御縁が切れて居たところ、どう云ふ譯かつい五六日以前から昔の縒が戻つた樣子で、毎夜のやうに奥の間へ御家老樣を忍び込ませ、不義を重ねておいでなさりまする。

珍齋　あんまり思ひがけない話で、わしにはとても本當のやうな氣持ちはせぬが、其方はたしかに御家老樣の御出のところを見屆けたかな。

お由良　それはたしかでござります。惡い事は出來ないもの、御殿の内で誰一人知る者はないと思ひの外、私がちやんと見屆けて居るのぢやわいな。不義はまだしもなれど、捨ておき難いは照千代樣を種にして、お家を乘つ取らうと云ふ謀叛の相談――まあお聞きなさりませ、今度奥方が御姙娠遊ばしたのを殘念がつて、玄澤殿に毒藥を拵へさせ、お産の前にこつそりと母君諸共胎内のお子樣をないものにしてしまはうと云ふ計略……

珍齋　して見ると、玄澤殿はお部屋樣の一味ぢやな。

お由良　一味どころか玄澤殿もお部屋樣とは昔馴染、切つても切れない惡縁らしうござんする。照千代樣は何を隱さう其方の子ぢやと、お部屋樣にうまく〵欺されて、あの慾深な玄澤どのが今宵ひそかに毒藥を持つて來たのはよいけれど、……まあ、あの呻り聲をお聞きなさりませ。

珍齋　おゝ寒む、寒む、何だか私は體中がぞく〵して來たが、もうその邊で話を止めぬかい。

お由良　いゝえ父樣、これからがほんたうに大事なところ父樣のお身の上にもかゝはる話でござんすわいな。……可哀さうに玄澤どのは、惡に與した天罰とは云ひながら、お部屋樣の罠にかゝつて、自分が作つた毒藥を梅野樣から御酒に混じてすゝめられ、ついうか〵と飲まされてたつた今あの通り、死ぬ最中でござんする。――あの藥さへ手に入れゝばお部屋樣には邪魔者の玄澤どの、遲かれ早かれ殺されるにはきまつて居れど、こよひ此の場であへない最期を遂げたのは、よい見せしめでござんする。

珍齋　それにしても私への御用といふのは何ぢや。餘計な事を喋舌らずと、梅野樣が此處へお見えにならぬうち、早く其の方を教へてくれ、あゝいやな事になつたなあ。

お由良　先程そつと奥の間の外の廊下で立ち聽きをした圖、梅では、玄澤どのゝ拵へた粉藥を奥方の召し上る御膳部の中へ振り撒くのが、父樣の御役目でござります。

（珍齋、默つて唯ぶる〳〵と顫へて居る。）

お由良　これを聞かねば殺すといつて威嚇しつけ、是非とも父樣に引き受けさせると、梅野さまが仰つしやつておいでになりましたわいな。

珍齋　…………

お由良　もし父樣、そのやうに恐がつてばかり居るところでござんせぬ。私は父樣の覺悟が聞きたうござります。今にも梅野樣がお召しになつて、奥の間へつれて行かれ大事を明かして頼まれたら、まあ何となさりまする。

珍齋　いくらお召しになつたとて、そんな所へ私は行かれぬ。此れで御免を蒙る故、後はよろしく其方に頼む。

お由良　（あわてゝ逃げ出さうとする珍齋の袂を捕へる）まあ〳〵お待ちなさりませ。此のまゝ逃げてよい程なら、私はわざ〳〵父樣をお連れ申しはいたしませぬ。

珍齋　はて柔んでもない事を云ふ女だや。そんなら私に惡企みの手傳ひをさせる了見かの。

お由良　いゝえさうではござりませぬ。お家の爲めに捨てゝ置かれぬ場合ゆゑ、疾うから私は密告しようと考へては居るけれど、動かぬ證據を摑まぬうちに迂濶な[illegible]出來ぬと思うて差し控へて居たのでござんす。なう父樣、今宵そなたをお召しになつたはもつけの仕合せ、わざと頼みを引き受けたやうに見せかけて、一味徒黨の數はもとより、事情を殘らず搜つた上、私に知らせて下さんせ。まだ御家中にどのやうな加擔人があらうも知れず、無闇な人に明かせぬ相談、それで父樣にお願するのでござります。

珍齋　密告するのもよいけれど、若しその前に見つけられたらどうするのぢや、今も其方が云ふ通り、どんな所にお部屋樣の味方が居ようも知れぬぞえ。年はも行かぬ娘の癖に、そのやうな危いことには近寄らぬのが何よりぢや。先づ止めにせい、止めにせい。

お由良　では父樣はお家の大事を聞きながら、うつちやつて置く御所存かえ。

珍齋　お家の大事も命には換へられぬ。もうそんな事は眞平眞平。

お由良　そのやうに頭から恐がらずと、よう考へて下さりませ。父樣の命も助かるやう、忠義の道も立つやうにしたがよいではござんせぬか。お部屋樣に頼まれたら、表向きは何處までも承知して、一味に加はる誓を立てたら其の場は無事に濟みまする。それから後で私と一緒に密告すれば、惡人たちは一と網に召し取られ、そなたは却

つて御褒美に預るわいの。

珍齋　それでもやつぱり裏切りをしそこなつて、見付けられたら大變ぢや。萬一首尾よく行つたところで、若し一人でも一味の奴が殘つて居たら、きつと意趣返しをされるであらう。そんなあぶなつかしい藝當はとても私には出來ぬわい。

お由良　謀叛の裏切りをしたからとて、誰が意趣返しをしませうぞえ。ほんに父樣の臆病は方途が知れませぬわいな。

珍齋　いや〳〵なか〳〵さうであるまい。相手がそれほどの惡人では、定めて裏切りのできぬやうに、充分手配りが就いて居ようぞ。そなたと私が密告したと分かつたなら、たとへ御褒美を頂いても、惡人ばらに恨まれて、どんな風に讐を取られるか知れぬこと、わしは半日でもそんな苦勞をするのは御免ぢや。

お由良　そんなら父樣はどうしても私の頼みを聽いてくれぬかえ。お家の爲めに忠義を盡す積りはないかえ。

珍齋　忠も不忠も命あつての物種ぢや。……こんな物騷なところで、いつ迄其方と話をしては居られない。ぐづぐづして居て梅野樣がお出になつたら百年目、何しろ私は逃げ出すから後はよろしく頼んだぞ。

お由良　（再び珍齋を引き止める）　まあお待ちなさりませ。ようござります。これ程云うても父樣が嫌ぢやと云ふなら詮ないこと、もうお頼みは申しませぬ。

珍齋　頼むと云うても頼まれはせぬ。えゝ早くそこを放してくれぬか。

お由良　さう云ふ譯なら私も父樣と御一緒に逃げまする。幼い折から大恩を受けた御主人の梅野さまを見捨てゝはすみませぬが、此の上御奉公をして居ればいづれ私も難儀を受けるにきまつて居る。怪我誤りのないうちに私を逃がして下さんせ。

珍齋　うん、それがいゝ、それがいゝ。さうきまつたら寸時も早く一緒におぢや。……（急に考へ直して又立ち上る）けれどもなあ、これお由良、其方どうしても此の場を逃げる了見なら、私と別別に逃げてくりやれ。私がお前を唆かして逃がしたやうに、お部屋樣から睨まれては大變ぢや。

お由良　それは御安心なさりませ。此の場は一緒に逃げ出しても、私は父樣に匿まうて頂かうとは存じませぬ。此れから直ぐに江戸を落ち伸び、お國表へ駈けつけて、謀叛のきざしを御城代へ訴へて出る所存でござんす。私獨りでする仕事ゆゑ、決して決して父樣に御迷惑はかけませぬ。

珍齋　やれ〳〵其方の忠義立てには困つたものぢや。先刻

から口を酸つぱくして云ふ通り、萬々が一仕損じたら其方は愚か私の首まですつ飛んでしまふわい。いくら迷惑はかけぬ積りでも、やつぱり迷惑が掛つて來る。強つてそのやうな眞似をするなら、親子の緣を切つてしまふからさう思へ。

お由良　親子の緣は切られてもお家の爲めならせんないこと、どうぞ父様、お許しなされて下さりませ。

珍齋　そんな大それた娘とは、もうちよつとでも一緒に歩くのは迷惑ぢやが、此の時間では廊下の方角がさつぱりわからぬ。直ぐ其處邊まで案内をして貰うて、それから後は別々ぢや。さあ〳〵早うせぬかいな。梅野さまに見つけられたらおしまひぢやぞえ。

お由良　ちよいと、もう一遍待つて下さんせ。證據の品を一つも持たずに逃げて行くのも殘念な、何かよい手がゝりはないものか知らん？　おゝ、さうぢや、さうぢや、いつも梅野さまの枕許においてある、嚴重な鍵のかゝつた蒔繪の手箱、あの箱の中は何か曰くがありさうぢやが、ひよつとして證據の品が這入つて居ようも知れぬ故、ついでに盗んで行くとしよう。

珍齋　これ！　馬鹿なことをしてはならぬ。（お由良、珍齋の手を振り切つて蚊帳の中に這入る。直ぐに彼女の悲鳴が起る。同時に或る物體が蚊帳の外へ轉り出す。それがお由良の死骸である。）

梅野　（蚊帳の中から血刀を提げて現はれる）これ珍齋其方の娘の死に樣を見や。妾に裏切りする奴は、誰であらうが此の通りぢや。わかつたかえ。

珍齋　へ、へ――え。（と云つたまゝ、腰を拔かしてへつたりと据わる）

（舞臺が廻つて、再び第一場のお銀の方の居間になる。）

第三場

お銀の方が玄澤の死骸の傍にうづくまつて煙草を吸つて居る。其の他は第一場の通り。梅野が左の襖を明けて獨りで這入つて來る。衣服を改めて來た樣子。

梅野　もし、藥の利き目はいかゞでござりました。

お銀の方　ほんに首尾よう行つたわいの、世にも物凄い毒藥ぢやと、自分で效能を述べた通り、――まあ此の姿を見やいなう。

梅野　ても恐ろしい藥の利き目、まあ人間といふ者は、脆いものでござんする。

お銀の方　さう云へば先き此奴が懷へ入れて居た妾の附け文、あれを此方へ取り出して賜れ。

梅野　おゝ、よろしうござります。（屍骸の懷へ手を差し

入れて文を取り返し、お銀の方に渡す）

お銀の方　此奴を欺しておびき寄せたいばつかりに、靱負殿には内證で、心にもない附け文をしたもの〻、殺してしまへばあの方のお疑ひも晴れるであらう。

梅野　玄澤を殺すなとは仰つしやつても、實は殺してしまひたいのが靱負樣の御本心、お部屋樣がお手づから御成敗遊ばしたとお聞きになつたら、きつとお喜びなさりまする。

（右側の廊下にみし／＼と足音がする。兩人竦然として身構へをしながら音の方を見守る。靱負が再び以前の服裝で覆面を取つて這入つて來る。）

梅野　おゝ、あなたは靱負樣。最前お歸りになつた筈が、どうして又こゝへ？

靱負　はゝ、實は歸ると見せかけて、蔭に隱れて聞いて居りました。

お銀の方　えゝッ、そんなら今の一分始終を？

靱負　面目もない次第ぢやが、お前樣の實意を疑うて、玄澤との話の模樣を搜つて見たのでござります。

お銀の方　搜つて見たら妾の實意は分つたであらう。其方をいとしう思へばこそ、自ら玄澤を手にかけたのでござんする。なう靱負どの、もう疑ひは晴れたかえ。

靱負　今となつて晴れましたが、實は先程廊下の外で聞いて居ると、やれ附け文を讀んだかの、照千代樣は其方の子ぢやの、揚句の果てには拙者に毒を飲ませようのと、睦しさうに語らうて居るお前樣の口振りに、玄澤ばかりか拙者まで欺されて、全くハラ／＼いたしたわい。

お銀の方　おほゝゝゝ、容易なことでは手管に乘らぬ玄澤ゆゑ、わざと安心させる爲め心にもない其方の惡口やら附け文やら。どうぞ免してくりやいなう。

靱負　さても／＼裏の裏かくお前樣の手管の凄さ、今度はお許し申しますが、拙者にだけは其の手は眞平でござりまする。

お銀の方　其方にだけは封じて居れど、若しも浮氣をした時は、どうなる事か知れぬぞえ。

靱負　さうと聞いては猶のこと、浮氣などはできませぬ。したが梅野どの、首尾よく藥が手に入るからは、後の役目は珍齋ぢやが、彼奴はいまだに參りませぬかな。

梅野　さあ其の事でござんする。實は召し使ひのお由良奴が、年はも行かぬ娘の癖にいつの間にわれ／＼の相談を嗅ぎつけたのやら、先程父の珍齋を妾の留守へ呼び入れて、餘計な入れ智慧をした故、よんどころなく其の場で斬つて捨てました。

靱負　えゝッ、して珍齋はいかゞいたした。

梅野　娘の最期に膽を潰して氣を失うたのを幸ひに、廊下

の柱へ括り付け、逃がされぬやうにして置きました。

靫負　さて〳〵其れは困つたことぢや。入れ智慧をされて居ては、尚更頼む譯には參らぬ。不憫ながら娘と一緒に片附けてしまはねばなりますまい。

梅野　いえ〳〵其れには及びませぬ。いくら娘が裏切りをするやうに說き勸めても、それは〳〵をかしい程お部屋樣の御威勢を恐れ憚つて、たゞもう逃げを張つてばかり居た樣子。あの分ならばきつとおどしが利きまする。

お銀の方　おどすのもよいけれど、一旦承知して置いて、後で訴人をするやうな、ひよんなことにはならぬかえ。

梅野　いえ大丈夫でござります。訴人をしたらわれ〳〵の一味の者にきつと讐を取られると恐がり切つて居りまする。あれでは此方が嚇さぬ前から、もう充分に威嚇かされて居るのでござります。

靫負　いかさまあの臆病では、そのくらゐの事はござらうも知れぬ。兎に角これへ呼び出して、とくと素振りを見定めるといたさう。

お銀の方　したが此の屍骸を見たら、又珍齋が氣絶をするであらうぞい。何處ぞへこつそり運んでしまふ手段はないか。

梅野　それは一と先づお次ぎの間の、戸棚の奥へ隱して置いたがようござります。後程妾がそつとお庭の古池へ沈めまする。もし靫負樣、憚りながらお手を借し下さりませ。

靫負　おゝ承知いたした。

（兩人次ぎの間へ屍骸を運び去る。靫負だけは直ぐに戻つて來る。）

靫負　つまらぬ男の意地づくから、六年前にお前樣を張り合うて、今日まで拙者の色敵になつて居たあの玄澤、これでやう〳〵胸がすつきりいたしたわい。

お銀の方　ほんに妾も惡魔拂ひをしたやうで、急にさつぱりしたわいなあ。

（梅野、珍齋の縛めを解いて連れて來る。未だに土氣色をしてぶる〳〵顫へて居る。お銀の方と靫負の姿を見ると、何かに打たれたやうにぎよつとして畏まる。）

梅野　お部屋樣、御家老樣、仰せに從ひ、珍齋めを此れへ引立てゝ參りました。

お銀の方　おゝ、これ珍齋、もそつと近う寄りや。いつもの剽輕は何處へやら、大さう萎れて居るさうなが、今宵に限つて遠慮するには及ばぬぞえ。

珍齋　は、はあ、（微かな聲で返辭をして、先方の顏を見ないやうに唯お辭儀ばかりして居る）

梅野　お部屋樣には其方に何やらお尋ねの筋がある筈ゆゑ、眞つ直ぐに答へをせねばならぬぞえ。

珍齋　は、はあ。

お銀の方　たつた今、梅野に痛い仕置きを受けた召し使ひ、あのそれ、お由良とやら云ふ大それた腰元は、其方の娘に違ひはないか。

珍齋　い、いかにも、わ、わ、わたくしの娘ではござりましたが、ま、まつたく、以て、大それた、あらう事かあるまい事か、勿體なくもお部屋樣に弓を引かうとするやうな、不埒な奴ゆゑ、先程とうに勘當したのでござります。へい、もう其の事なら梅野さまが、蔭で聞いておいでになつて、よく御存じでござります。親子の緣は切れて居るのでござります。

お銀の方　親子の緣を切つたと云うても、繋がる血筋は爭はれぬ、其方は娘の最期を見て、きつと不憫に思うたであらう。

珍齋　それは少しは不憫？……でもござりますが、親の言葉を聽き入れず、娘に似氣ない生意氣なことをする奴は御成敗を受けますのが當り前。もう私にさへお疑ひがかゝりませねば、それで結構でござります。結構どころか、一生御恩は忘れませぬ。

梅野　したが珍齋、其方がどのやうに言ひ譯をしても、繋がる緣があるならば、なか／＼お部屋樣のお疑ひは晴れぬ道理。お由良と其方とは同腹ぢやと、推量されても仕方がないぞえ。

珍齋　もし、梅野さま、それはあんまりお情なうござります。私が同腹であるかないか、樣子をきいておいでなされたあなた樣が、御承知の筈ではござりませぬか。

梅野　樣子はすつかり聞いて居たが、お由良の奴がわれわれを謀叛人ぢやの惡人ぢやのと惡口をついた度毎に、其方も同意をして居たではないか。

珍齋　な、なるほど、たゞ口先の惡口ぐらゐは同意をしたかも知れませぬが、御部屋樣の御謀叛を密告しようの何のといふ、そんな滅さうな、恩知らずの惡企みには、決して／＼同意をいたした覺えはござりませぬ。これはたしかでござります。もそつと正直なことを申しますと、私は非常に臆病者故、御謀叛などといふまあ孰方かと云へば、少し物騷な御相談に係り合ふのは氣味が惡い。……いえその、成る可くならば係り合はぬ――方がよいと、から申しただけでござります。たとへお由良からどのやうな話を聞きましても、誰にも告げ口などを致すことではござりませぬ。もし、梅野さま、私はほんたうに嘘も掛け引きも何にもない、正直正銘なことを申し上げるのでござります。どうぞお察しなされて下さりませ。同腹をしたなどゝいふお疑ひが晴れますやうに、お部屋樣へお口添へをなさつて下さりませ。

梅野　妾とても其方の正直は察して居るが、たとへ同腹の疑ひが晴れたとて、其方の命を助ける譯には行きませぬ。

珍齋　ひえーつ。それはあまり御無體でござります。お疑ひが晴れたのに、殺すといふのは非道にござります。

梅野　それや非道かも知れぬけれど、一味の外に一人でも此方の秘密を知つて居たら、たとへ告げ口をせぬからとて、生かしてはおかれぬぞえ。氣の毒ながら其方の命は貰ひまする。

珍齋　お待ちなされて下さりませ。決して／＼誰にも告げ口はいたしませぬが、それでもやつぱり、どうしても命はないのでござりますか。

梅野　さうぢやわいな。

珍齋　もし、さうあなた樣ばかりで獨りぎめになさらずと、お部屋樣や御家老樣にもよく御相談をなすつて下さりませ。

お銀の方　はてまあ其方は往生際の惡い男ぢや。今も梅野が申した通り、誰でなうても味方でなくば、大事を聞かれて助けておくわけには行かぬ。これ程因果を含めたら、もう好い加減に覺悟をしや。

珍齋　そんならどうでも、私の命はござりませぬか。

梅野　其方に恨みはないけれど、一味徒黨の掟ゆゑ、是非に及ばぬわいな。

珍齋　えゝ、そ、そんなら仕方がござりませぬ。どのやうな御用なりとも勤めますゆゑ、どうぞ私を、一味にお加へなされて下さりませ。

梅野　お部屋樣、珍齋が急にあのやうな事を申しますが、いかゞ取り計らひませう。

お銀の方　味方に入れても賴みにならぬ臆病者、役に立つどころか足手まとひになりはせぬかえ。

靱負　（其の時までわざと恐らしく默り込んで、ぢろ／＼と珍齋を睨め付けて居たが）いかさま其の御心配は御尤も。これ珍齋、其方はわれ／＼の味方になると申したが、命惜しさに一時逃れを申すのであらう。

珍齋　なか／＼以てさやうではござりませぬ。………

靱負　いや／＼さうに違ひないわ。梅野どの、やつぱり此奴は殺してしまうたがようござる。

珍齋　あ、もし、さう仰つしやらずに、もう一遍考へ直して下さりませ。私の力で出來ます事なら、たとへどんなに物騷な、どんなに危い御用でもいたしまする。へい、そりやもう必ずいたしまする。

お銀の方　えゝまあほんとにうるさい奴ぢや。ならぬと云つたら默らぬかえ。

珍齋　ちとおうるさうございませうが、私も一生懸命でござります。此れも先程お由良から聞きましたのでござり

ますが、現に今宵は私へ、仰せつけられる御用の筋がおありなされたのでござりませうが。……どうぞその御用を私めに勤めさせて下さりませ。もしお部屋様、御家老様、お願ひでござります。御用の筋は承知いたして居りまする。必ず立派に仕遂げますればお任せなされて下さりませ。今更味方に加へられぬと仰しやるのは、お情なうござりますぞえ。

靱負　いや一旦は其方に用事を頼む積りで居たなれど、愛想のつきた臆病者、とても大事には任せぬ程に折角ながら断りまする。

靱負　こりや珍齋、よつく承れ。成る程其方は今でこそ、立派に役目を仕遂げる覺悟で居ようも知れぬが、性得臆病な人間は、いかに勇氣を起しても、大事に當つて狼狽へ廻り、必ず仕損じがあるものぢや。拙者は勿論お部屋様も、其處をお案じなさるのぢやぞ。われ／＼一同其方の言葉を疑ふのではない。其方の正直は信じて居るが、其方の臆病には當惑して居る。生れ變つて來ぬうちは、とても其方にはやれぬ仕事ぢや。ぢやに依つて氣の毒ながら手打ちにいたさねば相成らぬ。

珍齋　へい御家老様の仰しやる事はよく分つて居りまする。いかにも私は、それはもうきつい／＼臆病者でござります。かうなつたら全く嘘は申しませぬが、つまり私はたゞ殺されるのがお嫌なのでござります。たとへ殺されると極まつても、一日でも二日でも一寸逃れに生きて居たいのでござります。唯今のところ、外に望みはござりませぬが、殺さずに置いて下さりましたら、こんな有難い御恩はござりませぬ。……

靱負　これ見い、そのやうな臆病なものにどうして大事が勤まるのぢや。

珍齋　……さあ、そのやうな臆病者ゆゑ、生かして置いて下されば、死ぬのが恐さに却つて一生懸命になりまする。命知らずの勇者と違ひ、殺されるのがしみ／＼嫌ひな私ゆゑ、おどかされゝば本氣になつて働きまする。をかしな理窟でござりますが、こればつかりはたしかでござります。

靱負　ふゝゝゝ、さて／＼其方の臆病は重寶ぢや。死ぬのが恐さに働くまではよいけれど、死ぬのが恐さに裏切りをして、餘計な告げ口を致す事はあるまいかの。

珍齋　いえ／＼大丈夫でござります。私は臆病な代りに目先は可なり利いて居りまする。へゝ（何となく助かりさうなので、だん／＼安心して來る）お言葉ではござりませぬが、當時日の出の勢のお部屋様、忠義なお方は片つ端からお手討ちにされて、お部屋様のお言葉なれば、邪が非でもお通しなさるお殿様に、今更告げ口を致すやう

な愚な私ではござりませぬ。もう其の事ならほんたうに御安心なされて下さりませ。下世話に申す馬鹿と鋏は使ひやうで切れるとやら、臆病者も使ひやうではなか〳〵お役に立ちまする。どうぞ命をお助けなされて、ためしに一遍お使ひなされて下さりませ。一生のお願ひでござります。此の通りでござります。（拜む）

お銀の方　あれ程に云ふものを、聽かぬといふも不憫ぢやが、なう靱負どの、どうしたものでござんせう。

靱負　さやうでござります。先程からだん〳〵と珍齋の申し譯、一應は道理のやうにも聞えまする。裏切りまずれば命のないといふ事が、よく呑み込めて居りさへしたら、あながち一味に加へられぬと極まつたものでもござりますまい。

梅野　これ珍齋、お二人があのやうに仰つしやるからは、次第に依れば其方に代つて、妾が命乞ひをして進せるが、必ず〳〵其方や裏切りをしないかえ。

珍齋　へい、こりや梅野さま忝う存じまする。今もあれ程申し上げた通り、裏切りなどは金輪際致すことではござりませぬ故、どうぞ宜しうお取りなしを願ひまする。あなた樣は命の親、此の通り伏し拜んで居りまする。……（拜みながら思ひ出したやうに又附け加へる）お部屋樣の御威光がようく分つて居りまする。

梅野　その御威光が分つて居るならよいけれど、ほんに日の出の勢のお部屋樣、憚りながら此の御家中の御家來は、誰であらうと殺さうと生かさうと思ひのまゝ。たとへ謀叛の證據を握つて訴へる者があらうとも、肝腎の殿の御心はお部屋樣のお手の内にあるのぢやぞえ。どのやうにでも云ひくるめて、忠義立てをする奴原が却つて御勘氣を蒙るやうに、取り繕ふのは造作もないのぢやぞえ。――それが分つて居るのぢやなあ。

珍齋　へい、分つて居る段ではござりませぬ。お部屋樣のお味方さしてさへ居れば、間違ひのない私たち、何を酔興に忠義立てをいたしませう。そのやうな馬鹿な眞似は死ぬのが恐くない方々の、する事でござります。

梅野　もしお部屋樣、御家老樣、まああのやうに申します故、今宵のところは妾に免じて珍齋めをお見逃しなされて下さりませ。その代り、少しでも不審なかどが見えましたら、その折こそは容赦なく妾が成敗いたしまする。

靱負　別人ならぬ梅野どのゝお口添へ、まさかに否とも申しにくいが、してお部屋樣の御所存は？

お銀の方　助けたうはないけれど、味方につけてもよい程な手柄を立てゝ見せるまで、命は當分梅野に預けておきませう。

梅野　おゝ忝う存じまする。これ珍齋、暫く命はお助けなさ

れて、何か手柄を立てたならばお味方に加へてやるとの有難いお言葉ぢやぞえ。

珍齋　へゝッ、有り難うぞんじまする。赦せぬ所をお赦し下さるお部屋樣の御息の程、必ず〳〵忘却はいたしませぬ。いやもう今宵は最初から魂が動轉して、生きた心地もございませなんだが、急に安心仕りました。

靫負　それ〳〵其方はそのやうな周章て者ぢや。お部屋樣は其方の命を赦すとは仰つしやらぬ。何か手柄を見せたらば味方に入れても苦しうないが、それまで首を繋いでおくと仰つしやつただけではないか。安心するにはまだ早いわ。

珍齋　(氣がついてわざと恐ろしさうな風をする)　な、なるほど、いえ私も安心をした譯ではございませぬ。何か一とかどの手柄を立てゝ、一時も早くお味方に加へて頂くやうに、御奉公を勵みまする。

梅野　そんなら御奉公の手始めに、先程お由良から聞いた筈の、大事な役目を云ひつけるが、きつと仕遂げてくれるであらうな。

珍齋　へえ〳〵よろしうございます。憚りながら奥方樣にもえらいお氣に入りの此の珍齋、隙を狙つて細工をするのは譯なしでございます。

靫負　その役目も四五日中に果さねば、其方の命はないのぢやぞ。

梅野　もしも首尾よく果したなら、命を助けてやる上に御褒美の下るやう、妾が計らうて進ぜませう。

珍齋　(ふと何事をか思ひ出して、今度は本當に恐怖に襲はれたらしく)　御褒美などは頂かずとも結構でございますが、……ほんたうに梅野樣、もしも首尾よく參りましたら、命だけは大丈夫でございませうな。玄澤どののやうなことには、ならないでございませうな。

梅野　ほゝゝゝ、其方は目先が利いて居ろというたではないか。あの玄澤は勿體なくもお部屋樣へ無禮な事をいひ掛けた故、それで仕置きをしたのぢやが、何で其方をあのやうな目に合はせませう。心配せぬがよいわいな。

珍齋　ではございますが、立派にお役目を勤めた後で、もう其の方は用はないなどと仰つしやられては大變でございます。どうやら私は氣がゝりでなりませぬが、大丈夫でございませうな。

靫負　大丈夫ぢやと申すのに叉してもうるさい奴ぢや。左程に我等を疑ぐるなら強つて其方に頼みはせぬ。あいや梅野どの、未だにこんな事を申すやうでは、此奴到底怪しうござる。一層此の場で拙者が手討ちに致してくれる。

珍齋　(全く度を失つて再び狼狽し出す)　あ、お待ち下さりませ。お待ち下さりませ。唯今申したことは、あれは

私の思ひ違ひでござります。あなた樣方をお疑ぐり申すなどゝどういたしましてそのやうな了見は夢にもござりませぬ。――へい、いえそりやもう、私の命はお部屋樣へ差し上げたも同然故、今宵のところをお助け下さりましたならば、たとへ手柄を立てました曉に、萬一御都合でどのやうな御仕置を受けましても、一向不服はないのでござります。いづれ其の時になりまして、お味方に加へて頂くなり、お手討ちになりますなり、改めてお思召通りに願ひまする。先づ兎も角も御用だけは私に勤めさせて下さりませ。ご、ご、後生お願ひでござります。……

靱負　何とも彼とも云ひやうのない臆病者ぢや。命を差し上げたも同然ぢやと云ふ口の下から、直ぐ命乞ひをいたして居る。拙者にはとんと此奴の了見が分らぬわい。これ梅野どの、かやうな奴に大事をお任せなされたら、後が面倒でかなはぬ故、斬つて捨てたらようござらうが。……

梅野　まあさう仰しやるものではござりませぬ。臆病ではござりますが、妾の眼からは見どころのある此の男、四五日中に必ず手柄を立てさせて、立派な御褒美が戴けるやうに、（御褒美といふ言葉を意味ありげに云つて、靱負に眼くばせする）使つて御覧に入れまする。

お銀の方　靱負殿の腹立ちは尤もながら、何かにつけて拔け目のない梅野の頼み、聽いてやつても仔細はないでござんせう。

靱負　それ程までに仰つしやるからは、强ひて異存は申さぬが、返す〴〵も呆れた奴ぢや。

梅野　（帯の間から薬を取り出す）そんなら珍齋、最前玄澤の持つて來た此の薬を一服其方に預けて置く。必ず共にぬかつてはならぬぞえ。

珍齋　（役目の恐ろしさと自分の運命についての憂慮とが、だん〴〵顯著になつて來て、總身に充ち溢る戰慄を我慢しながら云ふ）畏まつてござります。

梅野　それから其方に話がある。近う寄りや。

珍齋　はツ。（傍へ寄つて梅野の口へ耳を付ける。恐怖が絶頂に達したらしく、青ざめた血色をして、眼を閉ぢてしまふ）

梅野　これ、何故そのやうにふるへて居るのぢや、しつかりと、話を聽き取らぬかえ。

珍齋　（びつくりして眼を開き、胸をさすつて）はい、畏まつてござります。

靱負　ふゝゝゝ、（珍齋の樣子を見て微笑しながら立ちかける）はてもう夜明けに程もあるまい。拙者は此れで御免を蒙りまする。

お銀の方　おゝ、そんなら途中に氣を付けて、……

靱負　後はよろしくお二人樣に、お任せ申すでござりませう。

梅野　妾が其處までお見送り申しませうわいなあ。

（靱負と梅野とが廊下に出る。去り際に三人顏を見合せて氣味惡くにつこりする。珍齋が訴へるやうな、判じるやうな眼つきで三人の姿を偸み見る。）

第二幕

第一場――春藤家奥庭、右方に靑々と芝生の生えた築山、それに向ひ合つた左の方に池があつて、遠景に御殿の長廊下が見え、凡べて田舍源氏の錦繪風な配置。舞臺の左端から池を越えて中央へ土橋がかゝり、土橋の袂から少し離れて、築山の上に亭(ちん)がある。小姓の磯貝伊織之介が人待ち顏に其處へ腰を掛けて、池の向うを眺めて居る。前髮姿の、國貞流のうら若い妖艷な美男子で、女のやうな優しい口の利き方をする癖のあるのが何となく狡猾らしい感じを與へる。袴も着物も派手でなまめかしくて女性的の優雅と奸譎と男性的の智慮と、豪膽とが巧みに織り交ぜられた人間である事を想像させる。天氣の好い夏の日の午後、幕が明くと程なく、梅野が微醉の眼もとをほんのりと紅く染めて、あたりへ好氣を配りながら、急ぎ足に橋を渡つて來る。

梅野（橋の中央に立ち止まり、身を屈めて亭の方を眺めやる、低い聲で）伊織之介さま、そこにおいでゞござりますか。

（伊織之介眼を細くして笑ひながら頷いて見せる。梅野は、ちよつと後ろを振り返つて再び庭の樣子をうかがひ嬉しさうに馳せ寄つて傍へうづくまる。）

梅野　伊織さま、おそくなつて濟みませぬ。そなたは先(さつき)から妾を待つて居たのかえ。

伊織之介　さやうでござります。もうこれで小半時、おいでを待ち侘びて居りましたが、あまりお姿が見えぬゆゑ、どうした譯かと案じ暮らして居りました。

梅野　それはまあ氣の毒な。かう云ふ時には得て意地の惡い、不意の御用ができたため、思ひの外に遲刻したのでござんする。どうぞ許して下さんせいなあ。

伊織之介　ほんに今日といふ今日は、此のやうな淋しいお庭の片隅に、たつた獨りで待ちくたびれて、業を煮やして居たなれど、かうしてお前さまのお顏を見たら、すつかり胸が癒えました。もし梅野樣、よくまあおいで下さりました。私はうれしうござんする。

梅野　いつもはそなたに待たされるのが妾の役目、たまにはそなたを待たせたとて、そのやうに恨むものではござ

んせぬ。待たるゝ身より待つ身の辛さを、ちつとは覺えておきやいなう。

伊織之介　さうしてお前様は、どうやら醉つておいでなさる御様子ぢやが、何處ぞで酒を召しましたか。

梅野　あいなあ、今日も今日とて殿様が相變らずの御酒宴沙汰、妾もお部屋様に侍いて席へ列んだばつかりに、少うしばかり強ひられたのでござんすが、おもての風に吹かれた故もう直き覺めるでござんせう。お氣に觸つたら、暫く我慢をして賜や。

伊織之介　氣に觸りはいたしませねど、お前様と申し私と申し、お部屋様から大事な御用を申し付かつて居る體、いさゝかなりとも酒に心が亂れて居ては、油斷の基となりまする。大望成就するまでは、どうぞ愼んで下さりませ。

梅野　おほゝゝゝ、その心配はさることながら、僅かな酒に分別を失ふやうな梅野ではござんせぬ。醉つては居ても氣はたしか、――おゝそれ／＼、大事な御用で思ひ出したが、今日はそなたにお部屋様から、是非ともお頼み遊ばすことがありまする。幸ひ今頃女中たちは、一人殘らず御酒宴の席に侍つて、庭には誰も居ない様子、話を聞いて下さんせ。

伊織之介　もし、暫くお控へなさりませ。……（立つて行つて築山の周圍に人氣のないのを見定め再びもとの席へもどる）してお頼みと仰つしやりますのは。

梅野　そなたもかね／＼知つてゞあらう。此の間御城代から江戸詰を仰せ付かつて、お國表より出府した二人の邪魔者。……

伊織之介　おゝ、それはあの、氏家殿に菅沼殿、あのお二人でござりまするか。

梅野　いかにも、――あの二人は云はずと知れた御城代の廻し者、われ／＼一味の陰謀を嗅ぎつけて、隙だにあらば證據を握り、訴へて出ようと待ち構へて居るお目付役、なか／＼心は許せませぬぞえ。

伊織之介　その事ならば私も前から氣が付いて居りまする。先達てから憚りもなく殿の御亂行を數へ立てゝ、執念深くお諫め申して居る樣子。早くお手討ちになればよいに、たゞ御勘氣を蒙つたばかりとは、ても運のよいお人たちでござりまする。

梅野　先程珍齋が偵つて來た話では、今日も二人が申し合せて、御勘氣の身も顧みず、此れから直ぐに御酒宴の席へ割つて入り、命を捨てゝも殿をお諫め申すのぢやと、互に相談して居たとやら、ほんに／＼、餘計なことをするではないか。

伊織之介　したが、得て忠義者は命を惜しまぬ代りには、

智慧の足りない方々ばかり、又懲りずまに讒言して、揚句の果てがお手討ちになるは知れたこと、お二人の最後は眼に見えて居りまする。

梅野　さううまく行けばよいけれど、何をいふにもあの氣紛れな殿樣のなさること、決してあてにはなりませぬ。どんなお氣に入りの御家來でも、急にお手討ちになるかと思へば、御勘氣を受けて居た方々が、忽ち御寵愛を蒙むる始末、あれでは二人の最後の程も、いつの事やら案じられる。

伊織之介　それではお前樣は、あの方々を何とかしてしまふ御所存でござんすかえ。

梅野　一日生かせば一日此方の邪魔になる故、人知れず討ち果してしまひたいと思うて居たが、知つての通りあの二人は、御家中に名の響いた武藝の達者、その上血氣の若侍では、容易に手出しがなりかねて、今日まで控へて居りました。なう、もし伊織之介さま、お部屋樣のお頼みといふのは、このことでござんする。

伊織之介　して、それはどのやうな儀でござりまするえ。

梅野　惚れた慾目で云ふではないが、當時御家中の人々で、あの二人に勝つた腕を持つ者は、そなたより外にござんせぬ。それを見込んでお部屋樣が、早速そなたに頼みがあると仰つしやるのでござんすわいな。

伊織之介　(口では謙遜しながら、何處やらに充分な自信を見せていふ)はてまあ、それは及びもないことでござります。僅かばかりの武藝を習ひ覺えましても二十歳にも足らぬ子供の私、何であの方々に勝つた腕がござりませう。ようお考へなされて下さりませ。

梅野　いえ／＼そなたの腕前は、誰も知らぬと思ひの外、妾が見拔いて居りますぞえ。女のやうな優にやさしいお姿で、鬼神を凌ぐそなたの腕前、隱さうとても隱されぬ、外の人なら兎も角も、かりにも武藝の片端を心得て居る此の梅野、どうしてそれを見逃しませう。もし伊織之介さま、折角のお部屋樣のお頼みをそなた聽いては下さらぬか。

伊織之介　聽かぬと申すのではござりませぬが、若しこつそり闇討ちにでもなさるなら、お手傳ひぐらゐはいたしまする。

梅野　さあその闇打ちは得て仕損じの多いもの、萬一相手を取り逃がして、世間へ知れたら嫌疑の種を蒔く道理、それより今日の御酒宴のお座敷へ、二人が邪魔をしに來るのがもつけの仕合せ、わざと喧嘩を吹きかけて、その場を外さず眞劍勝負を願つて出たら、あの殿樣の御氣象ゆゑ、きつと御許しなさりまする。

伊織之介　おゝ、そんなら御前試合に事寄せて、あのお二

人を討ち果すのでござりまするか。

梅野　いかにもさうでござんする。いつも御酒興が昂じては、勝負事をおこのみになる殿様ぢや程に、お部屋様と妾とが口を揃へて唆かしたら、横手を拍つてお喜びなさるでござんせう。その時こそはそなた一人で引き受けて、彼奴等二人を討ち果して下さんせ。

伊織之介　成る程御前試合なら、斬つて捨てゝも後の面倒はござりませねど、闇討ちとは譯が違ひ、餘程の技がないからは、お二人を相手にして打ち勝つ見込はござりませぬ。猶更以て私などの及ばぬこと、平に御容赦願ひまする。

梅野　これ、そなたまあ何をいやるのぢや。云はずと知れた、一つ違へば大事な大事なそなたの命にかゝはること故、妾にたしかな見込がなうて、何で斯やうな危い役目を頼みませう。謙遜るのもよい程にして置きやいなう。——それともそなたは、日頃のお部屋様のお恩を無にする御所存でござんすかえ。そなたと妾の不義のいたづらを、許す計りか庇うて下さる御情に、背かうとなさるのかえ。

伊織之介　なか〳〵以て、さう云ふ譯はござりませねど……

……

梅野　それでは承知をしてくりやるか。

伊織之介　さあそれは……

梅野　さあ、さあ、早く返答しや。二人の爲めを思ふなら、妾をいとしいと思うたら、よもや嫌とは申されまい。腕に覺えのあるそなた、かういふ時に空々しう惚けて居るとは人が悪い。美しうてあでやかで、やさしいばかりが男の能ではないわいなあ。

伊織之介　そのやうに仰つしやられては、是非がござりませぬ。何處までも女らしう、か弱い風を裝つて居たいのが私の望みでござりましたが、お前様の眼力で觀破られては詮ない仕儀、いかにも承知致しました。

梅野　きつと異存はないのぢやな。

伊織之介　不肖ながらも伊織之介、あの方々のお命は、必ず貰ひうけまする

梅野　おゝ頼もしうござんする。そなたが引き受けてくりやつたら、仕損じのある筈はない、したが二人とも血氣にはやる猪武者、あまり相手を侮つて、かすり傷なと負はぬやうに、用心して下されや。

伊織之介　はて御安心なさりませ。お二人が一度にかゝつて來ても、討ち果すのに何の造作はいりませぬ。

梅野　却つて相手が油斷して、たかゞ子供の腕前と、そなたを見くびつて居よう程に、いよ〳〵勝負が始まつたら、二人を始め一座の者がびつくりするでござんせう。

まあいゝ氣味でござんする。

伊織之介　今まで人に隱して居た腕前が、一度世間へ知れるからは、もう此の後は容赦なく謀叛の邪魔をする方々は、殘らず斬つて捨てまする。

梅野　ほんに勇ましいそのお言葉、そなたが附いて居る上は、一味の者には千人力、大望成就疑ひないぞえ。

伊織之介　その代りには梅野さま、（全く女のやうな嬌態をして）どうぞ末始終私を、見捨てぬやうに可愛がつて下さりませ。

梅野　念を押すには及ばぬこと、立派な手柄を立てさへすれば、やがて褒美にわれ〳〵二人を晴れて夫婦にしてやると、お部屋樣の有り難い仰せぢやわいな。

伊織之介　そりや、ほんたうでござりますかえ。

梅野　何で僞りを云ひませう。……したが伊織之介さま、妾はそなたより十の年嵩、母親のやうな此の梅野に連れ添うても、決して嫌とは云はぬかいなあ。

伊織之介　嫌だなど〻は勿體ない、不思議な緣でお前樣に可愛がられた伊織之介、若しも添はれぬ位なら、何樂しみに謀叛の加擔をいたしませうわえ。

梅野　それをきいて妾も滿足、眞實うれしうござんする。

（右の方の築山の蔭からお銀の方が竊み足で窺ひ寄り亭の後ろに立ち止つて不意に二人を呼びかける。）

お銀の方　これ、二人とも其處にかえ。

伊織之介　おゝ、あのお聲はお部屋樣……

梅野　ひよんな所を御覽に入れて、お恥かしうござりまする。

伊織之介　もし、お部屋樣、お免しなされて下さりませ。

（兩人席を離れて、恭しくお銀の方の足下に跪づく。）

お銀の方　何の恥かしいことがあらう。いつ見ても美しい伊織之介、ほんに梅野は果報者ぢや。妾は眞實羨しいと思うて居るぞえ。

梅野　そのやうに仰つしやられると、恥かしいやら嬉しいやらで、穴へでも這入りたうござりまする。

お銀の方　おほゝゝ、てもまあ梅野としたことが、年がひもないうひ〳〵しさ、——妾の前で遠慮するには及ばぬ故、たんと見せ付けるがよいわいなあ。

梅野　えゝ、お部屋樣のお口の惡い、もう好い程にお嬲りなされて下さりませ。

お銀の方　それはさうと先程其方と手筈をきめて置いたこと、伊織之介に頼んでくれたであらうなう。

梅野　仰せまでもござりませぬ。唯今此處でくれ〴〵も、申し含めておきました。

お銀の方　さうして其方は梅野から聞いた頼みの筋を、引き受けて賜るかえ。

伊織之介　未熟な私の腕前が、お役に立たば此の上もない

仕合せでござりまする。何で違背いたしませう。

お銀の方　それさへ聞けば満足ながら、そなたのやうな優男を、あの荒武者に向はせては、どうやら妾も氣がかりな、……なう梅野、其方や心配にはならぬかえ。

梅野　その御心配は御無用になさりませ。妾の爲めには掛け換へのない大事な戀人、怪我過ちのあるやうな、心もとない腕前なら、妾が第一危い場所へは出しませぬ、必ず共に御氣遣ひなされますな。

伊織之介　憚りながら伊織之介、まだ子供ではござりますが、あの方々に後れをとらうとは覺えませぬ。勝負の程は今から見えて居りまする。

お銀の方　ほんにけなげな其方の覺悟、頼もしう思ひますぞえ。――そなたのやうな若者に梅野が心を寄せると云ふも無理はない。首尾よく望みを果したなら、妾がきつと二人の仲を、取り持つて進せるわいなう。

梅野　そのお言葉を力にして、伊織之介さま、どうぞ立派に仕終はせて下さんせいなあ。

伊織之介　はてまあ、御念には及びませぬ。

お銀の方　おゝそれ〱、すつかり忘れて居たことがある。(懐より一通の文を取り出す)これ梅野、ちと知らせたいことがある程に、其方は酒宴の席に紛れて、此の文を靭負殿へ渡して賜れ。きつい急ぎの用事ゆゑ。一と足先に早う行きや。(文を梅野に渡す)

梅野　どんな御用かは存じませぬが、幸ひ今しがた御家老様も、御酒宴に召された御容子ゆゑ、少しも早うお屆け申すでござりませう。

お銀の方　妾は其方と別々に、やがて後から行きまする。

梅野　そんなら、お部屋さま、伊織之介さま、後刻重ねて御前でお目に懸りまする。

お銀の方　おゝ、其方も拔りのないやうに。

梅野　畏まりました。

(梅野、橋を越えて左方に消える。伊織之介はまだ慇懃に地上へ兩手を衝いて蹲踞つて居る。その肩つきをうつとりと見守つて、お銀の方が茫然と佇立して居る。暫く立つと、伊織之介は訝しさうに首を擡げたが、ちつと自分を視詰めて居る女の容子に心付いて、急に恐れを感じたらしく再びこつそり俯向いてしまふ。同時にお銀の方が薄氣味の悪い笑顔を見せる。)

伊織之介　お部屋様、なぜそのやうに私を、いつまでも眺めてお出で遊ばすのでござります。

お銀の方　いつまで見ても見飽きのしない、そなたの器量をしみ〲と眺めて居るが悪いかえ。

伊織之介　悪いどころか勿體なくて、空恐ろしうござります。

お銀の方　恐ろしいのは疾うから其方も覺悟であらう。二人の仲が靱負殿に知れたなら、妾も其方も命はないぞえ。

伊織之介　それに付けても氣の毒なのは梅野さま、ようまあ彼のお人は氣が付かずに居りまする。

お銀の方　梅野を欺したいばつかりに、妾はあの、嫌な嫌な靱負殿に眞實焦れて居るやうな、心にもない狂言を書く胸惡さ。察してくれたがよいわいなあ。

伊織之介　その胸惡さは私とても同じ事、早く夫婦になりたいと、毎日のやうに梅野樣の繰り言をきかされて、ほと／＼當惑いたしまする。

お銀の方　梅野はいづれ折を見て、討ち果すのには造作はないが、厄介なのは靱負どの。八年前から馴染にして子まで儲けた仲ながら、今では二人の戀路の邪魔者、たとへ謀叛が成就して照千代樣の世になつても、妾は一生彼の人の自由にならねばなりませぬ。ほんに、ほんに、氣詰りな。……

伊織之介　又その時にはよい分別もござりませう。先づそれまでは謀叛が大事でござります。味方に取つて此の上もない御家老樣に梅野さま、隨分目をかけてお遣しなさりませ。

（珍齋が築山の蔭から慌しく走り出る。頻りに邊をきよろ／＼と見廻はすうちに、睦じさうな二人の姿を認めて驚きながらうろ／＼して居る。お銀の方が早くもそれに眼をつける。）

お銀の方　其處に居るのは珍齋ぢやな。

伊織之介　なに、珍齋め、えゝ胡亂な奴め。（いきなり立ち上つて珍齋の襟首を捕へ、膝下に引き据ゑる）

珍齋　あゝもし、何となされまする。何故あつて私を此のやうな目にお合はせなさります。あいたゝゝゝ。もし御無體でござります。ど、どうぞ、お助けなされて下さりませ。あいたゝゝゝ。

お銀の方　これ珍齋、其方や今此處で、何をうろ／＼して居たのぢや。

珍齋　へゝ、私は決してうろ／＼いたしては居りませぬ。實はお部屋樣に大急ぎで、申し上げたいお話がござりまして、唯もう夢中でお庭先へ、飛んで出たのでござります。

伊織之介　はて好い加減な嘘を申せ。其方此の場の話の樣子を、立ち聽きして居たのであらう。

珍齋　いえ／＼さやうではござりませぬ。あいたゝゝ、あいた、あいた、そのやうに、捻ぢ上げられては、腕がもげてしまひまする。もし伊織之介樣、お願ひでござります。あなたはまあ、女のやうな優しいお方だと存じて居りましたに、どえらい力がおありなさる。いやもう私

の背中の骨が、折れてしまひさうでござるわい。

伊織之介　さて／＼其方は臆病の癖に横着な男と見える。痛くば早く白狀したがよいではないか。

珍齋　いえどのやうに仰つしやつても、全く覺えのないことでござります。どうぞ御勘辨なされて下さりませ。

伊織之介　もし御部屋樣、どうせ樣子を知られた上は、もう一刻も斯うしては置けぬ奴。――幸ひ人目にかゝらぬうちに、不憫ながら私が、此奴の命を此の場で申し受けまする。あなた樣には少しも早う、此處をお立退きなされませい。

珍齋　た、たすけてくれエー。

伊織之介　（逃げようとして暴れ廻る珍齋を易々と小脇に抱へて口を塞ぎ、あはや一と討ちにしようとする）

お銀の方　あゝこれ、暫く待ちや。

伊織之介　それぢやと申して此儘には？

お銀の方　はて其のまゝにしておいて、何の氣遣ひがあらうぞえ。妾と其方と味方同志が二人で話をしたのを見られたとて、格別怪しい道理はない。珍齋とても一味の者、殊には大事な役目もある、早まつたことはなりませぬぞえ。（輕く伊織之介に眼くばせをして領かせる）

伊織之介　そのお言葉では是非もござりませぬ。てもまあ其方は、命冥加な奴ぢやなあ。（漸く珍齋を突き放す）

珍齋　えゝ危いこと、もう少うしで笠の臺がすつ飛ぶところであつたわえ。いや申しお部屋樣、重ね重ね命をお助け下されまして、忝う存じまする。死んでも御恩を忘れることではござりませぬ。

お銀の方　さうして其方が、妾へ急ぎの話というたは何事ぢや。

珍齋　おゝ、あまりの恐しさに大事の御用をすつかり忘れて居りました。實は唯今大變な事がござります。あのそれ先刻梅野さまにお話申して置きましたお二人の方々が、不意に御酒宴の席へ罷り越し、又しても殿樣に鹿爪らしい諫言沙汰、揚げ句の果てに聞き捨てならない惡口雜言を吐き散らすやら、御膳部を跳ね飛ばすやら、大騷動が起つたのでござります。

お銀の方　して殿樣には何となされてぢや。二人の者の狼藉を、御了見遊ばしたかえ。

珍齋　さあ其れからが又大珍事でござります。あの御短氣な殿樣が、何で御了見遊ばしませう。無禮な奴め、勘忍ならぬと仰つしやつて、刀の柄へ手をお掛けなされたところ……

お銀の方　おゝ、さうして二人は見事お手討ちになつたのかえ。

珍齋　なか／＼さうではござりませぬ。あはや殿樣のお手

にかゝつて眞二つと思ひの外、どつこいさうはと二人の方々が身を交して、あらう事かあるまい事か、勿體なくもあべこべに殿樣を取つて押へ、威丈高になつて、長たらしい御意見を申し上げて居りまする。

お銀の方　なに、二人の者が殿樣を取つて押へたと申すのぢやな。

珍齋　左樣でござります。

お銀の方　して多勢のお附きの者は、全體何をして居やる。誰も二人の亂暴を鎭める者は居ないのかえ。

珍齋　何を申すも相手は自慢の腕利きゆゑ、誰あつて口を出さうとする者はござりませぬ。それにまあ生憎と、御家老樣も梅野樣も、先程から急にお見えにならぬ樣子、其の餘の者は猫に睨まれた鼠も同然、小さくなつて顫へ上つて居りまする。

お銀の方　えゝ腑がひない者共ぢやなあ。

伊織之介　それにつけても憎いのはあの二人、僅かな武藝を鼻にかけて、威張つて居るこそ此方の仕合はせ、此れから直ぐに駈けつけて、思ひ知らせてやりまする。

お銀の方　ほんに、其方が手柄を立てるには、こんな好い折はないわいなう。――そんなら伊織之介、妾は先へ行く程に、其方も後から早く參れ。

伊織之介　斯くなる上は、二人の首はもう手に入つたも同じこと、はて心地よいことでござります。

珍齋　（心配さうに眞靑になつて）もし、伊織之介さま、あなた樣がたとひ如何程お強くてもあの方々には抗ひますまい。惡い事は申しませぬ。お止しなされた方が宜しうござりますぞえ。

お銀の方　これ珍齋、餘計なことを申さずと、妾と一緒に來たがよい。

珍齋　畏りました。

（お銀の方、珍齋を連れて橋を渡つて行く。伊織之介跪いて後影を見送る。）

第　二　場　（殿中酒宴の場）

大廣間の上手寄りに厚い緞子の座布團を重ねて太守の席が設けてある。それに接して少し下手にお銀の方の席がある。脇息、煙草盆、膳部などすべて同じやうにきらびやかな調度類が兩方の席に備へられて、後ろに極彩色の金屛風が引きまはしてある。廣間の右側は襖、左側は緣側を隔てゝ庭に臨む。

今しも酒宴半ばに事變が起つた最中である。太守は血色の極めて靑白い、眉の險しい、氣違ひ染みた眼つきをした神經質らしい人品で、滿面に怒氣を含みながら白刃を提げて自分の席に突つ立て居る。一人の侍が中

腰になつて、太守の利き腕をしつかと捕へ、凄じい見幕で邊を睨み付けて居る。それが氏家である。その傍に菅沼が傲然と端坐して太守の姿を見上げて居る。兩人とも二十五六歳の、正直一圖な、忠義に凝り固まつて聊か上氣して居るやうな武士に見える。杯だの、椀だの、銚子だのが三人の足下に蹴散らかされて亂脈に轉がつて居る。

遙か下手に五六人のうら若い女中達が、琴、三味線、鼓などを前に置いて、興ざめ顏に差垂れて控へて居る。――その又下手の緣側に四五人の靑侍が度を失つて平伏して居る。

氏家　あはゝゝゝ、いかゞでござります。殿にはいか程口惜しいと思し召しても、拙者の此の手を振り離す事がお出來にはなりますまい。朝夕此のやうななまめかしい、情弱な遊戲に現を拔かすお身の上で、一人前の力をお持ちなされぬは御尤も。その腕前で拙者をお手討ちになさらうとは、憚りながら笑止なことでござる。

菅沼　家來の身を顧みず無禮を働くわれ〳〵兩人、どうせ命はないものと覺悟をきめて居ります。それにつけてもお情ないは殿の御心、先程から斯くまでお諫め申し上げても、お聞き入れはござりませぬか。

太守　えゝ、うるさいわ、退り居らぬか、赦し難き奴なれど、忠義に免じて此の度だけは助けて取らせる。退れ、退れ、退れと申すに。

氏家　お聞き入れのないうちは、何でおめ〳〵退りませう。われ〳〵二人の命は更に惜しからねど、若し近頃のお身持ちが、忝くも將軍家へ知れたなら、殿には何となされますする。

菅沼　晝夜を分たず歌舞宴樂は愚かなこと、ほんの一時の御酒興に、罪なき者を無殘にも毎日のやうに御成敗遊ばすとは、桀紂以來暴君の例にも聞いた覺えはござりませぬ。ても恐ろしい御亂行でござります。

太守　えゝ、云はせて置けば附け上り、主人に向つて桀紂などゝは言語道斷、こりや、誰ぞ居らぬか、早く此奴等を引つ立てい。

侍一同　ははつ。（と云つて、たゞもぢ〳〵と御辭儀なして居る）

太守　此奴等二人を憚つて、手出しをせぬとは卑怯な奴ばら、何をぐづ〳〵致して居るのぢや。

氏家　あはゝゝゝ、殿の大事を控へながら、靑くなつて顫へて居るとは孰れも此れも腰拔け侍、いやはや見下げ果てたる方々ぢや。

菅沼　あれを御覽なさりませ。殿の御座興を助ける者は、皆あのやうな腰拔け武士、まさかの時に一人でも、お役

に立つ者はござりますまい。その御油斷があればこそ、お家を押領するなど丶云ふ、謀叛の噂も起る道理でござりませうが。

（侍二人、恐る〳〵立ち上つて兩人の傍へ近寄る。）

侍の一　さ、御兩所、暫くお待ちなさりませ。そりや御身たちの仰つしやることも、お尤もではござりますが、そのやうに事を荒立て丶は、却つて殿の御立腹を增すばかり、折角の忠義が役に立たなくなりまする。

侍の二　いかゞでござる氏家殿、いづれにしても今日のところは我慢めされい。又その內に御機嫌のよい潮を見料つて、ゆつくりと申上げたが上分別でござるてなう。

氏家　え丶面倒な。

菅沼　つべこべ云ふには及ばぬわえ。

（氏家は猶も太守の手頸を捕へたま丶、侍の一人を片手で見事に突き飛ばす。今一人の侍は菅沼に投げ返されて、鮮かなもんどりを打つて、上手の襖へどしんと打突かる。兩人ふら〳〵しながら漸く腰を擡げ、這ふ這ふの體でもとの席へ戻る。）

（靱負と梅野とが襖を明けて這入つて來る。）

靱負　こりや、二人ともお控へめされい。して其方たちは御勘氣の身も辨へず、何用あつて御酒宴の御座敷へ、案內もなく罷り越したのぢや。

菅沼　そのお叱りは覺悟の上、お家の爲めに見るに見かねて、殿へお願ひに上つたのでござります。

梅野　お願ひの筋があるならば、靜かに云うたがよいではないか。まあ〳〵此の手を除けぬかいなあ。

（梅野走り寄つて、捕へられた太守の手を振り放さうとする。）

氏家　はて、そなたこそお控へなさりませ。拙者の願ひを聞き入れがないうちは、命に換へても此の手を放しはいたしませぬわい。

梅野　さうして、其方たちのお願ひとはえ？

菅沼　そのお願ひは、先刻から事を分けて、幾度も殿へ申し上げて居りまする。

氏家　殿の御身に喰ひ入つて、お家に仇をする毒蟲のお部屋樣、お銀の方のお命が申し受けたいのでござりまする。

梅野　え丶つ。

靱負　なんと申す。其方や本心で云ふのぢやな。

菅沼　知れたことでござりませうが。兩人共に本心で、お願ひ申して居りまする。

靱負　（菅沼の前にぴたりと据わつて身構へをする）　何故あつてお部屋樣の命が欲しいと申すのぢや。お覺えめでたいお銀の方を毒蟲などゝは無禮であらう。兩人共控へ居らぬか。

菅沼　そりやお家老のお言葉とも覺えませぬ。言語に絶えた此の頃の殿のお身持ちは、抑も誰の所業でござります。憚りながら奸智に長けたお部屋樣の、お寵愛が過ぎる故、忠臣あれどもなきが如く、御亂行は日に增し募るばかりでござる。

氏家　御家老ともあらう者が、斯ほどの事にお氣が付かれず、佞人共の肩を持つて、媚び諂ひをなさらうとは、甚だ以て緩怠至極。

菅沼　お部屋樣を生けて置いては、百の諫言も水の泡。殿の御眼を瞞まして、邪道に導く魔性の者の、命を取るに不思議はござらぬ。

靱負　ふむ、そのやうな無法な事を云ひ張つて、若しお聞き入れがない時はいかゞ召さるゝ。

菅沼　斯く達てお願ひ申しても、お聞き入れがなくば是非に及ばず。――

氏家　お家の爲めには換へられぬこと、殿の御一命を申し受け、此の場に於て我等切腹いたすでござらう。

太守　なに、余が一命を絕つと申すか。

氏家　いかにも、さやうでござりまする。主君を弑し奉る天罰は恐ろしくとも、お家の危難を救ふためには餘儀ない次第でござりまする。

菅沼　もし、お願ひでござたます。不忠に似て不忠ならざる我れ〴〵が申すこと、殿にはよく〳〵御賢察を仰ぎまする。

氏家　さゝ、此れでもお聞き入れがござりませぬか。

菅沼　いかゞでござります。お銀の方のお命をわれ〳〵へ下さりまするか。

氏家　それとも殿のお壽命を戴きませうか。

菅沼　殿には何となされまする。

太守　（默然として考へて居たが、やがて徐かにきつぱりと云ひ放つ）何もそのやうに騷ぐには及ばぬ。余が一命を取らすであらう。

菅沼　えゝ。

氏家　なんと仰つしやります。

（兩人は愕然とする。）

太守　家名も命も、お銀の爲めには惜しうない。さゝ、早く余が首を打て。早う打て。

（氏家があつけに取られて手頭を放すと、太守は白刃を投げ出してどつかと据わり、大聲をあげて荒れ狂ふ。）

太守　お銀を殺す位なら、余が壽命を縮めてくれい。こりや氏家、斬れと申すになぜ斬らぬか。口程にもない臆病者め。

（お銀の方が珍齋を從へて、悠々と下手の緣側より入

り來る。それと知つて、氏家と菅沼が忽ち氣色ばむ。）

太守（お銀の方の姿を認めると、俄かに心配さうな口調で）おゝ、これお銀、其方は彼方へ參つて居れ、此處に居つては障りがあるのぢや。

お銀の方　はてまあ憎しい其のお言葉。さうして此の場の狼藉は、どうした譯でござんする。

太守　仔細は後に語るであらう。此處に居つては其方の身が危い。こりや珍齋、早く彼方へ連れて行かぬか。

珍齋　へい、へい、へい、もしお部屋樣、殿樣があのやうに仰つしやりまする。命あつての物種とやら、こんな所は長居は無益、さあ〳〵、彼方へ參らうではござりませぬか。

輕負　此のやうな氣違ひ武士を相手にしては、御部屋樣のお爲めになりませぬ。殿のお仰せを幸ひに、暫く御遠慮なされませえ。

梅野　ほんにさう遊ばしたがようござります。今も今とも此處にお出での、それはそれは強うい、えらあい、鬼のやうに恐らしいお人達が、勿體なくもお部屋樣のお命が欲しいなどゝ、勝手なことをほざいて居る最中でござります。此の方々の氣違ひが鎭まる迄は、それ、あの、（お銀の方に目くばせなする）もう直きでござりませう程に、暫しの間お次ぎの間で、一服召し上がつておいでなさりませ。萬事は私の胸にあること、お氣づかひなさるには及びませぬ。さあ〳〵珍齋、何をうろ〳〵して居るのぢや、ひよんな間違ひの起らぬうちに、早うお部屋樣をお連れ申して、お相手を勤めぬかいなあ。

珍齋　へい、へい、もしお部屋樣、あのやうに皆樣が仰つしやることでござりまする。早くお次ぎへ罷り越し、何がな手前が、面白い輕口でもお聞かせ申すと致しませう。

お銀の方　（一同の言葉を耳にも懸けず、佇立したまゝちつと二人の侍を睨め詰めて）これ、其處な二人の者、妾の命が欲いなら、いつでも其方たちに進ぜませう。

（つか〳〵と二人の傍へにじり寄る。）

太守　えゝ、其方や何としたのぢや。此れへ寄つては惡いと申すに。

お銀の方　いえ〳〵、嫌でござんする。どうぞ妾の氣が濟むやうに、任せて置いて下さんせいなあ。（太守の傍の自分の席へ座をしめて、しどけなく脇息へ頰杖を衝く）さあ二人の者、逃げ隱れはせぬ程に、斬るなと突くなと勝手にしや。……したが其方たちは、妾を斬つてもよいといふ、殿のお許しを受けたのかえ。

梅野　おほゝゝゝ、そのお許しがないばつかりに、あれを御覽なさりませ。あのやうに口惜しがつて、地團太踏んで居りまする。

お銀の方　さうであらう、さうであらう。命は惜しうはな

い程にいつでも其方たちに進ぜるが、かりそめにもお情を蒙つて居る體故、たつて欲しいといふのなら、殿のお許しを得たがよいぞえ。

氏家　己れ憎さその一言、御寵愛を笠に着て、云はうやうなき氣儘放埓、もう此の上は勘忍ならぬ。それ！　菅沼氏。

菅沼　おう、心得た。

（兩人一度に立ち上る。）

太守　えゝ何をする！

靱負　無禮者めが！　方々早うお立ち合ひなされい。

（末席に控へた以前の青侍ども、ばら／＼と馳け付けて二人に組み付く。氏家は刀に手を掛けてお銀の方に詰め寄る。女の危急を救はうとして藻掻いて居る太守の袖を、菅沼が摑んで居る。靱負と梅野とはお銀の身を庇つて、その前に据わる。折柄縁側の方で伊織之介の聲がする。

聲　暫く、暫く、暫くお待ちなさりませ。

（その聲が聞えると、今迄縮み上つて死んだやうになつて居た侍女たちが、等しく項を上げてハラ／＼した樣な顏つきする。）

侍女の一　おゝ、あの聲は伊織之介さま。

侍女の二　先からお姿が見えぬ故、妾は氣に病んで居たなれど、……

侍女の三　こんな所へ係り合つて、あの可愛らしいお方樣が、

侍女の四　何か過がなければよいが。

侍女の五　ほんに心配でござんすわいなあ。

（伊織之介、勢よく廣間へ馳せ入り、太守の足下に恭しくひれ伏す。）

伊織之介　（すぐに再び女性的な言葉になつて、嬌態を作りながら）どうぞ皆樣、暫くお待ち遊ばして下さりませ。委細の樣子は物蔭で承はつて居りました。年はも行かぬ子供の癖に、面羞うはございますが、退引ならぬ此の場の仕儀、殿樣とお部屋樣の御災難を、お救ひ申しに參りました。

太守　なに、其方が加勢に來てくれたと申すのか。

伊織之介　さうでござります。

太守　はゝゝ、其の志は嬉しう思ふが、其方は一體いかにして、余を救うてくれるのぢや。

伊織之介　生意氣かは存じませねど、痩せ腕ながらも此のお二方に渡り合ひ、相手を殺すか殺されるか、二つに一つの眞劍勝負が願はしうござりまする。

太守　さて／＼其方はけなげな奴、余が災難を氣遣ふあまり、命を捨つる覺悟と見える。

伊織之介　身に餘る御寵愛を蒙つた、日頃の御恩を報ゆるため、殿様と御部屋様のお身代りに、若年ながら私が、このお二方にお相手をいたしまする。勝負は時の運でござりまする。あながち私が後れを取ると、定まつた譯もござりませぬ。

梅野　成る程其方の云ふ通り、孰方が勝つやら負けるやら分りはせぬ。世間の人は知らずに居ても、そなたの手並の見事さは、妾がよう知つて居る程に、何の此れしきの氣違ひ侍、恐れることはござんせん、眼に物見せておやりなさるがようござります。

太守　こりや／＼梅野、其方や何を云うて居る。女ながらも武藝自慢の其方でさへ、此奴等が相手では抗ふまい。まして若年の伊織之介、見す／＼二人の手にかゝつて命を落すに極まつた者へ、勝負を許す譯には參らぬ。

梅野　伊織之介さまの手練の程を、御存知のない殿様故、お氣づかひは御尤もでござりますが、うはべは優しいお姿の、花恥しい若衆でも、鬼神を凌ぐ腕前の恐ろしさは妾がたしかな證人になりまする。此處にござるお二方のやうな、鼻息ばかり荒々しい、空威張りの名人を、片つ端から始末をするに何の雜作もござりませう。

伊織之介　梅野様のお言葉に、氣を許すではござりませねど、少しは腕に覺えのある伊織之介、滿更負ける積りではござりませぬ。どうぞ私の御願ひを、お聽きなされて下さりませ。

侍女の一　これ申し伊織之介さま、忠義に逸るのもよいけれど、そのやうな向ふ見ずは思ひ止つて下さりませ。

侍女の二　あの猛々しい、荒鷲のやうな人達に、雀のやうな其方が向うたら、一と掴みでござんすぞえ。

侍女の三　まあ考へてもぞつとする。其方の命に係はる大事。

侍女の四　どうやら人事とも思ひませぬわいなあ。

侍女の五　もう／＼ふつつり止めにして、苦勞をさせずに置かしやんせ。

靭負　常々からお氣に入りの伊織之介が願ひの筋、殿の御心痛はさる事ながら、本人の覺悟と申し、殊には思慮深い梅野殿がお口添へ、此れには必ず仔細がなくてはかなひませぬ。いつそのことに、お聞き屆けなされては如何でござります。

太守　いや／＼何と申しても、此ればかりは許されぬわい。

お銀の方　さて殿様のお情深い。伊織之介を不憫がつて、妾を不憫と思し召しては下さりませぬか。身代りに立つと云ふのなら、物の試しに勝負をさせて見たうござんす。

太守　又しても其方は無法を云ひ張つて、余を苦しめると云ふものぢや、惡推量は捨てゝおかぬか。

お銀の方　無推量でも無法でも、云ひ出したら後へは引かぬ妾の氣象。勝負が見たうござんす故、許しておやりなさりませ。それともいとしい伊織之介が、手傷でも負うたなら、可哀さうだと仰つしやるのでござんすかえ。
太守　手傷は愚か、いたましい最後を遂ぐるに極まつた奴、殺したうはなけれども、其方が强ひての望みとあらば是非もない。いかにも許して取らするぞ。
伊織之介　おゝ、お許し下さりますとな。忝う存じまする。
梅野　さあ面白いことになりました。お許しが出るからは、もう／＼此のやうな狼藉者を、生かして置くには及びませぬ。もし、伊織之介さま、早う二人の息の根を止めておしまひなさりませえ。
伊織之介　（氏家と菅沼の前へ慇懃に兩手をついて、飽く迄も落ち着いた、薄氣味の惡い猫撫で聲で）それでは御兩所樣、唯今お聞きなされまする通り、お部屋樣のお命を御所望遊ばすなら、先づ其の前に私と、御前試合をなされて下さりませ。此のやうな小童では、嘸御不足でござりませうが、一寸の蟲にも五分の魂とやら、武藝勝れしお二方の、お慰みには宜うござりまする。
菅沼　（あまり話が突飛なため、安心しながら聊か驚いて）あはゝゝゝ、先刻から默つて樣子を聞いて居れば、たはけた事を拔かし居る、其方を相手にいたしたとて、慰みにもなりはせぬ。子供の癖に邪魔立てせずと、引込んで居れ。さゝ、早う其處を退け。
伊織之介　いえ／＼此處は退かれませぬ。子供々々と侮つて、相手にせぬとは卑怯でござりませう。どうぞ私と眞劍の勝負をお願ひ申しまする。いざ御兩所樣、支度をなさりませぬかいなあ。
氏家　えゝ、そのやうに厭らしう、拙者の傍へのめ／＼と寄つて參つては相成らぬ。拙者は其方が大嫌ひぢや、かりにも侍の子ともあらう者が、いやはや男子の風上にも置けぬ奴。拙者は其方の顏を見ると、胸がむか／＼して參るわい。
伊織之介　（ますます女らしうなる）お氣に觸つたら御免なされて下さりませ。女のやうな聲を出して、河原乞食の眞似をする私が、あなた樣に擦り傷でも負はせる事が出來ましたら、まあ何となされまするえ。
氏家　こいつ、こましやくれた事を申す奴。なう菅沼氏、無益の殺生致したうはござらぬが、此の青二才は佞人ばらの一味の者、毒蟲奴等の片割れでござる故、不憫ながら血祭りに上げてやらうではござらぬか。
菅沼　うん、成る程それもようござらう。相手に致すも大人氣ないが、貴殿に代つて拙者が此奴を刀の錆に致して

くれる。

梅野　ほんにさうならうてはならぬこと、先づ順々に一人づつ、往生するのがよい分別。

（菅沼、廣間の前方に走り出でゝ、袴の股立ちを取り、上手を向いて體を構へる。）

菅沼　こりや菅二才、拙者が相手になつてつかはす、命が惜しくば今のうちに逃げるがよいぞ。

侍女の一　伊織之介さま、ようお考へなさりませ。子供のそなたが逃げたとて、誰も卑怯とは申しませぬぞえ。

伊織之介　皆様の御心配は忝うござりますが、私にも覺悟のあること、――菅沼さま、いざお相手を仕りませう。

（伊織之介は上手へ出て菅沼と向ひ合ふ。袴の股立ちも取らず、平然として鬢を撫でつけたり、襟を掻合せたりする。）

菅沼　いざ。

伊織之介　いざ。

（兩人刀を拔いて立つ。）

珍齋　こりやいよ／＼大變な事になつたわえ。あゝ間違ひがなければよいが、……手前は全體あのピカピカと光る物が大の禁物、氣のせゐか體中がうづ／＼して參りました。

侍女の二　妾も胸が冷や／＼して、見て居る氣にはなりませぬ。

侍女の三　お可哀さうな伊織之介さま、何とかしてお助け申す手だてはないものか。

侍女の四　えゝいやなこと、いやなこと、妾は斯うして眼をつぶつて居りまする。

侍女の五　いつそのことお次ぎへ入つて、耳を抑へて居た方が增ぢやわいの。

珍齋　いや御尤も／＼、此處に居ては壽命が縮まる。皆様彼方へお出でなさりませ。いの一番に手前が御免を蒙りまする。

侍女の一　ほんに珍齋は悧巧者。其方と一緒にわれ／＼も逃がしてくれぬかいなあ。

珍齋　さあ／＼早くお越しなさりませ。

（珍齋を先へ立てゝ、女中たち一同我れがちに下手へ逃げ去る。）

（廣間では既に勝負が始まつてゐる。二三合はすうちに菅沼は忽ち伊織之介の鋭い鋒先に切り捲くられ、技倆の相違が歴然と暴露される。意外の結果を見て、氏家も眞靑になる。）

靭負　やゝ、伊織之介はいつの間に、斯程の手練を積み居りしか。

太守　（喜色滿面、子供のやうにぞく／＼と肩顫はせる）

ほう、こりやまことに不思議々々。武藝自慢の菅沼が、あの太刀先に弄ばされて居るではないか。

梅野　それ、それ、伊織之介さま。もう一と息でござんすぞえ。え丶焦れつたい事ぢやわいなあ。

（同時に菅沼が斬り倒される。）

氏家　おのれ猪口才な小童め！　覺悟いたせ。

（不意に後ろから氏家が斬つてかゝる。殆んど直ちに、伊織之介が身を翻して「えい！」拔き打ちにすると、氏家も其の場にばつたり倒れる。）

靭負　さて／＼、驚き入つたる手練の早業、殿の御恥辱を雪ぎ參らせ、お部屋樣の御危難をお救ひ申したは偏へに其方が働きなるぞ、其方こそ誠にお家の忠臣、あつぱれな奴ぢやわい。

伊織之介　未熟な腕前が、お役に立つたは何よりの仕合せ。御家老樣のお褒めに預り、私も面目を施しまする。

太守　いや、心地よし、心地よし。（全く昂奮して、亂心の發作に襲はれ、狂人のやうな眼つきになる）早う酒を持て、此れを肴に飮み直すのぢや。こりや、誰ぞ居らぬか。珍齋は居らかぬ。珍齋々々、女などをも呼んで參れ。

（珍齋、緣側へ駈けて來て、その場の樣子を見て仰天する。）

珍齋　（けたゝましく叫ぶ）　ひえゝ、もし、皆樣お喜びなさりませ。もう大丈夫でござります。伊織之介樣は御無事でござりますぞえ。

侍女の辟　そりや本當でござんすかえ。

珍齋　ほんたうとも、ほんたうとも、まあ此處へ來て御覽なさりませ。菅沼樣と氏家樣とが斬られておしまひなされました。此れで漸う一と安心をいたしました。

（侍女たち廣間へ馳せ入る。）

（侍女の一人は銚子を携へて進み出で、太守に酌をする。太守、大盃を上げて立て續けに二三杯飮み乾す。）

梅野　（侍女等に向ひ）さあ／＼皆の衆、もう大丈夫ぢや。なんと小氣味よい事ではござんせぬか。

侍女の一　それにしても此の有樣はどうしたこと。

侍女の二　うれしいやら不思議なやらで。

侍女の三　なんだか夢のやうでござんする。

侍女の四　今まで少しも知らなんだが、伊織之介樣はえらいお方でござんすわいなあ。

太守　はゝ、面白い、面白い。（次第に醉が循つて來る）どうぢやお銀、其方の讐を取つて遣つたのぢや。何と胸がせい／＼したであらうの、さゝ、余が酌して取らす程に、其方も祝ひに飮むがよい。

（太守自らお銀の方に酌をしてやる。お銀の方は默つて杯を受けながら、うつとりと伊織之介の横顏に見惚

れて居る。)

太守　伊織之介、其方にも酌をして取らするぞ。

伊織之介　有りがたく頂戴いたしまする。

太守　(伊織之介の返す盃を波々と受けて喉を鳴らしながら、執念く何事をか考へて居る)はて、まだ此れだけでは面白うない。――こりや伊織之介。

伊織之介　はッ。

太守　(まだぢつと考へながら)はて、何か外に、一段と面白いことがありさうなものぢや。(きよろ／＼と一座の者を見廻した後、最後に梅野に眼をつけると、急に猛惡な相を帯びて來る)こりや、こりや梅野。

梅野　(何かは知らず竦然として)はッ、何御用でござりまする。

太守　はゝゝゝ、何もそのやうに驚く事はない。其方はたしか、女だてらに武藝が自慢であつたなう。(突然甲高い調子になつて)其方と伊織之介と、孰方が強いか眞劒勝負をして見い。

梅野　ひえゝ。(つと云つて、腰を拔かさんばかりに惶てる)

太守　(梅野が躊躇する體を見て、ぴり／＼と癇癪を起しながら)さゝ、眞劒勝負を致して見い。余が嚴命ぢや。背く事は相成らぬぞ。

(お銀の方と伊織之介とが、密かに顔を見合せる。)

靱負　(當惑の色を押し隱してさあらぬ風に)あはゝ、殿にはあまり御冗談がお上手故、梅野殿が本氣にしてびつくり致して居りまする。

太守　えい！　余は冗談を申すのではない。こりや梅野、何を致して居る。早く勝負を致さぬか。

靱負　此れはしたり、殿には如何なされました。梅野殿も伊織之介も大事な御家來、孰れが負けても殿の御損でござりませうが。

太守　餘計な事を申すには及ばぬ。それ、伊織之介、梅野がぐづ／＼致して居るなら、其方は構はずに斬つてかゝれ。

梅野　もし、お部屋樣、何とか殿樣に仰つしやつて下さりませ。妾は勿論伊織之介樣とてもどうして妾を斬る事が出來ませう。どうぞあなた樣のお詞がゝりで、二人の難儀をお助けなされて下さりませ。――伊織之介さま、そなたも共々お部屋樣へお縋り申したがよいわいな。

太守　伊織之介！　其方はなぜ早う斬り付けぬのぢや。余が言葉より梅野の命が大切ぢやと申すのか。

伊織之介　君命ならば是非なき次第、梅野さま、あなた樣のお命は貰ひましたぞえ。(いきなり斬りかゝる)

梅野　あれえ！　どうぞ助けて下さりませえ！

（梅野、一生懸命に叫びながら逃げようとする途端に後ろから髪を切られる。）

梅野　きやつ。（と云つて頭を抑へる）

珍齋　うわつ。（と云つて面を掩ふ）

梅野　えゝ、そなたはよくも妾を殺せたものぢや。あのこゝな、薄情男め。

太守　こりや、こりや、珍齋を始め女ども、此方を向いて見物いたせ。

珍齋　へい、へい、外の方なら兎も角も、梅野樣ではお氣の毒で、とても見物はできかねまする。

太守　なぜ見物が出來ぬのぢや。余が云ひ附けを用ひぬ奴は、片つ端から伊織之介に斬らせるぞ。

珍齋　ま、お待ち下さりませ。斬られては溜りませぬ。

侍女一同　見物いたすでござりませう。

（珍齋と共に急いで正面を向く。）

太守　伊織之介、皆の見物いたす前で、存分に梅野をし止めて見せい。

伊織之介　はゝつ、――梅野さま、お免しなされて下さりませ。

（伊織之介、遂に梅野を殺す。）

太守　わツはゝゝ。いやもう、たはいのない者ぢやなう。

（侍一人、上手の襖をあけて轉ぶが如く出で來り、喘ぎ〳〵太守の前へ兩手を突く。）

侍　申し上げます。一大事でござります。

太守　何ぢや、何ぢや。

侍　何奴かは存じませねど、奥方の御膳部へ、毒を盛つたる者あつて、唯今夥しく吐血遊ばされ、御苦痛の御樣子でござります。早や〳〵彼方へ、お越し下さりませ。

（太守を始め一同「えゝつ」と云つて、顏を見合せてすつくと立つ。唯獨り珍齋は茫然自失した如く据わつて居る。）

太守　して〳〵、すりや何者の爲業とも、未だ手がゝりはないと申すか。

侍　手懸りとてはござりませぬが、不憫ながら其處に居ります珍齋に、聊か嫌疑がかゝつて居りまする。

（珍齋依然として默つて居る。靱負が心配さうに其の態度を偸み視る。）

太守　なに珍齋の爲業ぢやと、……

侍　極まつた譯ではござりませぬが、先刻奥方のお給仕を勸めた珍齋、どうした譯か今日に限つてこそ〳〵と、直きに退出致した樣子。彼れより外に御膳部に近付いたものもござりませねば、自然と嫌疑が懸つて居りまする。――こりや珍齋、聞いた通りの次第故、一應其方を取り調べる。身共と一緒に參るがよい。

靱負　お待ちなされい。少しく思ふ仔細もあれば、取り調べは拙者がいたす。（珍齋の傍へ寄り、兩手を背後へ廻して捕へ、慰めるやうに）これ珍齋、よも其方の爲業ではあるまいが、兎も角も拙者が糺明いたすであらう。こりや、立ちませい！

（珍齋おど／＼しながら引き立てられる。再び襖の外に騒々しい足音と聲とが聞える。）

聲　奥方の御最期でござります。早く／＼、お越し下さりませ。

太守　おゝ、皆參れ。

（太守が眞先に、靱負、珍齋、侍女、侍等悉く上手と下手へ馳せ入る。お銀の方と伊織之介とが座敷に居殘る。）

お銀の方　伊織之介。

伊織之介（跪いて女の容貌を仰ぐ）お部屋さま。

お銀の方　うまく行つたわいなあ。

伊織之介　話に聞いた毒藥が、どうやらお役に立つたさうな、……

お銀の方　それにしても氣詰りなはあの珍齋、靱負殿の手に捕へたからは、よも間違ひはあるまいが、……（ふと下を向いて梅野の屍を見る）ほんに梅野は氣の毒な。なう伊織之介、此れでも其方の妻になる氣で居た女、満更憎うなからうに、無殘な事をしたわいなう。

伊織之介　氣紛れな殿のお言葉を幸ひに、戀路の邪魔の梅野様を、斬つて捨てたはよいけれど、謀叛の爲めには大事な加擔人、早まつた事を致しました。

（明け放された上手の襖から、靱負が密かに首を出して二人を視詰めて居る。）

お銀の方（靱負の姿に氣がつく）あれつ、其處に靱負殿が、……

伊織之介　えゝしまつた！　もうかうなれば破れかぶれ。

靱負　不義者！

（と呼んで奥へ逃げ伸びようとするところを、伊織之介が刀を振り翳して追つて這入る。襖の外で「いえつ」といふ掛聲諸共、靱負の斬られる聲が聞える。）

（伊織之介が戻つて來る。續いて其の後から、後ろ手にぐる／＼と縛り上げた珍齋の繩の先を亂暴に引き摺つて、太守が血刀を銜へて走つて來る。）

太守　やあ／＼此奴等、おのれ今まで余をば巧みに欺き居つたな。珍齋めが自白に依つて、罪は殘らず知れたのぢや。

お銀の方（圖太い調子で）知れたが何としたのぢやえ。

伊織之介（すつかり、沈着な態度を失つて、かあつと上氣する）此の馬鹿殿め！　うぬも冥途の道連れぢや！

（腕白な子供のやうに、がむしやらに怒鳴つて太守を斬り倒す。と同時に喪心したやうに据わつて。）

伊織之介　お部屋様、此處へおいでなさりませ。二人一緒に刺し違へて死にませう。

お銀の方　おゝ、斯うなるからは、それより外に道はない。其方と一緒に死ぬるなら、妾は嬉しうござんすぞえ。

（お銀の方、男と並んで据わる。）

伊織之介　覺悟はよろしうござりまするか。

お銀の方　（につこりして）早う殺して賜ひなう。

（兩人重なり合つて打ち倚す。座敷のまん中に珍齋が縛られたまゝ臀餅を舂いて、氣絶してゐる。）

――幕――

お國と五平（一幕）

人物

お國
五平
池田友之丞

時

德川時代

所

野州那須野が原

ひろびろとした淋しい秋の那須野ヶ原の夕暮である。上手より下手へ松並木の街道がつゞいてゐる。一本の松の根方に旅裝束の主從二人が休んで居る。主人と云ふのは西國の侍の後家お國、從者は仲間(ちうげん)の五平である。

五平　奧方さま、いかゞでございます、……もうそろ〳〵お出かけになりましては？……

お國　あい、まだくたびれが拔けぬわいの。

五平　したが、もう日の暮れに間もない樣子、――何にいたせ此の原中で夜になつては、路が難儀でございます故、次ぎの宿まで今一と時辛抱なさりませ、おつらいことでござりませうが。

お國　ほんに、女と云ふものは意氣地のない、――此のやうな足弱が道づれでは、そなたも定めし迷惑であらう。

五平　何の、そのやうな事がござりますものか、長い間おわづらひなされてから、けふでやうやう二日目の旅でござりますもの、お疲れ遊ばすのは當り前、――かうと知つたら、もう二三日宇都宮へ逗留いたすのでござりました。

お國　いえ、いえ、わたしの體が弱いからとて、さうゆるゆると日を過しては居られぬわいの、……宇都宮で病みついてから、もう二た月にもなるぢやほどに、……

五平　それもお道理ではござりますが、いかほど勝氣なお方樣でも、御病氣には、勝てませぬ。それに今日は又、朝から彼れ此れ六七里もお歩きなされたでござりませう。

お國　歩いても歩いても、一向人里らしいものも見えぬが、……此處は名にし負ふ那須野が原とやら、――まあ何と云ふ淋しい所であらうぞいの。

五平　此の原の先はやがて奧州ぢやと聞いて居ります、――此の原の道を何處までも、もう二三日お歩きなされたら、――白河の關へ參るのでござります。

お國　あゝ、白河の關と云へば、子供の頃からよう話しには聞いてゐたが、……私が七つ八つの時分、よう祖母様が話しては下されたが、……

五平　その白河の關へ着くのでござります。その關を越えてずつと奧州の果てまでも、……次第に依つたら參らねばならぬかも知れませぬ。

お國　わたしの祖母さまは和歌がお好きで、いつもいつも和歌の話をして下された。――歌に名高い白河の關と云うたら、廣島からは何百里の向ふにある。――大阪を越えて、京を越えて、東海道の果てにある江戸を越えて、まだその先を百里ほども行かねばならぬ。そしてその關の向ふにも、むかし夷の住んで居た奧州と云ふひろいひろい國があるのぢやと仰しやつて、――

五平　事に依つたら、そのひろいひろい國の中をのこらず歩かねばなりませぬ。

お國　――國を出てから、もう二年、今年の秋も暮れて行くのに、いまだに敵のありかが知れぬとは、ほんに何んとした事であらう。

五平　今頃お國では、定めし皆樣が待ちこがれておいでになりませう、お坊ちやまも今年はたしかお六つにおなりなされた筈、まあどんなにかお可愛いことでござりませうに、……

お國　あ、これ、子供の事は聞かして賜るな。それを云はれると、飛立つやうに國へ歸りたうなるわいの。

五平　はて、又してもうつかり致して居りました。お免し遊ばして下さりませ。――したが、それを思へば、一日も早う本望を遂げたいものでござります。

お國　……なう五平、わたしはどのやうに苦勞をせうと、旦那樣のお爲めゆゑ厭ひはせぬが、そなたは無かし……ほんにそなたには氣の毒でならぬぞえ。

五平　奧方さま、どうぞそのお言葉はお置き下さりませ。何ぞと云ふと「氣の毒ぢや」と仰つしやりますのが、お恨みでござります。此の五平奴はあなた樣の御家來でござりませうが、……

お國　それはさうでもあらうけれど、親の代から召し使うたと云ふではなし、ほんの二三年奉公をしたばかりのそなた――旦那樣のお出での時こそ、主とも思ひ思はれもすれ、今ではそなたを、家來のやうにも思ひませぬ。

五平　勿體ないことを仰つしやります。旦那樣の御家來なら、かう云ふ時こそなほさら御奉公をいたさねばなりませぬ。――二三年の間とは云へ、なみならぬ御恩を受けたのでござりますもの。――

お國　恩を忘れる者ばかり多い世間に、僅かな義理を重んじて、ようまあ盡してくれる事ぢや。旦那樣も草葉の蔭

から、そなたの忠義を喜んでおいでゞあらう。

五平　敵にめぐり遇ふまでは、五年は愚か十年でも二十年でも、きつとお供をいたしまする。相手は必ず奥州へ落ちのびたことゝ存じますが、若し奥州に居なければ又引き返して江戸へも上りませう。京大阪へも參りませう。四國へでも九州へでも、日本の國のあらん限りは、どのやうな邊土の果てまでも、いつ迄でも御一緒にさ迷ひまする。

お國　ぢやがそのやうに運が惡うて、幾年も幾年も敵にめぐり遇はなんだら、……かうして毎日山を越えたり野を渡つたりして居たら、二人とも知らぬ間に年を取つて、髮に白毛が生えるであらう。そなたとわたしとは、……考へて見ればほんに不思議な縁ではないか

五平　さやうでござります。――世が世ならばあなた樣は、私のやうな仲間風情がお側へも寄れぬお身の上、それがかう云ふ事になりましたのも、……憚りながら、何かの御縁でござります。

お國　敵を討ちに國を出た身が道中で長のわづらひをして、それでなうてもそなたに世話を燒かせるのに、思ひがけない看病までもして貰はうとは、ほんに何と云ふ腑がひのないことやら、……

五平　敵を討つのも御看病をいたしますのも、私に取つては同じ御奉公でござります。しかしまあ、あれほどの御病氣が、かうまで早う御本復になりましたのも、大方神佛のお加護でござりませう。もしひよつとしてお體のお惡いうちに、敵にでも遇ふやうなことがあつたら、――相手は卑怯な池田さま故、どんな事にならうとも知れぬと、私はたゞそればかりをお案じ申して居りました。

（その少し前から、遠くの方に微かな尺八の音が、きれぎれに聞えて來る。お國は一心に耳を澄ます。）

お國　これ、……五平や、そなた、あの尺八の音が聞えぬかいの？

五平　成る程、遠くの方でたしかに聞えて居りまする。ではあの虛無僧が參つたさうな。……

お國　あの音色はあの虛無僧に紛れもない。……此の間ぢう宇都宮で私がわづらうて居た折に、いつもあの窓の下で吹いて居たのは、あれぢや、あの調べぢや。

五平　あの虛無僧も私たちと同じやうに、急ぎの旅と云ふではなし、街から街を流して歩く身の上でござりませうが、あゝしていつも私たちの路を追ふとは、ほんに不思議な男でござります。

お國　あの虛無僧と私たちとは、中山道の熊谷から後になり先になりして、同じ日に宇都宮へ來たではないか。

五平　さやうでござります。さうして宇都宮でちやうど二

た月、あなた様が御病氣の間、雨の日にも、あの男の尺八の音が、窓の下に聞えぬことはござりませなんだ。
お國　若しひよつとして、あれが敵の友之丞ではあるまいかと、そんな氣がしたのぢやけれど、……
五平　それは私とても同じでござりました。したが、奥方さま、あなた様はあの虚無僧の顔を、御覧になつたでござりませうが、……
お國　此の間、窓の下へお金を投げてやつたとき、深編笠の端をかしげて私の顔を見上げたわいの。
五平　私もあの時たしかに見ましたが、池田様とは似ても似つかぬ男のやうでございました。
お國　それはさうぢやが、……此の後又も行き遇ふやうな折があつたら、もう一度よくあの顔を見たいものぢや。
五平　うろんな男ではござりますが、あれがよもや池田様ではござりますまい。現在敵と附け狙はれるほどの者が、まして御家中でも評判の臆病なお人が、私たちの傍近くへ、あゝ押し強う參れる譯はござりませぬ。
お國　さあ、そなたはさういひやるが、私に無禮な戀慕をしかけ、卑怯にも旦那様を闇討ちにした男ゆゑ、……私のあとを附けて居ようも知れぬと思ふが、……
五平　命を捨てゝかゝる積りなら、さやうなこともござりませうが、――それもあなた様お一人なら知らぬこと、私がお附き申して居りますのに、命の惜しいあの方に何んでそのやうな事が出來ますものか。あの虚無僧は決してさうではござりませぬ。池田さまはあの通り、劍術はお下手でも人品だけはお立派な、女のやうに色の白い優しいお方、あの虚無僧は色の黒い、頬骨の出た、武骨な人柄でござりました。
お國　ぢやが、友之丞はあゝ云ふ男。何處ぞにこつそりと隱れて居て、不意にどのやうな仇をせぬとは限らぬわいの。そなたも油斷をせぬがよいぞえ。
五平　私の身は兎も角も、あなた様にお間違ひがあつてはならぬと、始終氣を附けて居ります故、決して決してお氣づかひには及びませぬ。相手はたかの知れた腕前、見つけ次第に必ず生かしては置きませぬが、いまだに運惡う出遇はぬと云ふのは、――池田様も命冥加なお人でござります。
お國　旦那様がお亡くなり遊ばしてから、もう來月は四年目の祥月命日がめぐつて來たのに、思へば思ふ程憎い奴は友之丞。――あゝ、早う本懐を遂げたいものぢや。
五平　そのうちに時節が廻つて參りませうほどに、さういらいらと遊ばさぬがようござります。――何にいたせ、もう大分暗くなつて參つたやうでござりますが。
お國　奥州に近いと聞いたせゐか、ゆふべの風が身にしみ

る、……旅には馴れて來たやうでも、けふは何となう心細い。

五平　此のあたりは人の子一人通るではなし、暗くなれば尚更さびしうござります。――いかゞでござります？

お國　おみ足の工合はまだお直りにはなりませぬか？

お國　あらかたくたびれは抜けたやうぢやが、……（足の先を揉みながら）此の、拇趾の豆がつぶれて、こゝがずきずきと痛んでならぬわいの。

五平　どれ、どこでござります。ちよとお見せなさりませ。――

（お國の足もとへ寄り、草鞋の紐を解き、足袋を脱がせる。笛の音一旦途絶え、又次第に近づく。）

五平　おゝ、此れはまあ、さぞお痛みでござりませう。皮がむけて紅くなつて居りまする。はて、何んぞよい工夫は。ちよつとお待ちなされませ。草鞋の紐が觸らぬやうに、此れへ紙をおあてなされたがようござります。――

（懷紙を出して細く引き裂き、それを傷口へ卷いてやる。）

五平　さ、いかゞでござります。これでいくらかお樂になるでござりませう。

お國　おゝ、大さう樂になつたわいの。――久しう草鞋を穿かなんだので、直き此のやうに豆が出來るのぢや。

五平　もう二三日たちましたら、又すぐお馴れになりまする。――さちよつとおみ足をお上げなさりませ。

（云ひながら足袋を穿かせ、草鞋を結んでやつて居る。）

お國　五平や、あの虚無僧はだんだん此處へやつて來るやうぢやが、……

五平　（草鞋を結び終つて耳を傾ける）……町中を流して歩くなら兎も角も、人里を離れた原の中を、此の夕ぐれにあゝして笛を吹きながら歩いて居るとは、何にしても解せぬ男、……

お國　そなた、今にこゝにやつて來たら、もう一度よく顏を見てはくれぬかいの？

五平　よろしうござります。幸ひ此處で待ち構へて、今一應念の爲めに、面體を調べて見ることにいたしませう。

お國　ほんにさうしてくれたがよい。そなた、さつきも云うた事ぢやが、返す返すも氣を許してはならぬぞえ。

五平　奥方さまも、成るべく顏を見られぬやうになさりませ。私も此の笠を被つて、そしらぬ風で一服いたして居りませう。――（笠を被りながら上手を見る）あれもう其處へ參つたやうでござります。

（笛の音一層近くなる。お國は手拭を頭にかけ、五平は煙草に火をつけ、ぢつとうつむいて控へてゐる。）

（上手より虚無僧の姿が現れる。編笠を深く被り、尺八を吹きつゝ二人の前を通り過ぎて下手へ行かうとする。）

五平　もし、虚無僧どの、――虚無僧どの。

（二度目に呼ばれた時、虚無僧は吹くのを止めて默然として歩みを止める。が矢張り尺八を口へあてたまま振り向きもせずに立つて居る。）

五平　虚無僧どの、――憚りながら、少々物をお聞き申したいのぢやが、――

（虚無僧靜かに尺八を口から離し、二人の方を振り返る。）

五平　おぬしはあの、先だつて中山道の熊谷から、拙者どもの後になり先になり、宇都宮まで一緒に參られたお方ぢやと存ずるが、さやうではござりますまいかの？

虚無僧　（曖昧な、小さな聲で）いかにも、御一緒でござつたなう。

五平　さてはやはりさうでござつたか。――いや、別段用事と云ふではなけれど、かうして度び度び落ち合ふのが、不思議な御縁ぢやと存じたので、失禮ながらお呼び止め申したのぢや。しておぬしは、此れから何地へお越しになる？

虚無僧　いづこと云うてあてはござらぬ。――

五平　ぢやが、この街道へ來られるからは、いづれ奥州へ參られるのでござらうがの？

虚無僧　……

五平　もし左様なら、旅は道づれと申す事もござるゆゑ、次の宿まで一緒に參らうではござらぬか？

虚無僧　……

五平　虚無僧どの、どうなされた？……返辭の無いのはどう云ふ譯ぢや？

虚無僧　おぬしは拙者に、用事はないと云はれたが、さやうに隱しなさらぬがよい。……拙者の顏が見たいのでござらうが、……

五平　……（お國と共に呆然として虚無僧を見上げる）

虚無僧　見たくば見せて進ぜよう。――

（云ひながら極めて落着いて編笠を脱ぐ。色の白い、さかやきの痕の青々とした美男子である。）

五平　やゝ。

お國　そなたは池田友之丞――

虚無僧　いかにも池田友之丞ぢや。――お國どの久し振りでござつたなう。

お國　こゝでそなたに出遇ふとは、亡き夫の引き合はせ。逃れぬところぢや、觀念しや。

五平　旦那様の敵を討ちたさに、奥方さまのお供をして、

三年このかたお前樣を尋ねて居たのぢや。池田樣、もう御運の盡きでござります。男らしうお立ち合ひなされい。

友之丞　まゝ、そのやうに騷がずともよい。拙者は昔から人に知られた意氣地なし、劍術は下手なり力は弱し、お身たちが討たうと思へばいつでも討たれる。……ぢやが、お國どのと云ひ五平と云ひ、伊織殿は賴もしい妻や家來を持たれたものぢや。拙者のやうになまじ長らへて生き恥を晒さうより、伊織殿はずつと仕合はせぢや。

（此の臺辭の間に、友之丞は松の根方に腰をおろす、お國と五平が左右よりそれを圍むやうにする。）

五平　お立派なお腕前を持ちながら、お前樣の卑怯な手にかゝつて無念な最期をお遂げなされた御主人樣が、仕合はせとは何事ぢや。云はせて置けば途方もない事を、……

お國　これ友之丞、生き恥を晒すのが辛いなら、なぜあの時に潔よう、下手人は己れぢやと名のつて出なかつたのぢや、かりにも御家老の家に生れた身が、まあ淺ましい其のやうな姿になつて、……

友之丞　淺ましいのは拙者とてもよう知つてゐる。ぢやが、拙者は命が惜しかつたのぢや。

五平　池田樣、お前さまも今こそ落ちぶれておいでなさるが、昔は武士の端くれではないか。命が惜しいとはよう云はれた。……

友之丞　さ、さ、その臆病を笑つてくりやれ。いかほど人に笑はれても、拙者は命が惜しいのぢや。

お國　そのやうに命の惜しいそなたが、何で私どもの居る前へ出て來やつた？　それともそなた、とても逃れぬ所ぢやと覺悟をきめておゐやるのか？

友之丞　いやいや、覺悟が出來た譯ではない。——拙者はたゞ一と目そなたの顏が見たうて參つたのぢや。

お國　何？　何とお云やる？

友之丞　（淋しき微笑）あはゝゝゝ、お國どの、何もそのやうにきつとならずともよいではないか。實を申せば、拙者はそなたと五平とが、廣島を發足したその日から、今日まで足かけ四年の間、明け暮れ影のやうに附き添うて、そなたの跡を慕うて來たのぢや。いかに臆病な男ぢやと云うて、戀には命の危さを忘れることもあるのぢやほどに、……

五平　四年の間跡をつけたと？——そのやうな事がある譯はない。お前樣とは先だつて熊谷の宿で落ち合うたのぢや。

友之丞　其方がさう思ふのも尤もぢやが、拙者は決して僞りは申さぬ。お身たちが廣島を發足したのは、——忘れもしない一昨々年の師走の十日。あれからお身たちは中國筋を大阪へ出て京に廻り、一昨年の暮れに東海道を江

戸へ下つたのでござらうがな。ならお國どの、……虚無僧の姿に變へたはつい此の頃ぢや、が拙者はもう四年越し、そなたのお跡を追うて居たのぢや。

お國　さうしてそなた、私の跡を追うて來てどうおしやる心なのぢや。

友之丞　どうする心か、それは拙者にも分りませぬ。知つての通り拙者はそなたに戀慕をして、戀敵の伊織を闇討ちにした。それをお身たちに云はせたら、定めし卑怯ぢやと云ふであらうが、……

五平　卑怯でなくて何としようぞ！

友之丞　まま、その言ひ譯は後で申さう。――あの晩拙者は伊織殿を斬つて捨てゝ、闇に紛れて、一旦廣島を落ち延びはしたものゝ、考へて見れば此の先どうなるやら知れぬ身の上、いづこと云ふあてもなくさすらひの旅に出るにもせよ、せめては一と目お國どのゝ顏を見てからにしたいと思うて、……お國どのは、きつと拙者を追ひかけて仇討に出るであらう。拙者を見つけ出すまでは日本國中の津々浦々を經めぐるのであらう。その時を待つてこつそり跡へついて行つたら、望みがかなふ折もあらうかと、實はあの明くる日面體を變へて再び御城下へ忍び込み、そなたたちが旅立つ日まで隱れて居たのぢや。

お國　夫を殺してその上に又、そのやうな事をしようとは、――聞けば聞くほど面の憎い。

友之丞　ぢやがそれほどに憎まれても、そなたの事を思ひ切れぬ友之丞を、不憫とは思うて下さらぬか。先だつて宇都宮で、そなたが長のわづらひをして寢て居た折に、雨の日にも風の日にも、そなたの部屋の窓の下で尺八を吹いたは、誰あらう此の友之丞ぢや。そなたを思ふ心づくしを、蔭ながら聞いて貰ひたかつたのぢや。

五平　しかしあの虚無僧は、お前樣ではなかつたやうぢやが、……

友之丞　拙者は顏に墨を塗つて、お身たちの眼を欺いたのぢや。ならお國どの、そなたも覺えて居るであらう、つい此の間、そなたは窓から首を出して拙者に錢をなげてくれた。あの時始めて、國を出てから四年ぶりで、拙者はそなたの顏を見たのぢや。日頃の望みがあの時やうやうかなうたのぢや。

五平　聞けば聞くほどお前樣は執念きお人ぢや。――したがその望みがかなうたからは、此の世に思ひ殘すこともござるまいが、……いかゞでござります？　池田樣、さ、さ、男らしう勝負をなされい。

友之丞　いやいや、拙者は勝負をする氣はない。其方は國に居る時分から、仲間とは云へ武道にすぐれた男ぢやと云うて、人にも褒められ自らも許して居たやうぢやが、

拙者にはそのやうな者と太刀打をする腕はないのぢや。拙者は先刻も云うた通り意氣地のない、「武士の風上にも置けぬ男」ぢや。見す見す負けると極まつて居るものを、勝負をしたとて無益であらうが、……

五平　お前様は此の期に及んでも、まだ命が惜しいのでござるかな？

お國　一寸逃れに逃れようとおしやるのか？

友之丞　逃げられるものならば、一寸でも二寸でも逃げたい。卑怯とも臆病とも笑へ。拙者は僞りのない事を申すのぢや、……今更こんな事を云うたとて愚痴かも知れぬが、……そなたの夫の伊織殿と云ひ、又こゝに居る五平と云ひ、侍の道をよく辨へた劍道にすぐれた人は仕合せぢや。拙者はつくづく二人の者が羨しうてならぬわい。……

お國　そなた、人を羨むほどなら、なぜ自らも男らしうしないのぢや。

友之丞　男らしうしたいのぢやけれど、生れつき此のやうな、女々しい氣だてを持つて來たものを、自分の力でどうする事が出來ようぞい。拙者とても侍の家に生れたからは、そなたの夫に劣らぬやうな立派な武士になりたうござつた。劍道にも秀で、膽力も備はつた、一人前のものゝふぢやと云はれたうござつた。さうすればお國どのからも、――あゝまで嫌はれはせなんだであらうに、……今頃はいとしいそなたを妻に持つて、一生樂しく日を送ることが出來たであらうに、……それも此れも、みんな拙者の生れつきが惡いからぢや。つまり拙者が不運だからぢや。

お國　不運と云ふのは亡き夫の伊織殿のことぢや。そなたは國においやる時分御家老の家柄を笠に着て勝手氣儘なるふるまひをしやつたばかりか、夫のある身に戀慕をしかけて、私に恥を搔かせたではないか。今になつてそのやうな事を云うたとて、誰がそれを眞に受けよう。そなたが人に嫌はれるのはそなたの身から出た錆ぢや。

友之丞　いかにも拙者は人に嫌はれた。――侍の身にあるまじき不所存者、――怠け者で、うそつきで、女のやうで柔弱で、物の役にも立たぬからと云うて、そなたばかりか多くの人に蔑すまれた。ぢやが拙者から云はせれば拙者の氣だての惡いのは自分の知つたことではない。拙者は始めから斯う云ふ人間に生れて來たのぢや。そなたの器量が美しいやうに、拙者の心は生れながら醜いのぢや。なうさうではないか。それなのに拙者を攻めたとて無理ではないか。

お國　そなた、それほど自分の醜さを知つて居ながら、なぜ人を羨んだのぢや。

友之丞　お丶、羨まないで何としようぞ。――伊織どのも人間なら拙者とても人間であらうに。その上そなたと拙者とは約束までした仲ではないか。それが行末の見込みがないからとて、そなたにも疎まれ、そなたの父御にも斷わられた。いやそればかりか、世間の人もそなたたちはよう斷わつた、あのやくざ者の友之丞をよう見捨てた、伊織殿どのに見かへたと、手をたゝいて囃し合うた。唯一人とて拙者を氣の毒と云うてくれる者はなかつた。それが拙者には……拙者のやうな女々しい者には、云ひやうのない淋しい思ひをさせたのぢや。……拙者が伊織どのを斬つたのは、その淋しさに堪へかねたからぢや。

五平　ではお前様は、御主人様さへ居らせられなんだら、思ひが屆くとでも考へておいでなされたのか？

友之丞　いゝや、お國どのが拙者を捨てたは、伊織どのが居たからではない。拙者が悪い人間だからぢや。それは拙者とてもよう知つて居る。したが拙者は、伊織どのが憎かつたのぢや。伊織どのを褒めそやす世間と云ふものが憎かつたのぢや。伊織どのは誰が見ても立派な侍、拙者は不運な生れの男、それぢやのに人は拙者を憫れまうと思はないで、みな伊織どのゝ味方をする。戀の恨みもあるにはあるが、拙者は世の中と云ふものに楯をつく氣で、伊織どのを殺してやつたのぢや。闇討ちにしたは卑怯ぢやと云ふが、女々しい男が立派な侍を殺すのに、外にどう云ふ手だてがあらう。拙者のやうな弱い人間は、卑怯になるより外はないのぢや。

五平　そのやうな繰り言をいつまで聞いたとて埒は明かぬ。あまり時刻の移らぬうちに、――さ、さ、池田様、逃れぬ所とおあきらめなされて、お覺悟なさりませい。友之丞さまは、思ひの外にあつぱれな勝負をなされて、見事な御最期を遂げられたと、國への語り草になろやうに、立派にお立合なさりませ。武士の情に云うて進ぜるのでござりますが、――

お國　なう友之丞、そなたがどのやうに悪い人でも、それほどまでに私を慕うてくれたものを、決して憎いとばかりは思はぬ。回向は私がして上げるほどに、どうぞ聞き分けて覺悟をして賜れ。これ、友之丞どの、私の頼みぢや。

友之丞　そなたにそのやうに云はれると、拙者はうれしうて悲しうて……涙がこぼれる。そなたから優しい言葉をかけられるのも、思へばもう此れで七年振りぢや。生きて居てもかひのない身ぢやほどに、殺すと云ふなら殺されもしようけれど、かうして互ひに膝を交へて、此の原の中にいつまでも暮らして行くことは出來ないものか。あゝ、拙者は五平が羨ましい、五平のやうにそなたの供

をして五年でも十年でも、遠い國々をさまよふことが出來るのであつたら。なう五平、そちも武士の情を知るなら、少しは察してくれたがよい。

五平　その情を知ればこそ、先程からお前樣の覺悟を促してゐるのぢや。

友之丞　そちは格別、伊織殿から恩を受けたと云ふのではないに、ほんの二三年奉公をした身でありながら、はるばる奥方に附き添うて主人の仇を討ちに出た。――成る程聞けばあつぱれな忠義者、定めし後の世の鑑と云はれよう。ぢやが拙者とて若しも武道に達して居たら、そちの眞似は喜んでして見せう。まして、連れの女は美しいお國どの、幾日旅をつづけたとて惡うはなし、たまたま敵に出遇つたところで、相手は自ら臆病者と名のつて居る腰拔侍、斬つて捨てるのは容易い事ぢや。なう五平、さうではないか。そして首尾よう讐を報いて國へ歸れば、そちはお上の御感に會うて侍分に取り立てられる。あはよくば伊織殿の家名を繼いで、晴れてお國どのと夫婦にもなれる。忠義と云ふはさうしたものぢや。智慧才覺のある者なら、誰しも忠義はする筈ぢや。

五平　聞き捨てにならぬその一言。――お前さまは私に、何かそのやうな腹があつて、奥方さまのお供に出たと云はつしやるのか？

友之丞　そのやうな腹があつたとは申さぬ。そちが仇討ちの助太刀をせうと思ひ立つたは、お主の恩に報いる爲めで――拙者はそれを疑うては居らぬ。ただその忠義は、はたで見るほど辛いものではないと云ふのぢや。拙者のやうにいとしい人からは敵と狙はれ、世の中から爪彈きをされ、何處と云ふあてもなくさまよふ者の眼から見れば、樂しさうに思はれると云ふのぢや。

五平　お前樣は多くの人に浮き目を見せながらも、ようそのやうな事が云はれる。お前樣のやうな根性のひねくれたお人に、われわれの苦勞が分る筈はない。……

友之丞　したが五平、成る程苦勞もしたであらうが、そちにはそれを慰める術もあつたではないか。……宇都宮でお國どのが煩うた折、そちは心のありたけを盡してまめまめしう看護をした。痒い所へ手の屆くやうに、かひがひしく世話を燒いた。――

五平　はて、それがどうしたと云はれるのぢや？

友之丞　あの時お身たち二人は、はたの見る眼も羨ましい、仲の好い主從ぢやと拙者は蔭ながらさう思うた。……

お國　これ友之丞、そなた何を云やるのぢや。又しても私に恥を掻かせる氣か？

友之丞　……夫の仇討ちに出たそなたが、道中でわづらふは重ね重ね不運ぢやが、あの二た月の間と云ふもの、窓

の下で尺八を吹きながら、拙者はいつもさう思うた。――不運とは云ふが、今頃はさぞ心のうちで、お身たち二人はその不運を喜んで居よう。ひよつとしたら仇討ちの事も忘れて居よう。病が直ればいつまでさうして居られまいが、どうせ世の中は假の宿りぢや。暫しにもせよ樂しい時がありさへすれば仕合せであらうが。……なうお身たち、それに違ひないではないか。拙者は何もお身たちに耻を掻かせようと云ふのではない。羨ましいと思ふばかりぢや。

（お國青ざめた顔色で五平と眼を見合はせる。）

五平　これ、何を證據にそのやうなことを。

友之丞　お身たちは今、拙者を殺さうと云ふのではないか。死んで行く者に隱し立てをしたとて何になるのぢや。四年の間戀ひしい人の跡をつけて居た拙者が、どうしてそれほどの事を知らずに居よう。――成る程國を出た時はあつぱれな主從であつたらうが、お身たち二人がいつからともなく馴れ染めたのは、よう知つて居る。拙者はあの熊谷の越前屋で、お身たちの隣の部屋に泊つて居たのぢや。

お國　えゝつ、ではあの晩そなたは、――

友之丞　おゝ、隣の部屋で話聲は殘らず聞いた。――ぢやがお國どの、何も案ずるには及ばぬ。拙者が此處で殺されてしまへば、それを知つて居る者は廣い世の中にお身たち二人。敵を討つて國へ歸れば、きつと首尾よく晴れて夫婦になれるであらう。馬鹿を見るのは此の友之丞ただ一人ぢや。

五平　……それを知つて居られては、今更お前樣にも面目ない。何も始めからさう云ふ腹があつたといふ譯ではない。ふとした事から不義とは知りつゝ奥方さまと、……割りない仲になつてしまうた。……池田樣、どうぞ赦して下され。……

友之丞　はて、拙者は赦すも赦さぬもない。たゞそれにつけても恨めしいのは世の中ぢや。――拙者は人妻に思ひを寄せて身を誤つたに、そちは同じ事をしてそれが忠義ぢやと人に云はれる。そちには不義をしながらも世を渡つて行く道があるが、拙者にはその道がない。そちのやうに侍の道を辨へて、日頃の心がけが正しい者は善人ぢや、拙者のやうに根性のひねくれた、意氣地のない者は惡人ぢやと、世間の人は一概に云ふ。考へて見れば惡人と云ふ者は、つくづく損な役廻りぢや。いかにも拙者は惡人ならばこそ人を殺した。ぢやがその報いは受けて居るのに、そちは拙者を殺さうとするばかりか、それを立身の緒にする。

五平　池田樣、赦して下さい。私が惡うございました。私

ぢやとてお前さまと同じ惡人ぢや。
友之丞　そんなら其方は、拙者の命は赦してくれるか。
五平　さあ、それは……
友之丞　そちもお國どのも、拙者に向ける刄はない筈ぢや。そちこそ主人の奥方と不義をした。めぐり合せがよかつたら、拙者がお國どのを我が物にして、そちを伊織殿の敵と呼んで見せるのぢやが、……
お國　なう友之丞……さうお云やるのも尤もぢやが、……そなた、それほど私を思うて居るなら、どうぞ私の爲ぢや程に死んでくりやれ。
友之丞　いゝや嫌ぢや、――世に捨てられて有るにかひない日を送つては居るものゝ、淺ましい事にはそれでも矢張り命は惜しい。無理に殺すなら殺されもしようが、拙者はどうしても死ぬのは嫌ぢや。
お國　したがそなた、そのやうにして生きて居たとて何になると思うてぢや。私とそなたとが夫婦の約束をしたと云ふのは、あれは遠い昔のこと。今では私は、そなたに愛憎が盡きた。そなたが五平を殺したからとて私の體は思ひのまゝになりはせぬぞえ。五平も死ぬなら私も一緒ぢや。
友之丞　（淋しき微笑）　あはゝゝゝ、拙者が何でお身たちを殺さう。殺したうても拙者にはその腕がないのぢや。なうさうではないか、……
お國　そんならそなた、思ひ切りよう死んでくれぬか。どうぞ私を助けると思うて、……
五平　池田様、濟まぬ事ぢやが了見して下され。お前様の身になつたら、われわれ二人がさぞ憎うござらうが、――
友之丞　はて、何もお身たちは拙者を殺さずともよいではないか。戀路の邪魔をしようとは云はぬのに、……
お國　……でも、敵を討たねば國へは歸れぬ。――私たちは晴れて夫婦になりたいのぢや。
友之丞　お國どの、拙者を少しでも不憫と思うたら、よう考へて見てはくれぬか。お互ひに討つの討たうのとむづかしい事を云ふのは止めて、今迄の事はきれいに忘れてしまはうではないか。拙者は虚無僧になり果てて、一管の笛を便りに何處へなと流れて行かう。お身たちももう國へは歸らずに、一生旅をつづけるなり、知らぬ土地に落ち着いて家を持つなり、どうなりとして夫婦樂しく浮世をよそに暮すがよい。拙者は武士の道を知らぬが、さうしてこそお互に情を知ると云ふものぢや。
お國　いやぢや、私は國へ歸りたいのぢや。國へ歸つて五平を立派な侍にしてやりたいのぢや。……おお、そればかりか國には可愛い子供もある、……
友之丞　そなたにさうまで云はれても、拙者はどうしても

死にたうない、死ぬのはいやぢや。……此の友之丞がたつた一つの頼みぢやほどに、命だけは助けて賜れ。これ、お國どの、どうか拙者を不憫ぢやと思うて、……

（お國、五平にそつと眼配せして身を構へ、短刀の柄に手をかける。）

五平　氣の毒ながら是非に及ばぬ、……池田樣、覺悟めされい！

（五平斬つてかゝる。友之丞、尺八で身を庇ひながら飛びのいて、悲しい聲でののしりつづける。）

友之丞　えゝ、お身たちは卑怯ぢや、卑怯ぢや、……不義者ぢや、不義の主從ぢや、……（肩先を斬られて倒れる）おゝ、おのれようも拙者を殺した、……これ五平、おのれに一言いうて置くが、そこに居るその女は、お國どのはな、……

五平　何？　何と云ふ？

友之丞　お國どのは……この友之丞に――一度は身を任せたことがあるのぢや、……

五平　うん、さては、日頃の推量に違はず、――

（ヂロリとお國の顏色をうかがふ。お國面目なげにうなだれる。）

友之丞　お國どの、……いまはの願ひぢや。……そなたの手で止めを刺してくりやれ。

五平　いゝやならぬ。止めは拙者が刺してくりよう。お主の敵、戀の敵ぢや、……

（五平止めを刺す。その間お國は路ばたに倒れて泣きながら、袂で顏を隱して居る。長き間。次第に暗くなる。）

五平　奥方さま、――そのやうにお泣きなさらぬがよい。出來たことは是非がござりませぬ。

お國　友之丞と私のことを、そなた根に持つて居やるのであらうが、……

五平　お前さまも私も、此れで本望を遂げたのでござります。池田樣さへ死んでしまうたら、私どもは廣い世の中に誰に憚るものもない譯。もうお互ひに過ぎ去つた事は申しますまい。

お國　そんなら五平、私を末長う可愛がつてくれるかいの。

五平　可愛がらいで何といたしませう。勿體ないがお前樣は私の妻ぢや。

お國　さうきまつたら一日も早う、敵の首を土産にして、國へ歸りたうなつたわいの。

五平　さぞ皆さまが待ちこがれておいでなさりませうが。――御隱居樣やお坊つちやまの喜ぶお顏を、私も見たうござります。

お國　おゝ、いつの間にやら、もうすつかり日が暮れた。

――さ、さ、早う首を擧げたがよいぞえ。

（五平匕首を拔いてお國と共に屍骸に近づく。）

五平　池田樣、いかにも我れ我れは卑怯でござつた。酷うござつた。とは云ふものゝ、お家の爲め、戀のためには斯うするより外はなかつたのぢや。お前樣の不運とあきらめて下されい。――

お國　身勝手な奴ぢやと思ふであらうが、……友之丞どの、赦して賜はれ。

五平　南無阿彌陀佛。

お國　南無阿彌陀佛、……

（兩人口の中でかすかに稱名を唱へながら、靜かに跪いて合掌する。）

――幕――

本牧夜話（三幕）

人物

ミス・ジャネット・デイーン
フレデリツキ・マツイ
セシル・ローワン
初子　セシルの妻、劇中唯一の純粹の日本人
彌生　初子の異母妹
アレキシフ
その他ミセス・ヴンダ・スズキ、その夫キリヤム・スズキ、ブラウン夫妻、ミスター・グルツク、ジヤネツトの養母であるスカーレツト、ホテルの女將、ホテルのボーイ

所

橫濱本牧海岸及びその附近

第一幕

セシル・ローワンのサンマー・ハウス——前景に美しい芝生のある庭。それに臨んで赤ペンキを塗つた和洋折衷の平家建ての一と棟。下手後方に背の低い小松が二三本植ゑられ、その向ふに生垣がある。垣根の外は沙濱の道路で直ぐ海へつづいて居る。

家は兩側にヹランダがあり、そこのガラス障子が明け放されて居て、庭の方から室內全部が窺はれる。中央に純白のテーブル・クロースを懸けた食卓、椅子五六脚、上手の壁際に食器棚、下手前方ヹランダに近く籐の長椅子、その傍にテイー・テイーブル、大きな棕櫚の植木鉢、……すべて、ほんの夏の間を凌ぐだけの飾り付けがしてある。後方には四枚の襖が締め切つてあつて、それを開くと奧にある隣室が見えるやうにする。庭の生垣へ寄つた方にも白ペンキ塗りの小卓と二三脚の椅子が置いてある。

夏の晩のことである。幕が開く前にフオツクス・トロツトの蓄音機の奏樂につれて、男女數人がダンスをする足音が聞える。やがて靜かに幕が上る。——と、舞臺は夜の空と同じやうに一面に暗い。そして多勢が踊つて居るのは奧の部屋であるらしく、襖が締まつてゐるので人影は見えないが、花やかな電燈の光がちらちらと戶の隙間から食堂の方へ洩れて居る。食堂の燈は

凡べて消えて居て、誰も居ない。ただ飲み散らした酒やソーダ水の罎やコップが卓上に殘されて居る。暫くの間、ダンスに熱狂する賑やかな足音が、一定のリズムを繰り返す外には、あたりはしーんとして何も聞えない。庭の松の葉越しに、生垣の向ふの海の方で星が二つ三つキラキラとまたたいてゐる。

垣根の外の路を、白い服を着た背の高い太つた老人――アレキシフ――が下手から歩いて來る。そして立ち止まつて垣根に身を寄せて家の中を覗く。と、彼は直き眼の前の、庭の小卓に凭れかゝつてぢつと考へ込んで居る人影に氣がついて、輕い驚きの色を示す。それは初子である。彼女は最初から居るか居ないか分らないやうにひつそりと、暗い中に腰かけて居たのである。色の青白い、眼の小さい、小太りに太つた人の好ささうな女で、油氣のない毛を束髮に結ひ、洗ひ晒しの浴衣を着て居る。

アレキシフ (垣根の外から) 今晩は、……奥さん……

初子 今晩は、……どなた?

アレキシフ わたしです、奥さん、わたし――あなた分りません?

初子 えゝ、あの――

アレキシフ わたし分りませんか? わたし――アレキシフ。

初子 あゝ、アレキシフさん。

アレキシフ ウエイ、(佛蘭西語の「ウイ」と日本語の「ええ」とをごつちやにしたもの) さうです、あなた――そこで何して居ます?

初子 なんにもしては居りませんの、――(それとなく話頭を轉じる) まあ、今晩は大さう暑うございますのね。

アレキシフ さうです、大へん暑い、――

初子 風が少しもありませんのね。

アレキシフ ほんとう、ほんとうです、風がありません、けれども此處は少しあります、海のそばですから、私のうちはもつと暑い、わたし散歩に出て來ました。

初子 (他の事を考へながら上の空で) あゝ散歩に?

アレキシフ ウエイ、此處が一番涼しいです、……あなたのうち、今夜も亦ダンス?

初子 えゝ。

アレキシフ おゝさう、……いつもいつもダンス、ダンス、毎晩毎晩、面白いです。あなたなぜ踊らない? 奥さん。

初子 私?――私踊れないんですもの。

アレキシフ 踊れない? そんなことありません、ダンス大へんやさしいです、あなた直き覺えます…… (云ひながら、マッチを擦つて煙草に火を點ずる)

初子　でも私、かうして涼んで居る方がようござんすわ。
アレキシフ　なぜですか？　あなた獨りで淋しくはないですか？
初子　ですけれど、此の方が氣樂でようござんすわ、出來ない事を無理にしたつて駄目なんですから、――
アレキシフ　さう？――奥さん、あの、私少し――少し此處で休みたいです。そこへ這入つてもよろしいですか？
初子　えゝどうぞ。
アレキシフ　構ひません？
初子　構ひません、どうぞ。
アレキシフ　あゝ、ありがとございます。――
（一旦下手へ隠れ、直ぐ庭の方へ出る。ダンスまだ盛んに續いてゐる。）
アレキシフ　（初子の側の椅子にかけながら奥の間の方を見やつて）あすこ、お客さん大勢居ますね？
初子　えゝ大勢、――七八人居ます。
アレキシフ　おゝそんなに？　誰ですかあの人たちは？
初子　（指を折つて數へながら）フレデリックさんにジャネットさんに、山のミスタ・ブラウンとミセス・ブラウン、……
アレキシフ　あゝミスタ・ブラウン、――知つてます知つてます。
初子　それからミスタ・グルックにヴンダさんとヰリヤムさん、――ちやうど七人。
アレキシフ　それからあなたの旦那さんと彌生さん？
初子　えゝさう。
アレキシフ　おゝ？　チョッ、チョッ、（肩を聳やかして舌を鳴らす）九人ですね、あなたなぜ踊りませんか？　あなたダンス嫌ひですか？
初子　嫌ひでもありませんけれど、でも私見たいな日本人がやつたつて駄目なんですもの。
アレキシフ　なぜ？　なぜ駄目ですか？　あなたの旦那さん、ミスタ・ローワン、――あなたにダンス教へませんか？
初子　教へて貰ひましたけれど、わたし覺えが悪いから、どうしてもうまく出來ないんですの。
アレキシフ　あなた覺えが悪い？　うそです、そんな事ありません。
初子　いゝえ、私馬鹿だからいくら教はつても駄目ですわ、私が踊ると皆がをかしいツて笑ふんですもの。
（蓄音機が止まりダンスの足音止む。「あゝ暑、暑……汗びつしよりだ」「イエース、ベリ、ホット、トゥ、ナイト」などといふ男女の聲が聞える。同時に誰かがガラリと奥の間から襖を明ける。ジャネット、フレデリ

ツキ、彌生、セシル等の往つたり來たりする姿が見える。ジヤネツトは年齢二十一二歳、露西亞系の猶太人、金髪碧眼、白つぽいコツトン・ボイルの服を着てゐる。彌生は日本人とポルチユギースとの合の子、赤いちぢれ毛で顏にそばかすのある、やゝ不恰好に太つた娘、メリンス友染のキモノに耳飾と頸環をつけ、白足袋にダンスの草履を穿いて居る。フレデリツキとセシルとは孰れも日本人と米國人との混血兒。褪り色の上衣に白いパンツを穿いて居る。以上四人ながら殆んど日本人と同様に日本語を語る。一同ほつと息をしながら、椅子に腰かけて團扇を使つたりハンケチで汗を拭いたりする。）

（セシル急ぎ足で食堂へ出て來る。そして咽喉が乾いて溜らぬと云ふやうに慌しく卓上のビールの栓を拔き、一と息に飮んでから煙草に火をつけて庭の方を見る。）

アレキシフ　（セシルを見て立ち上り挨拶する）　おゝ、ボン、ソワアル、ミスタ・ローワン……いかがですか？

セシル　（冷淡に）　今晩は、……グツドイブニン、……（云ひながら頻りにビールを飮む）

アレキシフ　（手持不沙汰でモヂモヂしながら）　……わたし、今此處でミセス・ローワンと話しました。

セシル　おゝさう、どうか御ゆつくり。

（さう云つて又ぐいとビールを飮む。）

ジヤネツト　（奥の間から呼ぶ）　セシル！　早くおいでよ！　何してるの？

セシル　ウエイトエミニ、——今ビールを飮んでるんだ。

（再び蓄音機が鳴る、ソルツ舞踏曲。）

フレデリツキ　（奥の間で）　ジヤネツト！　僕と踊らう！

（ジヤネツトうなづいてフレデリツキに抱かれて踊る、他の人々も踊り出す。）

アレキシフ　（セシルに）　あなたのうち、いつも大へん賑かですね。

セシル　えゝ賑かです、賑かでないのはミセス・ローワンだけです。

アレキシフ　ははは、ミセス・ローワン大へんおとなしいです、あの人ダンス好きません？

セシル　えゝさうです、私の奥さんダンス嫌ひです、あの人は妙な人でしてね。

（セシル横眼で初子を見る。初子聞えない振りをして海の方を向き、テーブルに頬杖をついて居る。）

（奥の間から團扇を使ひながら彌生が出て來る。）

彌生　セシルさん、どうしたの？　踊らないの？

セシル　あゝ今、ちよつと一と休みだ。

彌生　私にも一杯ソーダ水をくれない？

セシル　うん、お飲み。

（彌生ソーダ水の壜を拔いて飲む。）

アレキシフ　おゝ彌生さん、――今晚は、マドモワゼル。

彌生　あら！　アレキシフさん、あなたいつ入らしつたの？

アレキシフ　わたし、今散歩に來ました、――あなたダンス、大へん暑い、咽喉が乾きました？

彌生　イエース、ほんとに咽喉が乾いちやつたわ、（飲みながらヂロヂロと庭の初子の方を見る）アレキシフさん、あなた姉さんとそこで話していらしつたの？

アレキシフ　ウエイ、あなたの姉さん獨りで大へん淋しいです。

彌生　淋しくつたつて仕方がないわよ、自分の勝手なんだもの、（セシルに向つて極めて早口に）サポーズ　ヒース　エ　リトウル　イン　ラヴ　ウイズユア……ね、さうよ、きつと。

セシル　ふゝん。（鼻先で笑ふ）

アレキシフ　何ですかあなた？　わたし英語分りません、わたし佛蘭西語、そして日本語少し、……

彌生　知つてるわよ、だからわざと英語で云つたのよ。

アレキシフ　（初子に）何ですか奥さん？　彌生さん何を云ひますか？

彌生　姉さんに聞いたつて分りやしないわよ、あの人はあなたと同様にまるツきり英語が出來ないの、ミスタ・ローワンの奥さんでありながら。

初子　（依然として海の方を向きながら）どうせ私は馬鹿だからね、お前さんのやうな悧巧な人とは違ひますから。

彌生　馬鹿だ馬鹿だッて云つてないで、自分から心がけて習ふやうにしたらいゝぢやないの。

セシル　さうです、ほんたうにさうです、あなた馬鹿ぢやありません、自分で馬鹿だと思ふのが悪いんです、そしてその爲めにしまひにはほんたうの馬鹿になります。

初子　私なんか始めッから馬鹿ですわ、私のやうな無教育な人間は、何を習つたつて覺えられッこはないんですから。

セシル　さう、それならどうも仕方がないですね、あなたの好きなやうにしたらよろしい。――

（短かき間。ダンス一旦止み、再びフォックストロットになる。）

アレキシフ　（その場を取りなすやうに）彌生さん、あなたと私とダンスしますか？

彌生　あなたと？　あなたがダンス？

アレキシフ　あはゝゝゝ、冗談です、冗談です。

彌生　冗談で幸ひだわ、あなた見たいなお爺さんとは此方でも眞ッ平だわ。（奥の間を覗いて）フレデリッキさん！ さあ、今度は私とやる番よ。

フレデリッキ　イエース　ウイズ　プレジュア。

（彌生奥の間へ去り、フレデリッキを擁して踊る。）

ジャネット　セシル！　まあ何をしてゐるの？　好い加減に出ておいでよ。

（セシル默つて奥の間へ行く。ジャネット彼を迎へて立ち上り、直ぐ踊り始める。）

アレキシフ　（初子の傍へ戻つて來る）奥さん、彌生さんあなたと大へん違ひますね。私あの人、あなたのきやうだいのやうに考へません。

初子　それはさうかも知れませんわ、――あの人は私の妹ですけれど、あの人と私とはお父樣が違ふんですから。あの人のお父樣はポルチユガルの人なんです。

アレキシフ　おゝさう？　あの人のお父樣はポルチユゲ―？

初子　えゝ。

アレキシフ　さう、さうですか、――それで分ります、あの人あなたと大へん違ひます。あなた――奥さんあの人好みますか？

初子　えゝ好みます、……憎いと思ふこともありますけれど、でもやつぱりきやうだいですから。……

アレキシフ　メイ、（佛蘭西語の mais）……あの人はよろしくないです、あの人あなたを馬鹿にします、私あの人を好みません。

初子　だつて仕方がありませんわ、あの兒の方が悧巧なんですもの。――さう思つて居ても私時々腹を立てたりしますけれど、それもやつぱり自分が馬鹿だからなんです。

アレキシフ　奥さん、あなた大へんやさしい、あなたいゝ人です。……あなた神樣を信じます？　教會へ行きます？

初子　えゝ參ります、裏の牧師さんの奥樣に連れて行つて頂きました。

アレキシフ　さう、私ちやんと知つてました。あなた何處の教會へ行きますか？

初子　公園の傍のメソヂスト教會、――

アレキシフ　おゝメソヂスト、私わかります、大へんよろしい。あなた教會へ行きます、メイあなたの妹さん、教會へ行きません。あの人若い男好きです、ね？

初子　どうですか私知りません。

アレキシフ　知りません？　ウエイ、あなた知つてます、あの人――あの人フレデリッキさん大變好きです。私ちやんと知つてます。

初子　アレキシフさん、あなたこんな事誰からお聞きになつたの？
アレキシフ　私誰からも聞きません、私よく分ります、あははゝゝ。
（蓄音器止む。奥の間の人々ダンスを止めて椅子にかける。）
ジャネット　フレデリツキ！　お前彌ッちやんと頬ッぺたを押ッつけて踊つてたね、チークダンスは罰金だよ。
フレデリツキ　馬鹿を云へ、己が知るもんか、彌生が己に頬ッぺたを押ッつけて来るんだよ。
彌生　あら！　さう云ふ譯ぢやないけれどつい〳〵さうなつてしまつたんだわ。
ジャネット　だから両方が悪いんだよ、さあ二人共罰金をお出し！
（一同笑ふ。）
アレキシフ　（ちよつと奥の間の方を見、ニヤニヤ笑ひながら立ち上る。）奥さん、わたし又参ります。——
初子　さうですか、もうお帰り？
アレキシフ　ウエイ、大へんよく休みました、どうも有りがたうございます。
初子　では又入らつしやいまし。
アレキシフ　有りがたうございます、お休みなさい。（握手する）
初子　お休みなさい。
アレキシフ　ボンニユイ、マダム。
（アレキシフ一旦下手へ去り、垣根の外に現はれる。そしてもう一遍「お休みなさい」と声をかけながら上手へ消える。初子も「お休みなさい」と鸚鵡返しに云ひ、又ぢつと海の方を向いてボンヤリして居る。）
（蓄音器が鳴り始める。今度は淋しいヴイオリン・ソロのセレナーデ。一同静かに聴いてゐる様子。）
（彌生食堂へ来る。）
彌生　（ヹランダへ来て初子を呼ぶ）姉さん、あたしお腹が減つちやつたけれど、何か臺所に残つて居ない？　グースベリーのパイはもうないか知ら？
初子　あるかも知れないよ、冷蔵庫を見て御覧。
彌生　さう、ぢや捜して見よう。
（彌生ヹランダを上手へ去り、直きにパイを皿にのせて匙で喰べながら戻つて来る。）
彌生　姉さん、アレキシフさんはもう帰つたの？
初子　あゝ今。
彌生　ほんとにいやな助平爺だつたらありやしない、あたしあんな奴は大嫌ひ。
初子　だつてそんな悪い人でもないと思ふよ。

彌生　うそよ、姉さんは人が好いから欺されてるのよ。うちへ來ると猫を被つて居るけれど、いつも其處のチヤブ屋へ行つてキテイーを追つかけ廻して居るのよ。爺の嫌にいやな奴だつてキテイーのとこでも鼻ッ摘みなんだつて。

初子　だけど、あの人はきつと淋しいんだよ。露西亞を逃げ出して日本へ來てから、まだやつと一年足らずだつて云ふぢやないの。それに奥さんとは佛蘭西で別れてしまつて、子供だのお母様だのも佛蘭西へ置いて來たんだつて云ふし、日本には知つて居る人は一人もないんだから、考へて見れば可哀さうだわ。きつと心細いだらうと思ふわ。

彌生　そりやさうかも知れないけれど、あんまり親切にしてやらない方がよくつてよ、圖に乘つて仕様がないから。――（パイを喰べ終つて、ヹランダに腰かける）姉さんは氣が付かないやうだけれど、アレキシフは姉さんが好きなのよ、それでちよいちよいやつて來るのよ。

初子　まさか、――そんな事があるもんぢやない。

彌生　いゝえさうよ、呼びもしないのに人の內へのこのこやつて來るなんて、づうづうしいッたらありやしない。今度來たら默つてておやりよ。

初子　だつてお前、私にはそんな氣の強いことは出來ないんだもの。

彌生　ふん、姉さんは駄目ねえ、――日本の女はみんな意氣地がないんだから、――

初子　でもアレキシフさんなんかまだ好い人だわ、本牧には惡い西洋人が澤山居るんださうだから。――此の間も刑事さんが來て調べて行つたさうぢやないか、大分此の近邊には西洋人の惡い人が居て、娘たちを欺したりするもんだから、風儀が紊れて困るとか云つて、――

彌生　へえ、さう？　そんな事があつたか知ら？　私知らないわ。

初子　何でも西洋人だと云へばお金のある立派な人だと云ふ風に思つて、しろうとの娘たちがつい欺されて、慰み物にされるんだつて、――

彌生　……

初子　（低い聲で）ねえ彌ッちやん、……こんな事を云ふと又怒るかも知れないけれど、……お前ほんとに、フレデリツキさんが好きなのかい？

彌生　えゝ好きよ、好きで惡いの？

初子　惡いと云ふ譯ぢやないけれど、……まあ、成るべくなら考へて見た方がいゝと思ふよ。

彌生　ふん、……私は私で自分のいゝやうにするんだから、餘計な世話は燒かないで頂戴。

初子　そりやあさうだらうけれど、お前の爲めを思つて云ふんだから、……フレデリツキさんも、矢張警察で睨まれて居るらしいからね。
彌生　だから私も欺されて居るツて云ふの？
初子　何も私はさう云やあしないさ。……
彌生　欺されるのは欺される方が間拔けたんだわ。姉さんのやうな日本人なら欺されもしようけれど、私は姉さんと違ひますからね。……フレデリツキが睨まれて居りやあ、セシルさんだつてお仲間ぢやないの。人の世話を燒くよりか自分の亭主のする事を見るがいゝや。
初子　だから、……私はそれを知つて居るから、……自分が今までさんざ苦勞をして來た事を思ふから、猶更お前にさう云ふんだよ。ほんとに私なんざ、人の事は云へやしない、自分がいゝお手本なんだから……
彌生　そりやあ姉さんが働きがないからさ。西洋人の奥さんだつて云ふのに、英語も一つしやべれないで、ちつとも御亭主の心持ちを飲み込まうとしないんだもの、それは嫌はれるのは當り前だわ。
初子　だけど、私には西洋人の心持ちは分らないもんだから、……
彌生　私には又、日本人の氣持ちの方が分らないわ。妙にいぢけて居て、陰氣で樣子振つてばかり居て！　ほんとに日本人ぐらゐ厭なものはありやしない！　私どんな事があつたつて、日本人の所へなんかお嫁に行つちややらないから。
初子　だつて、お前にしたつて西洋人と云ふ譯でもないぢやないか。
彌生　さう云へばフレデリツキだつてさうよ、あの人のパパは日本人なんだから、私と同じ事だわ。
初子　だけれどね、フレデリツキさんはあゝ云ふ如才のない人だから、そりやお前に對しても滿更ではないやうに云ふけれど、事に依ると外にもまだ好きな人があるんぢやないかね。あの人は私、ジヤネツトさんに氣があるんぢやないかと思ふよ。
彌生　そりやあの人は浮氣だからそのくらゐな事はあるでせうさ、あつたつて私や構やしないんだ、どうせ浮氣をするくらゐな男でなけりや面白かないんだから。――なあに、いくらジヤネツトに氣があつたつて、ジヤネツトの方でフレデリツキを嫌つてる事は、ちやんと私に分つてるのよ。ジヤネツトにはね、――姉さんにはお氣の毒だけれど、もうレツキとした人が、お前さんの旦那樣が附いて居るのよ。セシルさんはとうからあの人とをかしいんぢやないか。ほんたうに姉さんは人の世話を燒く暇があつたら、自分の亭主を取られないやうに氣を附けるが

いゝ。

初子　彌ちやん、お前そんな事を云つて、何か證據でもあるのかい？

彌生　證據なんかなくつたつて、大概様子で分りさうなもんだけれど、……それが分らなけりや餘ッぽど頓間よ。

初子　どうせ私は頓間なんだから、そんな話は聞かせないでおくれ、聞いたところで仕様がないんだもの。

彌生　それぢや姉さんは、若しもほんたうに捨てられちまつたら、どうする積りなの？

（いつの間にか奥の間では又ダンスが始まつて居る。ジャネットとセシルとがこつそり食堂へ抜け出して來る。そしてさし向ひにテーブルに腰かけ、ソウダ水を飲みながらそつと手を握り合つたりして、二人の會話に耳を傾ける。ダンスの足音が騒々しいので初子も彌生もジャネット等に氣が付かない。）

初子　捨てられたら私、外に行く所はないんだしするから、臺所の隅にでも置いて貰つて、コックにでもアマさんにでも使つて貰ふからいゝ。私なんぞにや其の方が相當してゐるんだから。

彌生　まあ呆れた！　そんな馬鹿々々しい事が出來ると思ふの？

初子　だつて、今迄にしたつて女中のやうなもんぢやないか。だからアマさんにでも使つて貰つて、いつ迄でも大人しく辛抱して居れば、少しは可哀さうだと思つてくれるだらうし、そのうちには又戻つてくれるかも知れないしするから、……

彌生　ふん、それがエス様の教へにでもあるッて云ふのね？

初子　教へにあるッて云ふ譯ぢやないけれど、セシルの方では何と思つても、私にはあの人より外に愛する人はないんだもの。それが私の道なんだもの。

（セシル、以上の話を聞きながら時々ジャネットと眼を見交してニヤリとする。そして此の時聲をかける。）

セシル　おいおい、何をしやべつてるんだい？　大分話が持てるぢやないか。

彌生　あら！　セシルさん？

ジャネット　うふゝゝ。（くすくす笑ふ）

彌生　まあいやだ、いつから其處にいらしつたの？

セシル　なあにたつた今さ、――フレデリッキがお前をさつきから捜して居たぜ。

彌生　ほんたう？――うそばつかり。

ジャネット　ほんたうよ彌ッちやん、行つて御覧よ、お前に話があるんだとさ。

彌生　（つんとして）さう……どうも憚りさま。

セシル　初子！（嘲弄的に）ミセス・ローワン！　あなた其處で何して居ますか？

初子　なんにもしては居りません。……

セシル　そんならあなた、そんな所に默つてつんとして居るのはお客樣に失禮です。みんなが愉快に遊んで居るのに、一緒に遊ぶのが嫌だと云ふなら、のこのこ庭先へ出て來ないで、何處かお客樣の見えない所へ這入つてらつしやい。あなたの姿が見えるだけでも皆が不愉快な氣持ちになります。

初子　さうですか、……どうも濟みません。……

（初子、輕い眼まひを感じたらしく兩手で額を蔽ひつつ立ち上り、座敷に上つてティー・テーブルの上に置いてある書物を取り、それを抱へながらヴェランダの角を曲つて奥の方へ去る。）

（フレデリツキ奥から出て來る。）

フレデリツキ（二人の樣子をヂロヂロ見ながら）ジヤネツト！　さあもう一番僕と行かう！

ジヤネツト　エキスキユース　ミー――今一と休みしてるんだから。

フレデリツキ　まあそんな事を云はないでさ、（後ろに廻つて無理に抱き上げようとする）さあお立ち　お立ち！

ジヤネツト（身をもがいて頓興な聲で）あれエ！　擽ぐつたい！　いやよいやよ！　あれエ――あツはゝゝゝゝ何するのよフレデリツキ！　彌つちやんに踊つてお貰ひよ！

彌生　フレデリツキさん！　嫌だつてものを惡いぢやないの。そんな人に構はないで此方へ入らつしやいよ！

（彌生無理やりにフレデリツキを捕へて奥の間へ連れ去る。ダンス盛んに續けられる。）

（セシル、ジヤネツトに眼配せして彼女と共に庭へ降りる。二人は今迄初子が居た小卓を挾んで腰かけ、ひそひそと語る。）

ジヤネツト　ねえセシル、お前フレデリツキと喧嘩しちやつた方がいゝよ、さうして彼奴が私の傍へ來られないやうにしておくれよ、ほんたうに厭ンなつちまふわ、毎日毎日うるさくつてしつツこくつて、仕樣がありやしない。

セシル　なあに、フレデリツキは彌生に任して置けばいゝさ、喧嘩をするのも智慧がないから。――己あその積りで彌生を内に置いてあるんだよ。あの女はフレデリツキがお前の傍へ寄つて行くと、ブルドツグ見たいに飛び出して來るんだから。

ジヤネツト　うふゝゝ、ほんたうにあれはブルドツグね、いくらフレデリツキだつてあの女ぢや可哀さうだ。

セシル　さう云つたつて、身から出た錆で仕方がないさ。

何しろあの女は馬鹿だから、欺されたとなつたら何を仕出來すか分りやしないぜ。フレデリツキも今ぢや後悔して居るだらうよ。

ジャネット　あたしだつて欺されりや何をするか知れないから、その積りでおいで。いゝかいセシル？

セシル　いゝよ、分つたよ、――まあもう少し待つてくれりやきつと其のうちに出しちまふから。

ジャネット　出す出すツていつ出すのさ？　出すなら早く出しておしまひな、あんな風にして半殺しの目に遭はして置くよりか、早く出してやつた方が當人だつて仕合はせぢやないか。

セシル　己たちならさう思ふけれど、あの女はさう行かないから困るんだよ。さつきもお前聞いてただらう、――捨てられても何でも己の內に居たいつて云ふ、――あの調子なんだからな。

ジャネット　あんな事をわざと云ふんだよ。いくら無神經だつてまさか女中に使はれて、私たちの傍に居られる譯はないぢやないか。――なあに、お金の千圓もやつて出て行けツて云やあ、大人しく出て行くよ。日本人の所へなら、まだあれだつて貰ひ手がない事はないんだから。

セシル　さううまく行けばいゝんだがね、――どうもあの女は眞面目であんな事を考へて居るんだから、始末に行かない。さうかと云つて、無理に追ひ出すのも何だか可哀さうなやうだし、……

ジャネット　だつて、あんな無神經な女はさう悲しくもないだらうから、可哀さうだとは思はないツて云つたぢやないか。

セシル　それもさうだが、無神經なだけに考へると可哀さうだよ。

ジャネット　ふん、そんな事を云つてたらいつになつたら出せるんだい？　出すと極まつたら好い加減に出しておしまひよ。どうせさう都合の好い時はありやしないから。

セシル　まあ、――實際それもさうなんだ、だから近いうちにきつと極まりを付けるよ。こゝ一と月ぐらゐのうちに。

ジャネット　きつとかい？

セシル　あゝきつとだ――それからね、此の間お前が欲しいと云つた物を買つて來てやつたぜ。

（云ひながらポツケットから金の頸飾を出す。）

ジャネット　（頸飾を受け取つて眺める）あゝ有りがたと、――此れはあの、山下町のアーサー・スミスのショオウインドウにあつたのね、（頸にかけて見る）此の間からあたし此れが欲しかつたのよ。

（奧の間のダンスが止み、人々歸り支度を始めるらし

くざわざわする。「おや、皆さんもうお歸り？　まだいいぢやありませんか」と云ふ彌生の聲につゞいて、「おお、サンキユー、パツト　イツト　イヅ　トゥーンート」「彌生さん、又參ります、今夜は有りがとございます」などゝ云ふ聲が聞える。ジヤネットその間に頭飾を外して懷に入れる。）

ジヤネツト　それぢや私もう歸らう、——又あした。

セシル　うん、そこまで送つて行かう。

（兩人座敷へ上る。同時に奥の間から一同でぞろぞろと食堂へ出て來る。）

ミスタ・ブラウン　オー、ミスタ・ローワン、アイ　エキスペクト　ユー　アツト　スリー・トウマロー　アフタヌン……

セシル　イエース、サンキユー、ウイ　シヤル　ハヴ　テイー　パアテイー

ヴンダ　ね、セシル、きつと入らつしやい。私たちも行きますから。

ミセス・ブラウン　そしてジヤネツト、ミスタ　グルツク、フレデリツキ、彌生さん、——みんな行かねばなりません。午後の三時に。プリース　ドント　ミツス　ゼ　タイム。

彌生　そして明後日の晩は又うちでダンスよ。

ミスタ・ブラウン　イエース、アイ　シヤル　トウライチークダンス　ウイズ　ヤヨイサン。あツはゝゝゝ。

（一同笑ひながら庭に降りてセシルと彌生に握手をし、「グツドナイト」を告げて下手へ去る。セシルと彌生も其の後に附いて行つてしまふ。）

（短き間。やがて、ヹランダの奥から初子が出て來る。卓上のコツプや罎を片附け、奥の間の電燈を消して襖を締め、テイー・テーブルの上にスタンドを運んで、それに明りを附ける。それから、籐椅子に腰かけ、持つて來た聖書を開いて、極く小さな聲で音讀する。長き間。）

（彌生が下手から戻つて來る。癪に觸つたやうな氣つきで、どつかりとヹランダに腰を下して考へて居る。初子は倘暫くの間熱心に讀んでから、靜かに顔を上げて尋ねる。）

初子　彌ツちやん、どうしたの？　何處へ行つたの？

彌生　ちよいと其處まで、——フレデリツキを送つて行つたのよ。

初子　さう。……

彌生　さう云へば今、そこの海岸でセシルさんに會つたつけ。ジヤネツトと二人で何かぺちやくちやしやべつてたわ。

初子　……（何か云はうとして、下を向いて默つてしまふ）

彌生　どれ、あたしお風呂へ這入つて來よう、――もうぬるくなつちやつたか知ら。

初子　よごれて居るけれど、まだ這入れない事はないだらう。

彌生　さう、それぢや這入らう。

（彌生、くさくさした樣子で溜息をついて立ち上り、ヹランダを上手へ去る。）

（初子、再び聖書を讀み始める……）

第二幕

第一幕と同じ場面。數日を經た或る日の午過ぎ。食堂はきれいに片附き、つきあたりの襖は締まつてゐる。庭の生垣の向ふには青い空と海が見える。フレデリツキと彌生とが籐椅子に並んで腰かけてゐる。フレデリツキは海水着の上に大きなタオルを纏ひ、彌生の膝の上にある英語の本を覗き込んでゐる。彌生は第一幕と同じやうなメリンス友染の單衣を着て、甘えるやうにフレデリツキに凭れかゝりながら、其の本を朗讀する。――

彌生

"At King-te-chin in China,
At King-te-chin in the far East of the Eighteen provinces of China,
Where all day long the porcelain factories belch cordel smoke,
And all night long the watch-men, striking
The hours on their lizard-skin drums," ……

フレデリツキ　さうさう、中々お前は發音がいゝ。

彌生　（二三行とばして先を讀む）

"At King-te-chin on the heart of brooding China,
Lives Chou-Kiou,
White as milk in a tazza cup,
Red as a pear-tree just dropping its petals,
Happy as the Spring-faced wind.
Chou-Kiou," ……

ちよいと！　何よ此のチユウ・キユウツて云ふのは？

――

"Chou-Kiou,
For whom the wild geese break their flight,
And fishes seek the darkness of the lower waters.
Chou-Kiou,"

フレデリツキ　チユウ・キユウツて云ふのは支那人の娘の

名なんだよ、また後でゆつくり讀んで御覽。

彌生 それぢや此の詩は支那人が書いたの？

フレデリツキ いゝや、アミ・ローエルと云ふ亞米利加の女詩人が書いたのさ。ちよいと變つた面白い本だよ。

彌生 むづかしい？

フレデリツキ なあに、そんなにむづかしかない。

（ジヤネットとセシル、海水服を着けて奥の間から出て來る。）

ジヤネット （ヹランダに出て） セシル！ 私のスウイミング・シユウを捜しておくんな。

セシル オーライト。

（庭に降りて縁の下から游泳靴を捜し出し、彼女の足に穿めてやる。）

彌生 （わざと二人に氣が付かぬ風をしながら、フレデリツキに） さう、どうも有りがと。それぢや暫く借りて置くわよ。むづかしい所があつたら教へてね。

フレデリツキ （横眼でチラとジヤネットを見つゝ） うむ。

セシル （靴を穿かしてやり、立ち上つて二人を見る） 何だい、それは？

フレデリツキ アミ・ローエルのリジエンヅさ、君讀んだらう？

セシル うん、讀んだ。――彌生、此の間貸してやつた有島武郎の「或る女」はどうしたい？

彌生 えゝ讀んだわ、面白かつたわ、――此れを讀んぢやつたら、「カインの末裔」を貸してね。

セシル うん、貸してやらう。――（ジヤネットを顧みて） どれ、ちよつと一つ浴びて來よう。

フレデリツキ 此れから海へ這入るのかい？ そろそろみんなやつて來やしないか？

セシル なあに、まだ大丈夫だ。

ジヤネット （庭の生垣の方へ行つて待つて居る） セシル！ 早くおいでよ。

（云ひ捨てゝ先にスタスタと下手へ去る。セシル直ぐに彼女を追うて去る。）

彌生 （二人が居なくなると直ぐ、手を伏せて） ね、御覽よ、私が云つた通りぢやないの。

フレデリツキ 何が？

彌生 二人共もうすつかり夫婦氣取でいゝ氣になつて居るぢやないの。

フレデリツキ ふゝん。（不愉快を紛らす微笑）

彌生 ね、だから駄目よ、あきらめちまつた方がいゝわよ。

フレデリツキ 何がさ？

彌生 あなたはまだジヤネットに未練があるのよ。ね、さうでせう？ そんなにぼとけなくつたつていいわよ。

フレデリツキ　ふゝん、……もう未練なんかありやしないさ。

彌生　さう？　そんならいゝけれど、未だに何とか思つて居るんだと、馬鹿を見るわよ。まあ、もう一と月もたつて御覽な、ジヤネツトが内へ這入り込んで來て、姉さんは追ひ出されるやうな事になるから。

フレデリツキ　お前のシスターは承知したのか？

彌生　承知したつてしなくつたつて、さうさせられてしまふわよ。此の間もジヤネツトと二人でそんな相談をして居たつけ。

フレデリツキ　そりや相談はして居たらうが、さううまくは行くまいと思ふぜ。

彌生　なぜ？

フレデリツキ　兎に角ミセス・ローワンは戸籍上米國人になつて居るからな。離縁をするにしても中々手續きが面倒だよ。それにセシルは追ひ出したいと思つても、親父が承知するかどうかな。

彌生　セシルさんは親の云ふ事なんか聞く人ぢやないわよ、第一あんなに夢中になつて居るんだもの。

フレデリツキ　だがセシルだつて慾はあるよ、――父親も今ぢや紐育で大分財産を作つたと云ふから、喧嘩をしたら遺産が貰へなくなつちまふぜ、あの親父は熱心なクリスチヤンだし、ミセスに對しては同情があるんだから、離縁だなんて云へばきつと怒るだらう。セシルだつて考へて居るさ。

彌生　けれどお父樣はセシルさんが姉さんを貰ふ時には、反對したツて云ふぢやないの？

フレデリツキ　そりや貰ふ時には反對したさ、けれど貰つて見るとあの通り大人しくつて忠實だもんだから、すつかり親父の氣に入つてしまつたのさ、考へて見ろとセシルも勝手な男だよ、貰ふ時には大騷ぎをして、歌麿の刎子だとか、浮世繪式の美人だとかつて、己たちにまでさんざのろけたもんだがね。

彌生　姉さんもあの時分には少しは綺麗だつたけれど、今みたいになつてしまつちや嫌はれるのは當り前だわ。何しろあの人は教育がないから駄目よ、それに性質がいぢけて居て妙にひねくれた所があるから。

フレデリツキ　セシルがあんまりイヂメるからだよ。だから段々あゝなつて來たんだよ。可哀さうに、追ひ出されたら行く所はありやしないぜ。それに後釜へジヤネツトを入れようとしたつて、あの女の素情が分つて見ろ、とても親父が承知するもんかよ。――まあ、己はさう睨んで居るがね。

彌生　ふん、さう睨んで内々それを望んで居るのね？

フレデリツキ　望んで居ても居ないでも、事實がさうだと云つて居るのさ、邪推をしちやあいかんよ。

彌生　お氣の毒樣！　さううまくは行きませんから！　何と云つたつてセシルさんはジヤネツトを放しツこないわよ、あの鹽梅ぢや道匪ぐらゐ棒に振つたつて驚きやしないから。

フレデリツキ　ふゝん、（得意げに笑ふ）だがさうなるとジヤネツトの方で何と云ふかな、――道匪がなけりあ喰詰いて居たツて無駄だからな。

彌生　そんな事があるもんか！　ジヤネツトだつて本氣に惚れて居るんだもの。

フレデリツキ　惚れてゐただけなら、何もあんなに結婚をしたがりやしないさ。ジヤネツトの腹は己にはちやんと分つて居るんだ。

彌生　どんな工合に分つて居るの？　セシルには徹で惚れて居て、ほんたうはあなたに氣があるツて云ふの？

フレデリツキ　まさか、己だつてさう己惚れて居やあしないさ。セシルの方が男ツ振りもずつと上だし、己みたいな醜男は疾うに振られちやつたのさ。

彌生　ふん、うまく云つてらあ！　振られたつてまだ氣がある癖に！

フレデリツキ　うそをつけ！　そりやお前の邪推だよ。

（ヹランダの上手から、初子がエプロンを着けて出て來る。）

初子　彌ツちやん、ちよいとお前手傳つておくれ、お茶の支度が間に合はないから。

彌生　（姉の方を振り向きもせず、面倒臭さうに）えゝ今。

初子　あの、サンドキツチが出來たからね、切つてお皿へ附けて頂戴。

彌生　えゝ、今行くわよ。

（初子上手へ去る。）

フレデリツキ　どれ、己もそれぢや其の間に泳いで來るかな。

彌生　行かなくつてもいゝわよ、此處に居らつしやいよ、まだ話があるんだから。

フレデリツキ　お前早く手傳つておやりよ。獨りであんなに働かして置いちや氣の毒ぢやないか。

彌生　おやあね、今日はゆつくりして行かない？　どうせ晩まで遊んで居たつていゝんでせう？

フレデリツキ　いや今日は少し、夕方から用があるんだ。

彌生　何か約束でもあるの？

フレデリツキ　少し會社の用事があつて忙しいんだ。

彌生　會社の用事が？――あなたにしちやあ珍しいわね。

フレデリツキ　己だつてたまには忙しい事もあるさ。此れ

でも一人前の技師なんだから、あまり輕蔑してくれるなよ。

彌生　だけど、會社の用が夜あるなんて可笑しいぢやないの？——どうせロクな用事ぢやあないんでせう？

フレデリツキ　いやほんたうだよ、ほんたうに忙しいんだよ。ほら、此れを御覽、（ティー・テーブルの上に置いてある一ポンド入りの藥罐を取つて見せる。）此れは今日會社から持つて來たんだがね、此の藥を使つて實驗しなけりやならない事があるんだよ。今夜のうちに內で試驗をして、明日の朝までにその結果を報告しなけりやならないんだ。

彌生　何？　その藥は？

フレデリツキ　此れは硫酸の濃い奴さ。

彌生　劇藥？

フレデリツキ　あゝ劇藥だね、此れが頰ツぺたへでもはねかつたら、顏中火傷したやうに爛れて、皮膚の色が變つちまふね。

彌生　へえ、いゝ事を聞いた、——それぢやその藥をジヤネットの顏へでもぶつかけてやつたら、どうするか知ら？　あなたは困る？

フレデリツキ　己よりかセルシが泣くだらうよ。

彌生　あなただつて泣かない方ぢやないでせう？　ちよいと其の罎を貸して頂戴。（手をさし出す）

フレデリツキ　（彼女の手を避けながら罎をテーブルの上に戻す）お止し、お止し、うつかり此の藥に觸つたら手が臺なしになつちまふぜ。

彌生　いゝわ、臺なしになつたつて。あたしの手なんかどうなつたつて、誰も困る人はありやしないわ。——だけど、そんなにいつ迄もジヤネットの事ばかり思つてゐると、私ほんたうにぶつかけてやるわよ。

フレデリツキ　止しておくれよ、ぶつかけるのは構はないが、己が飛んだ係り合ひになるからな。

彌生　ジヤネットよりか、あなたはセシルさんに打つかけてやりたいのね？　ねえ、さうでせう？——幾らかくれたら私代りにやつて上げてもいゝけれど。

フレデリツキ　さうだね、先づ千圓で請け合つてくれりやあ頼んでもいゝね。セシルは男ツ振りが自慢だから、此奴をかけられたら參るだらうよ。——

（初子が盆の上に茶器や菓子皿などを載せて出て來る。そしてそれを食器棚に置く。）

初子　彌ツちやん、濟まないけれどそのテーブルの上をきれいにして、此れを（食器棚の抽き出しからテーブル・クロースを出す）敷いて頂戴。もうそろそろ二時だから。

彌生　あゝさうね、サンドヰッチを切るんだつたわね。
初子　サンドヰッチは私が切つたからいゝの。テーブルの方を手傳つておくれ。
彌生　さう。
（彌生は立ち上つてテーブルを拭き始める。初子再び臺所へ去る。）
フレデリッキ　さあ、その間に一つ泳いで來よう、みんなやつて來たら敎へておくれ。
彌生　えゝ、敎へて上げるから成るべく近所で泳いでらッしやい、セシルさんの邪魔をしないやうにして。
フレデリッキ　ふゝん。
（フレデリッキ苦笑ひしつゝ海岸へ出て行く。）
（彌生、テーブルを拭きながら何か考へてゐる。そしてテイー・テーブルの所へ來て硫酸の罎を取り上げて見る。眼元に意地の惡い微笑が浮ぶ。やがて其の罎を手早く食器棚の中に隱し、テーブルを拭き終り、テーブル・クロースを懸けて居る。）
（初子が臺所から、もう一と組の茶碗や皿を盆に載せて來る。彌生と二人でそれらの食器に一つ一つ布巾をかけたり、食器棚からコップや匙を出して列べたり、いろいろお茶の準備をしながら下の會話を續ける。）
初子　あゝ、今日はほんたうに暑い日だね、あたし何だか頭がぐらぐらして、……ふいと立つと眼まひがして仕樣がない。……
彌生　さう？　そりやきつと貧血を起してるんだわ、又此の間のやうに倒れるといけなくつてよ。
初子　なあにそれほどでもないんだけれど、……
彌生　サンドヰッチはどうしたの姉さん？
初子　まだ、――お客樣が揃つてから持つて來ようよ、蠅が居て仕樣がないから。……セシルは海へ行つてるの？
彌生　えゝ、二人でね。
初子　あゝ、又何だかぐらぐらする。……
（眼まひの發作を感じ、兩手で顏をおさへる。短き間。）
彌生　どうしたの？　困つたわね。
初子　いゝえ、何でもない、……もう直つちやつたわ。
（再びものうげに働き始める。）
彌生　姉さん、……何か姉さんはセシルさんに云はれたんぢやないの？
初子　いゝえ、……なぜ？
彌生　でもね、そんな事で心配したのでそれが體に觸つたんぢやないかと思ふから。
初子　なあにあたし心配なんかしてやしないよ、――心配したつてなるやうにしかならないんだから。
彌生　それぢや姉さんは、もう仕方がないとあきらめて居

るのね？

初子　彌ッちやん、その話は止しておくれ、私はもう何も考へない事にして居るんだから。——人はどうでも、自分さへ正直にして居ればいゝんだよ。さうすれば神樣がきつと救つて下さるだらうから。

彌生　ふん、よくそんな事が云つてられるわね。姉さんだつて私だつて、——みんなジャネットが居るからなんだ。セシルさんもフレデリッキも、何處がよくつてあんな女に大騷をするんだらう。

初子　さう云つたつて仕方がないやね、ジャネットさんはあの通り器量よしなんだから。

彌生　あんな女は西洋人にはザラにあるわよ。

初子　だけど、あの人たちにはその西洋人のところがいゝんだよ。——ほんとにまあ、西洋人と云ふ者はどうしてあんなに綺麗なのかしら？　色が拔けるやうに白くつて、姿がよくつて、——私なんか恥かしくつて側へも寄れやしない。

彌生　西洋人だつてあれはラッシャン・ジュウなのよ。

初子　そんな事はよく知らないけれど、何でも亞米利加人ださうぢやないか。

彌生　亞米利加人だなんて、うそなのよ。あれは露西亞のジュウなのよ、ジュウなんて云へば西洋へ行けば誰も相手にしやしないんだ。スカレット・ホテルのお上さんの兒だつて云ふけれど、ほんとの兒だかどうか分つたもんぢやありやしない。きつと上海あたりから買つて來たんだわ。

初子　まあ、彌ッちやん、お止し、——そんな事を云ふもんぢやない、聞えると惡いよ。

彌生　聞えたつて構ふもんか！　ぐづぐづ云つたら私彼奴と喧嘩してやるから。うんと彼奴を懲らしめてやつて、世間へ顏向けが出來ないやうにしてやるから。——ほんたうよ、姉さん、そのくらゐな事はしてやつたつていゝんだわ。

初子　まあ、詰まらない、止しておくれ。——喧嘩なんかしてくれたら、私が仲へ立つて困つてしまふよ。

彌生　何も姉さんの爲を思つて云ふんぢやないのよ　私は私でジャネットに恨みがあるんだから、——いざとなつたら何をするか分らなくつてよ。姉さん見たいにいぢけて居るのは大嫌ひだから。

初子　ほんたうにお前は氣が强いんだね。お前の半分も氣が强いと、私も人に馬鹿にされないで濟むんだけれど、——

彌生　（テーブルの支度をし終り、氣を換へて云ふ）　姉さん、もう此れでいゝの？　まだクリームとお砂糖が來て

ゐないわ。

初子　こんな物は私が持つて來るから、――もうそろそろお客様が來さうなもんだね。

彌生　(奧の間の時計を覗いて) もう十五分で三時よ。セシルさんやフレデリツキを呼んで來ませうか？

初子　あゝ、呼んで來たらいゝだらう。

彌生　おや、ちよいと行つて來るわ。

(彌生庭へ降り、海へ出て行く。)

(初子、臺所へ行つてサンドヰツチや菓子や果物などを二三度に運んで來る。それからそれをテーブルの上に並べ、蠅を追ひのけながら新聞紙を被せ、ほつとした形でエプロンを脫いで籐椅子に腰かける。と、そこに新聞が置いてあるので何氣なくそれを取り上げ、讀むともなく讀んで居る。間。)

(暫くして、アレキシフが不意に庭先へこつそり步いて來る。)

アレキシフ　今日は、奧さん。

初子　今日は、――まあ、私どなたかと思ひましたわ。

アレキシフ　(帽子を脫いでハンケチで汗を拭く) 大變暑いですね。

初子　ほんたうに今日は特別ですわ、――まあお掛けなさいまし。

アレキシフ　有りがとございます、(ヹランダに腰かける) 奧さん、あなた顏色がよくないです。――あなた、體が惡いですか？

初子　えゝ、少し……

アレキシフ　おゝ、私大へんお氣の毒です。あなた二三日前、此れでした、(卒倒の身振りをして見せる) あなた此れ、――倒れました。

初子　まあ、よく御存知ね、

アレキシフ　ウエイ、私あのう……彌生さんに聞きました。私大へん心配でした。そして私、今日お見舞ひに來ました。

初子　有りがたうございます、別に大した事ぢやありませんでしたの。そんな事は私始終あるんですから。……

アレキシフ　チヨツ、チヨツ、(肩を聳やかす) 困りますねえ、大變惡いです。……

(間。)

アレキシフ　(モヂモヂしながら) 奧さん、あなた今、獨りだけ？

初子　えゝ、みんな泳ぎに行きましたの。

アレキシフ　わたし、……わたし今、海岸であなたの旦那さんを見ました。あなたの旦那さん、あの人と一緒でした。あの、スカレツト・ホテルの別嬪さん、……あなた

分ります？
（さう云つて、ニヤニヤ笑ふ。）
初子　えゝ、ジヤネツトさんも一緒なんですの。
アレキシフ　あなたの旦那さん、あなたを嫌ひます？　そしてあの人を愛します？
初子　どうですか私そんな事は知りません。
アレキシフ　ウエイ、あなた知つてます、あなた心配。あはゝゝゝ。
初子　私、――心配しても駄目ですから、――たゞ神様にお任せして居ます。
アレキシフ　おゝさう、それは大へんよろしいです。若しも神様を信じますならば、あなた今に幸福になります。
初子　……あゝ、（微かに溜息を洩らす）私――ほんたうに幸福になれるでせうか？
アレキシフ　ほんたうです、奥さん、――あなた今は苦しまねばなりませんです、けれども後に幸福です、私さう思ひます。……
（間。初子悩ましげに両手で顔を蔽ふ。）
アレキシフ　奥さん、……あなたの旦那さん、あなたに出て行けと云ひますか？……さうではないですか？
初子　そんな事を云ふこともありますけれど、……でもほんたうに云ふのだかどうか分りませんの。
アレキシフ　彌生さん、ほんたうだと私に云ひました。私あの人から聞きました。あなたの旦那さん大へん悪いです、――あなたを追ひ出します。――
初子　彌ッちやんがそんな事を云ひまして？
アレキシフ　ウエイ、私あの人から聞きました。――
初子　あの人はね、セシルが私を追ひ出して、ジヤネツトさんと一緒になればいゝと思つて居るんです。さうすればフレデリツキさんが自分の方へ来るかと思つて。
アレキシフ　おゝさう、あなたの妹さんも大変悪い、みな悪い人ばかりですね。
初子　……
アレキシフ　……奥さん。ミスタ・ローワンが若しもあなたを追ひ出したならば、あなた何處へ行きますか？　あなたのお父さんとお母さん、何處に居ますか？
初子　もう死んでしまひましたの、私何處へも行く處はありません。
アレキシフ　おゝさう、あなた大へん困ります、……奥さん、あなた行く處がありませんならば、どうぞ私の内へ来て下さい。私大へん喜びます、どうぞシエ、モア、――私の内へ、――
初子　（顔色を變へる）アレキシフさん、私を馬鹿にしないで下さい。私はミスタ・ローワンの妻です。私死んで

もセシルの側を離れません。幸福でなくつても構ひませんです。

アレキシフ　あはゝゝゝ、奥さん、あなた怒りました？　わたし冗談を云ひました、あなた怒つてはいけませんです。

初子　アレキシフさん、どうかもう歸つて下さい、お願ひですから。

アンキシフ　あはゝゝゝ、冗談です、あはゝゝゝ。（立ち上る）

（ジヤネツトとセシル戻つて來る。アレキシフが居るので、眼を見交してニヤリとする。）

アレキシフ　（うろたへながら）おゝ、ボンジユールームシユウ・ローワン。

セシル　（ひどく氣輕な調子で）やあ、今日は。

アレキシフ　（ジヤネツトに）ボンジユール、マドモワゼル。

ジヤネツト　今日は。

（アレキシフ近寄つて握手を求めさうな樣子をする。兩人知らぬ顏してすたすたと庭を上手へ歩み去る。）

アレキシフ　（何となく氣まづい心持ちで）奥さん、私歸ります、……左樣なら。

初子　（つんとして横を向いたまゝ）左樣なら。

（アレキシフすごすごと行つてしまふ。）

（直ぐ入れ違ひに彌生、フレデリツキ、ブラウン夫婦、ヷンダ、キリヤム等が庭へ這入つて來る。）

彌生　姉さん、皆さんが入らしつたわよ、今そこで會つちまつたの。

初子　（立ち上つて）あゝさう、――どうぞ、どうぞ皆さんお上り下さいまし。先程からお待ちして居りましたの。

（人々座敷へ上る。海水服のフレデリツキだけは庭を上手へ去る。）

ミスタ・ブラウン　今日は、奥さん、（握手する）あなた大變忙しい。

初子　まあ、ブラウンさん、ようこそ、――

（一同順々に挨拶する。）

ヷンダ　ミセス・ローワン！　セシルさんとジヤネツトさんはどうしましたの？

初子　あゝ今參ります。今まで泳いで居たもんですから、ちよつと風呂場へ參りましたの　（彌生に）ねえ、彌ツちやん、私今お茶を入れたり何かしなけりやならないから、その間皆さんに奥で待つて居て頂くやうにね。

彌生　あゝさう、それぢや皆さん、此方で暫く待つて居て下さいな。直きに支度が出來ますから。

（彌生、一同をつれて奥の間に這入る。初子は食器棚から紅茶の罐を出して、土瓶に紅茶を入れて居る。）

（ジヤネツトとセシルが服裝を改めて上手ヱランダから出て來る。）

セシル　もうみんな揃つたんだね。

ジヤネツト　あゝ、泳いだせゐか、私お腹が減つちやつたわ。

セシル　さうだらう、己も御同樣だよ、――初子！　早くして下さい！

初子　えゝ唯今。

（云ひながら、もう一つの土瓶に紅茶を入れる。）

ジヤネツト　（奥の間を覗いて大きな聲で）ヷンダさん來て居る？

ヷンダ　えゝ。

ジヤネツト　あなた昨夜、グリー・クラブのジヤズ・バンド聞きに行つた？

ヷンダ　えゝ、あなたどうして來なかつたの？

ジヤネツト　私？　ちよつと用があつたもんだから、……

（云ひながら奥の間へ這入る。セシルもその後に附いて行く。）

（フレデリツキ、ワイシヤツにパンツを着けて出て來る。籐椅子の處へ來てそこに脫ぎ捨てゝあつた上衣を着る。ふと、藥罎が見えないのに心付いて、キヨロキヨロしながら考へて居る。初子、土瓶を二つ提げて臺所へ湯を注ぎに行く。）

彌生　（奥から顏を出す）姉さん、まだ？

フレデリツキ　（眼配せしながら小聲で）ちよいと、ちよいと來ておくれ。

彌生　何よ？

フレデリツキ　（恐ろしく眞顏になる）ちよいと、――ちよいとまあ此處へ來てくれ。

彌生　何よ？　何だツたらさ。

（不承無精に傍へやつて來る。）

フレデリツキ　お前、あれを何處かへしまつたかね？

彌生　えゝ、しまつたわ。

フレデリツキ　何處へ？

彌生　何處だつていゝぢやないの、後で返して上げるから。

フレデリツキ　お前、まさかあんな物でいたづらするんぢやないだらうな？

彌生　ふゝん、そんなに心配しないだつていゝわよ。

フレデリツキ　詰まらない事をすると、己あ決して承知しないぞ。

彌生　承知しなけりやどうでも勝手になさいな、どうせ私はあなたに嫌はれて居るんだから。

フレデリツキ　馬鹿！　お出しッたら！

彌生　いゝえ出さない。いづれ返して上げるけれど、もう少し預かつて置くわ、あなたのほんたうの心持ちが分るまでは。

フレデリツキ　お前、己を脅迫する積りなのかい？

彌生　脅迫なんかしやしないわよ。脅迫されて居ると思ふのは自分に悪い事があるからなんだわ。あなたが人を欺したりしなければ、何も心配な事はないのよ。——ね、分つたでせう？　私だつてそんな亂暴な事はしやしないから、まあ安心して居らッしやい。

フレデリツキ　分つた、分つた、もうお前には降參したよ。

彌生　いーツ。（本心から憎々しげに齒を剝き出して睨める）

フレデリツキ　よ、お返しお返し、……お前の云ふ事は何でも聽くから、……本當に己が悪かつたから、……後生だから。……

（初子土鍋を提げて戻つて來る。フレデリツキ仕方なしに默つてしまふ。）

初子　彌ツちやん、お茶が這入つたから皆さんをお呼びしておくれ。

彌生　あゝさう、（奥を覗いて）皆さん、お待ち遠さま、さあどうぞ。——

（一同出て來てテーブルに就く。正面にジヤネツト、その向つて右側にセシル、左側にフレデリツキが腰かけるやうになる。初子と彌生とは、一番右の食器棚の前の椅子を占める。）

（フレデリツキは絶えず不安な樣子をして居る。そして內々彌生の動作に眼をつけて居る。）

彌生　（初子と共に一同へ茶を注ぎながら）　さあ、皆さんどうか上つて下さい。サンドキツチのいゝ方はサンドキツチ。それからパイのいゝ方はパイ。

ミスタ・ブラウン　私兩方いゝです、兩方たべます、あははゝゝ。

セシル　サンドキツチは何があるんだね？

彌生　チーズにソセエジにキウカンバーにサラダ、……どうぞ孰れでも好きな物を取つて下さい。

ミセス・ブラウン　奥さん、此のお茶は大そう結構ですわ、——

初子　まあ、さうでございますか、……（淋しく笑ふ）

彌生　ウキリヤムさん、あなたパイはいかゞ？

ウキリヤム　イエース　サンキユー、それアツプル・パイですか？

彌生　ノー、ストロベリーに櫻ん坊よ、あなた孰方がお好き？

ウキリヤム　おゝ、ストロベリー、プリーズ。
ヷンダ　まあ、此のパイはシナモンが利いて居て大へんおいしい、――奥さん、あなたが料理しましたの？
初子　えゝ、何ですかほんたうに下手ですけれど、……
ミスタ・ブラウン　下手ではないです、奥さん大へん上手です。
セシル　えゝさうです、ミセス・ローワンは料理が非常に上手です。（わざと片言交りに云ふ）私の奥さん、外の事駄目、たゞ料理だけ大へん上手、コックさんのやうです。
ジヤネツト　お止しよ！　アレキシフの眞似なんかするのは。
（一同初子に遠慮して低く笑ふ。）
（ジヤネツト、サンドキツチを行儀惡く喰ひかいてたべながら、爪先で床を蹈みつゝ小聲で鼻唄を唄り始める。）
彌生　ジヤネツトさん、まあ何を唄つてるの？　物をたべてる間だけ唄はお止しなさいよ。
（ジヤネツト返事をせず、嘲けるやうな眼でチラリと彌生を見、そして又平氣でつゞける。）
フレデリツキ　ミスタ・ブラウン、あなたいつ上海へ立ちますか？
ミスタ・ブラウン　明日、明後日、……明後日の次ぎの日立ちます。朝の八時。
フレデリツキ　ウイズ　ミセス　ブラウン？
ミスタ・ブラウン　さうです、そして上海に一ケ月、香港に一ケ月、九月日本に歸ります。
ジヤネツト　上海は何處のホテル？　アスタ・ハウス？
ミスタ・ブラウン　ノー、パレース・ホテル。あなた上海知つてます？
（ジヤネツト頷く）此處ナンキン・ロード、（手で圖を描きながら）此處バンド此のコーナーにパレース・ホテルあります。
ジヤネツト　えゝさう、私知つてるわ。
ヷンダ　それぢや九月まで會へないんだから、あしたの晩みんなで何處かへ行きませうよ、ねえセシル！
セシル　さうだ、それがいゝや、明日みんなで花月園へ行かうぢやないか。
ミセス・ブラウン　おゝ、アイム　ベリ　ソオリー。明日の晩はテンプル・コートのボールに約束がありますの。
ミスタ・ブラウン　さうです。――明後日の晩なら花月園よろしいです。
彌生　あら、私も行きたいわね、セシルさん、行つちやいけない？

ジャネット　（獨り語のやうに）明後日の晩はスペシャル・ダンスだから、夜會服のない者は這入れやしない。――ねえ、ヷンダさん、さうぢやなかつた？

ヷンダ　えゝさう、たしかさうよ。――

ジャネット　着物がなくつて斷わられたりなんかすると、ほんにいゝ耻ッ晒しね。よくそんなのがあるけれど、……

（彌生、むつとして沈默する。）

ミセス・ブラウン　さう云へばミスタ・グルックはどうしたでせう。あの人も誘はうぢやありませんか？

ジャネット　駄目よ、グルックさんはセシルと喧嘩しちやつたの。そしてセシルばかりぢやない、私たちの事をひどく惡く云つてるんだつて。

セシル　さう、明後日は日曜だからね、日曜にダンスに行くなんて云やあ、ミスタ・グルックは眼を丸くして怒りますよ。

ミセス・ブラウン　まあ、どうして？

セシル　あの男は變な男でね、耶蘇教に凝り固まつてるもんだから、安息日には内ン中にぢつとして居なけりやいけないッて主義なんです。國に角あれは變つて居ますよ、我れ我れのやうな不良な男女とはもう、附き合つてくれないさうです。あはゝゝゝ。

ジャネット　何云つてるんだい！　ミスタ・グルックは僞善者だよ、ねえ、さうぢやないか。あんな人とはもう此方でも附き合つてやらないがいゝよ。

ミスタ・ブラウン　安息日に遊んだらなぜ惡いですか？をかしいですね、私あの人馬鹿だと思ひます。

彌生　（ふいと思ひ出したやうに）クリスチヤンは日曜に休むけれど、デユウの安息日は土曜日なのね。あれはどう云ふ譯なんだらう、――フレデリッキさん、あなた譯を知つてる？

フレデリッキ　（イヤな顏をする）知らんね、僕は。

彌生　横濱にはジユウ商人が澤山居るのよ、そして土曜日にはみんな店を閉めてしまふの。――ジャネットさん、あなた譯を知つてるでせう？　知らない筈はないんだから。

（さういつて、ぢつとジャネットを睨みつける。一同顏色を變へる。短き間。）

ジャネット　（悠々と梭ん坊を咬みながら彌生に冷やかな一瞥を投げ、急にセシルに向つて云ふ）セシル！　お前あのポルチユギースを出しちやつとくれよ、傍に居られると汗ッ臭くつて氣持ちが惡いから！

彌生　何だつてジャネット！　もう一遍云つて御覽。

ジャネット　何だつていゝんだよ！　お前なんか引ッ込んどいで！

（ぷつと襁ん坊の種を吐きかける。）

彌生　畜生！

（いきなり立ち上つて珈琲茶碗を打つける。同時にジヤネットも猫のやうにすばしつこく身を起し、皿やコツプを手當り次第に猛烈に投げつける。「イフ　ユー　ゴー　オン　フアイテイング、ゲツタウト！」と誰かが叫ぶ。「止せ止せ！」「何亂暴するんだ！」などゝ云ひながら一同頻りに止めようとするが餘り勢が激しいので制し切れない。彌生、隙を覗つて身を屈めるとたんに食器の棚の下から硫酸の罎を取り出し、それを振り上げて向つて來る。）

フレデリツキ　あツ、ジヤネツト！　あぶない！　硫酸だ硫酸だ！

（狂氣の如くジヤネツトに抱き着き、身を以て彼女を庇ふ。）

彌生　フレデリツキ！　畜生！　なぜ退かないんだ！　さあ、ジヤネツトをお出し！　ジヤネツトを此處へお出しツたら！……シベリヤの生れのジウなんかに馬鹿にされて溜るもんか！　さあ！　邪魔をする奴にや誰にだつて打ツかけてやるから！

（云ひながら罎の栓を拔き、瞳を据ゑて狙ひを付けつつジリジリと詰め寄る。フレデリツキとジヤネツト眞青になる。セシル後ろから飛びかゝつて彼女の肘に縋る。）

セシル　（哀願するが如き調子で）彌生！　お前何するんだ！　後生だから止してくれ！　ジヤネツトを勘忍してやつてくれ！……彌生！　止してくれツたら！

（初子、此の場の騷ぎに再び眩暈を感じたらしく、喧嘩の始めからぐつたりと椅子に凭れて眼をつぶつて居る。そして此の時ふらふらと立ち上り、平氣で彌生の傍によつて彼女の手にある罎を摑む。）

初子　（落ち着いた穩やかな口調で）彌ツちやん、お前こんな物を持つてどうするんだよ、皆さんに御心配をかけちや濟まないぢやないか。さあ、私によこしなさい、さあ、彌ツちやん、――

（云ひながら、それが劇藥であるのを知らないらしく大膽に奪ひ取らうとする。）

セシル　初子！　馬鹿な事をするな！　あぶないツたら！

（彌生、爭ふ拍子に自分が硫酸を浴びさうになり、思はず手を放す。初子、力餘つて罎を持つた手を後ろへ跳ね返す。そのはずみにさつと藥液が迸り出てセシルの顏へ一面にかゝる。セシル「あつ」と叫びながら打倒れる。）

初子　（罎を持つたまゝ夫の傍に跪く）あなた、どうなさ

いましたの？　薬が眼へでも這入りましたの？……　まあ！（顏を覗き込んで始めてびつくりする）　それぢや此の薬は……

セシル（呻きながら絶叫する）　馬鹿！

（いきなり鏡を取つて初子の額へ投げ付ける。）

初子（滿面に薬を浴び、氣が遠くなつて微かな聲で）　ああ、濟みません、濟みません。

（さう云ひながら失心したやうに突つ伏す。人々恐る恐る傍へ寄つて來る。）

ジヤネツト　どうしたのセシル！　薬が顏へかゝつちやつたの？

セシル　ジヤネツト！　今己の顏を見てくれるな、彼方へ行つてくれ！

ジヤネツト（ちよいと覗いて見て薄氣味惡さうに顏を背け、フレデリキに囁く）　もう直らないかしら？

フレデリツキ　うん、……まあ直るまいね。

彌生（昂奮して獨語のやうに繰り返す）　馬鹿！　姉さんの馬鹿・　眼ツかちにでも鼻ツ缺けにでもなるがいゝや！　自分が餘計な手出しをするから惡いんだ！　馬鹿！　大馬鹿！

（それから力なく椅子に腰かけ、氣拔けしたやうにぼんやりしてしまふ。）

第三幕

第一場

場面前と同じ。第二幕より三箇月ほど過ぎて居る。秋の夜の十一時頃。

深い笠の附いた電燈のスタンドが、中央の卓の上に据ゑてある。その鈍い灯影を横顏に受けて、ぢつと頬杖をついたまゝ、セシルが彫像のやうに身動きもせずに居る。うす暗いのでよく分らないが、その額には恐ろしいひツつりとどす黒い斑點が出來て居る。短き間。初子が奥の襖から出て來る。彼女も同じやうに醜い相に變つてゐる。

初子（恐る恐る聲をかける）　あなた、もうお休みになつたらいかゞ？……

セシル（矢張りぢつと動かずに居る）

初子　ねえ、昨夜もおちおちおよらなかつたやうですから、……

セシル　……

初子　あなた、……もう十一時過ぎましたから。

セシル　うるさいから默つて居て下さい、寢たければ先へ寢たらいゝです。

初子　私は寢たかありませんけれど。

（間。初子、テーブルの上に置いてあつた佛蘭西刺繍の道具を取り、夫の傍に腰かけてしよざいなささうに刺繍を始める。）

セシル　初子、――

初子　はあ。

セシル　あなた彼方へ行つて下さい。そんな見ツともない顔を私の前へ出さないがいゝ。

初子　はあ。

（立ち上つて籐椅子の方へ行き、そこに腰かけて、蟲來ない明りの下で猶も刺繍を續ける。やゝ長き間。）

（垣根の外を人影が二つちらちらする。立ち止つてそつと家の中を覗き、やがて聲をかける。）

彌生の聲　今晩は、……姉さん。

アレキシフの聲　今晩は、……まだ寢ないですか？

初子　まあ、アレキシフさん、……今時分どちらへ？

彌生の聲　今こゝを通つたらね、明りが見えたもんだからまだ起きて居るのかと思つて、聲をかけたの。這入つてもよくつて？

初子　えゝあの、――（セシルの顔色を窺ひ、躊躇する）

彌生の聲　セシルさんはもうお休み？

初子　いゝえ、まだ、――

彌生の聲　さう、――ちよつと這入つてもよくつて？

初子　（仕方なしに）えゝ。

（彌生とアレキシフとが連れ立つて庭へ這入つて來る。二人はすつかり夫婦氣取りである。彌生は金のかかつた、けばけばしい洋裝好みのなりをして居る。）

初子　今晩は、――何處かへ行つていらしつたの？

アレキシフ　ウエイ、今夜わたしたち、東京へ行つて來ました。

彌生　帝劇へ露西亞のオペラを見に行つたもんだから、大變おそくなつちまつて今歸るところなの。これでも一と幕見殘して來たのよ、ねえあなた、――

アレキシフ　ウエイ、しかし私たち充分見ました。

初子　まあ、それはようござんしたわ。

（さういつて、又氣兼ねをするらしくチラリとセシルを見る。セシルは二人がやつて來てから成るべく顔を見られまいとするやうに暗い方へ首を向けてゐる。）

彌生　（セシルを見て）セシルさん、今晩は。

アレキシフ　今晩は、ムシユウ・ローワン。

（セシル默つてうなづく。）

彌生　まだ寢ないんですか？

セシル　うん。

彌生　（なだめるやうに）もう好い加減に寢たらいゝわ。

セシル　……

（垣根の外な男の聲と女の聲とが唄をうたひつゝ通り過ぎる。唄が次第に微かになりながら暫く聞える。セシルぢつと耳を澄ます。）

彌生　あゝ、……あれはフレデリツキにジヤネツトだね。今夜のオペラの唄をうたつてるんだわ。

アレキシフ　ウエイ、……あの人たち、今歸ります。

彌生　さうよ、きつと、（初子に）今夜私たち、帝劇で二人に會つたの。

初子　（ハラハラしながら）あら、さう。

彌生　そして、歸りの電車も一緒だつたの。――一緒どころか、つい私たちの鼻の先に腰かけてながら、とうとうしまひまで知らん顔をして、一とッ言も口を利かないのよ。まあ、何てづうづうしい人たちなんだか、……

（セシルふいと立ち上つて、座に堪へざるもの〻如く奥へ行つてしまふ。彌生氣が付いて言葉を控へる。）

初子　あの、セシルの前であの人たちの名前を云ふといけないんだから、此れからは氣を付けてね。

彌生　さう？　――セシルさんはまだジヤネツトの事が忘れられないのかしら？

初子　そりや、忘れては居るんだけれど、矢つ張り名前を聞かされると好い氣持ちはしないんだよ。あの人の身になつて見れば隨分口惜しいだらうからね。

彌生　口惜しいと思ひ出したら、私だつてどんなに口惜しいか知れやしない。そりやあの時は私もセシルさんも惡かつたけれど、始めッからの事を言やあ、あの二人の方が私たちより惡いんぢやないか。だのに警察ぢや私とセシルさんを罪にしといて、あの二人を放つて置くなんて、そんな馬鹿な話があるもんぢやない。

アレキシフ　彌生さん、あなた、どうぞその話止めて下さい。……（初子に）奥さん、私ほんたうに困ります、此の人いつも此れを云ひます。

初子　ほんたうよ彌ッちやん、もう其の話は止しておくれ。

彌生　私、考へるとフレデリツキの奴が憎くッて憎くつて、顔を見たら打ん擲つてやらうと思つた事もあるけれど、でももう此の頃ぢやそんな事を思つちや居ないわ。あんな人間を相手にするだけ損だと思つて、憎いなんて事は忘れるやうにして居るの。

初子　さうだとも、ほんたうにそれがいゝんだよ。セシルだつてそれは分つて居るんだから、そのうちにはきつと氣持ちが直つてくれるよ。たゞね、あの人たちが少しは遠慮してくれるといゝのに、あゝやつて此れ見よがしに此の近所を出歩くもんだから、それで時々思ひ出すんだよ。私いつそ、セシルを連れてアメリカへでも行つてし

まひたいと思つたんだけれど、二人ともこんな風をしてまさかさうも出來ないもんだから、……

彌生　なあに、此方で逃げ出さなくつたつて今に向ふで逃げ出すわよ。近いうちにあの人は上海へ行くんだつて。

初子　さう？　ほんたう？

彌生　さうだつて。そんな噂があるわ。――きつと此の近所に居たたまらなくなつたのよ、何ぼ人間がづうづうしいからつて、あゝしてのめのめと居られる譯がないぢやないか。上海へでも何處へでもさツさと行つちまふがいいさ。

初子　あの人たちは私たちと違つて、何處にでも廣い世間があるんだから、本當にさうしてくれるといゝ、さうしたらセシルだつて、今更憎いも口惜しいもありやしないんだけれど。

彌生　だからさうなれば、何も此方で逃げ出す事なんかありやしないわ。私たちもずつと横濱に居る積りだから、姉さんたちも此處の家に居らつしやいよ。ねえ、さうした方がいゝわ。セシルさんだつて、さう云つちや何だけれど、亞米利加へ歸つたところでやつぱり肩身が狹いんだから、それよりかまだ日本に居た方がいゝと思ふわ。さうして姉さんと仲好く暮らすやうにしたらいゝのに。

――

初子　（伏目がちに）さうなれば私、……セシルには濟まない事をしたけれど、それより外に望む事はないんだよ、……さうして一生、……死ぬまで暮らす事が出來ればそれが一番仕合はせなんだから。……

アレキシフ　奧さん、あなたきつと幸福になります、ミスタ・ローワンあなたを愛します。私さう思ひます。あなたそれを信じなければいけません。神樣はあなたを捨てませんです。

初子　はあ、私信じて居りますの。

彌生　セシルさんは此の頃どう？　少しは姉さんに優しくする？

初子　いゝえ、……前よりも一層根性がねぢけて、意地が惡くツて仕樣がないの。……だけどそれもまあ今のうちは仕方がないわ、どんな人だつてあんな目に遭へばさうなるんだらうから。

彌生　私なんか一と月も監獄へ入れられて居たつて平氣だつたけれどセシルさんには辛かつたと見えるのね。男ツて者はさうなると案外弱いんだから。

初子　ほんたうに、彌ツちやんのやうだといゝんだけれど、……セシルはあの通り見え坊だからね。此の頃ぢやめつたに訪ねて下さる人なんかないけれど、たまに誰方か來て下すつてもこそこそと奧へ隱れてしまふし、一と足だ

つて門の外へ出る譯ぢやないし、一日内に閉ぢ籠つて居て、一と言も口を利かない事があるの。だけど、出て來てから、まだ一週間にしきやならないんだから、それも無理はないと思ふわ。きつとそのうちに追ひ追ひと直るわ。

彌生　さうよ、きつと直るわ。セシルさんに取つちや、何と云つたつて姉さんより外頼りにする人はないんだもの。

アレキシフ（時計を出して見る）彌生さん、大へんおそい、十一時半です。――

彌生　あら！　もうそんな？

アレキシフ　ウエイ、私たち、歸らねばなりませんです。

彌生　姉さん、それぢや又來るわ。

初子　あゝ、いろいろほんたうに有難う。

彌生　セシルさんにも宜しく云つてね。

初子　あゝ、今にも少し機嫌でもよくなつたら、ちよいちよい遊びに來ておくれな。――アレキシフさん、どうかあなたも入らしつて下さい、私ほんたうに彌ッちやんがたつた一人のきやうだいなんですから。

アレキシフ　ウエイ、よろしいです。私やはり同じ事、私日本にたつた一人、私の國露西亞今ありませんです、日本わたしの國同じ事、そして彌生さん私の妻。

彌生　姉さん、それぢやお休みなさい。

アレキシフ　お休みなさい、奥さん。

初子　お休みなさい。

（アレキシフ、初子と握手し、彌生と腕を組んで去る。）

（初子、襖の方に行き、そこを明けて奥の間を覗く。）

初子　あなた、もうお休みになつたの？――

（間。返辭がない。）

初子　あなた！　何處に居らつしやるの？　あなた！　セシル！

（云ひながら奥へ這入り、間もなく戻つて來る。）

初子　まあ、何處へ行つたんだらう、セシル！　何處？返辭をして下さい！

（ヹランダの上手へ行き、直ぐ戻つて來て庭へ降り、垣根に身を寄せて表の闇を見る。）

初子　セシル！　セシル！

（頻りに叫び續けつゝ遂に庭から外へ出て行く。遠い海岸の方で、夫の名を呼ぶ彼女の聲が暫く聞える。それが次第に消えると共に舞臺暗くなる。）

第二場

スカレツト・ホテルのジヤネツトの部屋。――向つて左側の壁に寢臺、右側にドアー、後方に窓二つ、窓と

窓との間に化粧臺、臺の上に花瓶、壁間に裸體畫の額が懸つてゐる。天井に眞紅の笠のかゝつた、赤い電燈がともつて居るので、部屋全體が薄紅く見える。

時刻は直ちに第一場に續く。ジヤネットがナイト・ガウンを着て寢臺に腰かけ、煙草を吸つてゐる。フレデリツキはタキシード姿で帽子を阿彌陀に被り、片手に外套を抱へて細身のステッキを衝きながら、部屋の中を往つたり來たりする。

ジヤネット　いゝぢやないか、泊つて行つたつて。

フレデリツキ　今日は一旦歸るとしようよ、さう遊んでばかりも居られないから。

ジヤネット　なぜ？　何がそんなに忙しいんだい？

フレデリツキ　いろいろ用が溜つてるんだよ、立つ迄にすツかりそいつを片附けて行かなけりやならないからな。

ジヤネット　いくら忙しいツたツて夜は差支へないぢやないか？

フレデリツキ　ところがさうは行かないんだよ、晝間になると頭がボンヤリして睡くて仕樣がないんだ。何しろ此處ンところ每晩だからな。

ジヤネット　ふん、あんまり惚れられちや迷惑かい？

フレデリツキ　どう致しまして！　あはゝゝゝ。

ジヤネット　それぢや明日の晩は來る？

フレデリツキ　うん、明日は來るよ、今夜一と晩だけ、――一と晩ぐらゐゆつくり寢なくつちや遣り切れないから。

ジヤネット　ぢや、勝手におし！　さツさとお歸り。

フレデリツキ　おい、怒つたのかい？　怒つちやいかんよ。――だから早く上海へ行かう、その積りで己はせツせと支度してゐるんだよ。

ジヤネット　行くのはいゝけれど、うちの太ツちよの方はどうしてくれるんだい？　お金をやつてくれなけりやとても私を放しやしないよ、逃げて行つたつてきつと上海へ追ツかけて來るから。

フレデリツキ　分つてるよ、立つ迄にはちやんと話を附けて行くよ、――それからお前のステイーマー・トランクは明日の朝屆く筈だぜ、昨日鞄屋へ頼んどいたから。

ジヤネット　トランクばかり屆いたつて、お金を早くしてくれなけりやしやうがありやしない。セシルの方がお前より餘つぽど氣前がよかつたツけ。

フレデリツキ　馬鹿にするない、己だつてさう見くびつたもんぢやないんだ。

ジヤネット　あゝ、ほんとに早く行つちまひたい、もう横濱なんか嫌な事ツた。――

フレデリツキ　今夜のやうな事があるからな。

ジヤネット　何さ？　今夜のやうな事ツて？――私あんな

女は恐かないよ、向うが平氣なら此方だつて平氣なもんさ、お前は恐いだらうけれどね。

フレデリツキ　いや、己は實はぎよツとしたよ、つい此の間牢から出て來たばかりだのに、あんまり意外だつたからな。

ジヤネツト　さう云へばお前あのなりを見たかい？　一體まあ何てんだらう、まるで氣違ひぢやないか。あれであの爺と一緒に平氣で廊下を歩いてゐるんだから、馬鹿ほど恐ろしい者はありやしない。

フレデリツキ　ふん、全くだね、だがあれで己も助かつたよ。あの馬鹿の事だから、監獄を出たら何をやり出すか分らないと思つてたんだが、出ると直ぐにあの爺を摑まへたんだから篤くぢやないか。尤も孰方が摑まへられたのか分らんけれどね。

ジヤネツト　きつと何だよ、馬鹿は馬鹿なりに考へたんだよ。あんな爺でゞもなけりや誰も相手にする者はありやしないから、丁度似合ひの夫婦だよ。世の中ツてものはよく出來てらあ。

フレデリツキ　あはゝゝゝ、（笑ひながら腕時計を見る）冗談ぢやない、もう十二時だ、それぢや明日の晩來るぜ。

ジヤネツト　あゝきつとだよ、來ないと承知しないよ。

（フレデリツキ扉を明ける。ジヤネツト戸口へ行き、ドアーの蔭で彼を抱きしめる。）

ジヤネツト　それぢや明日の晩、――

フレデリツキ　あゝきつと。

（フレデリツキ去る。）

（ジヤネツト化粧臺に腰かけてちよつと顏を映して見、それから寢臺に這入り、仰向けになつて煙草を吸ひながら、英語の繪入雜誌をひろげて見る。が、直ぐに又それを放り出して臥ながら煙草を灰皿に捨て、手を伸ばして枕もとの壁にある電燈のスヰツチを切る。）

（短かき間。ガタリと云ふ音がして扉が明く。ジヤネツト、音がすると同時にスヰツチを捻り返して、すつくり身を起す。）

ジヤネツト　誰？――（部屋の外に立つて居る人影を認め、悚然として金切聲を上げる）あツ、セシル！　誰か來とくれ！

（セシル駈け込んで來て手早く扉をしめ、寢臺を降りて逃げ出さうとする、ジヤネツトの前に倒れるやうに跪き、兩手をひろげて彼女の脚に縋り着く。ジヤネツト寢臺に臀餅をつく。）

セシル　ジヤネツト！　後生だ！　大きな聲を出さないでくれ！　己は決して亂暴な事をしに來たんぢやない。己はお前に賴みがあるんだ。……なあ、ジヤネツト！　お

前定めし厭だらうが何卒己を助けると思つて、……いつかの約束を聽いてくれ、もう一度己の物になつてくれ。

（ジヤネツト身をすくめて恐ろしげにセシルの顏を視詰める。そして猶も逃げ出さうと悶えつゞける。）

セシル　なあ、ジヤネツト！　己はこんな顏になつちやつたがそれでもお前の傍に居たいんだ。頼むから己と一緒になつて、……此の體を己に抱かしてくれ。（激しく彼の女の全身を搖す振る）　此れは己の物なんだ、此の手も、此の腕も、此の脚も、みんな己の物なんだ。フレデリツキが取らうとしたつて此れは己の物なんだ。……

（母親が慌しく這入つて來る。酒樽のやうに太つた、眼玉の大きい物凄い女。）

ジヤネツト　（母親を見て急に氣があらくなる）　マアザアー！　早く此奴を追ひ出しとくれよ！　畜生！　お放しツたらお放しよ！　（平手でぴちやぴちやと擲り付け、足で滅茶苦茶に蹴る）　お前なんかにや用はないから出て行けツたら！

母親　まあ、ローワンさん、お放しなさいよ、うちの娘を摑まへて何するんだよ。

（ジヤネツトを助けて無理やりにセシルを突き放し、二人の間に割つて這入る。）

母親　まあお前さん、一體今時分何處から這入つて來たんだい！　用があるなら晝間おいで、（云ひながらつくづくとセシルを見る）　尤も其の顏ぢやあ、晝間來られても困るけれどね。

セシル　お上さん、何卒ジヤネツトを僕に下さい、僕はあの兒を貰ひに來たんだ、欲しけりやお金は幾らでも上げるから。

母親　さうさね、お前さんを旦那にするんぢや、百萬圓も貰はなけりやなりますまいよ、此の兒が可哀さうだからね。

ジヤネツト　そんな事を云つてからかつてないで、早く追ひ出しちまつておくれよ。今時分人のうちへやつて來やがつて、づう〳〵しいにも程があるぢやないか。此の體は己の物だツて、人馬鹿にしてらあ、顏を見ただけでもぞツとすらあ。

セシル　ジヤネツト！　一緒になつてくれさへすりや己はどんな事でも聽く。旦那と思つてもくれないだつてサーヴントでも奴隷でもいゝんだ。よう、ジヤネツト、己はそれでも澤山なんだ。一緒に外を歩くのが嫌なら己は一日內ン中に居て、お前の顏だけ見て居てもいゝんだ。ジヤネツト！　頼むから己の云ふ事を聽いてくれツたらー己を可哀さうだと思つてくれツたら！……こんな顏になつちまつたのもみんなお前の爲めなんだと思つて、……

ジヤネツト　何だつて？　私がお前をそんなにしたつて？
母親　ローワンさん、お前さんまあ飛んだ事を云ふぢやないか。言ひ懸りでも附けに來たのかい？
ジヤネツト　お前がそんなになつたのはお前のお上さんが馬鹿だからさ。恨みがあるなら內へ歸つてあの女に云つておやりよ、私に云つたつてお門違ひだよ、アイム　ベリー　ソオリーだけれど。
母親　さあさあ、ローワンさん、いくらお前さんがそんな事を云つたつて無駄なんだからね、好い加減にして歸つておくんなさい。——さあ、ローワンさん、歸らなけりや警察へ電話をかけるよ。
ジヤネツト　電話をかけた方がいゝよ、もう一度監獄へ行きたいんだらうよ、——
セシル　ジヤネツト！　己はお前を人にはやらない！
（突然立ち上つて母親を突きのけ、ポケツトに摑んで居たピストルを出してジヤネツトに亂射する。ジヤネツト寢臺の上に倒れる。）
母親　あれツ、畜生！　何するんだ！　誰かきとくれ！早く！　早く！
（云ひながらピストルを奪ひ取らうとする。格鬪の間にピストルの端が電燈に打つかり球が切れて室內暗くなる。）

セシル　（ニヤニヤ笑ひながら）お上さん、もう放したつて大丈夫だよ、此れで僕は澤山なんだ。
（母親思はず手を緩める。セシル自分の蟀谷にピストルをあてゝ打ち、床に倒れる。母親寢臺に走り寄つてジヤネツトの屍體に觸つて見る。）
（初子がホテルのボーイと二人で這入つて來る、暗いのでうろ〳〵して居る。）
初子　あの、セシルは居りますでせうか？
母親　誰だい？　お前さんは、——
ボーイ　ローワンさんの奧さんですよ、今訪ねて來られたんです。
母親　あゝさうかい、お前さんの御亭主は死んぢやつたよ。
初子　あゝ——
（危く倒れさうになり、ボーイの手に支へられる。）
母親　死ぬのは自分の勝手だけれど、大事な內の娘まで殺して行きやがつたんだよ、ほんたうに呆れた奴ぢやないか。——（ボーイに）お前、早く警察へ電話をかけとくれ。
ボーイ　はあ、——奧さん、あなたシツカリしなきやいけませんせ、大丈夫ですかね？
初子　有りがとございます、もう大丈夫ですから何卒私に構はないで、——

（ボーイ初子を置いて出て行く。初子、靜かにセシルの屍骸の傍に据わる。）

（母親、心づいて電燈を調べ、球を外して取り換へに行かうとする。ふと戶口の所に立ち止まつて、初子の姿を心配さうに見返りながら。）

母親　お前さん、しつかりして居なけりや困るよ、今直きに警察の人が來るだらうから、――

初子　はあ。

母親　又此處で自殺でもされちや迷惑だよ。

（云ひ捨てゝ出て行く。）

初子　（母親の出て行つたのを知らずに）私そんな事はしやしません、神樣がお召しになる迄は――

（初子、兩手で淚を抑へつゝ夫の屍骸の側にうづくまり、長く長く動かずに居る。）

――幕――

白狐の湯（一幕）

人物

角太郎
お小夜
お小夜の母
狐
仔狐
或る白人の女
その召使の老婆
或る白人の紳士
巡査

所

ある山奥の溪流のほとり

まんなかに溪流がながれてゐる。河床に幾つもの大きな岩がごろごろして居るので見えないが、せゝらぎの音がさらさらと聞える。兩岸は崖になり、その崖の間を細い山路が縫つてゐて、溪流の上に渡された丸木橋に通ずる。上手の路から丸木橋を渡つて舞臺の前の方の汀へ降りたところ、溪の水とすれすれに古い小屋が立つてゐる。それはその川の縁に湧く溫泉の小屋で、下手に小ひさな窓があり、入口は川の方を向いて開け放されてあるけれども、その近所に岩があるのと內部が暗いので湯の口は見えない。たゞほんのりとうす白い湯煙が小屋の奧から軒をかすめて這つてゐる。

靜かな初秋の夜である。流れに沿うた崖のふちには白萩がところどころに咲きこぼれてゐる。お小夜が溫泉小屋の入口に近い岩の上に腰かけてしよんぼり川上の方を見てゐる。暫くすると、一人の老婆――お小夜の母親――が、薪を背負つて下手の坂路を橋の方へ降りて來る。橋を半分渡りかけたとき、お小夜に氣が付いて立ち止まる。

母親　誰だあよ、そこに居るのは？……おめえ、お小夜ではねえかよ……

（お小夜默つてゐる。）

母親　まあ今時分……おめえはまあ……

（お小夜、母親に顏を見られてばつが惡さうにうつむく。）

母親　夜がふけてからこんな所に來るんでねえ、來てはなんねえつてあれほどおつかあが云つてるのによう。おめえ、いつから此處に來て居るだあ？　よう、いつからだ

あ？

お小夜　……（何事たか云はうとして默つてしまふ）

母親　何？　何だつてよう？

お小夜　なんにも云やあしねえよう。

母親　云はねえ？　云はねえだつて、おツかあにやあお前の腹は分つてゐるだあ。……さあ、早くけへんな、おツかあと一緒にけへんな。

お小夜　……

母親　よう、けへんなつて云ふによう、それにまあ、おめえ内を空ッぽにしてどうする氣だあよ。おツかあは今日隣り村へ廻らなけりやあなんねえから、歸りはおそくなるべえつて、今朝も斷つて置いたのによう。ほんたうに呆れた兒だあ。……（間）さあ、一緒に來ねえかつてばよう。

お小夜　まあ、おツかあ、……おいらは直きに後から行くよう。

母親　いゝやなんねえ。（空を仰ぐ）ほうら、もう月が穩木山のあの松の木にかゝつてゐるだあ、おめえにはあれが見えねえのかよ。

お小夜　おいらにだつて見えてゐるだあよ、おいらはあの月を待つてゐるんだもん、……

母親　あの月を待つてゐる？

お小夜　あゝさうだあよ、月と一緒に來る人があるのを待つてゐるだあ。

母親　ふん、待つてゐたつて來る筈はねえよ。角太郎はもう大方死んぢやつただあ。

お小夜　死んぢやつたら死骸が出なけりやなんねえつて、みんなさう云つてゐるだあよ。角ちやんの兄さの時だつて、姉えの時だつて、——ほれ、あの釣橋の下の方のよう、眞つさをな淵の中に仰向けになつて、ちやんと死骸が浮いて出たつて云ふんだもん。

母親　そりやああの時はさうだつたけれど、角の奴あ溪で死んだか山で死んだか分りやあしねえもん。死骸だつて出るときまつちやあ居ねえだあよ。

お小夜　だつて、昔ッから此の村ぢやあ狐に憑かされた者があると、みんな溪へ落つこて死ぬんだつて云ふんだもん、さうしてしまひにやあ死骸になつて、あの淵へ浮かぶんだつて云ふんだもん。……

母親　さう云つたつておめえ、死骸が浮いて出るまでにやあ間があるだあよ。角の野郎が居なくなつてからまだ五六んちにしかならねえもん。

お小夜　だからよう、まだ五六んちにしかたんねえだから、生きてゐるかも知れねえのによう。

母親　五日も六日も、飯い喰はずに山ん中に生きてゐられ

るかよう、いくら狐につまれたつて、……

お小夜　でも人間は、水さへ飲んでりやあ十日や二十日飯い食はねえでも大丈夫だつて、學校の先生がさう云つただあよ。だから角ちやんはまだ生きてゐるだあ。

母親　生きてゐたつて、そんな狐につまゝれた人間なんか、二度と我が家へ入れることはなんねえからなう。

（さう云つてお小夜を睨める。お小夜悲しげにうなだれる。）

母親（橋を渡り、お小夜の傍に來て岩角に腰かけ、やさしい言葉づかひになる）よう、お小夜ぼう、おめえはまあどうしてそんなに角の事ばかり案じるだあよ。おめえはまだ歳が若えんだしなう、今に嫁に行く時分になりやあ、いくらだつて好い婿が貰へるだあよ。

お小夜　あれ、おッかあ、おいらあ何もそんな氣ぢやあねえんだによう。……

母親　そんならなぜ角の事ばかり案じるだあよ、――さ、お小夜ぼう、好い兒だから一緒にけえんな。角の野郎は仕方がねえけれど、おめえの身にでも間ちげへがあつちや、おらあほんとに佛樣に申譯がねえ。

お小夜　角ちやんだつて、おッかあにやあたつた一人の甥だのによう。

母親　いゝや、おらあんな狐のついた人間を甥だたあ思はねえよ。あれの一家は代々狐にたゝられてゐるだあ。あれのおふくろが死んだのも、兄あや姉えが死んだのも、みんな狐の業なんだもん。

お小夜　狐がつくなんて、今の世の中にそんな事があるもんでねえつて、先生がさう云つただあよ。

母親　いくら先生がさう云つたつて、角のする事が正氣の沙汰と思へるかよう。小さい時はそんな風でもなかつたけれどな、奉公に出せばあの通り馬鹿になつて歸つて來るしよう。仕方がねえから引き取つてやりやあ、始終山ん中ばかりほッつき歩いて、何一つ用を足した事もありやしねえ。あれのおふくろが氣がふれた時も、ちやうどあんな風だつただあ。

お小夜　そりや、伯母さんの事は知らねえけれどな、角ちやんのは狐がついた云ふ譯ぢやあねえだあよ。たゞ少うし氣が變になつただけだあよ。だから親切にしてやれば今に直るかも知れねえのによう。

母親　いゝや、あれはたゞの氣ちげへぢやあねえ。――現におめえ、此の白狐の湯の近所でな、夜がふけてから彼が眞つ白な狐と一緒に歩いてゐるのを見たつて云ふ人が毎晩のやうにあるんだもんなう。

お小夜　おッかあが眞に受けるもんだから、みんなが面白がつて好い加減な事を云ふだあよ。そりやあ嘘にきまつ

てゐるだあ。

母親　いゝや、嘘の譯はねえだあ。さきをとゝひの晩は千歳屋の旦那が見たつて云ふし、その前の晩はお六さんとこの若え衆が見たつて云ふしよう、——

お小夜　そりやあみんな神經だあ。

母親　神經ならそんなに幾人もおんなじものを見る譯がねえだあよ。ゆうべもをとゝひも見た人があるんだもん。

お小夜　ほうれ、ゆうべ見た人があるつて云ふなら、角ちやんはまだ生きてゐるだあ。……だけどよう、見たらなぜ摑めえて、つれて來てくれなかつたかよう。

母親　さう云つたつておめえ、夜中にこんな溪の底まで降りて來る者はありやしねえだあ。暗くなりやあ誰一人だつて、此の小屋の傍へなんか、おッかながつて寄りつきやあしねえからなう。

お小夜　そんならみんな何處で角ちやんを見ただあよ?

母親　みんなほれ（上手の崖の上を指す）あの往還の栗の樹の下を通る時にな、——彼處から此の小屋の近所が見えるだあよ。それになう、いつも狐が出る時は月夜にきまつてゐるだからなう。

お小夜　……ほんたうにそんな事があるかしらなう、……

母親　おゝあるともよ、おめえだつて、たびたび聞いてゐる筈だあによう、……秋になつて、毎年此の萩の花が咲く時分になるてえとな、きつと狐が此處の湯へ這入りに來るだあ。ほれ、あの月が榛木山の此方側へ出て、谷間がま晝間のやうに明るくなつて、此の小屋の奥へあかりがさし込む刻限になるとな、いつもきまつて狐が湯の中に漬かつてゐるだあ。

お小夜　誰がそんな事を云ひ出しただあ?

母親　誰がつて、昔ッから見た者は多勢居るだあ。湯がきれいだもんだから、それへ月の光が透き徹つてよう、そん中に狐が眞つ白な毛なみを立てゝ、首つたまや腋の下をせッせと洗つてゐるのが、まるで雪女のやうに物凄いつて云ふだあよ。それがあんまりきれいだからつて、つい釣り込まれて小屋ん中を覗きでもしたもなあ、それつきり氣が違つて狐つきになつちまふだあ。角のおふくろだつて、兄あだつて姉えだつて、みんなそれであゝなつただあ。

お小夜　ぢやあ角ちやんも、夜になるとその狐を見に來るだかなう?

母親　あゝさうだあよ。毎晩々々、きつと此の小屋を覗きに來るだあよ。——何でも見た人の話ぢやあな、あの栗の樹の高えところから見おろすんだから、此れつぽつちにしきや見えねえけれど、そりやあ眞つ白なきれいな狐が、體ぢゆう月に照らされて銀のやうに光つてな、すう

ッと此の小屋を出て、その橋を渡つて行くだあとよう。さうすると又狗の奴がきまつてその夜にくツ着いてゐるッて云ふだあよう。

お小夜　橋を渡つて、それからどけへ行くだかよう?

母親　大方此の渓の川上の方へ行くだあよ。川上の方に狐の洞穴があるだあよ。

（お小夜、仰いで空の月かげた見、それから川上の方をぢつと見つめる。）

（間）

母親　さあ、お小夜ぼう、いつまで此處にかうしてゐるだあ、もう好い加減にしねえかよう。

お小夜　おいらあもう少し此處にゐるだあ。——

母親　おめえ、なぜそんな馬鹿を云ふだあよ。ほれ、もう月が此方(こつち)かたへ廻つて來ただあ。

お小夜　おいらあその月を待つてゐるだあ。さうして狗ちやんを連れて歸(かへ)るだあ。おツかあは先へけへつてくんろよう。

（次第に谷あひに月がさして來る。）

母親　おめえ、たまにやあ親の云ふこともきくもんだあよ。あんた野郎にかまつてゐると、今におめえも狐つきになつちまふだあ。

お小夜　なつたつていゝつてばよう、放つて置いてくんろよう!

母親　まあ!　さう云つてもおめえは剛情な兒だなう。いいともいゝとも、云ふことを聞かねえならお巡りさんを呼んでくるから。

お小夜　どうとでも勝手にしたらいゝだあ。

母親　さあ!　お小夜、（彼女の手を取つて立ち上る）立ちなよう!……立ちなつたら!

お小夜　だつて、おツかあにやあ狗ちやんが可哀さうでねえのかよう?　そんな無慈悲な了見で居りやあ、きつと自分の娘にも祟りが來るだあ。

母親　これ、馬鹿な事を云ふもんでねえつ!　さあ!　立たねえかツて云ふによう!

お小夜　あれ、何するだあ!

（母親、無理やりにお小夜を引つ張つて丸木橋を渡つて行く。）

お小夜　ようおツかあ、後生だから放してくんろよう!

母親　いんや、なんねえ、どうしてもおらあ連れて行くだあ。

お小夜　いやだつてばよう!　ようおツかあ。……

（両人爭ひながら上手の崖の路へ消える。「ようおツかあ、いやだつてばよう!」と云ふお小夜の泣き聲が暫く聞える。）

（長き間。月が谷あひを一杯に照らして、青白い光が

温泉小屋の中にさし込む。蟲がちいちいと頻りに繁く啼き始める。しんとした静かさの中に、溪川の早瀬の音が際立つて居る。）

（川上の岩の間から角太郎の姿が現はれる。裾のちぎれた筒袖を着て、擦り切れた草履を穿いてゐる。岩の上を飛び飛びに傳はつて溪川を渉りながら、だんだん丸木橋の方へやつて來る。と、とある岩角に足を滑らしてばつたりと俯伏しに倒れる。そして倒れたまゝ、體を平べつたく地面につけて、ぢつと死んだやうに動かない。）

（やゝ長い間。蟲の音。早瀬の音。……）

（上手の崖を、お小夜がこつそりと後ろを見返りながら下りて來る。丸木橋を渡つて、恐る恐る温泉小屋の傍まで行き、中を覗いて見ようとする。が、月の光が物凄くさし込んで居るので怯氣がついたらしく、小屋の周りを一とまはり廻つて見てから、今度は下手の窓に取り縋つて覗かうとして、又暫く躊躇する。そして結局覗く氣になれないで、橋の上へ戻つて來てきよろきよろとあたりを見廻し、戀ひしさうに川上の方を眺める。と、角太郎の姿に氣が付いてぎよつとして、橋を飛び降り、その方へ近寄つて行く。）

お小夜　まあ角ちやん、お前はまあ、そんな所に寢ころんで、何してゐるだあよう？　角ちやん、……角ちやんてばよう！

（角太郎の傍に寄り添ひ、抱き起しながら。）

お小夜　まあ、着物も何もこんなに濡れてゐるだあよ。……

（お小夜、角太郎を岩角に腰かけさせ、着物の裾をしぼつてやる。角太郎はぼんやりして、我を忘れてゐるもののやうにうつろな眼つきであたりを見廻して居る。）

お小夜　角ちやん、お前まあ、此の間から三日も四日も何處へ行つてゐただあよ？　己あどんなに心配したか知れねえのに。……（ぢつと、氣味惡さうに顔を見入る）よう、角ちやんてば！　しツかりしてくんろよう！……お前、お腹が減つて歩けねえんぢやねえの？　歩けねえなら己が負ぶつて行つてやるから、さあ、一緒に内へ歸らう。……歸らうよ角ちやん。

角太郎　（お小夜の手を拂ひのけながら）いやだよ己あ、己あ内へは歸らないんだ。（云ひながら猶もキヨロキヨロする）

お小夜　なぜ？　なぜだあよ？

角太郎　己あお前のおツかあは意地が惡いから大嫌ひだあ。

お小夜　そんな事はありやしねえよ。——おツかあだつてお腹の中ぢや角ちやんの事を案じてゐるだあ。角ちやん

が又狐にでもつままれたんぢやねえかツて云つてな、先も此處へ尋ねて來ただよ。……

（溫泉小屋の內部がぼうツと一層青白く明るくなる。角太郞はいつの間にかその小屋の方へ眼を据ゑて、お小夜の言葉が全く耳に入らないかのやう。……瞳の色が次第に怪しく鋭くなる。）

お小夜　（慓然としながら）角ちやん、お前何を――何を見てゐるだあね？

角太郞　あゝ、あれ、あんなに月がさしてるぢやないか。あれを御覽、あの小屋に月がさしてゐるのを。――（云ひながら物に惹き寄せられるやうにふらふらと歩き出し、橋へ上つて小屋の方へ近づく。）

お小夜　（同じく橋の上を追つて行き、やるまいとして手を捕へる）あれを見るんぢやねえ、見ちやあいけねえよ角ちやん。――

角太郞　いいや、己あ彼處へ行くんだ、あのお湯の中にもうあの人が來てゐるんだ。

お小夜　あれ、角ちやん、お止しツたらよう！　今時分あんなところに誰も人なんか居やしねえだあ。

角太郞　いいや、居る、居る、――ほら、（橋の上から透かして見る）あすこに白いものがちらちらしてゐる。――ほら、あすこに人が居るぢやないか。（更に小屋の方へ近づく）

お小夜　（さう云はれて其の方をちらりと見、ぞつとしながら）うそだあよ、角ちやん、ゐやあしねえよ。――己あさつきから此の小屋の近所にゐただあけれど、だあれも來やあしなかつただもん。……

角太郞　だつて己にはちやんと見えてゐるんだ。――毎晩、月があの小屋のお湯の中へさす時分に、きつとあの人が來てゐるんだ。ゆうべの晚も、をとゝひの晚も、ちやうど今時分に己あ見たんだ。

お小夜　うそだあよ、そんな事がある筈はねえ。

角太郞　うそぢやあない、――うそだと思ふなら己と一緒に來て見て御覽。……（又透かして見る）ほら、もう居る、居る。ほら、あの人が着物を脫いで、裸體になつたよ。……ほら、今お湯へ漬かつたよ。眞つ白な體に月がうつつて、……よう、お小夜ちやん、あれを御覽よ。

お小夜　（强ひて見まいとしながら）角ちやん、後生だから見るんぢやねえよ。そりやあきつと狐だあもの。

角太郞　馬鹿をお云ひ。ありやあ人間だよ。己はあの人をよく知つてゐる。己は神戶にゐる時分にあの人を見た事があるんだ。

お小夜　そりやあ狐だよ。――狐に違へねえだあよ。

角太郞　誰がそんなことを云ふんだ？

お小夜　おッかあがさう云つただあ。――おッかあばかりか、みんな村の人がさう云つてるだあ。月がさす時分にあのお湯を覗くと狐が居る。さうしてな、その狐を見た者はみんな狐つきになるだから、決して見ちやあなんねえッて。

角太郎　あはゝゝ、村の奴等はみんななんにも知らないんだ。ありやあ狐ぢやあないんだよ。――お小夜ちやん、お前にだけは己あ內證で敎へてやるがな、あれはほれ、稚兒ヶ淵の崖の上のな、あの別莊に泊まつてゐる西洋人の女なんだよ。

お小夜　（悲しげに角太郎を見る）うそだあよ角ちやん、あの異人さんが今時分こんな所へ來る筈はねえ。角ちやんの氣の迷ひだあよ。

角太郎　西洋人と云ふ者はね、人にお湯へ這入るところを見られるのが嫌ひなんだよ。だから今時分、だあれも居なくなつてから此のお湯へやつて來るんだ。……

お小夜　だつて、あの別莊にはお湯が引いてあるんだもん、こんな所へわざわざ這入りに來ねえだつて。

角太郎　でもあの人は惡い病氣にかかつてるんだよ。その病氣が此處のお湯へ這らなけりや直らないもんだから、そうッと人に知れないやうにやつて來るんだよ。村の奴等あだあれも氣が付かないんだけれど、己あちやんと知つてるんだ。

お小夜　（半信半疑になる）それを角ちやんはどうして知つてゐるだあよ？

角太郎　あの人はな、己の奉公してゐた店のな、直き近所の古い大きな西洋館に住んでたんだよ。……ああ、己はよく知つてゐる、……そこの家にはまだ二三人異人の女が住んでゐてな、夜になると紅い着物や白い着物を着て、みんな綺麗にお化粧をしてゐたんだよ。……だけどあの人はそれから病氣になつちやつたんだ。そして長い間わづらつてゐたんだ。

お小夜　だつて、あの異人さんはちつとも體なんか惡かあねえよ。夕方になると、谷を越えたり、川あ渡つたり、いつもてくてくと獨りで山路を歩いてゐるだあ。女のくせによくまああんなに活潑に歩けるッてよう、みんな感心してるだあもの。

角太郎　そりやあ每晩此のお湯へ這入りに來るから、だんだん直つて來たんだよ。此の夏からずうつと此處にゐるんだもの。――體がよけりやあんなに寒くなつて來たのに、いつまで此處に居やあしないよ。もう何處の別莊にだつてだあれも居やあしないぢやないか。……

（お小夜がぢつと考へてゐる隙に角太郎はふいと橋を飛び越えて行く。）

お小夜　（あわてゝその跡を追ひ、小屋の前へ來て又手を捕へる）角ちやん、角ちやんてば！

角太郎　己ああの人に用があるんだよ。お前いやなら彼方へ行つといで！　よう、お小夜ちやん、彼方へ行つといで！（云ひながら小屋の中を覗かうとする。お小夜引き止める）なぜお前は邪魔をするんだ。

お小夜　だつて、……もし狐だつたらどうするだあ。……

角太郎　（一と目小屋の中を覗く）ローザさん、ローザさん、……僕ですよ、洋服屋の小僧の角太郎ですよ。……

お小夜　あれツ、角ちやん、止してくんろよう！（云ひながら無理やりに下手の方へ引つ張つて行く。）

角太郎　（引つ張られながら小屋の窓にしがみ着き、伸び上つて中をのぞく）あれ、居る、居る、ローザさん。……

お小夜　これ、角ちやんたら！（つい一緒にのぞかうとして、やはり恐いのでのぞけない）ほうれ、だあれも返辭をしやしねえだあ、……人なんかゐやしねえだあよ。

角太郎　ローザさん、……ローザさん、……

お小夜　さあ、早く歸らうよ角ちやん、お前氣が違つたんだあよ。

角太郎　あれ、あすこにちやんと居るぢやないか。……あれ、あれを御覽。……ローザさんがせつせと體を洗つてゐる。……ああ、お湯の中に月があんなにさしてゐるよ。湯壺がまるで水晶のやうに透き徹つて、……ローザさんの體ぢうが雪のやうに照つてゐるよ。雪ぢやあない、銀だ、銀のやうに眩しくきらきら光つてるんだ。……ああ、今髪の毛をさらさらとしごいてゐる。……あれ、あれを御覽、……ローザさんの髪の毛が、金色の髪の毛が、お湯の中で月に映つてゐるぢやないか、あんな綺麗なものが……あれでも人間の髪の毛なんだよ……

お小夜　（見ようとしては躊躇しながら）そりやあみんな角ちやんの氣の迷ひだあよ、そんなものが見える譯はねえよ、……

角太郎　あれ、もう髪の毛を解いちやつたよ、……今度は腕を洗つてゐるよ。ああ、ローザさんは腕のおできを洗つてゐる。ローザさん、ローザさん、そんなにそこをお湯へ入れても沁みはしないの？……まあ何と云ふきれいなおできだ。紅い血うみがお湯の中でつやつやとして、まるで白いびろうどの上にルビーの玉がきらきら光つてゐるやうだ。……ああ、あれ、腕ばかりぢやない、脚にも一つ、肩にも一つ、……あれはおできぢやないのかも知れない。きつとほんたうのルビーなんだ。だからあんなに光つてゐるんだ。……お小夜ちやん、あれを御覽よ、あの眞つ白な襟頸を御覽よ。あれでも人間の肌なんだよ。……

（お小夜、再び幾度かためらつた後遂に角太郎に誘惑されて恐る恐る窓に取りつき、中を覗いて見る。同時に「あッ」と云つて身の毛のよだつやうな樣子で、直ぐに首を引つ込める）

お小夜　（眞青になつてふるへながら、逃げるやうに小屋の傍を離れる）あ、あ、あれは、き、き、きつねだ。狐だあよ角ちやん！……お、おらあ、狐を見ちやつただあ。

角太郎　ああ、もうすつかり洗つちやつた。タオルで體を拭いてゐる。ローザさん、ローザさん、もう上るんですか？　上るんなら僕がお迎ひに行きますよ。……

お小夜　角ちやん、そりやあ人間ぢやあねえ、……眞つしろな狐だあよ。やつぱりおッかあが云つた通りだあ。……己あお巡さんを呼んで來るよ。

（云ひ捨てて飛ぶやうに丸木橋を渡り、上手の山路へ走り去る。）

角太郎　……もう體を拭いちまつた。あれ、あれ、今着物を着てゐる。タオルで拵へた眞つしろな着物を着てゐる。體も着物もみんな眞つしろで、何だか雪の精のやうだ。……ああ、又湯壺の縁へ行つて、しやがんぢまつた。あれ、あれ、ローザさんの姿がお湯の上へ映つてゐる。お月さまよりも青白く、ぼうッと明るく映つてゐる。……ああ分つた、ローザさんは鏡を忘れて來たんですね？　それで水鏡をしてるんですね？　ああ、髮を結つてゐる。濡れた髮の毛からぽたぽたと雫が落ちる。……やつぱり金色の雫が落ちる。……おや、もう髮を結つちまつた。タオルをしぼつて、足を拭いて、白繻子の靴を穿いてゐるな。……ローザさん、もう支度が出來たんですか。出て來るんですか。僕はお迎ひに來たんですよ。……（云ひながら小屋の戸口の方へ廻る）ああ出て來た、出て來た。ローザさん！

（小屋の中から、白人の女に化けた狐が出て來る。白いタオルの浴衣を着て、素足に白繻子の靴を穿き、石鹼の箱とスポンヂとタオルを入れた籠を提げてゐる。狐が小屋を出ると共に小屋の中に充ちてゐた青白い月明りのやうなものが、始終狐の跡を追つてその身の周りを照らして行く。）

（白人の女の姿を見ると、角太郎は思はずその美に打たれたやうな風になつて、默つて二三歩後へさがる。狐、ちらりと角太郎を見、すうつとその前を通り過ぎつつ橋を渡りかける。）

角太郎　（遠慮しながら）もし、ローザさん、ローザさん、あなたはローザさんぢやないんですか？

狐　（橋の中途で振り返り、西洋人らしい日本語で）ええ、さう、……わたしローザです、あなた誰？――誰ですか？

角太郎　僕ですよ、――あの、神戸の洋服屋の中村にゐた小僧ですよ。

狐　おおさう、あなた、テイラーの中村にゐました？

角太郎　ええ、ゐました。僕はあすこに三年ばかり奉公をしてゐました。さうして始終ローザさんのところへ洋服を持つて行つたんですよ。ローザさんはいろんな服を澤山持つておいでしたね。ほら、二階のつきあたりのローザさんの部屋へ行くと、白い色をした鏡のついた簞笥があつて、――寢臺の横にそれが二つ列べてあつて、――中に一杯服がしまつてありましたつけね。ねえローザさん、僕はちやんと覺えてゐますよ。

狐　ああ、……そしてあなたの名前、何と云ひますか？

角太郎　僕は角太郎つて云ふんですよ。

狐　おお角太郎、――わたし知つてゐます。あなた、あの時のボーイですね。

（云ひながら橋を戻つて來て角太郎の顏を見る。）

角太郎　ローザさんは僕を大そう可愛がつてくれましたつけね。角太郎さん角太郎さんて、行くたび毎に僕の頭を撫でてくれて、よく銀紙に包んであるチョコレートをくれましたつけね。

狐　さうです、さうです、わたしあなたにチョコレート上げました。あなた、大へん悧巧なボーイでした。わたし決して忘れません。（岩角に腰をかけながら）あなた、なぜそこに立つてゐますか。一緒に此處へおかけなさい。

角太郎　ええ、ありがと、ありがたうございます。（うれしさうに並んで腰かける）

狐　角太郎さん――、そしてあなた、どうして此處へ來てゐますか。

角太郎　僕ですか、僕はあの、神戸に奉公してたんだけれど、氣ちがひでもないのに氣が違つたんだつて云はれて、こんな田舍へ追ひ歸されてしまつたんです。

狐　あなたのパパやママの家、此の田舍にあるんですか？

角太郎　いいえ、僕のお父さんやお母さんはもう死んぢまつたんですよ。だから仕方がないもんだから、伯母さんの家へ歸つて來たんです。

狐　おおさう、あなた伯母さんの家にゐます？

角太郎　いいえ、もうその家も出ちまつたんです。僕はあの婆あが大嫌ひなんだもの。――意地が惡くつて、毎日毎日僕を叱つてばかりゐて。――

狐　それならあなた、今何處にゐます？

角太郎　僕の家は何處にもありません。晝間は森の中だの山の中だのに隱れてゐて、夜になると此の谷へ出て來るんです。……ローザさん、僕はね、あなたが毎晩ここのお湯へ入らつしやるのをちやんと知つてゐたんですよ。

さうしていつでもあなたのお姿をそうッと蔭で見てゐたんですよ。

狐　おお、あなた毎晩此處に來ました？　きのふの晩もをととひの晩も？

角太郎　ええ、きのふの晩もをととひの晩も、その前の晩もその前も、僕はいつでもあなたがお湯へお這入りになるのを見てゐました。僕は小ひさな聲で、ローザさんローザさんて、あなたをあんなに呼んだんだけれど、けふまで一度も返辭をしては下さらなかつたんですね。

狐　おお、さう、わたし知りませんでした。ほんたうに濟みません。角太郎さん、あなた、勘忍してくれます？

角太郎　僕はどうしてローザさんが返辭をしてくれないのかと思つて、悲しくつてなりませんでした。でももうそんな事は何でもないんです、僕は今夜はうれしいんです、かうしてローザさんと二人ッきりで話をすることが出來るんですもの。――かうしてゐると、僕は神戸にゐた時のことを想ひ出しますよ。ねえ、ローザさん、あなた覺えておいでですか？　あなたのお部屋へ僕がたびたび使ひに行つた時分のことを？

狐　ええ、覺えてゐますよ。わたしあなたにチヨコレートを上げましたよ。

角太郎　あなたのお部屋にはきれいな物が澤山飾つてありましたつけね、繪だの寫眞だのいろいろな切れだのが、……さうしてあの、綠色の幕のかかつた窓のところに鳥籠が下つてゐましたつけね。籠の中にカナリヤがゐましたつけね。

狐　ああ、……あなた、ほんたうによく覺えてゐますね。

角太郎　僕はあのカナリヤが羨ましかつたんですよ。……

狐　なぜ？　なぜですか？

角太郎　だつて、あのカナリヤは、朝でも晩でも、始終ローザさんの傍にゐられるんですもの。さうしてローザさんの優しい手から餌を喰べさして貰へるんですもの……

狐　あなた、それほど私が好きでした？

角太郎　ええ、僕はローザさんが大好きでした。あなたのお部屋へ使ひに行くのが何よりも樂しみでした。ローザさんはよくピアノを彈いて、唄をうたつておいでしたね。一度僕がお部屋へ行つたら、太つた、髯の生えた、水兵のやうな服を着た西洋人が傍にゐて、一緒に唄をうたつてましたね。ローザさんはあの時僕を叱りましたね。――「默つて此處へ這入つて來ちやあいけないよ」ッて、恐い眼をして僕を睨めて、――

狐　私が恐い眼をしました？　そんな事がありました？

角太郎　ええ、――それから後も一度ばかりありましたよ。その時は水兵のやうな人ぢやなくつて、ケリー商會の旦

那と二人で、ローザさんはお酒を飲んでおいででしたね。あの時も僕はあなたに叱られました。「今お客さまがあるんだよ、用があるなら後におしよ」ッて、さう云ッて、――僕はローザさんに叱られたのが悲しかつたもんだから、今でも忘れずにゐるんですよ。

狐　ああ、角太郎さん、勘忍して下さい、勘忍して下さい。わたしあなたにお氣の毒しました。――けれどもわたし籠の中のカナリヤと同じことでした。わたしあなたが好きでしたけれども、あの水兵やミスタ・ケリーと仲好くせればなりませんでした。さうしなければわたしも矢張り意地の悪いお婆さんに叱られました。わたし自分で、自分の體が自由になりませんでした。ね、あなた分つてゐたでせう？

角太郎　ああ、それぢやローザさんは、ほんたうは僕が好きだつたんですか？

狐　ええ、わたし一番あなたが好きでした。わたし、ほんたうは、あの水兵もミスタ・ケリーも嫌ひでした。けれど仕方がありませんから、一緒に唄をうたつたりお酒を飲んだりしてゐました。

角太郎　ローザさん、僕はあなたのハンケチを持つてゐますよ。（懐から絹の薔薇色のハンケチを出す）ほら、これを御覧なさい。いつかあなたが此れをお前に上げると云つて下すつた、あのハンケチなんですよ。

狐　ああさう、さうです、わたしあなたにそのハンカチーフ上げました。あなた今でも持つてゐますね。

角太郎　此のハンケチの隅のところに、Kと云ふ字とRと云ふ字が書いてありますね。

狐　ああさう、（ハンケチを手に取つて見る）――あなた此れが分ります？　此のRと云ふ字、ローザのことです、そして此のKと云ふ字、角太郎さんのことです。

角太郎　でも店の者にこれを見せたら、Kと云ふ字はケリーさんのことだつて云ひましたけれど、……

狐　いいえ、ちがひます、あなたのことです。わたしあなたに、此の字を縫つて上げました。わたしあなたが好きでしたから。……

角太郎　きつとさうかも知れないつて、僕はさう云つたんだけれど、そんなことがあるもんか、だからお前は氣違ひだつて、みんなが僕を馬鹿にしました。僕はみんなに笑はれたり、からかはれたりしたんです。

狐　おお、みんながあなたをからかひました？

角太郎　ええ、さうですよ、今でも僕を狐つきだつてみんなさう云つてゐるんですよ。……村の奴等はね、ローザさんが此のお湯へ來ることをだあれも知らないもんだから、夜おそくなつてからこんな所へ來る者はない、そり

やあきつと人間ぢやあない、狐だ狐だつて云ふんですよ。

狐　おほほほ、（甲高く笑ふ）私のことを狐だと云ひますか？

角太郎　ええ、さうなんです、ローザさんがあんまり色が白いもんだから、あんなきれいな人間がゐる譯はない、あれは狐だつて云ふんです。

狐　おほほほ、をかしいですね、わたし狐ではありません。わたしローザ、ね、あなたよく知つてゐますね。

角太郎　ええ、知つてますとも。――僕はあなたがあの別莊へ入らしつた時から、きつと體が惡いので此の温泉へ這入りにおいでになつたんだと、さう思つてゐたんですもの。――ねえ、ローザさん、あなた、もうすつかりお直りになつたんですか？

狐　わたし、もうすつかり直りました。此の温泉はほんたうにいい温泉です、惡い病氣みんな直ります。ほら、（手頸のあたりをまくつて見せる）わたしの腕、こんなに綺麗。ね、此の通りこんなにきれい。

角太郎　でもあの、その肘のところにおできが出來てゐましたつけね。ほんたうにきれいな、ルビーのやうな美しいおできが、……

狐　おほほほ、これ、これですか。（肘の方までまくつて見せる）これおできではありません、これほんたうのルビーです。おできのやうに見えますけれど、わたし此處へルビーを入れて、みんなを欺してやりました。――これ、よく觸つて見て下さい。これ、分ります？

角太郎　（觸つて見る。びろうどのやうに細かい毛の生えた、白い肌がきらきら光つて、そこにほんたうのルビーが腫物の膿のやうな工合に嵌まつてゐる）ああ、ルビーだ、ルビーだ、ほんたうのルビーだ。やつぱりおできぢやなかつたんだ。

狐　おほほほ。

角太郎　まあ、何てきらきらよく光るんだらう！　ローザさん、あなたの肌へ若しほんたうのおできが出來ても、きつと此のルビーのやうにきれいでせうね？

狐　おほほほ、わたし、ここにもルビーを嵌めてゐます。これ、見て下さい、（云ひながら今度は脛を出す。そこにも白びろうどのやうな毛が生えて、ルビーが光つてゐる）

角太郎　（彼女の前に跪き、白繻子の沓を穿いた足を自分の膝の上にのせ、又そのルビーに觸つて見る）ああ、ほんたうだ、此れもルビーだ。まあ、何と云ふ可愛いきれいな沓なんだらう。

狐　おほほほ、おほほほ、（立ち上る）さあ、角太郎さん、わたしもう歸ります。あなた、わたしと一緒に來ません？

あなた、泊る家がないならば、わたしあなたを連れて行きます。わたしの生れた美しい國の美しい街へ連れて行きます。

角太郎　ああ、ローザさんの生れた街はきつと美しいでせうね。どうか僕をつれて行つて下さい。ローザさんはいつその街へお歸りになるんですか？

狐　今夜、——今夜歸ります。

角太郎　今夜？——でもローザさんは佛蘭西の方ぢやないんですか？

狐　ええ、さう、わたしの國ふらんす、わたし巴里で生れました。

角太郎　巴里で？——だけど巴里へ行くのには汽車に乘つたり船に乘つたり、幾日も幾日も旅をするのぢやありませんか？

狐　いいえ、汽車にも乘りません、わたし歩いて巴里へ行きます。わたしよく道を知つてゐます。巴里は彼方、(川上の方を指さす)——彼方にあります。此の川の中を何處までも何處までも上つて行きます、そしたら直きに巴里へ着きます。角太郎さん、あなた私と一緒に行きます？(肩へ手をかけて云ふ) さ、わたしあなたをつれて行きます、そして大事にして上げますよ、ね、一緒に來ませんか？

角太郎　(うなづきながら立ち上る) ローザさん、僕はあなたに何處までも附いて行きますよ。ほんたうに僕を可愛がつて下さいな。

狐　おお、好い兒、好い兒、あなたほんたうにナイス、ボーイ。巴里のわたしの家へ行つたら、わたしあなたにいい着物きせて上げます、うまい御馳走毎日たくさん喰べさせて上げます。さ、あなた、早く行かねばなりません。

(上手の岸に生ひ茂つてゐる萩の花がざわざわと鳴つて、花の下にべつたりと身をひれ伏して隱れてゐた二匹の仔狐が現はれる。白繻子のやうにピカピカ光る美しい縫ひぐるみを着てゐる。そして、ひよいと丸木橋の上へ跳んで出て、親狐の方を見てぴよこぴよこお辭儀をする。)

仔狐の一　ローザさん、ローザさん。

仔狐の二　角太郎さん、角太郎さん。

仔狐の一、二　あなたがたをお迎ひに參りました。

狐　おお、(角太郎を顧みて) あの人たち、わたしのうちの女中です、わたしたちを迎ひに來ました。

(さう云つて、ちよつと仔狐に眼くばせする。)

仔狐の一　角太郎さん、角太郎さん、お腹が減つて歩けないならわたしが負ぶつて上げませう。

仔狐の二　川にはごろごろ石があつてころぶと危うござい

ます。二人で抱いて行つて上げませう。

（仔狐どもするすると角太郎の傍へ寄り、一匹は首を持ち、一匹は脚を持つて高く高く胴上げをしながら、親狐と共に橋の中央を駈けて來る。角太郎はいつの間にか失神したやうになつてゐる。）

狐　うまく行つたね、（狐のやうな恰好をして）こん、こん、こん。

仔狐の一、二（角太郎を上下に搖す振りながら）こん、こん、こん。

（ついで一同溪川へ跳び下り、親狐を先に立てて、角太郎を引つ擔いだまま岩の間を乘り越え乘り越え、川上の方へ見えなくなる。）

（やや長き間　上手より提灯を持つた巡査、お小夜、母親の三人が下りて來る。用心深くあたりを見廻しながら温泉小屋の方へやつて來る。）

お小夜（橋の上から小屋の方を見て）角ちやん、角ちやんたらよう、返辭いしてくんろよう！

母親　なあに、もう居やあしねえだあよ、きつと狐にさらはれてしまつただあ。

巡査（小屋を覗き、周りを一とまはり廻つて見ながら）何處へ行つたか、もう此の近所には居らんやうだね。

お小夜（川上を向いて）角ちやん、角ちやんたらよう！

何處へ行つちまつたんだあよう！

巡査（お小夜に）お前、たしかに此處で狐を見たと云ふんだね。

お小夜　ああ、己あたしかに見ただあよ。それ、その小屋の窓のところで角ちやんと己が中を覗いて見るてえとな、眞つ白な大きな狐がお湯に漬かつてゐただあよ。

巡査　ふむ。（考へる）

母親　だからおツかあの云はねえ事ぢやねえんだによう、こんなところに居てはなんねえつて、あれほどにおツかあが云つたあのによう。

お小夜（再び川上に向ひ）角ちやん、――角ちやんてばよう。――

母親　そんなに呼んだつて、もうあの野郎は歸つちやあ來ねえだあ。さあ、お小夜ぼう、もう歸らうよ、（巡査に）旦那、ほんとうにまあこんな夜更けに、濟まねえことでござえました。

巡査　どうだね、もう少し川上の方を搜して見ようかね。

母親　いいえ、もうそれには及ばねえだあ、あの野郎は私はとつくにあきらめて居ますだあ。

（下手より白人の女、輕快な散歩姿で紳士と腕を組みながら山路を降つて來る。召使ひの老婆がそのあとについて來る。お小夜等のうろうろしてゐる様子を見な

がら行過ぎようとする）

巡査　（ちよつと躊躇した後、老婆に聲をかける）　もし、もし。

（白人等の一行、橋の上で立ち止まる。）

巡査　あの、失禮ですが、あなた方はこんなに晩くどちらへおいでになりましたね。

老婆　（面をふくらせながら）　わたしはね、うちのお孃さんが此の旦那と　（紳士をさす）　夕方散歩に出たつきり、大變歸りがおそいもんだから迎ひに行つて來たんですよ。

（二人の白人、うるさい事を尋ねる奴だと云ふ顏つきで聞いてゐる。）

巡査　はあ、成る程、――そしてどの方面を散歩して居られたのかね？

老婆　あんまり月がいいもんだから此の山の上の湖水の周りを歩いてゐたつて、さう云つてゐますがね。全體何だつてそんな事を聞くんですよ。

お小夜　（岩の上に落ちてゐた絹のハンケチに心づき、それを取り上げて巡査の方へ持つて來ながら）　ああ、ここに角ちやんのハンケチが落ちてゐただあよ　角ちやんはな、神戸にゐる時分に此のハンケチをローザさんに貰つたんだつてさう云つてな、肌身放さずに持つてゐただあよ。

白人の女　（ローザと云ふ名をきくと同時にふと氣がついて、ツカツカと傍へ寄つて來て巡査の手にあるハンケチを見る）　おお、これ、これ、これ私のものです、わたし神戸で此のハンカチーフ盜まれました。（强き語調で）誰が此れを持つてました？

老婆　まあ、ローザさん、ほんたうに此のハンケチだよ。これ御覽なさい、ここにRとKと云ふ字がちやんと書いてあるぢやないか。ケリーさん、記念のハンケチが出て來ましたよ。

白人の紳士　おおさう、わたくし大へん喜びます。（同じく傍へ寄つて）　おお、これに違ひありません、これ、どうして此處にありましたか？　わたくし不思議に思ひます。

老婆　（思ひ中つたと云ふ顏つき）　ああ、きつとあの小僧が盜んだんだよ、彼奴の仕業だ。……まあ、ほんたうに薄ッ氣味の惡い、厭な小僧だッたらありやしない。（巡査に向つて）　あなた方はあの、此の頃此の近所をうろついてゐる薄馬鹿のやうな小僧がゐるのを知りませんかね？　もと神戸の洋服屋に奉公をしてゐた、――

巡査　ええ知つてゐます、あれは狐つきでね、毎晩この小屋の近所をうろついてゐたんです。

老婆　ああ、彼奴ですよ。毎晩々々、うちのお孃さんが此

處のお湯へ這入りに來るのを知つて居てね。ゆうべも此の近所をうろうろして、跡を追ひかけて來たとかつて、もうお孃さんは氣味惡がつてゐたんですよ。

巡査　それでは今夜も此のお湯へお這入りになつたんですか？

老婆　いいえ、ゆうべで懲り懲りしちまつたつて、今夜は這入りませんでしたよ。それにもう、病氣の方も大分よくなつて來ましたので、明日は神戸へ歸ると云ふのでね、此の旦那が迎ひかたがた遊びに入らしつたんですよ。

巡査　ああ、さうですか、それでよく分りました。では此のハンケチはそちらへお返し申します。

白人の女　（横柄に默つて受け取り、紳士を見ながら）レット、アス、ゴウ――（巡査に）左樣なら。

巡査　左樣なら。失禮しました。

（白人の女、再び紳士と腕を組みつつ、老婆をつれて上手の山路へ去る。三人ぼんやりして後を見送つてゐる。短き間。）

（やがて、遠くの川上の方に一點の灯かげが見え、微かに叫ぶ人聲が聞える。）

人聲　おうい、みんな此方へ來いよう！　角ちやんが死んでゐるだよう。

お小夜　え！　角ちやんが死んでゐる？

（云ひながら夢中で川の中へ飛び降り、川上の方へ走つて行く。巡査と母親つづく。）

人聲　（灯かげと共にやや近くなり、ハッきり聞える）おうい！　早く來いよう！　角ちやんが死んでゐるだよう！　稚兒が淵に死骸が浮かんでゐるだよう！

（三人の姿が川上の方へ次第に消えて行く。）

――幕――

無明と愛染（二幕）

人物

無明の太郎
その妻楓
遊女愛染
高野の上人

時

南北朝の頃

所

或る山奥の廢寺

第一幕

凄じく朽ち古びた寺の本堂の内部である。上手に腐りかかつた板戸、下手に破れた襖がある。奥の方に内陣が見えてゐるけれども本尊の佛體は毀ち去られてあとかたもなく、わづかに須彌壇と蓮臺と背光だけが殘つてゐる。須彌壇の傍に唐櫃が一箇、それに凭せかけて五六尺の厨子に這入つた不動明王が置いてある。秋の夜ふけの心持で、楓が上手の方に据わり、護摩壇を爐の代りにしてあかあかと火を燃やしながら、小鳥の肉を炙つてゐる。彼女の傍には二人前の酒肴の用意があらかた整へられてゐる。楓は哀れなみすぼらしい姿をしてゐるが上﨟の着るやうななまめかしい袿や、鏡臺や櫛笥などが下手の方に散らかしてあり、柱や壁のところどころに獸の皮だの、獵の道具だの、物の具だのが吊るしてあつたり立てかけてあつたりする。

幕があくと間もなく、表の方で板戸をほとほとと叩く音がする。楓はちよつと耳を傾け、返辭をするのをためらひながら小鳥の肉を火にかざしてゐる、再び叩く音がする。

男の聲（板戸の外にて）頼まう、……頼まう、……

（間）

男の聲（前より少し聲高に）のう、もし、お頼み申す……、お頼み申す……

（楓、小鳥を傍に置き、板戸の方へ寄りながらひそひそ聲で、）

楓　どなたさまでござります。

男の聲　わしは高野の御山へ參る旅の僧ぢやが、……

楓　（默つてその聲をききながら考へてゐる）……

男の聲　嵯峨に行きくれて難澁してゐる。憚りながら一夜の宿を頼みたうて訪れたのぢや。

楓　（疑ひ深い、迷惑らしい口調で）それにまあ、さぞお困りでござりませうが、生憎今宵は主も居らず、歸りの程も分りませぬので。……したが、高野へおいでなさるお方が、人里はなれた此のあたりへどうしてお越しなされました。

男の聲　山のおくがに住む人々は世の中の騒ぎを知らぬと見える、――山の下では在々所々に火の手が上つて、京方と吉野方と、また合戰が始まつたのぢや。それ故愚僧は道を廻つて山越しをせうと存じたのぢやが、……主どのお留守ぢやとあらば是非ないこと、せめて雨露をしのぐよすがに、此の御堂の縁先なとお借り申すことは出來まいかの。

（語の間に楓はおづおづ立ち上つて、板戸を細目に明けて見る。）

楓　さあ、それもならぬとは申されませぬが、……（いよいよ迷惑な調子）この夜寒にそのやうな縁の端では、あかつきの霜が身にしみて、手足が凍えてしまひますぞえ。

男の聲　いやいや、愚僧は霜のおく朝も雪の降る夜もいとひはいたさぬ、たゞ足腰を休ませて貰へばよいのぢや。

楓　（だんだん板戸を繰りひろげて僧の姿をしげしげと見守る）そしてお師さまは、高野の御山の、何と云ふ御寺へおこしなされます。

男の聲　わしは高野の一乘院の住職をしてをる、――此のたび一字を建立せうと思ひ立つて、ことしの夏から秋へかけて京大和路を勸化のために廻つたのぢやが、三月あまりも寺をあけたほどに、一と先づ山へ歸らうかと存ずるのぢや。

楓　ああ、一乘院の上人さま、――（獨りごとのやうに云つて、誰かに聞かれるのを憚る風で、内陣の方を返り見ながら、やや打ち解けた言葉づかひになる）仔細あつて此の家へお泊め申すことは出來ませぬが、さればと云うて麓の里へはまだ五六里もござりませう……（云ひながら又ちよつと考へて）もし、嚮の間でよろしければ、此方で火になとおあたりなされて、休んでおいでなさりませ。

男の聲　おお、さらばそちらへ參つても大事はないと申さるゝか、それは何より忝ない。……

（上人が這入つて來る。四十前後の痩せた僧形で、笈づるを負ひ錫杖を携へてゐる。楓は戸外に氣を配りつつ板戸をしめ切り、爐ばたへ上人を案内する。）

楓　ではまあ此方へおいでなさりませ、ここが一番温うご

ざります。

上人　飛んだお造作にあづかることぢやが、ほんの一時休ませて下され。

（楓はしきりに薪をくべて一層あかあかと火をおこす、その間に上人は笈づるをおろし、いぶかしさうに部屋のありさまを見廻しながら爐の傍へすわる）

楓　（恥しさうに食べ物を片よせながら）何ぞおふるまひ申し上げたうはござりますけれど、これは主の夕餉のしるなり、それに此のやうな生ぐさい物では差上げることもかなひませぬ。本意ないことながらどうぞお免し下さりませ。

上人　いやいや、そのやうな心づかひには及び申さぬ。かうしてぬくまつて居られれば此れが何より極樂ぢや。――したが、見れば珍しい住居のやうぢやが、そなたはいつから此處に居られる？

楓　いつからと云うて、もう長いことでござります。たびたびの合戰に都の家は燒き拂はれ、身の置きどころに困じ果てて知らぬ國々をさまようた揚句、此の山おくに無住の寺を尋ねあててから、今年でもはや七年の秋を過しまする。始めのほどは假りの宿りぢやと思うてゐたものの、もう此の頃では尾の上をわたる鹿の啼く音もなつかしく、峯にそよぐ風のひびきもさほどにさびしうはござりませぬ。

上人　それではそなたは、以前は都のお人ぢやと見えるの。

楓　さやうでございます、――主はもと、京の三條堀河のあたりで、さるやんごとないお方さまの司人をいたして居りました。そのお邸も兵どもに火を放たれて、殿のお行くへも分らずなつてしまひましたが、……

上人　はてさてそれはお氣の毒な話。さうして主どのは、今では何をして居らるゝ？

楓　何をせうとて此のやうな土地になりはひとてはござりませぬ。御覽の通り鳥や獸を射て來ては、それを喰べたり、販いだりして、その日を送つてゐるまででござります。

上人　成る程なう、――愚僧もこのたび世の有りさまを見て參つたが、打ちつづく戰亂に有りがたい伽藍の堂塔は毀たれ、月卿雲客の館は燒かれ、都はもはや荒れてしまうて、やがて大方は淺茅が原ぢや。嘆かはしいことながらかやうな亂離の世の中には人里放れた山家のすまゐもなかなか心のどかであらう、では主どのは、こよひも狩に出られたのぢやな？

楓　はい、……每日のやうに狩りくらしては、夜に入つてから戻つて參るのでござりますが、狩りの獲物は鳥獸ばかりではござりませぬ。あれ、あれを御覽じなさりませ、

あそこにある黄金作りの圓鞘の太刀も、金襴地の直垂も、あの鏡臺のほとりにある唐綾の袿も、みんな主が麓の里から攫て參りました。

上人　なに、何と云はるゝ？

楓　御出家さまに嘘を云うては御佛の罰が恐ろしいほどに、何をか包み隱しませう　わたくしの夫は今では無明の太郎と云うて、此のあたりに鳴りひびいた盗人でござります。夜道に出ては人の命や寶を奪ひ、宿りを求める客人があれば、大方生きては歸しませぬ。お泊め申せぬ譯と云ふのはそれゆゑでござりますが、……

上人　（別に動ずるけしきもなく）　ほほう、では此の寺は山賊の住み家でござつたか。さてさて長い旅路にはさまざまなことに出遇ふものぢや。そこにおはする不動明王も、定めし驚いておいでであらう。

楓　まだあそこには御本尊の盧遮那佛も、もろもろの菩薩の像もござりましたが、薪の代にするのぢやと云うて、主が斧で割つてしまうて、もう何一つ影をとどめては居りませぬ。御佛をさへ恐れぬ夫の手にかかつては、御出家ぢやとてきつと無事ではござりますまい。早う主の歸らぬうちにお立ちなされたがようござります。

上人　雲水の身の心やすさには、ぬすびとなりとて案ずるほどのこともあるまい。今宵はからず此のところへ參つたのも何かの縁と云ふものぢや、愚僧に思ふ仔細もあれば、その太郎どのとやらに會はせては下さらぬかな。

楓　思ふ仔細と仰つしやりますのは？

上人　かうして國々を行脚する間には、或るときは夜盗に行きあひ、或る時はもののふに脅やかされ、劍の下をくぐつたことも數知れずござつたが、これが結縁のたよりとなつて、多くの人を佛の道へ導いた例がござる。いかなる者にも菩提の心はあるのぢやほどに、愚僧の力で及ぶものなら教化して進ぜたいのぢや。あるじ殿とてよもや鬼ではござるまいが、……

楓　（さしうつむいて涙ぐみながら）　あ、ありがたうござります、夫も昔は物の道理をわきまへた男、鬼でも蛇でもござりませねど、まことの鬼が外にゐるのでござります。

上人　まことの鬼が外にゐるとは？

楓　（上人が覺えず聲高になるのを、手を振つて制する）もしお氣をつけなされて下さりませ、今その鬼があの奥の間で眠つてゐるのでござります。

上人　はて何を云はるゝ？　いかほど末法の濁世とは云へ、鬼が居るとは信ぜられぬが、……

楓　外面如菩薩内心如夜叉と法の言葉にもあるものを、鬼でなうて何でござりませう。わたくしの夫はあの鬼ゆゑ

に盗みを働き、人の命をそこなふやうになりました。鬼の色香に迷はされて惡業道へ誘ひ込まれてしまひました。……

（短き間。上人はちよつと挨拶に困つた風情で、物思ひに沈みながら墨染の袖をつまぐる。楓は眼なしばたたきつつ二つ三つ薪をくべる。爐の火が白くぶすぶすとくすぶる。）

楓　世は刈りごもと亂れようとも夫の情があるものならば、片山里の侘住居も悲しいことはござりませねど、仇し女に男を取られ盗人の手助けをさせられて、何の生きがひがござりませう。これ、これを御覽じなさりませ、かうしてこゝに二人分の夕餉をととのへては居るものの、此れも夫と彼の人とがさしむかひで食べるのでござります。わたくしはただ下樣の召し使ひも同じこと、朝た朝なの水仕事に濡れそぼつ袖の干るひまもなく、折り焚く柴の夕のけぶりにむせぶ涙の乾くをりとてはござりませぬ。……（間。すすり泣く）此のやうな憂きめに會ひますのも、前世の業の盡きない故でござりませう

上人　してその女性はいつから此處に居られるのぢや。

楓　をととしの冬の雪のふる夜でござりました、戰に追はれて此の山の中へ迷うて參り、わたくしのもとへ宿を求めに來たのでござります。妾が都を立つた折には父の三位や母御前と一緒ぢやつた、熊野へ詣うでる途すがら、思ひもかけぬ兵火に遇うて供の者どもちりぢりになり、惡い野伏や山伏に父も母も討たれてしまうた、もはや寄るべのない身ぢやほどに、暫くかくまうてくれと申しますので。……

上人　ほう、ではやんごとない殿上人の姫ぢやと見ゆるの。

楓　邸は京の白川にある、みづからの名は愛染姫と云ふのぢやと、そのやうに申しては居りますが、何であの女が姫御前でござりませう。そだちは室か神崎か、いづれは遊女のなれの果てぢやと覺えまする。たとへ姿は上﨟のやうに﨟たけて、みめかたちは美しうても、あの女の心は鬼でござります。あるじを色香に迷はせたばかりか、多くの人を此の古寺へおひき寄せて、生血をすすり寶を掠める恐ろしい鬼でござります。

上人　さてさて、安達が原の黒塚の話をきくやうぢやの。——したが、人は誰でも煩惱の奴となることがあるものぢやが、いつかは懺悔の心をおこして解脱を願ふやうになる。そなたの夫とてやがては愛着の夢からさめる機縁もござらう、末世の時代にも神佛の加護はあるのぢやほどに、……

楓　御佛の慈悲がどのやうに廣大ぢやとて、四重五逆の罪を犯し、生きながら地獄に墮ちた人々の救はれる時はご

ざりますまい。夫は自業自得ゆゑせんないこととは申しながら、あさましいのは私でござります。業の海より業の海へと浮かびただよひ、川瀬の車のめぐるやうに輪廻生死の境をめぐつて、いつになつたら無礙の光を仰ぐことが出來ますのやら、……もう此の世には望みのない身ぢやほどに、せめて來世は淨土に生れたうござりますが、女人は罪の深いものぢやと聞きましたゆゑ、その願ひさへかなはぬこととあきらめてをりまする。

上人　なるほど、女人は五障のさはりがあつて悟りの道に入りにくいとは申すものの、さはりと云ふのはつまりは妄執が多いからぢや。そなたにしても朝に夕に嫉妬の炎を胸に燃やして、生死の因を造つてゐるのが何よりも惡いのぢや。そなたは人を鬼ぢやと云うたが、佛を疑ひわが身を呪ふそなたの心こそ鬼ではないか？　鬼はおのれの中にゐるのぢや。

楓　このやうな憂いめ辛いめに遇ひましたら、わたくしとても鬼になるでござりませう。御佛の力を疑ふと云ふではござりませねど、今の身の上では貴い教を聞くをりもなく、行を修めるひまもないのでござりますものを。實を申せば、私はとうから上人さまのお名前をきいてをりました、高野の御山に一乘院の聖と云うて、有がたいお師さまがおいでになる、生あるうちに一度まみえて功德にあづかりたいものぢやと、つねづねあこがれて居りましたが、勿體ないことながら、かうしてお目にかかれますのも淺からぬえにしでござりませう。どうぞ上人さまの法力で、心の鬼を退散させて下さりませ。後世安樂のたよりを得させて下さりませ。

上人　おお、それはちかごろ奇特なことを云はる、それについて思ひおこすのは、恥しながら愚僧も昔は心の鬼にさいなまれて、煩惱の火に燒きこがれたことがござつたのぢや。そのきづなを絶ち切つて偏へに如來の力にすがり三密の行を修するまでには一方ならぬ苦しみをなめたものぢやが、今ではやうやう不退轉の志を固めて、金剛不壞の身となり申した。そなたは在家の女ゆゑ行を修めるいとまはなけれど、さる先達の言葉にも、眞言念誦を怠らずば破戒の僧尼も往生を得、造惡の男女も淨土に生るると申してある。

楓　ではわたくしのやうなものでも、濟度の御手にすがれるのでござりませうか。

上人　無論のことぢやが、それには信心が第一ぢや。さうして明けくれ光明眞言を唱へたら、たとへ此の世で卽身成佛は出來ずとも死ぬる時には諸佛諸菩薩の來迎をうけ、來世は必ず安樂國土に生れるでござらう。さればこそ高祖大師も、虛空が盡き、衆生が盡き、涅槃が盡きな

ば我が願も盡きたんと、有りがたい誓ひをお立てなされた。」

（無名の太郎がこつそりと上手の奥から這入つて來る、鬚をぼうぼうと生やした、體つきの逞ましい男で、大きな太刀を佩き、山賊のいでたちをしてゐる。隅の方のうす暗がりに仁王のやうに立ちはだかつて、凄じい眼でぢつと上人を睨めつけてゐる。二人はそれに心付かない。）

上人 ――おお、それ、ここによいものがある（頸にかけた袋の中から一册の經文を取り出す）これは秘密の陀羅尼を記した貴いお經ぢや、これをそなたに進ぜようほどに、この中にある眞言陀羅尼を、おきる時もねむる時も念々の間に誦するがよい。

楓 あ、ありがたうございます

（楓が受け取らうとするとき、太郎が後ろから聲をかける。）

太郎 その袋の中のものを、ついでに皆置いて行かれい。

（云ひながら二人の間へ歩み出る。）

上人 （靜かな調子で）おん身は誰ぢや。

太郎 無明の太郎の面を知らぬとは、迂闊な出家もあつたものぢや。その袋には大分目方がかかりさうぢやが、よもや經文ばかりではあるまい。どれその中を調べてくれう。（手をさし出す）

上人 はて、折角ぢやが此の袋に觸れてはならぬ、おん身の爲めに惡いと申すのぢや。

太郎 （落ち着いた上人の態度にいささか氣勢を挫かれた形で）なに？ 身の爲に惡いと？

上人 いかにも、たとへ盜人であらうとも、佛の功力は知つてであらう。この中には愚僧が持佛の、觀世音菩薩のお姿があるのぢや。

太郎 觀世音でも普賢でも佛とあらば惡うはないわ。してその姿は木像か、黄金か、銅か？

上人 小ひさい、美しい黄金佛ぢや。

太郎 （黄金と聞いて眼の色を變へる）ほう、成るほど出家は正直ぢや。さ、命が惜しくばそれを此方へ渡して行きやれ。

楓 （おどおどしながら）もし、太郎どの、此のお方は一乘院の上人さまぢや。粗相があつてはなりませぬぞえ。

太郎 一乘院の上人ぢやと？ （はつと驚いたやうな樣子で、しげしげと上人の顏を見守る）おう、紛れもない高野の聖ぢや。

上人 さてはおん身は、愚僧を見知つて居らるるかの。

太郎 （再び兇惡な相になつてにやにや笑ひながら）上人ぢやとて聖ぢやとて、この山おくでは差別はないわ。お

ぬしは久しう諸國を勸化してゐた筈ぢやが、定めし寄進があつたであらうの。

上人　ありがたいことには、世は亂れても信心のともがらは絕えぬと見えて、思ひの外に喜捨の寶を集め申した。

太郎　ふん、集めて來たとは何よりぢや。それを殘らず置いて行かれい。

上人　愚僧の物なら進せてもよいのぢやが、ここにある寶は悉く御佛の物ぢや。このたび新たに御寺を建立せうと思うて、長い間兵火のちまたを行きめぐり、白刃の下を搔いくぐつて、數多の善男善女から淨い志を受けて來たものを、一紙半錢もおろそかには出來ぬ道理ぢや。

太郎　出來ぬとあらば腕づくでも取つて見せうぞ（刀の柄に手をかける）

楓　（夫の腕にすがり着いて）　これ、太郎どの、何をするのぢや。そなたは聖の法力に刄向はうとおしやるのか。たとへ劍を閃めかしても、上人さまの調伏には抗ひませぬぞえ。

太郎　あははは、調伏なぞとは片腹痛いわ。此の瘦せ法師に法力があるならどれその驗をためしてくれう。

（ぎらりと太刀を引き拔いて斬つてかかる。上人はその前から密かに身を構へてゐて、太郎が太刀をかざすと同時に袂の中で印を結び、珠數をつまぐつて呪文を唱へる。と、袋の中の觀世音菩薩から俄かに一すぢの光明が輝き出で、太郎は太刀を振り上げたまま斬り付けることが出來なくなる。）

太郎（踏み込まうとしてもがきながら）　やや、どうした事ぢや。

楓　おお、勿體なや、南無觀世音菩薩、——

（光明を見て恐れおののきつつ伏し拜む。）

上人　（口のうちで非常にかすかに）　まかしつだやそわか、しつだゆけいじんばらやそわか、ならきんぢそわか、……

（太郎、二三歩あとへよろめきながら、眼がくらんだやうにどうと尻餅をついて突つ俯す。やや長き間。上人はしづかに印を解いて太郎の樣子を見る。袋の中の光明が消え失せる。）

上人　太郎どのとやら、もはや手向ひはしないであらうの。

（さう云はれても、夫婦ともまだ死んだやうにぬかづいてゐる。）

（下手の襖をあけて愛染が姿を現はす。齡は三十路を過ぎてゐるらしいが、殘んの色香のなまめかしい女である。きらびやかな袿の上に房々した翠の髮をすべらかし、閾の際に佇んで上人に辭をかける。）

愛染　上人さまお久しいことでございます。

上人（微かに愛染の顔を視つめて）おゝ、愛染どのぢやな。

楓（恐る恐る面を上げる）ではあの上人さまは愛染どのを？

上人　知つてはゐるが、遠い昔の夢のことぢや

愛染　ほんにむかしの夢のこと。妾が知つて居りましたのはさるやんごとない少將の君でござりましたが、今では貴い御僧の行者、御山の聖におなりなされた、有りがたいことでござります。（云ひながらそこにうづくまつて恭しく両手をつかへる）なう、上人さま。どうぞあの頃の罪をゆるして下さりませ。

上人　いやいや、ゆるすどころではない。そなたと云ふものがあればこそ、色即是空のことわりを悟り、佛の道に這入れたものを、そなたは法の手びきでござつた。

愛染　かたじけなうござります、（両眼に袂をあてて涙をぬぐふ）……したが、今も今とてあらたかな御修法の力を拜みましては、此の身の罪が思ひやられて、そぞろに來世が恐ろしうてなりませぬ。もし、上人さま、いまだに迷の雲が晴れいで、輪廻の業をいとなんでゐるわたくしを、どうぞ憐れんで下さりませ。法の手びきをした者に手びきをなされて下さりませ。

上人（ひどく感動した樣子で）おお、よう云はれた　よう懺悔をしてくりやれた。ここで會ふのも大方ほとけのおん導きぢや。こよひはそなたに結縁のよろこびを得させて進ぜる――いや、愚僧も共に喜びを分けたうござるわ。

愛染　ああ、勿體ない仰せでござります。わたくしのやうな穢れた女が一期の障りを除かれようとは、盲龜の浮木にめぐり遇うたも同じこと。――なう、楓どの　そこはあまり端ぢか故、上人さまを奥の間へ招じて下さりませ。さだめしお疲れでござりませうが、まだ秋の夜は長いほどに、彼方でゆるゆる聽聞させていただきまする。

楓　ほんに、さうなされてはいかがでござります。奥と云うてもむさいところではござりますが、隙間もる風も此處よりはいくらかましでござりませうほどに、……

上人　もとより愚僧は樹下石上を褥とする者。法を説くのにいづこと云うて所をえらびはいたさぬが、……はて、折角のこころざしぢや遠慮なく受けるといたさう

楓　さ、さ、どうぞこちらへお越しなされませ

（楓、上人を案内して下手の奥へ這入る。）

（太郎は惡夢からさめたやうに顔を擡げて、眼の前に落した太刀を拾ふ氣力もなく茫然としてゐたが、愛染の懺悔の途中から、ときどき疑ぐり深さうに彼女の顔いろをうかがつてゐる。）

（上人が去つてしまふと、愛染はぢろりと太郎を流しめに見て消えかかつたともしびの心を搔き立て、默つて鏡臺の前に据つて化粧を始める。短き間。太郎の眉根がだんだん險しくなる）

太郎　（恐怖に近い表情で訴へるやうに愛染を見ながら）聖の教を聽かうと云ふのに、そなたは何をしてゐるのぢや。

愛染　（化粧しながら）　はて、知れたことぢやわ。おぬしの爲めに今の仕返しをしてやるのぢや。

太郎　仕返しとは？

愛染　またあの法師を迷はせて、煩惱地獄へ墮してやるのぢや。――彼奴のむかしはよう知つてゐる。あの法師はな。惡鬼羅刹に攻められるより妾の色香が恐ろしい、妾を見ると淺ましい犬畜生の心になると云ひ居つて、高野の山へ逃げていつたのぢや。も一度彼奴を犬畜生にさせてやるのぢや。

（さう云ひながら自分の顔をうつとりと鏡にうつしなほも餘念なく化粧をつづける。太郎は一としほ恐怖の色を露はにして心配さうに彼女の樣子を眺めてゐる。）

第二幕

第一場

舞臺前面と同じ。第一幕より一二時間の後。太郎は上手に、楓は下手に、護摩壇の埋み火を圍んでゐる。上人の持つて來た笈づるはまだそのままに置いてあり、夕刻の膳が夫婦の間に運ばれてゐる。太郎はむッつりと思ひに沈み時々心配さうに奥の方を見やりながら、楓に酌をさせて膳の物を食べてゐる。

楓　（酌をしながら、夫の機嫌を取るやうな口調で）　なう、太郎どの。その鳥の肉をたべて下され。こよひは何ぞ珍らしいものを上げたいと思うて、そなたの好きな鶴を燒いて置いたのぢや。

（太郎、默つて杯を乾し、そつけない樣子で鶴をたべる。）

楓　ことしもはや鶴の出る頃、……（獨りごとのやうに云つて、ふと氣を變へる）　それはあの、うしろの山でとらへたのぢやが、よい風味でござんせうが、……

太郎　（それには答へず。奥の間の方を見ながら）　もう何時ぢや。

楓　あれから大方半時あまり過ぎた時分。子の刻でござんせう、……（云ひながら、此れも奥の間の方を見る）　迷うた人を導くのが御出家さまの勤めぢやとは云

へ、こよひは定めしくたびれておいでなさるであらうに。

太郎　……

楓　したが、上人さまの教へをお聞きなされたら、愛染どのも必ず罪を懺悔して、有りがたいお方におなりなさるぞえ。なう、そなた、さうは思はぬかや。

太郎　おのれに何が分るのぢや、上人ぢやとて昔は己と同じ男ぢや……

（楓、いぶかしさうに夫の顏をのぞき込む。）

太郎　……秋の夜長をよいことに、彼奴等二人何をいつまで語らうてゐるのぢや。

楓　（はつと、悲しさうになる）はて、そなたまあ、何をお云ひやる？　あのお師さまは生きながら佛の功德を具へておいでぢや。そのやうな烏滸なことを言ふたら、又しても罰があたらうぞえ。

太郎　無明の太郎はぬすびとぢや、出家や行者を恐れてゐては、明日の月日が過されぬわ。

楓　では、そなた、たつた今あのやうな調伏に遇ひながら、いまだに迷ひがさめぬのかや。あの觀世音の御光が、そなたの眼に入らなんだかや。

太郎　その仕返しに、あの法師めをたばかつてくれるのぢや。女の色香に攻められたら、佛も地獄へ墮ちるであらうわ。

（楓、淒じい恐怖に襲はれた顏つきで啞然としたまま、夫を見上げる。）

太郎　（にやりと笑つて、杯をつきつける）これ、酌をせい。せいと云ふのに、何してゐるのぢや。……

（楓がぼんやりしてゐるので、自分で傍の瓶子を取つてなみなみと酒を注ぐ。）

楓　上人さまを謀らうとは、ても恐ろしい人たちぢや。何の何の、あのお師さまが迷はされよう。そなたの劍を受け止めたあの法力にかけられては、愛染どのこそきつと憂き目を見せられうぞえ。

太郎　（腹立たしげに）それをおのれが知つた事かは。彼奴等二人は古い馴染ぢや、法の手びきが戀の手びきとならうも知れぬ。己は彼奴を生かしては置かぬのぢや。

（さう云ひながら杯を重ねる、短き間。）

（楓は一層悲しさうな表情になり、やがてしくしくと忍び音に泣く。）

楓　（泣きながら）……そなたに連れ添うて十年あまり、都を追はれて逃げて來てから、ただの一と日も樂しう暮らした折とてはなく……わびしい獨り寢の手枕に、山家の夜々を泣きあかしては居たなれど、……せめてこよひは聖のをしへに導かれて、つれない人の心も解けようと、そればかりを、……そればかりを念じてゐたものを、……

太郎　えい、叉しても何を泣きをる？　おのれがやうなたわけた女を、家のうちへ入れて置くさへあるに、走り使ひの用にも立たず、はした女の數にも足らぬおのれが、誰の情で生きてゐるのぢや。

楓　ほんに生きてゐたとてかひのない身の上、ひとへに御佛の慈悲にすがつて、來世をたのんでゐるばかりぢや。

……

太郎　はは、それほど來世がたのみたくば、淵川へなりと身を沈めて、早う死んで失せたがよいわ。

（楓、疊にひれ伏して泣く。長き沈默。）

（太郎は獨り酒を飲みながら、意地の惡い眼で妻の樣子を偸み視てゐる。その間、楓の泣きごゑは縷々として絕えず、だんだんやるせなげに、はげしくなる。と、突然、荒々しい足音と共に下手の襖ががらりと開いて、醉ひしれた愛染の高笑ひが響く。）

愛染の聲（襖の蔭から）　あはははは、これ、太郎どの、御山の聖が犬になりをつた、犬ぢや、犬ぢや、畜生ぢや、あはははは。

（太郎は杯を手にしたまま、覺えず楓と顏を見合せて愕然とする。）

愛染の聲　太郎どの、早う奥の間へ來て見やらぬか。あの法師奴をたばかつて、毒ある酒を盛つてやつたのぢや、あはははは。

（太郎、杯を捨てて立ち上り、下手へ驅け込む。その後から楓が追つて行かうとする。）

太郎の聲（襖の向ふから楓をどうと突き飛ばす。）　えい、おのれ、そこに居らぬか。

（そしてぴつたりと襖をしめる。）

（楓、突き飛ばされてよろめきながら部屋の中央へ戻つて來て、失心したやうに打つ俯しに倒れる。）

楓　神も佛もない時代ぢや、此の世はあさましい鬼の棲み家ぢや。……

（短き間。）

（舞臺暗くなる、そして、出來るだけ早く次ぎの場面になる。）

第二場

同じ本堂の中の奥の間。上手は襖、下手と正面は壁。襖は半ば明け放され正面の壁殆んど一杯に、古ぼけた地獄極樂の繪が懸けてあり、やや下手寄りに明りが燈つてゐる。

部屋のまん中に、法衣を剝いで小袖ばかりになつた上人が、襟をはだけて胸を露はにして打ち倒れ、口を大き、開いたまま、がくがく頭をふるはせながら、體中に

痙攣を起して悶えてゐる。その周圍に二三本の瓶子がころがり、酒が流れ、脱ぎ捨てた法衣がだらしなくつかねてある。

上人、唇よりだらだらとよだれをたらし、苦しげな呻きを發する。

愛染の聲（襖の向ふから）あれ、あれ、あのざまを見てやらぬか。あの梵論字奴が犬のやうに這ひつくばうて死ぬるぞいの、あははははは。

上人　そなた、……そなたは何でわしを殺す、……く、くるしや、たへがたや、……

愛染（髪を亂したしどけない姿で、後ろに太郎を伴うて這入つて來る）痩せ法師めが思ひ知つたか、その苦しみも束の間ぢやぞえ。

上人　南、南、南無觀世音、……た、たすけさせ給へ、……

愛染　あはははは、そなたの佛は、これ、こゝにおはするぞえ。（云ひながら其處にすわつて上人の前に首をつき出す）これ、この顏が見えぬか、觀世音菩薩を念ずるより、愛染明王を拜んでお死にやれ。

上人　あ、あ、あくき、らせつが、又しても私を苦しめる……わ、わしを、ぢ、ぢ、ぢごくへ。

（太郎、悚然とした樣子で、ぺつたり襖に寄り着いたまま、その光景を佇んで見てゐる。）

愛染　さうぢや、さうぢや、おのれは地獄へ墮ちたがよいのぢや、上人が何ぢや、聖が何ぢや、おのれが修めた難行苦行が何の役に立つたのぢや。

（いきなり上人のふところに手をねぢ込み、袋を掴み出してずらずらと打ちまける。黄金佛や錢や寶がきらきらかがやいてこぼれ落ちる。）

愛染　おお、太郎どの、あるぞえ、あるぞえ、地獄の餓鬼に此のやうな寶は要らぬ。（それらを拾ひ集めながら）此れで仕返しをしてやつたのぢや。

（太郎、依然としてぢつと立ちすくみながら、愛染の手の中にある觀音の像を視つめる。）

上人（次第に手足がしびれて行き、上吊つた瞳を開いて、幻の影を追ふやうにうろうろ虚空を見廻しながら、とぎれとぎれに譫語を口走る）あ、あ、ありがたや、……む、むらさきの雲が、……か、かりやうびんかの囀りが、……

（太郎と愛染、不思議さうに上人を眺める。）

上人（その瞳は、だんだん愛染の顏の上に眞つ直ぐに注がれ、恍惚となる）南、南無、……くわんぜおん……ぼさつ、……も、もつたいなや、……

愛染　あははは、よい往生ぢや、それ、それ菩薩は此處にぢや、このお姿がよう見えぬかや。

（上人しづかに息が絶える。）

太郎　（亡きがらの傍へ近寄つて、つくづくと見守りながら）あれほど淨土を慕うてゐたものを、むごいことをしてしまうた、……

愛染　手強い法師ぢやと思うてゐたら、ほんの一と夜の睦言で命を捨ててしまうたわいの。――これ、太郎どの。愛染明王の色香のほどが、おぬしにもよう分つたであらう。心變りをするときは、きつと此の通りにして見するぞや

（太郎、深き思ひに沈みながら、言葉なくうなだれる。）

愛染　ささ、早う此奴の亡きがらを、床下へ埋めて賜らぬか。さうしてこよひの獲物を肴に、あらためて酒を酌まうわいの。

太郎　いやいや、かりにも高野の聖の骸ぢや、あの本堂の厨子にをさめて、せめてこよひは、己が供養をして進ぜよう。

愛染　はてたわけたことを云ふ人ぢや、地獄へ墮ちて行くものに、ぬすびとの供養が何になるのぢや。

太郎　ぬすびとぢやとて、ほとけを念ずる心がなうてはかなふまい。――なう、愛染。そなたも一緒に手向けの花をそなへて賜れ……

（愛染、腑に落ちない風情で、呆れたやうに太郎を見る。その時かすかに、襖の向ふで呻きごゑがきこえ、ばたりと物の倒れる音がする。）

愛染　（きつとなつて上手を睨む）誰ぢや。そこへ來たのは何者ぢや？

（短き間。答へなし。太郎、思ひあたることがあるかのやうに、なづなづした足どりで上手へ這入る。）

太郎の聲　（力のないがつかりした調子で）楓が死んだ刄に伏して死にをつたのぢや。

愛染　大方氣でも狂うたのぢや。――死ぬのはおのれの勝手ぢやが、所もあらうにそのやうなむさい死人をどこへ捨てるのぢや。

（太郎、氣が拔けたやうに、茫然として戻つて來る。）

愛染　蟲螻蛄のやうに暗いところにちぢまつて、泣いてばかり居たなれど、生きてゐれば何かのさまたげ、……もうけふからは、此の愛染が晴れておぬしの妻になるぞえ。

太郎　折角ながら、己はけふから獨りになる。……

愛染　何？　何とお云やる？

太郎　（苦々しげに愛染を睨んで）そなたは鬼ぢや。聖を犬にさせをつた罪の深さを知らぬと云ふは、鬼の心ぢや。

愛染　あははは、妾が鬼ならおぬしは何ぢや。いつからそのやうな臆病蟲に憑かれたのぢや。

太郎　聖のをしへで、無明の太郎は眼が開いたわ。上人さ

まと亡き妻とが、わしを導いてくれたのぢや。

（云ひながら、遺骸の前にひざまづく。）

太郎　おお、何と云ふうるはしいお顔ぢや。ぬすびとを救うて下されたお方が、地獄へ墮ちよう道理はない。……きつと淨土へお生れなさる。……

（愛染、太郎の隙をうかがひながら盜んだ品物をこつそりもとの袋に入れ、ふところに隱して立ち上る。）

太郎　（しづかに愛染を呼び止める）これ、そなた、そのふところにある物を返してくりやれ。

愛染　これは妾が貰つて置くのぢや。おぬしは盜人を止めたと云ふに、何で寶に眼をくれるのぢや。

太郎　この寺ぢうにある寶はみんなそなたに進ぜようほどに、あの觀世音を返してくりやれ。――亡き上人の回向のため、妻の菩提をとむらふためにあのお姿を肌身につけて此れから御山へ參るのぢや。

愛染　ほう、よい心がけぢや。（ふところから黄金佛をとり出し、太郎の前へからりと投げつける）さ、欲しくばくれてやるほどに、早う此處を出てお行きやれ。――臆病者に用はないぞえ。あはははは。

（愛染、高笑ひしつつ足音荒く上手へ這入る。太郎は黄金佛を取り上げ恭しく眼の前に捧ぐる。）

愛染の聲　あはは、何と言ふ臆病者ぢや。あはははは。

（太郎、刀を拔いて髻を切る。愛染の笑ひ聲がまだ聞えてゐる。）

――幕――

久保田万太郎篇

プロロオグ

登場人物

要次郎　中學生
おうめ　要次郎の母
政之助　要次郎の義兄
おまち　要次郎の許嫁
金三郎　おまちの父
俊吉　家庭教師
三治　大工
豐吉　三治の父（登場せず）
小間使
番頭
小僧

場所

東京日本橋の古い商家

（一月下旬、曇つた日の午後五時より八時頃まで。）

藏の背後の一室で、一方は狹い中庭に面してゐる。障子が閉め切つてある。一方は廊下へ出られるところで襖がしまつてゐる。他の一方はまた他の室へ續いてゐる。暗い壁と暗い襖とに圍まれて、飾りと云つては何にもない。一月の下旬の午後五時頃、雪催ひに曇つたまゝに暮れかけてゐるので、室の中は悲しいやうに暗い。障子を開けると庭を隔てゝ木の蔭に彼方の室の灯が赤い、舞臺には未だ灯がついてゐない。暗い中に俊吉と要次郎が代數の稽古をしてゐる。粗末な小机が一脚、教科書が三四冊、その机の下に散亂してゐる。側に小間使が洋燈をつける爲めに燐寸をすつてゐる。やがて灯がつくと、四邊の暗さが蘇生したやうに薄明るくなる。遠くで藏の網戸を開ける重い音が折々聞えて來る外は全く靜かである。小間使は灯をつけ終るとすぐ障子口から去る。

要次郎　（鉛筆の手を急に止めて無言）

俊吉　解りませんか、$A^2+2AB+B^2$ はつまり公式に依つて $(A+B)^2$ になるでせう。

要次郎　（無言）

俊吉　解らないんですか。

要次郎　（間）えゝ。

俊吉　君はまた公式を覺えきりませんね。

要次郎　（微かに）えゝ。

俊吉　代數は公式を覺えなかつたら全く駄目ですよ。殊に

この因數分解は總て公式を持つて廻らなければならないのですから、公式をよく覺える必要があるんです。

要次郎　（間）えゝ。

俊吉　僕もね、君位な時分數學が嫌ひでしてね。能く教師に數學の解らないやうな頭腦では仕方がない、數學をやつて緻密な頭腦を作らなければ駄目だなんていはれました。何といはれても嫌だで居ましたが。試驗があるからさう／＼怠けてゐる譯にもいかず、仕方がないからこつ〳〵こつやつて、どうにかかうにか胡魔化しましたがね、併しやつてゐるうちには、時には面白くなる事があるもんでしてね。（間）まあ心配なんかしないでやつてご覽なさい。やつてゐる中には自然と解つて來ますよ。

要次郎　（無言にて教科書の頁を繰る）

俊吉　あ、そこの公式です、そこに二つ並んでゐるでせう。それをよく見てご覽なさい。

（右の襖を開けて、これより少し前から、中の樣子を窺つてゐたお梅出づ。）

お梅　毎日ありがたうご座います。

俊吉　あ。（無言で同時に挨拶する）

お梅　大分冷えますやうでご座います。

俊吉　さうでご座います。今日はまた曇つてしまひましたせゐか、餘計お寒いやうで。

お梅　さやうでご座います。この間から催して居るのでご座いますから、この分では今晩あたりは雪になるでご座いませう。

俊吉　さうでご座いますな。

（間。）

要次郎　（熱心に計算してゐる手を止めて）これで宜いんですか。

俊吉　（ノオトを取り）さうです。これで宜うございます併しこの－は＋でなくちやいけません。－と－ですから＋になる譯でせう。

要次郎　（無言のまゝ、消ゴムでノオトを丹念に消す）

俊吉　それが出來たら、遲くなりましたから今日はそれだけにして置きませう

お梅　如何なものでご座いませうか、どうも小學校に居ります時分から、算術が不得手でご座いまして、度々先生からご注意を頂きました。

俊吉　いえ、何でご座います。妙なものでして、圖畫だとか習字だとかの巧い者は必ず算術が嫌で不得手なんでご座いますな。それから算術が好で、よく出來る子は、圖畫や習字がきつと下手なんでご座います。今も要次郎さんにお話したんですが、私なんかも算術は嫌で出來ませんでして、隨分泣かされました。兎に角數をして見たら

算術の不得手な子の方が出來る子より遙かに餘計でご座いませうな。

お梅　左樣でご座いますかね。私なぞには當今の學校の事はさつぱり解りませんですから、唯そばで心配するきりで、どうにもしてやる事が出來ませんのでご座います、

（間、要次郎はこの對話の中に教科書やノオトを整理して机を隅へ片寄せる。沈むやうに日は暮れきつた心持に燈火が幽鬱な色を帶びて稍四邊が薄暗くなる。室内も室外も全く夜の中へ沈んだ。）

お梅　（要次郎に）お前、彼方にお町ちやんが來て先刻から待つてゐるよ。お稽古が濟んだら鳥渡行つてご覽。

要次郎　お町ちやんが？　何時？

お梅　先刻勝やお使に行つた歸りに一緒に來たのさ。今夜は姉さんに浚つて貰ふんだらう　もうお浚ひが近くなつたから。

要次郎　（俊吉に挨拶して右の襖を開けて出て行く。）

お梅　家内が大勢なもんでご座いますから、もうごた／＼して居りまして、夜になりますと、やつとほつと致します。

俊吉　お大抵ではご座いませんね。

お梅　だもんでご座いますから、なるたけ遊ばすまいと致すんでご座いますが、要次郎もつい〳〵見世の方へ出て小僧なんかを對手に始終ふざけて居りまして困ります。隨分そばから喧ましく申しますが思ふやうにやつて呉れません。

俊吉　まだ何しろお若いやうですから。

お梅　年から申しますと、未だ十六とは云ひ條、師走生れでご座いますから漸く十五にしかなりませんのでご座います。

俊吉　あゝ左樣でございますか。

お梅　如何でご座いませう。今度の試驗は巧く參るやうな鹽梅でご座いませうか。

俊吉　さあ、それでご座いますが、初めに要次郎さんの兄さんからもお話でご座いましたから、精々その積りで氣をつけてやつて居るんでご座いますが――。

お梅　小さい時分から、尤も至つて弱い方なんでご座いまして、まあ毎日お休みしないで學校へ參るやうになりましたのは、つい近頃の事なんでご座います。以前はもう始終學校は休み通しで、藥三昧ばかりして居つたのでご座います。それに宅はもう唯今で十三代目でご座いますが、不思議と昔から男の子はどういふものか育ちませんので、何代目に致しましても、皆女が續いで居るやうな工合なんでご座います。

俊吉　はゝあ。

お梅　男の子が生れましてもぢき亡くなつてしまひます。でご座いますから、要次郎の父――二年あと亡くなりましてすけれど、種々心配致しまして、かういふ風な事で續いては、末始終せつかく十二代も續いた店に、もしもの事でもあるとたいへんだからと申しまして、種々占者なんかに見て貰つたのでご座います。

俊吉　はゝあ。

お梅　すると、占者の申しますには、以前からご座います母屋の方角が惡くつて、それが祟つてゐるんだと申すのでご座います。それから急に騒ぎ出して、早速出入の大工を呼びまして相談したのでご座います。この大工はまだ唯今でも生きて居りますが、もう年來の出入でご座いまして、よく氣心も知れて居ります。元を申しますと、その母屋を建てましたのはその大工の曾祖父に當る人なのでご座いますから、大工もたいへん心配いたしまして、すぐその家を毀して建てかへましたが、唯今ある彼方のが左様でご座います。建て直しますとぢき今度は要次郎が生れたのでご座います。

俊吉　はゝあ、不思議でご座いますな。

お梅　左様でご座います。不思議でご座いました。併しやつぱり生れ立が弱いのでご座いますから心配いたしました。唯今までに致しますには隨分苦勞いたしました。併しまあ幸と弱いながらも育ちましたからと思つて居りますのでご座いますが、何しろそんな風で育つたのでご座いますから、他で思ふやうに勉強も出來ないのだらうと思ふのでご座います。

俊吉　さうでご座いますか。とにかく身體がお弱いといふ事は私もさう思つて居りますから、この際無理に押へつけて勉強――させるといふ事はご當人の爲めにどうかと思ふのでご座いますが……

お梅　（間）　困る事には、要次郎の兄がご存じの通り高等商業學校を卒業して居ります。あの人の家は田舍でご座いますけれど、小さな時分から――要次郎がまだ生れません時分から宅へ引取つて、宅から學校へ通はして彼れまで仕上げたのでご座いますが、あの人は昔から學校が好きでご座いまして、成績も大分宜しかつたのでご座います　それがご座いますもんですから、要次郎の出來ないのを齒痒く思ふのでご座いませう　要次郎はとても學校をやらしたつて無駄でせうから、いつそ止めさしたらといふやうな事も申すのでご座います。要次郎の身にとりましても、そんな事をいはれるのは辛いでご座いませうが、私にしましても、そばに居りまして、そんな事を聞くのは折檻でご座います。そんな出來ないものに、學校をやらすのは無駄――かも知れませんが――私どもに

は解りませんのですけれど、兎に角中學だけはやらしたいと思ふのでご座います。

俊吉　それはご尤もで。

お梅　そんな風でご座いますから、若しこんどの試驗がうまく行きませんやうですと、兄の手前第一困るのでご座いますが、――要次郎も困りますれば、私も困るのでご座います。

俊吉　（無言）

俊吉　出來ないものは皆駄目といふのなら、是は又致し方のない話なのでご座いますが、矢張要次郎と同じ學校へ行つて居ります親戚の子で、矢張要次郎と同じやうに出來の惡い子がゐるのでご座いますが、それは又不思議に何の事もなく及第して行くのでご座います。その家の方でいはせますと。學校の試驗なんかどうでもなる――などと申して居りますので、私はまあそんな事はないだらうと思ふのでご座いますが、そんな筈があらうとも思ひませんが、是れが小學校と申すなら、それはお盆や歳暮に先生の所へ上るといふ事もご座います、中學校でそんな事があらうとは――とは思ふんでご座いますが、若しもさういふ事で濟む事なら――とも思ふのでご座います。親戚の家の例があつて見ますと、ついさうも思ふのでご座います。

俊吉　いや、そんな事があらうとは思へませんが、兎に角本當の所を申しますと、餘程巧く行かないと要次郎さんの今度の試驗は危ないのでご座います。初めに島渡成績表を拜見しましたが、何しろ二學期の代數の點が殆ど零點に近いのでご座います。是れを恢復するのには餘程しつかりしてかゝらなければ六かしいのでご座います。併しまたこの學期も二月一月に、三月に這入りましても多少餘裕がご座いますから、私の出來るだけは無理にでも試驗の巧く行くやうにやつて見ませうです。

お梅　どうぞ何分宜しく願ひます。

俊吉　その中ご主人――要次郎さんの兄さんにもお目にかゝつて、一通りはご相談もいたしませうし――

お梅　有難うご座います、どうぞ何分。

俊吉　併し要次郎さんには餘り心配させないやうにして頂きたいのですが――氣落ちがしたら勉强なさるのにも障るだらうと思ひますから。

お梅　それは宜しうご座います、なんとも申す事ぢやあ御座いません。

俊吉　それでは私は是れでお暇いたします。

お梅　まあ宜しう御座いませう、時分時で御座いますから、御飯でもめし上つて。

俊吉　いえ、少しわきへ寄つて行く所も御座いますから。

お梅　でも彼方に支度をさして置きましてすから。
俊吉　ありがたう御座いますが、また。
お梅　どうぞ御遠慮なさらずに、お構ひ申すので御座いませんから、
俊吉　御遠慮申すのでは御座いません
お梅　とにかく、まあ彼方へいらしつて
（お梅と俊吉、右の襖から出て去る。間。遠くの家の外を通る拍子木の音。障子口から要次郎、後ろからお町入つて來る。）
要次郎　（室の隅に寄せて置いた机の側へ寄つて、抽斗から何か探す）
お町　あつて？
要次郎　灯を此方へ持つて來てお呉んな
お町　（洋燈を机の側へ運ぶ）あつて？
（拍子木の音漸く遠くなる。）
（右手の襖から小間使が出る。俊吉が敷いてゐた座蒲團や火鉢を片付けて茶卓の上へ乗つた茶碗を持つて出て行かうとする。）
要次郎　（小間使に）あきや、おつ母さんは。
小間使　お茶の間にいらつしやいます。
要次郎　誰がゐるの。
小間使　大工さんの家の方が來て、お話をなすつていらつしやいます。
要次郎　（抽斗から多くの繪葉書を出す）あつたよ。
お町　あつて。
要次郎　お町ちやんは梅幸の方がいゝ？　羽左衛門の方がいゝ？
お町　私どつちでもいゝわ。
要次郎　是は今やつてゐる芝居。羽左衛門の是れいゝだらう。
お町　これは梅幸ね。あなたお正月の芝居みんな見て？
要次郎　（ある悲しさを感ずるやうに）うゝむ、歌舞伎へおつ母さんと行つたきり。
お町　どうして？　兄さんと行かなかつたの。
要次郎　この頃兄さんは芝居へ行くと喧ましいんだ。
お町　どうして？　兄さんだつて芝居好きぢやありませんか。
要次郎　だけど、學校へ行つてゝ芝居なんか見ると成績に係はるからいけないんだ。
お町　さう。
要次郎　三月の試驗にいゝ成績を取らなくつちや何處へも芝居へ行かれないんだ。お町ちやんにこの羽左衛門のあげようか
お町　私どれでもいゝわ。だけど、芝居が見られなくつちや

や詰らないわね。

要次郎　（話題をかへようとするもののやうに）今度のお浚ひには何をやるの。

お町　勸進帳をやるのよ。

要次郎　勸進帳？　去年は何をやつたんだつけかね。

お町　去年はね、道成寺よ。

要次郎　あゝ、さうだつけ。あのとき歸りに雨が降つた。

お町　困つたわね。

要次郎　だけどあの晩、あの二階から大川を見てゐたらなんだか淋しくなつた。

お町　さう、どうして。

（右手の襖からお梅と政之助が這入つて來る。）

お梅　おやお前たちはこゝにゐたのかい。

要次郎　繪葉書を出しに來たんです。

政之助　（他人には皮肉と聞えるやうな和らかな調子で）もう勉強は濟んだのかい

要次郎　えゝ。

お梅　今しがたまで由良さんがゐらしつたのだよ。

政之助　あんまり遊ばない方がいゝね。この學期は短かいんだから、ぢき試驗になつてしまふからね。

お梅　今鳥渡兄さんにお話があるから、お前たちは彼方へお出で。

要次郎　はい。

お梅　お町や、姉さんがさらつてやるといつて待つてゐるよ。

お町　さうですか。

（襖口から出て行く。）

お梅　火鉢をひき寄せながら）今夜は寒いね。

政之助　さうですね。雪をまだ持つてゐるから。

お梅　呼んだのは外の事ぢやあないんだがね。大工の豐吉が長い間身體が惡くつて寢てゐるのださうだよ。

政之助　豐吉が病氣。さうですか、久しく來ないと思つたが。

お梅　今豐吉の息子が來て、何だか鳥渡私に逢ひたいといふから、何だか知らないけれど逢つて見るとその事なんだよ。隨分長い間寢てゐるのださうだけれど、どうも思はしくいかないのだとさ。

政之助　もう何しろ年が年でせうからね。何でせう、もう六十——三か四でせう。

お梅　さうだね。六十——たしか四だらう。何でもお父さんと三つだか違つてゐたんだから。普請の時たしか四十七の五十だつたと覺えてゐるけれど。

政之助　さうですかね。

お梅　それでお醫者のいふのに、家療治ぢやあ何かにつけ

て思ふやうにいかないから、病院へ這入つたらといふんだとさ。

政之助　（無言）

お梅　病院へ這入る段になると、どうしても目に見えてここに五十圓のお金が入るんださうだ。それで――勿論そのお金のありやう筈がないんだから、申兼ねる次第だけれど、それだけお借り申したいといふんだがね。どうだらうね。

政之助　つまり病院へ這入る費用が借りたいといふんでせう。

お梅　まあさうなんだがね。だけどあの男も氣の毒だからね。病院へ這入つて直るものならまあ直してやりたいと思ふんだが、とにかく曾祖父さんの時分から出入してゐる隨分古い馴染なんだからね。以前なら借りなくてもその位な事は出來たのだらうけれど、今は矢張都合が惡いやうだから。

政之助　（無言）

お梅　（間）どうだらうね。貸すといつたつてもまあ見舞に何して仕舞ふやうなもんだけれどもね。

政之助　併し、さういふ事は困るんですがね。

お梅　（驚く）困る？　なぜ。

政之助　色々な古い關係から、事の何かある度に必ず持ち込まれるといふ事は隨分迷惑で困るんです。

お梅　迷惑？　迷惑つてお前――（自ら抑へるやうに）そりやあね。是が厄介者か何かで始終迷惑をかけてゐるとか何とかいふのなら知らない事、今まで永年出入をして、隨分家の爲には盡してゐる事はお前だつてまさか知らないぢやあるまい。

政之助　そりやあ彼等が盡すのは、盡すのが義務だからぢやありませんか。

お梅　そんな事いつたつてお前――そりやあ餘りだよ。あの母屋を建て直す時の事を考へたつて隨分心配をさしたぢやあないか。代々男の子の育たなかつたこゝの家に要次郎が生れた事だつて、いつて見りやあお前――

政之助　そんな事云つちやあ際限がありません。とにかく、豐吉と云ふ男の事に就いては昔から隨分過ぎる位な待遇をして居たんですからね。私が田舍から來た當時の子供心にもよく覺えてゐます。それに貴方は知らない事で、種々面白くない噂も私は聞いてゐるんですから。

お梅　面白くない噂つて？

政之助　それは今更いつたつて初まらない事ですからいひませんが――隨分私は中へ這入つて困る位置なんですよ。

お梅　ぢやあ、とにかくお金に貸されないといふんだね。

政之助　斷りたいんです。
お梅　さうかい。これぢやあ仕樣がない。主人のお前がさういふ以上、私が何といつたつて駄目な話たんだから。だけど私からはどうも斷りにくい事だから、濟まないけれどお前から與吉の息子に斷つてお吳れでないか。
政之助　それはようご座んす。私からよく話しませう。
お梅　ぢやあ今呼ぶから（立つて襖をあける）あきや。あきや。（元の位置に戻る）
（やゝ長き間沈默。襖の彼方へ小間使が來て手をつく。）
お梅　あのね、茶の間にある棟梁に此方へ來るやうにさういつてお吳れ。
小間使　はい
（小間使は立つて行く。）
（また沈默に返る。途端幾間か隔つた遠くの室で、彈く三味線の調子を合はせる音が斷續して聞え始める。お梅はふとその音に傾けるともなく耳を傾ける。政之助は火鉢の緣を撫でゝゐる。）
（夜がだん／＼と更けて行く。）
（三治、障子口から怖れるやうな心持を持つて這入つてくる。）
（やがて遠くの三味線は「勸進帳」を彈き始める。併し全く明瞭に聞えない。）
お梅　（三治に）此方へ這入つてお吳れ。
三治　（無言で叮嚀に挨拶する）夜分に上りまして、まことに相濟みません。
政之助　もつと此方へ來たらいゝだらう。
三治　へえ、どうもたいへんに御無沙汰して居ります。親父が身體が惡いもんで御座いますから。
政之助　さうだつてね。今年は寒いから仕方がないよ。
お梅　（間）今鳥渡話をして見たんだがね。
三治　へえ。（うなづく）
政之助　話を今聞いたがね　成程氣の毒だからどうともして上げたいのだけれど、少し私の方にも都合があつてね。こゝ暫らくの間金を貸すといふやうな事は一切斷つてゐる所なんで、氣の毒だけれど――貸して上げる譯にはいかないんだがね。
三治　さやうで御座いますか。まことに御無理を願ひますやうで濟まないんで御座いますが、（間）永年ご厄介になつて居りますもんで御座いますから、それに甘えてまあ――御無理を願ふやうな次第なんでございますが、――また何かお腹立でもございますなら、
政之助　いゝえ、そんな事はありやしない　思ひ違ひされちやあ困る。とにかく少し此方にも都合があるもんだか

ら。

三治　こんな事を申し上げられた義理ぢやあないんで御座いますが。

政之助　決してそんな事はありやしないんだよ。

お梅　私もね、種々頼んで上げたんだけれど、是ばかりは私達の思ふやうにも行かないんだから、せつかく來たのにお氣の毒だけれど

（間、遠く三味線の音は折々高く聞える。）

三治　（諦めたらしく）どうもお邪魔いたしました。

政之助　（冷靜に）まあいゝぢやあないか。

三治　ありがたう御座います。病人が殘して御座いますから。

お梅　わざ／＼來たのに無駄足させて氣の毒だつたね。

三治　どう仕りまして。ぢやあお暇いたします。

お梅　病人を大切におしよ。

三治　ありがたう御座います。ぢやあ旦那様お暇いたします。

政之助　氣の毒だつたね。

（三治障子を開けて出る。お梅障子際まで立つて行く。）

お梅　何だか怪しい客だねえ。（室へ這入る）

政之助　要次郎は近頃どんな塩梅でせう。勉強して居りますか。

お梅　出良さんが來て下さるやうになつてから、當人も一生懸命なやうだよ。

政之助　さうですか。頭腦がよくないんだから人一倍やればいゝんですけれど。

お梅　（前からの出來事で憤懣の心持がきざして居る苛々した氣分）何しろまだ遊びたい盛りなんだから。

政之助　うまく及第さへして呉れゝばよござんすが。

お梅　落第して、いつそ奉公にでも出してしまつた方があの子の爲めなのかも知れない。

政之助　さうする位なら何も心配する事はありませんに

お梅　あの子がゐなけりやあ私も苦勞しずに濟むんだのに

（間、沈默に陥ると三味線の音が高い。）

お梅　私はなんだか豐吉が可哀想で仕方がない。

政之助　あなたは人を信用なさりすぎるからいけません。

お梅　あゝ、私はほんとに人を信用しすぎる。（政之助の顏を一瞥する）信用しすぎちやあ後で詰らない目を見る。

（障子口から小僧が這入つてくる。）

小僧　端書がまゐりました。（はがきを渡す）

政之助　おい。端書が濡れてゐるぢやあないか。降つて來

たのかい。

お梅　降つて來た？　雨かい雪かい。

小僧　霙のやうでご座います。（小僧は出て行く）

政之助　要次郎の學校からはがきが來ました。

お梅　（不安さうに）何だつて來たんだい。

政之助　何か要次郎の事に就て話があるから、明日來て呉れろといふんですが。

お梅　何だらうね。（憤懣といふやうな心持を忘れたやうに）

政之助　成績の事なんでせう。

お梅　成績の事。

政之助　今までの成績が悪いから、こんどの試驗に注意しろとでもいふんでせう。

（間）

お梅　（以前のやうな心持に返る）落第するならしてしまつた方がうるさくなくつていゝ。

（また暫く沈黙。三味線の音はまだ止まない。夜はだんだん更けて行く。）

——幕——

プロロオグ（續篇）

（四月の下旬。花曇のまゝに暮れた日の午後七時頃より十時頃まで。）

裏二階の一室。そこは見世からも土藏からも離れた一棟の二階である。正面には四枚の障子が閉め切つてある。其等の障子の外は緣側になつてゐて其處には更に硝子戶が閉て切つてある。硝子戶の外は朧夜である。そこからは街の中を流れる堀割を臨む事が出來る。そして堀割の彼方の街々がその曇つた朧夜を灯した燈火な二つ三つを見る事が出來る。併し勿論裡容からはその障子が開かれた時にそれらの燈火の二つ三つを見る事が出來るばかりである。

前の幕の舞臺に比べると、そこには多少の裝飾があり多少數寄な構造があるとはいへ、何何方かといへば、暗い寂しい色の襖と、暗い寂しい色の壁とに圍まれた一室である。四月上旬の日が暮れてまだ間がない午後七時頃。一方の壁に寄せて袋戶棚がある。洋燈の笠を透すやうに照らす灯影の淡さと弱さと和らかさとがこの暗い寂しい室の中にも缺く事の出來ない四月の夜——櫻の咲いてゐる四月の夜といふ或る氣分を漂はしてゐる。室の一方の襖に續いた室には障子口があるこゝろで最も多く人々が出入する。（障子の外側もまた障子口に續いてゐる。）

灯の近くにお梅が何か調べ物をしかけた後のやうに古雅な文庫を取散らした儘で坐つてゐる。文庫の中には幾通かの手紙や種々な所有品が這入つてゐる。

お梅に近く灯の蔭になつてお町が一人で細螺を彈いてゐる。この二人に離れて襖口に近い所に三治が蹲るやうに坐つてゐる。

三人とも無言である。——長く續いた談話がふと途切れた後の沈默。

三人の人々の陰影が暗い。

お梅　（間——思ひあぐんだといふやうに少しうつむけた顏を上げる）とにかくそりやあ困つたねえ。それでお醫者にいはせると何うしてももう癒らないといふのかい。

三治　（少し顏を上げるが何伏目な儘で——低い沈んだ調子で）へえ、さうでございます。いつて見りやあまあ老病見たやうなものなんだから幾ら手當したつて駄目だといふんでございます。（間）癒る見込はとてもないんでといつて何日死ぬといふ事も解らないんで——それ

こそ明日死ぬか今夜死ぬか解らないんでございます。

お梅　たしか四だつたね。

三治　さうでございます。六十四でございます。亡くなつた此方の大旦那樣より三つ程下たんでございます。

お梅　また老病が出るなんて年齢ぢやあないがね。

三治　種々苦勞をさせるもんでございますから（嘲けるやうな暗い微笑――すぐ消える）で、とても助からないものと極まつてゐるなら――同じ死ぬんならどんな汚ない家でも我が家と名のついた所で死にたいと親父がいふんでございます。

お梅　病人はもう自分でも助からないんだと思つてゐるのかい。

三治　何しろ長い事でございますから自分でも諦めて居るらしいんでございます。

お梅　――さうだらうねえ。

三治　（間――更に低い調子で）いつぞや病院へ入れます時にあんな無理なお願ひを致しまして――何か旦那樣のご機嫌を悪くしてしまつたんでございますから、今更またそんな事を厚かましく願へた義理ぢやないんでございますが――申譯がないのでございますが――

お梅　年をとつてから苦勞があるほど辛い事はないからね。私は本當に與吉が可哀想で仕方がないんだよ。いつかの病院へ這入るといつて來た時だつて、政之助はあんな風だから仕方がないと思つてゐたけれど、私は側に居てそりやあ隨分、お前の前だけれども辛かつたんだよ。愚痴になるから言はないんだが、若し彼が實子なのならあんな事はいはせる事ぢやないんだが、そこはお前も知つてゐる通りの譯なんで強い事がいへない義理だからね。――あの事は悪く思はないでおくれよ

三治　いゝえもう、こんな事をお願ひ申す方が何なんでございますから。（間）といひ條、退院させるとなると今まで溜めた入院料や薬代を拂はなければならないんでございます。

（やゝ長き間。二人の對話の間細螺を蒔き直し〳〵して彈いてゐたお町がふとまた話が途切れたのに驚いたやうに、顏を上げて灯の蔭から三治の顏を見守る。）

三治　――こんな事を申し上げるのは何でございますが、あの入院させる時工面した後の始末だつてまだ實はついて居ないんで。いつぞやの樣なお言葉がある上にそんな事を申せた義理ぢやないんでございますが、それはそれとして、もう一遍旦那樣にお願ひして頂く譯にはまゐりますまいでございませうか。恥も外分も捨てゝしまつて――かうなつてはお願ひ申す外はないんでご座います。

お梅　（三治の一言々々にそゝられた憫れみの悲しみに壊

へがたいほど惱まされる）それで今の所どの位あつたら間に合ふんだい。

三治　三十圓だけ拜借出來れば病院を出る事が出來るんでございます。

お梅　三十圓ありやあいゝのかい。

三治　あとは何うにでもこしらへる積りでございますが――。

お梅　その位な事なら政之助に言はなくつたつて私がどうでもして上げよう。

三治　（ふと顏を上げる）――御心配かけまして。

お梅　政之助にいふと、また何のかんのといつて面倒になる。その位な事なら私が何して上げようよ。

三治　濟みませんがさう願へますりやあ。――勝手でございますが、こんないゝ都合はございません。

（お梅は更に灯に向いて文庫の中から縮緬の袱紗包を取出す。三治はまたうつむいて疊の上を見てゐる。――沈默。夜がやゝ深い。）

お梅　（幾枚かの紙幣を三治の前に置く）もつと何とかして上げたいんだけれど、今の所さうもいかないから、とにかく三十圓だけ持つて行つてお呉れ。

三治　まことにどうも濟みませんで。永年御厄介になつて居りますもんで――つい――。

お梅　古くから出入してゐる人達だと思ふと、自分の事のやうにも思はれてね。（間）だけどこの事は政之助にはいはないでお呉れ。あの人はあゝいふ氣質なんだから――私が私の勝手でやつた事だから構やしないやうなもんだけれど――それでもまた妙に取られると困るからね。――取られたつて構やしないけれど、それでも――。

三治　へえ、どうも種々御心配をかけまして濟みませんでございます。ぢやあ旦那樣の方は宜しく。

お梅　丁度今夜はまだ他所へ行つて歸つて來ないから。

三治　へえ、（間）勝手でご座いますけれど、是からすぐ病院の方へ廻つて見たいと思ひますから――是でお暇いたします。

お梅　あゝさうかい。すぐ病院の方へ廻るかい。ぢやあ退院したらとにかく鳥渡私の處まで知らしてお呉れ。

三治　すぐお知らせ申します。どうも有難うございました。

（叮嚀に挨拶する）

お梅　あのね、とても助からないものなら出來るだけ病人の氣を樂にしてやつた方がいゝよ。

三治　へえ、有難うございます、どうもお邪魔いたしました。（稍沈んだ調子）

（三治裡口から出て行く。）

（お梅もお町もその出て行く後姿を見送る。）

お町（お梅の顏を窺ふやうに）誰が病氣たんですの。

お梅　そらお前知つてゐるだらう。豐吉つて年をとつた大工。

お町　えゝ、せんに家へも來ましたわ。

お梅　あれがね。長い間――お正月時分から身體が惡くつて、もうとても癒らないんだとさ。

（お梅は再び調べ物を續ける。ふとその中から一通手紙を見出してそれを讀むともなしに讀み初める。）

（二人とも無言。）

（長い間。要次郎が襖を開けて室の中へ這入つて來る。その襖の音を聞くと殆ど同時にお梅とお町がふと顏を上げる。）

（要次郎は殆ど何物にも興味を感ぜぬらしき滅入つた心持でお町の近くへ坐る。）

（無言。）

お梅（同つ要次郎の顏を見るとすぐ微かな不安が動く心持――讀みかけた手紙を持つたまゝで）兄さんはまだ歸つて來ないかい。

要次郎（煩しさうに）まだ歸つて來ません。

お梅　遲いねえ。（何か續けていはうとしてふと滅入つた要次郎の顏を見るとすぐ默つて仕舞ふ。手紙を讀み續ける）

お町（小聲で。要次郎に）しなくつて。

要次郎（無言、微かに頷いたやうにも頷かないやうにも）

お町（細螺を數へる）ちう、ちう、たこかいな。ちう。ちう。たこかいな。

（小間使が襖を開けて這入つて來る。その音を聞くと、お梅とお町は再び顏を上げる。要次郎は俯うつむいた儘である。）

小間使　あのお孃樣。お宅からお迎でございます。

お町（細螺を數へる手を止めて）私？

小間使　左樣でございます。すぐお歸りなさいますやうに、あの、小僧さんが待つてゐらつしやいます。

お町　さう、何だらう。

お梅　お師匠さんでも來たんぢやないのかい。

お町　えゝ、でも――あゝさうかも知れませんけれど。

お梅　とにかくお迎だから行つて御覽な。（小間使に）迎は待つてゐるんだらう。

小間使　はあ。

お町　ぢやあまた明日――

お梅　あゝさうかい。その方がいゝ。

お町（細螺を箱の中へ纏める）ぢやあ要ちやんまた明日來ますわ。

要次郎（無言のまゝ頷づく）

お梅 （小間使に） まだ旦那は歸つて來ないかい。

小間使 はあ、まだお歸りになりません。

お町 ぢやあ、左様なら。

お梅 ぢやあまた明日お出で。

お町 えゝ。（要次郎にも挨拶して立ち上る）

お梅 （靜かに） あゝ鳥渡々々。あのね、家へ歸つたらね。お父つさんに私が少し用があるから、後で閒を見て來てお吳れといつたとさういつてお吳れでないか。

お町 小母さんが御用があるから後で來て吳れつて。

お梅 あゝさう／＼。忘れないでさういつてお吳れよ。

（お町と小間使と襖口から出て行く。）

（沈默が暫らくこの室の中に動かない。――お梅は手紙を卷く。そして散亂つた膝の周圍を片付ける。――何物かに待たれるやうなまた待たれないやうな不安の心持。）

（要次郎はその滅入つた心持へ何か自分をせき立てる或物があるやうに感じられて堪られないのを紛らす爲めに袋戸棚から雜誌を持つて來て讀み初める。夜は深い。ふと更けそめる――と、沈むやうに更ける。）

お梅 さういつても兄さんは遲いねえ。

要次郎 （微かに） えゝ。

お梅 どうしたんだらうねえ。

次郎 （無言）

お梅 （やゝ長い間。より低い聲で） 要ちやん、お前みたやうにさう力を落さなくつたつていゝんだよ。未だ本當に駄目だと定まつてしまつたといふ譯ぢやあなし、兄さんと由良さんとが話しにいつて下すつたんだから、どう巧く話がついたかも知れないのぢやないか。よし話が巧く行かないで、やつぱり駄目だとなつてしまふやうな事になつたつて、決して力を落すことはないんだよ。駄目なら駄目でまたその時にはどうともするからね。兄さんは何といふか知らないが、さうなりやあ私だつてお前の爲めにならないやうな事はさせないからね。

要次郎 （微かに） えゝ。

お梅 そりやあね。お前と兄さんと比べれば、兄さんは田舍で育つて小さな時分から苦勞もした人、身體も普通の人より丈夫な位なんだから、勉强だつて人よりか餘計出來る譯さ。だけど、お前なんかは生れた時から身體が弱いんで藥ばかり飮んで育つたんだからね。人のやうに勉强の出來ないのは當然なのさ。それを無理に勉强して、折角少し好くなりかゝつた身體を惡くするやうな事があつて御覽。そりやあ及第はするかも知れないが――そんな事があつちやあ何にもならない話ぢやないか。さうだらう。さうぢやないか。

要次郎　（無言――母の盲目的な慈愛を厭ふもの丶様に）

お梅　誰だつてお前、失敗のないものつてあるもんぢやあないからね。兄さんにいはしたら、學校で落第するやうなものは仕様がないといふかも知れないけれど、それも人によりけりさ。一年や二年の損がお前にして何であるもんぢやあない。（間）たつた一度位のことで見込がないから學校をやめさせるなんて――兄さんはさういつたつてそんな莫迦な事はさせやしないからね。（間）さうはいつたつて、今に兄さんが歸つて來て、先生が承知して吳れたといへばこの儘ずつと一年損しずに濟むんぢやあないか。若し及第するとなつたら、その代り一つ奮發して勉强して、今度こそ兄さんに何ともいはれないやうにしてお吳れよね。さうしたら私からもよく由良さんにお話して一層骨を折つて戴くから。

要次郎　（微かに）えゝ。（ふと或る新たな悲しみに迫まられる心持。）

（襖口から小間使が這入つて來る。お梅は三度その襖の音に或る注意を促される。）

小間使　あの下槇町の旦那様がいらつしやいました。

お梅　さうかい。階下にかい。

小間使　はあ。それから旦那様がお歸りになりましてご座います。

お梅　あゝ歸つたかい。由良さんもご一緒で？

小間使　はあ、御一緒でございます。今お二階へいらつしやるやうでございます。

お梅　（意味のない少しの狼狽）こゝへかい。さうかい。ぢやあ私達は一度階下へ下りよう。要ちやん、兄さんが歸つて來たといふから少しの間階下へ行つて。――（小間使に）あきや、お前こゝを鳥渡片付けて、それから蒲團や火鉢をね。

小間使　はあ。

（お梅と要次郎正面の障子口から出て行く。）

（入違ひに襖口から政之助と俊吉が這入つて來る。小間使が四邊を片付けて蒲團を運ぶ。）

（それから小間使は二三度繁く出入する。）

（政之助も俊吉も緊張したやうな弛緩したやうな錯雜な氣分を持つてゐる。そして一日に近い時間を焦慮だとか考察だとかそれから談話だとかに費した疲勞を覺えてゐる。而も二人とも或る平靜にその身を取りなしてゐる。）

政之助　ばかにむし／＼するやうですね。（まだ坐らない中に正面の障子を開けに行く）すつかり閉めきつてしまつたんだね。（和らかな調子で獨言のやうにいひながら更に緣側の硝子を開けにかゝる。）

小間使　（火鉢を運んで來る政之助の樣子を見、すぐにその側へ行く）　あ、開けませうでご座います。

（政之助は靜かに座につく。硝子戸を繰る音——春の夜の濃い空氣が室の中へ流れ込む。何處からか三味線の低い調子でも聞えて來さうな情調。）

政之助　とんだお暇つぶしをおかけまして——お勞れでござんしたらう。

俊吉　（やゝ明るき微笑）　いえ、それほどでもございません。

政之助　併し御迷惑でしたな。濟みませんでした。

俊吉　いゝえ、どういたしまして。併し何とかかう甘く話がつきさうなもんだと思ふと何だか殘念なやうな——

政之助　せつかく御心配をかけたのに——殘念ですけれども、併しまああれだけに手を盡くして駄目なんですから、矢張諦める外にいゝ工夫はござんすまい。

俊吉　さうでございます。實際あれ以上どうともする事は出來ませんな。併しあの受持の人はとにかく、あの校長の代理といつて出て來た人は非常に話の好く解る人ですな。

政之助　さうでござんす。あゝいふ風な穏やかな同情を持つた話方をされますと全く此方の無理な要求——そりやあ落第を及第にして呉れといふんですから無理な要求には違ありませんが——全く無理な要求が出來なくなつてしまひます。

俊吉　併し——（襖の開く音を聞いてふと話を止める）

（小間使が茶を持つて這入つて來る。）

政之助　（小間使に）　大きなお内儀さんは階下かい。

小間使　はあ、あの今下槇町の旦那樣がいらつしやいましてお話ししてゐらつしやいます。

政之助　下槇町の——（微かに動く感情——すぐ常に復す）あの後で鳥渡こゝへ見えるやうにさういつてお呉れ。

（小間使はすぐ出て行く。やゝ長き間。）

政之助　今要次郎の母が參りますが、出來るだけの手段を取つたといふ事は貴方からも能くお話し下さいますやうに。

俊吉　承知いたしました。實際、もう全く哀願の餘地がなかつたに違ひございませんから。

政之助　（殊に和らかな調子）　困ることには母は妙な考を持つて居りましてね、まあいつて見れば一種の因襲になつてゐる事なんですが。（更に調子を和らかにする微笑）——金の威力といふやうな事を絶對に信じて居るんでして、——尤も親戚の中に常にさういふ手段を用ゐて、不思議に要次郎同樣なのが失敗なくやつて行くのがあるんですが。つまり要次郎にしても最後の手段にそれを用ふ

れば必ず――まあ成功するだらうと信じてゐるんです。そりやあ私だつてそれを全く信じないのではないのでござんすが、今となつてはもう遲いんで施す餘地がないぢやあござんせんか。

俊吉　いつでしたか、私にもさういふ様な事をおつしやつた事がありましたが、勿論その場合私は否定してしまつたんですが、併しさういふ手段――運動も時と場合とを考へる必要があると思ひます。今度のやうな場合ぢやあ――とても。（微笑）

（襖の音、二人とも話を止めて注意する。お梅が這入つて來る。）

お梅　（叮嚀に挨拶する）どうも種々ご心配をかけまして、有難うご座います。

俊吉　いえ、どういたしまして。

（やゝ長き間。何物かの上に何物かの暗い形が迫るやうな沈默。）

政之助　種々話をして見ましたがどうも思つたやうに行きませんでした。

お梅　あゝさう――（やゝ低く――つとめて平靜に取りなす）

俊吉　出來るだけの事はやつて見たのでございますが――

お梅　いえもう濟んだ御無理を願ひまして。

政之助　今朝あれから突つかけに學校の方へ行きまして、どんな様子だかと思つてとにかく様子を見て見ました。併しまだ公然發表になつた譯ではないのですからと思つて、要次郎の受持の先生に逢つて、まあそれとなく今度はどんな成績かと聞きますと、矢張此方の考へ通り駄目だつたといふんでござんす。前々の通りに代數が惡かつたんです。なんでも嚴しくつけたら零點だけれど、まあ特別に二十點だけつけて置いたといふんです。それにしても一學期と二學期との點を合はしてそれを割ると、矢張同じ事に惡くなつてしまひます。それでは外の學科はと聞くと、それは前々よりずつと英語でも漢文でもそれぞれにいゝ點が取れて居るさうです。是は由良さんのお蔭に違ひないのでござんすが、併し矢張前々が惡いから惡い事になつてしまつたんです。で、惡かつたものなら仕方がありませんが、助けて戴く事が出來るものなら何んな條件をつけてもいゝから助けて戴きたいがといふと、午頃に一度會議があるからそれまで待てとその先生がいひました。その會議でたしかな處が定まるんださうです。たしかに及第させるといふ事のお請合は出來ないが、とにかく相談して見ませうといふので――それからその會議のすむまで待ちました。さう、濟んだのは二時頃でござんしたかね。（俊吉に）

俊吉　さあ、さうでございましたな。

政之助　すると先生がおき出て來ました。で、お氣の毒ですが、私の手ではとてもどうする事も出來なかつたといふんです。とにかく一度校長にお逢になつてお話したらといふんで、無駄だとは思ひましたが、またさうでもないと思つてとにかく會つて見ました。所が校長は忙しいからといつて、校長の代理といふ人が會つて吳れました。非常に穏やかなもの〻解つた人で、實は二年生の斯ういふもの〻事に就てゞございますが、まことに勝手なお願ひですが、どうとかして兎に角上げてだけでも戴けないものかと突込んで頼んで見ました。するとその先生も豫め知つて居たと見えて同情して吳れましたが、併しお氣の毒ながら何うとも仕様がないといふんです。どういふ條件をつけても今更どうも仕様がないといふんです。（間）で、その人にいはせると、要次郎は非常に身體が弱いといふんです。つまり成績の惡いのは身體が惡いんで勉强が出來ないからだらうといふんです。それから私が、ではその身體が惡いといふ事で酌量して戴けますまいかといふと、身體が惡いだけに此方では餘計及第させる譯にいかない――といふんです。今無理に及第さして三年になつた所で、三年の學科は二年に比べて餘程六かしくなる。二年の學科の勉强にも堪へられないものが到底三年の學科に堪へられるもんぢやあない。一年位な損をやつた方が本人の後々のためにも都合がいゝだらうといふんです。至極尤もな話で。

お梅　（無言）

政之助　で、――まあ仕方がないからその儘で引取つて來ましたが。――殘念な話ですが、これまで押し進めて行つて駄目だつたんですから、實際もう何うしようもないんでしてね。

（やゝ長き間。）

俊吉　（意味ある冷靜）こんな結果になりましたのは、まことに申譯のない次第で――

お梅　（冷靜に）飛んでもない事。つまりみんなあれが到らないからこんな事になつたので――さういふ御心配ぢやあ恐入ります。

政之助　由良さんのお骨折はこの三學期の成績で立派に見えて居るんですから、ただもつと早く氣がついて御面倒をお願ひ申せばよかつたんでした。

俊吉　うち明けたお話が、漢文だとか英語だとかいふやうな種類のものはどうとも一時ごまかしが利くんでございますが、代數や算術になると、本當に解つてしまつて居りませんと全く駄目なんでございます。今になつてこん

な事を申すのは何んだか言譯のやうに當りますが、一月の末にすでに鳥渡お話した通り、あの時分から實は心配して居つたんでございます。

政之助　（やゝ弛緩した心持で）とにかく實際きはどい藝當だつたんですから。併し死ぬときまつた病人でも手當をしなけりやあ愚痴も出ますが、出來るだけの手當もし何もした上で死ぬ分には是は仕方がないとする外はないので、とにかく出來るだけの事はやつたんですから、もう何ともいふ席はないんです。それをせめてもの諦めとする外はございますまい。

お梅　（無言――政之助のいふ或る詞にふと顏を上げて政之助の顏を暫く見る）

俊吉　（間）それで、御當人にはどういふ風にしてお話したものでせう。

政之助　さうでございますね。私達から直接にいつては何でせうから、是はとにかくお母さんから話した方が當人の得心も行くでせう。（お梅に）その方がいいでせうね。で、それから少し日が經つてから由良さんから改めて力をつけるやうにお話して戴いた方がいゝでせう。要次郎は階下に居るんですか。

お梅　あゝ、階下にゐます。

俊吉　では、私は今夜わざと要次郎さんにお目にかゝりませんから。

政之助　はあ、さういふ事にどうぞ願ひます。（お梅に）今日は留守に誰も來ませんでしたらうか。

お梅　別に何誰も見えないやうだつたが――あゝ小舟町の守田さんから三時頃電話だつたやうだよ。何か用があるらしいやうな様子だつたが。

政之助　あゝさうですか。今かけて見ませう。それから下槇町の小父さんが見えてゐるやうですね。

お梅　あゝ鳥渡用があつて。

俊吉　（時計を忙しく見る）では、お暇いたしますから。

お梅　まあお宜しいぢやご座いませんか。

俊吉　有難うございます。またいづれ。

政之助　とんだ御迷惑をかけて相濟みませんでした。

俊吉　お役にも立ちませんで。

政之助　お蔭で、話をするにも、貴方がゐらつしやるのでたいへんに氣が強うございました。

俊吉　では要次郎さんにはどうぞ宜しく。

お梅　かしこまりました。よく言ひ聞かせますでご座います。ではどうぞまた。

俊吉　はあ、また其中上ります。

（俊吉正面の障子口から出る。）

政之助　また歸りましたね。

（俊吉の後から政之助も出て行く。お梅は障子口まで見送る。そしてやがて元の座へ歸る。）

（客の去つた後に蒲團や火鉢や茶道具などが亂雜に四邊に散亂つてゐる。――その荒んだやうな不滿足なやうな氣分。）

（やゝ長い間沈默。花の香を帶びたやうな薄甘い風が吹き込んで、たしかに何處かで三味線を彈いてゐるやうな情調――夜が更ける。）

（襖を開けて金三郎が靜かに這入つて來る。）

お梅　（ふと顏を上げる。無言）

金三郎　（强ひて裝へる沈着な擧措）　やつぱり駄目だつたんですか。

お梅　（さうと意識はしないが堪へられぬ程にきざしてゐる忿懣の氣分で）　あゝ、駄目だつたんださ。

金三郎　話の半分頃から聞いたんですが、併しどうにかならなかつたもんですかね。

お梅　どうにもからにも、お前、餘り考へなしのやりかたぢやあないか。まともに學校へ行つて先生に逢つて話せる話だか話でないかまあ考へて御覽。學校へ行つてさ、ねえ、斯ういふものは落第ださうですが及第にして戴けませんかで行く話か行かない話か――つもりにしても御覽。あの人だつて高等商業までやらして貰つて、學校の事はよく知りぬいてゐるほど知つてゐる癖に――。

金三郎　政さんにも似合はない仕打でさあね。（暗い微笑）

お梅　まして校長さんにまで逢つたつていふぢやあないか。掛合事でもするやうにお前――藪を突いて蛇を出すやうな事をして話が纏るもんぢやあない。出來るだけの事をしたなんていつたつて、決して出來るだけの事なんかしてゐやしない。死ぬときまつた病人でも手當をしなければ愚痴も出るが、出來るだけの手當もし、何もした上で死ぬ分には仕方がないとする外はないなんて――まあ何といふ言草だらう。私達が何かいふと、私達のいふ事はみんな間違つてゐるやうに何んでも貶してしまふんだからね。それに政之助は要次郎が憎くつて憎くつて仕樣がないと見えて、何かにつけて惡いやうに惡いやうにとしてゐる。それが私にはよく解るのさ。やれ要次郎に學校は無駄だから止めさした方がいゝだらうの、餘り甘やかし過ぎるのつて目の仇にして叱るぢやあないか。落第でもすりやあ都合がいゝ位で、そんな莫迦な表向きな事をして學校へなんか行つたんだ。それに違ひない。

金三郎　まさかそんな事もないでせうが。

お梅　（隱しきれぬ昂奮の調子）　いゝえ、あるよ。（やゝ低い聲で）　それお前、築地の家の何を御覽な。要次郎よりも出來なくつて、何一つ解らなくつたつて、ちやんち

やんと一度も落第しずにゐるぢやあないか。ありやどうだい。それだけの事をする證據ぢやないか。やり方に依りやあどうにでもなるもんだよ。する事もしないで、お前都合のいゝ事を頼むなんて隨分無理な蟲のいゝ話ぢやないか。政之助だつてその事はよく知つてゐるんだよ。弟の爲めにするのが――弟の爲めに使ふお金がそれほど惜しいものかしら。

金三郎　――どうも困つたもんで。

お梅　義理ある弟なら――義理があれば義理があるだけ、それだけの事をしなくちやならない筈ぢやあないか。義理があると思へばこそ私なんかは隨分政之助には遠慮してゐる。だけどそれがあの人には解らないんだ。私に遠慮があつたつてあの人には微塵も遠慮がありやしない。それやあ勝手なんだからねえ。自分がかうと思つた事は他人なんか構やしない。理が非でも押通すんだから。

金三郎　(やゝ低い聲で)　さういふ處はたしかにありますね。(間――ふと思ひついて)　さつきお町が歸つて來て、熈吉の病氣がどうだとかいつて居ましたが。その後どんな鹽梅なんです。

お梅　矢張駄目なんださうだよ。その事で今夜三治がまた來たんだが、到底も癒らないとお醫者にも見離されてしまつたんださうだよ。

金三郎　さうですかね。それでまだ病院に居る事は居るんですか。

お梅　それなんだがね。病人ももう今度は駄目だといふ事を自分でも知つてゐて、同じ死ぬのなら病院なんかで死にたくない、まあ自分の家で死にたいといふんださうだがね。とにかく今病院を出るのには――まあお金が入るといふのさ。で、もう一遍――以前にはあゝやつて貸して戴けなかつたけれど、もう一遍お願して見て呉れないかといふのさ。政之助に話して呉れといつたつて、前にもあゝきつぱり斷つたんだもの、今更なんといつたつて貸しつこありやしないぢやないか。それから、とにかく政之助に内密で私の手許から貸してやつたけれど。私はどういふもんだか、あゝいふ永年家へ出入してゐるやうな古い馴染のものゝ事になると、どうも他人事のやうに思へなくなつてね。

金三郎　そりやあさうですよ。大工でも左官でも、親の代からの馴染だと思ふと、ちつとやそつとの落度があつたつて、まあ大眼に見ても濟ましたいのが人情でね。だから死んだり來なくなつたりすると、何だかかう世の中が變つて行くやうに思はれて妙にこれが心細いもんです。

お梅　それを政之助は、そんな事は何んとも思はないんだ

からね。尤も田舎で育つて中途からこゝの家の者になつたんだからかも知れないけれど、それやあ冷淡なもんだよ。なんかといふと古い關係から色んな事を持ち込まれるので迷惑だといふんだからね。本當にすりやあ嘉吉なんかは隨分家の事に就ては心配した男なんだから、五十や百のお金位出してやつたつて好い筈なんだ。せめて初めに來たとき心持良く五十圓貸してやつたら、向ふも喜ぶだらうし、政之助だつていゝ男になれたんだのに。向ふぢやあ借りられなかつたばつかりにどんな辛い工面をしたか知れやしない。

金三郎　死んだ小父さんとは全然肌が違ひますね。(間)　併しどうも、此方も古い關係から色んな事を持ち込む方なんだから。(明るいそして暗い微笑)　餘り強い威張つた事もいへませんがね。

お梅　だつてお前には眞逆何ともいやしまいがね。(間)　何でもいゝから、早く要次郎が一人前になつて、お町と一緒になつて呉れなくつちや安心は出來ない。

金三郎　(ふと何事か危惧せらるゝやうな氣分)　えゝ、早くさうならなくつちやあね。

(襖開く。お梅も金三郎も顔を上げる。政之助が這入つて來る。)

政之助　(金三郎の居るのを意外と感じた一種の惡感――併し色には現はさない。和らかな調子)　おや、おいでなさい。

金三郎　(何事か弱點を摘發されるのを怖るゝやうな不安の心持)　暫らく御無沙汰してしまつて。

政之助　いゝえ、私の方こそ――(間)　いゝ陽氣になりましたな。

金三郎　今年は花はもう遲いさうですね。(間――氣がついたやうに)　あゝ、毎日お町が御厄介です。

政之助　いゝえ。ちつともお構ひ申さないんでね。(煙草入を出しかける)

金三郎　(やゝ長き間)　今鳥渡要次郎の事を聞いたけれど――。

政之助　あゝ、さうですか。種々ご心配かけましたが、どうも――やつぱり一年無駄をやりました。仕方がないもんで。(微笑)

金三郎　(無言)

政之助　(お梅に)　もう當人に話して下さいましたか。

お梅　いゝえ。まだ話さない。(わざと強い――弱い調子で)

(障子口から番頭が這入つて來る。)

番頭　旦那樣。

政之助　(何かいひかけようとして振向き)　あゝ。

番頭　守田さんからお電話でご座います。
政之助　またかゝつて來たのかい。
番頭　へえ、唯今申し上げた事でご座いますが、早速先方へ問合せました所、とにかく永年のお取引だから、お取引だけは續けてやつて戴きたいといふんださうでございます。
政之助　そんな勝手な事をいはれちやあ困るよ。勘定も寄越さない、取引も止めないぢやあ立つ瀨がないからね。もう一度私が出よう。（金三郎に）色んな無理ばかりいつて來て困ります。
金三郎　景氣が悪いからね。
政之助　ぢやあ鳥渡失禮します。

（政之助番頭と一緒に出て行く。お梅眼を上げてその出て行く後姿を注意する。ふと二人とも無言――暗い灯の四圍は漸く憂鬱の色を帯びる。）
（襖が開く、金三郎は顏を上げる。お梅は今度はもうそれに注意しない。）
（要次郎が這入つてくる。まだ何事も知らない、以前の滅入つた心持のまゝ。――襖の近くに坐る。）
（金三郎はふと堪へられないやうに顏を背ける。）
（お梅は靜かに顏を上げる。が、要次郎を見ると直ぐにまたうつむく。）
（要次郎は二人の様子から一種の不安を感ずる心持――前にこの室から持つて出た雜誌を靜かに――淋しく繰り擴げる。）
（三人共無言。……沈默が再びこの室の中に動かない。）

――幕――

（明治四十四年五月八日）

暮れがた

登場人物

おりゑ
おせん
おみよ
嘉介
庄太郎
善次郎
源吉
喜代藏
末吉
半造
義太夫の流し、買物に來る娘、使の男、下女等。

賑やかな祭の囃子が遠くゆるやかに聞える。――その遠いゆるやかな囃子の調子が更にだんだん遠くゆるやかになつて續く。音もなくしづかに幕明く。

舞臺は三味線屋の見世の模樣。下手は土間。上手奧へ斜めに往來に面した入口がついてゐる。そこには祭で見世が休みなので半分格子戸が這入つてゐる。「御琴三絃師」と書いた白い撥形の看板が軒にさがつてゐるのがその格子の陰から見える。

見世の一部は仕切がしてあつて細工場になつてゐる。琴や三味線を並べた戸棚。絃や駒を入れた抽斗。奧への通ひ路には細かい大阪格子がしまつてゐる。壁はすべて鼠色。

五月十八日。三社祭の二日目の午後五時頃――空は今曇りかけて來たので家の中もどこか薄暗い。併し日が暮れるにはまだ間がある。細工場の後ろの壁に懸かつた時計が其薄暗い中に灰白く光つてゐる。時計の上には神棚がつつてある。

店の隅には金屏風が立ててあり、赤い毛氈が敷いてある。土間には脱ぎ捨てられた下駄が五六足。入口の格子戸の内側には赤く塗つた萬燈が一つ立てかけてある。見世全體の樣子が片付いてはゐるけれど、どこか纒りのつかない、調子が緩んでゐるやうな心持を見せてゐる。

見世の上り口には源吉と喜代藏とが將棋をさしてゐる。その周圍には末吉や半造や善次郎等が寄り集まつてその勝負を見てゐる。（末吉と半造の二人は神輿を

擔いで來たあとで、卸立の袢纏に晒を襷にしてゐる。二人とも足袋跣足なので上り口に腰をかけて見てゐる。）この五人に少し離れておせんがおみよに膝枕をさせながら縮草紙を切拔いてゐる。——煙草盆や茶道具が順序なくちらかつてゐる。

囃子の音が斷えずゆるやかに聞える。——折々遠くで神輿の渡御を報らせる太鼓の重い鈍い音が間を置いて聞える。人々はすべて無言——誰も皆賑やかな花やかな心持に疲れてしまつて、何かもの足りないやうな心持に蔽はれてゐる。やや長き間。將棋の勝負がついて、ふと賑やかな笑聲が起る。おせんはふと後ろを振返つて見てほほゑむ。笑聲が全く消えてしまはないうちに、奥からおりゑが嘉介を送つて出て來る。人々はふとそれに注意する。

嘉介　（五十五六。小商人風の構はぬ身形、少し醉つてゐる。呟くやうに）どうも烏渡上りまして、すつかり御馳走になつてしまつて。

おりゑ　（四十二三。やや粋な身形）いいえ、いつも何にもお構ひ申しません。生憎お相手が居りませんで——

嘉介　どういたして。（無意味な笑）——お歸りになりましたらどうぞ宜しく。（土間へ下りようとする。近くに居た末吉が急いで下駄を直す）やあ——こりやあどうも恐れ入ります。有難うございます。（おみよを見て）みいちやんはいつも音無でようござんすね。

おりゑ　いいえもうやんちやんで爲方がございません。何だか今日は、齒が痛いとか何とかいつて愚圖つて居ります。

嘉介　おやおや、そりやあ、いけませんね。お子さんは齒が痛いのが一等いけません。どうもやつぱり未だ、本當に時候が定まりませんから——。

おりゑ　さうでございますよ。何だか變に蒸々致しますから。——（誰にといふ事なく）なんだか嫌に暗くなつて來たんだね。

末吉　（二十三四。職人の一人。——側から）ええ何だか曇つて來ました。

嘉介　（外の方を見るやうにして）さうですな。何だか可笑しな模様になつて來ました。

おりゑ　もうちつとだから降らせたくないもんでございます。——何なら御用心に傘をお持ちになつたら。

嘉介　いいえどういたして。それには及びません。——いえ是ならどうにか今夜位は持つかも知れません。だけど三社様はきつと一日は降らなきやあ承知しないんだから困ります。いつでしたかな。二日ともまるつきり潰れてしまつて、十九日に神輿が廻つた事がありましたが。

末吉　ありやあ一昨年――一昨々年でした。
嘉介　一昨々年――さうか、もうさうなりますかね。早いもんですな。(無意味な笑)だけどお祭つて奴はいつになつても悪くないもんですが、併しどうも年々に、何だかかうさびれて來るぢやあございませんか。
おりゑ　さうでございますね。世の中がだんだん進んで來ると、人間がみんな怜悧になつて、莫迦な事はしなくなると見えます。この四五年といふものは山車はおろかお揃ひだつてまんぞくに出來や致しません。三芳屋さんがいらつした時分のやうな事はもうとても見られないでございませう。
嘉介　(ふと聲高な笑)あの時分は揃つて居りましたからな、呑氣な連中が。私、佐野屋、柏屋、こちらの大將――(ふと思ひ出したやうに)あゝさういへば柏屋はとうとう見世を締めてしまつたつていふぢやあござんせんか。
おりゑ　(小聲で)さうなんでございます。とうとういけないで――。
嘉介　だけどもねえ。どうして彼の家がさうなりましたらう。――氣の毒な。
おりゑ　庄ちやんが氣の毒でございましてね。――それ、あの總領の息子さん。そこにはいろいろな顚末もあるんでございますけれど。

嘉介　(頷く)さうでせうなあ。併しのんきな連中はやつぱりどうも――いけませんな。(無意味な笑)こりやあ、またお喋舌をしてしまひました。ぢやあお暇いたします。どうも鳥渡上りまして御馳走樣になりました。
おりゑ　本當にお關ひ申しませんで。
嘉介　では、また近いうちに伺ひますが、先刻お話しいたした事をどうぞお話しなすつて置いて。
おりゑ　かしこまりました。歸りましたらさう申して置きます。
嘉介　どうぞ何分一つ。――ぢやあ御免下さい。どうぞ宜しく。(居合す人々に)皆さん、ぢやあ御免下さい。(二三度挨拶をして出て行く。末吉は上り口を離れて格子の所まで立つて見送る。)
善次郎　(三十八九。職人の一人。――ふと口を出す)いつも元氣な人ですね。
おりゑ　氣樂な人さね。あれでも三芳屋つていへば隨分鳴らしたもんだけれど。とうとうあんなになつてしまつて。
善次郎　今は何をしてゐるんです。
おりゑ　今かい。今は何か才取見たやうな事をしてゐるんだらう――(おせんに)おせんさん濟みませんね。折角遊びに來てもおみよがくつついてしまつて。
おせん　(二十一二。襟のかかつた袷を著た身形)いいえ。

（おみよの顔を覗くやうにして）今姉樣に著物を著せるんですね。

おりゑ　（おみよの側に坐つて）まだ齒が痛いかい。

おみよ　（六つ。友禪の著物を著た身形）痛いの。

おせん　まだ痛うござんすか。もうぢき癒りますよ。音無しくしてゐるとね。

おりゑ　ぢつとしてゐると、ぢき收まるからね。

（樽神輿が近くを通る囃聲。――神輿の渡御を報らせる太鼓の音がだんだん近くなつて來る。――強い音が間を置いて響いて來る。）

半造　（二十五六。職人の一人。――末吉に聲をかける）もう納まるんだせ。

末吉　（嘉介を送り出したまま格子の所に立つて外を見てゐる）あああもう納まる。

おりゑ　あれは何處の神輿だい。

末吉　四の宮でさあ。――田町の。

おりゑ　ぢやあ一番荒いんだね。

半造　さうです。あの擬寶珠なんです。去年はあれで人死があつたんです。

おりゑ　嫌だね、危ない。神輿を擔いで怪我をしちやあ隨分ひきあはない話ぢやあないか。

末吉　お内儀さんさういつたつていけませんや。怪我をするのは自分勝手にするんでさあ。神輿が惡いんぢやありませんや。

半造　どうだい、もう一遍揉んで來ようか。

末吉　行かう。

半造　宮出しをして納めなくつちやあ心持が惡いやな。（その儘二人一緒に出て行く。善次郎は見てゐた將棋から再び眼を離して二人の出て行くのを見てゐる）

おりゑ　爲樣がない人達だね。賴みもしないのに重い目をして騷いでさ。二日も三日も肩が痛いの腰が痛いのつて爲事を休むんだから始末にいけない。

善次郎　（輕き笑。――一旦近よつた太鼓の音が今度はだんだん遠くなつて行く。――何鈍い重い音で響く）祭々と騷いで居ても、なつて見ればすぐもう仕舞だ。（獨語のやうに）

おりゑ　何んでも待つてゐるうちが花さ。――だけど氣になるね。嫌に暗いぢやあないか。まだそんな時間ぢやあないんだらう。

善次郎　ええ。（後ろの時計を振向く）まだ五時――二十分でさあ。暗くなるのにはまだ一時間、間がありますよ。すつかり雲が廻つてしまつたんでせう。

おりゑ　嫌に陰氣臭い日だね。降るんならいつそ降つてしまつた方がいいかも知れない。（ふとおみよがしくしく

泣いてゐるのに氣がつく）おや、どうしたの。
おせん（おみよを抱き上げる）痛いの、ええ、痛いんですか。
おりゑ　痛いかい、ええ。――爲樣がないね。どうしても夕方は鬱陶しくつて、くさくさするからね。
善次郎　少し表へ出て風にでも吹かれたらいいでせう。
おりゑ　さうだね、風に當つたらいいかも知れない。――少し表へ出てごらんな。
おせん（おみよに）表へいつて見ませうか、ええ。――まだ三社樣へお詣りしませんから三社樣へ行きませうか。ねえ。
おりゑ　ああそりやあ却つて氣が紛れていいかも知れない。私もまだお詣りに行かないから。――（おみよに）ぢやあ私の代りにお詣りして來てお吳れ。
おせん（おみよに）ぢやあ行きませう、ね。（立ちかかる）
善次郎　三社樣へ行くんなら、おせんさん一人ぢやあ無理ですぜ。神輿の納まるのを見る人で仁王門からお堂の近邊はなかなか通りきれやしません。
おりゑ　さうだね――ぢやあみいちやんは善さんに負つてつてお貰ひな。
おせん　ようござんすよ、小母さん。私一人で。
おりゑ　お前さんが負つちやあ大變だ。どうせ善さんは遊んでゐるんだから一緒に行つて貰つた方がいいよ。一人ぢやあ人込はなかなか大變だから。
善次郎（笑ひながら、わざと）うつかりした事はいへない。――（煙管を筒にさしながら立つて來る）
おみよ（悄しくしく泣きながら）姉ちやんでなくつちやあ嫌。
おりゑ　姉ちやんが一緒に行くんだからいいぢやないか。
おみよ　姉ちやんにおんぶでなくつちやあ嫌。
おりゑ　そんな解らない事いつちやあいけません。お前のやうな重いものをおぶつたら姉さんがやりきれやしない。いい子だから――。
おみよ　嫌、嫌、嫌、姉ちやんでなくつちやあ嫌。（愎れる）
おりゑ　だつてお前――。
おみよ　嫌、嫌、嫌。（愎れて泣く）
おりゑ　いふ事きかない子だね、本當に。そんなら何うでもおし。（おりゑがやや聲を强くする。おみよが泣き募る）
おせん（宥める）泣くんぢやありませんよ。泣くんぢやありませんよ。いい子ですからね。泣くと餘計齒が痛く

なりますからね。私がおんぶして行つてあげますから泣くんぢやあありませんよ。もう泣くんぢやあありませんよ。（おみよ、おせんの袖の蔭で泣きじやくる。善次郎は笑ひながら立つてゐる）

おりゑ　ほんとに爲様のない子だね、駄々ばかり捏ねて。

おせん　（土間に下りて下駄を穿く。上り口へ腰をかけておみよを負ふ）さ、行きませうね。行くんだからもう泣くのは止めて。ね。（やがて出て行く）

おりゑ　本當に癇癪張り出したら挺でも動かないんだもの、爲様がありやあしない。（善次郎に）善さん、お前の氣の毒だけれども後から一緒に行つて見て異れないか。

善次郎　よござんす。途中でだまして此方へ取りませう。

（表へ出て行きかけて立留る。外を見る）危ねえなあ。

おりゑ　（後から）來さうかい。

善次郎　（空を仰ぐこころ）ええ、——いまにざあつと來ますせ。（出て行く）

（椽神輿が遠くを通る囃聲 — その騷がしい物音がちき通りすぎてしまふ。——と、ふと四邊が沈んだやうに靜かになる。囃子の音はいつの間にか止んでしまつてゐて聞えない。）

（家の中がいよいよ暗くなつて來る——空がだんだん曇つて來たままに日が暮れて來る心持）

（ふと賑やかな併しもう疲れたやうな鈍い笑聲が起る。おりゑ振返つて見る。源吉と喜代藏とは將棋を止めて片付け初める。）

源吉　（四十二三。職人の一人。根がつきた樣子）ああ今日は指した。——（がつかりしたやうに）くたびれた——。

喜代藏　（三十八九。職人の一人——駒を箱の中に仕舞ひながら）眼がぼんやりしちやつた。（笑）

おりゑ　（笑を帶びた調子）おやもうおしまひかい。

喜代藏　ええ、もう仕舞です。（輕き笑。——源吉に）今日は何番指したらう。

源吉　さうさな、——何しろ十一時つから休みなしだから。

おりゑ　ほんとに呆れてしまふね、どうしてそんな將棋なんかが面白いだらう。碁だの將棋だのをやる人はみんな夢中になつてしまふんだねえ。

源吉　ばかに暗いな、もうこんな時間かしら。

喜代藏　（時計を仰ぐ）まだ六時十分前だ。こんな暗い事はないんだがな。（ふと立つて側の電燈を捩る。——灯がつかず）まだ來てゐねえ。灯がつかねえや。

おりゑ　すつかり曇つてしまつたんだよ。

源吉　（獨言のやうに）どら、そろそろ歸らうかな。——今年の祭は將棋で暮した。

おりゑ　まあいいぢやないか。御飯でも食べておいでな。
源吉　ええ。――朝、湯に行くといつて家を出たまんまここに引かかつちやつたんだから、家の奴は何處へいつたかと思つてるでせう。
おりゑ　嫌だよ、本當に。
（おりゑ話をしながら四邊に散らかつてゐる茶道具や煙草盆などを片付ける。源吉と喜代藏は將棋盤を片付けて店の眞中に立つて來る。煙草を吸つたりする。ふと話が途切れて沈默。通りがかりの義太夫の流しが門口へ立留まつて、千兩幟の佐和利を語り始める。――その三味線の鈍い音がそそる暮方の遣瀬ない心持。）
おりゑ　（間――なにがしかやる。流しは彈きながら去る）
源吉　喜代さん、行かねえか。
喜代藏　ああ行きませう。（煙管をはたく。――立ちかかる）
おりゑ　まあいいぢやないか。本當に御飯でも食べておいでな。
源吉　（氣の無い調子）　ええ有難う。
おりゑ　喜代さんもいいんだらう。
喜代藏　ええ――私は湯へ一杯這入つて來ます。
源吉　私も一遍家へ歸つて來ます。また晩に出直して來ませう。
おりゑ　さうかい、ぢやあ晩にまたお出でよ。親方ももうぢき歸つて來るだらうから。
（この間に源吉喜代藏土間へ下りて下駄を穿く。）
喜代藏　降るかなあ。
源吉　さあ。――どうにか降らしたくねえな。（出て行く）
（二人と殆ど入れ違ひに十四五の娘が這入つて來る。袋に包んだ三味線を持つ。）
娘　こんちは。
おりゑ　いらつしやい。
娘　あの濟みませんが是を張りかへて頂きたいんですけれど。（三味線を出す）
おりゑ　へえ。――（袋から出して檢める）
娘　あのやつぱりよつでして頂きたいんですけれど。――これで何日頃出來ませうか。
おりゑ　今、生憎見世の者が皆出てしまつて――誰もゐなくつて鳥渡解らないんでございますけれど。
娘　ああさうですか、ぢやあ成りたけ早く出來るやうに。
おりゑ　宜しうございます。あのお序でがございましたら明日でも鳥渡お寄り下さいませんかしら。
娘　どうせ毎日ここん所を通りますから、ぢやあ明日また。――
おりゑ　どうぞ濟みませんが、さうなすつて。――ああそ

れからお名前は何とおつしやいます。

娘　吉田。

おりゑ　吉田さん。―― はあ宜しうございます。

娘　それから濟みませんが、十二の三を二掛け……

おりゑ　十二でございますか。――（ふと困つたやうな樣子）

（抽斗の側へ寄つて彼方此方探す。時計が緩やかな調子で六時を打つ。庄太郎影のやうに寂しく這入つて來る。娘がふと注意する。）

庄太郎　（二十六七。氣の弱い地道な商人風の身形）ごめん下さい。

おりゑ　（探しながら振り返つて見る）おや庄ちやん――まあお上んなさい。

庄太郎　有難う、ごめん下さい。（上り口の隅の方から上つて來る）

おりゑ　（やうやう探し、絲を袋へ入れて渡す）どうもお待遠樣でございます。

娘　如何程でせうか。

おりゑ　六錢でございます。

娘　ぢやあまた明日。

おりゑ　どうぞ濟みませんが、さうなすつて下さいまし。――有難うございます。（娘出て行く）

庄太郎　小母さん、暫く御無沙汰いたしました。

おりゑ　いいえ。御無沙汰はお互さまですよ。一度上らうとは思つてるんですけれど、つい手前にかまけてしまつて――ああお父つあんが此間おわるかつたさうですが如何でございます。

庄太郎　有難うございます。どうも思はしくないんで困つて居ります。

おりゑ　おやおや、そりやあいけませんね。さうですか、そんなにおわるいんですか。そんなにお惡いんだとはちつとも知りませんでした。

庄太郎　いえ――やつぱり色々心配があるもんでございますから――それやこれやでつい御無沙汰をいたしてしまひまして、――それに御町内の方にお目にかかるのが極りが惡いもんでございますから。

おりゑ　何ですね、そんな詰らない事をいつて。極りの惡いもわるくないもないぢやありませんかね。

庄太郎　へえ――（寂しい微笑）

おりゑ　ですけどね、お父つあんでもお母さんでも今までああやつて何一つ御不自由なくしていらしつたんですから――さぞ――と思ひましてね。

庄太郎　それもこれも、みんな私のいく地がないから起つたんだと思ふと――なんだか親父にも母親にも氣の毒な

氣がして爲方がないんでございます。（寂しい微笑）

おりゑ　さういつたつて一概にさうといへやしませんやね——つまり運なんですからね。善くなるのも惡くなるのも——何も運で、是ばかりは爲方がありません。人間、運には勝てませんよ。それも是も定まつた運だと諦めりやあ——善い事ばかりないとおんなしでさうさう惡い事ばかりありやあしません、本當ですよ。だからなりたけ氣を落さない方がようござんすよね。

庄太郎　有難うございます。（間）そりやあもう何うなるも皆約束事だと諦めて居りますが、どうも併し、四十何年といふもの折角まあこの御町内で續いてやつてゐたのを、鳥渡した手違ひから全然知らない他所外の土地へ引込んでしまつたんだと思ふと、何だか情ないやうな口惜しい氣がして爲樣がないんでございます。

おりゑ　そりやあねえ、もう、さうでせうともね。

庄太郎（間。思ひついたやうに顏を上げる）小父さんは今日は。

おりゑ　今日はいつもの通り警固に出てまだ歸つて來ないんですの。

庄太郎（氣がついたやうに）　ああさうでございますか。（ふと失望したやうな心持）

おりゑ　もういい加減隱居して、若い方達にまかしてしまへばいいんですけれど、持つたが病でお祭なんぞといふと、いい年をしてもう相變らず先立なんでござんすものね。困つてしまひます。

庄太郎　家の親父なんぞもさうなんで。これを今年はこんな事になつたんでさうも出來ず——丁度今度越しました家もやつぱり三社樣の氏子なんで、昨日の朝も今朝も起きますと、屋臺の囃子が賑やかに聞えて來るんでございます。何處もおんなじで子供達が早くから騷いでゐるんでございます。さういふやうな事を見聞きしたら、身體が惡くつて寢てゐる親父は餘計元の事を思ひ出して堪るまいと思ふと、また氣の毒になりました。

おりゑ　ほんとにね。（同情に堪へないやうな心持）——いえね、先刻もね、三芳屋さんが鳥渡見えて、いろいろお話ししたんですけれど——。

庄太郎　へえ——三芳屋さんがみえましたか。

おりゑ　えええ、三芳屋さんはよく見世まで見えるんでござんすよ。

庄太郎　さうでございますか。——私はまあ暫らくお目にかかりません。今は何處にお出でなんでございます。

おりゑ　今は何でも本所の方にお出でなんですよ。あの方もね、ひとしきりは——とうとうあいふ風にいけなくなつて、お見世をしまつてここの町内から下谷の方へ行

つた當座は、隨分お困りなすつた樣子ですけれどもね、此頃はとにかくまた少しいいやうなんですよ。

庄太郎　さうでございますか。それは何よりでございますが。今は何をなすつてゐらつしやるんでございます。やつぱり元のやうに下駄の方を――。

おりゑ　いえ、さうぢやないんですの。何か地所だの家屋だの、才取見たやうな事をしてゐるんです。ああいふ方だから却つてさういふ商賣がいいんでせう。――ああさういへばやつぱり續いて貴方は米屋町の方へ――。

庄太郎　へえ――いえ。(うつむいた顏を上げる)　實はもう彼方へは行かないんでございます。

おりゑ　まあ、さうですか。どうしてね。

庄太郎　いえ――手違ひをいたした當時世話をして異れる人があつて、まあ或る店に這入るには這入つたんでござんすけれど――御存じの通りのああいふ激しい商賣なんで、とても私のやうな人間には勤まりきらないもんでございますから――一と月ばかり通つて見込がないから止めてしまつたんでございます。それで私のやうないく地のない人間には、やつぱり地道な商賣でなくつちやあ駄目だと思ひまして――此頃は西洋箱の內職を初めたんでございます。

おりゑ　西洋箱つていふと――ああ、あのボオル箱の事なんですか。

庄太郎　さうでございます。まあやうやくの事で少し馴れて來たんでございますが、それでもまだお得意へ出來た箱を風呂敷へ包んで背負つて行くのが。どうも辛くつて爲樣がないんでございます。(寂しい微笑)

おりゑ　まあ、貴方が箱を背負つてね、(堪らなく痛ましい心持)そりやあお辛うござんせうともねえ。此間まではただ小僧さんや何かの指圖さへしてゐれば、それで濟んでた方が急に御自分でそんな骨折業をなさるんですもの――でもねえ、よくまあ、それまでに諦めがおつきでしたわねえ。

庄太郎　夜なんか一人でぼつぼつ箱を背負つて、眞暗な道を通つて來ると、何んだか心細いやうな、情ないやうな變な氣になつてしまつて、もう堪らなく泣きたいやうな氣になる事が幾度もございます。よく人が大きな聲を出して唄をうたひますが、こんな時一つ眞似をして自分もうたつて見ようと思ひますが、どうしても喉からさきへ聲が出ません。思ひきつてもう聲を出して見るとその聲がまるつきり自分の聲のやうぢやあないんでございます。何だか餘計情ないやうな氣になつてしまひます。

おりゑ　(次第に身につまされる心持)　さうでせうともねえ。ですけれど、さうやつて地道にして稼いでゐれば、

何時か一度はきつとまたいい時が來ますよ。だから力を落しちやあ駄目ですよ。是非何も貴方が道樂をしたとか何とかしてかうなつたといふんぢやあなし――。

庄太郎　ええ有難うございます。――併しどうも何時まで箱を貼つてたらいいんでございますか――考へると嫌になりますから――いつそまた止めてしまはうかと思ひます。（次第に小聲になる）

おりゑ　（それには深く注意をしないで、何氣なく話頭をかへようとする）先刻もね、三芳屋さんと話したんですけれど、お祭なんぞでも年々にさびれて來て寂しくなります。以前のやうな氣の揃ふ連中が少なくなつたからだらうと思ひますが、町内でも古い家がだんだん減つて來て、今ぢやあ家と佐野屋さんが一番古い分になつてしまひました。そんな事を考へるとやつぱり心細い事もあります。

庄太郎　さうでございませうなあ。（ふと話が途切れかかる）

（家の内も外も全く黄昏の薄闇に包まれる。一度止んだ囃子の音がまた遠く緩やかに聞え初める。）

（おせんと善次郎とが歸つて來る。善次郎の背中にはおみよが眠つてゐる。）

おせん　唯今。

おりゑ　（庄太郎と一緒にふと振返へる）おやお歸り。――まあおみよは寢てしまつたんですの。

おせん　ええ、外へ出て、善さんにだまされておぶさると、ぢき寢てしまつたんです。（善次郎は笑ひながら靜かに見世へ上る）

おりゑ　おやおや、そりやあ大變だつたね。重かつたらうね、御苦勞樣。（おみよを善次郎の背から下ろす）

善次郎　他愛がありません。（ふと氣がついて庄太郎に會釋する）

おりゑ　たいへんな人だつたらう。神輿はもうみんな納まつたの。

善次郎　暗いぢやありませんか。電氣はまだ來ないんですか。（[illegible]振る。灯く。――家の中にふと或る生氣が湧いたやうに明るくなる）ええもうすつかり納まりました。

おせん　途中で小父さんに會ひました。今ぢき歸るつていつてらつしやいました。

おりゑ　さうですか――あの鳥渡濟みませんけど、おせんさん。

おせん　はあ。（側へ寄つておみよを抱き取る。――よき頭に立つて奥へ行く）

おりゑ　庄ちやん鳥渡ごめんなさい。

庄太郎　私はもうお暇いたします。

おりゑ　まあいいぢやありませんか、折角お出でなすつたのに。今家のも歸つて來るつていひますから――鳥渡ごめんなさい。(構はず大阪格子を開けて奧へ這入る)

(長き間。――囃子の音は次第に賑やかな心持を增す。)

庄太郎　なんだか降りさうな模樣でございましたが。

善次郎　さうでございます。今夜だけは持たしたいもんですが。――先刻の模樣ぢやあ今にも降るかと思ひましたが、なかなか降つて來ない所を見ると、殊によつたら今夜位は持つのかも知れません。だけど雨が降つちやあ御難でございますからなあ。

庄太郎　さうでございます。今の雨は陰氣でくさくさしてしまひます。

(おりゑ、下女と共に酒の支度をして奧から運んで來る。下女はすぐ奧へ這入る。)

おりゑ　何にもございませんけれど、お祭ですから一杯――。

庄太郎　どうもこりやまことに相濟みません、鳥渡上りましたばかりで御心配をかけまして。

おりゑ　いいえ、そんなんぢやないんですよ。ほんの有合はせなんです。お祭ですから今夜はくよくよ思はないで陽氣に飲つて下さいな。(笑)　善さん、お前お相手をして呉れないか。

善次郎　へい。――かういふお相手ならいつでも結構。(輕い調子の笑)どうでございます、お一つ。――

庄太郎　有難うございます。ええ――いえ――實は此頃は飲らないやうにしてゐるんでございます。貧乏してお酒でもございませんから。(情なさうな笑)

おりゑ　そんな事いつたつて、庄ちやん、それはいけませんよ。いくら苦勞があるからつて、苦勞は苦勞、お酒はお酒ですあね、さう始終間斷なしに、くよくよしてゐて、好きなお酒を飲む事まで遠慮してゐたら、今度は身體がたまりませんよ。それに是が外ぢやあなし、私の所ぢやありませんか。そんな事はいはないで飲つて下さいよねえ。

善次郎　さあ如何です、一つ。(切にすすめる)

庄太郎　ええ、有難うございます。(間)ぢやあお盃だけ。

おりゑ　何ですね、庄ちやん。またそんな事いつて。――さあ善さん、お酌しないかね。

善次郎　さあ、どうぞ一つ。――私が叱られますから、どうぞ一つ。

おりゑ　善さん、お前さんまづいね。鳥渡私にお貸しよ。

(無理に酌をして庄太郎に飲ます。そのまますすめて盃を二つ三つ重ねさす)

（囃子の音のいよいよ賑やかに高くなる。灯の色も明るくなる。門口へ使の男が來る。）

使の男　今晩は。（おりゑも庄太郎も善次郎もふと話をやめてその方を注意する）佐野屋から參りましたが、こちらの旦那樣は三社樣の方からすぐ御町内の方とご一緒に草津の方へお廻りになりましたから、鳥渡お斷り申します。

おりゑ　ああさうでございますか。わざわざ濟みません。どうも御苦勞樣でございます。

使の男　ではどうぞ、そのお積りで。

おりゑ　どうぞお宅へ宜しく。（使すぐ歸る）いつもは一度家へ歸つて出直すんだにね。

善次郎　今夜は親方はぐでんぐでんになつて來さうだな。

おりゑ　（庄太郎に酌なしながら）なぜさ。

善次郎　なぜつて――なんだかそんな氣がします。

おりゑ　今日だけは爲方がないさ。だけど此頃は大丈夫だよ。

庄太郎　相變らず草津でございますね。

おりゑ　さうなんですよ。併しこの頃はね。年のせゐかも知れませんが、餘り以前ほど飲みませんでね。餘り失敗もやらなくなりましたよ。（笑）

庄太郎　（少し醉が廻つて來る）失敗といやあ、何時でございましたかなあ、やつぱり草津の二階で、こちらの小父さんと家の親父と喧嘩をして、梯子から落つこちて怪我をした事がございましたねえ。それでゐて翌る日になつて醉が醒めたら、兩方でどうして怪我をしたんだらうと、喧嘩をした事は忘れてしまつて不思議がつた事があつたぢやございませんか。

おりゑ　さうさう、そんな事がありましたね、それで三代次つて藝者がとめに這入つたのが積に障るつて毆つたりなんかして――あとでまた二人で、その藝者を招んであやまつたんぢやありませんか。（笑）

庄太郎　さうですか、そりやあ知りませんでした、そんなあやまりに行つた事は親父はいひませんでした。（何かしら嬉しさうな笑）

おりゑ　それが可笑しいんですよ。その三代次つていふ藝者が佐野屋さんのお馴染でね、とうとう今ぢや佐野屋さんの世話になつてゐるんですよ。

庄太郎　（驚いたやうに）へえ。――

善次郎　家の親方は大丈夫ですか。

おりゑ　家のぢや向うで相手にしないから大丈夫だよ。

（ふと賑やかな笑聲。）

（囃子の音。）

（末吉、半造、歸つて來る。二人とも燈火に醉つたや

うに氣が浮き立つてゐる。何か面白さうに笑つて這入つて來る。）

末吉　（這入りかけてふと止まる）まだ家ぢやあ提灯をつけないんですね。

おりゑ　ああすつかり忘れてゐた。濟まないけれど灯けて與れないか。

善次郎　（上り口へ立つて行く）蠟燭は這入つてゐる筈だ。――燐寸はここにあるよ、

（半造と末吉、外へ出て軒の梯子をかけ、提灯を下ろす模樣――囃子の音）

おりゑ　あの囃子の音をきくと、なんだか氣がかう浮き浮きして來ますね。――三芳屋さんぢやあないけれど、お祭つていふものは矢張いいもんですね。――いい氣なもんだけれど。（笑）

庄太郎　まつたくでございます　あの囃子の音が遠くから聞えたり、花や提灯がずうつと並んだりしてゐる所を見ると、子供のやうな氣になつてもう堪らなくなつてしまひます。――實は何をやつても駄目ですから、いつそ田舍の方へでも行つて一と稼ぎして見ようかとも思つたんでございますが、かうやつて御馳走になつて、昔のお話なんかしたら、なんだかこの土地を離れるのが嫌になつてしまひました。もういくら貧乏しても三社樣の側は離れない事にきめます。

おりゑ　（深く注意をしない笑）ぢやあその積りでもつと飲つて下さいよ。

庄太郎　ええもう遠慮なく頂く事にします。（笑）

（この間に末吉と半造、提灯を下ろして來て、土間で蠟燭に灯をつけかける）

おりゑ　（思ひ出したやうに）ああ先刻方降り出しさうだつたが、どうしたらう。

善次郎　持ち直しやあしないか、

半造　（門口から外を出る）莫迦にしてゐやあがる。すつかり霽れて星が出てゐる。

おりゑ　おや、さうかい。

善次郎　そんなもんだ。

（居合はす人々がふと賑やかに笑ふ。（おせんもまた何時の間にか見世へ歸つて來てゐる）末吉は提灯をつけてゐる。囃子の音。――門口の外はもう全く暗くなつてゐる。）

――幕――

雪

登場人物

清次郎　雜呉服商
およし　清次郎の妻
おつる　清次郎の娘
おみへ　清次郎の母
良吉　相場師
陳　支那料理人
髪結
煙草屋の主人

幕しづかに明く。
舞臺は銀座の裏通りのとある煙草屋の二階。――清次郎が借りてゐる部屋の模樣、一間の窓。一間の戸棚、三方壁――階子口へ出られる襖口のみが、たゞ一つ附いてゐる。
壁に寄せて簞笥や茶簞笥が置いてある。簞笥の上には手文庫や、人形や、時計や――細々したものが載せてある。
襖口に近い壁には、袋に這入つた三味線が一挺三味線かけにかけてある。壁の色は黄がかつた薄い色。（或は茶がかつた薄い色。）
一月下旬の寒い冴えた日の午前十一時頃。窓の障子がなんとなく白々と見える。障子を開けると曇つた空が見える。（此窓から、往來が見下ろされるところ。）曇つてはゐるけれども、雪を模樣してゐるので、部屋の中は何處か明るく、靜かに落ちついてゐる。
そのあかるい靜かな中で、およしが髪結に髪を結はしてゐる。長火鉢がすこし離れて置いてある。その側には裁板や、針箱や、絎臺なんかが置いてある。縫ひかけの女物が、袷らしい、紅い、花やかな色を見せて散らかつてゐる。やゝ長き間。髪結もおよしも無言――そこには、その時、なんの物音もして來ない。正午に近いといふ或る心持が淋しく漂つてゐる。

髪結　（四十七八――年より老けて見える。落ちついた、ものしづかな調子）今日は深川は、たいへんな人出でございませう。

およし　（三十三四。いろいろの苦勞にかまけて見得も何もない樸はない身形。――併しひと目みて、誰にでも商賣人上りらしい調子が分る）深川。――（ふと思ひついた

やうに）　ほんに今日は二十八日でしたね。——不動樣でしたね。

髮結　刎不動でございますから。——なんだかをかしなお天氣でございますけれど、今日一日だけは持たしたいもんでございますね。

およし　さうですねえ。——だけど、この間つから、もう、降りたくつてゐるんですから。——降らなきやようござんすが。——ですけどね、人間もかう忙しくなつちやあ駄目ですね。不動樣も何も忘れてしまふんですから。

髮結　（ごく輕い笑）　まつたくでございますね。——さうでご座いますけれど、私共なんかのは、また、ちやんと存じてゐて、お詣りにまゐらうかなとも思ふんでございますけれど、お天氣が惡かつたり寒かつたりいたすと、なんだか億劫になつてしまつて、つい止してしまふんでございます。——つまり無精なんでございますかね。（輕い笑）——だけどこの二三日はまた莫迦にお寒いぢやございませんか。

およし　さうですねえ、やつぱり催してゐるくせに降らないからでせうけれど——それにしてももうこんなつて事はありやあしませんわね。

髮結　この頃方々樣で、死んだ死んだといふお話をよく伺ふんでございますけれど、やつぱりこんなにへんに寒かつたり何かするもんで、病人なんかは、たまらないんでございますね。

およし　死んだといへば、この間お話した病人もね、とうとういけませんでしてね。

髮結　まあ。——あの米屋町へお出なさる方のお內儀さんつて方でございますか。

およし　ええさうなんですの。一昨日の晩になつて、急に模樣が變つて、とう／＼いけなくなつてしまつて——それで今日がお葬ひなんですの。

髮結　さうでございますか。そりやあまあお氣の毒でございましたねえ。——まだたしかお若くつて……

およし　ええ、私なんかとそんなに違はない位なんですけれど。——もう、ねえ、散々苦勞をした人でしてね。

髮結　だけど、苦勞をしても、死んでは詰りませんですね。

およし　詰りませんねえ。——こんな苦勞をする位なら、いつその事、死んでしまつた方がいゝなんぞと思つた時分もありましたけれど、今では、もう、いくら苦勞をしても、死んでは詰らないとね、つくづく思ひますわ。（輕い笑）

髮結　さうでございますともね。（無意味な輕い笑）——ぢやあ旦那は今日はそれでお出掛け——

およし　ええ、昨夜つから——昨夜がお通夜でしてねえ。

とにかく良人がまだ米屋町へ行つてる時分、すこし世話になつた義理があるもんですから、昨日知らせが來るとすぐ出て行つて——夕方一遍歸つて來たんですけれど、すぐまたお通夜に出直して出て行きました。今朝お葬ひが九時といふんで、ずうつとそれを送つて歸つて來るんですけれど、——もう十一時になるでせうね。

髮結　ええ彼れこれもうさうでございませう。——だけど——おやあ昨夜はお一人だつたんでございますか。

およし　ええ一人だつたんですよ。

髮結　まあ、それは隨分お淋しかつたでせうにね。

およし　いいえね、晝間商ひに出たまんま、出先の都合で、歸らない事はよくあるんですから、一人といふ事はべつに珍らしかあないんですけれど、——昨夜はどうしたんですか、ふとお鶴がゐたら——と思ひ出したら、さあ淋しくつて淋しくつて——考へなくつてもいい事まで考へて、一人でいろんな苦勞をしてしまひました。

髮結　——さうでございませうともね。

およし　だけど、おかげで、瀧の家さんの仕事がたいへんにはかが行きました。（輕い笑）なりたけ何か思はないやうに、思はないやうにと思つて、氣のまぎれるやうにせつせと手ばかり動かしてゐました。さうしたら今度はすつかり眼が冴えてしまつて、なんでもやすんだのは二時すぎでした。

髮結　まあ、さうでございますか。——そりやあねえ、お鶴ちやんがゐらつしやると、ゐらつしやらないとでは、たいへんなお違ひでございませうからねえ。

（ふと話が途切れる。）

（遠い表通りの方を廣目屋の囃子が越後獅子をやりながら通る。賑やかな鉦や太鼓や三味線の音。——やがて通りすぎて聞えなくなつて行く——。）

（この間に髮結はおよしの髮を銀杏返しに結ひ終る。）

およし　（ごく輕い碎けた調子）どうも有難うございました。

（散らかつた居廻りを片付けかける。）

（髮結もともども片付ける。）

（およしはぢきに、鬢直しの湯を捨てに窓の側へ立つて行く。）

およし　（障子をあける。外を見る）雪空ですね。（湯をこぼして歸つて來る）

髮結　今度降れば雪でございますよ。

（およし火鉢の前に坐る。髮結も火鉢の近くに來る。）

およし　（髮結に煙草を吸ひつける）

髮結　（煙草をうけとりながら——散らかつてゐる仕立物に眼をうつす）それも瀧の家さんのお仕事でございま

すか。

およし　ええ瀧の家さんの――

髮結　さういへば、あのお家の、去年名古屋の方からお貰ひになつたお子は、いよいよ三月あたりから出る事になるんださうでございますね。

およし　さうですか。だつてまだ小さいぢやありませんか。――まだお鶴と同じ位なもんぢやありませんかしら。

髮結　いいえ。お鶴ちやんよりは、よつぽど大きうございますよ。だつて、名古屋でもつて、すつかり學校を濟まして、それからこつちへ來たんだといふのでございますものね。

およし　おやさうですか。

髮結　お鶴ちやんも今年で學校の方がおしまひになるんでございませう。

およし　ええ――

髮結　しかしお樂しみでございますね。

およし　でも、もう、他人に一旦やつてしまつたものを。――今更何といつても始まりません。――だけど今考へると、せめて學校の濟むまで家に置いといてやればよかつたと思ひます。――あんまり瀧の家さんの方で急ぐもんですからあゝいふことにしたんですけれど。

髮結　でもねえ、お鶴ちやんもよく諦らめてねえ。――どんなにか、まだ、おつ母さんが戀しいんでせうに。――いつでございましたかね、丁度泰明學校のところでお鶴ちやんにお目にかかりましたんでございますの。すると「小母さん、家に行つて」とね、そばへ來てお訊きなさるんですの。

およし　何しろ家が近所なだけにね――思ふと可哀想で――。

髮結　さうでございますね。學校やお稽古の行き歸りに側を通つたりなんかなすつたら自然會ひたくおなりで。――さうでございますね、忘れようとしても鳥渡忘れられない道理でございますねえ。

およし　瀧の家さんの方へも惡るし――またあの子の爲めにもなりませんから、固くいひつけて、なりたけ寄せつけないやうにしてゐるんですけれど――（言葉濁る心持）

髮結　（それには深く注意しないで、ふと話の調子をかへる）でも瀧の家さんのおかみさんは、ああいふ解つた、いい方ですから、御安心は御安心でございますね。

およし　ええ。――ですけれどもね、（顏を上げる）この稼業では、自分が散々苦勞して來てもう懲り懲りしてゐるんですから、何うか子供だけはね。――堅氣でもつて、その苦勞をさせたくないと思つてゐたんですけれど。――だけどやつぱりさういかないで。（遣瀨がないやうな

笑）

（その途端に襖があく。二人はふとその方を向く。良吉が這入つてくる。）

良吉　（三十一二。色の白い、小才を利かすらしい顔立。——贅澤な、しかし地味な身形。黒紋付の羽織の上へ鐵無地の羽織を重ねて着てゐる）ああ寒かつた。——（立つたまま、四邊の様子を見廻して）おや、大將はまだ歸つて來ずか。

およし　いいえ、まだ、——一緒ぢやなかつたんですか。

良吉　寺を出て電車までは一緒だつたんだが——ぢやあとうとう一臺乘り遅れたかな。

およし　そんなら、ぢやあ、ぢき歸つて來ますよ。——まあ立つてないで、此方へ來ておあたんなさいな。

良吉　（氣がついたやうに帽子なんか投げ出して）まあ、とにかく、あたらして貰はなくつちや。（火鉢の側へ寄つて來る）

髪結　（火鉢の側から離れるやうにして）此方へいらつしやいまし。

良吉　ああ退かなくつてもいいんですよ。

髪結　ええ——いいえ、またお喋舌をしてしまひました。午前にもう一軒お廻りしなければならないお家があるんでございます。（立ちかける）

およし　相變らず勝手な愚痴ばかりこぼして濟みませんでしたね。

髪結　いいえ私こそお邪魔をしてしまつて——ぢやあ御免下さいまし。（挨拶する。良吉にも挨拶して出て行く。およし襖口まで立つて行く）

良吉　今日は、まあ、しんに寒い日ですね。

およし　（火鉢の側へ歸つて來る）家にゐても隨分こたへますからね。——雪になるんですよ、きつと。これでは昨夜のお通夜はさぞ寒かつたでせうね。

良吉　ええ、十一時、十二時頃——更け際のその寒かつた事つたら。——震えてたまらなかつた。尤も一時うつてから先は、熱くなつて汗をふきましたがね。（意味ありげな笑）

およし　お酒が廻つて

良吉　酒——まあ酒が廻つたからには違ひないが。（微笑）一時うつとお念佛は女運の方へ引渡しの、同勢七人——（胸の中で數へて見て）七人ぢやあねえ、六人だ。連中八人で二階へ押上つたと思召せ——（笑）

およし　（驚いたやうに）まあ、お花を初めたんですか。

良吉　鳥渡そのね——（笑——ふと階子の音に注意する）おや、大將歸つて來たんぢやあないかしら。

（立つて行つて襖をあけると、途端に一人の支那人が

しづかに部屋の中へ這入つて來る。）

良吉（その姿を見て）なんだ、陳さんか。

陳（五十五六。大柄な恰幅。茶色の服を著てゐる。——全く日本馴れのした調子）今日は。（良吉に挨拶し、およしに挨拶する）

およし　おやお出でなさい。（擇ばしからぬ心持）

（良吉は元の座に戻る。陳はその側へ坐る。）

良吉（陳に）清の字はまだ歸つて來ねえんだ。

陳　さうですか。

およし（ふと口を挾む）何か御相談が出來てるんですか。

良吉　なあにね。どうせ半日潰れたんだから、今日はもう遊んでしまふ量見で——今ここへ來がけに陳さんを引張り出して來た奴さ。

およし　あゝさう。（何氣なくいつて、ふと心が曇る。——散らかつたままになつてゐる仕立物を片付け始める）

陳（それを見て）綺麗ですね。

およし　ええ——（構はず片付ける）

良吉（前にしかけた話の續きをはなし出す心持）で、まあ、二階へ上つたんだがね——

およし　——だけど隨分亂暴ぢやありませんかね。お通夜の晩だといふのに——佛樣が可哀想ぢやありませんかね。

良吉　ところが、——兎に角、ま、主人が先棒を振るんだから始末が惡い、ここの大將なんかは流石は少し氣がさしたやうだが、何んといつても多勢に無勢でね、中には葬ひを花會のやうに心得てる連中がゐる。そんなのにいはしたらこんな事は當坊だから——いつそ纏まりは早えや。——ところがね、可笑しいのは主人で、——何しろかみさんに死なれる位だから曲つてゐらあね。やれば、やるほど、惡いもんだから、さあ躍起になつてしまつた、「おこと！　たのむぜ。明日は上燒にしてやるから、ええ。しつかり頼むぜ——」とね。（一々力を入れて花札めくる眞似をして見せる——笑）

およし（痛ましい氣がするやうに）まあ——

良吉　考へればかみさんこそ災難さね。散々苦勞をさせられた揚句、死ねば死んだで——死んでまでおつかけに苦勞をさせられるんだから。——（笑）

およし　私だつたら行くところへ行けやしません。——勝負事といふと誰でもみんなさうなつてしまふんだから——私はほんとに勝負事はいやですよ。（ふとまた心が曇る）

陳（良吉に）甘い事ありましたらう。

良吉　——ところが。ここの大將も手前も滅茶々々。てん

で起きないんだから酷でえや。それでもここの大將なんかは初めに二三度吟味をとつたからいいけれど、手前と來たら曲つたきりといふんだから――もうみじめなもんです。

陳　ほう。（およしはなりたけ話を聞かないやうにしてゐる）

良吉　だから、今日もう一度、まん直しをやらうつていふ譯なんさ。

（襖があく。清次郎が力のない、沮喪したやうな、何か考へられてならないやうな樣子で這入つて來る。）

良吉　どうしたんだ、銘迦に遲かつたぢやないか。

清次郎（三十五六。色の蒼白い、瘦せた、寡默らしい顏立。外套。銘仙の著物に銘仙の羽織を著た身形）　ああ、鳥渡寄道して來たもんだから。（陳に輕く挨拶しながら外套をぬぐ）

（およしは立つて行つて、その外套を壁にかける。それから、下駄を始末しに行くところで階下へ下りて行く。）

（清次郎はおよしの立つたあとへ行つて坐る。）

良吉　多分電車で遲れたんだらうと思つてた。――俺はあれからすぐ此方へ來て、陳さん所へ聲をかけに寄つたら、遊んでたから序でに鳥渡引張り出して來た。――ねえ陳さん。

陳　今日は閑暇です。ぶらぶらしてゐます。

清次郎　ああさう。

良吉　で、どうするい。何處か當てでもあるかい。

清次郎（氣のすすまない風で）當てつて別にありやあしない。

良吉　ぢやあ、やつぱり陳さん處へ行かうか。――陳さん、君の方は都合はいいかい。

陳　どうせこんなお天氣でお客はありません。みんな遊んでます。都合惡くはありません。家でやりませう。

良吉　さうか。陳さんの都合さへよければ、こつちは何處でもいいんだから、ぢやあ陳さん處へ行く事としようぢやないか。

清次郎　さうだね。

陳　丁度いい事があります。昨日――一昨日から、橫濱から友達が二人遊びに來てゐます。二人とも勝負が好きです。金持です――（笑）

良吉　橫濱から。――へええ、そいつは面白いや。――ねえ、（清次郎に）面白いぢやないか。

清次郎　うむ――（氣のない返事）

良吉（清次郎の滅入つた樣子に注意する）どうしたんだな。莫迦に氣のない顏をしてゐるぢやないか。

清次郎　（紛らすやうに）　べつに何うもしやあしない――何しろ昨夜寢ないから。

良吉　俺だつて寢やあしないやな。――いや、寢た寢た。俺は寢た　曉方に一時間ばかりとろとろとした。すつかり取られて癪だから、座敷の隅へころがつてたら、そのまんま好い心持にうとうとしてしまつた。――さうか、ちつとも寢なくつちや堪らないだらうな。

清次郎　それに嫌にぞくぞく寒くつていけないんだ。

良吉　（併しもうそれには構はない風で）　ぢやあ、陳さん、さういふことにして。――とにかく、ま、出かけようぢやあないか。　（立ちかかる。陳も一緒に立ちかかる）

清次郎　一足さきへ行つて吳れないか。あとからすぐ行くから。

良吉　どうしたんだな。莫迦にぼんやりしてしまつて。――嫌だぜ、あとからなんていはないで一緒に來たらいいぢやないか。

清次郎　寒くつていけないから、湯に一杯這入つて來たいと思つて。――すぐあとから行くよ。さきへ行つて吳れ。

良吉　さうか。ぢやあ先へ行かう。なりたけ早く來て吳れなくつちや困るぜ。

清次郎　うむ、すぐ行く。

陳　待つてます。

（良吉と陳が出ようとするところへ、およしが階下から上つて來る。）

およし　おや、お歸り。

良吉　ええ、お邪魔しました――これから陳さん處へね。

およし　ああさうですか。（ふと清次郎の方を見る。清次郎は默つて坐つてゐる）　どうもいつもお構ひ申しません。

良吉　どういたしまして――（清次郎に）　ぢやあ清さんいいかい。

（清次郎は煩はしさうにうなづく。良吉と陳と出て行く。）

およし　お前さん、著物著かへるでせう。

清次郎　ああ、俺は湯に一杯這入つて來る。（帶を解き初める）

およし　お湯へ、さう。（炬燵にかけてあつた不斷著を持つて來て著かへさせる。さうして清次郎が著かへてゐるうちに、手拭や石鹼を支度して火鉢の上へ置く）

およし　すぐ歸つて來るんでせう。御飯の支度をして置きますから。

清次郎　すぐ歸つてくる。

およし　（たしかめるやうに）　陳さん處へ行くんぢやないでせうね。

清次郎 （逢はれるやうな心持。間） どの途一度歸つてくるよ。（出て行く）

（およし脱ぎ捨てられてある著物を疊む。疊みかけてふと何か氣のついたやうに時計をみる。――豆屋の賣聲が遠くに聞える。）

（やゝ長き間。――急に階下の煙草屋の主人が這入つてくる。）

主人 （四十七八。小柄で髮の毛が薄い。――襟のかかつた半纏を著た身形） おかみさん、おかみさん、あの――おつ母さんがお出でになりましたよ。

およし （著物を疊みかけたまま） ええ、おつ母さん――。

主人 あの、神田のおつ母さんですよ。

およし あゝさう。――（ふと喜ばしさが顏に上る） 濟みませんがどうぞ二階へ――

主人 今もう上つていらつしやいますよ。

（おみへ、初不動の歸りのこころで麥藁細工の住吉踊を手に持つて這入つて來る。）

おみへ （五十八九。色の白い痩形。圓髷に結つてゐる。お召の著物にお召の羽織、白足袋といふ身形。何處か意氣なところが窺はれる。肩掛をとりながら調子よく） 無斷でづかづか上つて來ましたよ。

およし ああおつ母さん、よくまあねえ。――お寒うござんしたらう。さあずつと火鉢の側へ行つて下さいましな。

おみへ ああ有難う。――（そこに居た主人を見て挨拶する） おや、その後はどうも暫らく、御無沙汰いたしました。別にお變りもなくつて。

主人 （口ごもりながら） あなたもお變りなくつて。

おみへ 有難うございます。お蔭樣で風邪もひきませんで。――また相變らずいつも二人が御厄介にばかりなりまして。

主人 どういたしまして、――手前こそ――春になつてまだおつ母さんが――まだ、お見えにならないけれど――何うなすつたんだらうと――昨日もおかみさんとお噂してゐたんでございます。

おみへ あゝさうでございますか。（口籠る氣味） いえねえ、家内が多いもんでございますから、やつぱり春はごたごたいたしまして――來よう／＼と思つて居りましても、つい出る折がございませんで、今日は深川の不動樣へまゐりましたから、それから歸りにこつちへ廻つてまゐりました。

主人 さやうでございましたか。――それはよく。（間）ぢやあどうぞごゆつくり。

おみへ 有難うございます。

主人 （およしに） おかみさん、火はありますか。

およし ええ有難う。たくさん起つてゐますから。（主人

出て行く）おつ母さん、こつちへどうぞ。

おみへ　ああ有難う。（火鉢の側へ坐る）

およし　（火を掻き起しながら）よくいらしつて下さいましたね。暫くいらつしやらないから、本當にどうなすつたかと思つてをりました。――ああ、春初めてでございましたね。お芽出度うございます。

おみへ　ああさうだつたね。お芽出度う。――相變りませず。（笑）誰も別に變りはないかい。

およし　ええ、有難うございます。お蔭樣で身體だけはみんな丈夫でございます。

おみへ　ああさうかい。それは丈夫なのが何よりだよ。（煙草入を出しかける）本當にね、春は早速來ようと思つたんだけれど、今もいつた通り春は人の出這入りも多かつたり何かするもんだから鳥渡來られなくなつてね。二三日前にやうやく車で四五軒年始廻りをしたやうな譯なんだよ。――その時築地まで來たからよつぽど寄らうかと思つたんだけれど、生憎いつもの車夫でなくつて知らない男だつたから、また面倒だと思つて、ずうつと歸つてしまつたがね。――（およし、この間に茶をついで出す）ああもう構はないで――だけど、何日だつたつけかね、この前、私がここへ來たのは。

およし　あれは丁度暮の金毘羅樣の日でございましたよ。納めの金毘羅樣で、たいへんに人が出たつて――

おみへ　ああさうだつたね。ぢやあざつと二月來なかつたんだね。

およし　（話の調子をすこしかへる）暮といへば、――暮にはまた、御無理を願ひまして、――いつもながら御無理を願ひまして申譯がございません。（なにものか紛らす寂しい微笑）

おみへ　（靜かに煙管をはたきながら）ああ、あれかい。あれはね、實はもう少しどうにかして上げたかつたんだけれど、あんなにもう押しつまつて、急な事だつたもんだから、さう行かなくつてね――

およし　いいえ、どういたしまして。――お蔭樣でほんとに助かりました。――私がうつかりしてゐたのも惡かつたんでございますけれど、良人も何とも私に話しといて呉れなかつたもんでございますから――

おみへ　それは清次郎だつて、毎々の事だもの、さうさうお前にだつていへた義理ぢやあないからね。――まあ今度のは商賣上の損だつていふから、仕方がない處もあるけれど――だけど、今までに、幾度あんな金貸の腹を肥やしたか解らないんだからね。――併しこの頃はどんな鹽梅だね。少しは身にしみて商賣をやつてるやうかね。

およし　（わざと裝つた調子で）ええ、この節は自分でも

考へたと見えまして、たいがい毎日、商ひに出て居ります。――尤も今日は折れ口がありまして、それへ行つて歸つて來て、今お湯へ鳥渡まゐりましたけれども――

おみへ　少しはもう、考へて吳れなくてはね。いつまで若くつてはゐないんだから。――

およし　（無言）

おみへ　では、勝負事の方もこの節は。

およし　（縮ふやうに）ええ。その方もこの節はあんまり――ちつとも、いい鹽梅に出掛けないやうでございますけれど――

おみへ　勝負事だけは是非どうしても止めさせなくてはね。商賣に身を入れる、入れないなんぞは多寡の知れた事だけれど、勝負事を止めて吳れないと、世間の信用がつかないからね。――是はなまじ初めに米屋町へなんか這入つたのが惡かつたのだけれど。――早い話が、實はそれさへ止めて吳れれば、あれの姉もね、どうにか兄貴殿に口をきいて、もう一度出入りだけでも出來るやうにしてやりたいといつてるんでね。――姉もね、實はお前にお暮に寄越したあの手紙も見て、お前が氣の毒だといつてるんだよ。

およし　（何となく涙ぐまれるやうな心持）いろいろ御心配をかけまして相濟みません。いえね、私がもう少ししつかりしてゐればいいんでございますけれど、――

おみへ　（何がなしに摑まれるやうな心持）決してそんな事はありやあしないよ。私だつて淸次郎には愛想をつかしてゐるんだもの。ただ私はね、お前とお鶴が可哀想でね。どうにかして、私がここへ來るだけでも、大ぴらに家を出られるやうにしたいと思つてね。

（襖があく。主人が顏を出す。）

主人　（およしに）おかみさん、鳥渡。

およし　はい。（立つて行く。主人が小聲で何かいふのを聞いて）ああさうですか、今、お湯からまだ歸りませんからと、――どうぞ濟みませんが、さういつて下さいまし。（主人、襖をしめる。およしはもとの座にかへつて來る）

おみへ　（不意に）その後お鶴の事はどうなつたね。もう藝者屋の方へ行つたきりになつてしまつたのかね。

およし　その事も詳しくお話ししなければならないんですけれども――此方の方のつもりでは、せめて學校を濟ましてからやるつもりでゐたんでございますけれど、向うでは、一日も早く寄越して貰ひたいやうな樣子で年廻りだの何だのをやかましくやいやいいつてまゐりましたから、思ひ切つて、すぐに向うへ渡してしまひました。それですから、今では向うの家から、毎日學校へ通つてを

りますんです。

おみへ　さうかい。――(諦めるもののやうに)　まあ、それも仕方がないね、考へると可哀想だけれども、また行く行くの事なんか思へば、今家にゐるより、その方が却つてあの子の爲めだかも知れないね。さうなるのも斯うなるのも――みんなさういふ事になる廻り合せなんだらうから、――たゞ私はもうここへ來ても、あの子に會へなくなつて、この世の中の樂しみが一つなくなつてしまつたよ――(笑)それでも時々は遊びにでも來るかい。

およし　ええ――やつぱり家は戀しいと見えて、――あんまり他人にはいへない事なんですけれど少しの暇を見ては、毎日のやうに來るんでございますよ。

おみへ　毎日のやうに。

およし　學校へ行くのに、毎日家からお辨當を持つて出ますんですけれど、晝飯になると、家まで食べに歸るつもりにしては、お辨當を持つてここへ食べに來るんでございますの。

おみへ　(ふと悲しみをそそられる心持)　毎日ねえ――

およし　來たつて、わづか十分か十五分位しきや居られやしないんですけれど、それでもやつぱり來たいと見えて、雨が降つて、どんなに道の悪いやうな日でも何でも、わざわざまゐりますんでしてね。尤も表向きは、さうさう來る事も、またさうさう寄せつける事も出來ないんでございますけれど――可哀想だと思ひましてつい、――

おみへ　晝飯に來るつて、お前、今日はもう來てしまつたのかい。

およし　(ふと氣がついたやうに)　いいえ今日はまだまゐりませんですけれど。(時計を見る)　あゝもう十二時半でございますね、來ればもう今頃は來る時分なんですけれど――あの子も來るたびに、お祖母さんはいつ來る、いつ來るつて、お目にかかりたがつてゐるんでございますから、今日來れば丁度いい機會なんでございますのにね。

おみへ　私は十一月來た時會つたきりだから――もう隨分會はないよ。

およし　(ふと階子の音をききつけたやうに)　おや、來たんぢやないかしら。

おみへ　ええ、來たかい。(ふと注意する)

(およし、立ちかける。と、そこへお鶴が這入つて來る。)

おつる　(十二三。色の白い眼の淋しい顏立。桃割に結つてゐる。――襟のかかつた著物。友禪の羽織。――辨當の包を袖にかくして持つてゐる)　おつ母さん――(襖の外で靜かにかういひながら襖をあける。何氣なく部屋の中

へ這入りかけて、ふとおみへの居るのに氣がつく。餘り思ひがけないのを、驚くやうにふと無言）

おみへ　まあ、お鶴や――（と、いはれて、おつるは一時にいひしらぬ悲しさ懐かしさに迫られて堪へられぬやうな心持。そのまゝ坐る）

およし　おばあさんに御挨拶しないかね。――何んだね、嫌な子だね、泣かなくつたつていいぢやあないか。（泪なかくす寂しい微笑）

おつる　（泣く――もう泣き止められぬ心持）

おみへ　（おのづと泪ぐまれて來る。――それをまぎらすやうな寂しい笑）どうしたの。

およし　今日はいつもより遲かつたんだね。

おつる　（歔欷しながら）ええ。

およし　おばあさんはね、お前が晝飯(おひる)に來るとお話したもんだから、來るのを待つてらしたんだよ。

おみへ　久しく顔を見ないからね、顔を見て行かうと思つて。――でもよく來たね。

おつる　（歔欷）ええ。

およし　（捨臺詞。――思ひ出したやうに）ああ勝手な事ばかりいつてすつかり忘れてをりましたけれど――おつ母さんはまだお飯前なんぢやあないんでございますか。

おみへ　まだだけれど、今日は朝が遲かつたせゐかまだ食べたくない。

およし　さうでございますか。ですけど――

おみへ　いいえ、ほんとに澤山だよ。それよりおつるは時間があるんだらう。そこで食べたらいいぢやあないか。

およし　今日はいつもより遲いんだから。ごめん蒙つて早く頂いておしまひな。

おつる　（間）食べたくないの。（低い聲）

およし　食べたくないつてお前、そんな事いつてお腹がすくよ。

おつる　でも食べたくないの――

おみへ　泪でお腹(なか)が一杯になつてしまつたかね。（笑）――ああそんなら好いものがあつた。お待ち。（袂から菓子包を出す）今途中で一軒寄つて貰つて來たんだけれど、――是でもおあがり。

およし　（包を取つて）まあ綺麗なお菓子――お前の好きな烏羽玉だよ。

（二人ですすめておつるに菓子を食べさせる。おみへ、茶をついでやりなどする。長き間――二人は默つておつるの横顔を見てゐる。そのあと捨臺詞、）

およし　（時計を見て）お前もう一時だよ。學校へ行かなくつちやあいけないんだらう。

おつる　ええ――（去るに忍びない心持）

おみへ　學校遲くなると先生にいけないだらう。
おつる　ええ――(また涙ぐまれてくる心持)
おみへ　(様子を見て)學校は遠いの。
おつる　いいえ、すぐそこ――
およし　數寄屋橋のところなんでございますの。
おみへ　それぢやあ、おばあさんがその學校の側まで送つてつて上げようぢやあないか。
およし　でも、わざわざたいへんでございます。
おみへ　なあに、どうせ車を連れてるんだから、ぶらぶら其處まで行かうよ。(おつるに)さうしようね。
おつる　(無言――ふと、およしの顔を見る。何か安心を得たやうな心持)
おみへ　ぢやあ私はおいとまするよ。(立ちかける)
およし　でも、もう、良人も歸つて來る時分でございますから。
おみへ　お前とお鶴に會へば、清次郎なんかには用はないから。(輕い笑。――紙入を出して、幾枚かの紙幣を火鉢の蔭へ置く)例の通り何にも買つて來ないから――
およし　あら、お母さん、いつもそんな御心配ばかりかけて。
おみへ　まあ、いいよ。――それからこのやあとこせを一つ置いて行かうね。子供だまし見たやうだけれど――
(笑。立ち上る)ぢやあお鶴、行かうかね。
およし　どうもいつも失禮ばかり――ぢやあまたそのうちに――
おみへ　ああ、こんどはぢき――來月になつたらぢき來ますよ。
(おみへ出て行く。おつるも欣ばしさうに出て行く。――およしも二人を送つて一緒に出て行く。)
(舞臺暫らく空虚。飴屋のチャルメラの音が聞える。やがておよしがかへつて來る。窓の側へ寄つて、細目に障子をあけて外を見る。――併しぢきにそこを離れて、おみへが置いて行つた住吉踊を壁の三味線かけにさし、散らかつたそこらを片付ける。)
(間。チャルメラ止む。清次郎が湯から歸つて來て靜かに這入つて來る。)
およし　まあお前さん、もう一足だつたのにね。いまおつ母さんが來て歸つたところですよ。
清次郎　(前よりも幾分か心持が引立つてゐる。――濡れた手拭をおよしに渡しながら)お袋が來た――さうか。(住吉踊に目をつけて)あゝ今日は不動様だな――飯の支度は出來てるか。
およし　丁度お前さんが出て行くとすぐおつ母さんがお出なすつたんで、ついまだ支度ができませんでした。――

少し待つて下さいな。

清次郎　昨夜、酒をのんで、今朝はまだ飯を食はないもんだから、莫迦に腹が減つた。何でもいいから早く食はして呉れ。少し用があるんだから。

およし　（不安さうに）陳さん處へ行くんですか。

清次郎　何だか今日は行きたくねえけれど、行かないとまた愚圖々々いつて、あとがうるさいから――

およし　（何かいはうとして氣をかへる）ぢやあ烏渡横町まで行つて何か見て來ますから。

清次郎　行くんなら傘を持つてかないと、何んだかちらちらやつて來たやうだぜ。

およし　あらとう／＼降つて來ましたか。でも、大した事はないでせう。

清次郎　早く歸つて來て呉れよ。

（およし出て行く。清次郎、新聞をとり上げてみる。そのあと、火鉢の抽斗から剪刀を出して爪をとり初める。主人が襖をあけて顏を出す。）

主人　清さん、角の支那料理から、すぐ來て呉れつて迎ひが來ましたよ。

清次郎　ああさうですか、有難う。――濟みませんが、今ぢき行くつてさういつて呉れませんか。

主人　さつきも一度來たんですよ。

清次郎　ああさうですか。濟みません。どうぞぢき行くからつて。

（主人襖をしめて出て行く。）

（清次郎は爪をとり續ける。）

（間。――舞臺は幕の明いた時のやうに明るく靜かに落ちつく。）

（急に往來の方が騷がしくなる。――近所に何か起つたやうな樣子。――慌ただしく入り亂れた足音が通りすぎる。）

（清次郎はふと耳を欹てて聞く。喧騷。）

（およしが慌ただしく襖をあけて這入つて來る。）

およし　（轉倒した心持）お前さん、たいへんですよ。

清次郎　どうした。

およし　今陳さん處へ手が這入つたらしいんですよ。

清次郎　何、手が這入つた。

（窓側へ立つて行つて、急いで障子を明ける。――外を見る。）

（およしも、ひき添ふやうにその後ろへ立つて外を見る。）

（間。喧騷。）

（雪はしと／＼と、だん／＼降りが強くなつて來る。）

――幕――

宵の空

登場人物

銀次郎　銀床の主人
清吉　同職人
新三　同職人
音吉　初音鮨の主人
茂介　同職人
宗兵衛　舊中田屋の主人
半三郎　棒屋の主人
長太郎　砥屋
濱吉　人形屋の主人
吉次郎　指物屋の職人
庄吉　羅呉服
おふぢ　三崎屋の娘

ほかに客二人。通りがかりの者二三人。近所の者二三人。支那蕎麥屋。義太夫の流し。銀床の小僧。三崎屋の見世の者。その他。

登場しない主要な人物。天新（近所の天ぷら屋）同姪、きん生（落語家）。平孝（幇間）。その他。

八月の末。宵。――宵といつても九時すぎ。――空はまつたく暗く惱ましく曇つてゐる。

蠟燭屋の土藏の裏。「銀床」の見世の前。

「銀床」の見世のなかには、瓦斯の灯火が水のやうにあかるく漲つてゐる。――三四人の職人が、みんなめいめい鏡のまへで仕事をしてゐる。見世のまへには縁臺が二つ。一つの縁臺には客が四五人、見世のなかの灯火を浴びて將棋をさしてゐる。通りがかりのものが三四人。周圍に立つてその勝負を覗いてゐる。――一つの縁臺には庄吉が一人、往來にそむいて腰をかけ、夕刊の新聞を讀んでゐる。義太夫の流しが立つて、野崎の段切を彈いてゐる……その三味線の音。

幕があいたとき、舞臺の上は、灯火のいろの或るうきうきした明るい心もちに染められてゐる。――しかしそこに、舞臺のかげに、「隅田川」のながれが暗いかなしい夢を横たへてゐることを考へなければならない。

將棋の群のなかで、流しの三味線と一しよに濱吉が中音でそれを唄つてゐる。――それが聞える。流しはやがて其處を離れる。彈きながら這入る。

間。

見世のなかから、白い仕事着を著た清吉が出てくる。

清吉　（濱吉に聲をかける）濱さん、お待ち遠さま。

濱吉　（口三味線をやめて）俺かい。

清吉　ええ、どうぞ。

濱吉　一寸待つて喫んな、いまもうすぐだから。――（相手の茂介に）ところでお手は。

（清吉、將棋のそばへ寄る。）

茂介　金二枚の桂馬。

濱吉　金二枚の桂馬と、――面倒だ、やつつけてしまへ。

茂介　ぢやあ此方は王手。

濱吉　置きやあがれ、畜生。そんならかうだ。

茂介　いい了見だ。――それでこの飛車がかう動けたつてね。

濱吉　あ、畜生。――さうか。

（ふとしばらく無言。）

（見世のなかから、半三郎（五十八九）出てくる。）

半三郎　（空を見上げて）仕樣がねえなあ、すつかり曇つてしまやがつた。

清吉　（おなじやうに空を見上げて）此奴は危なうござんすぜ。

半三郎　危なさうだなあ。――しかし降られたら御難だからなあ。

吉次郎　（將棋の群のなかから）何處かへおでかけですか。

半三郎　なあによ、明日大山へ立つんでね。

吉次郎　ああさうですか。其奴は何んですね。――（空をながめて）さうだなあ、この霪梅ぢやあ。――とにかく久しく降りませんでしたからねえ。

庄吉　（往來の方を向いて）天氣豫報には、南の風曇雨模樣ありとしてあります。（新聞を手から離す）

吉次郎　心細いことをいふぜ。

清吉　（半三郎に）だけど何んですか、大山へ行くのには、一たい何處まで汽車に乘つて行くんです。

半三郎　何處までつて、平塚まで乘つて行くのさ。

清吉　平塚つていふと、一たい何處いら邊の見當になるんです。――よつぽど遠いんでせうねえ。

半三郎　なあに、茅が崎のさきだから譯はない。――お前茅が崎は知つてるだらう。

清吉　いいえ、知りません。

庄吉　以前、團十郎の別莊のあつたところぢやないか。

清吉　ああ、さうですか。――知つてます、知つてます。

半三郎　あの茅が崎から、丁度一と丁場さささ。

清吉　へええ、さうなんですか。私はまたもつと酷く遠いのかと思つてゐました。――ですけど私はね、何處は何處の見當にあるんだか、さういつたやうな事はなんにも

知りませんでね、――生れてから汽車へ乘つたつていふのは、子供のときに、はじめて田舍から此方へ出てきたときと、下谷の床屋にゐた時分、盆の休みに鎌倉へ行つたときと、これまでにまだ二度しきや乘つたことがないんです。

吉次郎　情けねえ男だなあ。

淸吉　だつて性質だから仕樣がない。

庄吉　（半三郎に）それで平塚で下りてから、山まではまだよつぽどあるんですか。

半三郎　ああ、其奴は一寸ある。――まあ三里かな、しかしこの頃は開けたから、馬車もあれば俥もある。自動車もあつてね。

庄吉　子安とかつていふところは、どんなところなんです。

半三郎　子安つていふのは山のもう下のところでね、宿――つていふほどのこともないが、まあ宿だね、「諸願定宿子安まで、おりて五六の蚊帳のうち」つて山歸りの文句にあるとこさ。

吉次郎　「四六のあまに劣つたる、どぶつに二朱もん有難い」つてね。

濱吉　（側で唄ひだす）「四谷ではじめて逢うたとき、――好いたらしいと思うたが――（勝負はまだ結着がつかない）

半三郎　（間。――淸吉に）もう何時だらうな。

淸吉　さうですね、――（見世のなかを覗いて）十時十五分前です。

半三郎　もうさうなるのか。――まだこれから歸つて支度をしなけりやならないんだ。（立ちかける）

淸吉　其奴はたいへんですね。

半三郎　なあに、支度つていつたつて譯はねえんだ。――だけど此奴は仕樣がねえな。（空を見上げる）

（淸吉も庄吉もそれに誘はれて空を見る。）

淸吉　どうもねえ。

吉次郎　さあ、俺も歸るかな。――（半三郎に）親方、其處まで一しよに行きませう。

半三郎　天新の前までかい。

吉次郎　戯談いつちやあいけません。（縁臺から離れかける）

長太郎　（將棋の群のなかから）へえ、もう、それが親方のはうまで聞こえてゐるんですか。――吉公、すこししつかりしなくつちや不可ねえぜ。

吉次郎　何いつてやがるんでえ。

濱吉　（また唄ふ）「――好いたらしいと思うたが、――因果な縁の糸ぐるま――」と。

吉次郎　莫迦だな、此奴等は。

半三郎　さあ行くかな、（一寸見世のなかを覗く。淸吉に）おい、あとで初音の何に、俺がよろしくいつたつて、さういつて吳れ。

淸吉　ええ、ようござんす。

半三郎　ぢやあ、おやすみ。（誰にいふのでもなく）

（「おやすみ」「おやすみ」と、淸吉、庄吉、濱吉、長太郎、みんなめいめい口々にいふ。――四邊がふと或るしめやかな心もちになる。半三郎と吉次郎行きかける。）

淸吉　ああ、吉つあん、吉つあん。（呼びとめる）

吉次郎　（振り返る）何だい。

淸吉　――よろしくね。

吉次郎　なぐるぜ、眞實に――（這入る。――その前後に、將棋をみてゐた通りがかりのものが一人づつ、あんまり氣がつかないやうに去る）

長太郎　（間）吉公彼奴、すつかり面喰つてゐやあがつた。

淸吉　一たい何ういふ筋なんです。

長太郎　なんだ、お前知らねえのか。

淸吉　なんにも知りやあしないけれど、多分吉つあんのことだから。

長太郎　大きにな。――天新にこのごろ、出もどりの女が一人來てゐるだらう。

淸吉　あああの一寸色の白い、――親爺の姪だとかいふ――

長太郎　さうさうあれさ。

淸吉　ああ あれですか。――だけど何だつていふぢやありませんか、あの女あれで、三つとかになる子供をかかへてるんだつていふぢやありませんか。

長太郎　さうだらうさ。とにかく三年――（ふと考へて）いいや四年だ、――丁度四年あとに嫁に行つたんだから。兩方がもう、焦がれに焦がれて一しよになつた夫婦でね、それこそ死ぬの生きるのつていふやうな騷ぎをして、――間に這入つて邪魔をする奴もあつたのさ。とにかく隨分苦勞をして一しよになつた奴よ。

淸吉　へええ――だけどそれがまた、何うして別れて歸つてくるやうなことになつたんでせう。

長太郎　なあに、別れたんぢやあない、亭主がこの春死んだんだ。――それで仕方がなく歸つてきたんだ。

淸吉　死んだんですか。

長太郎　腕のいい鼈甲職人でね。――音なしい好い男だつたが。

淸吉　それで、男の方の身寄つていふやうなものは、べつに何んにもないんですかね。

長太郎　それがその男が、一たい子供の時分に兩親ともなくした男でね、――親方のところへ引取られて親方のと

ころで育つたやうな譯なんだから、身寄といつてはなんにもないんだ。

清吉　（しみじみと）――さうなんですか。――だけどなんですね、子供の時分からそんなに苦勞をして、女房を持つにもまあいろいろ苦勞をして、――しかし今になつてみると、そんな種々な苦勞がみんな夢みたやうなものだつたんですねえ。

長太郎　さうだよ、――考へてみりやあ、まつたく夢みたやうなもんだよ。

庄吉　それで、その內儀さんは一たい幾つになるんです。

長太郎　さう、――あの時分が十七か八だつたんですから、いまは二十一か二、たしか二でせうよ。

庄吉　今年はどうも、二十一、二といふところは、女はよくないやうですね。――この間阿母に死なれた表の三崎屋の娘、あれがやつぱり今年二十二ですからね。

清吉　ああさうですか。――だけど三崎屋のお藤さんなんかは、家が家なんだから何があつたつてそれほど何ぢやありません。――それより二十一や二で、子供をかかへてゐたら、一寸何うにもならないでせうねえ。

長太郎　しかし天新の親爺は歸つてきたんで結局喜んでゐるだらう。――なあに子供なんかは二兩か三兩の里扶持で里にでもやつてしまへば幾らでも始末はつく。――吉公ぢや仕樣がないが、吉公より金のある奴で、吉公のやうな親切な淫亂が世間には澤山あるからね。

清吉　天新の親爺つて、そんな奴なんですか。

長太郎　あの親爺と來たら、そりやあ喰へたもんぢやありやしねえ。――今はまあ、とにかく一軒見世を持つてるから、さう以前のやうに下らない眞似もしなくなつたが、以前はもう町內の厄介もので、下らねえ因緣はつけてあるくし、强請がましいことはするし、始終こそこそ善くねえ事をしちやあ、（一寸後ろを振返つて）いま頭髮を刈りに來てゐる初音の親方なんかに取つちめられてゐたもんだ。――いまのあの天ぷら屋の見世だつて、あれは何なんだ。もとをただせば初音の親方に持たして貰つたやうなものなんだ。――（ふと聲を低くして）それを初音の親方が今のやうな身體になつたつて、このごろぢやあ足踏もしねえ奴なんだからね。――そりや理窟のわからねえ不人情な奴よ。

清吉　さうなんですかねえ。――一寸見ると、なんだか拔けてるやうな顏つきをしてゐますがねえ。――それぢやあ、その娃つて人はなほ可哀想だ。とても浮いた沙汰どころの話ぢやない。――しかし、何うして長さんはそんな色んなことを知つてゐるんです。

長太郎　何うしてつてお前、俺は以前橫町の油屋の裏で、

しばらく天新の親爺と壁一重となりに住んでたからさ。

清吉　（さも思ひがけないやうなことを聞いたやうに）へええ、——さうですか。

長太郎　（間）　その時分から見ると、隨分ここいら近所も變つたよ。

庄吉　さうでせうねえ、——私がこの近所へ越して來たのは、つい一昨々年なんですが、それでももうなんですからね、越して來た當時のことを考へると、眞實に怖いほど變つてしまひましたからね。

長太郎　おやお前さんが越してお出でなすつた時分には、まだ中田屋が見世をあけてゐたでせうね。

庄吉　ええええ、まだまんまんと立派に商賣をやつてました。——私がはじめてこの近所へ來て借りた家は、河岸通りの、中田屋の家作だつたんです。

長太郎　河岸通りといふと、彼處の——いま三崎屋の所有になつてゐる——

庄吉　ええさうです、彼處です。——ところがさうすると、ぢきにだんだん妙な噂がきこえて來ました。——しかしとにかく、あれだけの大家ですからねえ、まさかと思つてゐると、——すると一年立つか立たないうちに、がらがらつと來てしまつたもんです、——驚くよりも何よりも、なんだか周圍からみてゐると、いよいよあの見世を締められたときには、嘘のやうな氣がして仕様がありませんでした。

長太郎　まつたくね、あればかりは、考へりや考へるほど、嘘のやうな氣がするばかりですよ。そりやあ、大分親指が撒き散らすつていふことは前から聞いてたけれど、大抵撒いたんぢやあ撒き切れないと思つてましたからね。——ところが、見世をしめたとなると、わづか半月かそこいらの間にそれが賣物になる。——一しよに今戸の寮まで賣物に出たと聞いたときにはまつたく驚いたよ。

清吉　しかし眞實に使ひ潰してしまつたんですかねえ。

長太郎　それがさ、——噂によると、すこし身上にめりが見えてきたとき、慌ててそれを取返すつもりかなんかで、株へ手をだしたといふんだがね。——それでまあ却つて終りを早くしたといふんだが、——なるほど此奴はさうありさうな事だよ。

庄吉　すこし屋體の大きな家が工合が惡くなると、ぢき急にばたばたと行つてしまふのは、みんなそれで失敗するんださうですね。

清吉　だけど、夢中でどんどん使つてゐるうちに、だんだん身上が減つて來るばかりつていふことがわかつたら、一たいどんな氣がするでせうねえ。

長太郎　さうなつたら、半分もう自棄で、何んにも解つた

もんぢやあないと思ふがね。

庄吉　これは吉原の幇間が話してゐたさうですがね、一たい中田屋の大將は男の藝人が好きで、役者は勿論のこと落語家や講釋師を贔屓にして、始終何處へ行くんでも二三人づつはきつと引張つてあるいてゐたんださうですね。――この、藝人の世話をして、いろいろ面倒を見てやつたことだけでも、つもつてみたら生易しいことぢやあないさうですが。――何んでも、中田屋の大將のおかげで、名題になつた役者や、眞打になつた落語家や講釋師が、勘定したら隨分あるだらうつて話ですがね。

長太郎　なるほどね、――さう聞いてみると、あの大將、何處か當り前の道樂ものとは氣合がちがふところがありますね。――とにかくあんなに落ち目になつても生れた土地を離れないといつていまに平氣で土地にゐるところなんか、一寸此奴は眞似のできない藝だからね。

清吉　私は知らないうちは何んとも思はなかつたが、以前のことを聞いてからは、あの旦那と、（一寸聲を低くして）あの初音の親方の顏をみると、なんだか涙が零れるやうな氣がして仕樣がありませんよ。

庄吉　こんな事をいつてるうちに、大きにまた今度は三崎屋が何うにかなるやうな日が來ないとも限りませんからね。

長太郎　しかし三崎屋は、儲けるばかりで肝心の使ふ奴がゐないから、一寸此奴は當分は六かしいだらう。

濱吉　ええ面倒臭い。（藪から棒に將棋の盤の上を掻きまはす。――長太郎も清吉も庄吉も話をやめてふり向く）

長太郎　何んだい、藪から棒に、氣ちがひみたやうな奴だな。

濱吉　（緣臺から下りかけて）何が下らないつて、世の中に將棋つ位下らないものはありやしない。

茂介　（笑ひながら――駒を箱のなかへ纏めながら）幾らやつても敵はなければ、世の中にこれほど下らないものはないよ。

濱吉　きいた風なことをいひなさんな。――將棋ぢやあ色は出來ねえよ。

長太郎　お前の清元ぢやあ、なほのこと出來ねえや。

濱吉　（緣臺から離れて）なんとでもいふがいいのさ、――清さんお待ち遠――。

清吉　清さんお待ち遠もないもんだ。――愚圖々々してゐたら、もうすぐ十一時ですぜ。

濱吉　まことに申譯がございません。いいから、ちよいちよいつと、手つとり早く剃つて置いて呉れりやいいや。

（濱吉をさきに、清吉見世のなかへ這入る。）

（間。入れちがひに、「おやすみ」「おやすみ」といふ

辭と一しよに、見世のなかから客が一人出てくる。――無言。そのまますぐに、空模樣を見るやうなことをしながら歸つて行く。）

（四邊がふとまたしめやかな、果敢ないやうにしめやかな心もちになる。）

（茂介は長太郎とまた將棋をさしはじめる。――しかしそこには、もう周圍に誰れもゐない。）

（庄吉は接穗がないやうにぼんやり立つて、見世のなかの時計をのぞく。）

庄吉　もう十時半まはつた。――（氣をかへて――長太郎に）ちやおやすみ、――おさきへ御免なさい。

長太郎　おやすみ。

（庄吉かへつて行く。）

（間。）

（見世のなかから、仕事著をきた銀次郎が一寸出て、茂介に辭をかける。）

銀次郎　茂スさん。親方を――

茂介　（ふり返つて）あい、承知。

（茂介すぐ勝負をやめて緣臺から下りる。銀次郎と一しよに見世のなかへ這入る。）

（間。長太郎は盤の上をながめて考へてゐる。――ちきに見世のなかから、音吉（六十七八）が大きな重い身體を茂介の肩に支へられて出てくる。老病で身體の自由がまつたく利かない。呼吸づかひも苦しさうに見える。――あとから一しよに銀次郎が出てくる。）

茂介　親方、すこしここで休んで行きませうか。

音吉　――（默つてうなづく）

（茂介、銀次郎と一しよにしづかに音吉を緣臺の上へ腰をかけさせる。）

銀次郎　今夜は家のなかにゐると蒸し蒸しするやうだけれど、そとへ出ると莫迦に冷やつくね。

茂介　もう二三日すりや九月だからねえ。（音吉のそばへ腰を下ろす）

長太郎　（音吉に）親方、今ばんは。

茂介　親方、五番地の長さんですよ。（そばから氣をつける）

音吉　（鈍い眼つきで長太郎の顏をみる）――ああ長さんか、暫らくだつたね。（舌のもつれるやうなところのある工合）

長太郎　ついどうも、じぶんにかまけて、――いつもごぶさたばかりして申譯がございません。――その後親方は身體の方の工合は――

音吉　ああ有難う。――相變らずさ。――どつちにしても俺の身體はもう駄目だよ。――早く死にてえと思ふんだ

けれど、どうも業が減しれえと見えて、死ぬことが出來れえ。

銀次郎 （横から） 戯談いつちやあいけません、親方なんかは、今まで他人の爲めなんかにさんざん苦勞をして來たんだから、これからは、當分今度は樂をして安氣に暮らすやうな順になつてゐるんですよ。

（茂介、この間に庄吉が置いて行つた縁臺の上の新聞をとり上げて讀みはじめる。）

音吉 何んだか知らないがね、このごろは毎日、晝間寢てばかりゐるよ。――朝飯を食ふと、すぐもうなんだか眠くなつてきて寢る。――晝だといつて起こされる。――それから晝飯を食つてお駒に新聞でも讀んで貰つて、それを聽いてゐると、だんだんまたうとうとと眠くなつてくる、――また寢る。――それで起きると、もう日が暮れてゐる。――今日も五時すぎに眼がさめて、それから茂スに湯に連れて行つて貰つてね、――さつぱりしたらなんだか序でに頭髮が刈りたくなつたから、それからすぐにまた此處へ連れて來て貰つた。――だけど、そんなに寢たら、夜寢られさうもなささうなもんだがその割りに夜は夜でまたよく寢られる。――どうしてかう寢られたもんだらうと思ふよ。

長太郎 （ふと返事に困つて） そりやあ何んですよ。――なまじつか眼がさめてゐて、下らない事を見たり聞いたりするより、始終寢てゐて、何んにも知らないでゐる方が、結局身體の惡いときは氣が休まつて好いんですよ。

音吉 でもな、あんまり寢られると、――寢てゐるうちにそのまんまぽつくり行つてしまふんぢやあないかと思ふよ。――こころ細い氣がするよ。

長太郎 そんな事があるもんぢやありません。

音吉 （すこし疲れてきた樣子――茂介に） おい茂ス、湯でも水でも一杯飲みてえ。

銀次郎 （すぐに見世のなかへ聲をかける） おい、親方にお茶を一杯持つて來て上げな。――（音吉に） いま持つて來ます。

茂介 （そばで） 濟みません。

（間。――見世のなかから、仕事着を著た小僧が盆の上へ湯呑をのせて持つてくる。茂介がうけ取つて、音吉にそれを飲ませる。）

（宗兵衞（四十八九）が悲しく醉ひ疲れて出てくる。――浴衣で、帽子もかぶつてゐない。――しかし一筋張りつめたやうな心もちを持つてゐる。）

（無言のまま長太郎の腰をかけてゐる後ろまでくる。――誰れも氣がつかない。）

宗兵衞 （銀次郎に） 親方、一寸ここを借りるせ。（縁臺

に腰を下ろす）

銀次郎　おや、旦那。——（長太郎も茂介も氣がつく）

茂介　（音吉に）親方、中田屋の旦那——。

音吉　中田屋の旦那——。（宗兵衛の顏をみて）旦那。

（呼びかける）

宗兵衛　（ふり返つてみて）なんだ、初音の親方ぢやあないか。

音吉　何處へおいでなすつた——。

宗兵衛　今日はね、晝間久しぶりで吉原の平孝の奴が遊びに來てね。——久しぶりだから早速まあ一杯初めてゐると、そこへひよつくり、きん生の奴がやつて來たもんぢやないか。

銀次郎　集りましたね。

宗兵衛　集つたね、——とにかくお客が二人、——それも選りに選つて好きな奴ばかり二人一しよになつたんだ。——話が彈んでね、——これから何處かへ出かけようつていふ事になつた、——すると平孝の奴がね、何處へ行つたつて、格別面白いところはありやしない。それより私の家へ行きませうつていひだした。——私が今度越してから、旦那はまだ一度も來て呉れないから是非つていふのさ。するときん生の奴が、其奴は是非お前のところへ行かうと贊成して、とうとうそれから平孝のところへ押しかけたものさ。——四時ごろから六時ごろまで平孝のところでまた飮んで、日のくれぐれにきん生と二人で引き上げた。——表へでて田町のところまで來ると、きん生の奴が、旦那、何處かへ行つてもうすこし飮みませうと言ひだした。——だつてお前は寄席があるぢやあないかといふと、なあに寄席なんか拔いたつて構はない、あんなものは拔く方が當り前だつていふやうな權幕でね、——それからとうとうまたきん生の馴染の、何んとかつていふ飮み屋へ行つたもんさ。——なかなかそこが乙な家でね、——酒が莫迦にいいんです。ところが其處へ來ると、きん生の奴がまた飮むわく。以前はからもう飮めない男だつたが、人間つてものは變れば變るものだと思つたよ。

（間。）

銀次郎　それからすぐ歸つたんですか。

宗兵衛　それからなんだ、——とにかくまあ其處はそれで勘定して表へ出るときん生の奴、なんでも家まで送るつていふ。——わざわざそんな事をしなくつてもいいから、すぐにお前は俥へでも乘つて家へかへれといふと、ぢやあお別れにもう一杯何處かで飮みませうといふ。——それから俺は怒つたね、——いい加減にしろ、ものには大概方圖つてものがある。ねえ、折角人がお前の身體を思

つて、俥へ乘つて歸れといつてやるのに、もつと飲まうとは何んといふ言ひ草だ、全體氣に食はねえ、俺はお前をそんな風に仕付けやしなかつた筈だ。――とね。するときん生の奴自分が悪るかつたから勘忍して呉れとあやまるんだ。――見ると、眼に一杯涙を溜めてるぢやあないか、――眼に涙をね、それからすぐ俥へ乘つて歸してやつた。だけど嬉しい奴ぢやあないか、親方。ええ。藝人が薄情だなんていふのは嘘の事だぜ。藝人つてものは――藝人らしい藝人つてものは、決してそんな薄情なものぢやあない。――俺は知つてるよ。――俺はよく知つてるよ。――薄情な奴つてものは、かへつて素つ堅氣の奴に多いもんだ。――ねえ親方、さうだらう。親方にはそれが解るだらう。

音吉 （間。――涙ぐましいやうな氣になつて默つてうなづく。）

（長太郎も銀次郎も茂介も、うたれたやうに默つて、宗兵衛と音吉とを見てゐる。）

宗兵衛 ねえ、話はすこしちがふが、三崎屋の家がさうだ。わづか二萬か三萬の錢が欲しいからつて、あの夫婦養子の成り上りが、たつた一人の眞實の血筋の娘を邪魔にすること。――以前のことを考へたら、あのお藤の娘に向つてあんな薄情なやうな眞似の出來る義理ぢやないんだ。もつと證據をいへつていふなら證據は手ぢかに澤山ある。――あらあねえ、親方。――全體素つ堅氣の奴等は氣に食はねえ。（ふと頽れるやうに横になる）

（間。――誰れも無言。）

茂介 （氣がついたやうに）親方、あんまり遲くなるといけないから、もう歸りませう。

音吉 ああ歸らう。（長太郎と銀次郎が手を貸して、茂介と三人がかりで、縁臺から音吉を立たせる）

長太郎 其處まで一しよに行かう。――（宗兵衛を見て）ああ、旦那がここへ寢てしまつたぜ。

音吉 風邪をひくといけねえ、起して上げな。

銀次郎 よございますよ、いま後で私が起しますから。

茂介 左樣なら、おやすみ。

銀次郎 おやすみ。

長太郎 おやすみ。

銀次郎 おやすみ。

（音吉、茂介と長太郎に兩方から支へられて歸つて行く。）

（間。）

（客が一人、見世のなかから出て來て歸つて行く。あとから濱吉が誰れのとも解らないやうな聲色を怒鳴りながら出てくる。）

濱吉　「峯の松風ざわざわと、耳やかましく俺の名を、問はれて何んの難波潟――。」

銀次郎　（ふり返つて）濱さんは眞實にいい氣なもんだぜ。

濱吉　（笑ひながら）「因果な緣の絲ぐるま。」つてね。

（濱吉が見世を出るとすぐ、清吉や新三やそのほか小僧がいろいろに手を分けて、見世を片付けはじめる。――入口には雨戸が入れられる。）

（舞臺がまつたく暗黑になる。――軒の電燈が、仄かにその四邊を照らしだすばかりになる。）

銀次郎　（緣臺のそばへ寄つて、宗兵衛を搖り起す）旦那、旦那、――（返事がない）旦那、旦那、こんなところに寢てゐて風邪をひくといけませんよ、ええ。

濱吉　どうしたんだい。

銀次郎　なあに、中田屋の大將が醉つてきてここへ倒れてしまつたんだ。――（起す）旦那、旦那。

宗兵衛　（ぼんやり眼をさまます。――暗いなかに身體を起して、四邊を見まはす。銀次郎に）有難う、有難う。――有難う。

銀次郎　いいえ、こんなとこに寢てゐて、風邪でもおひきになるといけませんから。

宗兵衛　（まだ大分醉つてゐる。――下駄を穿き直して緣臺から離れる）もう何時だらう。

銀次郎　もう十一時すぎました。

宗兵衛　とんだ邪魔をしてしまつた、――明日でもいづれあやまりに來ます。

銀次郎　どういたして。

宗兵衛　ぢやあまあ、おやすみ。

銀次郎　おやすみ。

（宗兵衛、悲しい足どりで夜露に濡れながら一人歸つて行く。銀次郎と濱吉。ふと默つてそのあとを見送る。）

（戶のくぐりをあけて、仕事着をぬいだ清吉と新三ともう一人小僧が、湯に行く手拭を持つて出てくる。――くぐりの中には灯火が暗くついてゐる。）

清吉　（空をながめて）棒屋の親方には氣の毒だけれど、此奴はどうしても明日はくどいな。

銀次郎　危ねえもんだとも。

清吉　一寸湯に行つて來ます。

銀次郎　今夜は遲いんだから、歸りに遊んで來ちやあいけねえぜ。

清吉　ええ、すぐ歸つて來ます。

新三　行つて來ます。

小僧　行つてまゐります。

濱吉　待ちねえ、待ちねえ。一しよに行くから。

（四人入る。――濱吉の何かうたふ唄がきこえる。し

かしぢきにそれは遠くなる。銀次郎しばらくして、くぐりのなかへはひる。）

（間）

（遠くから支那蕎麦屋のチャルメラの音がきこえはじめる。——斷えてはつづき、斷えてはつゞいて、その音がだんだんちかくなつてくる。悲しいやうに赤い行燈をつけた屋臺がぢきに舞臺へ出てくる。「銀床」の家の横のところへ屋臺がとまる。）

（通りがかりのものが一人、その屋臺の前へ立つ。）

（やや長き間。——この間に、舞臺の上の心もちが、まつたく今までと變つたものになつてしまはなければならない。）

（客が入ると一しよに、ぢきに屋臺も入る。——またしばらくチャルメラの音が悲しくつづく。）

（やや長き間。）

（お藤（二十二）出てくる。しなしなとした、さうして疲れた様子で。——そのまま河岸通りの方へ行く。やや長き間。）

（チャルメラの音まつたく聞えなくなる。——調子の外れた聲で柳の佐和利のところをうたふのがだんだん近づいてきて、清吉や新三が湯から歸つてくる。）

新三　（唄つてゐる）よおい／＼、よおいとな——。

（三人縁臺の上に腰を下ろす。）

新三　（しきりに唄ふ）「——母は今を限りにて、もとの柳に歸るぞや——必ず草木成佛と——」

清吉　「おいとこさうだよ——結の言葉に、伊勢屋と言いたよ——」（縁臺の上に引つくり返つて、新三の唄ふそばからそれを混ぜつ返す。）——眞つ暗ななかで、やがて三人が一しよに繰り返し／＼この「おいとこさうだ」の唄を怒鳴り立てる）

（三崎屋の見世のものが二人出てくる。四邊へ氣を配りながら、そこへ通りかかる。）

三崎屋の見世の者　一寸新さん、妙なことを訊くやうだけれど、家のお藤さんを見かけなかつたかしら。

新三　お藤さんを——いいえ、知らないよ。

清吉　（起き上つて）お藤さんが何うかしたのかい。

三崎屋の見世の者　お藤さんが先刻一寸表へ出たつきりまだ歸つて來ないんですわ。

清吉　こんなに遲くまで、一たい何處へ行つたんだい。

三崎屋の見世の者　何處へ行つたんだか解らないんだ。

新三　何うしたんだらう。

清吉　だつてこの頃すこし、お藤さんは身體が悪るかつたやうな様子ぢやあないか。

三崎屋の見世の者　なんだかこの頃は工合が悪るくつて、

四五日前まで寢てゐたんだ。

清吉　それで、今夜はお藤さんが表へ出るのに誰れも附いて出なかつたのかい。

三崎屋の見世の者　一寸表へ涼みに出てゐるうち居なくなつてしまつたんだ。――だから誰れも知らないんだ。

新三　ほんとに何うしたんだらう。

清吉　お藤さんはよく、横町の六藥さんのところへ行つてるぢやないか。――彼處へ行つてるんぢやあないか。

三崎屋の見世の者　お師匠さんのところへは先刻行つてみたんだけれど、今日は晝間一寸來たきり、今夜は來なかつたといふんだ。――ほんとに此處いらでも通るのを見かけなかつたかい。

清吉　俺たちはいま見世をしまつて、一寸湯に行つて歸つてきたばかりなんだがね、――どうも見かけなかつたなあ。――たいがい此處いらを通れば解るんだ。

三崎屋の見世の者　有難う。――ぢやあ一寸通りの方へ行つて見て來よう。（急いで行く）

新三　何うしたんだらう。

清吉　――どうも此奴は樣子がすこし變だぜ。

（舞臺の裏が急になんだか騷々しくなつてくる。それは明らかには聞えない。ただ何んとなくざわざわした心もちが傳はつてくる。）

新三　（ふと注意する）彼方の方になんかあるやうだぜ。

清吉　なんだまた喧嘩ぢやあねえか。（立ちあがる）

小僧　見て來よう。（驅けだして行く）

（間。――ざわざわしたやうな心もちがだんだん濃くなつてくるやうに思はれる。近所の者が一人急いで河岸の方から來かかる。）

清吉　初つあん。なんだい。

近所の者　身投げだよ。

清吉　え、身投げ――。

近所の者　三崎屋の娘だ。

清吉　三崎屋の――あ、お藤さん。

新三　（見世のくぐりをあけて家のなかへ聲をかける）親方、親方、――たいへんですよ。

銀次郎　（浴衣をきて出てくる）何うしたんだ。――何があるんだ。

清吉　三崎屋のお藤さんが身を投げたんです。

銀次郎　なんだ、お藤さんが身を投げた――。

（何處からともなく近所の者や通りがかりの者が一人二人寄つてきて、いつの間にか舞臺に清吉や新三や銀次郎と一しよに四五人の群が出來る。――「何うしたんだらう」「何うした譯なんだらう」といふやうな言葉がその中に低くとり交はされる。――舞臺の裏に動

いてゐた「喧騒」がいつか舞臺の上にも動いてゐる。）

（間。）

――幕――

雨空

登場人物

おせい　母親（登場せず）
おきく　お末の姉（すでに他家へ嫁付きたるもの。――二十四五）
お末　おきくの妹（二十二三）
幸三　指物職人（二十七八）
長平　淺草の芝居に出てゐる古い書生役者（四十四五）
使の男

淺草山の宿あたりのこころ。大通りよりすこし離れた新みち。おせい母子の住居。
八月上旬の曇つて暗き宵。八時ごろ。おせいの留守で二三日身體の工合を惡くしたお末が、床の上にすわり三味線を出して、思ひつくままのものをそぞろ彈いてゐる。それにはかかはりなく、長平は、壁に凭りかかり、新聞の拾ひ讀みをしてゐる。――雨もよひの、蚊やりの匂が澱んで、時をり、冷めたい水のやうな風がどこからともなく忍び込んで來る。――よきところに影燈籠のかげが寂しい。

（――お末、上方唄の「菊の露」を彈く。）

間。

長平　（ふと顔をあげて）其奴、聽いたやうな三味線だな。
（こそくさいながら惜げのない言葉づかひ）
お末　（彈きながら）これ。
長平　ああ。
お末　鳥の聲鐘の音さへ身にしみて。――「菊の露」よ。
長平　鳥の聲鐘の音さへ身にしみて。――ああさうか、三味線出してよい機嫌ぢやなつて奴だな。
お末　思ひ出すほど泪がさきに、落ちてながるる妹背の川を。――あたしの好きな唄。
長平　これで、何だからね、澤市をやつたこともあるんだからね。
お末　（笑つて）定りいつてる。――あんたにいはせると、なんの芝居でもやらないものはないんだから。（三味線を下に置く）
長平　だつて眞實だから仕樣がない。
お末　でも、こなひだはこなひだで女形――袖萩をしたことがあるつていつたぢやないの。
長平　それはずつと前の話だ。――生國は越後の新發田で

洒落に芝居をしてゐる時分のこつた。（新聞を手から離す）――澤市をやつたのは、その、もう、ずつとあと、大したこれが役者になつて九州をあるいてゐるときだ。――忘れもしない、十一月の末、空つ風の飄々ふくさなかに大御難を喰つてね――命から〴〵飛びこんだのが岩井なにがしといふ女役者の一座さ。――壯士の方ではとらしの、書生役者の仲間には入つてゐるが、恥をいへば、これでも、團越の旦那の呼吸のかかつたことのある身體だ。――足のうらにはまだ檜の匂が殘つ てゐるんだ。――かう、まあ、いつたもんだ。

お末　でたらめねえ。

長平　とれ、どう思つたか、おみそれ申しまして相濟みません。ではどうぞといふことになつて、のつけに、此奴あてがはれたものが――何だと思ふ――大宅の太郎は目を瞬しつてしろものだ。

お末　（笑つて）まあ。

長平　さすがにすこし驚いたね。――ぎり〳〵結着、決して、もう、おかけ値のないところが、昨日まで「己が罪」のモリソン、「通夜物語」の平助。――乃至は「金色夜叉」の仕出しに出る孤兒院の先生をやらしたら、當時、どこにも眞似手があるまいといはれた奴が、これ覺えてゐ君さまの、袴も春の置染。――おぼろげたらぬ殿ぶりを。――幾らなんでも、此奴、莫迦でねえから氣がささあね。

お末　（笑。無言）

長平　だが、背に腹はかへられない、苦しくなればぬすつとでもする奴がある。――さう思つて肚を定めた。――ここを先途と思ひきり巧く演つたね。

お末　でも、鎌倉へ出たの。

長平　出たともさ。――何でも構はねえ、高飛車に出ればいいと思つたから、ふんだんに此奴が眼を剝いてみせたね。――いかさま切なるおことが心底、さほどに思ふ愛情をつてなことで、大した芝居を御覽に入れたのさ。

お末　お客こそ災難ね。

長平　ところが可笑しいや。――客はグッともいはねえ。

お末　（笑つて）あきれたんだわ。

長平　そんなんぢやねえ。――幕が閉つて、樂屋へ入ると、樂屋の奴らの扱ひがまづ違つたね。――親方々々つていやあがる

お末　眞個

長平　いいえ眞實。――眞實だよ。――それが證據には、それなり、此方はほんの腰かけのつもりだつたのを是非といはれて、するずるに、一年あまりその芝居にゐついちまつたさ。

お末　（無言）
長平　その一年あまり。――その間に隨分いろんなものをやつた。――光國のあとが、忘れもしない、白石噺の大黒屋惣六、そのあとが輝虎配膳の輝虎さ。――日本駄右衛門もやれば、蝙蝠安もやつた、――源藏もやれば、孫右衛門もやつた。――一度なんかは是非やつてくれといはれて俊寛をやつたがね。此奴にはてこずつた。幾ら器用でも、器用ばかりぢやあ此奴はこなせなかつた。
お末　よつぽど役者のゐない芝居なのね。
長平　ゐるにもゐないにも、どうにか恰好のついてるのは、座頭と、座頭の義理ある妹になつてる奴と、もう一人、敵役をやる婆さんと、それつきりだつた。あとは、もう、源氏ぶしつてもないがらくたの寄合。――なかへ入つてみて驚いたよ。
お末　その座頭つていふのは幾つぐらゐなの。
長平　さう。――その時分で二十八九。――三十にはならなかつた。
お末　若いのねえ。
長平　若いんだ。――それに縹緻がよかつた。――米花の弟子でね、しばらく三崎座にゐたこともあつたさうだが、なか〳〵、それは、しつかりした技倆をもつてた。わけても世話がかつたものが巧かつた。

お末　そんな人が、また、どうして田舍なんかに――。
長平　さ、さ、さ、そこだ。――好いた男にわしや命でも、なんの惜しかろ露の身のさ。
お末　御亭主があるの。
長平　もとは、何か、三味線彈きかなんかだつたらしい。――東京の人間だ。――三崎座にゐるときにでもいい仲になつて、そのまま、ずるずるに、つまりは旅にでも出たんだらう。――一しよにね。
お末　（うなづく――無言）
長平　三十七八の、みたところはあんまりドッとしねえ男だつたが、女は惚れてた。どうしてあんなにも惚れたものだらうと思はれるほど惚れてた。――煩ひでもしようものなら、それこそ、夜の目もねずに世話をした。――それも、晝間、芝居で散々身體をつかつたあげくだからね。
お末　まあ。――それで御亭主は。
長平　亭主のはうだつて、それは、思へば思はるるさ。――それほどにされればいかな亭主だつてまんざら邪慳にはしねえだらう。まして、その女のために、女房子まで捨ててかかつたのなら、此奴。――
お末　その人、ほかに、おかみさんがあつたの。
長平　專らさういふうはさだつた。――あんまりあてには

ならないがね。
お末　だけど――だけどいいわね。
長平　何が。
お末　苦勞したつて――好きな人と一しよに苦勞するのなら仕榮があるわ。（笑つてみせる）
長平　おつと、と、と、――あと二三日で結納をする人だよ。
お末　どうして。（顏をすこし染める）
長平　穩ならねえことをいふ。――そんなことをいふと、さも、外に何かあつて、今度の緣談が氣にでも入らねえやうにみえるぜ。
お末　さうなんだもの。
長平　（笑つて）きいた風なことをいふぜ。――そんな器用なことの出來るお末ちやんなら何にも心配はねえとさ。
お末　（笑つて）はばかりさま。
長平　だつてさうぢやあないか。（いひかけて、ふと、表の格子のあいたのを聞きつける）誰か來たやうだぜ。
お末　さう。（耳を傾ける）
長平　誰だらう。
お末　おつ母さんぢやあないかしら。
長平　幾ら、なんでも、まだ歸つて來やしないだらう。

（長平が立つて唐紙をあける。途端に、外から、おきくが入つて來る。）
おきく　今晩は。
長平　何だ、諏訪町の御新造か。
おきく　（お末の床のうへにゐるのをみて）あら、どうしたの。
お末　入らつしやい。
おきく　どこか惡いの。（垂れてさういひながらすわる）
お末　暑さにでもあたつたんでせう。二三日、なんだか腦が重くつて。
おきく　それはいけないね。
お末　いいえ、そんな、大したことはないんですよ。
おきく　でも、今月になつて、惡くあつかつたり冷しかつたり――なんだか陽氣がハッキリしないから。（なかば長平にかけていふ。）
長平　ふるなら降るで、いつそ、ざあつと一杯來てしまへばいいんだが。――なんだかふんぎりがつかねえもんだから。
おきく　うちでもね、臺所の女中が、これは脚氣だけれど、この間つから矢張工合が惡くつてね。
お末　まあ。――それぢやあたいへんでせう。
おきく　大勢手があるからいいやうなものだけれど、でも

なんだか、ごたごた片附かないやうな氣がしてね。

お末　さうでせうつて。

おきく　だもんだから、來よう來ようと思ひながら、つい、何してしまつて。——今日は、いま、急に用が出來て、山谷まで來たから、ついでに、ちやうどいいから一寸寄つてみたの。

お末　いいえね、おつ母さんも、姉さんに相談することがあるから、一度行く〳〵といつてながら、いろいろ人が來たりなんかして。——そのうちに、こんな、あたしが寢るやうになつてしまつたもんですから。

おきく　（そこらをみ廻すやうなこころで）それで今夜は？

お末　おつ母さん？

おきく　ああ。（うなづく）

お末　何ですか、晝間、使の人が來て、燈火のつきぎはに末廣町へ行きました。

おきく　末廣町へ。——ああさう。

長平　さうとは知らず、此奴が、通りがかりにふらふらと寄つたのが身のつまり。——いいところへ來た、長さん、病人一人だからすこしゐてやつておくれ。——たちまち留守居仰せつかりさ。

おきく　だけど芝居は。——おやすみなの。

長平　樂屋に一寸ごたごたがあつてね。——疾うに出るはずの初日がまだ出ない。

おきく　よくごたごたする芝居ね。

長平　まあ長え正月はないだらうね。——ところでお客さまにお茶をあげるんだが。

お末　そのお茶はもう出ないかも知れない。——長さん、濟まないけれど、いれ替へて頂戴。

（長平猪牙がかりに立たうとする。）

おきく　ああ、もう、わたしなら澤山。——山谷で、いま散々飲んで來たんだから。

お末　でも。

おきく　いいのよ。——長さん、ほんとにいいのよ。——（笑つて）自分のうちへ來て遠慮しやしないわよ。

長平　では、まあ、御隨意に。——そのはうが此方も立たなくつてすむ。（立ちかけたのをまたすわる）

お末　ああ、さうだ。——お茶なんかよりもいいものがあつた。——長さん、やつぱり立つて。

長平　なぜ。

お末　臺所の、鼠入らずの上の棚にいいものがあるから持つて來て。

長平　鼠入らずの上の棚。——ハテ何だらう。

お末　あんたにもお相伴させるわよ。

（長平、立つて、臺所のはうへ行く。）
おきく　なあに。
お末　姉さんの好きなもの。
おきく　好きなもの。——何だらう。
お末　好きでも、でも、今年はいつものやうに喰べられないでせう。
（間）
（長平、二つに割つた西瓜を盆の上にのせて、庖丁を添へて、持つて出る。）
長平　持つて來たぜ、持つて來たぜ。
おきく（みて）ああ西瓜。
お末　めづらしいでせう。
おきく　あんまり緣がないわ。
長平　こんな乙なものを、どうして、世間の奴らは安くあつかふんだらう。（盆をおきくの前に置く）
おきく　さういふわけでもないんだらうけれど、年寄のあるうちだと、やつぱり大事をとるからね。
お末　長さん、つけるものを持つて來て。
長平　ああさうだ。——忘れた。（立つて、また、臺所へ行く）
お末　姉さん、どう。——あがらない。
おきく　有難う、——御馳走になるわ。（庖丁をとり上げる）お前さんは何う。
お末　あたし。——あたしは結構。
（おきく、西瓜を切りにかかる。——長平、小皿に鹽をいれて持つて來る。）
（間。）
（二人、喰べにかかる。）
長平（頰つて）うむ、此奴はうめえや。
おきく（箸の脚で種をとりながら）いい西瓜ね。
お末　だけど、それ、うまいことはうまくつても喰べるのが大へんでね。
長平　それは仕方がない。——此奴は、かうやつてみえもかざりもなく、かぶりついて喰ふところがいいんだ。——さうして、かう、一々種を吐き出すんだ。
おきく　わたしたちは、まさか、さうも出來ないけれど。
お末　でも、姉さんでも、以前には。——よく、それで、幸さんにいはれたぢやありませんか。
おきく　だつて、お前、それは。——（笑つて）年の行かない時分は。
お末　いいえ、さうでもなかつたわ。——いつだつたか、あれ、瓦町のお師匠さんが來て、おつ母さんとしきりに話をしてゐる間、臺所で、ちやうど八百由の持つて來た西瓜を、姉さんと二人でこつそり內職してゐるとき、幸

さんが來て、そのときも、姉さん、いはれたぢやありませんか。
おきく　（輕く）さうだつたかね。
お末　あれが、ちやうど、千原屋さんからはじめに姉さんに縁談のあつたとき。――だから、あたし、覺えてる。
おきく　さうだつたかしら。
お末　ええ、さうよ。
長平　さういへば何だつていふぢやあないか。――幸さんは大阪へ行くんだつていふぢやあないか。
お末　ええ。――誰に聞いて。
長平　此間、ここのうちで聞いた。
お末　ああさう。
おきく　（ふと思ひがけないやうに）そんなことがあるの。
お末　ええ。――姉さんにまだいはなかつたかしら。
おきく　いいえ、聞かない。――どういふの。
お末　どういふつて。――上方へ行くことになつたのよ。
おきく　何日。
お末　近いうちに。
おきく　あの遠くへ出ることの嫌ひな人が、よく、ま、出かける氣になつたわね。――叔父さんとでも一しよ。
お末　いいえ、姉さん。――一人よ。
おきく　一人。
お末　上方へ行つて。――ずつと、もう、行つたつきりになるのよ。
おきく　すぐにかへつて來るんぢやあないの。
お末　早くつて三年。――悪くすると、十年ぐらゐ、もうかへつて來ないかも知れないんですつて。
おきく　どうして。（手に持つたものをしづかに下に置く）
お末　あつちへ行つて仕事をするんですつて。
おきく　あつちへ行つて仕事を。――だつて可笑しいぢやあないか。
お末　ええ。――可笑しいと思ふんですけれど。
長平　全體、幸さんといふ人は、箱常の、行く行くは親方のあとに直るはずの人。――此方とらはさう思つてたがね。
おきく　世間では、みんな、さういふやうに思つてるけれど、べつにさういふわけでもなくつて。――ことによると、箱常の、叔父さんのはうにはさういふつもりもあるかも知れないけれど、それにしても、幸さんは、どのみち、自分のうちを立てなければならない身體だから。
長平　はてね。
おきく　さうとしても、あの人が、東京を離れるつてことはない。
お末　これが二三年まへなら、また、叔母さんとの折合が

いけないといふこともあつたけれど、このごろでは、もう、叔母さんはゐないし、叔父さんと二人のほんとの水入らず。――ほかのお弟子たちは、お弟子たちで、幸さん幸さんとあの通り、皆、懐いてゐるし。――なんにも不足なことはないと思ふんですけれど。

長平　芒尾花はなけれども、世を忍び路の旅衣。――大きにそんな意氣なことでもあるんぢやないか。

お末　いいえ、幸さんにかぎつて、そんなことはないわ。

長平　でも、このごろは、あんまりさうでもないらしいぜ。

お末　いゝえ、それは、お酒は飲むけれど。――ただお酒を飲むだけよ。

おきく　（笑つて）駄目よ、長さん。――この人は幸さんが贔屓なんだから。

お末　あら。――さういふわけぢやあないけれど。

長平　其奴は、ま、戲談だが。――だが、知らない奴はさう思ふぜ。

おきく　（間）だけど、また、それを、叔父さんがよく承知したね。

お末　それが叔父さんは割合に平氣で。――幸の奴は、このごろ、調子がすこし狂つてる。――なんの、彼奴が、旅へでて辛抱が出來るものか。――半月たたないうちにかへつて來ることは分つてる。――さういつて、この間も、うちのおつ母さんと話してゐましたわ。

長平　（笑つて）多寡をくくつてるのはいいや。

おきく　（眉をひそめるやうに）そんなことをいつて、――半月たつてかへつて來なかつたら何うするだらう。

お末　かへつて來やしませんわ。――あの幸さんが、どうして、かへつて來るもんですか。――自分で育てながら叔父さんに、幸さんのあの强情が分らないんでせうか。

長平　形は大きくても、まだ、頑是はござりませぬさ。――親方の眼からみたら、幸さんだつて、まだ、子どもだよ。

お末　だつて、長さん。

おきく　いいえ、それはさうかも知れない。――うちのおつ母さんにしたつてさうだもの。

お末　さういへばさうだけれど。

長平　（述懐するもののやうに）だが、お末ちやんは嫁に行く、幸さんはゐなくなる。――ちよいと、此奴、こつちも當分さびしくなる。

（間。三人とも、ふと、口をつぐむ。――雨を含んだ風がながれるやうに入つて來る。）

おきく　（襟を掻き合せるやうにして）冷しいこと。

長平　明日はいよいよ降りか。

おきく　この工合ぢやあね。――（心づいたやうに）それ

はさうと、もう、何時だらう。
長平　さあ。——もう、そろそろ、九時だらう。
お末　（時計をみる）九時——七分前よ。
おきく　大へんだ。——わたしはかへらなければ。
お末　まだ、いいでせう。——そのうちには、もう、おつ母さんもかへつて來ますわ。
おきく　でも、今夜は、九時までにかへるつもりにして來たから。——うちへかへつて、まだ、いろいろ用がある。
お末　大へんね。——でも倖でせう。
おきく　倖。
長平　なら、一つ飛だ。
おきく　でも、かへるわ。——明日。——明日は來られない。——明日は來られないけれど、二三日うちに、また、出直して來るわ。
お末　さう。
おきく　今夜は、ただ、その後あのはうが何うなつたかと思つてね。
お末　ああさう。——いろいろどうも。（頭を下げるやうな心もち）
おきく　で、結納は。——何日にきまつて。
お末　六日とかいつてました。
おきく　六日。——（繰つてみて）明々後日ね。
お末　今夜、末廣町は、そのことなんでせう。
おきく　さうだらう。——（氣をかへて）ぢやあ左樣なら。——御馳走さま。（立ちあがる）
お末　さうですか。
おきく　あ、それから、大切になさいよ。
お末　ええ有難う。——明日は起きます。
おきく　輕はずみをしないはうがいいわ。——もう大丈夫。
長平　大切な身體だ。
おきく　さうよ。ほんとに大切な身體だから。
お末　ええ。
おきく　ぢやあ、長さん、左樣なら。
長平　どうも、まことに。（立ちあがる）
おきく　（どこかで蟲のないてゐるのが聞える）よくないてるわね。——うちの？
お末　いいえ、裏の家の。
おきく　あら、さう。
（おきく、そのまま、出て行く。——お末も、長平もあとから送つて出て行く。）
（やや長き間。——蟲の音が誰もゐない舞臺のうへに澄む。）
（臺所のはうへの通ひ路の障子があく。幸三が入つて來る。すこし醉つてゐる。——悄ましげに柱に凭る。）

（お末をさきに、長平、座敷にかへつて來る。）

お末　（幸三のゐるのをみて）あら。

長平　何だ。——何時來たんだ。

幸三　今しがた。（笑ふ。——惱ましさが隱れる）

お末　ちつとも知らなかつたわ。

幸三　表へまはるのが面倒だから裏から入つて來た。どうだね。今日はすこしはいいかね。

お末　ええ有難う。——今日は、もうすつかり。——今夜は顏のいろがいいでせう。

幸三　うむ、どうにか人間らしいや。——おつ母さんはまだ歸らないかい。

お末　よく知つてるわね。

幸三　知つてるさ。——神田へ行くといつて、先刻、店のまへを通つた。

お末　何とかいつて？

幸三　長さんが留守をしてゐるから行つてみろ、さういつてつた。

長平　そんなら早く來てくれればいいのに。

幸三　なによ、そのつもりで外へ出たところ、途中で、ちよいと、新公のところへ引つかかつたもんだから。——一とくち附合つたんで遲くなつた。

お末　そんなことをしてるんですもの。——だから、先刻、評判がわるかつたわ。

幸三　誰に。

お末　姉さんに。

幸三　（ふと無言）

長平　今夜は、いままで、お菊さんが來てゐたんだ。

幸三　さうかい。

お末　ほんとの入れちがひ。——もう一足だつたのよ。——（長平に）ねえ。

長平　さう。——表から來たら角ぐらゐでぶつかつたらう。

幸三　そんな評判の悪いところなんかへ飛込まなくつて仕合だつた。——長さん、どうだ、こなひだの仇をうたれてやらうか。

長平　討たるるこころであらうかな。——よし、やらう。

（長平、立つて、將棋の盤を持つて來る。幸三のまへに置く。）

（間。）

（格子があいて表へ誰か來る。——お末が聞きつける。）

お末　誰か來たやうよ。

長平　（駒をならべながら）おつ母さんだらう。

お末　さうぢやないらしい。——何かいつてよ。

長平　何かいつてる。——其奴はないだらう。——（大き

な聲で）何誰。
（長平、いひながら立つて行く。――ぢきに手紙を持つてかへつて來る。）
お末　誰。
長平　使が俺んところへ手紙を持つて來たんだ。（立つたまま封を切つて讀む）
お末　どこから來たの。
長平　芝居の奴からだ。（さういひながら、返事をしに表のはうへ行き、すぐに、また、かへつて來る）――ちよいと俺は、濱川まで行つて來るぜ。
お末　どうしたの。――用でも出來たの。
長平　四五人で何か寄合をつけてる。――相談があるから直ぐに來いつていふんだ。
お末　でも、よく、ここにゐるのが分つたわね。
長平　方方探したらしいや。――どこを探してもゐないんで、とどのつまり、ここへ來たんだらう。
幸三　手數をかけせさる。――大した流行つ妓だ。
長平　（笑つて）中貰ひで一寸行つて來るぜ。
お末　留守番だから早くかへつて來なければ駄目よ。
長平　それは後釜が出來たから安心だ。
お末　あら、それはいけないわ。
長平　紛紜をいいことに飲んでるんだ。――なに、すぐにかへつて來るよ。
幸三　危えもんだ。
長平　大丈夫。――きつと、すぐ、かへつて來る。かへつて來てその勝負をつける。――首を洗うて義家お待ちやれだ。
（長平、笑つて、そのまま出て行く。）
（間。）
（二人とも、ふと、無言。――あたりが繼穗のないやうに白ける。――幸三、何といふこともなく、盤の上の駒をうごかす。）
（間。）
（お末、床のうへを離れて、茶簞笥のそばに寄る。茶を淹れにかかる。）
幸三　（みて）何だい、茶を淹れるのか。
お末　ええ。
幸三　俺ならいいぜ。
お末　ええ。――でも、もう出ないから。
幸三　そんなら俺は水のはうがいいや。
お末　さう。――ぢやあお冷にしませう。（立ちかける）
幸三　だけど、いいぜ。――病人が、そんな、働かなくつたつて。
お末　大丈夫よ。――あしたは、もう、起きるつもり。

（お末、臺所へ行き、大きな湯呑に水を滿たして持つて來る。――幸三のそばに置いて床のうへにかへる。――このあたり、すべてたとへば兄に仕へる妹のうそのなき心もち。――それに對して、幸三にも、妹を見る兄の厚きいたはりあること。）

幸三　（水をのみ干す。――湯呑を持つたまま）ああうまかつた。

お末　もう一つ上げませうか。

幸三　もう澤山だ。

お末　さう。――どうぞ御遠慮なく。（笑ふ）

幸三　（湯呑をみて）この湯呑も古い湯呑だな。

お末　覺えてて。

幸三　覺えてるとも。――此奴で、始終、ここの死んだお父つあんが熱い奴を引つかけてゐたんだ。

お末　さうよ。――朝、仕事に行くときと、晩、かへつて來てからと。――仕事に行かないときにはお晝にも飮んだわ。

幸三　でも、まるで、醉つたところを此方とらにみせたことがなかつた。――いつも機嫌のいい顏をしてゐたね。

お末　ええ。――わたし、こんなだけれど、お父つあんのことだけは、今でも、ときどき思ひ出しますわ。

幸三　もう少し生かして置きたかつた。

お末　せめて去年ぐらゐまで。去年まで生きてたつて、まだ、六十にはなりませんでしたわ。

幸三　ならないとも。――やうやく五十八。――うちの叔父貴より三つ下だ。

お末　（間）お父つあんさへゐたら、姉さんだつて、あんな――あんなお金のあるところへなんか行かなくつたつて好かつたんですわ。

幸三　（無言）

お末　大工の娘が仕合せだといふけれど。――仕合せのやうで不仕合せですわ。

幸三　（話をわきに外らすやうに）どつちだつていいやな、そんなこと。――そんなことよりもこの盤だ。――此奴も古い馴染だぜ。（將棋の盤のうへに手を置く）

お末　さうね。――詰將棋だの、はさみ將棋だの。――姉さんには出來てもあたしには出來なくつて――莫迦でしたわね、あたし。――燒餅をやいて、よく、おつ母さんに叱られましたわ。

幸三　その代りには、どろぼう將棋にかけると誰よりも巧かつたからいいぢやないか。

お末　（笑って）さうでしたわね。

幸三　一つ、趣向をかへて、俺は將棋盤でも持ちこむかな。

お末　どうして。

幸三　これだつて、お前、莫迦には出來ねえ。世帶道具だぜ。
お末　あら。――それぢやあ約束がちがふわ。
幸三　なぜ。
お末　だつて、あたしがお嫁に行くときには、針箱は俺が拵へてやるつて以前からいつてたぢやありませんか。
幸三　さうだつたかな。
お末　忘れたの。
幸三　忘れた。
お末　ほんたうに？
幸三　（笑つて）噓だよ。――大丈夫だ。――忘れやしねえ。
お末　よかつた。
幸三　人手にはかけねえよ。――釘一つだつて俺が削るんだ。
お末　あたし、大切にしますわ。（寂しい響をもつ）
幸三　それが出來るまで。――それが出來たときに俺は東京をおさらばだ。
お末　ぢやあ幸さんは。――あたしがお嫁に行くところをみて呉れないんですか。
幸三　それがみられる位なら心配はしねえよ。（寂しく笑ふ）
お末　幸さん。
幸三　え。
お末　（間。――無言。――急に激しくたへられないやうに泣く。）
幸三　どうしたんだ。――ええ。――どうしたんだ。（お末のそばへ寄る）
お末　（間）あたしねえ、幸さん。――あたし。――あたしが今度。――今度、どうして、急に、お嫁になんか行くことになつたのか幸さんに分りますか。
幸三　何をいつてるんだな。
お末　あたしねえ。――あたし。あたし姉さんがうらやましい。
幸三　（無言）
お末　幸さんは、まだ姉さんのことを忘れないんでせう。
幸三　何をいつてるんだな。――そんな莫迦なことがあるものか。
お末　いいえ。――いいえ、駄目。――外の人は何ていつたつて、あたしには、――あたしには分りますわ。
幸三　（無言）
お末　姉さんが、去年、千原屋へ行つてから。――姉さんにあはないやうに〳〵とあなたがしてゐることも。――それもあたしは知つてます。今夜でも、姉さんが來てゐ

たんで、それで、わざと、裏から入つて來て（ふと幸三と顏を合せる）――いいえ、――あたしはすぐにさうだと思ひましたわ。

幸三　（無言）

お末　姉さんが千原屋へ行くとき。――何も、みんな、うちのためだとは思つても、――さう思つても、あたしは姉さんを憎いと思ひましたわ。幸さんの心もちも知つてるくせに。――幸さんを一人殘して、――姉さんもあんまりだと思ひました。――さう思ふと、あなたの、お店にゐても、どこにゐても、ときどき、默つて、ぢつと、下を向いてゐるやうなところが見えるやうな。――ひとりでに眼のなかが濡れて來ました。

幸三　（無言）

お末　そのうちに、だんだん、夕方なんか窓から表をみてゐると、いつのまにか、心が、かう、遠くのはうをみてゐるやうな、――あなたのそばへ行つてますの。――板を削つたり、切つたりしてゐるそばに附いて働いてるのが、姉さんのやうな、あたしのやうな。――氣がついて幾度、はつと思つたか知れません。

幸三　（無言）

お末　噓だ、そんなことは噓だ。――自分で一生けん命にさう思ひました。――でも、さうすればするほど、あとからあとからとまた色んなことが出て來て、何かなんだか、餘計、もう、分らなくなりました。――そのとき、これがもし幸さんのはうに知れたら。――ふつとさう思ひました。――あたし、呼吸がとまるかと思ひました。

幸三　（無言）

お末　妹のやうに――眞實の妹のやうに思つて吳れるのにそんな、――そんな間違つたことを考へて、莫迦な奴だと嗤はれたら。――わらはれるなら、――まだようござんす。そんな奴ならもう構はない。――もしかさうでもいはれたら。あたし、もう、死んだつて間に合ひませんわ。

幸三　分つた。――何にも、もう、いはなくつてもいい。

（泪ながれる）

お末　かんにんして下さい。（再び泣きくづれる）

幸三　（間）俺は姉さんが好きだつた。――約束もした。――だが、そんな――そんな約束なんか反古みたやうなものだと思つて斷念めようとした。――だけど、駄目だ。――斷念められねえ。ただ、お末ちやん、お前が、――お前が優しくして吳れるので立つ瀨が出來た。――俺は改めて、お前に、禮をいふぜ。

お末　（無言。――泣いてゐる）

幸三　その當座、柄にもねえ自棄をして、酒も飲んだ、遊

びにも行つた。――だが、酒を飲んでも、遊びに行つても、俺は深みへ篏らなかつた。――お前つてもののゐることを思ふと、お前つてものが深切にしてくれることを思ふと、酒を飲む窓もなければ、遊びに行く窓もなかつた。――そんなことをしちやあお前に濟まないやうな氣がした。――俺はお前にすまねえと思つた。
お末　(無言)
幸三　癪に障ることのあつたときでも、根性のヒン曲つたときでも、お前の顏をみると、すぐ、量見が素直になつた。――俺には親もなければ同胞もない。お前つてものが出來て俺ははじめて生甲斐が出來たんだ。
お末　幸さん。
幸三　すると、お前、今度の緣談だ。
お末　(無言)
幸三　話が定つたと聞いたとき、俺は、今までついてた燈火を急にふつ消されでもしたやうな氣がした。――俺はつくづく世の中が嫌になつた。
お末　(無言――泣く)
幸三　俺は、もう、東京にゐる窓はなくなつた。――みすみすお前のゐなくなるのを誰がみてゐられる。――俺が上方へ行くといひ出したのも無理はねえだらう。
お末　幸さん。
幸三　何だな。
お末　あたし……
幸三　もういいや。――よして吳れ。
(臺所のはうの障子があく。外からかへつて來た長平が「おわかれだ、おわかれだ」といひながら入つて來る。意識のあんまりハツキリしないくらゐに醉つてゐる。)
長平　(笑つて) おわかれだ。――さ、幸の字、おわかれに一杯飲まう。(幸三のそばにすわる)
(お末、急いで泣顏をかくす。)
幸三　どうしたんだ。長さん。――何をいつてるんだ。
長平　(笑つて) 何がつて、お前、可笑しいや。――急におわかれになつたんだから可笑しいや。――明日高崎へ乘打でえ。
幸三　何だ、旅へ行くのか。
長平　下らねえことにごつた返してゐるところなんか眞つ平だ。――東京ばかりが日は照らねえ。――久しぶりで、また、旅烏だ。
お末　まあ、長さん。
長平　(笑つて) お末坊は嫁に行く。――幸ちやんは上方へ行く。そこで俺も旅烏よ。これで怨つこがなくなつたのよ。

幸三　ぢきに——ぢきに歸(けえ)るんだらう。

長平　誰が歸つて來るものか。——だからもう當分あへねえんだ。一年たつて逢はれるか、二年たつてあはれるか、みとめのつかねえ旅の空だ。——さ、だから行かう。——だから一杯飮みに行かう。（幸三の手をとつて立ちかける。）

幸三　（長平い浴衣の濡れてゐるのをみて）何だ、濡れてるぢやあねえか。——降つて來たのか。

長平　降つて來た。——降つて來たつて構はねえ。——行かう。——さ、行かう。（幸三の手をとつて引立てろ）

幸三　うむ、行かう。——（お末に）もうおつ母さんもかへつて來るだらう。——俺はもう歸(けえ)るよ。

お末　（力なく）ええ。

幸三　（間）さ、行かう。

長平　行かう。

（二人、行きかける。）

（間。）

お末　幸さん。（呼ぶ）

幸三　（わざと何のこともないやうに）何だ、末ちやん。

（お末のはうをみる）

（間。——雨の降る音強く聞えはじめる。）

——幕——

心ごころ

人物

要太郎　仙臺屋（味噌問屋）の長男（三十四五）

謙次郎　同　次男（二十四五）

おたか　同　隱居（登場せず）（五十八九）

藤兵衛　おたかの弟（森田町の叔父、登場せず）（四十五六）

善造　もと仙臺屋の奉公人（四十六七）

伊之助　同　（三十七八）

おしげ　仙臺屋に古くゐる女中（四十二三）

おしづ　謙次郎の愛人（登場せず）（二十二三）

小料理屋「裏梅」の主人　（四十一二）

竹本島之助と呼ばるゝ寄席藝人（二十四五）

土州屋の旦那と呼ばるゝ島之助の客（五十八九）

外に醫者、看護婦、夜番、「裏梅」の小女、仙臺屋の店の者、車夫など。

その一

仙臺屋の裏手。（淺草聖天町附近）

十二月中旬。年の市すぎの曇りたる夜。九時ごろ。

土藏のかげに謙次郎がぼんやり立つてゐる。間。

露次ぐちからおしげが出て來る。

謙次郎　（人の出で來るけはひにそれとなくあるきかける。——が、それをおしげと知ると安心したやうに）おしげ。……おしげ……

おしげ　（探るやうにそのはうをみて）若旦那……（あたりに氣を兼ねながら側へ寄る）よつぽどお待ちになりましたか。

謙次郎　なアにそんなでもない。——十分ばかりだ。

おしげ　……（謙次郎の身形に目をつける）

謙次郎　（それを避けるやうに）どんな工合だ、おふくろは。
おしげ　えゝ。――矢つ張……
謙次郎　いけないか。
おしげ　はつきりなさいません。
謙次郎　この二三日、また、惡く寒いからな。――で、醫者はどういふんだ。
おしげ　心が大へんに疲れておいでだから。――あんまり氣をつかはせないやうに。――先生はそれをおいひになります。
謙次郎　（間）矢つ張お前がすつかりやつてゝ吳れるんだらう。
おしげ　看護婦さんとわたくしとで。
謙次郎　何だ、看護婦が來てゐるのか。
おしげ　……（うなづく）
謙次郎　其奴はよく／＼だな。
おしげ　それといふのも。――皆あなたのなさり方がお惡いから……
謙次郎　そんな奴があるものか。
おしげ　いゝえ、若旦那。――あなたさへお宅に御辛抱なされぱこんなことにはなりません。
謙次郎　またお前は話をそこへ持つて行く。――紋切型だ。
おしげ　でも、それに違ひなければ、あなた……
謙次郎　（强ひて棄鉢に）辛抱するにもしないにも。――てんで俺をうちへ寄せつけないんぢやアないか。
おしげ　それは、あなた……
謙次郎　それも是もあるものか。――森田町だの方々が心配してくれたつて兄貴はロクな返事をしないんぢやアないか。――それがいゝ證據だ。
おしげ　……（無言）
謙次郎　兄貴がうちにゐる以上。――兄貴とうまのあはない俺の安穩でゐられるはずがないぢやアないか。おふくろだつて考へたがいゝんだ。
おしげ　若旦那。
謙次郎　何だ。
おしげ　それは何をおつしやいますの。
謙次郎　……（無言）
おしげ　あなたのお身持。――あなたがお宅をお出になるときのいろ／＼の經緯。――あなたはわたくしが何にも知らないと思つていらつしやいますの。
謙次郎　……（無言）
おしげ　あとの、御隱居さまの御心配をお考へになつたら、あなた。――假りにもそんな……
謙次郎　分つてゐるよ。――いはれなくつたつて分つてゐ

る。

おしげ　分つておいでになるなら。――世間へ行つて、あんまり、御自分で御自分の箔をお剥しにならないはうが……（謙次郎の顔をみる）

謙次郎　……（無言）

おしげ　それがお話のお邪魔になりますから……

謙次郎　よしてくれ。――俺は、何も、お前の說法を聽きに出て來たんぢやない。それよりも手紙でいつて置いたことを。――その返事さへ聽けばいゝんだ。

おしげ　でも、是は……

謙次郎　そのうちに、また、それはゆつくり聽くよ。――こんなところにぐづ／＼してゐて、誰にみられてもあんまり恰好のいゝ圖ぢやアない。――早いことにしてくれ。

おしげ　（あきらめる。間。帶の間から封筒に入れたものを出して）では、おつしやつたゞけ……（今更のやうに、また、あたりに氣を兼ねるやうにして渡す）

謙次郎　有難う。――いつも無理をいつて濟まない。（うけとつて、そのまゝ、しごく無雜作にふところへ入れる）――使を寄越さうと思つたんだけれど。――いつも使でばかり何するから……

おしげ　……（無言）

謙次郎　兄貴は今夜は……？

おしげ　夕方、お出かけになつて、まだおかへりになりません。

謙次郎　さうか。――（氣をかへて）ぢやア俺は行くぜ。――おふくろにいゝやうにさういつてくれ。

おしげ　よろしう御座います。

謙次郎　それと體（からだ）のはうを大切にね――もし模樣が惡いやうだつたら、善公のところまでさういつて寄越してくれ。――善公が俺のゐるところを知つてゐるから。

おしげ　そんなこともないだらうと思ひますが。――平生あんまり御丈夫なはうでございませんから。

謙次郎　それだ、心配は。

おしげ　……（無言）

謙次郎　ぢやア、また。――（幾分自分をとりなすやうに）俺のことは案じなくつても大丈夫だよ。俺だつて少しは考へてゐる。

おしげ　どうぞね、若旦那。――仙臺屋といふお見世の名前も思つて下すつて。――あんまり、我（が）をお張りにならないで……

謙次郎　……（うなづく）

おしげ　では、お氣をつけなすつて。

謙次郎　ほんとに濟まなかつたな。

おしげ　何の、あなた。

（謙次郎、おしげのそばを離れる。——行きかけて一寸おしげのはうをふり返る。——そのまゝ入る。）

（おしげ淋しくそのあとをみ送る。）

（間。）

（夜番の拍子木の音近づく。——おしげ、露次のなかへ入る。）

（長き間。）

（夜番、出て來る。——拍子木を叩きながら露次のなかへ入る。——しばらくして、また、出て來る。——上手へ入る。）

（間。）

（謙次郎、出て來る。——おしげからうけとつて、たしかにふところへ入れたはずの金のみえなくなつたところでそれとなく、ふところをみたり、袂を探つたりしながら、もとのところまで歸つて來る。）

（間。拍子木の音遠ざかる。）

（謙次郎、落ちてゐるけしきもないので絶望する。——ぼんやり、何といふこともなく立ち盡す。）

（間。）

（誰か來るけはひに促されて、謙次郎、ぼんやりあるきかける。——下手から、要太郎、出て來る。）

（——双方知らずにすれ違ふ。）

要太郎　（すれ違つてからふり向く。——謙次郎と知つて）謙次郎ぢやアないか。

謙次郎　（呼ばれてすこしあわてる。——立ちどまる。——そつとふり返つてみる）……（要太郎と知つて無言）

（間。）

要太郎　どうした。

謙次郎　……（無言）

要太郎　どうした。……俺はお前にあひたいと思つてゐた。

謙次郎　……（無言）

要太郎　今夜も、お前のことで、實は森田町まで行つて來たのだが……

謙次郎　……（無言。——ふと要太郎の顏をみる。——が、すぐにまた眼をふせる）

要太郎　森田町でも、櫻木町でも、俺の心もちをまるで分つてくれない。——俺がいへばいふほど・——何かいへばいふほど話が喰違つてくる。

謙次郎　（無言）

要太郎　森田町でも、櫻木町でも——俺がお前を憎んでゞもゐるやうに思つてゐる。お前を憎くつて俺がうちへ入れないと思つてゐる。——あくまで桁がちがつてゐる…

謙次郎　でも、あなたは……

要太郎　……（口をつぐむ。——謙次郎の顏を見る）

謙次郎　すこしは世間をみるはうが當人のためになる。——森田町の叔父さんのまへで、はつきり、さういつたといふぢやアありませんか。

要太郎　（うなづいて）いつたかも知れない。——おそらくいつたらう。——何としてもお前は世間を知らなすぎると俺は思つてゐる。

謙次郎　……（無言。——うべなはない面もち）

要太郎　かういつたらお前は腹を立てるかも知れないが。——が、お前の知つてゐる世間は……お前のみた世間は茶屋小屋の窓からみた世間だ。——茶屋小屋の窓からみた多寡の知れた世間だ。俺たちのいふほんたうの……

謙次郎　（遮るやうに）さうぢやアありません。そんなことをいふんぢやアありません。わたしのいふのは……

要太郎　……（無言）

謙次郎　すこしは世間をみるはうが當人のためになる。——この一言から押しても——あなたがわたしを好く思つてゐないことは分ります。

要太郎　よくは思つてゐない。——無論よくは思つてゐない。

謙次郎　……（無言）

要太郎　お前のしたいろ／＼の仕だら。——ことに、うちを出る前後の、おつ母さんはじめうちのものみんなにお前のかけた心配といふものは並大抵ぢやアない。——お前にしてもそれは分つてゐるだらう。

謙次郎　……（無言）

要太郎　その仕切をつけるのが大事だ。——お前はどう考へてゐる。

謙次郎　……（無言）

要太郎　（間）森田町の話にはその見とめがついてゐない。——それが分らないから俺には森田町の話がうけこめない。

謙次郎　……（無言）

要太郎　俺がお前にあひたいと思つたのはそこだ。——お前にあつて、はつきり、お前の意見を聽きたいと思つたのだ。

謙次郎　……（無言）

要太郎　どう考へてゐる。——どういふつもりである。

謙次郎　どうも考へてゐません。

要太郎　……？（無言）

謙次郎　どういふつもりでもゐません。

要太郎　……（無言）

謙次郎　わたしは、たゞ、うちへかへることだけを、——それも周圍の人たちの種々心配してくれるのを無下にも出來ないから、それで音無しく、森田町の叔父さんのい

ふ通りうちへ返ることに――返つてもいゝと思つたゞけなんです。

要太郎　……(無言)

謙次郎　何もぐづ〳〵いはれて。――這ひつくばつてまで返らうとは思ひません。

要太郎　……(無言)

謙次郎　どうせやくざに持ちくづした體(からだ)なんです。――今から陰氣臭い帳場のなかにつぐなんでも始まりません。

要太郎　……(無言)

謙次郎　それも、なくてならない人間なら知らず、うちにはあなたといふ人がゐるんだから……

要太郎　(強く。――だが、しづかに)　謙次郎。

謙次郎　(全く反抗の態度で)　何です。

要太郎　(しづかに)　お前はなぜさう要もない意地を張る。

謙次郎　……(無言)

要太郎　要もない意地を張つて不貞腐れる。――なぜほんたうのお前をみせないのだ。

謙次郎　いゝえ。兄さん……

要太郎　(押へるやうに)　俺はお前を知つてゐる。――誰よりもよくお前を知つてゐる。――俺とお前とはきやうだいだ。

謙次郎　……(無言)

要太郎　なるほど俺は養子でお前は實子だ。――だが、お前のうまれたときにもう俺はうちにゐた。――俺とお前とは一しよに育つた。――死んだ年寄が決してそれをいはなかつたから、ものごゝろのつくまで、俺は、俺とお前と、ほんたうの、血を分けたきやうだいだとばかり思つてゐた。

謙次郎　……(無言)

要太郎　養子の、實子のと、お互ひの間をいろ〳〵にいひ出したのは世間だ。――義理があるのないのといひ出したのも世間だ。――俺たちの知つたことぢやアない。――底を叩けばお前にしたつてさう思つてゐるに違ひない。

謙次郎　……(無言)

要太郎　お前はかへりたくなくつても俺はかへつて貰ひたいと思つてゐる。――俺に親身な相談相手といふものゝないことはお前がよく知つてゐる……

謙次郎　それほどに思つてくれるあなたが。――あなたのいふことはわたしには分らない。

要太郎　(うなづいて)　森田町でもそれを俺に詰つた。――だが俺はお前に這ひつくばへとはいはない。――お前が自分でいふやうに這ひつくばつてかへれとは決していはない。

謙次郎　……(無言)

要太郎　同時に、また、お前のいふほどお前の體がやくざになつてゐるとも俺は思はない。

謙次郎　……(無言)

要太郎　いまゝでの仕だらをはつきりお前が惡いと思つてくれゝばいゝ。――惡いと思つてその償ひをさへしてくれゝばいゝんだ。

謙次郎　どうすればいゝんです。――分るやうにいつて下さい。

要太郎　いまゐるうちを出てくれ。

謙次郎　いまゐるうち……？

要太郎　いまお前が世話になつてゐるうちをだ。――いひかへれば一しよにゐるいまの女とわかれてくれ。

謙次郎　(不意にうたれたやうに)　そんな。――そんなことは……

要太郎　隱さなくつもいゝ。――俺は善造から聽いてすつかり知つてゐる。

謙次郎　(思はずむら／＼として)　善造がそんなことを…

要太郎　それがお前の惡いところだ。――聽くやうにして聽いたから善造も話してくれたのだ。お前が腹を立てることはない。

謙次郎　……(無言)

要太郎　野暮な、分らない兄貴だと思ふだらうが、あの女がそばにゐてはお前の立つ瀨がなくなる。――何としても先方に惡いものがついてをりますので。――あれほどお前を贔屓の、お前のためにならないことゝいつたら塵ほどもいはない善造でさへかういつてゐる。――かういつて心配してゐる。……

謙次郎　……(無言)

要太郎　かういつてもお前には分らないかも知れない。――お前にはあの新堀の母子の氣立のいゝことばかりしかみえてゐないから。――うしろで絲を引いてゐるものゝあるのに氣がつかないから……

謙次郎　……(無言。――半ば嘲けるやうに、半ば何か怖れるやうに要太郎の顏をみる)

要太郎　伊之助だ。――俺が去年足を刈つた伊之助だ。

謙次郎　……(無言。――安心したやうにも、また、何か不安心なものがあるやうにも)

要太郎　はじめお前を唆のかして横道へつれ込んだ男だ。

謙次郎　……(無言)

要太郎　お前はあの男に惚れ切つてゐる。――だが、俺は、肚のよくない男と思つてゐた。たくらみのある油斷のならない男と思つてゐた。――十二三から見世へ來て、年寄の手鹽にかけた人間と思へばこそ、俺は隨分眼をつぶつてゐたが、少し手證をみたことがあるから、去年、あ

あしてきつぱりと出入をさしとめた。――それ以來俺を目のかたきにしてゐる。

謙次郎　……(無言)

要太郎　根が如才のない男だから方々へ自分を哀れつぽく持ちかける。――哀れつぽく持ちかけては俺のざんそをあげる。――あることないこといひ散らす。――揚句がお前をつかまへていまのざまだ。

謙次郎　……(無言)

要太郎　お前さへつかまへて置けば先方(さき)は仕事がし易い。これほど先方にとつて屈竟な道具はない。――それはお前に分るだらう。

謙次郎　……(無言)

要太郎　女にわかれてくれといふことは伊之助と緣を切つてくれといふことだ。――割つていへばさうだ。――人形よりも人形使の話だ。

謙次郎　……(無言)

要太郎　どうだ。――お前のために、仙臺屋といふお前のうちのために思案をかへる氣はないか。

謙次郎　……(無言)

要太郎　俺はお前のうちといつた。――このうちは俺のうちぢやアない、お前のうちだ。――お前が主人のうちだ。――俺はたゞ年寄からお前へ行く間を――その途中しばらくをあづかつたゞけだ。

謙次郎　……(無言)

要太郎　どうにか今まで、年寄から渡されたものだけは手をつけずに持ちこたへた。――これで年寄への俺のつとめは濟んだ。――今度はこれをそつくりお前へわたす。――さうすれば、それでおつ母さんへの俺のつとめが濟むのだ。……

謙次郎　……(無言)

要太郎　(ふと寂しく)藁の上から貰はれて來て――この年まで厄介になつて來た俺だ……

謙次郎　……(無言)

要太郎　俺は、强情を張つて、たうとうこゝまで一人で通して來た。――このさきもこれでずつと通すつもりだ。だが、お前はさうは行かない。どうせ一人世話をするものを持たなければいけない。――女と、こゝでいまわかれても、好きなものなら、お前――二年でも三年でもして餘燼(ほとぼり)がさめたら、俺が改めて骨を折りもしよう。――善造からも聽き、外のものからも聽いて、およその次第は分つてゐる。……稼業(しやうばい)をした人間に似合はない固いところがあるやうだ。――あゝいふ風ならおつ母さんの氣にも入るだらう。

謙次郎　……(無言)

要太郎　森田町で聴いたらうが、おつ母さんはこの月はじめから工合を惡くしてゐなさる。――平生しつかりしてゐるだけに、かういふときは寂しさうだ。――話相手といつてはおしげだけだから。……

謙次郎　……（無言――ふと泪が眼に滲む）

要太郎　考へてくれ。――考へてもう一度算盤を置き直してくれ。――どつちがわらはれてもおたがひの恥だ。

謙次郎　……（無言）

（やゝ長き間。）

謙次郎　おそくなりますから……

要太郎　かへるか。

謙次郎　えゝ。

要太郎　引きとめて勝手なことばかりいつた。――惡く思はないでくれ。

謙次郎　……（無言）

要太郎　宵の口、大へんに暖いと思つたらすつかり曇つた。

（空を見る）

謙次郎　……（無言。――さそはれて同じく空をみる）

要太郎　少しだ。（紙入からなにがしかの札を出して謙次郎に握らせる）

謙次郎　そんな……（要太郎の顔を見る）

要太郎　外にゐたらいろ／＼と不自由だらうが、さきになつて、また、その不自由したことが何かの足しになるときもあるだらう。

謙次郎　……（無言）

要太郎　だが、酒だけは少し愼しめよ。――酒を飲むとお前は間違ひが多いから。

謙次郎　……（無言）

要太郎　さ、ぢやアわかれよう。――萬事は、また、善造のところへ行つて相談したらいゝ。

謙次郎　……（無言）

要太郎　あの男は、正直な、いゝ男だ。――うちのため、お前のためばかりを思つてゐる男だ、――お前が相談をかけてやれば必とよろこぶ。

謙次郎　（微に）えゝ……

要太郎　今年も、あと、十二三日だ。――一夜あけたら、また、此方でも手筈をするから。

謙次郎　えゝ、――それよりも、兄さん……

要太郎　……？

謙次郎　おつ母さんの……

要太郎　大丈夫だ。――それほどのことはない。

謙次郎　……（無言）

要太郎　氣をつけておいで。

（間。）

（二人わかれる。――そのまゝ要太郎は上手へ入る。）
（謙次郎、ぼんやりそのあとをみ送る。――ほんたうの自分に返つた悲しい心もち。――おのづと泪ぐまれて來る。）
（間。）
（遠く、また、夜番の拍子木の音。）

その二

「うら梅」と呼ぶ小料理屋の内部。（仲見世附近）
「その一」と同夜、十時前後。
（正面の入口、閉め切つた硝子障子のそとに白く裏梅を染めぬいた紺の暖簾がみえる。見世はすべて土間、短冊形の長い臺が二ところに並べてある。）
一つの臺には土州屋の旦那と呼ばれる老人が島之助と一しよに酒を飲んでゐる。一つの臺には、ずつと離れて、伊之助が一人で酒を飲んでゐる。――土州屋の旦那のはうは、醉つてもうとろ〳〵してゐるが、伊之助のはうはまだしつかりしてゐる。二三本の德利を前にならべて、みるでもなしみないでもなしに、土州屋の旦那と島之助のはうを冷かにみてゐる。――板場の、盤だの榮螺だのをのせた棚のかげに主人が夕刊を讀んでゐる。
（間。）
土州屋の旦那　（小音で）……ねぐら離れしほとゝぎす、子で子にあらぬみづからを、この年月の御養育。（首をぐつたりさせる）
島之助　（幾分伊之助のはうに氣を兼ねて）およしなさいよ、旦那。――みつともない。
土州屋の旦那　（顏をあげて）不味（まづ）いかい。――俺のは不味いかい。
島之助　結構ですわ。――結構ですけれど……
土州屋の旦那　（よくも聽かずに）さうか。――ただ、俺は、玉三つに淨瑠璃、好きだよ。また、お前さんの、今夜の出來が滅法好かつた。
島之助　（眉をひそめて）いやですよ、旦那。
土州屋の旦那　ほんたうだよ。――ほんたうに巧（うま）かつたよ。
――うそだと思つたら、お前……
島之助　もう結構。――それよりも、さ、もう一つ召上れ。（銚子をとる）
土州屋の旦那　有難う。――（自分のまへにならんでゐる猪

口をみて）さうか。（うなづく）ぢやアこれは一つお前さんにあげよう。

島之助　あら、それは……

土州屋の旦那　まア、そんなことはいはないで。——わたしは、もう、今夜はすつかり諦めだ。（さういひながら島之助から銚子をとる。——島之助につぐ）

島之助　あゝ、もう、そんなに。（そのまゝ猪口を下に置く）——あたしも今夜は。——（顔に手をあてゝ）赤くなつたでせう。

土州屋の旦那　外へ出ればさめちまふさ。（猪口をとつて口へ持つて行く）

島之助　……（それにはこたへないで、黙つて酌をする）

土州屋の旦那　（今度は黙つてつがせながら）……まだそのうへに妹まで、みづからを助けんと……（首をふる）——どうだね、もつと何か喰べないか……

島之助　あたしは、もう……

土州屋の旦那　何か、かう、飯の喰へるものでも。

島之助　御飯、頂きませんわ。

土州屋の旦那　喰べない？——さうか。——ぢやア俺も喰べない。

島之助　上れやアしませんわ。

土州屋の旦那　ぢやア、かうしよう。——代に何かおつ母さんへおみやげを持つて行かう。——ねえ、さうしよう。

島之助　ようござんすわ、そんなに。——外にいろ／＼あるんですもの。

土州屋の旦那　いゝよ、いゝよ。——お前は黙つておいで。——（献立を書いた板を引寄せて眼を配る）さてと。——何にしようか。——何にしようぞ。——（主人を呼ぶ）親方ア。

主人　（新聞を離して）へい。

土州屋の旦那　申兼ねましたが、一つ、甘鯛を折にお入れなすつて。

主人　甘鯛を。——かしこまりました。——お幾人様にどう？

土州屋の旦那　よろしきやうに、そこは。

主人　へいっ。（板場の奥にみえなくなる）

島之助　旦那、まだ熱いのがありますのよ。（銚子をとつてすゝめる）

土州屋の旦那　止さう。——もう止さう。——この上飲んだら、もう……

島之助　まあ、——折角お銚子を持つたんですから。

土州屋の旦那　そんなに俺を酔はしていゝのかい。

島之助　大丈夫ですわ。

土州屋の旦那　お前さんは大丈夫さ。——お前さんは大丈夫でも。——まアいゝ、どうにかなるだらう。（猪口を

とろ）

島之助　なりますわ。（つぐ）

土州屋の旦那　（口の中で）……子で子にあらぬみづからを、と。（猪口に口をつけて下に置く）――どうしよう、伜で行かうか。――それともぶら〱歩かうか。

島之助　どつちでも。

土州屋の旦那　とにかく雷門まで出て、思案を決めよう。――（主人に）親方、まだですか。

主人　へい、たゞいま。（板場から折を持つて出る）お待遠さま。（土州屋の旦那のそばに置く）

土州屋の旦那　（みて）ど、どうも濟みません。――とんだお手數を。

主人　どういたしまして。

土州屋の旦那　お手數ついでに、どうぞ、御勘定を。

主人　へ、有難う存じます。（小さな算盤をとつて、立身のまゝ、二人の膳のうへをみながら球をうごかす）八圓六十錢頂戴いたします。

土州屋の旦那　八圓六十錢と　（紙入をあけて札を出す）是で、どうぞ。――あとは姐やに。

主人　へ、有難う存じます。（うけとつて板場へ入る）

土州屋の旦那　さア、出かけよう。

（土州屋の旦那と島之助、腰かけから立つ。いろ〱の買物をして來たと覺しい包を持つて臺のそばを離れる。――島之助の持ちものゝなかに羽子板がある）

土州屋の旦那　どうも御馳走さまでした。

主人　（板場で女たちと一しよに）有難うございます。

土州屋の旦那　（伊之助に）どうも、あなた、失禮いたしました。――おさきへ御免下さい。

伊之助　御免下さい。

（土州屋の旦那、硝子障子をあけ、ふら〱する足許をふみしめてさきへ出て行く。あとから島之助も會釋をして出て行く。）

（間。）

伊之助　一寸、熱いのを一つ。

主人　へい。――（女たちに）あちらお銚子だよ。

伊之助　あの女、とき〱來るんですか。

主人　いゝえ、こゝのところ一二度、いまの旦那とおみえになつたきりで。

伊之助　何者だか……？

主人　一向に。――御存じでございますか。

伊之助　知つてゐます。――あれは色物の寄席へ出てゐる島之助といふ女義太夫ですよ。

主人　あゝ、島之助さん。――さうでございますか。

（女の一人が徳利を銅壺から出して來て伊之助の前に

置く。――すぐに板場へかへる。）

伊之助　だけど、この方（親指をみせる）は？――始終こゝへみえる顔ですか。

主人　えゝとき／＼おみえになります。――門跡前の土州屋さんの旦那でございますよ。

伊之助　門跡前の土州屋？――あゝ、あすこの……

主人　御存じでせう。

伊之助　道理でどこかみたことのある顔だと思つた。――さうですか、土州屋の大將ですか。

主人　（笑つて）いつも元氣のいゝ方で……。

伊之助　始終あれですか。

主人　いゝえね、この春時分、角海老(えびや)だかの華魁をうけ出して、何でも、この、馬道あたりへ圍つたとかどうしたとかいふことを一寸聞きましたから、てつきりそれだなと、實は、この間つからさう思つてゐるんで……

伊之助　大したこつた。

主人　晝間、帳場の中で眼鏡を光らかしてゐるところをみた分にはとても分りません。

伊之助　いまの工合ぢやア、大將、大分喰下られてゐるやうだから。

主人　それに、また、片つぽがなか／＼しつかりらしい。

伊之助　それは、もう、あの女と來たら……

主人　何かござんすか。

伊之助　うちの店の謙次郎さんね……

主人　えゝ、あの、若大將。

伊之助　謙次郎さんがあの女には酷い目にあつてゐる。

主人　それは／＼。

伊之助　尤も、また、とりとめた道樂もしない時分だつたが、すつかり、此奴、夢中になつてしまつてね。――四谷だらうが、新宿だらうが、それからそれと毎晩のやうに追つかけおん廻した揚句が、願ひがかなつて、どうにか、まア、一しよに飯の一つも喰へるやうになつたと思召せ。――さア、泳がせること／＼。――何のかのと、あれで、半年ばかりに默つて、「箱」は消えたでせうね。

主人　勿體ない。

伊之助　で、どうしたかといへば、とゞのつまりが、御贔屓にして下さるのは有難いが、何分、まだ、修業中で、師匠にもかた／＼いはれてをりますから。――さういつたやうなことで、ぽんと一つ――何の事はない、體(てい)よく突出されてそれつきり……

主人　其奴は……

伊之助　で、謙次郎さん、さぞ腹を立てたらうと、思ふと大違ひ。――堅い女だ、今どきめづらしい藝人だ。――ほと／＼感心してゐるのをみて、わたしは、これはと思

つた……

主人　（うなづく）　大きに。

伊之助　で、まア、それが手解きといへば手解き。――そこにはまたそこにいろ／＼曰くのあることで、たうとういつぱしの極道になつたものゝ、さて、未だに謙次郎さん、あの女のことを忘れてゐません。――といふものが、その後かゝり合ふ女といふ女、みんなあの型だから可笑しい。

主人　ある奴です。

伊之助　わたしで好かつた　是がもし謙次郎さんだつたら、いまのさまをみて坊主になろといふかも知れない。

主人　とにかく、あの女、當があります。

伊之助　だが、あれだけ十州屋を押へてゐたらこの暮はさぞ樂だらう。――それを思ふとうらやましい。

主人　いつ、因縁でもつけに出かけますか。

伊之助　さア。――だが、親方とぢやア……

主人　いけませんか。

伊之助　おたがひに安の出來ない役者だからね

主人　（手を打つて）　違ひない。

（風の音。硝子障子のそとの暖簾の煽るのが見える。）

伊之助　（外をみて）　風が出て來ましたね。

主人　先刻まであんまり暖かすぎましたから。

伊之助　（徳利をふつてみて）　姐さん、お酒をもう一つ。

主人　（女たちに）　おい、お酒だよ。

（間。）

（謙次郎、硝子障子のそとに來る。――誰がゐるとも知らずうつかりあけて入る。）

主人　入らつしやいまし。

伊之助　（主人のさういふのにさそはれて何の氣なしにそのはうをみる）　おや、謙次郎さん。

（謙次郎、呼ばれて思はずたちどまる。――伊之助のゐるのをみてギヨッとする。どうしていゝか分らない混亂が來る。）

伊之助　こちらへ入らつしやい。――此方が好ござんす。（そばに席をあける）

謙次郎　有難う。（躊躇する。――だが、外にどうすることも出來ないので、あきらめて伊之助のそばへ行く。――腰を下ろしながら主人に強ひて愛想よく會釋する）

主人　お久ぶりで。――いま此方とお噂をしてをりました。

謙次郎　さうでしたか。

伊之助　どうしました。――かけ違つてこゝしばらくお目にかゝりませんでしたね。

謙次郎　（よそ／＼しく）　さうだつたね。（献立を書いた板をとつてみる）

伊之助　それから先刻、新堀のうちの門まで寄つたらちやうどお留守で……

謙次郎　あゝ、少し用が出來たものだから。（主人に）まだ飯前ですから、どうぞ一つ。

主人　何か鍋のものでも。

伊之助　鰒になさい。鰒に。

謙次郎　戯談だらう、俺は飯を喰ふんだ。

伊之助　すぐにですか。

謙次郎　あゝ。

伊之助　（笑つて）それこそ戯談だ。——（自分の猪口を干してさす）一つ上げませう。——少し冷めたいけれど、いま、すぐ、熱いのが來ます。（徳利をとる）

謙次郎　俺は飲まないんだ。

伊之助　飲まない？——（謙次郎の顔をみて）どうかしたんですか。

謙次郎　どうもしないが。——こゝのところ暫く飲まないんだ。

伊之助　はてね。——さういへば、今夜は、何だか浮かない顔をしてゐますね。

謙次郎　大したことはないんだが。——さういはれりやア、少し膽が病めるんだ。

伊之助　其奴は飲まないからだ。——あなたの前だが、飲む口がどうかして二三日も飲まなかつたら覿面體に響きます。——ときぐ試してみるが不思議なくらゐです。——さういふときに熱すぎるほどの奴を一杯ぐつと引つかければ……

謙次郎　（いまいましいやうに）そのくらゐなことは俺だつて知つてゐるよ。

伊之助　知つてるならやつたらいゝでせう。——譯のないこつた。——（主人に）ねえ、親方。

主人　それは飲つたはうがよろしいでせう。——何か大きなもので一つ　この湯呑ではいかゞです。（茶碗をとつて出す）

伊之助　湯呑結構。——此方へ貸して下さい。（うけとる女たちに）姐や、お酒は？

（女、うつかりしてゐた銅壺の中の徳利をすぐ出して來る）

伊之助　熱つ。（徳利に觸れた手を思はず離す）——此奴は沸立つてゐる。——おあつらへ向だ。——（湯呑を謙次郎のまへに置いて）さア、上れ。

謙次郎　（間が悪さうに）止さう。——まア、よして置かう。

伊之助　なぜです。

謙次郎　なぜと訊かれても困るが。——少しやめてみよう

かと思つて……

伊之助　やめる？　（間。――たちまち笑つて）およしなさいよ。――そんな白々しい顔をして、そんな……

謙次郎　いゝえ、ほんたうに。――ほんたうに止めようと思つてゐる。

伊之助　ほんたうに？　（念を押す）

謙次郎　……（うなづく）

伊之助　だけど、また。――何か理由でもあるんですか。

謙次郎　理由といふほどのこともないが――酒を飲むと、俺は――とかく間違ひが多いからね。

伊之助　いつてみれば？

謙次郎　いつてみれば――（自ら愧づるやうに）そんなことは、まア、いゝぢやアないか。

伊之助　誰かに、あなた、何かいはれましたね。

謙次郎　（少し慌てゝ）いゝえ、そんなことはない。

伊之助　さうですか。（うなづく）ぢやア、ま、よして置きませう。（機嫌を悪くする。――謙次郎には構はず自分だけで一つ二つ飲む）

（間。）

謙次郎　（臆病に、またいゝ白けた心もちから自分を救ひ出すやうに笑ふ）戯談だよ、戯談だよ。――誰がやめるものか。――（湯呑をとつて）さ、ついで。

伊之助　（猪口を持つたまゝで）飲むんですか。

謙次郎　飲むとも。

伊之助　それならさうと早くいつてくれゝば。（猪口を下に置く）ぢやア、つぎますよ。（幾分まだ強面に徳利をとる。――つぐ）

謙次郎　（さすがに気がさすらしく、飲みかけて、一度、下に置く。――だが、伊之助だの主人だのゝ眼に感じることによつて、すぐ、また、湯呑をとり上げる。――飲み干す）

伊之助　もう一つ

謙次郎　湯呑はもう願下にしよう。――（主人に）親方、こゝへもお膳を下さいな。

主人　へい、たゞいま。

謙次郎　それからばかでも焼いて下さいな。

主人　青柳を。――かしこまりました

（女、膳に銚子を添へて持つて来る。――謙次郎、すぐに猪口をとり上げる）

（側から伊之助がつぐ）

謙次郎　有難う。

伊之助　あなたに聞かせることがあります

謙次郎　……？

伊之助　あなたがもう少し早く来ると。――あなたに見せ

たいものがゐたんです。
謙次郎　見せたいもの？
伊之助　島之助がゐたんです。――（主人に）ねえ、親方。
……
謙次郎　（眼をそらして）何だ、下らない……
伊之助　うそだと思ふんですか。
謙次郎　どうだつて構はない。
伊之助　尤も連れがあるんです。――門跡前の、それ、土州屋ね。――あすこの旦つくが一しよなんです。
謙次郎　……（無言。――自分を紛らすやうに飲む）
伊之助　土州屋の、その、とろ〳〵した工合。――あなたの前だが、あれは大した女ですね。
謙次郎　……（無言）
伊之助　あなたは早く見切をつけて好かつた。――あの女に引かゝつてゐた日には、仕舞には骨まで舐られます。
女　お待遠さま。（謙次郎のまへに誂へものを持つて來る）
謙次郎　お酒のあとを持つて來ておくれ。
女　へい。（行きかける）
伊之助　此方もだ。
女　へい。
伊之助　大體、あの女の……
謙次郎　よしてくれ。――そんな話はたくさんだ。

伊之助　（笑つて）といふのは、まだ、あの女に思ひが殘つてゐるからです。――おしづさんにいひますぜ。
謙次郎　（猪口をさす）まア、一つ行かう。――（伊之助の顏をみて）今夜は、お前、大分醉つてゐるね。
伊之助　先刻まではしつかりしてゐたんですがね。――あなたの顏をみたらすつかり嬉しくなつてしまつて。――何だか、かう、急に……
（女、謙次郎のまへと、伊之助のまへと、兩方に、銚子を持つて來る）
伊之助　あなたもお飲みなさいよ。少しお飲みなさいよ。――あなたは飲まないと量見に隙きがあつていけない。（猪口をさす）
謙次郎　飲むよ。――かうなりやア、もう、飲むよ。――さア、ついだ。
伊之助　さう來なくつちやア嘘だ。（つぐ）――飲んで、今夜は、久じぶりにぐづ〳〵になりませう。――どこかへ行きませう。
謙次郎　戯（ふざ）けちやアいけない。――今の身分だ。
伊之助　（笑つて）あなたは知らないと思つてゐるんですか。
謙次郎　何を。
伊之助　あなたが今夜どこへ行つたか……
謙次郎　……（無言）

伊之助　あなた、今夜、聖天町へ行つたでせう。
謙次郎　……?
伊之助　(わらつて)　どうです。
謙次郎　行かないとはいはない。
伊之助　御覧なさい。――行けば無駄にはかへらないはずだ。
謙次郎　おふくろは工合が悪くつて寝てゐるんだ。(自分でついで飲む)
伊之助　でも、おしげといふものがゐます。――おしげにあへばお内儀さんにあつたも同じこつてす。
謙次郎　(むしろ満足なやうに)　よく知つてゐるね。
伊之助　それに、あなた。――その位な寸法が分らなくなつてどうします。
謙次郎　まア、上げよう。(猪口をさす)
伊之助　(うけとりながら)　ごまかしちやアいけません。
謙次郎　(金を失したことをはつきり思ひ浮べる。――たまらなくなる。――急いで話をかへる)　それよりも、今夜、兄貴にあつた。
伊之助　これに?　(親指をみせる)
謙次郎　……(うなづく。――伊之助から返された猪口に口をつける)
伊之助　どうしました。――何かいひましたか。
謙次郎　(うなづく)　いつた。
伊之助　(氣色ばんで)　何をいひました?
謙次郎　(間。わざと嘲けるやうに笑つて)　みんな俺がお前を憎んでゞもゐるやうに思つてゐるが、俺は決してお前を憎んでやアしない。――さういつた。
伊之助　(反感そのもののやうに)　さういふ白々しいことをいふんだ。――憎んでもゐないものが――憎んでゐないならゐないやうに、素直にあなたをうちへ入れたらいいぢやアありませんか。何のかのとこだはることはないぢやアありませんか。
謙次郎　だから俺はいつた。――何もあなたに這ひつくばつてまでわたしはうちへ入らうとは思ひません。――そんな弱い尻はないんだから。
伊之助　さうですとも。
謙次郎　仙臺屋にはあなたといふ立派な人がゐるんだ。――生憎とやくざに生れついたわたしのやうな人間はゐなくつたつていゝんだ。……
伊之助　乙うおやんなすつたね。――どうしました、相手は?
謙次郎　仙臺屋はお前のものだ。――死んだ親父からお前へわたる間をしばらく俺が預つてゐるだけだ。――はつきりかういやアがつた。

伊之助　それだ。——さういふ綺麗なことをいふんだ。——そんなら、なぜ、仙臺屋の家についた人間を——おんこ譜代の人間を大切にしないんだとはつきりいつてやりてえや。——ねえ、さうでせう。——その理由でせう。

謙次郎　さうだとも——（女に）姐さん、お酒がないよ。

伊之助　古いもので——大旦那の時分のもので、いま、まんぞくに店へ出入してゐるものが何人あります？——それが何よりの證據だ。——善造一人ぢやアありませんか。——あのぐうたらべえの善造一人ぢやアありませんか。——誰が、あんな、義理を知らない奴のところへ行くものか。——みんなさういつてゐます。

謙次郎　……（うなづく。自分について飲む）

伊之助　森田町さんだつていつてゐますぜ。——姉さんが一人で氣の毒だから行くんだ。——姉さんでもゐなくなつたら俺は行くのは御免だ。——森田町さんばかりぢやアありません、さうなりやア——お內儀さんでもゐなくなりやア、櫻木町さんだつて、本郷さんだつて緣切だ。

謙次郎　尤もさうなつた方が兄貴には都合がいゝかも知れねえ。

伊之助　（大きくうなづいて）全くだ。——さうなりやア、おしげだつてゐなくなりまさア。——すれば、あとは、みんな、親指の一味ばかりだ。——親指の徒黨ばかりだ。お家はいよ〳〵萬歲だ。——ざまア見やがれ。（罵るやうにわらふ）

謙次郎　（自分で自分の掘つた穴に落ちる——自分でうつかりいひ捨てたことのなかへ惹入れられる。——おたかのない後の家のさまがまざ〳〵と眼にうかぶ。——急に狂ほしく立上る）行かう、伊之助行かう。

伊之助　どこへ？（顏をあげる）

謙次郎　どこかへ行かう。——どこかへ行つてもつと飲まう。

伊之助　行きませう。

謙次郎　仙臺屋は俺のものぢやアない。お前のものだ。——兄貴は、かう、はつきりいつたんだ。——俺のものを俺が使ふに不思議はないんだ。

伊之助　さうですとも。

謙次郎　さきになつて使はうが今使はうが、——使ふ味にはかはりはねえんだ。——親方、預けて置くよ。（「その一」で要太郎からうけとつた拾圓札を臺の上に投げ出す）

（謙次郎をさきに伊之助、硝子障子をあける。——暖簾を煽る風が先刻よりも强くなつてゐる。）

謙次郎　畜生、酷い風になりやアがつた。

（二人、硝子障子をあけ放したまゝ出て行く。）

（間。）

(女、出て來て裏のうへを片附ける。)

(間。)

(主人、いまゝでの二人のことなどまるで心にかけないやうに外へ出て懸行燈をとり込んで來る。つぎに暖簾を外して來る。)

その三

仙臺屋の店さき。

「その二」の一日隔いた翌る日。雪のふる夜の八時すぎ。

火鉢のそばに、善造、五六人の店のものたちと一しよに坐つてゐる。その中の一人、炭斗を取つて炭をついでゐる。誰も無言。――離れて、上り框に、醫者の車夫、同じく火鉢を抱へてしづかに戸外の雪の音を聽入つてゐる。

長き間。

奧から、おしげ、出て來る。

おしげ　(車夫に)おかへりでございますよ。……(言葉すくなにさういつて鞄をわたす)

(車夫、立上る。――すぐに提灯をつけにかゝる。)

(醫者をさきに、要太郎、看護婦、そのあとについて出て來る。)

要太郎　ふりますのに度々どうも……

醫者　いゝえ。(下町の醫者らしい氣輕さでこたへて外套を著る。――土間を下りて下駄を穿く)

看護婦　では、すぐにお使ひを……

醫者　あゝ、さうして下さい。

(車夫、大戸のくゞりをあけて外へ出る。)

醫者　(要太郎に)明朝また。――どのみちまた早くうかがひますから。……

要太郎　有難う存じます。

醫者　お大切に、では……

(要太郎、おしげ、看護婦、とも〲店のものたちも無言のまゝ頭を下げる。――醫者、かへつて行く。)

要太郎　(間。――店のものゝ一人に)三吉、お前、氣の毒だが、内藤さんまで行つて來てくれないか。

店のものゝ一　へえ。

看護婦　お藥を取つて來ていたゞくんですが……

店のものゝ一　へえ。(立つてすぐ支度をする)

看護婦　お願ひいたします。(おしげとさきへ奧へ行く)

（このあたり、すべて、おしげの場合にいつた「言葉すくな」の、陰暗な、うつろな感じに支配される。）
要太郎　酷くふつてゐるか、まだ？
店のものゝ二　へえ。
要太郎　生憎な天氣だ。――（ふと善造をみて）何だ、善さん、そんなところにゐたのか？
善造　（おづ／＼した感じに）夜分上りまして……
要太郎　まア、こつちへ來たらいゝ。
善造　へえ。
要太郎　（店のものゝ二に）あの火鉢をこゝへ。――それからそこを片附けて……（上り框のはうへこなし）
（店のものたち、それ／＼立つていはれたとほりにする。――店のものゝ二、自分たちのいまゝであたつてゐたはうの火鉢を要太郎のはうへ持つて來る。）
店のものゝ二　このはうが火がよく熾つてをります。
要太郎　さうか。――で、お前たちはもう湯に入つたか？
店のものゝ二　いゝえ、まだいたゞきません。
要太郎　ぢやア、いまのうち、手の空いたところで入つてしまつたはうがいゝ。
店のものゝ二　有難うございます。
要太郎　こゝはいゝ、俺がゐるから。――（外の店のものたちに）外のものも、今朝早くつて疲れたらう、あつちへ行つてみんな休んだらいゝ。用があつたら呼ぶから……
店のものゝ三　有難うございます。
要太郎　あつちへ行つたら、それから、誰かにお茶を持つて來るやうに……
店のものゝ二　へえ。
善造　どうぞもう。――わたくしでしたら……
要太郎　奥はごた／＼してゐる。――却つてこゝのはうがいゝ……
（店のものゝ二をさきに、店のものたち、みんな奥へ行く。）
善造　いかゞなんでございます、御隱居さま？……すこしもそんな。――そんな御容體とはわたくし……
要太郎　いゝえ、この雪を喰つたんだらう、今朝がた急に工合が變つてね。……
善造　お驚きでございましたでせう？
要太郎　驚いた。――何にしても不意だからね。
善造　御尤もでございます。
要太郎　すこしでも、いゝえ、これが惡くでもなつてゐるんなら用心もするが、どつちかといへばこの二三日しごく快いはうだつたんだから……
善造　それは、もう、一昨日手前が上りましたときでも……
……

要太郎　（心づいて）あゝ、一昨日は有難う。――忙しいのに遲くまで……

善造　いゝえ、もう、手前こそいろ／＼御馳走にまでなりまして……

要太郎　おかげで、病人、今日は面白かつたとあとで大へん喜んでゐた。

善造　お顏のいろもよく、熱もお下りで、この塩梅なら、年でも越して陽氣がよくなつたら、思つたよりもこれは早く起きられるか知れない。――いつにない御機嫌で、御自分でもさういつておいでのくらゐだつたのでございます。

要太郎　（ふとさびしく）年だからね。――油斷は出來ない、

善造　でも、大したことは……？

要太郎　うむ、まア、大したことはなくつてすみさうだ。――今朝の注射がきいたと、いま、内藤さんはいつておいでだつたが……

善造　……

要太郎　まだしかし安心は出來ない。――このまんま落着いたとしても、これ。――善さんのまへだが、こゝでまた病ひの縒がもとへもどるんぢやアないか？――氣づかひはそこだ。……

善造　へえ。（微にうなづく）

（奥から、女中、茶道具をもつて出て來る。――善造と要太郎とのまへにそれ／＼茶をついで出す。）

（二人とも無言。――女中、去る。）

善造　さきほど森田町さんがおいでに……？

要太郎　うむ、來た。　今朝内藤さんへかける直ぐ、森田町と、櫻木町と、たゞとにかく電話をかけさせた。――さうしたら、森田町、ちやうど降り出したなかをすぐ來てくれた

善造　實は、手前、森田町さんにうかゞひまして……

要太郎　あゝ、それで？……わざ／＼それは……

善造　へえ。――いえ……（何か口籠る）

要太郎　森田町の、で、かへる時分にはまだハッキリしたみとめがつかなかつた。――案じてゐるだらうと思つて、先刻がた、その後の容體を、おしげにまた電話をかけさせたが……

善造　さう被仰つてゞございました。

要太郎　今夜また行く。――自分でもし行かれなかつたら誰か代りをよこす。――さういつてゐたさうだが……

善造　（遮ぎるやうに）へえ。――何かそんな……（言葉を濁す）

要太郎　しかしいまゝで來なければ。――もう何だらう、八

時……？（うしろの柱にかけられた時計をふり返つて）戯談ぢやアない、九時だ。――今日は時間の經つのがまるで空だつた。（さびしき微笑――ふとそこに纏めて置かれてある新聞に眼をつける）ろくに、まだ、今日は新聞もみない……（手許にとる）

善造　何としてもお一人ぢやア……

要太郎　おしげもゐれば看護婦もゐるんだから、何もそんな、さきへ立つて氣を揉むこともないんだが……（新聞を擴げてそのうへに眼を落す。――それとなく……）

善造　（間。――わづかに接穗をえたかたちに）實は、旦那、――折入つて、少々、おねがひいたしたいことがあるんでございますが……

要太郎　……？（顏を上げる）

善造　いえ、外のことではございません。――謙次郎さんのことなのでございますが……

要太郎　……（無言。――硬直した表情。――さりげなくとりなしはしても……）

善造　これまでのお詫はお詫。――それはそれといたしていかゞでございませう、御隱居さまに一ト眼でも……？

要太郎　……（無言）

善造　外のときでございません、御病氣の、かういふ場合でございます。――それをお汲みわけ下さいまして……（窺ふやうに要太郎の顏をみる）

要太郎　……（無言）

善造　御勘辨なさり難いところは。――それは、もう、なさり難いことは手前でも承知いたしてをります。重々承知いたしてをります。――承知いたしてをりますうへで――そのうへのお願ひでございます。

要太郎　……（無言）

善造　と、申して決して。――決してしかし……

要太郎　（遮ぎる）善さん……

善造　……（無言）

要太郎　（冷なほどしづかに）折角だがその相談には乘れない。

善造　……（ぐたりとした感じに默る）

要太郎　森田町も先刻それをいつた。――俺はうんといはなかつた。

善造　……（無言）

要太郎　かういつたつて森田町とお前とを一つにはしない――森田町は俺の肚のまるで分らない人お前は俺の料簡の隅々まで知つてゐてくれる人。――そのお前がさういふんだ。――よく〳〵のことだらうと思ふ……

善造　……（無言）

要太郎　聞いたかも知れないが、森田町もそれで、今日も

實はやり合つた。──どこまでも、先方は、俺が謙次郎を憎んでゐる。──邪魔にしてゐる。──たゞもうさうと決めてゐるんだから論は干ない。──段切はいつもきまつてゐる……

善造　……（無言）

要太郎　今日は、しかし、いひすぎたとあとで悔んだほど俺もいつた。──森田町もいつになくいきり立つた。（冷にわらつて）このまんまぢやアどのみちすむまい……

善造　……（困惑の表情）

要太郎　しかし、善さん、お前には理非はいはない。いはなくつてもいゝ相手だから。──その代りみてもらふものがある。……（ふところから封を切つた手紙やうのものを二通出して善造のまへに置く）

善造　……（のみこめない顔でそのなかの一通をとり上げる。──おもて、裏、うち返してみる）

要太郎　なかをみてくれ。

善造　……（なかをあける。──幾枚かの札が出て來る──とむねをつく）

要太郎　謙次郎どの、母より。──としてはないか？

善造　……

要太郎　日附は十二月十九日。──一昨日だ。……

善造　……（無言）

要太郎　もう一つのはうをみてくれ。

善造　……（もう一通のはうを取上げる。──なかゝら卷紙に書いたカナ〻長いものが出る）

要太郎　要太郎どの、謙次郎拜として日附は十二月二十日──昨日だ。……

善造　……（無言）

要太郎　この使に百圓わたしてよこせといふ無心狀だ。

善造　……（力なく眼をふせる）

要太郎　話をしなければ分らないが、一昨日の晩、俺は謙次郎に逢つた。

善造　（ふせた眼を思はず上げる）どちらで……？

要太郎　うちの裏で……

善造　……（無言）

要太郎　いへば謙次郎のことで、その晩も、森田町まで行つたかへりだ。──あれでもう彼是九時だつたらう。馬道から新道づたひにうちの裏へ出て、おもてへまはるつもりで何ごゝろなく土藏のうしろを通るとすれ違つた若い男がある。──みると謙次郎だ。……

善造　……（無言）

要太郎　呼びとめた、俺は。

善造　……（無言）

要太郎　俺はお前に逢ひたいと思つてゐた。──こつちか

らさういつて引きとめた。――霜の下りるなかで長いこと立話をした。

善造　……(無言)

要太郎　さきの肚もきけばこつちの肚もいつた。――すこしは世間をみるはうが當人のためになると森田町のまへでいつた一と言をトツコにとつて車を横に押すから、お前のみた世間は茶屋小屋の窓からみた世間だ、さうした多寡の知れた世間だ。――さうとハツキリいつた。――周圍でいろ／＼心配するからかへつてやるんだ、自分から這ひつくばつてまでかへらうとは思はない、どうせやくざに持ちくづした體だ。――さういふから、なぜさうお前は要らない意地を張るんだ、要らない意地を張つて不貞腐れるんだ。――さうもハツキリいつた。――ぢやア、どうすればいいといふから、いまゐるうちを出ろ。――

善造　……(ふと要太郎の顏をみる)

要太郎　いまゝでの仕だらをハツキリ自分に惡いと思へばいゝ、惡いと思つてその償ひをさへすればいゝ。――それにはいまゐるうちを出ることだ。――一しよにゐるいまの女とわかれることだ。

善造　……(無言)

要太郎　伊之助のことも俺はあからさまにいつた。――お前はあの男に惚れ切つてゐるが、あの男は肚のよくない男だ。――たくらみのある男だ。――あの男はお前を道具につかつてゐる。――女にわかれろといふのも畢竟は伊之助と離れろといふことだ。――お前には女のうしろで伊之助が絲を引いてゐるのが分らないんだ。――ありやうは善造もそれを心配してゐる。……

善造　……(無言)

要太郎　さういはなければさきは納得しない。――だから、俺は、わざとお前を引合に出した。

善造　おそれ入ります。

要太郎　最後に酒のことをいつた。――それと、お前は、酒をつゝしまなければいけない。――酒を飲むとお前は間違ひが多い……

善造　(しみ／＼と)全くでございます。――惡い御酒……と申すのでもございませんが、あがるとやはり……

要太郎　(冷に)覿面その無心狀だ。

善造　……(無言)

要太郎　一昨日の晩の、昨日もうそれだ。(胸の底に滲んで來る苦澁……)

善造　しかし、これ……(もう一度その手紙を取上る)

要太郎　仙臺屋といふものは俺のものぢやアない、お前のものだ。――俺はたゞお前へ行くものを預かつてゐるだけだ――さういつたのにすぐ附込んだその文句だ。――

要太郎どのとわざと名まへを呼んだのも胸にある……

善造　……(無言)

要太郎　その手蹟に、善さん、み覺えはないか？

善造　み覺え？

要太郎　それは伊之助の手蹟だ。――墨をさう滲ませて書くのがあの男のくせだ。

善造　と、謙次郎さんは……

要太郎　謙次郎のいふとほりを伊之助が書いたのさ。

善造　……(無言)

要太郎　俺は、善さん、泪も出ない。

善造　へえ。……(無言。眼をまたふかく伏せる。――が、自分にすぐその心持を救ふやうに)しかし……

要太郎　……？(無言)

善造　こちらのはうはどうして……？(もう一通のはうの手紙をとり上げる)

要太郎　夜番が拾つて店へもつて來た。

善造　夜番が？

要太郎　土藏のうしろに落ちてたさうだ。

善造　……(無言)

要太郎　拾つたものはなんにも知らない。――謙次郎といふ名まへをみて正直に屆けて來た。(さびしく冷に笑ふ)

善造　……(無言)

(間。――奥から女中出て來る。)

女中　旦那さま。

要太郎　……？(無言)

女中　御隱居さまがお呼びでいらつしやいます。

要太郎　あゝさうか。――(善造に)善さん、病人に逢はないか？

善造　お差支ございませんか？

要太郎　外の人ぢやアない、構はない。……

善造　さやうでございますか？……では……

要太郎　(女中に)常吉は、もう、湯から出たか？

女中　へえ。

要太郎　ぢやア、店へ來てゐるやうにさういつてくれ。

女中　へえ。

(要太郎さきに、善造、奥へ行く。――女中、あとに殘り茶道具を片附けたりする。)

(間。)

(くゞり開く。――車夫、入つて來る。)

車夫　善造さんといふ方がおみえでございませうか？

女中　善造さん？……えゝ、おみえです。……

車夫　こちら森田町の玉木から出ましたが……

女中　あゝ……

車夫　一寸お顏を拜借いたしたいんですが、善造さんに…

……?

女中　一寸お待ちなすつて……

車夫　すみません。……

（奥から、湯から出た店のものたち二三人出て來る。）

店のもの二（女中に）何だい?

女中　森田町さんからお使ひ……（いひながら入る）

（店のものたち、そのまゝ、また、火鉢のそばにすわる。――その間に、車夫、くぐりから首を出して善造のゐることを外へ傳へる。）

（間。）

（謙次郎、俥から下りたとりなしで入つて來る。――足もとの全くきまらないほど醉つて來る。――車夫にさゝへられてわづかに土間に立つことが出來る。）

謙次郎　いゝよ。――いゝよ。――うるせえな、いゝつてばな。……（車夫の手を無理に拂ふ。――ぺたりと、そのまゝ、上り框に腰を落す）

店のものたち　あ、危い。……（思はず立つ）

謙次郎　何をいつてやアがるんだ、馬鹿……

店のものたち　……（だまる）

謙次郎（車夫に）御苦勞。――かへつていゝ。……

車夫　でも……

謙次郎　でも?――何がでもだ……?

車夫　へえ。――いえ……

謙次郎　歸れといつたらかへつたらいゝぢやアねえか。――何をぐづ〳〵してゐるんだ。

車夫　ぢやア、まア。――いえ、よろしうございます。（車夫、そのまゝ出て行く。――謙次郎、上へあがらうとする。――善造、出て來る。）

善造　（それをみると慌てゝ）いけない、いけない、謙次郎さん。――いけない、あなた……（馳けよつて押へる）

謙次郎　何がいけない?――何がいけないんだ?――森田町の玉木から隱居の見舞に來たのが何がいけねえんだ。……

善造　いけない。――そ、それがいけない。――なぜ、あなた、わたくしが……

謙次郎　何をいつてやアがるんだ。――いつまでそんなあてにもならねえキッカケがべん〳〵と待つてゐられる……

善造　でも、あなた、それぢやア、……

謙次郎　いゝぢやアねえか。――このうちをとび出してゐる謙次郎ならいけねえだらう。――このうちの厄介ものの謙次郎ならそれアいけねえだらう。――俺はさうぢやアねえ。――だが俺はさうぢやアねえんだ。――玉木のうちから――森田町の玉木のうちから主人の代理に立つたんだ。……（聲、だん〳〵大きくなる）

（謙次郎の無理から上へあがらうとするのを、善造、上らせまいとする。揉合ふ。謙次郎の方のはうがまさる。――店のものたちは手をつかねてたゞみるばかり。）

（但し店のもの、二にそのまゝに奥へそれを知らせに入つてゐる）

（間。）

（要太郎、出て來る。――無言のまゝ二人の間に割つて入る。）

謙次郎　（要太郎の顔をちつとみて）　兄さんですね。――あなた、兄さんですね……

要太郎　……（こたへない）

謙次郎　あなたはわたしが憎いんですか？……わたしが憎いんですか？……えゝ、憎いんですか？　（わけもなく要太郎にかぶりつく）

要太郎　（ハッキリと）　憎い。

謙次郎　憎いんですか？――えゝ、憎いんですか？

要太郎　憎い。

謙次郎　憎いんですか？

要太郎　憎い。

謙次郎　憎いんですか？

要太郎　……（無言）

謙次郎　憎いんですか？

要太郎　……（無言）

謙次郎　に、憎いんですか？　（泪、滂沱として下る）

（間。――誰も無言。）

要太郎　森田町のしさうなことだ。（冷にわらふ）

善造　（遮ぎるやうにあわてゝ）　森田町さんぢやアございません。手前でございます。――手前がわるいのでございます。――みんな手前がわるいのでございます。

要太郎　……（無言）

善造　手前のいたらない――手前のいたらない智慧からこんな――相濟みません。――申譯がございません……

要太郎　……（無言）

善造　森田町さんは御存じないことでございます。――謙次郎さんも御存じないことでございます。――手前の。――みんな手前のさりやくでございます。……

要太郎　……（無言）

（間。――長き間。――再び誰も無言。）

要太郎　（店いものに）　まだふつてゐるか、雪は？

店のもの、三　（土間を下りてくゞりをあけてみる。――ふり返つて）　どんどんふつてをります。

（長き間。――三たび誰も無言。――謙次郎、急に嗚咽する。）

（十年十二月――十四年十月）

短夜（一幕）

□

專造　彫金師

伊三郎

重吉　鐵物商

おさわ　おふさの母

おふさ　伊三郎の女房

およし　專造の女房

□

大正八九年ごろ

□

淺草駒形河岸附近――專造の住居。

……專造、伊三郎、重吉、おさわの四人、食卓をかこんですわつてゐる。――食卓の上には、すでに手のついた一品二品の西洋料理（ごくついとほりの、カツレツとか、野菜サラダとかいつたたぐひの）だの、二三本の、空いた銚子だのがさびしくならんでゐる。――酒が出て、すくなくも、二時間はもう經つてゐる。

七月はじめのある夜。深更。

幕のあかないまへからの沈默が、幕があいても、なほしばらくのあひだ慘めにつづく。――專造も、伊三郎も重吉も、おさわも、誰もそれぞれ自分たちの心もちをみまもることによつて押しだまつてゐる。

燈火のいろばかり空しくあかるい。

專造　（急にとなりの部屋のはうを向いて）おい、まだか……？

およし　（となりの部屋で）ええ、いま……

（再び沈默。）

（戸外に支那蕎麥屋の笛の音きこえる。――だんだん遠くなる。）

（間。）

（およし、となりの部屋の長火鉢のまへを離れて、あたらしくついた銚子を專造のそばへ持つて來る。――專造うけとる。――そのまゝ、また、およしはとなりの部屋にかへる。火を直したり銅壺に水をさしたりする。）

專造　（重吉に）さア、熱いのを……

重吉　いえ、もう……

專造　まア……

重吉　おそれ入ります。（自分のまへの猪口を取上げる）

專造　ああ、其奴は……

重吉　いいえ、もう……（ついだツばなしになつてゐた冷えたのを干す。――改めて專造のまへに猪口を出す）

專造　……（酌をする）

重吉　へえ、もう。――おそれ入ります。（一くち飲んでまた、猪口を下に置く）

專造（伊三郎に。――きはめて冷かに）伊三さん……

伊三郎（呼ばれたまま顏を上げる）

專造　熱いのをどうだ。

伊三郎　……（默つて、また、眼をふせる）

專造（間。――おさわのはうを向いて）おつ母さん……

おさわ　わたくしは、もう。――お酌いたしませう……（手を出す）

專造　いいや、（自分で自分のまへの猪口につぐ。――銚子を下に置く）

重吉（時計を出してみる。――急に）どうも、これは、遲くまで……（猪口の飲み殘しをあける）

專造　まア、もう一つ……

重吉　いいえ、もう……（食卓のうへに猪口を伏せる）――とんだ、どうも、御厄介になりまして……（手拭だの煙草入だのをしまつする）

專造　何の――なんにもお構ひ申さないで……

重吉　では、これで。――まことに勝手でございますが……

專造　ぢやア、いま、お茶を。――一寸……（押へてよしを呼ばうとする）

重吉（それを、また、押へて）ああ、いえ、もう結構でございます。……

專造　まア……

重吉　いえ、時間がもう何でございますから……

專造　さうですか。

重吉　いづれ、二三日うちに、改めてまたおうかがひいたします。

專造（遮ぎるやうに）ああ、其奴は、――今度はこつちから出ます。――わたしのはうから上ります。――いつもお呼立てばかりして……

重吉　いいえ、もう、そんなことは……

專造　お忙しいところをほんたうにすみません。

重吉　何のお役にも立ちませんで。――（伊三郎に）では伊三郎さん、お暇しませう……（立ちかける）

伊三郎　……（無言）

重吉（かさねて）伊三郎さん……

伊三郎　……（無言。――身じろぎもしない）

（專造、伊三郎を強くみる。――おさわも、顏を上げ

て、ぬすむやうにみる。）

（間。）

重吉　（それとなく再び）出かけませう。――さ、出かけませう。――いつまで、何して、こちらのお宅も御迷惑です……

伊三郎　……（無言）

重吉　ねえ……（促す）

伊三郎　……（無言）

（間。）

專造　（こみ上げて來る心もちをおさへて）話が分らないのか、伊三郎さん……

伊三郎　……（無言）

專造　（かぶせて）まだ分らねえのか、お前には……

伊三郎　……（無言

重吉　（なかをとつて）さア、伊三郎さん。――（聲を落して）惡いやうにはしません。――ね、とにかく惡いやうにはしませんから……

伊三郎　……（無言）

專造　（急に叩きつけるやうに伊三郎に）まだ、俺に、怒鳴らせ足りねえのか……

（およし、おさわ、專造のはうを見る。）

重吉　（伊三郎に）それがいけない。――あなた、それがいけない。――このうへこなたに世話を燒かせるつてことはない。――あんまり勝手すぎる。――あんまりそれぢやア勝手すぎる。――わが儘すぎる。――ほんたうですよ……

伊三郎　……（無言。――ふかくうなだれる）

重吉　（專造に）どうぞ、まア、ここは。――わたくしからお詫びいたします。――お氣にどうぞおさへ下さらないで……

專造　あなたにさう被仰られると面目ない。――いいえ、この男はもうあなたにお任せしたんだから、何もわたしが、側からよけいなさりやくをすることはないんですけれど――それにしても、あんまり、ふんぎりがつかなすぎます。大てい小自烈つたくなります……

重吉　が、まア、それも。――話が分らない――分らないからどうといふわけでもないと思ひます。――得心はもう行つてゐるにきまつてゐます。――得心が行つてゐればこそ……

專造　（割りこむやうに）これだけ是非善惡をいつて分らなければ……

重吉　（押へて）宅へ行つて、また、よく。――腹藏のないところを、また、よく、聞いてみるつもりでをります。――伊三郎さんにしても、工合で、いひたいと思つてい

はなかつた――いひたいと思つてもいへなかつたことがこれで、あるだらうと思ひます。

専造 ……（無言）

（重吉、伊三郎になんどりと何かいひ聞かせる。――ささやくやうに……。）

（やや長き間。）

重吉 （改めて）まことに、どうも、遅くまで。――とんだお邪魔をいたしました。――（およしに）お内儀さん、毎度上りまして、どうも……

およし （火鉢のそばを離れて）お構ひ申しませんで、いつも、失禮ばかり。――どうぞお宅へよろしく被仰つて下さいまし。

重吉 有難う存じます。

およし 日中はお熱くつていけませんけれど、夕刻、お涼しくなつてから、觀音さまへお詣りながらお小さいのをおつれになつて、どうぞ、おかみさんにお出かけ下さいますやうに……

重吉 有難う存じます。――かへりましてさう申しますでございます。――疾うに出なければならないのでございますが、始終もうごたごたしてをりますもので、つい……

およし 大ぜいさんでいらつしやるんだからお大抵ぢやアございません……

重吉 おついでもございますまいが、あの邊を、もし、お通りがかりでございましたら、是非どうぞ、手前どもへもお立寄下さいまして……

およし 是非、一度、わたくしもうかがひます。

重吉 （おさわに）おふくろさん、失禮いたしました。――御免下さい……

おさわ まことに、どうも……（あわてて座蒲團をすべらす）

（重吉、伊三郎を立たせる。伊三郎、斷念めたやうにぼんやり立つ。――格子口のはうへその部屋を出る。――専造、およし、おさわ、送つて出る。）

（間。）

（格子の音。――「お休み」「お休み」とたがひにいひ交すのが夜更らしいさびしさを持つて聞える。）

（間。）

（戸外で、犬、一しきり吠え立てる。――専造をさきに、およし、おさわ、もとのところに返つて來る。）

（誰も無言。）

（舞臺、たとへば、汐の退いたあとのやうに白けた心もちに支配される。）

（間。）

専造 （およしに）何時だ、もう……

およし （食卓の上の汚れたものを下しながら）先刻がた

一時をうちました。
専造　一時を？
およし　ええ。
専造　そんなになるのか？
およし　ええ。
専造　みんな、さきへ寝かしたか。
およし　寝かしました。――臺所の人だけは、まだ、起きてゐますけれど……
専造　早く寝かした方がいい。
およし　ええ。
専造　（襟さきを掻合せる）さすがに夜がふけると冷える……
およし　それは、あなた……
（女中、出て來る。――汚れものを下げようとする。）
およし　それを持つて行くまへにおもてを閉めておくれ。
（女中、そのまま、格子のはうへ行く。）
専造　（銚子の殘つてゐるのを取つて）一寸、これ、熱くしてくれ。
およし　（うけとつて立つ。――おさわに）ああ、おつ母さん、さうやつて置いて下さい。――いま、おかねがやりますから。
おさわ　へえ。……（手傳ひごころに、ともども、手を出して片づける）
（およし、火鉢のそばへ行く。）
（間。）
（女中、戸じまりをしてかへつて來る。――おさわの手から廣蓋をうけとつて出て行きかける。）
およし　流しへ出して置けばいいよ。――明日のことにして……
女中　へえ。
およし　で、お前さん、すぐおやすみよ。
女中　有難うございます。
およし　（専造に）おふささんを何しませうか？
専造　うむ。
およし　それから、あつちへ行つたらおふささんに此方へみえるやうに……
女中　……（出て行く）
（間。）
およし　（燗の直つたのを持つて來る）少しぬるいかも知れませんけれど……
専造　……（うけとる。――無言。――ついで、すぐ、一くち飲む）
おさわ　（手を突いて）いろいろどうも有難う存じました。
専造　（押へるやうに）いま、まア、おふささんが來る……

おさわ　……(默る)

(燈火(あかり)のいろ澄む。)

(おふさ、出て來る。――おさわに引添つてすわる。)

専造　(おふさに)　おふささん、とにかく筋書どほりに行つた。――伊三郎は重さんがうちへ連れて行つた。

おふさ　……(無言)

専造　これで、まア、お前さんもおつ母さんも一と安心だ。――もう大丈夫だ。

おさわ　有難う存じます。――とんだお骨折をかけまして……

専造　で、醜態といふ奴だが。

おさわ　へえ。

専造　これは重さんのはうで當人に書かせることになつてゐる。――重さんが書かせて、いづれ持つて來る事になつてゐる。――だからそのつもりで……

おさわ　有難う存じます。

およし　(側から、――氣づかひなやうに)　ですけど、重さんのいふなりに音無しく書くでせうか?

専造　(突つ放すやうに)　書かないといつたところではじまらない。――いまさら強情張つたところで、此奴、どうなるものでもない。

およし　でも……

専造　いつもの傳(でん)に不貞腐れたり飲んだくれたりしてことをすます。ぐづぐづにことをすまさうつたつてさうは行かねえ――なかに、今度は、俺が入つてゐるんだ。――俺といふものが入つてゐるんだ。

およし　……(無言)

専造　ふざけた眞似をすれば俺が承知しねえ。

およし　(附け足すやうに)　それには、まあ、重さんといふ人だつて係合(かゝりあ)つてゐるんですから……

おさわ　あちらにもいろいろ御心配をかけまして……

およし　(専造に)　重さんといふ人は、けど、實(じつ)のある人ですね。

専造　……(無言――一人でついで飲む)

およし　以前(むかし)の義理をいつまでも忘れないで伊三さんの面倒を見る。熱湯を飲まされるやうな目にあつても愛想を盡かさず。――出來ない事ですわ。

おさわ　(うなづく)　全くでございます。

およし　大旦那にはお世話になつたが若旦那には何にもお世話にならない。――さういつてしまへば――つむじを曲げて、もし、さういつてしまつたらそれつきりの話ですわ。――一くちに不人情とはいへません。……

おさわ　それは、もう……

およし　自分に苦勞すると、やつぱり、人のいたはりが達

ひますね。
おさわ　あれだけお仕出しになる方は、やつぱり、それだけのところがおありになります。
およし　人間、運だといひますけれど、必ずさうばかりもいへません。――それだけの、また、甲斐性がなければ……
おさわ　さうでございますとも。
專造　（急に）おふささん。
（おふさ、顏を上げる。――およしも、おさわも、話をやめ專造のはうをみる。）
專造　此奴、念のために聞いて置くが……
おふさ　……（無言）
專造　假りに。――二年と三年と假りに經つて、だね。――伊三郎が、もし、料簡をすつぱり入替へて、酒も飲まない、何もしない、大道の眞中で一杯五十のアイスクリームを賣つても親同胞にひもじい思ひはさせない。――となつたとする。――おふささん、お前さんどうする？
おふさ　……（無言）
專造　どうするといふのは、縒をもどすか、もどさないか、だ。
おふさ　……（無言）
專造　おつ母さんの肚はこのあひだ聞いた。――おつ母さんはどんなことがあつてももう縒はもどさない。――はつきりさういつた。
おふさ　……（無言）
專造　が、おつ母さんの亭主ぢやアない、お前さんの亭主だ。――とにかくお前さんの料簡を聞かないことには――聞いて置かないことにはあとあとどんな間違ひが、此奴、出て來ないともかぎらない。――そのときになつて、高慢な面をしても彼奴は無駄に年をとつた、と、俺としてもいはれたくねえ
おふさ　……（無言）
おさわ　……これの（おふさのはうをさして）うけこたへが惡いといつては打つたり蹴たり、仕打が氣に入らないといつては二日も三日もうちをあけたり。――やうやくかへつてまゐつたと思へば、もう、生體もなく醉つてをりましたり。――何かいへば、うるさい、出て行け。――お前たちに用はない。――二言目にはさう申して夜よなかでも構はず怒鳴り散らします。――それもよろしうございます。……
專造　（遮る）おつ母さん、それは聞いた。――いままでさんざん聞いた。
おさわ　……（だまる）
專造　だから、いつてるぢやアないか。――當人がすつぱ

り料簡を入替へて、酒も飲まない何もしない、大道の眞ん中で一ぱい五十のアイスクリームを賣つても親同胞にひもじい思ひをさせない。――さうなつたとしたら。――さうなつたとしたらと、はつきり、さういつてゐるぢやアないか。
おさわ　へえ。――いえ……
專造　おつ母さんは愚痴が多くつていけない。
おさわ　……（無言）
專造　（もう一度おふさのはうを向いて）どうだね、おふささん。
おふさ　……（無言）
專造　ほんたうにもう未練がないかね？
おふさ　……（無言）
およし　（入れ代るやうに）これは、あなた。――これは無理です。
專造　どうしてヽ？
およし　どうしてつて無理ですわ。――（おふさに）ねえおふささん……
おふさ　……（無言）
およし　話がもうここまで來て。――書いたものをうけとるまでになつて……
專造　（いつそ嘲けるやうに）離縁状だの起請だのつていふものは引裂いてしまへば紙屑だ。
およし
おふさ　}……（無言）
（間。）
專造　（猪口をとり上げかけて、ふと、おふさに）何年になる、一しよになつて？
おふさ　（辛うじて聞きとれるほどに）五年でございます。
專造　（自分にいふやうに）早いものだ。……（飲む）
おさわ　……あんなにまで、いろいろ、お骨折をかけまして。――折角まとめていただきましたのを……
專造　……（無言）
およし　あの時分の伊三さんは、やさしい、氣の弱い。――思つたことでも半分も口へ出していへない風でしたのにねえ。――わづかなうちにどうしてあんなになつたんでせう？
おさわ　それを思ふとわたくしも不思議でございます。――かはつたと申してあれほどかはつた方はありますまいと思ひます。――お酒でも、以前は、これほど深くは飲まず……
およし　飲んでも、決して、酔つたところをみせませんでした。――人に酔つた顔を見せるのはきまりが惡い。――さういつたふうでした。――これがいまは……（專造に）

ねえ、どうしてでせうね？

專造　わかつてゐるぢやないか。――世間みずが急に世間へ打捨られたからよ。

およし　……（無言）

專造　乳母日傘で育つてよ、茶簞笥をあければ、いつも、何かしら菓子が入つてゐると思つてゐたしろものだ。――一たまりもあるものか。

およし　でも……

專造　俺にいはせればちつとも變つちやアゐねえ。――以前のまんまの伊三だ――以前のまんまの、思ふことの半分も口へ出していへねえいくぢなしだ。

およし　……（無言）

專造　以前は立つ瀨があつた。とにかく勝見のせがれ。――備前屋の若旦那といふ立つ瀨があつた。――だからよかつた。――だからそれで濟んでゐた――が、いまはその立つ瀨がねえ。――だから、飲んだくれもすれば不貞腐れもする。――さうでもしなかつたらあがきのつけやうがねえ……

およし　……（無言）

專造　思へば、だから、可愛想な奴よ。（ふとしみじみと）

およし　（さそはれて）それは、まア、さういへば。――自分の何にも知らない間に體よくうちは人にとられるし、自分の財產ときまつてゐたものは兄さんどのにいいやうにされるし、あげくにその兄さんどのに死なれるし。――不仕合といへば、隨分、不仕合です。――自棄になるのも、仕方がないとは、それは、思ひますけれど……

專造　……（無言）

およし　でも。――それにしても……

專造　……（無言）

およし　それならそれのやうに料簡をしなければ。――料簡をしめて勝見のうちを立てる考へをしなければ。――伊三さんがやらないで外にだれがそれをやる人があります？

專造　……（無言）

およし　（そのままおさわへ）ねえ、大切なからだぢやありませんか。

おさわ　お店のああいふことになりましたのを、世間では、伊三郎さんにかづけていろいろ申します。――伊三郎さんが、いへば、おふさのやうなものと一しよになつたから。――さうとはいはないばかりのこといろいろ申します。――聞くたびに、わたくし、お內儀さんのまへでございますけれど、それは人さまに知れない辛い思ひをいたしました。

專造　それが、また、愚痴だ。――世間で何といはうとお前

さんの退けめに思ふことはなんにもないぢやアないか。

おさわ　へえ……

專造　いま、おつ母さんは、いろいろお骨折をといつたけれど、さういはれるとこつちは何といつていいか分らない。――面目しだいもない。――もともとおつ母さんの堅いことをいつたのを――堅いことをいつてうんといはなかつたのを、こつちが無理に口說いてもらつたおふささんだ。……

おさわ　とんだことを……

專造　（つづけて）それもいい。――以前はどうでも、いまぢやア、伊三郎はおふささんの厄介ものだ。――おふささんに伊三は喰はしてもらつてゐるんだ。……

おさわ　……（無言）

およし　（おさわに）全くおふささんのおかげですわ。――おふささんが思ひ切つてああいふことをはじめて下すつたから伊三さんも……

おさわ　とても、いいえ、人さまにお敎へ申すの何のといへる……ではないのでございますけれど。――外にどういたすことも出來ないもので……

およし　……（うなづく）

おさわ　でも、有難いことに、さういふことならと被仰つて藏前のお師匠さん。――御存じでございませう、あの……

およし　ええ、お政さん……

おさわ　あちらがたいへん肩をお入れ下さいましてね。――お弟子をお世話下すつたり、これの（おふさへこなし）存じない、このごろの、新規のものをうつして下すつたり。――いろいろ御親切になすつて下さいます。

およし　結構ですわ、それは……

おさわ　これもさう申します。――わたくしもさうなれば安心でございます。――出來ませんまでも、このさき、これで、まア、細くもやつてまゐりたいと存じてをります。

およし　おふささんほどお出來になるものを持腐れになさるのは勿體なうござんすわ。――それは、もう、さうなさるはうが何ですわ。

おさわ　（全く善意に。――いつそほとほとしたやうに）稼業にいたさせようと仕込んだつもりはございませんでしたが……

およし　……（無言）

（間。）

專造　いつまで饒舌つてても切りがない。――寢るとしようぢやアないか。

およし　さうですね。――ぢやアここを片附けて……

專造　おつ母さんの蒲團はいいのか？

およし　ええ、二階へおふささんのと一しよにとらせてあります。

おさわ　いえ、わたくしは。――近いんでございますから……

専造　幾ら近いつたつて、この時間に、女一人でかへれるもんぢやアない。

(突然、戸外(そと)で、犬けたたましく吠え立てる。――遠くまた、近く……。)

(間。)

(雨戸を烈しい感じに叩く音……。)

専造　(耳を立てて)　何誰(どなた)……？

(「わたくしです。――おあけになつて下さい。――すみませんがお開けになつて下さい……」と上づつた聲でいそがしくいふのが――勿論はつきりではなく――聞える。)

専造　重さんだ。

およし　ほんとうに……

(専造、およし開けに行けとこなし。――およし、引きかけた食卓をそのままにして立つ。)

専造　(おふさに)　おふささん、あつちへ……

(おふさ、いはれるままに急いでそこを立つ。)

(間。)

(戸をあけるのにつづいて外から何かのなだれこむやうな物音。……「まア重さん。――あら伊三さんも……」と驚きと狼狽とでおよしのさういふのが聞える。――間もなく、およし、かへつて來る。)

およし　あなた、重さんと伊三さんとが怪我をして……

専造　怪我を？

およし　(おさわに)　おつ母さん、一寸……

(間。)

(おさわ、急いで立つ。――ともどもおよしと出て行く。)

(およしをさきに、重吉、伊三郎、おさわ、入つて來る。――重吉も、伊三郎も、顔のいろをかへ、著物をところ〴〵泥にし、ただならないさまをみせてゐる。――およしは、そのまま、となりの部屋へ行く。)

専造　(重吉に)　どうなすつた？

重吉　へえ……(強ひてわらふ)

専造　怪我をしたつてどこを……？

重吉　いえ、なアに。――ほんの……

およし　重さんは足を。――伊三さんは手と足を……(いひながら薬だの繃帯だのを持つてそばへ來る)

(間。――およし、おさわに手傳はせて、重吉と伊三郎の怪我の手當をする。)

（ふと誰も無言。）

（燈火のいろ白く澄む。）

およし　（繃帶をし終つて）　滲みますか、くすり？

重吉　いいえ……

およし　出していらつしやい。――出していらつしやい、足を……

重吉　へえ……

およし　ほんたうに……

重吉　へえ……

專造　つまらない遠慮だ、重さん。――樂にした方がいい。――ほんたうに樂にした方がいい……

重吉　へえ。――ぢやア、ま、御免くださいまし。（足を出してすわる）

專造　（およしに）　熱いのを……

およし　……（うなづいて立つ）

（おさわは、なほ、伊三郎の手當を終らないでゐる。）

專造　どうして、また、怪我なんぞ？

重吉　（心もちを押へる）　おはづかしい話で……

專造　……（無言）

重吉　こんなみつともない恰好をお目にかけるんではないんでございますが……

專造　しかし、うちを出なすつて……？

重吉　こちらをおいとまいたして出て厩橋までまゐりました。――あすこまで行けば俥がある。――さう思ひましたのが、生憎、遲いせゐか一臺もありません……

專造　……（うなづく）

重吉　橋を越せばあるだらう。――病院のあの角にいつも並んでをりますから。――もしなくつても石原までまゐればどうにかなる。――さう思つて橋をわたりかけました。――と、いきなり、伊三郎さん、わたくしの隙を見てぱつ……

（專造、伊三郎のはうをチラリと見る。――身ぢかのおさわも、火鉢の前に離れてゐるおよしも、同じく伊三郎のはうを見る。伊三郎、石のやうに動かない。）

重吉　逃がしちやアならない。――と思つて、わたくし、いそいでうしろから摑へました。――無理にそれをふり切らうとする。――さうさせまいとする。――揉合ふはずみに……

およし　お轉びになつた。……？

（およし、そのまへに、あたらしくつけた銚子を持つて食卓のそばに來る。）

重吉　石にでもすべつたものと思ひます。――折重つてもろに……

およし　あぶない。まア……

（專造。無言。）

およし　まア一つ……（猪口をとつて重吉にさす）

重吉　へえ、有難うございます。（うける）

およし　お痛みぢやアありません？

重吉　いいえ、そんな。――大したことは……

（およし、重吉の猪口につぐ。）

專造　（するどく）伊三さん……

重吉　ああ、一寸……（遮る――猪口を下に置く）

專造　……？（重吉のはうをみる）

重吉　一寸、わたくし、申上げたい……

專造　わたしに？

重吉　へえ。

專造　……（うなづく）

重吉　（出してゐた足を無理に折つてすわり直す。――手を突いていんぎんに）改めて、わたくし、あなたにお詫を申上げます。

專造　重さん……

重吉　（つづけて）自分のふつつかを棚に上げて、今日まで、伊三郎さんのことにつき皆さん御親類の方方おそろひの中へさし出たことをいたしたり、また、申上げたりいたしました。――さぞ分にすぎた奴といふ思召もあつたらうと存じます。――何とも申譯がございません。

專造　……（無言）

重吉　……が、わたくしは、御衣卿のとほり勝見の先代の大旦那に一方ならない御恩をいただいてをります。――十二の年から御厄介になり、どうにか今日、一人だちの出來ますやうになりましたのもみんな大旦那のおかげでございます。――その御恩の幾分でも。――せめて、その萬分の一でも、と、さう思ひますばかりに、わたくし、何か伊三郎さんのお役に立ちたい。――出來ますならばさういたしたいと考へました……

專造　……（無言）

重吉　したが、今晩といふ今晩、わたくしどもが出る幕でないといふことがわたくしによく分りました。

專造　……（無言）

重吉　わたくしどもの彼是いたすことは、反つて、伊三郎さんのおためにならない。――反つてさういふことになるといふことが、はつきり、わたくしに分りました。

專造　……（無言）

重吉　口ほどにもない奴といふおさげすみをいただくことは存じてをります。――いたし方がございません。――お叱りを覺悟のうへで、わたくし、一まづここで引取らせていただきたいと、その……

（間。）

専造　いや、分りました。……

重吉　……(だまる)

専造　御礼もといふ外わたしにはいひやうがない。

重吉　……(無言)

専造　あなたなればこそいままで我慢をして下すつた。——大てい肝の煮えたこつたらうと思ひます。

重吉　……(無言)

専造　すまないといふ臺詞は此方でいふ臺詞です。

重吉　とんだことを。……

専造　……(無言)

(間。)

重吉　では、甚勝手でございますが、これでわたくしはおいとまさせていただきます。

専造　どうぞ御随意に……

重吉　(およしに)とんだ、どうも、お騒がせいたしまして相済みません……

およし　(言葉ずくなにただ)失禮いたしました。

重吉　(おさわに)おふくろさん、お聞きのとほりのしだいでございます。——どうぞ悪しからず……

おさわ　(力なく)まことにどうも……

(重吉、座を立つ。——およし、おさわ、ともども立つ。)

専造　わたしはここで……

重吉　どうぞ、もう……

(重吉、そのまま、伊三郎から眼をそらして出て行く。——およし、おさわ、送つて出る。)

(間。)

(専造、湯呑に酒を満たす。——飲む。……)

(伊三郎、なほ、石のやうにうごかない。)

(燈火のいろいよいよ白く澄む。)

専造　此奴を片づけてくれ。

(およしとおさわのかへつて来たところで、専造、食卓を下げさせる——いはれるまま、およし、おさわと二人でそれをとなりの部屋に運ぶ。)

(戸外に犬の聲。——一しきりで止む。)

(間。)

専造　(伊三郎に)此方へ来ねえ。

伊三郎　……(無言)

専造　そこぢやア話が分らねえ。——もつと此方へ来ねえ。

伊三郎　……(無言)

専造　(こみ上げて来る心もちをそのまま)何といふ眞似をしやあがるんだ、手めえは……

伊三郎　……(無言)

専造　(かぶせて)何だつて、重吉に、手めえ、……(いひ

かけて、ふと、伊三郎の額に眼をとめる。――咎めるやうに）何を、手めえ、泣いてゐるんだ？

伊三郎　……（無言）

専造　何が悲しいんだ？――泣くほど何が悲しいんだ？

伊三郎　……（無言）

専造　ふざけるのもいい加減にしろ……

（間。）

伊三郎　（急に額を上げて）おねがひがあります、小父さん……

専造　何？

伊三郎　おふさに逢はせてください。……（泪をおさへる）

専造　（冷かに）何のために？

伊三郎　逢へば分かります。――逢はせて下されば分かります。

専造　……（無言）

伊三郎　わかれろと被仰るならわかれます。――わかれますからそのまへに。――そのまへに一度……

専造　手めえ、そこで何をしてゐたんだ？――今まで何をしてゐたんだ？

伊三郎　……（だまる）

専造　手めえには俺のいままでいつたことが耳に入らなかつたのか？

伊三郎　……（無言）

専造　おふささんは手めえに愛想が盡きたんだ。――愛想を盡かして手めえとすつぱり切れる料簡になつたんだ。

伊三郎　……（無言）

専造　だが、ぐうたらな、ふんぎりのつかねえ手めえのこつた。――うぬの勝手について喰ひ醉つたりすると出て行けがしにするくせに。――それだつて、いへば、手めえのほうで嫌なら出て行くのが至當なんだ。――いざとなると、こけ未練に、ぐづぐづようもねえ御託をぬかすにきまつてゐる。――それをみ越して、おふささんは、手めえがうちを空けてゐる間に神戸の姉さんのところへ足を抜いたんだ。――はつきり、先刻、さういつたぢやアねえか。

伊三郎　そんなことをいはないで、小父さん。――お願ひです。――逢はせるだけあはせて下さい。――お願ひです。……

専造　……（無言）

伊三郎　逢つて一と言聞けばいいんです。――當人の胸を一と言聞けばいいんです。――たつた一と言でいいんです。……

専造　そんなことをいつて、手めえ、俺のいふことをうろんに思ふのか？

伊三郎　うろんに思やアしません。――うろんに思やアしませんけれど。――(幾分いひにくいかたちに)　神戸へなんぞ行つてるわけがありません。……

專造　神戸へ行つてなくつて、ぢやア、どこにゐる?

伊三郎　……(無言)

專造　俺がかくしたとでもいふのか?

伊三郎　……(無言)

專造　そんならそれで探したらいいだらう。――手めえのここにゐると思ふところを探したらいいだらう。

伊三郎　……(無言)

專造　ことによると俺のところにゐるかも知れねえさ。――さがしねえ。――さがしてみねえ。――遠慮はねえから家探しでもなんでもしてみねえ。

伊三郎　……(無言)

專造　逢つて當人の胸を開く。いいだらう。――結構だ。――が、假りに、――もし假りに先方が嫌だといつたらどうする?　手めえのはうで逢ふつもりでも、おふささんのはうで逢はねえといつたら手めえどうする?

伊三郎　……(無言)

專造　ここにおふささんがゐるとする。――手めえが思つてゐるやうに、眞實、もし手めえのことをおふささんが何とかまだ思つてゐるとしたら、天井からでも、縁の下からでも、手めえのいふことを聞いてここへ出て來なくつちやアならねえ。――さうでなくつちやアうそだ。――ゐて、もし、出て來ねえとしたら、眞底、それア、手めえに未練のねえものだ。――いい加減うぬ惚れて置け。……

伊三郎　……(無言)

(やや長き間。)

(伊三郎、影のやうに立上る。――出て行かうとする。)

專造　どこへ行くんだ、手めえ……?

(間。)

伊三郎　……さがしに行きます。

專造　……?

伊三郎　おふさをさがしに行きます。

專造　と、手めえ、俺のいふことが聞かれねえんだな?

伊三郎　……(專言)

專造　どうしても聞かれねえといふんだな?

伊三郎　……聞かれれば、素直に、重さんのところへ行きます……(せきあげて來る泪をくひしばる)

(間。)

(伊三郎、出て行く。――誰も無言。)

(長き間。)

(戸外に、また、犬の聲。――むしろ陰鬱に……)

（おふさ、だれも知らないうち奥から出て來て忍び泣く。――ともども、およしも、おさわも泣く。）

專造　（ふとその方な見て）　何を泣いてるんだ、お前たちは？　――なんにも泣くせきはないぢやアねえか？

おふさ
およし
おさわ　……（泣く）

專造　（わざと）　おふさざんは、まア、仕方がねえ。――とにかく亭主にわかれたんだ、――が、おつ母さんの泣くところはねえ。――何が悲しくつて、おつ母さん、泣くんだ？

おさわ　……（泣く）

專造　（およしに）　手めえまで一しよになつて何のざまだ。……

およし　（泣く）

專造　彼奴はうぬで掘つた穴へうぬで落ちたんだ。――音無しく、あれで、重吉についてさへ行けば、いのちは、まだ、つなげたんだ。――ああ運んだものの改めて重吉から、どうでせう、ここをもう一度、と、いはれればいけないとはいへねえ。――おふささんにしても、おつ母さんにしても、とにかく一度は重吉の顔をたてなければならねえ。――（おふさとおさわに）　さうだらう？

おふさ
おさわ　……（無言。――泣く）

專造　それをあの馬鹿が向うみずな眞似をしやアがつてよ。怪我までさせれば世話はねえ……

おふさ
おさわ　……（無言。――泣く）

專造　これでもう重吉とも緣切だ。俺とも綺麗さつぱりだ。……

おふさ
おさわ　……（無言。――いよいよ泣く）

專造　なぜ、おつ母さん、わらつてやらねえ？――ざまアみろと、なぜ、いつてやらねえ？――心からでいい氣味ぢやアねえか。

おさわ　でも、旦那。……――みすみすたよるところが……

專造　いいぢやアねえか。――どう路頭にまよはうと先方の勝手だ。――他人のことをよけいな心配だ。……

およし　さういつたつて、あなた。――それは……

專造　何がそれはだ？――手めえだつてさうだ。――いまの今まで、あんな人はない、あんな料簡の人はない、と一しよになつて伊三のことを敵の末のやうにいつてゐたんぢやアねえか。――それをいまさらになりやアがつて……

およし　でも、あの、惨めな……

専造　惨め？――惨めといふのは俺のこつた。……

およし　……（無言）

専造　手めえたちに泣かれて俺はどうすればいいんだ？――どこに俺の立つ瀬はあるんだ？

およし　……（無言）

無造　誰のためにしたんだ？――誰のためにしたこつた？――いやさ、誰にたのまれて横へ押した車と思ふんだ？

およし　……（無言）

専造　（叩きつぶすやうに）いい加減にしろ、ふざけやアがつて……

（おふさ、およし、おさわ、泣く。）

（専造、ふいと窓のそばに立つ。――戸をあける。）

専造　有難え、もう空が白んで來た。（胸に滿ちた苦澁を惨んで來る泪ぐましさ……）

（三人、泣きつづける。）

――幕――

冬

人物

政吉　梅本の主人(三十四五)
おみよ　政吉の女房(二十四五)
おすが　政吉の舊主人(二十九)
三勝　落語家(二十六)
半七　落語家(五十一二)
喜兵衛　政吉の伯父(六十二三)
おきた　藝妓(二十九)
おたつ　梅本に古くゐる女中(五十四五)
その他　梅本の女中　三四人。

(吉原附近にある梅本といふ古い料理店の住居。——大正八九年ごろのこと)

その一

十一月の末、夜。——おみよの部屋で、おすが、政吉の着物に綿を入れてゐる。

(あたりがしづかなので、庭を隔てた座敷で彈く三味線の音がしめやかに聞えて來る)

間。

おみよ、盆の上に鶴の子の切つたのをのせて入つて來る。

おみよ　すみませんわね、姉さん。(さういひながらおすがのうしろを廻つて火鉢のそばに來る)

おすが　(下を向いたまゝで)いゝえ。——もう少しのところ……

おみよ　お客さまにそんなことをお願ひして。——隨分わたしもいゝ氣ですわね。(蟠りなくわらふ)

おすが　そんなことをいつて、おみよさん。——わたしに出來ることぐらゐ、少しは何かお手傳ひでもしなかつたら冥利に盡きますわ。

おみよ　また、姉さん、そんな。——よして下さいよ。

おすが　どうして？　(顏を上げる)

おみよ　どうしてつて、姉さん。——いやな方ね、あなたは……(わらふ)

おすが　でも、そのためにこの間、ちやアんと約定をしたんぢやアありませんか。(一くぎりついたところで綿から手を離す)

おみよ　どういふ約定を？

おすが　いけないわね、あなたは。――どこへも行つてはいけない、體のほんたうになるまでこゝにゐなければいけない。――この間、政さんとあなたにさういはれたとき…

おみよ　（うなづく）　えゝ……

おすが　わたしも料簡をきめてさうします。――いけないといはれるまで。――もう置くことは出來ないといはれるまでこゝにゐます。――政さんとあなたの一生厄介ものになります。――その代りにはいまゝでのやうにもうお客さまにしないで下さい。内輪のあつかひにして下さい。――さうでないと始終はゐ惡いことになります。――政さんとあなたにあれほどさういつたぢやアありませんか。

おみよ　だから遠慮なしにそれをお願ひしたからいゝでせう。

おすが　是だつて仕立屋へやるのを無理に横取したんぢやアありませんか、わたしが……

おみよ　そんなことをいつて姉さん。――それだつて、うちに知れたら、どんなにわたしが小言をいはれるか分りやアしませんわ。

おすが　政さんはだめですよ。――政さんはあゝいふ……（いひかけて默る。――わらつて）　ごめんなさい。――あなたのまへで是はいふことぢやアありませんわね。

おみよ　構ひませんわ、姉さんなら。――外の人が何かいへば默つちやアゐませんけれど……（わらふ）

おすが　いゝえ、惡口ぢやアありませんの。――たゞ、政さんは、惡く聞くつて。――いまだに以前のわたしを立ててゐて下さるんですもの。

おみよ　でも、それは……

おすが　（うへなはないやうに）　以前はどうでも。――いまはこの間もいつたやうにわけが違ひます。――（寂しく、半ば自分にいふやうに）　そんなにしてもらへるはずがありませんわ……

おみよ　いゝぢやアありませんか、どうだつて、――大切にしようとしまいとわたしたちの勝手だといつたら、姉さん、どうします？

おすが　ほんたうをいふと氣塞ですの。（強ひてわらふ）

おみよ　切りがないから止しませうよ。――それよりもお餅でも喰べませう。――そのつもりで持つて來ましたわ。

おすが　それは御馳走さま。

おみよ　何を上ります、姉さん？

おすが　わたしは何でも……

おみよ　阿部川を附合つて下さいません？――あなたをだしにつかつてありやうは……

おすが　結構ですわ、阿部川……

おみよ　ぢやア、すぐに。（さういひながら火鉢にかけた鐵瓶をとる）――あゝ、いけない。――お火がない……

おすが　あゝ、わたし、氣のつかないことをしましたわね。

おみよ　いゝえ、わたしが惡いんですよ。――先刻ついで行けばよかつたのを横着したもんですから……（炭斗をとる）

おすが　暖いとみんな正直で……

おみよ　ほんたうに。――ですけど、どうして今夜はこんなにあつたかいんでせう？

おすが　風がすつかりなくなりましたわね。

おみよ　明日あたりふるのかも知れませんわ。

（おみよ、炭をつぐ。――おすが、また、綿をのばす。――近くの三味線、まへよりもさらにしめやかに、冬の夜の更けがたの寂しさを思はせて聞える。）

（間。）

（おみよ、立つて、呼鈴を押す。）

（間。……女中「おまき」、唐紙をあける。）

おまき　お呼びになりましたか？

おみよ　あゝ。――おどんぶりの小さいのを持つて來ておくれ。

おまき　お一つでよろしうございますか？

おみよ　あゝ。――それからお小皿を二三枚……

おまき　……（唐紙を閉める）

（間。）

おすが　……何だか、かう、惹きこまれるやうな氣がしますわ。

おみよ　（茶簞笥からいろ／＼出しながら）　えゝ？

おすが　いゝえ、あの三味線を聽いてゐると……

おみよ　（それにはこたへないで）　あれを彈いてゐる妓。おきたさんといふそれは仕合の惡いひとなんですのよ。

おすが　……？

おみよ　いろ／＼にしてやうやくのこと一しよになつた御亭主に死なれ、續いてその御亭主との間に出來た五つになる男の子。――それは大切にしてゐました。――その子にまた死なれ……

おすが　まア。

おみよ　いまはその下の三つになる女の子を自分の手一つで育てゝゐます。――世話をしようといふお客さまがあつても、子どもが可哀相だからといつて强情に一人でやつてゐますけれど、自分もやつぱり體が弱いんでしてね。――始終やすんでばかりゐます。

おすが　幾つぐらゐの方です？

おみよ　さア、午とかいつたと思ひますけれど……

おすが　ぢやア、わたしと……
おみよ　あゝ、姉さんもさうでしたわね。
おすが　えゝ。
おみよ　と……？
おすが　九ですわ。
おみよ　九？――（信じられないやうに）さうですか？――七ぢやアありませんか？
おすが　いゝえ。
おみよ　わたしがあれだから。（指を折つてみて）あゝ、さうですわね。
おすが　あと一月で丁度ですもの。――駄目ですわ、もう
おみよ　でも、姉さんは。――とてもさうはみえませんわ。
おすが　さうですか？（寂しくわらふ）
おみよ　姉さんが、あの、はじめてうちへみえたとき、――あのとき、わたし、そのまへにいろいろ、うちから聞いてゐたから、それでも、すぐに、姉さんと思ひませんでした。――だつてあんまり姉さんが若いんですもの。
おすが　（思ひ返すやうに）あのときは。――あゝ、わたし、明石を着てゐました……
おみよ　えゝ、明石。――雨絣の、あの……
おすが　（あぐねたやうに、また、嘆息するやうに）そんなに、わたし、華奢にみえますかねえ。
おみよ　いゝえ、そんな。――華奢なんていふんぢやアありませんわ。
おすが　……
おみよ　つまり。――何といつたらいゝでせう？――姉さんがつまり綺麗すぎるからいけないんですわ。（わらふ）
おすが　（笑はないで）そんなことはありませんわ。
（おまき、どんぶりと小皿を盆のうへにのせて持つて来る。そのまへに三味線の音は止んでゐる。）
おまき　これで宜しうございますか？
おみよ　あゝ、有難う。――そこへ置いて行つておくれ。
おまき　……
おみよ　甚さんはかへつたかい？
おまき　いゝえ、まだでございます。
おみよ　まだ？
おまき　……（わらつてうなづく）
おみよ　お帳場にゐるの？
おまき　へえ。
おみよ　あの人、今夜、すこし酔つてゐるやうだね？
おまき　さうのやうでございます。
おみよ　いつもの傳で、また、くど〳〵いつてゐるんだらう？
おまき　へえ……（わらつてこたへる。――間もなく出て

行く）

（間。）

おみよ　この間、あの、寄席へ行つたとき。――二人で出て掛合噺をやつた落語家がありましたでせう。

おすが　えゝ。

おみよ　あの年をとつたはうの。――もと、あれ、うちの洗ひ方だつたんですの。

おすが　年をとつたはうといふと？――あゝ、あの、聾のいゝ……？

おみよ　えゝ。

おすが　まア、さうですか？

おみよ　うちに、何でも十年近くゐて、亡つたお父つアんにたいへん目をかけられたんださうですけれど、好きでたうとうあの稼業になり。――とにかく、まア、あゝやつて、一ぱしにいまやつてゐますの。

おすが　まアね。

おみよ　二三年まへまで一人で高座に出てゐたんですけれど、どう思つたのか、あの若いはうのと一しよになつて――あゝいふ三勝半七といふ名前になつて――いまのやうな掛合噺をするやうになりました。

おすが　と、中年からの人ですか？

おみよ　えゝ、まア。――二十四五までうちにゐたんだといひますから。

おすが　分らないもんですわね。

おみよ　もと〳〵さういふ性に出來てたさうですけれど……

おすが　（しみ〴〵と）でも、あゝやつて。――始終あゝ好きなことをいひ合つて暮せたらどんなにいゝでせうね。

おみよ　（わらつて）それなんですよ、姉さん……

おすが　……？

おみよ　誰しもさう思ひます。――はじめはわたしでもさう思ひました。――でも、みると聞くとは大きな違ひで、あの二人、高座を下りると、始終、いがみ合つてばかりゐます。

おすが　……？

おみよ　いへば、まア、稼業のうへだけで機嫌をよくしてゐます。――好きな、屈託のないことをいひ合つてゐます。――樂屋へ入ると用の口もきゝません。――同じ方角にうちがあります。――でも、決して一しよにかへりません。

おすが　それは、まア、高座にゐるときのやうにばかりもしてゐられないでせうけれど。――どうしてゞせう？

おみよ　半七のはうにすると、自分がゐればこそ、自分がそばで相をとればこそ三勝とか何とかいはれるんだ。――

ー年をとつてゐるだけにさう思つてゐます。……三勝のはうにすると、素人から上つたものに何が分る。こつちは根からの藝人だ。年は若くても、高座のことは、此方のはうがいろ／＼知つてゐるんだ。――さう思つてるます。――何かあると兩方がそれをいひます。――だから喧嘩になります。

おすが　（不思議さうに）それで一しよにゐるんですか？

おみよ　（わらつて）それが、また、可笑しいんですの。――幾らけんくわをしても。――喧嘩をしてわかれても、つまりは、また、ずる／＼に一しよになります。いまゝでにまア幾度さうやつたでせう？

おすが　わかれちやア、矢つ張、いけないんですか？

おみよ　さうなんですの。

おすが　……

おみよ　で、さうやつて、喧嘩をすると必と兩方がうちへ來ます。――來ておたがひのざんそを上げます。――ですけど、仲を直して一しよになるときには決して何ともいつて來ません。

おすが　（わらつて）げんきんですわね。

おみよ　ですから、このごろはもう、此方でも馴れつこになつて、何かはじまつても初手のやうに心配しませんの。――だつて打捨つて置いてもいゝんですもの。――ちやアんと、また、縒がもどるんですもの。

おすが　やつぱり縁があるといふんでせうね。

おみよ　どういふんだか分りませんわ、あゝいふのは。――今夜も、帳場に、半七のはうが來てゐるんです。

おすが　あゝ、あつちにみえてゐるのは……？

おみよ　また何か出來たんですよ、必と。――醉ふと、いふことがくどくつてね……

おすが　あんなさつぱりしたやうな人がね……？

おみよ　えゝ。――さア、火が起りました。（手に持つた火箸を灰にさす）――姉さん、あなた、幾つあがります？（網を火にかける）

おすが　幾つなんてそんなに。

おみよ　手前どもへおいで下さいましたら、どうぞ御遠慮なく……

おすが　有難うございます。

（二人、顏をみ合せてわらふ。）

（間。）

（おみよ、網の上に鶴の子を切つたのをのせる。――阿部川にかゝる手順をいろ／＼つける。――おすがはおすがの仕事をつゞける。）

（間。）

（唐紙があく。――政吉が入つて來る。）

政吉　おすがさん、手紙が來ましたよ。（手に持つた封書をおすがにわたす）
おすが　あら、すみません。――有難う……（うけとる）
政吉　何だ、阿部川か？（さういひながら、おみよに近く、位置としておみよとおすがの間にすわる）
おみよ　えゝ。――あなたはそこにみてゐらつしやい。
政吉　俺だつて喰ふよ。
おみよ　まア、あなたが阿部川を？――さうでなくつてもお天氣が變りさうなんですからよして下さいよ。（わらふ）
政吉　ばかだなア、お前は。――俺の好きなのを知らねえのか。
おみよ　知りませんわ。――いつが日にも喰べたことがないぢやアありませんか。
政吉　喰つたことがないんぢやアない、喰はしたことがないんぢやアないか。
おみよ　だつて、あなたがこれを。――誰にみせたつて宗旨違ひぢやアありませんか。――（おすがに）ねえ、姉さん。
おすが　（手紙を讀みかけて）そりやアね。（顔をあげてわらふ）
政吉　（おすがに）あんたまでさういふのは酷い。

おみよ　酷いことはありませんわ。――あたりまへですわ。（さういひながら黄粉をつけたものを小皿にとる。――箸を添へて）姉さん、出來ました。――お待ち遠さま。
おすが　どうぞお先へ。――わたし、あとで頂きますから。
おみよ　そんなことをいつて、姉さん、固くなつたら駄目ですわ。
おすが　わたし、いま、こゝを一寸やつてしまひますから。――あなた、まア、召上れ。
おみよ　また、姉さん。――わたしのもこゝに燒けてゐるんですのよ。
政吉　俺がそれを毒見してやらう。――此方へ出しな。（手を出す）
おみよ　ほんたうに、あなた、喰べるんですか？
政吉　喰ふとも。
おみよ　大丈夫ですか？
政吉　何が？
おみよ　そんな無理をして。
政吉　阿部川を喰ふのを無理つて奴がどこにある？――お前は、まア、俺と一しよになつて何年になるんだ？
おみよ　さア、何年になるでせう？――五年――六年ですか？（わらふ）
政吉　足かけ六年だ。――六年も一しよにゐて、まだ、俺

の料簡が分からねえのか？

おみよ　……

政吉　いつもいつてゐるぢやアねえか。――俺といふ奴は何も酒が好きぢやアねえんだ。

おみよ　（わらつて）だから、わたしもいつもいふでせう。――好きでもないのにどうして飲むんです？

政吉　だからよ、――うまくつて飲むんぢやアねえ。――恰好がつかねえから俺は飲むんだ。

おみよ　恰好がつかないから？

政吉　さうよ。

おみよ　そんな、あなた……

政吉　だらしがないといはれても是ばかりは仕方がねえ。――とにかく十年以來(このかた)の道づれだ。いろ／＼苦勞をし合つた俺だ、――氣に入られねえからつて、今から、無下にわかれることも出來ねえぢやアねえか。

おみよ　（おすがに）姉さん、あゝいふことをいふんです。

おすが　……（わらふ）

政吉　（阿部川を口に入れて）おい、これはいけねえぜ。

おみよ　どうしてです？

政吉　甘くも何ともありやアしない。

おみよ　あら、そんなことはありませんわ。

政吉　ぢやア、お前、喰つてみな。

おみよ　さうかしら？（一口喰べてみる）――さうでもありませんわ。

政吉　負惜しみの強い奴だな。――それで、もし、お前に甘ければ、お前のはうがよつぽど酒のみに出來上つてゐるんだ。

おみよ　こんな分らないことがありますか。

政吉　ぢやア、もつと、かなじまないで砂糖を入れるこつた。

おみよ　入れますよ――（砂糖の入れものを取つて、黄粉のなかに、ほんのわづかづゝ入れる）

政吉　（みて）何だ、それつばかり。――折助がさんきらいを買やアしめえし……

おみよ　だつて、そんなに甘くしたら喰べられやアしませんわ。――（おすがに）ねえ、姉さん。

おすが　（それにはこたへないで）さうでした。――わたし、思ひ出しましたわ……

おみよ｝政吉｝（無言。おすがの顏をみる）

おすが　政さんは、あの、七草粥がお好きでしたわね。

政吉　覺えてゐますか、おすがさん？

おすが　（わらつて）お砂糖で思ひ出しましたわ。

おみよ　七草粥つて、あの、お正月のあれですか？

おすが　えゝ。（深くうなづく）
おみよ　まア、あなたといふ人は……（政吉の顏をみる）
政吉　ふんだんにそれも砂糖をかけて喰ふ奴よ。――うれしかつたかね。――先生に、で、よくいはれた……
おみよ　……？
政吉　七草粥に砂糖をかけて喰ふ料簡ぢやアいゝ職人にはなれねえぞ。――酒をのめ、酒を……
おみよ　（わらつて）いゝ先生ね。
政吉　でも、その時分、俺は猪口に一つと飲めなかつた。――ねえ、おすがさん。
おすが　えゝ。
政吉　昔は元日に。――元日には方々から外の弟子たちが年始に來るんだ。――一日酒浸しだ。――煽りをくつて、俺も、飲めないのを無理に飲まされる。――はじめは、まア、強情を張つて、ふら／＼するのを我慢してゐるが、そのうち、自分の知らないうちいつか細工場へ行つてぶつ倒れてゐる。――眼がさめると燈火がついてゐる。――遠くで篠だの注連だのが風にざわ／＼いつてゐる……
おみよ　……
政吉　（おすがに）あの時分のことを思ふと、あんたのまへだが、いまでも何だか泪のこぼれるやうな氣になりますよ。

おすが　……（寂しくわらふ）
政吉　（つゞけて）賑やかでしたね。何のかのと二十日正月までは客の絶えることがなかつた。
おみよ　わたし、姉さんのその、池の端のお宅にゐた時分のあんたがみたかつた……
政吉　（嘲るやうに）お前なんかのそばへ寄れる俺ぢやアなかつた。
おみよ　あんな憎らしいことを……
おすが　（ふと）ですけど。――さういつてゐるうちに、もう、今年もお正月が來ます。
おみよ　ほんたうに。――また一つ年をとるんですわ。
おすが　（それにこたへるともなく）えゝ……
（間。――おまき、唐紙をあける。）
おまき　（おみよに）あの……
おみよ　わたし？
おまき　へえ。
おみよ　なアに？
おまき　一寸お帳場まで……
おみよ　何か用？
おまき　あの。――半七さんが、一寸お内儀さんに……
おみよ　（政吉に）甚さん、まだ歸らなかつたんですか？
政吉　相手になつてゐたら限がないから、おたつに引渡し

て、構はず此方へ來てしまつたんだ。
おみよ　また三勝といけないんぢやアないんですか？
おすが　（わらつて）今度といふ今度は金輪奈落わかれるんだとよ
おみよ　定文句いつてゐる。
政吉　一寸行つてやれよ。お前が行かないうちは歸りやアしねえ。
おみよ　（眉をひそめる）だつて同じことばかりいつてくどいんですもの。
政吉　まア、行つて、小遣でもやつて來いよ。
おみよ　でもお餅を燒きかけて……
政吉　それは俺が引きうけた。
おみよ　さうですか？
（間。）
（おみよ、おまきと一所に出て行く。）
（間。）
（政吉、火鉢のそばに寄る。――おすが、構はず自分のすることをつゞける。）
政吉　（餅をやきながら）半七といふ奴のこと。――おみよから何か聞きましたか？
おすが　（顔を上げて）えゝ。
政吉　相棒の三勝といふ奴と、始終けんくわをしながら、やつぱり、一つになつてゐます。――こゝんところ、暫くいゝ鹽梅に何にもいつて來ないと思つてゐると、今夜また、何のことでもあるやうにやつて來ました。……
おすが　さうなんですつてね。
政吉　厄介な奴でね。（さういひながら出來た阿部川を皿にとつて）出來ました。――さア、上れ。（出す）
おすが　いゝんですのに、わたしなら。
政吉　まア、お取んなさい。
おすが　すみません。――御馳走さま。（手をのばしてとる。――下に置く）けれど。――先刻もおみよさんにさういつたんですけれど、さういふのは、やつぱり、縁があるとでもいふんでせうね。
政吉　それはさうですよ。――縁あればこそですよ。
おすが　……
政吉　とにかく生れからいつても、半七は東京、三勝は上方です。――さういふ遠國へだてた同士の一しよになるといふことがそも〳〵縁のある……さア、何といつたらいゝでせう？
おすが　（うなづく）ほんたうに……
政吉　だが、何ですよ。――かうして、また、あなたと一しよに一つ屋根の下に暮らせるやうになつたのも――いつてみりやア、やつぱり、それですよ。

おすが　……

政吉　幾度も、まア、いふうやですけれど、實際、探しました。——手をかへ品をかへ探しました。——が、皆暮わからない。——春樹さんのお嬢さんなら、なアに、鎌倉にゐる。——鎌倉のさる寺にゐる。——今だからいひますけれど、さういふことをいふものもありました。——でも、そのとき、もしやと思つてわたしは鎌倉まで行つてみました……

おすが　尼さんになつてすむんでしたらどんなに好かつたでせう。

政吉　どうしても分らない。池の端にゆかりのある人をと思つてさがしても、是もみんな、どこへ行つたか分らない。——わたしが放蕩をして東京を離れてゐた間にすつかり世の中は違つてしまひました。——泣いても間に合はない。——俺の心もちはそれだ、と、あぐねてもうわたしは、その當座、おみよを摑へちやア愚痴をいひました。

おすが　……

政吉　（わらつて）だが不思議です。——どう思つても不思議です。——手をかへ品をかへ探しても分らなかつた奴が、あんた。——だめなもの、とても分らないものと斷念めたときに、小包をつゝんで來た田舎の新聞が手がかりにならうとは……

おすが　（寂しくわらつて）悪いことは出來ませんわね。

政吉　いゝえ、——縁あればこそですよ、ほんたうに、……

おすが　……

政吉　小包をつゝんで來た新聞です。——そのまゝ捨てゝしまへばそれつきりのものです。

おすが　……

政吉　女つて奴はたんねんです。——小包をあけて、その包んだ紙を擴げてゐると思ふと、急におやつといひました。——さうだ、この座敷です。

おすが　……

政吉　何かと思ふと是をみろといひます。——みると先生の名まへが出てゐます。——あとにあなたのことが事細かに書いてあります。

おすが　……

政吉　仙臺。——わたしは、おすがさん、こゝだけの話、ほんたうとは思へませんでした……

おすが　（しみ〴〵と）……すみません。

政吉　（わらつて）また、そんな。——話ですよ。

おすが　……

政吉　（話をかへるかたちに）その手紙、それ。——仙臺からですか？

おすが　（何ごともないやうに）えゝ……

政吉　よくよこしますね。――この間も……

おすが　以前に一しよのうちにゐて。――仲よくした人だもんですから……

政吉　あゝ一しよのうちにゐた。……さうですか。(改めて)うちのはうからは。――あすこのうちのはうからは、その後、何ともいつて來ませんか?

おすが　いゝえ、べつに……

政吉　いろ／＼それからそれと手繰つてみましたがね。――あなたはいゝとき見切をおつけなすつた。――あすこの、あの、三國家のこれ(拇指をみせて)といつたらあなた、仙臺で札附の惡だつていひます。……

おすが　……

政吉　引つかゝつたらさいご骨までしやぶられる。――そのうき目をみたものがいまゝでに何人あるか知れないさうです。――遣り方がうまいんで、また、うつかりみんな引つかゝるんだといひます……

おすが　……

政吉　あなたは、まア、知らぬが佛で。――そんな奴とは知らないでたよりになすつたんだらうが。――ほんたうにいゝ日をおくひになつた。……

おすが　それもみんな。――みんなあなたのお蔭ですわ。

政吉　そ、それをいつちやアいけない。――そんなことをいつてもらはうと思つて話すんぢやアありませんよ。

おすが　でも、それに違ひなければ……

政吉　それは、おすがさん、此方でいふことです。――先生がわたしにして下すつたこと。――さういふと、またあなたは嫌がるけれど御恩返し。――さうとしたつて、わたしのしたことなんぞ、その萬分の一にだつて當つてやアしません。

おすが　……

政吉　先生にかけたわたしの厄介。――わたしは酒を飮んだときばかりいやアしません。

おすが　……(さしうつむく)

(間)

(おみよ、かへつて來る。)

おみよ　(政吉に)かへりましたよ。

政吉　音無しくかへつたか?

おみよ　えゝ。――それより、あなた、外はたいへんな霜ですよ。

政吉　さうか。

おみよ　まアみて御覽なさい。

(おみよ、そのまゝ窓のそばによつて障子をあける。――深い霜。――おすがは無言。……)

――幕――

その二

「その一」の二三日あと。しぐれた午後。——おみよの部屋で、喜兵衛、火鉢のまへにすわつてゐる。——おたつ、少し離れて茶を淹れてゐる。……何のもの音も聞えず、しら／＼とあたり、初冬のしづもりを見せて押默つてゐる。

喜兵衛　（手を火に翳しながら）……でも、こゝんところ、めつきり寒くなつたぢやアないか。
おたつ　さやうでございます。——それに、また、今日はしぐれまして……（喜兵衛のまへに茶を出す）
喜兵衛　飽きずによく天氣がつゞいたからね。——もう降つてもいゝ時分だよ。
おたつ　でも、こゝまで降らずにまゐつたんでございますから、せめて明日もう一日持たせたいものでございます。
喜兵衛　なぜ？
おたつ　いゝえ、明日は酉でございますから。
喜兵衛　酉？　（すぐに氣がついて）　あゝ、二の酉か？
おたつ　へえ。
喜兵衛　其奴は氣がつかなかつた。——さうか、それは降らしたくない……
おたつ　しかしこの分では……（外へこなし）
喜兵衛　このまへはどうだつた、初酉は？
おたつ　へえ、このまへは、朝の模樣ではいかゞと存じましたが、好い鹽梅に、あとになつてすつかりお天氣に……
喜兵衛　それだと明日はむづかしいぜ。——初酉にふらなきや二の酉に降るのが定法だ。
おたつ　どういたしてゞございませうね？
喜兵衛　不思議だよ、此奴ばかりは。——一度は必とふるんだから……
おたつ　……
喜兵衛　どうだね、ところで？——忙しいかね、店は？
（煙草入を膝にとり上げる）
おたつ　有難う存じます。——おかげさまで……
喜兵衛　（うなづいて）　それは結構だ。——世間はどこも酷いらしいぜ。
おたつ　さうのやうなお話でございますね。
喜兵衛　何稼業によらず一般にいけないんだが、別してこの、茶屋小屋稼業はいけないらしい。——話の外らしいぜ。
おたつ　……
喜兵衛　昨日も藤家の親方が來ての愚痴よ。——今月になつて彼處いらのうちでさへまるで遊びだつていふもの

ね。――ベンともツンともいはない晩が三晩もつゞいたさうだ。――日清戰爭んとき以來の不景氣だといつてゐたがさうかも知れない。

おたつ　いえ、それと申しますのも、此方(こゝだ)はおみえになるお客さまがお客さま。――みなさまもう、古くから御贔屓の、お馴染さまばかりでございますから……

喜兵衛　つまりは賣込んだ暖簾の有難さだ。――おたつさんのまへだが……

おたつ　さやうでございます。

喜兵衛　何としてもそこは梅本。――田圃の古い梅本だ。――今出來のお茶屋さんとは、矢つ張、お客さまのはうで一つになさらない。……

おたつ　それは、もう……

喜兵衛　（火箸で、煙管の脂を落しながら）といふのも。――それといふのもつまりは先代だ。―それだけのことを先代がして置いてくれたればこそだ。

おたつ　……

喜兵衛　あだに思つちやアならない、忘れちやアすまない。――始終うるさくいふのはそこだ。

おたつ　……

喜兵衛　いつになつたら、しかし、政吉にその理合(わけ)が分るんだか……（嘆息するやうに――といふことは同時にまた冷かに煙管を下に置く）

おたつ　（幾分同感なうちにつゝんで）お分りに、いえ、ならないと申すわけでも……

喜兵衛　ないとはいはせない。――わたしはいはせないよ。

おたつ　……

喜兵衛　どだい政吉は、わたしにいはせれば、料簡の置きどころを取ッ違へてゐる――肝心のメドを取ッ違へてゐる。――幾らいつても、當人、そこに氣がつかない。――そも／＼のそれが間違ひだ……

おたつ　……

喜兵衛　早い話が政吉はこのうちをわがものと思つてゐる。――あれ一人のものと思つてゐる。――なるほど、政吉は、このうちの主人だ。名前人だ。――だが、主人でも名前人でも、この梅本といふものは。――この梅本の看板は政吉一人のものぢやアない。

おたつ　それは、もう……

喜兵衛　（かぶせて）さうだらう。――それに違ひないだらう。

おたつ　へえ。

喜兵衛　そも／＼の成立(なりたち)。――まア成立だ。先代が眼をつぶる際(きは)に、大坂町とわたしと圀藏をとも／＼枕許へ呼んで、たのむ、あとを。――圀藏一人ぢやア安心がならない。

──政吉がゐてもあの通りで役に立たない。

おたつ　……

喜兵衛　折角こゝまで丹精して來たものを子供の代でむざとしたことにされたくない。──でなくつても料理屋に二代なし。──世間でうるさくいふ口だ。──よつぽど腹をしめてかゝらなくつちやアいけない。──そのつもりで、お前も俺の亡いあとは、伯父さんたちをたよりに下手な自分料簡を出さずと何でも指圖してもらふやうにしなくつちやアいけねえ。──かた〳〵これだけはいつて置く。……

おたつ　……

喜兵衛　だから國藏は、あゝやつて、何によらず一々相談をかけて來た。──それこそ座敷の手入一つするんでも伯父さん、あすこをかうしようと思ひますがどうでせう？　こゝをかう直さうと思ひますがいゝでせうか？──それほどにしなくつてもいゝことまで、こくめいに、先代のいひつけ通りわたつて來た。──さうされると人情で、こつちでも矢つ張、何とかしてやりたい、少しでも、まア、箔をつけさしてやりたい。──わがことのやうに氣も揉んだ奴よ。

おたつ　お亡りになつたから申すのぢやアございませんが、大きい若旦那は、さう申しても、穏な、あたりの好い…

喜兵衛　いまどき珍らしい男だつた。──どうしてあんな氣立の男が流行病なんかに罹つたんだか……

おたつ　全くでございます。──分らないものでございます……

喜兵衛　國藏さへゐたら。──愚痴なやうだが、實際、このごろのやうにいろ〳〵嫌なことを番毎みたり聞いたりすると、ついさう思つてえうのない背腹を揉む。──わたしには大坂町のやうに、どうでもいゝ、勝手にするがいゝ。──と、みてあゝみないふりにすましちやアゐられない。──これは、まア、性分かも知れないが……

おたつ　大坂町さんでも、いゝえ、とき〳〵は被仰りたいと思召すこともおありなんでございませうが、矢つ張そこは……

喜兵衛　（うなづいて）店の出し方は違つても、落つれば同じ兩方が茶屋稼業だ。──大きに、それは、いひ悪いところもあるだらう。──だが、何だぜ、國藏の時分には大坂町でもいろ〳〵とさりやくをしたぜ。

おたつ　へえ。

喜兵衛　伯父さん〳〵と下駄を預けられたんで據なくさうした……とばかりはわたしは思はない。──それにしちやア隨分ふんごんだものゝいひやうをした。──わたしは知つてゐる……

おたつ　へえ。

喜兵衛　それがこのごろはふッつり口をきかなくなつた。――何一ついはなくなつた。――ときにわたしのはうから、實は、大坂町、田圃ぢやアこれ〳〵だ、政が斯ういふ始末だ。――何とかしなくちやアなるまい。――さういつて行つても、まアいゝやな、打捨つて置きねえ、若いものゝするこつた。――あたまで相手にしない。――さきごろの春樹の娘のこと。――あれを持つて行つたときにしてがそれだ。

おたつ　……

喜兵衛　誰よりさきに、いへば、腹を立てなくつちやアならない筋合にさへそれだ。――わたしにいはせれば、大坂町はあぐねてもう見切をつけた。――愛想を盡かした。――そのうへで、どうでもしろ、勝手にするがいゝ。――つまりはそれだ。……

おたつ　……

喜兵衛　（半ば自分にいふやうに）どうして、しかし、あの我が強いんだか……

おたつ　……？

喜兵衛　いゝえさ、政吉が。――同じ胤腹分けたきやうだいでありながら……

おたつ　……（喜兵衛のまへの茶碗をとつて茶をかへる）

喜兵衛　（間。――煙管をまた手にとりながら）今日出て來たのは、實は、おくらのことなんだが……

おたつ　おくらさんの？

喜兵衛　この間の話がまだつかないといふぢやアないか？

おたつ　へえ。――いえ……

喜兵衛　わたしは、もう、疾うにすんだことゝ思つてゐた。――さうとばかり思つてゐた。――昨夜おくらに話を聞いて驚いた。

おたつ　おくらさんにお逢ひに……？

喜兵衛　うちへ來たよ、昨夜……

おたつ　お宅さまへ？

喜兵衛　可哀想にしをれ返つてゐた。

おたつ　……

喜兵衛　改めて入譯を訊いてみたが、つまらない、何のこともない話ぢやアないか。――出るの退くのといふやうな、そんな大したことになる話ぢやアないぢやないか？

おたつ　へえ。

喜兵衛　おたつさんだつて側にゐたんだらうに何てことだ。――おたつさんに、全體、默つてそれをみてゐたのか？――おくらにさういつたよ、わたしは……

おたつ　（わざと）いゝえ、わたくしなんぞをりましても……

喜兵衛　それは、まア、片つ方口ぢやア分らない。――おみよのはうにしたら、おみよのはうで、それだけのまた理窟があるのかも知れない。――それを聞かないことには裁きはつかない。――だから、とにかく、今日はそれを聞きに來た。
おたつ　……
喜兵衛　どうだね、おたつさん、お前のみたところは？――どつちに理がある？――おみよに逢ふまへに、これは參考にお前の話も聞いて置かう。――遠慮のないところをいつてくれ。
おたつ　へえ。――でも、それは……
喜兵衛　さうでないよ。――使ふものと使はれるものとぢやアつかはれるものゝはうがいつも損をする――氣の毒だ。――だから、もし、おくらのはうに分のある話ならこれからもあることだ、はつきりおみよにさういひたいんだ。――畢竟そのはうがおみよのためにもなる。……
おたつ　……
喜兵衛　何としたつて、まだ、この屋臺骨を背負つて立つのはあの女には無理なんだ――いへばわたしなんかには眼にあまることばかりだ。――そばで政吉の楫を取らなければならないのを、そのしがくがつかず、あべこべに亭主にいゝやうにされてゐる。――亭主のすることは何でもいゝと思つてゐる……
おたつ　……
喜兵衛　おくらのことだつて、おみよ一人の腹から出たことゝはわたしは思はない。――政吉がうしろで絲を引つ張つてゐるとしかわたしには思へない。――現在おくらでも、それと申すのも、わたくしが、旦那のお氣に入らないのが惡いのでございます。――さういつてゐる……
おたつ　おくらさんは、いえ、何と申上げたか存じませんが、わたくしどもにいたすと、ほんのたゞの一時の言葉の行違ひ……とでも申しますか、なんにも外には……
喜兵衛　おくらのいふのもそれだ。――ほんの言葉の行違ひ。――お客さまの御座敷ですこし頂きすぎてゐたものでございますから、うッかりつい……
おたつ　さうなんでございます。
喜兵衛　戯談ぢやアない。――そんなことぐらゐで十幾年もゐついてゐるものゝ暇を出す。そんなつてことのあるもんぢやアない。――馬鹿〳〵しいにもホドがある。
おたつ　……
喜兵衛　そんなことで大せいの奉公人のしまりがつくもんぢやアない。――おくら一人のことぢやアないからね、これは……
おたつ　へえ……

（唐紙あく。おみよ、入つて來る。）

（喜兵衛、おたつ、急に話を止める。……）

おみよ　（愛想よく）　すみません、伯父さん、大へんにお待たせしてしまつて……（おたつに）　おたつさん、有難う……

おたつ　いゝえ……（座をすこしすさる）

おみよ　いまやうやくお膳が出て……（同じくおたつに、さういふとなくいひながら、そのまゝ火鉢のそばにすわる。）――（喜兵衛に）　今日はめづらしく晝間、御法事のおかへりの大ぜいさんがあつたもんですから……

喜兵衛　（冷に）　忙しいのは何よりだ。

おみよ　えゝ、お蔭さまで、まア……（火箸をとつて火を直す）――でも、伯父さん、お寒くつてもお宅ぢやアみなさん……？

喜兵衛　あゝ有難う、――體だけはみんな達者だ。

おたつ　（潮さきをみて）　お内儀さん、わたくしは……？

おみよ　あゝ、お帳場にだれもゐないから……

おたつ　（喜兵衛に）　どうぞ、旦那、ごゆつくり……

喜兵衛　あゝ有難う。

おみよ　それから、おたつさん、あつちへ行つたら伯父さんに……

喜兵衛　あゝもう構はないでくれ。――今日はさうしちやアゐないんだから……

おみよ　いゝぢやアありませんか、伯父さん、たまにおいでなすつたのに。――いま、もう、そのうちには良人もかへります。……

喜兵衛　……

おみよ　（おたつに）　ぢやア早く支度してね。

おたつ　かしこまりました。

（おたつ、出て行く。）

（間。）

喜兵衛　このごろは始終出あるいてゐるやうだな？

おみよ　（灰を均す手をやめて顔を上げる）　誰です？――良人ですか？

喜兵衛　うむ。

おみよ　いゝえ、そんなことはありませんわ。――一トきりにくらべると、このごろは、辛抱人になりすぎたほどうちにばかり。――組合の參會なんかでも、このごろはどうしたのかめつたに顔を出しません。

喜兵衛　……

おみよ　いまからさう無精になられちやアこまると思ふんですけれど……（わらふ）

喜兵衛　人は、でも、その逆をいつてゐる。――あんなにうちを外にしてもいゝものか？――それは、まア、店に

はお前がゐるからいゝだらうが……

おみよ　ですから、人のいふことなんかあてになりません。

喜兵衛　さういつたものでもないさ。

おみよ　だつて、伯父さん……

喜兵衛　まアいゝ。どつちにしてもゐないものは仕方がない。――そんなときに出て來たのがこつちの不念なんだ。

おみよ　ほんたうに折角來て下すつたのに。――いゝえね、今日は、お寺詣りに行つたもんですから……

喜兵衛　寺詣り？

おみよ　えゝ。

喜兵衛　誰の？――誰か、今日、こゝのうちにゆかりの…？

おみよ　いゝえ、うちの佛さまぢやアないんです。――よそさまの……

喜兵衛　どこの？

おみよ　いゝえ、春樹さんの。――先生のお姉さんとかになる方の。――大へんに、その方、良人を以前可愛がつて下すつたんださうです。……

喜兵衛　……

おみよ　その方の、今日が、ちやうど祥月にあたるんで。――谷中までそれで……

喜兵衛　一人でか？

おみよ　いゝえ、姉さんと。

喜兵衛　姉さん？

おみよ　えゝ、おすがさんと。

喜兵衛　まだゐたのか、春樹の娘は？（わざとさういつておみよの顔をみる）

おみよ　（かるく）えゝ。――御存じありません？

喜兵衛　わたしは、もう、疾うにゐないものと思つてゐた。

おみよ　……

喜兵衛　さうかい、まだぐづ〳〵してゐるのかい？

おみよ　（反抗するやうに強く）えゝ。

喜兵衛　だが、仕合な女よ。――どう間違つたつて、こゝのうちで、いつまでそんな世話になれるはずぢやアないんだ。

おみよ　（おもひ返してしづかに）いゝえ、さういふとへンですけど、それはわたしたちのはうで無理に。――それこそ姉さんは、すぐにでも、また、仙臺へかへるつもりだつたのを、もう少し。――そんなことをいはないでもう少し。――良人とわたしとで無理にさういつて……

喜兵衛　さうされたからつて。――幾らさういはれたからつて、少しでも料簡のあるものだつたら、なほのこと自分から身を退くのが至當なんだ。――自分のした所作を思はないにもホドがある……

おみよ　……

喜兵衞　それア、政吉は、いつかもいつたやうに春樹さんには世話になつたらう。——厄介もかけたらう。——が、世話になつた、厄介をかけたといつても擧句はどうだ。——放蕩のありッたけをしたあとが、もう少しで、みごと一生を棒にふるところだつたんぢやアないか。——それはなぜだ？——みんなあの女のためだ。……

おみよ　……

喜兵衞　古いことをみて知つてゐるものはみんないつてゐる。げんにおたつだつていつてゐる——結句お前が——何にも知らないお前が……何のことはない可哀想だ。

おみよ　いゝえ、それは。——わたしでもそれはいろ／＼聞いてゐますけれど。——でも、伯父さん、以前は以前、いまはいま……

喜兵衞　……

おみよ　以前のことはもう以前のことですんでゐると思ひます。——何もそれを洗ひ立して……

喜兵衞　洗ひ立ぢやアない。——わたしはものゝ道理をいつてゐるんだ。

おみよ　……

喜兵衞　わたしはお前たちを世間のわらひものにしたくない。何だ、あんな眞似を、と、世間の人たちにいはせたくない——でなくつても、いゝ加減、人はもういろ／＼いつてゐる……

おみよ　……

喜兵衞　まア、しかし、いゝや。——わたしがさう思つてもお前たちがさう思はなければそれつきりだ。——もともと默つてろと冒頭にいはれてゐることなんだ。——要らざるにくまれ口をきくでもあるまい……

おみよ……

喜兵衞　（急に）今日來たのは、實は、おくらのことだ。——どうするつもりだ、おくらを？

おみよ　（不意をうたれたかたちに）どうするつもり……？

喜兵衞　おくらの暇を出してそれつきりだといふぢやアないか？——それほどの、暇を出すほどの落度があつたのか、ほんたうに？

おみよ　（わらつて）いゝえ、そんなことはありません。

喜兵衞　そんなことがないなら、なぜ……？

おみよ　ですから、こつちから暇は出しません。——さきから暇をとりました。

喜兵衞　さきから？

おみよ　あんまり我儘がすぎますから小言をいひました。——さうしたら、不貞腐れて、ぢやアお暇をいたゞきます。……

喜兵衞　……

おみよ　すまなかつた、わたしが惡かつたから堪忍しておくれと、すぐにそこでわたしが謝りでもしたらよかつたか知れません——けど、外の奉公人の手前、いくら古くゐる人でも、大切にしなければならない人でも、わたしにはさうまで出來ません。

喜兵衞　……

おみよ　それもおいひこみの重つた忙しい晩。——しかも燈火のつき際の、誰もみんな轉手古舞をしてゐる最中に、車をさう横に押されちやア、伯父さんのまへですけれど、これ。——でなくつても、平生から、隨分あの人では我慢をさせられてゐるんですから……

喜兵衞　……

おみよ　でも、わたし、そんなことをいつたつて、お前さん、いまがいまどうすることも出來やアしない。それは暇をくれとおいひなら上げないこともないから明日まで待つておくれ——明日になつたら旦那にも話して、どうしても辛抱出來ないといふなら、強つてゐておくれとはいはない、改めて暇を上げる。——穩にさういひました。——と、大へんな權幕で、いゝえ、すぐにお暇をいたゞきます、すぐに出てまゐります。——どこへ行つたつて立派におまんまはいたゞけるんですから……

喜兵衞　……

おみよ　おやア勝手におし。——わたしとしてさういはないわけには行きません。——良人にいふと、嫌だといふものにゐてもらはなくつてもいゝ。——たまには、世間の、味の違つた御飯をたべるのもいゝだらう。——みんな、あの人の平生の[illegible]ぶりをみてゐますから、さうなつたつて誰一人、仲へ入つて口をきくものもありません。——ぷッぷしながらそのまんま、荷物をこしらへて出て行きました。

喜兵衞　……

おみよ　今日でもう半月ほどになります。——いまだに詫びも入れて來ないところをみると、どこかいゝところでも探せたとみえます。——けど、あの人に、外へ行つて奉公出來るとは。——さういつちやア何ですけれど、誰にいはしても難しいといひます。

喜兵衞　……

おみよ　それは、まア、性分もありませうけれど、あの人のあれ、やつぱりヒステリイぢやアないかと思ひます。——若いとき御亭主にわかれたきり、これといふ浮いたこともなく、四十を越すまで一人であゝやつて來たんですから、いへば無理もないわけですけど……

喜兵衞　（ふッと遮ぎるやうに）おやア何かい……

おみよ　……?　（喜兵衞の顏をみる）

喜兵衞　お前たちは、もう、おくらを返さないつもりかい？

おみよ　いゝえ、それは、あの人が自分に悪いと思へば。——さう思つてそれだけの道をつけて來れば……

喜兵衞　さうしなければうんといはないつもりか？

おみよ　それは、伯父さん、それだけの趣意が立たなければ……

喜兵衞　と、すみませんでした、悪うございましたと手をついて來なければいけないのか？

おみよ　いゝえ、そればかりでなく、これからはいまゝでのやうな勝手勤めをしないこと、昔くゐるのをカサにきて外のものにも幅をしないことは。——つまりさういふ約定をしてくれなければ……

喜兵衞　……

おみよ　實際いつて、あゝいふ人がゐちやア下の若い女中たちが可哀想です。そこへ行くと、おたつのはうは、口の重いだけまだ始末が……

喜兵衞　（自分に急にうなづいて）さうか、分つた。——ぢやア、もう、何にもいふことはない。……（煙管をはたいて筒にさす）

おみよ　……？

喜兵衞　お前のはうの肚を聞いて、ことによつたら口をきいてもいゝ。——さう思つて今日わざわざ出て來たんだ。

おみよ　あら、それは……

喜兵衞　だが、わたしが口をきけば、すみません、悪うございました、と、おくらに手をついて來させるだけも出來ない。——わたしにすれば、あの女、梅本のうちにとつてそんな安い役者ぢやアない。……

おみよ　……

喜兵衞　ちつとやそつとの我儘はあたりまへだ。——勝手勤めをしていゝだけのわけがあるからするんだ。——それを、そんな……

おみよ　けど、伯父さん……

喜兵衞　もういゝ。——いゝえ、もういゝ、——そのとほりをおくらにいつてやる。——當人にしても喜ぶだらう。

おみよ　……

喜兵衞　いや、お邪魔した。（立ちかける）

おみよ　まア、伯父さん、いまもう……（止める）

喜兵衞　このうちへ酒を飲みには來ないんだ。

（喜兵衞、そのまゝ出て行く。——おみよ、不快な表情、ともゝゝあとから座敷を出て行く。）

（やゝ長き間。）

（唐紙あく。——おまきとおきよ、二人で膳だの銚子を運んで來る。）

おまき　（みて）あら……

おきよ　お離れのはうぢやアなかつたの？
おまき　いゝえ、お內儀さんのお座敷といつたわ。
おきよ　おたつさんが？
おまき　えゝ。
おきよ　聞いて來ませうか？
おまき　けど……
（おみよ、かへつて來る。）
おみよ　お客さまはもうおかへりになつた……
おまき　あら、さうでございますか？
おみよ　……（火鉢のそばへそのまゝ來る）
おまき　どういたしませう、ちやア？
おみよ　いゝからそこへ置いておゝき。
（女中たち、いはれるまゝに運んで來たものをそこへ置く。）
おまき　あら、お燗はまだつけてございませんから……
おみよ　あゝ、いゝ。……
（女中たち、出て行かうとする。）
おみよ　一寸、おまき……
おまき　お呼びでございますか？
おみよ　すまない、お前、うしろへまはつて一寸肩を叩いてくれないか？
おまき　どうかなさいましたか？
おみよ　何だか、いま、急にかう……（肩に手をやる）
（おまき、おみよの背後にまはりいはれるとほりにする。――おきよだけ出て行く。）
おみよ　（間）有難う。――えゝ、有難う。――あゝ、いい氣もちだ……
おまき　お痛かアございませんか？
おみよ　いゝえ、大丈夫。――いゝ氣もち。――何だか、いま、急に氣が遠くなるやうに……
おまき　（叩きながら）どうなすつたんでございませう？
おみよ　どうしたんだか？――こんなこと久しくなかつたんだけど……
おまき　……
おみよ　有難う、――もういゝよ……
おまき　えゝ。
おみよ　ほんたうにいゝよ。
おまき　えゝ。
おみよ　（ふと）おや？――雨ぢやアないか？　（耳を傾ける）
おまき　さうでございますか？
おみよ　聞えるだらう、あの音……？
おまき　（立つて窓のそばへ行く。――障子をあけて）あゝ、降つてをります。――飛石のうへがあんなに濡れて

喜兵衛　お前たちは、もう、おくらを返さないつもりかい？
おみよ　いゝえ、それは、あの人が自分に惡いと思へば。——さう思つてそれだけの道をつけて來れば……
喜兵衛　さうしなければうんといはないつもりか？
おみよ　それは、伯父さん、それだけの趣意が立たなければ……
喜兵衛　と、すみませんでした、惡うございましたと手をついて來なければいけないのか？
おみよ　いゝえ、そればかりでなく、これからはいまゝでのやうな勝手勤めをしないこと、古くゐるのをカサにきて外のものにも幅をしないことは。——つまりさういふ約定をしてくれなければ……
喜兵衛　……
おみよ　實際いつて、あゝいふ人がゐちやア下の若い女中たちが可哀想です。そこへ行くと、おたつのはうは、口の重いだけまだ始末が……
喜兵衛　（自分に急にうなづいて）さうか、分つた。——ぢやア、もう、何にもいふことはない。……（煙管をはたいて筒にさす）
おみよ　……？
喜兵衛　お前のはうの肚を聞いて、ことによつたら口をきいてもいゝ。——さう思つて今日わざわざ出て來たんだ。
おみよ　あら、それは……
喜兵衛　だが、わたしが口をきけば、すみません、惡うございました、と、おくらに手をついて來させるだけも出來ない。——わたしにすれば、あの女、梅本のうちにとつてそんな安い役者ぢやアない。……
おみよ　……
喜兵衛　ちつとやそつとの我儘はあたりまへだ。——勝手勤めをしていゝだけのわけがあるからするんだ。——それを、そんな……
おみよ　けど、伯父さん……
喜兵衛　もういゝ。——いゝえ、もういゝ、——そのとほりをおくらにいつてやる。——當人にしても喜ぶだらう。
おみよ　……
喜兵衛　いや、お邪魔した。（立ちかける）
おみよ　まア、伯父さん、いまもう……（止める）
喜兵衛　このうちへ酒を飲みには來ないんだ。
（喜兵衛、そのまゝ出て行く。——おみよ、不快な表情、とも〴〵あとから座敷を出て行く。）
（やゝ長き間。）
（唐紙あく。——おまきとおきよ、二人で膳だの銚子を運んで來る。）
おまき　（みて）あら……

おきよ　お離れのはうぢやアなかつたの？
おまき　いゝえ、お内儀さんのお座敷といつたわ。
おきよ　おたつさんが？
おまき　えゝ。
おきよ　聞いて來ませうか？
おまき　けど……
（おみよ、かへつて來る。）
おみよ　お客さまはもうおかへりになつた……
おまき　あら、さうでございますか？
おみよ　……（火鉢のそばへそのまゝ來る）
おまき　どういたしませう、ぢやア？
おみよ　いゝからそこへ置いておゝき。
（女中たち、いはれるまゝに運んで來たものをそこへ置く。）
おまき　あら、お燗はまだつけてございませんから……
おみよ　あゝ、いゝ。……
（女中たち、出て行かうとする。）
おみよ　一寸、おまき……
おまき　お呼びでございますか？
おみよ　すまない、お前、うしろへまはつて一寸肩を叩いてくれないか？
おまき　どうかなさいましたか？
おみよ　何だか、いま、急にかう……（肩に手をやる）
（おまき、おみよの背後にまはりいはれるとほりにする。――おきよだけ出て行く。）
おみよ　（間）有難う。――えゝ、有難う。――あゝ、いい氣もちだ……
おまき　お痛かアございませんか？
おみよ　いゝえ、大丈夫。――いゝ氣もち。――何だか、いま、急に氣が遠くなるやうに……
おまき　（叩きながら）どうなすつたんでございませう？
おみよ　どうしたんだか？――こんなこと久しくなかつたんだけど……
おまき　……
おみよ　有難う、――もういゝよ……
おまき　えゝ。
おみよ　ほんたうにいゝよ。
おまき　えゝ。
おみよ　（ふと）おや？――雨ぢやアないか？（耳を傾ける）
おまき　さうでございますか？
おみよ　聞えるだらう、あの音……？
おまき　（立つて窓のそばへ行く。――障子をあけて）ああ、降つてをります。――飛石のうへがあんなに濡れて

野の近所にはロクなものはねえ、さきに寺へ行つて、かへりにユックリどこかへ廻るつもりだつたのを、おすがさん、堅いことをいつて何にも喰はないといふんだ。——ぢやア、ま、蕎麥でもといつたんだが、それでも嫌だといふんだ。——ぢやア勝手になさい、——日暮里の停車場で喧嘩してわかれた。

おみよ　酷く嫌はれたもんですね。

政吉　どうしてあゝ悪く遠慮をするんだか……？

おみよ　さうぢやアないんですよ、必と。——どこかその近所にゐる仙臺の人が以前のお馴染かなんかで、久しぶりで、その人と、つもる話でもしながら御飯をたべるんで、それであなたをさばいたんですよ。

政吉　戯、戯談だらう。

おみよ　姉さんだつて、たまにはそんなことでもなければ。——一人で、あなた、心細うござんすわ。

政吉　(打捨るやうに)　そんな莫迦なことがあるものか。

銅壺から銚子を出す)

おみよ　どうしてゞす？

政吉　おすがさんが、そんな……

おみよ　(わらつて)　わたし、可笑しいのは、あなたは姉さんのことをまだむかしのお嬢さんのやうに思つてゐるんですもの。

政吉　……(自分についで飲む)

おみよ　姉さんは、あなた、そんなどころぢやアないんですよ。——はじめお嫁に行つたさきが悪かつたばかりに、それからそれ、人の世話になつたり、藝妓になつたり。——仙臺へ行くまでだつて、男のために、隨分いろんな。——いふにいへないそれア苦勞をして來てゐるんですわ。

政吉　何をいつてゐやアがるんだ。——お前に聞かなくつたつて知つてるよ……

おみよ　いゝえ、あなたにいはないことでいろ〳〵あるんですわ。——わたしには、姉さん、何でもかまはず話してくれるんです……

政吉　……(飲む)

おみよ　はじめお嫁に行つたさきに、今年もう九つになる女の子があつて、その子をカセにもとの御亭主からいつまでもとき〴〵何かいつて來るらしいんですね。——未練があるんでせう、姉さんに。——それと、仙臺にも、よつぽど深く約束した、これは姉さんのはうから焦れてゐる人があるらしいんですね。

政吉　稼業してゐたんならその位のことはあつたらう。——そんなことよりも、何だつて來たんだ、今日？　(話をかへる)

おみよ　何がです？

政吉　茅町のよ。
おみよ　あゝ伯父さんですか？——いゝえ、おくらのことで……
政吉　おくらのことで？
おみよ　おくらに暇を出したのが不可らしいんです。——古くゐるものを勝手にする。——といふらしいんです。
政吉　おくらの奴、こつちでそれつ放しにしてゐるもんで、とう〳〵たまらなくなつて茅町へ泣きついたんだ。——さうに違えねえ。
おみよ　わたしもさうだと思つて。——だから、悪いと思つたけれど、思ひ切りさういつて上げましたわ。
政吉　そのはうがいゝんだ。——高飛車に出るに限るんだ。
おみよ　だからさういつてゐましたわ。——何にもいふなといふからいはないが……
政吉　おすがさんのこつたらう？
おみよ　えゝ。
政吉　あんまり酢の蒟蒻のいつてうるせえからはつきりさういつたんだ——俺の勝手で俺のすることを、いくら伯父さまだからつて、いち〳〵さう側から因縁をつけられてたまつたもんぢやアねえ。
おみよ　……
政吉　それも筋の通つたことでもいふならいゝ、あの人の文句と來たら、手前勘の、まるで律に合はないことばかりなんだからね。——皮肉をいつてそれが皮肉に立たないんだから嫌になる。——自分でいふことに自分で腹を立てたり意地を焼いたりしてゐるんだから世話アねえ。
おみよ　どうしてゞせうね、しかし……？
政吉　大根は俺たちが氣に入らねえんだ。——そも〳〵このうちを俺たちのやつてゐるのが氣に入らねえんだ。——兄貴が死んで、あとを俺にやらせるとなつたとき、あんな放蕩ものはいけない。——あんな彫金師のしくじりに何が出來る？——一人でさうじや〳〵張つたんだ。…
おみよ　……
政吉　といふものが、あとでこれは分つたんだが、自分でやりたかつたんだ、このうちを。——それを無理から大坂町が俺を引つ張つた。——何か落度はないか、しくじりはないか、鵜の目鷹の目になるわけだ。
おみよ　……
政吉　どうにか、まア、こつちがまじくなつてゐられるからいゝんだ。——さうでなくつてみろ何をいはれるか分らない。……
おみよ　けど、伯父さん、悪い人ぢやアありませんわね。
政吉　悪いどころか善人だ。——だからいけねえ。——だから何を仕出すか分らねえ。——あゝいふむらぎな敵役

が一番いけねえんだ。
おみよ　（ふッとさう半ば自分にいふやうに）　わたし、今日、すこしいひすぎたかしら？　（氣づかひな表情）
政吉　……
おみよ　わけもなく、先刻は氣が上ずつて……
政吉　嫌だぜ、おい……
おみよ　いゝえ、どうかしてゐたんですよ、あんなにあとで肩が張つたんですもの……
政吉　肩か？
おみよ　えゝ、急にかう筋がつまつて來て……（肩へまた手をやる）
政吉　久しくそんなことをいはなかつたぢやアねえか？
おみよ　えゝ。（ふと憂鬱な表情）
政吉　（銚子をとつてつぐ。――一しづくもない）　すまない、もう一つだ……
おみよ　取つて來ませう……（立つ）
政吉　わざ／＼立たなくつたつていゝやな。――そこで誰か呼べば……
おみよ　そろ／＼もう廣間のお客さまもお立ちでせうから……
政吉　あゝさうか。
（間。――雨の音。）
おみよ　すつかり本降りだ……
政吉　困つてゐるだらうな、おすがさん……
おみよ　（彈力のない聲で）　さうですわね。
（おみよ出て行く。）

――幕――

その三

舞臺「その二」に同じ。――「その二」の五日ほど後、いかにも小春らしい感じに晴れた午後。
おみよ、搔卷の病人々々した恰好で火鉢のまへにすわつてゐる。そばに、おきた（「その一」のおみよとおすがとの話の中に出た藝妓）見舞に來たかたちにすわつてゐる。――すこし離れて、おまき、手文庫からいひつけられた探しものをしてゐる……
おきた　……どうも、これは、とんだおじやまいたしました。（煙草入をしまひかける）
おみよ　まアいゝぢやアありませんか。
おきた　えゝ、有難うございます。――すぐおいとまいたすつもりが此方へ上るとつい何時も長くなつて……
おみよ　よござんすわ、たまのこつてすもの。
おきた　いゝえ、もつとちよい／＼上りたいといつもさう

存じながら、つい自分にかまけて、御無沙汰にばかりなつてをります。――そのくせお店の方へは毎晩のやうにうかゞひながら……(わらふ)

おみよ　でも、お小さいのがあつては。――矢つ張それは…

おきた　晝間はもうわたくしに附きツきり。――すこしでもわたくしがみえませんと狂人のやうになつてさがします。――こまつてしまひます。

おみよ　でも、おたのしみですわ……

おきた　おたのしみか苦しみか分りませんけど、子供のためと思ふと、無理をしても働きたい氣になります。

おみよ　(うなづくやうに)結構ですわ――わたしんとこみたやうぢやア駄目ですわ。

おきた　どうしてゞいらつしやいませうね。――お一人ぐらゐ、もう……

おみよ　出來ませんわ。――いまゝで出來ないんですもの……

おきた　まだ、あなた、そんな……(といひかけて)これは、また、自分の勝手なことを。――ほんたうにもうお暇いたします。――どうぞ、では、お大切に……

おみよ　さうですか?――すみませんでしたわね、わざわざ……

おきた　いゝえ、どういたして。――でも、そのお工合なら、もう……

おみよ　えゝ、もう大丈夫。――もう心配はありません。

おきた　でも、あんまり輕卒をなさいませんで……

おみよ　えゝ、有難う……

おきた　では、旦那さまによろしく。――お目にかゝりませんから……

おみよ　さう申します。

(おきた、おまきにもあいさつし、そのまゝいそがしく歸つて行く。)

(間。)

おまき　(探し出した根掛をみせて)お內儀さん、これでございますか?

おみよ　あゝ、それ。――こつちへおくれ……

おまき　久しく、これ、おかけになりませんでした。

おみよ　あゝ。(うけとる)

(政吉、入つて來る。)

政吉　どうだ、工合は?――つゞいていゝか?

おみよ　えゝ。

政吉　うむ、今日は顏のいろがいゝや。(すわる)

おみよ　大丈夫です、もう、……

政吉　驚いたぜ、ほんたうに。……急に、お前……

おみよ　(遮ぎるやうに)これから、いま、髮を結つて來

ようと思つて……

政吉　髮を？――いゝか、そんなことをして……？

おみよ　平生と、もう、ちつとも違ひません。――こんな風にしてゐると、かへつて……（髮へ手をやる）

政吉　さうか。――ぢやア、まア、好きにしたらいゝ。

おみよ　えゝ。

政吉　けど、わざ／＼こつちから出て行かなくつても、來てもらつたらいゝぢやアねえか、髮結に……

おみよ　でも、氣の毒ですから……

政吉　氣の毒つて、お前、勝手につけばいつもさうするぢやアねえか？（わらふ）

おみよ（それにさそはれないで）行つて來ますわ、でも。――すこオし外の風にふかれてみたいと思ひますから……

政吉　さうか。――どつちだつていゝんだ、俺は。――お前さへよければ……

おみよ　おまきに一しよに行つてもらひます、その代り…

政吉　それはさうしてくれなくつちやア。――（わらつて）一人で外へ出て、もし途中でひつくり返りでもされたら、お前……

おみよ　……

政吉　今日はしかし莫迦な天氣だ。――外へ出るには持つて來いの日だ――髮を結つた工合で、そんなにさばさばした氣もちなら、どこかへ遊びに行かうぢやアねえか？

おみよ　……

政吉　こゝんところしばらく出てあるかねえ。――幸ひ、今日は、店も半チクらしいから……

おみよ　……

政吉　どこがいゝ？――芝居か？――芝居はもう末でいけねえか？

おみよ　さうですわね。

政吉　あゝさうだ、十郎が來てゐる。――今朝、河岸で、誰かゞ評判してゐた。――何とかいふ狂言がバカ／＼しく可笑しいさうだ。

おみよ　えゝ、十郎なら。――わたし、十郎をしばらくみません。

政吉　俺だつてみない。――去年、一昨年……ぢやアない一昨々年、やつぱりいまごろ來たときみたつきりだ。

おみよ　一しよに行つたんですわ、そのとき……

政吉　さうだつたかな？

おみよ　えゝ。

政吉（思ひ出したやうに）うん、さうか、川崎の大師さまへ行つたかへりに有樂町で電車を下りて……

おみよ　えゝ。

政吉　さうだ、急にその氣になつて。――あの時分は暢氣だつたな……

おみよ　……

政吉　こんな屋體骨をしよつてもしなければ、背負はうともまた思はなかつた。――右を向かうと、左を向かうと。――それこそどんな眞似をしようと、どこに何の氣兼苦勞も入らなかつた。――お互になア……

おみよ　……

政吉　尤もふところは始終ヒッテンだつたが……(わらふ)

おみよ　……(さそはれて、ともに、寂しくわらふ)

政吉　(話をもとへもどす)で、可笑しいんだ。――俺は以前から十郎が好きで五郎が嫌ひなんだ。――それでゐて十郎より五郎のはうをよけいみてゐるんだ。――妙にさういふ廻合せになるんだ。

おみよ　わたしでも五郎は嫌ひですわ。――でも、矢つ張……

政吉　俺はあの五郎つて奴にヘンな色身をされると蟲酸が走るんだ。

おみよ　……

政吉　それと逆に、十郎のあのトボけた恰好をみると、それだけでもう肚の底から可笑しさがこみ上げて來るんだ。――まゝにならねえものよ……

おみよ　……(ふと顔に暗い影さす)

政吉　ぢやア、まア、早く行つて來ねえ。――その間に電話をかけて場所を開かして置くから。

おみよ　えゝ。

政吉　お前と、俺と。――今日は、一つ、おまきも連れて行つてやるか?――いろ／＼心配させたから……

おみよ　えゝ。

政吉　それとおすがさんと……

おみよ　……

政吉　今度は、お前、おすがさんにすつかり厄介になつちまつたぜ。――お前の代りをおたつがするんで、おたつのすることを、氣の毒にみんなやつてもらつてしまつた。――おくらがゐないんだから仕方がねえ。――それは、もう、座敷を働いてもらはねえばかりよ。

おみよ　……

政吉　いゝ、といつても聞かねえんだ。――何でも手傳はせろといふんだ。――ぢやア勝手になさい、こつちは知らねえからとはいつたものゝ、おかげでみんな大助かりよ……

おみよ　さうですつてね。――聞きましたわ……(力のない表情)

政吉　……

おみよ　ぢやア、一寸……（立ち上る）
政吉　氣をつけて行きねえよ。
おみよ　えゝ。
政吉　（おまきに）それから、おまき、あつちへ行つたら誰かにこゝへ來るやうに。――おたつでもいゝ……
おまき　へえ。
（おみよをさきに、おまき、出て行く。）
（間。政吉ふと窓のそばへ立つ。――あけて外をみる。――冬ばれの空は、濃く、水のやうに澄んでゐる、――遠くどこかで建前をしてゐる木遣りの聲が聞える……。）
（間。）
（唐紙あく。――おすが、入つて來る。）
おすが　お呼びで……？
政吉　あゝ、おすがさん。――あんたでなくつても……（窓のそばを離れる）
おすが　いゝえ、いま、おたつさんは一寸……
政吉　すみません、ほんたうに。――いゝ氣になつて……
おすが　また、そんな……（わらふ）御用は……？
政吉　あんたぢやア困る。――電話をかける用だから……
おすが　おかけしますわ、わたしでよかつたら。――どちらへ……？
政吉　それよりも、あんたに、迷惑でも今日附合つてもらはなくつちやア……
おすが　……？
政吉　いゝえね、いま急に十郎をみに行く話が出來てね。――あなたと、おみよと、わたしと三人で……
おすが　あら、わたしは……
政吉　（押へるやうに）そんなもう遠慮は聞かない。――附合へといつたら、あんたは、器用にたゞさうかといつてゐればいゝんですよ。……
おすが　さうは行きませんわ。
政吉　こまるなア、ほんたうに……
おすが　でも、結構ですわ、おみよさん。――すつかり今日は元氣が出て……
政吉　平生と、もう、ちつとも違はない。――何をいつてやアがると思ふけれど、さういつてしまへば、おすがさんのまへだが實も蓋もなくなる。――こゝは、まア、だから、密とお持佛さまにして……
おすが　それは、あなた、さうして上げなければ。――仕方がありませんわ、病患ひのときは……
政吉　いゝえ、彼奴のは半分わがまゝですよ。――わたしは、もう、さうふんでゐる……
おすが　そんなことをいつて……

政吉　いゝえ、あんたは知らないから。――こゝんところ暫く中休みだつたゞけで、以前は始終。――稼業をまだしてゐる時分から、一寸何か自分に思ひつめたことでもあるとすぐ始りました。……

おすが　わがまゝぢやアありませんわ、それは。――さういつちやアあんまり可哀想ですわ。――どうしたつて、女は、それは。――昔から女は氣の狭いものに決つてゐるんですから……

政吉　……

おすが　かうと、一つ、自分に何でも思ひつめたら。――さうじたら、もう、外には智慧も分別も……

政吉　出ませんか？

おすが　えゝ。――情ないもんですわ、それは……

政吉　あんたでもさうですか？

おすが　(さびしくわらつて)　それは、わたしなんぞ。――人一倍だらしがないんですから。……

政吉　そんな莫迦な……(わらふ)

おすが　いゝえ、ほんたうに。――政さんにそれが分りません？　(ふと政吉の顔をみる)

政吉　さア、其奴は……

おすが　いまゝでわたしのして來たことは、みんなそれは、かうと自分に思ひつめた――自分にさう淺墓に思ひつめたあげくのことばかり。――さういふ仕損ひばかりです……

政吉　……

おすが　あとから幾ら後悔しても間に合ひません。

政吉　……

おすが　でも、人間は。――(急に)　止しませう、つまらない……(もう一度さびしくわらふ)

政吉　(その言葉にそのまゝ附いて行けないもどかしさを感じながら)　それは、まア……

おすが　けど、おみよさんは、何かそんな……？

政吉　(いつそ救はれたやうに)　いゝえ、それが、この間のあの雨のふつた日。――われ／＼が寺へ行つた留守に茅町の伯父貴が來た、とまア思召せ……

おすが　……

政吉　おくらにどうして暇をやつたといふこれが掛合です。――でなくつても、平生から、いろいろうるさい世話を燒いて來るんです。――いつも、でも、當らず觸らず、柳にうけて置く奴を、その日に限つて、當人蟲のゐどこでも惡かつたか、いひたいことをポン／＼いつてしまつたらしいんですね、逆に……

おすが　……

政吉　で、伯父貴がいま、カン／＼でかへつたといふとこ

ろへわたしが歸りました。——いひすぎたかしら、といふから、たまにはその位にしたはうがいゝ、といつたんですけれど、そこはやつぱり女です。——すつかり寢覺を惡くして、そのまんま、わけもなく、ぼんやり鬱込んでしまつた。——それがそも〳〵のとツかゝりです……

おすが　さういへば、あの晩、いつになく顏の色がお惡い。——歸つて來てさう思ひました……

政吉　あくる日になつても鬱いでゐるから、そんなに氣になるんなら顏を出して來い、さうして何とつかず、昨日はすみませんでした、と、さういつて來い。——さうすれば、先方にしたつて、もと〳〵柄のないところに柄をすげて來てゐるんだから、嫌なことの一つ二ついつて、顏が立つたと思へばそれでケリはつく。——さういつたときには、生返事をして氣に入らない顏色をしてゐましたが、あとになつて急に、行つて來ます、そのはうがいいから。——さういつてすぐ俥で出て行きました。

おすが　あゝ、あのときは、あなたもこゝにゐた……

政吉　此奴がしかしいけなかつた。——反つて色揚げをして來たかたちで……

おすが　……

政吉　歸つて來るとあのさまです。——口惜しいといつて泣く、わめく、あたける……

おすが　……

政吉　さぞ、あなた、驚いたらうと思つてね。

おすが　いゝえ……

政吉　みツともなくつて、しかし……

おすが　女はだれだつてさうなります。——たゞ、それがはつきり外へ出るか出ないかだけ。——わたしなんか、政さん、いざとなつたらもつと大へんですわ。

政吉　(わらつて)　戯談……

おすが　いゝえ、ほんたうです。——さうなると、わたし、刄ものを持ち出します……

政吉　……？

おすが　そのときは夢中ですから、自分ぢやア知りません。あとでよく人にいはれます……

政吉　(つく〴〵)　あなたがねえ……

おすが　(わらつて)　感心しなくつたつてようござんすわ。

政吉　いゝえ、しかし……

おすが　(半ば自分にいふやうに)　一寸した。——ほんたうの一寸した間違ひから誰でも……

政吉　いゝえ、何かあつたんです。——茅町で、また、必と何かあつたんです……

おすが　……

政吉　が、それを聞くせきもありません。――だから、あなた。――(苛立たしく)どうせろくなことぢやアないのは分つてゐますが……
おすが　……
政吉　みよりの、親類の。――そんなもの、あなたのまへだが、糞の役にだつて立ちやアしません……
(不意に唐紙あく。――おみよ、入つて來る。――まへの櫛卷のまゝの、まへよりも蒼い顔で)……
政吉　何だ？――どうしたんだ、お前？――行かなかつたのか、髮結へ？
おみよ　えゝ。
政吉　どうして？――行かないつもりか、芝居へ？
おみよ　行きません。
政吉　なぜ？――折角、お前……
おみよ　行つていらつしやい、あなた……
政吉　俺は行きたかアねえ。――俺は行きたかアねえが、お前(まへ)が……
おみよ　ですから姉さんと一しよに行つていらつしやい。姉さんと二人で……
政吉　何？
おみよ　構ひませんわ。――ちツとも、えゝ、構ひませんわ……

政吉　……
おみよ　(だん〳〵呼吸のはずんで來る感じに)どうせ、わたしは。――どうせ、わたしは、こゝにゐる人間ぢやアないんですから……
政吉　(冷に)どうしてだ？――どうしてこゝにゐる人間ぢやアない……？
おみよ　それをわたしにいはせるんですか？――あなたはそれをいはせるんですか？――わたしがそれをいはなくつちやアいけないんですか？
政吉　……
おみよ　えゝ、いけないんですか？――わたしからそれをいはなければいけないんですか？(政吉の手に掴みかかる)
政吉　何をしやアがるんだ、莫迦！……(つき退ける)
おすが　まア、政さん……(押へる)
おみよ　それは、あんまりだ。――それは、あなた、あんまりだ。――あんまりです……(泣きしづむ)
政吉　あんまり？――何があんまりだ。――俺が何があんまりだ。默つて聞いてゐりやアいゝ氣になつて何をいやアがる――勘違(かんちが)えをして何をいやがるんだ……
おすが　政さん……
政吉　いゝえ、打捨(うつちや)つといて下さい。――病人と思つてい

たはつてやりやア附け上りやアがつて……

おみよ　（急に顔を上げて）離縁して下さい。――いゝえ離縁して下さい。――すぐに、さア、離縁して下さい。

政吉　してやるとも。――してくれといふならいつでもしてやる。――すぐに出て行け。――さア出て行け……

おみよ　出て行きます。――えゝ、出て行きます。――あなたのやうなそんな腐つた根性の……

おすが　まア、おみよさん。――あなたも、そんな……

おみよ　いゝえ、黙つてゝ下さい。あなたは黙つてゝ下さい。――あなたにそんなことをいはれるわけがありません。

おすが　……

おみよ　そんなことをいふなら。――そんなことをいふなら、なぜ、あなた、良人の人を捨てたんです？――良人の人を打捨つて、十年まへに、田舎の人のところへなんぞお嫁に行つたんです？

政吉　おみよ？

おみよ　あなたにいつてるんぢやアありません。――姉さんにいつてるんです。――わたしは姉さんにいつてゐるんです。

政吉　そんな下らねえことを、手前……

おみよ　下らなかアありません。――いゝえ、下らなかアありません。――下らないもんですか。――そのためにあなたは、――姉さんとその一しよになれなかつたばかりに、あなたは……

政吉　莫迦、いゝ加減にしろ。――いゝ加減にしねえか……（おすがへ氣を兼ねるこなし）

（おすがは無言。――さしうつむく。）

おみよ　いゝえ、しません。――なぜいゝ加減にしなくつちやアいけないんです？――口惜しかアないんですか？――口惜しかアないんですか、あなたは？――嫌はれた人に、そんな、どうしてまだそんな未練があるんです？（泣く）

政吉　（前よりも強く）おみよ！

おみよ　何です？

政吉　いふことゝいはねえことゝあるんだぞ。――手めえいまゝで、おすがさんをそんなつもりにしてゐたのか？――俺とおすがさんをそんな料簡でさりやくしてゐたのか？

おみよ　……

政吉　だから、あれほど、初手にいつて聴したんぢやアねえか。――どんな、また、下らねえことを、どこからどう聞嚙らねえものでもねえと思つてよ。――そんなことでもあつた日には、また、あとで面倒と思つてよ。――

いはなくつてもいゝことまで、在りやうはこれ〳〵だ、ことによるとさうなるかも知れなかつたんだ。——巨密なことまではツきりさう話して聽したんぢやアねえか。——手めえだつて、それで、すつかりもう納得の行つてるはずなんぢやアねえか。

おみよ ……

政吉 以前は以前、いまはいま、はツきりそのけじめをつけてゐるんだ。——つけすぎるほど此方はつけてゐるんだ。——それを何だ？——未練とは何だ？——未、未練があるとは何ていひぐさだ？

おみよ ……

政吉 手めえにそんなことをいはれて、これからさき、どの面下げて俺がおすがさんのまへに出られる？——出られると手めえ思ふんだ？

おみよ ……

政吉 手めえ、これは、茅町へ行つてなにかいはれて來たな？——いゝやうに、手めえ、茅町の奴らにしやくられて來たな？——さうに違えねえ。——（うなづくやうに）必とさうに違えねえ。

おみよ （急に）えゝ、さうです。——伯父さんに聞きました。——伯父さんにすつかり聞きました。

政吉 それを手めえ……

おみよ ほんたうと思ひます。——みんなほんたうと思ひます。——いまゝで知らなかつた色んなことが伯父さんの話でみんな分りました。

政吉 何い？

おみよ いゝえ、この間、姉さんとあなたがお墓詣に行つた谷中の佛さま。——先生のそのお姉さんになるといふ人が、あなたと姉さんとにとつて、どんな人になるかつてことでもよく分りました。

政吉 ……

おみよ あなたと姉さんを一しよにしようと、一番骨を折つた人なんですつてね、その人？

政吉 それがどうした？——そんならどうしたといふんだ？

おみよ ……

政吉 それがどこを何うすれば惡いんだ？

おみよ ぢやア、これは？——このお金の手形は何です？

（帶の間から出す）

政吉 ……（思はず色をかへる）

おみよ 知りませんよ——わたしは知りませんよ、かういふお金……

政吉 ……

おみよ 何のお金です？——何の入用があつて借りたお金

です？――何につかつたお金なんです、この千圓……

政吉　……

おみよ　姉さんのために入用だつたんでせう？――姉さんのためにつかつたお金なんでせう？――なぜそれをわたしにいへなかつたんです？――どうしてわたしにかくしてしなければいけなかつたんです？

政吉　……

おみよ　何のかのと口では綺麗なことをいつて。――かげでこんな。――わたしをふみつけにするやうな……口惜しい……わたしは口惜しい……（泪、せき上げる。――袂を嚙んで口惜しがる）

（政吉、おすが、ともに無言。）

（間。――おすが、つと立上る。）

政吉　（哀願するやうに）おすがさん……

おすが　（さびしく）いゝえ……（泪をかくして窓のそばへよる）

（間。――遠く木遣りの聲……。）

――幕――

その四

「その三」の四五日あと。夜、九時すぎ。――政吉、三勝と半七の二人を相手にさびしく酒を飲んでゐる。――かなりもう長い時間の經つたあとで、元來が飲めない三勝はさうでもないが、政吉も、半七も、ふかく醉つてゐる。――外には、十一月の末の、霙まじりの冷めたい雨が音を立てゝふつてゐる。

間。

……うんじた感じに誰も無言。――三勝、三味線をまた（といふのはそれまでに散々もう弾いてゐる）取上げるともなく取上げて弾く。

半七　（うたふ）聖天、鎌倉、おほましやうでん、あとは四丁目で、てんすてゝん、すとゞんどん、おひやりひやりとろひやりとろ、笛の聲、さき玉ぢや、あと玉ぢや、ともにうちこむ、ちえんちえちえちち、あたり鉦……

政吉　さア、やらう……（まへにあつた猪口をあけて半七にさす）

半七　へえ、有、有難う……（うけとる。――すぐ、また、つゞけてうたふ）泪かくして送り出す、二階ざしきでみてゐたら、ひと足づゝに遠くなる、えゝもじれつたい曲り角、それ／＼それ、さうぢやいな……

（その唄のうち、政吉、横になつてしまふ。）

（間。）

（おたつ、銚子をもつて入つて來る。）

おたつ　さア、甚さん、熱いのを……
牛七　もういけねえ。――もう飲めねえ……
おたつ　そんなこといはないで。――折角わたしが持つて來たんぢやアないか……
牛七　ぢやア、まあ、一杯だけ……（猪口を出す）
おたつ　さア、三勝さんも……
三勝　いえ、もう、手前は。――手前は……（手つきをして平謝りにあやまる）
おたつ　いくぢがないのね、お前さんは……
三勝　でも、今日のやうな長いくさぢやア。――罷出たのが三時として、四、五、六、七、八、九、十。――ぶッつゞけに、これ、七時間といふもの……
おたつ　あけてばかりゐたんでせう。（盃洗をわきへよせる）
三勝　戯、戯談を。――そんな卑怯な。――いざとなれアこれだつて……
おたつ　ぢやア飲んだらいゝ。
三勝　でも、それは。――ぢやア、まア、眞似だけ……
おたつ　若いくせにそんな……（つぐ）
三勝　へえ、もう。――それでもう……
牛七　（急に）行かう。――三勝、行かう……
三勝　（猪口に口をついで下へ置く）あゝ、行かう。（おたつに）そろ／＼もう……
牛七　だが、雨が降つてやアがる。――（耳を傾けて）あの音。――氣が重いなア、あの音は……
おたつ　お内儀さんが、ちやんと、自動車をさういつて下さいましたよ。
牛七　え、自動車？――ほんたうに？
おたつ　だから、今夜は、いくら醉つても大丈夫……
牛七　さうと決りやア、もう。――三勝、ことのついでに一つ、どこかへぽオんと乘ッつけようぜ……
三勝　（わらつて）どうぞ、旦那、お供を……
牛七　久しぶりだ。――ほんたうに、三勝、出かけようぜ。女はほんものだぜ……
おたつ　大層な景氣ね。
牛七　ふん、知らねえな。――當時、もう……
おたつ　けど、お詫はもう出來たの？
牛七　出來たも出來ねえも。――いゝんだらうと思ふんだ、もう。――なア、三勝……
三勝　緣あればこそ。――緣あればこそ、お前たち、遠國へだてた同士が一しよになつて稼業をするやうにもなつたんだ。――幾らいがみ合つても、また、一しよになるんだ。――有難いと思へ。――勿體ないと思へ……（政吉にいはれたとほりをいふ）

半七　その通りなんだ。――それに違えねえんだ。……

三勝　（言葉をつゞけて）　分りやアいゝんだ。――分りやア詫ひもへちまもねえ。――たゞ、お前たちが、金輪奈落わかれる。――今度はもうどんなことがあつても縒をもどさねえ。――きいたふうなことをいふから、よし、ぢやアお前たちがいかほど雨方でこまつても、勝手に今度は腐合ふことはならねえぞ。――俺のところへわたらねえで一しよになつたら今度は俺が承知しねえぞ。

半七　だから。だからかうやつて、相すみません、向後はもう決して心得違ひはいたしません、喧嘩はいたしません。――さういつて二人で、おづ／＼出て來たんぢやアねえか。……

三勝　だからいゝんだ。――だからもういゝわけだ。……

半七　（しみ／＼）　だが、三勝、俺が悪かつた。――俺のわがまゝをいつたのが悪かつた。――堪忍してくれ……

三勝　（さそはれて）　何をいつてるんだ、兄貴。――そんなことをいつて、お前。――お前ばかりが悪いんぢやアねえ。――こつちも悪いんだ。――こつちも我儘だつたんだ……

（女中「おとみ」入つて來る。）

おとみ　（おたつに）　自動車がまゐりました。

おたつ　（半七に）　お待ち遠さま。――來ましたよ。

半七　有難え。――さ、行かう、三勝……（立上る）

三勝　しかし、旦那に……

おたつ　（止める）　あゝ、ようござんす。――おやすみになつたやうだから……

三勝　さうでございますか？

おたつ　あとでよくいつといてあげます……

三勝　では、どうぞ。――今夜は旦那も少し。（おたつ、それをいふなといふこなし）――ぢやア、いづれまた……

半七　こぼれ松葉はあやかりものよ、さ。――早くしろよ、

三勝……

三勝　あいよ。――枯れて落ちても女夫づれさ。……

（半七をさきに、三勝・おたつ、つゞいて出て行く。）

（燈火のいろの空漠な感じ。――飽くまで冷めたい雨の音……）

（長き間。）

（おまき、入つて來る。――戸棚からかけるものを出して眠つてゐる政吉のうへにかける。――そのあと食卓のうへの汚れたものを下ろしたりする。……）

（おみよ、入つて來る。）

おまき　（政吉へこなし）　お掻巻、これでよろしうございますか？

おみよ　あゝ、それでいゝ。――お膳は、汚れたものだけ

下げて、後(あと)そのまんまにしといておくれ。
おまき　片づけませんで？
おみよ　あゝ。
おまき　……（いはれたやうにする）
おみよ　お酒は？
おまき　殘つてをります、まだ……
おみよ　おやア、それもそのまんまにしといて……
おまき　へえ。
間。）
（おまき、汚れたものを廣蓋にのせて出て行く。――おみよ、火鉢のそばに心弱くすわる。）
（雨の音。）
（……帯の間から手紙を出す。すこしの躊躇のあと碧で封を切る。――讀む。）
政吉　（間。――眼をさます。――起きる）どうした、二人は？
おみよ　かへりました、いま……
政吉　……無言。――銚子をとり上げる）
おみよ　冷めたいでせう、それ……
政吉　……（無言。――搆はずついで飲む）
（間。接穂のない、氣不味い沈默……）
おみよ　あなた……

政吉　……（無言）
おみよ　姉さんからです。
政吉　……（眼をそらす。――猪口をとる）
おみよ　みて上げて下さい。――姉さんは盛岡へ……
政吉　……
おみよ　この手紙は仙臺で書くけれど。――これのそつちへ行く時分には、もう、こゝにはゐない……
政吉　……（ふと肯へない表情）
おみよ　さう書いてあります。――みて上げて……（滲んでくる泪をそつと拭く。――手紙を猪板のうへに置く）
（政吉、無言、手紙をとり上げる。――讀む。――このうち、おみよ、取返しのつかないことをした悔と悲しさとがいまさらのやうに胸に滿ちて來る。――と一しよに忍泣きの聲がだん／＼たへられないやうに高くなる……）
おみよ　……す、すまないことをしました。――どうしたら、ど、どうしたらわたしいゝでせう。（泣く）
政吉　……
おみよ　姉さんを、そんな、盛岡なんかへ。――そんな盛岡なんて遠いところへやつたのは――やるやうにしたのはわたしです。――みんなわたしが惡いんです……
政吉　……

おみよ　わたしが人にしやくられたばかりに。――いゝえしやくられたのもわたしが悪いからです。――もと〱わたしが淺墓だつたからです……

政吉　……

おみよ　わたしがあんな端下ない眞似さへしなければ。――端下ないお金のことなんぞいひ出しさへしなければ、姉さんはどこへも行きやアしませんでした。――仙臺へだつて歸りやアしませんでした。――仙臺へ歸れば姉さんは。――いろ〱もう姉さんは……

政吉　……

おみよ　でなくつても姉さんのあとを追ツかけて、あくまで姉さんを食ひものにしようとする悪い奴が仙臺から出て來てゐたんです。――始終、電話をかけてよこしたりしたのはその奴だつたんです。――わたしは知つてゐました。――それをわたしは知つてゐました。――盛岡へも必とその奴に連れて行かれたんです……

政吉　……

おみよ　姉さんは體が悪いんです。――さうでなくつてもこのごろまた悪いんです。それをそんな――これから寒くなるばかりだといふのにそんな。――姉さんは死にます。――死にます。――必と死にます……

政吉　……

おみよ　さうなれば。――もしさうなればわたしです。――姉さんを殺したのはわたしです。――わたしが姉さんを殺したんです……

政吉　……

おみよ　だのに、――だのに姉さんはそんな。――そんな優しいことをいつて來て。――どうして恨んぢやアくれないんでせう。――恨んぢやアくれないんでせう。――わたし、もう。――わたしは、もう……

政吉　……

おみよ　いくら體が甲斐なかつたといつて――ほんたうでなかつたといつて――人の要らざる口の端にのつて根も葉もない――根も葉もないことをいひ散らすなんて。――すみません。――すみません。――ほんたうに、わたし……(咽ぶやうに泣く)

(間)

政吉　……さうぢやアねえ。――いゝや、さうぢやアねえ……

おみよ　いゝえ。――いゝえ、さうです。――さうです……(泣きつゞける)

政吉　……ぢやアねえ。――さうぢやアねえ。――(低く)俺が悪かつた……

おみよ　いゝえ、あなたは。――あなたは何にも。――あ

なたの惡いことは何にも……

政吉　いゝや、惡かつた。――お前にかくしていろ〳〵した俺が惡かつた。――おすがさんは、それを、何でもお前が知つてゐるとばかり思つてゐた。――それがそもそもの間違ひだつたのだ。

おみよ　いゝえ、さうぢやア。――そんなことぢやア……

政吉　（押へるやうに）さうなんだ。――俺にゐは分つてるんだ……

おみよ　……（政吉の顏をみる）

政吉　おすがさんを仙臺から呼ぶには、眼にみえて、二千幾らといふ金がそこになくつちやアいけなかつた。――その位なことはどうにもなる。――わけなく請合ひはしたものゝしがくがつかねえ……――恩人だ、恩返しだ、なまじさういふ買込をしたゞけいまさらそんな金が要る。――何の仲でもさうまでお前にはいへねえ、――俺はさう思つた……

おみよ　なぜ、あなた、そんな……

政吉　これから茅町の、伯父にはいはねえ、伯母に話した。――いやア伯母は親身だ。――と思つたのがいまになりやア油斷だつたんだが、みかけた山がある、すぐに持つて來る、さういつて内密に千兩まはしてもらつた。――それがあの手形よ。

おみよ　（眼をふせる）

政吉　これと手許を掻きあつめて三百兩こしらへた。――それをおすがさんに送つた。――おすがさんはそれで身拔きをしてこつちへ出て來た。――聞くから俺はいつた、いゝえ、あれは、おみよのほんの志で、あともすぐこしらへるといつてゐます。――だが、いふと當人がこまります。――だから、あなたは、どこまでも知らない顏で……

おみよ　……（泪を拭く）

政吉　あとは自分でする、さうまで心配はかけられない。――おすがさんはいつた。――いゝから默つておいでなさい、惡いやうにはしない、二人で話は必とつける。――さうはいつたが、俺の手で、そのうへ千圓はおいて百圓のことだつて出來ない。――いまだからいふが、俺はあぐねてまんじりとも出來ねえ晩が幾晩もあつた。――

おみよ　……

政吉　よつぽど俺はお前にぶちまけようと思つた。――さうすれア苦患がなくなる。――さう思つて幾度お前の顏をみたか知れねえ。――が、駄目だ。――いゝ、ねえ。――どうしてもいへねえ。……

おみよ　……

政吉　といふのが、――といふのがおすがさんに俺は惚れ

てゐた。——お前のいふとほり、まだおすがさんに俺は未練があつたんだ。

おみよ　それは、いゝえ……

政吉　さうなんだ。——手めえでもさうと知らなかつたがさうなんだ。——だからつまりはそんな小細工をしたんだ……

おみよ　そんな……

政吉　さうなんだ。——それがいけなかつたんだ。——それが一番いけなかつたんだ。

おみよ　いゝえ、それは。

政吉　堪忍してくれ。——俺が惡かつたんだ、堪忍してくれ。

おみよ　いゝえ、それは、——さうぢやアありません、それは……

政吉　いゝえ、さうだ、さうなんだ……

おみよ　いゝえ、さうぢやアありません。——さうぢやありません、それは……

政吉　いゝえ、さうなんだ。——さうなんだ、——俺がわるかつたんだ……

（政吉、湧いて来る泪を押へる。——おみよ、ともにまた泣く。）

（間。）

（……冷めたい雨の音。）

——幕——

（十五年二月）

辰巳婦言（三幕八場）

（三馬原作）

人物

藤兵衛　滑川酒店の番頭

喜之助　雪の下穀屋の息子

長五郎　市川組の俠客

おとま　古市場二川屋の板がしら

外に、廻しの女、娘分、げいしや、男げいしや、船頭、その他

時

江戸時代、冬

場所

鎌倉手越の里古市場

第一幕

第一場

……古市場の橋の下。日の暮。――一さうの猪牙、喜之助を乗せて古市場の方へ行く。

喜之助（空を見上げて）ふらなければいゝが……

船頭（櫓を押しながら）なアに、今夜はうけあひます。

（同。）

（逆に古市場のはうから藤兵衛を乗せた猪牙出て来る。）

藤兵衛　いま行き違つた船は、あれは……

船頭（櫓を押しながら）二川屋の客さ。

藤兵衛　みた顔だが

船頭　雪の下から来る喜之さんさ。

藤兵衛　あいつがさうか……（嘲りのいろを浮べる）

（……漕ぎ去る。）

第二場

古市場二川屋の二階。――長五郎、おとまと二人で酒を飲んでゐる。

長五郎（さかづきをとつて）ついでくんねえ。

おとま　およしよ、もう……

長五郎　なぜ。

おとま　毒だよ、そんなに

長五郎　ばかアいへ、好きな酒をばやめろぢやないが茶碗酒をばやめさんせ。――酒薬にあるのを知らねえか。――だから俺はがぶ／＼はくらはねえ。――手めえこそ

癇積を起して叩らねえやうに用心しろ。

おとま　大きにお世話だよ。

長五郎　ふん、勝手にしやアがれ。（横を向く）

おとま　勝手にするよ。――勝手にして裾研へ行くよ。

長五郎　何？

おとま　かくしたつて駄目だよ、ちやんと種が上つてゐるんだから。

長五郎　何をいつてやアがるんだ。――友だちの附合で行つたのに何の不思議がある？

おとま　だからいゝ働きだよ。

長五郎　誰が、また、そんなことをいやアがつたんだ。――入らざるそんなかな棒を曳きやアがつたんだ。

おとま　誰でもいゝよ。――親切にさういつて知らせてくれた人があるんだから……

長五郎　……（幾分間のわるきこなし）

おとま　今日も子供屋のをばさんがしみ／＼意見するぢやアないか。――それだつてまた、人の意見をこはがる位なら、こんな裸にまでなつて、いまゝでお前を呼び通しやアしない。わたしだつて意地がある。人ウつけ、鞍替したつてわたしはお前を離しやアしない。――それをお前は――お前のはうぢやアわたしのさう思ふ半分もわたしのことを思つちやアくれないんだから……

長五郎　…………………

おとま　いつそもうくさ／＼してたまらないから、用事をつけて引込んでゐれば、こゝのうちをはじめ何のかのとやかましくいふし。――ほんたうに、もう、わたし……

長五郎　（遮るやうに）愚痴をいふねえ、手めえらしくもねえ。――愚痴をいやアどうなるんだ。

おとま　だつて、お前……

長五郎　そんな小うるせえこと吐しやア屋臺骨をたゝまして……

おとま　あれ、そんな大きな聲おしでないよ。

長五郎　（低い聲で）と叱られる奴よ。――何をいふにも借だらけだから始らねえ。――いつかの櫛のしのぎもいろ／＼やりくつてみたがどうにもならねえ。やつとのこと利上をしてくゝりつけた。――今年のやうにかう目の出ねえのもめづらしい。（しをれる）

おとま　さう思ふからわたしだつていろ／＼あんもんしてゐるんだよ。――それ、新川のお客ね？

長五郎　新川の？

おとま　藤印さ。

長五郎　うむ、どうした、彼奴？

おとま　いゝえ、こゝんところまた三日にあげず來るんだよ、――今日も來ていまかへつたのさ。――ちやうどい

いから、いろ〳〵つうくつしてやつとこれだけこしらへた。(帯の間から出す) 十兩と外に一兩二分。――どうせ足りないとは思ふけど……

長五郎　すまねえ。――この恩はわすれねえ。

おとま　定りいつてる。――それより、お前、入つたと思つて無駄づかひしないでおくれ。――少しづゝでも不義理のはうを濟すやうにしておくれ。――さうでないと、わたし――いまにわたしが行くとなつたつて……

長五郎　分つてるよ。――いはなくたつて分つてる。――お前ばかりに苦勞はさせねえ。――その位な料簡は俺だつてもつてゐる。

おとま　まだ雪の下から來るお客にやちつとばかりあてゝ置いたけど、このはうは初仕舞のお客だから……

長五郎　雪の下といふのはあの喜之助といふ若えのか？

おとま　あゝ。――部屋住でもしつかりしたうちの一人息子ださうだから……

長五郎　(歎息するやうに) 金持にやア何がなる。

おとま　それより、お前、おつ母さんの病氣はどうなの？

長五郎　まだいけねえ。――惡いときお袋に患はれたんでなほのことしがくがつかねえ。

おとま　喰べるものは？

長五郎　でも、ちつとづゝは喰へるさうだ。

おとま　さうだぢやアないよ。人まかせでなくちつとは自分で氣をつけなくちやア、お前。――一體だれがついてゐるの、そばに？

長五郎　傭ひ婆アとも思つたんだが、どつちにしてもおんなしだから、毒のふき出した野郎だの建前からおつこちた居候だのをあてがつてある。

おとま　さぞ氣のつかないことだらうね？

長五郎　木ッ葉喧嘩をしちやア酒をくらふことより知らねえ奴らだ。

おとま　(急に) おとなしくなつておくれよ、お前さん。――こんなときこそ女房の役と思つてもいまの身の上ぢやアどうすることも出來やアしない。

長五郎　…………

おとま　わたしは、ほんたうに、實のおつ母さんの患つたより心配してゐるんだよ。

長五郎　…………

おとま　どつちへまはつたつていまのまんまぢやア末がとげられない。――さう思ふとわたしは心細くつて、――もう少し親身になつてくれない分には……

長五郎　(うなづいて) すつぱり、ぢやア、禁酒だ。

おとま　…………？

長五郎　さうすりやアいゝんだ。――さうすりやアいさく

さねえんだ……

おとま　さういへばそんな。――何もさうまでしなくつたつて……

長五郎　いゝや、さうぢやアねえ、酒を飲むから間違ひが起るんだ。

おとま　…………………

長五郎　手めえがそんなに案じてくれるのに俺アよつぽど不孝もんだ。――俺にしたつて氣がつかねえぢやアねえ――俺のやうな奴は早く死ぬがましだらう……

おとま　かうしていろんなことを思ふせゐか、わたしはもう、常住お前のところへ行つた夢ばかりみる。――さうしちやア目をさましてつまらない思ひをする……

長五郎　……　………

おとま　猶もとの稼がしらの。――さういはれて負けない氣になつて稼ぐ。――何のそれがたそくになるんだらう？――しみ〴〵わたしはこの稼業が嫌になつた……

長五郎　それは俺とつておんなしだ。かうして、まア、町抱で候の、出入場で候のとみかけはいさみで暮すやうだが裏へまはれば親方闘れの子分すたりといふ奴よ、仲間の奴らに引立てられるだけいざとなると此奴が大きなこつた。――それもこれも苦界と思やアあきらめがつく。もうちつとの辛抱だ。――五大力ではわしやなけれどもだ。

おとま　縁と時節の來を待て。――おツつけお前に御膳をたべさて思入朝寢をしようよ。

長五郎　自前でもかせがねえやうにしろ。

おとま　よしとくれ、そんなんぢやアないんだから。

長五郎　（身ぶるひして）寒い。――ぞく〳〵しやアがる……

おとま　お酒がさめて來たんだらう？

長五郎　さうかも知れねえ。

おとま　もう一つ熱いのをもらはうよ。

長五郎　それには及ばねえ。

おとま　（わらつて）急に遠慮しなくつてもいゝよ。

長五郎　それよりあつちの客が待つてるるだらう。早く行つてやんねえ。

おとま　いゝんだよ。

（障子の外に廻しの女「お八重」來る。）

お八重　おとまさん、一寸……

おとま　あい、いま行くよ。

（お八重、去る。）

長五郎　いはねえこつちやアねえ、御上使のお入だ。

おとま　惡く、また、今夜は落合つたもんだもの。

長五郎　だから早く行けよ。

おとま　行くよ、そんなに邪魔にしなくつても。――いやならいやで出て行くけど親方は來なくつてもいゝんだね？

長五郎　何？

おとま　三行半ぢやアすまないよ。

長五郎　半も長もあるものか、判人袋の緒が切れた、きりきり出てうしやアがれ。――と、まア、夫婦喧嘩の紋切形はこんなものよ。

おとま　いまのうちから稽古して置かうかね。――だが、去られた心もちはどんなだらう？

長五郎　まんざらでもあるめえよ。

おとま　その氣で行つて來よう。――熱いのをいま持つてよこさせるから……（障子の外へ出る）

（間。）

（近くの座敷の廻りいたこ聞える。――わたしや出雲にとり殘されて男冥利につきたのか……。）

長五郎　ふん、何とかいつてやアがる……（冷えた酒をついで飲む）

第　三　場

前の場と同じく二川屋の二階。前の場の座敷より廣くみつきもよし」。――喜之助、氣のすまぬかほで一人すわつてゐる。

前の場の廻りいたこ、こゝへも遠くきこえて來る。

――心がらとはわしやいひながらひよんな苦勞をするわいな……

おとま、入つて來る。

おとま　喜之さん……（座敷のなかをみまはして）あら、誰もゐないの？

喜之助　…………（無言。――眼をそらす）

おとま　どうしたの？――何をさうむづかしい顏をしてゐるの？（喜之助により添つてすわる）

喜之助　…………（無言）

おとま　嫌だわ、ほんたうに（わらふ）――およしなさいよ、そんな……

喜之助　（突きのけるやうに）大きにお世話だ。

おとま　まア……

喜之助　いかに俺が――いかに俺が間拔たつてその手にものるものか

おとま　何をいふの？――それは、お前、何をいふの？

喜之助　自分の胸に聞くがいゝ。

おとま　妙なことをいふのね。――（わらつて、また）およしなさいよ、人じらしな。

喜之助　それはこつちでいふこつた。

おとま　…………(喜之助の顔をみる)

喜之助　白ばつくれるもいゝ加減にしろ。

おとま　無理だわ。――無理ですわ、それは。――何にもその理由もいはないで……

喜之助　理由は、だから、そつちの胸に聞けといふんだ。――胸で分らなければ腕に聞け。

おとま　(思はず) えゝ?

喜之助　(かぶせて) ざまアみろ、驚いたらう……

おとま　…………(眼をふせる)

喜之助　酷いのがうき世とは聞いてゐた。――だが、かうまで、酷い、果敢ないものとは思はなかつた。――はじめて眼がさめた、俺は。――だが、辛くするならするやうに、邪慳にするならするやうに、なぜもつとすつぱりとさうしないんだ。――綺麗になぜ船宿のまへで突出さないんだ。

おとま　…………

喜之助　そんなことゝは知らないから、のろい奴が、蚊にくはれてもこつちの顔だけは、後生大事に上からさすつて我慢してゐたんだ。――そんな彫もの、さきおやア疾うに消してゐると友だちにいはれても、たきつけたつて誰が眞にうけるもんかとわらつて多寡をくゝつてゐたんだ。――三度に一度、さうでもないと思つても野暮つたく改められるもんぢやアない、うつかりしたことをいつて料簡をみられることもない、默つてゐるに如くはない。――と、さう思つたのもつまりはそつちを買被つてゐたからだ。――そんな腐つた性根とは思はなかつたからだ……

おとま　…………

喜之助　いつまで未練なことはいはない。――これだけいへばこれでいゝんだ。(いきなり火鉢のなかから焼火箸をとつてわが腕のおとまの名を彫つたほりものを焼消さうとする)

おとま　(驚いてその手にすがる) あ、待つて下さい。――喜之さん、待つて下さい。……

喜之助　何をするんだ。――何だつて止めるんだ……

おとま　そりやア短氣です。――あんまりそりやア短氣です……

喜之助　何が短氣だ。――はつきり出入をつけてやるんだ。――そつちが消したからこつちも消すんだ。……

おとま　さういつちやア、お前、實もふたもない。――わたしの心を知らないやうに。――後生だから――後生だから聞いて下さい。――一ト言、喜之さん、聞いて下さい……

(おとま、無理に火箸を喜之助の手からもぎとる。)

――稜みに、おとま、やけどする……。）

おとま　熱ッ……

喜之助　（驚く。――が、冷かにみてみないふりする）

（近くの座敷のいたこ。――智慧もきりやうもないわし故に心つくせどあだになる……。）

おとま　これにはいろ／＼經緯があります――一圖にさうお前のやうに……（うつむいて）といふのも、いゝえ、つまりはわたしのいたらないから……

喜之助　…………　……

おとま　すみません。――堪忍して下さい。（眼を拭く）

喜之助　（嵩にかゝつて）と、いへばいゝのか？――詫びればすむのか？――この期になつてまだそんな……

おとま　ですから、いゝえ、今日いはうか明日いはうか？――でも、さういつたらまアどんなに腹を立てるだらう。――いゝえ、腹を立てるだけならいゝ、それをトッコに、二度とふたゝび逢はないぞ。――さうでもゝしいはれたら……

喜之助　當りまへよ、知れたこつた……

おとま　だからつい一日延びに――（さびしく）一日延びになつたんです……

喜之助　…………

おとま　決して、それだつて、いまさらお前を突出すの引出すの。――そんなことのありやうはずがありません――うそにもそんな――そんなことをいはれるさへわたしは……（再び眼を拭く）

喜之助　（上の空といつた感じに）そんならなせ消した？（……強いことはいつてもそれまでは幾らかまだよもやに引かされてゐた。――そこまで來てはつきりそれのほんたうと分つたのから來たいまさらながらの失望。――それだけいひ方に力がない）

おとま　だからこれには。――いろ／＼これには……

喜之助　（にべもなく――といふことはいつそ捨鉢に）いひわけはたくさんだ。

おとま　（半ば自分にいふやうに）お前に無理をさせまいと思つたばかり。――こんなことになると思へば……

喜之助　…………

おとま　喜之さん、口惜しいけどわたし、十兩のお金がなければ身が立たなかつたんです。

喜之助　（強く）何？

おとま　いつか話したお父つあんの病氣がいまにやつぱり思はしくないんです。――それに入るいろ／＼の、人參の代や何か八兩ほど年をかき入れても都合してくれ――おつ母さんからさういつて來ました。

喜之助　……（おとまの顏をみる）

おとま　いゝえ、お前にうち明けるのは知つてゐます。――うち明ければ、お前の、身にかへてしてくれるのも知つてゐます。――知つてゐるだけいへません。――初仕舞のあるのにそのうへまた。――お前を大切に思へばわたしにはいへません。

喜之助　おためごかしは止しにしろ。

おとま　さうぢやアありません。――お前はよくつても、でも、お前のうちの首尾があります。

喜之助　…………

おとま　（しんみりと）さうでなくつても負けない氣のお前。――わたしは末を案じるから……

喜之助　末を案じりやアいまはどんな眞似をしてもいゝのか？

おとま　（あぐねたやうに）いゝえ、さうぢやアないけど……

喜之助　ざまアみろ。（横を向く）

おとま　その代りには必とこのお前の顏は立てます。

喜之助　ふゝん、だ。

おとま　お前への面ばれに必と藤兵衛をつき出します。

喜之助　藤兵衛？――藤兵衛といふのは新川の……？

おとま　えゝ。

喜之助　逢つたことはないが聞いてはゐる。――其奴のこりやアさりやくか？

おとま　器用に、えゝ、十両くれたと思へば。――なせ喜之助の名をうでへ彫つた？……

喜之助　そんなケチな、胸氣なことをいふ奴とは思はなかつた……

おとま　嫌だといへばそれつきりです。――わたしは構はなくつてもお前の名の出たうへは、どんなまた後腐れがお前に、――わたしはそれを思ひました。

喜之助　…………

おとま　といふのも女の淺い智慧……でした。ぶつとも叩くともお前のいゝやうにして下さい。――それでも料簡出來なければ、すつぱり藤兵衛をつきだしたあとで、それこそわたしを突出すともどうともして下さい。――どうされたつてわたしはうらみとは思ひません。

喜之助　…………

おとま　お前に突出されて、わたし、どうせ生きてるつもりはありません。――さう思つて――可哀想と思つて堪忍して下さい。

喜之助　…………

おとま　ねえ。――ねえ、喜之さん……

喜之助　…………

おとま　ねえ。――ねえ……

喜之助　…………………

（おとま、自分にしおんたきめ、のべ紙を裂いて小指を結へ、ついと立つ。）

喜之助　どこへ行く？　（袂を押へる）

おとま　あ、あすこまで。

喜之助　何しに？

おとま　えゝ、あの……

喜之助　指を切つてどこの淺黄裏にやるんだ？

おとま　…………………

喜之助　大ていにしろ。

（おとま、そのまゝべつたりすわる。）

おとま　喜之さん、わたし。——わたし、もう……（泣く）

（近くの座敷のいたこ。——かくのだますといはんすけれどわしにかゝれるぬしぢやない……）

喜之助　（間。——急に）相手は藤兵衞だ。

おとま　…………？（顏を上げる）

喜之助　消した奴より消さした奴だ。

おとま　お前……？

喜之助　（歎息するやうに）……やつぱり駄目だ。

（近くの座敷のいたこ。——おまへばかりに苦勞をさせてわしは苦勞をせぬかいな……。）

——幕——

第二幕

第一場

二川屋の二階。（前まくより一ト月あまりあと）

長五郎をまんなかに、あば鐵、あを吉、おさき松、鳶頭、姐分、それに男げいしやを加へた大一座。——一しきり大騷ぎのすんだあとで杯をはやらせてゐる。鐵も、松も、吉も、カナリもう醉つてゐる。——長五郎のそばに、おとま、いつそ冷やかなとりなしにそのさまをながめてゐる。

あば鐵　酒を持つて來い、酒だ〳〵……

姐分　こゝに、お前、ありますわね。

男げいしやの一　えゝ、お杯のおあきはございませんかな、お杯の……

おさき松　さア行くぜ。（杯をなげる）

男げいしやの一　おッと、猪牙で來なさい、にたりは遲い……

男げいしやの二　ふさつてら何と來た。

あを吉　古い洒落をいふねえ。

男げいしやの一　長さん、お一つ……

長五郎　いけねえ、俺はもう飮めねえ。

男げいしやの一　では、のめんな褒りましてもう一つ……

姐分　あつかましいね、この人は。

男げいしやの二　(急に)なんにもいふ人ではないわえ……

男げいしやの三　いよ、紀の國屋ア……

(お八重、入つて來る。)

お八重　さア、あちらでおあがんなさいまし。

(「おツとしよ」とばかり、これにて、鐵、松、吉、みんな立上る。長五郎とおとまとだけ殘して一同どやどやと廊下に出て行く。)

船頭　(廊下から長五郎に)どうなさいます、宵立になさいますか？

お八重　おとまりでせう、今夜は？

長五郎　まだ決めてゐねえ。

お八重　あんなこと。――たまに來て何ですよ。

長五郎　先刻から散々いたしめられた奴よ。(わらふ)

お八重　當りまへですわ、よく道が分つたと思つて。――ねえ、おとまさん……

おとま　聞きながら來たとさ。

長五郎　何だ、手めえまで。――(船頭に)工合にしようぜ。

船頭　(うなづいて)そんなら……

(お八重、船頭、去る。)

(間。)

長五郎　大風のふいたあとのやうだ。――(杯をとつておとまにさす)どうだ、一つ飲まねえか？

おとま　(それをうけとつて)長さん……

長五郎　えゝ？

おとま　大さうなこつたね。

長五郎　何が？

おとま　今日のけしきさ。

長五郎　ふん、これしきの工面が出來ねえでどうする？――と、まア、たまにはいふ奴よ。(わらふ)

おとま　…………

長五郎　戲談のけて、お前に俺は禮に來たんだ、今日……

おとま　禮に？

長五郎　隨分いまゝでお前には厄介をかけた。世話ア焼かした。――が、喜んでくれ、どうにか俺もうだつが上りさうだ。

おとま　ほんたうかい、お前？

長五郎　こゝんところ暫く出て來なかつたのもありやうはそのためだ。――くはしいこたア追つて話すが、これからは決して苦勞はかけねえ。――お前も、だから、そのつもりでゐてくれ。

おとま（しみ〴〵と）分らないもんだねえ、人つてものは……

長五郎　全くだ。——自分でも、俺ア、夢のやうだ。——このまへ來てお前に無理をいつたときから二タ月とまだ經つちやアゐねえ。

おとま　それより、お前、藤兵衞さんだよ。

長五郎　藤兵衞？——うむ、どうした、彼奴？——　相變らずか？

おとま　いゝえ、それが。——たうとう店をかぶつたぢやアないか。

長五郎　新川をか？

おとま　あゝ。

長五郎　いつ？

おとま　先月の末……

長五郎　で、どうしてゐる？

おとま　それは、まア、一番々頭でもしてゐたんだからしがくはついてゐるけど……

長五郎　それにしても——（感じ入つたやうに）分らねえものだなア……

おとま　この間も來たとき、とても歸參は出來さうもないから、いつそ自分で見世でも出さうかといつてたけど。——强つ氣で愚痴らしいことをいはないだけわたしア氣兼でね。（歎息するやうに）

長五郎　誰もしかし口をきくものもねえのか？

おとま　店ぢやア、でも、下の者がだん〳〵くり上げて出世するからいつそうれしがつてゐる……

長五郎　よく出來てやアがる。——が、その妄念がみんなお前の體にとツつくんだせ。（わらふ）

おとま（さびしく）それを思ふと。——それを思ふと、だから、片時もこのごろこの稼業をしてゐる氣がしなくつて……

長五郎（外してわざと何のこともないやうに）何だ、そんな氣の弱え……

おとま　それが、いゝえ、藤兵衞さんばかりぢやアないんで。——喜之さんでも、このごろ、親御の首尾を惡るくしてわきへどこかあづけられてゐるといふんだもの……

長五郎　其奴は事だな。

おとま（いかにも思案に盡きたやうに）長さん、わたしどうしたらいゝだらう？

長五郎（間。——しんみに）人は落日が肝心だからな……

（お八重、廊下に來る。）

お八重　おとまさん……

（おとま、立つて行く。——お八重、何かさゝやく

……。）

おとま　いゝから好きにさしてお置きよ。（そのまゝすぐ長五郎のそばにかへる。）

（お八重、あぐねたかほで去る。）

おとま　長さん、わたしに飲ましておくれ。

長五郎　はじまつたな。

おとま　いゝえ、いつもの今日は癇積ぢやアないの。

長五郎　……　…………

おとま　素面ぢやア、わたし、誰のまへにも出られないい……

（おとま、大きいもので飲む。）

第二場

前幕第三場と同じ座敷。――藤兵衛、お八重を相手にくど／＼いひながら酒を飲んでゐる。

藤兵衛　……いゝか、十六文のつまみ菜を買ふにしたつて十文を六文と二度に買へば値が違ふ。――網守だつて皿に買ふのは損だ。水をしぼつて目籠で買へば一ト杓子は徳が行くんだ。――ものゝ利合つてものはさうしたもんだ。

お八重　…………（だまつて銚子を火にかざす）

藤兵衛　忘れもしねえ、今年の正月、早ぶへりの朝だつた。――英鄕の橋をわたると十ばかりの小僧が筒つぽを着ておもたさうに荷を下してゐる。海にはまだ白魚の篝がみえた。もう七つちつとすぎか。――兄イ、その荷は一荷いくらだ？――聞くと、よく賣つて二百がもんだ。――さういふぢやアねえか、思はず俺はホロリとした。――さすがに俺は無常をかんじた……

お八重　…………

藤兵衛　それから、俺は、腰の錢入に三百ばかりあつた奴をやらうと思つた。取らねえ。なるほどこりやア尤もだ、そんなら俺がみんな買はうと、その荷を川へ放したら、惜さうな顔をして頂いて持つて行つた……

（おとま、入つて來る。――だまつてお八重のそばにすわる。）

藤兵衛　（つゞける）げいしやに遣つた一分よりその三百のはうがどんなに生きたか分らねえ。――うれしがられたゞけだつて大したこつた。――儲けにいくも金なら使ひやすいも金だ。――世の中といふ奴はだから入我我入。――分つてるやうで分らねえ……

おとま　お八重さん、そんなこと音無しく聞いてるやつがあるもんかね。

お八重　えゝ、でも……

藤兵衛　誰も手めえに聞けとはいはねえ。

おとま　（それにはこたへないでお八重に）有難う、わたしがするわ。

（おとま、お八重から銚子をうけとる。――お八重、おとまにまかせて救はれたやうに出て行く。）

（間。）

おとま　つぎませう。（銚子をとる）

藤兵衛　それより、手めえ、いまゝでどこへ行つてゐた？

おとま　えゝ？

藤兵衛　なぜさう喜之助に義理を立てるんだ？

おとま　…………………

藤兵衛　（嘲るやうに）いくら手めえ隱したつて天道み通しだ。――惡そばえをするだけ無駄だ。

おとま　…………………

藤兵衛　なぜかくす？――何だつてかくす？――かくすにはさだめし隱すだけの理窟があるだらう。――それを聞かう。――それを聞かうぢやアねえか？

おとま　…………

藤兵衛　手めえ、あの喜之助は、俺に對して疾うにもう突出したんぢやアねえか。――いやさ、あれほど固く、つき出してみせると俺に請合つたんぢやアねえか。――それからもう幾日になる？

おとま　…………………

藤兵衛　（いきり立つて）なぜつき出さねえ？――何だつてつき出さねえ？――何だつて、まだ、喜之助を呼んでゐやアがるんだ？

おとま　…………………

藤兵衛　（急にまた嘲るやうに）俺には分つてゐる。――手めえの料簡にはよく分つてゐる。――何だらう、手めえ、俺がいま店をかぶつて、一トしきりの藤兵衛でなくなつたのにうつかり彼奴をつき出して、虻蜂とらずになつちやアうまらねえと算盤を取つたんだらう？――それであれまでに絲道のついたものを、たゞ合の手でまじくなひの、べんべんだらりと今日まで引ずつて置きやアがつたんだらう？

おとま　（間。）藤兵衛さん。

藤兵衛　何だ。

おとま　かくしてゐるのはわたしが惡かつた。――堪忍しておくんなさい。

藤兵衛　（強く）何？

おとま　けど、それにはそれだけの理由（わけ）があります。――つき出すとお前にうけ合つたそのあとで、喜之さん、親御の首尾をわるくしていまではわきへどこか預けられてゐます……

藤兵衛　だからどうした？

おとま　そこです。――わたしもこの内おやア板頭とか何とかいはれてゐます――人にメドをとられるだけ、喜之さんの、心細く、たよりなくなつてゐるところを、いかに情なし稼業の、嘘を元手のつとめはしてゐても、わたしは、藤兵衛さん、道にはづれたことは出來ません。

藤兵衛　…………

おとま　明日にも親御のこゝろが直つて、喜之さんがうちへかへつたといふことを聞いたら、そのときこそ立派にわたしは突出してみせます。――いまそんなことをして、あれでも立引か、何といふ眞似をする女だ。……いゝえ、わたしがいはれる分には何といはれても構ひません、ともどもお前までつぶれたら。……人は、いゝえ、あることないこと必といひます。

藤兵衛　…………

おとま　お前でなければ疾うにこのことを話してゐます。――お前だからわざといはなかつた。――それを未練で――わたしの未練で呼んでるやうに思はれちやアわたしの立つ瀬がありません。――これで惡かつたら、わたし、どうでもお前の好きになります。

藤兵衛　それは、手めえ、誰にいふ口だ？――いひたかアねえが、朝は大島町の綱身うりの出端を切ッかけに、日が暮れゝば白魚の篝と一しよに三百六十日、うちに寢る夜を遊びと心得てゐる人間だ――つべこべ悧巧ふつて何をいやアがる。――人をふみつけにするのも大ていにしろ。

おとま　…………

藤兵衛　そつちがさういふ料簡ならこつちにもしようがある。――もう一も二も論はねえ。――所詮腐つた根性つ骨なら、緣を切るとも切らねえともかうなりやア手めえの勝手だ。――義理知らずのふんばりあま、面ア洗つて出直しやアがれ……

（間。）

おとま（急に）好ござんす。――これだけいつて聽いてくれないならそれつきりです。――こつちの體さへ覺悟すりやア、面倒なことも、むづかしいことも、怖いこともおそろしいこともありません。――もうなんにも被仰んな。

（おとま、手を叩いて呼ぶ。――返事をしてやがてお八重來る。）

お八重　お呼びなさいましたか？

おとま　お八重さん、こゝにあるものをみんな階下の八疊へ持つて行つておくれ。

お八重（耳を疑ふやうに）階下の？

おとま（はつきりと）喜之さんのゐる隣の座敷さ。

お八重　おとまさん……

おとま　いゝんだよ、分つてるんだよ……

（おとま、大きいものでまた立續けに飲む。）

（……お八重、出て行く。）

（藤兵衞、冷かにおとまのそのさまをみまもる。）

第　三　場

二川屋の階下(した)ざしき。――喜之助、船頭の忠七を相手に手もちなくすわつてゐる。――酒の道具はならんでゐるが外にだれもゐない……

喜之助　（急に）歸らう。――忠公、歸らう。――すぐ船をこしらへてくれ。（いらつくかたちにきせるをきせる筒にしまひかける）

忠七　お待ちなさい、まア。――いま呼びます。――何をしてゐやアがるんだらう、彼奴らア……

（手をたゝく。）

喜之助　もういゝ。――呼ばなくつたつていゝ。――先方(さき)からよツつかないものを何も……

忠七　いゝえ、呼びます。――いま呼びます。――ふざけやアがつて、畜生……（手をたゝく）

（お八重、入つて來る。）

お八重　（冷かに）お呼びなさいました？

忠七　お呼びなさいましたぢやアねえ、何をしてゐやアがるんだ。――先刻から呼んでるのが聞えねえのか？

お八重　あら、さうですか？

忠七　あら、さうですか？――何をいやアがる、勝手につけば手めえのはうからべた／＼よツついて來るくせに……

お八重　…………

忠七　おとまさんはどうした、おとまさんは？

お八重　えゝ、いま來ます。

忠七　どんなに忙しいか知らねえが面ぐらゐ出したつて罰はあたるめえ。――どうでも手めえが抜けられなきやアお仕着どほりの言付(ことづけ)で、さびしいだらうが待つてくれとか、げいしやでも呼んでろとかいつてよこしてもいゝはずだ。――內の奴にしたつて頂くものをいたゞいたときばかりちやほやするのが能ぢやアあるめえ。

喜之助　いゝやな、もう。――そんなことをいつたつてはじまらない……

忠七　いゝえ、いはなくつちやアくせになります。――けふは縣に出たの、堀の內へ行つたのとお前さんを呼出しちやア、升屋を奢れの、芝居がみてえの、――おとまさんを楯にもうねだり放題の……

喜之助　止せよ、こゝツともない。――費消(つか)つた金が惜しいやうにみえる……

忠七　でも、あんまりうけとれねえ仕打をしますもの。
お八重　いま、ぢやア、すぐ呼んで來ます。
喜之助　無理をしなくつてもいゝ。――俺はもう――今日はもう俺はかへるから……
お八重　えゝ、さういひます。
　（お八重、去る。）
忠七　どだい彼奴の面が氣にくはねえ。
喜之助　さういふな。――勘當されたこつちがぶねんなんだ。
忠七　でも、お前さん……
喜之助　いゝやな、仕方がない……
　（間。おとま、ふら〳〵と入つて來る。足もとのきまらないほど醉つてゐる。――あとに娘分一人ついてゐる）
おとま　（座敷へ入ると一しよにべた〳〵とすわる。苦しさうにうつぶしになる。――やがてぼんやり顏を上げる）水をおくれ。――だれでもいゝから持つて來ておくれ。あの人に飲まされてわたししみじみ醉つた……
喜之助　……（思はず顏の色をかへる）
おとま　誰もゐないのかい？　持つて來ておくれよ、早く――氣がきかないねえ、ほんたうに……
喜之助　おとま……
おとま　（上の空に）えゝ？
喜之助　何だ、その恰好は？　（忠七や娘分のまへた氣兼ねるこなし）
おとま　（顏をみて）まア喜之さん。――お前まだこゝにゐたの？
喜之助　（思はず）何？
おとま　わたしア、もう、疾うにかへつたものと思つてゐた。
喜之助　それは、おとま、誰にいふ口だ？
おとま　お前にさ。
喜之助　……………？
おとま　誰にもいやアしない、お前にさ。
喜之助　（カッとするのをわざとわらつて）大した愛想盡しだ……
おとま　わるかつたわね。――大した愛想盡しで惡かつたわね。（喰つてかゝる）
おとま　何だい？――何か用かい？
娘分　（み兼ねて）おとまさん……
娘分　喜之さんに、お前。――いくら醉つてゐるからつて……
おとま　好いぢやアないか。――何をいはうと好いぢやアないか。――よけいなお世話だよ。（ふり拂ふ）

(喜之助、いきなりおとまを引倒してゐつたうちに打つ。――娘分、驚いてさゝへる。)

娘分　あれ喜之さん、そんな――そんな手荒な……

(喜之助。聽かない。――娘分、とても自分の手に終へないとみて「誰か。――誰か來ておくれ」と人を呼ぶ――お八重、娘分たち二三人駈けて來てなかへ割つて入る。)

喜之助　(興奮したまゝ)　ふ、ふざけやアがつて。――默つてゐりやアいゝ氣になりやがつて……

忠七　さうですとも。――よく、まア、いまゝで、辛抱しなすつた。――板頭か棒頭か知らねえが、こつちはもうみてゐてもじり／＼……

お八重　何だね、忠さん、お前まで一しよになつて……

忠七　あたりめえだ。――お客に對してふしだらがありやア、船頭は、旦那はおろか親方にまで言譯がねえんだ。――たとへ喜之さんが料簡してもかうなりやア俺がいやだ、この俺が合點しねえ……

娘分　忠さん、お前。――後生だから……

(外の娘分もとも／＼とめる。)

おとま　打捨つてお置きよ、みんな、――どうとも好きにさせるがいゝ……

娘分　おとまさん、お前も。――お前も、もう……

おとま　いくら體は賣物でも勝手にさうぶたれてすむもんぢやアない。何もからんだ筋ぢやアなし、嫌だから嫌、はつきりさういつたゞけぢやアないか。――それが氣に入らなきやア見立替をするがいゝ。――馴染もへちまもあるもんか……

娘分　おとまさん……

おとま　いゝぢやアないか――わたしのわがまゝと酒のわるいのは正札附になつてるんだよ。――ものいひツぷしが惡くつて氣に障つたらたんと障つたがいゝ。――七十五日わるくいはれりやアそれでいゝんだ……

(喜之助、ぢツとこのうち自分をおさへてゐる。)

喜之助　忠公、行かう……(急に立ちかける)

女たち　喜之さん、そんなことをいはないで。――それぢやアわたしたちがすみません。

喜之助　馬鹿をいへ、このうへゐれば恥の上塗をするばかりだ。――理も非もわからない奴を相手に……(いひかけて)これも親に泣きをみせた罰だらうよ。(忠七、一ト足さきに出て行く)

おとま　(間)　喜之さん……

喜之助　何だ？

おとま　緣を切つたら起請を返しておくんなさい。

喜之助　引札どうぜんな紙つ屑。――いはなくつても返し

てやる……（首にかけた守り袋から二重三重につゝんだ起請を出しておとまのまへに投げだす）

おとま　（とり上げてなかを改めふところに入れる。――そのあと帯に挟んだ紙入から喜之助のはうからとつた起請おなじく幾重にもつゝんだのを出して）さア、お前のも返しますよ。（喜之助のまへに投げだす）

喜之助　……（とり上げてすぐ引ッ裂かうとする）

おとま　あゝ、それ……（聲をかける）

喜之助　何？（出端をくじかれたかたちに思はずその手を止める）

おとま　（冷かに　相手をめつけてもう一度後に立てるといゝ……

喜之助　な、なにをいやアがる……（そのまゝまるめて袂のなかに入れる）二度たアもう逢はねえぞ。（ざしきを出ようとする）

娘分　喜之さん、それは。――そんな短氣な……（兩方から袂にすがる）――お八重さん、早くお前旦那に……

（お八重、急いでざしきを出て行く。）

（混亂、――ふり切つて、喜之助、出て行く。――娘分二人そのあとを追ふ。）

（間。）

（おとま、急に癪をおこす。――殘つた娘分おどろいて介抱する。）

娘分　しつかりして。――しつかりして、おとまさん……

おとま　（苦痛を忍ぶ）大丈夫。――大丈夫……

（隣座敷との境界の杉戸のかげに藤兵衛、廊下に長五郎のすがたあらはれる……）

――幕――

第三幕

第一場

鳥居町船宿、（前まくのあくる朝）

忠七、仕出しの岡持を下げて外からかへつて來る。――女房おうた、火鉢のそばにすわつて酒の支度をしてゐる。……外には雪がふつてゐる。

忠七　（半ば自分にいふやうに）すつかり積りやアがつた……

おうた　昨夜つからふりつゞけだもの。

（忠七、上り口に岡持を置く。――足を拭いて土間からあがる。）

忠七　いま、お内儀さん、二川屋の女が來やアしませんか？

おうた　來たよ。

忠七　投網町でみかけた恰好がよく似てゐると思つた。

――お八重の閻魔でせう？

おうた　あゝ。

忠七　何てつてました。彼奴？

おうた　何さ、西河岸まで態々に來たから寄つた。――さういつてゐた。

忠七　で、喜之さんのことは？

おうた　訊いてたよ。――だから昨夜、河岸からすぐお歸んなすつた。――さういつて置いた。

忠七　(自分に)　畜生、さぐりに來やアがつた……

おうた　さういつたよ、でも。――昨夜は藤兵衞さんといふむづかしいお客と落合ひの、おとまさんも酔切つてゐたんで、ひよんな間違ひも出來ました。――よくこなたからさういつて、もう一度來て下さるやうに……

忠七　彼奴、まア、どこを押しやア　そんな音が出るんだ……

おうた　だからわたしもいつたよ。――えゝ、みえたらさういつて上げませう……

忠七　そんなこつて感じる相手ぢやアありません。――もつと小ツ酷く――ふんづかめえて鼻つ面を……

おうた　(わざと取合はず)　お前にもたのんでくれといつてゐたよ。

忠七　何をッ

おうた　喜之さんをつれて來るやうにさ。

忠七　そ、さういふ――さういふ畜生です……

（この應酬のうち、忠七、岡持からとつて來た料理を出す。――おうた、銅壺へちろりを入れたり、鍋を火にかけたり、手鹽皿だの散蓮華だのならべたりする。……）

おうた　出來た。――いゝよ

忠七　あい……（立つて奥へ行く）

（喜之助、とぼ〳〵忠七と出て來る。）

おうた　（はれ〴〵と）　さア、お燗がつきましたよ。

喜之助　…………

おうた　お氣晴しに一つ召上れ――忠公、お前……

忠七　お一つ上つて御思案どころ。――さア、喜之さん……

喜之助　………………

（喜之助、力なくすわる。――忠七、すぐさかづきをとつてさす。――おうた、酌をする。）

（間。……雪の日しん〳〵とした感じ）

喜之助　（無理に一つ二つ飲んだあと重ねてまたいがれたさかづきをそのまゝ下に置いて）　親方は？

おうた　一寸いま藤崎まで出かけました。

喜之助　この降るのにッ

おうた　えゝ、帝釋講の寄合で……

喜之助　帝釋講？（床にかけた帝釋天の懸物へこなし）大へんだね、それは……

おうた　あんなガラ〳〵した人が、信心のことつていふと、何を措いても夢中になるんですから可笑しくつて……

喜之助　………………

おうた　そろ〳〵もうお鍋の方もようございますよ。（火の加減を見る）

喜之助（それにはこたへず、思ひ入つたさまに）俺も早く信心でもすればよかつた……

おうた（顔を上げてわらふ）何を、あなた。——いまからそんな……

喜之助（それをうけつけず。——きはめて心弱く）さうでもしてゐたら昨夜のやうな赤つ恥も……

忠七　いたゞきませう。一つ……（手を出す）

喜之助（さかづきをあけて忠七にやる）……いまも、奥の、炬燵のなかでつく〴〵俺ア考へた。——考へりやア考へるほど不孝の報が怖しくなつた……

おうた　………………

忠　七　………………

喜之助　平生から親の意見を上の空に、慈悲があまればあまるほど内にゐるのがうるさくなつた……だまされるとも知らず畜生のやうな奴にのろくなつた……何といふ罰あたりだ。（眼を拭く）

おうた　それは、まア。——さういへばさうですけど。——これにはしかし……（いたはるやうに喜之助の顔をみる）

喜之助　………………

おうた　何かこれは。——何か、まア、これには……（忠七をかへりみて）ねえ、さう思はないか、お前……？

忠七（うべなへないかほで）へえ。——それは、まア……

喜之助（おうたに）さういつてくれるのは有難いけれど——みす〳〵、でも。——みす〳〵起請まで……

忠七（その尾について）そ、それなんで。——充満坪の煤掃するやうに、あくたもくたをまき出したあげくが起請を返せ。——そんな、お前さん……

おうた（喜之助に）で、その起請？

喜之助（幾らかの興奮をもつて）だから、そんな紙つ屑すぐに叩ッ返した……

おうた　いゝえ、さきの。——おとまさんの……？

喜之助　うけとつてすぐみるまへで。——みるまへで引ッ裂かうとした。——と、どうだ？——相手をめつけてもう一度役に立てろ……

忠七　さういふことをいやアがるんです。——どこまでい

けツ太いか……

おうた（喜之助に）で、それ？

喜之助　さういはれて、お前のまへだが……（しを〳〵と）引ツ裂いたつて譽め手はなし……

おうた　…………？

喜之助　口惜しいが持つてかへつた。（袂をさぐつて前まくのまるめたまゝの起請をつかみ出す）

おうた　わたしに、それ……（手を出す）

喜之助　こんなもの……（てれかくしを交へてさびしくわらふ）

おうた　いゝえ、こんなものでも。——一寸わたしに……

喜之助　たゞいまのお笑ひ草。——そつちの火鉢へくべてくれ……（投出す）

（おうた、取上げる——擴げて上の包をあけると中からみす紙五六枚に紅筆で書いたおとまの文出て來る。——このうち、喜之助、一つ二つ飮む。）

おうた　おや、これは？

喜之助　……？（顏を上げる）

おうた　手紙ですわ、これ……

喜之助　手紙？

おうた　……用事のみしめしまゐらせてとよこよひのことちいお御はらだちのお心のほど……（讀みかけて忠七に）讀んで御覽、お前……

忠七　へえ、——（うけとつて讀む）……御はらだちのお心のほどかね〴〵かくごのまへに御座候——このわけ——このわけ合か——このわけ合はどうも〳〵まをしわけもなき事ながら、少々あ……や……のあることゝ幾……幾重にもおさつし下されたく、くどうは申さず候まゝ。——いま一たび御腹立を御かんにん被成……なされ候て何とぞ……何とぞ……

（忠七、辛うじて讀む）

喜之助　みせてくれ、俺に……

（おうた、ちろりを下に置き、忠七からそれをうけとつて喜之助にわたす。）

喜之助　（讀む）何とぞ〳〵この所書のもとへ一寸御はこばせ願まゐらせ候。とてもこなたへは御入らせもあるまじく、また忠どの事もきつくはら立のやうすにさつしまゐらせ候。これとても無理ならず候、たゞ何事も申譯のかず〳〵御めもじのうへにて、めんぼくもなく御はづかしく存ながらも此わけ一通りを申上たく候へば、何とぞ〳〵書添のところまで御入らせかならずかならず御まち下され候やうねがひ上まゐらせ候。そのうへにてかれこれともにすぢの立候事に御座候。氣づよき女と思召のほどいくへにも御はづかしく、たゞ〳〵思ふにまかせぬ身にし候へばしみ〴〵

じれつたく、心のうちにてふさぎをりまゐらせ候。——しんにけがらはしきちくしやうとも思召して一たび御立歸りのうへたらばくはしく／＼わが身むねのうちお明し申上げたく、それのみねんじまゐらせ候。——わからぬ奴と御つもらせもあらんなれど、かやうにまでも申上候へば、ぜひ／＼一たびは御かへらせ神かけていのりまゐらせ候。——筆するゑながら此わけを忠どのへも鳥居町の八五郎さまおかもじさまへもよしなに御申わけ下されかし。——申上げたき御事もこの中にて候へばあら／＼しめしまゐらせ候……

（誰も無言。）

（間。）

おうた　（いつそ嘆息するやうに）　こんなことだらうと思ひました。

喜之助　……（うつむく）

忠七　で、その來てくれろといふさきは？

喜之助　七軒堀と書いてある……

忠七　七軒堀？

おうた　と、いふのは、たしか、おとまさんの親御のところ……

喜之助　えゝ？

忠七　（あぐれたやうに）　此奴ア・喜之さん、思案をかへたきやアなりませんねえ。

喜之助　と、いつていまさら……

おうた　（急に）　喜之さん、お願ひ——これは行つて上げて下さい……

喜之助　………………

おうた　行つてよくそのわけ合を聞いたうへ。——そのうへで切れるともわかれるとも——濟（すま）すましはいくらでも出來ます……

喜之助　………………

おうた　突出すと見せてかういふ手紙を仕込んだおとまさんの胸のうち。——その胸のうちを、喜之さん、察しないといふこたアありません。——それも昨日や今日の仲なら知らないこと。——いまゝで二年あまりも馴染んで來たおとまさんがそれぢやアあんまり可哀想です……

（間。）

喜之助　（うなづく）……お前のいふこつた。——行くとしよう。

おうた　行つておくんなさいますか？

喜之助　すぐに行く。——忠公、羽織を持つて來てくれ。

忠七　承知……

（忠七、立ちかける。——途端おもてから、長五郎・ついと入つて來る。）

長五郎　それには及ばねえ。——來ようが遲えから俺のは

うから出て來た……

忠七　（驚いて）　おめえは……

長五郎　長五郎だ。——まんざら知らねえ面でもあるめえ。——御免よ……

（長五郎、梯はず上へあがる。——喜之助、おうた、忠七、不意をうたれたかたちに、茫然とたゞ、思ひもよらないこの闖入者をみまもる。……）

長五郎　喜之さんといふのはお前だねッ．

喜之助　（わづかに自分を取返して）　わたしさ。

長五郎　お前のはうぢやアどうか知らねえが、俺のはうぢやアお前をよく知つてゐる。——そのつもりで、まア、このさき附合つてくんねえ……

喜之助　…………

長五郎　早速だが、お前に、不承してもらひてえことがあつておとまのうちまで呼出しをかけたんだ——が、吾妻つ子だ、氣が短けえ。——いつまでべん〳〵と待つちやアゐられねえから出て來た。——有難えわけのものと思ひねえ……

喜之助　…………

長五郎　聞けば、お前も、おとまとは長え附合ださうだが、あの女とは俺は、三年この方の深え馴染だ。——友だちや子分の奴らにものろく思はれるほどだから、ぜッぴ女房にしねえぢやア組合へも面が立たねえ。——と思ふ矢先、念かとゞいて、ひよんなことから急に今度、俺のところへ來ることになつたんだ……

喜之助　……（顏のいろ變る）

長五郎　喜之さんにはいろ〳〵世話になつた、だんまりぢやア義理が惡い。——おとまの折角いふもんだ。——器用にこゝでおとまを俺にくんねえ。——えゝッ？——何があつても苦情はねえ　と　はツきり一ト言いつてくんねえ……

喜之助　（絶望的に）　どうとも好きにするがいゝのさ。

長五郎　どうとも好きにッ——（どなる）　ふざけるな、はツつけ奴……

喜之助　…………

長五郎　下から出りやアつけ上つて好きにしろたア何て言草だ。——よぢくれたことをいふねえ。——土臺その高慢が氣にくはねえんだ……

喜之助　…………

長五郎　こつちはしんの話合をするんだ。——男づくの口をきくんだ。——それを何だ。——それを手めえは何だ。——手めえのはうでさう出るなら、これからアもうおとまの體に指もさゝせるこつちやアねえからさう思へ。——（冷かにわらつて）　此方はの、いさくさなしに兩親

ならべ・熨斗水引でもらつたんだ。——腕づくでもなけりやアみゝづくでもねえんだ……

（このうち始終、おうた、忠七、いろ〳〵氣を揉むことなし。——が、長五郎まくし立てゝつけ入る隙をみせない。）

（間。）

（喜之助、ついと立つ。）

長五郎　待て、どこへ行くんだ？

喜之助　多、多寡があそびのうりもの買ひもの。——あとから上つたのが此方のふせうさ。

長五郎　（うなづくやうに）うん、よくいつた。——さ、これをみねえ……（手早くふところから書いたものを出して喜之助のまへになげ出す）

（おうた、とり上げる。）

おうた　（眼を觸れたまゝを）……また〳〵一寸しめしよ〳〵、——これはおとまさんの……？

長五郎　いゝからさきを讀んでみねえ。

おうた　（あたりのその歪んだ感じの雰圍氣をみてとる。——讀む）……昨夜、御まへさまおんかへらせのあとにて、長さまと、とくしんづくにてうつくしく切れ申候……

（おうたをはじめ、喜之助、忠七、驚いて長五郎をみる。）

（長五郎、無言。）

おうた　（間。——讀みつゞける）……くはしきわけは長さまよりお聞き下されたく候。——昨夜藤兵衛にせかれてつき出し申候やうなることにて、さぞかし御はらたちもあらんなれど、御まへさまの男をつぶして男を立てさせ申候いたしかたおん目にかけたく、藤兵衛を山までつれ出しまゐり居候まゝ、長さまことを少しもおうたがひなく耶摩本まで早々おん出待上り〳〵めでたくかしく……

（おうた、喜之助、忠七、茫然とまた無言。）

長五郎　（居住ひを直して）喜之さん、お内儀さん、忠七さん、とんだ茶番をお目にかけました。——が、そこに書いてある通り昨夜つきりでおとまとわつちやアわかれました……

おうた
喜之助
忠　七
……………

長五郎　隨分いまゝでおとまには苦勞をかけました。——いふ目の出ることをいゝことに、苦しい勤めのなかゝら、阿濟に貢がせもすりやアいたぶりもしました。——おはづかしいが、いまの時世は、いつそ夫を野郎の甲斐性ぐれえと思つてゐました。——ふツつりその眼がさめました……

おうた
喜之助　……………
忠七

長五郎　といふのが、今度、饑鬼の時分からわつちを手塩にかけて面倒を見てくれた親方が長の患ひで死にました。——今はの際にわつちを枕もとへ呼んで、長、手めえはいゝ男だ、世間で何といはうと俺アさう思ふ。たゞ疵は酒だ。酒を飲むから遊びにも陥る。——後生だから止めてくれ。——手めえの身状さへよくなれば、俺のあとをそつくり手めえにまかして、安心して俺ア眼がつぶれる——と、さういはれたのが身に沁みました。——しみ〴〵わつちの身に沁みました。—そこで、喜之さん、わつちは酒と遊びを金毘羅さまへ断たうと決めました。

おうた
喜之助　……………
忠七

長五郎　さうなると心がゝりはおとまです。——いまゝで痛めつけた罪ほろぼしには、どうぞしてたしかな人の手につけてえ。——之とみとめのついた人に世話をたのみてえ。——さう思つておとまの料簡も聞きました。——おとまは、もし、心の底からお前をたよりにしてゐます……

喜之助　……………

長五郎　昨夜のしうちも、おとまにすると、つまりは藤兵衛には、新子のときから世話になつた義理があります。——それを楯に、彼奴がまた、始終おとまにあかぬけのしねえ無理ばかりいひます。—店をかぶつたせうがに年季をぬき、世帯でも持たうといふことになつた日には、一生おとまの浮ぶ瀬がなくなります。——が、昨夜でその義理も返りました……

喜之助　……………

長五郎　（いまさら恰好がつかないやうに）とんだ茶番のけんのみでぶつかつたのも、いへば喜之さんの氣を引くため……とでも、まア。——すみません、堪忍してやつておくんなせえ。——堪忍してどうぞおとまをみ捨てないでやつておくんなせえ。——おとまの奴、彼奴、あんなきかねえ氣のやうにみえて、大根はごくの、いくぢのねえ、素直な可哀想な女です。——情のあんなさるのをみ込んでおたのん申します。

（喜之助、夢みごゝちに無言。）

（間。）

おうた　長さん、さうしてこの耶摩本といふのは？

長五郎　昨夜の返報に藤兵衛の面をふむ魂胆がしてあります。

おうた　ぢやアおとまさんは……
長五郎　喜之さんをわっちの行くのを、いまごろもう、そこで首を長くして待つてゐませう。
忠七　それだつたら、喜之さん……（立つ）
おうた　（忠七に）すぐに支度をしな……
忠七　おッと……（そのまゝ土間へ下りる）
（喜之助の眼から急に泪が溢れる。）
喜之助　長さん、一つ飲んで下さい。（さかづきをあけてさす）
長五郎　……有難う。（さそはれて不覺に泪ぐむ）
（おうた、酌をする。）
忠七　いゝ鹽梅に小止みになりやアがつた……（櫓をかつぎ出す）

第二場

二タ間つゞきの座敷の廣いはうに、藤兵衞と、おとまを眞ん中にして、お八重、船頭、げいしや、男げいしや、わけもなく大ぜい夢中で拳をうつたりしてゐる。
——十二分にもう酒はまはつてゐる。
藤兵衞　もつと騷げ、もつと騷げ……
男げいしやの一　さア、ぢやア、今度は惣踊りだ。
男げいしやの二　女どもゝ立つた〳〵。
（男げいしや、無理にげいしやたちを立たせようとする。）
おとま　（不機嫌で）止しとくれ。——血の道がおこらア……
げいしやの一　そらおとまさんが騷ぐなといふぢやアないか。
げいしやの二　大ていにしてお置きよ。
（一座急に白ける。）
男げいしやの一　さアいけねえ。——女どもは騷がねえとよ。
男げいしやの二　藤さんは騷げといふ、おとまさんは騷ぐなといふ。——此奴アよつぽどむづかしい……
男げいしやの一　誰かいゝ智慧はねえか？
男げいしやの三　うちへ行つてかゝアに聞いて來べえ。
男げいしやの四　何をいやアがる。
お八重　いさくさなしにお酒としたら……？
男げいしやの一　（頓狂に）お酒？——（膝を打つて）さうだ、お酒……
男げいしやの二　そのこと〳〵……
船頭　やつといゝ智慧が出やアがつた。
（藤兵衞とおとまを除いた外のものみんな笑ふ。）
男げいしやの一　酒だ〳〵……（無上に手を叩く）

（女中、いそがしく銚子を運んで来る。――みんな景氣よくさかづきをまはす……が、白けた一座の空氣は決してそれによつて救はれない……）

（間。）

藤兵衛　おとま、飲みねえ。（吸物椀の蓋をとつておとまのまへに出す）

おとき　わたしやア今日からお酒は斷つたといふのがお分らないの？

藤兵衛　誰に斷つてたつた？

おとき　誰にでもない、自分にさ。

藤兵衛　（冷かにわらふ）さうか。――おときは飲まねえといふから俺が飲む。――誰でもいゝ注いでくれ……

（そばにゐたげいしや急に酌をする。）

藤兵衛　（一ト口飲んで下へ置く。――一座をみまはして）手めえたちはどう思ふか知らねえが、色男きどりで遊ぶ奴は俺は大嫌えだ……たとへていやア蛞蝓だ。

男げいしやの一　なぜでございます？

藤兵衛　さうぢやアねえか、色白で、生ツ白けりやアいゝかと思ひ、手も足も出ねえくせに光りたがる。――錢を出すにも月鼻があかねえ。――ぬめんとしたところが何と蛞蝓だらう。

男げいしやの二　そんなお客は鹽花をふるに限ります。

藤兵衛　そのまた蛞蝓をのみたがる蛇のやうな奴があるのよ。

男げいしやの三　はて？

藤兵衛　蟇といふ奴は中つ腹で飛び出したがるが、錢がねえからたゞまじ／＼とグウの音も出ねえ。

男げいしやの一
おなじく　二　…………
おなじく　三

藤兵衛　と、また、生殺しの蛇といふ女郎があるのよ。――ためになる客は袖にしてぬらくら穴つ入りばかりしたがる。――蛙は蛇にのまれてゐるのと知らず、蛇は蛞蝓にとけると知らねえ。――なんとべら棒ぢやアねえか？

（藤兵衛、一座をみまはす。――とつさに誰も無言）

（おとま、吸物椀をあけていきなりお八重のまへに出す。）

おとま　ついでおくれ。

お八重　まアこれで？

おとま　いゝからついでおくれ。

（お八重、つぐ。――おとま、一ト呼吸にのんで藤兵衛のまへに出す。）

おとま　藤さん、飲んで下さい。

藤兵衛　（冷かに）何だ、あやまるのか？

おとま　いゝえ。

藤兵衛　おやア何だ？

おとま　あやまらないおさかづきさ。

藤兵衛　何？

おとま　昨夜、お前の顏を立てゝ、喜之さんをつき出したらそれでいゝぢやアないか。――それをきだくづ〳〵いふのは店衆のあくがぬけないからだ。――さういはれるのも、わたしのやうな情のない、いつこくなものになじんだお前の不運さ。――わたしやア、もう、今日といふ今日は愛想が盡きた。――わたしのはうからおさらばさ。――さう思つておくんなさい。

（おとま、つい と立つ。――藤兵衛、矢庭におとまの帶をつかんで引倒す。）

（一座のものみんな思はず立上る。――が、藤兵衛のけんまくにのまれてどうすることも出來ない。）

藤兵衛　何をいやアがる、ふんばり奴。――昨日俺にいぢめころされ、よんどころなく喜之助をつき出した手めえのさりやくを俺が知らねえと思ふのか？――ろくでもねえ智慧をふるつて、手めえたちがいかほど相場をくるはせようと、それに乘つて買込むやうなそんな藤兵衛ぢやアねえ。――働きのねえその面で板頭がすさまじい。――垢の入つた腐れ緣、俺にはもう未練はねえ、手めえがいはずと切れてやる。――藤兵衛は、さア、切れてやる。……

（藤兵衛、矢立を出しておとまの腕に二人命と書く。）

藤兵衛　お八重……（目まぜする）

（お八重、立つて隣座敷との間の唐紙をあける。――と、そこに、喜之助、長五郎、忠七の三人ゐる。）

藤兵衛（閾越しに）喜之助さん、長五郎さん、いまゝで二川屋で落合ひましても、あぢなもので御挨拶も申しませんでした。改めていまお近づきになります。

喜之助／長五郎　……（顏なみ合せる）

藤兵衛　さて喜之助さん、昨夜おとまの氣を引いたところ、よもやと思つたお前を乘切つてつき出しました。――しくじつてゐる藤兵衛を立てゝくれたのはかたじけないが、さういふ無理をしたからは、必ずその返報はあるものと覺悟はしてをりました。――が、いまおとまと切れたのはわたくしも親方へ歸參がかなひました。

喜之助／長五郎　……………

藤兵衛　店へまたもどれた上は、二度ともう二川屋へ足ぶみはいたしません。――稼業大事、親方大事、これからはもう生れかはつた料簡で、いまゝでのとりもどし、

身を粉にして働きます。――といふのも、わたくしも、來年はもう四十。――と自分にさう氣がついちやア一日だつて馬鹿はつくせません。――おとまのこともふツつり思ひ切りました。

喜之助｝
長五郎｝……………

藤兵衛　おとまの腕の彫ものを消したことも、いまがいままでの惡態も、それもこれもおとまのいまいつた店ものの野暮。――手代敵の持ちまへと、わらつてどうぞ堪忍して下さいまし。――長五郎さん、とも〴〵お前にもたのみます。

（間。）

長五郎　さすがは大家の御支配人、さつぱりとしたおさばきだ。――いかにもわつちは承知した。

藤兵衛　それで大きに安心しました。

長五郎　が、出入いさくさなしにすんだ上は、おとまの腕の、二人命のこの一本は改めてこゝでわつちが消します。（手拭でふきとる）――さ、かうすれば、二人命……（その手をそのまゝ喜之助の膝へつきやる）――藤兵衛さん、わつちも仔細あつて昨夜でおとまとすつぱりわかれました。

藤兵衛　えゝ？

長五郎　おとまの行末を改めてわつちは喜之さんにあづけました。

（一座、啞然とする。――喜之助、面目なげに上氣してうつむく。）

（間。）

（藤兵衛、手を叩いて女中を呼ぶ。――女中、出て來る。）

藤兵衛　あつちの座敷の支度はいゝか？

女中　よろしうございます。

藤兵衛　これが藤兵衛の遊び納め。――喜之助さん。長五郎さん、どうぞ附合つてやつて下さい……（立上る）

（おとま、急に聲を立てゝ泣く。――お八重をはじめげいしや、男げいしや、みんなそのそばへよる。）

（藤兵衛、長五郎、ぼんやり顏をみ交す。――いへば「離れゆく」ものゝさびしさをおの〳〵の身うちに感じながら……。）

長五郎　畜生、またふつて來やアがつた……（窓の外のふる雪に眼をそらす）

――幕――

大寺學校（四幕五場）

人物

大寺　三平　大寺代用小學校長（六十一二）
峰　一郎　同　高等科受持の先生（二十六七）
光長　正弘　同　尋常科受持の先生（五十八九）
玉守　久一　同　新任の先生（二十八九）
高柴　虎夫　祝賀會發起人（學生）
佐々木善吉　同
岩田　清　同
たか子　校長の姪（二十四五）
お　久　たか子の裁縫の弟子
おあき　同
おくめ　同
おたま　同
おさと　同
おゆき　生徒の一人

外に、岩井屋（古着屋の若主人）片倉（骨董屋の若主人）しん馬（落語家）祝賀會來會者大せい。

時　代
明治の末
場　所
東京淺草

第一幕

第一場

大寺學校の教場。――といつても、町中の、あたりまへのうちを二三げんつぶして無理からさうした恰好にした古い建物の一部。十月上旬の曇つた午後。――退けてもうみんなかへつたあと。――當番のものだけ三四人殘つて掃除をしてゐる。間。

峰、階下から上つて來る。

峰　出來たか、掃除？
生徒の一人　もう少しです。
峰　遊んでないで早くやんなさい。
（峰、そのまゝそこに立つ。――黑板の惡戯がきを消したりする……）

（やゝ長き間。）

峰 （……掃除、すむ。）

すんだら歸つていゝ。

（生徒たち、箒や塵拂をしまつたり開けッぴろげたはうばうの窓を閉めたりする。）

光長 （階下から上つて來る） 峰先生……

峰 ……？ （ふり返る）

光長 何とも昨日は……――相濟みません、每度……

峰 何でしたつけか？

光長 いゝえ、わたくしが早くもどつたので。――あとの稽古をまたあなたに……

峰 あゝ。――いゝえ、お易い御用です。（わらふ）

光長 每々、ほんたうに御厄介ばかりかけます。（眼をシヨボ〳〵させる）

峰 それよりいかゞです、御病人は？

光長 有難う存じます。――何分にもこの陽氣で……

峰 いけませんか？

光長 （ほと〳〵したやうに） どうも、その。――因果なそのやまひでして……

（……かへりかけた生徒たち、包をかゝへたまゝ、二人のそのさまを不思議さうにみて立つ。）

峰 何をみてゐるんだ、お前たちは？

（生徒たち、狼狽てゝ階下へ行く。）

峰 お幾つにおなりです、奧さん？

光長 七になります。

峰 と？

光長 いゝえ、四十七に……

峰 お若いんですな、まだ？

光長 （それにはこたへず。――嘆息するやうに） 今年でちやうど九年になります……

峰 九年……？

光長 いゝえ、三十九の秋はじめて患ひつきまして……

峰 で、その間、始終おやすみになつたきり――といふわけでも……？

光長 いゝえ、いつそ夫でゐてくれるとまた始末も好いんですが。――なまじ容體にさしひきのあるだけ。――工合のよいときにはあたりまへの體とかはりません。話をしても分りますし、子供の世話もしてくれますし。――それこそわたくしが少々無理なことを申しても、その無理を默つてわたくしに通させてくれます……

峰 ……（うなづく）

光長 やまひがきざして來るとそれが。――一朝さうなるとそれが何もかも分らなくなります。――子供の見界もつかなくなります。――誰でもそばにゐるものに喰つて

かゝります。

峰　…………

光長　實際、……實際もう恥をお話しなければ分りませんが……

峰　つまりヒステリイの……

光長　そ、さうなんで。——それの悪いんで……

峰　さういふとき、何とかそれを抑へることは出來ないものなんですか？——たとへば、まア、さういつたときの何か藥とか。——または、まア……

光長　さうなんです、いえ、藥といふものを一切飲みません。——何といつても強情を張つて飲みません。——押していへば藥をのませて自分を殺すのかと一層猛り立ちます……

峰　なるほど、そんな風ぢやア……

光長　いろ／＼人がいつてくれますので、お加持もやつてみました、祈禱もしてみました。——いろ／＼信心もしてみましたが、どうもさて、これといふげんが一向みえません。

峰　…………

光長　お醫者も、ありやうは、手のつけようがないといつてゐるので。——校長に、まア、わきでよく面倒をみるより外はない。——さうするよりみちはない。——なまじのことをして、この上やまひを募らせたら、それこそ取返しがつかない。——さういひますので……

峰　…………

光長　（急に）どうも、これは。——とんだこれは愚痴をお聞かせいたして……（さびしくわらふ）

峰　いゝえ。

光長　ついどうもお心やすだてに。——年甲斐もなく。——相濟みません……

峰　（しみ／″＼と）お大ていぢやアありませんなア、しかし……

光長　（さそはれてしみ／″＼と）有難う存じます。——これも、いえ、前生からの約束と思へば……

峰　…………

光長　（階下へこなし。——辭をやゝ落して）これは、しかし、どうぞこゝだけのお話にねがひます。——校長にも、たか子さんにも、かうした深いことはまだ……

峰　大丈夫です、それは。——決してそんなよけいなことは……

光長　あなただけ。——全くこんなお話し出來るのはあなただけで……

峰　それよりも、先生。——さういふことだと、おうちの方がみなさん、あなたのお歸りを待つておゐでゞせう。

光長　それは、もう、わたくしの出たあとは子供ばかりなんで……

峰　でしたら、少しでも早くおかへりになつたら……？

光長　いえ、それがその――實は、今朝ほども、そんなこんなで出て來るのが遲れまして。――校長と、まだ、ほんたうに顏を合せてをらないので……

峰　そんなこと、あなた、どうだつていゝぢやアありませんか？

光長　いえ、でも……

峰　よけいな御斟酌ですよ、それは。

光長　しかし……

峰　かまやアしません。――もし何とかいつたらわたしから校長にさういひます。

光長　尤も、昨夜電報をうつて置きましたから、奉公さきからいまごろ上の娘が歸つてまゐつてゐるだらうと思ひます。――それさへ歸つて來てくれゝば……

峰　それにしたつて、あなた、早くおかへりになるに越したことはないでせう。

光長　それは、まア……

峰　清書の直しがあつて、今日はまだ、わたしはかへれません。――ずつと殘ります。――だから何かあれば代りはして置きます。

光長　では、まア。――とにかく挨拶だけでもいたして……

峰　えゝ。

光長　いろ／＼どうも、――相濟みません……

（光長、階下へ行く。――猫背の、さうでなくてもまろい背中をよけいまろくしながら……）

（間。）

（峰、机のそばに椅子をよせ、抽斗から埃だらけのインクに筆を出す。――片つ方の抽斗からは毛繻子の風呂敷につゝんだ圖畫の清書を出す。）

（……露地の下で、飴屋、チャルメラをふきはじめる。――その、しづかな、泪ぐましい、あてどのない音いろ。）

（間。）

（峰、筆にインクをふくます。――清書を直しはじめる。）

おゆき　（密と下から上つて來る）先生……

峰　（顏を上げて）何だ、おゆきか？

おゆき　えゝ。

峰　何か用か？

おゆき　あのウ、お座の中に忘れたものがあるんですけど……

峰　忘れもの？

おゆき　えゝ。
峰　何を忘れた？——お手玉か？
おゆき　いゝえ。
峰　帶か？
おゆき　いゝえ。
峰　何だ？
おゆき　……(わらふ)
峰　いゝから持つて行きなさい。
(おゆき、いそいで自分の机のそばによる。——蓋をあけて毛絲の編みかけを出し、峰にみえないやうに手早く袂の中に入れる。)
峰　お洒落をしてどこかへ行くのか？
おゆき　えゝ。
峰　どこへ行く？
おゆき　觀音さまへ。
峰　觀音さまへ行くのに、いち〱そんな、いゝ着物を着替へて行くのか？
おゆき　でも、今日は。——今日は菊市ですから……
峰　菊市？
おゆき　えゝ。
峰　それで、今朝、雷門の近所を、菊をもつた人が大ぜいあるいてゐたんだな。——どうするんだ、あの菊？
おゆき　上げるんです。
峰　上げる？
おゆき　上げてべつのを觀音さまからいたゞいて來るんです。
峰　いたゞいて來てどうするんだ？
おゆき　頭痛のおまじなひになるんです。
峰　お前、頭痛もちか？
おゆき　いゝえ、あたしぢやアないんです。
峰　誰と行くんだ？——姉さんとか？
おゆき　いゝえ。
峰　おつ母さんとか？
おゆき　えゝ。——姉さんは加減が惡いんです。
峰　加減が惡い？——またか？
おゆき　えゝ。
峰　どうしたんだ、お前のところの姉さんは？——始終このごろ體ばかり惡いぢやアないか？
おゆき　えゝ……(顏に暗いかげ掠める)
峰　よつぽど惡いのか？
おゆき　いゝえ、そんなぢやアないんです……
(……チヤルメラの音。)
(大寺校長、階下から上つて來る。——袴を脱いだあとで幅の廣い帶をぐる〱卷にしてゐる。)

校長　峰君……

峰　………（向く）

校長　御苦勞さま、遲くまで……

峰　（どつちかといへば無愛想に）　いゝえ。

校長　…………

峰　（さきをくゞるかたちに）　何か御用ですか？

校長　ちよつと君に……

峰　それでしたらお呼び下されば……

校長　いや、それほどの……

峰　…………

校長　すこし君にお願ひがあつてね……

（校長、おゆきのはうをみる、——おゆき、そのまへに階下へ下りてゐる。）

（チヤルメラの音、遠ざかる。）

（間。）

校長　實は野上のことだが……

峰　えゝ。

校長　何か、あの子供、昨日稽古中にしくじりをやつたさうだが……

峰　校長のまへですが、あんな强情な、わがまゝな、素直でない子供もありません。——一度いつか思ひきりいつてやらうと思つてゐました。——ちやうどいゝ機會でしたから……

校長　何をしかし……？

峰　いゝえ、事件そのものはつまらないことで、わたしの一寸階下に下りた間、隣の席の田宮とただ喧嘩をしたにすぎないんですが……？

校長　何でしかし……？

峰　いゝえ、何でといふほどのこともないんで、田宮のもつてるものを野上がみせろといふ、田宮が嫌だといふ。——それがもとでぶつたとか抓つたとか。——結局田宮を泣かしてしまつたので……

校長　で？

峰　それから二人を殘して小言をいひました。——が、いへば、田宮のはうにつみはありません。——ことは野上一人のうへにあります。——田宮をさきに返し、一人にして、それからまた一時間ほどはツきりいつて聽かせました。

校長　…… ……

峰　（いかにもさう感じたやうに）　驚きました、しかし。——驚いたよりもあきれました。——それほどいつても、何とさういつても、決して返辭といふものをしません。——口を結んだなり、それこそ、泪一つこぼしません。

校長　…………

峰　大てい眼に立ちました。——思はず大きな聲も出しました。——が、それでも默つてゐます。——默つて、ぢッと、しまひには反抗するやうにこつちの顏を睨めつけます。

校長　…………

峰　微塵も子供らしいところがありません。——子供らしい可愛げといふものが全くありません。——畢竟は横着。何をしてもいゝ、何をしたつて大丈夫だ。——多寡をさうくゝつてゐるのがありありみえます。（わざと）どういふ理由か知りませんが？

校長　…………

峰　が、あゝいふ子供のゐることは外の子供たちに決していゝ影響を與へません。——何とか、これは……？

校長　いえ、それは。——それはわたしもかね／″＼心配してゐる。——何とかしたいと思つてゐる……

峰　…………

校長　何としても、しかし、うちで我儘一杯にさせて置くもので……

峰　…………

校長　いえ、實は。——昨日のことについても。——それについても昨夜、わたしのところへさういつて來た……

峰　何を……？

校長　それが、いゝえ、當人うちへ泣いてかへつたのださうで。——いくらだましてもだまらない、わけを聞いてもいはない。——何かいへばいふほど嵩にかゝつて泣く……

峰　そ、さういふ子供です……

校長　で、まア、いろ／＼にしてやッと口をあかせると、友だちと喧嘩をして殘された。先方もわるいのに、先生、先方は叱らないで自分ばかり叱つた。先生は自分を憎んでゐる……

峰　憎んではゐません。——憎んではゐませんが……

校長　いゝえ、まア、當人がさういつた。——そのくらゐなことあの子供ならいひ兼ねない……

峰　…………

校長　で、さきのいふのに……

峰　一體だれが來たんですか、そんなことをいつて？

校長　母親が自身に出向いて來た……

峰　あの「魚吉」のかみさんがですか？

校長　さうなんだ。——それでこまつた……

峰　…………

校長　君は、まア、御存じあるまいが、一本氣の、感情の強い。——一旦かうと自分に思ひ込んだら人のいふことなんぞ耳にもかけない。——さういつた質の……

峰　…………

校長　だから、それは違ふ、それはさうぢやアないと此方で理合をいつても、あとでは分る、が、そのときには決して飲込まない。――それにいつもこまる……

峰　…………

校長　といつて決してわるい人ぢやアない。――勝氣な、親切な。――そこは江戸ッ子だから……

峰　（遮るやうに）で、さきで、何といふんですか？

校長　いゝえ、それが、當人がいやだといふから氣隨にさせる。――當分氣のすむまでやすませるから。――と、まア、さういふんだが……

峰　（冷かに）そんなことだらうと思ひました。

校長　えッ？

峰　いゝえ。今日、あの子供、缺席でしたから……

校長　（やゝいひ兼るやうに）で、一つ。――そこで一つお願ひがあるんだが……

峰　何でせうか？

校長　と、さう改まつていはれるとこまるが。――どうだらう、――君、野上のうちのものに逢つてくれまいか？

峰　と、それはッ

校長　いゝえ、まア、一寸顏を出してくれまいか？

峰　顏を？

校長　すまないが、君……

峰　と、何ですかッ……わたしに野上のところへ詫びに行けと被仰るんですかッ（色を作す）

校長　（狼狽てゝ）そ、さうぢやアない。――さういふ意味ぢやアない。――さう取られちやア困る……

峰　でも、あなた……

校長　いえ、さうぢやアない、わたしのいふのは。――わたしのいふのは双方に、――双方に、まア、いへば誤解……

峰　誤解？

校長　いえさ、まア、さきにも思ひ違ひがあれば此方にも……

峰　此方にはありません。――此方には誤解も思ひ違ひもありません。

校長　それは、まア、さういへばさうだが……

峰　ありません。――わたしのはうには決してありません。――そんなことのある筈がありません。

校長　でも、これ、さきにいはせると……

峰　さきはさうでせう。――さきにしたらさうでせう……

校長　だから……

峰　が、そんなことの。――つもつてもみて下さい。――そんな不足がましいことのいつて來られる理由がどこに

ありますーーそれからしてさきは間違つてゐます。

校長　間違つてゐる。ーーそれだけに。ーーさういふ相手だけにわたしは……

峰　…………

校長　まア、わたしにすると。ーーわたしにするとことを大きくしたくないと思ふので……

峰　さういふ必要がありませうか？

校長　そ、さういつたら、峰君、身もふたもない。

峰　なくつていゝと思ひます。ーーあの子供の、あのおいとゝいふ子供の、あの強情な根性の悪い、可愛げのないところを、この機會に、どこまでもわたしは親たちに知らせてやりたいと思ひます。

校長　しかし、それは。ーーそれをするには場合が悪い。

峰　どうしてゞせう？ーーこの機會といふくらゐです、わたしはさう思ひません。

校長　でも、君、田宮のおてるといふものが一方にゐては……

峰　ゐてもいゝと思ひます。ーー田宮といふ子供も、體ばかり大きくつて、だらしのない泣蟲の、始末にいけない子供ですけれど、昨日は、あの子供に、何の罪科もありません。

校長　そ、そこだ、君。ーー野上のはうでは決してさう思はない。ーーだからいけない……

峰　と、あなたは野上のはうからいつて來たことをそのままお取上になるのですか？

校長　いえ、さうぢやない。ーーさういふと角が立つ……

峰　でも、あなたは、野上のはうのことばかり被仰つて、わたしのはうのことは。ーーわたしのはうからは何にも聽いて下さらないぢやアありませんか。

校長　…………

峰　野上のはうのいふことだけ聞くと、わたしが何か、片手落のことでもしたかのやうにしかとれません。ーー以ての外です……

校長　が、峰君、ーー君のやうにさういつても。ーーすこしは、君、わたしの立場も思つてくれないと……

峰　立場？

校長　いろ〳〵、君、わたしにすると。ーーいろ〳〵そこにうるさいことがあるんでね……

峰　しかし、それは、　被仰るのは野上に對してだけの立場ぢやアないでせうか？

校長　野上に對してだけの？

峰　さうです。ーーほんたうのあなたの立場ぢやアないと思ひます。

校長　それは、君……

峰　ほんたうのあなたの立場となれば、さういふ不足がましいことをいつて來たものに向つて、ことさら、ことの是非をあきらかになさるべきだと思ひます。

校長　…………（

峰　かういつては失禮ですが、あなたはすべてにあんまり御斟酌をなさりすぎると思ひます。——餘計それでおいとのやうな子供はつけ上ります……

校長　（否定するやうに）しかし、そんなことは……

峰　いゝえ、それはさう被仰れないと思ひます。——はッきりこれだけはいへます……

校長　それはさう理窟をいへば……

峰　理窟ぢやアありません、事實です……

校長　でも、君……

峰　…………

校長　（強ひてわらふ）それは、まア、君にしてもいろいろいひたいことはあるだらうが。——まア、そこを。——そこを一つ……

峰　…………

校長　とにだらう、君……？

峰　…………

校長　ふせうしてもらへまいか、今日のところだけ？

峰　ふせうして、しかし……？

校長　だから、ふせうして、わたしの顔を立てゝもらへないだらうか？

（間。）

峰　折角ですが……

（峰、急に立上る。——手早く淸書の直しかけを風呂敷につゝむ。——インクと筆を抽斗に入れる……）

校長　峰君……

峰　失禮します。（かまはず机のそばを離れる）

校長　君、峰君……

（校長の再びさういつたとき、峰、すでにもう階下へ下りてゐる。）

（間。）

（露地の下を研屋とほる。——「はさみ、庖丁、かみそり研ぎ。——はさみ、庖丁、かみそり研ぎ……」とゆつくりした調子に呼んで行く聲……）

（校長、ぼんやり立ちすくむ。——人知れず吐息をつく……）

（やゝ長き間。）

（階下から、男と女の、にぎやかに入交つた聲きこえて來る。——間もなく、たか子をさきに、高桑、佐々木、どや〳〵といふ感じにあがつて來る。）

たか子　高桑さんと佐々木さんがいらつしやいましたわ…

：（といひかけて）あら、峰さんは？（あたりをみまはす）

校長　（不機嫌に）歸つた……

たか子　あら、いつ？

校長　いまだ。

たか子　ちツちも、あら、知りませんでしたわ。――いつ玄關を出て行つたらう？――（高桑に）ねえ、あたしたち氣がつきませんでしたわね……

高桑　（うなづく）えゝ……

たか子　必とあたしたちが話をしてゐたんで默つて歸つたんですわ。――必とさうですわ。――ほんとにへんな人……

高桑　先生、御趣意書の下書が出來たんですが……

校長　あゝ、それは……

高桑　みていたゞいて、すぐでも今日、印刷屋へまはさうと思ふんですが。――さうしないと間に合ひませんから……

校長　………

高桑　（佐々木に）君……

（佐々木、ふところから原稿用紙二三枚に書いたものを出す。――高桑、うけとつて校長にわたす。）

たか子　（そばから）まア綺麗！――まるで女の書いたやうな字……

高桑　（如才なく校長に）記念といふ字を入れる說と入れない說と兩方あるんですが、これはしかしどつちが宜しいでせう？

校長　さア……

高桑　入れると大寺小學校創立二十年記念祝賀會。――そのはうがはツきりしますが長すぎると思ひます。――たつた二字でたいへんしつツこくなります。

校長　少しでも、それは、いひ易いはうがいゝでせうね。

高桑　（佐々木をふり返つて）そら、君……

校長　しかし、わたしは、眼鏡を……（袂をさぐる）

たか子　階下ぢやアありません？

校長　と、思ふが……

たか子　とつて來ませうか？

校長　しかしこゝにゐたんではどのみち仕方がない。――階下の敎場へ行かう……

たか子　（高桑と佐々木に）そら御覽なさい。――だから、あたしが、どうせ階下へ來るんだから呼んで來て上げませうつていふのに無理に來るつていふんですもの。

高桑　だつて大せいゐるのに……

たか子　いゝぢやアありませんか、大せいゐたつて。――いくらゐたつて、みんな、お針の人たちばかりぢやアあ

りませんか。――(わざと) 大丈夫よ、とつて喰べようとは誰もいはないから……

高桑 いゝえ、それアね、とつて喰べられても構ひませんがね……

たか子 あれだ!

校長 (さうしたとりやりを聞くに堪へないやうに) と、とにかく階下へ行かう……

(校長、自分からさきへ立つて階下へ行く。――たか子、高桑、佐々木、そのあとにつゞく。高桑、密とたか子のうしろからいたづらをしかける……)

第 二 場

大寺學校の住居。――といつても教場の一部につゞいた六疊と四疊半ほどの二タ間。――六疊のはうは校長の寝所。(但し、晝間は、たか子がそこで四五人の裁縫の弟子たちをとつてゐる) ――四疊半のはうには、茶簞笥だの、長火鉢だのが置いてあつて臺所につゞく。――玄關へのかよひ路に狭い廊下がついてゐる。

前の場と同じ日の午後八時すぎ。――たか子、座敷の眞ん中に鏡臺を出して髪を結つてゐる。お久、そばにすわつてそれをみてゐる。――教場のはうに向いた障子に燈火のかげのさしてゐるのが、校長の「夜學」の子供たちを教へてゐることを語つてゐる。

……細々とさびしい蟲の音。

やゝ長き間。

……たか子、髪を結ひをはる。

たか子 あゝ、やつと出來た。――すぐのつもりが……(柱に懸つた時計をみて) あら、八時すぎよ、もう……

お久 えゝ。

たか子 戯談ぢやアない、一時間の餘もかゝつたわ。

お久 眞逆……

たか子 いゝえ、かゝつたわよ。――あんたの來たの、まだ、七時だつたもの……

お久 えゝ、でも……

たか子 あんまり、はじめ、お饒舌(しやべり)したのがいけなかつたんだわ。――あれで手がお留守になつたんだわ。――どう……? (お久にみせる)

お久 よく出來ましたわ。

たか子 さうかしら?――自分ぢやア何だか……(はうばう觸つてみる)

お久 氣に入りませんか?

たか子 駄目ね、矢つ張。――時間のかゝるときはかゝるだけのわけが矢つ張あるんだわ。――お饒舌したからばかりぢやアないわ。――こゝんとこ、いろ/\じれつた

い、くさ／＼することばかりあるもんだから……

お久　………

たか子　いゝわ、明日また結ひ直すから……（が、未練になほ鏡の中をのぞく）

お久　以前、よく、圓髷に結つてらしたぢやアありませんか？

たか子　よくでもないけど……

お久　またお結ひになつたら？――よく似合ひますわ。

たか子　とき／＼はあたしも結ひたいと思ふけど。――でも、先生が嫌な顔をするから……

お久　どうしてゞせう？

たか子　どうしてだか……

（たか子、油の手をふく、――散亂つた鏡臺のまはりを片づける。――とも／＼お久も手傳ふ。）

（間。……蟲の音）

たか子　さ、行かう。――お待ち遠さま……（立つ）

お久　お師匠さん、このピンは？

たか子　あゝ、それ。――いゝわ、鏡臺んなかへ入れといて頂戴……

お久　ぢやアこゝへ入れときますわ。（抽斗をあけて入れる）

たか子　あんた、お湯の道具は？

お久　あつちにあります。（臺所のはうへこなし）

たか子　ぢやア、もう、出かけていゝわ。――あたし、すぐだから……

お久　ぢやアさきへ出て待つてます。

（お久、臺所のはうへ出て行く。――たか子、鏡臺をいつも置いてある位置に直したあと、簞笥から羽織を出して着替へる。）

たか子　（教場のはうに向いた障子をあけて）ぢやア、一寸、お湯に行つて來ますから……

（たか子、そのまゝ臺所のはうへ出て行く。）

（やゝ長き間。……蟲の音）

（教場のはうに「夜學」の子供たち「二三人」のかへつて行く物音きこえる。――しばらくして教場のはうに向いた障子の燈火のかげ消える。――校長、入つて來る。）

（間。）

（校長、机のまへにすわる。――入念に墨をすり出す。――ほまち仕事の、琴の目ろくを書く仕事にとりかゝる。）

外の聲　御免……

校長　はい……

（障子あく、――廊下に、光長、立つてゐる。）

校長　お入り……

光長　へえ……

（光長、入つたあとを閉める。――校長、筆をおいてむき直る。）

光長　行つてまゐりました。

校長　御苦勞でした。――（不安げに）どうでした？

光長　どうも、いえ、分りにくいところで……（わらふ）

校長　（けゞんらしく）番地をしかし……？

光長　その番地を、いえ、さがしますのに大骨を折りました。――實は、わたくし、あちらのはうは始めてゞ。――それには、小梅といふところを、あんな廣いところと思ひませんでしたので……

校長　わたしもよくは知らないが……

光長　いつそ土手から入ればよろしかつたのを、正直に水戸さまの裏へまはつたもので、暗さには暗し、擾蓉見當がつきません。――やつと煙草屋をさがして番地を訊くと分らないといひます。――かういふ植木屋はないかといふとこゝいらは植木屋だらけだから分らない。――さういふ覺束ない返事で……

校長　…………

光長　仕方なく、今度は、植木屋でさがしました。――同業者をそれからそれとたづねました。――それでやツと知れましたが、何の、あなた、まるでそれまで見當のちがつたところをあるいてをりましたんで……（わらふ）

校長　で、ゐましたか、峰君は？

光長　をりました。――ちやうどいゝ鹽梅に、いま歸つて來た……といふところで……

校長　といふと？

光長　學校のかへりに、深川の、もとの主人のうちへまはつたとかで……

校長　もとの主人？

光長　辯護士とかいつてをりました。

校長　で、してくれましたか、話？

光長　いたしました。――よくあなたのお心もちを傳へました。

校長　で、何と……？

光長　へえ、峰君よく分つてくれまして……

校長　（ホツとしたやうに）分つてくれた？

光長　へえ、自分もわるかつた。――自分もいひすぎた。――たとへ何であらうと校長にあゝ言葉を返すといふことはなかつた。――君からよく校長にお詫してくれ。――さういつてをりました。

校長　いえ、そんなことは。――もと〳〵こつちも無理をいつたんだから……

光長　いえ。

校長　で？

光長　しかし。――勿論、いえ、お詫をしてくれといふ位で、そのことについては何とも思つてをりません。――何ともゝう思つてはをりません。――が、先刻その。――――先刻學校を出たときはわけもなく料簡がいきり立つてゐた。……と、峰君、笑つてさう申すんで、そのつまりいきり立つたまぐれ、まゝよ、二度ともう學校の閾はまたがない。――で、すぐ、深川の、もとの主人のうちに驅けつけて實はこれ〱。――氣の早い話、身のふり方をたのみましたのださうで……

校長　…… ……

光長　と、さやうで、では、事務所に缺員がある、お前ならいゝ、おれ入れてやる、明日からやつて來い……

校長　……

光長　と申すのが、いろ〱聞きますのに、主人といふ係いくらか縁も引いてをりますんださうで、まへにそこを借ましたのも、申せば、峰君、自分の勝手に、一人で當分勉強したい。――で、こなたの御厄介になりましたやうなわけ。――從つて、歸るのにも、何のいさくさもないわけで……

校長　…… ……

光長　校長の折角さう被仰つて下さるのを。――折角のその御好意を無にいたすやうで何とも相濟まないわけですが。――といつて、その、これを峰君、わたくしに。――――それはこまる。わたしにそれは取次げない。――固くさう申したんですが……

校長　………

光長　ここにかく御覽をねがひます……

（光長、峰にことづかつて來た封書を校長のまへに置く。――校長とり上げる……）

光長　辭職といふことは、この場合、何としてもおだやかでない。――世間の思惑もある。――くり返しさう申したんですが、そこは若いだけ、一旦かうと思ひこむと……

校長　………

光長　いづれお目にかゝつてお詫もいたします。……これまでのお禮もいろ〱申述べます。――ついしてかうしたことにはなつたものゝ、決してそんなわけではない、いはば一身上の、いつまで自分も安閑としてはゐられない。――あと二三年にどうしても試驗をとらなければならない。――さうしなければ郷里の親に顏むけが出來ない。――それにはちやうどいゝ機會だから……

校長　………

光長　さういはれますと。――峰君のお父さんとわたしと

は同年で……

校長　…………

光長　わたくしにいたすと、しかし、折角おつかひに立つて甲斐のないことになりまして。――何とも。――何とも面目ございません……

（間。）

校長　いえ、さういふことなら。――仕方がありません。

（峰の辭職届を封筒のなかにまた入れる）

光長　へえ。……

校長　峰君の、正直な、生一本な氣性を知りながら今日のやうなことをいつたのがそも／＼の間違ひ。――峰君に愛想をつかされても文句はいへない。――峰君につみはない……

光長　（もち／＼と）さう被仰られると、しかし、わたくしの昨日早くかへらしていたゞいたのがそも／＼の間違ひで。――わたくしさへ早くかへらなければ、峰君、わたくしの代りに階下へ下りることもなく、峰君が階下にさへ下りなければ、二階で、野上と田宮とさうした喧嘩をすることもなかつたわけで――わたくしのために飛んだ……

校長　そんなことをいつたら限りがない。――そんなことをいつたら、野上のうちとわたしとの關係。――それを峰君にわたしの話さなかつたのが一番わるい……

光長　でも……

校長　これは、いえ、あんたでも御存じない。――野上のうちの先代とわたしとは、その以前、一丁目の紺屋の露地で、隣同士同胞（きやうだい）のやうにして十年あまり暮した……

光長　……？

校長　そのうち向うも表店へ出る、こつちもそれまでの寺小屋を學校にする。――親類にならうと兩方で約束した――だから先代の死んだときわたしは施主に立つた……

光長　……？

校長　さういふ古い附合。――が、向うは年々にのだつばかり、こつちは年々に衰微するばかり。――それにはその古い附合を知つてるものがだん／＼なくなつた。――さうなると、以前を知つてるものがみると不思議にみえる。――そとでも、知らないものがみればあたりまへのこれだ。――峰君がおいとゝいふあの子供の我儘（わがまゝ）に腹を立てたのもつまりはそれ……

光長　いえ、それは――野上のうちと特別御懇意になすつておいでのことはわたくしでも承知してをります。――が、さういふしかし御關係とは。――微塵わたくし……

校長　いゝえ、それは、たか子も知らない。野上のうちのものも誰も知らない。――知つてゐるのは――多少でも

知つてゐるのは野上のいまの當主だけです……

光長　…………

校長　といへば。――といへば、まア、大てい分つてもらへると思ふが。――いろ／＼そこに面倒なことがあつてね……

光長　……（うなづく）

（間。）

（……時計、九時をうつ。）

校長　（心もちをかへて）　幸ひ明日は日曜でもあり。――何とかあとの始末はつけませう、明日のうちに……

光長　では、また、明朝でもわたくし一寸うかゞひます。

校長　御苦勞ついでに、一つ、さうして下さらんか。――御病人のあるところをお氣の毒だが……

光長　いゝえ、病人のはうは、先刻もう娘がかへつてまゐりましたから……

校長　といつて外に相談相手はなし……

光長　おそれ入ります。――では、今晩はこれで……（いひかけて思ひ出す）　あゝ、それから圖畫の清書を……（障子のかげから新聞づゝみをとり出す）――あとに、まだ、作文の直しが一つ殘つてをりますさうですが、それはいづれあとからお屆けいたすさうで……

校長　あゝ、さうですか……

光長　お邪魔いたしました……

校長　生憎、たか子、湯にいま行つたもので。――お茶も上げないで……

光長　いゝえ、もう。――實は、かへりに、峰君と一寸蕎麥を喰ひまして……

校長　道理で、みえたとき、すこし御機嫌だと思つた……

（さびしくわらふ）

光長　（やゝ狼狽て）　いゝえ、そんな。――そんなに決して……

（光長、廊下に出る。――校長、ともにおくつて出る……）

（間。）

（校長、歸つて來る。――圖畫の清書の直しをあけてみる。――すぐ、また、もとのやうに叮嚀につゝんで棚のうへに置く。――机のまへにすわる。）

（間。）

（……このうち始終蟲の音。）

（臺所のはうから、たか子、濃くつけた白粉の顔はればれと入つて來る。）

たか子　たゞいま……

校長　…………

たか子　ぽつ／＼降つて來たわ。

校長　…………

（たか子、先刻のやうにまた鏡臺を出して來る。――そのまへにすわる……）

たか子　夜行くとそれアこむんですもの、お湯。――おちおち洗つてなんぞゐられやアしない……

（校長、しづかに筆を行る。）

（……蟲の音。――雨の音だん〳〵高くなる。）

――幕――

第二幕

大寺學校の教場。――たゞし階下。――廣い、のべたらな場所を、黒板でたゞいくつかに仕切つたその一部。――階上（第一幕第一場）と違ふところは、稽古用の大な算盤だの、オルガンだの、掛圖だの、尋常科らしい感じのするものがいろ〳〵配置されてゐる。

十月下旬の晴れた午後。（前まくの十日あまり後）――

佐々木、オルガンにむかつて一人で「越後獅子」を彈いてゐる。――窓の外に日の光があかるい……

……たか子、入つて來る。――徐と佐々木の後に立つ。

間。

佐々木、彈き止めて、ふと、ふり返る。

たか子　うまいわね……

佐々木　（やゝ含羞んで）戲談でせう。

たか子　いゝえ、ほんたうに。――誰かと思つたわ。――習つたの、あんた？

佐々木　習ふもんですか、こんなもの……

たか子　ぢやアどうしてさう彈けるやうになつたの？

佐々木　どうしてつて……

たか子　あたし、田舍から來た當座、どうかして彈けるやうになりたい。――さう思つて隨分やつてみたわ。――でも、駄目。――いくら教はつても、教はつたそのときだけで、あくる日になるとすぐ忘れてしまふの。――「君が代」を覺えるのに一ト月の餘もかゝつたわよ……

佐々木　何か、一つ覺えれば、あとは……（いひながら「君が代」の中ほどまで彈いてみる）

たか子　そらね。――なか〳〵さういふやうに。――さういふやうにあたしたちがやつたんぢやア行かないんだから嫌になッちまふ……

佐々木　コツですよ。――コツさへ飲込めば……

たか子　だつて肝心の指がいふこと聞かないぢやア……

佐々木　それだつて始終やつてれば自然とうごいて來ますよ。

たか子　器用なのよ、あんたは。――何でも、つまり、手

さきですることが。――畫だつてあゝうまいしさ……

佐々木　好きなんですよ、それより……

たか子　もつと、何か、彈いて御覽なさいよ。

佐々木　何を……？

たか子　何でもいゝわ、面白さうなもの……

佐々木　何がいゝだらう？

（佐々木、また、オルガンのはうを向く。――すぐに「春雨」を彈きはじめる。）

（間。）

（校長、玉守をつれて入つて來る。――あとに、光長、從ふ。――佐々木も、たか子も氣がつかない。）

校長　（不機嫌に）たか子……

たか子　えゝ……（何ごゝろなくふり返る。）――玉守をみて一寸てれる。）

（……佐々木、やゝ狼狽てゝ、彈き止める。）

校長　あつちへ行つて茶を淹れかへときなさい。

たか子　（つんとした感じに）はい。

（たか子、「御免な――」と玉守のわきを通つて出て行く。）

校長　（玉守に。――機嫌よく）こゝが三年に四年。――光長君のうけもちです。

玉守　（きどりをみせて）はゝア……

校長　男女合せて、三年が十七人の、四年が十五人……だつたね、君。（光長をふり返る）

光長　さやうで……（うなづく）――この間、三好金次郎の同胞と高橋ふみとが退きましてすから……

校長　（玉守に）矢つ張わたしどもへ來る子供は、古くからこの土地にゐついたもの。――それこそ親の代からわたしを知つてる……といつた工合のうちのものが多いんで……

玉守　ふ、ふん……

校長　それがこゝんところ、市區改正といふ奴で、さういふ古い手合がだん／＼外へ引越して行きます。――さうなると、自然。――いゝえ、なかには強情に、知らないところへかよはせては子供が可哀さうだ。――さういつて、越したさきから、遠いのをいとはずいまだに通はして來る親たちもありますが……

玉守　（ハンケチを出して口のまはりをふきながら）しかし。――極めてしかし、家族的な……

校長　それは。――それは、もう、家族的といふことはわたしのむかしからの念願で。――その點からいふと、むやみに大ぜいの子供を誰でもよしにあづかるより氣ごゝろの知れた、すこしの子供の面倒をみるはうが、どうもほんたうのやうに……

光長　一時のやうぢやア。實際。——三年と四年だけでも八十七人をりましたんですから。——とても、あゝなると、一人ぢやア手がまはり切りません……（理由もなくわらふ）

校長　あの時分はうちばかりぢやアない。——宮部でも、紅雲でも、毎年申込を斷るのが一ト骨だといつたもんだ……

玉守　算盤をおやりになるんですか？

校長　これがわたしところの味噌でしてね。——時勢遅れだといふものもありますが、何分にもこのあたり、商人やの多いことで……

玉守　なるほど……

（たか子、かへつて來る。）

たか子　よろしうございます。

校長　ぢやア、まア、あつちへ……

（校長をさきに、玉守、光長、去る。——たか子、殘る……）

佐々木　何です、あれ？

たか子　今度來ることになつた先生よ。

佐々木　あゝ峰さんの代りに……

たか子　えゝ。

佐々木　おッそろしい、まア、あたまを光らしたもんだな。

たか子　早稻田にゐたんですとさ。

佐々木　（信じられないやうに）早稻田に？

たか子　さういつて光長さんが連れて來たんですわ……

佐々木　ほんとかしら？

たか子　大へんいゝとこの息子さんなんですとさ。——それで何にもしなくつてもいゝんだけど、遊んでゝも退屈だから……

佐々木　僕ア峰さんのはうがいゝなア。

たか子　あんたは知らないのよ。——知らないからさういふのよ。——あんな、あんた、强情な、へんくつな分らずやつてあるもんぢやアないわ。

佐々木　でも、あたまを短く刈つた、あの、氣取つたところのちッともない、厭味のない。——小學校の先生は、矢つ張、あゝいふはうが僕アいゝな。

たか子　出來ないのよ、あれは。——したくつても出來ないからあゝ構はないのよ。——若いんですもの、峰さんだつて。——出來れば、それは、いくらだつてお洒落することよ。

佐々木　侮辱ですよ、それは。——可哀想ですよ、さういつちやア……

たか子　いゝえ、さうよ。——男つてさういふものよ。

佐々木　ぢやア、あなたは、袴をあゝずる〳〵引きずつた

白い足袋を穿いた。——あゝいふにやけた恰好を好いと思ふんですか？

たか子　好いとも思はないけど。——でも、何よ、にやけてみえるのは色が白いからよ。

佐々木　浮氣なんだなア、たか子さんは……

たか子　あら、どうして？

（……そのすこしまへより聞えてゐた物産やの拍子木の音だん／＼近づいて來る。——それと一しよに「有難う。——有難う。——蟻が十なら、みゝずが二十、蛇が三十五で嫁に行く」とくり返してはやす滑稽な賣聲がだん／＼はッきり聞えて來る。）

たか子　物産やが來たわ。（窓のそばへよる）

（ともに、佐々木、さそはれてそばによる。——二人、外をみて立つ。）

（間。）

（高桑、入つて來る。）

高桑　（あたりをみまはして）岩田、まだ、來ないか？

佐々木　（ふり返って）まだ……（窓のそばを離れる）

高桑　何をしてやアがるんだらう、彼奴？——三時までに必と！——あんなに固く自分からいつときながら。——四時ぢやないか、もう……（いそがしさうに時計をみる）

たか子　いらつしやい。

高桑　今日は。——（佐々木にまた）それから岩井屋さん來なかつたか？

佐々木　岩井屋さん？——いゝえ……

高桑　片倉さんも？

佐々木　來ない。

高桑　可笑しいな。

佐々木　來ることになつてるの？

高桑　なつてるんだ。——昨夜、仲見世で、岩井屋さんに逢つたから、明日いよ／＼プログラムを拵へます。もし好かつたらおいで下さい。——さういつたら、外にもいろいろお打合したいことがあるから、では片倉をさそつて三時ごろうかゞひます。——はッきりさういつたんだ……

たか子　おやアみえますわ、もう。——あの方たちなら大丈夫ですわ。

高桑　けど、たか子さん、前景氣甚だいゝですよ。——いまゝで、岩井屋さんの、發起人になつてもらひにあるいたところではどこでも喜んで、これはいゝこつた、是非それは骨を折らう。——みんなさういつたさうです。——だから、早くプログラムを拵へて切符を賣りにかゝれば五百や六百はすぐに捌ける。——岩井屋さんも大乘氣で……

たか子　だつて、そんなに、五百人も來たら入るところがないぢやアありませんか？（可笑しさうにわらふ）

高桑　それア入りますよ。――入れてみせますよ。

たか子　だつて……

高桑　細工はりう／＼仕上を御覽じろ。――それより賣店はいゝんでせうね――やつてくれるんでせうね？

たか子　えゝやりますわ。――そのつもりでみんなにもうさういひましたわ。

佐々木　なんと何を賣るんです？

たか子　珈琲に、カステラに、お煎餅。――けどねえ、高桑さん……

高桑　……？

たか子　珈琲より、あたし、この學校の人たちなら甘酒のはうがよかアないかと思つて。――ハイカラすぎるわ、珈琲は……

高桑　だつて大へんでせう、甘酒は？

たか子　あら、珈琲のはうがよツぽど大へんだわ。――第一道具だつてありやアしませんわ。

佐々木　いつそ蜜豆をやつたらどうです？

たか子　いゝえ、お玉ちやんなんかしきりにさういふのよ。――自分たちが好だもんだから……

佐々木　でなければ、ゆで小豆……

たか子　あら、ゆで小豆は……（輕蔑するやうに）

高桑　まア、何でもいゝから儲けてさへくれゝば。――プログラムには、たゞ賣店の設備あり。――さうとだけ書いて置きますから……（ふところからプログラムの原稿を出して鉛筆で書入れる）階上、賣、店、の、設備、あり……

たか子　みんな、お揃ひに、赤い襷をかけるつもりですわ。

高桑　（それにはこたへず）それから三曲合奏のことはどうなつたでせう？

たか子　あゝ、それは、お久さんとこまで返事が來ることになつてるんですけど。――生憎今日はお休みで。――明日ぢやアいけません？

高桑　たしかにやつてくれることはやつてくれるんですね？

たか子　えゝ、それアもうやることは。――たゞ三味線を彈く人がきまらないだけなんですわ。

高桑　それもぢやアよし、と。――（鉛筆で机の緣を叩きながら）あゝさうだ。――おゆきちやんて子がゐますね？

たか子　おゆきちやん？――あゝ藤木の……？

高桑　苗字は知らないけど……

たか子　階上の二年にゐる、音無しい、可愛いゝ顏した子

ぢやアありません？

高桑　えゝ、さう……

たか子　ぢやアさうだわ。――藤木おゆきちやんですわ。

高桑　あの子、活人畫に出てくれないでせうかね？

たか子　活人畫の何に？

高桑　二つあるんです、趣向が。――どつちでもいゝんです。――一つは太田道灌の、七重八重花は咲けども山吹の。――一つは五條の橋、辨慶と牛若……

たか子　あの子は、あれで、踊もならつてるんですわ。

高桑　（念を押すやうに）さうでせう？――（わが意をえたやうに）だらうと思つたんだ……

たか子　（やゝ嫉妬に似たものを感じて）眼が早いのね、しかし……

高桑　な、なぜです？

たか子　いつめつけたの、あの子を？

高桑　それア、もう……（いひかけて立直る）だが、どうでせう？――出てくれるでせうか？

たか子　先生からいつてもらつたら出るでせう。

高桑　（眉を顰めるやうに）先生から？

たか子　先生もあの子が好きなのよ。――悧巧もんだから、あの子、外のことでなし、學校のためだから。――先生からさうでもいはしたら嫌とはいはないでせう……

高桑　ぢやアたのんで下さいな。――さういつて先生にたのんで下さいな。

たか子　あら、あたしから？

高桑　此方からそれアいつてもいゝけれど、此方からいつて、もし、それアこまる。――さうでもいはれたら、あなた……

たか子　そんなことをいふわけありませんわ。

高桑　いゝえ、いひます。――必といひます。――さうまでいはなくつても必と何とかいひます。

たか子　さうかしら？

高桑　へんですよ、先生。――何だか角があります、われわれに。――（佐々木に）さう思ふだらう、君だつて？

佐々木　（たか子に）僕たちのしてゐることがよく分らないんぢやアないんですか、先生に？

たか子　（やゝ狼狽てゝ）そんなことありませんわ、分つてますわ。

高桑　今度のことについて、だれより一番熱心でなくつちやアいけない先生が一番不熱心ですよ、しかし。――冷淡すぎますよ……

たか子　いゝえ、それは。――性分よ、それは。――いくらお肚ん中でうれしいと思つてもそれを顔にだつて出せないのよ、先生は。――だから、なほのこと口に出して

……

高桑　いゝえ、それア知つてます。――知つてますけど……

たか子　それには、こゝんところ、峰さんのことなんかあつていろ／＼ごた／＼したんでせう。――それでいくらか機嫌も悪いんです。――だから、そんな……

高桑　張合がありませんよ、しかし……

たか子　いゝえ、張合がないといへば、峰さんの止したことでもあたしにはこれッぱかりもいはないんですものね。――月曜にも來ない、火曜にも來ない。――いつにも休んだことのない人が可笑しいと思つて訊くと、うむ、峰君はうちを止した。――あたしのはうからさういはなかつたら、新しい先生が來たつてあたしには何ともいはないつもりだつたんですよ。――一しよのうちにゐたつてさうですもの。――たいていそれア嫌になるわ……（さういつて密とうしろをふり返る。）

（途端に、岩田、いそいで入つて來る。）

岩田　遲くなつた、すまない、すまない……

高桑　何をしてゐるんだな？――三時つて約束ぢやアないか……

岩田　だからすまないつていつてるぢやアないか。――ぐづぐづいふなよ……

高桑　でも、君が早く來てくれなければ、プログラムのきまりがいつまでもつかないんぢやアないか……

岩田　此方だつて、いまゝで、そのために方々あるいて來たんぢやアないか。――相手は藝人だ、さう／＼思つたやうに右から左へ話のきめて來られるもんぢやアねえ……

高桑　ぢやア、ちやんと、話はきめて來たんだな？

岩田　きめて來たか來ねえかはッきり聞いてみたらいゝだらう……

高桑　（急にいんぎんに）ど、どうぞ。――どうぞこちらへ……

岩田　（つんとした感じに）ふざけるねえ……

高桑　（岩田のそばへよつて）すまなかつた。――すまなかつた、兄哥。――腹も立たうが、まア、堪忍してくんねえ……

岩田　うるせえな。――（たか子に）今日はしかしいゝ天氣ですよ、外は。――風はなし、あッたかだし、あるくのには持つて來いの日だ……

たか子　かういふ日どッか遠くへ遊びに行つたらいゝでせうね。

佐々木　（歎息するやうに）これなら今日、寫生に行けばよかつたなア。――よッぽど、先刻、さう思つたんだけど……

高桑　これからは、もう、かういふ天氣はザラだ。――秋

空晴れて氣は清く、だ。――會がすんだら、一日、みんなで慰勞會の代りにどッかへ遠足しようか？

岩田　うん、それはいゝ。――家ん中で茶話會をやつたつてつまらない。――（たか子に）さうしたら一しよに行きませんか？

たか子　行きますわ　――さそつてさへくれゝば行きますわ。

岩田　あなたが行けば外の人たちだつて行くでせう？

たか子　それア行きますわ。――お久さんだつて、おあきちやんだつて、喜んで行きますわ……

高桑　（わらつて）必と、それだと、先生から樽が出るから……

たか子　あら、どうして？――だつて大せいで行くんでせう？

岩田　關係者みんなで……

たか子　そんなら樽はないぢやアありませんか？――何かいつたら一しよに連れて行けばいゝぢやアありませんか？

佐々木　鴻の臺がいゝな、行くんなら……

岩田　鴻の臺？――下らないぢやアないか、あんなとこ…

佐々木　でも里見公園から江戸川をわたつて柴又へ出れば。――あの渡船へ乗るだけだつていゝ……

岩田　それより井の頭がいゝ。――飯田町から汽車で吉祥寺といふ停車場で下りればいゝんださうだ。――大きな池があつてとても素敵ださうだ……

たか子　それより西新井の大師さまになさいよ。――あたし、まだ、知らないんだから……

佐々木　あすこそ厄年の人の行くところですよ。

たか子　來年、あたし、厄ですわ。

高桑　（わざと頓狂に）來年厄ですつて？

たか子　えゝ。

高桑　と、來々年三十ですか？

たか子　酷いわ、高桑さん。――いくらあたしがお婆さんだつて三十にはまだ間があるわ。

高桑　だつて、女の厄は十九のあとは二十九でせう？

たか子　あらさう？――あたし二十五よ、來年……

高桑　二十五は男の厄ですよ。

たか子　男の？――ぢやア、あたし、間違へてゐたわ。

佐々木　暢氣だなア、たか子さんは……（わらふ）

たか子　あら、暢氣ぢやアないわ。――これだつて、あたし……

高桑　（遮るやうに）さ、商賣々々。（いそがしくまた鉛筆をとり上げて、――岩田に）と、君、しん馬はいゝんだね？

岩田　さういふお目出度い會なら喜んでうかゞひます。――さういつた……

高桑　で、演るものは？

岩田　「千早ぶる」なんかゞいゝだらうといつてゐた……

高桑　……ふらくれないに水くゞるとは、か。――いゝだらう、あれなら……（書入れる）――講談は？

岩田　右龍をつれて來るやうにたのんで來た。――彼奴なら間違ひがないから……

高桑　何を演る？

岩田　彼奴なら義士傳にきまつてゐる。

高桑　よし、義士傳……（書入れる）――琵琶は？

岩田　さ、それなんだ。――昨夜も今日も行つたんだが錦水の奴うちにゐないんだ。仕方がないから、矢つ張、錦葉で間に合せることにした。――その代り彼奴ならほんとの車代でいゝ……

佐々木　可哀想に……

岩田　だつて、彼奴なんか、片つ方に豆腐屋といふちやんとした商賣をもつてゐるんぢやアないか。

高桑　何を演らせる？

岩田　「常陸丸」がいゝと思ふんだ。――でなければ「城山」……

高桑　それは「常陸丸」の方がいゝ。――「常陸丸」にしよう……（書入れる。――大きな聲で）出來たア……

岩田　みせてくれ、一寸……

高桑　あとは大寺小學校創立二十年祝賀會つてことをどこへ入れるかだけが問題だ……（といひながら原稿を岩田にわたす）

たか子　（しみ〴〵感心するやうに）へんだわねえ、しかし……

高桑　何がです？

たか子　どうして、あんた方、そんなによく藝人のことなんぞ知つてゐらつしやるの？

高桑　それア知つてゐますよ。――岩田なんか並木亭の定連ですもの……

（「……どうも、それは、お忙しいところを」「いゝえ、とんだことを」さうした應酬をしながら、眼鏡をかけた校長をさきに、岩井屋、入つて來る。）

校長　（誰にといふことなく）岩井屋さんがみえた……

岩井屋　（校長のうしろから愛想よく高桑に）昨晩は……

高桑　あゝ昨晩は……

岩井屋　（佐々木と岩田に）みなさん、御苦勞さまでございます。――遲刻いたしまして……

佐々木
岩田　｝いゝえ……（頭を下げる）

高桑　片倉さんは？

岩井屋　すぐにまゐります。――いま寄りましたらちやうど客で……（この間でたか子にも目禮する）

岩田　プログラムが出來ました。（岩井屋にわたす）

岩井屋　あゝ左樣で。（うけとる）

高桑　いま出來たばかり。――先生にもまだお目にかけないんです……

岩井屋　どうぞ、では、先生から……（校長へそのまゝまはさうとする）

校長　いや、わたくしは。どうぞ。――どうぞまアおさきへ……（押返す）

岩井屋　左樣ですか？――では……（みる）――お骨折で。これは、大へんにぎやかに。――落語、講談、琵琶、三曲合奏。――よくこれだけお揃へになりましたなア……

高桑　その中へ、もう一つ手品を入れたいと思つたんですが……

岩井屋　いゝえ、これで十分です。――外に、まだ、あとへ行つて活人畫もあれば喜劇もあるんですから。――これだけでも三十錢ぢや安すぎます……（さういひながら校長へそれをわたす）　おさきへ……

校長　いや……（うけとつてみる。――やゝしばらく無言。顔を上げる）　しまひのこの喜劇といふのは、これは？――――矢つ張これは商賣人を……？

岩田　いゝえ、さうぢやアないんです。――僕たちがやるんです……

校長　……？（おもはず岩田の顔をみる）

岩田　僕と、佐々木と、今日は來てゐませんが勝と。――で、佐々木が女形をやります……

校長　……（何かいはうとして止す。――暗然とした感じに眼鏡をとつて下に置く）

（間。　……高桑、佐々木、岩井屋の三人、はツきりその感じをみてとる。――密と呼吸をのむ。――岩田とたか子はそれにあづからない。）

たか子　（いつそ燥いだ感じに）　ねえ、あの、藤木のおゆきちやん。――あの子を活人畫に出したいと高桑さんたちがいふんですけど。――出てくれますわね、さういへば……

校長　…………

たか子　（高桑に）「太田道灌」のはうをあたしいゝと思ひますわ。――あれなら、あの、女のはうをするんでせう？

高桑　（外らすやうに）　えゝ、まア……

たか子　先生がさういつたとあたしからいひませうか？――――それで好ければ、あたし、今夜でも……

校長　（全くの不機嫌で）　馬鹿なことといつちやアいけない

……

たか子　え丶？（背へないやうに）

校長　あすこのうちにはいま病人があるんぢやアないか。——あの子の姉がずつと寢たつきりになつてゐるんぢやアないか。——知らないのか、お前……？

たか子　（不足らしく）知つてますわ、それは。——おしまさんの惡いことはよく知つてゐますわ。……

校長　知つてたら、お前。——その最中へそんな暢氣らしい……

たか子　…………

校長　先方の料簡にもなつてみなさい。——でなくつても、町内で、堅いでとほつてゐるあのうちぢやアないか……

たか子　…………

校長　そんな無暗なことをして、お前……

たか子　（遮る）もう好ござんす。——分りました……（ふくれる）

（間。）

校長　高桑君、聞いてのとほりのわけだ。——もしおゆきでなければいけないのならどうだらう、それだけみ合せにしたら。——外にいろ／＼あるんだから……（結句弱つ氣にやゝいひよどむ）

高桑　え丶構ひません、止しませう。——どうせいろどりに入れたんですから……

（高桑、さういふなり手を伸して校長のまへのプログラムの原稿を自分のはうにとる。——活人畫とある部分だけ鉛筆でキピ／＼抹消する……）

（……誰も無言。）

（やゝ長き間。）

（片倉、入つて來る。）

片倉　（極めて元氣よく）遲くなりまして……

校長　（ふり返る）いや……

（——あとのものはたゞ目禮するだけ。——片倉、ふと、拍子ぬけのした感じ。——すぐあたりの白けた空氣を感じて上げも下げもならない心もちになる。）

（窓の外にいつかつめたく消えた灰いろの日ざし。）

（たか子、急にそこを出て行く……）

——幕——

第三幕

大寺學校の教場。（階上。——第一幕第一場に同じ）

十一月中旬。（前まくの半月あまりあと）大寺學校創立二十年祝賀會の當日。——休憩室にあてられたそこは、

上り口だけ殘し、あとの部分すべて紅白の幕でつゝまれる。萬國旗や提灯の蜘蛛手に張りわたされた下に、急ごしらへの、机を長方形にならべて白い布をかけた食卓がいくつも用意されてある。勿論、そのうへも、季節をおもはせる菊やもみぢの造りばなで飾られてゐる。――賣店案内の、佐々木たちの描いたとおぼしい種々の漫畫がところ嫌はず貼り散らされてあり、そろひの赤い襷をかけ、賣店係のしるしの青いリボンを胸につけた、お久、おあき、おくめ、おたまたち、絶えず幕のかげを出たり入つたりする。……

午後二時前後。――うちのなかのしかく陽氣なのに引かへ、戸外は、陰氣に冷めたく曇つてゐる。――階下の會場では、いま生徒たちによる「君が代」の合唱だの發起人の挨拶だのがすんで校長の謝辭とまで番組のすゝんだところである――幕のあいたとき舞臺に、おくめとおたまとが食卓に茶碗をならべてまはつてゐる以外だれもそこにゐない。

間。

餘興係のしるしの赤いリボンをつけた高桑をさきに、しん馬、階下から上つて來る。

高桑　岩田、いま、ぢきに來ます。――こゝですこしお待ちなすつて……

しん馬　（落語家らしい擧止で）有難う存じます。――いえ、おそれ入ります……

（……しん馬、眞ん中の食卓のまへに腰を下ろす。――もの珍しげにあたりをみまはしながら煙草入を出しかける。）

高桑　（おくめに）おい、君、お客さまだよ。

おくめ　あら、だめですわ、まだ。――いま、また、支度してゐる最中ですわ。

高桑　何だ、まだそんなことをしてゐるのか？

おくめ　だつて……

高桑　ぐづ／＼してゐたら、君、駄目だぜ。

おくめ　でも、三時でせう、休憩は？

高桑　休憩はさうさ。――休憩はさうでも、お客さまは、そのまへだつてずん／＼來るぜ。

おくめ　（ビックリしたやうに）あら、さうですか？――（うしろをふり返つて）ねえ、休憩にならなくつてもお客さま來るんですとさ。――困るわねえ……

（幕のかげでそれにこたへるが聞えない。）

おくめ　えゝ？――あゝさう……（高桑のはうを向いて）甘酒なら出來ましたつて……

高桑　いゝや、甘酒でも。――持つて來給へ。

おくめ　二つですか？

高桑　二つ。

（おくめ、幕のかげに入る。）

高桑　（しん馬に）右讃さんは？

しん馬　もうまゐります。――遲くも二時までには必ず伺ふと申してをりましたから……（といひながら時計を出して）おや、これはもう二時まはりました……

高桑　いゝえ、來てさへ下されば。――時間は、まだ……

しん馬　それは。――それは、もう、決して。――まゐることは必ずまゐります……

（おくめ、盆にのせて甘酒を持つて來る。）

おくめ　お待ち遠さま……（高桑のまへに置く）

高桑　（しん馬に一つとつて）いかゞです、一つ……？

しん馬　（持つた煙草を下に置いて）へえ、これは。――これはおそれ入ります。――頂戴いたします……

高桑　（一ト口飲んで）うん、思つたよりこれはうまいや。

おくめ　（うしろを向いて）思つたよりうまござんすつて……

おあき　（幕のかげから顔を出して）よかつたらどうぞお代りを……（すぐ引つ込む）

（おくめ、おたまと二人、高桑たちと關係なく、そのまゝ適宜のところに腰をかける。）

しん馬　しかし。――甘酒とは御趣向で……

高桑　いゝえ、もと／＼珈琲のつもりだつたんですが、珈琲よりこの方がこゝのお客には受けるだらうといふんで……

しん馬　それはうけます。――それはこの方がうけます。――矢つ張しかし、こちらの生徒さん方が？（おくめのはうへこなし）

高桑　いゝえ、これは、學校でも裁縫のはうの人たちで……

しん馬　裁縫の？

高桑　校長の姪になる人がべつに弟子をとつて裁縫の稽古をしてゐるんで……

しん馬　あゝ左樣で。――しかし、こちらは、先日岩田さんにもうかゞひましたが、大へんお古い……

高桑　えゝ、それはこの近所にも、宮部だの、紅雲だの、おんなしやうな學校がいくつもありますが、古いことではどこもこの學校にかなひません。

しん馬　さうでございませうとも。――二十年といへば、あなた。――いまから二十年まへなら憲法發布の……

高桑　（うなづいて）憲法發布の年の秋にそも／＼はじめたんださうです、この學校を。――それまでゞも、このさきの町内で寺小屋のやうなものをやつてゐたんだといひますから、ほんとといふと二十年よりもつとになるわけです。

しん馬　（しみ〴〵）お大抵ぢやアございませんなア、しかし……

高桑　ですから、まア、われ〳〵もおせッかいをしてかうした會をやることにもなつたんですが……

しん馬　（うなづいて）結構でございます。――全く結構なお催しでございます。――校長先生になすつてもどんなにお喜びか……

高桑　ビツクリしたらうと思ひます。――お前たちに何が出來るといつた風に、いくら此方が骨を折つても、肝心の校長に昨日までちつとも氣乘をしてくれないんです。――何を相談かけても親身になつてくれません。――何度腹を立てゝ出さうと思つたか知れません。

しん馬　いえ、まア、それは、――矢つ張りそれは大事をおとりになるんで。――御存じでございませうか、あの、山谷の河本學校といふ學校を。――矢つ張こちらのやうな　？

高桑　えゝ知つてゐます。――あれは、また、こゝよりも古い、曰くのある、――たしか、あすこの校長、東京市から褒美か何かもらつたんぢやアありませんか？

しん馬　さうでございます。――その御褒美を頂戴したとき、――そのときの矢つ張かうしたお祝のお催しのあつたとき、尤もこれは今日のやうな多勢（おほぜい）さんぢやアございませんが、お招きをいたゞいてわたくしお饒舌（しやべり）にうかゞひました。――そのときその校長先生のなすつた御挨拶。――立派な、から、長い髯をお生（はや）しになつた、みるからむづかしい顏をなすつた方でしたが、自分はいまゝでつひぞ心から笑つたといふことがなかつた。しかし今日といふ今日は、心から、しんから底から笑ふことが出來る。――みんなそれもみなさんのお蔭だ。――いまゝで長い間の苦勞も今日のこのうれしさにくらべれば何の事でもない。――何といつて自分はお禮をいつていゝか分らない。――涙（なみだ）を零さないばかりにさう被仰いましたが、蔭でうかゞつてをつてわたくし、なるほどさうだらうなア、さうしたものだらうなア。――つく〴〵わたくしさう思ひましたが……

高桑　それは、まア、うちの校長でも、腹ん中ぢやアすつかりうれしがつてゐるに違ひないんです。

しん馬　あとでこれはうかゞひましたが、そのお祝ひをしほに、自分もとる年だ、いつまでも自分のやうなものゝ頑張つてゐる時勢ぢやアない。――さう被仰つて、それから間もなく、すつぱりこの學校をお止めになつたさうですが……

高桑　（意外なやうに）あ、さうですか、あすこ？

しん馬　いゝえ、可笑しいのはそれで、學校をそのお止め

になると一しよに碁象戯の會所をおはじめになつたさうですが、もしほんたうとすると、これ、意氣な、思ひきりのいゝ……

高桑　さきをくゞつたんです。——先手をうつたんです、それは。——とても、このさき、代用學校の立ち行くわけのないことをはつきりみ越したんです、それは……

しん馬　左様ですかな？

高桑　それは、もう、このごろのやうに公立のいゝ學校がどん／＼出來たら代用學校の立つ瀨はありません。——(やゝ聲を潛めて) こゝなんぞでも、近所にまだそれがないからいゝんですけれど、いまに市區改正でもすつかり出來て、どこかに一つそれが建てば一トたまりもありません。

しん馬　(わらつて) そんなことも……

高桑　いゝえ、さうです。——さうなんです。——さうなるにきまつてゐるんです。

しん馬　………

高桑　だからすこし目端のきく校長ならいまのうちから用心してかゝります。——さうしなければ足掻のつかないものが出來ます。——が、こゝの校長にはそれが分りません。——そんなことになるなんぞとは夢にも思つてゐません。——それは世間にうといんですから……(ふだんの反感がわけもなく言葉にあらはれる——勿論、その場合、緣もゆかりもない相手といふことが漸次わすれて來てゐる)

しん馬　………

高桑　いざとなつたつて、だから、こゝの校長には碁會所なんぞはじめる智慧は出やアしません。——その半分ものが分つてれば大したもんです……

(岩田をさきに、岩井屋、このとき急いで階下から上つて來る)(……岩田は、高桑と同じ餘興係のしるしの赤いリボンを、岩井屋は、接待係のしるしの白いリボンを胸につけてゐる)

岩田　(高桑にいきなり) おい、どうするつもりなんだ？——いつまであんなものをやらして置けばいゝんだ？

高桑　(不意を喰つたかたちに) 何？　——何を……？

岩田　(ぷん／＼して) 何をつて、君、あんな下らない。——あんな下らない、愚にもつかないことをいつまで饒舌らして置けばいゝんだ。——今日は、君、いつもの紀元節や天長節ぢやアないんだぜ。——いつもの子供たちばかりの相手ぢやアないんだぜ。

高桑　(腑に落ちないやうに) だつて、君……？

岩田　だつて君ぢやアないよ。——そんな落着いてゝどうするんだ。——はじめッからあんなに客をだらしてしま

つてどう方返しをつけるんだ？

岩井屋　（幾分とりなすやうに）いえ、それといふのが、校長すつかり上つてしまつたんで。——たゞもうわくわくしてしまつた證據には、いつもあんな、一つことを幾度もいつたり、さきにいふことを後からいつたり。——めつたにあんなことはないんですが……

高桑　（急に色を作して）まだ庇つてるんですか、校長？

岩井屋　さうなんです。

岩田　それをいつてるんぢやアないか。——それをさういつてるんぢやないか。——もう、君、三十分の餘にもなるんだぜ。

高桑　そんなはずぢやアなかつた。——時間は切詰ですから出來るだけ簡單に。——たかだか十分か十五分で。——今日も、先刻、出るまへに俺はハッキリさういつたんだ。——だから安心してゐたんだ。——疾うにもうそれはすんで會計報告にでもなつてるんだらうと思つてゐたんだ。

岩田　思つてゐたつてさうなつてゐなきやア仕樣がないぢやアないか……

岩井屋　（高桑に）だから、いかゞです、會計報告は止してすぐ餘興にお入りになつたら？

岩田　さうでもしなかつた日には、君……

高桑　（それにはこたへず岩井屋に）それは構ひません。——われわれはちッとも構ひませんが、もともとそれをしろといつだのは校長です。——それをいひ出したのは校長です……

岩井屋　ですから、それは、片倉とわたくしとで責任を負ひます。——責任を負つて、あとで、刷物にでもなんでもして配ります。

高桑　それでいゝんです。——どこの何の會だつてみんなさうするんです。——今日の會の收支を今日すぐ報告する。——どだいそんな器用なことの出來るわけがないぢやアありませんか……

岩井屋　（わらつて）それは、もう……

高桑　でも、強情に飽くまでさういふものだし、あんまり先方のいふことを蹴散らしてばかりゐるものと思つて、格別邪魔にもならないから、まアいゝとプログラムに入れて置いたんです。——しかしかういふことになると……

岩田　さうでなくつてもはじまりが十何分遲れてゐるんだ。

高桑　よし、構はない。濟みしだいすぐ餘興へ行かう。——ぐづぐづいつたらあなたが惡いんぢやアないかといつてやる……

岩井屋　（わらつて、また）何としても堅い方ですから……
高桑　堅いつていふんぢやアありません、氣が小さいんです。――料簡がケチなんです……
岩田　（ぢれッたさうに）どうだつていゝぢやアないか、そんなこと。――それより、君、餘興だ。――プログラムの順だと講談だけど、このあとすぐ講談ぢやアまるで氣が變らないぜ。お客はうだるばかりだぜ。――いつそ、どうだ、落語にふりかへちやア……
高桑　それはさうだ。――そのはうがいゝ……
岩田　しん馬さん、君、さうしてくれないか？
しん馬　へえ、わたくしはもうどちらでも……
岩田　右龍さんもよう來てゐるけど……
しん馬　あ、まゐりましたか、右龍？
岩田　來た。
しん馬　どちらにをります。
岩田　階下にゐる。
しん馬　さうでございますか。
岩田　で、君、氣の毒だけれど、聞いてのとほりのわけだ、うんと一つ馬力をかけてくれ給へ。――思ひきりわつといはせてくれ給へ。
しん馬　かしこまりました。
岩田　短くつていゝ。――時間は短くつていゝから……

（途端、階下に、拍手の音起る……）
高桑　（急に）すんだ！
岩田　（しん馬に）ぢやア、君……（立上る）
しん馬　へえ……（狼狽てゝ煙草入をしまひかける）
高桑　おねがひします。
しん馬　よろしうございます。（立つ）
（岩田をさきに、しん馬、いそいで階下へ下りて行く。――高桑も立つて上り口のあたりまで行く。）
（間。）
（急にまた階下に拍手の音起る。（まへのよりにぎやかな感じの）――つゞいてどつと笑ひ立てる聲。）
（高桑、もとの位置にかへつて來る。）
高桑　どうです、岩井屋さん、甘酒あがりませんか？
岩井屋　出來ましたか、もう？
高桑　出來ました。――いま一杯飲んでみましたが思つたよりうまいんです。
岩井屋　では、一つ、頂戴しませうか。
高桑　（おくめの方をふり返つて）お代りだ、甘酒……
（おくめ、おたまと綾取をしてゐたのを止してすぐ立つ。――幕のかげへ入る。）
岩井屋　しかしよく行きました。――これだけに行かうとは思ひませんでした……（やゝホッとしたといつた感じ

にさういひながらふところから帳面だの鉛筆だのをつかみ出す）

高桑　（とも〳〵）安心しました、しかし。——前景氣がいゝといふので樂觀はしてゐましたけれど……

岩井屋　いゝえ、それが。——間際になつてそれがすつかり引ッくり返りました。——これはと思ひました。——（わらつて）いまだからお話しますけれど……

高桑　それは、また……？

岩井屋　いゝえ、つまりは此方が多寡をくゝりすぎたので。——發起人になつてもらひにはう〳〵あるいたとき、それ〳〵證のいゝことをはう〳〵でいはれたのを正直にうけとつたのがいけなかつたんです。——いざプログラムが出來て、改めてまた切符を賣りにまはると、五枚や十枚だまつて引取つてくれるはずのところで一枚か二枚しか買つてくれず、義理にも一枚は買つてくれると思つたところで、やれ忙しいからの、生憎その日は都合が惡いからの。——どこへ行つても、これ、ケンもホロロです……

高桑　さうですかなア……

岩井屋　これではいけないと、そこで片倉と相談して、今度は構はず、手近の、懇意なところばかり選つて無理押附けに押附けてあるきました。——（わらつて）野上のところへ行つたのなんぞやや强談のかたちがありました。

高桑　野上といふとあの「魚吉」の……？

岩井屋　さうです……

（おくめ、甘酒をもつて來る。）

おくめ　お待ち遠さま……

高桑　……（うけとる）

おくめ　お團子かカステラあがりませんかつて？

高桑　お團子かカステラ？——それならいつそお煎餅のはうがいゝ。

おくめ　まだ來ないんですよ、お煎餅……

高桑　どうして？

おくめ　一時までに持つて來るつもりのが來ないんで、お師匠さん、自分でいま催促に行きましたわ。

高桑　どこの煎餅や？

おくめ　横町の八ッ橋煎餅……

高桑　ぢやアいゝや、まア……

おくめ　さうですか？

（おくめ、高桑のそばを離れる。）

高桑　（岩井屋に）で「魚吉」へおいでになつて……？

岩井屋　お前のところで二十枚や三十枚引うけないつてことはない、さういつて片倉と一ト晩わりこみました。—

―あすこの弟の伊之ちやんとは、いつかも申したとほり、われ／＼おんなじ卒業でした。――それは發起人を斷つた手前からいつてもその位なことをするのは至當だ。――發起人にもならない、切符も買はない。――どういふ事情があるか知らないが――よしどういふ事情があるにしても、それはそれ、これはこれ、いまゝでの長い間の關係からいつても、お前のところで今度のことに知らない顏でゐるつて法はない。――それぢやア義理に缺ける。――高飛車に一つかういひました……

高桑　しかし、どの位あの峰さんの事件が……？

岩井屋　さ、それをあなたにくはしく伺ひましたからそのつもりでやりました。――はじめは、さきも、白ばツくれてをりましたが、しまひに此方で切出したもんで、實はそれもある。――心もちを惡くしてゐることをハツキリ白狀しました……

高桑　しかし、あれは、峰さんが學校を止したんでもう解決がついたと思ひますけど。――先方の顏はそれでもう十分立つてると思ひますけど……

岩井屋　ですから、いゝえ、そんなことをいつまでも根にもつてやアしない。――あとで言譯のやうにさういつてゐました。――そんなことよりもまだ外にいろ／＼ある。――いろ／＼縺れがある。――が、そんなことで今度のことに骨を折らないんぢやアない。――發起人を斷つたのも、顏出し一つしないのも、それはいま、うちに少しごた／＼したことがあつて、それで義理を惡くするやうなことになつてゐるんだ。――全く拔けられないことがあつて手傳へないんだから惡く思はないでくれ。――その代り切符は買ふ。――いくらでも買ふ……

高桑　大へん、しかし音無しく……

岩井屋　稼業柄野上のうちのものは、鼻つ張はみんな強いんですけど、そのつもりで此方で話を持つて行けば決してそんな分らないことはいひません。――いつまで強情は張りません……

高桑　矢つ張ね……

岩井屋　しかし片倉はあゝいふ性分ですから、それでも構はず突ツこみます。――何とも思つてないものが、そんならなぜ、そのとき以來妹を學校へ行かせないんだ。――おだやかでないぢやアないか……？

高桑　困つたでせう、さういはれちやア……

岩井屋　いや、それは、當人がいやだといふもんだからついずる／＼に休ましてしまつたんだ。――決してそれは俺たちの指金ぢやアない。――さういひました。――自分からさういふのが可笑しいとあとで片倉とわらひましたが……（わらふ）

高桑 （ともにわらつて） それは……

岩井屋 で、それからそれ、いろ〳〵話して行くうちにかういふことをいひました。――實は、今度、俺のところも外へ普請することになつた……

高桑 普請？

岩井屋 どこへといふと、それはまだハッキリいへないが、こゝよりもつと廣小路に近くなることだけはたしかだ。――さういひます。――おやアこの店はといふと、こゝぢやア稼業の足搔はわるし、それには今年一杯しかこゝにゐられないんだ……

高桑 と、矢つ張あすこも取拂ひに……？

岩井屋 しかしあすこは市區改正にはまるつきり關係のないところなんで。――それはあすこの地面一ト曲輪は、以前仲町の伊勢喜といふ質屋の持つてゐたのを、四五年まへ、野上のうちのどん〳〵伸すさかりに買つたものです。――ですからあすこは自分地面。――自分で手離しでもしないかぎりそんな取拂はれるなんてわけはありません……

高桑 ……（うなづく）

岩井屋 妙なことをいふと思つて、歸つてそれを宅の親父に話しました。――と、宅の親父は知つてゝあゝそれは市との間の話がついたんだ。――市ぢやア疾うからあすこをほしがつてゐたんだが、なか〳〵片つ方がうんといはなかつたんだ。――これでまた「魚吉」は一ト身上こしらへた……

高桑 ……

岩井屋 市ではあすこをつぶして何か大きなものを建てるつもりがあるらしいんださうです。――それが電話局といふうはさもあれば、學校といふうはさもあるんださうです……

高桑 學校だと……？

岩井屋 むろん小學校。――何としても、あなた、馬道まで行かなければ、このへんには情ないことに公立といふものがどこにもまだないんですから……

高桑 ぢやアそれは。――必とそれはさうです。

岩井屋 …………？

高桑 何か、いゝえ、そんな氣がします……

岩井屋 （うなづいて） 電話局といふのはそれは。――いいえ「淺草」といふ局の將來出來るといふことは聞いてをりますが、でもそれは、出來るにしてもずつとまだあとのことだらうと思ひます。――とてもまだ來年や來々年のことぢやアあるまいと思ひます……

高桑 …………

岩井屋 たとすれば。――どうも、これ、學校といふうは

さのはうがほんたうのやうに思はれます。――(やゝ聲を低くして) だが、高桑さん……

高桑 …………

岩井屋 もし、しかし、さうなると。――さうなるとこの學校は……?

高桑 さ、それです。

岩井屋 野上のうちとこゝぢやア眼と鼻の。――ほんたうの、あなた。――あんまり近すぎます……

高桑 それなんです。

岩井屋 あんなところに出來られたら、とてもこの學校の立つて行ける瀬はありません。

高桑 實は、いゝえ、いまもしん馬と、山谷の河本學校の話をしてさういつてたんですが。――とてもこう私立は。――どうしたつて、もう、かうした工合になつたら……

岩井屋 時勢で、まア、それも仕方がないといふものゝ。――さうなるとしかし校長が……

高桑 知らないと思ひます、校長は……

岩井屋 知らない?

高桑 いゝえ、それにまだ氣がつかないと思ひます。――そんなことになるとは夢にもおもはないと思ひます……

岩井屋 (背へるやうなうべなへないやうな) さうでせうか?

高桑 でなければ。――でなければあんなノホヽンでゐられるわけがないと思ひます。

岩井屋 ノホヽンでね?

高桑 ノホヽンといつてゐるければあんな平氣で……

岩井屋 …………

高桑 でなければ、岩井屋さん、もつとわれ／＼に。――今度のこのことでももつとわれ／＼にいゝ顔をみせるわけだと思ひます。――みせなくつちやアうそだと思ひます。――まるで、あんな、木で鼻をくゝるやうな、――あんなつて法はないと思ひます……

岩井屋 が、まア、それは。――よくそれはあなたでも、岩田さんでも、佐々木さんでも、みなさんこゝまで我慢なすつたと思ひます。――みなさんなればこそです……

高桑 ばか／＼しい、誰のためにこんな骨を折るんだ。――さう思つて、途中で、何度止さうと思つたか知れません。――いまだから矢つ張いひますけど……

岩井屋 御尤もです……(あいそよくうなづく)

高桑 が、止したらそれつきりです。――折角そこまで運んだことが水の泡になります。――それには周圍でいろいろいつてくれます。――何をいつてもつまりは相手にしなければいゝんだ。――さう思つて、しまひには、此方だけでかまはずどん／＼やりました。――氣に入らな

さうだからいつそ止めようかといつた喜劇も、いゝからヤツてしまへ。――さういつて、わざと、校長に分るやうに大びらに稽古しました……

岩井屋　おかげです。――全くみなさんの御丹精のおかげです……

高桑　いゝえ、そんなことはありませんけど……

岩井屋　これで、われ〳〵も、肩の荷が下りました。――いえ、實際……

（……このとき、階下に、くづれるやうな笑ひ立てる聲一トきは高く聞える）

岩井屋　大分うけてるやうですな……

高桑　さうのやうです。

（二人、階下へこなし。――片倉、岩井屋と同じ接待係のしるしのリボンを胸につけていそいで上つて來る……）

片倉　ねえ高桑さん……（さういひかけて岩井屋に）何だ君、こゝにゐたのか？――どこへ行つたかと思つて先刻から探してゐたんだ……

岩井屋　何か用か？

片倉　何か用かぢやアないよ。――階下ぢやア、みんな、受附の手が足りなくつて轉手古舞つてるんぢやアないか……

岩井屋　そんなわけはないぢやアないか。――受附はもう疾うに……

片倉　しまふつもりがそれがしまへないんだ。――どんどんあとから突ツかけて來るんだ。

岩井屋　まだ？

片倉　まだ！――それもどこをどうまはつた切符かいろんな人間が來る。――始終公園をほツつきあるいてるやうな學生も來れば、近所のいろんな老人なんかも來る。――いまも雜賀屋の隱居が杖を突ツぱつてノコ〳〵やつて來た……

岩井屋　あゝ、あの隱居は、何でもみたり聞いたりすることが好きなんだ。

片倉　道理で茶番はもうすんだかと訊いてゐた。

岩井屋　茶番はよかつた……

高桑　……（苦笑する）

片倉　ところで、高桑さん。――こゝですぐに休憩にしてくれませんか？

高桑　こゝで？

片倉　早くつても、さうしてもらはないと、會場の整理がつきません。――あとから來たものはみんな後に立つてなければなりません……

高桑　あゝ、それは……

片倉　だから、一つ、こゝで休憩して、御順に前のはうへ詰めてもらへは、三十や五十らくにまだ入ります……

高桑　このあと講釋をいつそ琵琶にして、それで休憩にしようと思つたんですが。――止むをえません、さういふことなら。――思ひ切つてさうしませう……

片倉　さうして下さい。――たのみます……

岩井屋　ぢやア岩田さんに早くさういはないと……

高桑　さうです、支度するといけません……

片倉　ぢやア、すぐ行つてさういひませう。――（岩井屋に）來いよ、君も……

岩井屋　うん……（立上る）

高桑　行きませう、僕も……（とも／＼立上る）

片倉　さうですか？――ぢやア……

高桑　（おくめとおたまに）君たち、今度すぐ休憩だよ……

おくめ／おまた　あら？（立上る）

高桑　さういひ給へ、外の人たちに……

（高桑、さういひながら、いそがしく、片倉、岩井屋のあとにつゞいて階下に下りる。）

（おくめ、おたま、いそいで幕のかげに入る。――すぐ、また、おあき、お久たちと一しよに出て來る。）

おあき　……だつて？――ほんたう、それ？

おくめ　ほんたうですわ。――高桑さんがいまさういつたんですもの。――（おたまに）ねえ……

おたま　えゝ。

おあき　だつて、まだ、お師匠さんも歸つて來ないのに。――（お久に）ねえ、どうしませう？

お久　（誰よりもおぐれて）どうしませうつて仕様がないぢやアないの……

おあき　（やゝぢれッたさうに）おたまちやん、一寸みて來てよ。

おたま　えゝ？

おあき　階下へ行つてお師匠さんが歸つて來たかどうかみて來てよ。

おくめ　（口を出して）歸つて來ればすぐ來るでせう、こゝへ？

おあき　だから、みに行つてまだ歸つてゐなかつたら誰かに行つてもらふのよ、呼びに。――おたまちやん、早く行つて來て頂戴……

おたま　えゝ。

（おたま、急ぎ上り口のはうへ行く。――途端、階下に、急霰のやうな拍手の音おこる。）

おたま　あら……（おもはず立留る。――おあきたちのはうをふり返る）

おあき　しまつたのかしら？

（……つゞいて休憩にうつッたのを感じさせる喧騷。——お久、おあき、おくめ、おたま、ぼんやり立ちつくす。）

（間。）

（來會者ぞろ〳〵階下からあがつて來る。——はじめは三人五人づゝ。——だん〳〵その數をます。）

（——あがつて來ては、だれも、一寸立留つてあたりの光景をみまはし、それから探つたさうにテーブルのはうへすゝむ。——お久たち、まご〳〵する……）

（間。）

（たか子、そのなかを掻分けるやうに急いであがつて來る。——あとに煎餅やの店のもの從ふ。）

おあき　（すぐみて救はれたやうに）お師匠さん……

たか子　（あたりにゐる大ぜいを十分意識に入れて）ほんとに仕様がないつたらありやアしない。——あんなにハツキリ時間をいつといたのにぐづ〳〵してゐるんだもの。——あたしが行かなかつたらまだ出來やアしなかつた……

お久 ⎫
おあき ⎭ まア……

たか子　（煎餅やの店の者に）コッちへ持つて來て頂戴…

煎餅屋　へえ……

（たか子、幕のかげに入る。——來會者、ぞく〳〵階下からあがつて來る。）

（間。）

（舞臺たちまち人でうづまる。誰がだれとも分らない。そのなかで甘酒を註文するもの、團子を註文するもの、煎餅を註文するもの。——たか子をはじめ、お久、おあき、おくめ、おたま、右に左にその間を縫つていそがしく立ちまはる。——といふことは、煙草のけむりの立迷ふなかに、いろ〳〵の話聲、笑ひさゞめく聲、ほしいまゝに入りみだれる……）

（——帽子を歪めてかぶつたり、羽織の紐にリボンを結んだりした生利な中學生らしい一トむれの、隅のはうのテーブルに陣取つたのがさうしたなかにあつてことさら傍若無人に振舞ふ。）

中學生の一　（からかひ面に）ビールをくんないか、君…

おくめ　ビール？——ビールなんかありませんわ。

中學生の二　ビールがなければ熱い奴を——つていつたつてね。

中學生の三　（その尾について）おでんはないか、おでんは……

中學生の四　あれは俺は信田巻だ……

中學生の二　俺ア竹輪と雁擬きだ……

中學生の一　よせやい、共食するの……

たか子　（遠くから）おかどが違ひます。――こゝはおでんやぢやアありません……

中學生の五　おでんやぢやアないとよ。――間違へちやアいけねえ……

中學生の三　ぢやア何だ？

たか子　（怯まず）甘酒屋よ。――だから甘酒をあがれ。おあきちやんこゝへ五人さん、頂戴……

おあき　たゞいま……

（このとき、上り口に、お酌のやうなけば〳〵しい恰好をした女の生徒（はじめの幕に名まへの出た田宮のおてる）玉守の手を引つ張つて上つて來る――そのあとに、おゆき、つゝましく從ふ……）

中學生の三　（眼早くみつけて頓狂な聲を出す）よいしよ！

（居合すものみんな上り口のはうをみる。）

おてる　あら……（いやらしく嬌態をする。）――甘ッたれるやうに玉守に）行きませうよ。――一ぱいだから行きませうよ、先生……

玉守　うん……

（玉守、わざと中學生たちのはうをみず、そのまゝすぐ、おてるとおゆきをつれて階下に消える……）

中學生の三　（おてるのいつた眞似をして）行きませうよ。――一ぱいだから行きませうよ、先生……

（居合すものみんなどッとわらふ……）

中學生の二　何だい、彼奴？

中學生の三　誓願寺ん中にゐる田宮つて按摩の金貸のうちの奴なんだ。

中學生の二　按摩の金貸？

中學生の三　とても因業で大へんな奴なんだ。――とてもそれで吝嗇なんだ。

中學生の四　そんなうちの奴にみえないぢやアないか。

中學生の三　彼奴はお洒落なんだ。――お洒落で浮氣なんだ。――それでゐてあんな大きな體をしたがらすぐ泣くんだ。――それア泣蟲なんだ。

中學生の二　よく知つてるんだな。

中學生の三　これは、彼奴、俺のいとこの奴のうちのまへを毎日のやうに通るんだ。――彼奴、そのいとこの奴に惚れてるやアがるんだ。――だからよく調戯つてやるんだ。

（たか子、おあきからうけとつて人數だけの甘酒を中學生たちのまへに運ぶ。）

たか子　お待ち遠さま。……（いひすてゝ、すぐ、外のテー

ブルのはうへ行く）

中學生の一　（み送つて）　おほッ、あの姐さん、なか〱氣が強いよ。

中學生の三　馬鹿！――失禮なことをいふなよ。――姐さんぢやアない、奥さんだ……

中學生の二　奥さん。――どこの？

中學生の三　この學校のよ。

中學生の二　この學校の？――と、あの禿のか……。

中學生の三　（わざと）　大きな聲だすなよ、聞えるぢやアねえか。――ねえ、奥さん……

（……みんなたか子のはうをみる。）

たか子　（すまして指圖する）　おたまちやん、あちらの方御勘定。――それからこゝへお茶をさして上げて……

（中學生たち、顔をみ合せてわらふ……。）

中學生の二　（わけもなく落語家の眞似をし出す）　……それにつけても吉田の兼好。――寒からぬほどにみて置け峰の雪。――傾城につみなし、かよひ給ふまらうどにこそつみあれ……

（階下に、そのとき、餘興のはじまる知らせの振鈴鳴る。――いそいでどのテーブルのものも立上る。）

中學生の一　今度は何だ？

中學生の三　琵琶だ。

中學生の二　そのまへにまだ講釋が殘つてゐる。

中學生の一　講釋なんぞつまらねえな……

（大ぜい一しよに下りるので上り口しばらくごたつく――そのなかにまじつて、中學生たち、いろいろわいわいいふ……。）

（間。）

（……急にあたり大風のふいたあとのやうになる。――たか子と、お久と、おくめと、おたまと、さうしていまゝで誰もそのゐることに氣のつかなかつた光長と峰と二人だけそこに殘る……。）

お久　（たか子に）　何でせう、あの人たち……？

たか子　墮落學生だよ、どッかの。――生意氣だつたらありやアしない……

おあき　あたし、みたことありますわ、あの人たちの顔。――始終この近所をうろついてる人たちですわ、必と…

お久　どうして來たんでせう、あんな人たち？

たか子　矢つ張り切符を買つて來たんだらうけど……

（光長、前に出る……。）

光長　たか子さん……

たか子　（驚く）　あら、先生。――いつ……？

光長　いえ、さきほどからをりましたんですが……（さびしく笑ふ）

たか子　あら、ちツとも存じませんでしたわ、あたし……
お　久
おあき　あら、あたしたちも……
光長　いえ、實は……
たか子　（おくめとおたまに）お前さんたち汚れたものを
ずん／＼あつちへ片附けて頂戴……
（おくめ、おたま、返事をしてさうし出す。――お久
もおあきもとも／＼手傳ふ……。）
光長　實は、その、思ひがけないお客さんが……
たか子　思ひがけない？
光長　へえ。
たか子　どなたですの？
（峰、すゝみ出る。）
峰　（固苦しく）その後は……
たか子　（ビツクリして）まア峰さん……（やゝ顏を染め
る）
（お久も、おあきも、おくめも、おたまも、おもはず
しかけたことの手をやめて峰をみる。）
たか子　（わづかに自分を立直して）ちつとも存じません
でしたわ。いつおいでになりましたの？
峰　えゝ、もう少しまへに……
たか子　でも、よく……

峰　（やゝ間の惡さうにわらつて）あれツきりになつてを
りますから。――光長さんにお知らせをいたゞいたのを
しほに、お詫かた／＼、校長先生にお目にかゝりに出ま
した。
光長　（側からとりなすやうに）外のときでございませ
ん。――とにかく。――かういふとにかくお芽出度いを
りでございますから。――（峰に）本來ならば、今日は、
あなたにもいろ／＼働いていたゞかなければならないと
ころで……
たか子　ほんたうですわ。
峰　いえ……（もぢ／＼する）
（そのまゝ話途切れる……。）
（間。）
光長　（その氣不味さを救ふやうに）しかし、先生は。――
―先生はどこにおゐでになりませう？（あたりに眼をく
ばる）
たか子　階下にゐるでせう？
光長　いゝえ、階下にはどこにもおゐでがないので……
たか子　こゝへはまるツきり顏をみせません。
光長　（一人言のやうに）はて、どこへおいでになつたら
う？
お久　（たか子に）お師匠さん、お茶碗や何かすぐにみん

な洗つてしまひませうか？
たか子　いゝわ、あとで。——一しよにあとで洗ふから……
おあき　ぢやア、片附いたらあたしたちも階下へ行つて……
たか子　いゝわ、さうして……
おくめ
おたま　あゝうれしい……
（光長、峰、とり殘されたやうにぼんやりその應酬を聞いて立つ。——と、校長、そゝくさと階下から上つて來る。）
光長　（いさんで）あゝ先生……（そばへよる）
校長　光長君……
光長　峰さんがみえました。
校長　いまそれを聞いたから……（可懷しさうに峰に）やア君……
峰　（いんぎんに）御無沙汰いたしました。（前に出てあたまを下げる）
（間。——階下に拍手のおと起る。）
たか子　（校長に）何ですの、今度……？
校長　三曲だ。
たか子　あら、もう……？
校長　尺八をふく人の都合で早くなつたんだ。
おあき　お師匠さん……（呼ぶ）

（……外の、お久も、おくめも、おたまも聽きに行きたいこなし。）
たか子　行かうよ、聽きに……
お久　でも、こゝ……
たか子　いゝよ、すぐ歸つて來れば……
（襷をとつて、たか子をさきに、いそいで四人階下へ行きかける……）
校長　しづかに……
たか子　（ふり返つて）だめよ、どたばたしちやア……
（五人、階下へ消える……）
（……ふと接穗を失つた感じ。——琴、三味線、尺八の入りまじつた音しづかに階下から聞えて來る。）
（間。）
光長　（校長に。——間の拔けた感じに）どこにいまゝでおゐでになりました？　階下をはうばうおさがしいたしたんですが……？
校長　いや、番組のことで樂屋へ一寸行つてゐたもんだから……
光長　あゝ、それで……
校長　峰君、まアおかけ……
峰　有難うございます。
校長　光長君、君も……

光長　へえ……

（三人、捨臺詞、とかくして腰を下ろす。――途端、階下からたか子そゝくさと歸つて來る。）

たか子　（校長に）あなた、あなた……（うつかりさう呼びかけて氣がつく。――どぎまぎする）

校長　何だ？（不機嫌にふり返る）

たか子　おゆきちやんのところから、いま、おゆきちやんを迎へに……

校長、迎へに？

たか子　えゝ、おしまさんの容體が急にわるくなつたんですつて……

校長　（狼狽てゝ）おしまの？――それはいけない。――それはすぐ歸さなくちアいけない……

たか子　えゝ。

校長　で、だれが來たんだ、迎へに？

たか子　店の人です。

校長　まだゐるか？

たか子　ゐます。

校長　ぢやア、すぐ……（いひかけて）いゝ、わたしが行く……（峰に）一寸、君、失禮する……

光長　と、あの藤木の……

校長　（愚痴のやうに）病人があるんだから來なくつてもいゝといつたんだ。――それをあゝいふ義理の堅いうちだもんだから……

（校長をさきに、たか子、そのまゝあたふたと階下へ行く。）

（光長、峰、ぼんやりまた取殘される。）

（間。――光長、ふいと立つて窓のそばへ行く。）

光長　ふつてまゐつたやうですよ。（鈍い眼でみさだめる）

峰　雨ですか？

光長　えゝ、その。――ぽつ〳〵……

（峰、立つて光長のそばへ行く。）

峰　あゝ、これは惡いときに……（窓のそとをみまもる）

（……琴、三味線、尺八の入りまじつたしづかな音。）

（間。）

―幕―

第四幕

大寺學校の住居。（第一幕第二場に同じ）

十一月下旬。（前まくの七八日あと）

……夜、六時すぎ。校長――、机のまへにすわつて、いつもの、琴の目ろくを書く仕事に一人しづかにしたがつてゐる。――水の底に落込んだやうなあたりのし

づけさである。

長き間。

校長、一トくぎりついたところで筆をおく。――ほッとしたやうに顔を上げ、時計をみ、眼鏡をとつて机のうへに置く。――ぼんやり立上つて四疊半のはうへ行く。

間。

……長火鉢のそばに、晝間、たか子の出て行くとき支度して行つた膳が置いてある。――校長、その膳を持つて机のそばにかへつて來る。――すぐに膳のうへの銚子を取つて、そばの、瀬戸の火鉢に懸つた鐵瓶のなかに入れる。箸箱から箸を出す。蓋物の蓋をあける――そのあと氣を短く鐵瓶から銚子を出す。――一杯ついでとりあへず加減をみる――まだゞといふ思入。――猪口を下に置き、すぐまた銚子を鐵瓶のなかに返す。――そのとき玄關にだれか來る。

外の聲　御免下さいまし……

（校長、顏を暗くする。――不機嫌に立つて障子をあける。――玄關に出る……。）

外の聲　藤木から出ましてございます。――これは、ほんの……（あとハツキリ聞えない）

校長　いや、これは。――これはどうも御叮嚀に……

外の聲　……（ハツキリ聞えない）

校長の聲　一寸どうぞ……

（校長、盜り膳の角岡持を下げて座敷にかへつて來る。――それをそこに置き、臺所へ行き、いろ／＼皿小鉢のたぐひをもつて來る。――盜り膳のしな／＼をそれらにとり分ける……）（そのまへに銚子を鐵瓶から出す。）

（やゝ長き間。）

（臺所のはうに誰か來る……。）

外の聲　御免……

校長　（顏を上げる。――やゝ眉を顰めて）…………

外の聲　光長でございます……

校長　お入り……（すぐ、また、顏をふせて料理をとり分けつゞける）

（光長、のツそりと入つて來る。）

光長　（膳の出てゐるさまをみて）これは御飯中で……

校長　いゝえ……

光長　……（もぞ／＼する）

校長　構ひません……

光長　へえ……（すわる）

（校長、とり分け終る。――空いた器をもとのやうに岡持へ入れ、それを下げて、また、玄關に出る。）

校長の聲　わざ〳〵恐れ入りました……
外の聲　いゝえ……
校長の聲　どうぞお宅へよろしく被仰つて下さい。――いづれ、二三日うち、お禮ながら是非うかゞひます……
外の聲　……(聞えない)
校長の聲　だん〳〵、しかし、お寂しくつておゐでゞせう。――さうでせうつて。――御無理ありません……
外の聲　…………
校長の聲　ほんたうに、これは、お使ひ柄(がら)、……恐入りました。――御免下さい……
(……使のかへつて行く氣配。)
(間。)
(校長、座敷へかへつて來る。――すわらないで、そのまゝ、四疊半のはうへ行く。――箸と猪口を一人まへ持つて來る。)
光長　(おづ〳〵した感じに)　たか子さんは……?
校長　(それほど不機嫌でなく)　まだ歸りません。(すわる)
光長　どちらへか……?
校長　いや、今日は。――いろ〳〵この間骨を折らせたので。――お久やおあきたちとその褒美に……
光長　(のみこむ)　あゝ左樣で……
校長　どこか目黒のはうへ行くといふのに。――早く出て行けばいゝものを、矢つ張、女は……
光長　今日は、しかし、お出かけになるには持つて來いのお天氣で……
(このうち、校長、もつて來た箸と猪口を光長のまへに置く。)
校長　(銚子をとり上げて)　一つ、君……
光長　(不意をうたれたやうに)　いえ、わたくしは……
校長　まア……
光長　わたくしは、いま、食事をいたしてそれから……
校長　さうだらうが、君。――今夜はおしまの逮夜だ。
光長　あゝ……(膝を叩く)
校長　行かれないといつてやつたらわざ〳〵いま送り膳をしてよこした。――そのこれは御馳走だ。――君もおしまは手鹽にかけたことがあるんだから……
光長　さうでございますか?――では、まア御遠慮なしに……(いつて矢つ張りおづ〳〵した感じに猪口をとり上げる。)
(校長、酌をする。――そのあと自分の猪口につぐ。うまさうに飲む。)
校長　どれでもいゝものに箸をつけて下さい。
光長　有難うございます。

校長　このよせものなんぞ好ささうだ。――どうです……

（皿の位置を變へる）

光長　へえ、いたゞきます……

校長　わたしは、さかなは、あるにそれは越したことはないが、なくつてもまた、一向こまらないはうでね。――それこそ福神漬でもあればそれでいゝ……（重ねて自分の猪口につぐ――光長に）さア……

光長　おそれ入ります（猪口を出す）――しかし。――しかし先生が……

校長　……？（光長の顏をみる）

光長　いえ、先生が。――それほど先生がお好きとは、わたくし……

校長　何を？（飲む）

光長　いえ、御酒を。――それは、いえ、召上ることは承知してをりましたが、始終さう御晩酌を……

校長　いや、始終はやりません、日曜だけです……

光長　日曜だけ……？

校長　それも人の出入のあるときはやりません。――今夜はもう誰も來ない、何のじやまも入らない。――さうとみきはめのついたときでなければやりません……（ついで飲む）

光長　（やゝ狼狽てゝ）と、わたくし。――今晩、これは、とんだ心なしを……

校長　いや、君ならいゝ。――君なら構ひません。

光長　しかし……

校長　君とは、わたし、一度いつか一しよに飮りたいと思つてゐたんでね……

光長　おそれ入ります。

校長　いえ、ほんたうに。――ちやうどいゝ機會だ。――遠慮なく、君……（酌をする。――自分のはうにもつぐ。――殘りをあとの銚子にうつして鐵瓶のなかに入れる）

光長　どのくらゐしかし召上るので？

校長　そんなに、いえ、いまは飮らない。――たか〴〵二合。――いゝところそのくらゐ……

光長　お一人でしかし……

校長　以前は飮んだ。――これで十四五年まへは一升酒……といひたいがもつと飮んだ……

光長　とてもそれは……

校長　で、いざとなると夜明し。――常住夜明しです。それでゐて、そのころ、平氣であくる日、子供たちの面倒がみられた……

光長　とても、それは、わたくしども……（わらふ）

校長　體も一つはよかつたに違ひないが、それよりも、大根は、畢竟そばにさうさせる相手がゐたからさうした亂

暴も出來たんで。——光長君のまへだが、これ、酒はやつぱり氣のものでね……

校長　それは、もう……

光長　わたし、君に、以前一丁目の紺屋の露地で、野上の先代と隣同士ゐたことを話したことがあつたと思ふが……

校長　へえ、いつぞや。——いつぞや一寸うかゞひました。

光長　その時分だ。——野上のその先代と暇さへあれば二人で飲つた。——これが、また、わたしに輪をかけた強の者でね。——いざ飲み出したとなつたらテコでもうごかない。——と、此方もつい負けない氣になつて……（さういひながら鐵瓶から銚子を出す。——一寸加減をみて、光長につぎ、自分につぐ）すこし、これは、つきすぎたか知れん……

光長　いゝえ……（飲む）

校長　その時分、まだ、二人ともとにかく輕身だから暢氣だつた。だれに遠慮もなかつた。——その後、まア、兩方が家内をもち、わたしのはうには出來なかつたが、先方にはすぐ女の子が出來た。——さうなると、さすがに、それまでのやうなこともさう〳〵は出來なくなつたが、それでもなほとき〴〵は、その網の目をくゞつて一寸々々寄合をつけた。——飲み出せば、これ、おたがひに女房も子供もないこと——そこは若い時分の有難いところで、いくら周圍で何といはうと、さうなつたら聞くんぢやアない。——それぢやア隨分失敗つた……（わらふ。——猪口をあけて光長にさす）一つ上げよう……

光長　へえ、これは……（うける）

校長　（酌をしながら）こも〴〵野上のうちとわたしのうちとはさういふ關係に出來てゐるんだ。——だから、そのうち、先方も表店へ出る、こつちもこゝへ來る。……さうなつたとき、おたがひが東京にこれといふ知合をもつてゐない。——何かにつけて心細い。——そこで、兩方が、親類にならうならうといつたわけにまでなつた……

光長　有難うございました。（飲んで校長にかへす）

校長　（うけとつて）で、何事によらず力になり合つた。——（光長の酌をしようとするのを）いゝえ、いゝ、勝手につぐ。（銚子をとつて自分でつぐ）——家内の死んだときなんぞ、だから、來年がもう十七年になるが、葬式萬端、何から何まで一人で野上がやつてくれた。——いまでもわたしはその心いれを覺えてゐる。（飲んですぐまたつぐ。——光長に）さア……

光長　（やゝ狼狽てゝ）いえ、もう……

校長　まア……

光長　わたくしはもう……

校長　いゝぢやアないか、まア……

光長　さうでございますか？――では……（猪口を出す）

校長　だから、わたしも……（酌をする。――そろ〳〵もう醉つて來てゐる）

光長　へ、おそれ入ります。

校長　その代り、わたしも、先方がいまの養子をとるときには骨を折つた。――たのむといふからよろしい。――わたしは引うけた……

光長　と、「魚吉」のいまの主人さんは、あれは……？

校長　男の子がないんで子飼からの奉公人を養子に直した。――紺屋の露地で生れた女の子。――たつた一人のその女の子に娶した。――いまのあの內儀さんさ……

光長　と、家附の……？

校長　（それにはこたへず）が、その、店のその七藏をさうするについて、だ。――東京の生れで氣立もいゝ、目さきもよくみえる、稼業にも熱心だ。――どこに一つ難はない。――聟として持つて來いだ。――俺はさう思ふがどうだらうといふからわたしも賛成だ。あれなら、末始終、必とうちのためになる。――といつたもの〻、さて、こゝに一つこまることがある。――搔暮目のみえないことだ。

光長　目の？

校長　いゝえさ、このはうがまるでいけない。（ものを書く手つきをする）

光長　それは、また……

校長　聞いてみるとそれが可哀想なんだ。――小さい時分、生さない仲の親の手に育つたんだ。――それでさうなんだ……

光長　なるほど……（仔細らしくうなづく。――急に銚子をとつて校長につぐ）

校長　が、さうはいふもの〻、とりやうによれば此奴わけのないことだ。――仕込めばそれでいゝことだ。――よろしい、請合つてわたしが一人前にする。立派な後繼ぎに仕立てゝみせる。――さういつて、それから、毎晩店を仕舞つたあと一時間づゝわたしは當人を手許に呼んだ。――いろはのいの字からわたしは手をとつて教へた。

光長　………

校長　それをちやうど二年つゞけた。――わたしも一生けんめいだつたが、先方はわたしよりもつと一生けんめいだつた。――うそをいへば、その二年の間、一ト晩といへども缺かさなかつた。

光長　………

校長　一心はおそろしい。――それには元々性がいゝんだからすゝみも早い。――その間に、君、新聞の續きもの

ぐらゐ讀めるやうになつたぢやアないか……

光長　（感動したやうに）御丹精で、しかし……

校長　無論當人はよろこんだ。――わたしも面倒み甲斐のあつたのを喜んだ。――が、當人より、わたしより、誰より野上が一番喜んだ。――安心だ、これでもう安心だ。その當座、顔をみるたんびにうるさくそればかりくり返した。（銚子をとつて自分につぐ）

光長　………

校長　末始終必とうちのためになる。――さういつたわたしの眼に狂ひはなかつた。――先代も、それは、ぼてふりから表店に仕上げたくらゐだから働きものだつたには違ひなかつた。――が、その先代が死んでいまの代になると、普請はする、奉公人はふやす。――とう／＼手を擴げて祝儀不祝儀の仕出しまでするやうになつた。――日一日と榮えるばかりで、わつか八九年のあひだに、この近所での、立派な、評判の店になつた。――あの世で、さぞ、先代が喜んでゐるだらうと思ふと人事のやうには思へない。

光長　………

校長　といふのがまことに人情のある男でね。――無口で世辭けいはくはこれツぽかりもないが、以前のことをいつまでも忘れないで、蔭になり日南になりわたしのことを思つてくれる。――いまでこそめツたに逢ふこともなくなつたが、三四年まへまでは、おもひ出したやうにときどき機嫌をきゝに來た。――で、よく、外へ出ちやア一しよに飲んだ。――そして、いつも、そのたんびに、自分に出來ることなら何でもする。――遠慮なくいつてくれ。――先生のためならどんなことでもする。――懇懇さういつたもんだ……

光長　………

校長　さういはれると、さて、ぢやアかうしてくれ。――氣の毒だが、一つ、これをかうやつてくれ……とは、これ、光長君のまへだがいへないもんでね……

光長　……（うなづく）

校長　いざとなれば、だから、どんな無理でも聽いてくれる。――わたしはさう思つてゐる。――強情にわたしはさう思つてゐる。――だから、君、わたしは氣丈夫だ。――誰が知らなくつてもあの男だけはわたしの氣を知つてゝくれる――わたしも、また、あの男の料簡をよく知つてる……（銚子をとつて自分につぐ）――いふことの辻褄がだん／＼合はなくなつて來る。――なぜそんなことをいふのか自分にもよく分らないかたち……）

光長　（正直に）しかし。――しかしわたくし……

校長　えゝ？（銚子をもつたまゝ聞きかへす）

光長　いえ。――わたくしは、いえ、萬々そんなことはない。――そんなことは風說にすぎない。――さう思つてをりますんですが……

校長　まア、君。――あけ給へ、それを……

光長　へえ……（いそいで冷えた猪口をとり上げる）

校長　さア……（酌をする）――あゝ、いけない。――こいつアもう空だ……

（校長、すぐに立つて臺所へ行く。――光長、キヨトンとした感じに一人殘される。）

（間）

（校長、新しい銚子をもつてかへつて來る。）

光長　（校長のすわるかすわらないかに）もツぱら、しかし。――專らしかしさういふことを……

校長　な、何を……？（銚子を鐵瓶に入れる）

光長　げんに、いえ、今日も正守君が來て心配してをるやうなわけで、――實は、わたくしも、返事にこまる仕儀で……

校長　……？（眼をパチ〳〵させる感じに）

光長　しかし、また、いまのやうなお話をうかゞふと。――どこから、しかし、さういふはさの出てまゐりましたもんですか……

校長　（急に）わたしには分らない。――何だね、それ？

光長　へえ。――いえ……

校長　（銚子を出して）さア君……

光長　へえ……

校長　……（光長に酌をする。――そのあと自分につぐ）

光長　（さぐるやうに）しかし。――お聞きぢやアございませんか、しかし……？

校長　聞かない。――何をさうそんなに……？

光長　いえ、市の學校の近々いよ〳〵出來ることになつたといふ……

校長　どこに？（猪口の手をとめる）

光長　それが。――それが、いえ、「魚吉」の……

校長　「魚吉」のどこに？

光長　「魚吉」のいまをりますあとに……

校長　だつて、君、あすこは。――あすこの地面は……

光長　「魚吉」のものださうで。――それを市がいゝ値に買上げたんださうで……

校長　……？

光長　そのために、「魚吉」では、麗小路のはうにいまよりもつと手廣い店をめつけたとかめつけてゐるとか……

校長　（急にわらふ）そんなことはない。――それはうそだ。（飲む。――すぐ、また、あとをつぐ）

光長　（さそはれて）いえ、それは。――わたくしも、そ

れは……

校長　假りにもそんなことがあれば最初にわたしのところへ來るはずだ。——かういふ話があるとまづわたしのところへさういつて來るはずだ。——それが何ともいつて來ない。——それがたしかな證據ぢやアないか……

光長　(拍子拔けのしたやうに) へえ……

校長　そんな馬鹿なことがあるものか……そんなことをしたらわたしが。——みす／＼この學校が。……(打捨るやうに) そんなめッたな眞似をする七藏ぢやアない……

光長　しかし……

校長　わたしはあの男が好きだ。——いまの野上のうちであの男だけが苦勞して來てゐる。あとのものたちはそれをして來てゐない。——駄目だ……

光長　………

校長　どうしたんだ?——ちッとも、君、飲らないぢやアないか?——なぜ、もつと。——ずん／＼もつと飲らないんだ?——さ、お酌しよう……

光長　いゝえ、わたくしは。——わたくしは、もう……

校長　何をいつてるんだ。——いつまでおんなしことをいつてゐるんだ。——さ、出し給へ。——猪口を出し給へ……

光長　いゝえ、ほんたうにもう……

校長　ほんたうもうそもあるものか。——折角いゝ心もちになつて來たんだ。——それをそんな野暮な。——さ、器用に飲み給へ……

光長　しかし……

校長　飲めといつたら飲み給へ。——何でもいゝから飲み給へ……

(校長、無理に光長に、立續けに三四杯飲ます。——それに準じて自分もその以上飲む。)

(……光長、がくりと急に醉ふ。)

校長　それより、君、峰君はどうした?あれッきり、君、逢はないか?

光長　へえ、あれッきり。——あれッきりで……

校長　あのときは殘念なことをした。——もつと、あのとき、わたしは峰君とゆつくり話がしたかつたんだ。

光長　いゝえ、峰さんも。——峰さんもあとでさういつてをりました。——峰さんは、先生……

校長　(構はず引取つて) わたしは峰君が好きだ。——七藏が好きなやうに、わたしは、峰君が好きだ。——必と峰君も。——必と峰君もいまにものになる……

光長　(うなづいて) なります。——必となります。——自分でも、來年は、必と辯護士の試驗のうかるやうにする。——この間もはッきりさういつてをりました……

校長　君、飮まうぢやアないか。――今度、一度、峰君と三人でしみ／＼飮まうぢやアないか……

光長　飮みませう！――それは面白い。――いゝえ、それは面白い……

校長　峰君、來るだらうね？――來てくれるだらうね？

光長　來ます――必と來ます。――喜んで必と來ます……

校長　わたしは好きなんだ。――わたしは峰君が好きなんだ。――だのに、――わたしは、峰君とあんな氣不味いことをしたんだ。

光長　いゝえ、峰さんは。――峰さんは先生を誤解してをりました。――たしかにさうでした。――が、あとになつて。――あとになつてそれが分りました。

校長　それでいゝ。――分つてくれゝばそれでいゝ。――人間は、君、みんなもちつ持たれつだ。

光長　全く。――これはもう全く……

校長　もちつもたれつ相生の――もちつもたれつ相生の、松と松とのわかみどりだ。――實際だよ。――ほんたうだよ……

光長　（うたふ）こつちに思へばその人も……

校長　一つ聞かせようか、わたしの淨瑠璃を……？

光長　あなたが？（校長の顏をみる）

校長　かうみえても、君、わたしのは上方仕込だよ。

光長　うかゞひませう。――

（校長、眼を瞑ちてうたひ出す。――思ひもよらない美音……）

校長　……ためかやいまは冬枯れて、すゝき尾花はなけれども、世を忍ぶ身のあとやさき、人目をつゝむ頰かむり、かくせど色香梅川が……

（……光長、おなじく眼を瞑ちて聽く。）

（間。）

校長　いけない。――久しくやらなかつたらまるで聲が出ない……（銚子をとつてつぐ。――出ない）何だ、おつもりか……

光長　先生、とつて來ます。――わたくしがとつて來ます。

（すぐ立上る）

校長　すまない。――君を煩はしちやアすまないが……

光長　そんなこと。――そんなこたア……

校長　鼠入らずの横んとこ。――米櫃のそばの――そこにさかみやの德利が置いてある……

光長　分ります。――分ります……（ふら／＼しながら臺所へ行く）

（間。）

光長　（聲だけ）やア、これは。――ありません、先生……

校長　ない？（ふり向く）

光長　此方もゝうおつもりで……

校長　そんなわけはないが……（立ちかける）

光長　よろしい。――いゝえ、よろしい。――すぐに行つて來ます……

校長　どこへ？

光長　さがみやへ行つて一升すぐ持つて來るやうに申しつけて來ます。

校長　それは、君……

光長　いゝえ、よろしい。――わけアありません。

校長　しかし……

光長　いゝえ、よろしい。――大丈夫。――大丈夫……

（光長、そのまゝ臺所から出て行く。――校長、障子のそばまで立つて行く。）

（間。）

（校長、ふら〳〵とまたもとへ返る。――それ〴〵空いた銚子を未練にもう一度づゝふつてみる。――あきらめる。）

校長　（眼を瞑ぢてまたうたふ）わしが父さま母さまは、京の六條の珠數屋町……

（……ぐたりとした感じ。）

（間。）

（校長、横になるともなく横になる。――くど〳〵何かつぶやくやうにうたひながらそのまゝうとうとする。――眠る。……）

（間。）

――幕――

おその

（ある古劇のアレンジメント）

□

おその
六三
お梶
清兵衛
長庵
七郎助
その他

□

江戸深川

□

……お梶、屏風をあけて床の上のおそのに藥をのませてゐる。

おその　（心から感謝するやうに）　有難うございました…

お梶　飲めたかい？

おその　えゝ

お梶　それによかつた、藥さへとほれば安心だ……

おその　えゝ……（やゝ苦しさうにうなづく）

お梶　何か食べてみようとお思ひでないか？

おその　有難うございますけど。――胸がまだ痞へてをりますから……

お梶　何か、しかし、無理にでもたべないと。――何にもまだ、昨夜からたべてゐないんだから……

おその　すみません。――御心配ばかりかけまして……

お梶　何だね、そんな他人がましい……

おその　（力なく）　いゝえ、お内儀さん、ほんたうに、わたくし、よくしていたゞけば頂くほどお内儀さんにお氣の毒で……

お梶　それがいけないんだよ。――そんなことをいふのがそれがよけい病ひに障るんだよ。――そんなことをいふ手間に、お前、精出して藥も飲み、たべるものも食べてさうして一日も早く座敷へ出られるやうになつてくれる。――さうしてくれるのがわたしには一番うれしいんだよ。

おその　えゝ……

お梶　といふのも、お前といふ人は、好きでわたしがうちへ連れて來た人。――あんまり兄さんの仕方が憎いから、善六さんに話し、横から出て無理にわたしのところへ抱へた人。――だから、わたしにすれば、どうしたつてこ

の土地で、吉原にゐたときよりもつとお前を立派に賣出させなければ。――さうしなければわたしの意地が立たない。

おその　それは、いゝえ、それはよく分つてをります。

お梶　（やゝ寂しく）それは、まア、あゝいふ邪慳な兄さんをもつたことや、お屋敷の首尾をわるくした六三さん……

おその　……（おもはず顔を上げる）

お梶　……とかいふ方のこのさきのことや。――それからそれいろ／＼思ひまはしたら、でなくつても狹い女ごゝろに。――それには、わたしにいはせれば、苦勞はしてもそれだけにまだ年を、――きな／＼思ふなといふのはさういふわたしのはうが無理かも知れないけれど……

おその　……（さしうつむく）

お梶　けど、これだけはいつて置くよ。――わたしの口からさういふのは可笑しいけど、根がお肚の綺麗なうちの人はもと／＼この稼業が好きでないんで、時節さへ來ればそれこそ明日にでもこの稼業を止めたいと始終それはわたしにさういつてゐる。――以前中裏にゐたのをいまこの横町に引つ込んだのも、大ぜいゐた子供たちをみんな外へ住替へさせたのも、つまりはみんなその心からしたことで……

おその　……

お梶　といつたところで、いくらさう此方でばかり思つたところで、それもみんなさだまる約束だから、仕合なうすければ一生さう行かないかも知れない。――一生このまんまで終らなければならないかも知れない。――でもいゝ。――でも構はない。――一生わたしたちはそのつもりで。――一生そのつもりを大切にもつて暮して行けばいゝんだから……

おその　……

お梶　さういふ心もちなんだよ、わたしたちは。――賣出させるの、伸立せるのといつても、決してだからわたしたちそれを店のために、自分たちのためにさういふんぢやアない。――無理からさういつてお前を稼がさうといふんぢやアない。――はじめて逢つたときから、わたしもお前を親身の妹のやうに思へば、うちの人もまた、どういふものか俺はおそのが不憫でならない。――あゝいふやさしい氣立の子がどうしてさう苦勞をするだらう。――お前がうちへ來るとからわたしにさういつてゐる……

おその　……

お梶　それだけに、わたしたち、たゞもうお前の身の末があんじられてね……

おその　……

お梶　このうへの不仕合に、このさきまたどういふ辛いことが出て來るか知れない。どんな憂苦勞がわいて來るか分らない。――でも、必ずそれを氣に病んでめつたなことはしないでおくれね。――すこしでも思案にあまることがあつたら、かくさず打明けておくれね。――どんなことが起らうとわたしたちがついてゐれば決してわるいやうにはしないから……

おその　……

お梶　必ずはづかしいことや悲しいことは聞せないでおくれよ。――たのむから。――たのむからどうぞ聞かせないでおくれ。――えゝ？――いゝかい……？

おその　有、有難うございます……（泪をふく）

お梶　……（おそはれてともに衿と泪をふく）

おその　親方さんやお内儀さんがさうまでやさしくして下さるにつけても……

お梶　えゝ？

おその　いゝえ、どうしてあゝ兄さんは……（再び泪をふく）

お梶　それがいけない。――そんなよけいなことを思ふからいけない。――それもゝうわたしが引うけて話をするといつたからは何にも心配することはない。――何でも氣を大きく。――氣を大きくもたなければいけない……

おその　えゝ――えゝ……

お梶　（わらつて）さういふわたしも惡い。――そばでわたしがつまらないことをいろ〳〵いふもんだから……――堪忍しておくれ……

おその　いゝえ、そんな……

お梶　さ、すこしまた横におなり。――さうおし……

おその　えゝ、……

お梶　いつまで起きてゐて風にあたるといけない。――大分、また、先刻方から冷えて來たから……

おその　えゝ。――では、すこし、やすませていたゞきます……

お梶　さうおし。――ゆつくりお休み。――さ、わたしが懸けてあげる……

おその　いゝえ、おそれ入ります……

お梶　いゝからおやすみ……

（おその、横になる。――お梶、夜着をかけたりする……）

（間。――お梶、屏風を引廻して去る。）

（……長庵、七郎助と一しよに門に來る。）

長庵　御免。――御免……（……返事なし）御免。――（そばで七郎助のぶつくさいふのを押へて一ト際聲を張上げ

る）お留守かな？　どなたもお留守かな？

「はい、どなた？」といひながら、お梶、おくから出て來る。）

お梶　（それをみて顏を曇らす。――が、あいそよく）まア、長庵さんに七郎助さん。――よくおいで。――さ、さアどうぞ……

長庵　（七郎助をふり返つて）お許しが出た。――さアどうぞ……

七郎助　まアお手前から……

長庵　いや、まア……

七郎助　まア……

長庵　では年やくに愚老から。――はい、御免。――御免を……

（長庵をさきに七郎助、くど〱いひながら座敷にとほる。――二人とも醉つてゐる。）

長庵　いやお內儀、この中は……

お梶　まアお二人ともいゝ御機嫌で。――今日はどちらへ？

長庵　いや、こちらへ。――どちらへでもなく此方（こちら）へな……

お梶　（やゝ皮肉に）それは、また……

長庵　といふのもおそのゝ身の代。――お內儀、あの後金のしらちはどうつけて下さる？

お梶　だから、それは、あのときもいつたやうにおそのと兄妹（きやうだい）の緣さへ切れば。――さうさへして下さればいつでもそれは……

長庵　しかし、お內儀……

お梶　（押へて）が、それにしても肝心のおそのが、昨日から氣合をわるくしてやすんでゐます。（屏風のはうへこなし）そのことでしたら、長庵さん、またのことにして下さいまし。

長庵　と、あの妹は？――一寸、では、容體を……（立ちかける）

お梶　（とめて）あゝ、それは。――折角いま眠つたところ。――いま起しちや可哀さうですから……

長庵　それもさうか？（うなづいてすわる。――七郎助と顏をみ合せる。――暗默のうちにこなし）がお內儀……

お梶　……？

長庵　もし愚老が。――假りにもし愚老がその話を承引（うけひ）かずとしたら。――いやといつたらそのときはどうなさる？

お梶　いやといつたら？

長庵　（うなづいて）おそのと兄妹の緣を切り申さぬ。――未來永々切り申さぬ。――さうしたときはどうなさるな？

お梶　それは、また？――何で、また、そんなことを？

長庵　何でゞもよい。――そのあかつきはどうなさる？

お梶　それはそのときは……

長庵　そのときは？

お梶　それまでのことゝ思つていたゞきませうよ。（横をむく）

長庵　しめた！（手をうつ）

お梶　えゝ？

長庵　（七郎助に）話は出來た……

七郎助　おッと……（ふところから財布を出して長庵のまへに投げだす）

（長庵、いそいでそのなかゝら小判で二十兩出す……）

長庵　お内儀、いつぞやの手附に二十兩。――さ、耳をそろへてお返し申す……

お梶　（や、狼狽てゝ）長庵さん……

長庵　金を返せば、おそのはやつぱり愚老の妹。――煮てくはうと燒いて食はうと。……（七郎助に）あとはそつちの腕次第だ……

七郎助　これでやつと落着いた……

（急に、おその、屏風のかげから轉び出る。）

おその　後生です……後生でございます、お内儀さん…

お梶　あゝ、お前……（掻き抱く）

おその　いやです。――わたしは行きません。――死んでもわたしは七郎助さんのところへは行きません……（泣く）

お梶　わたしのうつかりしたばかりに。――うつかり多寡をくゝつたばかりに。――堪忍しておくれ。――堪忍しておくれ……

おその　いゝえ、そんな。――みんな兄さんです――みんな兄さんのするわざです。――わたしは――わたしは、もう……（泣き入る）

お梶　いけない。――氣をしづかに。氣をしづかにおちつけて……

おその　えゝ。――えゝ……

お梶　心配おしでない。――悪いやうにはしない。――決して悪いやうにはしないから……

おその　えゝ。――えゝ……

お梶　大丈夫。――大丈夫だから……

（長庵、七郎助、そのさまを冷かにみまもる。）

長庵　いくら泣いてもわめいても、だ。――もういけねえ。――もう間に合はねえ。

七郎助　そろ〳〵、ぢやア、出かけようか。――酒がさめたら里ごゝろがついた。（煙草入をしまひかける）

長庵　よからう。――話がつきやア片時（かたとき）もこんなところにある義理はねえ。――行かう。――さ、おその、行かう

……（立上つておそのを引立てる）
お梶　（遮る）長庵さん……
長庵　（空つとぼけて）えゝ？
お梶　いかに何でも、お前。——それは。——あんまり、それは……
長庵　あんまり、それは？——何が？
お梶　何がつて、お前、寢てゐるこんな病人を……
長庵　なアに大したことはねえ、陽氣あたりだ。——名醫の見立に間違ひはねえ。——（おそのに）行かう。——さ、行かう。——（じやけんに）素直に、えゝ、來やがらねえか……
おその　（消え入るやうに）お内儀さん。…お内儀さん…
お梶　あいよ。あいよ……
（……お梶のやるまいと支へるのを、七郎助、そばからそれをさまたげる。——その間に、長庵、無理からおそのを上り口までつれて出る。——おその、かなはぬながら行くまいとする……）
（間。）
（淸兵衛、つと外から入つて來る。——揉合ふなかに割つて入る。——とゝ、長庵と七郎助を搔退けおそのをうしろにかばつて立つ。）
長庵　手めえは淸兵衛……
七郎助　何を、うぬ、こちとらの邪魔をしやアがる……
淸兵衛　話は外で聞いた。——何にもいはずといゝ……
長庵　といふなら。——それなら俺たちのすることにいなやはあるめえが……
淸兵衛　いなやはねえ。——いなやなんぞあるものか……
（わらふ）
長庵　ぢやア、なぜおそのを渡さねえんだ？——音無しくなぜ渡さねえんだ？
淸兵衛　いなやはねえが不足がある。
長庵　何だと？
淸兵衛　（お梶に）おい、その金をこつちによこしねえ。
（お梶、そこにそのまゝになつてゐる小判をとつてわたす。）
淸兵衛　（念を押すやうに）長庵さん、これア小判だね？
長庵　念にはおよばねえ
淸兵衛　いつぞや女房が手附に渡したのは櫻銀だ。——矢つ張その一分銀で返してもらへめえか。
長庵　戲談いやアがれ。——いつまでそれをもつてる間拔があるものか。——ふざけるのもいゝ加減にしろ。
七郎助　それとも小判は通用しねえといふお觸でも出たのかね？
淸兵衛　出たからいふのだ。

長庵・七郎助　何だと?

清兵衛　裏にこの三星の極印。――昨日さるお屋敷でぬすまれたといふ小判もたしか……

七郎助　……(おどろく)

清兵衛　と、まア、いつてしまつたら曲がねえ。――さ、これはそつちへ大切にしまつて置きなせえ。(わらつて財布ぐるみ七郎助のまへに投出す)
(七郎助、いそいでそれをふところに入れる。)

長庵　(うさんな顔で)ぢやアその金は?

七郎助　箆棒め、そんなあやしい金ぢやアねえ。

長庵　そんなら遠慮することアねえ。――さつさとさア手附を返してしまひねえ……

七郎助　でも、折角さきでさういふもんだ。――器用に一歩銀の耳をそろへてもよし、さうでなければ手附を返さず、福島屋清兵衛は悪足のある女を承知で證文したと、とてものことに觸れてあるく。――さうすれば、このさき、人中へ出て二度と高慢な口はきけねえ。

長庵　なるほど、それもいゝだらう。

清兵衛　お梶、おそのゝ身もとはお前が洗つたはずだ。――そんなことのある女か?

お梶　いゝえ、この子に限つて。――それは何かの間違ひです。――そんなことのあるわけがありません。

長庵　ない?――必とないか?――お内儀、必とないか?

お梶　ないといつたらありません。

長庵　これでもないか?
(長庵、いきなりおそのゝ腕をとつて引据ゑる。――袖をまくつて入ぼくろをみせる。)

長庵　六三命……

清兵衛・お梶　……

長庵　(にく／＼しく)こんな證據があつてもこれでもないか?

清兵衛・お梶　……

長庵　ざまアみやがれ。
(長庵、七郎助をかへりみてわらふ。――清兵衛、いきなり持つた煙管の火皿をおそのゝ胸に押しつける。――おその、苦しむ……)

お梶　(おどろく)まアお前さん……

清兵衛　うるせえ、しづかにしろ。

お梶　……

清兵衛　長庵さん、七郎助さん、これで文句はあるめえか?

長庵　うん、さすがは福島屋、いゝ度胸だ……

清兵衛　と決つたら、こゝは上り端だ、奥へ來なせえ。
（自分から立つ）
長庵　（やゝ皮肉に）此奴は汐さきが變つて來た……
清兵衛　お梶、酒の支度をしねえ。
お梶　だつて、お前さん……
清兵衛　いゝからしろつていふんだ。
（清兵衛をさきに、長庵、七郎助やゝ煙に卷かれたかたちに奥へ行く。——お梶、おそのに心を殘してあとに從ふ。）
（間。）
（……六三、窓のそとに來る。）
六三　おその、おその……
おその　……（顔を上げる）
六三　こゝだ、こゝだ……
おその　まア六三さん。——お前、どうして……？（窓のそばによる）
（二人、手を取合はないばかりにそのまゝ、しばらく泪にくれる。）
六三　……さうして、お前は、いよ／＼こゝのうちへ證文することに？
おその　いゝえ、それが、いまになつてまた兄さんが……
六三　得心しないのか、長庵が？
おその　（力なく）えゝ……
六三　矢つ張、それも、七郎助の……
おその　そ、さうなんです。（泪を拭く）——わたしは、もう、六三さん。——わたしはもうあきらめました。
六三　おその、それは何をいふのだ？（やゝ鋭く）
おその　いゝえ、とてもこの世では添へない二人。——わたしといふものゝゐた分にはいつまであなたもお屋敷へ御歸參は出來ません。——大切な色紙の行方を知れなくしたのもわたしなら、そんなしがないおすがたにしたのもわたし。——わたしさへ緣が切れゝばせめて親御へのお詫だけでもかなふだらうと思ひます。……
六三　（冷かに）お前とわかれて何の榮耀。——この上まだどんな苦勞でもわたしはいとひはしない……
おその　といふのは、いゝえ、とも／＼わたしもいつまでさう苦勞をするより、いつそのこと七郎助さんの……
六三　おその……
おその　いゝえ、一生わたしは、樂に暮したくなりました。
六三　……（ぢつとおその、顔をみる）
おその　六三さん、さういはれるのがくやしければ、さ、斬つて下さい。——斬るとも突くともして下さい……
六三　……
おその　浪人するとさうも未練に……

六三　……

おその　女でも、わたしたんぞ、いざとなればこの通り……（腕をまくつてみせる）

六三　……（驚く。――丸腰なのをくやむこなし。――急に窓のそばを離れる）

おその　六三さん……

六三　えゝ、待つてをれ……（六三、いそいで去る。）

おその　堪忍して下さい。――堪忍して下さい。――この言譯は未來で必と……（そのまゝ泣きくづれる）

（……長庵、出て來る。）

長庵　出來した、出來した。――これでこそ俺の妹だ。――長庵の妹だ……（機嫌よくさういひながらおそのゝそばにすわる）

おその　それおやア、お前……

長庵　障子のかげからちやんとみてゐた。――よく六三を突出した。――よく、手めえ、その氣になつた。――褒めてやるぞ、褒めてやるぞ……

おその　いゝえ、あれにはいろ〳〵……

長庵　わけでもあるといふのか？

おその　……（かすかにうなづく）

長庵　（わらつて）わけもへちまも入るものか。六三とわかれゝば、これでいゝんだ。あとは七郎助の御新造だ……

おその　あゝそれだけは……

長庵　まだそんなことをいつてゐやアがる。――いけ強情な。（といひかけて）うんといへ、うんといへ……

おその　……

長庵　惡いことはいはねえからうんといへ。――手めえさへうんといへば、手めえばかりぢやアねえ、俺まで一生左團扇でくらせるんだ。――たのむ。――たのむから合點してくれ……

おその　……（かぶりをふる）

長庵　かぶりをふるのは嫌か？――そんなら此方にもしようがある……（ふところから袱紗づゝみを出す）これをみろ。

おその……（顔を上げる）

長庵　これこそ六三が草を分けてさがしてゐる小倉の色紙だ。

おその　えゝ？（おどろく）

長庵　これがほしければうんといへ。――いやだといへば百兩が千兩積んでもわたすこつちやアねえ。

（おその、急にそれへとりつく。）

長庵　えゝ、何をしやアがる……（引放す）

おその　どうぞ。――と、どうぞ、兄さん。――それさへ

あれば六三さんの――六三さんの御歸參が。――おねがひです。――おねがひです。――おそのゝ一生のおねがひです……(身を揉んで哀訴する)

長庵　(冷かに)　知らねえよ。

おその　そんなこといはないで。――そんな邪慳なことはないで……

長庵　どつちが邪慳だ?――いふことは聽かねえ、色紙はよこせ。――さういふ手めえのはうがよつぽど邪慳だ。――そんな勝手な奴があるものか……

おその　いゝえ、わたしの惡いところはあやまります。――いくらでも惡いところはあやまりますから……

長庵　うるせえな。

おその　兄さん。――ねえ、兄さん、――ねえ、兄さん、後生ですから……(再びとりつく)

長庵　(急に)　えゝ、いゝ加減にしやアがれ……(用捨なくふり拂ふ)

(おその、カッとしたかたちにいきなり長庵にむしやぶりつく。――長庵、不意をうたれてやゝ怯む。――おその、その隙に色紙を手もとにとらうとする。長庵さうさせまいとする。爭ふはずみに、色紙、眞ん中より裂ける。――二人とも仰天する……。)

長庵　(捨鉢に)　さまアみろ。これで六三は一生うもれ木だ……(手の餘つた半分をずた〱にやぶく)

(おその、長庵の差添を拔くより早く長庵に斬りつける。)

長庵　何の眞似をしやアがる……(押へる)

(おその、ふり切つてまた夢中に斬りつける。長庵、必死にその刄の下を掻いくゞる。――とゞ一ト太刀二タ太刀斬られる。逃げ損じてあへなく絶命する……)

(間。)

おその　兄さん、お前ばかりは殺さない、わたしもあとからすぐに行きます……(泣く)

(……「おその、おその」と奥で清兵衛の呼ぶのが聞える。――おその狼狽てゝ、あり合す蒲團を長庵の上にかける。)

(清兵衛、出て來る。)

清兵衛　何だ、おその、そこにゐたのか?――兄貴はどうした、歸つたか?

おその　は、はい、いま。――こゝにいま醉つて寢てをります。

清兵衛　そつと、ぢやア、そのまんま寢かして置け。

おその　は、はい……

清兵衛　ありやうは尾花屋から是非といつてお前をかけて來た。體がわるいと斷つたら、一寸でいいから顏だけで

もみせてくれ、吉原の時分のお馴染だと追ッかけてまたいつて來た。――馴染とあつちやアこちとらの一存にも行かねえ、――折角よくなりかけたものを無理をしてまたぶり返してもつまらねえが、外へ出てまた氣が晴れるやうなら却つてそれもいゝだらう。――さう思つてお前の耳に入れるんだ。――どうでもお前の氣儘にしねえ。

おその　有難うございます。――それは、わたくし、やつていたゞきます。

清兵衛　さうはいふものゝ大丈夫か？――起居(たちゐ)に苦しくはねえか？

おその　大(だ)、大丈夫でございます。

清兵衛　さうか。――手めえでさういふならたしかだらう。（奥へ向つて）お梶……

（お梶、出て來る。）

清兵衛　お梶、當人にさういつたら矢つ張行きてえさうだ。早く支度をしてやんねえ。

お梶　そんなら、そのまんまで、行つてすぐ歸つて來たはうがいゝ。

清兵衛　したが馴染の客といふもんだ。着附は華奢(なで)にしてやんねえ。――どんな御大身の一座かも知れねえから下着は白無垢がいゝ、上は何でもいゝが帶はこの間拵へた蝦夷にしきを締めさせてやんねえ。

お梶　えゝ、さうしてやりませう。

清兵衛　それからあつちの座敷の膳をこつちへ持たしてよこしてくれ。

お梶　あい／＼。

（お梶、おそのをつれて奥へ行く。）

（間。）

（清兵衛、そばによつて長庵の死骸をあらためる。――女中の膳を運んで來るのにいそぎもとの座にもどる。――銚子の燗をつけて一つ二つ猪口を重ねる。――そのまゝぢつともの思ひにしづむ。）

（間。）

（お梶、座敷着に着替へたおそのをつれて出て來る。）

おその　親方さん、それでは行つてまゐります。（手をついてさびしくいふ）

清兵衛　病中の門出(かどで)だ。――一つ祝つて行きねえ。（猪口をとつておそのにさす）

お梶　さ、わたしがお酌しよう。

（お梶、ついでやる。――おその、飲んで清兵衛に返す。――ふと氣味合。――おその密(そつ)と泣く。）

（間。）

清兵衛　さ、客が待つてるだらう、早く行きねえ

おその　えゝ。

お梶　そこいらまでわたしが送つて上げようか？

清兵衞　何の、つい角を曲るばかりだ。――なア、おその……

おその　えゝ。――では、親方さん、お内儀さん、ずゐぶんとも御機嫌よろしう……

お梶　何だねえ、そんな、どこへでも行くやうに……

清兵衞　何の、さうぢやアねえ、それが當りめえだ。――お前こそ病人だ、隨分氣をつけて……機嫌よく勤めて來ねえ……

おその　有、有難うございます……

（間。……窓のそとに雪ふりいづ。）

（おその、出て行きかける。――堪へずそこに泣きくづれる。――と、舞臺暗くなる……。）

――――――――――――

……舞臺あかるくなる。――屛風のうちに、おその、われとわが泣く聲に眼をさまして起直る。怯えたやうにあたりをみ廻す……

お梶、屛風をあける。

お梶　（晴れやかに）どうしたの、夢でもみたの？

（おその、お梶の顏をみてやゝ安心したやうにほツと吐息をつく。）

お梶　ちやうど好かつた、いまもうお粥が出來たから起さうと思つたところ。――あんまり食べないのも毒だから無理にでも食べておくれ。

おその　えゝ。

お梶　こゝへいまもつて來て上げるから……（さういひながら火鉢のまへに返る）

おその　（おづ／＼と）あの……

お梶　えゝ？

おその　いゝえ、あの……親方さんは……

お梶　晝間、會所へ行つたきりまだ歸つて來ない。――どこを遊んであるいてゐるんだか……

おその　（再びおづ／＼と）あの……雪がふつてをりませうか？

お梶　（わらつて）何をいつてゐるんだね、花が咲くといふのに雪がふつてどうするんだね？――今夜はいゝお月夜だよ。

おその　……

（間。）

（おその、密と腕をまくつてみる。入ぼくろの何ともなつてゐないのにこゝろから安心する……。）

（お梶、粥の鍋を下ろす……。）

――幕――

（昭和二年五月）

里見弴篇

知慾煩惱

「嫉妬」改題

時　現代

人
男
女
俥夫
村の男、甲乙
自轉車に乘れる通行人

景

初秋の避暑地。闇の晩十一時頃。星は明かなれど、老松の間の淋しき往來にて、暗し。上手奥へ海まで五六丁のこゝろ。單調にして、而も力强き濤聲きこゆ。路傍、やゝ奥へ引つ込みて、塔型の墓石大小四五基、ささやかなる鳥居、奉納の小幟。

五十あまりの俥夫、重げに、のろくさ俥を曳いて下手より登場。俥上の「男」は堅く腕を組んでゐる。

俥夫　旦那、八幡塚(やはた)と云ふと、これですかねえ。

（ト、墓石の方を顎で指す。）

男　おろして貰はう。（俥をおりながら）いくらだ？

俥夫　えゝ、すみませんが、年寄のことですから、七十錢おやんなすつて……。

男　（蟇口のなかを搔探つて）ぢア、一圓。それから別に一圓、これは使賃だ。

俥夫　へえ？

男　これから行つて貰ふ使の前渡しだ。いま通りがゝりにお前に憶えといてくれと云つた家な……。

俥夫　へえ〳〵、あの、橋手前の……。

男　さうだ。しつかり憶えてるだらうな。間違はれると困るぞ。

俥夫　森長(もりちやう)の貸家の、向つて左の方……。

男　さうだ〳〵。ちよつと、あすこまで行つて來て貰ひたいんだ。

俥夫　それぢア、旦那、一町もあるかなしぢアありませんか。こんなに頂戴しちや多すぎますさア。

男　まアいゝからとつとき……。

俥夫　さやうですか、それアどうもすみません。

男　あすこへ行つて、もし、女中らしい女が取次に出たら、ちよいと奥樣にって、かう云ふんだ。それで、ハイカラ

な七三に結つてる女が出て來たら、ちよいと……、と云つて門口まで出て來て貰ふんだ……。

俥夫　へえ。（少し固くなる）

男　うまくやつてくれゝば、またあとで増しをやるから、忘れないやうに、しつかり憶えてつてくれよ。

俥夫　たゞ、ちよいと云へば、すぐ門口へ出て來てくれますんでせうか。

男　大抵大丈夫だ。もし怪しんでるやうな樣子だつたら、これを……。

（ト、紙入を探り、名刺を一枚ぬき出して、星明りにすかし、よく見定めてから渡す。）

同右　これを渡して、こちらさんのお使で、と云へばいゝが、それまでにしないでも、大抵すぐ出て來るよ。

俥夫　へえ〳〵。

男　出て來たら、近くに人がゐるかゐないかよく見定めて置いて、いつものところでお待になつていらつしやいますから、どうぞすぐにおいでください、つて、耳のそばで早口に云ふんだ。

俥夫　へえ。（だいぶ不安な調子）

男　どうだ、うまくやれるか。

俥夫　へえ、……まア、こんなに餘分に頂戴したことですし、こつちはどうにかやれるつもりですけれど、なにぶん先方さんが……

男　先方か、先方は大丈夫だ、お前がさう云ひさへすりア、すぐ行くとか、行かれないとか、どつちか返答をするよ。決してお前に面倒のかゝるやうなことはないから、安心してゐなさい。

俥夫　さやうですか……。

男　で、お前は、來るとか來られないとか、その返事を、もう一度こゝまで云ひに來て貰ひたいんだ。どつちにしろまた増しはあげるよ。……間違へて隣の家へでも飛び込まれたら騷動だが、大してむつかしいことぢアなし、どうだ、大丈夫やれるだらう……？

俥夫　へえ……もしまたお留守でしたら……？

男　ゐるにきまつてゐるんだが、然し、萬が一にも留守だつたら、なんにも云はずに歸つて來りやアいゝんだ。

俥夫　へえ、承知しました。ぢア、旦那、ちよつと行つて參りますから、すみませんが、その間ちよいと俥を……

男　それアいけないよ。無駄でも曳いてつて貰はなくつちア。こんなところで俥の番人をさせられてたら、通りがかりの人が……。

俥夫　なアに、旦那、終列車が着いちまやア、もうこゝらあたり、人つこ一人通りアしませんけど……

男　それアさうだが、近いんだから、まア曳いてつてくれ

よ。

俥夫　へえ、ぢア、ちよつと行つて參ります。

男　あゝ、御苦勞だがね、一つ大急ぎで賴むよ。

俥夫　へえ〳〵。

（ト、俥を曳いて行きかけるのを、うしろから。）

男　あゝ、それからね、先方の女を、決してお前の俥に乘せて來ちアいけないよ。俥はもつて來なかつたつもりで、門口から見えないところに置いとくんだ。先方で、萬一俥があるかつて訊いても、空身で、たゞ使だけに賴まれて來たやうに云ふんだよ。いゝね、解つたね。

俥夫　畏りました。

（ト、急ぎ退場。）

（男、あとを見送りながら、少しついて行き、また戻り二三度同じところを往き來する。それから、ふと思ひついたやうに八幡塚へはいり、懷中電燈であたりを照して見つゝ、だん〳〵に奧へ消える。ほどなく、また出て來て、墓石の一つに腰をおろし、手紙を取り出て、そこへ電燈の光を射つけて讀む。五六行讀んだ頃、ヒヨイと上手を見、すぐ灯を消す。可なりの速度で、自轉車に乘つた男が舞臺をよこぎる。）

（濤聲と、松籟と、蟲の音だけの、薄暗い間がちよいと續いて、俥夫が、空身で驅け戻つて來る。）

俥夫　旦那、旦那？

（ト、あたりをすかし見ながら、かすめた聲で呼ぶ。）

（男、すぐ塚を出て來て、）

男　どうだつた。

俥夫　ぢきお見えンなります。帶を締め直しながらうちへはいつて、女中さんになんか仰有ると、そのまゝすぐ出ていらつしやる御樣子でしたから、わたしは、桶屋の角に俥を置きッぱなしで來ちまひました。うしろから、俥を曳いて來るところが見えたんぢアまづいと思ひましたから……。

男　さう、それア御苦勞さん。これはね、少しだが、骨折りだ。歸りに一杯やつておくれ。でな、この話は、めつたに人に云つちア困るぜ！

俥夫　えゝ、それアもう、御安心なすつてください、大丈夫です。

同右　旦那、こんなに……。

（ト、金を受けとり、ちよいと見て、）

男　まア、いゝ。ぢや、御苦勞さんだつたね。（何も禮を云はうとするのに被せて）もういゝから、お前は早く歸つておくれ。

俥夫　ぢア、旦那、どうも重ね〳〵有難うございました。……もうぢき、お見えンなりますよ。……またどうぞお

願ひ申します。

(ト、急ぎ退場。)

(男、それに答へず、塚の蔭に身をひそめる。遠くで、村の若い衆の唄ふ、安來節か俗謠が聞える。)

(ほどなく、急ぎ足に「女」登場。すぐ「男」の姿が目にはいるものと豫期して來たのが、裏切られたこゝろで、わづかに不安を帶びた調子で、)

女　東さん、東さん！

(男、駈けより、情熱的に抱きつく。女もそれに答へる。一瞬間の後、女の背後に廻した男の手、女の肩の上から眞正面に自分の顏を照らすやうに、懷中電燈がパツと點火される。)

(女、餘りの驚愕に、息を引いたまゝ、石のやうになつて了ふ。)

(男、ゆる／＼と手をほどき、一二歩あとへ退つて、今度は女の眉間へ、近々と光を射つける。女、聲もたて得ずに、地にひれ伏して了ふ。男、なほも、女の上に光を注ぎかけて、冷熱相剋の調子で、はつきり云ふ)

男　まづ、今のやうな具合に抱き合つたと……。それから……それからどうするんだ？

(女、全身をワナ／＼震はし、地面にかぶりついてゐる。)

同右　「十二日のこと、思へば夢のやうです」と書いてあるな、無論先月の十二日だな、俺が山陰道へ出張した翌日だな。それから、十五日、十八日、二十一日、二十四日と逢つてゐるな。二十四日には、どつかへ遠ッ走りをして、泊つて來てゐるな。二十六日に歸つて來た俺に、淸水の奧さんに誘はれて、湯本の別莊へ一晩御厄介になつて來ましたと話したのが、つまりそれだな。――かういふ手紙は、もつとしつかり錠のおりるとこへしまつて置かないとなんにもならないぞ。……今月になつてから、俺は、都合五晚こつちへ歸つて來られなかつた。二日と五日と、八日と、それから十二、十三、つまり、昨日、一昨日だ。その間にはどう云ふことがあつた。今月になつてからの手紙は、來なかつたのか、來ても破つて了つたのか、ほかにしまつたのか、兎に角見當らなかつた。然し、先月の分は、今日の午後、お前が買物に出て行つた留守に、殘らず見て了つた。だから、今朝歸つて來たばかりの俺が、急に、大事な用件を胴忘れして來たと嘘をついて、もう一度夕方からうちを出かけたわけだ。――俺はこれだけあからさまにいつてやる。お前も、先月十二日、いや、あいつのことをなんとか思ふやうになつたそも／＼からのことを、今こゝで、あらひざらひ云つてしまひ！

（この臺詞にかゝると間もなく、女忍び音に泣き出し、終る頃には、烈しい嗚咽になつてゐる。男、突つ立つたまゝ、暫く待つてゐるが、とても答が得られさうもないと見てとると、小腰を屈め、肩のあたりを輕く打つて、）

同右　どうしたんだ。何故さう泣くんだ。何が悲しいんだ。俺が可厭やになつて、あいつが好きになつたのなら、今すぐにでも暇をやるから、さう云ふ點で悲しがる必要はちつともないよ……。

（調子は優しげであるが、云ひ終つて立上ると、女の肩先に觸れた指を、何か不潔なものへでもさはつたあとのやうに、衣服の膝のあたりにこすりつけて、拭ふやうな仕草をする。）

（女、泣き續けながら、首を振る。）

同右　首を振るのは、さうぢアないと云ふのか、別段、俺が嫌ひになつたわけぢアないと云ふのか。

（女、うなづく。）

同右　同時に、あの男が好きになつたわけでもないと云ふのか。

（女、うなづく。）

同右　うむ。さうすると、離緣はされたくないと云ふんだな。

（女、頻にうなづく。）

同右　では、こんな事が、どうして起つて來たんだな。好きな亭主がありながら、嫌ひな男に身をまかせる……。

女　そんな、わたし、決して、わたし、操まで……。

男　成程、體は綺麗だと云ふんだな。然しちよつと待てよ、十七日の手紙に、「お約束の品、資生堂へ行つてもありませんでしたから、あすこで教つて、態々横濱のケラーマンといふ獨逸人の藥屋まで行つて、やつと手に入れました。品は全く同じです。明日持つて行きます。先日の分は返して置かないと、ひよつと數を憶えてゞもゐられたら大へんですから……」一字一句間違ひないつもりだが、一體これは、……この手紙の文句は……。

（思はず激越の調を帶びて來るが、どうやら冷靜を裝つて。）

同右　藥屋になんの買物があつたのだ。

（女、嗚咽の聲を新たにする。）

同右　お前のしたことは、總て、一時の氣迷ひとして許しもする。だが、それについて、今更、少しでも隱しだてするとなると、――このうへ俺を騙しにかゝつてゐるとなると、それはすこウし罪が重いぞ。間違ひとか、出來心とかで片づけられないぞ。

（以上、女の臺詞は甚だ少いけれど、始終男の手から懷中電燈の光が注ぎかけられてゐるので、體の表情は

十分明かでなければならない。然るに、こゝで、男はもう一度、女のそばにしやがみ、同時に電燈が消される。明るさに馴れた觀客の目は、しばし女の在かさへ見失ふほどで、以下、臺詞は多少と雖も、却つて眞の感情の動きは、甚だ知るに難い。）

女　惡うございました。許して頂きたいのは山々ですけれど、わたしの口から、厚かましくつて、そんなことをお願ひ申上げられません。どうぞ御存分になすつてくださいまし。

男　存分にしろ……

（ト、猛然と立ちあがる。間。思ひがけない落ちついた調子で）

同右　思ふ存分にされるか。

女　どうぞ、ぶつとも、蹴るとも、殺すともなすつてください……。

男　姦通された亭主の心持と云ふものは、決してそんなもんぢやアない。そんなことで氣がすむくらゐならいとやすいことだ。

女　ぢア、どうなすつたらお氣がすむんです。

男　情ないことは、知りたいと思ふ心ばかりだ。何から何まで、寸分あまさず知りたいのだ。それを聞かせて貰ふためには、今のお前と俺と、そつくり位置を變へて、俺が――なんの過もない俺が、丁度いまお前がしてゐるやうに、大地にへいつくばつて、お前の足もとにひたすら哀みを乞ひ、許しを願ひたいくらゐだ。

女　……だつて、わたし、一體、何をお話しすればいゝのです。

男　お前と、あの男との間にあつたこと、――言葉でも、眼つきでも、仕草でも、なんでもかんでも一切合財、ひと滴も餘さず知りたいのだ。

女　まア……

男　町内で知らぬは亭主ばかりなり、――姦通された亭主を、これくらゐ慘酷に云ひ罵つた言葉はありやアしない。知りたい心よりほかにない亭主が、他人が知つてゐるほどのことを、何ひとつ知らずにゐる。こんな悲慘な滑稽は決してほかに類があるまい。知りたい！　頼むから、――この通り、地びたに手をついてお願ひするから、どうか話してくれ、何もかも、すつかり話してくれ。

（やゝ久しき間。徐々に芽ぐむ優越と、不安と、相半ばした調子で）

女　でも、お話したら……。

男　怒るかも知れない。氣が狂ふかも知れない。まかり間違へば殺して了ふかも知れない。然し、そんなことは第二の問題だ。今はたゞ知りたい、知りたい、何もかも、

ひとつ残らず知りたい。それよりほかの心は、これんばかりもありアしない。

女　これをすつかり聞いたら、さぞお氣がすむやうにお思ひなさるでせうけれど、結果は丁度正反對になりはしないでせうか。

男　餘計なことを云ふな！　お前のした事が、結果を考へ考へ出來ることか！　お前たちは、恐しさに震へる樂しみを味つて來たんぢアないか。俺は、傷けられた心の、苦しみや痛みを、せめて今こゝで樂まうとしてゐるんだ。さア云へ！

女　まア、樂まうとしてゐる！

男　お前たちの樂んだ上を、踏み躙り踏み躙り、俺がこの苦痛を樂めないくらゐなら、どうして許すもんか！

女　離縁してください。

男　馬鹿！　折角の樂みを、さうむざ／＼逃して了つてたまるものか。さア話せ！　初めから、――眼つきで心を通はしたそも／＼の初めから、寸分洩さず話せ！

（電燈を點ず。いつかあげてゐた女の顏が、それと同時に伏さる。）

同右　さア、初りはどうしたんだ、

女　一番初は、あの人から手紙をよこしたんです。

その手紙はとつてあるか。

女　やぶいて了ひました。

男　なんと云つてよこしたんだ。

女　氣さくな、面白さうな奧さんで、大好きだから、これから仲よしになりませうつて……。

男　それはいつ頃のことだ。

女　先月の初め頃です。

男　俺が、玉突で口を利くやうになつて、うちへ連れて來て、一緒にビールを呑んだのは、先々月、七月の中旬ごろだつた。あれから、時々俺の留守を狙つて遊びに來るやうになつたんだな。

女　狙ふと云ふわけでもなかつたんでせうけれど……。

男　日曜のほかは、毎日俺が東京へ出ることを知つてゐて、日曜には一度も來ずに、ほかの日にばかり遊びに來たとすれば、つまり、留守を狙つたことぢアないか。

女　ほんの一遍か二遍です。

男　その手紙をうけとつて、お前はどんな氣がした。

女　たゞ輕い意味にとつてゐました。仲よしになりたい、と云ふ言葉でしたから……。

男　嬉しかつたか。

女　嬉しいと云ふほどでもありませんでしたけれど、わたしもあの人を嫌つてはゐませんでしたから、さう惡い氣持でもありませんでした。

男　返事をやつたのか。
女　出しませんでした。
男　その後初めて來たのはいつだ。
女　往來で會つて、二言三言立話しをしました。たしか先月の五日か六日頃です。
男　その時、お前は、近いうちに俺が旅行をすると云つて話したらう。
女　どうでしたか、はつきり憶えません。
男　その次には？
女　十二日です。
男　俺が山陰にたつた翌日だな？　偶然ぢやアあるまい。お前から手紙を出しはしなかつたか。
女　手紙は出しませんでしたけれど、その前往來で會つた時に、十日頃から貴方が旅行なさるかも知れない、と云ふ話をしたかも知れません。
男　それ見ろ！　云はんこつちアない……。それで、十二日には、何時ごろ來たんだ。
女　四時ごろでした。ホテルに晩御飯をたべに行かう、と云つて誘ひに來てくれたのです。
男　で、行つたのか。
女　斷りました。
男　なぜだ。
女　そんなに親しくもしないのに、御馳走になつたりしてはお氣の毒だと思ひましたから。
男　さうぢやアあるまい。あすこに、俺の友達がよく行つてるから、うつかり出會ふとまづいと思つたんぢやアないか。
女　少しはさう云ふ氣持もあつたかも知れません。
男　俺の想像でばかり話を進めずに、自分ではつきり云つたらどうだ。いくら露骨に話したつて――いや露骨なら露骨なほど、俺の樂しみは大きいんだから、遠慮なく喋話るがいゝ。……それからどうした。
女　うちで一緒に御飯をたべました。
男　あいつは酒好きだ。酒を出したのか。
女　うちにあつたベルモットを一二杯あがつたゞけで、日本酒はよすと仰有つて……。
男　飯がすんでからどうした。
女　一緒に散歩に出ました。
男　どこへ行つたか。町か、海岸か。
女　すぐ海岸へ行きました。
男　ぢア、この道を通つたんだな。うちの飯がすんでからなら、もう暗くなつてゐたらう。
女　八時半ごろでした。
男　手をつないでゐたか。

女　まさか！（輕い笑）
男　先月の一昨日、と云ふとやつぱり闇夜だな。
女　えゝ、暗い晩でした。
男　海岸でどうしたのだ。
女　歩いたり、砂の上に腰をおろして休んだりしました。
男　砂の上に、並んで腰をおろした時には、無論接吻をしたな。
（女、默す。男、近寄り、腕をとつて引き起す。）
同右　さア、その時に歩いたり休んだりした通りを、今これから、俺と一緒にやるんだ。そのとき云つた通りの言葉を云へ。そのとき、笑つた通りに笑へ。そのとき使つた通りの目使ひをして見せろ。その時とつた通りに俺の手をとれ。さア歩くんだ！　その時には、そんなにうつ向いてはゐなかつた筈だ。（顎へ手をかけ、ぐいと上を向かせる）そんなみじめな面はしてゐなかつたらう。さア、その時のやうに、幸福さうにして見せろ。さア、快濶に話さないか。笑はないか。
（上手奥より、どら聲に俗謠が聞えて來る。男、ふと口を噤み、次第にこなたへ近づいて來るものゝあることを慥めてから、無言のまゝぐい／＼と女の手を引いて、塚の奥へ行きかゝる。）
女　どこへ行くの。あたしいやですわ。
男　さう云つたのか。その時さう云つたのか。
女　あら、いやですつたら！
（なほきれ／＼に拒む言葉を殘しながら、兩人塚の奥へはいる。）
（村の男、甲、乙、唄ひ續けながら、上手より登場。塚の前にさしかゝると、奥にて、女の聲「助けてえ」と叫ぶ。忽ち口を覆はれしか、たゞ一言にて、甲乙は己の唄聲にまぎれ、そら耳か、讖かに迷ふ。）
甲　なんか聲がしたやうだな。
乙　女の聲で、助けてくれえ、と云つたやうだぜ。
甲　なアに、そんなこたアあるめえ。
乙　やア、たしかにさう聞えたよ。
甲　そんなら、たつた一聲つてこたアねえ筈た。
乙　だからよ、へんだアな。
（ト、口を押へてゐる手を、無理にもぎ離しかけたやうに、「誰か來て」と云ふ聲が不明瞭に聞える。甲、乙で不氣味になり、立止つてぢつと耳をすます。）
塚の方へ二足三足駈けよるが、あとまたしんとするので不氣味になり、立止つてぢつと耳をすます。）
（篠藪のガサ／＼と搖れ騷ぐ音がする。）
甲　なんだ……。
乙　大へんだ！
（ト、下手へ駈け出す。）

甲　どけえ行く氣だ。

乙　誰か呼んでこうよ。

甲　さうだ。巡査さん……。

（兩人一散に下手へはいる。）

（なほしばし、藪の音。）

（男、塚の後ろへ飛び出して來る。血相が變つてゐる。ちよつと下手をすかし見て、すぐ上手に駈け込む。）

（濤聲、松籟、蟲の音。）

――幕――

愛憎不二

秋の夜
星あかり
森のなかの少し打開いた場所

美しい、二十四五の女が、人待顔に、五六歩の間を往きつ戻りつしてゐる。
風なくして自然と枝を離れる落葉。極めて静なる蟲の音。
三十二三の男(甲)が、樹蔭から樹蔭へ身を隱しながら忍びよる。
女、心づき、透し見る。
人影なし、落葉と蟲の音。
女、また歩きだす。我が足ならぬ足の、落葉を踏みしめる音を聞きたるこゝろにて、急に振り向く。時に、樹間を掠むる人影を認む。危惧の念に充たされつゝ、低聲に、

女　だアれ?

（答なし。女、急に逃げ出さうとする。甲、躍り出でて追ふ。すぐ捕へられる。）

甲　（息がはずんでゐる）なぜ逃げるんだ。

（女、無言、いきなり振り拂つて、もう一度遁走を企てる。甲、追ひ、一旦下手に入り、あまり間をおかず、叫聲とゝもに、女の體が、投げ飛ばされたやうに舞臺へ轉がり出る。甲もつゞいて出る。）

男　（血相が變つてゐる）なんにも、云ふことも聞くこともない。お前だつて、覺悟はしてゐるだらう……。

（覺悟と云ふ言葉で、跪つたまゝ女の體が、きゆつと縮まり、蒼白い顔が甲をふり仰ぐ。口が喘いでゐる……）

甲　なにも、いまさら驚くことはないだらう。もし俺以外の男を好きになつたら、殺すよ、と云つてあつたね?

女　（ガク／＼と頷き、同時に、身を膝行り遠のきつゝ）ですから、あたし……。

甲　（それに頓着なく）誰でもよく云ふことで、千人に一人も實行する者のない言葉だ、惚れた女の耳に囁く男のお座なりだ、——まさかさう思つてたと云ふんぢやあるまいな。

女　（かぶりを振る。ちり／＼と、いつか舞臺中央へ膝行つて來る）

甲　（これもちり／＼と、四五尺の間隔を保つてついて行

く）よし、それぢア、信じてゐたと云ふんだな。

女　ですけど……。

甲　すけど？

（答を待つ。女の唇、徒に戰く。）

甲　言葉としては信じられたが、實行としては信じられなかつたんだらう。（間）今こそお前は、俺がほんとうに信じられて來た筈だ。俺が、お座なりなんぞ云ふおつちよこちよいでないと云ふことが……、俺の熱情に懸値なんぞなかつたと云ふことが……。

女　（急に半身おきあがり）ですからあたし……、あたし、ほんとうにいけない人でした……。

（甲の足もとに泣き伏す。甲、冷然と見おろす。落葉と蟲の聲。）

女　でも、どんなことになつて來ようとも、あたし、あなたが大好きですわ……。

甲　それは信じられる。だが、それと同時に、お前はあの人も大好きだらう。

女　（立ちあがり、甲の胸に身を投げかける）そんなことはありません！

甲　（冷然と拂ひのける）いけない。それは信じられない。嘘だ！

女　（なほも縋りついて）いゝえ、いゝえ、ですから、今夜、……たつた今、自分で自分の心が解つたのです。矢ツ張りあたしは、誰より彼より、一番あなたが好きだつたのです。たゞそれが、自分で解らなかつたゞけですわ。ね、あなた、さうなの、きつとさうなの！

（甲、いつとはなしに女の背へ手を廻してゐる。目をつぶり、ものを考へてゐる。）

（女、背に廻された手の感覺に力を得て、早口に續ける。）

女　ですから、あたしの罪は、あたしが馬鹿だつたことです。自分で自分のほんとうの心持が解らなかつたことです。ね、さうでせう？　ね、あなた、さうでせうッたら……。

（女に搖ぶられたゝめとも、自らさうしたとも分ち難いほどに、甲の首が頷く。）

女　馬鹿から起つた間違ひだからつて、それア惡いにやア違ひありません。だけど、馬鹿だつてことが罪とは云へませんわ。ねえ、もしさうなら、その罪は神樣が着なければならない筈ですもの。……あゝ、さうだわ、さうだわ、それに違ひないわ。……あたし、急にいろんなことが解つて來た……。

甲　もういゝ。

（聲が優しくなつてゐる。ほつとしたやうに女が見あ

げる。目と目とが合ふ。）

甲　お前のしたことは、馬鹿から起つた間違ひだ。

女　え、さうよ、さうよ。

甲　お前は、俺の愛に甘えて、ちよつと氣がゆるんだんだ。

女　え、すみません、ほんとうにすみません。堪忍してくださいね。

（甲の胸に面を伏せ、堅く抱きつく。甲も抱きよせる。）

（落葉。蟲の音。可なり永き間。）

甲　あの人は、だが、俺の尊敬してゐる先生だ……。

（古池の面にポトンと一つ落し込んだ石のやうに、この臺詞から靜に擴がつて行く波紋が、甲と女との心のうちに、さま／＼な思ひを描くだけの間。）

甲　初ッから俺は、お前が好きになりさうな人だと思つてゐた。（間）卑怯な話だが、正直なところ、先生にお前を逢せるのが可怕かつた、可厭だつた。

女　（嗚咽）すみません、すみません。

甲　そのくせ一方では、逢つてから、もしお前が、先生を好きにならないやうなら、──あの人の深い氣持に惹かれないやうなら、お前も仕樣のない、駄目な女だ、どうか先生のいゝところがすぐ解るやうな女であつてくれ、──さう云ふ氣持もずゐぶん强かつた。

女　（やゝ甘え氣味に）可厭々々、もうそんな話はよして頂戴！

（耳を覆ふ。ちよつと調子のはづれた間。落葉、蟲の聲を配せず。）

甲　もうぢきこゝに見えるのだらう。なん時に逢ふ約束なのだ。

女　可厭よ。もう今夜、先生のことは話さないつて約束をしてくださらない？

甲　（やゝ鋭く）なぜだ。

女　（それには答へず、體をもぢ／＼させながら）さア、早く歸りませう。

甲　いつそのこと、二人で、こゝで先生にお目にかゝらうか。

女　可厭！

甲　（やゝ獨語の調子）先生も隨分お前が好きだ。俺には、それがよく解つてる。

女　そんなことないと思ふわ。

甲　（鋭く）ほんとうにさう思ふか。

女　だつて、先生には奥さんやお子さんもおありだし、それに第一あんなにお仕事を大切になさる方ですもの……

甲　仕事を大切にする人なら、必ず、生活をそれ以上大切にする人だ。生活に少しの誤魔化しも許せない人だ。

（しみ／＼とした間。蟲の音。）

甲　何を考へてた？
女　なんにも……。
甲　嘘だ、先生のことを考へてゐたらう。
女　いゝえ……。
甲　ちよいと目をお見せ
（両掌で頬を包み、女の顔を仰向かせ、上からぢツと見おろす。）
（永き間。）
（嗚咽で、女の肩が大きく波をうちだす。男は歯を喰ひしばり、ポロ〳〵泪を流す。肇で、二人の心に全き通路が開ける。舞臺照明を、理由なく、すうツと暗くする。）
甲　死なう。一緒に死なう。
女　（決然として）勘忍して下さい。あたしには死ねません。
（甲の手を離させ、する〳〵と地上に崩折れて了ふ。）
（甲の涙一時にとまり、心臓まで冷え亙る心地……。）
（短き間。）
甲　どうしても死ねないか。
女　死ねるくらゐなら、さつき殺されてゐます。死なうと思へば、さつき、一言でもあなたを憤らせるやうなことを云ひさへすれば、すぐ殺して貰へたんです。でも、あたしには死ねません、死ねません。いま死ぬのは心残りです、可厭です。……あたしは、あなたが大好きなんです……。
甲　解つてる。
女　いゝえ、解つてません。ほんとに、あなたには想像もつかないくらゐ大好きなんです。
甲　だから、俺を殺したくないと云ふんだらう。
女　いゝえ、あなたも大好きですけれど……。
甲　俺も大好きだが、先生は……。
女　あゝ、先生……。
（女、地面から弾かれたやうに飛びあがり、一散に舞臺奥へ駈け出す。甲の手に短刀が光る。追ふ。太い幹の蔭で一撃をうけ、叫びながら出て来る。背後から、もう一刀右背を突かれ、女は、舞臺中央へのめり倒れる。甲も、續いてそこへ轉げより、上半身を膝へ抱きあげて、急き込み、）
甲　死んでくれ、死んでくれ。喜んで一緒に死んでくれ。
女　（苦しい息づかひの間から、はつきりと）可厭！　頼まれて死ぬのは可厭！
甲　ぢア……。
（短刀を取り直す。）
女　（聲のない笑）待つて、自分で死ぬから……。

（瞑目して、少時の間何事かを念ず。落ちついて、帯の間を探り、手紙やうのものを取り出す。）

女　これは書置……。ですから、……ですから、これと、（書置を、甲の右の手に渡すやうにしながら）これとを、（ト短刀を握つた指を、一本々々こぢあげながら）これと、……これとを……取り變へッこしてね……。ね、解つたでせう。想像もつかないほど、あたしは、あなたを……あなたを……。

（云ふうちに、書置と短刀とを取り變へて了ふ。舞臺照明、理由なく光度を増す。）

女　さよなら！

（見事に刄に伏す。）

（甲、ぐづ〳〵と腰を落す。惘然たり。）

（落葉と蟲の音の間。）

（暫して、甲、書置を讀み始める。その終りに近く、三十六七歳の男、（乙）急ぎ足にて下手より登場。甲、認めて。）

甲　先生！

乙　（ぎよッとして立どまり、透して見て）榊原君か……。

甲　（立つて、よろ〳〵とそばへ行き、後手に女の死骸を指す。口、吃す）あ、あ、あれ……。

（乙、駈けより、死體を抱き起す。短刀、ぬけ落つ。はッとする。）

乙　さよ子！　さよ子！

（耳もとに口をよせて呼びながら、あちこち觸つてみる。その冷さに心を凍らせながらも、執着はいや増す心地。）

乙　さよ子！　おい、さよ子！

甲　（見かねて）先生、もうどうしやうもありません。立派な最期でした。

乙　（それも耳にはいらず、呼びつゞける聲が、だん〳〵悲壯になつて來る）さよ子！　さよ子！　死んぢやいけないよ！　お前は死んぢやアいけないんだ！　さよ子、おい、さよ子ッたら！

（見苦しきまでの取り亂しかた。）

（甲、ぢッと見詰めてゐるうちに、だん〳〵輕蔑の色が動いて來る。）

甲　先生、先生！

乙　（軈て傍に人あるを辨じたる如くに、振り返るなり）おい、誰か、醫者だ！　醫者だ！

甲　（益々輕蔑の調）先生！

乙　あ、榊原君か。おい、早く、醫者だ！　醫者を呼んで來るんだ！

甲　何を呼んで來たつて、死んだものは、どうにももう仕

様がありません。

その氷のやうな調子に冷まされて、やゝ我に返り、ぢッと見詰める。）

乙　一體これはどうしたと云ふんだ。

甲　どうもしやアしません。さよ子が死んだのです。

乙　（殆ど無意識に吃く）さよ子が死んだ……。

甲　（はつきりと）さうです、先生の愛していらつしたさよが死んだのです。

乙　あゝ……。

（死骸に抱きつき、悲嘆、愁傷、小兒と選ぶところなし。）

甲　先生、こゝに書置があります。

（そばにより、傲慢な態度で、肩を叩く。乙、死體より面を離さず、たゞ手のみ振りて、うるさい〳〵、と云ふ氣持を示す、甲、呆れ返つた様子にて、そばを離れながら、吃く。）

甲　十年以上も騙されてゐたんだ、……これが大原先生の正體か……

（乙が斷腸の思ひをよそに、靜にあたりを歩き廻りながら、間をもつて、きれ〳〵に吃き續ける。）

甲　こんな男のために……。

馬鹿！　ほんとうに馬鹿なさよ子だ！

馬鹿な罪悪だ……、神の背負はなければならない罪悪だ！

（頭を振りながら）俺ぢアない、俺の知つたことぢやアない……。

人間の愚さは、神の背負ふべき罪悪だ！　（舌を打つて）馬鹿なさよ子め！

さア行かう、こんな馬鹿々々しさのなかに、いつまでまごまごしてゐられるもんか！

（甲、唾をはいて下手へ行きかゝる。乙、ふと顔をあげ、それと見て、）

乙　おい、君、君！　どこへ行くんだ。

甲　お先に御免かうむります。

乙　御免かうむる？　（次第に明かなる心眼を瞬き來る）それは、なんと云ふ口の利き方だ。さよ子は、君が、あれほどまでに愛してゐた人ぢアないか。

甲　さつきまでは……。

乙　さつきまでとは？

甲　殺すまでは……。

乙　殺す？

甲　さう……。（冷靜に）さよ子が、彼の女自身を殺すまでは……。

乙　その前、君たちは一緒にゐたのだね？

乙　（甲、答へず、行きかゝる。）
ちよつと待ち給へ。この背なかの傷はどう云ふのだ。
甲　これをごらんなさい。こゝに書置があります。
（甲、立ち戻つて來る。乙も立ちあがる。兩人、死骸なかに、上下に相對す。乙、書置をうけとり讀む。甲、死骸から顔を背けて立つてゐる。）
（夜の更けて行く靜けさ。かれ〴〵な蟲の聲。）
（乙、讀み終り、しみ〴〵とした心から湧いて來るやうな、目のなかの涙を拭き取りながら、死骸に向つて、優しく。）
乙　さよ子、お前はいゝ人だね、ほんとにいゝ人だね……。
甲　（そつぽを向いたまゝ）なアに、そいつは馬鹿だ。
乙　さう……、馬鹿だ。美しい心の馬鹿だ、可愛らしい馬鹿だ……。
（甲、振り向く。乙、その眼を、ぢツと自分の視線のもとに押へつけたまゝ。）
乙　こんな書置一本で、君を殺人罪から救へると思つて死んださよ子は……、なるほど君の云ふ通りの馬鹿だ。然し、それでしすましたりと思ふ君の馬鹿とは、大ぶん性の違ふ馬鹿だ。せめては、その性の違ひでも思ひ知りたまへ。
甲　（驚かず）まア、そこに落ちてる短刀を拾ひあげてごらんなさい。それは、お宅の倉から無斷で拜借して來たものですよ。
乙　（更に動ぜず）あたしとしては、君なりあたしなりが、殺人の嫌疑で牢獄へ行かうと行くまいと、死刑にならうとなるまいと、そんなことは、今となつては、もうどうだつていゝことだ。それよりは、こんな可愛らしい謀計をして、いつなんどき君に殺されても、あとで君を苦しませることがないやうにと、始終こんな、（書置を甲の方へ突きつけてみせる）こんなものを持つて歩いてゐたさよ子の心根を考へてやりたまへ。心の底の底から深くあたしを愛してゐながらも、立派に君も愛してゐたんだ、――立派にだぜ。あたしより先の關係だからとか、これまでの義理合だとか、心變りをすれば殺す殺されるの約束がしてあつたからとか、そんなしようことなしの氣持からぢアなかつたんだぜ。ほんとに君が好きだつたんだ。それアまた君だつて、あたしにないいゝ性分をもつてゐるんだから、當り前の話だ。當り前と思ひながら、正直なところ、あたしは、その點、君に對して嫉妬を感じずにはゐられなかつた。――それほどだ！　だが、さよ子も殺されたくはなかつたらう。まだ〳〵死にたくはなかつたらう……。可哀想だ、可哀想だ……。
（乙、涕泣し、終には號哭す。）

（このうち甲、次第に首が垂れ、暗然として傾聴し、乙の號哭するに及んで、身を投じ、大地にひれふす。）

甲　先生、許してください！

乙　あたしぢアない、あたしぢアない。君が許しを乞はなければならないのは、さよ子だ。君の目の前に横はつてゐるそのさよ子だ、死んで了つたさよ子だ。

（號泣す。甲も亦泣く。）

甲　馬鹿！　馬鹿！　馬鹿！（と、我が髪を搔り）神様あなたは、なんと思つてこんな馬鹿を拵へたんです、恨みます、恨みます。

乙　こんな場合、俺は、神様なんぞを引合ひに出す氣持にやアなれない！　君を恨む、俺は君が憎い！

甲　僕はまた、先生を恨んだ、憎んだ。

乙　當り前だ！　その憎い人間を、なんだつて今もつて先生なんぞと呼ぶんだ！　憎い戀の仇を、なんだつて生かして置いたんだ、なぜさよ子と一緒に殺して了はうとはしなかつたんだ。碌な愛が出來ない奴には、碌な憎みさへ出來やアがらない！　えゝ、齒痒いけだものだ！

（地にすり附けてゐる甲の頭を、いきなり、烈しく踏み躙る。甲、呻きながら、大地にしがみつく。乙、罵り續ける。）

乙　人を殺すなら、殺すだけの憎みをもて！　愛をもて！　心に碌な憎愛ももてないくせに、この手は！　この手は、けだものめ！　お先ッ走りのこの手が！　くそ！

（蹴返へされた甲の手先へ、短刀が觸れる。摑む。立上るや否や、飛鳥のやうに、乙の胸へ頭からのめりかゝる。）

乙　うん、さうだ！

（と、關取が幕下の力士に稽古をつける時のやうに、ぶら手のまゝ、どんと胸でうけとめる。が、脇腹に立つてゐる。）

乙　くツくツくツ、かうだ！

（ぶらさげてゐた兩手を、徐に甲の咽輪へ入れると、くるりと彼方を向け、肘をかけて締めあげる。）

乙　貴様のやうな奴は、碌な死に様も出來まい。さ、一緒につれてつてやる！

（甲、滿足げに、されるまゝになつてゐる。）

乙　なぜ、手むかはない！　生意氣な小僧ッ子だ！　さア、苦しいか。苦しけれアぢたばたしろ！

（乙、ぢりぢりと締め上げる。甲、平然として死に就く。）

（乙、息の絶えた甲を突き倒し、我が身もよろけ倒れる。）

（女を中央に、上下へ、同じほどの隔りをもつて甲乙

が、轉び伏す。甲、動かす。乙は、大地にペタンコにひれふしたまゝで、ぢり〳〵と女の死骸の方へすりよつて行く。）

乙　さよ子！　さよ子！

（落葉と、かれ〲な蟲の音。）

（舞臺照明を、理由なく暗くする。）

——幕——

たのむ

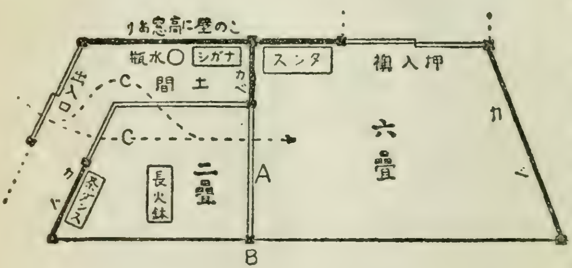
時　現代

人

内田助次郎（五十五六）
かつ（四十三四）
爲吉（三十二三）
豫審判事（五十位）
檢事（四十五六）
裁判所書記（三十四五）
警部（四十位）
近所の男（四十位）
その他、刑事、甲、乙。巡査。高窓から覗き込む子供の顔。

景

上手、六疊ほどの部屋。正面に一間の押入。襖は、切張りや腰張りでさんぐ\に繕つてあつて、その繕ひに用ゐた紙も、時代も、區々まち\/であるが、なかに、最近貼つたらしい新聞紙の箇所だけ、やゝ白く目立つ。その下手、三尺折り廻しの壁際によせて、古ぼけた簞笥。上には行李が載せてあり、汚しく散かつてゐる。横手の壁には、脱ぎ捨てた着物、印半纏などがひつ掛



A　この隔、敷居ばかりにて、障子も襖もなし。

B　この柱、芝居心にて、とりて差支なし。

C　登場人物の通過路を示す。

けてある。續いて下手、舞臺端によせて二疊。粗末な舊い長火鉢、同じやうな茶箪笥。

その奥、土間の臺所のところにて、流し、水瓶、その他臺所道具が、貧しく置いてある。突當りの壁に吊り棚、高窓あり。

この土間を下手に出づれば、すぐ出入口のところ（そこも、東の見物席の一部分からは見えるわけゆゑ、それらしく飾るもよし、また、ほかになんとか方法をとるもよし、兎に角、西の見物からは見えないところゆゑ、そこで芝居があつてはならない。）

尚、念のため圖面を參照せられたし。

この舞臺面は、無論「第四の壁」を取り去りたる切斷面なれば、上下左右とも、黑にて包むこと

總て、貧民窟にある、ひどい長屋建の內部の態。

秋雨のそぼ降る十月上旬。白ッぽい、陰氣な光が、高窓と、出入口の方から、總にさし込んで來ること。故に、設光の灸所は、雨の日の、午後二時頃の「暗さ」を現すにあり。つまり薄暗いながらに、夕方にならず、まして夜にならない工夫が肝心なり。

幕あくと、長火鉢の上に、爲吉が胡坐で、剝げちよろけた能代膳を控へ、手酌で飮んでゐる。青筋の濃い、逞しげな、そして鼻ッぱりの強さうな男。素袷に半纏、といつても、粹になつてはいけない、いゝ男でも、また特別醜男でもない、普通の勞働者

かつ　うしろ向きに、流しもとで漬物を刻んでゐる。洗ひざらした黑地のゆかた半纏、赤球の簪にぐるぐると捲きつけた束髮、眉を剃つた、でつぷりと大きな女。

そとには、溝板の上を行く足音、遠く、カーブを行く電車の軋り。じめじめした、陰氣くさい靜かさ

爲吉（長火鉢の藥罐に德利をつけて、燗をし直しながら、勞れた、ものうげな聲で獨語つ）なるほどとちぎる秋なすび……

かつ（それをうけて）おうとこを刻まないぢア食べられないよ。生薑があると、おろしにかけるとうまいんだがねえ

爲吉　買つて來ねえな

かつ　買つて來ようか。序にお酒を……（こゞんで、貧乏德利を振つてみる）……あゝ、まだ一本や二本はありさうだ。

爲吉　ぢア、まアいゝやな。

かつ（默つて刻んでゐる）

爲吉（せうことなしの出鱈目を云ふ）生薑、生薑か……。

生譃なすびに……火事、親爺か……。
かつ　（笑ひ聲ながら、ほき出すやうに）なアにさ……。
爲吉　（我ながら少し可笑しく、上機嫌になつて）もういい加減にして來ねえな。
かつ　お待ちよ、いますぐだから。
爲吉　（盃を充さうとするが、すぐなくなる。綺麗に滴を切つてから、手を延し、土間から上り端へ押しやりながら）ぢア、こいつも序に……。
かつ　なんだい。（ト振り向き）あいよ。ぢア、こいつはそつちに取つてくれ。（ト、引き換へに漬物の小鉢を渡す。――土間を引きずる足駄の音）
爲吉　（うけ取るために、延びだした拍子に出入口の方を見て）なんだ、ちつと明るくなつて來たんぢやアねえか。（ト、頭を低くし、出入口から空を見あげるこなし）
かつ　さうかい。（徳利に酒を注いでゐる）
爲吉　さうかいぢアねえよ、冗談ぢやねえ。（急に本氣になつて、そこらの下駄を突ッかけ、門口まで空模樣を見に出かけながら）土方殺すにや刄物は要らぬ、つてな……。
かつ　（酒を注ぎ終り、すぐ頭の上の高窓から空を見る）駄目だよ、おんなじこつたよ。
爲吉　（姿は殆ど見えず）降つてるか。（立てつけの惡い出入口の戸を、ガタ／＼と引きあける音）あ、なアるほど……。俺きもしねえで、感心によくもまア降りやアがるな。（下駄を引ずつて歸つて來る）土方殺すにや刄物は要らぬ、か。
かつ　（このうち二疊へあがり、長火鉢の下に坐つて、徳利を藥罐につけたり、火をいぢつたりしてゐるが、輕く節をつけてあとをとる）雨の三日も降ればよーい。と。
爲吉　（もとの座へ直りながら）何がいゝことがあるもんか。だらしがねえ、雨なんぞに殺されて……。
かつ　まアいゝやね。落ついてぶら／＼しといでよ。
爲吉　……てえほどの御身代でもあるめえに……。（シュッと音をさせて盃を吸ひ、かつにさす）
かつ　お待ちよ。（うけた盃を猫板の上に置き、徳利の尻にさはつてみてから）よささうだね。（ト、手酌で注がうとする）
爲吉　（手を伸して奪ひとり、酌をしてやりながら）おめえ、爺さん爺さんつて安く云ふけれど、然しなんだせ、今時伸を引いて、簞笥の一つも据ゑようてえなア、どうして、なか／＼生優しい蓋當ぢやアねえせ。
かつ　馬鹿におしでないよ。あれだつて、これだつて、（ト、六疊の簞笥の方へ顎をしやくり、長火鉢の緣を手の平で叩いて）もと／＼あたしのもんだもの。永年つれ添つち

アゐたけれど、その間に、なくなされたものこそあれ、何一つ、――普段着一枚こさへて貰つたことなんぞありやアしないよ。（飲んで、盃を返し、酌をしてやる）

爲吉　なアるほどね。てえしたもんだ。

かつ　何がさ。

爲吉　そんな働きのねえ男でも、なア、亭主となりやア矢ッ張りそれ……。（盃を口へ持つて行く）

かつ　馬鹿々々しい、よしとくれよ。

爲吉　だつて、さうぢやねえか、永年つれ添つたつて云ふぢやアねえか。（飲む）

かつ　それアお前、さうだよ。（もう一度盃をよこすことを豫期しきつてゐる手つき。にも拘らず、膳の上へ置かうとするので）ちよいと、おくれなね。

爲吉　うるせえな。もう一つ出したらいゝぢアねえか。（とは云ふものゝ、さす）

かつ　（酌をさせ、一口飲むと、身をひねつて、すぐうしろの茶箪笥から、もう一つ別な盃を出して相手に渡し、注いでやつてから、さてといふ風に話の續きにかゝろ）それアね、いくらどじでも唐變木でも、亭主となりア仕様がないやね。なんてつたつて、それア矢ッ張り女は……。

爲吉　チエッ。（香をうち、横を向く）

かつ　いゝえさ、さういふわけぢやないけどさ、――つまり、あたしの云ふなアお金のことだよ。それア、上を見ればはうづがないが、まアこつちとら相應に、その日その日の食ひものをあてがつてくれりやア、それでまアいいとしなきアなんないからね。

爲吉　それに、その爺さんてのは、よつぽど辛抱人だつたに違えねえ。十年前なら兎も角も、この不景氣に、――おまけに電車自動車の世の中だ、どうしておめえ、朦朧のよぼ〳〵爺が、夜ッぴてまご〳〵して歩いてみたところで、これだけの世帶は張りきれるわけのもんぢやねえや。

かつ　（多少得意げな氣持で）それアね、いゝ按配に子供はなかつたし、晝間の稼ぎと違つて、たまにアちよいとした椋鳥もひつかゝつたからね……。

爲吉　だつておめえ、薄白痴だつてえぢアねえか。

かつ　だからさ、世の中は面白いもんでね、うちの耄碌爺さんみたいな、お人好しの甘ちやんでも、下にやア下があるとみえて、お花見時分なんぞにやア、時たまいゝ仕事をして來たつけよ。……それだつてまア、二三年前までの話だけれど……。（微ながら懐舊の情うごく）

爲吉　（容易くその情合にほだされると、忽ち義憤めいた氣持で苛ついて來る）そンだけの稼人で、おまけにおめえにやア、からもう目がなかつたてえのに、……だから、女なんてえもなア……。

かつ　だつて、それアお前……。（云ひ澁るのではなく、擧げるべき理由が、てんからあたまにない、と云つ風な口の噤み方）

爲吉　（暫く答を待つてから）　だつて……、どうだつてんだい。

かつ　（促されるまゝに、ふと思ひついた言葉を擲り出す）だけど、それアお前、……ふとした出來心だアね。

爲吉　（そんな出來合の答でも、あやふやに正義感がをさまりかけて）うん、（ト、考へ込みながら、盃を口へもつて行き）どうも、まア、それも……。

かつ　（調子に乘つて）時のひよりで仕様がないやね。何も悪い氣で、……爺さんをおッぽつて、なんでもかでもその男と一緒にならうのなんのつて、そんな深い謀計があつたわけぢやなしさ、なアにお前、どこのおかみさんだつて、そんな話の二つや三つ……。

爲吉　（うるさゝうに）わかつたよ！

かつ　（益々圖に乘つて）この節ぢア、自動車で乘り歩いてるやうな、いゝとこの奥さんたちだつて、ちつともあてにやアならないつてんだもの、ましてやお前、こしとら社會であつてみりやア……。

爲吉　うるせえな！　わかつたつてえのに……。（陰鬱になつて、グビ〳〵酒を飲む）

かつ　（引き込まれて、これも陰氣な氣持になり、ぼんやり考へ込んで了ふ）

爲吉　（ふと、氣を變へて）で、これからさき、おめえ、一體、どうしてやつてくつもりなんだ。

かつ　（それに就いての考へに耽つてゐるのでもなく、たゞ默つてゐる）

爲吉　爺さん、裁判がうまく行つて、命だけは助つたところで、どうせその年齢ぢア、もう二度と娑婆を見る氣遣はねえんだから、おめえだつて、こゝでなんとか思案をつけとかねえぢア……。

かつ　（ふと我に返つたやうに）それア大きにさうなんだよ。

爲吉　だから、どうする氣だつてえんだよ。

かつ　（本能的な媚が、突然、顔や體に現はれて來る）爲さん、今更お前、そんなこと……。

爲吉　そんなこと、つて、おらア何も……。この先おめえの……。

かつ　だからさア、何もどうしてくれのかうしてくれのつて、あたしやそんなむづかしいこたア云やアしないよ。たゞね、こんな婆さんでも、一緒にゐてやらうと思つてくれるんなら……。

爲吉　それアいゝが、おらにやア、とてもこんだけの世帯

は、張り通せる氣づけえはねえし……

かつ　なんだねえ、そんなこと！　あたしやア、……お前さんさイいつまでもあたしをほツぽり出さないでゐてくれりやア、假令（たとへ）……。

爲吉　（急に冷淡になる）　フ、ンだ！

かつ　何が、フ、ンだよ。

爲吉　爺さんに殺つけられた野郎も、さだめし、たんとそいつを聞かされたんだらう。

かつ　（勝ち誇つた笑）　やいてるよ！

爲吉　（慍りツぽく）　誰がくそ、てめえみてえな……。

かつ　（負けてゐずに、むッとする）　なら、いゝぢやねえか。よしんばあたしが、――養つてくれてがなくつて、明日にものたれ死をしようと、何もおめえは、ほッときアいゝこつた。な、な、なにもそんな、嫌はれてまで、おらアおめえの世話にならうたア思やアしねえし、第一、おめえ、こゝに轉がり込んで來てから、一ン日だつて仕事に出たことがあるかい。みんなおらが……、（涙聲になる）　爺さんが、食ふものも食はずに、好きな酒も我慢して……。

爲吉　（感動しやすく、すぐ折れて、宥めにかゝる）　だからよ……、何も……。

かつ　（ゆかたの袖口で涙を拭きながら）　よく、爺さんがさういつたつけ、――おめえとおらとは、ひと周りの上も年齢（とし）は違ふし、永年夜働きをして、おらア大ぶ體も損じてるから、どうせ一足お先に死なゝきアならねえ、さうなつたあとで、おめえがもう一度男をもたうとどうしようと、先だつものは金だ。金せえありやア、世の中、どうにでも切り抜けて行けるもんだ、つてさう云つてさ、どんなに苦しい時でも、その日〳〵の稼ぎのなかゝら、きちん〳〵とお前、一割づゝは、あたしの名前で、郵便局に積んどいてくれたんだよ。その……。

爲吉　わかつたよ。だから、俺だつて、毎ン日空模様ばかり氣にしてゐるんだけれど、これぢやアおめえ……。

かつ　……さういふ、血の出るやうなお金だつて、爲さん、あたしやアお前のためなら……。

爲吉　わかつたよ。もういゝぢアねえか。……だから、天氣になりしでえ、稼ぎに出りやいゝぢアねえか。なアにおめえ、世間にやア、五人十人子供を抱（かか）へてたつて、どうやらかうやらやつてる人だつていくらもあるんだ。おめえ一人ぐれえ、いくらおらだつて、まさかひぼしにもしやアしめえぢやねえか。なア、安心してねえ、安心してねえ。

かつ　（忽ち感激して）　爲さん！

爲吉　まアいゝやな、いつぺえいかう。（ト、カブリとあ

けてさす)

かつ (嬉しさうにうけて) ほんとに爲さん、いつまでも
その氣でね……。

爲吉 でえじようぶだよ!

かつ お前は飽性らしいから……。

爲吉 そんなこたアねえよ。

かつ おまけに、男ぶりはいゝし、若いんだし……。

爲吉 おだてるない! この雨をくらつちア、自由勞働者は、はゞかンながら、逆に振られたつて鼻血も出ねえや。

(兩人、和み笑ふ)

(この時、出入口の戸の、亂暴に引きあけられる音。正服の巡査、頭巾をはねのけながら入り來り、土間に立つ。)

巡査 内田。……ての は、お前ンとこかね?

かつ へえ。(答へながら、恐る/\立つて行き、突膝で應對する)

巡査 これから、こゝで實地檢證があるから……

かつ (意を解せざる態)

巡査 裁判所から判檢事の方々もお見えになるんだから、萬事粗忽のないやうにな……。

かつ (ヒヨコ/\と頭をさげるばかりで、なほ意を解せす)

巡査 一體、お前、誰かね?

かつ (臆して答へられない)

巡査 犯人の妻かね?

かつ 内緣で御座います (ト、頭をさげる)

巡査 あすこにゐる男は?

かつ ………、(もぢ/\して) 親戚の者で、爲吉と申します。

巡査 (女では埒があかないといふ風に、今度は爲吉の方へ話しかける) 實地檢證といふのはね、犯人をつれて來て、實地で、犯罪の模樣を詳しく取調べることだ。解つたか。

爲吉 (それより前に、坐り直して、長火鉢の前から巡査の方に向つて) 兩手を膝に、キチンとかしこまつてゐるが、話しかけられると、一々頷いて聞く) へえ、解りました。

巡査 もうすぐこゝへお見えンなるが、判檢事の方々に對しては、よく謹んで、……もしなんかお訊ンなつたら、正直に、言葉を謹んで、ハキ/\と、よくわかるやうに申しあげなきアいかんよ。いゝか解つたな。

(爲吉、頷く。巡査、去らうとする。かつ、追ひ縋るやうに言葉をかける。)

かつ (恐る/\) 犯人と申しますと?

巡査　被告、内田、……なんと云つたつけかな？（衣囊に何かを探る）
かつ　内田助次郎と申します。
巡査　うん、その内田助次郎をつれて來て、こゝでどうした、あすこでどうしたつてことを、一々實地にやらせてみるんだから……。
かつ　あの、内田助次郎がこゝへ參りますんで？
巡査　さうだ。
かつ　ヘツ！　こゝへ……。
巡査　別に何も、そこらを取り片づけることもいらんが、成可くまア綺麗にして置くやうにな……。
（急ぎ退場。）
かつ　（顏色を變へて跳び戻つて來る）どうしようね。お前さん……。
爲吉　どうするもかうするもねえぢやねえか。
かつ　だつて、爺さんが來るんだよ、こゝイ……。
爲吉　來たつていゝぢやアねえか。
かつ　あたしやいやだよ！　一遍だつて面會に行つてもやらないし、きつと恨まれてるに違ひないんだから……。さうだ！　あたし、お兼さんとこイ行つてるからね、お前さんは……。
爲吉　いゝぢアねえか、何もおめえ……。

かつ　だつて、お前、もしひよつと……。
爲吉　（笑つて）そんな氣づけえがあるもんかな。どうせ、おめえ、繩つきで來るんぢアねえか。
かつ　それだつても……。
爲吉　でえじよぶだつてことよ！
かつ　（男の賴母しさに、自らも不安を抑へつけながら）それアさうだね、ふんじばられて來るんなら……。
爲吉　なアに、さうでなくつたつて、ぢたばたすりやア、俺が撲り倒してやらア。
かつ　それアね、お巡査さんだつて大勢ついて來るんだらうし……。ぢア、かうおしよ、お前さんどつかに行つといでなね。かうやつて、火鉢の向前に坐つてちやア、なんぼなんでもあんまり……。
爲吉　（おつかぶせるやうに）なアにがよ！　あんまりもくそもねえぢアねえか！
かつ　だつて、お前……。
爲吉　いゝつてことよ！　おらだつて、一遍はその爺さんの面も見て置きてえやな。
かつ　それアお前、こゝイはいつて來る時ンだつて、出て行く時ンだつて、見ようと思やアいくらだつて見られるんだから……。
爲吉　うるせえな！　何も、火鉢の向前に坐つてやらうと、

一緒にくツついてねてようと、ちつとも構つたこたアねえぢアねえか。つまらねえとこでみえエするねえ！

かつ　さうぢアないけどさ……。

爲吉　なアに、さうよ！　爺に未練がありやアこそ、さうしてみえが張りてえんだ！　フン！　後家さん面が聞いて呆れらア！

かつ　すぐさうお前みたいに……。

爲吉　なアに、さうきまつてらア……。

（何も兩人の言葉がもつれ合ふところに、路次の溝板に大勢の足音が近づいて來て、すぐ出入口があき、以前の巡査が眞先にはいつて來る。）

（兩人、居住居をたゞし、小さくなつて控へる。巡査、土間に散らかつてゐる下駄を片づけたりする。）

（すぐ、豫審判事が、警部の話に、何やらうち頷きながら出る。――これ等の人々の容貌、服裝等は略す。いづれも、それらしければよし。

（次に、檢事と書記。これ等の人々が、狹い土間で靴をぬいであがるまで、どこかひそ〳〵とした感じに、ざわめき、混雜する。）

（内田助次郎、黑地のゆかたに袷を重ね、細紐をする。素足。深編笠。手錠。腰繩。刑事「甲」に繩尻をとられて、しよんぼりと登場。巡査が、既に上へあがつた人の靴を片よせたりしてゐる間、ぢツと、長火鉢の方へ顔が向いてゐる。足もとの片づいたのも氣づかずに、立つくしてゐるので、刑事が輕く背を突く。なほ同じところを見詰めたまゝ、上へあがり、押しやられるやうに、ぐづ〳〵六疊の間へはいる。）

（無論他の人々も、長火鉢の前の二人に對しては、それ〳〵の氣持と、從つてまた態度が現はれなければいけない。なかで、檢事には、一番注意深く二人を見させたい。）

（もう一人の刑事「乙」と、巡査とは、土間に立つてゐたり、囁き合つたり、兎に角そのへんにゐる。六疊では、判事が、ちよつと二疊の方へ顎をしやくり、警部に何か訊く。警部、流しそばのところへ巡査を呼び、かゞんでなにか聞きとり、戻つて報告する。その間に、判檢事、うちのなかを見廻すとか、囁き合ふとか、いろいろしぐさあり。書記は、毛繻子の風呂敷包をとき、筆記の支度をする。）

（やがて、判事の命令で、繩取りの刑事が、部屋の中央にしよんぼり突立つてゐる助次郎の編笠をぬがせてやる。先刻から、二疊の二人を見詰めたきりの顔が、こゝに肇て見物の前に現はれる。勞働者に獨特な皺の深さをもつた、人の好ささうな爺。額は禿あがり、髮

と、やゝ伸びた髭とは、ともに胡麻鹽。大して獄中の窶は見えず、頰の肉など、ダブンとたるんでゐる方がいゝ。鳥睛が、なみよりも白ちやけてゐるかと思はれるやうな、愚鈍な、しよぼ〳〵とした眼つき。）

（かつ、爲吉、兩人に對する感情は、あまり複雜で、とてもどうと取りとめがつかず、却つて、よそ目には、ぼかアんとしてゐるやうな、然しどこか弱々しげな表情。）

判事　（一體に、表情に動きがなく、冷たい感じだが、低い聲で、ごく穩かにものを云ふ質の人でありたい。が、この呼びかけだけは、少し凛とする方がいゝ）被告、內田助次郞！

助次郞　（その方を向いて、お辭儀をする）

判事　これから取調べにかゝるが、一切嘘を云はんやうに、よく考へて、間違つたことを云はんやうに……。わかつたな。

（助次郞、もう一度頭をさげる。）

（判事は、書記から厚ぼつたい調書をうけとり、印の赤線の出てゐる箇所を、あつちこつち引ッ繰り返してみながら、以下の訊問をする。書記はそばで書きとる。）

判事　えゝ、九月八日の晩に、お前は仕事に出かけたかね。

助次郞　（うなだれたまゝ、碌に考へもせずに頷く）

判事　それア何時ごろだつたな？

助次郞　（臆々とした低い聲）いつもの通り、八時かそこらで……。

判事　それから、こゝに歸つて來たのは？

助次郞　なんですか、頭が重くつて、……その二三ンち前から、鼻ッ風邪をひいて居りましたもんですから……。

判事　（半ば、調書を讀む調子で）とても倖は引けさうもないと思つたから、一晚休むつもりで歸つて來たと……さうだな？

助次郞　（頷き）體だけは、至つて丈夫な方で御座いますから、めつたにそんなことも……。

判事　（それは耳にもかけず、他の箇所をめくり、同じく半ば讀む調子で）いつもの通り倖を借りて、一旦は雷門まで行つたが、腰が痛かつたりして苦しいので、一人も客を乘せずに、すぐ歸つて來た。――さうだな？

助次郞　へえ、倖を返しによりまして、輪代を半夜分だけ拂ひましてから……。

判事　三ノ輪の居酒屋にはいつて酒を飲んだ。――さうだな？

助次郞　（頷く）

判事　どのくらゐ飲んだ？

助次郞　コップに一杯きりで……。

判事　酒か。濁酒か。

助次郎　えゝ、電氣ブランといふやつで……。

判事　ぢア、こゝに歸つて來た時には、お前は醉つとつたかな？

助次郎　いゝえ、ちよいと氣つけに一杯やりましたんで、……この分なら仕事が出來ると思ひましたくらゐ、お蔭樣で、すつかり元氣がよくなりましたから……。

判事　醉つたといふほどぢアないが、元氣づいてはゐた、と云ふんだな？

助次郎　（頷く）

判事　歸つて來たのは十時半頃、——さうだな？　間違ひないな？

助次郎　（ぼんやりしてゐる）

判事　どうだ、その時分か？

助次郎　（驚いて、續けざまに頷く）

（訊問の始まる前から、おもてに人だかりがするこゝろにて、出入口の方がざわめき、そとにゐる巡査の制する聲などし、それがだん／＼激しくなつて來る。）

（で、この時、バリ／＼と、下駄で羽目板を掻く音がして、正面の高窓から、十五六の子供の首が覗き込む。）

子供の聲　やア、ゐやアがる／＼。

（抑へた聲で、然し嚴しく巡査が叱りつける。すぐひつ込むが、少しすると、他の子供や、同じ奴が、叱られ／＼何度も首を出す。たうとう巡査がおもてへ廻つて行く。子供たちが、ワーッと云つて逃げて行く氣勢など。この間に判事は、調書をあちこち飜してゐる。警部が近より、何か訊き、頷くのを見て、土間にゐる刑事「乙」のそばへ行き、何か云ひつける。命をうけ、刑事、出て行く。入れ違ひに、子供たちを追つぱらつた巡査が歸つて來て、笑ひ顔で警部と何やら二言三言話す。）

判事　では、お前、御苦勞だがひとつ、こゝに歸つて來てからあとを、そのまゝそつくりやつて見せてくれないか。——あすこでどうした、こゝでかうしたつてことを……。

（刑事「甲」が、もぢ／＼してゐる助次郎を引つたてゝ、上り端へ行き、下駄を穿かせる。判檢事たちも二疊へ近く立ち並ぶ。）

判事　今お前は、その晩、そとから歸つて來たところだ、いゝか！

助次郎　（頷き、恥らふやうにかつの方を偸看る）

判事　まづ第一に、（出入口を指さして）そこの戸は、あいてたのか、それとも締りがしてあつたのか。

助次郎　（振り向いて見ながら）あいてたやうにも思ひますが……。

（かつ、事實の相違を唱へたくもあり、可怕くもあり、もぢ／＼する。）

（判事は、それも見てとつてゐる。）

判事　いつもはどうなんだ、毎晩仕事から歸ると叩いて起すのか。

助次郎　夜があけてから歸つて來ることもありますし、寢てゐる時でも、大抵棧はかつてありませんですが、さア、あの晩は……。

判事　ぢア、戸を叩いた憶えはないんだな？

助次郎　（やゝ正氣づいたやうな聲になる）あゝ、さうでした！　さうでした！　叩きました。あゝ、慥に叩きました。

判事　（調書の上に目を走らせながら）珍しく締りがしてあるので、これアまたをかしいぞ、と思つたといふことを。お前、前に一度云つてゐるがね……。

助次郎　御尤で！　全くそれに違ひ御座いません。……ええ、女房のやつめが、（ト、云ふ時かつの方へ目は向けない。が、かつの方では、ギヨッとして、助次郎を見詰める）前にも一度まをとこをいたしましたことが御座いましたが、その時にも締りがして御座いまして、いくら叩いてもあけてくれませんで……、そんなことが前にも一度あつたもんで御座いますから、どうも、こいつアすこウし怪しいと思ひましたんで、……へえ……。（このあたりから、だん／＼元氣づき、雄辯になつて來る）

判事　ぢア、その晩も叩いたんだな？

助次郎　まつたく、さやうで、へえ……。

判事　さうしたらば……？

助次郎　永いこと待たせやアがつてから、女房のやつめが、寢間着姿かなんかで出て來やアがつて、「誰だい？　誰だい？」つて云ひますから、「俺だア」つて怒鳴つてやりましたんで、へえ……。唯今、締りがしてなかつたやうに申しあげましたのは、全くわたくしの憶え違ひで、えゝなんとも申譯御座いません。

判事　それからすぐあけてくれたのか？

助次郎　すぐぢやア御座いません。……するてえと、ひとしきりシインとしちまひまして……、やがてのほどに、「なんだね、お前さん、今時分……」なアんてえましてからに、いきなりがらッとあけやアがつたんで御座いまして、へえ……。

判事　それで、はいつてみたら、……うちのなかは、暗がりだつたのか、燈がついてたのか。

（云ひながら、六疊から引つ張つて二疊の敷居へ引つかけてある、うちぢうにたつた一つの電燈を見やる。）

助次郎　へえ、矢張りそこんところで、（ト、指さし）電氣がとぼつとりましたんで……。

判事　それからどうした。
助次郎　默つて上へあがりまして、そこんとこイ行つて……。（爲吉の席を指すが、目は爲吉に向けない）
判事　あがつて、その通りやつてごらん。
（助次郎あがる。警部が、爲吉の背を叩いて、六疊の方へ行つてろ、といふこなし。爲吉、ふくれ返りながらも、命じられたやうにする。かつも續いて立つて行かうとするが、六疊との境に立ち重つてゐる。人垣を見ると、それを押し分けてまでの勇氣はなく、薄べつたい座布團から滑りおり、茶箪笥の蔭に身を縮めて、ぐづ／＼と居竦んで了ふ。ノコ／＼とやつて來た助次郎は、爲吉の尻のぬくもりの殘つてゐる座布團の上に、平氣でペタリと坐り込んで了ひ、キヨト／＼と、膳の上や、そこらあたりを見廻す。）
判事　そこに坐つて、それからどうしたんだ。
助次郎　（記憶の蔓を手放して了つた態で、ぽかァんと現在だけを感じてゐる）
判事　おい、それからどうしたのか。
助次郎　へえ。（吃驚して、一生懸命記憶をたぐり出さうとする）……へえ、へえ、……えゝと、なんです、……するてえと、こいつが……。
（すぐ鼻のさきにゐるかつの方へ、思はず顎をしやくる。かつ、縮みあがる。ト、助次郎も息を引き、うなだれて了ふ。）
判事　するとどうしたんだ。
助次郎　……えゝ、それから、二言三言、云ひ合ひをいたしましたんで、誠にどうも、なんとも申譯御座いません。
（ト、頭を下げる。眞正面にゐるかつも、思はず頭をさげる。）
判事　その時、女房はどこにゐたのか。
助次郎　そこです。
（ト、言下に答へて、鼻のさきに指を突きつけるのに、かつは、尙更尻ごみ、身の置きどころもなく、壁に貼りついて了ふ。）
判事　どういふことを云ひ合つたのかね？
助次郎　いえ、なに、つまらないことで……。
判事　つまらんこととは、どういふのかね？
助次郎　いえ、もう、愚にもつかない燒餅喧嘩で……。「庄公の野郎が來てやがるんだらう！」とかなんとか……。まつたくわつちだよくねえんで、へえ……。
（助次郎が頭をさげる度に、かつも吊り込まれて頭をさげる。）
判事　ふん。で、その時にお前は、被害者の庄太郎が、事實こゝに來てゐるに違ひないと思つてゐたのか、それと

も又た、今お前が云ふやうに、愚にもつかない燒餠喧嘩のつもりだつたのか。

助次郎　へえ。それは、なんです、おもてに立つて、戸のあくのを待つて居りました間の方が、「野郎、またへえずり込んでやがるに違えねえな」と思つて居りましたんで、こゝイ來て坐りましてからは、別だんそんな樣子も御座いませんし、たゞもうほんのむしやくしや腹で、そんなことを怒鳴つてみたまでのことでして……、へえ。

判事　それで、その喧嘩はどうなつたんだ。口だけですんだのか　それとも、掴み合になるほどまでやつたのか。

助次郎　默つてりやアいゝものを、因果とまたこいつが勝氣な性分でして、ガア〳〵つてがなり立てやアがるもんですから、ついそれ、わつちも、こッから、ぶう、ポカリッとひとつねえ……。

（長火鉢ごしに、相手の横ずつぽうを撲り飛ばす身ぶり。かつ、「どうも誠に相濟みません」と云ふやうに、ぺたりとお辭儀をする。）

判事　ふん、それから？

助次郎　するてえと、いきなりうしろの方で、ドタバタつていつたと思ふてえと、庄公の野郎が……。

判事　その時には、こゝに、障子か襖がはいつてゐたのか。それとも……。

助次郎　どういたしまして、そんなもなア、いつの昔からねえんですが、わつちがこゝを借りる……。

判事　よし〳〵、ぢア、この通り、矢つ張りあけつぱなしになつてゐたんだな？

助次郎　さやうですよ、へえ……。

判事　それだのに、被害者庄太郞のゐることが、それまでどうしてお前に知れなかつた？　をかしいぢアないか。

助次郎　蚊帳が吊つてありましたし、電氣がこゝイ引ッ張つて來てありますから、そつちア薄くれエし、よもやと思ふから、別だん覗いて見もしませんでしたから、ついどうも、ちつとも氣がつきませんかつたんで……。

判事　それで、どうした。

助次郎　へえ……。（どこまで話したのか忘れて了ひ、まごついてゐる）

判事　（ちよいと嚴しい調子）庄太郞に、いきなりうしろから撲られて、それからどうしたといふんだ。

助次郎　へえ！……こーんちきしやう、と思ひましたから、いきなり武者振りついて、ド、ド、ッと……。

（坐つたまゝながら、胸倉へ喰ひついて、相手を押し倒さうとする身ぶり。）

（このへんから、次第に話にみが入り、登場したての、しよぼ〳〵とした樣子などはどこへやら、いよ〳〵相

手を刺すあたりを話す時分には、大勢の見物の前で、一世一代の大役を勤める役者にでもなつたやうな氣で、すつかり亢奮し、野性をさへ帶びて來て、無我無中にやつて見せる。）

助次郎　ド、、ドッと、そこんところ、（ト、六疊の、簞笥の置いてあるあたりを指さす）押し倒してやるてえと、野郎も必死ンなりやアがつて、膝頭で、いやつてえほどひとの睾丸を蹴あげやアがつたんで、……あゝッと思つて、手がゆるんだ拍子に、今度ア胸へ足をふんがけやがつてからに、力いつぱい蹶返しやアがつたからたまらねえ……。

（話すうちに知らず識らず乘り出して來るのに、刑檢事たちも、ぢり／＼とあとへさがる。助次郎は、簞笥の前あたりで、相手をギユー／＼抑へつける身ぶり、續いて、蹴返されたこなし。）

助次郎　ヒヨロ／＼ッと、こゝんとこまでよろけて來て、（ト、流しの前の土間近くまで、あと退りに退つて來てみせ）スッテンコロリンとうしろへ轉げ落ちた……。

（ト、云ふかと思ふと、忽ち素足のまゝ、うしろ向きに土間へ、ドタリと不器用に跳びおり、態々尻餅までついてみせる。刑事が慌てゝ繩を繰り延ばす狀、さながら猿廻しの如し。）

（見る人（爲吉、かつ兩人を除く）いづれも失笑する。）

（助次郎、すぐ身を起し、流しもとの庖丁挿から、菜切庖丁をぬき持たうとするが、刑事に、ぐいと腰繩を引かれて取り落す。）

（この動作に、かつは浮き腰になる。）

刑事　（可笑しさをこらへた聲で）よし／＼、何も、態々庖丁を持ち出さなくたつていゝ。……そこで兇器を手に把つた、と……。よし解つた、それから？

助次郎　出刄庖丁を把るが早いか、跳びあがつてつて……、（言葉の調子はひどく威勢がいゝが、動作は至つてぶまに、またのこ／＼匍ひあがる）野郎を目がけて突いてかかると、肝ウつぶしやアがつて「人殺し！」「たすけてくれえ！」つて喚きやアがつて、あつちこつち逃げ廻りやアがるのを……。（猶込、敵に迫る狀を、六疊いつぱいにうろついてみせる）

刑事　（思はず職業ばなれのした、普段々々した調子になつて）そんなこと云つたつて、お前、こゝにやア蟵は吊つたるんだし、床はとつたるんだし、さうはお前……。（ごく自然な笑ひ聲）

助次郎　（はッと氣はつくが、負惜み半分に）蟵なんざア、旦那、夙の昔に吊手が切れちやつてますし、寢床だつて、まるでもう踏みくちやでさア。……追つかけ廻してゐる

うちに、ちよいと野郎に隙が見えたから、ワッとばかり一本つッ込むと、野郎、キヤッといつて、わつちの肩に力いつぱいしがみついたからたまらねえ、もろに、お前さん……。（ギヨロ〳〵あたりを見廻し、いゝ加減にそこらを指さして）そこんところへもつてからに、ドサリ！　折り重なつて倒れましたんで、へえ……。

（出來榮よく、一席の長講を終つて、樂屋にさがつて來た藝人のやうな得意と、滿足とをもつて、肩で息をし、手錠のまゝの甲で、禿げあがつた額の汗を拭く。）

（人々は、可笑しくもあるが、その、底ぬけの善良さに打たれて、なんとなく、胸の熱い思ひで立ちつくしてゐる。）

（助次郎は、その氣勢につれて、無論誰の顏へも目は向けず、手のやり場にさへ困り、もぢ〳〵してゐるうちに、ついヒヨイと口へ飛び出して了つたやうな調子で、二疊の方を振り向きざま。）

助次郎　おッかア！　水をいつぺえくんねえな！

（かつも、その調子に吊られて、無意識にヒヨイと擡げかけた腰を、――氣がついて、あたりの人々を見廻しながら、またぢり〳〵と落ちつける。それと見た判事が、「よし〳〵、棑はんから持つて來てやれ！」と云ふこなし。かつ、「有難う御座います」と云ふこなし。立つて、茶簞笥から湯呑を取り出し、慌しく土間へおり、水瓶の水を汲んで來て、恐る〳〵助次郎のそばへよる。）

（助次郎、手から手へうけとりしなに、恥しさうな、氣の弱い眼つきを、チラリとかつへ走らせるが、すぐ、うまさうにゴク〳〵咽を鳴らして一息に飲み乾し、無雜作に湯呑を突き返す。かつ、小走りにもとの座へ歸る途中、ほんのチヨイ、チヨイと、眼頭へ指先をあてる。）

（こゝに、先刻出て行つた刑事「乙」が、近所の者らしい、薄ぎたない男をつれて來る。）

（この男は、「おかみ」とさへ聞けば、たゞもうわけもなく、震へあがつて了ふやうな小心者で、矢鱈にヒヨコ〳〵頭ばかりさげて、始終蚊のなくやうな聲でうけ答をするので、見物には一言も聞えない。）

（警部がそれと見て、判事に、「何某をつれて來ました」といふそぶり。判事、「すぐこゝへ」といふ顏。警部、その男を上へあがらせ、判事の前へつれて來る。）

（これにて人々の居どころが動く。それまで、具合惡さうに、「おかみ」の人たちのなかに混つてゐた爲吉は、チヨコ〳〵ツと、長火鉢の前の元の席へ歸る。）

（助次郎は簞笥のそばへ引きさがる。）

(六疊の中央で、判檢事、書記、警部に取りまかれ、近所の男の取調が始る。)

(判事の「正直に、ありのまゝを云はないと、僞證罪になるからね」とか、「内田のかみさんが、お前のうちに飛び込んで行つて、それから、時を移さず、すぐお前はこゝに駈けつけて來たんだね？」とか「それで、來てみたら……？」とかいふ言葉が、纔に見物席に達しればいゝ。あとは、いづれも默劇でこの件をはこぶ。)

(一々判事の問に答へながら、男は、兇行の現場を說明するしぐさ。――このへんに、被害者が、かういふ風に、こつちを頭にして横たはつてゐたとか、こゝらは、いつぱい血だらけだつた、とか、さういふ類のことを、臆々と低聲に喋りながら、手まねをしてみせる。この取調は、或る一定の時間だけ續くのだが、以下に述べる主役たちの芝居を妨げるやうな、人目を惹く動作は出來るだけ避けなければならない。これは、主役たちの無言劇に、ごく弱音の伴奏をつけて行くに過ぎないのだから。)

(助次郎は、少しもそれには耳を藉さずに、長火鉢のあたりを頻と氣にしてゐる。氣にしながら、初のうちは顔が向けられない。ふと、すぐそばの壁に、印半纏がぶらさがつてゐるのに氣がつくと、そつと手をかけて、引つくり返して襟字のところを見る。それから、なんといふこともなしに、鼻へもつて行つて匂ひを嗅いでみる。)

(そのうちだん／＼大膽になり、少しづゝ二疊の方へ體を捩ぢ向けて行つて、ショローリ、ショロリと二人を偸看し、あはよくば、かつと視線を合はさうとしてゐる。)

(かつは、神妙らしくうなだれたまゝだが、大ぶん氣持を樂にしてゐる。)

(爲吉は、人々の注意が、近所の男の話に集注されてゐるのに安心し、且は「なアに、これしきのこと、屁とも思つてやアしねえ」といふ氣持を誇示するために、ことさら手荒く、ガチャ／＼音をさせて藥罐の蓋をとつたり、燗をしなほしたり、いゝ加減で引きあげて、酒を飮んだりする。かつが、頻とそれを目で禁めるが、「なアに構ふことがあるもんけえ」といふやうな顔をして見せて、一向取り合はない。)

(最後にかつが、「あすこで見てゐるからさ！」と、胸で知らせるのに、「なんでえ、誰が見てようと構はねえぢやねえか」の氣持で、ヒョイと振り向く。パッタリ、助次郎と視線が合ふ。互にはッとする。――とたんに助次郎は、ニタリと和やかに笑ひかけるが、それを爲

吉は、見たか見ないの瞬間に、顔をもとへ戻して了ふ。)

(助次郎は、淋しく笑ひをさめる。爲吉は、ぢッと膝の上を見詰めたまゝ考へ込んでゐるが、忽ち意を決したやうに、猫板の上に置いてあつた以前の湯呑に、すつかり徳利の酒をあける。それから、茄子の漬物の刻んだのを、一箸に出來るだけ澤山はさみあげ、湯呑は左に持つて、つか／＼ッと助次郎のそばへより、默つて、ぶつきら棒に突き出す。)

(助次郎、その顔を見詰めてゐるうちに、泣面をつくり、ぼろ／＼と手ばなしで泣き出す。)

(爲吉、「さア早く！」と云ふ風に、兩手に持つたものを、一つしやくつて突き出す。)

(助次郎、刑事の顔を窺ひ、氣をかねる。刑事、無感情にたゞちよいと輕く頷いてみせる。)

(助次郎、大急ぎで、手の甲で涙を拂ひ、一つ鼻を啜つてから、手を出す。——まづ湯呑をうけ取り、半分ほど飲み、むせながら、今度は左の手の平に漬物を載せて貰ひ、ちよつと頂いて口に入れる。それから殘りの酒を飲む。)

(助次郎、湯呑を返しながら、涙に硬ばる顔を、引き伸ばすやうな顔をして、低聲ながらも、眞實がこもり。)

助次郎　たのむよ、お前さん！

(爲吉、一つ大きく頷くと思ふと、すぐ、クルリと背を向けて、まるで慍つてゐるやうな、可怕い顔をして火鉢の前に歸り、どかッと胡坐をかく。)

(丁度この時に、六疊の方では、近所の男が、押入の襖の、新しく貼られた新聞紙の箇所を指し、そこに、シヤアッと血がかゝつてゐた、と云ふ身ぶり。)

(その話聲に、助次郎、ふと振り返る。襖に一番近く立つてゐた警部が、何心なく、新聞紙のはなれ目をつまんで、ぱり／＼とはがしてみる。眞黑な血痕が現はれる。)

(助次郎、ブル／＼ッと震へあがり、顔をそむけて了ふ。)

(あと二言三言で、すぐ近所の男の取調がすむ。)

(男は、法官たちの前に、ヒヨコ／＼お辭儀をし、かつともちよつと頭をさげ合つて、急いで歸つて行く。)

(判事が顔をよせて、ちよつとのま協議してから、いづれも「では、これで……」といふやうな顔つきになり、あがり口へ來て靴を穿く。)

(その間に助次郎は、編笠を被せられ、一番あとから、とぼ／＼と二疊の方へ來かゝり、爲吉のうしろで、何かもの云ひたげにしてゐる。)

(爲吉は、先刻の慍つたやうな顔が、だん／＼だんだ

ん澁面になつて來て、この時には、一生懸命濤を喰ひしばり、肩を震はせてゐる。）

（かつは、助次郎が酒を飲むくだりで一度泣くが、あと泣きやんでゐて、またいよ〳〵歸つて行くといふだんになると、聲をあげんばかりに泣きだす。）

（助次郎も、それを見ると、涙がこみあげて來るこなし。刑事に促されて土間におりる。法官たちは、どやどやともうおもてに出て了つたあとで、そこには、隅の方に巡査が一人立つてゐるきり。助次郎は、爲吉の方へ顔をさしよせるやうにして、）

助次郎　ぢや、ほんとにたのむぜ！

（爲吉、急にしやくりあげて泣き出し、頻に頷く。）

（助次郎、今度は、かつの方へ。）

助次郎　仲よく暮しねえよ。いゝか……。

（助次郎、とぼ〳〵と、けれども、心安げに引かれてはいる。）

――幕――

平凡長命

（長兄武郎の靈前に捧ぐ）

時

今でも昔でも差支なし

所

國内

景

あまり人里に遠くない山中の庵室。決して贅澤ではないが、强ひてむさくるしき要もなし

人

甲。老人。（八十歳以上）何宗とも定め難き佛徒の服裝なれど、出來るだけ僧侶らしく見えぬがよし。庵の主人なる故、住居と打扮との辻褄の合ふことは肝要なり。

乙。壯者。（三十歳がらみ）可なりみすぼらしき打扮。但しどこか都會人らしくあくぬけてゐる方がよし。

乙 （通りがゝりの庵室のうちに甲を認め、都會人らしい狡猾と慇懃とを以つて）えゝ、旅の者ですが、少し休ませて頂けませんでせうか。

甲 （相手を見定めようともしずに）さア〳〵。

乙 あゝ、くたびれた。（然るべきところに、腰かけるなり坐るなりする）そこらに井戸水か淸水かありませんでせうか。

甲 丁度湯が沸いてるからお呑みなさい。なんかまだ少しくらゐ食べるものもあつたかと思ひますよ。たゞね、あたしは年寄だから、お世話をしてあげることは出來ませんがね、御遠慮なく、自分で御自由におやんなすつてくださいまし。

乙 實は腹もすいてゐるんです。お言葉に甘えて、ぢア勝手に頂戴することにしますぜ。

甲 さア〳〵。

（乙、食器を取り出し盛んに飲み食ひする。）

甲 おいしさうにあがりますね。

乙 （なほ食り食ひながら）えゝ、腹がすいてる時には、なんでもうまく食へるもんです。

甲 （感嘆して）羨しいなア。

乙 あなたはお腹がすかないんですか。

甲 いや、なか〳〵さうはいきませんよ。でも、年をとると、何を食つても何を飲んでも、さうおいしいとは思は

なくなりますからね。

乙　(や、皮肉に) 結構ぢアありませんか。

甲　(すなほに) 普段はなんとも思ひませんが、今のやうに、おいしさうにものを食べなさるところを見ると、若い頃に、自分がうまがつてものを食べたことなんぞ思ひ出しましてね。……まつたく、おいしくものが頂けると云ふことは、悪くないものですからねえ。

乙　(その言葉には少しも心を惹かれず、食ひ終つたものを片よせたりしながら) どうも御馳走樣でした。……ときに、こゝには、あなたお一人ッきりでおいでなさるんですか。

甲　えゝ、さうです。いつの間にか、あたし一人ッぽつちになつて了ひました。

乙　ぢア煮炊(にたき)ものなんぞどうしておいでなさるんです。どうも大した御馳走ぢアありませんか。

甲　里の人が代り／＼あがつて來ては、親切に世話をやいてくれるので……。

乙　一體あなたは何者(なに)なんです。

甲　さア、何者(なん)でせうか。もうこの年齡(とし)では、なんにも出來ませんから、商賣を申しあげるわけにもいきませんし……。

乙　一體いちんち三界なにをしておいでなさるんです。

甲　なんにもしやアしません。いや、しないんぢやない、もう何をすることも出來ませんのですよ。

乙　それに、よく村の人が、こんなところまで世話をしにあがつて來ますね。

甲　まつたくですよ。……多分あたしが、今日までに、さう大して悪いことをしなかつたおかげだらうと思つてますがね……。

乙　と云ふと……？

甲　いえ、別に大したことぢアありませんが、少しは人樣のおためになりさうなことを、云つたり爲たりした憶(おぼえ)がありますから、大方そのせゐだらうと思つてゐるのですよ。

乙　だが、人間つて奴は、ひとの悪事はいつまでも憶えてるが、いゝことをしたのは、すぐに忘れて了ふもんですぜ。

甲　それが、忘れられないからこそ、かうして優しくして頂けるんでせうかね。

乙　なか／＼自惚(うぬぼれ)が強いんですね。

甲　なに、こんな年寄に、もう自惚なんぞありやアしませんよ。その代りまた謙遜も出來ませんね。何もかも、だんだんに出來ないことだらけになつて行くのです。

乙　それでも、口だけはなか／＼達者ぢやアありませんか。

甲 （愉快さうに笑つて） さうですね、あなたに云はれて氣がつきましたが、や、今日はまた特別よく喋るのですよ。……成程、これは有難い。

乙 （忌々しさうに、傍白） 暢氣なぢゝいだなア。（甲の方へ向き直つて） こんなところに一人ッぽちでゐて、よくあなた寂しくありませんね。可厭だと思ふやうなことはありませんか。

甲 ありますとも。尾籠なお話ですけれど、この頃ではもうたわいがないもんですから、つい粗相なんぞしますが、そんな時は、自分も心持が惡いし、世話をしてくださる方にも、お氣の毒やらみつともないやらで……。

乙 へえ、みつともない！ 自惚も謙遜も出來なくなつたなんて云つてる人にでも、まだそんな色氣があるものかね。（相手を甘しと見くびつて、だん／＼言葉使ひが粗略になつて來る）

甲 （そんなことには更に頓着なく、嬉しげに） あるんですよ、有難いことに、それがあるんですよ。

乙 （思はず失笑して） なにが有難いんだ！

甲 いや、この體を見捨てずにゐてくれるものなら、なんだつて有難いんですよ。……あなたは齒はお丈夫ですか。

乙 （なにを云ひだしたんだ、とも思はないほどの冷淡さで） 別段なんともないやうだね。

甲 それア結構です。思ひ出しても可厭だが、齒ですよ、一番さきにこの肉體を見捨てゝ行くやつは。子供の時分に一度脫け變つたが最後、今度いたんだ齒は、もうどうにも仕樣がないんですからね。人によつていろ／＼でせうけれど、あたしは齒でしたよ。それから髮が薄くなつたり耳や目が遠くなつたり……、用捨なく、いろんなものがあたしの體から脫け出して行きましたよ。ですから今日が日まで一緒にゐてくれたものなら、なんだつて有難い……。

乙 解つた／＼。ぢア、大小便をしくじつたりして、可厭なことはあると……、そこで、悲しいことはどうだね。

甲 さやう……。（ぢつと考へ込む）

乙 どうだね、悲しいことや辛いと思ふことは、あるかね、ないのかね？

甲 （悲しげに） さう……、仰有られてみて、氣がついたんですが、さう云へば、だん／＼そんなことも少なくなつて來ましたね。

乙 （せゝら笑つて） さう云つてべそをかいてりア世話アねえや。

甲 （愕然として） や、成程！ こりやア有難い。（眞實喜ばしげに） あるんですね、矢つ張りあるんですね。

乙 （なかば獨言のやうに） 馬鹿々々しくつて話にもなら

ねえ。

甲　（同じくなかば獨言のやうに）　いや、さうだらうとも、智慧と云ふほどのことでもないが、自分で自分の心に氣がつくと云ふやうな才覺は、この節とんとなくなつて了つた。よつぽど馬鹿にはなつたらしい。

乙　然し、折角のお喜びだが、おぢいさん、そいつは可訝しいぜ。悲しいことを見つけた、自分もまだ悲しがれる、と云つて喜ぶんぢア、悲しいが悲しいにたちアしめえ。

甲　ア、成程！

乙　どうだね、それでまた悲しくなつたかね。（自分で自分のあたまのよさに滿足して、愉快げに笑ふ）

甲　なんだか、ごた〳〵とこみ入つて來て、よくわけが解らなくなつて了ひましたが、兎に角、まだあたしは悲しがれる、それから喜べもする、これだけは確なんですね。いや、有難い、有難い。……時に、あなたは話の面白いお方ですね。里から來てくれる人たちとは大違ひだ。

乙　こんな山奥の土百姓と一緒にされてたまるもんか。（傍白）　いや、御挨拶で痛み入るが、（急にしんみりして）然し羨しい境涯だなア。悲しいも辛いも、嬉しいも有難いも、一緒くたになつてわけが解らないたア、この世からの極樂だ。

甲　（不服さうに）　……極樂……。

乙　なんだ、ひどくつまらなさうな顔をするぢやアないか。

甲　これが極樂なら、まだこのさき、本場の極樂へまで行つて、このうへ退屈しなきやアならないなんて、そんな……、それぢアあんまり殺生だ。

乙　おい〳〵、冗談ぢアねえぜ。こんなところに庵室を結んでる限りにやア、いづれこの世が可厭になつてのことだらう、抹香くせえ氣持になつてのことだらう。それに……。

甲　あゝ、お若いに似合はず、なか〳〵お目が高いな。……仰有る通り、一時はそんな氣にもなりましたよ。

乙　「一時は」つて、今もつてお前、坊さんの裝をしてゐるぢアねえか。然し坊主にしちア、感心にいやみのねえのが取柄だ。

甲　坊主と云やア商賣でせう。あたしはさつきも云ふ通り、無職か、強ひて云へば、まづ乞食ですからね。……ところが、假の宿でもなんでも、矢つ張りこの世が一番結構ですね。なか〳〵もつて、可厭になんぞなつてたまるもんですか。えゝ、とんでもないことですよ。

乙　さう云ふ娑婆ッ氣でゐながら、なんだつてまたこんな山ン中に庵なんぞ結ぶ氣になつたんだ。

甲　それはあたしが、だん〳〵にいろんなことが出來なくなつて行くからですよ。自分でも困るが、さぞはたには

御迷惑だらうと思ひましてね、人様のそばから一寸二寸と膝行るうちに、たうとうこんな山奥まで來て了つたんですよ。かう、箱のなかの物かなんかゞだん／＼一杯になつて來て、そばからはみ出すやうな按配しきに、あたしなんざア、そろ／＼もう人間のそとへはみ出しかゝつてゐるところですよ。

乙　（思はず呟く）　羨しいなア。

甲　（聞き取りそこねて）　なんです？

乙　いや、暢氣で結構だと云ふのさ。

甲　暢氣で……。（考へ込んで）　成程ねえ……。

乙　何を感心してるんだい。

甲　いえね、さう云はれてみれば、なに一つ樂みもない代り、これと云つて悲しいこともないのですから、暢氣と云はれても、なんと文句のつけやうもない境涯でせうねえ。ですが、あたしにしてみれば……。

乙　暢氣と云はれたんぢア納らねえのか。

甲　さう云ふわけでもありませんが、あなたのやうなお若い方を見ると、お羨しいやうな氣もしましてねえ、つい……。

乙　へーえ。もうお前くらゐの年寄になれば、ふとした洒落や空世辭に、時にはそんなことも云つてみたいものらしいが、さうしみ／＼と若返りたがる人つてえのも、俺アまだ逢つたことがねえや。どうもお前さんはちつと變つてるぜ。

甲　さうでせうか。

乙　變つてるとも。一體お前、何がよくつて、そんなに若い時分を戀しがるんだい。

甲　何がよくつて？　それアもう何から何まで……。兎に角、若いうちなら、人間に出來るだけのことなら、なんだつても思ふさまやれるんだから豪氣でさアね。三十臺から五十臺いつぱいでせうか、そこらの二三十年こそ、ほんとうに、矢でも鐵砲でももつて來い、と云つた氣持で暮せる時期でせうね。出來ないなんて言葉は、字引のなかから取つちまへ、なんてつてえばつた人もあるとか聞いてますが、豪氣ぢアありませんか。お見受け申したところ、あなたなんぞも、丁度その御壯なところで、さぞ何もかも好き自由なんでせうね。たゞ／＼お羨しい限りですねえ。

乙　何が、好き自由なもんか。皮肉なぢゝいだな。

甲　どういたしまして、皮肉どころか、大眞面目でございますよ。

乙　ところが、御覽の通り、布子一枚のすつてん／＼だ。恥かしながら、今朝からまだ一碗の飯も口へは入れなかつたんだ。こゝで御馳走にありつけたなア、天の助とも

思ふくらゐのわけさ。いかに盛りの年頃だつて、人間さうさう思ひ通りになるもんぢアねえ。一つぐれだしたら、際限なしに落ちてくものさ。

甲　（ちよつと呆れたやうに目を睜つて）　それが何故……いゝ心持ぢアありませんか。さぞ面白からうな、さうやつて、たゞ一人あてもなく放浪ついて歩けたら。

乙　とんでもねえ、俺ア刑状持だぜ。

甲　（びくともしずに）　なほさら結構ぢアありませんか、氣持に張りがあつて。どんなにか面白いか知れやアしない。

乙　巫山戯るなよ。俺ア不仕合な人間なんだ。

甲　不仕合？　（考へ込んで）　不仕合、……不仕合と……。

乙　いかに耄碌したつて、人間に不仕合と云ふものがあるつてことまで、すつかり忘れちまつたわけでもあるめえ。

甲　あゝ、思ひ出しましたよ。いろ／＼憂いこと辛いこと、それから悲しいこと。……だが、決して住みにくゝはないところでさア。

乙　何が？　浮世がか？

甲　いえさ、不仕合と云ふ國の話ですよ。謂はゞピリッと來て、目が覺めるやうな冷い水でさア。大抵弱い魚でも腹を上にして浮いちまふやうな心配の要らない國でさアね。そこへ行くと仕合の國で、微温かい水に、のう／＼と泳ぎ廻つてるやつの方が、ぷッくり浮いちまはないためにやア、餘計な氣苦勞も要るわけでせうよ。……然しまア、浮くも沈むもつゞまるところは一つでさア。あたしどものやうに、だん／＼出來ることの數がへつて行つて……。

乙　とゞのつまりは、息が出來なくなつて、それでいよいよお手ッ拂ひ、か。

甲　（微笑ましげに）　さうなんですよ。まアたつた一つの樂みと云へば、それくらゐのもんですね。

乙　嘘つき！　さんざ若い者を羨しがつて置きながら、死ぬのが樂みたアなんて云ひ草だ。

甲　（ひとたまりもなく恐れ入つて）　いや、まつたく仰有る通りです。ですがね、決して嘘ではございません。心にもないことを云つてるわけではございません。もう一度若い時分の氣持になつてみたいと思つたのも本當ですし、それからいま申しあげた氣持にも嘘はありませんので。もうあたしには、とても嘘はつけなくなつてゐます。どつちつかずのお叱りならば、これ、この通り　（ト平身低頭する）　平に詫び入ります、あやまります。その代り、どうか嘘を云つたとは思はないでくださいまし。御願ひ申します、御願ひ申します。

乙　年齢にも恥ぢず、よくさうだらしなくあやまれたもん

だ。意氣地のねえ！

甲　その意氣地なんぞも、負惜みと一緒に、夙（とう）の昔になくなして了ひました。……それなんです、まつたくそれなんですよ。なくなして惜しいものも、なくなつてよかつたと思ふものも、どちらをどうと云ふ選（え）り好みが云へないんですから、――年と共に一樣になくなつて了ふもんですから、それで、殘して置きたかつたものを惜む氣持で若返りたがつたり、なくなつてよかつたと喜ぶ氣持から、果ては一日も早く息を引きとりたいと願ふやうになつたりするのでせう。自分としては無理もないことだと思つてゐますが、然しどつちつかずなことばかり云つてゐるのは、聞く人の身になつたなら、決していゝ心持のものぢアありません。間拔じみた、歯痒いものです。でも、正直なところ、さう云ふ氣持から起つて來る迷ひですから、どうぞ御勘辨ねがひます。

乙　（少しづゝ相手の言葉に心を惹かれだす）なに別に許すも許さないもありやアしねえ。もと／＼俺に係つたことぢアねえんだが、しかし、成程いまのお前さんの話は、いかにもありさうなことだ。（考へ込んで獨言のやうに）……ふうん、さうか、年をとると、いゝ氣持も惡い氣持も、一樣に人間の心から脱けて行つて了ふものかな。ふうん、ふうん、ふうん。（頻りに考へ込む）

甲　さうですよ。生れた時は、誰しも同じやうにだらしのないものです。母親の乳房に吸ひつくことよりほかには、なんにも出來ないやうなたよりのないものです。それが、笑へるやうになる。首が据わる。匍ひだす。片言を喋べる。見る間にいろんなことが出來るやうになります。十臺、二十臺、あなたがたの年頃と、だん／＼に、して出來ることの數はふえる一方でせう。面白い盛りぢアありませんか、いゝことだの惡いことだの、そんな選り好みはありやアしません。今まで出來なかつたことが出來るやうになる、それだけでものび／＼としたいゝ心持でさアね。おまけに、人間として、出來る限りのことなら、何をしたつていゝんですからね。いや、惡いと云つたつてしずにゐられるわけのものぢやアありません。失禮ながら、あなたなんぞ、隨分なんでも出來さうな方だ。

乙　その通りだ。なか／＼ひとには出來ないやうな、思ひ切つた惡事も働いて來たが……

甲　なに、それア、あなたに出來ることなら、大抵誰にだつて出來るのですよ。たゞ、めつたには爲ないと云ふだけのことでせうよ。しないのと、出來ないのとは別です。例へてみれば、赤ン坊や、もうあたしどもみたいになつて了つた者には、とても人殺しは出來ません。けれども、どんな聖人君子だらうと、達者なうちなら、それは出來

るのです。豪氣ぢアありませんか、人間に出來ることだつたら、しようとさへ思へば、なんでも出來るんですからね。

乙　ぢアお前さんは、人間に出來ることなら、なんでもした方がいゝと云ふのかい。

甲　なに、さうでもありませんよ。いゝ惡いは別として、したくないことはしない、その自由も、達者なうちなら利くんですからね。可厭なことなら、無理にするにやアあたらないでせう。一體人間に出來ることゝ云ふのは、大根で、するかしないかの二つの道に、どちらなりとも選べる自由のことでせう。しないと云ふことも、出來ることのうちですからね。

乙　（ひと膝のり出して）お前さんてえ人は、一體どう云ふことをして來なすつたんだい。

甲　なに、碌になんにもして來アしません、いゝことも惡いことも、ほんのぽつちりづゝでさア。

乙　まアさう云はずに、ひとつ話して聞かしてくんねえな。

甲　ぢア、かい摘んだ話をしませうか。一體あたしは、生得なんでもしたい方の質でしてね、またやれば人並には出來たんです。……いや、いゝ惡いは別ですよ。決してこれア自慢話ぢアないんですからね。結構碌でもないまねばかりして來たんですが、……さやうさ、二十五六の年齡でしたらうか、これアかうしてゐちアいけないと思つたんです。つまり云やア、出來る限りのことのなかゝら、選り好みをする氣になつたんです、——つまり、いいことばかりしようとねえ。

乙　ふうん、それでどう云ふことをしたね？

甲　大泥棒の子分になつたんですよ。

乙　變つてるねえ。

甲　それがね、何しろ年齡がいかないから、どうしたらいいことが出來るのか、皆目見當もつかないんでね、仕樣がないから惡いことの邪魔をしてやらうと云ふわけだつたんですよ。夜仕事に出かけると、故意とどぢなまねをしたり、眞つ先に忍び込んだと思やア、早く起きてかう〳〵なさい、いま泥棒がはいるところですから、なんて主人を起して、うまく遁れる段取をつけてやつたりしましてね。馬鹿ですね。それくらゐならいつそのこと、お上へでも訴へて出た方が早手廻しなのに、まアそんなことをしてゐたんですよ。そのうちこいつが親方に知れて、野郎、たゝんじまへと云ふわけでさア。その時分、こつちは大した善人のつもりだから、とても一生のうちに一度でも、人を殺すやうな氣にならうたア、夢にも思つてやアしませんでしたがね、斬つてかゝられると、あとは夢中でね、結局あたしがかうして生き延びてるんだから、相手は死

んだんでせうね。よもや出來まいと思つてた人殺しが、あたしにも出來たんですよ。だが、あとは可厭な氣持のもので、それからすつかり脅えちまひましたね。一生しまいと思つてゐたことが、かう易々と出來るやうぢア、とても自分で自分が賴みにならない、さう思つたから、佛様のお力にたよる氣になりましてね、さアそれから一生懸命坊主の修行をしましたよ。然し、惡いことはしまい、なんて決心が、ちつともあてにならないつてことは、その後も度々經驗があります。これが、いつも大抵は女犯でしたつけ。これアもういつそのこと、どうしても出來なくなつちまはなきやアいけないと思つて、剃刀で、あはや陽物を切り落さうとすると、そこへ師の御坊がはいつていらつしやいましてね、「勿態ない、馬鹿なまねをするな、佛はどこから生れたと思ふ。今に見ろ、したくも出來ない時が來るんだ。邪魔にはならん、つけとけ、つけとけ」と、かう仰有つたんで、はつと目が覺めたやうな氣がしましたよ。

乙 （次第に敬意をもちだす）へえ〳〵、で、その後はいかゞでした。

甲 邪魔にならないどころか、大層役にたちましたよ。

乙 と、仰有いますと?

甲 好き勝手なまねをして、たうとう宗門を追はれたんでさア。

乙 成程、還俗なすつたのですね。

甲 そのとき師の御坊が仰有るには、「お前はまだ〳〵いろんなことが出來る。出來ることなら、しないも修行、するも修行だ。こゝはしない修行どころだが、お前はもう一度俗に還つて、する修行で心魂を錬つて來い」とね、あたじを一間に召してのお話でした。

乙 へえ〳〵、それから?

甲 それからは別に變つたお話もありません。たゞ、いくらか人様よりは夙く出來なくなつたことが多いかと思つてゐます。

乙 それはどう云ふことでせう。

甲 なんでもありません。自分の心にそまぬことです。そればかりは、いくらしようと思つても、どうしても出來なくなりました。

乙 それは、我が儘におなんなすつたと云ふことゝ、どこか違ふのでせうか。

甲 いえ、まつたくそれです、我が儘に違ひないのです。たゞ、安心して我が儘に振舞へるやうになつただけです。人を悦ばせこそすれ、決して腹を立てさせたり、悲しませたりするやうな心配はなく、なほさらあとで自分が寂しくなるやうな憂のない、さう云ふ我が儘が出來るやう

になつたのです。

乙　もう少し詳しく仰有つて頂きたいのですが。

甲　なに、なんでもないことなんですよ。あたしは自分に出來るだけのことが解つたのです、力の限りを知つたのです。あたしの性分と折合へない人とは、初手からお近づきになりませんし、緣あつて結ばれたお方には、さき樣はどうあらうと、こちらからは、眞實まごゝろをもつてお交際することが出來たんです。それを知つてくだすつた方々は、みなさんあたしを好いてくださいました。勿態なくなつて、涙がこぼれるほど好いてくださいました。さう云ふ方々に對して、どうしてあたしから惡い心がもてませう。あたしが我が儘いつぱいにすることなすことを、一つ殘らず、みなさんが悅んでくださる、――さう云ふ境界が、あたしにはわりに夙く來たかと思はれるだけのことです。

乙　不思議ですね、あたしはまたつい三四年前までは、近所で評判の孝行息子だつたのです。爲たいことも云ひたいことも、我慢に我慢をして、親兄弟のためと、たゞもう働きづめに働いたのです。ずゐぶん世の中の辛いこと、悲しいことも潜つて來ました。それでゐて、することなすことが、ぐれはまになつて了ふのです。ひとのためよかれと思つてしたことが、いつも、狡猾な、油斷のならない人間の謀計みたいに釋られて了ふのです。

甲　失禮ながら、事實あなたは、さう云ふ氣持ぢアなかつたんですか。

乙　（ギックリして突ッ立つ）なんだと！

甲　お腹がたちましたら勘忍してください。でも、あたしには、さう見えたのです。

乙　な、何をもつてそんなことをぬかすんだ。次第によつちア承知しねえから！

甲　あなたは、先程こゝへいらした時に、自在の釜に湯がたぎつてゐるのが目にはいつてゐながら、この邊に井戶か淸水はないか、なんて仰有いましたね。それから、あたしが毫碌してゐるのを馬鹿になさいましたね。でも、あたしは、あなたがいゝお方だ、惑の綺麗なお方だ、と思つて、ついいろんなお喋りもして了つたのです。正直に何を申しあげても、肚にさへ落ち込めば、決して惡くはお釋りにならない方だと思へばこそ、今のやうな無遠慮なことも申したのですよ。

乙　（もう一度座につき、恭しく頭をさげる）恐れ入りました。一々思ひあたります。

甲　なにもそんなに恐れ入ることはありませんよ。さつき御自身で仰有つたやうに、あなたは不仕合な方のやうですね。人のために悶つて殺されかゝつたことのあるあた

しには、あなたの苦々しいお心持はよく解るつもりです。その苦々しさから、きつとあなたは、ひとが俺のことを、狡猾な油斷のならない奴と思ふんなら、いつそのことさう云ふ人間になつてやれ、つて云ふやうな、捨鉢な氣持におなんなすつたんぢアありませんか。ねえ、さうでせう？

乙　まつたくお察しの通りです。

甲　つまらないぢやアありませんか。あなたのお心も、一生も、あなたのもので、決して人様のものぢアないんですから、そんな、ひとがかう思ふからさうなつてやれなんて、そんなつまらない意地を張つてみたところで、仕様のない話だと思ひますがね。孝行息子の時分だつて、さうですよ。きつとあなたは、あんまりひとのことばかり思ひすごして、御自分の氣持と云ふものが涸れて了つたんぢアないんですか。心の誠から出ない仕草は、いかにそれが立派な見てくれを備へてゐようとも、結局相手の心に觸れるものぢアありませんよ。それより、その後あなたが捨鉢になつてからなすつたことのなかに、きつとまごころの罩つた立派な行爲があつたに違ひありません。

乙　なアにあなた、呑む、ぶつ、買ふ、手のつけられない道樂者になつて了つただけのことでさア。

甲　結構ぢアありませんか。出來ることならなんでもおやんなさい。可厭になつたらおよしなさい。

乙　夙に可厭になつてゐながらよせないんです。

甲　それは、可厭になり方が足りないんでせう。無理によすのでなく、出來なくならなくつちアいけません。出來なくなるためには、よすも修行、やるも修行です、修行中少々の退轉は誰しも仕様のないことです。そのうちには、だん／＼出來なくなります。あたしのやうになつて了ふと、しなければならないと思ふことだつて出來やアしません。いゝことも惡いことも、一夜のうちに出來なくなります。若いうちは、なんでも爲たいだけのことは、出來る限りのことは、なんでも恐れずなさるがいゝ。出來なくなりますよ、すぐ出來なくなりますよ。たゞその時になつて、いゝことの方が先に出來なくなるか、惡いことから順に出來なくなるか、それには若い間の心懸が露骨に現はれて來ますからね。それだけは、もつと氣をおつけになつた方がいゝかも知れません。あんまり惡い心と馴染が深くなつて了ふと、いつまでも手が切れないで、年とつてから、だん／＼出來ないことの數がふえて行くなかに、惡い氣持ばかりがちよい／＼顏を出して、それこそはほんとうに始末のつかない寂しさに鎖されなければならなくなるでせうよ。幸に、あたしの心懸は、

さう悪くはなかつたもんですから、悪い心と手が切れてから、もう暫くになりますよ。然しさうかつて別段いゝこともも出來やアしません。ですから、親切な里の人たちに、たゞ食べさせて貰つてゐることが、だん／＼氣づまりになつて來ました。實は今日から、假令匐ひ摺つてでも、もつと深い山の奥へはいつて行つて、木の實草の根で、痩せ細つた壽命を繫いで行かうかと思つてゐたところです。でも、そんなことをして、里の人たちを騒がせでもすれば、なほのこと氣の毒ですし……。（急にほんの少しばかり自嘲を含んだ笑ひ聲をあげて）この年齢になつても、矢つ張り苦勞は絶えないもんですねえ。ですが、その苦勞もおつつけ出來なくなるんでせう。早くそこまでぼけて了ひたいもんです。

乙　それほどになつても、失禮ながら、自分の手では死にたくないものでせうか。

甲　可厭ですね。赤ン坊のなんにも出來ないのと、老人の出來ないのとは、同じやうにみえても、決して同じ價ではありません。年をとつて赤子に返ると云ふのは、たゞ形だけのことです。振り出しの、なんにも出來ないところから、なんでも出來る絶頂まで登りつめて、それからあとは下り坂に、だん／＼もとの出來ない平地へおりて行くものと思ふと大間違ひです。人の一生は、決してさう云ふ峠道ではありません。最後まで登りつめるのです。發足の、オギヤアとも泣けないところから、最後の息を引きとつて、枯木のやうな死骸になつて了ふまで、登りづめの山道では、なんでも出來る盛りと云ふ時代が、やつと六七合目にもあたりませうか。かう見えて、あたしも、まだ一生の旅の、摺り切れ草鞋をぬいではゐないつもりです。こゝまで來たからには、なほさら絶頂の美しい眺めが拝みたい。どういたしまして、自殺なんぞ、とんでもない話でさア。

乙　一體あなたはお何歳におなりです。

甲　なに、まだ九十にはなりますまい、よくは憶えてゐませんけれど。

乙　實に驚き入つた御精力ですね。

甲　それも、やがてはなくなりますよ。さうなればさうなるで、あつた昔を戀しがりながら、なくなつた今を樂むでせう。どこまで行つてもおんなじことです。たゞ山が高くなれば、それだけ大氣が澄み亙るだけの話でせう。絶頂の眺めは、高ければ高いほど、さぞ美しからうと、それは頻りに思はれますが、なに今日が日それへたどり着かうと、いくら慾張りでも、有繫にもう未練はなささうです。實はあたしも、幾度か自殺しかけたこともありますが、よくぞ思ひ止つたものだと、時折考へだしては

喜んでゐるんですよ。いくら勇敢でも悲壯でも、自殺者の一生と云ふものは、謂ば梢を吹き折られた木のやうなものですからね。ちよつと面白い、くらゐには眺められますけれど、どうも立派な木だなア、と見あげるやうな心持にはなれませんやね。なんと云つたつて、立派なのは老後の自然死ですよ。病氣と名のつくやうな病氣もなく、ポックリと逝くやつですよ。自然に享けた命を大切に使つて、そつくりまた自然に返して行く、と云つたやうな、完全な、堂々とした美しさがあるぢアありませんか。

乙　なんですか、そのへんのことになると、とてもあたしには解りません。また解りたいとも思ひませんが。

甲　さうです〳〵。解らない方がいゝのです。

乙　ぢアあたしは、そろ〳〵もうおいとまといたしませう。どうも、いろ〳〵有難うございました。失禮ばかり申あげまして、なんとも申譯ございません。

甲　どういたしまして。では、結構な一生をお過しなさいまし。

乙　（立ちあがつて）有難うございます。では、あなたも御機嫌よろしう。

甲　あたしこそあなたにお禮を申さなければならなかつた。おかげで今日は、半日面白く、時の經つのも忘れて過しましたよ。では、一生を御大切になさいまし。

（甲、緣先まで匐ひ出して見送る。）

（乙、幾度かお辭儀をして、見返りがちにはいる。）

（甲、老人らしい寂しい微笑を浮べて、延びあがり延びあがりいつまでも見送つてゐる。やがて、見えなくなつたころで、奥へ匐ひ込んで、圍爐裡のそばにコロリと横になる。）

（ちよつと間があつて、乙、たち戻つて來る。うたゝねをしてゐるのを見て、遠慮してすぐ立去らうとするが、思ひ切れずにまた歸つて來る。）

乙　あなた、もし、あなた、あなた！

（初は憚りながら、だん〳〵聲高に呼び覺まさうとする。それでも返事がないので、上へあがつて、腿のあたりをゆすぶつてみる。それでも起きないのに不審を起して、顔の方へ近づき、とゞ、口へ手の平をあてがつてみる。もう息がない。乙、吃驚するが、取り亂しては騷がない。）

乙　あゝ、これはもう絶頂を極められたとみえる。

（と、靜かに呟き、ぢつと死顔に見入つてから）

乙　手もなく佛様だ。なか〳〵會ひ難い死顔だ。

（合掌禮拝する。）

——幕——

小暴君

時　現代

人
伊澤敏朗（二十四五）
秦仁助　同年輩
諸岡　伊澤の姉婿。陸軍中將（五十五六）
日野　同じく次姉の婿。海軍大佐（四十五六）
妙子　日野夫人。（三十四五）

景
中央に、さながら高時天狗舞の舞臺をそのまゝの、高足の屋臺、たゞ、上下二間に分れ、十疊の上の間の正面は、本床、床脇。次の六疊間に、塗縁の板戸。隔の襖、障子は總て取りはづしてあり。おとして廻縁。それより下手へ、渡殿風の廊下にて母屋へ續くこゝろ。
上下とも庭の植込にて見切る。燈籠、飛石、池の干潟など、數寄をこらせる庭づくり。
上の間、よきところへ羆の皮を敷く。床、床脇その他の飾付は、それ／＼由緒あり、且つ趣味よきもの、主人の人柄を現はすに足るべし。たゞ、太刀置のみありて、これに倚るの太刀なし。

眞夏の夕方より夜にかけて。日のあるうちは蟬、青蜩の聲。月出でゝ後に蟲の音。舞臺に人なし。
暫くして、下手、母屋の方にて、

伊澤の聲　うるさい。
（諄々と、何やら云ひ聽かすやうな低い聲。それにおッ被せて）
伊澤の聲　えらい／＼！　有繋は未來の海軍大臣だ。一々御尤だよ！　解つたよ！　えらいよ！（相手の言葉に對して）……いゝぢやないか。どうならうと君の世話にやアならないんだ。あゝ、いゝとも！
（云ひながら、渡り廊下に現はれる。色つや蒼黃色く、唇は紫じみ、血走つた眼ばかりギョロ／＼光らせ、一見して可なり進んだ神經衰弱患者。とんがり鼻の頰から顎へかけて貧相にこけたわりに、やゝよれ加減に頭

の地肌にぴつたりくッつく癖のある薄い毛髪に包まれた頭蓋骨が大きいので、ちよつと辣韮に似てゐる。丈はヒヨロ長いが、蚊とんぼのやうな手足、よれ〳〵の絣つぽ浴衣に、だらしなく兵兒帶を巻きつけてゐる。亢奮の餘且つは虚勢を張つて足音あらく上の間まで來るがいきなり羆の皮の上にゴロリとなると、反轉して痔の痛に呻き苦しむ。）

（やがて、ヒヨイと腹匍になり、母屋の方へ聽耳を立てる。間をおいて、妙子（打扮には特別の註文なし。）足早に渡り廊下の中ほどまで出で、急に、何か考へついたらしく、すぐまた取つて返さうとする！）

伊澤　なんだい？

妙子　（曖昧に）いゝえ。（ト去る）

（伊澤、なほ聽耳たてゝゐる。暫して、妙子、笑顔よく出て、廊下から。）

妙子　朗さん、お客様よ。

伊澤　誰だ。

妙子　秦さんつて方……。

伊澤　俺ンとこへ來た客なら、なぜすぐ俺にさう云はないんだ。

妙子　いゝえね……。

伊澤　何がいゝえだ。奥イ行つて、親爺や兄貴に相談して來たぢアないか。（やゝ勦りの氣持で）馬鹿なやつだなア。

妙子　どうも、すみません……。

伊澤　こゝに通してくれたまい。

妙子　はい。（立つて行かうとする）

伊澤　それから、俺の煙草！

妙子　はい。

（ト、はいる。よきほどの間をおいて、秦を案内して出る。學生と若旦那との間、――例へば、頭の刈り方や、紺絣の一重に夏羽織といふやうな着付にしても、何となく半端な感じがある。夙くも人生に疲勞と倦怠とを感じだしてゐるやうな元氣のない神經衰弱的な擧措、もの云ひ。）

伊澤　よウ。（忽ち病苦を忘れたやうに、然し、寢轉んだまゝ、飄々たる調子）

秦　やア、失敬。……暑いね。

伊澤　どうしたい。

秦　うん。

（このうち、妙子、座布團、團扇を運び、勸める。秦は一見女中でない人に取次がれたり、さういふ用事をされたりすることに、神經衰弱的に拘泥つてゐて、まだ友達同士の調子になれない。而も、出來るだけは濶達に振舞はうとして、座布團を緣近くに移し、片足緣

にお ろし、柱に背を倚せて座を構へる。)

妙子　どうぞ、お羽織をおとりあそばして……。

秦　はア、いゝえ……。

伊澤　(秦の、堅くなつてゐるのを救ふ心持もあつて)　早く冷たい麥湯でも持つて來たまい！　それから煙草どうした！　煙草盆もだよ！

妙子　はい。(去る)

秦　(そこらを見廻して)　隨分變つた建物だね。どういふんだい！

伊澤　(與もなげに)　肇てだつたかね。

秦　誰かから、話は聞いたことがあるやうな氣もするが、ジヤーン、カ、ジヤン、ジヤカ／＼ジヤン、だね。

伊澤　(薄笑ひ)　なんだい、それア。

秦　高時天狗舞さ。

伊澤　うん、さうだ。

秦　てえと、まア、鎌倉時代の建築つてことになるんかな。

伊澤　そんなこつたらう。

秦　ふーん。

(立つてあちこち見て歩く。)

(妙子、云ひつけられたものを持つて出る。)

(秦、金金具の、置戸棚のやうなものゝ前にしやがんで。)

秦　これも、鎌倉時代かい。

伊澤　(首を擡げ、その方を見て)　いや、そいつア大ぶん舊いんださうだ。但し寫しだがね。

妙子　(お愛想に)　まだ鉋つてものゝなかつた時代には、板を削るにも、みんな鑿を使つたんださうで御座いますよ。(伊澤の方へ)　ねえ、これ、さうなんでせう？

伊澤　(好意ある荒々しさで)　知つたかぶりしてやがら！

秦　あゝ成程。(ト、板の表を撫でゝみながら)　さう云やア、いくらかでこぼこしてますね。

伊澤　正倉院の御物にあるんだとさ。推古朝だとか云ふんだがね、よくは知らないよ。

秦　あゝさう云へば、君んとこの阿父さんは、若い時分にあすこの役人をしていらしつたことがあるんだつてね。

伊澤　藏の番人だね。……いまだにその根性がぬけやがらねえ。

妙子　まア、朗さん！　(立つて行きかけてゐたのが、立ちどまり、振り返つて優しく睨む)

伊澤　(機嫌よく)　さうぢアないか。なにか俺が持ち出してやらうと思つても、年が年ぢう藏の前にがん張つて、目ばかり光らせてやアがる……。一體が、藏番に生れついたやうなやつなんだ。

妙子　まア！　呆れた口ねえ。(ト、去らうとする)

伊澤　（その背なかへ）おい！　酒の仕度をしてくれない
か。なんかうまいものをさう云つて、いゝかい、解つた
ね？

妙子　はい、かしこまりました。（ト、優しく答へて去る）

秦　（そこらを見終つて、もとの席に歸る）今のは……？

伊澤　（肘枕で横になり、スタアを銜へたつぱなしでものを
云ふ。あとからあとへと、唇から煙草をはなす暇がない
ほど喫し續ける。それも、半分も吸はないうちに灰にさ
す癖がある）フ、、フ、、、フン（ト、鼻で笑つてか
ら）女中のやつらが、一人のこらず逃げ出して行つちま
ヤがつたもんだから……。

秦　どうして？

伊澤　うん？　間抜なまねをしやがるたんびに、俺が構ま
はずひツぱたいてやるんでね。

秦　それで、今の、姉さんかい。

伊澤　さうだ。あいつも間抜だけれど、女中よりやア、ま
だいくらかましだよ。

（互の胸のうちに、別々な、然し無論交渉のある思ひ
が、いろ／＼と動き移つて行く、――可なり永い間。）

秦　（唐突に）飯を食ひに出ないか。

伊澤　いやだ！　今日はうちで飲まう。

秦　こないだぢう、あつちこつち飲み廻つて、一週間も赤
坂をうろついてたんだつて？

伊澤　誰に聞いた。

秦　平孝がそんなことを云つてた。

伊澤　あいつは馬鹿だよ。

秦　どうとかしてあとから梅の家へ行くつて約束を、つい
行けなかつたもんだから、すつかり君に慍られちやつ
た、なんて、そんなことを云つてたつけ。

伊澤　どこイ行つても、格別面白いこともないね。……こ
のごろ吉原へ出かけるかい？

秦　行つた、二三ち前にや行つた。君のことを訊いてたよ。

伊澤　誰が。

秦　（笑つて）お女將さんやなんかだ。

伊澤　女將さんかア。女將さんぢやア始まらねえなア。……
まち子やおいくに逢つたかい？

秦　來た。……あのへんになると、少しくらゐ通つてみた
ところで、更に手答へなしだ。

伊澤　そんなこともなからう。

秦　いや、倉の三戸前くらゐ背負つてないと、とても齒が
立たない感じだよ。

伊澤　（それには、笑ひ顔を答へて置いてから、急に癇癪聲
を張り上げて母屋の方へ呼びかける）おーい！　酒はど
うした、酒は！　なんにもなくつていゝんだから、酒だ

け先に持つて來いよ！

（「はーい、たゞいま」と、遠くで妙子の聲が答へる。

可なり永い間。青蜩の聲がしきり。次の間の方に木の間を洩れた夕陽が斜にさし込んで來る。その陽の色は、だん／＼赫ッちやけ、舞臺端の方へ廻つて行つて、遂に消える。）

秦　あの姉さんはどつちなんだい、上の方かい、下かい。

伊澤　下の方さ。あいつはまだいゝんだけれど、あいつの亭主と來たら……。

秦　下つていふと海軍の方だね？

伊澤　……とても、くだらなさ加減の方途が知れねえんだ。

秦　だつて、海軍省きつての俊才と云はれてる人だつていぢやないか。……この日天氣晴朗なれども、波高し、――あれを書いた人なんだらう？

伊澤　きざな奴よ。とても鼻もちがならねえや。

秦　どうしたんだい。また喧嘩でもしたのか？

伊澤　したどころぢやない。さんざッぱら云ひ合つて、たつた今もの別れになつたばかりのところさ。多分まだ奥で、親爺やお袋をとつ捉まへて、なんのかんの、理窟ッぽいことを云つてやがるんだらう、――馬鹿野郎だイ！

秦　さうか、さういふ騒ぎがあつたあとなのか。どうれで、玄關に立つた具合が、なんとなく、かう、へんだと思つたよ。

伊澤　どうして？

秦　どうしてつてこともないが、姉さん……とは知らなかつたけれど、兎に角女中でない人が取次に出たり、一旦こつちへ來かけて、それからまた奥へひつ込んじまつたり、なんとなくかう、うちのなかゞごたついてゐるやうな、一種へんに不穏な空氣が動いてたよ。

伊澤　（そつぽを向いて、暢氣らしく聲をたてゝ笑つてから、やゝ聲色めかして）ほんのさゝいな内證ごとだ。

秦　フ、ン。（と、鼻のさきで笑つて）定九郎住家の段、かな。

（互に、自分たちの機智に氣をよくして、擧て、仲のいゝ友達同士らしい、ほがらかな笑ひ聲をあげる。それが鎮つて、ちよつと間をおいてから。）

秦　ときに、どうだい、ほんとに出かけないか。

伊澤　いやだよ、今日は。……つまんないぢアないか、出かけて見たところで。

秦　それア、大して面白いこともないが、こゝで飲んでたつて……。奥では親族會議が始まつてるし、女中は一人殘らず逃げ出しちまつて、姉さんのお給仕と來らア……。

伊澤　かまふもんかい！

秦　そつちはかまはなくつたつて、こつちがかまふよ。昔

段から、悪友の隨一に數へられてさうな俺の身にもなつてみろ、とても針の筵だぜ。どうしても君が出かけないつてンなら、俺ア歸るからね。

伊澤　まア、いゝさ。（半身起き直つて、大聲に奥へ呼びかける）おい！　早くしないか！　酒だけ先に持つて來りやアいゝんだつてのに！　何をしてゐるんだい！

妙子の聲　はい〳〵。

（それと殆んど同時に、兩手に二人前の膳を捧げて、しとやかに、妙子がはいつて來る。）

妙子　臺所の勝手がわからないもんですから……お待たせしてすみませんでした。

伊澤　なんか、食ひものをさう云つたかい？

妙子　えゝ、先刻、すぐ電話でさう云つときましたから、もうおッつけ來る時分です。（秦の前に膳を据ゑて）ほんとに、なんにも御座いませんのですよ。

秦　どう致しまして。どうも、とんだ……。

（妙子がはいつて來ると、忽ち堅くなつて了ふ秦に對する心遣から、酌しようと把りあげてゐた銚子を、横合からひつたくつて）

伊澤　いゝから君は早くあつちイ行つてたまい。

妙子　はい。

伊澤　それから、いゝ時分にあとを持つて來るんだぜ。

妙子　はい。

伊澤　解つてるのかい？　酒のこつたぜ。

妙子　それは解つてますけれど、いゝ時分つていふ、その程加減が、わたしぢアちつとむづかしさうですわねえ。

伊澤　初は五分おきかそこらさ。それからだん〳〵にゆつくりさ。――考へてみたつて解りさうなもんだ。

妙子　うちが、ちつとも頂けませんから……。

伊澤　うるさいな、餘計な口を利くんぢアない！

妙子　はい。

伊澤　酒も飲めねえやうな亭主だから、云ふことが一々つぼをはづれるんだ。……なんでもいゝ、早くあつちへ行きたまい！

（妙子も、有繋に少ししよげて、伏眼のまゝ、ちよつと頷き立ちかゝるのへ）

伊澤　なんにも要らないたア云つたが、これアまた、あんまりなんにもなさすぎるね。なんかうちにないのかい？　海苔でも、佃煮のやうなもんでも、なんでもいゝや。

妙子　（寂しい笑顔で）あいにく……。

伊澤　なんにもないのか。ぢア、よし〳〵。……食ひもの屋の方をどん〳〵催促したまいよ。

妙子　はい。（去る）

（間。）

伊澤　飲めよ。
秦　うん。
伊澤　酒はわるくないつもりだよ。
秦　うん、うまい。
（以下、互に酌をし合つて飲む。伊澤は、なほ横になつたまゝ、連日連夜の深酒で、焦け爛れた胃腑に滲みるらしく、初の三四杯は、薬でも飲むやうに、眉間を皺め、引き結んだ唇の隙から、少しづゝ啜り込むやうにしてゐる。秦も、口では「うまい」と云ひながら少しも反跳のつかない杯の運び方。）
（各自の考へごとの方へ、餘計氣が行つてゐる。）
伊澤　なんか變つたことでもないかね？
秦　ないね。
伊澤　淺井のやつどうしてゐる？
秦　相變らずだ。
伊澤　逢ふか？
秦　一昨日の晩だつたか、一緒に吉原イ行つたんだ。
伊澤　あゝさうか、淺井が一緒だつたのか。
秦　君ンとこへも電話をかけてみたんだけれど……
伊澤　さうか、そいつア惜しいことをしたな。……俺は、かけ違つて暫く逢はないんだが、あいつの童貞はどうなつたらう。
秦　ドウテエ？
伊澤　童貞さ。
秦　あゝ！　……もと／＼怪しい童貞だ。
伊澤　まだ破つた様子もないかね。
秦　さア、別に話も出なかつたから、そのまんまなんだらう。
伊澤　（親愛の意味で）馬鹿な奴だなア。……よオし！　そイぢア俺が、一二三ンちうちに、ひとつ、うまアく罠にかけておとしてやらう。
秦　（薄笑ひを洩しただけで、默つてゐる）
伊澤　おい、ぼんやりしてないで、ちつとあけろよ！
秦　（默つて注がせる）
伊澤　どうしたい、いやに元氣がないぢアないか。
秦　フ、ン。（と、苦笑ひで）こゝではしやげつたつて無理だよ。
伊澤　どうして？　いゝぢアないか。
秦　よかアないよ。若殿御癇氣の折から、殿中鳴りをひそめて、ひたすら謹愼の意を表してゐるぢアないか。
伊澤　（さも暢氣らしい笑ひ聲をたてゝ）……まアいゝやね。飲めよ。
秦　（ガブリとあけて、注がせ、自分も酌をしてやりながら）飲むこたア飲むがね……。

伊澤　醉へねえか。
秦　醉へねえ。……おい、つまらねえ强情を張らずに出かけろよ。
伊澤　いやだよ！　今日ばかりは、誰がなんと云つたつて、かうやつて頑張つてゝ、思ひきりうちの奴らに當り散らしてやるんだ。
秦　（暫く相手の顔を見詰めてゐてから）一體、貴樣は、よつぽど得な性分に生れついてるね。さうやつて、誰ンでも我儘が振舞へるつてのは、ゐながらにして、王位を占めてるやうなもんだぜ。
伊澤　俺が我儘か？
秦　癇癪がおこせるだけでも大したもんだ。
伊澤　普段抑へてるから、つい時々大破裂をやらかすんだよ。俺アちよいとみると、我儘みたいかも知れないけれど、實は決してさうぢアないと思ふね。それよか、なんにも文句を云はずに、大人しさうな顔をしてゐながら、結局自分の思つた通りやつてく貴樣の方が、ほんと云へば、ずうツと我儘の度は强いんだぞ。――俺アせんからさう思つてる。
秦　（圖星をさゝれたやうな氣持を押し隱して）お互にひとの花は赤く見えるつてやつかな？
（妙子、銚子を持つて出で、笑顏で、）

妙子　いかゞでした？　ちつと早すぎまして？
伊澤　いゝよ。置いてきたまい。
（妙子、伊澤のそばへ膝行りより、客の方へは顔を反けるやうにしてやゝ低聲に、）
妙子　あのね、あのウ……、兄さんが、ちよつとあんたにつて……。
伊澤　（そつけなく）いやだよ！
妙子　ちよつとね……？　もうすぐ歸るつて云つてるんですから。
伊澤　そイぢア、さつさと歸しちまつたらいゝぢアないか。もう云ふことも聞くこともない筈だ。
妙子　そんなこと云はないでさ、ねえ、朗さん、あたしから頼むからさ……。
伊澤　いやだつたらいやだよ！
秦　（見かねて）行つて來いよ！
妙子　ねえ、ほんの五分かそこら。いゝでせう？
伊澤　（すつかり旋毛を曲げて了つて）い、や、だ、よ！
妙子　ぢアね、かうして頂戴。
伊澤　うるさいな。それほど逢ひたいもんならそつちから出て來たらいゝぢアないか。
秦　おい、行けよ、行つて來いよ！
伊澤　面ア見たばかりで胸がむかつくんだ！　こゝへ來た

つて、こつちア一切うけ答をしないからね……。

妙子　そんな憎まれ口を利くもんぢアないわ。うちにゐたつて、ほんとに、それア、しよツちうあんたのことを心配して……。

伊澤　そ、それが第一餘計なお世話だつてんだ！　もう先刻の話ですつかり蹴はついてるんだから、會ふ必要はないよ！　歸せよ、早く歸しちまへよ！

妙子　しやうのない人ねえ。（秦の方へも、ちよつと寂しい笑顔をみせ、仕方なく立つてはいる）

（間。――あたりはそろ／＼薄暗くなつて來る。）

秦　ネロだね。

伊澤　うん？

秦　ネロだよ、暴君ネロだよ。

（この評語は、さう氣に入らないこともないらしく、聲をたてずに笑ひながら、伊澤は、そのとき離て身を起し、そうツと胡坐を組みかけるが、急に顔を顰めて、）

伊澤　あた、あいたゝゝゝたツ！　痛い！

秦　なんだ、痔か？

伊澤　ひでえんだ！　この二三ンち、はゞかりのたんびに、五合ぐらゐづゝ血がおりるんだ。

秦　横になつてろよ。

伊澤　なに……。（ト、尻をもじ／＼させながら）もうちつと飲んじまやアいゝんだ。要するに、こんなもなア、忘れてさへすりやアなんでもないんだ。（さう云つて、ガブリとあける）

秦　（注いでやりながら）五合は大袈裟としても、然しさう毎ンち血がおりちやアかなはないね。

伊澤　たまるもんか。牛乳五合で、やつと血が一滴しか出來ないつて云ふんだからな。

秦　そイぢア、はゞかりのたんびに、五五二升五合の牛乳を飲まなくつちやア追ツつかないわけだな。

伊澤　また始めやアがつた……貴樣がなんか計算をして、一度だつて合つたためしはないぢアないか。よく／＼おたまの悪い奴だなア。

秦　どうして。さうぢアないか。一遍に五合ツくだれば、五五二升五合ぢアないか。どこが間違つてるんだい。

伊澤　（噴きだして）馬鹿！

秦　何が馬鹿だい！　貴樣こそ……。

伊澤　五合の牛乳が、そつくり五合の血になる場合ならそれでいゝんだ。だけど、五合の牛乳が……。

秦　あゝ、一滴の血か！　なアるほど、そイぢアちイつと勘定が違つて來るかな。

伊澤　一滴と五合ぢア、ちつとの違ひたア云へないぜ。……だから貴樣は、こと計數に關する場合は、默つて引ツ

込んでりやアいゝものを、なんてエと……。

秦　いやンなつちやふせ、洒落がわからねえんだから……。

伊澤　なにが、どこが洒落だい。

秦　わからなきアいゝよ。

伊澤　あゝなアるほど！　一滴の血でちイつとか！

秦　血のめぐりの悪い奴だ。

伊澤　よせよ、くだらねえ。

（少しづゝ酒が廻りだして來たらしい、だらしのない笑ひ聲。）

（日野、海軍大佐の白服、參謀肩章、海軍大學卒業章を帯び、つか／＼と登場。キリッとした、才子らしい容貌。英吉利風の短く刈りんだ髭。赭顏。小柄ながらガッシリとした堅肥。）

日野　（やゝ捍へたところのある快濶さで）やア、はじめてるな。（トつか／＼部屋へ通つて）電氣をつけろよ、景氣のわるい。（ト、スキッチをひねり、六疊の方もつけ、序に自分で座布團を持つて來る）

秦　（默つて、丁寧にお辭儀をする）

日野　やア、これア肇まして。僕、日野です。始終敏朗が御世話になつてますさうで……。

秦　いゝえ、こちらこそ……。

伊澤　（突然に）先刻の話は、あれでもう、もの別れになつたんぢやありませんか。いゝ加減にお歸ンなすつたらどうです。

日野　（ニコ／＼顏で）うん？　君から指圖をうけんでも、そろ／＼もう出かけなけりやアならん時刻なんだがね。（ト、時計を見てから、秦の方へ）……兎に角まア、秦さん、お近づきに一杯いたゞきませう。

秦　（面喰ひながら、盃を乾してさす）ぢア、失禮。

伊澤　（横合から日野に食つてかゝる）何も君が、俺の悪友になんぞ、お近づきになつてくれる必要はないよ！

日野　（餘裕をみせて、もの靜かに）まア君は默つとれ！……然し、悪友とは、秦さん、貴方こそいゝ御迷惑だ。

（世馴れた笑ひ聲）

伊澤　話があるならあるで、さつさとそれを片づけちまはうぢアないか。

日野　うーん？　まア、さう急かんでもよからう。……やア、有難う。（ト、秦に盃を返し、酌をしてやりながら）ねえ、秦さん、貴方もひとつ考へてみてくださらんか。息子の分際として、假にも親の頭に手をあげたり、仕舞の果には、そこにあつた（ト、床脇の太刀置きの方を顎でさして）刀を持ち出して振り廻したり、――そんなことをしてすむもんか、すまんもんか、貴方なんぞはどういふ御意見ですかなア。

伊澤　そんなこたア……。
日野　（手つきでも制して）君はいゝ、君に訊いとるんぢアない。……ねえ、秦さん。二十四五にもなつて、思慮分別のあるべき一人前の青年が、もしそんなことをしてゐるところを御覽なすつたとしたら、貴方はどんな感じがなさる？　ねえ、ひとつさういふ場面を想像してみてくださらんか。
秦　どうつて。……伊澤は、然し、病人ですから……。
伊澤　馬鹿！（ト、秦の方へは、存外機嫌のいゝ笑ひ聲で）さう、矢鱈にひとを氣違ひ扱ひするなよ！
日野　いや、いつそ氣違ひなら氣違ひで、却つて扱ひいゝんだけれど、君のは、正氣で、何も彼も承知してゐながら、時々むちやをやらかすんだから、どうにも始末にならんのだ。……舊くからのお友達だと云ふんだから、秦さんもさだめし御存知のことだらうと思ふが、一體この男は、子供の時分には、神童とまで云はれたくらゐの悧巧者だつたさうで、僕が知つてからでも、あたまのいゝ點では私に敬服もし、從つて、大いに將來に望を囑してゐたんですが……。
伊澤　おだてたつて駄目だよ！
日野　いや、決しておだてゝるわけぢやアない。實際、——先刻も二人で、いろ／＼話し合つてみたんですけれど、理路整然として、ものゝ道理はよく解つとるんです。それだのに……。
伊澤　それだのに、君が、わけの解らないことばかり云ふんだよ。いゝかい？　せめて、その事實だけでも解つて歸りたまい。
日野　さうか？　僕の云ふことが解らんか？
伊澤　それア解るよ、解りすぎるほどよく解るよ。然し、沒曉漢の云ふことは、ひと口に「解らない」と云ふんだよ！　それが日本語の云ひ廻しなんだよ。
日野　ふーん？　俺の云ふことが、君には、それほど道理にはづれて聞えるかね？
伊澤　だから、今も云ふとほり、道理にやア合つてるんだよ。
日野　ぢア、一體、なんにはづれとるね？
伊澤　うるせえな！　はづれてないよ！　なんにもはづれてないよ！　あゝ、立派なもんだよ！　また、未來の海軍大臣が、道理にはづれてたことを云ひさうな筈もないぢアないか。だから、安心して、さつさと歸つたらいゝだらう！
日野　（わざと眞正面にその皮肉をうけて）それほどよく解つとるなら、口ばかりでなく、生活の上で、もうちつとは、合理的にやつて行つたらどうかね。昨今の君の行

僞なんてものは……。

伊澤　解つた、解つた！……おい、秦！　かういふ奴なんだ。察してくれよ！

秦　（うつ向いて、苦笑ひを噛み殺してゐる）

（妙子、銚子を持つて出で、良人のそばに近く坐り、耳もとで、）

妙子　貴方、もうすぐ七時で御座いますよ。そろ〳〵お出かけなさいませんと……

日野　うん、よし〳〵、わかつとる。……まア、お前、秦さんにお酌してあげ。

妙子　はい。

秦　これアどうも、恐れ入ります。

（酌をしてゐる妙子の耳に口をよせて、日野が、早口に、）

日野　どうした、兄貴來るつてか？

妙子　（それには、ちよつと、目で頷き返して置いて）　もう自動車も參つて居りますんですよ。

日野　さうか。（と、急に腰を浮かして）　ぢア、秦さん、是非僕は、ちよつとでも顏出しとかにやアならん宴會があるんで、これで失敬しますが、貴方は、もしお暇でしたら、ゆつくり遊んで行つてやつてください。……それから、君は、（ト、伊澤の方へ）　今夜はあんまり醉はん程度に飲んで、ひと晩ぐつすり安眠するんだね。何しろ寢の足らんのが、氣が苛々して一番いかんよ。ぢア失敬します。

（秦は丁寧に頭をさげるが、伊澤はそつぽを向いて知らん顏をしてゐる。有繋に、妙子がはら〳〵して、）

妙子　朗ちやん！　なんとか御挨拶をなさいなね！

日野　よし〳〵。（ト、寛大らしく制めて、あとは呟くやうに）　人間だと思へば腹も立つが……！

伊澤　なにッ！　（顏色を變へて立ちかゝらうとする）

日野　なアに、病人ならば仕方がないといふことさ。まア、大事にしたまい。

（そのまゝ、渡りを踏み鳴らして母屋へ去る。妙子も、おいた銚子を持つて、續いて小走りに去る。）

（伊澤は、急に氣ぬけがしたやうに、焦點もなく膳の上を見据ゑてぽかんとしてゐる。暫くして、）

秦　俺も歸らう。

伊澤　まア、待てよ、もつと飲まうぢアないか。それに、今もうなんか來るだらう。

秦　豫想以上に如才のない人だね。もう少しは軍人らしい人かと思つてた。

伊澤　どだいなつちアゐないよ！　もと〳〵親爺に呼びつけられて、お義理で、仕方なしに出かけて來やアがるん

だから、叱言を云ふにしたつて、俺の氣に入りさうなことを云ふにしたつて、どつちみちうはの空なんだ。それでも自惚てやアがるから、俺ほどのものが態々出かけて來てやつたんだから、一言のもとに閉口して、ペコ／＼あやまるのが當り前だ、つて云ふやうな肚があるんだが、どうして、さうは問屋で卸さねえや。

秦　（輕く笑つて）その手は食ひませんよ、か？

伊澤　さうとも！　はゞかんながら、そんなあめえンぢアねえから。見損なふねえ、つて云つてやりてえくれえなもんだ！

秦　然し、君の姉さんはいゝよ。

伊澤　ちつと勿態ないかな？　豚に眞珠、――それほどでもないか。

秦　いや、造に勿態ない。

伊澤　惚れたか？

秦　惚れもしないが、なか／＼いゝとこがあるよ。……。上の姉さんてのは……。

伊澤　それアもう夙の昔に死んぢやつたんだよ、

秦　あゝ、さうか、亡つたのか。

伊澤　そいつも、ちよいとよかつたんだがね、何しろ亭主が、見るから野獸の如き奴だからね、たうとう肺病になつて死んぢやつた。

秦　その兄さんも、今にやつて來るらしいね。

伊澤　さうか。

秦　日野さんが、奥さんに、兄貴、來るか、つて訊いてたよ。

伊澤　さうしたら？

秦　目で、こんなことしてた。（ト、頷いて見せる）

伊澤　やれ／＼。それぢア、いよ／＼、陸海軍總動員だ。

秦　苦手なのか？

伊澤　なにが？　陸軍の方か？

秦　うん。

伊澤　それア、海軍たア比べものにならないよ。云ふこたアとてもめちやくちやだが、どだい人間の出來が違ふよ。正直も正直だし、さば／＼としたもんだ。

（妙子が、運び膳に料理を載せて出る。）

妙子　お待遠樣でした。すみません。

伊澤　隨分おそいうちだなア。

妙子　その代り御馳走ですよ。

（ト、料理を、兩方の膳へつけ、すぐあとを取りにはいり、渡りのつけ際まで母親が手傳ひ、運んで來てゐるこゝろにて、「よござんすよ、阿母さん、わたくしが致しますから」とか、「ほんとうにもう、さうして置いてくださいまし」とか、蔭の辭を聞かせる。）

伊澤　おい、それから、序に酒だよ。
妙子　はい、たゞいま。（ト、あとの料理と一緒に持つて出る）
伊澤　（あとから來た鮎の鹽燒を膝の上に見詰めながら）おい、秦、これ、どこの料理だかわかるか
秦　うーん？（わかつてゐながら、妙子の手前すぐにも云へないで、ニヤ／＼笑つてゐる）
伊澤　（妙子の方へ）ちきしやう！　やつたな？
妙子　なんです。（惡戯らしい笑ひ顔）
伊澤　どうも、いやにおそいと思つたら……。
妙子　あら、もうわかつて？
伊澤　（機嫌よく、且つはやゝ得意げに）わかるさ！　ほかに、こんなどろッとした葛酢を使ふうちはないもの。
妙子　へーえ、有繋は違つたもんね。……でも、それだけわかつてくだされば、御馳走する方でも張合があるわ。
伊澤　面當がましく、赤坂の食ひものなんぞとりやがつて、……生意氣やつてやアがら。
妙子　（まづ秦の盃を滿してから）その、御機嫌のなほつたところで、お氣には召しますまいけれど、ひとつ、お酌でもさせて頂きませうか。
伊澤　（あけて注がせながら）序にそれも呼んでくれりやアなほよかつたんだ。
妙子　まア、圖々しいのねえ。すぐつけあがつてあんなことを云ふのよ。
伊澤　（上機嫌な笑ひ聲をあげて）さア、もうそこらでよからうぜ。そのうへ喋つてるとぼろが出る。出來のいゝところで、引きさがつといて貰はうか。
妙子　はい／＼。（ト、嬉しさうに、あいた銚子を持つて去る）
（以下は、兩人とも、いゝ心持になり、飲み且つ食ひながら喋る。）
秦　然し、なんだつてまた今度は、そんな大荒をやらかしたんだい？
伊澤　いつだつて、別に、これぞつて理由なんぞありやしないよ。
秦　でもさ、なんか機縁がなくつちやア、いくらネロでも荒れ出しやうがあるまい。
伊澤　うーん？（ト、苦笑ひで）なアに、久振りでうちに歸つて來ると、いきなり親爺の奴が、なんかガミ／＼云やアがつたんだ。
秦　いつさ。
伊澤　今朝さ。……今朝つたつて、もう午にやアなつてたらうけれど。
秦　なアんだ、晝日中歸つて來たのか。……そいつア、潮

時がわるすぎらア。

伊澤　なアに、歸つたのは昨夜なんだがね、その時のこたア、（ト、右顳にいくらか具合わるげに笑つて）實は、自分ぢアよく憶えてゐないんだよ。どうも、話の樣子だと、ちつと手荒かつたらしいがね。

秦　ふーん。で、刀を振り廻したつてのはいつのことなんだい。

伊澤　それア今日さ。いゝ心持に寢てゐるところを、何遍も何遍も起しに來させた揚句が、たうとう親爺のやつ、自分で出かけて來やアがつてからに、枕頭でうるさくいゝなりたてるぢアないか。一體、なんにも仕事がねえもんだから、叱言を云ふのをいゝ暇つつぶしと心得てゐやアがるんだ。

秦　ぢア、素面でやらかしたのか。（ト、刀を振り廻す手つき）

伊澤　昨夜の酒は、いくらか殘つてたかも知れないが、……あつ、つゝゝつツ、とてもやりきれねえ。（ト、尻をもぢつかせ、またそうツと體を横たへる）

秦　拔刀か？

伊澤　うるせえな！　要もないことを執拗く訊くなイ！

（折角の上機嫌が、それで忽ちまた怪しい雲行になる。反感を通り越した冷淡さで、互に空嘯いてゐる。）

（いつかもう庭さきは、明るい夏の月かげになつてゐる。）

（虫の聲ばかり繁く聞える。間。）

妙子　（急ぎ足に登場）お兄樣がいらつしやいましたよ。

（伊澤、ギクリとして半身擡げるが、すぐまた肘枕で横になつて了ふ。秦の方が、却つて居住ひを正す。妙子が、どうにかして伊澤を起して置かうとする間もなく、ドシン／＼渡りを踏み鳴して、諸岡登場。大體、大入道の感じ。丈高く、肉附よく、腦天まで禿あがつた半白を五厘苅にした頭が大きく、眼口鼻が大きく、手足が大きい。色は赭黒い。――いかにも實戰に強さうな武人の相。細い絣の白地の一重に、絹紬の兵兒帶。素足。）

（伊澤の枕もとに、どかりと坐り込む。伊澤は、薬鉢になつて、知らん顏をしてゐるが、秦は、座布團を滑つて、丁寧にお辭儀をする。）

諸岡　（それには、氣がついたのかつかないのか、知らん顏で、いきなり太い聲で云ふ）おい！　どうした。

伊澤　どうもしやアしない。

諸岡　あばれて、始末におへんから來てくれつて、わざわざ使が來たぞ。拔刀を振り廻して、親爺さんを追つかけ廻すなんて、そんなむちやな奴があるか！　馬鹿だな、

貴樣は！

伊澤　（そッぽを向いて、神經的に、髭の毛をむしつてゐる）

諸岡　（やゝ前こゞみに、顔を覗き込むやうにして）　なんかむしやくしやすることでもあつたんぢやらう。うーん？　さうぢやらう、なア。

（間。月光ます／＼冴ゆ。）

（このうち、妙子は、座布団、団扇など納め、麦水のコップを持つて出るなどあり。よきほどに退場。）

諸岡　老人や女相手に、一人でえばり散してみたところで、仕樣がなからうが。それより、どつか、遊びに行かうぢやないか。今夜は、うんと金を持つとるから、どんなとこイでも、お前の好きなとこへつれてつてやるぞ。なア、これからすぐ出かけようぢやないか。

伊澤　いやだ！　兄さんなんかと遊びに行つたつてつまンねえや。

諸岡　（愉快さうな高笑）　ぢア、（ト、いきなり秦の方へ）あんたも一緒に行かう。なア、つきあひなさい。（すぐまた伊澤の方へ）　なア、そんならよからう。どこでもええ、三人で出かけようぢやないか。うちでなんぞ飲んでたつて始まらんからな。

伊澤　どこイ行つてみたところで、始まらないことはおんなじだよ。

諸岡　爺みたいなことオ云ふなよ！　なア、出かけようぢやないか。どこがえゝか……、うん、こッからは、赤阪が一番近いな。あすこがえゝ！　なア、赤阪イ行かう！

伊澤　（思はず笑ひ顔になつて）　よせよ、柄でもない！

諸岡　（笑つて）　さう馬鹿にするな。俺だつて、一流なら、大抵どこの妓だつて知つとるぞ。こつちで知らんでも、彼方からちやんと挨拶するが！

伊澤　なほやりきれねえや。

諸岡　（笑つて）　たまに俺がおごつてやるッちうに、をかしな奴ぢやなア。

伊澤　まア、預けとかう。

諸岡　そんなこと云つとらんで、元氣を出せ、元氣を！

伊澤　それより、默つてほつたらかしといて貰ひたいよ。

諸岡　（案外、しんみりと）　さうか。ぢアまア、お前のええやうにせえ。

（間。）

諸岡　おい！

伊澤　うーん？

諸岡　えゝ月夜だぞ。ひと周りそこら散歩して來るだけでもえゝぢやないか。うちにばかり悶々しとるから癇癪も起るんぢやぞ。なア、ちつとおもてを歩かう！

伊澤　（目をつぶり、知らん顔をしてゐる）

諸岡　おい！
伊澤　（默つてゐる）
諸岡　返事をせえ！
伊澤　（強情に默つてゐる）
諸岡　こら！　返事をせんか、返事を！
伊澤　（目をあかうともしない）
諸岡　（怒氣を帶びて來る）起きろ！
伊澤　（ものうげに）うるさいな。
諸岡　なに？
伊澤　たつた今、いゝやうにしろと云つときながら、うるさいぢアないか。
諸岡　生意氣いふな！　起きろ！　こら、敏朗！
伊澤　（無言）
諸岡　目上の者が來とるのに、挨拶ひとつせんで、寢そべつとる奴があるか！
伊澤　（無言）
諸岡　これほど云つても起きんか？
伊澤　（無言）
諸岡　起きんと……、撲るぞ、貴樣！
伊澤　（緊張した聲音で）あゝ、いゝとも、撲つてくれ！
諸岡　ほんとに撲るぞ！　（云ふと同時に、大きな拳固をかためるが、ふと秦と目を合せると、蘭鑄の頭のやうな、こぶ〳〵だらけの顏を引き歪めて、聲を立てずに笑ふ）
秦　（慌たゞしく目を外らす）
諸岡　なア、朗！　そんな意固地を云はんで起きたらどうぢや。そいで、赤阪へでも行つて、愉快に騷がうぢやないか。なア、この方がよつぽどえゝぞ！
伊澤　（素鉢になつて喰つてかゝる）いやだつたらいやなんだ！　何遍いつたつておんなじこつた！
諸岡　そんなら勝手にせえ！　（釣り込まれて怒鳴り返すが、どうやら怒りを抑へて、もう一度柔かに云ふ）おアこゝでもえゝ、俺も一緒に飮むから、兎も角も起きろよ。
秦　（思はず、とりなすやうに）痔が痛いんださうです。
諸岡　（その方へは目もくれずに）痔ぐらゐなんだ！　起きようと思つたら起きられんことはなからう。一晩ぢうでも附合つてやるから、大いにひとつ飮まうぢやないか！
伊澤　（無言）
諸岡　なア、起きて飮め！　お友達も見えとるんぢや。
伊澤　（無言）
（不穩な間）
諸岡　これほど云ふに！　貴樣、いよ〳〵起きんな？
伊澤　起きるもんか！
諸岡　よオし！　（膝頭から五寸と離れてゐない腦天へ、び

ねりをかけて、大きな拳固をゴツンと衝きあてる） 起きろ！
伊澤　いやだ！
諸岡　（もうひとつ喰はせて） どうだ、これでも起きんか！
伊澤　殺されたつて起きるもんか！
諸岡　よオし！ （いよ〳〵力の罩つた突きを喰はせる）
伊澤　（餘勢で肘枕がはづれ、疊の毛に顏を埋める） やれやれ！ もつとやれ！
（諸岡、鷲掴みに襟がみを、とると、引きずりよせて置いて、續け打ちに二つ三つ喰はせるが、伊澤は、グタリとしてゐて更に手答がない。諸岡、力まかせに彼方へ突ツころがし、汚いものにでも觸れたあとのやうに、パタ〳〵と掌を打ち合せながら立ちあがる。）
諸岡　腰拔野郎が！ （そのまゝ、足音あらく母屋へ去る）
（伊澤、身動きひとつしない。秦も、凍りついたやうになつて、ぢつと友達の姿に見入つてゐる。）
（月明。蟲の音）
（伊澤の肩に、不規則な波が搖れだすが、強情に欷歔の聲は洩さない。却つて、秦の目に涙がにじんで來る。）
（暫くして、妙子が、手拭を浮した金盥を持つて出る。秦、慌たゞしく涙を拭く。）

妙子　（そつと枕頭に坐つて） 頭を冷しませう。ねえ？
（伊澤の肩の震へが、急に細かくなり、烈しくなる。妙子、手拭をしぼつて、伊澤の頭へあてがふ。）
秦　（強ひて冷かな聲音で） それぢア僕、失敬します。いろいろ御馳走樣でした。
妙子　（引きとめるすべもなく） さやうですか。それアどうも……。誠に、……なんと申してよろしいんですか、誠にお恥しいことで……。
秦　（丁寧に頭をさげ） どうぞ、よろしく仰有つてください。
（わざと伊澤には聲もかけず、目もやらずに、急いで去らうとする。妙子も見送りに立つ。）
秦　どうぞもう……。
妙子　いゝえ……。
（二人の足音が聞えなくなると、伊澤は、微かながら音をたてゝ泣きだし、身をもだえる。）
（渡り廊下のかなた、植込の間から、鳥打帽を被り、太いステツキをついて、しよんぼりと、諸岡が出て來る。）
諸岡　（縁先に立つて） おい、朗！
（はツとしたやうに、伊澤の肩の震へがとまる。）
諸岡　お前もよかないが、俺もちつと短氣すぎた。なア、

痛かつたらう！　かんにんせえ！　なあ、朗！

伊澤　（子供の泣聲のやうに、少しもつくろふところなく）歸れ！　さつさと歸つちやえ！

諸岡　（すなほに）うん、歸らう。……俺が惡かつた。なア、朗！　かんにんせえ、なア。……ぢア、俺は歸るぞ。……さよなら。

（云ひ終り。しを〳〵と植込の蔭に去る。）

（伊澤、心おきなく、ワア〳〵聲をあげて泣きだす。）

——幕——

（月明。蟲の音。）

正直次郎

時　天保年間

人

片岡直次郎

三千歳

寮番の女房

新造

金子市之丞

場

入谷村なる大口屋の寮

正面、廣からず、且また粗末な感じの一間、床の間などもない方がよし。普段はあまり使つてゐないらしく、人氣なげに、寒げに見ゆ。下手よりに、一間の襖で出入口。廻り縁、上手奥の突當りは板戸の開き。それよりなほ上手へ、お馴染の「奥の間」の羽目を見せ、袖垣、植込など、庭さきの模様よろしくあり。下手に庭木戸。飛石は、正面の一間を無視して、すぐに上手袖垣を廻り、「奥の間」へ通ずるこゝろ。

金子市之丞、庭木戸のそとに立つてゐる。寡黙な、愛想ッ氣のなささうな人物。寮番の女房、「たゞ今」とか、「たゞ今すぐにあけます」とか、捨臺詞のうちに、木戸の閂をバタバタ云はせ、奥の間を案じるこなし。ほどなく扉を開く。

女房　お待たせ申しまして相濟みません。さアどうぞ……。

（金子、鷹揚に、輕く會釋してはいる。女房は、手早くあとを閉し、小走りに案内する。）

同右　いつまでもお寒いことで御座います。

金子　さうですね。

女房　昨夜からはまた、殊更身にしみますが、そのせゐでか、今日は頭痛がすると仰有つて、今しがたまでお床のなかにいらつしやつたのですけれど……。（聲を張つて奥の間へ。）ようございますか。もう片づきましたか。

金子　わたしへの遠慮なら、要らないことだから、そのまま横になつてゐればいゝのに……。

女房　いゝえ、もう……。（奥の間へ。）およろしいんですね。お通し申しますよ。

（蔭の聲、「さアどうぞ」と答へるにつれて、女房、金子に會釋し、先に立つて袖垣を廻り、はいる。と同時に、板戸の開きがあいて、するりと直次郎が出る。いつも

の打扮の、半纏の代りに、華美な廣袖をはおつてゐる。動作は機敏でも、慌てふためいてゐるやうに見えてはいけない。庭から、奥の間の方を見込むやうな科は最いけない。緊張して、然し落ちついて、さつさと正面の部屋へはいればいゝ。）

（續いて、新造が、直次郎の半纏を擁へて出る。この方は、騒々しくならない程度で、十分慌てゝゐる心持を見せなければいけない。半纏を置いて、ひそめた聲で）

新造　たゞ今すぐお火を……。

（何か云ひかける直次郎の言葉を待たずに、一旦正面出入口に消え、座蒲團を持つて出ると、がらんとした部屋の眞中あたりに敷き、大急ぎですぐまたはいる。）

（直次郎、置き物のやうに、ぽつんとその上に坐る。間のぬけた姿ゆゑ、見物は笑ふかも知れないが、そこで緊張を緩め、寒さうな科などをしてはいけない。生野暮に、ぢつと考へ込んでゐなければいけない。）

（新造が火鉢を運んで來る。直次郎、すぐには手を出さず、なほ考へ込んでゐる。新造、何か慰めるやうなことでも云ひたさうにしながら、相手の様子にそれも出ず、ついで來たばかりの火を直したり、暫くもぢもぢしてゐてから、立つて行かうとする。續いて直次郎も立ちあがる。）

新造　あら？

直次郎　歸らう。

（廣袖をぬぎ、半纏をはおる。新造、小走りに驅け戻つて來て、ことさらに耳に口をよせ、いろ／＼云つて止めるこなし、内々おかぼれしてゐるので、こんな時にでも……、と云つた氣持で、必要以上にそばへよつて、親切らしい言葉を囁いたり、ちよいと胸に手をかけたりするのが、ひどく嬉しさうに見えなければならない。）

（直次郎も無論たつて歸りたくつて歸らうと云ふのではないし、いやにべた／＼くつついて來られるのにも、少しく辟易の態で、そのまゝもとの座につく。新造は、いそ／＼と奥へはいる。廣袖が半纏になり、火鉢が來て、少しは形がついて來たけれど、まだ十分に居心地惡く、間ぬけじみて見えなければいけない。この感じは、後に膳が來、酒が出ても、なほ續かなければいけない。それでゐて、主役がこの感じに打克たれて、てれくさそうに見えるやうな、いつものイージーゴーイングな直次郎になつて了ふのでは、この芝居は滅茶滅茶である。だん／＼生野暮な眞面目さに、見物を引つ張り込んで了ふ力があつてほしい。）

（直次郎は、兩手を火鉢の縁に置いて、そろ／＼青い焔をあげ始めた炭火を見詰めてゐる。心持のしまつて

ゐることが、自然形（かたち）をキチンとさせる。）

（奥の間から、金子の、もの靜かな呂（ろ）の聲が、何を云つてゐるのか解らない程度で、ボソ〳〵と聞えて來る。無表情な三千歳の聲も時折洩れる。が、大體二人とも言葉少なである。そして、その間が、少くも不穩な感じを齎すやうなものでなく、家常茶飯的な落つきで、長閑に聞えなければならない。）

（直次郎が、そつちへ耳を持つて行かれてはいけない。さうかと云つて、聞くまいとする努力などが見えてもいけない。自然聞えては來るけれど、そんなことでは、少しも氣が散らされないほど、考へごとがしつかりしたものに見えるやうでなければいけない。――この間は、役者次第で、もてさへすれば、永いほどいゝ。）

（新造が、二品三品の皿小鉢と銚子とを載せた膳を持つて出る。）

新造　御免ください。（ト、膳の上から銚子を取りおろしながら）から云ふ不精なまねをして……。

（すぐ酌をしようとする。直次郎、靜に盃を取りあげ、なほ考へ込んだまゝつがせ、一口飲む。新造、もう一杯ついで、さて何か話しかけようとするところに、「ごめん」と襖の外から聲をかけて、寮の女房がはいつて來、新造の耳もとに、何やら二言三言さゝやく。新造は、開きから奥の間の方へ行く。）

女房　お寒う御座いますから……。（ト、銚子を取りあげる。）

直次郎　へ。（ト、うけ、すぐ飲んでさす）

女房　わたくし？　晝間つから……。

直次郎　まア、いゝでせう。（酌をする）

女房　（持ちあげて少ししかつがせなかつた盃へ、ちよいと脣をつけたばかりで下に置き、なんとなく目をそとへやる）なんですか、またしぐれて來ましたのね。

直次郎　（檐端（のきば）から空を仰いで）また雪にならなきアいゝが……。

女房　さ、どうでせう。惡くすると、もう一遍くらゐちらつくのかも知れませんわね。（盃をあけて返しながら）お盃洗なしで……。

直次郎　いゝえ、（ト、うけて）雪も、降つてるうちはいいけど、あと、いつまでも道がぬかるんでね……。

女房　えゝ、ほんとうに。うちの人なんぞ、しよツちう出歩いてばかりゐるもんですから、――それに、歩きやうが下手だとみえましてね、少し道が惡くつても、それアもう背なかのうへ一の方まではねをあげて歸つて來るんですよ。足駄なんぞ、貴方、も、まるで泥ぼツかり！……いゝえね、それにあの通りの醉ツぱらひでせう？

歩きやうが下手なばかりぢアないんですわ。ぬかるみだつてなんだつてお構ひなしに、きつとボチャン〳〵やつて歸つて來るんでせうよ。それアね、いつもあと始末で、あたし、ほんとうに一骨折りますわ。でも、そんなことは、御自分樣は一向お構ひなしですからね、うちへ轉げ込むが早いか、大の字なりになつて、グー〳〵云つてねちまふんですのよ。ほんとうに、あんな困つた人ツたら……。それになんでせう……。

（このお喋り、役者次第にて、もてさへすれば、この先なほ可なり永く續いても差支なし。要するに、話上手にて、それからそれへとノンセンスに等しいお喋りを續けて行く、都會育ちの四十女にありがちな、あの特色を發揮するもの。但しこの場合としては、習慣も習慣なれど、一つには、多少ともきまり惡く、面白くもなからうと思はれる直次郎の鬱した氣持を、なんとかはぐらかして了はうと云ふ、親切なたくらみもあつてのこと故、話題はなるべく面白可笑しく、話方は、身ぶり手ぶりで、大袈裟に、剽輕に、一生懸命なだけ、そこに多少不自然なところが見え、この人のいつものお喋りほどにはいつてゐない、と云つた具合でなければいけない。）

（この間の直次郎もちよつとむづかしい。話に引き込まれていけず、さうかと云つて、不愛想に、ぽかんとほかのこと考へてゐるのでもなく、相手が親切でやつてゐてくれるお喋りだといふことは、十分察してもゐるし、その好意は嬉しくうけてもゐるのだが、もともとさう面白からう筈のない話を、無理にも面白がつて聞いてゐるやうな顏をするほど輕薄ではないのだから、始終たゞ穩かな笑顏で、靜に頷き返してゐるくらゐがよいところだらう。肝心なのは、やゝ間のぬけた、馬鹿げた樣子に、暖く相手を包み込んでゐる大さが見えることだ。年上の、お喋りな女にまくし立てられて、いゝ潮合を見計らつて打切りも出來ず、始末に困つてゐるやうに見えてはいけない。このお喋りの間に、先刻新造がしめ損つて行つた板戸が、さう強くない風で、間をおいて、三四度バタン〳〵輕くあふる。それが、女房よりさきに、直次郎の耳にはいつてゐなければいけない。然し、決して振り向かずに、背なかが氣にしてゐる。五度目かそこらに、やつと女房も氣がついて、喋り續けながら立つて行つて、カタンと棧をかふ。そのうしろ向きの立姿のまゝ、ふと言葉尻が消えて行つて耳が奥間へ行つてゐる。）

（相變らず無表情な三千歳の話し聲が、靜に幽に洩れて來る。と、すぐまた女房は、「……ですからね、それ

アもう、全くなんですよ……」と云ふやうな、一つも意味をなさない言葉で、前の話の尻へ、無理に、然し手際よく新しい話をすげ込みながら、もとの席へ戻つて來る。その時、直次郎が手酌でつがうとしてゐる銚子の尻が大分もちあがるのに氣がつき。）

女房　あら、どうもすみません。ついうつかり喋り込んでしまつて。……すぐ持つて來ますから……。

（ト、そのまゝ襖の出入口からはいる。直次郎、食ひものに箸をつける。）

（間をあけて、三千歳が、靜かな、落ちついた足どりではいつて來る。直次郎、見返る。）

三千歳　ひとり？

直次郎　たつた今までお神さんが來てゐたんだけれど……

三千歳　さう！

（ト、そばに坐り、持つて來た草双紙を默つてそこに置いてから、膳の上を見て、ちよいと侘しげな顏をする。）

同右　あら、隨分なんにもないのね。

直次郎　何しろ腹がペコ／＼だ。……あつちも御飯かい？

三千歳　いゝえ、お晝飯をすましていらつしやつたんですつて。ですからあたしも、たつた今すんだとこだつて云つて……。いつの間にかお午すぎちやつてたのね。（微笑。）

直次郎　日射がないんで、まるつきり刻限が知れなかつたが、どうれでひどく腹がすいたと思つた。

三千歳　でも、もうおそきですから、先に一人で御飯を食べちまつちアいやよ。

直次郎　今お銚子の代りを取りに行つてゐるんだが、まるツきり底がはいつてないんで、たつた一本でこの通りだ。

（ト、顏を撫でる。）

三千歳　まだ、なんともありアしませんよ。……いつだつて半時と落ちついてゐたことのない人なんだから。……穿物を表に廻して、歸りはあつちから出て貰ひますから、貴方は、ここでゆつくりあがつてゝくださいね。

直次郎　いや、俺アもう飯にして貰つて、今日はこれで歸らうよ。

三千歳　なぜ？

直次郎　なぜつてこともないが、また二三日うちに出直して來よう。

三千歳　一人ツぼつちにして置いて、寂しいでせうけれど、もう暫だから辛抱してゐてね。少し聞いて貰ひたいこともあるんだし……。

直次郎　話は俺の方にもあるけれど、云つたところで、つまりは愚痴かも知れない……。

（足音を聞いて、三千歳は立ちあがりながら、）

三千歳　ぢア、ほんとに歸つちまつちアいやですよ。きつと待つてゝくださいね。

（ト、念を押しながら、急ぎ足に開戸へはいる。）

（女房、銚子を持つて出る。）

（直次郎、今度は少しばかり恥しい氣持で、無意識に草双紙を取りあげ、棒に卷いて、片手の掌を輕く叩いてゐる。女房は、氣勢で三千歳の來たことを察しながら、敢てそれに觸れずに。）

女房　どうもお待遠樣でした。

（ト、酌をして、それからまたぽつ〳〵お喋りにかゝる。今度は、直次郎の氣持が、前よりも一層寂しく、暗くされてゐる樣子なので、次のやうな話を始める。）

（――これを臺詞で書くと、くだ〳〵しく。あまり長くなるから、こゝには故意と意味だけ述べて置くが、上演の機があれば、無論臺詞に書き改める。――）

（まづ、前の日深川の不動へ詣つて來た話をする。それから、「信心と云つたところで……」と云ふ風な冒頭で、神佛を馬鹿にしたやうなことを云ひ、自分のお詣りも、深川が懷しいからだ、と、暗にその土地に情人でも住んでゐるらしい口吻で、遠廻しにのろける。若々しく、陽氣らしくそんな話へ持つて行く裏の心は、現在ちやんとした亭主をもつてゐる自分でさへ、蔭へ廻れ

ばそれくらゐの祕密はもつてゐるのだから、まして貴方がたのしてゐることなんぞは、當り前も當り前、大威張でゐるがいゝ、なんのこれしきの差合に、ちつともしよげることはないではないか、と云つたやうな、はたから勇氣をつける意味が十分に汲み取れるのだ。）

（この話のうちに、直次郎はいよ〳〵陰鬱になつて來る。仕舞には、火鉢の火に目を落して、ぢつと考へ込んで了ひ、時々氣がついて、ほんのお義理に笑顔を向いて頷いてみせたりしてゐる。相應利口な女ゆゑ、それにもすぐ氣はついてゐるのだが、乘りかゝつた舟で、自分のお喋りに、止むなく自分が引き摺られて行く態。暫くして、奧の物音、氣勢に心つき、）

女房　あら、お歸りらしいわ。

（ト、これをしほに立つてはいる。）

（直次郎も、ぢつとひとつところを見詰めたまゝ、奧の物音に耳を澄ましてゐる。）

（三千歳、新造を從へて、正面の襖から出る。喜色おのづと面上に躍る意氣があつてほしい。）

三千歳　あつちへ行かない？

直次郎　（不愛想なほどに）いゝぢやないか、こゝでも。

三千歳　でも、なんだか落つかないでせう？

新造　ぢア、おこたをこつちへ持つて參りませうか。

三千歳　え﹅、さうして頂戴。

（新造、突番の女房に手傳はせて、炬燵、座蒲團、その他調度いろ〳〵運び込み、この部屋の空氣が一變する。この、調度の持ち運びは、捨臺詞のうちに、出來るだけ短時間に、手順よく成し終ること、また、新造が立つて行つたあとには、女房、女房のゐない時には新造と、どつちか一人は必ず舞臺にゐて、三千歳の注意の半分以上はそつちへ向けられ、直次郎との間には、一言の受け渡しもない方がい﹅。つまり、そこに、構はず、落つかない、寧ろ騷々しい空氣を釀し立て﹅置いて、總てが片づき、二人がさがつて行つたあとを、汐が引いて行つたやうにじつくりと締めたい。）

（――尤も、劇場の構造によつては、二杯飾り込み、廻して、「奥の間」に變つてもよし。その場合注意を要するのは、金子が歸つたばかりのあとへはいる、といふことに、多少とも拘泥つた氣持を、直次郎を演じる役者がもたねばならぬことだ。――）

三千歳　（肇てはツとしたやうに、炬燵に手を入れながら、しみ〴〵と男の顏を眺めて）寂しかつた？

直次郎　（なほ浮かない顏で）うん。

三千歳　何をそんなに考へ込んでるの？

直次郎　いろ〳〵考へた。……考へるといふことは、決して惡いことぢアないよ。

三千歳　どんなことを考へてたの？

直次郎　云ふとやきもちじみるが、まア差當つて今日のことさ。

三千歳　……ほんとにすみません。

直次郎　ちつともあやまられるところはないけれど、……一體、貴方にしてもあたしにしても、惡いことをしてゐると云ふ氣持は、これツばかりだつてありやアしない。ね、さうだらう？

三千歳　（何を云ひだすのか解せぬ面持で）……え……。

直次郎　世間の口なんざアどうでもい﹅。金子さんに對しても、……天地神明に對しても、ちつとだつて疚しい氣持なんぞありやしまい？

三千歳　（ぢツと男の眼のなかを見詰めたま﹅、微かに頷き返すのみ）

直次郎　それだのに、俺は、兎に角身を隱したんだ、逃げたんだ。……それア、あの咄嗟の場合にだつて、俺はちつとも驚いたり慌てたり、……自慢ぢアないが、そんな氣持は微塵もありやアしなかつた。よしんば、ねごみに踏ン込まれて、た﹅ツ斬られようとも、びくともしやアしない。お前さんのため、……ためなら當り前だが、ただお前さんのことでだつて、いつ何時、どこでどう云ふ

非業の最期を遂げようと、俺アちつとも悔みやアしない。その氣持は、お前さんだつて、少しも變りはないと思つてるんだ。

三千歳　えゝ、あたしはたゞ貴方が生きてさへゐてくださればいゝの。貴方が死んだら、あたし、すぐ死んで了ふわ。……えゝ、わけなく死んじまふわ。

直次郎　さうだらう？　それだのに、金子さんが來たと聞くと、いくら氣持は平氣だと云つても、兎に角俺は逃げ隠れするんだから……。

三千歳　それは、貴方が、あたしへの遠慮から……。

直次郎　うん、さう云ふ時代も慥にあつた。然し、この頃はさうぢやないよ。貴方が、あたしのために金子さんをしくじつたつて……。

三千歳　えゝ、そんなこと、あたしだつて、ちつとも氣にかけてやアしません。たゞあたしは……、あたしの氣持つて、ほんとにへんですわね、……あの人が、なんにも知らずに、一生懸命あたしを可愛がつてゝくださる、その、まるで子供みたいな、……でなければ、夢みたいな氣持を、あたしの呼び醒す聲で、はツと吃驚させるのが……。

直次郎　それもよく解つてる。解つてるどころぢアない、さう云ふ女らしい、優しい性分もあたしは大好きだし、あたし自身だつて、金子さんに對して、どれほど好意をもつてるか、ちよつと貴方にだつて想像がつかないくらゐかも知れない。

三千歳　えゝ、それも知つてますわ。

直次郎　然し、ほんとのことを云ふと、あたしと金子さんとのやうな關係で、一方が一方に好意をもツてことは、大へんな侮辱を與へてゐることだからね。……さうぢやないか、戀仇だもの、お互に憎み合つてこそ五分々々の相手だけれど、氣の毒なもんだ、と思はれるなんて、これ以上の侮辱はありやアしない。だから、今まであたしは、金子さんに同情してゐることを、貴方にだつて成可く云はないやうにしてゐたんだ。然し、だん〳〵俺に好意をもたれるやうなことになつたのは、露骨に云へば、金子さんの責任さ。……俺が、額に青筋を立てゝ、あの金子のやつが、つて調子でものを云ふやうなら、あの人も立派なんだけれど、俺にさんづけで呼ばれるんぢやア、實際俺としても賴母しくないよ。さう云つちやアあんまりひどいが、正直なところ、力の入れやうがなくつて、却つて始末が惡いんだよ。

三千歳　ほんとにさうねえ。

直次郎　誰に疚しいところもない俺が、つい逃げ隠れしなけれアならないと云ふのも、一つはそのへんてこな同情からも來てゐるんだよ。だが、人はさうは思はない。……

人の思はくなんざアどうでもいゝやうなもんだけれど、誰だつて、男なら大抵まア、直次郎つてやつは、呆れた圖々しいやつだ、隣座敷に金子が來てゐるのに、平氣の平佐で酒を飲んでやアがるつて云ふ風な見方をするだらうし、女なら、まアいけすかない、どうでせう、あの、色男のお札はこれから出ます、つて云ふやうな、ひとりで納り返つてる樣子ッたら！　きざだわねえ、とても見ちアゐられないわねえ、つてえやうなもんだらう。……さうかと思ふと、喜兵衞の神さんなんぞは、俺が氣を腐らしてるとでも思つてか、なんのかんの慰めてくれるんだ。それも、ぢかの話はこれんばかりもしないで、遠廻しも遠廻し、大廻りに廻して來て、仕舞にやア、深川とやら、本所とやらに、自分の情人でもあるやうなことまで仄かして、暗に俺たちの氣持をいたはつてくれるんだ。その好意は、決して仇には思はないけれど、……つまり、それ、今の話だ、俺が金子を、さん附で呼ぶのとおんなじことで、そんな同情は有難迷惑だ。憚りながら、俺たちの氣持は、同情されたりいたはられたりして、それでやつとのことで芽を出すやうな、そんな室育ちぢアねえんだ、とでも云つてやりてえくらゐなもんだつたけれど、おかげで、俺もまアだん／＼そんなことぢア氣持が動かされなくなつて來たよ。ぢつと一人で考へると、何もかも、鏡に映し取つて見るやうに、はつきり解つて、結局穏かな好意をもつよりほかはなくなるんだ。……我ながら、あんまり分別くさくつて、燥つてえやうな氣がするくらゐさ。

三千歳　でもね、あたし、この頃、その分別と云ふものを、それア荷厄介にしてゐるんですのよ。人みたいに、なんでも自分の云ひたいことや爲たいことが、あとさき見ずに、どん／＼云つたり爲たり出來たら、どんなにいゝか知れないと思つて……。

直次郎　ところが、それはさうは行かないやね。性分なり、今まで經て來た境遇なりで、一旦分別がついて了つたら、今度はまた、容易なことで、そのあとさき見ずつて云ふやつが出來るもんぢアないやね。……實は、先刻ッから俺もそれを考へてたんだが、この頃の俺たちの仲なんてものは、世間で謂ふ、いろだ戀だとは、よつぽどわけの違つたものになつて來て、いやに分別くさくいぢけちまつたと思ふんだよ。それだから今もね、二人の男が一人の女を好きになつた場合の、一番無分別な處置を考へてみたんだ。つまり、一番直情的な、簡單なやり方をしたのは、原始時代の人間に違ひないんだが、それアもう云はないでも知れたことで、力づくだ、腕力次第と云ふやつだ。考へてみりやア、全くそれでもいゝんだ。だから、

場合によつちア、俺から金子に、果し狀をつけないものでもないが、然し、腕づくとなると、大抵はまア强い者が勝つのが順だ。どつちが餘計本氣で惚れてるか、その眞劍さも、幾分關係しないことはなからうけれど、どうも矢つ張り腕力の强いやつの方が勝つ率が多いに違ひない。それくらゐなら、まだしもジヤン拳の方がましなくらゐで、好きさ加減の多い少いとは無關係なんだから、一向くだらない話だと思ふんだ。看貫みたいな機械で、心臟でも摑み出して載つけてみると、本氣の度合が、きちんと目盛に表はれて來るやうなものでもあれば格別、どうもこいつばかりは、いかに水野樣でも大岡樣でも、はたから黑い白いはきめられないんだし、もしきめられたとすれば、誰だつて、慍つちまふだらうし……。

三千歳　身贔屓なことを云ふやうですけれど、それが一番はつきり解るのは、相手の女だと思ふわ。

直次郎　それアまア、他人の眼よりはいくらか慥かにやア違ひないけれど、それだつて人間だからね、絕對に公平たア云へないさ。

三千歳　それアさうね。（眞面目くさつて巫山戲る）公平に云つたら、貴方なんぞより、よつぽど、金子さんの方が……。

直次郎　なにヨウ云つてやがるんだい。

三千歳　心臟を載つける看貫なんてものが、出來ないのがお仕合だつたんぢアない？

直次郎　そんなこと云やア、お前さんのなんざア、お醫者の使ふ天秤にもかゝらなからう。

三千歳　貴方のなら、輕いから大丈夫だけれど、あたしのはちつと重さうだからね。

直次郎　とすれア、分別の重みかな？　……何しろ、貴方つて人は、何をするにも、地びたから足の離れない人なんだから……。

三千歳　どつかの人には、それがまた引離せないんだから……。

直次郎　引き離さうとすれば、すぐ痛がつて泣くくせに…

三千歳　泣きアしないわ！　あたし、きつと自分一人の力で、貴方のとこへ飛んで行くから、その時、あんまりヒヨロ／＼してゐると受けとめそくなつてよ。いゝこと？大丈夫？

直次郎　生れたまゝの裸一貫。用意も支度も要るんぢアない。今すぐでも結構だ。

三千歳　ぢア、これからすぐに、金子さんへ使をやつて……

直次郎　さうだ。騙すばかりが嘘ぢアない。假令好意から出てゐるんでも、有ることを無いやうに思はせて置くのは、決していゝことぢアない。腐つた土臺の上に、がつ

しりした家は建たないんだ。私たちのためにも、金子さんのためにも、そんな噓は一時も早く吹き飛ばして了ふ方がいゝんだ。早速來て貰つて、面と向つて、何もかも正直に云つて了ふんだね。貴方ほどの人が、今までそこに氣がつかなかつたのが不思議なくらゐだ。

三千歲　あんまりさきのさきまで考へすごして……。

直次郎　分別の祟だ。

三千歲　いゝえ、さう云つちア分別に氣の毒だわ。たゞあたしが弱蟲だつただけのこと、卑怯だつただけのこと。

直次郎　然しもう、一旦肚がきまつたからは、人の一念、強いもんだ。假令殺されるまでも、あとへは退くなよ。

三千歲　その氣で心を決めました。

直次郎　それでこそ千人力、强いもんだ。

三千歲　一生一度の强がり。殺されても笑つちアいやですよ。

直次郎　誰が笑ふものか！　都合のいゝ方法は澤山あるが、そのなかに、正しい行爲と云ふのは、たつた一つしかない。そのために死ぬのなら……。

三千歲　えゝ、あたしは本望！

直次郎　そこまで聞けば俺も安心だ。なに、金子さんだつて、お前さんを殺したところで始らない話、そんなまねはしやアしないよ。

三千歲　その代り、貴方のところへ飛んで行つて了つたら、あとはあたし、へと／＼と弱くなつて了ひますよ。

直次郎　女だもの、弱いのが當り前だ。今までの貴方が、ちつと强すぎたくらゐのものさ。その曉には、心置なく弱くおなんなさいとも。

三千歲　貴方を困らせるほど弱くなつちまつてもいゝんですね？

直次郎　いゝとも！

三千歲　うれしい！

（ト、縋りつく。）

（直次郎、抱きしめ、心のうちにて、
「この女に勇氣をお授けください！　勇氣、勇氣！ほかにはなんにも要りません。今日半日、男にも勝つた勇氣をもたせてやつてください！」
と、神とも佛とも、天とも地とも知れないものに向つて一生懸命に祈願をこめる。）

――幕――

紐（一幕）

時　現代

人

陸軍歩兵中尉　矢崎
同　卒　加藤
同　木村
田舍の中婆さん
同　娘
その他、學生、甲、乙、都會風の若夫婦。道者。
籠屋。兵卒大ぜい。

景

日光、華嚴の瀧の、落口にある瀧見臺。舞臺なるべく高く、五六疊敷ほどの平地にて、そこへおりて來る一條の徑を除けば、上も下もおそろしき斷崖絶壁なり。平地を遶りて、鐵條網の柵を結ひ遶らし、投身者に備へあり。斷崖は、鬱蒼たる老若の雑木（欅、楓、樺などの如き葉の細なる樹を撰びたし）にて一面に覆はる。眺望に便ずるため、平地の正面だけ枝を拂ひ、茂みに窓を穿ちたる感じなり。舞臺に瀧は見えざれども、遙か下方にあたりて、だう／＼と水聲鳴り轟く。樹間を洩れ來る眞夏の日光、珠をなして躍り、瀑聲に劣らじと、蟬、蜩鳴きしきる。人物の出入りは、總て、丸太にて土止をなしたる急傾斜の徑に依る。

幕あくと、學生、道者、籠屋を案内にたてたる都人士など、柵に倚りて下を窺き込んだり、帽子をぬいで汗を拭いたりしてゐる。

籠屋　（前から引き續いて説明してゐるところ）……瀧壺までが五丈と六尺。幅は一丈と云ひますが……。

學生甲　（自分がつれて來た籠屋でもないのに、横合から茶茶を入れる）雨がたんと降りやア太くなり、旱の時には細くもなります。

學生乙　よせやい、馬鹿！

ハイカラな奥樣　ちよいと、貴方！　こゝへ來て御覽なさいましよ。霧で、とても下まで見えませんわ。

臆病らしいその夫　うん／＼、（ト、うしろの方に引つ込んで、なほ籠屋にいろ／＼説明を求めてゐる）

奥様　ねえ、來て御覽なさいましつたら！

夫　知つてるよ、この前來たとき見て、もうすつかり知つてるんだよ。

奥様　まア、凄いわ！

學生甲　痛快ぢやねえ。

奥様　成程これア、少しくさく〳〵してゐる時なら、飛び込みたくなるわねえ。

夫　おい！　もつとこつちイひつこんでろよ！　おい、あぶないぢアないか！

奥様　大丈夫よ！　こゝからすうツと飛んでつたら……。

夫　おい〳〵！

奥様　さぞいゝ心持でせうね。

學生甲　既に巖頭に立つに及んで、胸中何等の不安あるなし。擧て知る。大なる悲觀は大なる樂觀に一致するを。

夫　と來たかな。ホレーシヨの哲學、竟に何等のオーソリチーに値するものぞ。序のことに、トブーンと來い！

奥様　あゝ、さう〳〵！（ト、思はず見も知らぬ他人に話しかける）いゝわねえ！　あれ、始まりはなんてんでしたつけ。

學生甲　（朗々として誦す）悠々たる哉天壤、遼々たる哉古今。五尺の小軀を以てこの大をはからんとす。

奥様　えゝ、さう〳〵！　それから？

學生甲　ホレーシヨの哲學、竟に何等のオーソリチーに値するものぞ。

奥様　あゝ、いゝわねえ。その先は？

學生甲　先ですか？　これから先は、……あぶない、おつこちる……。

奥様　まア！

學生乙　よせやい、馬鹿！　もう行かうよ！

學生甲　行かう！

（捨臺詞よろしく、だん〳〵に歸つて行き、遂に舞臺空虛になる。下の方から時折鶺鴒が舞ひあがつて來、樹間を掠め去る。）

（田舍の中婆さんと、年ごろの娘がおりて來る。）

母親　あぶねえよ、氣イつけなよ。

娘　大丈夫だよ、來て御覽よ。あゝ、涼しい！　顏にしぶきがかゝるよ。

母親　（覗き込んで）はアれまア、おつかねえ！　ひとつ間違つておつこつたら、どうだべえ。

（このとき上にて、「あんまり危險なとこへ立よるんぢやないぞ！」といふやうな注意を與へる聲がして、四方へ散らばる大勢の靴音。同時に、兵卒がドヤ〳〵とおりて來る。狭い平地は、見る間にぎツちりに詰つて了ふ。）

（婆さんと娘は隅の方に押しつけられる。兵卒たちは、やれ高いの、素敵だの、どれ〱俺にも見せろのと、めい〱勝手に喚き立てる。）

（なかには、なんか猥褻がゝつたことを云つて娘に嬈（からか）ふものもある。入れ變り立ち替り前に出て、瀧壺を窺き込み、それ〲なんとか感嘆の言葉を放つて、順々に歸つて行くが、あとから〱おりて來る。蟻の行列のやうに、狹い徑で擱れ違ふ時に、兩方ちよつと立ち止る。この人數かなり多くてよし。）

（最後に二人殘つたところへ、勢よく駈けおりて來た一人が「そら、おつこちるぞ！」と、おどすつもりで、いきなりうしろから、背なかを突くはずみに、その手が滑つて、一人の方の帽子を跳ね落す。が、一間ほど先の木の枝にひツかゝつてとまる。）

（「あツ！」と云つて、互に顏を見合せ、三人、悄然と立ち竦んで了ふ。）

（折から歸りかけてゐた田舍の親子づれも、吃驚してそつちを見詰めてゐる。）

木村　（帽子を失つた兵士のつれ。誰に云ふともなく）おい！　どうするんだ……。

加藤　（あとから來ておどかした兵）困つたなアー

木村　困つたがあるか！　貴樣が、つまらんまねをするからだ！

加藤　いやア、實際わるかつた！　すまん、すまん！

木村　俺にあやまつたつて仕樣があるか！　矢崎にあやまれ、矢崎に！

加藤　（帽子を落した兵の方へ）失敬した、矢崎！　な、勘忍してくれ！

矢崎　（ぼんやり、枝の上の帽子を見詰めてゐる）困つたなア。

加藤　何、ついそこだ。なんとかすれア取れないこたアない。

木村　うん、取れる。なんかかう、竹竿みたいなもんがあるといゝんだが……。（トあたりを見廻す）

加藤　なんかありさうなもんだな。少し長けれア、ステッキでもいゝんだけどな……。よし、俺、上へ行つてなんか見つけて來る。（駈けあがつてはいる）

矢崎　弱つたなア。

木村　何、そんなに心配することアない。取れるよ、きつと取れるよ！

（風が來て、ザワ〱と枝がゆれる。）

矢崎　（氣が氣でなく）あ、あ、あツあゝゝ！　あーツと、たすかつたあ！

木村　（樹々の梢を見あげて）生憎と風が出て來やアがつ

た。これア、早くなんとかせんといかんな。

矢崎　（腕時計を見て）それに、三十分の休憩時間だ！

木村　その間にやア、飯も食はんけれアならんし……。

矢崎　かうなつちやア、飯どころの騒ぎぢアない！

（このうち、親子のものも、何やら囁き合つたり、帽子の引ッ懸つたところを窺き込んだりして、とも〲心配さうな思入。）

（加藤、六尺ほどの竹の棒を擔いで駈け戻つて來る。）

加藤　あつた、あつた！

木村　あつたか！

矢崎　や、有難う！　どれ〲、俺に貸してみろ！

木村　うまく、そうッとやらなくつちア駄目だぞ。

矢崎　弱つたことにやア、帽子が下向きになつてやアがるんだ。

加藤　それだつて、横の方から、うまく具合をすれア引ッ懸るよ。

矢崎　（竹竿の先に、手つきをしてみながら）　こゝイなんかかう、鉤みたいなもんがついてるとうまいんだがな。

木村　そんな贅澤いつたつて、さうお誂へどほりのものがあつてたまるもんか。まア、仕方がない、それでやつてみるんだ。

矢崎　なんかないかなア、かう……。（ト、中指と食指を二本、鉤の手に曲げて、それを輕く振り動しながら、頻に考へ込んでゐる）

加藤　どら！　俺に貸してみイ！　こんなことは、俺が一番器用さうだ。

矢崎　待て、待て！　（ト、なか〲竹竿を渡さずに）　針金の切ッぱしでもありやア、折り曲げて、こゝんとこにかう……。

木村　よし、今度ア、俺が行つて探して來てやる。（急ぎ徑を駈けあがる）

矢崎　たのむ！　なんかみつけて來てくれ！　（ト、うしろから呼びかけてから、獨語のやうに）　弱つたなア。へたアして、つッ突き落しちまやアそれまでだからなア。

加藤　だから、つッ突いちア駄目だ。うまアく、かう、先へ引ッ懸けるやうな具合にして……。

矢崎　なか〲さううまかアいかんよ。

加藤　まア、ちよいと、俺に貸してみろッたら。

矢崎　駄目々々！　それア、貴樣が、いくら器用だつて、それア駄目だ！

加藤　大丈夫だよ！　下イおつことすやうなへまアしやしない！

矢崎　まア待て！　萬一おつことしちまつてみろ、貴樣はいゝだらうが、俺は、輕くつて外出停、へたアまごつき

ア、營倉もんだ。

加藤　それア無論營倉さ。

矢崎　よせ！　人事だと思つて、つまらないことウ受合ふない！

加藤　だから、貴樣がやつたんぢア、つッ突き落しちまふにきまつてるから、俺に貸してみろッちゆうんだ。……人が折角親切に云つてやつてるのに、なんだ！

矢崎　誰がやつたつておんなじこつたよ。おんなじことなら、自分でおつことしちまつた方が、まだ諦がつかア。

加藤　竿でなく、なんかかう釣りあげるやうなもんがあるといゝんだがな。

矢崎　井戸の釣瓶をおつことした時に釣りあげる碇な、あれがありやア一番いゝんだ！　あれならもう間違ひなく釣りあげられるがなア。……上の茶店にないかな。

加藤　あるもんか！　第一井戸がありやアしない。あることアあるが、堀ぬきで、柄杓で汲めるんだもの。

矢崎　なんだ、貴樣もう辨當くつて來たのか？

加藤　うん、大急ぎでかッこんで來た。

矢崎　早いとこいきやアがるな。……ぢア、木村のやつも飯を食つてやアがるのかな？　（思はず上を見あげる）

加藤　馬鹿いへ！　俺アあの前に食つちまつたんだ。竹竿を探しに行つた序に食つて來たわけぢアねえぞ！

矢崎　あゝ、さうか！　さうだらうなア、なんぼなんでも、それぢアあんまり人情缺いてやアがると思つたんだ。

（また風が來て枝が搖れる。兩人、身を竦めてハラハラする。田舍の親子も、悉く事件のなかに惹き込まれ、どうなることかと、歸る端を失つて、まご／＼してゐる。）

（木村、枯枝を持つて駈け戻つて來る。）

木村　針金なんてないぞ！

矢崎　（失望の聲）ないか！

加藤　よく、電信柱のそばなんかに落ッこちてるもんだがなア。

木村　馬鹿いへ！　東京市内たアわけが違はい！　……仕方がない、これだア。（ト、枯枝を見せる）

加藤　そんなものウどうする氣だ。

木村　この三叉のとこを使つて、鉤にするんだ。どうだ、うまいことを考へついたらう。

矢崎　成程、それアいゝ。（ト、手を出す）

木村　まア、待て！　いま俺がうまく拵へてやる。

（ト、ナイフを出し、要らない枝を拂つて、やゝ碇に似た形に拵へあげる。その間、はたの二人もいろ／＼口を出す。とゞ、出來あがつたやつを、手巾で、竿の先へきつく結ひつける。）

矢崎　あゝ、これなら大丈夫だ！　（ト、勇み立ち、すぐ竿

を伸べるが、ほんの僅か寸法が足りないので、だん〳〵に鐵條網から乘り出す。）

加藤　（うしろからバンドに手をかけて）俺がおさへてゝやるから、もつと伸び出しても大丈夫だ。しつかりやれ！　落すと重營倉だぞ！　そのつもりで、死んだ氣ンなつてやれ！

（木村も、緊張しながら腰に吊るさがる。）

（矢崎、一生懸命の無言にて、精よい乘り出し、手を伸すが、もう少しといふところでなか〳〵屆かない。）

木村　チエツ！　もうちつとだ！　しつかりやれ！

加藤　重營倉を忘れるな！　そら！　もう一寸五分だ！

（矢崎、いろ〳〵やるうちに、ちよいと觸つたと思ふと、帽子は、ポロリと落ちて、もう一段下の、葉の厚い枝にとまる。）

（一同、ヒヤツとして、それ〳〵叫聲をあげる。）

木村　しまつたなア！

加藤　馬鹿！　だから俺にやらせエつて云ふんだ！

矢崎　（鐵條網に踏みかけたまゝ、決然たる色を浮べて）かうなれアもう仕方がない。俺ア、あすこへおりよう！　あの枝を傳はつてつて取る！　（ト、足下四五尺の斷崖から、幹を横へてうねり出してゐる樫を指す）

木村　冗談いふな！　そんな向不見なまねをして、貴樣…。

矢崎　大丈夫だ！

加藤　いくら大丈夫だと思つても、そんな危險なまね……。

木村　帽子と命がつツかふか！　馬鹿！　よく落ちついて考へてみろ！

矢崎　いや、俺アどうしても取つて來る！　誰がなんてつても取つて來なきア氣がすまん！

母親　（默つてひつこんでゐられなくなつて）それアお前さん、およしなせえまし！　こゝらから落ちたひにやア、めつたに死骸だつてあがるこんぢアねえだ。いかに大事な軍帽だからつて、……戰で死ぬんならそうかねえけんど、そんな、帽子くれえのこんで、お前さん……。

木村　よせつたらよせ！

母親　惡いこたア云はねえ、それだけはおよしなせえましよ。きつと、お故鄕にやア、お前さんの除隊を、首イ長くして待つてなさる親御さんたちだつてあんべいに、帽子と心中して、瀧さおツぱまつたと聞きなすつたら……。

加藤　まア、兎に角一度おりろ！

矢崎　大丈夫だ！　放してくれ！

母親　これ、お二人さん！　放すでねえだぞ！　放したら駄目だぞ！

（ト、自分も足に取りつく。娘もそばではら〳〵してゐる。）

（そこへ、その小隊の指揮官である中尉がおりて来て、様子を見るなりどなりつける。）

中尉　貴様等、そんなとこで何しとる！　あれほど危険なところへ立ちよつちやいかんつて云つといたのに、馬鹿た奴等だ！

（矢崎は、柵から飛びおり、一同うしろを向いて直立不動の姿勢をとる。）

中尉　一體、何をしとつたんだ！

矢崎　は。帽子を落したんであります。

中尉　どこイ。（ツカ／＼と柵のそばへよつて下を窺き込む）

矢崎　あすこに引ッ懸つて居るんでありますから、今、あの木へおりて……。

中尉　馬鹿！　そんな危險なまねをしちアいかん！

矢崎　でも、ほかに仕様がないんでありますから……。

中尉　いかん、いかん！　一體、どうしてあんなとこに帽を落したんだ。

矢崎　は。

中尉　よく、しつかり被つとらなかつたんだらう。

加藤　いや、わたくしが、巫山戯て、うしろから突きとばした拍子にぬげたんであります。わたくしが悪いんであります。

中尉　なんだつてそんなつまらんまねをするんだ！

加藤　は。おどかしてやらうと思ひまして……。全くわたくしが悪う御座いました。

中尉　ふん、馬鹿な奴等だなア！

（中尉にもその眞情は察しられ、それ以上叱るわけにもいかないので、仕方なく、もう一度柵のそばによつて帽子を見おろしながら）

中尉　だいぶ下だな。

矢崎　いゝえ、大丈夫とれます！

木村　今、この竿でやつてみたんですが、もう少しといふとこで、あすこへ落して了つたんであります。竿が、もう一寸長かつたら……。實に惜しいことをしました。

中尉　ぢア、それまでは、もつと近いとこにあつたのか。

矢崎　は。あの、もう一つ上の枝に引ッ懸つて居つたんであります。

中尉　その時に、何故すぐ俺ンとこにさう云つて來んのだ！　もうあすこまで落ちてからぢア、とても取れやアせん。

矢崎　いや、わたくしが、自分で必ず取つて參ります！

中尉　いかん、いかん！　よしんば、うまくあの幹へおりられたつて、それから先どうするつもりだ。お前みたいな大きな體で、あの先の細い枝に乘れると思つとるのか。

片足かけたばかりで、ミシッと來るにきまつとるぢアないか！　馬鹿なやつだ！
矢崎　は。
中尉　仕方がない、諦めちまへ！
矢崎　は。でも、帽がなくつては……。
中尉　そんなこと云つたつて、仕方がないぢアないか！
母親　（心中の憤慨をひとり言のやうに洩す）　この炎天に帽子なしぢア、馴れねえもんは、一町行かねえうちに、霍亂（くわくらん）でも起してぶツ倒れべえ……。
中尉　（心では、それもさうだ、と思ひながらも）　熱い寒いの騒ぎぢアないぞ！
矢崎　いえ、熱いのは構ひませんが、假にも陛下から下しおかれました品をなくなしましては、自分一個の問題でありません。小隊の名譽にも係りますから、是非とも取りに行かしてください！
中尉　いかん、いかん！　それア、斷然いかんぞ！
矢崎　は。
中尉　いかに大切にしなければならんと云つたからつて、被服は被服だ。人命と一緒になるか！　軍帽が陛下のものなら、お前の命は、尚更大切な陛下の御所有だ！　それを、……斷然いかんぞ！
矢崎　は。

中尉　仕様がない。帽なしで歸れ！
矢崎　は。（しをれる）
中尉　宇都宮まで行つたらなんとかしてやるから、それまでは、……さうさな、手拭でも被つてけ！
（娘、母親に何か囁く。母親頷き返し、したり顔に、然しおつかなびつくりに進み出て、）
母親　町の警察イ行つてみたら、巡査さんの帽子の要らなくなつたのが、二つや三つあんべと思ふだがね……。軍服ウ着て、まさかすつとこ被りでも歩けめえし、この炎天に帽子がねえぢア……。
中尉　（優しく）　まアいゝ。いゝから、お前はまア、默つてひツこんでろ。（兵卒たちの方へ）……ぢアいゝな。決して取らうとするんぢアないぞ！　宇都宮まで行つたら、あすこでなんとかしてやるから……。
兵士三人　（口々に）　は。
中尉　それを、云ふことを聽かんで、一足でも柵の外へ出てみイ、その時こそ唯は置かんぞ！　いゝか！　解つたな！
三人　は。
（中尉は、それで、上へ引き返して行く。――あとに、三人とも、悄然と顔を見合せて立つてゐる。）
木村　仕方がない、行かう！

加藤　然し、殘念だなア。（ト、未練らしく帽子を見おろしてゐる。）

矢崎　殘念だ！　下まで落ちちまつたもんなら諦もつくが、ついそこに見えてながら……。

加藤　ちよつと、なんとかすれア、取れないことはないんだからなア。

木村　それアさうだが、もうよせ！　諦めちまへ！　もしなんなら、石でもぶつけて、瀧壺へ落しちまつてやらうか。

矢崎　馬鹿いふな！……ほんとに、あれア取れるね。ちよいと、その欅の幹までおりやア、あとは、先刻の竿で十分とゞくんだからな……。

木村　まア、然し、それだきアよせ！　小隊長殿にあゝ云はれてみると、そばにゐた吾々にだつて、多少の責任はかゝつて來るわけだからな。それだきやアよしてくれよ。

矢崎　さう思ふんなら、さつさとあつちイ行つてくれ。何もこつちから頼んで、手を借りようと云つたわけぢアなし……。

加藤　矢崎！　ま、さう云ふな！　……木村もまた、へんなことを云ふもんぢアないぞ！　責任は、いづれ吾々三人共同のもんだ。

木村　だから制めるんぢアないか。

加藤　うん、それア解つとる、……その貴様の氣持はよく解つとるんだが、貴樣の今の云ひ方は、なんだかちつとへんだつたぞ！

矢崎　兎に角俺ア取る！　誰がなんと云つたつて取つて來ずにやア置かん！

木村　それア吾々だつて、取らしてやりたいことは山々だ。決して俺ア、責任を遁れようと思つて云つたんぢアない。

加藤　だから……、なんとかいゝ工風はないもんかなア。

矢崎　俺ア、どうしてもあの欅の木におりるよ。あすこからなら樂に取れるんだから……。

木村　ぢアやれ！　男子の一言だ！　なアに、虎と見て石にたつ矢と云ふこともある……。

加藤　うん、面白い！　ぢアかうしろ、――なんか紐を見つけて來るから、それで體を結ひつけておりてけ。萬が一踏みはづすやうなことがあつても、そんなら、吾々がこつちで、しつかり紐をつかまへてゝやるから大丈夫だ。

矢崎　なアに、そんなことをしてくれなくつたつていゝ。そんなことをしてくれると、却つて氣がゆるんでいけない。

木村　いや、それア加藤の云ふやうにした方がいゝ。萬一に備へるといふことは、決してそれア卑怯なこッちアない。……さうだ！　それアいゝことを考へついた！　そ

んなら吾々も、安心して取りにやれる。

加藤　さうだとも！　ぢア、早速なんか紐を見つけて來よう！

（このうち、娘は、何やら母親に囁きながら、腰紐をといて渡す。母親、それを持つて進み出る。）

母親　これでは間に合はねえかな？

加藤　どれ／＼。（ト、ひツたくるやうに受け取り、ぢツと見て）いやに赤エなア。

矢崎　馬鹿！　ちよいと見せろ！（ト、奪ひ取り、兩掌に絡みつけて引き試みる）大丈夫かな？

木村　（他の一端をとりて眺め）だいぶこれア、やぶけかかつてるぞ。

娘　あら、やだア！（ト、顏に兩袖をあてる）

木村　（振り返つて）やア、失敬々々！　いや、決してさういふつもりで云つたんぢアないんだ。……これア失敗したなア。や、失敬々々！

加藤　（腕時計を見て）おい／＼、もう十分しかないぞ！

矢崎　うん、よし！　ぢアこれでやらう。

木村　そつち、引ツ張つてみろ！（兩人、綱引のやうに引ツぱり合つてみる）大丈夫だ、大丈夫だ！

加藤　ぢア、早く體に結ひつけろ！

（このうち娘、帶をとき、その下にしめてゐた紐をも解いて、今度は自分で持つて出る。）

娘　もしヒヨツと切れると大變だから、二本にして使つておくんなさい。

矢崎　（早速うけ取つて）うん、有難う！　二本ならなほ大丈夫だ。

加藤　ヨウ／＼。

矢崎　馬鹿！（ト、ちよつと赤くなりながら、紐を二本にして胴に捲きつけようとする）

木村　劍をとれ、劍を！

加藤　序に、靴や上着もぬいじまつたらどうだ。

矢崎　よし來た！　さうしよう！

（劍をはづし、上着や靴をぬぐ。加藤、木村、捨臺詞にて、紐を體に結きつける手傳をする。）

木村　さア、これなら大丈夫だ！

加藤　何、これなら、落ちて死んでも不足はあるめえ。

矢崎　馬鹿いふな！　ぢア、賴むぞ！

（ト、竿を片手に、元氣よく柵を跨ぎ越える。）

（この時、一人の兵士がおりて來て、この態を見るより、慌てゝ飛んで歸つて行く。）

（矢崎、岩角、草の根をたよりに、下の欅の幹へおりて行く。）

（加藤、木村は、紐の先をしつかと握り、そろ／＼と

操り出してやる。）
矢崎　もつと出せ、もつと！
兩人　どうだ、とゞいたか？
矢崎　もうちつとだ！
兩人　どうだ！
矢崎　よオし、しめた！
（親子は、思はず桐へしがみつき、夢中になつて見入つてゐる。）
（矢崎は幹に馬乘りになり、だん〳〵前へ躙り出る。その重みで、木がゆすれ、どの木の枝か、帽子を乘せてゐるのまでゆさ〳〵する。）
娘　駄目だわ、駄目だわ！　そんなにゆすぶつちア、帽子がおつこつちまふだによウ！
（矢崎、枝が分れて、足場のいゝあたりへたどりつき、いざこれから竹竿を使はうといふところで、手を滑らして取り落して了ふ。）
矢崎　やツ！　しまつた！
兩人　どうした！　どうした！
矢崎　なに、大丈夫だ。竿をおつことしちまつたんだが、こゝまで來れアもう手が屆きさうだ。もうちつと紐を延してくれ！
兩人　大丈夫か？

矢崎　大丈夫だ！　もうちつとだ！
兩人　もうさうは出せないぞ！
矢崎　ほんの五寸かそこらだ！　おい、さう引ッ張つてちア駄目だぞ！
（あます紐がないので、兩人、足をふん張りながら、そろ〳〵と桐の方へ近づいて行く。）
兩人　どうだ、まだか？
矢崎　もうちつとだ！
（帽子の庇へ手がかゝつた瞬間に、上から駈けおりて來た中尉が、いきなり大聲でどなりつける。）
中尉　おい！　こらツ！
（兩人、ピクッとした、拍子に、思はず紐を引く。矢崎、枝を踏みはづして、ぶらアんと斷崖へ吊るさがる。その、袋にかゝつた重みで、兩人、ずる〳〵ッと桐の際まで引きずられて出る。無言。それと見るや、中尉も夢中で駈けより、ともに紐に取り縋る。）
中尉　しつかりしろ！　さア、引けッ！　力いつぱい引くんだ！
兩人　うんしよ！
（三人、うしろへ反つくり返つて引く〳〵。矢崎、だんだんに吊りあげられ來て、やつと岩端へ手がかゝる。そこからは、匍ひ轉びながら、桐の根へ引きつけられる。）

矢崎　（一同の、一生懸命の無言を破つて、）
しめた、もう大丈夫だ！（なほ夢中で引かれ、矢崎は鐵條網にへばり附いて了ひ、）

矢崎　たい！　たい／＼たい／＼！　たい

三人　どうした？　大丈夫か？

矢崎　もう大丈夫だからゆるめてくれ！

三人　いゝか！　もう鐵條網につかまつたか？

矢崎　つかまつたどころか、刺々が食ひ込んでる！

（中尉、鐵柵に腰かけおり、抱くやうにして、柵を踏み越えさせる。）

（矢崎、遂に平地に立ち、中尉と眞正面に顔を合せる。と同時に、直立不動の姿勢をとり、思はず、帽のない頭に手を擧げる。）

中尉　どうしたか！　馬鹿！

矢崎　はッ！　取れました！

（目の前に帽子を突き出す。）

中尉　そんなもん！　（ト思はず振り拂つて）　あれほど云つといたのに、命知らずめ！　馬鹿ッ！

矢崎　はッ！

中尉　（うしろの二人を振り返り）　貴様たちも、なんだ！
馬鹿ッ！

兩人　はッ！

中尉　實に呆れ返つた馬鹿な奴等だ！

矢崎　（二人の方へ）　取れたぞ！　（ト、帽を振つて見せる）

兩人　取れたか！

中尉　馬鹿な奴だ！　もうこれから、決して落さんやうに、顎紐で、頬ぺたに縛りつけとけ！

矢崎　はッ！

（この時、帯しる裸の娘が、いきなり地べたにへいつくばつて、大聲に泣きだす。

（腰紐を體に捲きつけたまゝの矢崎、ふと目を落して、帽子の顎紐を延し始める。）

（まだ腰紐の先を、堅く手に捲きつけたまゝの畑葉、木村は、人形のやうにしやちこ張つて立ちつくす。）

中尉　帽をかぶれ！

矢崎　はッ！

（帽を被り、堅く顎紐をかける。そして、正面に擧げた顔には、雨の頬を、涙がぽろ／＼零れ落ちてゐる。）

（上からおりて來る兵士たちの足が見えだすころ、速かに幕を引きつける。）

（しまり切るまで激しい音）

秋晴

時代　現代
所　東京市内
人
とき　姉（二十六七）
みつ　妹（二十四五）
きよ　女中（四十あまり）
ます　同（十九くらゐ）
常吉　出入りの俥夫
その他・運轉手二人、小僧、御用聞。

景

山の手の、小路の奥へ五六間も引つ込みたる貸家。上(うへ)下(した)五間ほどにて、日當りよく、小ざつぱりと建つてゐる。下手よりに玄關、庭木戸。階上階下とも障子をあけ放ちあり。

こゝに移り住む者ある當日の樣(さま)なり。二階は既に掃除を終へ、夜具包、屏風、額類など置いてあれど、人はゐない。階下にも簞笥二棹、茶簞笥、姿見など、まだ置き所のきまらないまゝに雜然と置いてある。

初秋、午後一時頃の日射。

きよ、奧まつた臺所で、掃除をしてゐる姿が時々見える。

常吉は緣側を拭いてゐる。

常吉　どうしたんだらう、馬鹿に手間どるぢアないか。
きよ　なに？　あとの荷？
常吉　さうさ。もうさうたんともないんだらうがね？
きよ　あら、まだこの三層倍くらゐは來ますよ。
常吉　さうかな。そイぢア、今度はあつちの手が足らなくなつてやアしないかな。
きよ　でももう、相原さんの奧樣が、小僧さんをつれて見えてるでせうから……。
常吉　相原さんてえと、西河岸の、なんだね、お姉さんだね？
きよ　あら、お姉さんだつて……。（笑ふ）
常吉　さうぢやあねえのかい？
きよ　お妹御さんですよ。
常吉　へーえ、さうかい。俺ア一遍お送りしたことがあるつきりで、よくも憶えてねえが、あの西河岸の奧さんの

方が、よつぽどふけてなさるやうに思つたがなア。

きよ　それア、さう申しちアなんだけれど、御器量がね……

常吉　それもさうだし、一つにやアまア、あちらは堅氣の奧樣だし……、ねえ、それア矢っ張りどことなく違はアね。

きよ　生意氣お云ひでないよ。うちの奧樣だつて、何も……

常吉　さうまアむきンなんなさんなよ。（笑ふ）然し、お前さんは、感心に主人思ひだなア。

きよ　それアまた誰だつてあたりまへのことぢアないか。

（下手、表通の方にあたつて自動車の爆音。）

常吉　あ、來たやうだせ。

（縁先に出て、庭木戸の彼方を伸びあがり見る。）

常吉　あ、奧さんだ。

きよ　あら、さうお。

（とき、小さな風呂敷包と手提とを持つて登場。耳隱し。やゝ華美好みのお召の袷。羽織なし。草履。）

（きよ、常吉、玄關に出迎へる。）

とき　もうすつかり掃除できて？

きよ　はい。まア、あらかた……。（おもてを窺き）お一人でいらつしやいましたんですか？

とき　（常吉を顧て）あんた、そんなとこでぽかんと突ッ立つてないで、荷物を取つて來なさいなね。運轉手一人ぢア仕樣がありやアしないわ。

常吉　あ、へッ、畏りました。

（出て行き、運轉手とも〳〵に、佛壇、神棚、小机、その他、毀れやすさうな品ばかり、何度かに運んで來る。それにはかけ構ひなく、一方、屋内のやりとりは續く。）

きよ　おますさんは、どういたしましたんです？

とき　だつて、お前、いまだに誰一人西河岸から來てくれアしないんだもの。あの人と來たら、朝早くから行くのなんのつて……。自分が來られなけれア、せめて正どんでも小僧でもいゝから、先によこしてくれりやアいゝんだのに……。

（云ひながら、うちのなかをぐる〳〵廻つて見て歩く。きよ、それについて廻る。）

きよ　ぢア、あちらは、今、おますさん一人ッきりなんでございますか？

とき　うゝん、いゝ按配にね、濱田屋の小父さんが來たから、とつ捉へて、手傳はしてやつてるんだよ。たまさか伺へばこんなもんだ、なんて、愚痴をこぼしてたけど、それでも感心に。ますと二人で、うん〳〵云つて麻繩なんかかけてたわ。

（そこへ、常吉が部屋のなかまで荷を持ち込んで來て、）

常吉　どちらに置きませう。
とき　假にまア、どこイでもいゝから置いといて、あんたは、今の自動車ですぐうちへ歸つて頂戴。そイでね、もし妹が來てゐたら、すぐまたその自動車でこつちイ來るやうにつて……。毀れやすさうなものは、成可くそんときー緒に載せてよこすのよ。
常吉　へ、畏りました。
とき　あゝ、それから、へんな、若いやうなお爺さんみたいな人がゐるかられ、どうも御苦勞さんでしたつて、よく禮を云つて歸しッ頂戴、――近いうちに、こつちのうちに來てくださいつて、さう云つてね……。所番地は、あたしも教へといたけれど……。
常吉　へえへ。そイで、もしもまだ西河岸の奥さんがお見えンなつてませんでしたら、一旦自動車は歸しちまつてよろしいんですね？
とき　それアさうよ。……そイでね、あんたは、すつかり荷物を積み込んぢやつたら、よく火の元に氣をつけて、大家さんに聲をかけといて、そイから、その荷物自動車のてつぺんに乘つかつて來なさいよ、ね？（微笑）まずは、先に電車でよこしてくれてもいゝわ。
常吉　往きは、一人でふんぞり返つて行ける代り、歸りがトラックと來て、おまけにそのてつぺん……。
とき　よくあるわよ、あんたみたいな人が、荷物のてつぺんにとまつて……。
常吉　とまる？　まるで蠅ですね。
とき　蠅よ。蠅とまるすべる、つてね。滑り落ちないやうに氣をつけていらつしやいよ。
常吉　おや／＼。ひどいことになるもんだな。
とき　愚圖々々いつてないで、早く行つてらつしやい！
常吉　へ。
（おもてにとんで出て、下手より退場。とき、きよに何か云ひつけたりしてゐる間もなく、常吉、駈け戻つて來る。）
常吉　西河岸の奥さんがお見えなさいましたよ。
（續いて、みつ登場。風呂敷包を持つ。丸帯、大島の袷、一重羽織。）
とき　（縁先より伸びあがつて、手招きしながら）こつちからいらつしやい、こつちから！
みつ　（庭木戸からはいり）どうも、おそくなつてすみません。
とき　ほんとよ！　朝早くから來る、なんてつといて、一體今時分まで何してたのよ！
みつ　ほんとにすみません。今朝になつて、急にうちのが、名古屋まで行つて來なくちアならないなんて……。

とき　(常吉が出て行く後姿を見て呼びかける)　ちよいと、常さん！　ちよいと待つてよ。
常吉　へえ。(戻つて來る)
とき　(臺所の方へ)　ねえ、きよ！　さうしたら、お前も一緒にあつちイ行つて、あとの荷造りの方に廻つておくれな。その方が早く片づいちまつていゝし、それに、大家さんには、矢つ張りお前が顏を出しといた方がいゝわ、常公ぢア、なんだか、きちんとしさうもないからね、さうおしなさいよ。
きよ　(この臺詞の間に臺所から出て來て、みつにも挨拶し、傍輩に)　今、相原さんの奥樣に、お茶でも差上げませうと存じまして……。
とき　いゝわ、お茶なんぞ……。
みつ　えゝ、どうぞもうそんな……。
とき　だからさ、こつちのあと片づけは、幾ン日かゝつたつていゝんだから、總がゝりであつちをやつておしまひよ。ね、その方が、ものがきちんとしていゝからさ。
みつ　尤も、うちの小僧も、一人あつちを手傳はせて置きましたけど……。
とき　あれでせうッ　あの、薩摩ッぺえでせうッ　あんなの駄目よ！　(きよの方へ)　いゝよ、こつちは、二人で暢氣にぼつ〳〵片づけものでもしてるから、矢つ張りお前、行つて來ておくれよ。
きよ　はい。畏りました。
(挨拶なし、割烹着をぬぎながら、水口より出、下手、玄關の裏にぬけて、常吉と前後して急ぎ足に退場。)
みつ　(沓脱よりあがり)　いゝうちだわね、ちよいと見せて貰はう。
とき　どうせお宅樣のやうな具合に、手廣くは參りませんがね……。(と、笑ひながら先に立つて案内する)
みつ　まア、いやなお姉さん。(部屋を通りぬけながら)　八疊、六疊ね。こゝは吹き通しだから、きつと夏は涼しいわよ。
(兩人、臺所から、裏側の(看客には見えない)女中部屋、湯殿など見歩きながら、大體次のやうな捨臺詞よろしくあるべし。)
(みつ「この女中部屋は少し暗いわね」　とき「でも、寢る時だけだから」　みつ「それアさうね」　とき「ちよいと、見てごらんなさいよ、可愛いゝお湯殿でせう？」　車戸の音「まあ、利口に建つてるわねえ」等々。)
(二階にあがり、おりて來て、八疊、六疊を見歩く間も、よろしく捨臺詞。おりて來て、住みつかば、茶の間になるべき八疊の間に腰を据ゑる。)
とき　座蒲團も、どつかに來てる筈なんだけど……。

みつ　あら、引越のお手傳に來て、坐り込んじまつちやア仕樣がないわ。（持參の風呂敷包をとき、餅菓子の箱か何かを取り出し、茶箪笥の中段に入れながら）あとで、みんなのおやつにでも使つて頂戴。

とき　何？　なに持つて來てくれたの？

みつ　駄目よ！　姉さんなんぞに食べられるもんぢアないわ。（云ひながら、まづ羽織をぬぎ、包から取り出した割烹着を着、手拭を姐さん被りにする）

とき（それと見て）ものものしくも出立つたもんね。そんなに、あんた、働く氣で來たの？

みつ　それアさうよ！　……さア、なんかしませう。一體、何から手をつけたらいゝの？

とき　そんなに慌てなくつたつて、みんなが來てからでいいわよ。

みつ　相變らず暢氣ねえ、姉さんは。

とき　だつて、もうこゝイ來ちまへば、何もそんなにガチヤガチヤすることはないんですもの。まア、お坐んなさいなね。

みつ　えゝ、でもね、たゞぽかんとしてたつて仕樣がないから、なんか、坐りながらでも出來るやうなことない？

とき　さうね、ぢア、鏡臺の抽斗か、机の抽斗でもお片づけなさいよ。

みつ　折角來て、なんかしなきやアね……。

（鏡臺を持ち出し、その抽斗や開きのなかに、新聞紙でくるんで詰め込んである化粧品その他を出し、ほぐして入れ變へたりする。ときもそこへよつて來て、鏡に顏をうつし、ちよつと前髮を揃へてみたりしながら。）

とき　あたしもなんか被らうかしら、そイでないといかにも怠けてるやうに見えていけないから。（と手巾を出しふはりと髮の上に載せるが）へんね、よさう。（と、すぐまた取る）何しようかな。あたしも、なんか働くことないかな。

みつ　お姉さんは、まア、そこに坐つてらつしやればいゝわ。

とき　よし！（と、男のやうな調子で）久振りで、ひとつ、背なかの上に乘つかつてやらうかな。

（みつの肩に兩手を置き、ぴよいと飛びあがつて背なかの上に坐る。）

みつ（上體をぐらつかせながら）いやよ！　苦しいから降りてよ！

とき（降りて、鼻を突き合せんばかりに坐る）一體、君は、なんで來たんだい？

みつ　どこに？

とき　こゝにさ。

みつ　電車で來たわ。
とき　それにしちやア早かつたね。
みつ　お姉さんが出かけると、ほんの一足違ひだつたんですつて。
とき　態々こつちから自動車を迎ひにやれば、その間に電車で來る、萬事さういふ半間な人たんだから……。
みつ　だつて、仕樣がないぢやアないの。
とき　さうさ。これぱかりは、焼き直さなけれア仕樣がないさ。
みつ　なんだか、とても御機嫌なのね。どうしたの？
とき　どうもしやしないよ。
（ふと、同じことに關する考へが、二人の胸へ落ちかかつたやうな間。）
（どこからともなく、樫の落葉が庭先へ舞ひ込んで來る。）
みつ　だけど、ずゐぶんだしぬけで、あたし吃驚しちやつたわ。
とき　（心持は違つて來てゐるが、なほ冗談の調子を捨てない）いゝぢやアないか。
みつ　それア、いづれ姉さんのこつたから、何遍も何遍も、よウく考へた揚句のことだらうとは思ふけれど……。
とき　どういたしまして。浮氣アその日の出來心つてね…

みつ　いゝえ、眞面目にさ、……表町さんだつて、あんないゝ方なんだし、それに、なんてつたつて、十年近くもお世話になつて來てゐるんだし……。
とき　（なほ冗談佝調ながら、いくぶん氣を入れて）あたしはね、あなたより餘計お正月をして來てゐるんですよウ。
みつ　それアさうにきまつてゐるけど、うちのだつて、ずゐぶんに心配してたわ。いきなり電話で、明日引越すの、表町さんとはもうなんでもなくなつちやつたのつて、何も彼も一緒こたなんですもの。
とき　（やつと少し眞面目になつて）さうさ。またそのとほりなんだもの。
みつ　（云ひ憎いのを、一生懸命に、姐さん振りを取つたりしながら）それアね、あたしもね、お姉さんのことで、だいぶん前から、ちよつと聞いてないわけでもないのよ。だから、なにか事が起らなきやアいゝがと思つて、蔭ながら……。
とき　（急に、むきになつて憤る）生意氣いふのね、あんたは！　何が蔭ながらよ！　蔭ながらなんてことは、目上の人が、心持にうんと餘裕があつて、どうもあれにも困つたものだけれど、云へば云ふでどうだとかかうだとかッて、いふやうな時に……。

みつ　いゝえ、お姉さん、あたし、決してそんな……。

とき　ぢア、はつきり仰有いなね。あたしが、間島さんを好きンなつて、表町の方を斷つたことが、つまりあんた方の氣に入らないつて云ふのね？

みつ　氣に入るも入らないも……。

とき　そんならどうだつて云ふのよ！

みつ　間島さんて方がどんな方なんだか、それアあたしたちはなんにも知りませんよ。ですけど、表町さんの方なら、永い間、それアもうほんとに、はたで見るさへ羨しいほど、何から何まで氣もおつきなさるし……。

とき　知らないことに、なんだつてそんな、餘計な口出しをするの！

みつ（怨めしげにときを見詰める）

とき　あたしはあんたの姉さんよ！

みつ（一生懸命涙を抑へて）ですから、そのたつた一人のお姉さんが……。

とき　あたしの行末が案じられるつて云ふの？　え？　妹のあんたが……？

みつ　さうあんたみたいに、何もかも姉さん姉さんで……。

とき　えゝ、云ふわよ！

みつ　あたしばかりぢアないわ。うちのだつて、叔母さんだつて……。

とき　うるさいのね！　そんな人たちが、千人萬人よつてたかつてかゝつて來ようと、ちつとも、びくともするんぢアないわ！　ほんとにうるさい人たちつたらないのね！

（みつ、亢奮から、だん／＼片づけものの手附が荒つぽくなつて來る。その時、机の抽斗を取り落す、帳面、書簡箋その他いろ／＼飛んで出る。「あら」と、低聲に呟き、拾ひ込むうちに、小紙片を取りあげ、讀む。）

とき　なに？（と、窺き込む）

みつ　まア！　表町さん、あんまりお氣の毒だわ！

とき　なによウ！（ひつたくつて見る。吃驚する）あら、なアに？　これは。

みつ　三千圓の小切手よ……。

とき　まア、いつの間にこんなもの……。（と、當時の様を思ひ出さうとする眼差）

みつ　知らなかつたの？

とき　あたりまへぢアないの！　あんたは、へえ、さやうですかつて、あたしがこれを受け取つといたと思ふの？

みつ　さう、知らなかつたの！　ぢア、姉さんが階下イでも行つてる間に、そうッと入れてお歸ンなすつたんだわね。

とき　さうなんでせうね。（有繋に少し凋れて）まア、ちつとも氣がつかなかつたわ。

みつ（しんみりと）姉さん、だから、あんた、悪いこと云はないから、もう一度考へ直してみたらどう？ それアね、よしんば、御夫婦の間にだつて、時にやア喧嘩といふこともあるんだし、今度のことなんぞまつたく一時の氣迷ひだと思ふわ。つまり、魔がさしたとでもいふんでせうか……。ですから、あたし、もう一度お姉さんの方からあやまつて行つて……。もしなんなら、うちのなり、あたしなり、喜んでお使ひに行くわ。さうすれば、――まだ今のうちなら、世間にばあッとしたつてわけぢアないんだから、表町さんだつて、どんなにお喜びなさるかわからないし、あたしたちの顏も立つわけですからね。ね？ さうなさいよ、ね？ お姉さん！

とき（おつと空に眼を据ゑたまゝ）あんたは、こんなことよく知つてるけど、一體この小切手つてものは、受取つた方で銀行に出しにさへ行かなければア、お金はもともとどほりその人のもんでゐるんでせうね？

みつ ええ、それアさうよ。

とき（シュッ〳〵と、惜げもなく小切手を破り捨てる）

みつ あら！ 姉さん！ あんたつて人はまア……。

とき（手を出さうとするのを、すばやく、くる〳〵ッと掌の平に丸めて、庭に捨てる）

みつ 何が氣に入らなくつて、そんな面當がましいことをするの？ 實際、あんたつて人の我儘にも呆れるわね！ ほんと云へば、うちのだつて、叔母さんだつてさう云つてるわ、今度のことばかりは、いくら贔屓目に見ようとしたつて、どこまでもお姉さんがよくないつて。大不贊成よ！ それアあたしは、お姉さんの氣持だつて、滿更わからないわけぢアないし、さう一概にも云へないとは思つてるんだけど、……間に立つて、ほんとに困つちまふわ！

とき さう、それア惡かつたわね。あたしが困るのは、いくら困つたつて、これア自業自得で仕樣がないけれど、あたしのために、あんたを困らしちア氣の毒だわ。だからもう決して間になんぞ立たないで頂戴！ 夫婦ときやうだいの間ですれば、それア無論御亭主の方につくのがあたりまへなんだから、いつでも相原さんと一緒になつて、あたしの惡口を云つてれアいゝぢアありませんか。なまじつか、間になんぞ立つて、困られたりしちア、却つてこつちが迷惑するわ！ お嫁に行つたからには、なんでも女は、御亭主にさへついてれアいゝんだから。

みつ また始つた……。

とき また始つたつて、それに違ひないぢやないの。それア、あたしも同罪なのよ。あんたを妹だと思へばこそ、あたしの嬉しいことなら、なんによらず、あんたにも喜

んで貰へるものとばかり思ひ込んで、自惚きつてたのが大間違だつたのよ。だけど、もう今日といふ今日は目が醒めたわ。今後はあたしの方でも、決してこんな馬鹿げた夢はみないから、あんたの方でも、どこまでも他人のつもりでゐて頂戴！　他人なら、何をどうしようと、別段あんた方の顏にかゝはることもないんだから、あんた方の方でも氣が樂だらうし、あたしだつて、のう〳〵としたもんだわ！

みつ　姉さん！　あんたそんなこと云ふもんぢアないわよ！　ですから、あたしは、姉さんの氣持だつて解つてゐる……。

とき　いゝえ、解る筈ないわ！　だつて、あんたなんぞに、ひと言だつて相談した覺えもないし、惚話一つ聞かせたこともないつもりよ。それが解つたら大へんだわ！

みつ　だつて、それア、いくらあたしが馬鹿だつて、少しは解りますわ。先刻あたしが來た時みたいな、あんな御機嫌のいゝ姉さん、あたし驚てよ。そんなにまで喜んでなさるのかと思つて、それアあたしだつて、ずゐぶん嬉しかつたんだけれど……。

とき（ぐいと胸にはこたへるが、どこまでも意地を強く）それアあたしが馬鹿だからよ。くだらないことに、子供みたいに嬉しがつたりして、ほんとにみつともなかつたわね。

（表通に、自動車のとまつたらしい響。）

みつ（急き込んで）姉さん！　あたしが惡かつたんだから、かんにんしてね？

とき　とんでもない！　あんたの云ふことは一々御尤よ。ひとつも間違つてやしないわ！

みつ　そんなこと云はないで……。ほんとにあたし、生意氣ばかりいつて……。

とき　兎に角、あたしは、今日限り妹なんぞないつもりで暮すわ。親もなし、きやうだいもなし……、その方がよつぽどさば〳〵してゝいゝことよ！

（——と、立ちあがる時、きよ、ます、常吉、小僧、先刻のとは別の運轉手、ガヤ〳〵と荷を運び込んで來る。とき、玄關に出て、さも快濶げに、——と云ふことは、先刻の心からの快濶は失はれて！——一同を勞ふ。）

とき　すつかり載りきつた？

常吉　へえ、まアどうやらかうやら。

とき　そイで、お前たちも（と、女中たちに）みんな一緒に荷物のてつぺんにとまつて來たの？

きよ　いゝえ、わたしどもは、一足先に出まして、電車で參りましたんですけれど、丁度その四角のところで、後方から來る自動車が見えましたもんですから……。

とき　あゝ、さう！　それア丁度よかつたわね。

（この間に、みつは、大急ぎで涙を拭きとり、ちよつと鏡を覗いてみたりして、家のなかにどや〳〵と女中たちがあがり込んで來ると同時に、急に鏡臺を隣の方へ持つて行くなど、さも忙しく働いてゐるやうに見せる。）

（男たちは、玄關や縁先へ、どん〳〵荷物を持ち込んで來る。小僧は、ときの前に、ピヨコリと頭をさげる。）

とき　あゝ、どうも御苦勞樣！　わからないことは、みんなに訊いてね……。

（以下、あつちこつちで、騒然と捨臺詞を云ひ合ひ、立ち働く。）

（例へば、女中「奥樣、これは……？」とき、「なアに、それ？」女中「お掛軸ばかり一緒になつて居りますんですが……」とき「あゝ、さう。ぢア、二階だわね」或はまた、とき、女中に「お前たちのものは、なんでもいゝから、ひとまづ三疊に擲り込んどいてね、あとでゆつくりおほどきなさいよ」或はまた、とき、常吉に「お前さん。あとで手がすいたら、臺所に棚を吊つてやつておくれよ。板が足りなかつたら、どつか近所で買つて來てね」常吉「へえ、畏りました」或はまた、水口に半身を見せる御用聞きと、女中のやりとり、「ええ、三河屋でございますが、お米、味噌、醤油、お酒の御用、罐詰類もございますから……」女中「今まだ取り込んでますからね、いづれ落ちついてからゆつくり……」等々。）

（二階、階下、水口、玄關、縁先、あつちでもこつちでも、主にときを中心にして、捨臺詞が重り合ひ、やや暫く騒ぎが續くなかに、みつ一人が、仲間はづれのやうな態にて、まごついてゐる。たま〳〵ときと擦れ違ひざまに、「姉さん、これは……」などと、手に持つたものに就いて、何か訊かうとするが、ときの方では、素ッ氣なくひつぱづして、ほかの者にばかり口を利く。）

きよ　（臺所から）　奥樣、お茶をお淹れたさらなかつたんですか？

とき　あゝ、どこにお茶があるんだか、……めんどくさかつたから。

きよ　あら、よくお湯が沸いて居りましたのに……。

とき　さうお。たくさん沸しといておくれよ。もう少したらおやつにするからね……そイから、先刻たのんどいたあれ、買つて來てくれたでせうね。

きよ　は。往き道に、自動車で乘りつけたもんですから、あすこの人が、驚いて居りましたわ。

とき　序に、常公と一緒に、二つ三つつまんで來たんぢや

アないの？

きよ　あら、奥様……。（笑ふ）

みつ　（そばへよつて來て、庭を指し）姉さん、あれ、あんなことしといていゝの？

（とき、見向きもしずに臺所の方へ去る。みつ、涙ぐみ庭へおり、先刻ときが投げ捨てた小切手を拾ひあげ、更に細かに千切り、塀のそとに擲らうとしてよし、うちへあがつて臺所の方へ行く。とき、そこから出て來る。）

みつ　（ちよつと掌の平を開いてみせて）燃しちやつた方がいゝでせう？

（とき、すまして八疊の方へ行く。みつ、一旦臺所へはいり、出て來ると抑へがたき涙を、人目のない二階へ持つてあがる。）

（この間にも、他の者の捨臺詞は、依然綾を織るが如くなるべし。）

（みつ、二階座敷の眞中に、べたんと坐つて泣く。）

（これより、ときは、平氣を裝ひながらも、時々二階を氣にするこなし。）

とき　（ますに）これ、二階だよ。どこの隅でもいゝから、置いて、すぐおりといでよ。

（ます、文庫のやうなものを二階へ持つてあがる。）

みつ　（泣顔を反けて立ち）なアに？

ます　いゝえ。（と、そこらに置いてすぐおりる）

とき　ますウ！

ます　はい。（と、そばへよる）

とき　（背を向けたまゝ低聲に）相原さんの奥さん、二階にいらつしたかい？

ます　はア。

とき　何してたこと？

ます　えゝ、（困つたやうな笑ひ顔で）わたくし、すぐおりて參りましたから……。もう一度行つて、見て參りませうか。

とき　馬鹿！　いゝんだよ。

常吉　（庭先から）荷はすつかりもうおろしましたが、トラック、歸つて貰つてよろしいんでせうか。

とき　あゝ、ちよつと待つて！（と、帶の間から銀貨入を出し、若干か常吉に渡して）お帳面になつてるんだからね、これは御祝儀だけです、つてさう云つて、歸しツ頂戴！

常吉　へ、畏りました。（と、去る）

とき　（臺所に向つて、やゝ大聲に）きよウ！　荷がすつかり運び込めたつて云ふから、おやつにしようぢやないの。お湯も出來てるんでせう？

きよ　はい。よろしうございます。

（人々、ころしく捨臺詞にて、八疊の前を間に片よせ、眞中を開いて席を設ける。茶道具、皿、折詰の鮓などが運ばれる。みつの持つて來た菓子箱は、ときが自分でそこへ持ち出す。）

（この間に、二階では、いゝ氣持に涙を出したあとのぼかんとした眼つきで、秋晴の空を眺めやつてゐる。スーく と、赤蜻蛉が簷を掠め、柱をよぎつて飛び交はす。）

（階下では、おやつの支度が出來、常吉も小僧も呼ばれて、そとでぽんく と着たものをはたいたりしてから、のこく あがつて來る。）

ます　（ときのそばに來て）　相原さんの奧樣をお呼びして參りませうか。

とき　（鮓を皿に取り分けながら）　あゝ。

（ます、立つて行かうとする。）

とき　あゝ、およいと！　いゝよく。今、あたしが行くから。（常吉たちに）　あんた方、さぞお腹がすいたでせう？　なんでもいゝものを、勝手にとつて食べッ頂戴ね。

常吉　へ。どうも御馳走樣です。

（とき、皿や箸を二人の前に置き、忙しく身を起して二階へあがつて行く。）

（この間に、みつは、欄干にとまつた一匹の赤蜻蛉を見詰めてゐるが、やがてぬき足さし足よつて行き、提へにかゝる。その指先と蜻蛉とが、五寸くらゐの近さに迫つた時、ときが階段をあがりきる。）

とき　みつちやん！　（何氣なく呼ぶ）

（みつ、振り向き、聲をたてるな、といふこなし。ときも、身を竦めてそつと近より、低聲に。）

とき　なアに？

（みつ、左はうしろに廻して、靜に、靜に、といふ手つきをしながら、右で、すばやく赤蜻蛉を提へる。）

みつ　つかまイた！

とき　なアにイ？

みつ　蜻蛉よ！　赤蜻蛉よ！

とき　つかまイたの？

みつ　つかまイたわ！　（羽根を指の間に挾んで、相手の鼻の先に突き出す）

とき　あら、うまいわね！

みつ　赤くつて、姉さん好みね。

とき　あら、いゝわねえ。

みつ　糸、ないかしら。

とき　あるわ。（階下へ向いて、大聲に）　ますウ！　糸もつといで！

ます　（階段のあがり口に駈けよりながら）　はア？　なん

でございます。

とき　糸！　糸！　白でも黒でも、木綿でも絹でもなんでもいゝわ。

ます　はい！（と、とつて返し、そこらまご〳〵して歩きながら）おきよさん！　あんた、針箱知らない？　針箱！

きよ（用をしながら）さア……。

とき（二階から）なんでもいゝんだから早くさ！　針箱がめつからなきやア、……あゝ、今のお鮓の折が結いてあつた紐でもいゝわよ！

ます　はアい！

（急ぎそれを持つて二階にあがる。とき、それをうけ取ると性急に、シウ〳〵とそのひら紐を裂き、二三本繋ぎ合せる。みつ、その先をわがねて、赤蜻蛉の肩を縛りつけ、手をはなす。）

とき　待つてよ！

（と云ふ間も待たず、手元から糸が伸びて、蜻蛉はあちこちへ飛び廻つてゐる。）

とき（喜び勇んで）あら！　飛んでるわ！

（みつ、目のなか一杯に涙をため、下唇を噛んで、その様子を見詰めてゐる。）

ます　あら、ずゐぶん元氣がよろしいんでございますね。

（と、これはひたすら蜻蛉の動きに見惚れる。）

（ときは、子供のやうに、無邪氣に嬉しがる。）

（階下の男たちは、鮓を頰張り、茶を飲んでゐる。夕日の影あか〳〵と、靜に。）

――幕――

春光

時　現代

人
- 老父（七十歳以上）
- 老母（六十歳位）
- その娘　貞子（二十一二）
- 嫁　百合子（二十四五）
- その一人子　一雄（五六歳）
- 下男（五十五六）

景

正面十疊の座敷。當主の居間兼客間。調度よろしくあるなかに、緣側の隅に重ね置きたる小鳥の籠が目立たす。

棟續きながら、小庭を隔てゝ上手に四疊半ほどの中二階、老父の書齋なり。下手に垣、庭木戸、植込。總て山の手のもの靜なる中流家庭の住居の態。

春光あたゝかき朝なり。

氣象者らしき老母、既に中二階の掃除を終り、紫檀の机上に清拭をかけ、あとに筆硯、唐本の類を置き直したり、まめ〳〵しく働きゐる。

下男、竹箒と埃取りを提げて、上手より下手へ庭先を通りぬけて行かうとする。

老母　爺や！

下男　（むツつり者らしく、ろくに中二階の方を見あげもせずに）お早う御座います。

老母　お早う。お前、御隱居樣を……。

下男　はい、裏の畑においでなさいます。お呼びいたしませうか。

老母　いゝえ、いらつしやりどころさへわかつてればいゝんだがね、……それアさうと、（ト、緣側に身を乘り出して、やゝ低聲になり）昨夜、お前、旦那樣のお歸りを知つてたかい。

下男　は、いえ、つい心づきませなんだが……。

老母　お歸りがなかつたんだらう？

下男　さア……。耳門（くぐり）だけあけときまして、ついそのまゝぐつすり寝込んで了ひましたもんですから……。

老母　不用心だよ、お前！　これからは、晩くお歸りの時

は、叩いて起して頂くとも、寝る前にはちやんと締りをしてお了ひなさいよ。

下男　はい。畏りました。

（小腰をかゞめ、下手庭木戸よりはいる。老母もあたりを片づけ終り、障子をしめる。）

（舞臺無人。飼はれたる小鳥、――鶯、カナリヤ、繡眼兒など、長閑に歌ひゐる。）

（「花咲かば告げんと云ひし山里の……」と、中音に謠曲「鞍馬」を口誦みながら、老父上手より登場。當主の居間の緣先に腰をおろして、庭の草木を眺めたりしてから、鳥籠の前に膝行りより、なかを窺く。）

老父　おい／＼。（ト、奥の方へ呼びかけ、返事を待たずに）鳥の餌はどうした。水も替へてないやうだぞ。

（奥にて、はーア？　と問ひ返すやうに答へながら、貞子、襖をあけて出る。）

貞子　お早う御座います。（ト、おてんばに、ちよつと疊に手を突く）

老父　相變らず寢坊だな。これから御飯なんだらう。

貞子　いゝえ、もうとつくに頂きましたわ。

老父　これごらん。（ト、鳥籠を指さして）今朝はまだ餌がやつてないよ。どうしたんだ。

貞子　（意味ありげな微笑）は、今やります。（ト、立ちかける。）

老父　今やりますつて、お前、晴彥はどうしたんだ。めつたに人手に任したことのない、あれの一役ぢアないか。

貞子　（曖昧に）えゝ。

老父　まだ寢てゐるのか。

貞子　さア、どうですか、いまお嫂さんに訊いて參りますわ。

（ト、逃げるやうに奥の襖をあけてはいる。長閑に小鳥の聲。）

（老父、暫く待つてみるが、そのまゝ誰も出て來ない所在なさに、緣よりあがり、室內、當主の机邊、床の懸物、違棚の飾付など、だん／＼に見廻りながら一旦奥へはいり、間もなく中二階の障子をあけて姿を見せる。手焙を前に、銀煙管にて煙草をのみ、新聞を擴げる。）

（貞子、十疊の間の襖を靜にあけて、あたりを窺ひ、うしろを振り向くと、低聲に。）

貞子　だいじよぶ！　もうどつかへ行つてお了ひンなつたわ。

（なほも、庭先の方まで目をくばりながら、座敷にはいつて來る。續いて百合子、鳥の餌を入れたる器を盆に載せて出る。）

貞子　どこイいらつしたんだらう。（ト、縁先にて見廻し、庭下駄に氣がつくと）あら、もうお部屋へいらしちやつたらしいわ。

百合子　（努めて、不機嫌を押し隱したる表情）さう？　でも、まアよかつたわねえ。

（ともぐ＼小鳥の籠の前に蹲踞り、捨臺詞よろしく、餌や水の世話なやく、總て、事に觸れざる態なり。）

貞子　阿母樣、知つてらつしやるらしいわね。

百合子　さう？　どうして？

貞子　なんだか、そんな風な口吻だつたわ。でも、却つてその方がいいかも知れないわ。阿母樣から阿父樣に知れて、一度うんと叱られた方がいゝんだわ。

百合子　さうねえ。（ふと考へた樣へて）でも、まさか、子供ぢやアあるまいし……。（聲き笑）

貞子　そイでも、いくら歳つ張り、可愛がつてはゐるわよ。男つて、存外氣の弱いもんね。わたしなんぞ、阿父樣くらゐ、へとも思つてやアしないけれど……。

百合子　さうでもないことよ。だつて、ずゐぶん圖々しいぢやアないの。先には、どんなに晩くなつても、歸るだけはきつと歸つて來たんだけれど、この頃ぢア、月に二遍や三遍は、きまつて泊つて來るんですものね……。

貞子　へんねえ。一體何がそんなに面白いんでせう。

百合子　だつて、それア……。（云ひ淀む）

貞子　どうして……？

百合子　どうしてつて……。

貞子　お酒に醉ッぱらつて、藝者たちと騷いでるんでせう？

百合子　あら、さうぢやないわ。

貞子　さうお？（ト、しんから驚き）ぢや、何してるの？

百合子　何つて……。

貞子　（やゝ自ら悟るところあるものゝ如く、とんだことを云ひだしたといふやうな、後悔の面持）……でも……そんなことないでせう。

百合子　それアさうよ、好きな人が出來てるのよ。

貞子　あら、そんなことないと思ふわ。

百合子　さうでなくつて、たゞ遊んで、騷いで來るだけのことなら、何もうちをあけるまでのことはないぢやないの。二時にならうと、三時にならうと、その晩のうちに歸つて來られる筈よ。

貞子　だつて、……そんなこと……。

百合子　ぢア、朝までかゝつて、お酒を飲んで騷いでるんだと思ふの？

貞子　（曖昧に）ぢやないかしら……。

百合子　そんな馬鹿なこと！　第一、誰が夜どほしお酒の

相手なんぞしてくれるもんですかね。

貞子　さうかしら。……でも、もしさうだとすれば、ずゐぶんいやなお兄さんねえ。

百合子　でもね、男つてみんなさういふものらしいわ。

貞子　そんなこと……。

百合子　いゝえ、さうなのよ！

貞子　さうだとすれアずゐぶん癪ね！

（この言葉に、百合子、急に胸がいつぱいになり、返事が出來ない。自然、鳥籠を抱ふ手がお留守になり、ガタリと膝から取り落す拍子に、なかの一羽が飛び出し、馴れぬ羽根をはためかして、あたりを二三度舞ひ廻つてから、空高く去る。）

（籠を取り落した瞬間に、「あらッ！」と低聲に叫んだきり、百合子、いかんともなすところを知らず、たゞ惘然とあたりを見送つてゐる。）

（同じくあつけにとられてゐた貞子、急に笑ひ出す。百合子も誘はれて、ちよつと笑ふが、すぐ眞面目になり。）

百合子　あら、大へんだわ！

貞子　（なほ笑ひ續けながら）だつて仕方がないぢやないの。

百合子　いゝえ、歸つてから、どんなに叱られるか知れないわ。

貞子　（それアさうだ、と思ふと同時に、急に笑ひがとまり、眞劍な目つきになる）どうしませうね。

百合子　困つちやつたわねえ。

貞子　全く、お兄さんと來たら、鳥のことつて云ふと、まるで半氣違ひなんだから……。

百合子　あたし、これからすぐ行つて、おんなじやうなのを買つて來とかうかしら。

貞子　だつて、あんなに夢中なんだから、きつとそれアわかつちやうことよ。

百合子　さうねえ。どうしたらいゝでせうねえ。

貞子　いゝことよ。構やアしないぢやないの。どうせ兄さんだつて惡いことしてるんですもの。

百合子　でもねえ……。

貞子　いゝわよ。いゝ懲戒だわよ。

百合子　それもさうだけれど……。

（奥にて、「貞子！　貞子や！」と老母の呼ぶ聲。「はい」と答へ、すぐ立ちあがつて、行きかけながら。）

貞子　いゝから、ほつときなさいよ。

（ト、奥へはいる。）

（百合子、ひとりぢツと考へ込むうち、だん／＼ヒステリカルに亢奮して來る。遂に、やゝ發作的にからの

鳥籠を傍に投げ捨て、他のいくつかも、片ッぱしからあけ放ち、バタバタと鳥を追ひ逃して了ふ。それから急に袂に顔を埋め、聲を忍びながらも、烈しく泣きだす。）

（飛びたつた小鳥のうちの一羽が、中二階の欄干近くに枝をさし延べてゐる老梅に舞ひ戻つて來て、冴々と囀く。この以前より、机に向ひ、熱心に唐本の一つに讀み耽つてゐた老父、ふと心づき、老眼鏡の上から、ぢッとそれに眼を注ぎ、さも滿足げなり。）

（貞子、戻つて來て、泣き沈んでゐる嫂の樣子を見、驚きてそばへよる。）

貞子　あら、嫂さん、どうしたの？

百合子　（更に悲みを深くする）

貞子　いゝぢやないの、あんな鳥の一羽や二羽……。（云ひながら、傍の鳥籠が一つ殘らずからッぽになつてゐるのに心づき）あら！　まア！　どうしたの？

百合子　（いよ〳〵泣く）

貞子　みんな逃しちやつたのね？（ちよつとの間、あつけにとられてゐる）

百合子　あたし……、あたし……。（嗚咽のために言葉を成さない）

貞子　いゝわよ！　構やしないわよ！　いゝ氣味だわ！　こんなこつちアまだ〳〵たりないくらゐだわ！　ほんと云へば、もつとひどい目に會してやつたつてもいゝんだわ。……ね？　だから、泣いちア駄目よ！　いゝから、歸つて來ても、知らアん顔して、えばつていらつしやいね？　ね？　ね？　……さうよ、あたりまへよ、このくらゐのこと！

百合子　（泣き聲が高まらうとする）

貞子　駄目々々！　阿父樣のお部屋まで聞えるわよ。……みんなお兄さんが悪いんですもの。ちつとも泣くことなんぞありやアしないわ。

（奥にて老母の聲、「一雄や！　一！　一ちやんはどこイ行つちまつたんだい？」と呼びながら、半紙に包んだ菓子を持つて出る。）

（百合子、庭の方へ顔をそむけて、慌たゞしく涙を拭く。貞子は、手早く、亂雜になつた鳥籠を片づけ、積み直し、その前に座を占めて、なかの見えないやうにする。）

老母　（何事も心づかず、近より來る）一ちやんどこイ行つたか知らないかい？

貞子　なんだか、玄關前の方で聲がしてたやうですよ。

老母　あゝ、さうかい。（ト、行きかゝり、ふと、片づける間のなかつた餌道具のひつくり返つたのを見つけて）まア、お前さんたちは、何をしたんだい？　そこらぢう

水だらけぢアないか。

貞子　よござんすよ、いま拭いときますから。

老母　百合さん、お前さんもまた、ひとが來て口を利いてるのに、そつぽばかり向いてゝ……

百合子　（泣いたあとの、鼻の詰つたやうな聲で）　はい、どうもすみませんでした。（ト、伏目ながら、體を振り向ける）

老母　どうしたんだい？　お前さんたち喧嘩でもしたのかい？

（二人とも、默つて目を伏せてゐる。老母は、緣近く、座敷のうちに坐る。）

老母　（やゝ優しく）　百合さん、何をお前さん泣いたんです？

百合子　（頸垂れたまゝ、ほら／＼と膝の上に涙を落す）

老母　貞子、お前さんがまた何か……。

貞子　なんでもないんですよ……。

老母　なんでもないつて、……そイぢア百合さんは、なんだつて泣いたりするんです。

（言葉のうちに、ふと貞子の背後の鳥籠に目をつける、貞子は、上半身で、どうにかその視線を遮らうとする。）

老母　ちよいとどいてごらん。（ト、貞子を押し退け、鳥[illegible]りよつて）　おや！　これアまアどうしたつて云ふんだらう？

百合子　（決然として）　わたくしが、みんな逃して了ひましたんです。

老母　（驚き、眼を瞬つて振り向き）　なんだつてさ。

百合子　（無言）

貞子　餌をやらうとして、ついはずみで……。

老母　だつて、それにしちやア、お前、一つ殘らずぢアないか。

百合子　繡眼兒だけはついだつたんですけれど、あとは……

老母　なんだつてそんな亂暴なことをしたんです。日頃のあんたにも似合はない……。

貞子　そんなこと仰有つたつて、阿母さん、もとの起りはと云へば、お兄さんが惡いんですもの、お嫂さん一人ほッたらかしといて、自分は勝手放題……。

老母　あんたは默つてらつしやい！　あんたの知つたことぢアないぢアありませんか。……昨夜靖彥が歸つて來なかつたくらゐのこと、あたしだつてちやアんと知つてます。それア靖彥が、この頃ちよく／＼うちをあけるつてのも、決して褒めた話ぢアありませんけれど、さうだからつて、その腹いせに、なんの罪科もない飼鳥にあたり散すなんて、そんな意地のわるい仕打つてのがありますか。

貞子　鳥に當り散したりなんぞしやアしませんわ。もともとお兄さんが、台所でいけないことばかりなすつて……。

老母　ですからさ、あんなに大事にしてゐなさることを知つてながら、それをみんな逃しちまふなんて……。それくらゐなら、靖彦が歸つて來た時、擲つなり喰ひつくなりした方が、まだしもわけが分つてゐるけれど、知らない間に、あれほど大事にしてゐなさるものを、一羽殘らずゐなくしちまふなんて……見てゝごらんなさい、明日ッからうち中どんなに淋しくなるか……。いつかお隣の藁屋から火事が出かゝつた時だつて、靖彦が一番先に持つて出たのは、何んだと思ひます。——この鳥籠だつたぢやありませんか、お前さん達だつてさうでせう、まだ一雛の生れなかつた時分には、それこそほんとに、懐に入れて抱いて寝ないばかりにして可愛がつてたもんぢやありませんか。第一、あの不精なお祖父様が、毎朝御自分で裏の土手から菜を採つていらつしやるほどのお慰みになつてゐたんぢやありませんか。……いくら腹が立つたからつて、あんまり自分勝手な仕打だと思ひますよ。少しははたの人のことも考へて見たらどうです。ほんとにあんたにも似合はない、無考なまねをしてくれたもんですね。

貞子　だつて、さう仰有つたつて、それア阿母様、片手落ですわ。第一に、お嫂さんを、そんなことしないではゐられないやうな氣持にした、そのお兄さんといふ發頭人を差し置いて、お嫂さんばかり悪いやうに仰有つたつて……。

老母　ですから、靖彦の方は、歸り次第お祖父様に、嚴しく叱つて頂くつもりですよ。そんなこと、決してわたしは、自分の子だからどうの、よそから來た人だからかうのつて、そんな差別はつけやしません。お前さんは、默つてひつ込んでれアいゝんです！

（この以前より、だん／＼聲高になつて來た老母の聲に、中二階の老父は耳を傾けてゐるが、この時奥へ廻つて、そこに立ち現はれる。）

老父　なんだな、お磯！　朝ッぱらからガン／＼みつともないぢやないか。

老母　いゝえ……。

老父　いゝえぢやない！　百合が鳥をみんな逃しちまつたつて云ふんだらう。いゝぢやないか。欲しかつたらまた買つて來ればいゝんだし、そのくらゐのこと、何もそんなにガミ／＼云ふにアあたらないぢやないか。

老母　でも、あんまり、することが女らしくありませんから……。

老父　何が、何が女らしくないんだ。至極女らしいぢやアな

いか。お前だつて、若い時分には、よくさういふ八當りをしたもんだ。同じことでも、物を投げつけて毀したりするよりも、生き物を放してやる、つまり放生會だ。咎めるどころか、結構なことだ。つい今しがたも、俺の部屋の前に差し出した梅の枝に、繡眼兒が來て、可愛らしく啼いてたつけが、人怖しない様子が、どうも飼はれてたやつに違ひないと思つて眺めてたんだ。いかにも嬉しさうに、もの珍しさうに、枝から枝へ飛び交してゐた。いま思へば、百合が放してやつたうちのどいつかだつたんだ。……靖彥が歸つて來て、愚圖々々いふなら、俺からよく解るやうに云つて聽かしてやらう。なアに、飼ひたかつたら、またいくらでも買つて來るさ。

（百合子、しく〳〵とすゝりあげる。）

（老母は穩に首を垂れてゐる。）

（貞子は、心ひそかに凱歌を擧げてゐる。嬉しさうである。）

（下手、植込の枝にガサ〳〵と音をたて、護謨の彈力を利用した玩具の飛行機が舞ひ込んで來、カチヤりと地面に衝突する。）

（人々驚いて見返る。）

（同時に、一雄、庭木戸の扉を突きあけ、驅け込んで來る。）

老父　そーら、飛行機が墜落したぢアないか！

一雄　うゝん、だいじよぶなんだよ！

（時に、下手玄關前の砂利場に、自動車の乘り込んで來た音、警笛。）

一雄　やア、パヽだ、パヽだ！　パヽが歸つて來たんだ！

（ト、飛行機をひッ掴んで、庭木戸より飛び出して行く。）

（老父ののびやかなる笑聲。）

――幕――

正體

時　現代

所　村

人

お市（三十七八歳）

太吉（十一二歳）

お花（八九歳）

宇川（三十四五歳）小學校教員

第一場

景　單調な村道。九月の曇つた日暮方。舞臺空虚。ほどよく蟲の音をあしらふ。

お市、邪慳な相、小金のある百姓の女房の打扮ながら、どこかに酌婦あがりらしい、いやらしさを見せる。小ざつぱりとした身なりをさせた娘お花の手を引いて、上手より登場。五六歩おくれて、太吉、妹お花とは比べものにならぬみすぼらしき身なりにて、しよぼ〳〵とついて出る。顏色蒼白く、痩せ衰へてはゐるが、怜悧の相、兩手に持ち切れぬほどの風呂敷包を抱へ込んでゐる。

お花（甘えて）阿母アおらもうくたぶれちやつた。

お市　なんだね、もうついそこにうちが見えてるぢやないか。辛抱おしなね。

お花　いやだア。おんぶ……。（手を繋いだまゝ無理にしやがんで了ふ）

お市　さアもう一足だアね。花ちやんは利口もんぢアないかよ。ね、もうちつとだから歩きなよ。

お花（鼻聲になる）いや〳〵、いやだア。

お市（子に甘く）よし〳〵。ぢア、しやうがない、阿母アがおんぶしてつてやらう。太吉、お前これを持つてきな。

（ト、兒への言葉に急に嚴しく、振り向いて、左に提げた貧乏德利を渡さうとする。太吉、兩腕の荷に、ぎごちなく手先だけを出し、受けとらうとする。その間にも「よう、阿母ア、早くおんぶつたら」などゝ、繋いだ手を振り動かしたりするお花の方へ氣を取られな

がら、後手に渡した徳利が地上に取り落される。

お市　あれ！

（ト、お花の手を振り放し、慌てゝ拾ひあげ、指をすべらして、もう一度取落す。前に栓の拔けた徳利は、それで完全にからになつて了ふ。）

同右　間拔め！

（いきなり太吉の頬へ平手でピシャリと喰はす。太吉ちよつと恨めしげに見上げる。）

同右　見ろ、この馬鹿野郎が！　折角のうまいお酒を、みんな泥に飲ませちまつたぢアねえか。

（胸ぐらを把つて小突く。）

太吉　（心弱くすぐ泪聲になつて）堪忍しておくれよ、阿母さん、ついうつかりしたもんで……。御免なさいね……

お市　こ、御免ですむと思ふのかよ。今日びの高いお酒を、これも、手前のやうなうつかりもんに持たせたら、どんなまた粗相をしやがるか知れねえと思へばこそ、阿母アが、重い思ひをして、えツちらおツちらこゝまで提げて來て、ついもううちと目と鼻の近くまで來てから……。この駑畜生め！

（力に任せて突き飛ばす。太吉、思はず携へてゐた荷を放り出して、後にぶッ倒れる。が、すぐ起き返り、大地に手をつき、一生懸命涙をこらへて。）

太吉　すみません、阿母さん、ついあたいが……。堪忍してください。御免なさい、御免なさい。

（それは耳にもかけず、お市はなほも二つ三つくらはす。）

お市　なんだ、御免とさへ云やアすむかと思つて、二言目にはピイ／＼云つてあやまりアがつたつて、さう／＼は勘弁ならねえぞ。ほかになに一つ樂みのねえ阿母アの、大事な大事な寢酒を、はツと思ふまにふいにしちまやアがつて、それが何が孝行息子だ。うはべばかりいやに神妙らしくこしらへくさつて、子供の腹さへ見透せねえやうな村の衆や、學校のへツぽこ教員なんぞをいゝやうに丸めこめやアがつてからに、孝行息子だなんぞと、とてつもねえ評判を立てられりやアいゝかと思つて……。世間はそんなことで誤魔化されようが、この阿母アにやちやんと解つてるぞ。手前は親を恨んでるんだらう。子供のくせに、腹では恨めしく思ひながらも、繼母だから仕樣がねえなんぞと、惡く諦めをつけたりしてゐやアがるんだらう。

太吉　阿母さん、そ、そんな……。

お市　いゝや、駄目だ。いくら手前が、うはべだけ神妙らしくしてみせやアがつたつて、親の眼までは瞞着しきれやアしねえんだ。ちやアんと解つてゐるんだ。もう／＼

今日といふ今日は、ほんとに堪忍ならねえからさう思へ！

（土足にかけ、なほその上にも打擲する。太吉泣きながら詫び入る。捨臺詞よろしく、折檻してから）

同右　手前のやうなやくざものは、どこへでも行つちまへ！　おらアもう子とは思はねえから……。さア、花ちやん、歸らう。

（ト、あたりに落ち散つた風呂敷包を拾ひ集め、呆氣にとられて佇んでゐるお花の手を引いて花道へ行きかかる）

同右　ほんとにあんなふて〴〵しい野郎つてあるもんぢアねえ。花ちやんは、あんなやつ、もう決して兄さんだなんぞと思ふんぢアないよ。

お花（迎合的に頷いて）兄ちやん馬鹿野郎だね。

お市　あゝさうだとも。お前そんな、兄ちやんなんて呼ぶことがあるもんかね。太吉の野郎で澤山だよ。

お花（振り返つて）太吉の馬鹿野郎やアい。ざまアみろ。

お市　さうだ〳〵。もつと惡態をついておやりよ。

お花　馬鹿、大馬鹿野郎、馬鹿やアい。

（ト、振り向き〳〵罵りながら向揚幕へはいる。）

（太吉、地に轉び伏したまゝ泣いてゐる。だん〳〵薄暗くなつて來る。やがて、體の痛みをこらへて立ちあがり、しく〳〵泣きながら、下手へ行きかけるが、その時、ふと、足もとの貧乏徳利に氣がつき、拾ひあげて、恨しげに見詰める。悲しみが新たに湧き起つて來る。力なく投げ捨てゝ、またワッと泣き出す。）

（宇川、田舍の小學校の教師らしい詰襟の洋服にて、下手より登場。すぐに太吉を認め、つか〳〵と側へよる。）

宇川　おい、宮崎、どうした。

（いきなり聲をかけられ、吃驚して泣きやみ、思はず逃げ出さうとする。）

同右　おい、ちよつとお待ち〳〵。一體、今時分、こんなところにたつた一人で、どうしたと云ふんだ、え？

（やさしく肩に手をかけ、顏をさし窺く。太吉も懷しげに見あげるが、すぐその目を伏せて了ふ。）

同右　まア、お前、泥だらけぢアないか。（着物をはたいてやりながら）どうしたんだ、轉んだのか。

（太吉、頷く。）

同右　なアんだ、轉んだくらゐのことで、そんな往來なかで泣いてるやつがあるもんか。そんな弱いことつてあるもんか。なア、さうだらう、宮崎。（云ひながら落ちてゐる德利に氣がつく）あゝ、これアなんだな、酒を買ひにやらされて、歸りにおツことして零しちまつたんだ

な、さうだらう。それで泣いてたんだらう。

（太吉、しく／＼泣き出す。）

同右　あゝ、うちへ歸つてさう云つたら叱られるだらうなア。よし／＼、先生が一緒に行つてあやまつてやらう。な、さうしよう。

太吉（慌てゝ）先生、それだけは御免なさい。

宇川　えッ。なぜ？

（太吉、口ごもる。宇川、はゝアと思ひ當つて、ひとり頷く。）

同右　よし／＼、ぢア先生は行くまい。（間）ときにお前、この頃なんか心配ごとがありやしないかい？　遊び時間でも、お前ひとり目に立つて元氣がないし、なんか始終かう考へ込んでゐる容子だが、心配なことゝか、辛いことゝか、なんでもいゝ、正直に先生にさう云つてごらん。若し人に聞かれて困るやうなことなら、先生は、決して誰にも話しアしないよ。この間から、一ぺんゆつくりお前に訊いてみたいと思つたんだが、どんなことでも、お前の心にかゝつてゐることを、綺麗にうちあけてくれないか。ほんとに先生は誰にも喋りやアしないから、どんな內證なことでも、安心してお話し。きつと、なんとか相談相手になつて、お前の氣の晴れるやうにしてあげるから、ねえ、お話し。

（太吉、深く考へ込んでゐる。）

同右　先生は、大へんお前のことを心配してゐるんだよ。誰でも、さう始終心に思ふことがないと云ふわけにやアいかない。いろ／＼心配ごともあるもんだ。さう云ふ時には、この人は、と思ふ人に話して、一緒にいろ／＼考へて貰ふのが一番だ。さうお前のやうに、自分一人の胸にをさめてゐては、それアお前、とてもやり切れるもんぢやアない。仕舞には、お前、體を惡くしちまふよ。

（瘦せ衰へた太吉の顏を、いた／＼しげにぢツと見詰めて、暫く無言。）

同右　ねえ、云つてごらんな。先生は、決して惡いやうにはしないから。なんでも正直に話してお了ひ！　さうしたばかりでもいくらか氣持が輕くなるんだから。ねえ、宮崎、お前は先生が信用できないのかい？

（太吉、かぶりを振る。）

同右　そんならいゝぢアないか。先生は、お前のために、どんなにでも骨を折つてあげる。どんなむづかしいことでも、きつとなんとか處置をつけてあげる。だから、どんな內證なことでも、ちつとも隱さずに話してごらん。

（太吉、まだ躊躇してゐる。）

同右（嘆息して）これほど云つても、宮崎は、先生を信用してくれないのかねえ。

太吉　いゝえ、そんなことはありません。

宇川　さうだらう？　ぢアお話しな。

（太吉、何か云ひかけて、口ごもる。）

同右　例へばだ、自分の目上の者のことでも、無理は矢つ張り無理なんだから、遠慮ばかりしてゐずに、構はず云つてごらん。お前の悪いことは云つてあげるし、また……。

太吉　（決心して）先生、僕、毎晩可怕い目にあふんです。

宇川　（熱心に）可怕い？　つて、一體それア、……ど、どんな目にあはされるんだ。

（太吉、あゝ、矢つ張り話すのではなかつた、と云ふ風に、急に伏目になつて了ふ。）

同右　さア、そこまで云つたもんだ、どんな目にあはされるんだか、隠さずにあとを話してごらん。

太吉　（おづ〳〵と）おばけが出るんです。

宇川　おばけ？

（ト、呆れて顔を見詰める。而も太吉が、飽までも眞面目に、ぢつと見返してゐるので。）

同右　ふうん。（ト、考へ込み）一體それア、……兎も角、もつと詳しく話してごらん。

太吉　毎晩、おそくなると、枕もとへ来て坐るんです。

宇川　どんなものが……。

太吉　……おばけです。

宇川　どんな顔をして、どんな風をしてゐるんだい。

太吉　一番初めの晩にちよつと見たつきり、可怕いから、いつでも堅く目をつぶつてゐますから……。

宇川　うん、それで、何か口を利くのかい。

太吉　なんにも云はずに、冷い舌で顔ぢう舐め廻すんです。

宇川　そんな馬鹿なことがあるものか。夢でも見るんだらう。

太吉　いゝえ、夢ぢアありません。毎晩宵から、僕は、ちつとも寝られやアしません。はつきりおきてゐて、たゞ寝たふりをしてゐるんです。

宇川　一體それア、いつ頃からのことなんだ。

太吉　もう、十日ばかりになります。

宇川　ふうん。（ト、思ひ當つて獨語つ）丁度そんなものだ、お前がだん〳〵……。（氣を變へて）で、何かい、お前のそばには阿父さんや阿母さんや、妹も寝てゐるんだらうが、その人たちは……？

太吉　僕、ひとりで寝てゐるんです。

宇川　別の部屋にかい？

太吉　僕だけ、御爺さまの部屋に寝るんです。

宇川　うん、寝室に寝かされるのか。ぢア、ほかには誰もゐないんだね？

太吉　えゝ……。

宇川　なぜ阿父さんにさう云はないんだ。
太吉　この頃うちにゐませんから……。
宇川　ふうん、どこへ出かけてるのかい。
太吉　繭を仕入に行つてます。
宇川　あゝ、秋蠶だな。さうか、それアちつとも知らなかつた。それで、いつ頃から留守なんだい。
太吉　出かけてから、丁度半月になります。
宇川　阿母さんには……？
太吉　（忽ちしをれて）誰にも話しません。先生に云ふのが初てです。
宇川　さうか。……然し宮崎、お前、世の中に幽靈なんてものが、實際あるもんと思ふかね？
（太吉、深くうなだれて了ふ。）
同右　どうも先生には信じられないんだ。と云つて、お前お噓をついてるんだとは思はないけれど、それア恐らく、なんかの間違ひだらう？　この頃お前は、大ぶん體が弱つてるやうだから……。（氣を變へて）まア、それアいいとして、ぢアかうしようぢアないか。今夜、先生をお前のうちに泊めてくれないか。一晩一緒に寢てみよう。
太吉　（慌てゝ）先生、後生ですから、それだけは……。
宇川　なぜ……？　（自ら考へて見て、迷ふ）うん、さうさな……、然し……。

太吉　僕、辛抱できないことはありませんから、どうぞ先生も、もう心配しないでください。
宇川　阿父さんが留守だとすると、ひよつとすると、こりやア……。（考へながら、獨語に呟き、ふと、夕闇の迫つたのに心づいて）よし／＼、ぢアまア先生がゆつくり考へて置かう。どうしても先生には、そんな幽靈なんてあるもんだとは信じられないが……。
太吉　（おづ／＼と）先生、どうか、このことだけは……。
宇川　あゝ、誰にも云やアしないよ。兎に角、あんまりおそくなると、うちでも心配するだらうから、今日はこれで別れよう。先生は、決して聞きつぱなしにはしやアしない。よウく考へてみた上で、なんとか處置をつけてあげるから、さうあんまり心配しないがいゝ。
（太吉、頷き、いきなりヒヨツコリと頭をさげる。）
同右　あゝ、ぢア急いでお歸りよ。
（ト、共々に花道の附際まで來て）
同右　なんなら先生も、お宅を零したお詫びに行つてあげようか、それとも却つて行かない方がいゝか。遠慮なく云つてごらん。
太吉　（元氣よく）僕、ひとりで歸つた方がいゝと思ひます。
宇川　さう。そんならさうおし。ぢアさよなら。

（太吉、丁寧に禮をなし、強ひて活潑に、花道をはいる。中途でうしろを振り向き、あとを見送つてゐる教師と目を合せると、急に渋面をつくり、駈け込む。）

（宇川、夕闇のなかに、暗然とし佇む。蟲の聲。）

（やがて上手へ歩き出す。）

第二場

景

質素。薄暗き洋ランプ一個、正面板戸にて奥の間に通ず。上手窓。雨戸なし。窓のそと竹藪。下手土間より納屋へ續くあたり、甚だ暗し。

煎餅布団の上に太吉がころがつてゐる。掛布団なし。ぼろ〳〵の寝間着に、無理に足をくるんだり、額を叩いたり、手首を掻いたり、頻りに蚊に攻められてゐる科。蟲の聲。

やゝ間があつて、正面板戸をそうッとあけて、お市登場。板戸のあく音に、すぐ太吉は、ぐつすり寝入つてゐる風を装ふ。お市、寝息を窺ひながら、足音を忍ばせて、室を横切り、土間から納屋へはいる。

宇川、和服の上にオーヴァをはおり、丸太ン棒を持ちて、上手竹藪より姿を現はす。窓のやぶれ穴に目をあてる。太吉が静に横たはつてゐるのに、やゝ安堵の態。ひそかに巻煙草に火をつけ、掌のなかにかこつて吸ふ。時々蚊に攻められる科。蟲の音しきり。

下手土間の暗がりに、幽霊が現れる。髪を振り亂し、眞ツ青な顔に、眼窩々として、白い舌をダランと吐いてゐる。白衣。そろ〳〵と太吉の枕もとによる。太吉、微に呻く。幽霊、下手向きに坐り、こゞみかゝつて、長き舌もて太吉の顔を舐め廻す。太吉、呻く。

窓外にしやがんでゐた宇川、聞耳をたて、中腰にやぶれ穴よりうち窺き、この態を見ると、ガラリと障子を引きあけ、躍り込む。

太吉　（はね起きるや否や）阿母さん、あぶない、早くお逃げ！

（と、殆ど同時に、宇川が打ちおろした丸太ン棒で、幽霊の頭が打ち割られる。それは、なかをくりぬいた西瓜に、髪をかぶせ、眼の部分を白くくりぬき、舌には蒟蒻をはめ込んだ面で、キヤツと云ふ叫聲と共に、化物の正體であるお市が逃げ出す。宇川は、襟がみを把つて引き戻す。上からはおつた白衣がぬげて、お市は土間へ跳びおりようとするが、引戻され、ちよつと揉み合ひ、とゞ打ち伏せられる。太吉、割つて入り。）

太吉　先生！　ぶつちやいけません、ぶつちやいけません。

宇川　なに、こいつは化物だ！

（二つ三つ拳固を喰はす。）

太吉　先生！　先生！

宇川　この人でなしめ！　鬼婆アめ！

（突き放す。お市、疊に突ッ伏して、穴へも入りたき思ひに、ちゞこまつて了ふ。太吉、そばへよつて、優しく、背をさすりながら。）

太吉　阿母さん、堪忍してくださいね！　僕がつい餘計なお喋りをしちまつたもんだから。御免なさいね。阿母さん、御免なさいね。（宇川の方へ）先生！　先生もどうか阿母さんを惡く思はないでください。ね、後生ですから、こんなこと、誰にも仰有らないでください。ほんと云へば、僕、可怕くもなんともなかつたんです。初めの晩は、それア死ぬほど可怕かつたんですけれど、その翌日、出すものがあつて、納屋へはいつて行つたら、おばけが、――おばけのぬけがらが、米俵のうしろに隱してあるのを見附けちやつたんです。でも僕、折角阿母さんが、よる夜中に起きて、僕を……、そんな……、折角そんなにまでなさるものを、僕が可怕がらなくつちア惡いと思つて……。僕、ほんとは、ちつとも可怕かアなかつたんだけれど、たゞ……、たゞ……僕、どうして阿母さんが、それほど……、それほどまでに僕が憎らしいのかと思ふと、僕、僕……、いつそ死んぢまつた方がましだと思つて、それからは、僕、御飯も食べないで……。でも、僕、悲しくつて、……、どうかして阿母さんに……、阿母さんに可愛がられるやうになりたいと思つて……。（泣く）

宇川　阿母さん！　あ、あなた……、あなたは……、こ、この子の……、この子の……、あなたは……。

（感激のために口が利けず、終に、子供のやうに兩手を顏にあてゝ泣き、すぐにまた怒を發して。）

同右　こ、これア、な、なんです、（ト、西瓜の破片を取りあげて、突きつけ）な、な、なんて眞似をするんです。馬鹿々々しいにもほどがある、髢だの蜥蜴なんぞくッつけ散かしてからに、馬鹿々々しい……。子供だましで、罪がないと云ひたいが、もしこれが、宮崎のやうな、こ、こんな、こんな利口な子でなくつて、ほんとの幽靈だと思ひこんでたとしたら、一體、ど、どうなると思ふんです！　死んじまひますよ、あゝ、死んじまひますとも！　而も一番慘酷な殺し方だ！　恐怖のためにぢりぢり〳〵と衰へて行つて……。ほんとにあなたと云ふ人は……。

（と、激昂して、またもや打つてかゝらうとする。太吉、仲へ割つて入り。）

太吉　先生！　堪忍してください！　僕が悪いんです。僕が、阿母さんに見附られないやうに、時々死んだ阿母さんのお墓参りに行つたりするのが悪かつたんです。きつと阿母さんは、そんなことから、僕が嫌ひになつたんです。僕、僕、僕ほんたうに悪かつたんです。ですから、先生、どうか阿母さんを悪く思はないでください。阿母さんが僕を嫌ふのはあたり前で、矢ッ張り僕が悪かつたんです。ねえ、どうぞ堪忍してくださいね。ね、後生だから堪忍してくださいね。

宇川　こ、こ、これを聞きなさい、阿母(おつか)さん！　この子の、こ、こ、この、この心が、この心が、あなたの胸へ通じないくらゐなら、あなたは……、あなたは……。

お市　（急に顔を振りあげ）　太吉！

太吉　阿母(おつか)さん！

（互に堅く抱きつく。）

宇川　そ、そ、そ、さうだ！

お市　さア、太吉、すぐこれからせんの阿母さんのお墓へ行かう。あたし、せんの阿母さんにあやまつて来なきア氣がすまない。お墓の前で、お前にも詫びる……。さア、すぐ一緒にいつとくれ！

宇川　そ、そ、そ、さうだ／＼！　さうだ！

（三人の泣聲。）

――幕――

白扇の下

時　現代

人

鳥居　劇作家（三十四五歳）

靜江　その妻（二十三四歳）

伊東　或る一座の座頭（三十六七歳）

三浦　その一座の役者（三十一二歳）

金子　同じくマネージャー（四十三四歳）

その他、男衆、下廻など大勢。

景

或る貸席の二階の廣間。正面は一枚一間ほどの大襖。（純白と目にたつやうな模樣は避けること。）下手の一枚だけがあいてゐて、隣の同じやうな廣間の一部が窺はれる。下手の見切は硝子窓。金巾の粗末な窓引（カアテン）が引いてあつて、そこに二月末の午後四時頃の光りが暖かさうにさしてゐる。すぐ下は往來のこゝろ。上手の見切は壁、それへよせて、外套や帽子が二山三山（ふたやまみやま）つくねてある。正面奥へよせて舞臺監督のための小机。あちこちに薄べつたい座蒲團が六七枚、既に人の去つたあとらしく散ばつてゐる。天井は高く、ガランとした感じ。總て殺風景な、芝居の稽古場の態。

幕あくと、伊東がたゞ一人、勞れ切つたやうに、ベッタリ胡坐をかいてゐる。好みの衣裳。（和服）咽（のど）に厚ぼッたく濕布を卷いてゐる。利己主義者らしい白面の好男子。

隣室では、大勢の下廻りが、群集の出る芝居の稽古最中とみえて、言葉としては聞きとれないが騷々しい人聲。監督者、鳥居の敎へたり叱つたりする聲も混る。時々下手の襖をあけはなしてあるところから窺き込むものや、ちらりと姿を見せるものもあつてよし。さういふ騷ぎをよそに、伊東は、下手の日あたりを見詰めたまゝ、ポカンとして、卷煙草をふかしてゐる。ゆつくりと、それを半分ほどすふくらゐの間があつて、下手から金子がはいつて來る。相應趣味よく、また上手に着こなした洋裝。

金子　（歩みよりながら、愛想よく）や、どうも、毎日御苦勞樣……。

伊東　（見返るなり、これもうつて變つた快濶さで）いら

つしやい。今日はいつになく遲がけでしたね。（手近の座蒲團を引きよせて自分の向ひに敷く）

金子　（手先で輕く會釋を返しながら座につき）　ちよいと野暮用でね。

伊東　ウフッ。（わざとらしい噴飯し方）　どちらでした、ゆうべは。まぶたが二重になつてますぜ。

金子　冗談でせう。

伊東　（勝ち誇つたやうな笑）　貴方と來たら、すぐわかるんだから……。

金子　さういふ君こそ……。一體、昨夜の十時からさきの三四時間といふものは、どこでどうしてゐたのか、頗と或る方面で問題にしてゐましたぜ。（悠々と煙草を取り出し）　この行方不明については、僕は……。

伊東　なアに、なんでもありやしませんよ。いつものうちで、みんなと一緒に飯を食つて、それから……。

金子　それから……

伊東　それから、銀座をぶらついて、買物なんぞして……。

金子　（どこまでも上手に）　まアいゝさ、乘りかゝつた舟だ……。

伊東　乘りかゝつた舟つて……。一體それア……。

金子　だけど、玄人と違つて、事が面倒だぜ。ほかのことは兎も角として、明後日の初日が出せないやうな騷動でも持ちやがつたひには、これア笑ひごつちアすまされないからね。君が赤い着物を着るくらゐのことなら、僕ア三年でも辛抱するがね……。（親しみを現すために、わざとづけ／＼云ふ）

伊東　な、な、なんです、それア……。そんな、赤い着物を着なきアならないやうな、……　（臺詞めかして）　左樣な覺えは……。

金子　（同じく調子をつけて）　ないと申すか。

伊東　ない。（云ひ切るが、有繫にてれてゐる）

金子　君にも似合はない、往生際の惡さだね。（やゝ眞面目に）　……まア然し、ほんとに氣をつけ給へよ。相手が初心なだけに可怕いよ。

伊東　（てれかくしに、いきなり大聲で隣室に呼びかける）　おい、太田、太田！　そこらに、うちの太田はゐないかい！

（急にかげの人聲が鎭り、「へえ」と返事をする者がある。）

同右　誰かうちの太田を呼んでくれないか。……鼻の道具を持つて來いつて……。

（かげにて返事。）

金子　（顎でちよいと隣を指し、冷嘲の調子で）　相變らず熱心なもんだね。

伊東　どうも、とてもやりきれませんや。あの長丁場を、毎日二度、悪くすると三度づゝ返されるんぢア、とても體が續きませんやね。もう第一場がすんだばかりで、へと〳〵でさア。えらいものに捉まつちやつたア。

（男衆が出て、突膝で、顏つきだけで用を訊く。）

同右（突慳貪に）スプレイ！

（男衆「へい」と立つて、部屋を横ぎり、上手の外套などの置いてあるところへ行く。）

同右（肇て氣がついた風を裝つて）あゝ、なんだ、そんなとこにあつたのか。

（男衆の持つて來たスプレイを、手器用に扱ひ、手巾でちよいと鼻を隱しながら、シユウ〳〵と藥を吹き込む。男衆、すぐに退場。）

同右（鼻の治療をしながら）どうも、おかげで、すつかり咽を傷つちまひました。まるでガラ〳〵です。

金子（冷かすやうに）然し、いゝことです。役者はいつもさうありたい。

伊東　まつたく、こんな嚴しい稽古つて、生れて肇てゞすよ。えらい目にあふもんだ。

金子　それアさうさ、何しろ自分の女房に初舞臺を踏ますんだもの。これア誰だつて車輪になるわけだアね。また實際、素人としちやアうまいもんだからね。あれぢア亭主殿が夢中になるのも無理アないよ。

伊東　それアいゝけれど、はたがたまりませんやね。こつちの芝居に頼んだ人が、今ぢアまるであべこべでさア。なんのこたアない、あの人の出しものに、こつちがお附合で……。

金子　日頃御贔屓になる旦那衆のお嬢さんが、踊の浚ひに出るといふんで、花四天かお迎ひ坊主に頼まれた態があるね。

伊東（我が意を得たといふ風に乘り出して）さう〳〵、それですよ、まつたくそれですよ。おまけに、その稽古なるものが、とてもやかましいと來てゐるんだから助からない。

金子　なアんて、泣言ばかり云つてるが、芝居をかこつけに、内々いゝことをしてゐるんだから……。

伊東　ちよツ〳〵！（慌しく鼻からスプレイをはなし、手で制しながら、隣に氣をくばつてから、一段と聲を落して）聞えますよ、冗談ぢやない。

金子　さては、世を憚る身とはなつたりける、かな。

伊東　さうぢアないけど……、だつて、先生、隣にゐるんですよ。

金子　ゐたつて、評判の稽古で夢中でさア。よしんば、耳のはたで呶鳴つたつて聞えやアしない。

伊東　（苦笑ひで）　違ひない。

金子　聞えないと云やア、町内に知らぬは亭主ばかりだからいゝやうなものゝ、ほんとに君、ちつと氣をつけないといけないぜ。太田なんて朴念仁(ぼくねんじん)は、君にうまく丸められるとさうかと思つて、――なんでもないことなんだと思つて、誰ンでもペラ／＼喋つちまふからね。あゝ云ふのには、却つて、ほんたうのことを明して聞かせると、事件の重大さに震へあがつちまつて、君から喋れと云はれたつて、決して口外しやアしないんだ。どういふ經歴で男衆になんぞなつたのか知らないけれど、あれア君、さういふ質(たち)の人間だよ。男衆的なとこは藥にしたくも持ち合さないやうな人間だよ　だから、さういふ男には、またそれ相應の云ひ聞かせ方があるんだ。逆手を用ひなきア駄目だよ。

伊東　（鼻の治療に氣をとられてゐるやうに見せかけて、その實、相手の說を傾聽してゐたのが、言葉の終ると同時に、そしらぬ顏で、鼻をチン／＼とかみ、痰を吐いてから）　さうどうも貴方みたいに、何か體の關係でもあるやうに……。

金子　いや、そんなこたア見てゐたわけぢアなし、あるかないか知らないよ。またあつてもなくつても、別段僕に影響する問題ぢアないよ。たゞ先刻も云ふ通り、こゝまで運んで來て、萬一、芝居が出來ないやうなことにでもなると事だからね。稽古にだつてあれだけ熱中する人だもの、ひよつとそんな噂でも耳にはいつたとしてみたまい、それア君、とてもたゞぢアすまないから。奧さんを芝居に出さないくらゐは未(おろか)なことだ、まかり間違へば、君の命だつてあるかないかわかりアしない。

伊東　おどかしつこなしにしませうよ。そ、そんな、なにも……。

金子　さうでないよ、君、まア考へてもみたまい、芝居の稽古があれだけねつ、いんだもの。まして、首つたけ惚れて、さんざすつたもんだの揚句に、手に手を取つて駈落までして、やつと一緒になれたつていふ、大した謂つきの細君ぢアないか。

伊東　さうですつてね。

金子　さうですつてね、つて、君、あの時分盛に新聞にも書きたてられたぢアないか。それからまだやつと三四年にしかならないんだが、考へてみると、女なんてものは……。

（襖のあいたとこへ、ひよいと人が立つ。）

伊東　なんだい？　なんか用かい？

（その男、「いゝえ」と、すぐ去つて了ふ。）

金子　（伸びをしながら）　兎に角世の中、荒ッぽくなつて

來たよ。素人(しろと)も玄人(くろと)も、女房も娘もあつたもんぢアない。あゝ、おッかない、おッかない。

伊東　（多少不自然に話頭を變へて）時に、どんな具合です、今度の芝居の前景氣は？　よさゝうですか？

金子　さうさね、鳥居さんの奥さんが出るつてことに就いては、花柳界なんぞぢア、多少反感をもつてらアね。その點は君だつて氣がついてるだらうけれど、それアまア女らしいやきもちで、無論一般の好奇心には投じてゐるんだから、惡い筈はないと思ふね。何しろ、ずぶの素人が、いきなり玄人の中に混つて、それも主役と云つてもいゝほどの大役を勤めるなんて、全く前例のないことだからね。よかれ惡かれ評判になるさ。來るよ、大丈夫客は來るよ。

伊東　さうですかしら、そんならいゝけれど、もうあたしは、あつちこつちで、反感の聲ばかり聞かされるんで、どうかしらと思つて、内々案じてたんですがね……。それと、稽古では、とても吾々でも及ばないほど、すつかりお手に入つたもんだけれど、いざ舞臺となると、そこは、なんてつても……。

金子　素人の悲しさ、かね？

伊東　まアね、……萬が一とちつたりなんかされたひにはね……。

金子　然し、それアどうも、そこまで心配しだしたらきりのないことで、とちる時にやア玄人だつてとちるんだし、……まア、あれだけ稽古をつんだらいゝとしなきアなるまいね。……それアさうと、君はもう體があいたんだらう？　どつかで飯でも食ひながら、ゆつくりひとつ、お惚話(のろけ)を拜聽しようぢアないか。

伊東　それがさういかないんです。

金子　どつか、廻るところでもあるのかい？

伊東　いゝえ、群集の稽古をすませてから、もう一度第一場の幕切れのとこだけやるから待つてろつて、――なんのこたアない、學校の先生から留置(とめおき)を命じられた態(かたち)なんです。

金子　だつて君、奥さんはもう先刻一人で歸つちやつたつていふぢアないか。

伊東　（やゝ呆れ顔に）一體貴方はいつていらしつたんです。

金子　今さ。

伊東　實にどうも、監督嚴重(げんぢゆう)だなア。

金子　（いくらか忸怩(ぢくぢ)として）それア君、はいつて來りやア、まづ第一に、主(おも)だつた役者の、誰それはゐて、誰それは歸つた、くらゐのことは訊くさ。

伊東　それにしたつて、（なかば自分に呟くやうに）……

ちつとこれア、油斷がならないなア。

金子　油斷がならない？

伊東　……いゝえ……。

金子　（意地わるく）いゝえ？　いゝえ？　どうだつて云ふんだい。

伊東　（すてばちになつて）貴方に睨まれちやアかなはない。實はね……。

（横坐りの身を躙りよせ、ニヤ／＼しながら金子の耳もとに囁く。金子、「ウン／＼」と鼻音で答へながら、頻りに頷く。時々洩れ聞える言葉としては、）

（金子「いつ？」伊東の答聞えず。）

（金子「嘘つけえ」伊東「いゝえ、それアね……」あと聞えず。）

（金子「だつてあの時は、これも一緒だつたぢやないか」と、親指を示すのに對して、伊東が、默して頷くと、「惡い奴だ。どこまで圖々しいんだかはうづが知れない」）

（金子「ふうん、呆れたなア」伊東「然し、それアあの人だつて……」あとは聞えず。）

（金子「昨夜？　……そんなことだらうと思つてたんだ」伊東、無言の見返し。）

（金子「何しろ君は、呆れ返つた人間だよ」下等なニヤ／＼笑。）

（等、この私語がやゝ暫く續いた後に、伊東が、つと身を引いて、）

伊東　然し、どうぞ、これア絶對に……。（ト、輕く唇を抑へて見せる）

金子　無論さ、生命の問題だもの！

伊東　まさか……。（語尾に不安がねばり着く）

金子　（眞面目に）さうでないよ。實際、先刻も云つたけれど、太田に氣をつけ給へ。それでもう、そんな危險な火悪戯は、そこらで打切りにするんだね。實際君、あの人の性分ぢやアやりかねないぜ。（ト、匕首かなにかで相手を刺すやうな身振りをして見せる）

伊東　（一層不安な調子）まさか……。

（二人別々に思ひに耽つてゐるやうな間。いつか、下手の窓の日射が、黄色ッぽい殘照になり、幾分舞臺が薄暗くなつてゐる。）

金子　然しまア、無理のないこともあるよ。いかにお芝居とは云ひながら、毎日あゝやつてべた／＼ひつ着いちやア、嬉しいの、悲しいの、やれ、いつそ死んじまひたいの、なんのつて云ひ合つてるんだもの。考へてみりやア惡いだしものさ。鳥居さんが、なんと思つてか、今度の芝居に限つて、是非うちの女房にやらせてみたい、なんて云

ひ出したのが……。

（襖のあいてゐるところへ、突然鳥居が立ち現はれる。著しく下顎骨の發達した、藝術家らしくもなく意志の強さうな、粘液質な容貌。逞しい體躯。好みの和服。袴を着ける。）

（部屋の空氣に殘つてゐる或る匂ひが、三人の鼻を、それぞれの意味で強く刺戟してゐるやうな、ごく短い間。）

鳥居　まだ來ませんか？

金子　え？　奥さんですか？

鳥居　ちつと近所まで用達に行つて來るつて、先刻出かけたんですが……。

金子　こゝにはお見えになりませんでしたけれど……。

伊東　階下を見させませうか。

鳥居　いや、そいぢアまだなんでせう。（時計を出して見ながら、なかば獨語の調子で）どうしたんだらう、四時半までには、間違ひなく歸つて來いつて云つといたんだのに……。

金子　もうそちらの、ワア〳〵連のお稽古の方はすんだんですか。

鳥居　（苦笑）えゝ、まア……。

金子　それぢア御一服なすつたらいかゞです。お勞でせう。

鳥居　いえ、なに……。ぢア、來るまで、もう少し……。

（輕く笑つて、すぐ襖の蔭に姿が消える。）

（金子と伊東、顏を見合せたまゝ暫く間。隣から、鳥居が、何か云ひ聞かせてゐるやうな聲が聞えて來る。）

金子　何しろあの勢だからたまらない

（やゝ冗談めかして云ひかけても、伊東は、默つて、疊の上の一點を見詰めてゐる。）

同右　（腕時計をはづし、龍頭を捲きながら）これからまた始まるんぢア、今夜はお辨當ものだな。僕ア御免かうむつて、お先に失敬しよう。

伊東　（慌てゝ縋りつくやうな調子）そんなこと云はないで、すぐだから、つき合つてくださいよ。一時間とかゝりやアしませんやね、第一場の幕切だけなんだから……、

金子　またあの濡場かい。あすこへ來ると、先生、へんにまた一生懸命になるのが不思議だよ。いつだつてあすこが、一遍で通過したためしはないぜ。きまつて二三遍は小返しがあるんだから……。どうも少し、變態性慾じみた氣がしてならないんだ

伊東　變態性慾つて……？

金子　いゝえさ、お芝居とは思ひながらも、自分の女房と他人のいちやつく具合を見てゐるのが、一種なんとも云はれない快感なんぢアないかと思ふんだ

伊東　まさか……。

金子　いや、さういふ氣持はあるもんだよ。

伊東　あすこはね、まつたく僕がうまくないんだ。然しそれア、舞臺なら、つて自信はあるんだけれど、何しろ御亭主を前に置いて、よその奥さんと……。

金子　何を、何を！　その手で素人をお騙しよ、だ。

伊東　いえ、それアほんとですよ。舞臺なら兎も角、なんだかどうも氣がさして……。

金子　あたり前さ、それで氣がさゝなきア、天道是か非か、だ。蟲のいゝことを云つてるぜ。

伊東　さう貴方みたいに……

金子　まアいゝさ、いゝさ　あゝあ（ト、大欠伸して）腹がすいた。さアまア、（ト、腰を掛け、洋袴の折目や、襟の皺を氣にして、引つぱつたり、熨したりしながら）君は御緩なすつて、いゝ心持にお巫山戯なさい。人前も憚らず、ひッ着いたり、とつ着いたり、僕は、他事ながら、とても見ちアゐられないから、これで御免をかうむるよ。

（鳥居と靜江が急ぎ足にはいつて來る。靜江、華美な顔だち、豐頬。最新流行の束髪。好みの和服。無論このちよつと前に、隣室の騒々しさが、はたとやまなければならない。）

鳥居　や、どうも、大へんお待たせしました。

靜江　すみません、おそなはりまして。

金子　お歸ンなさい。

伊東　いかゞでした、お氣に入つたのが見つかりましたか。

靜江　まだ期節に早いでせう？　だもんですから、どこへ行つても、これはと思ふやうなのがないんですの。資生堂になくつて、仙女香へ行つて見たんですけれど……。

金子　なんです、洋傘ですか。

靜江　えゝ、二幕目にさして出る……

金子　成程ね、まだちよいと洋傘には早いからね

（この臺詞のうちに、鳥居夫婦は、それ／＼よきところにすまふ。）

鳥居　いよ／＼なけれア、お前の去年ので間に合はしとけばいゝぢやないか。

靜江　でも、ずゐぶんひどくなつてるんですのよ。

伊東　なに、舞臺で見りやア、なんだつて立派に見えますよ。

金子　第一この人だつて、（ト、伊東を指さして）白く塗りやア二枚目ですからね。

伊東　あれだ！

鳥居　（冗口には些の興味もないらしく、金子に向つて）ソブア、さう云つてくださいましたか。

金子　ソフア？

鳥居　ソフア！　長椅子！

金子　あ、さう〳〵。（ポンと膝をうつて）すみません、すつかり忘れちまつて……。待つてください、事務所に電話をかけさせて、今すぐ……。

（ト、立ちかけるのを制して、）

鳥居　よござんす、よござんす。あればあるに越したことはないんだけれど、どうせまた明日の舞臺稽古で、いろいろ形の變つて來るところもあるでせうから……。明日は間違ひないでせうね。

金子　それアもう、小道具の方で承知してゐますから。

鳥居　（頷き返し、すぐ伊東の方へ）ぢア、早速かゝらうぢアありませんか。

伊東　えゝ、やりませう。（隣に大聲で呼びかける）おい、誰か、三浦君を呼んで來ておくれ。

（「へ」と返事。皆々立ちあがる。鳥居は正面の小机を控へて、舞臺監督の座になほる。金子は、そこらの座蒲團を片づけたりしながら、そのそばへ行つて坐る。靜江は立つたまゝ身づくろひをする。伊東は、性急らしく襖のあいてゐる方へ行く。同時に、下廻りが大勢どや〳〵とはいりかけ、それと見て、敷居際で、口々に、「お先へ」「お先へ」「お先に御免」など挨拶し、すぐ引返して行く。伊東は、それには目もくれずに、敷居際まで行つて、「おい、どうした、三浦君は。歸つちまやアしまいね」と呼ぶ。「いゝえ、唯今すぐ。ちよつと今、お辨當を使つていらつしやいますから」と答へる聲。伊東、「辨當？　冗談ぢやアないぜ、全體それア、晝飯かい、晩飯かい」と笑つてから、「あゝ、それからまた椅子だ、二脚だよ、いゝかい」かげの聲、「へい、唯今」と答へ、暫して、ごくありふれた椅子を二脚兩手に提げた男がはいつて來て、下手あつらへの場所に置き、すぐ退場。伊東が、その一つに腰をおろし、懷から取り出した書抜をあちこちめくつたりしてゐるところへ、手巾で口のはたを拭きながら、三浦が、手提を持つた男衆を從へて登場。洋裝。あとから藝熱心な下廻りが二人、見學の意味で、こそ〳〵はいつて來て、部屋の隅にうづくまる。この三人は、幕の下りるまで、無表情、無動作にて、出來るだけ觀客の注意を惹かぬやうに心懸けること。）

三浦　すみません、お待たせしました。

伊東　なんだい、飯を食つてたんだつて？

三浦　えゝ、ちよいと底を入れとかないと、とても……。

（ト、稽古の烈しさに堪へられない、といふ意味を言外に託した微笑）

伊東　（頭領らしい寛大な微笑と共に、低聲で）しつかり

やつとくれよ、一人でもまづいと、何遍でもやり返させられるんだから。

（三浦、手巾(ハンケチ)の蔭で楊子を使ひながら、首だけで答へる。）

（この間、鳥居と金子とは何か低聲に話してゐる。身づくろひを終つた靜江は、臺詞を呟きながら、一人でいろ／＼な表情をして見てゐる。）

鳥居　よござんすか。よければかゝりませう。

伊東　どうぞ。

靜江　どこからやるの？

（鳥居、臺本をあちこちめくつてゐて、それには答へず。三浦は、部屋の隅に行き、男衆の持つた鞄から書抜と扇子とを出させ、そこに座を構へて、黙讀し始める。）

〔以下臺詞のうちに「　　」をかけたる部分は、劇中劇の臺詞、並にそのト書なり〕

鳥居　えゝと、ぢアこゝから行かう。……醫者がはいりました。「それを追つて行つた芳子、暫くして慌しく登場」……最後の立稽古だから、ひとつ本意氣で、うんと馬力をかけてやつてください！　さア、下手の扉(ドア)から出た！

（伊東は、急に、椅子の上で、苦しげに息を喘ぎだす。靜江は、上手で、　舞臺監督が觀客の位置に即いてゐるわけ故、實際の舞臺とは、上手下手があべこべになり、劇中劇の演技も、從つて、總て實際の觀客には背を向ける態になる。それは、目立たぬやうに、避け得るかぎりは避けたいことであるが、然し、決して、實際の觀客の方へ正面を見せ切つてはならない。）慌しく扉(ドア)を押しあける科をして、椅子の方へ驅けよる。）

伊東　「芳子さん、水、水……」

（靜江、小戻して、實際には置いてない卓の上で、コップに水を注ぐ科(しぐさ)。それを伊東の手に持ち添へ、劬(いたは)り飲ます科。）

伊東　（靜江を押しやりながら）「もつと、そつちに……。そばへ來ちアいけません。僕は、僕は……」

靜江　「いゝえ、大丈夫です！」

伊東　「いけません！　醫學博士の口から立派に宣告されたんです。知らないうちは兎も角、……僕は貴方を不幸にしたくはありませんから……」

靜江　「噓です、あんなことはみんな噓です。貴方の御病氣は、決してそんな……」

伊東　「僕はもう夙(とう)から覺悟してゐたんです。それは、覺悟はしながらも、萬一の望みは持つてゐましたけれど、はつきりさう聞けば聞いたで、今は却て、心に靜な落つきが來ました。僕は決して醜(みぐる)しく取り亂したりはしないつ

もりです……」

鳥居　うん、少しまだ弱々しすぎるな。病苦は病苦として云つてる言葉には、もつとしつかりした精神が出てほしいな。泣言でも云つてるやうに、女々しく聞えると困るんだ。

伊東　さうですか。えゝと……。（目をつぶり臺詞の緒を考へる）

鳥居　（調子をつけて）「僕は決して醜しく取り亂したりはしないつもりです。どうぞもうそんな……」さ。

伊東　あ、さう、「取り亂したりはしないつもりです。どうぞもうそんな、氣休めは云はないでください。幸福の絶頂にゐる者にとつては、死の顏だつて、少しも恐ろしいとは思ひません……」

鳥居　「少しも恐しく見えるものぢアありません」だよ。

伊東　あ、さうか、「少しも恐しく見えるものぢアありません。さういふ風に云つてくださる貴方のお心持は、よく解るけれど、どうぞもう、今更僕の覺悟を亂すやうなことは……」

靜江　「いゝえ、わたしは、そんな卑怯な女ぢアありません。いゝ加減な氣休めを云つて、それで貴方が御安心なさるとも思つてやアしません。わたしは、先ほどの博士の言葉のなかに、ふと或る暗示をうけたのです。……これはみんな作りごとです。本多に頼まれて、博士は、いい加減な出鱈目を云ひに來たのです。またいつものからくりです。わたしはもうちやアんとそれを見拔いて了ひました」

鳥居　すこウし亢奮しすぎるよ。そこはまだそれほどでなくつてもいゝんだ。

（靜江、その方を見て頷き返す。）

同右　「……ちやアんとこれを見拔いて了ひました」あと續けて！

伊東　「そ、こんな、馬鹿な！」

鳥居　さうだ、うまいぞ！

靜江　「いゝえ、馬鹿ぢアありません。貴方はまだ、本多と云ふ人間を、よく御存知ないから……」

伊東　「だつて、いくらなんでも……」

靜江　「いゝえ、さうなんです。あの人は、以前にも……」

鳥居　よからう、よからう。そこの長臺詞は飛ばすことにしよう。何しろ、時間がないんだから……。

（ト、時計を出してみる。金子がそばから何か囁く。頷いて、）

同右　晩にこゝで、義太夫のお浚とかゞあつて、ふさがつてるんださうだから、そこはづうッと飛ばして……。

伊東　（書拔を出し、頁をめくりながら讀む）「假にも、貴

方の御主人ぢアありませんか。貴方はそれほどまでに本多君を……」

鳥居　（同じく臺本をめくりながら）いや、そこも飛んじまつて、いきなりラヴ・シインへ行かうぢやないか。ええと……、（讀む）「わたしもうなんにも要りません。命も要りません……」そこからやつて貰はう。そこぢアもう芳子は、ソファに腰かけてるんだ。

（靜江、領いて、あいてゐる方の椅子へ行つて腰かける。）

同右　さう。もつと椅子をぐツとそばへくツつけてくれ。……三浦君、この間に、本多が窓から窺くよ。いゝね、うんと凄くやつてくれ給へよ。

三浦　（領いてから）先生、矢つ張り、カアテンからよつぽど顔を突き出すやうにしないと、東のお客には見えなからうと思ふんですが……

鳥居　うん、これも、明日實地の舞臺でよく研究してみよう。……（靜江に）さア始めておくれ。

靜江　（いきなり伊東にしがみつく）「あたしもうなんにも要りません。命も要りません。いつそこのまんま死んで了ひたいくらゐですわ」

鳥居　まづいなア。それぢアまるで、色じかけで男を蕩しにかゝつてるやうぢアないか。もつと本眞劍になつてやらなくつちア駄目だよ。

靜江　（伊東から離れて、揉上あたりのほつれ毛を掻きあげながら）だつて、前の方からづツと續いてやつて來ないと、いきなりぢアなんだかへんですわ。

鳥居　そんなことを云つたつて、時間の都合でやれないんだから仕方がないぢやないか。さア、もう一度！

靜江　（前よりも力強くしがみついて）「わたしなんにも要りません。命も要りません。いつそこのまんま死んで了ひたいくらゐですわ」

（伊東、悲痛の面持で力一杯抱きよせる。椅子がぐらついて、あぶなく倒れかゝるのに、忽ち普段の顔になり、「これアいけねえ」と呟き、もう一度椅子の按配をしてかけ直す。金子と三浦、笑ひを忍ぶ。鳥居は苦い顔をしてゐる。）

伊東　（形をつけてから）「僕も今までは自分の氣持を殺し殺しゝて來ましたが、貴方もさういふ氣持なら……」

（接吻）

鳥居　まるでなつてないぢアないか！　ひとツつも實感が罩りやアしない！　そこは、却つて讀み合せをやつてた時分の方がうまかつたぜ。今日はまた特別まづいや。どうしたんだい、一體！　明後日は初日だつていふのに、少ししつかりしてくれなくつちア困るぢアないか！　…

…もう一度やり直し！

（男女優、懸命に、同じ個所を繰り返し、更に先へ進む。この劇中劇の臺詞、科等は、くだ〳〵しければ、この脚本が上演される日まで、姑く省き置く。前出の部分より推して、以下讀者の想像に任す。）

（鳥居は、始終不滿の色を浮べて見てゐるが、或る句切に來たところで、）

鳥居　駄目だなア。（ト、殆ど投げ出すやうな調子の嘆聲を洩す。）

伊東　さうですかねえ。うまくいきませんかねえ。

鳥居　いかないとも！　第一君、まるで體がくツついてないぢアないか、二人とも及び腰で、まるで檢閲の巡査にでも睨まれながらやつてるやうな風だぜ。

伊東　さうかなア。今日に限つてさうまづいつて筈はないんだがなア。

金子　（そばから取りなすやうに）然し、檢閲つて云へば、實際それも考へとかなくつちアならない問題ですね。

鳥居　なアに、君、脚本が通つた以上、それを出來るだけ效果的にやらうとするのは、役者なり演出者なりの誠意ぢやアないですか。いけないもんなら、脚本で抑へるがいゝんだ。

金子　それアまアさういつた理窟ですがね、兎角お上のことつてものは、なか〳〵さういふ具合に、一本筋には話が通りませんからね。

鳥居　まア然し、それア別問題でさア。稽古は稽古で、飽まで完全を期してやるより仕方がないんだから……、まア、いゝ、あと續けてやつちまはう！

伊東　（靜江に）さア、それぢアひとつ、貴方の泣き出すところから返してくださいな。

（靜江、伊東に取り縋つて嗚咽する。）

同右　「なぜ泣くんです。今更になつて貴方は、御主人のことが……」

靜江　（すゝり泣きの間から、きれ〴〵に）「えゝ、それは思ひますわ。思ふのがあたり前ですわ。いくら惡い人でも……」

伊東　「それアさうだ。それアそれに違ひないけれど、その僅な瞬間だけでも、貴方の心から、僕のことが消え去つてゐると思ふと……」

靜江　「そんなことありませんわ。貴方を思へばこそ、本多のことまでが思ひ出されるんぢアありませんか。わたしの心はもう……。いゝえ、心ばかりぢアありません、體だつて、……體だつて……」

伊東　「芳子さん！」

（その少し前から、二人のうしろの、實際にはない窓

から、そつと忍び込んで來るやうな科をしてゐた三浦が、丁度その時に、椅子の凭りかゝりに身を擦りつけるまでに迫り來つて、上着の下に隱し持つてゐた扇子を、いきなり逆手にふりかざす。）

鳥居　いけないなア。それぢアまるで壯士芝居ぢアないか。葉村利腐でやつた日本最初の「ハムレツト」の劇中劇に、山本嘉一扮するところの刺客を思ひ出しちまつたぜ。そんなに君、へんな誇張にならないで、もつとすら〱ッとやつて、それで凄みが出せないものかねえ。

三浦　はア。どうも……。

鳥居　どうせ素人のことだから、形はうまくいくまいけれど、氣組だけひとつ、僕がやつて見せようか。

（云ひながら、机の前に立つて、三浦のそばへ行き、「ちよつと貸してみたまい」と、扇子をうけとる。伊東と靜江、そつちを見てゐる。）

同右　さア、やりたまい。なんだッけ、「そんなことありませんわ。貴方を思へばこそ……」あすこからやつてみたまい。

（伊東と靜江、抱きよつて、命じられた條を繰り返す。）

（鳥居、忍びよる。鬼氣、暮色蒼然たる室内に溢る。）

（伊東の「芳子さん！」と同時に、拔く手も見せず振りあげた白刃が薄あかりのうちに閃く。）

（靜江が、キヤツと叫んで、椅子から轉び落ちながら、伊東の膝へ縋りつく。）

（伊東、すッくと立ちあがる。）

（金子も、ばね仕掛のやうに飛びあがり、三浦、室の一隅にかたまつてゐた三人の男たちにも、みな一樣に電流のやうな戰慄が突き貫ける。）

伊東　（突ッ立つと同時に）な、な、なにするんだ！

（ト、恐怖に滿ちた叫び聲をあげ、いち早く逃げのびようとするが、膝に抱きつかれてゐるので動けず、その場で、右肘をあげて身をかばふ。それと同時に、がツくり、魂がぬけたやうに、鳥居の右の手がさがり、その惰性で、上體が三浦の方へ向く。）

鳥居　（ごく輕く）といつたやうな意氣でね、ひとつやつてみたまい。

（三浦の前につき出された右の手の平には、無論一本の扇子が乘つてゐるばかり。）

（ぱつと一時に、室内の電燈が明るくともる。同時に幕がおり始める。）

（凍りついたやうに動かない人々の間を、鳥居がたゞ一人、自由に、身輕に、正面の小机の方へ戻つて行く……。）

（幕おり切る。）

泉鏡花篇

稽古扇（二幕）

（札所長屋、雁々松）

人物

お藤　扇橋の踊娘
船蟲の紋次　地まはり
お光　娘
一次。二九郎。三十　ごろつき
喜藏　車夫
兩換屋勘右衛門　地主
おせき　差配の娘
川邊旬作　區役所のやとひ
長三郎　大工
お三輪　地主の娘
柏木信夫　子爵家の世子
鐵砲の平篠　按摩
お綱　女髪結

上　札所長屋

團扇太鼓の音にて幕開く。

お光　おゝ、賑かだ、講中が通るんだよ。一寸、かみゆひさん、此處から見えるでせう。

（竹格子の出窓の戸を開けろ。此の窓の下に、川邊旬作の机、本箱、葛籠などあり。）

お綱　（お藤の藤色のきれ、ふつさりとした結綿の鬢を撫でつけながら）　戸外を通るんぢやありませんよ、お光さん、角の地主様の內で、近所の人たちが集つて敲いてるんですよ。

お光　おや、然う。何かあるの？

お綱　あゝね、地主様のお孃さんが、頼母しいぢやないか、三年越の戀が叶つて、其方がお婿さんに極つたものだから、豫て願掛けをなすつた、池上のお祖師様へ願ほどきのお禮に、見事なね、繪の額を上げなさるの。旦那も酒落た方だわね。それが大びらなんでせう。近所の少い衆が類似るとつて、あの通りさ。額を取巻いて雛立てるんだよ。而して今夜、皆で池上へ送るんですとさ。

お藤　（姿見に向ひながら、聞いて居て）　一寸、待つて下さい。（とお綱の櫛の手をとめる）

お綱　何うしたの。

お藤　急に煙草が喫みたくなつたの。是非喫まなくちやならないの。

お綱　我儘だわえ。
お光　隨分だわ。
お藤　堪忍して下さい、濟みません。（と長羅宇で吸ひつける。煙草入は自分の帶から拔く）
お光　あら、何うしよう。隨分だつて、私、貴女の事を云つたんぢやないの。其の地主樣のお嬢さんの事なんですよ。皆に然うやつて囃されて、まあ、どんな顏をしておゐでだらうねえ。
お綱　土地ッ子だもの、お祭の屋臺に乘つたやうでせうよ。
お光　歸りがけに覗いて遣らうや、貴女、お先へ。
お藤　失禮。
お光　然やうなら、髮結さん。
お綱　然やうなら……光ちやんも、あやかりに行つたら可いでせう。
お光　お生憎樣。あばよ。（と蓮葉に出て行く）
お藤　（立つて、お光があげた、其の出窓の左右を眴しながら、しめる時、句作の机の上を見る）春色梅曆……まあ、學者ですねえ。
お綱　學者が嚔をしやあしないか。
（と裏口を指して、別の鏡臺の前に片づけものをして居る梳手のお粂と顏を見合せて笑ふ。川邊句作は、此の折から水道端で冷水摩擦をして居る。……但し其の體は見えず。）
お藤　濟みませんでした。何うぞ。……（と前の座に着いて、肩をすぼめる）
お綱　寒いの。
お藤　悚然しましたものですから。
お綱　襟へ毛でも入つたかねえ。
お藤　否。
お綱　煙草は最う可いんですか。
お藤　否ね、おかみさん。私は、實は、急に一服したく成つたんでも何でもないの。今歸つた方が、お開けなすつた窓ですから……然う云つちや惡うござんすからね……急に烟草がのみたいと云つて、此方を向いたんです。……ふつと、あの、氣に成る事があつたものですから、つい。……
お綱　まあ。何麽事？　少いお師匠さん。
お藤　あれ、後生だから、お師匠さんは止して頂戴。あの……別に、今日に限つたと云ふんぢやありませんけれど、お內ぢや、恁うやつて姿見が立つて、鏡臺が並んで居るでせう。おかみさん、昔、寅待をしたと云ふ話がありますわねえ。
お粂　寅待つて？　姐さん。（と梳手、不思議さう）
お綱　あゝ、寅の年の、寅の月の、寅の日に、紅を點けな

い鐵漿ばかりの片化粧、捌髮、白裝束で！

お兼　可厭な、氣味の悪い、何うするつて云ふんでせうねえ。

お藤　夜よ、夜中ですよ。寅童子、寅童子と心に念じて、熟と姿見を凝視めて居ると、其の丁ど寅の刻に、自分の顔のほかに、最う一つ、違つた顔が、屹と歴々と映つてスーツと消えますとさ。

お兼　まあ。……（と擦り寄る）

お藤　其の顔が、前世からの約束事で、其の婦の御亭主に成るんですつて。

お綱　其の男に添ふんだとさ、お前。（と梳手に）　澤山古い事でもないとさ。仲之町の遊女が、其の寅待をして、姿見の裡へ、塵紙のやうな顔をした屑屋の影が映つたのを見て、氣が違つたつて話さへあるんだよ。

お藤　私なんぞが、何も、屑屋さんを嫌ふと云つたわけではありませんけれど……でも、塵紙のやうな顔ぢやねえ。……ですから、今窓が閉くと。直ぐに其處は拔裏の露地でせう――種々なものが通るでせう。豆府屋だつて、屑屋だつて――又、どんな氣味の悪い顔が映らないとも限らない、と然う思つたら悚然しました。目を塞いで居りや見えないんですけれども、さあ、氣に成ると、其の癖、なほ、姿見の裡へずつと氣を取つて引張り込まれさうで堪らなく成つたもんですから。

お綱　あゝ、よく、傍へどいて、お前さん、一服しなすつた。そんな心持のする時は、悪くすると、日中、ひつそりとした露地の隅ッ子を、魔が通るんだよ。どんな不思議なものが映つて、一生忘れられない、可厭な思ひをしなさらうとも知れなかつたんだよ。其の遊女なんぞも、考へて見れば、通魔が魅したんだわね。

お藤　（身震ひして）最う澤山。それだし……おかみさんも知つて在らつしやる通り、私もねえ……四年越、遠い親類の、踊のお師匠さんの許へ、内弟子に行つて居たけれど、それでなくつてさへ困る中を、親父が飛んだ遣り損ひをする、母樣は大病だし――迚もお稽古どころの騷ぎぢやないのですから、家へ歸つて、而してまあ、一時凌ぎに私が藝妓をする事に成つたでせう。……お金子は最う借りてあるし、……先月末までにも、柳橋の其の主人へ、行かなけりやならない處を、母さんの容體が容體ですから、一日のばしに無理を頼んで、恁うやつて、内に居るんですけれど、中へ入つて、世話をした人の義理にも、然うまで遊んでは居られません。……あつちやならない事だけれどね、母さんに、もしもの事のあつた時、更めて内へ歸して貰ふまでも、明日は、是非披露と云ふ事に極つたんですもの。――黄道吉日なんですつて――

願が叶つて、池上様へ額を納める方もあるんだわね。勤めをするのに、何が吉日なんでせう。おまけに、まる抱へなんでせう。……（としんみりして）ですもの、娘と云ふのも今日限――どんな可厭らしい客に逢つて、死ぬほどな思ひをしようやら。……手拭と扇子を持つて、大いお師匠さんのお供をして、お邸や町方のお座敷を勤めたやうなわけには行きますまい。……そんな、こんなで、自分でも、不思議なほど、窓が閉くと、私と一所に姿見に可厭な顔が寫りさうで、氣味が惡くつてならなかつたんです。

お綱　おなじ流れの身だつても、おもしろづくに、浮いた人もある中に、お前さんの氣象ぢや、眞個ねえ。私はお察し申しますよ。

お藤　ありがたう存じます、おかみさん、それにね、此の間からお頼み申して置きました、あの方ねえ。

お綱　むゝ、お前さんの情人かい。

お藤　まあ、知らない。（と云つて、傍の梳手に一寸氣をかれる）

お綱　（心付き）可厭だ。話に引込まれて浮つかりして居た。お粂坊、おや、お前、出掛けなゝ。

お粂　はあ、お師匠さん、何方から……

お綱　廻りぢやない、遊びだよ。（云ひかけてお藤に目まぜで）……來なさるんだらうね、其の方が。……明日披露をするくらゐぢや、おなごりに、今日のうち。

お藤　えゝ、ですから今夜……

お綱　可ござんすとも、其の段取は丁と出來て居るんだよ。――お粂坊、何時も云つてるお前、お友達の處へ遊びに行つて、活動寫眞でも見るが可い。日が暮れたら寄席へおいで、私が行つてるから。

お粂　では、遣つて頂きます。

お綱　おや、お前、着換へなくつても可いのかい。

お粂　あの……一寸前掛けをとりますばかり、今日あたり遊ばして遣るツておツしやつてゞしたなら、今朝から、着換へて居りましたわ。

お綱　お聞きなさいよ。呆れたもんだ。

お粂　少いお師匠さん、御緩り。

お藤　お粂さん、お樂み。

お粂　あら、貴女こそ、おほゝほゝ。

お藤　（唯莞爾する）

お綱　生意氣お云ひでないよ。

お粂　（門口を出る）

（と其處へ、川邊何作。木綿の縞入な袷長に、井戸端から來て行逢ふ。）

お粂　まあ、長いわねえ。

旬作　然うか。……(となまぬるく引張つて) 髮かね、(とあたまに手を遣り) 裾かね。(と帶の下を覗く)
お粂　鼻の下ぢやない事よ。
旬作　何かい、(と頭を撫でゝ) 何處へ行くかね。
お粂　(突然にドンと背中を一つくらはして) お樂み！……
…(とばたばた駈出す)
旬作　(けろりとして) へゝへゝ。
…と大な襟の附いた紀州ねるの縞の襯衣。だらりと太く手の甲へかゝつて長し。其袖口の釦をはめながら、件の裾長にて、むんじりと内へ入つて、一日、お藤を見ると、棒を呑んだやうに、しやつきりばつて、舞臺の眞中へ突立つて、じろり、じろりと見る。)
お綱　(此のうち長火鉢の火を見て、鐵瓶を掛けなどする)
お藤　(髮のゆひたて、水が垂りさう。艶麗な顔を上げて) 今日は、……(と會釋する)
旬作　やあ、別嬪さん、失禮。(と突拍子)
お藤　(顔を背ける)
お綱　川邊さん、長湯だわねえ。今朱を持つて迎ひに行かうと思つた處さ。
旬作　然うか、朱を持つて何うするですか。
お綱　じやくひ上げるのさ、お前さん。
旬作　僕が區役所に勤務する云うて、鯔扱ひにするちうは殘酷ですやろ。而してぢや、風呂に行つたではないですが、冷水摩擦を遣るですよ。
お綱　だつて、それがお前さんのお湯なんぢやありませんか。日に二度くらゐ、大薦脱で、しやぼんで臍まで洗ふんだよ。――而して磨くの。……(とお藤に云ふ)
お藤　然う……(と氣なし)
お綱　おめかしつちやありやしない。其のかはりお湯ツたら、精々御勉强で月に二度。……然うね、暮には大晦日の晩を入れて……一度……三度の事があつたつけかね。
旬作　風呂は度々浴びるは、其の、衞生に害があるです。僕はめかすぢやないですが、冷水摩擦は身體を强壯にする唯一の方法ぢやね。貴方、何う思ひますか、えゝ、別嬪さん。
お藤　結構ですわね。
お綱　身體を誰と競爭するの、役者？(と低い聲でお藤に訊く)
お藤　否、御丈夫になさるんですとさ。
お綱　お前さん、(と旬作に) 痩せちや居るが、そんなに脂肪ぎつてる癖に、其上丈夫に成つて何うおしなんだね。
旬作　飽くまで身體を强壯にして、大事業を起さんならんで。
お綱　おや、……地形を起す……女護の島へかえ。

お藤　否、立派な事をなさるんですとさ。
お網　無理心中は不可いねえ。
旬作　馬鹿な事言はんもん。
（と机の前に行き、壁際の二枚折の屏風を取つて、引廻して、其の中にて、にきびとりを顏にぺた〳〵。だらだらと頭髮に油を塗り、種々に櫛を入れる。）
お藤　それでは、おかみさん、晩ほどに……
お網　あゝ、其の方と御一所に。……お前さんの顏を見ると、立違つて私が出て、（と旬作に目を遣つて）皆留守にして…… 狹い處だけれど、明渡してあげますわ。
お藤　濟みません、それでは何うぞ。
お網　お待ちなさいよ。丁どお茶が入つたから。……いえ、お前さん、好いてする事でなくつても、稼業となれば繁昌が可うござんす。祝つて故ッとお出花さ。
お藤　折角ですから頂戴して。（と一寸坐直る）
小取廻しにお網茶を入れる。合方あり。――船蟲の紋次、薄汚れた袷、古浴衣をかさね、三尺帶。片手な矢藏、人相の惡い頰被りで、三尺ばかりの、づんどに切つた太い青竹の先へ、繪馬を一面ぶらりと下げたを、肩に引掛け、花道から、さびた聲の陰氣な節にて、はなうた。）
紋次　戀ゆゑに、魂拔けうか〳〵と、來て見りや小春の人でなし、二十九枚の起請文、投げた治兵衞が――と（唄ひさして）へッ、笑かしやがらあ。（と門口にかゝり、ひそ〳〵と窺ひながら）へい、御免下せえまし。（と覗くやうに開けて入る）
お網　おや、お前さんは？
紋次　へい、私あ、其處等川端を這つて歩行く、蟲のやうな、けちな奴でごぜえす。向後お見知り置き下せえまし、へい、へい。（とおじぎをする）
お網（可厭な奴と、座を立つて）兄哥さん、何か用かい？
紋次　何ね、おかみさん、お宅樣のこツちやねえんですよ。其方の、其處においでなせえます姐さんがね、扇橋裏の繪馬屋へ、此繪馬をお誂へなすつたんで。こりや、其の繪馬でね。
お藤　まあ、持つて來て下すつたんですか。
紋次　手を入れる所をすつかり拵へ上げておいておくれ。急いでだよ、後で取りに來るから。……ト恁う言置いておいでなすつたさうですが、私が通りかゝつたもんだから、繪馬屋のおん爺が、お前さん、私がなまけて、日は永し、のら〳〵ほつゝき歩行く事を承知でね――別に用事もあるめえし、つい一寸屆けて上げや。そらの、こゝに、願主、寅の二十一歲女と、書入れた姐さんは、お網さんて髮結さんの許へ行つて居なさるから――と、恁う

云ふもんですからね、へい、持つて參つたんでごぜえますよ。

お綱　それは何うも。

お藤　ね、おかみさん、まだお話しはしませんでしたけれど、此方の棟梁も、地主樣の掛額の景氣附に、皆なと池上樣へお出掛けなさるッてことですから、私も其の願がけのお叶ひなすつたお嬢さんに、蔭ながらあやかりたし、棟梁に、お邪魔でも、託かつて、繪馬を納めて頂きたいと思ひましてね、誂へて來たんですわ。――（紋次に）あの、若衆さん、御苦勞樣。（と帶に手を入れる）

紋次　あ、もし、姐さん。出過ぎましたが、決してお駄賃、へい、御祝儀は頂きません。外の事と違えまさ。御信心のお使ひだ。錢金づくに成つちや御勿體ねえ。否、決して、何うして、何てつても頂きませんよ。

お綱　お藤さん、まあ、あゝ言ひなさるもんだから。

お藤　そりや、濟みませんねえ。（と繪馬を頂く）

お綱　兄哥さん、一服おあがんなさいまし。

紋次　へい、ぢや何うぞ頂かして下せえまし。可いお住居でございますねえ。えゝ、もし、姐さん、些と申兼ねましたが、それぢや一服頂かして下せえましな。

お綱　川邊さん、お前さん、卷煙草があるでせう。（と屏風の上から覗いて言ふ）

句作　胡蝶を持つとるですが。

お綱　え、胡蝶ですつて？　お前さんのなら蝙蝠でせう。貸して頂戴。

お藤　（煙草盆の世話をする）

お綱　おや、唯た一本。

句作　足りんですか。

お綱　何だねえ、箱ごとお出しなさいなね。（と引つたくつて、此方の紋次に）さあ、おあがんなさいまし。（とさし置いて、長火鉢の向うへ歸る）

紋次　（もぢ〳〵と捻くりながら、お藤の顏と、見くらべ〳〵）一寸もし、……私あお恥かしい性分でごぜえまして、恁う云つたハイカラな卷いた奴あ、一向に下さりません。刻みを何うぞ、次手にお煙管を……長えのを何うかね。

お綱　（可厭な奴と、云ふ顏つきにて）お藤さん其處にありませう、上げて下さい。

お藤　はい……めしあがれ。

紋次　へい、頂きますがね。姐さん、姐さん、迚も頂くくらゐなら、お前さん、一服吸ひつけておくんなせえな。

お藤　えゝ。

紋次　姉さん、其の、花の蕾に眞珠てッた處へ、一寸押着けて、あい、てつて、くの字なりに吸口を向けて寄越し

てをくんなせえよ。

お綱　何だつて。

紋次　ねえ、造作のねえ事ぢやごぜえませんか。不可ませんかい。

お綱　不可ませんよ。

紋次　そりや不人情と云ふもんだ。私だつてお前さん、お稻荷樣が引越しをする樣に、繪馬を擔いで來たんぢやありませんかね。

お藤　ですから、お前さん……

紋次　おつと！　其の御駄賃は御無用だ。頂かねえと云つちや金輪際、一錢だつて頂かねえ。今日は、死んだ母親の命日だ。一生涯に唯一度の追善供養の氣で背負つた繪馬さ。御布施の十錢ぐれえ此方から出して遣ら。

お綱　異う云ふね、（とづゝと出て）お前さん何と云つたえ。死んだ母親の命日だつて。其のお前さん命日に、强請がましい事を云つちや、濟みさうもないもんだがねえ。

紋次　へ、此方等式あ、間違つて、媒妁人入れた夫婦でも、阿爺と阿母とあ割床だ。死んだもの丶命日に、吸ひつけ煙草をのむなんざ、お線香のかはりになりまさ。是非戴きてえね。不可ませんか、不可ねえんですか、不可ねえのか。おい！　雪の膚に緋縮緬。賴むつてんだ、姐さん、分らねえな。

お綱　お默り。一寸、此處を何處だと思つてるんだ。髮結のお綱の内だよ。憚りながら御當節は、廓でも吸附煙草は御法度だよ。手前どもでも法度でござんす。

紋次　分りました。御華主の御新姐さん、娘さん徒が、いけえこと出入りをしなさる處だ。風儀の惡い、吸附煙草なざ、一切法度だと、恁うおつしやるんだ。

お綱　當然さ。

紋次　よく、お前さん口賢え事を云ひなさるねえ。其處等の姐えと、若え男を引摺込んで、逢引宿をしなさるのは、風儀が惡くはねえのかね。

お綱　何だとえ——あゝ、彼れこれと面倒くさい、男が居ながら。……川邊さん、出て來て對手をおしなさいよ。

何作　（ぐじ〳〵と、しり込して）　然う云ふものには、對手にならんが可えですよ。

紋次　然うだ、然うだ。可い料簡だ。引込んで居ねえ。お前は學者だと見えて先が見えらあ。解りが可いぜ。出る幕ぢやねえんだからな。えゝ、もし何うでございますかね。

お綱　何だつけかね、覺えのない事は、つい忘れた、言へるものなら、最う一度言つて御覽。

紋次　言はねえでよ。若え男を引込んで、其の姐の宿をするのは、風儀が惡くはねえかと云ふのよ。吸つけ煙草が

御法度なら、逢引宿は御禁制だ。恁う、八幡鐘ならきぬぎぬの絲でからげて背負ひもしようが、使ひはやまに廻されて、繪馬をかつぐ兄哥ぢやねえ。此間から、其の姐さんに、首つたけで、影のついた樣に出入りは知つてるから、扇橋の繪馬屋のお爺も、私が威かして引攫つて持つて來たんだ。一服のみてえばつかりよ。惚れたが無理かえ、察してくんねえ。恁うぶちまけて云つたからにや、お前が空耳を走らかして、輪に吹く煙が、眞圓な月になつて、一日が暮れても、歸らねえから然う思へ。

お藤　（挑りかれて）一寸一服。……

お綱　お止し！　こんな言懸りをされた上ぢや、たとへ、此の人がお前さんの情人だつて、煙草をつけさして成るものかね。私がさせない、お綱がさせない。あい、私が點けさせないが何うするえ。

紋次　何だ。（と立身上りに件のづんど切の青竹を引寄せる）

（些と前、よき程に、大工長三郎、腹掛、股引、印半纏、つツかけ草履、吉原かぶりに出で。）

長三郎　あゝ一貫三百ア何うでも可い。（と口拍子、團扇太鼓をたゝきながら、門口に來て、内の聲高なるに、樣子を窺ひ、裏へ廻つて、臺所口の暖簾から此時づゝと出る）や、船蟲、――蟲ぢやねえか。

紋次　えゝ。

長三郎　豪勢、威張るな。

紋次　へい、こりや棟梁の内でごぜえすかね。

長三郎　むゝ、俺が小指の内だが、其が何うした

紋次　え……驚いた。へい、結構な、お住居でごぜえすねえ

長三郎　九尺二間の三間切よ。何も然う驚くほど結構な長屋ぢやねえ。

紋次　だが根太がしつかりしてまさあね。

長三郎　船ぢやあるめえし、お前に身ゝんだいをされてぐらつく樣ぢや、雨降りの度に流されつちまはあ。いや、雨と云や、お天氣模樣が怪しく成ツたぜ。汐の加減か、てめえ、妙な處まで游いで來たな。

紋次　這つて來た蟲でごぜえす、陽氣の所爲でね。へい、決して汐加減で泳ぎ出したわけぢやありません。這つて來たんだ、棟梁、何にもおつしやらねえで。……えい、もし、何方も、こりやあ折角だから頂いて參りやす。次手に火を貸しておくんなせえまし、これでも癩病ぢやごぜえやせん。へい。（と小さくなつて、それでも圖々しく卷煙草を銜へて出て行く）

お藤　（嬉しさうに、ほつとして）棟梁、好い處へ。

長三郎　やあ、こりや、少いお師匠さん。

お藤　あれ又。……（とうつむく）

長三郎　トやツた處で、迷はせる奴さ。

お綱　串戯ぢやない、何だい、あれは？……

長三郎　水溜に湧いた蟲さ。しみツたれた奴だけれど、因つた事にや——お前見たか——何時でも持つて歩行きやがる、あの青竹の中へ、蚯蚓な、油蟲、毛蟲——船蟲は己が綽名だ。——申すにも不及よ。蜈蚣に、馬陸、青い蜥蜴、紫色の蜘蛛も交ぜて、どつさりこと拾ひためて、うじや〱と詰めて居て。……

お綱　えゝ。

お藤　まあ！

長三郎　何處でも強請り込んで言ふ目が出ねえと、歸りがけに、あの、それ、入れものゝ栓をはづして、疊とも言はず、敷居とも言はず、ほた〱と蟲を落して仇をするのよ。から最う、其術に掛つちや、腕づくにも、力づくにもかなはねえ。時々は五錢と三錢、閑釣に俺が出た時なんか、煙草錢をくれて置くもんだから、仔細なしに歸りやがつた。蝮指で引捻つて、あの栓を抜きやあしめえかと、ありやうは俺もびく〱したのよ。意氣地はねえが、（ト胸をたゝいて）こゝで嫌ふんだから遣瀬がねえ。おまけにお前、あの青竹のな、處々、ぽち〱斑の入つた、色の變つてる處と來た日にやあ、其の下に嚙付いて、右の青蜥蜴や、紫蜘蛛が、可恐しい毒を吹いて居るんだつてな、誰も慄毛を震ふんだせ。

お綱　如何な事でも。……どれ、鹽花を振つて置かう。

（とばら〱と撒く。其處へお藤が立つて來て、）

お藤　長居をしましたね。おかみさん、そして、（と茶棚の上に置いた繪馬を指して、お綱にさゝやく）ね……ね……可ござんすか。……

お綱　む、む、（と頷きながら、出拔に故と調子高に）長さん、少いお師匠さんが精事の願掛、其の繪馬を池上様へ預かつて下さいとさ。（と一息に云ふ）

お藤　棟梁、後生です——おかみさん覺えて在らつしやいよ。（と門をぱつたり、空を視めて）此方と曇りましたわね。

お綱　晩には、春雨さ。

お藤　あ、可い鹽梅に、先刻の奴の影も見えない。（と歸る）

長三郎　（逸早く繪馬を取つて見て居て）願主、寅の二十一歳女、惱ませるせ。なあ。

お綱　可哀相に、お藤さんも苦勞をするねえ。見なすつたかい、窶れたよ。

長三郎　また一倍とよくなつた、堪らねえなあ。（とすぐ出さうにする）

お綱　御飯は？　棟梁。

長三郎　飯所ぢやねえ　でん／＼太鼓で夢中になつて、今日は朝から怠けて居るが、一軒仕事場へ顏だけも出さねえぢや、方げえしの着かねえ處が有る。トすぐに引返して地主樣で酒だ。其勢で樽天王よ、お嬢さんをおみこしにして繰出すんだが、評議の模樣で、品川迄船になるかも分らねえ。然うだ、お藤さんに見惚れて忘れて了つた。うまくなつたせ、や、一貫三百アどうでも可い、と恁うお稽古の出來た處を、お前に見せようと思つて中返りをしたんだ。

お綱　泣かずに澤山お遊びなさい。

長三郎　何もお前だつて、俺の稼ぐ處へ惚れ込んだ譯ぢやあるめえ。聞きや、お藤さんの色男も立派な華族の若樣が、其の爲に勘當されて、下宿にくすぶつてると云ふぢやねえか。諸事、色事は勘當をされるに限る。なまけるに歸したもんだ。――いやあ。（と仰山に）大將、御勉強だね。

旬作　ヘツヘツ。（と苦笑ひ）

長三郎　ぽかと來て花もちらほらと云ふ土曜日だ、お出かけなせえな、池上へ……一所、はどうですえ。

旬作　脚氣の氣味ぢやで、遠足は不可んですよ。

お綱　不景氣な病氣だねえ。

長三郎　船になつたらお出なせえな。

旬作　危險ぢやからね

長三郎　何が危險だ、お前さん、學者の樣でもねえ、日本は島だと云はあ……船に乘つてるも同一ぢやありませんかい

旬作　けれどもです、引くりかへると堪らんですよ。

お綱　引くり返つたら泳ぎなさいなね。

旬作　僕は燗徳利ぢや。

長三郎　燗徳利は賴もしいね……何うしてゞすえ。

旬作　些とも泳げんです。入るとすぐにぶく／＼ですが。

長三郎　何んのこつた、賴もしくねえ。

お綱　お前さんの方は、船は大丈夫だけれど、上つてから岡場所へお沈みなさんなよ。

長三郎　（雪駄をつッかけながら　一人ぢや沈みつこなし……だが恁う云ふのと、（紬馬をさして）と共々なら、奈落の旅も厭はねえ

お綱　惡い蟲だよ。

長三郎　また鹽はなぢやねえか。（と格子ながらり）

お綱　手まへどもは、世帶持、鹽はめつきり高値うござんす。

長三郎　しほが高いと鷗が泳ぐぜ、や、一貫三百ア何うでも可い。（と太鼓をたゝいて出て行く）

（恁る處に、地主、兩換屋勘右衛門、差配の娘おせき、

十四五になるを連れ、羽織の腰に瓢簞をつけ、おせきに塗杯と臺を持たせ、勝手口より入り來たる。）

勘右衛門　（手拍子にて）四海波靜にて、國も治まる時津風、枝を鳴らさぬ御代なれや。（となかしな節）

お綱　まあ、地主樣の旦那、臺所から……可厭ぢやございませんか。おせきさんも、何うなすつたんでございます。

勘右衛門　はッはッはッ、いや、高橋きつての中年增、相ひかはらず、眩しいな。

お綱　大層御機嫌でございます事。

勘右衛門　相に相生の松こそめでたかりけれ……と何と、恁う出た處は、芝居の捌役と見えよう、が、然にあらず、可い年をして捌かれ役、厄介をかけに來た。いや、別儀でないがな、今度それ一人娘の三輪的に、婿どのを取當てた。

お綱　申後れました、おめでたう存じます。

勘右衛門　三國一ぢや、それは可しよ。當人戀婿と云ふもので、天井拔け有頂天は仔細ないが、傍で見る俺が堪らぬ。一昨年、それ、閻の講中、と云ふ、かけがへのない婆どのを亡した俺よ。嬉しいにつけても思出してな、一倍と寂しうて我慢ならんぢや。處で、信心を企てゝ、今日た此の地内の、お長屋總體、世間で札所長屋と云ふ通り、三十三軒の、觀世音、辨財天、愛染樣、すべて女體にておはします方々へ、ずらりッと札を打つて、新姐、年增へお神酒を獻じて、俺もお流れを頂戴するわさ。中には三途川の婆と云ふのも居らんではないがな、いや、又、此處の内のやうに、堂守が留守の山寺は、信心が格別よ。一ッ祝つて飲んでおくれ。それ、お關坊、杯を出したり。

お關　一軒々々、お供なんでございますわ。（と笑ながら臺を据ゑる。）

お綱　お祝ひ申して頂きませう。旦那、恁うした處は、高砂でございますね。

勘右衛門　いや、其の高砂は尉と姥で、直ぐに姥を思出すと、あの嬉しさうな娘の顏を見せたら、と淚で此處へつつかける。處で、四海波を謠ふ奴さ。

お綱　旦那のお謠は長唄のやうでございますとさ。

勘右衛門　昔取つた杵づかさ。婆どのが、恰ど此のおせき坊くらゐな年よ。何か、俺と云ふものに、ぞつこんでの、おまけに此の娘にそつくりな容色好し。

お關　又おはじめなさいました。それを云ふなら、もうお供はしないッて云つたぢやありませんか。

勘右衛門　おつとあやまる。さてお重ね。……三杯くらゐは可からう。三つくらゐは溜めても可いが、四月、五月と成るとかくされぬ。些と家賃の方も入れなさい。

お綱　恐れ入ります。

勘右衛門　はゝはゝ。扨てお肴ぢや。それ、お關坊、婆さんの少い女、出さつせえ。

お關　知りませんよ。……あの、おかみさん。（と水引をかけた包を出す）

お綱　まあ、これは、何うも。

勘右衛門　何と五月、恐れ入つたか！（と瓢箪の上へ突袖して）處で、隣家の左官へ廻らう。あの又た媽が、塗る事、塗る事、白子の地藏を拜んで遣らう。

お綱　旦那、いツつけますよ。

勘右衛門　いツけるなら、六月たまつたと云つてくれ。……もう此れ猶豫なし流れ月だ。おつと、川端の作人に流れるは禁句だつけ。枝を鳴らさぬ御代なれや。

（とおせきをつれて、のいと出て行く。）

お綱　おもしろい旦那さんねえ、川邊さん。

何作　黠物ですなあ。

お綱　其の癖金佛樣なんだよ。——さあ、片づけものをして置いて。（と鏡臺を置直してきちんとするうち。……何作本をおき、のぼせた顔して、大ためいき、袂からはながみを出して、額のあぶらをべと／＼と頬に拭き、眉をしかめながら、小形の姿見を出して覗き／＼、やがて、小刀の背を返して、頬から頤を、べたりと扱いては、作のはながみに塗すつて居て。）

何作　おかみさん。（と呼ぶ）

お綱　はあ。

何作　人間の顔と云ふものは、どうして恁う汚いもんですウ。（と歎息する）

お綱　えゝ、何故さ。（と妙な顔）

何作　拭うても／＼膏が浮く。……穿つても、潰いても、にきびが吹くで。

お綱　まあ、可厭だ。聞いても恐れる。（と眉を顰める）

何作　迷信でも可い。何か、禁厭なとないもんですかい。

お綱　ありますね……先刻、此處に居たでせう。あの綺麗な人に、撫でゝ貰へば、卽座に治つて、玉子に目鼻に成りますわ。

何作　（生眞面目に）しかしです、頼んでも肯いてくれんですだらう。

お綱　まづ、不可ますまいね。（と背後向く）

（何作兩手で額を壓へる。ばた／＼とお蔦駈出で、縺然と入つて、いきなりお綱の背中へ抱つく。）

お藤　おかみさん。

お綱　あら、吃驚した、何うしたの。

お藤　來たわ！　入らしつたのよ、何うしませう。

お綱　其の方？

お藤　はあ。……

お綱　はあもないもんだ、此人は。何うしませうツて、ー此方へお通しなさいなね。

お藤　ですけれども、何處に在らつしやるか分らないんですもの。

お綱　落着いて下さいよ、お前さん、何うしたと云ふんだね。

お藤　私が家へ歸らうとする　途中で出つくはしたものですから、急いで引返して來たんですけれど……一所に來た事は來たんですけれど……

お綱　馬鹿にしないねえ。いゝ人を途中へ落ことして來る人がありますか。

お藤　何うしたら可いでせう、一寸。（とそは〳〵する）

（露地を附いて入つた車夫、喜藏、お藤が開けたまゝの格子戶から、ぬいと顏を出して、）

喜藏　へい、お駄賃を願ひます。

お綱　（立かゝつて）おや、車でおいでかい。

お藤　否。

お綱　ぢや、お蓮樣が其處へ入らしつたのかい。（と車夫に云ふ）

喜藏　お連樣ですか、何ですか、お供をして來ました方は、何處へおいでなすつたか分らねえんで。

お綱　一寸、じれつたい。誰の車賃さ。

喜藏　其の姐さんのでさあ。

お綱　矢張、お前さん乘つて來たの。（とお藤に云ふ）

お藤　えゝ、其は然うなのよ。

お綱　何を云つておゐでだね、若衆さん、そして、如何にど。

喜藏　濟みませんが、圓助頂かしておくんなさいまし。

お綱　高いぢやないかね、何處から乘つたの。

お藤　ぢき其處の小名木川通からよ。

お綱　馬鹿にしないねえ、お前。

喜藏　ですがね、お二人分ですからね。

お綱　一寸、相乘かい。

喜藏　串戲ぢやありません、半分づゝ二人で、お乘んなすつたんで。

お綱　二人で？　半分づゝ？……だから相乘かと聞くんぢやないか。

喜藏　否、お連の方は、初め兩國からお供をして、扇橋まで、と云ふお極めで參りましたんですが、小名木川通りへかゝりますと、向うから、其の姐さんがおいでなすつたんでさ。其奴を見ると、突然お前さん、お連の方が、下ろせ、で以て、飛下りたんでせう。ひつたり附着いてへゝ、二人で何か云つておいでなさるかと思ふと、其姐さんが、ぽつと櫻色になんなすつた。……。

お藤　（はつと片袖で顔を隱す）
喜藏　と思ふと、お前さん、入交（いれかは）つて、姐さんがお乘んなすつたらうぢやありませんか、ねえ。それから、其おさしづ通に、此方樣まで參つたんで、へい。お駄賃の所は、どちらから頂くんだか分りませんが、お連樣は、からつきし、其ッ切、何處へ行きなすつたか知れませんから、何うぞ此方樣で願ひたいもんですが……吃驚賃を入れますと、一兩ぢや、お易いもんです、へい。
お綱　分りましたよ。（と立てかへて喜藏を返す）
お藤　おかみさん、（と片手をがみをして）後生、一生、出て見て、お連れ申して下さいな。
お綱　だつて、所番地も言はないで、一人で車に乘つて來たのかね。
お藤　えゝ。
お綱　えゝぢやないわ、しつかりおしよ。
お藤　だけれど、日が暮れてからのつもりだつたのに、眞晝間、あの銚子通ひの川蒸汽に乘る……下りる……人ごみの處でせう。私、くわつとして了つて、（と耳をおさへて）夢中なの——四方八方、見られては、知れては大變ばかりですもの。自分で目を塞いで來ましたわ。……町の名ぐらゐは然う云つたやうに思ひますけれど、……露地ですから、知れますまいよ。私は出られません。後生だから見て來て頂戴。（と息せいて云ふ）
お綱　どんな方さ？　私だつてお目にかゝつた事はないんだからねえ。一寸（ちよいと）、どんな方さ、一寸？
お藤　どんな方つて……あの。（極（きま）りの惡さう）
お藤　焦（じ）れつたいねえ。
お藤　堪忍して下さいな。……だつて、何時も然う云つてるぢやありませんか。
お綱　あゝ、色の白い、鼻筋の通つた。……
お藤　（頷く）
お綱　目つきの凛々しい、口許の優しい。
お藤　（頷く）
お綱　縞の着物に、絣の羽織で。……
お藤　（頷く）
お綱　申分のない。
お藤　（頷く）
お綱　勝手におしよ。（と門を出る）
（お藤あとについて、露地を眴（みま）はす。）
お藤　うまく行逢つて下さると可いけれど、路が違ひはしないか知ら。
（こゝに淸元の合方（あひかた）あり。お藤、扇を露地に立てゝ方角を占ふ。やがて、心ゆかし。目じるしのつもりにて、縮緬の手拭にくる〳〵とまいて帶にさしたる黄金の地

の扇を開き、富士なりに、俯向けにして、格子に掛け、手拭にて結び止めて、……）

大分曇つたよ。（格子をしめる）

（と舞臺薄暗くなる。お藤、上へ上り、鏡臺に向ひ、鬢のほつれを掻上げる。再び本を讀んで居た佝作、のそ〳〵と立ち、じた〳〵と震へるばかり、音をひそめて、お藤の背後から肩越しに姿見を覗く。顏映る。）

お藤　あれ、可厭な顏が、あれえ。

（ふり返りさま、佝作を突飛ばす。不意をくらつて尻持をつきながら、）

佝作　へゝ、へゝゝ。（と笑つて、机の前へ摺戻る）

お藤　（身震ひして、鏡臺に面を伏せる）

お綱　（信夫を連れて出で、扇に目をつけ、莞爾と信夫の顏を見て）さあ、何うぞ

信夫　（無言にて會釋しながら、扇は其のまゝにして、ともなはる）

お綱　お藤さん。

お藤　あ。（と顏を上げる）

お綱　町の曲角の處に立ていらしつたよ。

お藤　（笑顏に成る）

信夫　驚いた、何うも弱つたよ。（と許り）

お綱　貴方、何うぞ、こんな所でございますから、お氣味が惡うございませうが、まあ、お敷きなすつて下さいましな。

お藤　おかみさん、何うぞ、もう

お綱　さあ、貴方、お召ものが汚れますからさ。

信夫　否、（と云ひながら、蒲團を敷く）お邪魔をいたします。

お綱　飛んだ事を、貴方、何ういたしまして。まあ、お茶を一つ入れませうね。

お綱　おかみさん、何うぞ、……あの、私がしますから。

お綱　なさりたいでせう、然うでせう。ほゝ、ではなさいまし。私は臺所の用が少々。……洋燈掃除をして、直ぐに出掛けますから。……お藤さん、精々働くんですよ。

（と笑ひながら立つ）

お藤　（うつとりと成つて、思はず、信夫の袖に手を置く）

（と、佝作、湧出る額の汗を拭ひながら、ぬいと頭を上げて覗く。信夫、これを見て、屹と拂ひのける。お藤心づき默つて茶をつぎ、茶臺にのせて、そツと出す。信夫默つて取つて、目で佝作の方を敎へ、頤でさしづする。お藤かぶりをふる。信夫目で叱る。お藤打顰みながら、又一つ茶臺にのせて、信夫の背後から佝作の前へ持つて行く。）

お藤　如何です。

旬作　はあ。
お蔦　貴方、前刻から、詰めて御勉強でございますね。
旬作　(慌しく本をかくして)　えらく、怠けて居るですが。
お蔦　否、御勉強よ、毒だわ、貴方、そんなになすつちや。而して、貴間そんなになさいましても、晩方から御近所の娘さんを迷はしちや不可ませんねえ。
旬作　些とも迷はんですなあ。
お蔦　あら、嘘おつしやい。
旬作　わはは。(とだしぬけに、はめをはづした高笑。片隅の葛籠の上へあたまを抱へて寝倒れる)
お蔦　(呆れて、興さめ顔)
(座に戻ると、信夫、此の間に別に一個、茶碗を茶臺にのせて置く。お蔦見て。)
おや。(と嬉しがる)
信夫　(済まして)　お前もおあがり。
お綱　さあ〳〵、出かけよう。(と手拭に包んだ石鹸の箱を持つて)　川邊さん、お前さん湯へ行かないか。
旬作　(むつくと起き、横ずわりに成つて)　今日は止めぢや。
お綱　何故さ。
旬作　冷水摩擦で洗うたから。
お綱　何も、おつきあひだね。一寸、湯はつけたり、……異な驕りと云ふのがあるんだから。
旬作　ふむ。
お蔦　おかみさんが、お鰻を驕りますとさ。
旬作　いや、鰻は腹にもつて不可んですよ。
お綱　おや、軍鶏、……ね、軍鶏にしませう。
旬作　然うか。
お綱　然うかつて人があるものかね。
旬作　軍鶏なら、軍鶏なら可えが、僕はまだ腹がくちいでなあ。
お綱　贅澤な事をお言ひでないよ。
旬作　だつて時刻が早いぞ。
お綱　だから一風呂浴びてさ、薩張りした處で、濡手拭を提げて、お前さんと吉野屋の二階で差向ひに成らうと云ふ、こゝに一人粹な年増が居るんだあね。
旬作　然うか。
お綱　然うかは困つたね　さあ、お出掛けなさいよ。
旬作　だが、何も、一所に出んでも可えではないかね。
お綱　ですから、お前さんは格子戸から、私や勝手口から、可いかい、両花道の出としようよ。
旬作　然うか。
お綱　一寸、串戯ぢやない。然うかは弱りましたね。よう、川邊さん、それから中仕切をトン〳〵、番臺で顔を見合

せて、兩方の戸をぐわら〳〵。淺くとも淸き流れの、とか何とか云ふので出てさ。吉野屋で一重櫻。あとで寄席へ行きませうよ。

何作　然うか。けれども、寄席もつまらんもんなあ。

お藤　貴方、そんなお附合の惡い事云ふもんぢやありませんわ。

何作　ぢや、まあ先へ行くさ。僕は最う些と經つてから。

お綱　そんなに長湯ぢやありません。

何作　然うかい。けれども、まあ緩りで可からうが。（とぬすみ目にて、信夫とお藤をじろり〳〵）

お綱　否さ、焦つたいねえ。

信夫（居住居を直して）お藤、私は最う歸らう。

お藤　まあ、（と顏を見る、目がうるんで怨めしさうに）罪になりますよ。（と笑顏をつくる）

お綱　えゝ、もう、川邊さん、粹事の眞似をすると云ふのに、分らない人だねえ。

何作　然うか、あゝあ、それぢや出ようかな。何だか、脚氣で、氣が重いで。

お藤　貴方、內にばかりいらつしやると、蟲が湧きますよ。

何作　何、其かはり、冷水摩擦をやつとるですよ。（と漸つとこさと尻を立て、さて、つゞらの蓋をあけて、たゝんだ、めりやすの襯衣を引出し、古足袋、汚れた靴足袋などを引散らかして見て居る）

お綱（まづよしと）早々となさいよ。門へ廻るから。——御免なさいまし。（と氣早に臺所に入る）

何作（小首を傾げ）はてな、靴にしようかな。（と茶色の靴足袋をはき、あとを片づけ、羽織を着て、衣紋を直し、袖口を引張る）

お藤（泣出しさうに成つて、身もだえして、信夫の袖を握つて居る）

何作（また、唐縮緬大巾の帶を解いて、胸高にしめ直し、本箱の上の石鹼箱を、手拭にくるんで袂に入れ、柱の折釘へ引つかけた古い山高帽を取つて、ソツと指のさきで頂邊を彈いて頭に頂き、古新聞に包んだ、靴を出して、ふツ〳〵と吹いて、上間へ、ポカンと置く）

お藤（勇みなをし）お出かけですか。

（と出しなに信夫の背中を、しめたと云ふ心、一つたたいて、何作の背後に立つて、押出す身振）

お綱（もう廻つて出て居て、此時覗く）何をしてるのさ。おや、（と吃驚して）へえ、靴を穿いて來るの、お前さん、湯へ行くのに。

何作　然うか、しかし湯からすぐに軍鷄屋へ行くぢやないですか。

お藤　大相、面倒なんでございますこと。（と何作が一々、

紐なかどるので、堪らなく氣を揉む）

旬作　はあ、加減をして、だまし／＼遣らん事には、此の紐がよぢれるですで。

お蔦　お手傳ひ申しませうね。

お綱　早くなさいよ、川邊さん、先へ行つて待つてるよ。

（と見かれてついと行く）

お蔦　（白い指で、旬作の靴につかまり紐を結ぶ……）

（合方あり。――香水の薫（かをり）ゆかしき鬢の毛をかきあげしまゝ横櫛に、さすや窓もる月の影――）

信夫　（ちつと、これを見詰める）

旬作　これは。（片手で帽を脱ぎ、据ゑて持つて、片手を開けて結ばせる）

（お蔦結びながら、ト信夫と顔を見合せて、貴方、おもてを背ける。）

お蔦　さ、貴方。

旬作　やあ、面倒でありました。

お蔦　お辭しな。（と背中をトンと叩いて出し、格子をばつたり、信夫の傍へ、飛び寄つて）ええ、生命（いのち）が縮まるやうだつた。何だらう、まあ、お綱さんも氣が利かないぢやないか。親類うちに都合があつて、當分一人預かつて置くんだつて。……大抵分つた人の癖に、今日あたりは、何處かへ遂出して置けば可いのさ。……尤も、日が暮れてから來るつもりぢやあつたんだけれど。……もゝんぢいッたらありやしない。

信夫　一寸、もゝんぢいは、さしがあるよ。

お蔦　氣樂ねえ。憎らしい。（と心付いて）お忘れもの？

（と格子へ云ふ）

旬作　（此の時小戻りして來て、扇と手拭を、ひこ／＼と嗅いで居て）いや、何、別に。……（と、のそ／＼引込む）

お蔦　あゝ驚いた、動悸がこんなんですわ。

信夫　（更めてぢつと顔を見て）お蔦、お前、あの、あいつの靴の紐を結んでくれたか。私の爲に。……（とほろりとする）

お蔦　小指一つも貴方のものを、勝手に使つて濟みません。

信夫　あゝ濟まんよ、濟まないとも。

お蔦　だつて。……

信夫　だつてぢやないんだ。小指どころか、他（ひと）に口を利くんでも一々斷つてくれないぢや。……

お蔦　ですけれど、些とも早く、恁うして二人に成りたいんですもの。私や餘り焦つたくツて、あの邪魔ものさへ、拂へれば、死んでも可いと思ふほど、氣が違ひさうに成りました。

信夫　あの邪魔ものばかりなものか。世間が皆んな邪魔をすら。勝手にしろ！　何を！　今日の思ひばかりでも、

添ひ遂げないで置くものか。

お藤　添へるでせうか。

信夫　添つて居らあね。

お藤　それでも、思ふやうに、話さへ出來ないんですもの、果敢ないわねえ。

信夫　辛抱するんだ、辛抱するんだ、お互に。……待つ間が花だと云ふぢやないか。

お藤　其の花も咲いたのに、藝妓に成つて私や何うせう。雨だの、風だの、可厭な顔だの、……（と云ひかけて、心付き）あゝ、一寸、……（と立つて）明るい處へ。（と鏡臺を直す）

信夫　何をするんだよ。

お藤　一所に顔を映して頂戴。先刻、可厭なものゝ、顔が映つて、私、氣に成つて、氣に成つて、仕様がないんですから。……

信夫　何をくだらない。

お藤　ねえ、また此上に、藝妓に成つて、苦勞をするんぢやありませんか。一度ぐらゐは、言ふことを聞くものよ。

信夫　はい／＼畏まつたよ。

（二人ならぶと、臺所から廻つて、旬作、そつと入り、ぬつくりと背後に突立つ。）

お藤　あれえ。（と振向く）

信夫　（吃驚して）何だ。（とお藤に）何うしたんですか。（と旬作を見る）

旬作　忘れものをしたですから。

（と机のまはりを搔探し、本箱を覗き、やがて又葛籠の蓋を開けて、悠々と雜物を引出す。）

お藤　（震へながら）見て上げませうか、何なんです。

旬作　貴女には分らんですな。僕の心と同じものですで、

お藤　（むつとして）一生、こゝに居てお探しなさいましよ。

旬作　やあ、熱いです。

（と額を拭ひながら、羽織を脱いで、ぐつたりと胡坐かき、壁に凭懸つて目を瞑る。）

信夫　（屹と成つて、つツと立ち）お藤。

お藤　あい。（とうろ／＼して縋寄る）

信夫　面倒だ、私は歸る。（云ひなり門を出る）

お藤　一所に行くの、よう。（と追縋る）

信夫　並んで晝間歩行けるかい、馬鹿。

（と突戻して、街と花道にかゝる時、若衆大勢、揃ひのなり、一同、團扇太鼓をたゝきながら。）

伊助　さあ、様子の可い處を、町内の娘子に見せて廻らうぜ。

呂八　迷はせろ、迷はせろ。

波太郎　やあ、ぽつり／＼降つて來た。
仁造　花の雨だ、構はねえ。
穗之助　濡れる事、濡れる事。
（と口々に騷ぎ立てゝ、練つて來る。信夫の姿、其の間に亂れて入る。お藤、駈出さうとして、此に憚つて、一旦格子の內へ小隱れる、どや／＼と通つて一同入る。）
お藤　（そつと出て、信夫のあとを遙々との如く見詰めながら、目を扇子に返し、手拭を解き、扇の面を額に當て、はら／＼と落淚する）
（鶯啼く。櫻の花片ちら／＼と其姿にかゝる。）
句作　（うそ／＼とうかゞひ出で、下からお藤を覗込む）
緘次　（ひそんで、出窓から、內の狀をさし窺ふ）
お藤　えゝ。（と云つて、開いたまゝ、扇で句作の額を打つ）
句作　（額をふせられたまゝ、めんない千鳥で、よろ／＼と膝を支く）
お藤　口惜しいね。（と其のまゝ、手拭の端を皓齒で嚙む）
（櫻ばら／＼と靜に、颯と雨の音。――幕。）
（新內のながしにてつなぎ、雨の音しと／＼と直ぐに幕あく。）

下雁々松

舞臺、向つて右の方、暗き水、流を見せず、波を立てず。水の外は、凡て場割の土手模樣、松の木立すくすくあり、松の色なりたけ黑きがよし。あとにて此の間へ月出で、櫻の花びら散かゝる。苫船一艘、苫をかけ、土手より離し、棹を深く立てゝ此に繫ひあり。岸より船べりに歩みの板を渡す。奧へ此の板とならべて橋をかける。お綱と信夫、橋を渡りて出づ。此の場面の時、汐滿ち船高し。はじめ、そぼ降る雨、やがて朧、のちに凄きまで月の色を渡る。尙ほ勝手よき松の根に、荷車一臺あり。水の彼方に木場の景色、松のむかうは灯入りにて、遠見の廓。
幕あく、と件の荷車に、土地のごろつき三人、一人は腰かけ、一人は蹈み、一人は立かゝりて、頰杖つき、どれも蓑と、笠と、炭の明俵にて風體をかへながら、額を交へ、無言にてひそまりつゝ、一方へ目をそろへて、獲もの來る、と囁き頷く。
お綱　（信夫をともなひ、吉野屋とかいた番傘をさしかけて）貴方、此土手を一つ眞直に越しますと、直きに大門でございます。其の近所に、些ともさしのない、極、あの、安心な家がありますからね。

信夫　かさね〴〵、御迷惑をかけて、實に濟まない。
お絅　私は何の造作もあるんぢやありません。ですが、貴方、貴方は、もしか、私がお留め申さなかつたら、お藤さんをあれなり殘して、歸つてお了ひなさるおつもりだつたんでございますかい。餘りですわねえ。ですが、それと云ふのも私が不行屆きから起つたんでございますがね。
信夫　そんな事はありやしない。おかみさんの方は、日が暮れてからと云ふ手筈に成つて居たんださうだ。忍んで逢ふのに、眞晝間は何事だらうと、お藤にも散々こゞとを言はれたんです。でも、さあ、と成ると、矢も楯も……
……（苦笑す）そんなこんなで、焦つたさの餘り、癇癪が起つて、つい、ね。
お絅　御尤でございますとも。否ね、お湯屋へ入つて、帶を解きかけましても、まだ、番臺越に、あの、川邊むつちり殿の形が見えますまい。氣に成りますから、半纏を脫いだまんま、戸外へ出ても、まだ見えませんから、一足づゝ內の方まで歸つた處で、貴方が顚々して駈出しておいでなすつた。……と其始末で、何でもお歸りなさると云ふ。歸しちや私が濟まない。立話しも出來ませんから、吉野屋で一口さしあげて、お引留め申したんですが、あの娘とは違つて、怨みつらみは、私の方がうまいでせう。ほゝゝ、（と微醉）大分お困んなすつたやうですね。其のかはり、これから好い處へ貴方をお連れ申しますと、すぐに私が引つ返して、　殊によると、お藤さんは、私の處から、最う扇橋の內の方へ歸つて居るかも知れませんが、其のまんま連れ出して、私が前刻の入れ合せに、ゆつくり明日までお逢はせ申しますから、澤山可愛がつてお貰ひなさいましよ。
（と來かゝると、三人、件の荷車を、狹い土手の眞中へ引き摺り出し、横に木戸を築いて通さず、行違ひに、つけまはして、千鳥がけに行途を遮ぎる。二三度搦んで）
信夫　何をするんだ。
一松　何だと。
二九郎　何にもしねえ。
お絅　通しておくれ。
三十　勝手に通りやがれ、往來だ。
信夫　車を横にするから通れんぢやないか。
一次　默つて口をきけ。何處だと思ふ。此方人等の車は、横に引くと極つてるんだい。
お絅　あゝ、分つた。お前たちは喧嘩を賣つて、どぶろくを買ふ氣だね。
二九郎　巫山戲た事を。

三十　遣つけ了へ。

一次　白壁の染がきめら。

（と五人入亂れる。三人は、蓑と笠と、あき俵にて、おの／＼顏をかくし、片手のみにて亂暴するゆゑ捗がゆかず。お綱、信夫、それ／＼あしらふ　両倒れ、と三人、蓑など棄てゝ立ちかゝると、一たまりもなく、お綱は荷車にかけて仰向けに、信夫は松の樹に押しつけられる。）

お綱　（其の時、奴等の顏を透かし見て）おや！　お前たちは、一や三十ぢやないか。

一次　えゝ、おかみさん。

三十　や、お綱さんか。

二九郎　こりや、堪らねえ。

一次　棟梁にや、内證で、内證で。

（と吃驚敗亡で、一目散にばら／＼遁げる。）

お綱　呆れた奴等だよ。まさか、お米番の氣ぢやあるまいねえ。

信夫　おかみさん。

お綱　あゝ、貴方、お怪我をなさりはしませんか。

信夫　私は何うもしやあしない。其方が婦だからひや／＼した。

お綱　雁々松の此の丁場は、いやな、貴方、凄い處でございましてねえ。

信夫　雁々松と云ふのかい。

お綱　すら／＼、松の樹が、霞の中に並びました景色が、雁が飛ぶやうに見えるんですつて。寂い處で、暮れると人通りもありませんがね、土地ッ子が御一所ですから、大丈夫でございます。あゝ、丁ど雨もあがりました。さあ、出かけませう。（と入る）

（其のあとへ、貸本屋利吉、懐手をかじりながら焦つて通つて、これも入る。と花道から、按摩平孫、コトコトと杖を鳴らし、仰向けに、目を白く、鎌首へかゝる。お藤、氣のぼせのしたる風情、うろ／＼早足にて出で、ばつたり行逢ふ。）

お藤　あの、按摩さん

平孫　へえ。

お藤　一寸、今しがた、此の雁々松で、喧嘩があつたつて、お前さん、見やしませんか。

平孫　見た？……見えやしないねえ、私には、はあ。

お藤　あ、悪かつた、お聞きなさりはしなくつて。

平孫　聞きましたよ　はあ、見たも同然だ、……お前さん。目の前で、えゝ……遣つたね、えらく遣つたねえ。くわッと、怯う、遣つゝけたねえ。

お藤　ひどい喧嘩。

平蔭　ひどい喧嘩、大喧嘩！　えゝ、何うも、そりや、激しいの何のつて、戦だね、大砲を打たないと云ふまでの事たね、可恐しうがしたぜ。私あ、腰を抜かしたあ、お前さん、血みどろ血ンがい。

お藤　えゝ、血を出して、何方です。

平蔭　何方つて……其……相手と……相手とでねえ。

お藤　何ですか、相手は七八人で、此方は二人とか、一人とか言ふんですけれど。

平蔭　一人？……

お藤　一人ですか。

平蔭　一人、……だがね、其の何かね、お前さん、知合かね。

お藤　知合と云ふんでもないんですけれど、一寸、其の一人は、どんな人……

平蔭　どんな人と云つて、其の、何たねえ。

お藤　學生さん風の方ぢやないか知ら。

平蔭　學生さん風の、それ／＼、少い人さ、少い、色の。

お藤　白い方よ。眉毛のすつきりした、目の凛々しい、絣の羽織をめした。

平蔭　其の通り、瓜二つ！

お藤　えゝ、何うしよう、私、乾と、柏木の若様だよ。

平蔭　若様々々、若様と云つた、……さあ、大變、

お藤　而して、お怪我でもなすつたんですか。

平蔭　怪我、怪我どころか、生命もあるめえ、怪我にも何にも、お前さん、大怪我だ。から額が眞二つ。衣服も何にもずた／＼だ。血みどれ血ンがい。其處等にも、ぽたりぽたりと、棒ほどなが落ちて居よう、私の下駄になんぞ着いて居はしないか。得て、こんな事からかゝり合に成るものだ。あゝ可恐え、可恐え、長居はおそれだ。

（と、きよと／＼入る）

お藤　何うしたら可いだらう。……まさかと思ふけれど、信夫さんだつたら私何うしようねえ、而して何處で、何うした喧嘩か知ら。（とうろ／＼する）

（目の前へ人が見える。即ち是川邊句作。薄暗がりなり、お藤、氣が急いて心付かず。）

お藤　貴方々々、一寸お尋ね申しますが、つい今しがた、大喧嘩がござんしたつて。

句作　へゝゝ、お藤さん、へゝ、名を知つとるでせう、僕ですが、川邊ですが。

お藤　あれ、又……（と怯えて）何うして貴方、此處へ。

句作　何うして言うて、先刻、前程にも、言うて、あの通り、膏汗を流いて一生懸命に言うたですが、然う言うた上に成つたからには、此れからと云ふもの、川邊は、貴女の影法師同然ぢや思うておくれえ。膠、漆で附着いて、死

ぬまで離れはせんですよ。……僕ぁです、先きへ死ぬ時は、貴女を嚙み殺いて、冥土でも一所の釜にうだり、同じ血の池に沈み、同一針の山で、突き刺されるまで離れぬ云うたでないですか。貴女、藝妓になると云ふ。僕買ひに行く金がなかつたら、區役所のかへりに寄つて、門へ立つとる、料理茶屋でも、待合でも一晩中……夜があけるまでも外に立つとる。湯に入れば……矢張立つと、と誓つて云うたではないですか。前刻は、貴女が聲を立てた――長屋がわや／＼出て來るから放したですが、矢張り此の通り、貴女が來る方へ、影に成つて、附着いて來とるですよ。此處では喚いても聞えんですぞ。（と袖を捕む）

お藤　可厭。

（と振放し、駈出すを、甸作追縋つて抱留める。）

甸作　走れば走るです。飛べば飛ぶです。然うすると比翼の鳥ですなあ。へゝゝ。

お藤　川邊さん、眞個に、串戲ぢやありませんよ。

甸作　串戲でないです。生命がけです。

お藤　否、串戲ぢやない、離して下さい。

甸作　放しはせんです。此の、此の、白粉ですか、香水ですか、此の香が堪らない、筋も骨も。

お藤　何んですね、路傍で見つともない。

甸作　恥も外聞もないですよ。

お藤　信夫さんはお怪我をなさるし……其處々々ぢやないんだわ。放して下さい、よう。（困じて泣く）

甸作　（其まゝ、身をおしに凭れながら、二人岸にのぞむ）然う言はんで、顔を見せておくれえ、顔を見せておくれえ。（と袖でかくしたのを覗込むやうにする）

お藤　（かぶりを掉る）

甸作　わあ、血だらけのものが流れて來た。

お藤　（吃驚して水を見る）

甸作　（すかさず、其の肩を抱きながら、同じやうに川の面に顔を映して）見なさい。貴女の影のやうに見えて、僕の身體は離れんでせうが。（とにや／＼）

お藤　（きつぱりと）其の船へ行きませう。

甸作　船へ行くかね。而して、何うするかね。

お藤　分るやうに話をしませう。

甸作　可いねえ、船は可いねえ、へゝゝ。

お藤　貴方、まあ、おいでなさいまし。

甸作　（前へ立つて、其船に岸から渡した板を渡る）手を引くかね。

お藤　危いわ、そんな事して。（と熟と見込んで、衝と膝を支くと、サソクに兩手に板を取つて引つくりかへす）

甸作　わッ。（ざんぶと落込む）

お藤　（手づかみに、二ツ三ツ、石を打込み、やがて、すつと立つ。時に拭へるが如く月出づ。振り仰いで、松ヶ枝はづれに月を凝視めて、笑顔寂しく）　あゝ嬉しい。お月様には、可厭な影が映らない。（其の時はら／＼と擦散りかゝる）　まあ、綺麗な、あれ／＼、月の前を、花片が、花片が／＼、あれさ、お前さんたち、汚い男の上に落ちや可厭。

（と袖で拘ふやう追つて、散るのをひら／＼と扇で圍ひ、花びらを受けて、袂をかへして、うつかり視つめる。思ひがけぬ裳を摑むで、水中より、句作の手、腕きながらぐいと引く。お藤はたと横に倒れる。句作呻き呻き、一度あたまを出す。其の手、お藤の襟にかゝる　お藤ひかれながら扇を脱ぐ、片袖するりと、緋の長襦袢、扇を取つて、丁と句作の手首を打つ。打てども離さず、次第に引込まれて、お藤の姿、汀に反返る。トタンに、もやひ船の苫を撥ねる、と胴の間に船蟲の紋次。）

紋次　（それと見るや、枕にして居た、白丁を取つて、ドンと句作にたゝきつける。急所に當る）

句作　（音もなく、これにて沈む）

紋次　（其のまゝ艫を取り、上段に大きく振りかぶつて、獸つて水中を見込む）

お藤　（身を起すと、よろ／＼となつて、松に縋る）

紋次　（其の時、艫をうしろへ投げて、又胴の間に、もぐり込む）

お藤　あゝ、（とほつと息）　袖も濡れるやら、綻びるやら……此ぢや町へは出られない。

（と、荷車の嚢を取つて引かける。手拭ひを、吹流しに、街へ。少時打傾いて立ちながら、すた／＼と行かうとするを、紋次船べりに頰杖して、覗ひ居る。）

紋次　おい、姐さん、姐さん。

お藤　あゝ、私。

紋次　待ちねえ。……一寸、用がある。

お藤　え、！

紋次　いや、きづかひなもんぢやねえ。（といひ／＼結から一跨ぎに、ひらりと上る）

紋次　恁う、姉さん、何處へ行くんだ。

お藤　（見て）　まあ、お前さんは前刻見えた。……

紋次　蟲だよ、船がありや船蟲も出らあな。吃驚するにや當らねえ。何處へ行くよ。

お藤　（おど／＼しながら）　一寸其處まで行きますわ。

紋次　交番へ自首するのか。

お藤　いゝえ、はあ、あの、何ですつて？

紋次　恁う、とぼけちや不可え。お前は取逆上せて何にも

知るめえが、私あ船に居て殘らず見たんだ。鯤のやうな野郎だつて、人間一疋殺したからにや、お前もすつぱり身を投るか、松の枝へ扱帶でもぶら下るだらうと思つたら、かくれ蓑とおいでなすつた。呆れるぢやねえか、おい。

お藤　何にも言ひません。お前さん、後生です、見のがして下さいましな。

紋次　不可えよ。傍に居た私が、かゝり合に成つて迷惑だ。丁と極りを附けてくんねえ。人間は一疋取替、殺し度かあ殺すのよ。其のかはり自分も死ぬんだ。人殺しをしたあとで、のめ〳〵色男と長生をしようなんて、そんなづうづうしい奴があるもんか。岡々しいより、汚ねえ了簡、しみつたれた、けちな性根だ。そんな事は深川にや流行らねえ。

お藤　あの、……私のだいじな方も、酷い怪我をなすつたと言ひますし、もう、死にますつもりでいたしました事ですけれど……

紋次　未練が出て、逢ひたくなつたか。

お藤　何うなすつたか、案じられてなりませんもの。……お前、あの平

紋次　むゝ、其の安否なら聞かして遣らう

紋次　……

（以下上段続き）

紋次　むゝ、其の安否なら聞かして遣らう。お前、あの平家按摩に、ヅドンと一發當てられたんだ。當世の火縄銃、古い嘘をつく名代な奴よ。私が見て知つて居ら。若え奴あ、すりむき疵も着けられやしねえ。

お藤　眞個ですか。

紋次　殺せ、活せの、かけあひ最中、嘘を云つてる隙はねえ。（と屹と云ふ）

お藤　まあ、嬉しい。あの方は、御無事なのね、あゝ、難有う存じます。

（と、あはれに、思はず手を合せて紋次を拜む。紋次ぶつと、もの思ふこと）

紋次　拜んだな。さあ、此佛がついて居る。安心して往生しねえ。

お藤　何うぞ、あの、お前さんを、佛樣と思ひます、手を合せて拜むから、……

紋次　見のがしてくれぬかね。いんや！　助ける方ぢや佛にならねえ、拜まれねえよ。さつさと手前で片づけねえか。おい、首をくゝるか、身投げをするか、それなら佛で見物すらあ。おい、何うする。

お藤　はつ。（と泣崩れる）

紋次　（石に片胡坐、青竹を支いて頤を撫で）泣いたつて助けねえ。私なんざ、傾城の涙で藏がもつた举句なんだ。見ねえ、いゝ月夜だぜ。雨さへ降らなきや、婦の涙で笠は着ねえよ。

お藤　（思ひ餘つて、遁げようと立上る。取つて引戻す）

紋次　えゝ、卑怯な奴だ。（と引捕ゑる）

お綱　（戻り道、これを見ると、駈けつけて、紋次を突遣り）何をするんだえ。（トお藤を庇ふ）

紋次　何もしねえ、月夜にや、船蟲がてんとう蟲よ。其姐さんが、お前許の、あの、むつゝり野郎を、川へはめて殺した處を見て居たから、げしにんを取つに遣らうと云ふんだ。……言句はあるめえ。禮を云つて、煙草の一斤も購んねえな。

お綱　川邊を、こ、ころしたつて、お藤さんが。（とお藤を、抱くやうにして、仕うちにて聞取り、一度川の面を凝と見る）えゝ、まあ、お藤さん、飛んだ事をしてくれたねえ。

お藤　堪忍して……おかみさん。

お綱　堪忍するもしないもないけれど、さし當つた當惑より、お前さんの身の上が危さに、私は身體が震へるよ。まあ、何より自首をして出る事におしなね。後は何とも相談しよう。おい、紋次か、卑怯な遁隠れなんぞしやあしないよ。私がついて、出る所へ丁と然う申して出るが、何うしたえ。言句はなからうね。

紋次　然うかし、其奴に自首なんか、雲隠へでも隠れる氣だらう。てんとう蟲が然うはさせねえ。

お綱　默つておゐで。（お藤に）自首するね、名のつて出るわね。

お藤　おかみさん、見遁がして下さいましよ。

お綱　見遁がすにも何にも、私は夢なら覺めて欲しい、と唇を嚙んで居る。……髪の毛を引張つても、目が覺めたいもの、何うしよう。人一人殺しちや遁げおほせられはしないから、思切つて名告つてお出よ。向うにはね、町の方にはね、お藤は來ないか、最う來さうなものだと、旦那が、……可いかい、其の筋の若旦那が、立つたり、居たり、待つておいでだよ。さあ、行かう、私と一所に、名のつて出ようね。

お藤　（はじめて頷く）

お綱　見たか、船蟲、潔く自首して出るのに、いざこざがあるなら、言つて御覽。

紋次　可、いざこざはねえから行きねえ。一所に附いて行つて見屆けようから。

お綱　あれさ、お前も、御苦勞な、附いて來るには及ばないわね。

紋次　べらぼうめ、人間の歩行く通り、お月様の歩行くを見ねえ。何處までも、てんとう蟲はついて廻らあ。お前たちが出る處にや、責道具に酒を並べて、緋の羽織のお奉行が、ほつれた鬢の御詮議だらうが、然うは問屋でおろさねえとよ。

お綱（はつと腰を落して）然うまで知つておいでだものを、此の上は隠さない。何うか、此處は、情で見遁してあげておくれ。家財道具を賣つてなり、半纏を脱いでなり、お前さんの酒代は、乾度私が拵へるから。お前さんもいゝ若いものぢやないか、後生だ、察しておやんなさいよ。

長三郎（出で、小がくれて、うかゞひ居る）

紋次　錢金ぢや、人の命は買はれねえ。川邊付作を殺したんだ。どの道助かりやしねえぢやねえか。

お綱　私手をつくよ、手をついて頼むから。

紋次　煩えな。

お綱　では、恁うしよう、とに角一時でも、半時でも、お前さん、猶豫をして、お藤さんを、生命にかけた大事な人に逢はせておくれ、ね、それだけなら可いだらう。

紋次　然うまで云ふのに、嵩にかゝつて、阿漕な事も言はれめえ。それだけの事なら。……

お綱　肯いておくれかい。

紋次　まあ、聽さ。恁う、其のかはり唯ぢや不可え。お藤さんが一寸逢ひに行つて歸るまで、貧乏ゆるぎもさせねえで、おかみさん、お前を此處に留めて置くが、それでも可いかね。

お綱　あゝ、可いとも、人質に成らうよ。さあ、お藤さん、はやくおいで。

紋次　其處で、おい、其の間、松の下に二人で立つても居られめえ。苫船の中へ連れて入るか、それでも可いか。おまけに見ねえ、蜈蚣に蚰蜒、青い蜥蜴に、紫の蜘蛛のうじやと詰つた、此青竹と膝組だが構はねえか。

お綱（分別して）覺悟をしてます。可うござんす。（と二人立ちかゝる）

長三郎（默つて、領き〳〵見て居る）

お綱　さあ、お藤さん、おいでなさい、さつきの方は、叶屋の二階だよ。

お藤　おかみさん、私、ぢきに戻らねばならないんですか（とおろ〳〵して云ふ）

お綱（其の顔を熟と見て）察しておくんなねえ。

お藤　可厭、おかみさん、自首するのも可厭、牢屋へなんか、私、死ぬより倚つらい。然うかつて、死にたくないんですもの、助けて下さいましよ。お前さん、見遁しておくんなさいよ。

紋次　狀あ見やがれ、あの通りだ。

お綱（つゝと寄つて、お藤をおさへ）分らない人だねえ。お轉婆ものゝ我儘から、此の體裁に成つたけれど、自分で云つては恥かしいが、私は此でも、……死ぬ場合には死んで見せるよ。覺悟をおしなね、お藤さん、氣をはつ

きりとおもちなさいよ。

（と落ちた舞扇を取つて、二ッ三ッ、嚢の上から續け打ちに打つて、丁と振りあげる。長三郎躍り出でゝ、其の腕を支へ、ぐいと取つて引く。）

長三郎　何をしやがる。船から見た、土手の樣子が尋常ぢやねえ。お前たちのやうでもあるし、……一人であがつて來て樣子は聞いた。此ン畜生、お綱、てめえ、人質に成るくらゐな事を恩に被せて、聞分けがないと焦れ込んで、打ちたゝきをしやがつたな。些とばかりの達引を賣ものにしやあがる、けちな土根性、踏みのめしてくれる。

（と突放す）

お綱　あゝ、棟梁、お前の氣にも可恥かしい。何の恩になぞ被せるものかね。餘りお藤さんが可哀相、ものゝ色も見えないやうに、恁う狼狽た心だと、私が身に代へて逃さうたつて、逃げおふせるものぢやない。交番の前ぢや倒れます。氣をはつきりとさせようと思つたばかり。此の手の冷めたさ見ておくれ。扇子を上げた、と思つたら、指に覺えも何んにもないもの、（と紋次に）お前さんは、又た餘まりな。鷺の羽を挘るやうな、恁うした處を、見て居ながら、些ッとでも、いぢらしいと思はないかい。眞に今年三十四まで、隨分のんきに暮したけれど、たゞ一時の心配に、肉を殺いで瘦せるやうな、お藤さん、堪忍して頂戴。

（と肩を抱いて、はつと泣く。お藤、其の膝にしつかと、取縋りて、顏を見まもり。）

お藤　おかみさん、棟梁、私、人殺しをして置いて逃げたい、みれんな根性と、おさげすみなすつちや、口惜しいわ。はづかしい。柏木の若樣が、怪我をなすつたと、夫だけ、見ず知らずの按摩さんに聞いた時さへ、活きて居る氣はしませんでしたが、川へ人を落してから、急に死ぬのが可厭に成つた。……御覽なさいな、汚ならしい、可厭らしい、川邊が、冥土に待つて居るぢやありませんか。母さんは大病でも、まだ冥土ぢやありません。父さん、大きいお師匠さん、棟梁、おかみさん、誰も居ない……川邊一人が居る處へ、何うして私が行かれます。……そればツかりで、私は死ぬのは可厭なんです。死にたくないわ、助けて下さい。よう、棟梁、おかみさん。

長三郎　（さしうつむいて居て）だつて、人殺しをしたものを、助けようがないぢやないか。

お綱　長さん、何とか分別をしておやんなね。無理はない。川邊さんが待つて居るなら、私だつて死ねないよ。

長三郎　おれも分別に餘つたなあ。

紋次　（澄まして、石にうしろむきに腰をかけ、巻莨をのんで居て、此の時、鷹揚に向直る）おい、お前さん方、い

ま、お藤さんか、其の姉さんの言つた事を、尤と思ふか、何う思ふ。

長三郎　（目たゝき）尤だ！　地獄、極楽あるなしは知らねえが、嫌ひ抜いた男と一所に、あの世へ行くのをいやだと云ふ、女心だ。可哀さうに。……私は無理はねえと思ふ。悪たお前も察してくんねえ、

お絹　眞個、無理はないわねえ。

紋次　（煙草を棄て、静に腕をくんで）私も思ふ。……何だか、暗え、だゝつ廣え、ばう〳〵と、風の吹く中で、其の姉さんが、あの涎に、追廻されさうな氣がしてならねえ。今夜は私がてんとう蟲だ。何うにかして遣る！おい、棟梁、これを見ねえ、あッ、（と咽喉を掻つて吐いて、桑紙にうけて）此奴を見ねえ。（と云ふ）

長三郎　たんつぼなんか突出しやがれ、潰しちや置かねえぞ。（と寄つて見て）や、青竹から金魚でも出しやがつたと思つたら、血だ、血だ。

紋次　振りかぶつて、其の時、川岸の石をハタと打つ、颯と竹破る、。長三郎思はず退さる）此の通り、よつ、贓物を蟄居へば、人間の腹も綺麗なもんだ。東海道は蒼空よ。八ッ橋の古跡のあたりを、紫の蜘蛛と青蜥蜴が、きりきりと這廻つて、血の中へ、藤の花を、ゆかし懸し、と纏込んでるぜ。私あ毒蟲を二疋と呑んだ。呆れるない！

一目お藤さんの顔を見てから、惚れて惚れて惚れ抜いたが、竹に封じた蟲同然、毒な私の身體だから、吸つけ煙草の無心くれえが精一杯で居た處よ。

長三郎　其のお前がまた何だつて、毒蟲を呑んだんだ。

紋次　棟梁、おめえさん、意気な人たちだ聞いてくんねえ。然う云つちや、のろいやうだが、手前で惚れた婦にや、柄の可い半纏の一筋も買つて遣つて、喜ぶ顔が見てえものよ。……が、俺の身體で何が出來る。くされ袷にずたずた三尺、婦の手に遣る物てッちや、此の生命の外にや何にもねえ。

長三郎　むゝ、其奴あ、お互だ。

紋次　よし、くれてやらう持つてけ生命、と、其氣で居たと思ひねえ。えゝ、お前さんたち、川邊の奴ア川へ落した、落したはお藤さんが落したが、串戯ぢやねえ、いくら相手が、あんた奴でも、所作事でホンと投る奴ぢやあるめえし、……踊の扇子で打たくらゐで、人間がくたばるかい。周章なさんな。急所を狙つて、白丁徳利を、ぐわん、と一番腦の中からおみまひ申して、彼畜生の、留めを刺したは、此の紋次だ。それ、見ねえ。お藤さんのために、人殺しをした俺ぢやねえか。覚悟がなくッて出來るものか。

長三郎　や、眞個か。毒蟲、こいつは暗夜だか、月夜だか、

見當がつかなく成つた。

紋次　むゝ、それと云ふのが、お藤さんが川邊を落したあとで、月からこぼれる花びらを、同じ流れに浮くな、と云つて、袖で庇つた緋縮緬。玉で拵へた姿を見たら、餘りと云へば美くしさ、辛抱が仕切れねえ、吸つけ煙草の一服さへ嫌はれる身體ぢや、長生するのも厭だからよ。

お綱　お前さん、そんなに、まあ、生命に掛けてお藤さんを手に入れようと思つたのかね。

紋次　串戯を云つちや不可え。算盤珠に當つてよ、生命を遣るから、俺の思を叶へてくれろ、と云つた日にや、金子を遣るから、轉べと吐す。……下根性も同一だ。江戸ツ兒が、そんなけちな了簡を持つものか。たゞで遣る氣よ。たゞ遣るが、其の半襟の一件だ。喜ぶ顔が一度見てえ。其の姉さんの樣子ぢや、人を一人殺したから、すぐに自分も死ぬだらう。首を縊るか、身を投げるか。飛出して、……其處を一番抱留めて、いや、身代りには俺が成る、待ちねえ、川邊を殺したのは紋次だ、と云つて聞かして、一目で可い、俺の顔を見て莞爾するのを見てえ、と思つた。處を、未練らしく逃げるぢやねえか。俺の方ぢや、おつかひものゝ生命を包んだ風呂敷包を開けられねえから、故とな、のつぴきさせず責めたのよ。分つたかね。——お藤さん、お藤さん。（お藤、傍へ、縋り寄る）呂律も些と、怪しくなつた、恁う後生だ、俺の遣る生命、……やすい半襟は氣に入つた、不斷がけにする、と一言云つて聞かしてくんねえ。

お綱　お藤さん。（と涙聲にて呼ぶ）

お藤　其の、お前さんの半襟は、腕まもりの袋に縫つて、一生膚身を離しません。何うしたら可いでせう、……お前さん、死なゝいで下さいまし、私や、たよりのない身體ですもの。

紋次　可愛いな、（と其の背に手をかけて）お藤さん、俺が達者で居て見ねえ、川邊が待つてるのが可厭らしさに、此の後百年たつた處で、壽命でも死なれめえぜ。……安心しねえ。俺が冥土へ行つてるからな、川邊の五人や十人、褌を旗に立てゝ押寄せたつて、氣づけえねえ。千年も、萬年も色男と添つたあとで、壽命でゆつくり遣つて來ねえ。其の時は、眞個の半襟を買つて遣らあ、な。嬉しいか。

お藤　………………

長三郎　嬉しからう、お藤さん、俺も一度此のくらゐに惚れて見てえ。

お藤　嬉しいよ、お前さん。（と紋次に縋る）

紋次　俺も嬉しい。えゝ、棟梁、惚れたと云ふ一念にや、人間何をするか知れねえな。我身に我身が分らねえ。苦

痛苦痛、賽の目は六と出て、人間の道中は止りらしいぜ。
あゝ苦しい、が素敵に可い心持ちだ。

長三郎　道理だ。

紋次　待ちねえ。下手人の方は片がついたが、可愛い人を襲者にして此上苦勞はさしたくねえ。棟梁、おい、其の繪馬を貸しねえ。此の青竹に引挾んでよ。可いか。繪馬を差げて思ふ人に添へるやうに願がけをすると云つたな。俤に願書差出しなんざ、まだるツこい、死んだものには見えるだらう。いづれ其處等に世帶を持つてる、むすぶの神に直訴をして遣る。（としつかと取つてだうと手をつき）お藤さん。たゞ殘惜いのは、お前の踊を見ないで死ぬんだ、お藤さん。

お藤　あい、あい、何うしよう、私、何にも言はれない。

紋次　それからな、死顏の見得を張るんぢやねえ、私も舊は身分があつた。親兄弟に恥かしい。蓑を着せてかくしてくんねえ。よう、お前の肩に着いたもんだ。畜生の淺ましさ、矢張り揚錢をかすする奴か。おい、引かぶせてくんねえよ。

お藤　あい。（と着せかけ、兩袖で肩を抱いて、顏をふせる）

お綱　お藤さん、親身の兄さんとお思ひよ。お前さんは、容色のいゝのが仇に成つたが、また其の美しさで助かつたよ、安心おしよ。

お藤　否、おかみさん、紋次さんが、私のために、冥土へ行つて下さいます。其處は川邊の居る處でも、些とも可恐い事はないんですもの。……最う何時でも死ねますわ、私一所に死にたいわ。

長三郎　むゝ、人情だ、人情だ。

紋次　（苦笑ひして、切なさうに）馬鹿を云つちや不可え、一所に死なれて堪るものか。俺とお前と見當違えな道行をして見ねえ、地獄へ行つて此から世話に成らうと云ふ、肝心な閻魔が吃驚して目をまはさあ。……そんな事より、引導がはりに、踊を一つ見せてくんねえ。

お藤　まあ、お前さん、私が何うして……

紋次　扇を持つて川岸へ立つたツ切、其で可いよ。散る花びらを扇で受けた。……あの姿がもう一度見てえと思ふ。

長三郎　お藤さん、死ぬ氣で一つ立ちねえな。――や、地主のお孃さんが皆を連れて、船から來たぜ（と云ふ）

（大萬燈花々しく、團扇太鼓を手に〳〵持ち、そろひの扮裝にて多人數出づ。其の中にお三輪、髮は三ツ輪に結てから、平打の簪、このみの帶。黑で格子、黃八丈、えりつきの一枚小袖、緋の紋縮緬の長襦袢。片棲を端折り、雪駄ばきなり。）

紋次　（最後の顏を上げて）おう、土地の兄哥か、若衆徒、

猪蟲の紋次ア人殺をして自分も死ぬんだ。見届けてくんねえよ。あッ！　お藤さん、さらばだせ。

（とばつたりのめる。お藤すがる。）

お綱　まあ、お孃さん。

お三輪　おかみさん、あの姉さんは。

長三郎　へい、皆でお話しいたしました、あれが扇裔のお藤さんでございます。

お三輪　（此のうち、舞扇を拾ひ、開いて見つゝ）貴女、お藤さん、澤山苦勞がおありなさいますッてね。貴女、出過ぎましたやうですが、お金子で濟む事だけは、私が何うにかいたしませう。……もう御心配なさいますな、そして、あの、其のうち、お浚ひをなすつたら、お上手だつて評判の踊を見せて下さいな。（といひつゝ、お藤に扇を渡す）

お綱　（一寸、頂き、默つて取る）

お綱　まあ、お藤さん、聞いたかい。あゝ、もう一人、些と早く、逢はしたい人がある。一寸勘太さん。……

勘太　おい。（と云ふ）

お綱　濟まないが、お前さん、一走り、大門前の時屋へ行つてね、私が云つた、と然う云つて、梅本さんと云ふ方に、急いで此處までおいで下さいましッて、頼まれておくんなさい。

勘太　然う云や分るね。

お綱　あゝ、直ぐにッて。

勘太　よしきた、東は辰巳の廓……（と駈けて行く）

お綱　若い衆さん、皆で會間をしようねえ。（一同太鼓をたゝく）

長三郎　おい、靜に、少し待ちねえ。（と更まつて）お藤さん、紋次が、あんなに焦れたんだ。一ッ、扇をお開きなせえ。……お孃さんも、今のやうにおつしやるんだ。……

お綱　まあ、お前さん、何うしてそんな事が。……お孃さんも、今が今、とおつしやるんぢやないんぢやないか。

長三郎　いや、何よりの功徳に成る。……死出の山も鼻唄で越すッてよ。……こゝろ意氣だ、紋次の心は、俺に分つた。さあ、お藤さん、思案しに立つて遊んねえ。

お藤　はい、（と頷き）お前さん、（と裳に縋つて）兄さん、兄さんと思ひます。……妹と一言云つて下さいな。（と扇を構へて、向直る　風の音頻と、しあたゝく、花びらかゝる）おゝ……枝ならば手向けたいねえ、花びらなり。（と此を受けつゝ、きりきりと扇を開く）

お藤　あれ、風が出て、——薄ら寒い。

お三輪　ぞッとするわねえ。……

長三郎　あゝ、まだ宵だらうに、夜半のやうだ。

お藤　（唄）曉の明星は、西へ、（とさす手、ひく手をためらひ、中空を凝と視て、細く透る聲、しめやかに）魂は何處においでだらうねえ。（と恍惚する）

（此の間頻に花ふる。）

（長三郎眞前に、いづれも團扇太鼓賑かに。――）

――幕――

夜叉ヶ池

場所

越前國大野郡鹿見村琴彈谷

時

現代。――盛夏

人名

萩原晃　鐘樓守
百合　娘
山澤學圓　文學士
白雪姫　夜叉ヶ池の主
湯尾峠の萬年姥　眷屬
白男の鯉七
大蟹五郎
木の芽峠の山椿
鯖江太郎
鯖波次郎
虎杖の入道
十三塚の骨
夥多の影法師
黑和尚鯰入　劍ヶ峯の使者
與十　鹿見村百姓
其の他大勢
鹿見宅膳　神官
權藤管八　村會議員
齋田初雄　小學教師
畑上嘉傳次　村長
傳吉　博徒
小烏風呂助　小相撲
穴隈鑛藏　縣の代議士
劇中名をいふもの。　（白山劍ヶ峯、千蛇ヶ池の公達）

三國嶽の麓の里に、暮六つの鐘きこゆ。――幕を開く。

萩原晃此の時白髪のつくり、鐘樓の上に立ちて夕陽を望みつゝあり。鐘樓に柱に蔦からまり、高き石段に苔蒸し、棟には草生ゆ。晃やがて徐に段を下りて、清水に米を磨ぐお百合の背後に行く、

晃　水は、美しい。何時見ても……美しいな。

百合　えゝ。

（其の水の井に菖蒲あり二三輪小さき花咲く。）

晃　綺麗な水だよ。（微笑む）

百合　（白菊の露に手を當てつゝ）でも、白いのでございますもの。

晃　そりや、米を磨いで居るからさ。……（框の縁に腰を掛く）お嬢さん働き者、せつかくのお手だ水仕事で嗄なしは恐多い、些とお手傳ひと行かうかな。

百合　可うございますよ。

晃　否……お手傳ひと云ふ處だが、お百合さんの然うした處は、咲殘つた菖蒲を透いて、水に影が映したやうで尚に綺麗だ。

百合　存じません。

晃　賞めるに怒る奴がありますか。

百合　おなぶり遊ばすんでございますものを——そして旦那様は、こんな臺所へ出ていらつしやるものではありません。早くお机の所へおいでなさいまし。

晃　鐘を撞く旦那はをかしい。實は權助と名を替へて、早速お飯にありつきたい。何だか可恐く腹が空いて、今、鐘を撞いた撞木が、杖にされば可いと思つた。處で居催促と云ふ形もある。

百合　ほゝ、又お極り。……すぐお夕飯にいたしませうねえ。

晃　手品ぢやあるまいし、磨いで居る米が、飯に早變りはしさうもないぜ。

百合　まあ、あんな事を——これは翌朝の分を仕掛けて置くのでございますよ。

晃　翌朝の分——あゝ、お世帶もち、然もあるべき事です。いや、其を聞いて安心したら、がつかりして餘計空いた。

百合　何でございますねえ。……お菜も、あの、お好きな鴫燒をして上げますから、おとなしくしていらつしやいまし。お腹が空いたつて、人が聞くと笑ひます

晃　（縁に上る）誰に遠慮がいるものか。人が笑ふのは、ね、お前。

百合　はい。

晃　お互に朝寢の時——

百合　知りませんよ。（晃、背向く）

晃　頻く蝙蝠が押寄せた。裏縁で燻して遣らう。（納戸、背後むきに山を仰ぐ）……雲の峰を燒落した、三國ヶ嶽は火のやうだ。西は近江、北は加賀、幽に美濃の山々峰、數萬の松明を列ねたやうに旱の焰で取卷いた、夜叉ヶ池へも映るらしい、丁ど其の水の上あたり、宵の明星の色さへ赤い。……なか／＼雨らしい影もないな。

百合　……其の龍が棲む、夜叉ヶ池からお池の水が續くと申します。此處の清水も氣の故やら、流が澤山痩せました。頃日は村方で大騷ぎをして居ます。……若さは强し

……貴方、お身體に觸りはしますまいかと、——めしあがりものゝ不自由な片山里は心細い、私は其が心配でなりません。

晃　流が細つたつて構ふものか、お前こそ、其の上夏痩せをしないが可い。お百合さん、其の夕顔の花に、一寸手を觸つて見ないか。

百合　はい、恁ういたすのでございますか。

晃　花にも葉にも露があらうね。

百合　あゝ冷い。衣の手にも涼しいほど、しつとり花が濡れましたよ。

晃　世間の人には金が要らう、田地も要らう、雨も降らなければなるまいが、我々二人活きるには、百日照つても乾きはしない。其の、露があれば澤山なんだ。（戸外に向へる障子を閉す）

百合　貴方、お暑うございませう。開けてお置きなさいましても、涼う、其方此方人も通りますまい。

晃　何、更つて、そんな心配をするものか。……晩方閉込んで一燻し燻して置くと、蚊が大分樂になるよ。

（時に蚊遣の煙なびく。）

（學圓、日に焼けたるパナマ帽子、背廣の服、落着のある人體也。風呂敷包を斜に背ひ、脚絆草鞋穿、杖づくりの洋傘をついて、鐘樓の下に出づ。打仰ぎ鐘を眺めつ。）

學圓　今朝、明六つの鐘を撞つて、こゝで暮六つの鐘を聞いた。……

（お百合は客に來たうへす。）

やあ、お婦が出ます。（と聲を掛く）

百合　はい。（見向く）

學圓　途中、峠の竹藪の處へ出て……暗く成つた處で、今しがた聞きました。時を打つたは此の鐘でせうな。

百合　然やうでございます。

學圓　音も凄い……立派な鐘ぢや。（と見上げ）鐘樓へ上つて見ても差支へはありませんか。

百合　（然る抱へて立つ）えゝ、大事ございません。けれども貴客、お串戯に、お杖やなんぞでお敲き遊ばしては不可ません。

學圓　何、鐘を買ふのではありません。決して敲いては見ますまい。（笑ふ）

百合　御串戯おつしやいます。……否、悪戯を遊ばすやうなお方とは、お見受け申しはしませんけれど、其の鐘は、明六つと、暮六つと、夜中丑滿に一度、三度のほかは鳴らさない事になつて居りますから、失禮とは存じましたが、一寸申上げたのでございます。さあ、何うぞ御遠慮なく、上つて御覧なさいまし。（夕顔の垣根につい

て入らむとす）

學圓　あゝ、一寸……お待ち下さい。鐘も見ようと思ひますが、ふと言を交はしたを御縁に、餘り不躾がましい事ぢやが、茶なりと湯なりと、一杯お振舞ひ下さらんか。

百合　お易い事でございます。まあ、貴客、此へお掛けなさいまし。

學圓　御免下さいよ。

百合　眞に見苦しうございます。

學圓　此は――お寺の庫裡とも見えません。御本堂に離れて居ますか。

百合　否、最う昔、焼けたと申しまして、以前から、寺はないのでございます。

學圓　鐘ばかり……

百合　はい。

學圓　鐘ばかり……成程、處で西瓜の一件ぢや。（帽子を脱ぐ、殆ど剃髪したる如き一分刈の額を撫でゝ）や、西瓜と云へば、内に甜瓜でもありますまいか。――茶店でもない様子――（見廻す）

（片山家の暮れ行く風情、茅屋の低き納戸の障子に灯影映る。）

此の上、晩飯の御難題は言出しませんが、如何とも腹が空いた。

百合　ほゝ。（と打笑み）筧の下に、梨が冷してござんす上げませう。（と夕顔の蔭に立廻る）

學圓　（がぶ／＼と茶を呑み、衣兜から扇子を取つて、煽いだのを、と翳して見つゝ）おゝ、咲きました。貴女の顔を見るやうに。

百合　えゝ？（問返す）

學圓　いや、葉の色を見るやうに。

百合　もう、年をとりますと、花どころではございません早く干瓢にでもなりますれば、……と其ばかりを待つて居ります。

學圓　小刀を此へお遣はし……私が剝きます。――お世話を掛けては却つて氣遣ひな。どれ／＼……旅の事馴れ、不器用ながら、梨の皮ぐらゐは、うまく剝きます。おゝおゝ氷よりよく冷えた。玉を削るとは此の事ぢやらう。

百合　旅を遊ばす御様子にお見受け申します……貴客は、どれから、どれへお越しなさいますえ？

學圓　扨て名告りを揚げて、何の峠を越すと云ふでもありません。御覧の通り、學校に勤めるもので、暑中休暇に見物學問と云ふ處を、遣つて歩行く……尤も、歸途です――涼しくは木の芽峠、音に聞えた中の河内か。（扇はづれに山見る眉）峰の茶店に茶汲女が赤前垂と云ふのが事實なら、疱瘡の神の建場でも差支へん。湯の尾峠を

越さうとも思ひます。——落着く前は京都ですわ。

百合　お泊りは？　貴客、今晩の。

學圓　あゝ、浮かり泊りなぞお聞きなさらぬが可い。言尻に着いて、宿の御無心申さんとも限らんぞ。はゝはゝ、いや、串戲ぢや。御心配には及ばんが、何と、其の湯の尾峠の茶汲女は、今でも赤前垂ぢやらうかね。

百合　山また山の峠の中に、嘘のやうにもお思ひなさいませうが、眞個だと申します。

學圓　谷の姫百合も緋色に咲けば、何も其に不思議はない。が、此の通り、山ばかり、重り果る、あの、巓を思ふにつけて、……夕焼雲が、めら／＼と巖に燒込むやうにも見える。こりや、赤前垂より、雪女郎で凄うても、中の河内が可いかも分らん。何にしろ、暑い事ぢやね。——漸つと此處で呼吸をついた。

百合　里では人死もありますッて……酷い旱でございますもの。

學圓　今朝から難行苦行の體で、暑さに八九里惱みましたが——可恐しい事には、水らしい水と云ふのを、此處へ來てはじめて見ました。此は清水と見えます。

百合　裏の崖から湧きますのを、筧にうけて落します……細い流でございますが、石に當つて、りん／＼と佳い音がしますので、此の谷を、あの琴彈谷と申します。貴客、それは、おいしい冷い清水。……一杯汲んで差上げませうか。

學圓　何が今まで我慢が出來よう、鐘堂も知らない前に、此の美しい水を見ると、逆蜻蛉で口をつけて、手で引掴んで、がぶ／＼と。

百合　まあ、私は何うしませう、知らずにお米を磨ぎました。

學圓　いや、しらげ水は菖蒲の絞、夕顏の花の化粧に成つたと見えて、下流の水は矢張水晶。さゝ濁りもしたかつたつが、村里一統、飲む水には困るらしく見受けたに、此處の源まで來ないのは格別、流れを汲取るものもなかつたやうに思ふ……何ぞ仔細のある事ぢやらうか。

百合　あの、湧きますのは、裏の崖でございますけれど。

學圓　はあ、はあ。……

百合　水の源は此の山奥に、夜叉ヶ池と申します。凄い大池がございます。其の水底には龍が棲む、其處へ通ふと云ひまして——祟があると可恐がります。——最う薄暗くて見えますまいけれど、其の貴客、流の石には、水がかゝつて、紫だの、緑だの、口紅ほどな小粒も交つて、其は綺麗でございますのを、お池の主の眷屬の鱗がこぼれたなんのッて、氣味が惡いと申すんでございますから……

學圓　綺麗な石が毒蛇の鱗か。や、かさ〳〵と、凄いことを遣つて了うた。（と扇子を以て胸を打つ）

百合　まあ、（と微笑み）私どもが此の年まで朝夕飲んで何ともない。其だのに、人は疑ふのでございます。

學圓　尤も、尤も。ものを疑ふのは人間の習ひですよ。私は今のお言で、決して心配はしますまい。現に朝夕飲んで居らるゝ、此の年紀まで。……（と打ち見遣り）お幾歳ぢやな。

百合　…………。

學圓　さあさ、失禮ぢやが、お幾歳です？

百合　御免なさいまし、……忘れました。……

學圓　はゝゝ、諺にも、婦人に對して、貴女は何時死ぬとは問うても可い、が、何時生れた、とは聞くな――とある。其は無遠慮に過ぎました。……お幾歳ぢやと年紀は尋ねますまい、時に幾干ですか。

百合　幾干かとおつしやつて？

學圓　代價ぢや。

百合　あの、お代、何の？……お宿……、ま、滅相な。お茶代なぞ頂くのではないのでござんす。

學圓　茶も茶ぢやが、いやあ此は、鐘のやうにもじや〳〵と聞えてをかしい。茶も勿論、梨を十分に頂いた。お商賣でなうても無代價では心苦しい。づばりと餘計なら默つても差置きますが、旅籠なり、御覧の通りの風體。丁と云うて取つて下さい。

百合　然うまでお氣が濟みませんなら、少々お代を頂きませうか。

學圓　勿論ともな。

百合　でも、あの、お代とさへ申しますもの、お貰には限りません。其のかはり、短いのでも可うござんす、お談話を一つ、お聞かせなすつて下さいましな。

學圓　談話をせい、……談話とは？

百合　方々旅を遊ばした、面白い、珍しい、お話しでございます。

學圓　其の談話を？

百合　はい、お代のかはりに頂きます。貴客には限りません、藥賣の衆、行者、巡禮、此の村里の人たちにも、お鐘に合ふものがござんして、其のお代をと云ふ方には、誰方にも、お談話を一條づゝ伺ひます。澤山お聞かせ下さいますと、お泊め申しもするのでござんす。

學圓　むゝ、此こそ談話ぢや。（と小膝を拍つて）面白い。お話しませう。……が、扨て談話と云うて、差當り――お茶代に成るのぢやからつて、長崎から強飯でもあるまいな。や、思出した。然も此の越前ぢや。

晃　（細く障子を開き差覗く）

（時に小机に向ひたり。双紙を開き、筆を取りて、客の物語る所をかき取らむとしたるなるが、學圓と雙方、ふと顔を合せて、何とかしけむ、燈火をふつと消す。）

百合　どんたお話、もし、貴客。

學圓　……時に此處で話すのを、貴女のほかに聞く人がありますかね。

百合　否、外にはお月様ばかりでござんす。

學圓　道理こそ燈が消えて、あゝ、軒端の椽で、よくには見えぬが、……納戸に月が射すらしい。――お待ちなさい。今、言ひかけた越前の話と云ふのは、椽の下で牡丹餅が化けたのです。たとへば、こゝで私がものを云ふと、其の通り、椽の下で口眞似をする奴がある。村中が寄つて集つて、口眞似するは何ものぢや、狐か、と聞くと、違ふ。と答へる。狸か、違ふ、獺か、違ふ、魔か、天狗か、違ふ、違ふ。……しまひに牡丹餅か、と尋ねた時、應と云つて消え失せたと云ふ――其の話をする氣であつたが、……まだ外に、月が聞くと言はるゝから、話を更へて、別の談話をする氣に成つた。お聞きなさい。此は現在一昨年の夏――

一人、私の親友に、何か豫て志す……國々に傳はつた面白い、又異つた不思議な物語を集めて見たい。日本中殘らずとは思はぬが、此夏は、由緒い北國筋の名所を渡り、傳つて尋ねよう、と夏休みに東京を出ました。――其切、行方が知れず、音も沙汰もない。親兄弟もある人物、出來る限り、手を盡して捜したが、皆目踪跡が分らんから、われわれ友だちの間にも、もはや世にない、死んだものと斷念めて、都を出た日を命日にする始末。いや、一時は新聞沙汰、世間で騒い噂をした。……自殺か、怪我か、遭難かと、果敢ない事に、容易ならんと觸る、袂を絞つて言交はすだに。あとを思ふにも、姑の、にも、何の因果もない男なやに。貴女、世間には變つた事がありませうな、……

百合　あゝ、貴客、貴客、嘸有う存じます……眞個に嘸有う存じました。（とにべなく言ふ）

學圓　そんなに話を云うて、婆代のかはりに成るのですかい。

百合　最う澤山でございます。

學圓　それでは面白かつたのぢやね。

百合　……おもしろいのは、前の牡丹餅の化けた方、あとのは澤山でございます。

學圓　扨て談話は此からなんぢや、今のは眞個の前提ですが。

百合　何うで、……結構でございますか、……而して貴客、話す時、成ります、お宿をお取り遊ばすにも御不自

山でございませうから。……

學圓　いや／＼、談話の模様では、宿をする事もあると言はれた。私も一つ泊めて下さい、――此の談話は實がありますから。

百合　先刻は、貴客、女の口から泊りの事など聞くんぢやない。……其の言について、宿の無心でもされたら何うするとおつしやつて。……最う、淸い涼しいお方だと思ひましたものを、……女ばかり居る處で、宿貸せなぞと、そんな事、……もう、私は氣味が惡い。

學圓　氣味が惡いな？　牡丹餅の化けたのではないのですか。

百合　こんな山家は、お化より、都の人が可恐うござんす、さ、貴客何うぞ

學圓　此は、押出されるは酷い。（不承々々に立つ）

百合（續いて出で、押遣るばかりに）何うぞ、お立ち下さいまし。

學圓　婦人ばかりぢや、とも角うも言はれぬか。鉢の木ではないのぢやが、蚊に焚く柴もあるものを、……常世の宿なら、恁う情なくは扱ふまい。……雪の降らぬがせめてもぢや。

百合　眞夏土用の百日旱に、たとひ雪が降らうとも、……（と立ちながら、納戸の方を熟と視て、學圓に瞳を返す）

御機嫌よう。

學圓　失禮します。

晃（衝と蚊遣の中に姿を顯し）山澤、山澤。（ときつぱり呼ぶ）

學圓　おい、萩原、萩原か

百合　あれ、貴方。（と走り寄つて、晃を留めるやうに、膝を突き手に晃の胸を壓へる）

晃　歸りやしない、大丈夫、大丈夫。（と低聲に云つて）何とも言ひやうがない、山澤、まあ――まあ、此方へ。

學圓　私も何とも言ひやうが無い。十に九ツ君だらうと、今の、顏を見た時、又先刻からの樣子でも然う思うた、けれども、餘り思掛けなし――（引返して框に來り）第一、其の頭は何うしたい。

晃　頭も何うかして居ると思つて、まあ、許して上つてくれ。

學圓　埃ばかりぢや、失敬するぞ、（と足を拭いたなりで座に入る）いや、其の頭も頭ぢやが、白髮は何うぢや、白髮はよ？……

晃　此か、谷底に棲めばと云つて、大蛇に呑まれた次第ではない、こいつは假髮だ。（脱いで棄てる）

學圓　はゝあ、……（とお百合を密と見て）勿論ぢやな、其の何も……

晃　こりや、百合と云ふ。

（お百合、座に直つた晃の膝に、其のまゝ俯伏して縋つて居る。）

學圓　お百合さんか、細君も……何、奥方も……

晃　泣く奴があるか、涙を拭いて、整然として、御挨拶しな。

（と言ふうちに、極り惡さうに、お百合は衝と納戸へかくれる。）

君に背中を敲かれて、僕の夢が覺めた處で、東京へ歸るかつて憂慮ひなんです。

學圓　（お百合の優しさに、涙もろく、ほろりとしながら）いや、私の顔を見たぐらゐで、萩原——此の夢は覺めんぢやらう……何、いゝ夢なら、敢て覺めるには及ばんのぢや……しかし萩原、夢の裡にも忘れまいが、東京の君の内では親御はじめ、

晃　むゝ。

學圓　君の事で、多少、それは、壽命は縮められたか分らんが、皆先づ御無事ぢや。

晃　あゝ、然うか。難有い。

學圓　私に禮には及ばない。

晃　實に濟まん！

學圓　扨て此は何うしたわけぢや。

晃　夢だと思つて聞いてくれ。

學圓　勿論、夢だと思うて居る。……

晃　委しい事は、夜すがらにも話すとして、知つての通り……僕は、それ諸國の物語を聞かうと思つて、北國筋を歩行いたんだ。處が、自身……僕、其のものが一條の物語に成つた譯だ。——魔法つかひは山を取つて海に移す、人間を樹にもする、石にもする、石を取つて木の葉にもする。木の葉を蛙にもすると言ふ、……君も此處へ來たばかりで、もの語の中の人に成つたらう……僕は最う一層、其の上を、物語、其のものに成つたんだ。

學圓　薄氣味の惡い事を云ふな。では、君の細君は、……（云ひつゝ憚る）

晃　（納戸を振向く）衣服でも着換へるか、髪など撫つけて居るだらう。……襖一重だから、背戸へ出た。……

學圓　（伸上り納戸越に透かして見て）おい、水があるか、蘆の葉の前に、欄にも月の光が射して、假髪をはづした髪の艶、雪國と聞く故か、まだ消殘つて白いやうに、襟脚　背筋も透通る。……凄いまで美しいが、……何か、細君は魔法づかひか。

晃　可哀相な事を言へ、まさか。

學圓　ふん。

晃　此の土地、此の里——此の琴彈谷が、一個の魔法つか

ひだと云ふんだよ。――

山澤　君は、此の山奥の、夜叉ヶ池と云ふのを聞いたか。

學圓　聞いた。然も其の池を見ようと思つて、今庄驛から五里ばかり、態々此處まで入込んだのぢや。

晃　僕も一昨年、其の池を見ようと思つて、唯一人、此の谷へ入つたために、恁う云ふ次第に成つたんだ――ここに鐘がある――

學圓　あゝ！　何か、明六つ、暮六つ……丑滿、と一晝夜に三度鳴らす、其の他は一切音をさせない定ぢやと聞いたが。

晃　然うだよ。定として、他は一切音をさせてはならない、と一所にな、一日一夜に三度づゝは必ず鳴らさねばならないんだ。

學圓　其は？

晃　こゝに傳説がある。昔、人と水と戰つて、此の里の滅びようとした時、越の大德泰澄が行力で、龍神を其の夜叉ヶ池に封込んだ。龍神の言ふには、人の溺れ、地の沈むを救ふために、自由を奪はるゝ上は、其のかはりに鐘を鑄て、撞に掛けて、晝夜に三度づゝ撞鳴らして、我を驚かし、其の約束を思出させよ。……我が性は自由を想ふ、自在を欲する、氣まゝを望む、ともすれば誓を忘れて、狹き池の水をして北陸七道に漲らさうとする、我が自由のためには、世の人畜の生命など、ものゝ數ともするのでない。が、約束は違へぬ、誓は破らん――但し其の約束、其の誓を忘れさせまい。思出させようとするために、鐘を撞く事を怠るな。――山澤、其のために鑄た鐘なんだよ。だから一度でも忘れると、立處に、大雨、大雷、大風とゝもに、夜叉ヶ池から津浪が起つて、村も里も水の底に葬つて、龍神は想ふまゝに天地を驅けると……恁う、此の土地で言傳へる。……其のために、明六つ、暮六つ、丑滿つ鐘を撞く。……

學圓　（乘出でゝ）面白い。

晃　いや、面白いでは濟まない、大切な事です。

學圓　如何にも大切な事ぢや。

晃　處で、其の鐘を撞く、鐘撞き男が誰だと思ふ。

學圓　君か。

晃　僕だよ、即ち萩原晃が其の鐘撞夫なんだよ。

學圓　はてな

晃　こゝに小屋がある……

學圓　むゝ

晃　鐘撞が住む小屋で、一昨年の夏、私が來て、代るまでは、彌太兵衛と云ふ七十九に成る爺樣が一人居て、これは五十年以來、如何な一日も缺かす事なく、一晝夜に三度づゝ此の鐘を打つて居た。

山澤、花は人の目を誘ふ、水は人の心を引く。君も夜叉ヶ池を見に來たと云ふ。私が矢張り、池を見ようと、此里へ來た時、暮六つの鐘が鳴つたんだ。彌太兵衛爺に、鐘の所謂を聞きながら、夜があけたら池まで案内をさせる約束で、小屋へ泊めて貰つた處。

其の夜、丑満の鐘を撞いて、鐘樓の高い段から下りると、爺は、此の縁前で打倒れた――急病だ、死ぬ苦悩をしながら、死切れないと云つて、悶える。――恁うした世間だ、既う以前から、村一統鐘の信心が消えて居る。……爺が死んだら、誰も鐘を鳴らすものがない。一度でも忘れると、時をめぐらさず、田地田畠、陸は水に成る、沼に成る、幾萬、何千の人の生命――其を思ふと死ぬるも死切れぬと、呻吟いて掻く。……蟲より細い聲だけれども、五十年の閲歴を、一生懸命、然うした信仰で鐘樓を守り通した、骨と皮ばかりの爺が云ふのだ。……鐘の自から鳴る如く、僕の耳に響いた。……且は臨終の苦患の可哀さに、安心をさせようと、――心配をするな親仁、鐘は僕が撞いて遣る、――とはつきり云ふと、世にも嬉しさうに、ニヤニヤと笑つて、拜みながら死んだ。其の時の顔を今に忘れん。

が、まさか、一生、こゝに鐘を撞いて終らうとは思はなかつた。丑満は爺が濟ました、明六つの鐘一度ばかり、代つて撞くぐらゐにしか考へなかつた。が、さあ、爺が死ぬ、村のものを呼ばうにも、此の通り隣家に遠い。三度の鐘で其の外は、晝にも夜にも鐘を撞くことは成らないだらう。

學圓　其の鳴らして成らないと云ふは、何うした次第ぢやね？

晃　鐘は、高く、此處にあつて――其の影は、深く夜叉ヶ池の蒼潭に映ると云ふ。……撞木を當てゝ鳴る時は、風にすら、そよりとも動かない、其の池の水が、さらさらと波を立てると聞く。元來、龍神を驚かすために打鳴らすのであるから、三度のほかに騒がしては、譴を招く事に當る。……

學圓　其の道理ぢや、むゝ。

晃　鐘も鳴らせん……處で、不知案内の村を駈廻つて人を集めた、――ナア、彌太兵衛の始末は着いたが、誰も承合つて鐘を撞かうと言はない。第一、しかじかであるからと、爺に聞いた傳説を、先祖の遺言のやうに嚴に言つて聞かせると、村のものは嗤と笑ふ。……若いものは無理もない。老者ども、年寄どもとなり、寺の和尚までけろりとして、昔話なら、桃太郎の寶を取つて歸つた方が結構でござる、と言ふ。癪に障つた。勝手にしろ、と私も其處から、（と框を指し）草鞋を穿いて、すたすた此

の谷を出て歸つたんだ。歸る時、鹿見村のはづれの土橋の袂に、榎の樹の下に立つて帽子を見送つたのが、(と調子を低く)あの、婦人だ。

其の日の、明六つの鐘で、學校通ひの小児をはじめ、指さしをして笑ふ上で、私が撞いた。此の様子では、最早や今日から、暮六の鐘は鳴るまいな！……もしや、若夜け、山津浪、然うでもない、大暴風雨で、村の滅びる事があつたら、打明けた處……他は構はん、……此の鎮の生命もあるまい――待て、二三日、鐘堂を俺が守らう。其の内には、と又四五日、半月、一月を經るうちに、早いものよ、足掛け三年。――君に逢ふまでこれさへ忘れた……又、忘れるために、其の上、年に老朽ちて世を離れた、と自分でも斷念のため……ばかりぢや無い、……暁は燕の行きかへり、軒なり、空なり、行交ふ目を、一寸は紛らす事もあらうと、晝間は白髪の假髪を被る。

學圓 (默然として顏を見る)

晃 (言葉途絶える)然う顏を見るな、恥入つた。

學圓 (少時、打案じ)すると、あの、……お百合さんぢや、其の人のために、こゝに隠れる氣に成つたと云ふのぢや。

晃 ……益々恥入る。

學圓 いや、恥づるには及ばん。が、何うぢや、細君を連れて東京へ歸るわけには行かんのかい。

晃 何も三ヶ國と言はん。越前一ヶ國とも言はん。われわれ二人が見棄てゝ去つて、此の村と、里と、處に棲むものゝ生命を何うする。

學圓 萩原、(と呼んで)、、(暫く)こゝ、君は其を信ずるかい。

晃 信ずる、信ずるやうに成つた。萩原晃はいざ知らん、越前國三國ヶ嶽の麓、鹿見村琴彈谷の鐘樓守、百合の夫の二代の彌太兵衛は確に信じて居る。

學圓 (ひたりと草鞋の胡坐に手をつき、あぐらき) 何にも言はん。然う信ぜい。堅く信ぜい。奥方の人を離れた美しさを見るにつけても、天が此の村のために、お百合さんを造り置いて、鐘樓守を、こゝに据ゑられたものかも知れん。君たちも二人は二世の村の神ぢや。就中、お百合さんは女神ぢややな

百合 (行燈を手に黒髪美しく立出づる) 私、何うしたら可うございませう、

學圓 や、此は……

百合 貴客、今ほどは。

學圓 扨て、お初に……はゝはゝ、奥さん。

百合 まあ……。(と恥らふ)

晃　これ、まあ……ではない、よく御挨拶申しな、兄とおなじ人だ。
百合　（默つて手をつく）
學圓　はい〳〵。いや、御挨拶は最う濟みました、貴女、噓は出ませなんだか。
晃　うつかり噓なんぞすると、蛟が飛出す。
百合　あれ、澤山おなぶんなさいまし。
晃　そんなに、お前、白粉を粧けて。
百合　あんな事ばかりおつしやる。（と優しく睨んで顏を隱す）
學圓　何にしろ、お睦じい……はゝはゝゝ、勝手にお噂をしましたが、何は、お里方、親御、御兄弟は？
晃　山澤、何にもない孤兒なんだ。鎭守の八幡の宮の神官の一人娘で、其の神官の父親さんも亡く成つた。叔父があつて、其が今、神官の代理をして居る。……此の前だが、叔父と云ふのは、了簡のよくない人でな。
學圓　それは〳〵。
晃　姪を此を、附けつ廻しつ爲たと云ふ大難ぶつです。
百合　眞個に、たよりのない身體でございます。何にも存じません、不束ものでございますけれど、貴客、何うぞ御ふびんをお懸けなすつて下さいまし。（しんみりと學圓に向つて三指して云ふ）

學圓　（引き入れられて、思はず涙ぐむ）御殊勝ですな。他人のやうには思ひません。
晃　（同じく何となく胸せまる、涙を拂つて）さあ〳〵、親類と云ふお言葉なんだ。遠慮のない處、何にも要らん御吹聽の鳴燒で一杯つけな。此からゆつくり話すんだ山澤、野菜は食はしたいぜ、そりや、甘いぞ。
學圓　奥方、お立ちなさるな　ト其處でぢやな、萩原、私は志した通り、此から夜を掛けて夜叉ヶ池を見に行く氣ぢや。種々不思議な話を聞いたら、尙ほ一層見たく成つた。御飯はお手料理で御馳走に成らうが、お杯には及ばん、第一、知つてる通り、一滴も飲めやせん。
晃　成程、然うか、夜叉ヶ池を見に來たんだ。……明日にしては、と云ふんだけれども、道は一里餘り、が、上りが嶮しい。此の暑さでは夜が可い。しかし、四五日は歸さんから、明日の晩にしてくれないかい。
學圓　いや、學校がある。此でも學生の方ではないから勝手に休めん。第一、遊び過ぎて、既う切詰めぢや。
晃　其は困つた、學校は？……先刻、落着く先は京都だと云つたやうだな。
學圓　むゝ、去年から。……みやづかへの情なさぢや。何しろ、急ぐ。
晃　分つた、では案内かた〴〵一所に行く。

學圓　君も。
晃　……直ぐに出掛けよう。
學圓　それだと、奥方に濟まんぞ。
晃　何を詰らない。
百合　否……（と云ひしかしなしなと）貴方、直ぐにとおつしやつて、……お支度は、……
晃　土橋の煮染屋で竹の皮づゝみと遣らかす、其の方が早手廻だ。鰊の煮びたし、焼どうふ、可からう、山澤。
學圓　結構ぢや。
晃　事が決れば早いが可い。源左衛門は草履で可し、最明寺どのは、お草鞋、お草鞋。
學圓　やあ、おもしろい。奥さん、いづれ歸途には寄せて頂く。私は味噌汁が大好きです。小菜を入れて食べさして戴せて下さい。時に、歸途は何時に成らう。……
晃　さあ、夜が短い、明方に成らうも知れん。
學圓　明けがた……は可いが、（と草鞋を穿きながら）待て待て、一所に気短に飛出して、今夜、丑滿つの鐘は何うするのぢや、
晃　百合が心得て居る。先代彌太兵衛と違ふ。仙人ではない、生身の人間。病氣もする、百合が時々代るんだよ。
學圓　では、池のあたりで聞きませう。――奥方しつかり願ひます。

百合　はい、内をお忘れなさいませんやうに、私は一生懸命に。（と涙聲にて云ふ）
晃　……おい、あの、彌太兵衛が讓りの、お家の重寶と云ふ瓢箪を出したり、酒を買ふ、――其から鎌を貸しな、滅多に人の通はぬ處、路はあつても熊笹ぐらゐは切らざあ成るまい。……早くおし
百合　はい、はい。
學圓　やあ、どきどきと鋭いな。（と鎌を見る）
晃　月影に……（空へかざす）尚ほ光るんだ。此でも露を拂つて、これを覺えたせ　此方だ、此方だ。（と先へ立つ）
百合　お氣をつけ遊ばせまし（とうるみ聲にて、送り出づる時、可愛き人形袖にあり）
晃　何だい、こんなもの。（見返る）
百合　太郎が一寸お見送り。（と袖でしめつゝ）小父ちやんもお早くお歸りなさいまし、坊やが寂しうございます。（と云ひながら、學圓の顔をみまもり、小家の内を指し、うつむいてほろりとする）
學圓　（庇ふ状に手を擧げつゝ、又涙ぐみ、）御道理ぢや、が、大丈夫、夢にも、そんな事が、貴女、（と云つて晃に向きかへ）私に逢うて、里心が出て、君が此なり歸るまいか、と云ふ御心配ぢや。

百合（きまりわるげに、つと背向になる）
晃　あゝ、其で先刻から……馬鹿、嬰兒だな。
學圓　何かい、一寸出懸に、キスなどせんでも可いかい。
晃　旦那方ぢやあるまいし、鐘撞彌太兵衛でがんすての。
（と兩人連立ち行く。）
百合（熟と少時）　まさかと思ふけれど、ねえ、坊や、大丈夫お歸んなさるわねえ。おゝ〱目ン目を瞑つて、頷いて、まあ、可愛い。（と頬摺りし）坊やは、お乳をおあがりよ。母さんは一人ではお夕飯も欲しくない。早く片附けてお留守をしませう。一人だと見て取ると、村の人が煩いから、月は可し、灯を消して戸をしめて。――
（と框にづツと雨戸を閉める。閉め果てると、戸の鍵がガチリと下りる。やがて、納戸の燈、はつと消ゆ。）
〈出る化ものゝ數々は、一ツ目、見越、河太郎。獺に、海坊主、天守にをさかべ、化猫は赤手拭、篠田に葛の葉、野干平、古狸の腹鼓、ポコポン、ポコポン、コリヤ、ポンポコポン、笛に雨を呼び、酒買小僧、鐵漿着女の、けた〱笑、里の男は、のつぺらぽう。
（と唄――）

（與十、竹の小笠を仰向けに、鯉を一尾、嬉しさうな顔して見て、ニヤ〱笑つて出づ。）
與十　大い事をしたぞ。へい、雪さ豐年の兆だちゆう、旱は魚の當りだんべい。大沼小沼が干た故か、ぢよんぢよろ水に、びちや〱と泳いだ處を、ちよろりと掬つた。……（鯉跳ねる）わい！　銀の鱗だ。づゝんと重い。四貫目あるべい。村長様が、大閣爐裡の自在竹に掛つた瀧登りより、えツと大え。こりや己が食はうより、村會議員の髯どのに賣るべいわさ。やれ、鯉。髯どのに身賣をしろぢや。値に成れ、値に成れ。（鯉跳ねる）ふあ、銀の鱗だ。金が光る……光るてえば、鱗てえば、こゝな、（と小屋を見て）鐘撞先生が打つてしめた、神官様の孃様さあ、お宮の住居にござつた時分は、背中に八枚鱗が生えた蛇體だと云つけえな。……そんではい、夜さり、夜ばひものが、寢床を覗くと、何時でもへい、白蛇の長いのが、孃様のめぐり廻つて、のたくるちツて、現に、はい、目のくり球廻らかいて火を吹いた奴さへあつけえ。……
鐘撞先生には何事もねえと見えるだ。まんだ、丈夫に活きてござつて、執殺されもさつしやらねえ。見ろやい、取つても着けねえ處に、銀の鱗さ、ぴか〱と月に光るちツて、汝がを、（と鯉をじろ〱）ばけものか蛇體と

想うて、手を出さずば、うまい酒にもありつけぬ處だつたちうものだ。——嬢様が手本だよ。はつてな、今時分、眞暗だ。舐殺されはしねえだかん、待ちろ。（と抜足で寄つて、小屋の戸の隙間を覗く）

（蟹五郎。朱顔、蓬なる赤毛頭、緋の衣したる山伏の扮装。山牛蒡の葉にて捲いたる煙草を、シヤと横銜へに、ぱつぱつと煙を噴きながら、兩腕を頭上に突張り、ト鋏を極込み、踞んで横這に、づかり／＼と歩行き寄つて、與十の潜見する向脛を、かつきと挾んで引く。）

與十　痛え。（と叫んで）わつ、（と反る時、鯉ぐるみ竹の小笠を夕顔の蔭に投ぐ）ひやあ、藪澤の大蟹だ。人殺し！

（と怯し飛んで遁ぐ。——蟹五郎すかり／＼と横に追ふ。）

（鯉七、鯉の精。夕顔の蔭より、する／＼と顯る。黑白鱗の帷子、同じ鱗形の裁着、鰭の如きひら／＼足袋。件の竹の小笠に。面を蔽ひながら來り、はたと其の小笠を擲つ。顏白く、口のまはり、べたりと髯黑し。蟹、此を見て引返す。）

鯉七　（ぱく／＼と口を開けて、はつと溜息し）あゝ、人間が旱の切なさを、今にして思當つた。某が水離れしたと同然と見える。……おゝ、大蟹、今ほどはお助け嬉しい、難有かつたぞ。

蟹五郎　水心、魚心だ、其の禮に及ばうかい。又、だが、瀧登りもするものが、何ぢやとて、笠の臺に乘せられた。

鯉七　里へ出る近道してな、無理な流を拔けたと思へ。石に鰭が躓いて、膚摑の成らぬ處を、ばッさりと喫つた奴よ。

蟹五郎　此奴にか。（と落ちたる笠を挾んで壓へる）

鯉七　鬼若丸以來と云ふ、難儀に逢はせた。百姓めが、汝。

（と笠を踏む）

笠　己ぢやねえ、己ぢやねえ。（と、聲ばかりして蔭にて叫ぶ）

鯉七　はあ、いかさま汝の行爲でもあるまい。助けて遣らう——それや行け。やい、稻が實つたら案山子に成れ！

（と放す。しかけにて、竹の小笠ぱた／＼と煽つて遁げる。）

はゝはゝ飛ぶわ／＼、南瓜畠へ潛つて候。

蟹五郎　人間の首が飛んだ狀だな、氣味助、氣味助。かッかッ／＼。（と笑ひ）鯉七、此から何處へ行く。

鯉七　むう、些と里方へ用がある。處で瀧を下つて來た。何が、此の頃の旱で、やれ雨が欲しい、それ水をくれろ、と百姓どもが、姫様のお住居、夜叉ケ池のほとりへ五月蠅きほどに集つて來せる。それはまだ可い。が、何の禁

厭か知れぬまで。鐵釘、鐵火箸、錆刀や、破鍋の尻まで持込むわ。まだしもよ。お供物だと血迷つての、犬の首、猫の頭、目を剜き、髯を動かし、舌をべら〱吐く奴を供へるわ。胡瓜ならば日野川の河童が嚙らう、以つての外な、汚穢うて〱、お腰元たちが掃除をするに手が懸つて迷惑だ。處で、姫樣のお乳母どの、湯尾峠の萬年姥が、業へ內意——降らぬ雨なら降るまでは降らぬ、向後汚いものなど撒散らすに於ては其の分に置かぬ——と里へ出て觸れい、とある。ためにの、此の鮮を煩はす、厄介な人間どもよ。

蟹五郎　其の事かい、御苦勞、御苦勞。處で、大池の姫樣には、なか〱雨を下さる思召は當分ないかい。

鯉七　分らんの。旱は何も、姫樣御存じの事ではない。第一、其許なども知る通りよ。姫樣は、それ、御緣者、白山の劍ヶ峰千蛇ヶ池の若旦那にあこがれて、戀し、戀しと、其ばかり思詰めてましますもの、人間の旱なんぞ構つて居る暇があるものかツてい。

蟹五郎　神通廣大——俺をはじめ考へるぞ。然まで思惱んでおゐでなさらず、雨袖で飜然と飛んで、疾く劍ヶ峰へおゐでなさるが可いではないか。

鯉七　其處だの、姫樣が座をお移し遊ばすと、それ、立處に可恐しい大津波が起つて、此の村里は、人も、馬も、水の底へ沈んで了ふ……

蟹五郎　何が、何が、第一俺が住居も廣う成る……村が泥沼に成るを、何が遠慮だ。勸めろ、勸めろ。

鯉七　忘れたか、鐘が此處にある。……御先祖以來、人間との堅い約束、夜晝三度、打つ鐘を、彼奴等が忘れぬ中は、村は滅びぬ天地の誓盟、姫樣にも隨意に成らぬ。然ればこそ、御鬱懷、其の御ふびんさ、おいとしさを忘れたの。

蟹五郎　南無三寶、堂の下で誓を忘れて、鐘の影を踏まうとした。が、山も田圃も晃々とした月夜だ。まだ〱しめつた灰も降らぬと成ると、俺も澤を沿て、山の池、御殿の長屋へ行かずばなるまい。同道を賴むぞ、鯉。

鯉七　むゝ、其の儀は、ばくりと合點んだ。かはりにはの、道が寂しい……里へは、きこう同道せい。

蟹五郎　歸途はお池へ伴侶だ。

鯉七　月の暇を、唄うて行かうよ。

蟹五郎　何と唄ふ？

鯉七　——山を川にせう——と唄はうよ。

蟹五郎　面白い。

〈と同音に、鯉はふら〱と袖を動かし、蟹は、ばツばツと煙を吹いて、——山を川にせう——山を川にせ

う――と同音に唄ひ行く。行掛けて淀み、行途を望む。）

鯉七　待て、見馴れぬものが、何やら田の畝を傳うて來る。

蟹五郎　カッ〳〵、怪しいものだ。小蔭れて樣子を見んかい。

（兩個、姿を隱す。）

百合　（人形を抱き、媚かしき風情にて戸を開き戸外に出づ）夜の長い事、長い事……何の夏が明易からう。坊やも寢られないねえ、――お月樣幾つ、お十三、七つ――今も誰やら唄うて通つたのをお聞きかい、――山を川にしよ――あゝ、此の頃では村の人が、山を川にもしたからう、お氣の毒だわねえ。……まあ、良い月夜、峰の草も見えるやうな。晃さん、お客樣の影も、あの、松のあたりに見えようも知れないから、鐘堂へ上りませうね。……ひよつとかして、袖でも觸つて鳴ると惡いね、田圃の廣場へ出て見ようよ。（と小屋のうちに廻つて入る）

（鯰入、花道より、濃い鼠すかしの頭巾、面一面に黑し。白き二根の髯、鼻下より左右にわかれて長く裾まで垂る。墨染の法衣を絡ひ、鰭の形したる鼠の足袋。一本の蘆を杖つき、片手に緋總結びたる、美しき文箱を捧げて、ふら〳〵と出て來る。）

鯰入　遙々と參つた。……以つての外の旱魃なれば、思うたより道中難儀ぢや。（と遙に仰いで）はあ、爭はれぬ、峰の空に水氣が立つ。嬉しや、……夜叉ケ池は、彼處に近い。（と辿り寄る）

（鯉、蟹、前途に立顯る。）

鯉七　誰だ。此へ來たは何ものだ。

蟹五郎　お山の池の一の關、藪澤の關守が控へた。名のつて通れ。

鯰入　（杖を袖にまき熟と視て）扨は緣のない衆生でないの。……此は、北陸道無雙の靈山、白山、劍ケ峰千蛇ケ池の御公達より、當國、三國ケ嶽夜叉ケ池の姫君へ、文づかひに參るものぢや。

鯉七　おゝ、聞及んだ黑和尙。

蟹五郎　鯰入は御坊かい。

鯰入　此は、いづれも姫君のお身内な。夜叉ケ池の御眷屬か。よい所で出會ひました、案内を賴みませう。

蟹五郎　お使、御苦勞です。

鯉七　些と申つかつた事があつて、里へ參る路ではあれども、若君のお使、何は措いてもお供せう。姫樣、お喜びの顏が目に見えるわれらもお庇で面目を施します、さあ、御坊。

蟹五郎　さあ、御坊。

鯰入　（ふと、くな〳〵と成つて得進まず）しばらく。先づ、しばらく。……

鯉七　御坊、お草臥れなら、手を取りませう。
蟹五郎　何と腰を押さうかい。
鯰入　いや／＼疲れはしませぬ。尾鰭はのら／＼と跳ねるなれども、こゝに、ふと、世にも氣懸りが出來たぢやまで。
鯉七　氣懸りとは？　御坊。
鯰入　此處まで辿つて、いざ、お池へ參ると思へば、急に此の文箱が、身にこたへて、づんと重う成つた。其の事ぢや。
鯉七　戀の重荷と言ひますの。お心入れの御狀なれば、池に近し、御雙方お氣が通つて、自然と文箱に籠りましたか。
蟹五郎　又かい。姫樣から、御坊へお引出ものなさる、……あの、黄金白銀、米、粟の溢こぼれる、石臼の重量が響きますかい。
鯰入（悄然として）いや、私が身に應へた處は、こりや蟲が知らすと見えました。御褒美に遣はさるゝ石臼なれば可けれども――此の坊主を輪切りにして、スッポン煮を賞翫あれ、姫、お晝寐の御目覺しに――と記してあらうも計られぬ。わあ、可恐しや。（とわな／＼と蘆の杖とゝもにふるひ出す）
鯉七　何で又、其のやうな飛んだ事を？　御坊。……

鯰入　いや／＼、急に文箱の重いにつけて、ふと思ひ出いた私が身の罪科がござる、扨て、言ひ兼ねましたが打明けて恥を申さう。（と頸をすくめて、頭を撫で）……近頃、此方衆の前ながら、館、劔ケ峰千蛇ケ池へ――熊に乘つて、黒髮を洗ひに來た山女の年增がござつた。裸身の色の白さに、つい、とろ／＼と成つて、面目なや、ぬらり、くらりと鰭を滑らかいてまつはりましたが、フトお目觸りと成つて、われら若君、以つての外の御機嫌ぢや。――處を此の度の文づかひ、泥に潛つた閉門中、唯おほせつけの嬉しさに、うか／＼と出て參つたが、心付けば、早や鰭の下がくすぼつたい。
蟹五郎　かッ、かッ、かッ、（と笑ひ）御坊、おまめです。あやかりたい。（と又笑ふ）
鯰入　笑はれますか、情ない。生命とまでは無うても、鰭、尾を放て、髯を拔け、とほどには、おふみに遊ばされたに相違はござるまい。……此は一期ぢや、何とせう。（と寂しく泣く）
（鯉、蟹、此を見て囁き、頷く。）
鯉七　いや、御坊、無い事とも言はれませぬ。昔も近江街道を通る馬士が、橋の上に立つた見も知らぬ婦から、十里前の一里塚の松の下の婦へ、と手紙を一通ことづかりし事あり。途中氣懸りに成つて、密と其の封じ目を切つ

て見たれば、——妹御へ、一つ、此の馬士の腸一組参らせ候。——としたゝめられた——何も知らずに渡さうものなら、腹を割かるゝ處であつたの。

鯰入　はあ。（と嘆と尻持つく）

蟹五郎　お笑止だ。かツ〳〵〳〵。

鯉七　幸い、五郎が鋏を持ちます……密と封を切つて、御覧が可からう。

鯰入　やあ、何と、……其を頼みたいばツかりに恥を曝した世迷言ぢや。……嬉しや、大目に見て下さるかなう。

蟹五郎　尤も、尤も。

鯉七　又……（と聲を寄めて）戀し床しのお文なれば、そりや、われ〳〵どもが尚ほ見たい。

鯰入　（わなゝきながら、文箱を押頂き、紐を解く）

（鯉、蟹等と寄る。蓋を放つて齊しく見る。）

鯰入　やあ！

鯉七　えゝ〳〵。

蟹五郎　やあ〳〵〳〵！

鯰入　文箱の中は水ばかりよ。

（と云ふ時、さつと、清き水流れ溢る。）

鯉七　あれ〳〵〳〵、姫様が。

（はつと鯰入とゝもに泳ぐ形に腹ばひに成る。蟹は蹴いて手を支ゆ。——迫上にて——）

（夜叉ケ池の白雪姫。雪なす羅、水色の地に紅の焔を染めたる襲衣、黒漆に銀泥、鱗の帯、下締なし、裳をすらりと、黒髪長く、丈に餘る。銀の靴をはき、帯腰に玉の如く光輝く鐵杖をはさみ持てり。両手にひろげし玉章を颯と繰落して、地摺に取る。）

（右に、湯尾峠の萬年姥。針の如き白髪。朽葉色の帷子、赤前垂。）

（左に、腰元、木の芽峠の奥山椿、萌黄の紋付、文金の高髷に緋の乙女椿の花を挿す。両方に手を支いて附添ふ。十五夜の月出づ。）

白雪　ふみを讀むのに、月の明は、もどかしいな。

姥　御前様、お身體の光りで御覧ずるが可うございます。

白雪　（下襲を引いて、袖口の炎を翳し、やがて讀果てゝ恍惚と成る）

椿　姫様。

姥　もし、御前様。

白雪　可懐しい、優しい、嬉しい、お床しい音信を聞いた。……姥、私は参るよ。

老女　たま〳〵麓へお歩行が、

椿　最うお帰り遊ばしますか。

白雪　何處へ？……（と聞返す）

老女　お住居へ。

白雪　何？
老女　夜叉ヶ池へでござりませう。
白雪　あれ、お前は何を言ふ……私の行くのは劍ヶ峰だよ。
一同　劍ヶ峰へ、とおつしやりますると？
白雪　聞かずと大事ないものを――千蛇ヶ池とは知れた事――おふみの許へさ。（と巻戻し懷中に納めて抱く）
姥　（居直り）叉……我儘を仰せられます。お前様、こゝに鐘がござります。
白雪　む。（と眦をあげて、鐘樓を屹と見る）
姥　お忘れはなさりますまい。山ながら、川ながら、御前様が、お座をお移しなさりますれば、幾萬、何千の生類の生命を絶たねば成りませぬ。劍ヶ峰千蛇ヶ池の、あの御方様とても同じ事、此へお運ひとなりますと、白山谷は湖に成りますゆゑ、其のために彼方からも御越の儀は叶ひませぬ。――姥はじめ胸を痛めます。……おいとしい事なれども、是非ない事にござります。
白雪　そんな、理窟を云つて……姥、お前は人間の味方かい。
姥　へゝ、（嘲笑ひ）尾のない猿ども、誰がかばひだていたしませう。……憎ければとて、淺ましければとて、氣障なればとて、たとひ仇敵なればと申して、約束はかへられませぬ、誓を破つては相成りませぬ。

白雪　誓盟は、誰がしたえ。
姥　御先祖代々、近くは、兩、親御様まで、第一お前様に御遺言ではございませぬか。
白雪　知つて居ます。（とつんとひぞる）
姥　もし、お前様、其の淺ましい人間でさへ、約束を堅く守つて、五百年、七百年、盟約を忘れぬではござりませぬか。盟約を忘れませねばこそ、朝六つ暮六つ丑滿つ、と三度の鐘を絶しませぬ。此の鐘の鳴りますうちは、村里を水の底には沈められぬのでござります。
白雪　えゝ、怨めしい……此の鐘さへなかつたら、（と熟と視て、すらりと立直り）衆に、此處へ來いとお言ひ。
椿　（立つて一方を呼ぶ）召します。姫様が召しますよ。
鯉七　（立上りて一方を）やあ、いづれも早く。（と呼ぶ）
（眷屬ばら／＼と左右に居流る。一同得ものを持てり。扮裝おもひ／＼、鎧を着たるものあり、髑髏を頭に頂くもあり、百鬼夜行の體なるべし。）
虎杖　虎杖入道。
鯖江　鯖江ノ太郎。
鯖波　鯖波ノ次郎。
（此の兩個、「兄弟のもの。」と同音に名告る。）
塚　十三塚の骨寄鬼。
蟹五郎　藪澤のお關守は既に先刻より。

椿　其のほか、夥多の道陸神たち、こだますだま、魑魅、罔魎。

（影法師、おなじ姿のもの夥多あり。目も鼻もなく、あたまから唯灰色の布を被る。）

影法師　影法師も交りまして。

（と此の名のる時、ちら〳〵と遠近に陰火燃ゆ。此よりして明滅す。）

鯉七　身内の面々、一同参り合せました。

鯰入　憚りながら法師も此に……。

白雪　おゝ、遠い路を、大儀。すぐお返事を上げませうね、其のために皆を呼びましたよ。

姥　や、彼方へお返事につきまして、いづれもを召しました？——仰せつけられまする儀は？

白雪　姥、何う思うても私は行く。劒ヶ峰へ行かねばならぬ。鐘さへなくば盟約もあるまい……皆が、あの鐘、取つて落して、微塵になるまで砕いてお了ひ。

姥　えゝ〳〵仰せなれぱと云うて、いづれも必ずお動きあるな。（眼を光らし、姫を瞻めて）まだ其のやうなわやくをおつしやる。……身うちの衆をお召出し、お言葉がござりましては、わやくが、わやくに成りませぬ。天の神々、きこえも可恐ぢや。……數の人間の生命を斷つ事、屹とおたしなみなさりませい。

白雪　人の生命の何う成らうと、其を私が知る事か！……戀には我身の生命も要らぬ。……姥、堪忍して行かしておくれ。

姥　あゝ、お最惜い。が、成りますまい。……最う多年御辛抱なさりますと、三十年、五十年とは申しますまい。今の世は佛の末法、聖の澆季、盟誓も約束も最早や忘れて居りまする。漸ッと信仰を繋ぎますのも、あの鐘を、鳥の啄いた蔓葛で釣しましたやうなもの、鎖も絆も切れますのは、まのあたりでござります。其までお堪へなさりまし。

白雪　あんな氣の長い事ばかり。あこがれ慕ふ心には、冥土の關を据ゑたとて、夜のあくるのも待たれうか。可し、可し、衆が肯かずば私が自分で。（と氣が入る）

椿　あれ、お姫樣。

姥　此は何となされます……取棄てゝ大事ない鐘なら、お前様のお手は待たぬ……身内に仰せまでもない。何、唐銅の八千貫、恁う痩せさらぼへた姥が腕でも、指で挾んで棄てませうが、重いは義理でござりまするもの。

白雪　義理や掟は、人間の勝手づく、我と我が身をいましめの繩よ。……鬼、畜生、夜叉、悪鬼、毒蛇と言はるゝ私が身に、袖とて、褄とて、戀路を塞いで、遮る雲の一重もない！……先祖は先祖よ、親は親、お約束なり、

盟誓なり、それは都合で遊ばした。人間とても年が經てば、ないがしろにする約束を、一呼吸早く私が破るに、何に憚る事がある！　あゝ、戀しい人のふみを抱いて、私は心も惘亂した、姥、許して！

姥　成程、お氣が亂れましたな。朝六つ暮六つ唯た一度、今宵此の丑滿一つも、人間が怠れば、其の時こそは瞬く間も待ちませぬ、お前樣を、此の姥がおぶひ申して、お靴に雲もつけますまい。人は死なうと、溺れようと、峰は崩れよ、麓は埋れよ、劍ヶ峰まで、唯一飛び。……此の鐘を撞く間に、盟誓をお破り遊ばすと、諸神、諸佛が卽座のお祟り、それを何となされます！

鯉七　當國には、板取、歸、九頭龍の流を合せて、日野川の大河。

蟹五郎　美濃の國には、名だゝる揖斐川。

姥　二個の川の御支配遊ばす。

椿　百萬石のお姬樣。

姥　我まゝは……

一同　相成りませぬ。

姥　お身證。

一同　大事にござります。

白雪　えゝ、煩いな、お前たち。義理も仁義も心得て、長生したくば勝手におし。……生命のために戀は棄てない。お退き、お退き。

（一同、入亂れて、遮り留むるを、振拂ひ、掻い潛つて、果は眞中に取籠められる。）

お退きといふに、え……

（とじれて、鐵杖を拔けば、白銀の色、月に輝き、一同は、はッと退く。姬、する／＼と寄り、颯と石段を駈上り、柱に縋つて屹と鐘を――。）

諸神、諸佛は知らぬ事、天の御罰を蒙つても、白雪の身よ、朝日影に、情の水に溶くるは嬉しい。五體は粉に碎けようと、八裂にされようと、戀しい人を血に染めて、燃えあこがるゝ魂は、幽な螢の光と成つても、劍ヶ峰へ飛ばいで置かうか。

（と晃然とかざす鐵杖輝く……時に、月夜を遙に、唄の聲す。）

――ねんねんよ、おころりよ、ねんねの守は何處へいた、山を越えて里へ行た、里の土產に何貰うた、でん／＼太鼓に笙の笛――

白雪　（ちつと聞いて、聞惚れて、火焰の袂なよ／＼と成る。やがて石段の下を呼んで）姥、姥、あの、聲は？……

姥　社の百合でござります。

白雪　おゝ、美しいお百合さんか、何をして居るのだらうね。

姥　鐘人の児の留守に、人形を抱きまして、心遣りに、子守唄をうたひまする。

白雪　戀しい人と分れて居る時、うたを唄へば紛れるものかえ。

姥　おほせの通りでござります。

一同　姫様、遊ばして御覧じませぬか。

白雪　思ひせまつて、つい忘れた。……私が此の村を沈めたら、美しい人の生命もあるまい。鐘を撞けば仇だけれども、（と石段を静に下りつゝ）此家の二人は、嫉しいが、羨しい。姥、おとなしうして、あやからうな。

姥　（はら〳〵と落涙して）お嬉しう存じまする。

白雪　（椿に）お前も唄ふかい。

椿　はい、いろ〳〵のを存じて居ります。

鯉七　いや、お腰元衆、いろ〳〵知つたは結構だが、近ごろはやる——池の鯉よ、緋鯉よ、早く出て麩を食へ——なぞと、馬鹿にしたやうなのはお唄ひなさるな、失禮千萬、御機嫌を損じよう。

椿　まあ……お前さんが、身勝手な。

一同　（どつと笑ふ）——

白雪　人形抱いて、私も唄はう……劍ケ峰のおつかひ。

鯰入　はあ、はあ、はッ。

白雪　お返事を上げよう……一所に——椿や、文箱をお預り、——衆も御苦勞であつた。

（一同敬ふ。——でん〳〵太鼓に笙の笛、起上り小法師に風車——と唄ふを聞きつゝ、左右に分れて、おひおひに一同入る。陰火全く消ゆ。）

（月あかりのみ。遠く犬吠え、近く五位鷺啼く。）

（お百合、いきを切つて、褄もはら〳〵と遁げ歸り、小家の内に駆入り、隠る。あとより、村長畑上嘉傳次、村の有志権藤管八、小學校教員齋田初雄、村のもの等追掛け出づ。一方より、神官代理鹿見宅膳、小力士小烏風呂助と、前後に村のもの五人ばかり、烏帽子、素袍、雑式、仕丁の扮装にて、一頭の眞黒き大牛を率ゐて出づ。牛の手綱は、小力士これを取る。）

村一　内へ隠れたぞ、内へ隠れたぞ。

村二　眞暗だあ。

初雄　灯を消したつて夏の蟲だに。

管八　踏込んで引摺出せ。

（村のもの四五人、ばら〳〵と跳込む。内に、あれあれと言ふ聲。雨戸ばら〳〵とはづるゝ。眞中に屹と成り——左右を支へて。）

百合　何をおしだ、人の内へ。

管八　人の内も我が内もあるものかい。鹿見一郡六ヶ村。

初雄　燒土に成らう、野原に焦げようと云ふ場合であるです。

宅膳　(づゝと出で)　こりや、お百合、見苦しい、何をざわつく。唯今も、途中で言聞かした通りぢや。汝に白羽の矢が立つたで、否應はないわ。六ヶ村の水切れぢや。米ならば五萬石、八千人のために、雨乞の犧牲に成りませう！　小兒のうちから知つても居らうが、絶體絶命の旱の時には、村第一の美女を取つて裸體に剝き……

百合　えゝ、(と震へる)

宅膳　黑牛の背に、鞍置かず、荒繩に縛める。や、尤も神妙に覺悟して乘つて行けば縛るには及ばんてさ。……すなはち、草を分けて山の腹に引上せ、夜叉ヶ池の龍神に、此の犧牲を奉るぢや。が、生命は取らぬ。然るかはり、背に裸身の美女を乘せたまゝ、池のほとりで牛を屠つて、角ある頭と、尾を添へて、此を供へる。……肉は取つて、村一同冷酒を飮んで啖へば、一天忽ち墨を流して、三日の雨が降灌ぐ。田も畠も蘇生るとあるわい。昔から一度も其の驗のない事はない。お百合、それだけの事ぢや。我慢して、村長閣下の前につけても御奉公申上げい。さあ、立たう、立ちませう。

百合　叔父さん、何にも申しませせん、何うぞ、あの、晃さん、旦那樣のお歸りまでお待ちなすつて下さいまし。もし、皆さん、堪忍して下さいまし。……手を合せて拜みます。そ、そんな事が、まあ、私に……

管八　何だとう？

初雄　貴女、お百合さん、何ですか、

百合　叔父さん、後生でございます……晃さんの歸りますまで。何うしたんですか。

宅膳　又しても旦那樣ぢや　晃、晃と呆れた奴めが。これ、潮の滿干、月の數……今日の今夜の丑滿は過されぬ。立ちませう。立ちませう。

管八　言ふことを肯かんと縛り上げるぞ。

嘉傳次　村、郡のためぢや、是非がない、これ、はい、氣の毒なものぢやわい。

管八　お神官、こりやいかんでえ？

宅膳　引立てゝ可うござる。

管八　來い、それ。

(と村のもの取込むる。百合遁げ迷ふ。)

風呂助　埒あかんなう。私にまかせたが可うごんす。

(とのさばり掛り、手もなく抱すくめて摑み行く。仕丁手傳ひ、牛の背に仰けざまに置く。)

百合　あゝれ。(と悶ゆる)

(胴にまはし、ぐる／＼と繩を捲く。お百合背を捻ち

て面を伏す、黒髪颯と亂れて長く牛の鰭爪に落つ。）

嘉傳次　宅膳どん、こりや、きものを着て居て可いかい。

宅膳　はあ、いづれ、社の森へ參つて、式の如く本支度に及びまするて。社務所には、既に、近頃此のあたりの大地主に成られましたる代議士閣下をはじめ、お歷々衆、村民一同の事をお憂慮なされて、雨乞の模樣を御見物にお揃ひでござりますてな。

嘉傳次　其の事ぢやつけね。

初雄　皆、急ぐです。

管八　諸君努力せよかね、はゝゝゝ。

（一同、どや／＼と行きかゝる。）

晃　（衝と來り、前途に立つて、屹と見るより、仕丁を左右へ拂ひのけ、はた、と睨んで、牛の鼻頭を取つて向け、手綱を、ぐい、と緊めて、づか／＼我家の前へ、腰なる鎌を拔くや否や、無言のまゝ、お百合のいましめの繩を弗ッと切る）

百合　（一目見て、）おゝ晃さん、（ところげ落ち、晃のうしろに身をかくして、帶の腰に取縋り）旦那樣、いゝ處へ。貴下。何うして、まあ、よく、まあ、早う歸つて下さいました、ねえ。

晃　（百合を背後に庇ひ、利鎌を逆手に、大勢を睨めつけながら、落着いたる聲にて）あゝ、夜叉ケ池へ――山路、三の一ばかり上つた處で、峰裏幽に、遠く池ある處と思ふあたりで、小兒をあやす、守唄の聲が聞えた。……唄の聲が此の月に、白玉の露を繋いで、蓬の草も綾を織つて、目に蒼く映つたと思へ。……伴侶が非常に感に打たれた。――山澤には三歳に成る小兒がある。……里心が出て堪へられん。月の夜路に深山路かけて、知らない他國に徊徉ふことは又、來る年の首途にしよう。歸り風が颯と吹く、と身體も寒く成つたと云ふ。私もしきりに胸騷ぎがする。すぐに引返して歸つたんだよ。（と穩に、百合に向つて言ひ果てると、すツと立つて、瓢を逆に、月を仰いで、ごツと飮む。）

（百合、のび上つて、晃が紐を押へ頸に掛けたる小笠を取り、瓢を引く。晃はなすを、受け取つて框におく。すぐに、鎌を取らうとする。晃、手を振つて放さず、お百合、しかと其の晃の鎌を持つ手に縋り居る。）

晃　歸れ、君たちア何をして居る。

初雄　更めて斷るですがね、君、お氣の毒だけれど、最う、村を立去つてくれ給へ。

晃　俺を此の村に置かんと云ふのか。

初雄　然りです。――御承知でもあるでせう、又御承知がなければ、恐らく白痴と言はんけりや成らんですが、此の旱です、旱魃です。……一滴の雨と雖も、千金、寧ろ

萬金の場合にですな。君が迷信さるゝ處の其の鐘はです。一度でも鳴らさない時は卽ち其の、村が湖に成ると云ふです。湖に成る……結構ですな。望む處である、です、から。して、からに、其の卽ちです。今夜からしてお撞きなさらない事にしたいのです。鐘を撞かん事に成つて見る日に成つて見ると、いたしてから、其の、鐘を撞くための君はですな、名は權助と云ふか何うかは知らんですが、えゝん!

村二三　ひや〳〵。（と云ふ）

村四五　撞木野郎、丸太棒。（と怒鳴る）

初雄　えへん、君は此の村に於て、肥料の糟にも成らない、更に、敢て、而して其の、聊も用のない人です。故にです、故にですな、我々一統が、鐘を、お撞きに成るのを、お斷りを、しますと同時に、村を、お立ち去りの事を宣告するのであるです。

村二三　然うだ、然うだとも。

晃　望む處だ。……鐘を守るとも守るまいとも、勝手にしろと言はるゝから、俺には約束がある……義に依て守つて居たんだ。鳴らすなと言ふに、誰がすき好んで鐘を撞くか。勿論、卽時に此處を去る。

村四五　出て行け、出て行け。（と異口同音）

晃　お百合行かう。——（其のいそ〳〵身繕ひするを見て）支度が要るか、跣足で來い。茨の路は負つて通る。（と手を引く）

（お百合其の袖に庇はれて、大勢の前を行く。——忍んで樣子を見たる、學圓、此の時密と其の妻を顧す。）

管八　（惡く沈んだ聲して）おい〳〵、おい待て。

晃　（構はず、つか〳〵と行く）

管八　待て、こら!

晃　何だ。（と衝と返す）

管八　汝、村のものは置いて行け。

晃　塵ひとつ葉も持つちや行かんよ。

管八　其の婦は村のものだ。一所に連れて行く事は出來ないのだ。

晃　いや、此の百合は俺の家内だ。

嘉傳次　默りなさい。村のものぢやわい。

晃　何處のものでも差支へん、百合は來たいから一所に來る……留りたければ留るんだ。それ見ろ、萩原に縋つて離れやせん。（微笑して）置いて行けば百合は死なう………人は、心のまゝに活きねばならない。お前たちどもに分るものか。さあ、行かう。

宅膳　（のしと進み）これ〳〵若いもの、無分別は僞に成らんぞ。……私が娃は、たゞ此の村のものばかりではない。一郡六ケ村、八千の人の生命ぢや、雨乞の犧牲にし

てな。それぢやに、其の犧牲の女を連れて行くのは、八千の人の生命を、お主が奪取つて行くも同然。百合を置いて行かん事には、此處は一足も通されんわ。百合は八千の人の生命ぢやが。……さあ、何うぢやい。

學圓　しばらく、（鐘を掛け、お百合を中に悠と立並ぶ）其の返答は、萩原からは爲にくからう。代つて私が言ふ。——如何にも、お百合さんは村の生命ぢや。それなればこそ、華冑の公子、三男ではあるが、伯爵の萩原が、ただ、一人の美しさのために、一代鐘を守るではないか。

——

既に、此の人を手籠めにして、牛の背に衆目の恥辱を與へた諸君に、論は無益と思ふけれども、衆人環り視る中に於て、淑女の衣を奪うて、月夜を引廻すに到つては、主、親を殺した五逆罪の極惡人を罪するにも、洋の東西にいまだ嘗てためしを聞かんぞ！

そりや或は雨も降らう、黒雲も湧き起らうが、其は、慘憺たる黒牛の背の犧牲を見るに忍びないで、天道が泣かるゝのぢや。月が面を蔽ふのぢや。天を泣かせ、光を隱して、それで諸君は活きらるゝか、稻は活きても人は饑ゑる、水は湧いても人は渇ゑる。……無法な事を仕出して、諸君が萩原夫婦を追うて、鐘を撞く約束を怠つて、萬一、地が泥海に成つたら何うする！　六ヶ村八千と言はるゝか、其の多くの生命は、諸君が自ら失ふのぢや。同じ迷信と言ふなら言へ。夫婦仲睦じく、一生埋木となるまでも、鐘樓を守るに於ては、自分も心を傷けず、何等世間に害がない。

管八　默れ、煩い。汝が勝手な事を言ふな。

初雄　一體君は何ものですか。

學圓　私か、私は萩原の親友ぢや。

宅膳　藪から坊主が何を吐す。

學圓　如何にも坊主ぢや、本願寺派の坊主で、そして、文學士、京都大學の教授ぢや。山澤學圓と云ふものです。名告るのも恥入りますが、此の國は眞宗門徒信仰の淵源地ぢや。諸君のなかには同じ宗門のよしみで、同情を下さる方もあらうかと思うて云ひます。（教員に）君は學校の先生か、同一教育家ぢや。他人でない、扱うてくれ給へ。（神官に）貴方も教への道は御親類。（村長に）村長さんの醇名にもお縋り申す。……（力士に）な、天下の力士は俠客ぢや、男立と見受けました。……何分願ひます、雨乞の犧牲はお許しを頼む。

（此がために一同少時ためらふ。……代議士穴隈鑛藏、葉卷をくゆらしながら、恬々と出づ。）

鑛藏　其奴等騙賊ぢや。又、騙賊でなうても、華族が何だ、學者が何だ、糧を何うする！……命を何うする？……萬

事俺が引受けた。遣れ、汝等、裸にしようが、骨を抜かうが、女郎一人と、八千の民、誰が鼎の輕重を論ぜんやぢや。雨乞を斷行せい。

（力士眞前に一同ばらりと立懸る。）

學圓　私を縛れ、（と上衣を脱ぎ棄て）　憑ほど云うても肯入れないなら止むを得ん、私を縛れ、牛にのせい。

晃　（からりと鎌を棄て）　いや、身代りなら俺を縛れ。さあ、八裂にしろ、俺は辭せん。――牛に乘せて夜叉ヶ池に連れて行け。犧牲によつて、降らせる雨なら、俺が龍神に談判して遣る。

百合　あれ、晃さん、お客樣、私が行きます、私を遣つて下さいまし。

晃　成らん、生命に掛けても女房は賣らん、龍神が何だ、八千人が何うしたと！　神にも佛にも戀は賣らん、お前が得心で、納得して、好んですると云つても留めるんだ。

鑛藏　（ふは〳〵と輕く詰め寄り、コツ〳〵と杖で叩いて）　血迷ふな！　たはけも可い加減にしろ、女も女だ。湯屋へは何うして入る？……うむ、馬鹿が！　（と高笑ひして）　君たち、おい、苟も國のためには、妻子を刺殺して、戰爭に出ると云ふが、男兒たるものゝ本分ぢや。且つ我が國の精神ぢや、卽ち武士道ぢや。人を救ひ、村を救ふは國家のために盡すのぢや。我が國のために盡すのぢや。國のために盡すのに、一晩嬶々を牛にのせるのが、然ほどまで情ないか。洟垂しが、俺は料簡が廣いから可いが、氣の早いものは國賊だと思ふぞ、汝。俺なぞは、鑛藏は、村はもとより此處に居るたゞ此の人民蒼生のためと云ふにも、何時でも生命を棄てるぞ。

（時に村人は敬禮し、村長は頭を撫で、有志は得意を表す。）

晃　死ね！　（と云ふまゝ落したる利鎌を取ってきつと突つく）

鑛藏　わあ。（と思はず退る）

晃　死ね、死ね、死ね、民のために汝死ね。見事に死んだら俺も死んで、其から百合を渡して遣る。死ね、死なないか。

（とぢりゝと寄るたび、鑛藏ひよこ〳〵と退る。お百合、晃の手に取縋ると、縋られた手を震はしながら、）

然、然らずんば決闘せい。

（一同其の詰寄るを、わツわと遮り留む。）

傍へ寄るな、口が臭いや、こいつ等も！　汝等は、其の成金に買はれたな。これ、昔も同じ事があつた。白雪、白雪と云ふ、此の里の處女だ。權勢と迫害で、可厭がるものを無理に捉へて、裸體を牛に縛めて、夜叉ヶ池へ追

上せた。……處女は、口惜しさ、恥かしさ、無念さに、生きては里へ歸るまい。其方も、……其方も……追つては居らるゝ。同じ生命を、我に與へよ、と鼻頭を撫でゝ牛に言ひ含め、終夜芝を苅りためたを、其牛の背に山に積んで、石を合せて火を放つと、轡を當てるまでもない。白い手を擧げ、衝とさして、麓の里を教ふるや否や、牛は雷の如く舞下つて、片端から村を燒いた。……麓にぱつと塵のやうな赤い焔が立つのを見て、笑を含んで、白雪は夜叉ヶ池に身を沈めたと言ふを聞かぬか。忘れたか。汝等。おれたちに指でも指して見ろ、雨は降らいで、鹿見村は焔に成らう。不埒な奴等だ。

鑛藏　世迷言を饒舌るな二才。村は今既に旱の焔に燒けて居る。其がために雨乞するのぢや。やあ衆、手ぬるい、遣れ遣れ。（いづれも猶豫するを見て）埒明かんな、傳吉ども來い。（と喚く）

（博徒傳吉、威の長ドスをひらめかし、乾兒、得ものを振つて出づ。）

傳吉　疊んで了へ、疊んで了へ。

乾兒　合點だ。

晃　山澤、危いぞ。

（とお百合を抱くやうにして三人鐘樓に驅上る。學圓は奥に、上り口に晃、お百合、と互に楯に成らんと爭ふ。やがて押退けて、晃、すつくと立ち、鎌を解す。博徒、衆ともに下より取卷く。お百合、振上げたる晃の手に縋る。）

一同　遣れ〳〵、遣つ了へ、遣つ了へ。

學圓　言語道斷、いまだ嘗て、恁る、頑冥暴虐の民を知らん！　天に、――天に銀河白し、瀧と成つて、落ちて來い。合掌す。

晃　大事な身體だ、山澤は遁げい、遁げい。

（と呼ばゝりながら、眞前に石段を上れる傳吉と、二打三打、稲妻の如く、チヤリ、と合す。傳吉退く。時に礫をなげうつものあり。）

晃　（額に傷き血を厭へて）あツ。（と鎌を取落す）

百合　（サツクに其鎌を拾ひ）皆さん、私が死にます、言分はござんすまい。（と云ふより早く胸さきを、かツしと切る）

晃　了つた！（と鎌を捩取る）

百合　晃さん――御無事で――晃さん。（とがつくり落入る）

（一同色沮みて茫然たり。）

晃　一人は遣らん！　茨の道は負つて通る。冥土で待てよ。（と立直る。お百合を抱ける、學圓と面を見合せ）何時だ。（と極めて冷靜に聞く。）

學圓　（沈着に時計を透かして）二時三分。

晃　むゝ、夜待に見れば星でも了る……丁ど丑滿……然うだらう。（と昂然として鐘を凝視し）山澤、僕は此の鐘を撞くまいと思ふ。何うだ。

學圓　（沈思の後）うむ、打つな、お百合さんのために、打つな。

晃　（鎌を上げ、はた、と切る。𨋎と撞木落つ）

（途端にもの凄き響きあり。――地震だ。――山鳴だ――夜叉ヶ池の上を見い。夜叉ヶ池の上を見い。夜叉ヶ池の上を見い。眞暗な雲が出た、――と叫び呼はる程こそあれ、閃電來り、瞬く間も歇まず。衆は立つ足もなくあわて惑ふ、半あれて一蹴りに驅け散らして飛び行く。）

鐵蔵　鐘を、鐘を――

傳嘉次　助けて下され、鐘を撞いて下されなう。

宅膳　救はせたまへ。助けたまへ。

（と逃げまはりつゝ、絶叫す。天地晦冥、よろぼひ上るもの二三人石段に這ひかゝる。）

（晃、切拂ひ、追ひ落し、冷々然として、峯の方に向つて、學圓と二人彫像の如く立ちつゝあり。）

晃　波だ。

（と云ふ時、學圓ハタと俯伏しに成ると同時に、晃、咽喉を斬つて、うつぶし倒る。）

（白雪。一際烈しきひかりものゝ中に、一たび、小屋の屋根に立顯れ、忽ち眞暗に消ゆ。再び凄じき電に、鐘樓に來り、すつくと立ち、鐵杖を丁と振つて、下より空さまに、鐘に手を掛く。鐘ゆら〳〵と成つて傾く。）

（村一同昏迷し、惑亂するや、萬年姥、諸眷屬とゝもに立ちかゝつて、一人も餘さず盡く屠り殺す。――）

白雪　姥、嬉しいな。

一同　お姫樣。（と諸聲凄し）

白雪　人間は？

姥　皆、魚に。早や泳いで居ります。田螺、鰌も見えまする。

一同　（哄と笑ふ）はゝゝゝはゝゝ。

白雪　此の新しい鐘ヶ淵は、御夫婦の住居にせう。皆おいで。私は劒ヶ峰へ行くよ。……最うゆきかよひは思ひのまゝ。お百合さん、お百合さん、一所に唄をうたひませうね。

（忽ち又暗し。既にして巨鐘水にあり。晃、お百合と二人、晃は、龍頭に頰杖つき、お百合は下に、水に裳をひいて、うしろに反らして手を支き、打仰いで、熟と顏を見合せ莞爾と笑む。時に月の光煌々たり。）

（學圓、高く一人鐘樓に佇み、水に臨んで、一揖し、

合掌す。）

（月いよ〳〵明かなり。）

――幕――

海神別荘

時　現代

場所　海底の琅玕殿

人物

公子
沖の僧都（年老いたる海坊主）
美女
博士
女房
侍女（七人）
黒潮騎士（多数）

森厳藍碧なる琅玕殿裡。黒影あり。――沖の僧都。

僧都　お腰元衆。

侍女一　（薄色の洋装したるが扉より出づ）はい、はい。これは御僧。

僧都　や、目覚しく、美しい、異つた扮装でおいでなさる。

侍女一　御挨拶でございます。美しいか何うかは存じませんけれど、異つた支度には違ひないのでございます。若様、豫てのお望みが叶ひまして、今夜お輿入のございます。若奥様が、島田のお髪、お振袖と承りましたから、私どもは、餘計其のお姿のお目立ち遊ばすやうに、皆して、恁やうに申合せましたのでございます。

僧都　はあ、扨てもお似合ひなされたが、何處の浦の風俗でやらうな。

侍女一　度々海の上へお出でなさいますもの、よく御存じでおあんなさいませうのに。

僧都　いや、荒海を切つて影を顯すのは暴風雨の折から。如法大抵暗夜ぢやに因つて、見えるのは墓の船に死骸の蠢く裸體ばかり。色ある女性の衣などは睫毛にも掛りませぬ。さりとも小僧のみぎりはの、蒼い炎の息を吹いても、素奴色の白いはないか、袖の紅いはないか、と胴の間、狭間、帆柱の根、錨綱の下までも、あなぐり探いたものなれども、孫子は措け、僧都に於ては、久しく心にも掛けませいで、一向に不案内ぢや。

侍女一　（笑ふ）お精進でおいで遊ばします。もし、これは、櫻貝、蘇芳貝、いろ／＼の貝を蕊にして、花の波が白く咲きます、其の渚を、青い山、緑の小松に包まれて、

大陸の婦たちが、夏の頃、百合、桔梗、月見草、夕顔の雪の裝などして、旭の光、月影に、遙に（高瀾なる碧瑠璃の天井を、見上げやかに打仰ぐ）姿を映します。あゝ、風情な。美しいと視めましたものでございますから、私ども皆が、今夜は此の服裝に揃へました。

僧都　一段とお見事ぢや。が、朝ほど御機嫌伺ひに出ました節は、御殿、お腰元衆、いづれも不斷の服裝でおいでなされた。其の節は、今宵、あの美女が此へ輿入の儀はまだ極らんのだ。地盤人間は決斷が遲いに因つてな。……其ぢやに、豫てのお心掛か。類狹く裝が間に合うたものなう。

侍女一　まあ、貴老は。私たち此の玉のやうな皆の膚は、白い尾花の穗を散らした、山々の秋の錦が水に映ると同じに、装うと思へば、つい其れなりに、思ふまゝ、身の裝の出來ます體で居りますものを。貴老はお忘れなさいましたか。

貴老は。……貴老だとて違ひはしません。緋の法衣を召さうと思へば、お思ひなさいます、と右左、峰に、一本燃立つやうな。

僧都　ま、ま、分つた。（腰を屈めつゝ、壓ふるが如く掌を擧げて制す）何とも相濟まぬ儀ぢや。海の住居の有難さに馴れて、蔭日向、雲の往來に、潮の色の變ると同樣、如意自在心のまゝ、立處に身の裝の成る事を忘れて居ました。

なれども、僧都が身は、怎うした墨染の暗夜こそ可けれ、燃緋の法衣など絡はうなら、づぶ濡の提灯ぢや、戸惑をした鱏の魚ぢやなどゝ申さう。膝も石も利く事ではない。（細く丈長き鐵の鐺を倒にして携へたる杖を、輕く突直す）

いや、又忘れては成らぬ。忘れぬ前に申上げたい儀で罷出た。若樣へお取次を頼みましよ。

侍女一　畏りました。唯今。……あの、丁ど可い折に存じます。

（右の方闥を排して行く。）

（僧都謹みたる體にて室内を眗す。）

はあ、爭はれぬ。法衣の袖に春がそよぐ。

（鐺の杖を抱きて佇む。）

公子（衝と出づ、闥を排きて、性急に登場す。面玉の如く萠丈けたり。黑髮を背に捌く）

（青地錦の直垂、黃金づくりの劍を佩く。）

（上段、一階高き床の端に、端然として立つ。）

爺い、見えたか。

（侍女五人、以前の一人を眞先に、すらすらと從ひ出づ。いづれも洋裝。第五の侍女。年最も少し。二人は

床の上、公子の背後に、二人は床を下りて僧都の前に、第一の侍女は其の背に立つ。)

僧都　は。(大床に跪く。控へたる侍女一、件の錨の杖を預る)　これは〳〵、御休息の處を恐入りましてござります。

公子　(親しげに)　爺い、用か。

僧都　紺青、群青、白群、朱、碧の御藏の中より、此の度の儀に就きまして、先方へお遣はしに成りました、品々の類と、數々を、念のために申上げたうござりまして。

公子　(立ちたるまゝ)　おゝ、あの女の父親に遣つた、陸で結納とか云ふものゝ事か。

僧都　はあ、いや、御聰明なる若樣。若樣にはお覺違ひでござります。彼等夥間に結納と申すは、親々が縁を結び、媒妁人の手を以ち、婚約の祝儀、目錄を贈りますでござります。然るに此度は、先方の父親が、若樣の御支配遊ばす、わだつみの財寶に望を掛け、もし此の念願の屆くに於ては、眉目容色、世に類なき一人の娘を、海底へ捧げ奉る段、しかと誓ひました。卽ち、彼が望みの寶をお遣しに成りましたに因つて、是非に及ばず、誓言の通り、娘を波に沈めましたのでござります。されば、お送り遊ばされた數の寶は、彼等が結納と申さうより、俗に女の身代と云ふものにござりますので。

公子　(輕く頷く)　可、何にしろ些少ばかりの事を、別に知らせるには及ばんのに。

僧都　いや〳〵、鱗一枚、一草の空貝とは申せ、僧都が承りました上は、活達なる若樣、斯やうな事はお氣煩かしうおいでなさりませうなれども、老のせうがに、お耳に入れねば成りませぬ。お腰元衆もお執成。(五人の侍女に目遣す)　平にお聞取りを願はしう。

侍女三　若樣、お座へ。

公子　(顧みて)　椅子を此方へ。

(侍女三、四、兩人して白き枝珊瑚の椅子を捧げ、床の端近に据ゆ。大楕圓形の白き琅玕の、沈みたる光澤を帶べる卓子、上段の中央にあり。枝のまゝなる見事なる珊瑚の椅子、紅白二脚、紅きは花の如く、白きは霞の如きを、相對して置く。侍女等が捧出でゝ位置を變へて据ゑたるは、其の白き方一脚なり。)

僧都　眞鯛大小八千枚。鰤、鮪、ともに二萬疋。鰹、眞那鰹、各一萬本。大比目魚五千枚。鱚、魴鮄、鯒、篠身魚、目張魚、藻魚、合せて七百籠。若布の其の幅六丈、長さ十五尋のもの、百枚一卷九千連。鮟鱇五十袋。虎河豚一頭。大の鮹一番。さて、別に又、月の灘の桃色の枝珊瑚一株、丈八尺、(此の分、手にて仕方す)　周圍三抱の分にござりまして。えゝ、月の眞珠、花の眞珠、雪の

眞珠、いづれも一寸の珠三十三粒、八分の珠百五粒、紅寶玉三十顆、大さ鶴の卵、粒を揃へて、此は碧瑪瑙の盆に裝り、緑寶玉、三百顆、孔雀の尾の渦卷の數に合せ、紫の瑠璃の臺。五色に透いて輝きまする鰐の皮三十六枚、沙金の包七十袋、量目約百萬兩。閻浮提金十斤也。緞子、縮緬、綾、錦、牡丹、芍薬、菊の花、黄金色の董、銀覆輪の、月草、露草。

侍女一　もし／＼、唯今の其は、あの、殘らず、其のお娘御の身の代とかにお遣はしの分なのでございますか。

僧都　殘らず身の代と？……はあ、如何さまな。（心付く）不重寶。これは／＼海松ふさの袖に記して覺えのまゝ、潮に乘つて、颯と讀流しました。はて、何から申した事やら、品目の多い處へ、數々ゆゑに。えゝ／＼、眞鯛大小八千枚。

侍女一　鰤、鮪ともに二萬疋。鰹、眞那鰹各一萬本。

侍女二　（僧都の前にあり）大比目魚五千枚。鱈、魴鮄、鯒、あいなめ、目ばる、藻魚の類合せて七百籠。

侍女三　（公子の背後にあり）若布の其の幅六丈、長さ十五尋のもの百枚一卷九千連。

侍女四　（同じく公子の背後に）鮟鱇五十袋、虎河豚一頭、大の鮹一番。まあ……（笑ふ。侍女皆笑ふ）

僧都　（額の汗を拭く）それ／＼然やう、然やう。

公子　（微笑しつゝ）笑ふな、老人は眞面目で居る。

侍女五　（最も少し。齊しく公子の背後に附添ふ、派手に美しき聲す）月の灘の桃色の枝珊瑚樹、對の一株、丈八尺、周圍三抱の分。一寸の玉三十三粒……雪の眞珠、花の眞珠。

侍女一　月の眞珠。

僧都　少時。までぢや／＼、までにござる。……桃色の枝珊瑚樹、丈八尺、周圍三抱の分までにござつた。（公子に）鶴の卵ほどの紅寶玉、孔雀の渦卷の緑寶玉、青瑪瑙の盆、紫の瑠璃の臺。此の分は、天なる（仰いで禮拜す）月宮殿に貢のものにござりました。

公子　私も然うらしく思つて聞いた。僧都、それから後に言はれた、其の董、露草などは、金銀寶玉の類は云ふまでもない、魚類ほどにも、人間が珍重しないものと聞く。が、同じく、あの方へ遣はしたものか。

僧都　綾、錦、牡丹、芍薬、縺れも散りもいたしませぬを、老人の申條、はや、又海松のやうに亂れました。えゝえゝ、其の董、露草は、若樣、此の度の御旅行につき、白雪の龍馬にめされ、渚を掛けて浦づたひ、朝夕の、茜、紫、雲の上を山の峰へお潛びにてお出ましの節、珍しくお手に入りましたを、御姉君、乙姫樣へ御進物の分でござりました。

侍女一　姫様は、閻浮提金の一輪挿に、眞珠の露でお活け遊ばし、お手許をお離しなさいませぬさうにございます。

公子　度々は手に入らない、私も大方、姉上に進げた其の事であらうと思つた。

僧都　御意、娘の親へ遣はしましたは、眞鯛より數へまして、珊瑚一對……までに止まりました。

侍女二　海では何ほどの事でもございませんが、受取ります陸の人には、鯛も比目魚も千と萬、少ない數ではございますまいに、僅な日の間に、ようお手廻し、お遣はしに成りましてございます。

僧都　然れば其の事。一國、一島、津や浦の果から果を一網にもせい、人間夥間が、大海原から取入れます獲ものと云ふは、貝に溜つた雫ほどに聊少なものでござつての、お腰元衆など思うても見られまい、鉤の尖に蟲を附けて雜魚一筋を釣ると云ふ仙人業をしまするよ。此の度の娘の父は、然までにもなけれども、小船一つで網を打つが、海月ほどにしよぼりと擴げて、泡にも足らぬ小魚を掬ふ。入るものが小さき故に、其が希望を滿しますに、手間の入ること、何ともまだるい、鰯を育てゝ鯨にするより齒痒い段の行止り。（公子に向ふ）若樣は御性急ぢや。早く彼が願を滿たいて、誓の美女を取れ、と御意ある。よつて、黒潮、赤潮の御手兵を些とばかり動かしましたわ。赤潮の劒は、炎の稻妻、黒潮の黒い旗は、黒雲の峰を築いて、沖から撲と浴びせたほどに、一浦の津波と成つて、田畑も家も山へ流いた。片隅の美女の家へ、門背戸かけて、疊天井、一齊に、屋根の上の丘の腹まで運込みました儀でござつたよ。

侍女三　まあ、お勇ましい。

公子　（少し俯向く）勇ましいではない。家畑を押流して、浦のもの等は迷惑をしはしないか。

僧都　否、否、黒潮と赤潮が、密と爪彈きしましたばかり。人命を斷つほどはござりませなんだ。尤も迷惑を爲ば、いたせ、娘の親が人間同士の間でさへ、自分ばかりは、思ひ懸けない海の幸を、黄金の山ほど摑みましたに因つて、他の人々の難澁如きは聊か氣にも留めませぬに、海のお世子であらせられます若樣。人間界の迷惑など、お心に掛けさせますには毛頭當りませぬ儀でございます。

公子　（頷く）そんなら可——僧都。

僧都　はゝ。（更めて手を支く）

公子　彼の親は、此方から遣はした、娘の身の代とか云ふものに滿足をしたであらうか。

僧都　御意、滿足いたしましたればこそ、當御殿、お求めに從ひ、美女を沈めました儀にござります。尤も、眞鯛、鰹、眞那鰹、其の金銀の魚類のみでは、滿足をしませな

んだが、續いて、三抱へ一對の樫珊瑚を、夜の渚に差置きますると、山の端出づる月の光に、眞紫に輝きまするを夢のやうに抱きました時、彼の父親は白砂に領伏し、波の裙を吸ひました。あはれ龍神、一命も捧げ奉ると、御恩のほどを難有がりましたのでござります。

公子　（微笑す）親仁の命などは御免だな。そんな魂を引取ると、海月が殖えて、迷惑をするよ。

侍女五　あんな事をおつしやいます。

（一同笑ふ。）

公子　けれども僧都、そんな事で滿足した、人間の慾は淺いものだね。

僧都　まだ〳〵、彼は深い方でござります。一人娘の身に代へて、海の寶を望みましたは、慾念の逞い故でござりまして。……たか〳〵は人間同士、夥間うちで、白い柔な膩身を、炎の燃立つ絹に包んで蒸しながら賣り渡すのが、峠の關所かと心得ます。

公子　馬鹿だな。（珊瑚の椅子をすツと立つ）戀しい女よ。望めば命でも遣らうものを。……はゝ、はゝ。

（微笑す。）

侍女四　お思はれ遊ばした娘御は、天地かけて、波かけて、お仕合せでおいで遊ばします。

侍女一　早くお着き遊せば可うございます。私どもゝお待遠に存じ上げます。

公子　道中の樣子を見よう、旅の樣子を見よう。（闥の外に向つて呼ぶ）おい〳〵、居間の鏡を寄越せ。（闥開く、侍女六七人、赤地の錦の蔽を掛けたる大なる姿見を捧げ出づ）

僧都も御覽。

僧都　失禮ながら。（膝行して進む。侍女等、姿見を卓子の上に据ゑ、錦の蔽を展く。侍女等卓子の端の一方に集る）

公子　（姿見の面を指し、僧都を見返る）彼だ、彼だ。あの一點の光が其だ。お前たちも見ないか。

（舞臺轉ず。少時暗黑寂寞として波濤の音聞ゆ。やがて一個、花白く葉の青き蓮華燈籠、漂々として波に漾へるが如く顯る。續いて花の赤き同じ燈籠、中空の如き高處に出づ、やゝ低し。尙ほ見ゆ、少しく高し。其の數五個に成る時、累々たる波の舞臺を露す。美女。毛卷島田に結ふ。白の振袖、綾の帶、紅の長襦袢、胸に水晶の珠數をかけ、襟に兩袖を占めて、波の上に、雪の如き龍馬に乘せらる。凡そ手綱の丈を隔てゝ、一人下髮の女房。旅扮裝、素足、小袿に褄端折りて、片手に市女笠を携へ、片手に蓮華燈籠を提ぐ。第一點の燈の影は此なり。黑潮騎士、美女の白龍馬を犇々と圍

んで兩側二列を造る。凡十人。皆崑崙奴の形相。手に
手に、すく／＼と槍を立つ。穗先白く晃々として、氷
柱倒に黑髮を纓ふ。或ものは燈籠を槍に結ぶ、灯の高
きは此なり。或ものは手にし、或ものは腰にす。）

女房　貴女、お草臥でございませう。一息、お休息なさいますか。

美女　（夢見るやうに其の瞳を睜く）あゝ、（歎息す）もし誰方ですか。……私の身體は足を空に、（馬の背に裳を搔緊む）倒に落ちて落ちて、波に沈んで居るのでせうか。

女房　否、お美しいお髮一筋、風にも波にもお緩れはなさいません。何でお身體が倒などゝ、そんな事がございませう。

美女　何時か、何時ですか、昨夜か、今夜か、前の世ですか。私が一人、楫も櫓もない、舟に、筵に乘せられて、波に流されました時、父親の約束で、海の中へ捕られて行く、私へ供養のためだと云つて、船の左右へ、前後に、波のまに／＼散つて浮く……蓮華燈籠が流れました。

女房　水に目のお馴れなさいません、貴女には道しるべ、また土産にもと存じまして、此が、（手に翳す）其の燈籠でございます。

美女　まあ、灯も消えずに……

女房　燃えた火の消えますのは、油の盡きる、風の吹く、陸ばかりの事でございます一度此の國へ受取りますと、こゝには風が吹きません。たゞ花の香の、ほんのりと通ふばかりでございます。紙の細工も珠に替つて、葉の青いのは、翡翠、琅玕、花片の紅白は、眞珠、白珠、紅寶玉。燃ゆる灯も、またゝきながら消えない星でございます。御覽遊ばせ、貴女。お召ものが濡れましたか。お髮も亂れはしますまい。何で、お身體が倒でございませう。

美女　最後に一目、故鄕の浦の近い峰に、月を見たと思ひました。其切、底へ引くやうに船が沈んで、私は波に落ちたのです。唯幻に、其の燈籠の樣な蒼い影を見て、胸を離れて遠くへ行く、自分の身の魂が、導く鬼火かと思ひましたが、ふと見ますと、前途にも、あれ／＼、遙の下と思ふ處に、月が一輪、おなじ光で見えますもの。

女房　あゝ、（望む）あの光は。否、月影ではございません。

美女　でも、貴方、雲が見えます、雪のやうな、空が見えます、瑠璃色の。そして、眞白な絹絲のやうな光が射します。

女房　其の雲は波、空は水。一輪の月と見えますのは、此

から貴女がお出遊ばす、海の御殿でございます。あれへ、お迎へ申すのです。

美女　そして、參つて、私の身體は、何う成るのでございませうねえ。

女房　ほゝゝ、（笑ふ）何事も申しますまい。唯お嬉しい事なのです。おめでたう存じます。

美女　あの、捨小舟に流されて、海の贄に取られて行く、あの、（胸す）これが、嬉しい事なのでせうか。めでたい事なのでせうかねえ。

女房　（再び笑ふ）お國では如何でございませうか。私たちが故郷では、最う此の上ない嬉しい、めでたい事なのでございますもの。

美女　彼處まで、道程は？

女房　お國でたとへは煩かしい。……おゝ、五十三次と承ります、東海道を十度づゝ、三百度、往還りを繰返して、三千度いたしますほどでございませう。

美女　えゝ、そんなに。

女房　めした龍馬は風よりも早し、お道筋は黄金の欄干、白銀の波のお廊下、たゞ花の香りの中を、やがてお着きなさいます。

美女　潮風、磯の香、海松、海藻の、咽喉を刺す硫黄の臭氣と思ひのほか、眞個に、清しい、佳い薫、（柔に袖を動かす）……ですが、時々、悚然する、腥い香のしますのは？……

女房　人間の魂が、貴女を慕ふのでございます。海月が寄るのでございます。

美女　人の魂が、海月と云つて？

女房　海に參ります醜い人間の魂は、皆、海月に成つて、ふは〳〵さまようて歩行きますのでございます。

黑潮騎士　（口々に）――煩い。叱々。――（と、ものなき龍馬の周圍を呵す）

美女　まあ、情ない、お恥しい。（袖を以て面を蔽ふ）

女房　否、貴女は、あの御殿の若樣の、新夫人でいらつしやいます、もはや人間ではありません。

美女　えゝ。（袖を落す。――舞臺轉ず。眞暗に成る）――

女房　（聲のみして）急ぎませう。美しい方を見ると、黑鰐、赤鮫が襲ひます。騎馬が前後を守護しました。お憂慮はありませんが、いざ參ると、斬合ひ攻合ふ、修羅の巷をお目に懸ければ成りません。――騎馬の方々、急いで下さい。

（燈籠一つ行き、續いて一つく。漂蕩する趣して、高く低く奥の方深く行く。）

（舞臺燦然として明るし、前の琅玕殿顯る。）

（公子。椅子の位置を卓子に正しく直して掛けて、姿

見の傍にあり、向つて右の上座。左の方に赤き枝珊瑚の椅子、人なくしてたゞ据ゑらる。其の椅子を斜に下りて、沖の僧都、此の度は腰掛けてあり。黒き珊瑚、小形なる椅子を用ゐる。おなじ小形の椅子に、向つて正面に一人、略唐代の儒の服装したる、髯黒き一人あり。博士なり。）

（侍女七人、花の如く其の間を装ひ立つ。）

公子　博士、お呼立をしました。

博士。（敬禮す）

公子　此を御覧なさい。（姿見の面を示す）千仭の蜒を累ねた、漆のやうな波の間を、幽に蒼い灯に照らされて、白馬の背に手綱したは、此の度迎へ取るおもひものなんです。陸に獅子、虎の狙ふと同一に、入道鰐、坊主鮫の一類が、美女と見れば、途中に襲撃つて、黒髪を吸ひ、白き乳を裂き、美しい血を呑まうとするから、守備のために、旅行さきで、手にあり合せたゞけ、小数の黒潮騎士を附添はせた。騎士は白刃を揃へて居る。

博士　至極のお計ひに心得まするが。

公子　處が、敵に備ふる此處の守備を出掃はしたから不用心ぢや、危険であらう、と僧都が言はれる。……其は恐れん。……私が居れば仔細ない。けれども、又、僧都の言はれるには、白衣に緋の襲した女子を馬に乗せて、黒髪を槍尖で縫つたのは、彼の國で引廻しとか稱へた罪人の姿に似て居る、私の手許に迎入るゝものを、不祥ぢや、忌はしいと言ふのです。

事實不祥なれば、途中の保護は他に幾千も手段があります。其は構はないが、私は聊かも不祥と思はん、忌はしいと思はない。

此を見ないか。私の領分に入つた女の顔は、白い玉が月の光に包まれたと同一に、愈々清い。眉は美しく、瞳は澄み唇の紅は冴えて、聊かも窶れない。憂へて居らん。清らかな衣を着、新に粧つて花に露の滴點る裝して、馬に騎した姿は、かの國の花野の丈を、錦の山の懐に抽く……歩行より、車より、駕籠に乗つたより、一層鮮麗なものだと思ふ。其の上、選抜した慓悍な黒潮騎士の精鋭等に、長槍を以て四邊を拂はせて通るのです　得意思ふべしではないのですか。

僧都　（頻に頭を傾く）

公子　引廻しと聞けば、恥を見せるのでせう、苦痛を與へるのであらう。槍で囲み、旗を立て、淡く清く装つた得意の人を馬に乗せて市を練つて、やがて刑場に送つて殺した處で、――殺されるものは平凡に病疾で死するより愉快でせう。――其が何の刑罰に成るのですか。陸と海と、國が違ひ、人情が違つても、まさか、そんな刑罰はあ

るまいと想ふ。僧都は、うろ覺えながら確に記憶に殘ると言はれる。……貴下をお呼立した次第です。一寸お驗べを願ひませうか。

博士　御聞けの記憶は私にもありますで。しかし、念のために、驗べまするで。えゝ、陸上一切の刑法の記錄でありませうか、それとも。

公子　面倒です、あとは何うでも可い。たゞ女子を馬に乘せ、槍を立てゝ引廻したと云ふ、そんな事があつたかと云ふ、それだけです。

博士　正史でなく、小說、淨瑠璃の中を見ませうで。時の人情と風俗とは、史書よりも寧ろ此の方が適當でありますので。（金光燦爛たる洋綴の書を展く）

公子　（卓子に腰を掛く）大相氣の利いた書物ですね。

博士　此は、佛國の大帝奈翁が、西曆千八百八年、西班牙遠征の途に上りました時、豫て世界有數の讀書家、必要によつて當時の圖書館長バルビールに命じて製らせました、函入新裝の、一千卷、一架の內容は、宗敎四十卷、抒事詩四十卷、戲曲四十卷、其の他の詩篇六十卷。歷史六十卷、小說百卷、と申しまするデュオデシモ形と申す有名な版本の事を……お聞及びなさいまして、御姉君、乙姬樣が御工夫を遊ばしました。蓮の絲、一筋を、凡そ枚數千頁に薄く織擴げて、一萬枚が一折一百二十折を合せて一册に綴ぢましたものでありまして、此の國の微妙なる光に展きますると、森羅萬象、人類をはじめ、動植物、鑛物、一切の元素が、一ゝづゝ微細なる活字と成つて、然も、各々五色の輝を放ち、名詞、代名詞、動詞、助動詞、主客、句讀、いづれも個々別々、七彩に照つて、燦く開きました眞白な枚の上へ、自然と、染め出さるゝのでありまして。

公子　姉上が、其を。――嘸、御祕藏のものでせう。

博士　御祕藏ながら、若樣の御書物藏へも、整然と姬樣がお備へつけでありますので。

公子　では、私の所有ですか。

博士　若樣は此の册子と同じものを、瑪瑙に靑貝の蒔繪の書棚、五百架、御所有で居らせられまする次第であります。

公子　姉があつて幸福です。どれ、（取つて披く）此は…………唯白紙だね。

博士　は、恐れながら、それ／＼の豫備の知識がありませんでは、自然の其の色彩ある活字は、ペイジの上には寫り兼ねるのでございます。

公子　恥入るね。

博士　いや／＼、若樣は御勇武で居らせられます。入道鮫、黑鮫の襲ひまする節は、御訓練の黑潮、赤潮騎士、御手

の劔でなうては御退けに成りまする次第には參らぬのでありまして。雖然、姉姫樣の御心づくし、節々は御閲讀の儀をお勸め申しまするので。

僧都　もろともに、お勸め申上げますのでござります。

公子　（頷く）まあ、今の引廻しの事を見て下さい。

博士　確に。（書を披く）手近に淨瑠璃にありました。ああ、此にあります。……若樣、此は大日本浪華の町人、大經師以春の年若き女房、名だゝる美女のおさん、手代茂右衛門と不義顯れ、即ち引廻し磔に成りまする處を、記したのでありまして。

公子　お讀み。

博士　（朗讀す）――紅蓮の井戸堀、焦熱の、地獄のかま塗よしなやと、急がぬ道をいつのまに、越ゆる我身の死出の山死出の田長の田がりよし、野邊より先を見渡せば、過ぎし冬至の冬枯の、木の間木の間にちら／＼と、ぬき身の槍の恐しや、――

公子　（姿見を覗きつゝ、且つ聽きつゝ）　あゝ、幾干か似て居る。

博士　――また冷返る夕嵐、雪の松原、此の世から、懲る苦患にわう忘日、島田亂れてはらはら／＼、顏にはいつもはんげしやう、縛られし手の冷たさは、我身一つの寒の入、涙ぞ指の爪とりよし、袖に氷を結びけり。……

（侍女等、傾聽す。）

公子　唯、いゝ姿です、美しい形です。世間は其で女の罪を責めたと思ふのだらうか。

博士　先、ト見えまするので。

僧都　然やうでございます。

公子　馬に騎つた女は、殺されても戀が叶ひ、思ひが屆いて、嘸本望であらうがね。

僧都　――袖に氷を結びけり。涙などゝ、歎き悲しんだやうにござります。

公子　其は、其の引廻しを見る。見物の心ではないのか。私には分らん。（頭を掉る）

博士　――まだ他に例があるのですが。

博士　（朗讀す）……世の哀とぞなりにける。今日は神田のくづれ橋に恥をさらし、又は四谷、芝、淺草、日本橋に人こぞりて、見るに惜まぬはなし。是を思ふに、かりにも人は惡き事をせまじきものなり。天是を許し給はぬなり。……

公子　（眉を顰む。――侍女等等しく不審の面色す）

博士　……此女思込みし事なれば、身の窶るゝ事なくて、毎日ありし昔の如く、黒髮を結はせて美はしき風情。……

公子　（色解く。侍女等、眉をひらく）

博士　中略をいたします。……聞く人一しほいたはしく、

其姿を見おくりけるに、限ある命のうち、入相の鐘つく比、品かはりたる道芝の邊にして、其身は憂き煙となりぬ。人皆いづれの道にも煙はのがれず、殊に不便は是にぞありける。——此で、鈴ヶ森で火刑に處せられまするまでを、確か江戸中棄札に槍を立てゝ引廻した筈と心得まするので。

公子　分りました。其はお七と云ふ娘でせう。私は大すきな女なんです。御覽なさい。何處に當人が歎き悲みなぞしたのですか。人に惜まれ可哀がられて、女それ自身は大滿足で、自若として火に燒かれた。得意想ふべしではないのですか。何故其が刑罰なんだね。もし刑罰とすれば、惡の枚、情の類だ。實際其の罪を罰しようとするには、其のまゝ無事に置いて、平凡に愚圖々々に生存らへさせて、皺だらけの婆にして、其の娘を終らせる方が可いと、私は思ふ。……分けて、現在、殊に其のお七の如きは、姉上が海へお引取りに成つた。刑場の鈴ヶ森は自然海に近かつた。姉上は御覽に成つた。鐵の鎖は手足を繋いだ、燃草は夕霜を置殘して其の肩を包んだ。煙は雪の振袖をふすべた。炎は緋鹿子を燃え拔いた。緋の牡丹が崩れるより、虹が燃えるより美しかつた。戀の火の白熱は、凝つて白玉と成る、其の膚を、氷つた雛芥子の花に包んだ。姉の手の甘露が沖を曇らして注いだのだつた。其のまゝ海の底へお引取りに成つて、現に、姉上の宮殿に、今も十七で、紅の珊瑚の中に、結綿の花を咲かせて居るのではないか。

男は死なゝかつた。存命へて坊主に成つて老い朽ちた。娘のために、姉上は其さへお引取りに成つた。けれども、其の魂は、途中で牡の海月に成つた。——時々未練に娘を覗いて、赤潮に追拂はれて、醜く、ふら／＼と生白く漾うて失するあはれなものだ。

娘は幸福ではないのですか。火も水も、火は虹と成り、水は瀧と成つて、彼の生命を飾つたのです。拔身の槍の刑罰が馬の左右に、其の譽を輝かすと同一に。——博士如何ですか、僧都。

博士　しかし、しかし若樣、私は愼重にお答へをいたしまする。身は此の職にありながら、事實、人間界の心も情も、まだ聊かも分らぬのでありまして。若樣、唯今の仰せは、其は、すべて海の中のみに留まりまするか。

公子（穩和に頷く）　姉上も、以前お分りに成らぬと言はれた。其の上、貴下がお分りにならなければ此は誰にも分らないのです。私にも分らない。しかし事情も違ふ。彼を迎へる、道中の此の（又姿見を指す）　馬上の姿は、別に不祥ではあるまいと思ふ。

僧都　唯今、仰せ聞けられ承りまする内に、條理は辨へず、

僧都にも分らぬことのみではござりますが、唯、黒潮の抜身で圍みました段は、別に忌はしい事ではござりませんやうに、老人にも、其の合點參りましてござります。

公子　可、しかし僧都、こゝに蓮華燈籠の意味も分つた。が、一つ見馴れないものが見えるぞ。女が、黒髪と、あの雪の膚との間に――胸に珠を掛けた、彼は何かね。

僧都　はあ。（卓子に伸上る）はゝ、いかさま、いや、若樣。あれは水晶の珠數にございます。海に沈みまする覺悟につき冥土に參る心得のため、檀那寺の和尚が授けましたのでござります。

公子　冥土とは？……其こそ不埒だ。そして仇光りがする、あれは……水晶か。

博士　水晶とは申す條、近頃は專ら硝子を用ゐますので。

公子　（一笑す）私の戀人ともあらうものが、無ければ可い。が、硝子とは何事ですか。金剛石、また眞珠の揃うたのが可い。……博士、贈つて然るべき頭飾をお検べ下さい。

博士　畏りました。

公子　そして指環の珠の色も怪しい、お前たち何う見たか。

侍女一　近頃は、かんてらの灯の露店に、紅寶玉、緑寶玉と申して、貝を鬻ぐと承ります。

公子　お前たちの化粧の泡が。波に流れて渚に散つた、あの貝が寶石か。

侍女二　錦襴の服を着けて、青い頭巾を被りました、立派な玉商人の賣りますものも、擬が多いさうにございます。

公子　博士、次手に指環を贈らう。僧都、すぐに出向うて、遠路であるが、途中、早速、硝子と其の擬ひ珠を取棄てさして下さい。お老寄に、御苦勞ながら。

僧都　（苦笑す）若樣には、新夫人の、まだ、海にお馴れなさらず、御到着の遅いばかり氣になされて、老人が、こゝに形を消せば、瞬く間もなう、お姿見の中の御馬の前に映りまする神通を、お忘れなされて、老寄に苦勞などゝ、心外な御意を蒙りまするわ。

公子　はゝは、（無邪氣に笑ふ）失禮をしました。

（博士、僧都、一揖して廻廊より退場す。侍女等慇懃に見送る。）

公子　少し窮屈であつたけな。

（侍女等親しげに皆其の前後に齊眉き寄る。）

性急な私だ。――女を待つ間の心遣にしたい。誰か、あの國の歌を知つて居らんか。

侍女三　存じて居ります。浪花津に咲くや此花冬籠、今を春べと咲くや此花。

侍女四　若樣、私も存じて居ります。淺香山を。

公子　いや、そんなのではない。（博士がおきたる書を披

きつゝ）女の國の東海道、道中の唄だ。何とか云ふのだつた。此の書はいくらか覺えがないと、文字が見えないのださうだ。（呟く）姉上は貴重な、しかし、少しあてつこすりの書をお拵へに成つたよ。あゝ、何とか云つた、東海道の。

侍女五　五十三次のでございませう、私が少し存じて居ります。

公子　歌うて見ないか。

侍女五　はい。（朗かに優しくあはれに唄ふ）

都路は五十路あまりの三つの宿、……

公子　おゝ、其だ。字書のやうに、江戸紫で、都路と標目が出た、（展く）あとを。

侍女五　……時得て咲くや江戸の花、浪靜なる品川や、やがて越來る川崎の、軒端ならぶる神奈川は、早や程ヶ谷に程もなく、暮れて戸塚に宿るらむ。紫匂ふ藤澤の、野面に續く平塚も、もとのあはれは大磯か、蛙鳴くなる小田原は。……（極惡げに）……もうあとは忘れました。

公子　可、こゝに緑の活字が、白い雲の枚に出た。――箱根を越えて伊豆の海、三島の里の神垣や――さあ、忘れた所は教へて遣らう。此の歌で、五十三次の宿を覺えて、お前たち、あの道中雙六と云ふものを遊んで見ないか。上りは京都だ。姉の御殿に近い。誰か一人上つて、雙六の濟む時分、丁度、此の女は（姿見を見つゝ）着くであらう。一番上りのものには、瑪瑙の莢に、紅寶玉の實を裝つた、あの造りものゝ吉祥果を遣る。繪は直ぐに間に合はぬ。此の室を五十三に劃つて雙六の目に合せて、一人づゝ身體を進めるが可からう。……賽が要る、持つて來い。

侍女　（六七、うつむいてともに微笑す）――何うした。

侍女六　姿見をお取寄せ遊ばしました時。

侍女七　二人して盤の雙六をして居りましたので、賽は持つて居りますのでございます。

公子　おもしろい。向うの廻廊の端へ集まれ。そして順に成つて始めるが可い。

侍女七　床へ振りませうでございますか。

公子　心あつて招かないのに來た、賽にも魂がある、寄越せ。（受取る）卓子の上へ私が投げよう。お前たち一から七まで、目に從つて順に動くが可い。さあ、集れ。

（侍女七人、いそ／＼と、續いて廻廊のはづれに集り）

貴女は一。私は二。（恁う口々に樂しげに取定め、勇みて賽を待つ）可いか、（片手に書を持ち、片手に賽を投ぐ）――一は三、かな川へ。

（侍女一人進む）二は一、品川まで。（侍女一人また進む）三は五だ、戸塚へ行け。（恁くして順々に繰返し次

第に進む。第五の侍女、年最も少きが一人衆を離れて賽の目に乗り、正面突當りなる窓際に進み、他と、間隔る。公子。これより前、姿見を見詰めて、賽の目と宿の數を算へ淀む。……此の時、うかとしたる體に書を落す）

まだ、誰も上らないか。

侍女一　漸く一人天龍川まで參りました。

公子　あゝ、まだるつこい。賽を二つ一所に振らうか。（手にしながら姿見に見入る。侍女等、等く其方を凝視す）

侍女五　きやつ。（叫ぶ。隙なし。其の姿、窓の外。裳を引いて颯と消ゆ）　あゝれえ。

（侍女等、口々に）　あれ、あれ、鮫が、鮫が、入道鮫が、（と立亂れ騷ぎ狂ふ）

公子　入道鮫が、何。（窓に衝と寄る）

侍女一　あゝ、黒鮫が三百ばかり。

侍女二　取巻いて、群りかゝつて。

侍女三　あれ、入道が口に銜へた。

公子　外道、外道、其の女を返せ。外道。（叱咤しつゝ、窓より出でんとす）

（侍女等縋り留む。）

侍女四　輕々しい、若様。

公子　放せ。あれ見い。外道の口の間から、女の髮が溢れて落ちる。やあ、胸へ、乳へ、牙が喰入る。えゝ、油斷した。……骨も筋も斷れような。あゝ、手を悶える　裳を煽る。

侍女六　否、若様、私たち御殿の女は、身は綿よりも柔かです。

侍女七　蓮の絲を束ねましたやうですから、鮫の牙が、背筋と鳩尾へ噛合ひましても、薄紙一重透きます内は、血にも肉にも障りません。

侍女三　入道も、一類も、色を漁るのでございます。生命は頃刻助りませう。

侍女四　其の中に、其の中に。まあ、お靜まり遊ばして。

公子　いや、俺の力は弱いものゝためだ。生命に掛けて取返す。――鎧を寄越せ。

（侍女二人衝と出で、引返して、二人して、一領の鎧を捧げ、背後より颯と肩に投掛く。）

公子　（上へ引いて、頸よりつらなりたる兜を頂く。角ある毒龍、凄まじき頭と成る。其の頭を頂く時に、侍女等、鎧の裾を捌く。外套の如く背より垂れて、紫の鱗、金色の斑點連り輝く。公子、又袖を取つて肩よりして自ら咽に結ぶ、此の結びめ、左右一雙の毒龍の爪なり。迅速に一縮す。立直るや否や、劍を拔いて、頭上に翳し、ハタと窓外を睨む）

（侍女六人、齊しく其の左右に折敷き、手に手に匕首

を拔連れて、晃々と敵に構ゆ。)

外道、退くな。(凝と視て、劍の刃を下に引く) 虜を離した。受取れ。

侍女一 鏈をめしたばつかりで、御威德に恐れて引きました。

侍女二 長う太く、數百の鮫のかさなつて、蜈蜒のやうに見えたのが、あゝ、ちり〴〵に、ちり〴〵に。

侍女三 めだかのやうに遁げて行きます。

公子 おゝ、丁度黑潮等が歸つて來た、歸つた。

侍女四 眞個に、おつかひ歸りの姉さんが、とりこを抱取つて下すつた。

公子 介抱してやれ。お前たちは出迎へ。

(侍女三人づゝ、一方は闇のうちへ。一方は廻廊に退場。)

(公子、眞中に、すつくと立ち、鞘に劍を納めて、右手なる白珊瑚の椅子に凭る。騎士五人廻廊まで登場。)

騎士一同 (槍を伏せて、蹲り、同音に呼ぶ) 若樣。

公子 おゝ、歸つたか。

騎士一 以ての外な、今ほどは。

公子 何でもない、私は無事だ、皆御苦勞だつたな。

騎士一同 はッ。

公子 途中まで出向つたらう、僧都は何うしたか。

騎士一 あとの我ら夥間を率ゐて、入道鮫を追掛けて參りました。

公子 よい相手だ、戰鬪は觀ものであらう。——皆は休むが可い。

騎士 槍は鞘に納めますまい、此のまゝ御門を堅めまするわし。

公子 然までにせずとも大事ない、休め。

(騎士等、禮拜して退場。侍女一。登場。)

侍女一 御安心遊ばしまし、疵を受けましたほどでもございません。唯、酷く驚きまして。

公子 可愛相に、よく介抱して遣れ。

侍女一 二人が附添つて居ります。(廻廊を見込む) あゝ、最う御廊下まで。(公子のさしづにより、姿見に錦の蔽を掛け闇に入る) (美女。先達の女房に、片手を曳かれて登場。姿を蕭に、深く差俯向き、面影やゝやつれたれども、然まで惡怯れざる態度、徐に廻廊を進みて床を上段に昇る。昇る時も、裾捌き靜なり)

(侍女三人、燈籠二個づゝ二人、一つを一人、五個を提げて附添ひ出で、一人々々、廻廊の廂に架け、其のまゝ引返す。燈籠を侍女等の差置き果つるまでに、女房は、美女を其の上段、紅き枝珊瑚の椅子まで導く順にてありたし。女房、謹んで公子に禮して、美女に椅

手を執う。）

女房　お掛け遊ばしまし。

美女　（揖讓かる、狀に椅子に掛く。女房は其の裳に蹤居る）

美女　（うつむきたるまゝ少時、皆無言。やがて顏を上げて、正しく公子と見向ふ。瞳を据ゑて瞬きせず。――間）

公子　よく見えた。（無造作に、座を立つて、卓子の周圍に近づき、手を取らんと衝と腕を伸ばす。美女、崩るゝが如くに椅子をはずれ、床に伏す）

女房　何うなさいました、貴女、何うなさいました。

美女　（聲細く、然れども判然）はい、……覺悟しては來ましたけれど、餘りと言へば、可恐うございますもの。

女房　（心付く）おゝ、若樣、其の鎧をお解き遊ばせ。お驚きなさいますのも御尤でございます。

公子　解いても可い、（結び目に手を掛け、思慮す）が、解かんでも可からう。……最初に見た日は何處までも附絡ふ。（美女に）貴女、おい、貴女、此を恐れては不可ん、私は此あるがために、強い。此あるがために力があり威がある。今も既に此に因つて、めしつかふ女の、入道鮫に啣まれたのを助けたのです。

美女　（やゝ面を上ぐ）お召使が鮫の口に、矢張り、そんな可恐い處なんでございますか。

公子　はゝはゝ、（笑ふ）貴女、敵のない國が、世界の何處にあるんですか。仇は至る處に滿ちて居る――唯一人の娘を捧ぐ、……海の幸を賜はれ――貴女の親は、既に貴女の仇なのではないか。唯其敵に勝てば可いのだ。私は、此の強さ、力、威あるがために勝つ　闇に唯二人ある時でも私は此を脫ぐまいと思ふ。私の心は貴女を愛して、私の鎧は、敵から、仇から、世界から貴女を守護する。弱いものゝ爲に強いんです。毒龍の鱗は絡ひ、爪は抱き、角は枕しても聊か貴女の身は傷けない。ともに此の鎧に包まるゝ內は、貴女は海の女王なんだ。放縱に大膽に、不羈、專橫に、心のまゝにして差支へない。鱗に、爪に、角に、一絲掛けない白身を抱かれ包まれて、渡津海の廣さを散步しても、敢て世に憚る事はない。誰の目にも觸れない。人は指をせん。時として見るものは、沖の其の影を、眞珠の光と見る。指すものは、喜見城の幻景に迷ふのです。女の身として、優しいもの、媚あるもの、從ふものに慕はれて、其が何の本懷です。私は鱗を以て、角を以て、爪を以て愛するんだ。……鎧は脫ぐまい、と思ふ。（從容として椅子に戾る）

美女　（徂直り、會釋す）……父へ、海の幸をお授け下さいました、津波のお强さ、船を覆して、此處へ、遠い海

の中をお連れなすつた、お力。道すがらは又お使者で、金剛石の此の襟飾、寶玉の此の指環、（嬉しげに見ゆ）貴方の御威德はよく分りましたのでございます。

公子　津波位、家來どもが些細な事を。さあ、其處へお掛け。

（女房、介抱して、美女、椅子に直る。）

頸飾なんぞ、珠なんぞ。貴女の腰掛けて居る、其は珊瑚だ。

美女　まあ、父に下さいました枝よりは、幾倍とも。

公子　あれは草です。較ぶれば此處のは大樹だ。椅子の丈は陸の山よりも高い。然うして居る貴女の姿は、夕日影の峰に、雪の消殘つたやうであらう。少しく離れた私の兜の鍬頭は、彼の天守の棟に飾つた黃金の鯱ほどに見えようと思ふ。

美女　あの、人の目に、それが、貴方？

美女　譬喩です、人間の目には何にも見えん。

美女　あゝ、見えはいたしますまい。お恥かしい、人間の小さな心には、此處に、見ますれば私が裳を曳きます床も、琅玕の一枚石、恁うした御殿のある事は、夢にも知らないのでございますもの、情なう存じます。

公子　否、そんなに謙遜をするには當らん。陸には名山、佳水がある、峻嶽、大河がある。

美女　でも、こんな御殿はないのです。

公子　あるのを知らないのです。海底の琅玕の宮殿に、寶藏の珠玉金銀が、虹に透いて見えるのに、更科の秋の月、錦を染めた木曾の山々は劣りはしない。……峰には、其の錦葉を織る龍田姫がおいでなんだ。人間は知らんのか、知つても知らないふりをするのだらう。知らない振をして見ないんだらう。――陸は尊い、景色は得難い。今も、道中雙六をして遊ぶのに、五十三次の一枚繪さへ手許にはなかつたのだ。繪も貴い。

美女　あんな事をおつしやつて、繪には活きたものは住んで居りませんではありませんか。

公子　いや、住居をして居る。色彩は皆活きて動く。けれども、人は知らないのだ。人は見たいのだ。見ても見ない振をして居るんだから、決して人間の凡てを貴いとは言はない、美しいとは言はない、唯陸は貴い。けれども、我が海は、此の水は、一畝りの波を起して、其の陸を浸す事が出來るんだ。たゞ貴く、美いものは亡びない。……中に貴女は美しい。だから、陸の一浦を亡ぼして、こゝへ迎へ取つたのです。亡ぼす力のあるものが、亡びないものを迎へ入れて、且つ愛し且つ守護するのです。貴女は、喜ばねば不可い、嬉しがらなければならない、悲しんでは成りません。

女房　貴女、おつしやる通りでございます。途中でも私が、お喜ばしい、おめでたい儀と申しました。決してお歎きなさいます事はありません。

美女　否、歎きはいたしません。悲しみはいたしません。唯歎きますもの、悲しみますものに、私の、此の容子を見せて遣りたいと思ふのです。

女房　人間の目には見えません。

美女　故郷の人たちには。

公子　見えるものか。

美女　(やゝ意氣ぐむ)　あの、私の親には。

公子　貴女は見えると思ふのか。

美女　恁うして、活きて居りますもの。

公子　(屹としたる音調)　無論、活きて居る。しかし、船から沈む時、此處へ來るに何う云ふ決心を爲たのですか。

美女　それは死ぬ事と思ひました。故郷の人も皆然う思つて、分けて親は歎き悲しみました。

公子　貴女の親は悲しむ事は少しもなからう。はじめから其のつもりで、約束の財を得た。然も滿足だと云つた。其の代りに娘を波に沈めるのに、少しも歎くことはないではないか。

美女　けれども、父娘の情愛でございます。

公子　勝手な情愛だね。人間の、そんな情愛は私には分らん。(頭を掉る)　が、まあ、情愛として置く、其で。

美女　父は涙にくれました、小船が波に放たれます時、渚の砂に、父の倒伏しました處は、あの、丁ど夕月に紫の枝珊瑚を抱きました處なのです。そして、後の歎は、前の喜びにくらべまして、幾十層倍だつたでございませう。

公子　おや、其の枝珊瑚を波に返して、約束を戻せば可かつた。

美女　否、ですが、最う、海の幸も、枝珊瑚も、金銀に代り、家藏に代つて居たのでございます。

公子　可、其の金銀を散らし、施し、棄て、藏を毀ち、家を燒いて、もとの破簑一領、網一具の漁民と成つて、娘の命乞をすれば可かつた。

美女　それでも、約束の女を寄越せと、海坊主のやうな黒い人が、夜ごと／＼天井を覗き、屏風を見越し、障子に立つて、責めはたり、催促をなさいます。今更、家藏に替へましたツて、と然う思つたのでございます。

公子　貴女の父は、もとの貧民になり下るから娘を許して下さい、と、其の海坊主に掛合つて見たのですか。見はしなからう。そして、貴女を船に送出す時、磯に倒れて悲まうが、新しい白壁、艷ある甍を、山際の月に照らさして、夥多の奴婢に取巻かせて、近頃呼入れた、若い妾に介抱されて居たではないのか。何故。其が情愛なんで

す。

美女　はい。……（恥ぢて首低る）

公子　貴女を責むるのではない。よし其が人間の情愛なれば情愛で可い、私とは何の係はりもないから。些とも構はん。が、私の愛する、この宮殿にある貴女が、そんな故郷を思うて、歎いては不可ん。悲しんでは不可んと云ふのです。

美女　貴方。（向直る。屹に力を帯ぶ）私は始めから、決して歎いては居ないのです、父は悲しみました、浦人は可哀がりました。ですが私は――約束に應じて寶を與へ、其の約束を責めて女を取る、――それが夢なれば、船に乗つても沈みはしまい、もし寶として、浪に引入るゝものがあれば、其は生あるもの、形あるもの、云ふまでもありません、心あり魂あり、靈あるものに違ひない。其の上、威があり力があり、榮と光とあるものに違ひないと思ひました。ですから、人は然うして歎いても、私は小船で流されますのを、然まで、慌騒ぎも、泣悲みも落着過ぎもしなかつたんです。もしか、船が沈まなければ無事なんです。生命はあるんですもの。覆す手があれば、それは活きて居る手なんです。其の手に縋つて、海の中に活きられると思つたのです、

公子　（聞きつゝ莞爾とす）やあ、（女房に）……此の女は豪いぞ！　はじめから歎いて居らん、慰め賺す要はない。私はしをらしい、あはれな花を手活にしてながめようと思つた。違ふ！　此は樂く歌ふ鳥だ、面白い。それも愉快だ。おい、酒を寄越せ。

（手を擧ぐ。忽ち闥開けて、三人の侍女、一罎の酒と、白金の皿に一對の玉盞を捧げて出づ。女房盞を取つて、公子と美女の前に置く。侍女退場す。女房酒を兩方に注ぐ。）

女房　めし上りまし。

美女　（辭宜す）私は、些とも。

公子　（品よく盞を含みながら）貴女、少しも辛うない。

女房　貴女の濃紅なは桃の露、あちらは菊花の雫です。お國では御存じありませんか。海には最上の飲料です。お氣が清しくなります、召あがれ。

美女　あの、桃の露、（見物席の方へ、半ば片袖を蔽うて、うつむき飲む）は。（と小き呼吸す）何と云ふ涼しい、爽やいだ――蘇生つたやうな氣がします。

公子　蘇生つたのではないでせう。更に新しい生命を得たんだ。

美女　嬉しい、嬉しい、嬉しい、貴方。私が然うして活きて居ますのを、見せて遣りたう存じます。

公子　別に見せる要はありますまい。
美女　でも、人は私が死んだと思つて居ります。
公子　勝手に思はせて置いて可いではないか。
美女　ですけれども、ですけれども。
公子　其の情愛、とかで、貴女の親に見せたいのか。
美女　えゝ、父をはじめ、浦のもの、これから皆に知らせなければ殘念です。
公子　（卓子に肘を凭出す）歸りたいか、故郷へ。
美女　否、此の宮殿、此の寶玉、此の指環、此の酒、此の榮華、私は故郷へなぞ歸りたくはないのです。
公子　では、何が知らせたいのです。
美女　だつて、貴方、人に知られないで活きて居るのは、活きて居るのぢやないんですもの。
公子　（色はじめて鬱す）むゝ
美女　（微醉の瞼花やかに）誰も知らない命は、生命ではありません。此の寶玉も、此の指環も、人が見ないでは、些とも價値がないのです。
公子　それは不可ん。（卓子を輕く打つて立つ）貴女は榮耀が見せびらかしたいんだな。そりや不可ん。人は自己、自分で滿足をせねばならん。人に價値をつけさせて、其に從ふべきものぢやない。（近寄る）人は自分で活きれば可い、生命を保てば可い。然も愛するものとゝもに活きれば、少しも不足はなからうと思ふ。寶玉とても其の通り、手箱に此を藏すれば、寶玉其のものだけの價値を保つ。人に與ふる時、十倍の光を放つ。唯、人に見せびらかす時、其の艷は黑く成り、其の質は醜く成る。
美女　えゝ、ですから……來るお庭にも敷詰めてありました、あの寶玉一つも、此の上お許し下さいますなら、乾と慈善に施して參ります。
公子　こゝに、用意の寶庫がある。皆、貴女のものです。施すは可い。が、人知れずでなければ出來ない、貴女の名を顯し、姿を見せては施すことはならないんです。
美女　それでは何にもなりません。何の效もありません。
公子　（色やゝ嶮し）隨分、勝手を云ふ。が、貴女の美しさに免じて許す。歌ふ鳥が囀るんだ、雲雀は星を淩ぐ。星は隕落させない。聲が可愛らしいからなんです。（女房に）おい、注げ。
（女房酌す。）
美女　（怯れたる内端な態度）もう〳〵、決して、虚飾、榮耀を見せようとは思ひません。あの、唯活きて居る事だけを知らせたう存じます。
公子　（冷かに）止したが可からう、
美女　否、唯今も申します通り、故郷へ歸つて、其處に留まります氣は露ほどもないのです　一寸お許しを受けま

して生命のあります事だけを。

(公子、無言にして頭掉る。美女、縋るが如くす。)

あの、お許しは下さいませんか。些との外出もなりませんか。

公子 (爽に) 獄屋ではない、大自由、大自在な領分だ。歎くもの悲しむものは無論の事、僅少の憂あり、不平あるものさへ一日も一個たりとも國に置かない。が、貴女には既に心を許して、秘藏の酒を飲ませた。海の果、陸の終、思つて行かれない處はない。故郷如きは唯一飛、瞬きをする間に行かれる。(慈む如く染々と顔を視る)が、氣の毒です。

貴女に、其の爺と、虚飾の心さへなかつたら、一生聞かなくとも濟む、また聞かせたくない事だつた。貴女、これ。(美女顔を上ぐ。其の肩に手を掛く) こゝに來た、貴女は最う人間ではない。

美女 えゝ。(驚く)

公子 蛇身に成つた、美しい蛇に成つたんだ。

(美女、瞳を睜る。)

其の貴女の身に輝く、寶玉も、指環も、紅、紫の鱗の光と、人間の目に輝くのみです。

美女 あれ。(椅子を奔つ。侍女の裾にて、袖を見、背を見、手を見つゝ、わなゝき震ふ。雪の指尖、思はず鬢を取つて衝と立ちつゝ) 否、否、否。何處も蛇には成りません。一、一枚も鱗はない。

公子 一枚も鱗はない、無論何處も蛇には成らない。貴女は美しい女です。けれども、人間の眼だ。人の見る目だ。故郷に姿を顯す時、貴女の父、貴女の友、貴女の村、浦、貴女の全國の、貴女を見る目は、誰も殘らず大蛇と見る。ものを云ふ聲はたゞ、炎の舌が閃く。吐く息は煙を渦巻く。悲歎の涙は、硫黄を流して草を爛らす。長い袖は、腥い風を起して樹を薙ぐ。閻ゆる膚は鱗を鳴してのたうち蜿る。不図、肉身のものゝ目に、其の丈より長い黒髪の、三筋、五筋、筋を透して、大蛇の背に黒く引くのを見る。それがなごりと思ふが可い。

美女 (髪みだるゝまでかぶりを掉る) 嘘です、嘘です。人を呪つて、人を詛つて、貴方こそ、其の毒蛇です。親のために沈んだ身が蛇體に成らう筈がない。遣つて下さい。故郷へ歸して下さい。親の、人の、友だちの目を借りて、尾のない鱗のない私の身が驗したい。遣つて下さい、故郷へ歸して下さい。

公子 大自在の國だ。勝手に行くが可い、そして試すが可からう。

美女 何處に、故郷の浦は……何處に。

女房 あれ彼處に。(廻廊の燈籠を指す)

美女　おゝ、（身震す）船の沈んだ渦が見える。（蹶然と叫ぶ。）……亂るゝ紅、炎の如く、トンと床を下りるや、颯と廻廊を突切る。途端に、五個の燈籠齊しく消ゆ。廻廊暗し。美女、その暗中に消ゆ。舞臺の上段のみ、やゝ明く殘る）

公子　おい、其の姿見の蔽を取れ。陸を見よう。

女房　困つた御婦人です。しかしお可哀相なものでございます。（立つ。舞臺暗く成る。――やがて明く成る時、花やかに侍女皆あり）

（公子。椅子に凭る。――其足許に、美女倒れ伏す――疾く既に歸り來れる趣。髮すべて亂れ、袂裂け帶崩る。）

公子　（玉盞を含みつゝ悠然として）故郷は何うでした。……何うした、私が云つた通だらう。貴女の父の少い妾は、貴女の其の恐しい蛇の姿を見て氣絶した。貴女の父は、下男とゝもに、鐵砲を以つて其の蛇を狙つたではありませんか。渠等は第一、私を見てさへ蛇體だと思ふ。人間の目は然う云ふものだ。そんな處に用はあるまい。泣いて居ては不可ん。

（美女悲泣す。）

不可ん、おい、泣くのは不可ん。（眉を顰む）

女房　（背を撫る）若樣は、歎悲むのがお嫌です。御性急で在らつしやいますから、御機嫌に障ると惡い。こゝは、樂む處、歌ふ處、舞ふ處、喜び、遊ぶ處ですよ。

美女　えゝ、貴女方は樂いでせう、嬉しいでせう、お舞ひなさい、お唄ひなさい、私、私は泣死に死ぬんです。

公子　死ぬまで泣かれて堪るものか。あんな故郷に何の未練がある。さあ、機嫌を直せ。こゝには悲哀のあることを許さんぞ。

美女　お許しなくば、何うなりと。えゝ、故郷の事も、私の身體も、皆、貴方の魔法です。

公子　何處まで疑ふ。（忿怒の形相）お前を蛇體と思ふのは、人間の目だと云ふに。俺の……魔……法ゝ許さんぞ。女、悲むものは殺す。

美女　えゝ、えゝ、お殺しなさいまし。活きられる身體ではないのです。

公子　（憤然として立つ）黒潮等は居らんか。此の女を處置しろ。

（言下に、應夜を跳ね、其穴より黒潮騎士、大錨をかついで顯る。騎士二三、續いて飛出づ。美女を引立て、一の騎士が倒に押立てたる錨に縛む。錨の刃尖に、黒髮の亂るゝを搔摑んで、押仰向かす。長槍の刃、鋭く其の顖に臨む。）

女房　あゝ、若樣。

公子　止めるのか。
女房　お床が血に汚れはいたしませんか。
公子　美しい女だ。花を拐るも同じ事よ。花片と蕊と、ばらばらに分れるばかりだ。あとは手箱に藏つて置かう。
――殺せ。（騎士、槍を取直す）
美女　貴方、こんな惡魚の牙は可厭です。御卑怯な。見て居ないで、御自分でお殺しなさいまし。（公子、頷き、無言にてつか／＼と寄り、猶豫はず劍を拔き、颯と目に翳し、衝と引いて斜に構ふ。面を見合す。）
あゝ、貴方。私を斬る、私を殺す、其の顏のお綺麗さ、氣高さ、美しさ、目の涼しさ、眉の勇ましさ。はじめて見ました、位の高さ、品の可さ。最う、故鄕も何も忘れました。早く殺して。あゝ、嬉しい　（莞爾する）
公子　解け。
（騎士等、美女を助けて、片隅に退く。公子、劍を提げたるまゝ）
此方へおいで。（美女、手を曳かる。ともに床に上る。公子劍を輕く取る）杯を與はう。手を出せ。（手首を取つて刃を腕に引く、一線の紅血、玉盞に滴る、公子返す切尖に自から腕を引く、紫の血、玉盞に滴る）飮め、呑まう。
（盞をかはして、仰いで飮む。廻廊の燈籠一齊に點れ輝く。）
あれ見い、血を取かはして飮んだと思ふと、お前の故鄕の、浦の磯に、岩に、紫と紅の花が咲いた。それとも、星か。
（一同打見る。）
彼は何だ。
美女　見覺えました花ですが、私はもう忘れました。
公子　（書を見つゝ）博士、博士。
博士　（登場）……お召。
公子　（指す）あの花は何ですか。（書を渡さむとす）
博士　存じて居ります。龍膽と撫子でございます。新夫人の、お心が通ひまして、折からの潮に、一際色が冴えました。若樣と奧樣の血の俤でございます。
公子　人間に其が分るか。
博士　心ないものには知れますまい。詩人、畫家が、しかし認めますでございませう。
公子　お前、私の惡意ある呪詛でないのが知れたらう。
美女　（うなだる）お見棄なく、幾久しく。
一同――萬歲を申上げます――
公子　皆、休息をなさい。（一同退場）
（公子美女と手を携へて一歩す。美しき花降る。二歩す、フト立停まる。三歩を動かす時、音樂聞ゆ。）

美女　一歩(ひとあし)に花が降り、二歩には微妙の薫、いま三あしめに、ひとりでに、楽しい音楽の聞えます。此處は極楽でございますか。

公子　はゝゝ、そんな處と一所にされて堪るものか。おい、女の行く極楽に男は居らんぞ。(鎧の緒目を解きかけて、)音楽につれて徐ろに。やゝ、なゝめに立ちつゝ、其の龍の爪を美女の背にかく。雪の振袖、紫の鱗の端に仄に見ゆ)男の行く極楽に女は居ない。

――幕――

天守物語

時

不詳。たゞし封建時代――晩秋。日沒前より深更にいたる。

所

播州姫路。白鷺城の天守、第五重。

登場人物

天守夫人、富姫（打見は二十七八）岩代國猪苗代、龜の城、龜姫（二十ばかり）姫川圖書之助（わかき鷹匠）小田原修理、山隅九平（ともに姫路城主武田播磨守家臣）十文字ケ原、朱の盤坊。茅野ケ原の舌長姥（ともに龜姫の眷屬）近江之丞桃六（工人）桔梗、萩、葛、女郎花、撫子（いづれも富姫の侍女）薄（おなじく奥女中）

女の童、禿五人。武士、討手大勢

舞臺

天守の五重。左右に柱、向つて三方を廻廊下の如く餘して、一面に高く高麗べりの疊を敷く。紅の鼓の緒、處々に蝶結びして一條、是を欄干の如く取りまはして柱に渡す。おなじ鼓の緒のひかへづなにて、向つて右廻廊の奥に階子を設く。階子は天上に高く通ず。左の方廻廊の奥に、また階子の上下の口あり。奥の正面、及び右なる廻廊の半ばより厚き壁にて、廣き矢狹間、狹間を設く。外面は山嶽の遠見、秋の雲。壁に出入りの扉あり。鼓の緒の欄干外、左の一方、棟甍、並びに樹立の梢を見す。正面おなじく森々たる樹木の梢。

女童三人――合唱――

此處は何處の細道ぢや、細道ぢや、
天神樣の細道ぢや、細道ぢや。

――うたひつゝ幕開く――

侍女五人。桔梗、女郎花、萩、葛、撫子。各名にそぐへる姿、鼓の緒の欄干に、或は立ち、或はゐて、手に手に五色の絹絲を卷きたる絲枠に、金色銀色の細き棹

な通し、絲を松杉の高き梢を潜らして、釣の姿す。女童三人は、緋のきつけ、唄ひつゞく。――冴えて且つ寂しき聲。

少し通して下さんせ、下さんせ。
ごようのないもな通しません、通しません。
天神様へ願掛けに、願掛けに。
通らんせ、通らんせ。

唄ひつゝ其の遊戯をなす。

薄、天守の壁の裡より出づ。壁の一劃は恰も扉の如く、自由に開く。此の婦やゝ年かさ。髷中の突通し、御殿奥女中のこしらへ。

薄　鬼灯さん。蜻蛉さん。

女童一　あゝい。

薄　静になさいよ、お掃除が済んだばかりだから。

女童二　あの、釣を見ませうね。

女童三　然うね。

（いたいけに領きあひつゝ、侍女等の中に、はら〳〵と袖を交ゆ。）

薄（四邊を眴す）これは、まあ、まことに、いゝ見霽しでございますね。

葛　あの、猪苗代のお姫様がお遊びにおいでゞございますから。

桔梗　お待遠しからうと思ひまして、それには、申分のございませんお日和でございますし、遠山はもう、もみぢいたしましたから。

女郎花　矢狭間も、物見も、お目觸りな、泥や、鐵の、重くるしい、外圍は、一寸取排つて置きました。

薄　成程、成程、よくおなまけ遊ばす方たちにしては、感心にお氣のつきましたことでございます。

桔梗　あれ、人ぎゝの惡いことを。――いつ私たちがなまけましたえ。

薄　まあ、然うお言ひの口の下で、何をしておいでだらう。二階から目薬とやらではあるまいし、お天守の五重から釣をするものがありますかえ。天の川は芝を流れはいたしません。富姫様が、よそへお出掛け遊ばして、いくら間があると申したつて、串戯ではありません。

撫子　否、魚を釣るのではございません。

桔梗　旦那様の御前に、丁ど活けるのがございませんから、皆で取つて差上げようと存じまして、花を……あの、秋草を釣りますのでございますよ。

薄　花を、秋草をえ。はて、此は珍しいことを承ります。そして何かい、釣れますかえ。

（女童の一人の肩に、袖でつかまつて差覗く。）

桔梗　えゝ、釣れますとも、尤も、新發明でございます。

薄　高慢なことをお言ひでない。――が、つきましては、餌の儀でござんすがね。

撫子　はい、それは白露でございますわ。

葛　千草八千草秋草が、それは〳〵、今頃は、露を澤山欲しがるのでございますよ。刻限も七つ時、まだ夕露も夜露もないのでございますもの。（瞬を視る）御覽なさいまし、女郎花さんは、もう、あんなにお釣りなさいました。

薄　あゝ、眞個にねえ。まつたく草花が釣れるに成れば、さて、これは靜にして、拜見をいたしませう。釣をするのに饒舌つては惡いと云ふから。……一番だまつておとなしい女郎花さんがよく釣つた、爭はれないものぢやないかね。

女郎花　否、お魚とは違ひますから、聲を出しても、唄ひましても構ひません。――唯、風が騒ぐと不可ませんわ。……餌の露が、ばら〳〵こぼれて了ひますから。あゝ、釣れました。

薄　お見事。

（と云ふ時、女郎花、棹ながらくる〳〵と絲を卷戻す。）

絲につれて秋草、欄干に上り來る。さきに傍に置きたる花とゝもに、女童の手に渡す。

桔梗　釣れました。（おなじく絲を卷戻す）

朝顏　あれ、私も…………

（花につれて、黄と、白、紫の胡蝶の群、ひら〳〵と舞上る。）

葛　それ〳〵私も――まあ、しをらしい。

薄　桔梗さん、棹をお貸しな、私も釣らう、まことに感心、おつだことねえ。

女郎花　お待ち遊ばせ、大層風が出て參りました、餌が絲にとまりますまい。

薄　意地の惡い、急に激しい風に成つたよ。

萩　あゝ、內廓の秋草が、美しい波を打ちます。

桔梗　然う云ふうちに、色もかくれて、薄ばかりが眞白に、水のやうに流れて來ました。

葛　空は黑雲が走りますよ。

薄　先刻から、野も山も、不思議に暗いと思つて居た、これは酷い降りに成りますね。

（舞臺暗く成る、電光閃く。）

撫子　夫人は、何處へおいで遊ばしたのでございますえ。早くお歸り遊ばせば可うございますね。

薄　平時のやうに、何處へとも何ともおつしやらないで、

ふいとお出ましに成つたもの。

萩　お迎ひにも參られませんねえ。

薄　お客樣、龜姫樣のおいでの時刻を、それでも御含みで在らつしやるから、ほどなくお歸りでござんせう。——皆さんが、御心入れの御馳走、何、秋草を、早くお供へなさるが可いね。

女郎花　それこそ露の散らぬ間に。——

（正面奥の中央、丸柱の傍に鎧櫃を据ゑて、上に、金色の眼、白銀の牙、色は藍の如き獅子頭、萠黄錦の母衣、朱の渦まきたる尾を裝ひたるまゝ、莊重に之を据ゑたり。——侍女等、女童とゝもに其の前に行き、跪きて、手に〳〵秋草を花籠に挿す。色の其の美しき蝶の群、齊く飛連れてあたりに舞ふ。笛やゝ聞ゆ。雨來る。）

薄　（薄暗き中に）御覽、兩眼赫耀と、牙も動くやうに見えること。

桔梗　花も胡蝶もお氣に入つて、お嬉しいんでございませう。

（時に閃電す。光の裡を、衝と流れて、胡蝶の彼處に流るゝ處、殆ど天井を貫きたる高き天守の棟に通ずる階子。——侍女等、飛ぶ蝶の行方につれて、ともに其方に目を注ぐ。）

女郎花　あれ、夫人がお歸りでございますよ。

（はら〳〵と其の境の許に、振袖、詰袖、揃つて手をつく。階子の上より、先づ水色の衣の褄、裳を引く。すぐに蓑を被ぎたる姿見ゆ。長なす黑髮、片手に竹笠半ば面を蔽ひたる、美しく氣高き貴女、天守夫人、富姫。）

夫人　（其の姿に舞ひ縋る蝶々の三つ二つを、蓑を開いて片袖に受く）出迎へかい、御苦勞だね。（蝶に云ふ）

——お歸り遊ばせ、——お歸り遊ばせ——（侍女等、口々に言迎ふ。——）

夫人　時々、ふいと氣まかせに。野分のやうな出歩行きを、……

（ハタと竹笠を落す。女郎花、これを受け取る。貴女の面、凄きばかり白く﨟長けたり。）

露も散らさぬお前たち、花の姿に氣の毒だね。（下りかかりて壇に弱腰、廊下に裳。）

薄　勿體ないことを御意遊ばす。——まあ、御前樣、あんなものを召しまして。

夫人　似合つたかい。

薄　偖に其の上に、御前樣、お痩せ遊ばしてをがまれます。柳よりもお優しい、すら〳〵と雨の刈萱を、お被け遊ばしたやうにござります。

夫人　嘘ばつかり。小山田の、案山子に借りて來たのだものを。

薄　否、それでも貴女がめしますと、玉、白銀、揺の絲の、鎧のやうにもをがまれます。

夫人　賞められて些と重く成つた。（蓑を脱ぐ）取つておくれ。

（撫子、立ち、うけて欄干にひらりと掛く。）

（蝶の數、其の蓑に翅を、憩ふ。……夫人、獅子頭に會釋しつゝ、座に、褥に着く。脇息。侍女たちかしづく。）

少し草臥れましたよ。……お龜様はまだお見えではなかつたらうね。

薄　はい、お姫様は、やがてお入りでござりませう。それにつけましても、御前様おかへりを、お待ち申上げました。——そしてまあ、孰方へお越し遊ばしました。

夫人　夜叉ケ池まで參つたよ。

薄　おゝ、越前國大野郡、人跡絶えました山奥の。

萩　あの、夜叉ケ池まで。

桔梗　お遊びに。

夫人　まあ、遊びと言へば遊びだけれども、大池のぬしのお雪様に、些と……頼みたい事があつて。

薄　私はじめ、こゝに居ります、誰ぞお使ひをいたしますもの、御自分おいで遊ばして、何と、雨にお逢ひなさいましてさ。

夫人　其の雨を頼みに行きました。——今日はね、此の姫路の城……こゝから視れば長屋だが、……長屋の主人、それ、播磨守が、秋の野山へ鷹狩に、大勢で出掛けました。皆知つておいでだらう。空は高し、渡鳥、色鳥の鳴く音は嬉しいが、田畑と言はず駈廻つて、きやつ／＼と飛騒ぐ、知行とりども人間の大聲は騒がしい。まだ、それも鷹ばかりなら我慢もする。近頃は不作法な、弓矢、鐵砲で荒立つから、うるさゝもうるさしさ。何よりお前、私のお客、此の大空の霧を渡つて輿でおいでのお龜様にも、途中失禮だと思つたから、雨風と、はたゝ神で、鷹狩の行列を追崩す。——あの、それを、夜叉ケ池のお雪様にお頼み申しに參つたのだよ。

薄　道理こそ時ならぬ、急な雨と存じました。

夫人　此の邊は雨だけかい。それは、ほんの吹降りの餘波であらう。鷹狩が遠出をした、姫路野の一里塚のあたりをお見な。暗夜のやうな黒い雲、眩いばかりの電光、可恐い雹も降りました。鷹狩の連中は、曠野の、塚の印の松の根に、澪に寄つた鮒のやうに、うよ／＼集つて、あぶあぶして、あやめ笠が泳ぐやら、陣羽織が流れるやら。大小をさしたものが、些とは雨にも濡れたが可い。慌て

る紋は泡沫のやう。野袴の裾を端折つて、灸のあとを出すのがある。おゝ、をかしい。(微笑む)粟粒を一つ二つと算へて拾ふ雀でも、俄雨には容子が可い。五百石、三百石、千石一人で食むものが、其の笑止さと言つてはない。をかしいやら、氣の毒やら、ねえ、お前。

薄　はい。

夫人　私はね、群鷺ケ峰の山の端に、掛稻を楯にして、戻道で、そつと立つて視めて居た。其處には晝の月があつて、雁金のやうに(其の水色の袖を壓ゆ)其の袖に影が映つた。影が、結んだ玉づさのやうにも見えた。――夜叉ケ池のお雪様は、激しいなかにお床しい、野は其の黑雲、尾上は瑠璃、皆、あの方のお計らひ。それでも鷹狩の足も腰も留めさせずに、大風と大雨で、城まで追返しておくれの約束。鷹狩たちが遠くから、松を離れて、其の曠野を、黑雲の走る下に、泥川のやうに流れてくるに從つて、追手の風の横吹。私が見て居たあたりへも、一村雨颯とかゝつたから、歸も讓ますに蓑をかりて、案山子の笠をさして來ました。あゝ、其處の蜻蛉と鬼灯たち子兒に持たして後ほどに返しませう。

薄　何の、それには及びますまいと存じます。

夫人　いえ／＼、農家のものは大切だから、等閑には成りません。

薄　其の儀は畏りました。お前様、まあ、それよりも、おめしかへを遊ばしまし、おめしものゝお濡れまして、お氣味が惡うござりませう。

夫人　おかげで濡れはしなかつた。氣味の惡い事もないけれど、隔てぬ中の女同士も、お龜様に、此のまゝでは失禮だらう。(立つ)着換へませうか。

女郎花　次手に、お髮も、夫人様。

夫人　あゝ、あげて貰はうよ。

(夫人に續いて、一同、襖の內に隱る。女童のこりて合唱す――)

此處は何處の細道ぢや、細道ぢや。
天神様の細道ぢや、細道ぢや。

(時に棟に通ずる件の階子を棟よりして入來る。岩代國麻耶郡猪苗代の城、千疊敷の主、龜姫の供頭、朱の盤坊、大山伏の扮裝、頭に犀の如き角一つあり、眼圓かに面の色朱よりも赤く、手と脚、瓜に似て青し。白布にて蔽うたる一個の小桶を小脇に、柱をめぐりて、內を覗き、女童の戯るゝを視つゝ破顏して笑ふ。)

朱の盤　かちかち／＼。

(齒を噛鳴らす音をさす。女童等、走り近く時、面を

差寄せ、大口開く。)
もなう。(獣の吠ゆる眞似して威す)

女童一　可厭な、小父さん。

女童二　可恐くはありませんよ。

朱の盤　だゝだゝ——(濁れる笑)いや、さすがは姫路お天守の、富姫御前の禿たち、變化心備はつて、奥州第一の赫面に、びくともせぬわ我折れ申す。——さて、更めて内方へ、ものも、案内を頼みませう。

女童三　屋根から入つた小父さんはえ?

朱の盤　これは又御挨拶だ。唯、猪苗代から參つたと、さささ、取次、取次

女童一　知らん。

女童三　べいゝ。(赤べろする)

朱の盤　これは、いかな事。——(立直る。大音に)ものも案内。

薄　どうれ。(壁より出迎ふ)いづれから。

朱の盤　これは、岩代國會津郡十文字ヶ原青五輪のあたりに罷在る、奥州變化の先達、允殿館のあるじ朱の盤坊でござる。即ち猪苗代の城、龜姫君の御供をいたし罷出ました。當お天守富姫樣へ御取次を願ひたい。

薄　お供御苦勞に存じ上げます。あなた、お姫樣は、

朱の盤　(眞仰向けに天井を仰ぐ)屋の棟に、すでに輿をばお控へなさるゝ。

薄　夫人も、お待兼ねでございます。

(手を敲く。音につれて、侍女三人出づ。齊しく手をつく。)

早や、御入らせ下さりませ。

朱の盤　(空へ云ふ)輿傍へ申す。此方にもお待うけぢや。——姫君、此へお入りのやう、舌長姥、取次がつせえ。

(階子の上より、眞先に、切禿の女童、うつくしき手鞠を兩袖に捧げて出づ。)

(龜姫、振袖、裲襠、文金の高髷、扇子を手にす。又女童、うしろに守刀を捧ぐ。あと壓へに舌長姥、古びて黄ばめる練衣、褪せたる紅の袴にて從ひ來る。)

(天守夫人、侍女を從へ出で、設けの座に着く。)

薄　(そと龜姫を仰ぐ)お姫樣。

(出むかへたる侍女等、皆ひれ伏す。)

龜姫　お許し。

(しとやかに通り座につく。唯、夫人と面を合すとゝもに、雙方よりひたと褄の襟を寄す。)

夫人　(親しげに微笑む)お龜樣。

龜姫　お姉樣、おなつかしい。

夫人　私もお可懷い。——

(間。——)

女郎花　夫人。（と長煙管にて煙草を捧ぐ）
夫人（取つて吸ふ、其のまゝ吸口を姫に渡す）此の頃は、めしあがるさうだね。
龜姫　えゝ、どちらも。（うけて、其の煙草を吸ひつゝ、左の手にて杯の眞似をす。）
夫人　困りましたねえ。（また打笑む）
龜姫　ほゝゝ、貴女を旦那樣にはいたすまいし。
夫人　憎らしい口だ。よく、それで、猪苗代から、此の姫路まで——道中五百里はあらうねえ、……お年寄。
舌長姥　御意にござります。……海も山もさしわたしに、風でお運び遊ばすゆゑに、半日路には足りませぬが、宿宿を歩ひましたら、五百里……されば五百三十里、もそつともござりませうぞ。
夫人　あゝね。（龜姫に）よく、それで、手鞠をつきに、わざ〳〵此處までおいでだね。
龜姫　でございますから、お姉樣は、私がお可愛うございませう。
夫人　否、お憎らしい。
龜姫　御勝手。（扇子を落す）
夫人　矢張りお可愛い。（其の背を抱き、見返して、姫に附添へる女童に）どれ、お見せ。（手鞠を取る）まあ、綺麗な、私にも持つて來て下されば可いものを。

朱の盤　はゝツ。（その白布の包を出し）姫君より、貴女樣へ、お心入れの土産が此に。申すは、差出がましうござるなれど、これは格別、奥方樣の思召しにかなひませう。……何と、姫君。（色を伺ふ）
龜姫　あゝ、お開き。お姉樣の許だから、遠慮はない。
夫人　それは〳〵、お嬉しい。が、お龜樣は人が悪い、中は磐梯山の峰の煙か、虚空藏の人魂ではないかい。
龜姫　似たもの。ほゝゝほゝ。
夫人　要りません、そんなもの。
龜姫　上げません。
朱の盤　いや先づ、（手を擧げて制す）おなかよくてお爭ひ、お言葉の花が蝶のやうに飛びまして、お美しい事でござる。……さて、此方より申す儀ではなけれども、奥方樣、此の品ばかり、お可厭ではござるまい。
（包を開く、首桶。中より、色白き男の生首を出し、もとどりを掴んで、づうんと据う。）
や、不重寶、途中揺溢いて、此は汁が出ました。（其の首、血だらけ）これ。姥殿、姥殿。
舌長姥　あい〳〵、あい〳〵。
朱の盤　御進物が汚れたわ。鯖の落ちた鱠の鮨を眞水で洗ふ、手の悪い魚賣人には似たれども、其の儀では決してない。姥殿、此方、一拭ひ、清めた上で進せまいかの。

夫人（煙管を手に支き、面正しく屹と視て）氣遣ひには及びません、血だらけなは、尚ほおいしからう。

舌長姥　こぼれた實は、埃溜の汁でござるわの。お館様には穢りませぬ。汚穢や、見た目に、汚穢や。どれ〳〵掃除して參らせうぞ。（紅の袴にて膝行り出で、桶を横手に据と居へ、白髪を、ざつと捌き、染めたる歯を角に開け、三尺ばかりの長き舌にて生首の顔の血をなめる）汚穢や、（べろ〳〵）汚穢やの。（べろ〳〵）汚穢やの、汚穢やの、あゝ、甘味やの、汚穢やの、あゝ、汚穢いぞの、やれ、甘味いぞなう。

朱の盤（催しつゝ進る）やあ、姥さん、歯を當てまい、御馳走が減りはせぬか。

舌長姥　何のいの。（ぐつたりと衣紋を抜く）取る年の可恐しさ、近頃は歯が悪うて、人間の首や、澤庵の尻尾はの、かくやにせねば咽喉へは通らぬ。其のまゝの形では、金化猫の額でさへ、横噛りにはならぬ事よ。

朱の盤　後生らしい事を言ふまい、彼岸は過ぎたぞ、いや、奥方様、此の姥が件の舌にて舐めまするど、鳥獣も人間も、とろ〳〵と消えて骨ばかりになりますわ。……それやこそ、申さぬことではなかつた。お土産の顔つきが、時の間に、細長う痩りました。なれども、過失の功名、死んで變りました人相が、却つて、もとの面體に戻りました。……姫君も御覧なさい。

亀姫（扇子を顔に、透かし見る）あゝ、ほんになあ。誰も一目食べたさう。

（侍女等一同、瞬きもせず熟と視る。）

薄　御前様――あの、皆さんも御覧なさいまし、亀姫様お持たせの此の首は、もし、此の姫路の城の殿様の顔に、よく似て居るではござんせぬか。

桔梗　眞に、瓜二つでございますねえ。

夫人（打頷く）お亀様、此のお土産は、これは、たしか……

…………

亀姫　はい、私が盾を貸す、猪苗代亀ヶ城の主、武田衛門之介の首でございますよ。

夫人　まあ、貴女。（間）私のために、そんな事を。

亀姫　構ひません、それに、私がいたしたとは、誰も知りはしませんもの。私が城を出ます時はね、まだ此の衛門之介はお妾の膝に凭掛つて、酒を飲んで居りました。お大名の癖に意地が汚くつてね、鯉汁を一口に食べますとね、魚の腸に針があつて、それが、咽喉へさゝつて、それで亡くなるのでございますから、今頃丁ど其のお膳が出たぐらゐでございますよ。（ふと驚く。扇子を落す）まあ、うつかりして、此の咽喉に針がある。（もとどりを取つて上ぐ）大變なことをした、お姉様に刺さつたら

何うしよう。

夫人　しばらく！　折角、あなたのお土産を、いま、それをお抜きだと、衞門之介も針が抜けて、蘇返つて了ひませう。

朱の盤　いかさまな。

夫人　私が氣をつけます、可うござんす（扇子を添へて首を受取る）お前たち、瓜を二つは知れたこと、此の人はね、此の姫路の城の主、播摩守とは、血を分けた兄弟だよ。

（侍女等目と目を見合す。）

一寸、獅子にお供へ申さう。

（みづから、獅子頭の前に供ふ。獅子、其の牙を開き首を呑む、首、其の口に隱る。）

龜姫（熟と視る）お姉樣、お羨しい。

夫人　え。

龜姫　旦那樣が、おいで遊ばす。

（間。——夫人、姫と顏を合す、互に莞爾とす。）

夫人　嘘が眞に。……お互に…………

龜姫　何の不足はないけれど。

夫人　こんな男が欲いねえ。——あゝ、男と云へば、お龜樣、あなたに見せるものがある。——桔梗さん。

桔梗　はい。

夫人　あれを、一寸。

桔梗　畏まりました。（立つ）

朱の盤（不意に）や、姥殿、獅子のお頭に見惚れまい。尾籠千萬。

舌長姥（時に、うしろ向きに乘出して、獅子頭を視めつゝあり）老人ぢや、當館奧方樣も御許され。見惚れるに無理はないわいの。

朱の盤　いやさ、見惚れるは仔細はないが、姥殿、姥殿は其處に居て舌が屆く。（苦笑す）

（舌長姥思はず正面に其の口を蔽ふ。侍女等忍びやかに皆笑ふ。桔梗、鍬形打つたる五枚錣、金の龍頭の兜を捧げて出づ。夫人と龜姫の前に置く。）

夫人　貴女、此の兜はね、此の城の、播摩守が、先祖代々の家の寶で、十七の奧藏に、五枚錣に九ツの錠を下して、大切に祕藏をして居りますのをね、今日お見えの嬉しさに、實は、貴女に上げませうと思つて取出して置きました。けれども、御心入の貴女のお土産で、私のはお恥しく成りました。それだから、唯思つたゞけの、申譯にお目に掛けますばかり。

龜姫　否、結構、まあ、お目覺しい。

夫人　差上げません。第一、あとで氣がつきますとね、久しく藏込んであつて、かび臭い。蘭麝の薰も何にもしま

せん。大阪城の落ちた時の、木村長門守の思切つたやうなのだと可いけれど、……勝戦のうしろの方で、矢玉の雨宿をして居た、ぬくいのらしい。御覧なさい。

龜姫 （朱金の輝く裏を返す） ほんに、討死をした兜ではありませんね。

夫人 だから、およしなさいまし、葛や、しばらく其處へ。

（薄闇のまゝ、葛、其の兜を獅子頭の傍へ置く。）

お歸りまでに、屹とお氣に入るものを調へて上げますよ。

龜姫 それよりか、お姉様、早く、あのお約束の手鞠を突いて遊びませうよ。

夫人 あゝ、遊びませう。——彼方へ。——城の主人の鷹狩が、雨風に追はれ／＼て、もうやがて大手さきに歸る時分、貴女は澤山お膳がいゝから、此の天守から美しい鷹が驚くと、また立騒いでお煩い。

（龜姫のかしづきたち、皆立ちかゝる。）

いや、御先達、お山伏は、女たちと此處で一獻お汲みがよいよ。

朱の盤 吉祥天女、御功德でござる。（膝を突つて叩頭す）

龜姫 あゝ、姥、お前も大事ない、こゝに居てお相伴をしや。——お姉様に、私から我儘をしますから。

夫人 尤さ。

舌長姥 もし、通草、山ぐみ、山葡萄、手造りの猿の酒、山蜂の蜜、蟻の甘露、諸白もござります。が、お二人様のお手鞠は、唄を聞きますばかりでも壽命の藥と承る。恁やうに年を取りますと、慾も、得も、はゝ、覺えませぬ。唯もう、長生がしたうござりましてなう。

朱の盤 や、姥殿、其の上のまた慾があるかい。

舌長姥 憎まれ山伏、これ、歸り途に舐められさつしやるな。（とぺろりと舌）

朱の盤 （頭を抱ふ） わあ、助けてくれ、角が縮まる。

（侍女たち笑ふ。）

舌長姥 さ、お供をいたしませうの。

（夫人を先に、龜姫、薄と女の童等、皆行く。五人の侍女と朱の盤あり。）

桔梗 お先達、さあ／＼、お寛ぎなさいまし。

朱の盤 寛がいで何とする。やあ、えいとな。

萩 もし、面白いお話を聞かして下さいましな。

朱の盤 聞かさいで何とする。（扇を笏に） それ、山伏と言つぱ山伏なり。兜巾と云つぱ兜巾なり。お腰元と言つぱ美人なり。戀路と言つぱ闇夜なり、野道山路厭ひなく、修行積んだる某が、此のいら高の珠數に掛け、いで一祈り祈るならば、などか利驗のなかるべき。橋の下の菖蒲は、誰が植ゑた菖蒲ぞ、ぼろぼん、ぼろぼん、ぼろぼんのぼろぼん。

（侍女等わざとはら〳〵と逃ぐ、朱の盤五人を追廻す。）

ぼろぼんぼろぼん。ぼろぼんぼろぼん。（やがて侍女に突かれて撞と倒ろ）などか利験のなかるべき。

葛　利験はござんせうけれどな、そんな話は面白うござんせぬ。

朱の盤　（首を振つて）ぼろぼん、ぼろぼん。

（鞠唄聞ゆ。）

――私が姉さん三人ござる、一人姉さん鼓が上手、
一人姉さん太鼓が上手。
いつちよいのが下谷にござる。
下谷一番達しやでござる。二両で帯買うて、
三両で括けて、括けめ括けめに七總さげて、
折りめ折りめに、いろはと書いて。――」

葛　さあ、お先達、よしの葉の、よい女郎衆ではござんせぬが、参つてお酌。（扇を開く）

朱の盤　ぼろぼんぼろぼん。（同じく扇子にうく）おとゝとゝ、丁どある〳〵。いで、お肴が所望せう。……などか利験のなかるべき。

桔梗　其の利験ならござんせう。女郎花さん、撫子さん、一寸、お立ちなさいまし。

（両女立つ。）

こゝを何處ぞと、もし人問はゞ、こゝは駿河の府中の宿よ、人に情を掛川の宿よ。雉子の雌鳥ほろりと落いて、打ちきせて、しめて、しよの〳〵いとしよの、そゞろいとしうて、遣瀬なや。

朱の盤　やんや〳〵。

女郎花　今度はお先達、さあ。

葛の葉　貴方がお立ちなさいまし。

朱の盤　ぼろぼん、ぼろぼん。此方衆思ざしを受けうならば。

（侍女五人扇子を開く、朱の盤杯を一順す。即ち立つて、腰なる太刀をすらりと抜き、以前の兜を切先にかけて、衝と天井に翳し、高歴に拍子を踏んで――）

戈鋋劍戟を降らすこと電光の如くなり。
磐石巖を飛ばすこと春の雨に相同じ。
然りとは雖も、天帝の身には近づかで、
修羅かれがために破らる。

――お立ち――（陰より諸聲）

（手早く太刀を納め、兜をもとに直す、一同つい居る。）

龜姫　お姉様、今度は貴方が。私へ。

夫人　はい。

舌長姥　お早々と。

夫人　（頷きつゝ、連れて廻廊にかゝる。目の下遙に瞰下す）あゝ、鷹狩が歸つて來た。

龜姫　（ともに瞰下す）先刻私が參る時は、蟻のやうな行列が、その鐵砲で、松並木を走つて居ました。あゝ、首に似た殿様が、馬に乘つて反返つて、威張つて、本丸へ入つて來ますね。

夫人　播磨守さ。

龜姫　まあ、翼の、白い羽の雪のやうな、いゝ鷹を持つて居るよ。

夫人　おゝ。（輕く胸を打つ）貴女。（間）あの鷹を取つて上げませうね。

龜姫　まあ、何うしてあれを。

夫人　見ておいで、それは姫路の、富だもの。

（裳を取つて扇に裝ふ、美しき胡蝶の群、ひとしく裳に舞ふ。颯と袖を開く風情す。）

それ、人間の目には、羽衣を被た鶴に見える。

（ひらりと落す時、一羽の白鷹颯と飛んで天守に上るを、手に捕ふ。）

（――わつと云ふ聲、地より響く――）

龜姫　お涼しい、お姉様。

夫人　此の鷹ならば、鞠を投げてもとりませう。――澤山お遊びなさいまし。

龜姫　あい。（嬉しげに袖に抱く。其のまゝ、眞先に階子を上る。二三段、唯振返りて、衝と鷹を雪の手に据うるや否や）

蟲が來た。

（云ふとゝもに、袖を拂つて一筋の征矢をカラリと落す。矢は鷹狩の中より射掛けたる也。）

夫人　（齊しくともに）む。（と肩をかはし、身を捻つて背向に成る、舞臺に面を返す時、口に一條の征矢、手にまた一條の矢を取る。下より射たるを受けたるなり）推參な。

（――忽ち、鐵砲の音、あまたゝび――）

薄　それ、皆さん。

（侍女等、身を垣にす。）

朱の盤　姥殿、確り。（姫を庇うて大手を開く）

龜姫　大事ない、大事ない。

夫人　（打笑む）ほゝゝ、皆が花火線香をお焚き――然う

すると、鐵砲の火で、此の天守が燃えると思つて、吃驚して打たなく成るから。

(――舞臺やゝ暗し。鐵砲の音止む――)

(夫人、龜姫と聲を合せて笑ふ、ほゝゝゝほ。)

夫人　それ、御覽、次手に其の火で、燒けさうな處を二三ケ處焚くが可い、お龜樣の路の松明にしようから。

(舞臺暗し。)

龜姫　お心づくしお嬉しや。然らば。

夫人　さらばや。

(寂寞、やがて燈火の影に、うつくしき夫人の姿。舞臺に唯一人のみ見ゆ。夫人うしろむきにて、獅子頭に對し、机に向ひ卷ものを讀みつゝあり。間を置き、女郎花、清らかなる小搔卷を持ち出で、靜に夫人の背に置き、手をつかへて、のち去る。――)

此處は何處の細道ぢや、細道ぢや。
天神樣の細道ぢや、細道ぢや。

(舞臺一方の片隅に、下の四重に通ずべき階子の口あり。其の口より、先づ一の雪洞顯れ、一廻りあたりを照す。やがて衝と翳すとゝもに、美丈夫、秀でたる眉に勇壯の氣滿つ。黑羽二重の紋着、萠黃の袴、臘鞘の大小にて、姫川圖書之助登場。唄をきゝつゝ低徊し、天井を仰ぎ、廻廊を窺ひ、やがて燈の影を認めて、やゝ驚く。次で几帳を認む。彼が入るべき方に几帳を立つ。圖書は躊躇の後決然として進む。瞳を定めて、夫人の姿を認む。劍夾に手を掛け、氣構へたるが、じりじりと退る。)

夫人　(間)誰。

圖書　はつ。(と思はず膝を支く)　某。

夫人　(面のみ振向く、――無言)

圖書　私は、當城の大守に仕ふる、武士の一人でございます。

夫人　何しに見えた。

圖書　百年以來、二重三重までは格別、當お天守五重までは、生あるものゝ參つた例はありませぬ。今宵、大殿の仰せに依つて、私、見屆けに參りました。

夫人　それだけの事か。

圖書　且つ又、大殿樣、御祕藏の、日本一の鷹がそれまして、お天守の此のあたりへ隱れました。行方を求めよとの御意でございます。

夫人　翼あるものは、人間ほど不自由ではない。千里、五百里、勝手な處へ飛ぶ、とお言ひなさるが可い。――用はそれだけか。

圖書　別に餘の儀は承はりませぬ。

夫人　五重に參つて、見屆けた上、如何計らへとも言はれなかつたか。

圖書　いや、承りませぬ。

夫人　そして、お前も、然う見屆けた上に、何うしようとも思ひませぬか。

圖書　お天守は、殿樣のものでございます、如何なる事がありませうとも、私一存にて、何と計らはうとも決して存じませぬ。

夫人　お待ち。此の天守は私のものだよ。

圖書　それは、貴方のものかも知れませぬ、また殿樣は殿樣で、御自分のものだと御意遊ばすかも知れませぬ。しかし、いづれにいたせ、私のものでないことは確でございます。自分のものでないものを、殿樣の仰せも待たずに、何うしようとも思ひませぬ。

夫人　すゞしい言葉だね、其の心なれば、此處を無事で歸られよう。私も無事に歸してあげます。

圖書　冥加に存じます。

夫人　今度は、播磨が申しつけても、決して來ては成りません。此處は人間の來る處ではないのだから。――また誰も參らぬやうに。

圖書　いや、私が參らぬ以上は、五十萬石の御家中、誰一人參りますものはございますまい。皆生命が大切でございますから。

夫人　お前は、そして、生命は欲うなかつたのか。

圖書　私は、仔細あつて、殿樣の御不興を受け、お目通を遠ざけられ閉門の處、誰もお天守へ上りますものがないために、急にお呼出しでございました。其の御上使は、實は私に切腹仰せつけの處を、急に御模樣がへに成つたのでございます。

夫人　では、此の役目が濟めば、切腹は許されますか。

圖書　其のお約束でございました。

夫人　人の生死は構ひませんが、切腹はさしたくない。私は武士の切腹は嫌ひだから。しかし、思ひ掛なく、お前の生命を助けました。……惡い事ではない。今夜はいゝ夜だ。それではお歸り。

圖書　姬君。

夫人　まだ、居ますか。

圖書　は、恐入つたる次第ではございますが、御姿を見ました事を、主人に申まして差支へはございませんか。

夫人　確にお言ひなさいまし。留守でなければ、何時でも居るから。

圖書　武士の面目に存じます――御免。

（雪洞を取つて靜に退座す。夫人長煙管を取つて、拂

く音に、圖書板敷にて一度留まり、直ちに階子の口にて、燈を下に、壇に蹲る。）

（鐘の音。）

（時に一體の大入道、面も法衣も眞黒なるが、もの陰より甍を渡り梢を傳ふが如くにして、舞臺の片隅を傳ひ行き、花道なる切穴の口に踞まる。）

（鐘の音。）

（圖書、其の切穴より立顯る。）

（夫人すつと座を立ち、正面、鼓の緒の欄干に立ち熟と視る時、圖書、雪洞を翳して高く天守を見返す、トタンに大入道さし覗き狀に雪洞をふつと消す。圖書身構す。大入道、大手を擴げて其の前途を遮る。）

（鐘の音。）

（侍女等、凛々しき扮裝、揚幕より、懷劍、薙刀を構へて出づ。圖書扇子を拔持ち、大入道を拂ひ、懷劍に身を躱し、薙刀と丁と合はす。かくて一同を追込み、揚幕際に扇を揚げ、屹と天守を仰ぐ。）

（鐘の音。）

（夫人、從容として奧に返る。圖書、手探りつゝもとの切穴を搜る。（間）其の切穴に沒す。しばらくして舞臺なる以前の階子の口より出づ。猶豫はず夫人に近づき、手をつく。）

夫人　（先んじて聲を掛く。穩に）又見えたか。

圖書　はつ、夜陰と申し、再度御左右を騷がせ、まことに恐入りました。

夫人　何しに來ました。

圖書　御天守の三階中壇まで戻りますと、鳶ばかり大きさの、野衾かと存じます、大蝙蝠の黑い翼に、燈を煽ぎ消されまして、いかにとも、進退度を失ひましたにより、灯を頂きに參りました。

夫人　たゞそれだけの事に。……二度とおいでゞないと申した、私の言葉を忘れましたか。

圖書　針ばかり片割月の影もさゝず、下に向へば眞の暗黑。男が、足を踏みはづし、壇を轉がり落ちまして、不具になどなりましては、生效もないと存じます。上を見れば五重の此處より、密にお燈がさしました。お咎めを以つて生命をめされうとも、男といたし、階子から落ちて怪我をするよりとは存じ、御戒をも憚らず推參いたしてございます。

夫人　（莞爾と笑む）あゝ、爽かなお心、そして、貴方はお勇しい。燈を點けて上げませうね。（座を寄す）

圖書　いや、お手づからは恐多い。私が。

夫人　否々、此の燈は、明星、北斗星、龍の燈、玉の光もおなじこと、お前の手では、蠟燭には點きません。

圖書　はツ。（瞳を凝す）

（夫人、世話めかしく、雪洞の蓋を抜き、短檠の灯を移す。燭をとつて、熟と圖書の面を視る、恍惚とす。）

夫人（蝋燭を手にしたるまゝ）歸したくなく成つた、もう歸すまいと私は思ふ。

圖書　えゝ。

夫人　貴方は、播磨が貴方に、切腹を申しつけたと言ひました。それは何の罪でございます。

圖書　私が手に据ゑました、殿樣が日本一とて御秘藏の、白い鷹を、此のお天守へ逸しました。其の越度、其の罪過でございます。

夫人　何、鷹をそらした、其の越度、其の罪過、あゝ人間と云ふものは不思議な咎を被せるものだね。其の鷹は貴方が勝手に鳥に合せたのではありますまい。天守の棟に、世にも美しい鳥を視て、それが欲しさに、播磨守が、自分で貴方にいひつけて、勝手に自分でそらしたものを、貴方の罪にしますのかい。

圖書　主と家來でございます。仰せのまゝ生命をさし出しますのが臣たる道でございます。

夫人　其の道は曲つて居ませう、間違つたいひつけに從ふのは、主人に間違つた道を踏ませのではありませんか。

圖書　けれども、鷹がそれました。

夫人　あゝ、主從とかは可恐しい。鷹とあの人間の生命とを取かへるのでございますか。よしそれも、貴方が、貴方の過失なら、君と臣と云ふもののそれが道なら仕方がない。けれども、播磨がさしづなら、それは播磨の過失と云ふもの。第一、鷹を失つたのは、貴方ではありません。あれは私が取りました。

圖書　やあ、貴方が。

夫人　まことに。

圖書　えゝ、お怨み申上ぐる。（刀に手を掛く）

夫人　鷹は第一、誰のものだと思ひます。鷹には鷹の世界がある。露霜の清い林、朝嵐夕風の爽な空があります。決して人間の持ちものではありません。諸侯なんど、と云ふものが、思上つた行過ぎな、あの、鷹を、唯一人じめに自分のものと、つけ上りがして居ます。貴方は然うは思ひませんか。

圖書　（沈思す。間）美しく、氣高い、そして計り知られぬ威のある、姫君。——貴方にはお答が出來かねます。

夫人　否、否、かどたてゝ言籠めるのではありません。私の申すことが、少しなりともお分りになりましたら、あの其の筋道の分らない二三の丸、本丸、太閤丸、廓内、御家中の世間へなど、もうお歸りなさいますな。白銀、黄金、球、珊瑚、千石萬石の知行より、私が身を捧げま

す、腹を切らせる殿様のかはりに、私の心を差上げます、私の生命を上げませう。貴方お歸りなさいますな。

圖書　迷ひました、姫君。殿に金鐵の我が心も、波打つばかり惜亂をいたします。が、決心が出來ません。私は親にも聞きたし、師にも教へられたし、書もつにも聞かねば成りません。お暇を申上げます。

夫人　（歎息す）あゝ、まだ貴方は、世の中に未練がある。それではお歸りなさいまし。（此の時蠟燭を雪洞に）　はい。

圖書　途方に暮れつゝ參ります。迷の多い人間を、あはれとばかり思召せ。

夫人　あゝ、優し其のお言葉で、猶ほ歸したくなく成つた。（袂を取る）

圖書　（屹として袖を拂ふ）　強ひて、斷つて、お歸しなくば、お抵抗をいたします。

夫人　（微笑み）　あの私に。

圖書　とんでもない事。

夫人　まあ、お勇ましい。凛々しい。あの、獅子に似た若いお方、お名が聞きたい。

圖書　夢のやうな仰せなれば、名の、ありなしも覺えませぬが、姫川圖書之助と申します。

夫人　可懷い、嬉しいお名、忘れません。

圖書　以後、お天守下の往かひには、誓つて禮拜をいたします。――。（衝と立つ）

夫人　あゝ、圖書樣、しばらく。

圖書　是非もない、所詮活けてはお歸しない掟なのでございますか。

夫人　ほゝゝ、播磨守の家中とは違ひます。こゝは私の心一つ、掟なぞは何にもない。

圖書　それを、お呼留め遊ばしたは。

夫人　おはなむけがあるのでござんす、――人間は疑深い。卑怯な、臆病な、我儘な、殿樣などは尚の事、貴方が此の五重へ上つて、此の私を認めたことを誰も信じはせぬであらう。清い、爽かな貴方のために、記念の品をあげませう。（靜に以前の兜を取る）　――これを、其の記念にお持ちなさいまし。

圖書　存じも寄らぬ御たまもの、姫君に向ひ、御辭退は却つて失禮。餘り尊い、天晴な御兜。

夫人　金銀は堆けれど、そんなにいゝ細工ではありません。しかし、武田には大切な道具。――貴方、見覺えがありますか。

圖書　（疑ひ目を凝しつゝあり）　まさかとは存ずるなり、私とても年に一度、蟲干の外には拜しませぬが、ようも似ました、お家の重寶、青龍の御兜。

夫人　まつたく、其に違ひありません。
圖書　（愕然とす。急にし）此にこそ足の爪立つばかり、心急ぎがいたします、御暇を申うけます。
夫人　今度來ると歸しません。
圖書　誓つて、――仰せまでもありません。
夫人　然らば。
圖書　はつ。（兜を捧げ、やゝ急いで階子に隱る）
夫人　（ひとりもの思ひ、机に頰杖つき、獅子にもの言ふ）貴方、あの方を――私に下さいまし。
薄　（靜に出づ）御前樣。
夫人　薄か。
薄　立派な方でございます。
夫人　今まで、あの人を知らなかつた、目の及ばなかつた私は恥かしいよ。
薄　豫てのお望みに叶うた方を、何でお歸しなさいました。
夫人　生命が欲い。抵抗をすると云ふもの。
薄　御一所に、此處にお置き遊ばすまで、何の、生命をお取り遊ばすのではございませんのに。
夫人　あの人たちの目から見ると、此處に居るのは活きたものではないのだと思ひます。
薄　それでは、貴方の御容色と、其のお力で、無理にもお引留めが可うございますのに。何の、抵抗をしました處で。
夫人　否、容色は此方からは見せたくない。力で、人を強ひるのは、播摩守なんぞの事、眞の戀は、心と心……（輕く）薄や。
薄　は。
夫人　然し、然うは云ふもの丶、白鷹を据ゑた、鷹匠だと申すよ。――緣だねえ。
薄　屹と御緣がござりますよ。
夫人　私も何うやら、然う思ふよ。
薄　奧樣、いくら貴女のお言葉でも、此は些と痛入りました。
夫人　私も痛入りました。
薄　これは又御挨拶でござります――あれ、何やら、御天守下が騷がしい。（立つて欄干に出づ、遙に下を覗込む）……まあ、御覽なさいまし。
夫人　（座のまゝ）何だえ。
薄　武士が大勢で、篝を焚いて居ります。あゝ武田播摩守殿、御出張、床几に掛つてお控へだ。おぬるくて、のろい癖に、もの見高な、せつかちで、お天守見屆けのお使ひの歸るのを待兼ねて、推出したのでございます。もしえ／＼、圖書樣のお姿が小さく見えます。奧樣、おたまじやくしの眞中で、御紋着の御紋も河骨、すつきり花が咲いたや

うた水際立つてお美しい。……奥様。

夫人　知らないよ。

薄　おゝ、兜あらためがはじまりました。おや、吃驚した。あの、殿様の漆見たいな太い眉毛が、びく／＼と動きますこと。先刻の亀姫様のお土産の、兄弟の、あの首を見せたら、何うでございませう。あゝ、御家老が居ます。あの親仁も大分百姓を痛めて溜込みましたね。そのかはり頭が兀げた。まあ、皆が図書様を取巻いて、お手柄にあやかるのか知ら。おや、追取刀だ。何、何、何、まあまあ、奥様々々。

夫人　もう可い。

薄　えゝ、もう可いではございません。図書様を賊だ、と言ひます。御秘蔵の兜を盗んだ謀逆人、謀逆人、殿様のお首に手を掛けたも同然な逆賊でございますとさ。お庇で兜が戻つたのに。――何てまあ、人間と云ふものは。――あれ、捕手が掛つた。忠義と知行で、てむかひはなさらぬか知ら。しめた、投げた、嬉しい。其処だ。御家老が肩衣を撥ましたよ。大勢が投運れた。あれ危い、豪い。図書様投合せた。……一人腕が落ちた。あら、胸切。また何も働かずとも可いことを、五両二人扶持らしいのが、あら、可哀相に、首が飛びます。

夫人　秀吉時分から、見馴れて居ながら、何だねえ、騒々しい。

薄　騒がずには居られません。多勢に一人、あら切抜けた、図書様がお天守に遁込みました。追掛けますよ。槍まで持出した。(欄干をするする／＼と) 図書様が、二重へ駈上つておいでなさいます。大勢が追詰めて。

夫人　(片膝立つ) 可し、お手傳ひ申せ。

薄　お腰元衆、お腰元衆。――(呼びつゝ忙しく階子を下り行く)

(夫人、片手を掛けつゝ几帳越に階子の方を瞰下す。)

(――や、や、や、激しき人聲、もの音、足踏。――)

(図書、もとゞりを放ち、衣服に血を浴ぶ。刀を振つて階子の口に、一度屹と下を見込む。肩に波打ち、はつと息して凝と成る。)

夫人　図書様。

図書　(心づき、蹌踉と、且つ呼吸をいて急いで寄る) 姫君、お言葉をも顧みず、三度の推参をお許し下さい。私を賊……賊……謀逆人、逆賊と申して。

夫人　よく存じて居ります。昨日今日、今までも、お互に友と呼んだ人たちが、いかに殿の仰せとて、手の裏を反すやうに、――ようまあ、あなたに刃を向けます。

図書　はい。微塵も知らない罪のために、人間同志に殺されましては、おなじ人間、断念められない。貴女のお手

に拘ります。……御禁制を破りました、御約束を背きました、其の罪に伏します。速に生命をお取り下されたい。

夫人　えゝ、武士たちの夥間ならば、貴方のお生命を取りませう。私と一所には、いつまでもお活きなさいまし。

圖書　(蹙きつゝ) お情餘る、お言葉ながら、活さようとて、討手の奴儕、決して活かして置きません。早くお手に掛け下さいまし。貴女に生命を取らるれば、もう此の上のない本望。彼等に討たるゝのは口惜い。(夫人の膝に手を掛く)さ、生命を、生命を——恁う云ふ中にも取詰めて參ります。

夫人　否、此處までは來ますまい。

圖書　五重の、其の壇、其の階子を、鼠の如く、上りつ下りついたし居る。……豫ての風説、鬼神より、魔よりも、此處を恐しと存じて居るゆゑ、聊か躊躇はいたしますが、既に、私の、恁く參つたを、認めて居ります。恁う云ふ中にも、唯今。

夫人　あゝ、それも然う、何より前に、貴方をおかくまひ申して置かう。(獅子頭を取る、母衣を開いて、圖書の上に被ひながら)此の中へ……此の中へ——

圖書　や、金城鐵壁。

夫人　否、柔かい。

圖書　仰の通り、眞綿よりも。

夫人　そして、確かり、私におつかまりなさいまし。

圖書　失禮御免。

(夫人の背より其の袖に縋る。縋る、と見えて、身體其の母衣の裾なる方にかくる。獅子頭を捧げつゝ、夫人の面、尚ほ母衣の外に見ゆ。)

(討手どや／＼と入込み、唯見てわつと一度退く時、夫人も母衣に隱る。唯一頭青面の獅子猛然として舞臺にあり。)

(討手。小田原修理、山隅九平、其の他。抜身の槍、刀。中には仰山に小具足をつけたるもあり。大勢。)

九平　(雪洞を寄す)やあ、怪しく、凄く、美しい、婦の立姿と見えたは此だ。

修理　化るわ／＼。御城の瑞兆、天人の如き鶴を御覽あつて、殿樣、鷹を合せたまへば、鷹はそれて破蓑を投落す、……言語道斷。

九平　他にない、姫川圖書め、死ものぐるひに、確に其なる獅子母衣に潜つたに相違なし。やあ、上意だ、逆賊出合へ。山隅九平向うたり。

修理　待て、山隅、先方で潜つた奴だ。呼んだつて出やしない。取つて押へ、引摺出せ。

九平　それ、面々。

修理　策を着けい、うかつにかゝると怪我をいたす。元來

此の青獅子が、並大抵のものではないのだ。傳へ聞く、以前これは御城下はづれ、山の地主神の宮に飾つてあつた。二代以前の當城殿樣、お鷹狩の馬上から——一人町里には思ひも寄らぬ、都方と見えて、世にも艶麗な女の、行列を颯と避けて、其の宮へかくれたのを——とろんこの目で御覽じたわ。此方は鷹狩、もみぢ山だが、いづれ戰に負けた國の、上臈、貴女、貴夫人たちの落人だらう。絶世の美女だ。しやつ攫出いて奉れ、とある。御近習、宮の中へ闖入し、人妻なればと、いなむを捕へて、手取足取しようとしたれば、舌を噛んで眞俯向けに倒れて死んだ。其の時にな、此の獅子頭を熟と視て、あはれ獅子や、名譽の作かな。わらはに斷ばかりの力あらば、虎狼の手にかゝりはせじ、と吐いた。さな、續いて三年、毎年、秋の大洪水よ。何か、死骸取片づけの山神主が見た、と申すには、獅子が頭を逆にして、其の婦の血を舐め〳〵、目から涙を流いたと云ふが觸出しでな。打續く洪水は、其の婦の怨だと、國中の是沙汰だ。なき婦が前髪にさしたのが、死ぬ時、髪をこぼれ落ちたと云ふを拾つて來て、近習が復命をした、白木に刻んだ三輪牡丹高彫のさし櫛をな、其の時の馬上の殿樣は、渡して袂へお入れなさつた。祟を恐れぬ荒氣の大名。おもしろい、水を出さば、天守の五重を浸して見よ、とそれ、生捕つて來てな、此處へ打上げた其の獅子頭だ。以來、奇異妖さまざまな、評判のやうに沙汰する天守、まさかとは思うたが、目のあたり不思議を見るわ。——心してかゝれ。

九平　心得た、槍をつけろ。

（討手、槍にて立ちかゝる。獅子狂ふ。討手辟易す。修理、九平等、拔連れ〳〵一同立掛る。獅子狂ふ。又辟易す。）

修理　木彫にも精がある、活きた獸も同じ事だ。目を狙へ。

（一たび、修理、力を合せて、一刀づゝ目を傷く、獅子伏す。討手其の頭をおさゆ。）

圖書　（被衣を搔退け刀を揮つて出づ。日々に罵る討手と、一刀合すと齊しく）あゝ、目が見えない。（押倒され、取つて伏せらる）無念。

夫人　（獅子の頭をあげつゝ、すつくと立つ。黑髮亂れて面凄し。手に以前の生首の、もとどりを取つて提ぐ）誰の首だ、お前たち、目のあるものは、よつく見よ。（どつしと投ぐ）

（——討手わツと退き、修理、恐る〳〵これを拾ふ。）

修理　南無三寶。
九平　殿樣の首だ。播磨守樣御首だ。

修理　一大事とも言ひやうなし。御同役、お互に首はあるか。

九平　可恐い魔ものだ。うか／＼して、こんな處に居べきでない。

（目手一目、立つ足もなく、生首をかこひつゝ、亂れて退く）

圖書　姫君、何處においでなさいます。姫君。

（夫人、悄然として、立ちたるまゝ、もの言はず）

圖書　（あはれに寂しく手探り）姫君、何處においでなさいます。私は目が見えなく成りました。姫君。

夫人　（忍び泣きに泣く）貴方、私も目が見えなく成りました。

圖書　えゝ。

夫人　侍女たち、侍女たち。――せめては燈を――

――皆、盲に成りました。誰も目が見えませんのでございます。（口々に一同はつと泣く聲、壁の彼方に聞ゆ）

夫人　（獅子頭とゝもにハタと崩折る）獅子が兩眼を傷けられました。此の精靈で活きましたものは、一人も見えなく成りました。圖書樣、……何處に。

圖書　姫君、何處に。

（さぐり寄りつゝ、やがて手を觸れ、はつと泣き、相抱く。）

夫人　何と申さうやうもない。貴方お覺悟をなさいまし。今持たせて遣つた首も、天守を出れば消えませう。討手は直ぐに引返して參ります、私一人は、雲に乘ります、風に乘ります。圖書樣には出來ません。あゝ口惜い。あれ等討手のものゝ目に、蓑笠着ても天人の二人揃つた姿を見せて、日の出、月の出、夕日影にも、拜ませようと思つたのに、私の方が盲目に成つては、たゞお生命さへ助けられない。堪忍して下さいまし。

圖書　くやみません！　姫君、あなたのお手に掛けて下さい。

夫人　えゝ、人手には掛けますまい。其のかはり私も生きては居りません、お天守の塵、煤ともなれ、落葉に成つて朽ちませう。

圖書　やあ、何のために貴女が、美しい姫の、此の世にながらへておはすを土産に、冥土へ行くのでございます。

夫人　否、私も本望でございます、貴方のお手にかゝるのが。

圖書　優賞のお辭か、姫君。

夫人　えゝ何の。――然うおつしやる、お顏が見たい、唯一目。……千歳百歳に唯一度、たつた一度の戀だのに。

圖書　あゝ、私も、もう一目、あの、氣高い、美しいお顏

が見たい。（相縋る）

夫人　前世も後世も要らないが、せめて恁うして居たうござんす。

圖書　おゝ、天守下で叫んで居る。

夫人　（屹となる）口惜しい、なう、せめて一時隙があれば、夜叉池のお雪様、遠い猪苗代の妹分に、手傳を頼まうものを。

圖書　覺悟をしました。姫君、私を。…………

夫人　私は貴方に未練がある。否、助けたい未練がある。

圖書　猶豫をすると討手の奴、人間なかまに居られます、貴女が手に掛けて下さらずば、自分、我が手で――（一刀を取直す）

夫人　切腹はいけません。あゝ、是非もない。それでは私が御介錯、舌を噛切つてあげませう。其と一所に、𦨞のたばねを――此の私の胸を一思ひに。

圖書　せめて其の、ものをおつしやる、貴方の、ほのかな、口許だけも、見えたらばな。

夫人　貴方の睫毛一筋なりと。（聲を立てゝともに泣く）

（奥なる柱の中に、大音あり。――）

――待て、泣くな〳〵。――

（工人、近江之丞桃六、六十ちばかりの柔和なる老人。頭巾、裁着、火灯袋を腰に、扇を使うて顯る。）

桃六　美しい人たち泣くな。（つか〳〵と寄つて獅子の頭を撫で）先づ、目をあけて進ぜよう。（火灯袋より一挺の鑿を抜き、獅子の眼に當つ。）

（――夫人、圖書とゝもに、あつと云ふ――）

桃六　何うだ、の、それ、見えよう。はゝはゝ、もやんと開いた。嬉しさうに開いた。おゝ、もう笑ふか。誰がよ、誰がよ、あつはつはつ。

夫人　お爺様。

圖書　御老人、あなたは。

桃六　然れば、誰かの嫁に牡丹も刻めば、此の獅子頭も彫つた、近江之丞桃六と云ふ、丹波の國の楊枝削よ。

夫人　まあ。（圖書と身を寄せたる姿を心づく）こんな姿を、恥かしい。

（圖書も、ともに母衣を被ぎて姿を蔽ふ。）

桃六　むゝ、見える、恥しさうに見える、極りの惡さうに見える、はつはつはつはつ。睦じいな、若いもの。（石を切つて、ほくちをのぞかせ、煙管を横銜へに煙草を、すぱ〳〵）気苦労の擧句は休め、安らかに一寝入さつせえ。其のうちに、もそつと、其の上にも清い目にして進ぜよう。

（鑿を試む。月影さす。）

そりや光がさす、月の光あれ、眼玉。（鑿を試み、小耳

を傾け、雷の如く叫ぶ天守下の聲を聞く）世は戰でも、胡蝶が舞ふ、撫子も桔梗も咲くぞ。……馬鹿めが。（呵呵と笑ふ）こゝに獅子がゐる。お祭禮だと思つて騒げ。（[illegible]を當て）、槍、刀、弓矢、鐵砲、鼓の奴等、

――幕――

山吹

序

山吹の花の、わけて白く咲きたる、小雨の葉の色も、ゆあみしたる美しき女の、眉あをき風情に似ずやとて。——

時　現代

所　修善寺温泉の裏路。同、下田街道へ捷径の山中

人

島津正　（四十五六）洋畫家

縫子　小絲川子爵夫人

おなじ　（二十五）もと料理屋「ゆかり」の娘

邊栗藤次　（六十九）門附の人形使

ねりものゝ稚兒、童男、童女二人。よろづ屋亭主。馬士一人

ほかに村の人々、十四五人

候　四月下旬のはじめ。午後。——

第一場

場面。一方八重の遅櫻、三本ばかり咲滿ちたる中に、よろづ屋の店見ゆ。鎖したる硝子戸に、綿、紙、反もの類。生椎茸あり。起癈散、清暑水など、いろいろに認む。一枚戸を開きたる土間に、卓子椅子を置く。ビール、サイダアの罎を並べ、菓かごり一樣、焼酎の瓶見ゆ。此の店の傍すぐに田圃。

一方、杉の生垣を長く、下、石垣にして、其の根を小流走る。石垣にサフランの花咲き、雜草生ゆ。垣の内、新緑にして樹一本、道を覗きて枝垂る。背景勝手に、紫の木蓮あるもよし。

よろづ屋の店と、生垣との間、路をあまして、あとすこし未だ耕さゞる水田一面、水草を簇く。紫雲英の花あちこち、菜の花こぼれ咲く。路をめぐりて垣に添ひて、次第に奥深き處、孟宗の竹藪と、槻の大樹あり。この藪より山道をのぼる。

狭き土間、貧しき卓子(テイブル)に向つて腰掛けたる人形使――辺栗藤次(へぐりとうじ)、鼻の下を横撫でしながら言ふ。うしろ向のまゝなり。

人形使　お旦那――お旦那――もう一杯注いで下せえ。

萬屋　(店の障子戸の内より土間に出づ) 何もね、旦那に(お)の字には及ばないが、(苦笑して) 親仁、先刻(さつき)から大分明けたではないか。……然う飲んぢやあ稼(かせ)げまいがなあ。

人形使　へ、へ。最う今日は稼いだ後(あと)だよ。お旦那の前だが、これから先は山道を峠へ帰るばかりだでね――ふらりふらりとよ。

萬屋　親仁の、其ふらり〳〵は、聞くまでもないのだがね、峠にはまた同様な小屋があらうが。――私も今日は、然うして一人で留守番だが、湯治場の唯一つ越した此方は、此の通り、ひつそり閑で、人通りのないくらゐ、修善寺は大した人出だ。親仁は此からお稼ぎ時ではないのかい。

人形使　されば、此の土地の人たちはじめ、諸国から入込んだ講中がな、爺、媽々、爺、孫、眷属で、丁とはや護摩の煙が渦を巻いて居るやうな騒ぎだ。此の、時々ぱらぱらと来る梅雨模様の雨にもめげねえ群集(くんじゆ)だでね。相当の稼ぎはあつたゞが、もうやがて、大師様が奥の院から修善寺へお下りだ。――遠くの方で、ドーンドーンと、御輿(みこし)の太鼓の音が聞えては、誰も此方人等(こちとら)に構ひ手はねえよ。店を上げた見世物の、おや、おやん、おやんも、音を潜めただからね――皆を此方へ、はい、あばよと、……はゝゝ、――晩景から、また一稼ぎ、みつちりと稼げるだが、今日の御代にさへありつけば、此の上の欲はねえ。――稼り遂つたにした處で、往生安楽(わうじやうあんらく)をするばかり。(ぐつたりと叩頭(おじぎ)して、頭の上へ硝子杯(コツプ)を突出す)――お旦那、もう一杯、注いで下せえ。

萬屋　船幽霊が、柄杓(ひしやく)を貸せと云つた手つきだな。――底ぬけと云ふは、これからは始まつた事かも知れない。……商賣だからいくらでも賣りはするが。(呑口捻る)――親仁、また其處へ打倒れては不可(いけな)いよ。

人形使　往生安楽をするばかり。(がぶりと呑んで掌(てのひら)をチウと吸ふ) 別して今日は御命日だ――弘法様が適に会びかものゝ自動車へ、相乗にお引取り下されますてね。

萬屋　弘法様がお引取り下さるなら世話はないがね、村役場のお手数に成つては大變だ。ほどにして置きなさいよ。(店の内に入らんとす)

人形使　(大な聲して) お旦那、もう一杯下せえ。

萬屋　弘法様の御祭だ。芋が石に成つては困る。……もの惜みをするやうで可厭だから、まゝよ、いくらでも飲みなさい。だが、いまの一合たつぷりを、もう一息にやつ

たのかい。

人形使　これまでは雪見酒だで、五合一寸たちまちに消えるだよ。……これからがお花見酒だ。……お旦那、軒の八重櫻は、三本揃つて、……樹は若えがよく咲きました。滿開だ。——一軒の門に此のくらゐ咲いた家は修善寺中に見當られえだよ。——此を視めるのは無錢だ。酒は高値え、いや、しかし、見事だ。あゝ、うめえ。

萬屋　くだらない事を言ひなさるな、醉つたな、親仁……

人形使　これと言ふも、酒の一杯や二杯くれえ、時たま肥料にお施しなされるで、弘法樣の御利益だ。

酒屋　詰らない世辭を言ひなさんな。——全く此の邊、人通りのないのはひどい。……先刻、山越に立野から出るお稚兒を二人、大勢で守立てゝ通つた切、馬士も見掛けない。——留守は退屈だ——あゝ太鼓が聞える……

（此の太鼓は、棒にて荷ひつりかけたるを、左右より、二人して兩面をかはる〴〵打つ音なり、ドーン、ドーンドーン、ドーンと幽に響く。）

人形使　笙篳篥が、紋着袴だ。——消防夫が揃つて警護で、お稚兒がついての。あとさきの坊樣は、香を焚かつしやる、御經を讀まつしやる。御輿舁きは奥の院十八軒の若い衆が水干烏帽子だ。——南無大師、遍照金剛ッ！　道の左右は人間の黒山だ。お捻の雨が降る。……村の嬢女は振袖で拜みに出る、獨鈷の湯からは湲樣が裸體で飛出す——あはゝゝ、やれさて此が反對なら、弘法樣は嬉しかんべい。

萬屋　勝手にしろ、罰の當つた。（店へ入る）

人形使　南無大師遍照金剛。——（ちびりとのみつゝ、ぐたりと成る）

（夫人、雨傘をすぼめ、褄を片手に提げ、手提を持添ふ。櫛卷、引かけ帶、駒下駄にて出づ。其の運緩な視め。）

夫人　まあ、綺麗だこと——苦勞をして、よく、こんなに——（間）……お禮を言ひたいやうだよ——あゝ、眞當に綺麗だよ。よく、お咲きだこと。（懲くて、小流に添ひつゝ行く、石がきにサフランの花を見つゝ心付く）あら、鯉が、大な鯉が、——（小溝を覗く）まあ、死んでるんだよ。

（やゝ長き間。——衝と避けて、立離るゝ時、其の石垣に立掛けたる人形つかひの傀儡目に留る。あやつりの竹の先に、白拍子の舞の姿、美しく擡げたり。夫人熟と視て立停る。無言。雨の音。）

あゝ、降つて來た。（井菊と大きくしるしたる番傘を開く）まあ、人形が泣くやうに、目にも睫毛にも雫がかゝつてさ。……（傘を人形にかざして庇ふ）

人形使　（短き曖髮を頭にて分け、口大く、皺深し。眉迫り、ごま鹽髯硬く、眞赤に醉ひしれたる面を出し、夫人の其の背をじろりと視る。はじめ拔頭巾を被りたる間、おもて柔和なり。いま頭巾を脫いだる四角な額に、白髮長くすく〳〵として面凄く）

畫家　（海色の中折帽、うすき外套を着たり。細面にて淸く瘦す。半ば眠れるが如き目ざし、通りたる鼻下に白き毛の少し交りたる髭をきれいに揃へて短く摘む。おもての色やゝ沈み、温和にして、然も威嚴あり。素足の桐下駄にて、雨に懸念せず、ステッキを靜につき、一度櫻を見る）

人形使　（此の時また土間の卓子にむかつてうつむく）

畫家　（夫人の言葉に、何等の意味なく會釋し）はゝあ、操りですか。

夫人　先生——ですか、あの、此は私のぢやあございませんの。

畫家　（はじめて心付きたる體にて）何うも、此は失禮しました。いや、端から貴女がなさるのだと思つた次第でもありませんが、一寸今時珍しかつたものですから。近頃は東京では、場末の緣日にも餘り見掛けなく成りました。……これは珍らしい、靜を殺すと蛇體が大長刀を持つて反つて居る。……其の蛇體が、もう一つ變ると、赤い鉢卷をしめた所に成つて、踊を踊るのですが、これには別に、然うした仕掛も、からくりもないやうです。——（覗き〳〵、濟して夫人のさしかざしたる香案の中へ半身）猶、これは舞臺にかかりらしい。あゝ、人形は名作だ。——御覽なさい凄いやうです。……誰か持つて居ますか。……何うして、こんな處へはふり出して置きますかね。

夫人　人形つかひは——彼處で。（輕く指し、聲を低くす）お酒を飲んで居るやうですの。……然うらしいお爺さんが見えました。

畫家　うまいでせうな、乾と……一つ使はせて見たうございますね。

夫人　およしなさいまし、先生。……大相醉つて居るやうですから。

畫家　如何も、醉つ拂つて居ては面倒ですね。あゝ、しかし、人形は名作です——歸途にまた出逢ふかも知れない。（半ば呟く）貴女、失禮をいたしました。（冷然として山道の方へ行く）

夫人　（二三步あとに續る）先生、あの……先生——どちらへ？

畫家　（再びはじめて心付く）いや、（と輕く言ふ。間）……先生は弱りましたが、町も村も大變な雜鬧ですか

ら、其の山の方へ行つて見ます――貴女は、（おなじく眠れるが如き目のまゝ）つい、お見それ申しましたが、おなじ宿にでもおいでなのですか。

夫人　えゝ、ずつと（お傍にと言ふ意味籠る）……ですが、階下の奥に。あの……

畫家　其は何うも――失禮します。（また行く）

夫人　（一歩縋る）先生、あのこゝへ入らつしやりがけに、もしか、井菊の印半纏を着た男衆にお逢ひなさりはしませんでしたか。

畫家　あゝ、逢ひました。

夫人　何とも申しはいたしません？……………

畫家　（徐に頭を振る）さあ……あの方庭を野田屋へ向つて渡る渡月橋をまた渡りさすと、欄干に、長い様に、葭簀を掛けたのが立てゝあります。――この大師の市には、露に葭簀を掛けるやうです。其の者が、案山子を横に擧げたやうでをかしい、と思つて、ぼんやり。――尤も私も案山子に似て佇んで居りますから、（微笑む）一枚、買ひたいけれども、荷になると思つて見て居りますと、成程、宿の男が通りかゝりました。

夫人　えゝ、さうして……

畫家　あゝ然うです。（頷きたる顔を傾く）……「其處に奥さまがおいでゞす」と言つて行き過ぎました。成程……貴女の事でしたか、お連に成つて一所に出掛けたとでも思つたでせう――失禮します。

夫人　まあ、先生。……唯今は別々でしたけれど、昨夜おそく着きました時は、御一所でございましたわ。

畫家　貴女と……

夫人　えゝ。

畫家　存じませんな。

夫人　大仁で……自動車はつい別に成りましたんですが、……おなじ時に、――

畫家　私は乘合でしたがな……然やう……お一方、仕立てた方がおありだつたやうに思ひますが、それには、至極當世風の髪も七三で……（と半ばにいふ）

夫人　其の女が……（やゝ息忙しく）其女が、先生、宿へ着きますと、すぐ、あの、眉毛を落しましたの。（顔を上げつゝ、畫家はなじろむ）髪もこんなにくる／＼巻にしたんです。

畫家　はゝあ（いぶかしさうに、しかし冷靜に聞くのみ）

夫人　先生。（寄添ふ様に、うなだれて、さしうつむいて）頭陀袋を抱く）宿の男衆が申したのは、何處の奥様でと言ふ意味ではないのです。（やゝ興奮しつゝ）貴方の奥さまと言ふ意味でございました。

（――間。――）

畫家　（かくても、もの靜に）……と仰有ると？

夫人　昨晩、同じ宿へ着きますと、直ぐ、宿の人に――私は島津先生の――あの私は……（口籠る。小間）お寫眞や、展覽會で、蔭ながらよく貴方を存じて居ります。――「私は島津の家內ですが」と宿の人に――「實は見つからないやうにおなじ汽車で、あとをつけて來たんですの。」主樣は此と今日はないかも存じませんが、然う云ひましたの。……其の次第は「島津は近頃浮氣をして、餘所の婦と、此處で逢曳をするらしい。」……

畫家　私が。

夫人　貴方が　あの、そして、假に私の旦那樣か、

畫家　それは少々怪しかりません。（苦笑する）

夫人　堪忍して下さいまし。先生、――「座敷を別に、ここに忍んで、其の浮氣を見張るんだけれど、廊下などで不意に見附かつては不可いから、容子を變へるんだ。」と然う言つて、……いきなり鏡臺で、眉を落して、髮も解いて、羽織を脱いではふり出して、帶もこんなに（なよやかに、頭を振向く）あの、蓮葉にしめて、「後生、內證だよ。」と堅く口止をしました上で、宿帳の御名のすぐあとへ、……あの、申譯はありませんが、おなじくと……

畫家　（微に眉を顰む。しかし寛容に）保養に來る場所ですから、そんな惡戲もいゝでせうな――失禮します。

夫人　あれ、先生、お怒りも遊ばさないで……

畫家　綺麗な奥さんに惡戲をされて――却て喜んで居るかも知れません。――しかし失禮します。

夫人　どうしませう、先生、私……惡戲どころではありません。

畫家　惡戲どころでないと言ふは？（此の時はじめて確と言ふ）

夫人　（激して、やゝ震へながら）後生です。見て下さいまし。貴方に見て頂きたいものがあるんです。（外套の袖を引く、引れる力に、畫家を小流の縁に引戾す）一寸御覽なさいまし。

（鯉を指す、死したる鯉、此の時いまだ寄着の目につかず。）

畫家　おゝ、此は酷い。――此は悲慘た。

夫人　先生、私は、こゝに死んで流れて居ます、此の鯉の、ほんの死際、一息前と同じ身の上でございます。

畫家　（無言。……）

夫人　（間）私には嚴しく追手が掛つて居ります。見附かりますと、いまにも捉へられなければなりませんものですから。――途中でお姿をお見上げ申し、お宿まで慕つて參つて、急の思ひつきで、失禮な事をいたしました。

一生懸命なのです。そして一寸の間に、覺悟をしますつもりで居ります。——目を落して、形をかへて、貴方の奥さまに成つて隠れて居ましても、人出入の激しい旅館では、些とも心が落着きませんから、然うして道に迷つて居ります。何うぞ、御堪忍なすつて下さいまし。……夢にも惡戲ではないのですから。

畫家　いたし方がありますまいな。

夫人　（もの思ひがさに、本意なげに）無理にもお許し下さいましたか。……其の上尚はお言葉に甘えますやうですけれど、お散歩の方へ、……たとひ後へ離れましても、御一所に頂へますと、立派に人目が忍べます。貴方……（弱く媚びて）何うぞ、お連れ下さいましな。

畫家　（きつぱりと）其は迷惑です。

夫人　まあ。——いゝえ、お連れ下さいましても、其の間に、唯（更に鯉を指す）此の姿に成ります覺悟を極めますだけなんでございますもの、

畫家　それは不可ませんな。御事情はどんなであらうと、此の形になつては仕方がありません。

人形使　（つんのめりたるが猛然と面を擡げ）お旦那、もう一杯下せえ。お旦那。

畫家　（此の聲を聞く。敢て心に留めず）私一人としてはこんな姿にお成りなさろだけは堅くお止め申します——失禮をします。（衝と離れて山手に赴く）

夫人　（畫家の姿、槻の樹立にかくれたる時、はら〳〵とあとを追ひ、また後戻りす。見送りつゝ）はかないねえ！（わが聲に、思はず四邊を視ろ。降らぬ雨に傘を開き、身を恥ぢてかくすが如くにして、悄然と、畫家と同じ道、おなじ樹立に姿を消す。）

人形使　お旦那、もう一杯下せえ。

萬屋　ちよッ、困らせるぢやあないか。（つい、と奥へ入る）

人形使　そのかはり、へ、へ、今度はまた月見が出来ただよ。雲がかゝると滿月が忽ちかくれる。（一息に煽切る）あゝ、うーい。……御馳走……（首にかけたる汚き大蝦蟇口より、だらしなく紐を引いてぶら下げたる財布を挟り突錢する）弘法様も月もただよ、錢も遠く金剛を照すたね。えい。

（と立つ。脊高き痩脛、破股引にて、よた〳〵。酒屋は委細構はず、さつさと片づけて店へ引込む。）

えい。（よた〳〵。やがて人形の前までよた〳〵）はッ、鯉御前様、（急に恐入つたる體にて、殆ど土下座なするばかり。間。酔眼を鯉に見向く）やあ、兄弟、浮かばずにまだ居たな。頭が衝へたか、腹が鞘つたか知らねえが、わんぐりと歯形が殘つて、蛆がついては堪らねえ。先刻も見て居りや、野良犬が嗅いで嗅放しで失せを

つた。犬も食はねえとは此の事だ。おのれ禮にもなる奴が、前世の業か、死恥を曝すは不便だ。——俺が葬つて遣るべえ。だが、蛇塚、猫塚、狐塚よ、鯉塚と言へば、これ突流すてはあんめえ。土に埋めるだな、土葬にしべえ。（半ばくされたる鯉の、肥えて大なるを水より引上ぐ。）若者に出でゞ）引導の文句は知らねえ。鱗あるものには祟れ、化けて出て、木戸錢を、うんと取れ。南無。（背負と一所に懐中に捻ち込みたる頭巾に包み、腰に下げ、改つて當る）はッ、鱗族南無。（咽喉に巻いたる古手拭を伸ばして、頬冠す——さながら狡者の如くおのが目をば結ふ。其の心は、美女に對して、慚愧の顔さへ憚るなり。人形使の背を高く引かつぐ。山手の方へ）えい。（よたよた、よた〳〵〳〵）

（夫人、樹立の蔭より、半ば出でゝ此の體を窺ひつゝあり。）

人形使　えい。（よた〳〵）えい。（よた〳〵〳〵）

夫人　（次第に立出で、あとへ引かへし狀にすれ違ふ。何は其の人形使を凝視しつゝ）爺さん、爺さん。

人形使　（丈高く、蒼き面にて、じろりと不氣味に見向く。鷹の如し）

夫人　（次第に、身近く寄る）私は何にも世の中に願はなし、何の望みも叶はないのだから、お前さんの望を叶へて上げよう。寶石も澤山ある。お金も持つて居ます——失禮だけれど、お前さんの望むこと一つだけなら、屹と叶へて上げようと思ふんだよ。望んでおくれな。爺さん叶へさしておくんなさいな。

人形使　（無言のまゝ睨むが如く見詰めつゝ、しばらくして、路傍に朽ちし稻塚の下の古縄を拾ひ、ぶらりと提げ、じりじりと寄る。其體、ぶる〳〵と動く。）

夫人　あゝ、それ。（と退る）

人形使　（ニヤリと笑ふ）

夫人　あと先を見つた。——もう蛇でも構はない。何うするの——何うするのよ。

人形使　（ものいはず、繊手をさしのべて、唯招く。招きつゝ、あとじさりに次第に樹立に入る）

夫人　何うするのさ、何うするのさ。（おなじく次第に、かくて樹立に隠る）

（舞臺少時空し。白き家鴨、五羽ばかり、一列に出でて田の間を漁る。行春の影を象徴するものゝ如し。）

馬士　（樹立より、馬を曳いて、あとを振向きつゝ出づ。馬の背に米俵二俵。奉納。白米。南無大師遍照金剛の札を立つ）あゝ氣味の悪い。眞晝間何事だんべい。いや、はあこげえな時、米が砂利に成るではねえか。（眉毛に唾しつゝ俵を探りて米を嚼む）先づ無事だ。太鼓の音近く聞

ゆ。——弘法様のお庇だんべい。あゝ氣味の惡い——いづれ魔ものだ。あゝ怖恐え。

——廻る——

第二場

場面。——一方やゝ高き丘、花菜の畑と、二三尺なる青麥畠と相連る。丘のへりに山吹の花咲揃へり。下は一面、山懐に深く崩れ込みたる窪地にて、草原。苗樹ばかりの桑、薄く芽ぐみたる枝條に似て參差たり。一方は雜木山、就中、かしの大樹、高きと低き二幹、葉に黒きまで枝とゝもに茂りて、黒雲の湧の如く、かくて花菜の空の明るきに對す。花道をかけて一條、皆、丘と丘との間の細道の趣也。遠景一帶、伊豆の連山。

畫家　（一人、丘の上なる畦に咲ける山吹と、畠の菜の花の間高き處に、靜にポケット、ウヰスキーを傾けつゝあり。——鶯遠く音を入る。二三度鷄の聲。遠音に河鹿鳴く。しばらくして、立ちて、聊かものに驚ける狀す。尙ほ窺ふよしゝて、花と葉の茂に隱る）

夫人　（傘を片手に、片手に繩尻を控へて——登場）

人形使　（猿轡のまゝ蝙蝠傘を横に、縱に十文字に人形を背負ひ、うしろ手に人形の竹を持ちたる手を、其の繩にて縛められつゝ出づ。肩を落し、首を垂れ、居所に悲くものゝ如し。然も醉へる足どり、ふた／＼として先に立ち、山懐の深く窪み入りたる小暗き方に入り來り、さて兩腕を拂けば繩落つ、實はいましめたるにあらず、手にて彌く裝ひたるなり。人形を桑の一本に立掛け、跪いて拜む。かくてやゝ離れたる處にて、口の手拭を解く）御新造様。そりや、約束の通り遣つて下せえ。（足手を硬直し、突伸べ、ぐにや／＼と俯向けに草に俯す）

夫人　眞個なの、爺さん。

人形使　やあ、聽にこんな眞似が出來るもので。それ、遣附けて下せえまし。

夫人　眞個に打つの？

人形使　血の出るまで打つて下せえ。息の止るまでもお願えだよ。

夫人　眞個かい、眞個に打つのかね。

人形使　何とも最う堪らねえ、待兼ねますだ。

夫人　……あをで頭請られたつて、それまでの事だわね。——では、約束をしたものだから、眞個に打つてよ。我慢をおし。（雨傘にて三つ四つ。と續け狀に五つ六つ）

人形使　堪へねえ、些とも堪へねえ。

夫人　（鞭打ちつゝ）これでは——これでは——

人形使　駄目だねえ。（寢ながら捻向く）これでもか、こ

れでもか、と遣つて下せえ。

夫人　これでも、あの、これでも。

人形使　そんな事では、から駄目だ。待たつせえまし。（倚子の袖なし、よごれくさりし印半纏とゝもに脱ぎ、痩せたる膚背を露出す。よろりと立つて樹に其の身をうしろむきに縋りつく。振り向きて眼を瞬りながら）傘を引被いて、骨と精になせえまし。それでは、婆娑々々するばかりで、些とも肉へ應へねえだ。

夫人　（ため息とゝもに）あゝ。

人形使　それでだの、打つものを、此の酔拂ひの乞食爺だと思つては、些とも力が入らねえだ。――御新造様が、おのれと思ふ、憎いものが世にあるべい。姑か、舅か、小姑か、他人か、親類、友だちか。何でも構ふ事はねえだの。

夫人　あゝ。

人形使　其の憎い奴を打つと思つて、思ふさま引擲くだ。

可いか、可いかの。

夫人　あゝ。

人形使　それ、確りさつせえ。

夫人　あゝ。あいよ。（興奮しつゝ、びり／＼と傘を破く。ために、髪つき、襟さき顔など血汐浸む――取直す）――

――畜生――畜生――畜生――畜生――

人形使　うゝむ。（痛に呻く）うゝむ、然うだ、其處だ。些と、へい、應へるぞ。うゝむ、然うだ。まだ／＼。

夫人　此でもかい。此でもかい、畜生。

人形使　そ、そんな、屁べたや、土性骨ばかりでは埒明かねえ、頭も耳も構はずと打叩くんだ。

夫人　畜生、畜生、畜生。（自分を制せず、魔に魅入られたるものゝ如く、躍りかゝり、飛び上り、髪亂れ、色あをざむ。打つて打つて打ちのめしつゝ、息を切る）あゝ切ない、苦しい。苦しい、切ない。

人形使　うゝむ溜らねえ、苦しいだ、可い鹽梅だ。堪らねえ、いゝ氣味だ。

畫家　（土手を傳はつて窪地に下りる。見かず、しかし急ぎ寄り、遮り止む）貴女、――奥さん。

夫人　あら、先生。（瞳を瞬くとゝもに、小腕しびれ、足なえて、崩るゝ如く膝を落し、半ば失心す）

畫家　（肩を抱く）ウヰスキーです――淸涼劑に――一體これは何うした事です。

人形使　（びくり／＼と蠢く）

畫家　（且つ此を見つゝ）何うした事情だか知りません。けれども、餘り極端な事をしては不可い。

夫人　（吻と息して）私、何うしたんでございませう、人間界にあるまじき、淺ましい事をお目に掛けて、私何う

したら可いでせうねえ、（ヒステリックに泣く）

畫家　（止むことを得ず、手をさすり背筋を撫づ）　氣をお鎭めなさい。

人形使　（血だらけの唇を、半纏にて巻き、蹲ひつゝ草に手をつく）はい、……此は、えゝゝ旦那樣でござりますか、はい。

畫家　此の奥さんの……別に、何と言ふではないが、一寸知合だ。

人形使　はい、其のお知合の旦那樣に、爺から申上げます。はい、えゝ、くどい事は、お聞きづらうござりますで。……早い處が、はい、此の八ッ目鰻の生干を見たやうなぬらりと黒い、乾からびた老耄も、若い時が一度ござりまして、その頃に、はい、太い罪障を造つたのでござります。女子の事でござりましての。はい、ものに譬へやうもござりませぬ。欄間にござる天女を、蛇が捲いたやうな、いや、奥庭の池の鯉を、蟾蜍が食ひ破りましたさうな儀で。……生命も血も吸ひました。――一旦夢がさめますると、其の罪の可恐さ。身の置所もござりませぬで。……消えるまで、失せるまでと、雨露に命を打たせて居りますうちに――四國遍路で逢ひました廻國の御出家――弘法樣かと存ぜられます――御坊樣から、不思議に讓られたでござります。竹操りの此の人形も、美しい御婦人でござりますで、爺が、この酒を喰ひます節も、嘸ぞはや可厭であらうと思ひますで、遠くへお離し申して置きます。擔いで歸ります節も、酒臭い息が掛らうかと、口に手拭を噛みます仕誼で。……美しいお女中樣は、爺の目に、神も同然にをがまれます。それにつけても、はい、昔の罪が思はれます。せめて、朝に晩に、此の身體を折檻されて、拷問苛責の苦を受けましたら、何ほどかの罪滅しに成りませうと、それも、はい、後の世の地獄は恐れませぬ、現世の心の苦しみが堪へられませぬで、不斷常住、其の事ばかり望んでは居りますだが、木賃宿の同宿や、堂宮の縁下に共臥りをします、婆々嬶々なら何時でも打ちも蹴りもしてくれませうが、それでは念が屆きませぬ。はて乞食が不心得したゝめに、お生命までも、おうしなひに成らつせえましたのは、美しいお方でござりましたもの。矢張り、美しいお方の苛責でなうては、血にも肉にも、些とも響かぬでござります。――又此の希望が、幽靈や怨念の、念願と同じ事でござりましての、此の面一つを出したばかりで大概の方は遁げますで。……よく〳〵の行倫智識か、豪傑な御仁でないと、聞いてさへ下さりませぬ。――此の老耄が生れまして、六十九年、此の願望を起しましてから、四十一年目の今月今日。――たつた今、其の美しい奥方樣が、通り

かゝりの乞食を呼んで、願掛は一つ、一ヶ條何なりとも叶へて遣らうとおつしやります。――未熟なれども、家業がら、佛も出せば鬼も出す、魔ものを使ふ顔色で、威しては見ましたが、此の幽靈にも怨念にも、恐れなされませぬお覺悟を見抜きまして、さらば、お叶へ下されまし、と豫ての念願を申出でまして、磔柱の罪人が引廻しの狀をさせて頂き、路傍ながら隱場所の、此の山崩れの崖下へ參りまして、お有難い責折檻、苛責を頂いた儀でござります。……旦那樣。――もし、お美しい奥方樣。おありがたうござります。おありがたうござります。

夫人 (はじめて平静に) お前さん、痛みはしないかい。

人形使 何の貴女樣、此の老骨は、醉つた頭をそより〳〵と春風に吹かれますも、觀音樣に柳の枝から甘露を含めて頂きますも、同じ嬉しさでござります。……はたで見ます唯今の、美女で以て夜叉羅刹のやうな奥方樣のお姿は、老耄の目には天人、女神を其のまゝに、尊く美しく拜まれました。はい、此の老骨のござりまするあひだは、骨も筋も柔かに、血も二十代に若返つて、樂しく、嬉しく、日を送るでござりませう。

畫家 (且つ傾き、且つ聞きつゝ、冷靜に金口煙草を燻らす) お爺さん、煙草を飲まないかね。

人形使 いやもう、酒が、あふ桶の水なれば、煙草は、亡者の線香でござります。

畫家 嗅みたまへ。(眞珠の飾のついたる小箱のまゝ、銜と出す)

人形使 はッ此は――弘法樣の獨鈷のやうに輝きます。勿體ない。(差出して、畫家の金口から吸ひつける) 罰の當つた――勿體ない。此の葉の露に甦りまして、ふはふはと……極樂の雲へ、舞ひませう。

夫人 爺さん、お待ちよ。……打たれたばかりで、煙草に可いのかい。

人形使 たとひ桂川が逆に流れましても、此に嘘はござりませぬ。

夫人 何か私に望んでおくれ。何うも私は氣が濟まない。

人形使 此の上の望と申せば、まだ一度も、もう三度も、御折檻、御打擲を願ひたいばかりでござります。

夫人 そして、それから。

人形使 はあ、其の上の願と申せば、此の身體が粉々に成りますまで、朝に晩に、毎日毎夜、お美しい奥方樣の折檻をうけたいばかりでござります。――はや醉も覺めました。もう世迷言も申しますまい。――晝は遠慮がござりますが、眞夜中は、狸、貉、化ものも同然に、とがめ人のござりませぬ、獨鈷の湯へ浸ります嬉しさに、たつ野の木賃に巣をくつて、しばらく此の山道を修善寺へ通

ひましたが――今日かぎり下田街道を何處へなと流れます。雲と水と申したけれど、天の川と溝の流れと分れましては、もはやお姿は影も映りますまい。お二方樣とも、萬代お榮えなされまし。――靜御前樣、へい〳〵、お供をいたします。

夫人　お待ちなさい、爺さん。（決意を示し、衣紋を正す）私がお前と、其の溝川へ流れ込んで、十年も百年も、お前の其の朝晩の望みを叶へて上げませう。

人形使　やゝや。（聲に出さず、顏色のみ）

夫人　先生、――私は家出をいたしました。餘所の家内でございます。連戻されるほどでしたら、何處の隅にも入れませうが、此のまゝでは身の置處がありません。――溝川に死んだ鰻の、あの淺ましさを見ますにつけ、死んだ身體の醜さは、然う成るものと存じましても、矢張り毒を飲むか、身を投げるか、自殺を覺悟して居ました。ただお煩さゝの餘りでも、「こんな姿に成るだけは、堅く止める。」と、おつしやいました。……あの先刻のお一言で、私は死ぬのだけは止めましてございます。

先生、――私は、唯今では、名ばかりの貧乏華族、小絲川の家内でございますが。

畫家　あゝ子爵でおいでなさる

夫人　何ですか、もう……――あの、貴方、……前は、貴方が、西洋からお歸り時分、よく、お夥間と御贔屓を遊ばして、入らしつて下さいました。日本橋の……（うつとりと更に畫家の顏を見る）――お忘れでございますか、お料理の、ゆかりの娘の、縫ですわ。

畫家　あゝ、然うですか。お縫さん……お妹さんの方ですね。綺麗なお孃さんがおいでなさると言ふ事を、時々風說に聞きました。

夫人　（はかなさうに）えゝ、先生は、寒い時寒い、と言ふほど以上には、お耳には留まらなかつたでございませう。私は貴方に見られますのが恥かしくツて、貴方のお座敷ばつかりは、お敷居越にも伺つた事はありませんが、蔭ではお座敷においで遊ばす時の、先生のお言葉は、一つとして聞き洩らした事はないくらゐでございます。奥座敷にお見えの時は、天井の上に俯向けに成つて聞きます。裏座敷においでの時は、小庭を中に、湯どのに入つて、衣服を着てはかりは居られませんから、裸體で壁に附着きました。其のほか、小座敷でも廣室でも、我家の暗をかくれしのぶ身體はまるで鼠のやうで、心は貴方の光のまはりに蛾のやうでした。ですが、苦勞人の女中にも、わけ知の姉たちにも、氣ぶりにも悟られた事はありません。身ぶり素ぶりに出さないのが、眞個の我が身體で、口へ出して言へないのが、眞實の心ですわ。唯恥

かしいのが戀ですよ。——ですがもう其の時分から、ヒステリーではないのか知ら、少し氣が變だと言はれました。……貴方、お察し下さいまし。……私は全く氣が變に成りました。貴方が御結婚を遊ばして、あとまる一年、唯湧くものは淚ばかり、うるさく伸びるものは髮ばかり。座敷牢ではありませんが、附添たちの看護の中に、藻拔のやうに寢て居ました。死にもしないで、じれつたい。……消えもしないで、淺ましい、死なずに生きて居たんですよ。

——我が身に返りました時、年紀も二十を三つ越す。廣い家を一杯に我儘をさして可愛がつてくれました母親が亡くなりました。盲目の愛がなくなりますと、明い世間が暗く成ります。いまゝで我まゝが過ぎましたので、其の上の我がまゝは出來ない義理に成りました。それでも、まだ我がまゝで——兄姉たちや、親類が、確な商人、もの堅い勤人と、見立てゝくれました緣談を斷つて、唯今の家へ參りました。

姑が一人、小姑が、出戾と二人、女です——夫に事ふる道も、第一、家風だ、と言つて、水も私が、郊外の住居ですから、釣瓶から汲まされます。野菜も切ります。……夜はお姑のおともをして、風呂敷でお惣菜の買ものにも出ますんです。——其を厭ふものですか。——日本橋の實家からは每日のおやつと晩だけの御馳走は、重箱と盤臺で、其の日其の日に、男衆が遠くを自轉車で運ぶんです。が、さし身の角が寢たと言つては、料理番をけなしつけ、玉子燒の形が崩れたと言つては、客の食べ餘を無禮だと、お姑に、重箱を足蹴にされた事もあります。はじめは、我身の不束ばかりと、怨めしいも、口惜いも、唯謹で居ましたが、一年二年と經ちますうちに、よく其の心が解りました。——夫をはじめに——私の身につきました……實家で預ります財產に、目をつけて居るのです。いまは月々の其の利分で、……然う申しては如何ですが、內中の臺所だけは持つて居るのでございますけれど、其の位では不足なのです。——それ姪が見合をする、從妹が嫁に行くと言つて、私の晴着、櫛笄は、其のたびに無く成ります。盆くれのつかひもの、お交際の義理ごとに、友染も白地も、羽二重、縮緬、反ものは殘らず拂はれます。實家へは默つて居りますけれど、簞笥も大抵空なんです。——…………

……………………。それで主人は、詩をつくり、歌を讀み、脚本などを書いて投書をするのが仕事です。

畫家　其は弱りましたな。けれど、末のお見込はありませう。

夫人　いゝえ、其の末の見込が、私が財產を持込みません

と、いびり出されるばかりなんです。咳をしたと言ては、ひそ〳〵、頭を痛がると言つては、ひそ〳〵。姑たちが額を集め、芝居や、活動によくある筋の、あの肺病だから家のためにほかへられない、と言ふ相談をするのです。——夫はたゞ「辛抱を、辛抱を」と言ふんですが、其の辛抱をしきれないうち、私は死んで了ひませう。つい此の間もかぜを引いて三日寢ました。水をのみに行きます廊下で、「今度などが汐時ぢや。……養生と言つて實家へ歸したら。」姑たちが話すのを、ふいに痛い胸に聞いたのです。

畫家　それは薄情だ。

夫人　薄情ぐらゐで濟むものですか。——私は口惜さにかぜが拔けて、あらためて夫に言つたんです。「喧嘩をしても實家から財産を持つて來ます。其のかはり唯一度で可うござんす。お姑さんを貴方の手で、せめて部屋の外へ突出して、一人の小姑の髻を摑んで、一人の小姑の横そつぽうを、ぴしやりと一つお打ちなさい」と……

人形使　（じり〳〵乘出す）其處だ〳〵、其の事だ。

畫家　はゝゝ、痛快ですな。しかし穩でない。

夫人　（激怒したるが、忘れたやうに微笑む）穩でありませんか。

畫家　先づ。……其處で。

夫人　きさまは鬼だ、と夫が申すと、いきなり私が、座敷の外へ突飛ばされ、倒れる處を髻をつかまれ、横そつぱうを打たれました。——其の晩——昨晩——其の晩の、夜は却つて目につきますから、昨日家出をしたんです。先生……金魚か、植木鉢の草になつて、おとなしくして居れば、實家でも、親類でも、身一つは引取つてくれませう。私は意地です、其は厭です。……此の上は死ぬほかには、行き處のない身體を、其の行きどころを見着けました。（決然として向直る）此のをぢさんと一所に行きます。——此の人は、婦人を虐げた罪を知つて、朝に晩に笞の折檻を受けたいのです。一つは世界の女にかはつて、私が其の怨を晴らしませう。——此の人は、靜御前の人形を、うつくしい人を禮拜します。私は女に生れました、ほこりと果報を、此の人によつて享けませう。——此の人は、死んだ鯉の醜い死骸を拾ひました。……私は弱い身體の行倒れに成つた肉を、此の人に拾はれたいと存じます。

畫家　（或は頷き、又打傾き、やゝ沈思す）奧さん、更めて、お縫さん。

夫人　（うれしさうに、あどけなく笑ふ）はアい。

畫家　貴女の其のお覺悟は、他にかへやうはないのですか。

夫人　はい、此のまゝ、貴方、先生が手をひいて、旅館へ

お歸り下さる外には――

人形使　然うだ、然うだ、其の事だ。

畫家　（再び沈默す）

夫人　（すり寄る）先生。

畫家　貴女、それは御病氣だ。病氣です。けれども私は醫師でない、斷言は出來ません。――貴女のお覺悟はよくありません。しかし、私は人間の道について、よく解つて居りません。何ともお敎へは申されない。それから私がお手を取る事です。是非善惡は、さて置いて、それは今私に決心が着きかねます。卑怯に囘避するのではありません。私は自分の仕事が忙しい。いま分別をして居る餘裕が。――人間の小さいために、お恥かしいが出來ないのです。しかし一月、半月、しばらくお待ち下さるなら、其の間に、また、覺悟をして見ませう。

夫人　先生、私は一晩かくれますにさへ、顏も形も變へて居ます。運命は迫つて居ます。

畫家　御尤です。――（顏を凝視さるゝに堪へざるものの如く、目を人形使に返す）爺さん、乾とお供をするかね。

人形使　犬になつて――

（遂と夫人を抱き起し、其の腰の下へ四這ひに入る背に、夫人おのづから腰を掛けつ、倚倒れむとする手を畫家たすけ支ふ。）

馬に成つてお供をするだよ。

畫家　爺さん、――何事も御隨意に。

夫人　貴方、そのお持ち遊ばすお酒を下さい。――そして媒妁人をして下さい。

畫家　（無言にて、壜を投げ、且つ酌する）

夫人　（ウイスキーを一煽りに、吻と息す）爺さん、肴をなさいよ。

人形使　口上擬に、はい小謡の眞似でもやりますか。

夫人　いゝえ、其の腐つた鯉を、こゝへお出しな。

人形使　や。

夫人　お出しなね。刃ものはないの。

人形使　野道、山道、野宿だで、犬おどしは持つとりますだ。（腰がけのどんぶりより、錆びたるナイフを捻出す）

畫家　あゝ、奧さん。

夫人　此の人と一所に行くのです。――此のくらゐなものを食べられなくては。……………

人形使　やあ、面白い。俺も食ふべい。

畫家　（衝と立ちて面を背く）

――南無大師遍照金剛。――南無大師遍照金剛――遠くに多人數の人聲。童男童女の稚兒二人のみ先づ練りつゝ出づ――

稚兒一　（いたいけに）南無大師遍照金剛、…………
稚兒二　（なほいたいけに）南無大師遍照金剛。…………

（はじめ二人。紫の切のさげ髪と、白丈長の稚髷とにて、靜に練りいで、やがて人形使、夫人、畫家たちを怪むが如く、ばた〳〵と驅け拔けて、花道の中ばに急ぐ。畫家と夫人と二人、言ひ合せたる如く、ひとしくおなじ向きに立つ。人形使も又眞似るが如く、ひとしくともに手まねき、ひとしくともにさしまねく、此の光景怪しく凄し。妖氣おのづから場に充つ。稚兒二人引戻さる。）

畫家　いゝ兒だ。一寸賴まれておくれ。
夫人　可愛い、お稚兒さんね。
畫家　（外套を脫ぎ、草に敷く）奥さん、爺さんと並んでお敷きなさい。
夫人　まあ、勿體ない。
畫家　否、その位な事は何でもありません。が貴女の病氣で、私も病氣に成つたかも知れません。——さあ、二人でお酌をしてあげておくれ。

（夫人、人形使と並び坐す。稚兒二人恰も鬼に役せらるゝものゝ如く、かはる〴〵酌をなす。靜寂、雲くらし。鶯はせはしく鳴く。笙篳篥幽に聞ゆ。——南無大師遍照金剛——次第に聲近づき、やがて村の老若男女十四五人、くりかへし唱へつゝ來る。）

村の人一　えゝ、まあ、御身たちやあ何をしとるだ。
村の人二　大師樣のおつかひ姫だ思ふで、故と遠く離れてるだに。
村の人三　うしろから拜んで歩行くだに——いたづらをしては成んねえ。
村の人四五六　（口々に）來うよ〳〵。（こんどは稚兒を眞中に）南無大師遍照金剛、…………

（かくて、幕に入る。）

夫人　（外套をとり、塵を拂ひ、畫家にきせかく）唯一度ありましたわね——お覺はありますまい。醉つて在らして、手をお添へに成りました。此の手に、——もう一度、今生の思出に、もう一度、本望です。（草に手をつく）貴方、おなごり惜う存じます。
畫家　私こそ。（嘿然とする）
夫人　爺さん、さあ、行かう。
人形使　えゝ、えゝ。然やうなら旦那樣。
夫人　行かうよ。

（二人行きかゝる。本雨。）

畫家　（つか〳〵と出で、雨傘を開き、二人にさしかけ）お持ちなさい。
夫人　貴方は。

書家　雨くらゐは何の障もありません。

夫人　お志頂戴します。（傘を取る時）えゝ、こんなちや

激しく跣足に成り、片褄を引上ぐ、緋の紋縮緬の長襦袢艶絶なり。爺の手を、いと曳く。）

人形使　（よた〳〵と成つて續きつゝ）南無大師遍照金剛。

夫人　（花道の半ばにして振かへる）先生。

書家　（やゝ、あとに續き見送る）

夫人　世間へ、よろしく。……然やうなら、……

書家　御機嫌よう。

夫人　（人形使の繊手を、脇に搔込むばかりにして、先に、番傘をかざして、揚幕へ――）

書家　（佇み立つ。――間。――人形使の聲揚幕の内より響く）

――南無大師遍照金剛――

（夫人の聲も、又きこゆ。）

――南無大師遍照金剛――

書家　うむ、塵界かな、此は、はてな、夢か、いや現實だ。――（夫人の駒下駄を視る）えゝ、おれの身も、おれの名も棄てようか。（夫人の駒下駄を手にす。苦悶の色を顯しつゝ）いや、仕事がある。（其の駒下駄を投棄つ）

（雨の音留む。）

（福地山修善寺の暮六ツの鐘、鳴る。）

――幕――

解說

谷崎潤一郎篇

渾大防小平

小引

敢て、谷崎氏と云はず、凡そ第一流を以て自他共に許す作家については自ら定評があつて、所謂文壇的常識となり、初歩の文藝愛好者にとつては甚だ都合のいゝ測度計の役目を勤めてゐる。從つて、そんなことを今更改めて述べ立てる必要はない。が、たつた一言だけ、極めて少數な讀者に對する親切として文藝史家の口眞似をさせて貰ふ。

「刺靑」「少年」「幇間」「麒麟」等の初期の作から、「赤い屋根」「痴人の愛」「蘿洞先生」の近作に到るまで、氏の藝術の中に現はれた著しい特色は、そのマゾヒズムである。

　異常性慾を取扱つて成功した作家は他にも多くあるかも知れない。室生犀星氏の初期の作中にもサヂズムの痕迹を認めることが出來るなどは、不勉強で、寡聞な筆者にも氣がついてゐる。然し、氏ぐらゐ、大膽に、反覆飽くなくこれに題材を求めてゐる作家は日本にはなし、また、その方面では最初の人である。但しこの點にのみ氏の作品を價値づけたがる一部の讀者の存在することは殘念である。

　專門の病理學者、心理學者にしては勿論、さならずとも人間の性情にマゾヒズム、サヂズム、その他變質的な事實の存在することを知つてゐる人々は、無數であるはずだ。然し、氏の作品がその事實の存在に一般の注意を向けたことは爭はれない。氏の作の獨自さは時代の風潮を背景に發展して今日に及んでゐる　氏の作の基調となるべき特異の神經、感能について、或は、唯美主義、惡魔主義などの肩書をつけて品隲される藝術至上主義的な氏の藝術の本質についての細かい點は、到底與へられた紙面と、時日とを以てしては述べられないからすべてを割愛するが、自然主義文學がその擡頭の日より約十ヶ年を閱して行詰りを生じその平板單調に飽きられた所へ忽然として現はれた氏の異色ある作品に對し、讀書界は、悉く駭目し、空前の喝采をこの紅顏の新進作家に送つた。氏の文壇への進出ぶりのどんなに目覺しかつたかは、年少の讀者には恐らく想像出來まいと思はれるものがあつた。その後の白樺派諸作家の文壇進出ぶりの華かさと雖も、氏の進出ぶりの前には一籌を輸さなければならないかと思ふ。この卷に收められた諸作も多くは氏の文壇的位置を確立させるに役立ち、發表當時善惡共に問題となつた作であることだけを述べて置く。

「戀を知る頃」

春機發動と共に現はれた少年の被虐嗜好的淫慾に動因をなしてゐる。當時中學生だつた筆者などのこの作から得た感銘は今でも鮮に想起することが出來る。當時讀書階級を駭目させた作。作者の唯美主義的傾向も濃厚に滲み出てゐる。

ウエデキントの「春のめざめ」が西歐諸國の教育家に所謂性教育の必要を痛感させ、その研究に指を染めさせる動機となつたやうに、この作も、もつとさうした方面で識者の注意を惹いていゝ筈であるが、寡聞なる筆者はこの作が日本の教育界などで一向さういふ機縁になり得なかつたことを怪しんでゐる。教育家などの讀書の範圍が極めて狹少で前代の傳統のまゝ、小說は卽ち小人の說で士君子の手にすべからざるものといふ見當違ひな料簡が未だに幅をきかしてゐることを考へて寒心に堪へない。これは脫線。素より其處に重心を置きすぎることはこの作を正しく味識する所以ではないが。

（發表大正二年七月）

「十五夜物語」

戀愛に殉じた若い夫婦が、その戀愛の總決算に、妻の身賣りといふ悲劇を醸出す。そして三年の間、純粹な感情で再度その戀愛感情を取戻さうとしたその喜びの日に、更に大きな最後悲劇に到達する。

「二人の戀をつなぐものは、魂と魂ぢやと信じてゐたのに、實は屍骸と屍骸ばかりだつたのぢや。（下略）」

「魂と魂との、變らぬ戀を樂しまうと仰つしやるなら、この忌はしい屍を捨てゝしまふより外によい思案はござんせぬ。醜い影を此世に殘して、あの世へ行けばお前も私も、きつと淸淨な人間に生れ變るでござんせう」

そして、彼等は情死を遂げるのだ。單なる佛教的未來觀のほかにいと高きものへの憧憬が示されてゐる。「春の海邊」「愛すればこそ」の「澄子」などを通じて作者の道德觀の片鱗が覗はれる。谷崎氏を氏の作品中の人物と全然同一視してゐる讀書子も世には尠くないかに見受ける。唯一の自叙傳的作品と氏の云ふ「異端者の悲しみ」などをとかくの證據にして云々するのも一部の常識になつてゐる。作品の底を流れる深い作者の心境に徹して意外なものを感ずる場合がありはしまいか。それはともかく、さうした定評を有する氏にこの種の作品のあることはおもしろい。

（發表大正六年九月）

「春の海邊」

明るく朗かな感のする完璧の作。前述に盡きてゐる。

「法成寺物語」

惡魔主義、唯美主義等の銘を打たれた作者のさうした一面の傾向の最も端的に顯著に、現はれてゐる作。從つて作者の藝術觀を了解するに便利な作だといふことが云へる。

定雲（上略）いみじき聖大德ならいざ知らず、現世に生きとし生ける者は、まことの佛の御顏を拜まう筈はござりませぬ。たゞあなたのやうな、すぐれて美しい御相を、菩薩の假形し給ふものと、崇め信ずるのみでござります。若し世の中に美しい人が居らずば、佛を信ずるよすがとてはござりませぬ。

四の御方。御佛の姿は美しいものと、其方はどうして知つて居るのぢや。

定雲　人間の苦患を救ふものは、美しい姿より外にござりませぬ。如來に紫磨金の肌がなくば、菩薩に瓔珞の屑がなくば慈悲の大海がどのやうに廣く、弘誓の光がどのやうに尊くとも、などて佛を信ずる心が起りませう。かくては畢竟、穢土も淨土も同じことでござりまする。それ故に私は眼に見えぬ御佛よりも、眼に見ゆるあなた樣のお姿に穢土の苦しみを免れるのでござります。

かうした主張は作中どの頁にも繰返されてゐる

「恐怖時代」

明治大正文學全集三十五卷卷末解說に作者自ら下の如くに云つてゐる。

此の戯曲は實はむしろト書の方がよかつたのである。ト書きの中に作者は血みどろな幻想を描いた。然るに此れを載せた「中央公論」が發賣禁止になり、その後今のやうに改作したので、長いト書きが殆ど削り取られてしまつた。此れでは氣の抜けたビールのやうなものである。

筆者は當時發賣の禁止された中央公論によつてこの作の元の姿を見た。何分にも記憶がうすれて何とも云へないが、自然主義に飽きた讀書階級が、この刺戟の強い作品の惡の讃美に駭目した事實だけは憶えてゐる、この作に對する褒貶毀譽はやかましかつたが、とにかく、讀書界の興味の中心となり、氏の惡魔主義的傾向をはつきり代表させて了つた。草双紙の持つ色と匂、讀者を最後の大詰まですつかり擽き絡せて了ふ非凡な構想力が、非常な喝采を呼んだのである。

「お國と五平」

池田友之丞の特異な性格が中心になつてゐる。作者の作品の中にこの性格は實にいろ／＼に姿を變へて出現してゐる。作者にとつては稍ゝ類型的な性格ながら、この戯曲の

持つてゐる詩がさうした缺點を抑し包んで渾然とした味に到らせてゐる。

（發表大正十一年、新小說）

「本牧夜話」

大正十一年の交作者は横濱本牧十二天に假寓してゐた。その隣家にその方面ではかなり有名なキヨホテルがあり、作者の家から其處での私娼の生活がよく見えたさうである。（氏の作「九月一日以後のこと」昭和二年正月改造所載によると）恐らくはさうした機緣が作者にこの作をなさせたのであらう。一九××年代の横濱を背景とした世相描寫であると同時に、作中人物の個々の人物の性格の躍如たること、作者の寫實的作品の中でも「愛すればこそ」「愛なき人々」などと共に傑作を以て數へられるもの丶一つである。

（發表大正十一年、改造）

「無明と愛染」

これに就いても作者は明治大正文學全集卷末解說で

此の戲曲は世評の如く第二幕で失敗してゐる。しかし第一幕が非常に會心の出來榮えなので、此のまゝにしてしまふのは餘りに惜しい。これも折があつたらば筆を加へて完璧な作品にしたいものである

と云つてゐる。全くその通りで、十三年正月改造に第一幕が發表された時は非常な好評だつたが、三月に同じ誌上に第二幕の現はれた時は明かに失望で酬ゐられた。加筆完成されることを望む。

（發表大正十三年一月）

里見弴篇

小引

作者が白樺派の作家として、初めて文壇的存在を認められた時は、まだほんの弱冠といつていゝ年輩だつた「善心惡心」が中央公論の請によつて執筆發表され、「俄あれ」「恐しき結婚」その他出造ものとも總稱すべきいくつかの珠玉の如き好短篇小說が、作者今日の文壇的位置の牢固たる基礎を形作ると同時に、異常なる心理解剖作家といふ折紙がつき、里見弴の名は直ちに心理解剖作家の聯想を伴ふまでになつた。

これは、つゞまるところ、作者の豐な天稟によつて來る犀利尖銳な人間心理の洞察が正に然あるべく評價されたので、何の不思議はない。然かくこの作者の洞察力は鋭く、

正しく對象に働きかけて行くので、單に小說の場合ばかりでなく戲曲に於いても亦同樣である。

此處で讀者の注意に訴へたいことは、この作者の戲曲に對する見解乃至態度が一般劇作家と少し違ふ點である。

それは、作者の戲曲に於ける「ト書き」の位置に就いて說明すれば簡單に理會出來ると思ふ。

戲曲といふものゝ本質から云つて、「ト書き」がどんな使命をもつか、こんなことは、言を俟つまでもないほどはつきりした問題である。從つて、天分のすぐれた藝術家の「ト書き」に於ける注意は、その臺詞と同じ重要さをもつて疎かならず工風創作され、同時に、これを讀む場合にも、上演された場合と別趣の期待せざる効果を生ずることも亦自明の理である。然るに何時、どういふ機會にさうなつたか、日本の現代戲曲のうちの或るものは、明かに「讀む脚本」として別樣の位置を强要するに到つた。

この點について作者の神經は鋭敏に働き、小說と戲曲との本質上の相違に基いて、その認識を深め、頑固に自家の見解に立つて戲曲の筆を染めてゐる。

筆者は作者の戲曲集「姑心」(大正十五年新潮社刊行)の跋について熱心なる讀者の繙讀を俟つのであるが、便宜上要點を摘んで、作者の態度を語り讀者の參考に供したい。(これは、大正十年六月、作者の處女戲曲「新樹」が雜誌「人間」に掲載され、次での上演に當つての斷書として同じ作品に附記されたもの、感想小品集「朱き机に凭りて」の中にも採錄されてゐる。)

作者の云ふ所を要約すれば、――

小說は書き上げた時既にその仕事は完成し、その價値は何物によつても增減はしない。ところが、脚本の場合だとさう行かない。脚本は、ある一つの無形の「芝居」に對する設計書である。脚本は所謂綜合藝術である芝居の重要な要素で、從つて上演されて初めて完成される。そこで「讀む脚本」といふものについて一應考へる必要が生じるが、それの發生は、芝居の愛好家や研究家がある一つの芝居の完成するまでの過程について、各自の研究心或は好奇心を滿足させる目的でその公開を要求することにより一般讀書子の眼にふれるに到つたので、芝居といふものゝ發生と同時に單に讀むことのためにかういふものが存在したのではないと思ふ。

さて、「芝居」には役者の演技にまたなければ完全に表現出來ない部分のあることを考慮に入れて置かなければならない。從つて作家は、豫め、舞臺的効果を考へて筆をとらねばならないから、作中の人物の言葉として、作家がどんないゝ臺詞を考へついたとしても小說の場合の如く直ちにこれを言葉として採用はできない、言葉よりも動作として

より効果的である場合はどんな名臺詞でも弊履の如く捨て去つて、その代り乾燥無味な「ト書き」を其處に差挾む度量が肝要だ。功を役者に讓り、作家は緣の下の力持になる心がけが要る。この心がけのない作家の作品が屢〻舞臺上に、役者と作者との功名爭ひを演じ、芝居をして虻蜂とらずに終らしめる。自分は新しい芝居の舞臺で度々さういふ場合に出會つてゐる。斯ういふ心構で書く自分の脚本が讀んだゞけで、期待し得る効果の全部を讀者に感ぜしめ得ないのは當然である。但し、現今の劇作家の多くの場合やつてゐる無形の劇場、無形の役者のために用意される態の脚本が無意義とは決して思はない。否、今日の劇場、今日の役者、今日の興行方針を知れば知るほど、志の堅い作家なら反對に上演を意圖しないで製作するだらうことを至當と考へる。此處でいふ上演を意圖しないでといふことは、現在ある所の特定な劇場への上演を目的としないといふ意味なことは斷るまでもない。

以上で、作者の戯曲に對する態度は略〻想見出來るはずである。作者は脚本を飽くまで、大道具師の道具帳、繪圖面と本質に於て同じものと考へ、內輪の手控へとし、讀者の要望によつて示しはしても、それを以て直ちに讀者の喝采を期待すべきでない。そこで「ト書き」の如きも極端に云へば役者の仕草に對する指定で、その指定通りにさへやれば、役者の巧拙は無論勘定に入れるとして、まづければ拙いなりにとにかく、其處に豫想されたある効果を產み出す。「ト書き」はそれだけの目的で取扱ふべきで、「ト書き」までも一般讀者を當て込むやうな調子に書いて、「讀む脚本(レーゼ・ドラマ)」などゝ納まつてゐるのは卑怯だと主張してゐる。

從つて、作者の戯曲のうちのあるものが結果として、文學的效果を十二分に上げてゐることは、別問題として、「たのむ」或は「正直直次郎」「正體」の如き、主要な部分が對話によらずして詳密な「ト書き」によつて運ばれてゐる事實に注意を向けなければならない。

そこで忠實なる讀者は先づ「ト書き」によつて想像の舞臺を頭の中に拵へ「ト書き」の示す動きを、自身登場人物の心持で、丁寧に描き出しながら讀み進んで行くだけの用意を持たなければならない。

「知慾煩惱」

妻の不貞を知つた男の、妻を死に到らせるまでの心理の最高頂に置ける動向を素因にしてゐる。

愛慾の葛藤、三角關係の諸相は、作者の好んで取扱ふ材料で、この卷に收められたもののみでも五篇ある。

愛する者に背かれ、欺かれた者の複雜さ、一圖に事の眞相が知りたく、知つて見ると、知らぬ前より一層煩悶が大

きく、對手が許せなくなる、その消耗的な動きを中心の一點にぎゆうと摑んで、僅かに一場の情景に壓搾し、實感の確さに考へ深めてゐる好箇の一幕物。

（發表大正十三年九月、演劇新潮）

「愛憎不二」

「知慾煩惱」の姉妹篇。

餘談でもあるし、あまりに啓蒙的な說明になつて恐縮だが、筆者が母校國學院大學に現代日本文學を講じて、文學初步の學生から屢〻質問を受ける所から、書くのだが、武者小路氏が人道主義作家であることは首肯される。里見氏がどうして、何處が、人道派なのか。これは、明かに愚問に屬する。基督や釋迦が出てくるから人道的。讀者、娼婦が出れば非人道的。まさかさうでもあるまいが、――さういふ入門者のために、この作者の人道主義的素質――氣魄、所謂まごゝろの端的なる表れとしてこの戲曲の最後に出て來る一句を拾ひ上げて置く。

……碌な愛が出來ない奴には、碌な憎みさへ出來やアがらない！　えゝ齒痒いけだものだ！

人を殺すなら。殺すだけの憎みをもて！　愛をもて！　心に碌な情愛もないくせに、この手は！　このけだものめ！　お先ッ走りのこの手が！　くそ！

（發表大正十三年一月、改造）

「たのむ」

曾て六代目尾上菊五郎から、自身演出出來る脚本をといふ依囑を受け、追つての自然の機會もあらばと輕い意味で受諾、それから餘程の時日が經過した後、無論、菊五郎に嵌めてといふやうな心持でなくて出來たのがこの作。何かの都合で今以て上場はされないが、上場されたらば通俗的な意味でなしに最も面白いと思はれる。例の「ト書き」が重要な働きをしてゐる。讀んだゞけでは到底企圖された情味は現れまい。作者の代表作の一つである。

「平凡長命」

令兄有島武郎氏に不慮のことあつて幾くならず物された作。そのことを下に持つて見ると一層理解が深められよう。作者の人生觀、世界觀を窺ふに最も便利な作品の一つだといふことが出來る。澄み通つた、譬へば秋の夕空の深さにも比すべき心境のうち、自ら、作者の所謂「たいことをたいする」まごゝろの主張が力強く滲み出てゐる。

（發表大正十二年九月、改造）

「小暴君」

初め同名の小說として雜誌女性誌上に發表され、傑作と

して好評嘖々たりしものを、三宅周太郎氏の請により作者自ら脚色して、演劇新潮誌上に登載。

「正直直次郎」

河竹默阿彌の「天衣紛上野初花」の三千歳直侍。清元で「忍逢春雪解」の件の新しい解釋。この「ト書き」にも作者の何物をも疎かにしない、眞摯、人格がはつきり反映してゐると同時に、才氣煥發で少し煩さいくらゐにまで神經の行亙つてゐる點がよく解る。小言幸兵衞などゝ陰口を利かれる作者の一面の特質の現れである。

「紐」

「秋晴」

「春光」

以上の三作の如きに對し、生中な説明などは全く無用の業である。作者の所謂自然解（詳しくは昭和三年八月號三田文學所載の同名題の感想に據ること。――直觀的に物の本質を把握すること。人爲解。即ち主知的解釋の反對。自然解、人爲解共に作者の新造語。）によつて正しく感得すべきである。

「正體」

これも演出の上ならでは、效果の薄い作品讀みながら、時々眼をつぶつて、頭の中で、自身演出する氣で讀むこと。

「白扇の下」

「知慾煩惱」「愛憎不二」と同一の動因による作。作者の作劇術はこの作に於て異常な藝術的迫眞を示してゐる。筆者一人の考であるかも知れないが、讀み去り讀み來つて最後に到る時、一道の殺氣が身に迫る感がある。筆者は作者の戲曲中この作をもつて壓卷なりと思つてゐる。

里見氏の戲曲の大部分を讀み返して、ゆくりなく憶起すことは、先年、岸田國士氏がその初見參の作である「古い玩具」を「新潮」に發表した直後、ある日、今築地小劇場の文藝部にゐる高橋邦太郎、當時は筆者などゝ共に同人雜誌「現代文學」に據つてゐたが、その高橋の話に、岸田氏の言葉として、現在日本の作家の中、里見氏ほど會話の巧な作家はない、氏の會話の中には、心理の微妙な陰翳、感情の含蓄があり、年齡、階級、職業などの區別がはつきり受取れる。專門の劇作家中にも比儔の少ない天分の所有者で、氏は里見氏の戲曲に多く期待してゐるといふ意味のことを聞いた。直接の話でないし時日も經過してゐるから、今日でも岸田氏がさう思つてゐられるかどうかは知らないが、全く作者は「言葉の詩人」であり、或る時は「言葉の

魔術師」でさへもある。

この巻に收められた他の三作家は偶然にも、それ〴〵一世に聞えた名文章家であり、孰れ疎かならぬ會話の名手であるのは一奇であるが、とにかく傳聞する所に於て、岸田氏は氏の會話の絕妙を特に取立てゝ讃歎してゐる。若しこれが筆者の何かの錯誤でさう考へてゐるとしても、有り得べき錯誤であらうと祕に信じてゐる。

作者に對して他にも云ふべき多くがあるが、一つは紙數の制限から一つは作者に師事する筆者として贔屓の引倒しに墮せざるため十分意を盡さないまゝに以上で擱筆する。

泉鏡花篇

小引

正宗白鳥氏は何時か改造誌上のその文藝時評の中で、自分にはあれだけの信者を持つてゐる泉氏の作品の面白さと云ふものが全然わからない。何處が一體面白いのかこんな意味のことを云つてゐた。これも一種の泉鏡花觀で、鏡花先生の作品はある特種の人によつてのみ正當に深く理解される代り、解らない人には未來永劫、金輪際解らないらしい。正宗氏に同感の人士も世には相當あるかも知れない。ことほど、主觀の勝れた特異な藝術境に立つ作家である。從つて又解る人間にとつてこれ位面白く魅力に富んだ作品といふものも尠い。稀に見る天稟だと云へる。それだけに作者の思想感情、趣味、好尙の特色あることまた贅言を須ひない。

例へばその道德觀について見ても誠に作者らしく直截に、敢て失禮な言辭を弄するならば、善惡好惡悉くが獨自の好みの上に立つて寸毫の曖昧模稜を許さない。寧單純に何の陰翳もなく、黑は黑、白は白で黑から白への無類の色の諧調は認められない。善玉は善玉惡玉は惡玉と初めからちやんと極つてゐる。極端に云へば拵へものゝ感さへするほど作者の好みについた人物が讀者の思惑、批評家の顏色などにお構ひなく天衣無縫の行文の妙に委せて傍若無人に活躍する。

「稽古扇」の川邊句作といふ人物を取つて見る。これが凡そ間拔けな田舍漢で、作者の風尙と正反對な氣障な性格に作り上げられ、散々作者に酷遇された揚句が馬鹿な死目に逢はされる。おまけに讀者は作者に對する義理からでも、これに同情出來ない端目に引ずゝて行かれるのだ。然るに柏木信夫、お藤となると、何をしようがお眼こぼし、いゝ兒だいゝ兒だと頭の撫でられ通しである。同じことが「夜叉ケ池」でも云へる。萩原晃、百合、山澤學圓は善玉。縣

の代議士穴隈鐵藏（姓からして穴隈だ）風呂助、嘉傳次、傳吉、宅膳、大小不揃ながらこれが一統に惡玉。一通り跳梁を逞しうするがトゞのつまりは小ッ酷くやつつけられてダアが落。凡そ先生の主義感、趣味好尙を蔑するほどの者は轍を一にしてこの運命に逢着することを覺悟せねばならぬ。と、いふやうなわけで先生の作には性格の扱ひ方、構想、取材、眼に立つて不自然なものがあり、搗てゝ加へての妖怪趣味が、一九——年代の白日靑天下にまで淺慮會釋なくその存在を主張する。それでゐて、一度繙讀するとなると、一切の不合理、不自然が何時の間にか何處かへ影をかくし、實感の確さで受取られる。凡手にあらざること論を俟つまでもないといふことの裏には、それらは此に作者の本質の深い所から發してゐて、作者自身には、何の不合理不自然も感じられないといふ事實が儼存するのであらう。

從つて、先生の浪漫的、傳奇的な作品を主知的に解剖して味はうなどゝいふ態度は思はざるの甚だしいものであると云はなければならない。

作者の作を理解する上に大事なことは作者の瑰麗織巧な文章である。（云ふことはあまりに定石であり、事古りにたれど、定石だけに念を押す必要があるものである。）作者くらゐ何でもないことを面白く話して聞かせる話し手は今の文壇は勿論過去の日本文學の領域にもさう澤山はあるまいと思ふ。機智縱横、諧謔百出、端睨に遑あらず。譬喩の巧まざる巧妙さ淺き流の杜若を說くこと一言にして、ゆかりの色も濃く忽ちにして仲之町張りの花魁へ聯想の飛び移るくらゐは朝飯前で、從つて先生の作品が中等教科書に何としても採錄出來ない因を造つてゐるのである。といふやうなわけで、戲曲のト書の如きが一篇の作の効果を上げる上に重要な役目を勤めてゐる。

筆者は、「通夜物語」「女系圖」「日本橋」などの上演をほんの兩三囘見たにすぎず、その點威張つたことは云へないが、この卷に收められた四篇の如き、上演の曉果して繙讀の際の感銘以上のものが受けられるかどうか。「稽古扇」は先年明治座（？）で僅かに伊井、喜多村、村田正雄の顏ぶれで上場されてゐるが、當時の雜誌歌舞伎の批評など朧氣に辿ればどうも好評とまでは行かなかつたらしい。

讀めば理窟をならべる閒がなく面白いのだが、その邊全く行文の妙にあるのだと思ふ。第一場第二場といふやうな實用一點張りな名稱を厭つて、上、札所長屋。下、雁々松、といふ風な細かい注意が疎かならず行屆かせてある。

かういふ細な味まで味ひつくす用意なくして先生の作に臨んでは一向面白からう筈はないのである。

後年新感覺派といふ一群の作家が出て、それ〴〵新時代の新感覺を提示する所があつたが、先生こそは、誠に感覺

派と唱へられて然るべき人の隨一であると筆者は以前から考へてゐるのである。と同時に腹からの浪漫派（ロマンチスト）として頑強に自家の藝術境に蟠居してゐる點を偉なりとするのである。この作者に對して現代意識の遊離を難ずるが如きは、猿猴水に月を掬ふの類であると云ふべきだ。

「稽古扇」

意氣（いき）、張（はり）、氣勢（きほひ）、俠骨、回顧的な江戸情緒。材を明治年代に取つてはあるが、すべてが浪漫的（ロマンチック）な夢の世界である。只、作者の筆に上る時、あり得べからざる眞實が忽焉として現前するのだ。

「夜叉ヶ池」
「海神別莊」

「稽古扇」に比すれば、これらは、更に一段と浪漫的な傾向の强まつた作。傳說と現實世界との不思議な交錯を見る。

筆者の記憶に誤がなくば水上瀧太郎氏は何かで、先生は、白晝、市ヶ谷から中野までの甲武電車――今の中央線――の中で夥多の小人が急速力で走る電車の窓から飛び込み、クッションの上を躍り歩くのをまざ〳〵と目擊されたといふ先生の直話を書いてゐられた。

先生にとつてはそれは眞實なのである。

さうしたことに同感の全然ない人にとつては、この作も、次に收められた「天守物語」「山吹」いづれも味識されよう筈はない。

（發表大正二年三月）
（發表大正二年十二月）

「天守物語」

怪奇な世界を描きながら、この作のシテ役天守夫人富姫の持つ道德觀は、現實世界に生きる作者の道德觀――その作品全部を底流瀰漫する所の道德觀である。「夜叉ヶ池」では幽界と、人間界との交涉に多少の融一を缺く感があつたが、この作に至つては眞に毫末の瑕瑾だもない夜光珠の耀きが燦として現はれてゐる。

（發表大正六年九月）

「山吹」

前述の如く作者の道義觀を如實に語つてゐる。

（發表大正十二年六月）

解　說

久保田万太郎篇

大江良太郎

久保田万太郎氏は、明治二十二年、淺草田原町に生れた。

「――田原町一丁目、二丁目、三丁目、――三丁目の大通りへ出ると、電車が通つてゐます。廣小路の廣い通りで、雷門のゐまはりの宿屋、牛屋、天麩羅屋、小料理屋が、わづか一丁ばかりの間に、呉服屋、鰹節屋、鼈甲屋、小間物屋と云つたやうな土藏造りの暖簾をかけた大きな、古い店になつて並んでしまひます。」

「淺草田原町」の書き出しである。

氏はかうした本願寺の大きな屋根が大通りのつき當りに見え、そして、指物屋の横丁に、紺氣の拔けた質屋の半暖簾が覗かれるところで幼き日を過した。

淺草小學校、第三中學から慶應の普通部、大正三年に慶應義塾大學文科を卒業してゐる。氏の處女作は小說「朝顏」である。永井荷風先生の推薦で「三田文學」に揭載された。明治四十四年、二十三歲の時の作である。朝日新聞紙上で小宮豐隆氏の讃辭を得、一躍して文壇に名を爲すに到つた。

續いて發表したのは戲曲「遊戲」である。後年、氏は戲曲集「雨空」の序文でかう言つてゐる。

「――わたしは、今までに、小說を書いて屢〻後悔した。だが、仕合なことに戲曲を書いては一度もまだ後悔したことがない。十年前に書いたものを見ても、不味いとこそ思へ、何故こんなものを書いたらうと悔んだことは一度もない。それだけはわたしにはつきり言へる。」

「遊戲」も作者自身にとつては、確かに後悔を與へる作品ではないであらう。が、自分は、久保田万太郎劇作の第一篇として「プロロオグ」を推したいものである。

當時、新劇運動勃興の風潮を迎へて、雜誌「太陽」が戲曲募集を行つた。選者は小山內先生だつたと思ふ。群りつどうた應募者の中で、賞をかち得た若武者は灰野庄平氏だつた。いま一人は久保田万太郎氏だつた。「プロロオグ」はかうした由緒をもつた作品である。後半はあとで「三田文學」へ發表された。今讀みかへして見ると舞臺指定の繁雜、運びの冗長が眼につかないではない。とはいへ、「プロロオグ」一篇の底を流れてゐるものは廢頹し行く「江戶」の風物をなつかしむ土地つ子久保田万太郎氏の豐かな詩情である。日本橋の古い商家、土藏の白壁を背後にして埋れ行くやるせない春の日の記錄である。「プロロオグ」に描かれた世界はこれからどうならうといふのではない。ましてどうなら

なければならないといふのでもない。只あるがまゝにあるのである。與へられた運命を、しかも時勢の流に押し流され行く下町の運命を、從順に受け忍んでゐるのである。弱氣から來る都會人らしいあきらめ、周圍への氣がねが生むあはれにもみぢめな自分への憐愍、中學生要次郎の姿は、大川の灯の色を慕ふ若い下町つ子の中に多分に見出し得る性格であらう。かうした意味で「プロロオグ」は、久保田万太郎戯曲集中でのプロロオグであつた。ことに自分はあのすなほな筆致を愛する。後年の「心ごゝろ」の謙二郎、そして「夜鴉」の恭介は、代數の方程式に惱むわが要次郎の藝術的成長であつた。

「暮れがた」は雜誌「スバル」の戯曲附錄として明治四十五年の新年號を飾つた作品である。

「——當時、わたしは木下杢太郎氏の（といふよりは「和泉屋染物店」の）影響を受けた。木下杢太郎氏によつて、わたしはわたし自身の道を見出すことが出來たといつてもそれは嘘ではない。」

作者のこの言の如く「暮れがた」はその形式に於て「和泉屋染物店」を踏襲してゐる。然し、それは何處までも影響だつた。暗示だつた、都會詩人久保田万太郎氏の獨擅する戯曲境は開拓則完成だつた。「プロロオグ」を書いて僅か半歳、氏は完成したる「暮れがた」をもつて堂々と世にその眞價を問うたのである。舞臺は撥形の看板が格子の蔭に下つてゐる淺草の一廓三味線屋の見世先である。時は五月、三社祭の二日目、賑かな囃子の音がゆるやかに聞えて來る。板つきの娘は繪草紙を切り拔いてゐる。總てが淺草といふ名にふさはしい色彩と、香氣とを持つてゐるのである。永井先生が氏の第一著作集「淺草」の跋の中で次の如く述べてゐられる。

「——久保田君は、その生れ落ちて育つた淺草といふ一番よく知り拔いてゐる土地の生活を藝術的興味を以つて書いてゐる。改めて論ずるまでもなく、近代の有名なる作家の傑作の中には、その作家の故郷なる一地方特種の風景生活傳說を描寫したものが少くない。これは一面に於て切實なる寫實的興味を呼ばしめると同時に、他の一方に於て、エキゾチックの香氣に觸れさせるからであらう。（中略）佛蘭西の一部分たるブルタニュの漁村を描いたピエール、ロチの或る作品が、同じ佛蘭西の讀者にさへエキゾチックの妙味を感ぜしめた。」

「淺草」「雪」に次ぐ氏の著作集は題して「東京夜話」と言ふ。そして隨筆集は「駒形より」と稱し、「三筋町より」と呼ぶ。傑作「末枯」の前篇をなすものに「今戸橋」がある。かうした名稱以外に氏のとりあつかふ場面は常に三社樣の氏子の住むところなのである。なかで最もエキゾチックな

香氣の馥郁たるものは戲曲「暮れがた」であらう。同年、田中榮三、稻富寬、酒井米子の土曜劇場により有樂座で脚光を浴びた。氏の脚本中最初の上演である。

「雪」のでたのは明治四十五年三月の「太陽」である。正月の雪空、初不動、住吉踊、烏羽玉、都囃子。「雪」一幕を生活する人々を圍繞するものは、やはりかうした郷土的詩味の豐な季題趣味であつた。或る藝妓屋の下地の子が、學校の辨當を近所の親の家まで食べに來る。よく在り勝ちな下町の一插話が「雪」一篇を作成した。さういへば支那料理店の陳さんは、作者が嘗て田原町の相模屋の路次で見た始終耳掃除をしてゐた支那人の移植ださうである。

「――わたしの書く戲曲は一つとして空想でないものはない。」

とは、一日、久保田万太郎氏より聞いた言葉である。その小說に於てすら體驗からくる自叙傳的生活記錄の作品が少ない。「きのふのこと」「火事の記憶」等の隨筆體のもの以外には、「家」「妹におくる」「妻子」等、ほんに數へる程しかあるまい。「雪」は徹頭徹尾空想の所產であつた。大正十年十一月、機を得て喜多村緑郎、村田正雄の手により歌舞伎座で上演された。なかでも喜多村のおよしの妙技は未だに髣髴たるものがある。

「新脚本號」大正三年六月の「中央公論」は、かうした眼新しい名のもとに十三篇の新作戲曲を並べた。口繪にはビヨルンシエルネ・ビヨルンソンの立像がのつた。「宵の空」はその時「凶」なる名題のもとに掲載された脚本である。更け行く夏の夜の大川端の寂寥、いはばこの作は一つのドラマテック、スケッチと言ひ得る。自分は「宵の空」を、「書面」「浮世床小景」と同じ範疇に入れて鑑賞してゐる。

第四著作集「戀の日」上梓以來、遲筆をもつて知られてゐたこの作者が益々遲筆になつた。或る意味で氏の停滯時代だつたかも知れない。「青鷺」にをさめられた數篇のうちには當時の難澁困惑を物語るものがある。久保田万太郎氏を再生せしめた作品は大正八年十月、雜誌「人間」に出た小說「九月蜩」である。そして挽回したその名聲をより一層高調せしめたものに戲曲「雨空」がある。この作品も言つて見れば小說「たびがらす」の空想的擴充であつたらう。が、「水のおもて」「宵の空」「彼のみたもの」「ひとりむし」「祭の出來事」(この作品は小山内先生の「夜明前」の序幕として書かれたもので、新富座の舞臺にはかかつたが、當時活字にはなつてゐなかつた。)等、「暮れがた」「雪」に比し餘り進境を見せなかつた此等の諸作の後、間を置いて出現したのは「雨空」である。そして久保田氏の戲曲は皿を並べて片つ端から試食する洋食ではなくして、少量を熟讀玩味すべき腕の冴えた料理人の日本料理である。しかも「雨空」

は、一般人の口にあふやう砂糖がきいてゐる。內容的に見て齒ごたへがある。賞讃の的となつたのも道理であらう。十一年九月、花柳章太郎、藤村秀夫、小堀誠等新派若手連の新劇座第三回公演として有樂座で上演された。なにを隱さう自分も三階から「雨空」に隨喜の淚をながした一人である。

「中央公論」の「四月號」に次いで十一年の正月には「心ごころ」を發表した。そして未定稿のまま新劇座第四回の試演として報知講堂で演じられた。北風の寒い一日、休暇を利用して大磯の旅宿にあつた自分は、堪へかねて見物に上京した思ひ出がある。「續心ごころ」はそののち二年置いて「文藝春秋」秋季一幕物號に出た。

――あなたはわたしが憎いんですか？

――憎い。

――憎いんですか？

――憎い。

これまで纖細な舞臺の情趣と感情の小波をのみ克明に描いて居た作家が、かうした調子の張りを以つて要太郎謙二郎兄弟の眞情を探つてゐる。紆曲の大きい人間への突進はこれまでのものに見得ない程、強い張りのあるものだつた。「短夜」も波長の大きい舞臺的感情のリズムを持つ一幕物である。ことに、この作は動きの多いことに於て惠まれてゐる。後年、新劇協會から自作提供の懇願を受けた作者が、選ぶに「短夜」をもつてしたのは理の當然だと言はなければならない。配役は市川小太夫の伊三郎、伊志井寛の重吉、伊澤蘭奢のおよし、そして特別加入といふ格で松本要二郎が專造をやつた。大正十四年正月の「中央公論」で好評を得たこの作に比し、前年「演劇新潮」に出た「不幸」は評判にならなかつた。しかし、自分は、枯淡な冴えきつた久保田万太郎氏の藝のあとをば「不幸」の中に一番多く見出してゐる。

長篇戲曲「冬」は、嘗てその序幕が「新潮」に載り、十五年三月同誌上で完成したものである。「鼠尾草」なる題名で第一幕を書き、後「改造」で「あぶらでり」と名をかへて全幕を掲載したのと似た發表形式である。「短夜」以後の三年間、久保田万太郎氏の戲曲創作慾はとみに揚つた。先づ「月夜」である。「通り雨」である。「招待劵」である。「秋の夜」である。少し遲れて「燈下」である。そして、多幕物としては「なさけ」改題の「露深く」があり、「舊友」があり、前述の「あぶらでり」があり、芥川龍之介氏賞揚するところの「夜鴉」がある。未完成の長篇に、近作「房吉」の一篇がある。全く小說家久保田万太郎が大正十四年を期して、劇作家久保田万太郎に變じた觀さへある。かくして天下公認の寡作家が、天下驚異の多作家となつた。矢繼早

に出た以上の諸作のうち、自分の一番好むものは「冬」である。戯曲作法的に見た四幕物の構成美、和解し離散し行く主要感情の韻律的交奏、ことに二幕目は氏の作品中での白眉であらう。目立たない喜兵衛の消し方、時雨をあしらつた政吉の出、刈りこんだ手法の中に空虚な味を持たせ行く幕切れの伎倆、一寸他に類を見ない。かうした氏の戯曲時代が愈々高潮に達し、古劇のアレンヂメントとなり、自他小説のドラマタイズとなつた。

大正十四年七月である。中村時蔵を中心とする芝居の研究團體「修行會」が、邦樂座でその第一回公演をやつた。その時、「隅田春藝者氣質」補訂の任にあたつたのは小山内先生と久保田万太郎氏である。「おその」の誕生は言はずもがな、三馬原作「辰巳婦言」のドラマタイズも、その胚胎はこの「梅堀」にあるであらう。戯曲「辰巳婦言」の出たのは十五年九月の「女性」脚本號である。後半、解決を求めて安易な世話狂言の落に墮したうらみはあるが、新市場橋下の猪牙船の出あひ、返してからのいたこをあしらつての無駄をさけた運びは、かれきつた筆致である。いま一つ三馬の戯曲化として「浮世床小景」がある。

かうしたドラマタイズの話が出た時だつたと思ふ。

「――わたしの小説のうち、芝居になるのは『くづれやな』だね。」

或る日、氏はかういふ言を漏らしたことがあつた。自分も歸つて新潮社の短篇シリイズ「妻子」を繙き、「くづれやな」を讀みかへして見た。そして、これは成程すばらしいものが生れるかも知れないぞと思つた。間もなく「女性」誌上に連載されたのは「大寺學校」である。久保田万太郎氏の作品は藝術的鑑賞の永久性を持つてゐると共に、やがて風俗史的な研究史料となる日も來るであらう、とは、自分の持論である。戯曲「大寺學校」は小説「くづれやな」同樣、作者の創作態度を決定する認識に特殊な進展がある理ではない。時勢に押し流され行く私立學校の破滅が、何故かうなつたのか、どうなつて行かうとするのか、判斷し、思索する前に作者は先づ憐愍の涙をたゝへてしまふのである。移り行く人の世の姿を眺めて一人心の底から寂しくなつてしまふのである。だから新時代の峰君も「櫻の園」のトロツヒモフではなく、校長の姪たか子も「叔父ワアニヤ」のソオニヤではない。しかし、作者がかうした時代の潮鳴りを身を挺して聽かうと意志するとき、「大寺學校」の哀調に、もつと深さが加はるであらう。自分は決してこの作者に間口を擴げてほしいなどとは言はない。限られた奥行きも結構である。只その與へられたる圏内を思索と探求をもつて掘り下げてもらひたい。さうすることによつて氏の作品はもつと文化史的な光彩を加へ得るであらう。自分はか

うした意味で「大寺學校」は等閑視出來ないこの作者へのあけの鐘だと思つてゐる。

今日の久保田万太郎氏を成長せしめた友に水上瀧太郎氏のあることは人の知るところであらう。「貝殼追放」中の一文「末枯の作者」は久保田万太郎氏の全部を語つて餘りあるものである。

今夜も外は雨である。孤獨を愛して孤獨に堪へられない久保田万太郎氏をしのびつゝ、かうした粗雜な解說を書いた自分の非才をおわびして置きたい。

（昭和三年八月四日）

編輯校訂
責任
吉田甲子太郎
清水義政
佐藤十三郎

日本戯曲全集・第四十二巻
現代篇第十輯・第六回配本

著作権者代表者検印

禁無断上演

昭和三年八月二十五日印刷
昭和三年八月二十八日發行　（非賣品）

著作者　谷崎潤一郎
　　　　久保田万太郎
　　　　里見弴
　　　　泉鏡花

發行者　和田利彦

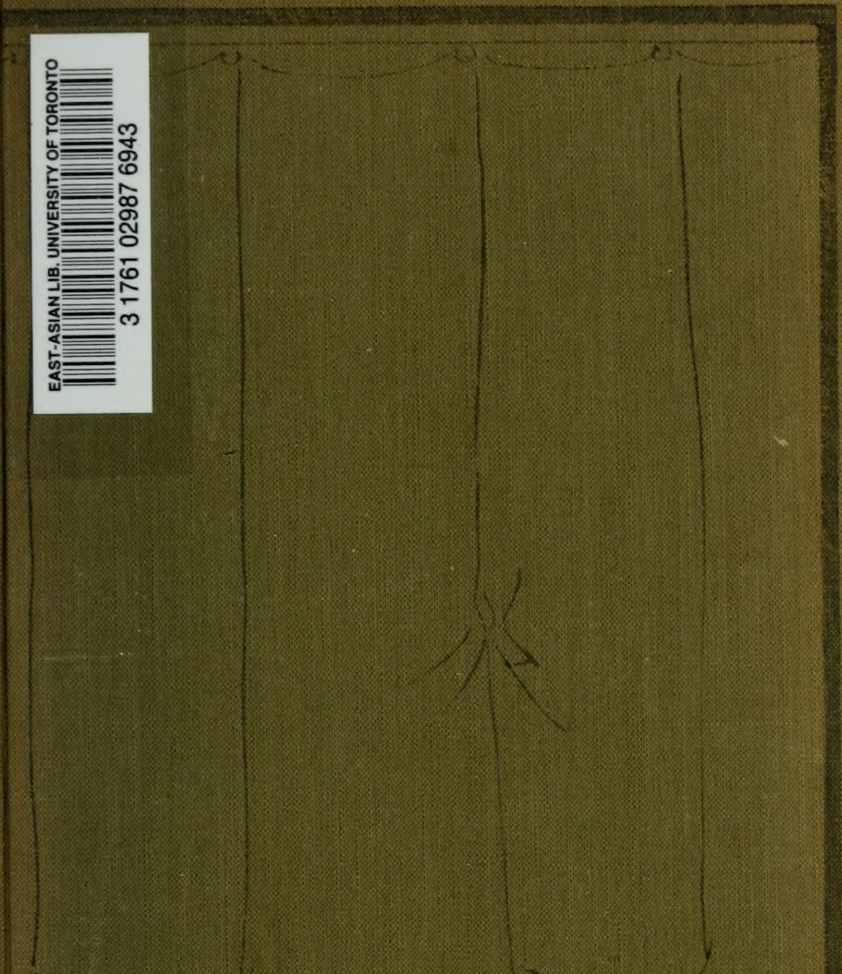
印刷者　島源四郎

製本者　高崎鐵五郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目
發行所　春陽堂
電話京橋六五二
四四一五
振替東京一六一七

東京市小石川區諏訪町五六　常磐印刷所印刷





EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02987 6943